平成26年度　教育･研究業績書

奈良学園大学
（奈良産業大学）

平成 26 年度　教育・研究業績書　目次

【人間教育学部】

教授

■ 伊﨑　一夫
■ 梶田　叡一
■ 鎌田　首治朗
■ 善野　八千子
■ 西辻　正副
■ 松田　智子

特任教授

■ 小竹　光夫
■ 渡邉　規矩郎

准教授

■ 金山　憲正
■ 土谷　長子
■ 中田　正浩
■ 山本　美紀

特任准教授

■ 阿部　秀高（退職の為記載なし）
■ 増井　眞樹

専任講師

■ 岡野　聡子
■ 岡村　季光
■ 熊田　岐子
■ 高木　悠哉
■ 松井　典夫

特任講師

■ 瀧明　知恵子

助教

■ 阿尾　あすか

【保健医療学部】

教授

■ 安藤　邑惠
■ 上本野　唱子
■ 中川　晶
■ 坊垣　友美
■ 三毛　美恵子（退職の為記載なし）
■ 守本　とも子
■ 吉岡　隆之
■ 吉村　雅世

准教授

■ 岡本　響子
■ 嶋田　理博
■ 藤原　尚子（退職の為記載なし）
■ 家根　明子（退職の為記載なし）

専任講師

■ 大山 真貴子
■ 勝眞 久美子（退職の為記載なし）
■ 北島 洋子
■ 西田 絵美

特任講師

■ 廣川　聖子

助教

■ 出原　弥和
■ 大浜　惠美子
■ 岡　居久代
■ 髙橋　晶
■ 高橋　里沙

【ビジネス学部】

教授

- 井上　眞理子
- 岩見　昭三
- 宇津木　成介
- 金田　充広
- 河合　和男
- 川本　正知
- 清水　啓司
- 竹山　理
- 松本(伊達)　桃子
- 西口　清治
- 西田　裕之
- 平尾　透
- 福留　和彦
- 古田　雅雄
- 宮坂　純一
- 森　　基雄
- 矢倉　伸太郎
- 渡辺　邦博

准教授

- 清都　千春（退職の為記載なし）
- 武谷　嘉之
- 棚橋　　豪
- 豊田　正明　（退職の為記載なし）
- 藤井　路子
- 三浦　晴彦
- 水野　清文
- 岡田(森元)　伸枝　（退職の為記載なし）
- 山下　雅弘
- 山本　英司（退職の為記載なし）

専任講師

- 西川　弘展
- 松本　尚哲

【情報学部】

教授

- 大原　荘司
- 岡部　修一
- 杵崎　のり子
- 桑原　祐子
- 多喜　正城（退職の為記載なし）
- 西岡　茂樹
- 根岸　　章
- 福西　三千春
- 向井　厚志（退職の為記載なし）
- 門垣　一敏
- 山田　　尚

准教授

- 小野　俊郎
- 菅　徹
- 阪元　勇輝
- 宮崎(竹田)　治美
- 米川　雅士

専任講師

- 片岡　英己
- 玉野　哲也
- 羽太　広海

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　伊 﨑　一 夫

研究分野	研究内容のキーワード
教育学，教科教育学	国語科教育、教育実践学、言語活動、絵本の読み聞かせ、言葉とコミュニケーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 (1)相互評価活動による支持的・受容的風土を有する国語教室づくり	昭和62年～現在	学習評価において、相互評価活動を学習の中に効果的に組み込むことの必要性を提案している。平成20年版学習指導要領の書くこと領域に位置づけられた「いいところ見つけ」の価値については、平成元年版学習指導要領改訂時より主張しており、伝え合い活動、「いいところ見つけ」によって、学習者の表現吟味力の育成、コミュニケーションの活性化による支持的･受容的な人間関係の構築などを自らの学級において実践し、確認してきた。その具体的手立てとしては、付箋紙による評価コメントの交換や、相互評価の観点となる学び方や認識力の活用できる既習事項として蓄積する「くらしの言葉・学びの言葉」等がある。一連の研究成果を活用し、博論「これからのあるべき国語教室に関する実践的研究」をまとめるなど、研究を継続している。 （神戸大学附属住吉小学校・三田市立公立小学校・環太平洋大学）
(2)PISA型読解力を育む読解指導	平成10年～現在	文学教材、説明文教材において「情報の取り出し－解釈－熟考・評価－論述」のPISA型読解力のプロセスを満たす読解指導の研究を継続的に行ってきた。文学教材においては、気持ちの読み取りに終わらない目的意識を明確にし、テキストの価値を吟味・評価する読み方の指導を中心にし、説明文では、発信を意識した立場から効果的な文章構成や表現技法を確かに学ばせる読解指導を展開している。研究成果については、著作・論文等において公開している。 （三田市立公立小学校・環太平洋大学）
(3)形成的な評価を活用した授業計画の開発	平成21年～現在	シラバス作成時に授業の形成的評価を計画に位置付け、それを基に授業の改善を行う。また、それぞれの授業終了時に自由記述形式のアンケートを実施し、その記述内容を整理したものを次回の授業でフィードバックし、自己評価並びに相互評価に活用することを行った。授業改善の有効な方策であると共に、学生とのコミュニケーションツールとしての役割も果たした。環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科・学級経営学科の実践である。

事項	年月日	概　　要
(4)自分の思いや考えを適切なフォーマットで出力させ、言語表現力を育てる系統的指導	平成21年～現在	自分の思いや考えを可視化するためには、一定の分量を伴った文章表現の場が必要となる。国語科に限らず、平成20年版学習指導要領の要となる「言語活動の充実」を体感･体得することは、教員養成教育における不可欠の学習である。「教育方法・技術論」「国語科教育法」等の授業では、A4・1枚(1600文字程度)の授業ふり返りレポートの作成を必須課題とした。その際、レポート全体の構成の工夫として、適切な小見出しによるまとめ方を強調し、記述内容の整合性・論理性を高める表現指導を行った。環太平洋大学次世代教育学部乳幼児教育学科・学級経営学科の実践である。
2　作成した教科書，教材 ・大学用教科書の編集執筆 移行期からはじめる新しい国語科の授業づくり （総頁数133P, 責任編集　伊﨑一夫・阿部秀高） （再掲）	平成21年4月10日 日本標準	新学習指導要領実施に伴い，「言語活動の充実」の意味と意義を中心に、格上げされた言語活動例の具体化とその方法について詳細に解説した。自ら行った授業実践例等についても豊富に掲載し，確かな言語力を育成するための授業づくりのポイントと、求められる指導方法の工夫改善について具体的に解説した。 平成22年度「国語科教育法」の授業において教科書、平成22年度「教育方法・技術論A(初等)」「教育方法・技術論B(中等)」の授業において参考書として使用。
・大学用教科書の編集執筆 子どもと言葉・絵本の世界 （総頁数65P, 単著） （再掲）	平成21年9月1日 友野印刷	0歳から就学前、さらに小学校低学年までの子どもの言葉の発達過程の概要(「ことば獲得以前の子ども」「ことばを覚え始める子ども」「ことばの意味がわかり始める子ども」「ことばで対話を深める子ども」「ことばでものを考えはじめる子ども」「考えたことをことばにしていく子ども」)を示し、園生活を中心に小学校入学時までの子どもの言葉に関わるさまざまな事例を用いながら、子どもの生活や遊び、子ども同士の関わりが言葉の発達にどのように影響するのか解説した。また、幼稚園教育要領の領域「言葉」の「ねらい」に示された子どもの言葉を育てるために、言葉が育つ環境と要因、保育者の言葉かけや援助のあり方、絵本・紙芝居などの児童文化財の活用方法などについて具体的な方法を提示した。特に絵本の読み聞かせについて詳述している。 平成21～22年度「子どもと言葉」の授業において教科書として使用。
・大学用教科書の編集執筆 小学校国語科 学習指導案で授業が変わる！ －学習指導案を読む・書く・使いこなす－ （総頁数135P, 単著） （再掲）	平成23年４月10日 日本標準	国語科の授業づくりの具体化を学習指導案の計画･立案によって行うことを基本方針に、「学習指導案を読み解く」「学習指導案を書ききる」「学習指導案を使いこなす」「教材解釈と授業づくり」「学習指導要領で求められる国語力とそのポイント」を観点として、「言語活動の充実」を担う国語科の役割とその具体化について詳細に解説した。 平成23～24年度「国語科教育法」の授業において教科書、平成23～24年度「教育方法・技術論A(初等)」「言葉の理解」の授業において参考書として使用。

事項	年月日	概　　要
・大学用教科書の編集執筆 次世代の教職入門 （総頁数279P,共著） （再掲）	平成23年5月20日 大学教育出版	学級担任の教師は、児童・生徒相互の人間関係を育てる場としての学級の役割を重要なものとして認識し、個や集団に働きかけ、児童・生徒相互の好ましい人間関係を育てるために学級経営を充実させる。その要として学級経営案は作成される。小学校を中心に、幼稚園・保育所、中学校における具体的な学級経営案の事例をもとに、一人の教師として学級経営デザインができるよう解説した。（担当:「第6章学級経営」pp.133-155。中田正浩編著） 平成23年度「教職入門」の授業において教科書として使用。
・大学用教科書の編集執筆 国語実践に学ぶ「基礎・基本習得の技能」 （総頁数40P,単著） （再掲）	平成24年8月21日 株式会社ERP 教育PRO 特集号	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、「言葉の力」の獲得を保障する学習活動について実践的方向を示し、その具体化の手立てと有効性について論じた。学習活動の活性化のためには、単元構想や実際の指導における仕組みや仕掛けの工夫が求められると共に、学習指導要領の指導事項として示されている「言葉の力」の理解と吟味が不可欠であることを強調した。学習指導要領において示された記録、報告、解説、推薦等の言語活動例を取り上げ、それらの意味と意義について、実践事例を挙げながら詳述している。 平成24年度「言葉の理解」の授業において教科書として使用。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
環太平洋大学における学生による授業評価の結果	平成21年	学生による授業評価を、担当する講義（「教育方法・技術論Ａ（初等）」「教育方法・技術論Ｂ（中等）」「子どもの表現と発達A（言葉と表現）」「子どもと言葉」「総合演習」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。 特に「授業の適切な方法による展開」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.8/4.0)を得ており、さらに「子どもと言葉」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった。
	平成22年	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「教育方法・技術論Ｂ（中等）」「子どもの表現と発達A（言葉と表現）」「子どもと言葉」「総合演習」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。 特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.8/4.0)を得ており、さらに「子どもと言葉」「国語科教育法」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった。

事項	年月日	概　　要
	平成23年	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「言葉の理解」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「白板や教育機材の使用」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.7/4.0)を得ている。「国語科教育法」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった。
	平成24年	学生による授業評価を、担当する講義（「国語科教育法」「教育方法・技術論Ａ（初等）」「言葉の理解」「日本語表現」等）の全てにおいて行い、所属学科教員の平均、もしくは平均を上回る評価を得、その結果を公開した。特に「授業の適切な方法による展開」「授業の進度や説明の適切さ」「教員の授業に対する熱意」「白板や教育機材の使用」「有用な知識やスキルの獲得」等の項目において高い評価(平均3.8/4.0)を得ており、さらに「国語科教育法」「言葉の理解」においては「授業で使用された教科書の有効性」に関する評価(平均3.9/4.0)が高かった
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）講演講師、研究会講師、指導助言等		
1）　第69回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成18年 8月8日	1年生文学教材「てがみ」を素材として，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。特に低学年の児童同士のコミュニケーション活動を活性化させる手だてについて詳しく解説した。
2）　第70回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成19年 8月7日	6年生文学教材「ヒロシマのうた」「桃花片」を素材として，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
3）　兵庫教育大学主催の研修講座講師 「実践者と研究者のコラボレーションによる国語科授業づくりセミナー －授業びらき・授業つなぎ・授業おさめ－ 」	平成19年 8月23，24日	実践事例として，1年生への年間を通した作文指導，絵本等の紹介活動を中核とする読書指導などを示しつつ，授業実践における「意味・価値」を解説し，個々の教師が，確かで豊かな国語授業を自らの実践において生み出すための示唆を与えた。

事項	年月日	概　　要
４）　第71回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成20年 8月5日	5年生文学教材「大造じいさんとがん」を例に，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。併せて，確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
５）　新学習指導要領にもとづく授業づくり ―国語科の授業をどう変えるのか 兵庫県川西市教育委員会主催 平成20年度 国語科教育研修会 講演講師	平成20年 8月22日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等について説明を行った上で，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が，新国語科に対応した国語教室実現への改善のポイントとなることを指摘し，その具体策の要点について解説した。尚，実践事例として，小学校１年生を対象とした通年の作文指導と6年生における教科書教材を活用した作品紹介活動を取り上げた。
６）　新学習指導要領と国語科授業の創造 大阪府箕面市教育委員会主催 平成20年度授業カアップ連続講座② （小：国語） 講演講師	平成20年 8月25日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，小学校1年生における年間を通した作文指導と5年生における教科書教材を活用したＰＯＰ作りと作品の推薦活動を実践事例として取り上げながら，新国語科に対応する国語教室実現に向け，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が工夫改善のポイントとなることを指摘し，具体化の要点について解説した。
７）　新学習指導要領と「言語活動の充実」 鳥取県中部地区小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会　講演講師	平成21年 6月10日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと、その際に求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校６年生における読解指導と、卒業論文を書かせる総合学習とを取りあげた。

事項	年月日	概　　要
８）　第72回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成21年 8月4日	2008年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校高学年における「作品紹介活動」を示し、学習指導の工夫改善のポイントと、その際必要不可欠となる指導技術について詳細に解説した。
９）　新学習指導要領にもとづく授業づくり ―言語活動の充実が目ざすもの－ 兵庫県川西市教育委員会主催 平成21年度 国語科教育研修会 講演講師	平成21年 8月26日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
１０）　新学習指導要領と国語科授業の創造 旭川市教育委員会主催 国語教育研究大会　講演講師	平成21年 11月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，新国語科に対応する国語教室実現に向けての具体的方策を示しながら、具体化の要点と求められる授業技術・方法について詳細に解説した。
１１）　新学習指導要領と「言語活動の充実」 愛知県北名古屋市小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会　講演講師	平成22年 2月12日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
１２）　新学習指導要領にもとづく授業づくり －言語活動の充実－ 兵庫県川西市教育委員会主催 平成22年度 国語科教育研修会 講演講師	平成22年 8月5日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「話すこと・聞くこと」領域の年間を通した「スピーチ活動」を取り上げた。

事項	年月日	概　　要
１３）　第73回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「PISA型読解力の授業づくり」 講師	平成22年 8月10日	2009年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校低学年における「絵本紹介活動」を示し、「論理の接続詞」を活用した絵本紹介の仕方とその意義について詳細に解説した。
１４）　言語活動の充実と年間指導計画への期待 宮崎県小学校教育研究会国語部会主催 第38回宮崎県小学校教育研究会 夏期研修会 講演講師	平成22年 8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、説明文教材「たんぽぽ」「ビーバーの大工事」（２年）、「くらしの中の和と洋」（４年）、「森林のおくりもの」（５年）等を取り上げた。
１５）　「言語活動の充実」と国語科 年間指導計画への期待 平成22年度環太平洋大学 教員免許状更新講習 講師	平成22年 8月26日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「読むこと」領域の年間を通した「本の紹介活動」を取り上げた。
１６）　「言語活動の充実」と 学校・地域・家庭の教育力 篠山市教育委員会指定研究事業 「学力向上実践推進事業」 平成22年度篠山市立味間小学校 公開研究発表会　講演講師	平成22年 10月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，各学年の公開授業を取り上げ、それらの授業の成立は、学校・地域・家庭の教育力に支えられていることを強調した。
１７）　確かな学力と人間関係をつくりだす力 三田市教育委員会指定研究事業 平成22年度三田市立富士小学校 公開研究発表会　講演講師	平成22年 11月26日	豊かな人間関係を培うためには確かな言語運用能力が不可欠であることを踏まえ、当該校の３年にわたる研究の有する価値とその成果について言及した。特に共生教育においては、自己をみとめ、他者とコミュニケーションすることが極めて重要であることを強調した。

事項	年月日	概　　要
１８）　読売新聞社主催・読売教育賞 第60回記念シンポジウム分科会 「国語教育」最優秀賞受賞者・ 実践成果報告	平成23年 6月4日	第57回読売教育賞国語教育部門最優秀賞実践「情報活用力としての『書く力』をたかめる－読み書きシートの徹底活用－」について、実践の概要と特質について報告し、参会者との意見交流を行った。
１９）　絵本が語ってくれること －国語教育とのつながり－ 「夢ナビライブ２０１１」 大阪会場・講義ライブ	平成23年 7月12日	学生たちが親しんできた絵本を素材に、「同じ絵本でも国によっていろいろな違いがあること」「接続詞などの使い方に着目することによる解釈の深まり」「論理的に思考することの大切さ」「国語教育の役割」等について解説を行った。
２０）　PISA型読解力を育む 新しい国語の授業づくり 大阪市教育センター主催 「学力向上授業研修会」 講演講師	平成23年 7月21日	「思考力・判断力・表現力」と「論理的に考えること」、PISA型読解力と「論理的に考えること」、「論理的に考えること」と「つなぐ思考」等の関連について、新学習指導要領の趣旨をふまえ、詳細に解説した。「論理的に考えること」が培われる国語教室の具体像については、小・中学校の実践事例を取り上げた。
２１）　第74回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり」 講師	平成23年 8月9日	平成20年版学習指導要領国語科の重要実践課題である「思考力・判断力・表現力の育成」に向け、論理的な思考を促し、強化する必要性を示した。具体例として、絵本紹介(小学校1年)における理由を組み立てさせる接続詞の活用事例、「どうぶつの赤ちゃん」(光村1年)における読解のキーワードを用いた表現活動の成果を取り上げた。「言語活動の充実」には、活動だけではなく適切な評価が必要であることを強調した。
２２）　「言語活動の充実」と「国語科」 平成23年度環太平洋大学 教員免許状更新講習 講師	平成23年 8月25日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
２３）　思考力・判断力・表現力等の 育成と授業づくり 福山市教育委員会指定研究事業 平成23年度福山市立東中学校 公開教育研究会　講演講師	平成23年 11月4日	論理的思考力を育成するためには、「『ＷＨＹ』『ＨＯＷ』を自問すること」「『質問力』を鍛えること」「関係性を理解して解釈すること」「因果関係・脈絡・つながりに着目させること」等が重要であることを解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、数学、理科、社会、英語、技術家庭、音楽等）を多数取り上げた。
２４）　習得・活用・探求型の授業を創造する 三田市教育委員会指定研究事業 平成23年度三田市立本庄小学校 公開研究発表会　講演講師	平成23年 12月2日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、「習得・活用・探求」活動の意義とその具体化の視点について詳細に解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、算数、社会、音楽、総合学習等）を多数取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。

事項	年月日	概　　要
２５）　国語科指導力向上に向けて 奈良市教育センター主催 「国語科教育研修講座」 講演講師	平成24年 7月27日	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」は、学習意欲をもって基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育成することに主眼があることを、具体的な実践事例を示しながら解説した。言葉の力を培う国語教室を実現するためには、(1)年間指導計画の構築、(2)相互評価活動の活性化、(3)「言葉の力」のメタ認知の場の設定が重要となることを強調した。
２６）　第75回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「『自分の考え』」を表現できる授業づくり」 講師	平成24年 8月7日	「たんぽぽ」(東書2年)、「たんぽぽのちえ」(光村2年)を用いて、形式段落に区切る演習を行い、段落の区切りの理由を明らかにすることが段落相互の関係の理解を深めることを解説した。題名の重要性など、既習の学びを活かして、意図的に学習を組み立てていくことなど、自分の考えを表現するには、基礎的・基本的な学びのステップが必要であり、意図的・目的的な既習の学びの連続性が、明確な「自分の考え」を生み出すことを強調した。
２７）　「言語活動の充実」と各学校への期待 平成23年度環太平洋大学 教員免許状更新講習 講師	平成24年 8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。各学校が抱える指導時数の不足感をふまえ、実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げ、特に「①年間指導計画」の重要性を強調した。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
２８）　第1回「ことばの力」育成シンポジウム in千葉 言葉の力を活用する言語活動と国語科授業づくり －小、中学校との連携を視野に－ 公益財団法人 中央教育研究所、 特定非営利活動法人 日本語検定委員会 主催 報告者並びに パネルディスカッション・パネリスト	平成24年 8月25日	報告では、「言葉の力」を活用する国語科授業づくりにおいては、「既習の学びを可視化し活用する言語活動が求められること」「既習の学びの積み重ねと積み上げには年間指導計画が重要であること」を、「たんぽぽ」(東書2年)「たんぽぽのちえ」(光村2年)の実践事例をもとに提言した。シンポジウムにおいては、「言葉の力」の習得と活用を小学校と中学校とが連携して行う必要があることを強調した。
２９）　国語授業の改革と学力向上 第4回ＥＲＰフォーラム・イン大阪 対談・聞き手	平成24年 12月22日	平成20年度版学習指導要領改訂に伴う、教科書を使いこなし言葉の力を向上させる国語授業の改革に関して行われた対談(梶田叡一・兵庫教育大学名誉教授、小森茂・青山学院大学教授)の聞き手として、(1)「確かな学力」の基幹としての「言葉の力」の育成の中核的な役割を果たす国語科のありよう、(2)＜確かな＞「言葉の力」と＜豊かな＞「言葉の力」を実現する授業革の視座、(3)「読むこと」「書くこと」の連動させる学習指導の工夫改善のポイントを明らかにした。

事項	年月日	概　　要
３０）学力向上や子どもたちの言語力の向上のために 「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 奈良市教育委員会主催	平成25年 2月22日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、公開授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、教科書に閉じこもりがちな学習を見直し、実の場を活用した学習が有効となること、日常生活に資する言語力を培うためには、いかに広く多様な情報源に向かわせるか、言語環境の整備、多様な言語情報への目配りが大切であることを強調した。
３１）第76回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「既習の学び・記述力を生かす国語科授業づくり（小学校）」 講師	平成25年 8月6日	「自然のかくし絵」(東書3年)を用いて、段落相互の関係をふまえた筆者の「書き方の工夫」を探る演習を行い、説明文における記述方法の特徴をとらえる学習の必要性について解説した。「書き方の工夫」については、「具体例」「問いと答え」「写真や絵」「説明の順序」「つなぎ言葉」などの学習者に馴染みやすい用語で整理することによって、説明文の読解学習だけではなく、既習の学びを活かして「説明文を書く」活動にも転用できること、さらに「自分の考え」を表現する多様な学習へとつながっていくことを強調した。
３２）学力向上や子どもたちの言語力の向上のために 「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 奈良市教育委員会主催	平成26年 2月15日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、平成25年度に行った研究授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、「習得・活用」の道筋の明確化、目標と評価の一体化に十分配慮することが必要であることを強調した。
３３）未来をつむぐ学校茶道－伝統文化への入口－ 第45回学校茶道指導者研修会・第35回学校茶道担当者講習会 合同研修会 基調講演　講演講師	平成26年 7月18日	明治維新後、茶道がいち早く学校教育に取り入れられた歴史や学校茶道の普及・拡大について教育制度の変遷に沿った解説を行った。学校教育の学習内容の一例を取り上げながら、日本の総合文化の代表である茶道の果たす役割や意義について強調した。
３４）奈良市教育センター1年経験者研修講座 講師	平成26年 7月22日	奈良市教職2年目を迎えた幼小中高教員74名に対して、求められる教職の資質やより良い学級経営のあり方等に関する講義・解説を行った。特に、学級経営の視点として、児童・生徒からの評価、保護者からの評価を積極的に取り入れることの価値や、学級経営と普段の授業実践とが密接に関連していることの重要性を強調した。

事項	年月日	概　　要
３５）「言葉の力」を高める言語活動の活性化 兵庫県国語教育連盟 第57回夏季国語教育研修大会 講演講師	平成26年 8月6日	「言語活動の充実」において「付けたい言葉の力」を明確にすることの重要性について解説した。言語活動の質を高めるためには、前単元までの学びを生かすこと、言語活動における「５つの言語」(相手意識、目的意識、条件・状況意識、表現・理解の方法意識、評価意識)を明確にすること、「付けたい言葉の力」に照らし合わせた目標と評価を設定することなどの重要性を強調した。
３６）第77回日本国語教育学会全国大会 ワークショップ 「自分の考えをもって伝え合う授業づくりー『発問研究』と『教材研究』とを中心にー」 講師	平成26年 8月9日	「スイミー」(光村1年)、「名前を見てちょうだい」(東書2年)、「一つの花」(光村・東書4年)を用いて、作品の構造的理解を支えるワークシート例を示し、作品の特質と主題を捉える演習を行い、物語教材における指導方法の工夫改善の方略について解説した。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、意欲的に考え判断し表現できる「発問研究」と「教材研究」、その実現のための「場面と時間」の確保が必要であることを強調した。
３７）「教材研究で授業が変わる」 鳥取県教育センター　平成26年度教職員研修 【小学校国語】「教材研究で授業が変わる」 講師	平成26年 8月21日	児童自らが考えを表現できる教材研究のあり方や授業づくりについて、「名前を見てちょうだい」(東書1年)、「ごんぎつね」(東書・光村4年)等を用いた実践的な演習を行い、「言語活動の充実」につながる基本的な考え方や教材解釈の仕方について具体的に解説した。教材研究や教材解釈においては作品を概念的にとらえないこと、授業づくりにおいては「目あてとふり返り」の重要性やノート指導の工夫が不可欠であることなどを強調した。
３８）「ことばの力」を育む授業―設計と評価― 三田市教育委員会指定研究事業 第19回　三田市立ゆりのき台小学校　研究発表会 公開研究発表会　講演講師	平成26年 11月17日	授業設計におけるポイントを「基本要素」と「発展要素」に整理し、研究発表会当日の公開授業をもとに解説した。「基本要素」として、「「付けたいことばの力」＝言語力の明確化」「学習活動の統一化」「評価規準の具体化」の3点を、「発展要素」として、「『具体・抽象』の昇降化」「『習得・活用』のサイクル化」「『個の学び・集団の学び』の往復化」の3点を示した。
３９）平成26年度奈良市教育フォーラム 分科会「小中の学びの系統性をふまえた授業モデル【国語】」 講師	平成27年 1月25日	奈良市の国語の学力・学習状況調査の分析結果による課題のうち、「相手意識、目的意識の明確にして書くこと」「資料から適切な情報を得て、伝えたい事実や事柄が明確に伝わるように書くこと」の課題解決に焦点を当て、学習指導の工夫改善を図るための方策とその意義について解説した。特に「事実に対する自分の意見を理由や根拠を明確にして考えて書く力」を高める授業の重要性を強調した。

事項	年月日	概　　要
（２）茶道教室講師、学校茶道クラブ顧問等		
１）神戸新聞文化センター・茶道教室講師	平成16年 4月～現在	茶道裏千家より平成8年4月茶名（宗一）拝受、平成12年2月準教授、平成26年10月教授に昇進。平成16年4月からは、神戸新聞文化センター・茶道教室講師として、男性専科クラス（日曜日、月二回）、初級クラス・中級クラス・上級クラス・幼児クラス（日曜日、月四回）において、指導を行っており、現在に至る。
２）兵庫県三田市立ゆりのき台小学校 茶道クラブ顧問	平成16年4月～ 平成18年3月	特別活動の一領域であるクラブ活動指導の一環となる茶道クラブを設立し、担当した。４年生から６年生の希望者35名による茶道クラブにおいて、顧問として指導に当たった。盆略点前を中心に、亭主ならびに客ぶりの基本的な所作を指導した。クラブ活動の概要については、学校便り等において積極的に紹介した。
３）兵庫県三田市立けやき台小学校 茶道クラブ顧問	平成19年4月～ 平成21年3月	特別活動の一領域であるクラブ活動指導の一環となる茶道クラブを設立し、担当した。４年生から６年生の希望者30名による茶道クラブにおいて、顧問として指導に当たった。盆略点前を中心に、亭主ならびに客ぶりの基本的な所作を指導した。クラブ活動の概要については、学校便り等において積極的に紹介した。
５　その他		
１）　第57回讀賣教育賞「国語教育部門」 最優秀賞	平成20年 7月11日	情報活用力の育成を目的とする年間を通した実践である「情報活用力としての『書く力』を高める―『ブックレポート』を書く活動を中核に―」を評価され，受賞。 主な受賞理由は，「現代社会で求められる情報活用力を着実に身につける国語の年間カリキュラムのモデルとなる優れた実践であること」及び「生徒相互でいい所を見つけ合い，情報伝達のワザを共有する学習プロセスは普遍性を持つこと」等である。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 (1) 小学校教諭１級免許状 (2) 中学校教諭１級免許状　　理科 (3) 高等学校教諭２級免許状　理科 (4) 小学校教諭専修免許状	 昭和52年3月 昭和52年3月 昭和52年3月 平成20年5月	 昭51小普第1030号　（兵庫県教育委員会） 昭51中１普第1498号　（兵庫県教育委員会） 昭51高2普第1604号　（兵庫県教育委員会） 平成20小専第49号　（兵庫県教育委員会）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 Ⅰ　財団法人福武教育文化振興財団 平成22年度教育研究助成(個人の部) 絵本を活用した読解指導の工夫に関する研究	 平成22年 ７月	 小学校における読解リテラシーとなるPISA型読解力の向上に関する具体化の視座を絵本に求め、その有効性を検証する研究に対して、補助金の助成を得た。（100,000円）
Ⅱ　科学教育費補助金及び学術研究助成基金 (1)　平成22年度科学教育費補助金 基盤研究(C) 地域の教育・文化施設における 絵本の「体感型読書」プログラムの 開発的研究 研究代表者	 平成22年 ４月	 絵本の読み聞かせや読書教育に関する国語教育分野における先行研究等の検討をふまえ、「体感型読書」プログラム作成を前提とした協力施設の実態調査と、「体感型読書」プログラムの開発研究に対して、研究代表者として補助金の助成を得た。（研究代表者;伊﨑一夫.研究分担者;山本美紀）（直接経費 1,800,000円）
(2)　平成22年度科学教育費補助金 基盤研究(C) 不登校回復期の生徒への 共同学習モデルの開発 研究分担者	平成22年 ４月	学習意欲と社会的適応とを兼ね備えた不登校回復期の支援モデル開発について、学力の実態と特性に関する分析研究に対して、研究分担者として補助金の助成を得た。（研究代表者; 杉田郁代.研究分担者; 伊﨑一夫）（直接経費 500,000円）
(3)　平成23年度科学教育費補助金 基盤研究(B) 学校・文化施設による＜持続可能な 地域文化力＞を育む「連携型プログラム」の開発研究 研究分担者	平成23年 ４月	学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、両者の協力体制を「連携型プログラム」として結晶させ、〈持続可能な地域文化力〉育成のための施設の有効活用と人材育成の方法論を示す開発研究に対して、研究分担者として補助金の助成を得た。（研究代表者; 山本美紀.研究分担者;伊﨑一夫）（直接経費 2,000,000円）
Ⅲ　委員 (1)　小学校用国語科教科書の執筆・編集委員	平成2年～ 平成17年～	小学校国語検定教科書（東京書籍）の編集協力委員として平成２年より執筆・編集を行う。 平成１７年度刊行本からは、編集委員として本格的に関わり、平成２３年度刊行本については、言語事項単元（全学年）並びに低学年文学教材を中心に執筆・編集作業を行った。特に、各学年巻末には、言語活動の充実をふまえ、年間を通して育みたい言語力を可視化する学習資料の添付を行った。

事項	年月日	概　　要
(2)　「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」 指導法改善研究部会(授業開発国語部会) 指導助言者	平成24年度～ 平成26年度	「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」の実施に当たり、生活改善や授業開発、学びの連続のあり方についての視点から、奈良市の子どもの学力向上のための課題解決に関する指導法改善研究部会(授業開発国語部会)における指導助言を継続して行った。平成20年度版学習指導要領における「言語活動の充実」をふまえ、小学校・中学校の授業改善の視座を明確にし、提案授業のプラン作成と提案授業実施後の検討会における総括講演では、公開授業の価値付けと今後の課題を明示した。
(3)平成26年度奈良市教職員研修運営協議会委員（座長）	平成26年度	平成26年度奈良市教職員研修講座の運営や受講者の意識分析データをもとに、奈良市教職員研修の内容や運営に関する検討協議を行った。研修講座体系の明確化、資質能力向上の仕組み強化、校内研修の活性化等に関する課題を整理し、平成27年度奈良市教職員研修の改善方向を明確にした。
4　その他		
（1）平成20年度兵庫県「ゆずりは賞」受賞 （兵庫県教育委員会）	平成20年 11月14日	「ゆずりは賞」は，学校教育や社会教育等の分野で多くの人々の模範となるような立派な行為や有益な研究・発明をした個人や団体を表彰しその功績をたたえるものであるが，第57回讀賣教育賞「国語教育部門」最優秀賞を受賞した功績に対し表彰された。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
(1) 小学校国語科 PISA型読解力 向上の学習問題と解説	共著	平成19年 5月	明治図書	国語科の教育課程実施調査，PISA調査の課題をふまえ，PISA型読解力を向上させるための具体的なプランの提示と、その有効性について論じたものである。 B5版 総頁数86P 編者:小森茂 共著者:伊﨑一夫・雨宮久高・漆山仁志・岩井信康・小宮孝之・齋藤純一・篠山紀子・清水典子・山本平生・中島敬康・成田信子・渡辺真由美 担当:2章1節「テキストを理解･評価しながら読む力を高める学習問題」pp.14-25 単著 内容:言語の教育という国語科の立場から，学習者の「国語への関心・意欲・態度」と「テキストの中の情報の取り出し」とを大切にしながら，「テキストの解釈」「熟考・評価」に応じた具体的なプラン(「海のいのち」6年下、「ごんぎつね」4年下)を提案し，その効果的な活用の仕方について詳述した。特に，これまでの読解指導との違いを明確化した。
(2) 「読解力」で 授業をかえる	共著	平成20年 1月	ぎょうせい	PISA型読解力として求められている指導・改善の方向をふまえ，単元レベルにおける工夫・改善について論じたものである。 B5版 総頁数230P 編者:田中孝一・小森茂 共著者:青木弘明・有賀直美・飯塚啓介・伊﨑一夫・門戸千幸・蒲生信博・黒田篤志・河野庸介・古賀勝利・小森茂・鈴木彰・田中耕一・田沼良宣・千葉昌之・永池啓子・中屋友厚・藤本鈴香・藤山英人・星原貴光・細谷俊太郎・堀江祐爾・松本万寿実・三田大樹・峯元済年・弓場順枝・米澤俊和・渡部光昭 担当:4章1節「〈小学校国語〉作品の内容や表現の特徴を理解・評価する力を高める単元づくり」pp.56-63 単著 内容:PISA型読解力をふまえた指導方法の工夫改善の一例として、「ヒロシマのうた」(東書6年)を取り上げ、その実践的価値について考察し，明確化した。特に，「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」のそれぞれの段階において求められる思考方法を強化し，情報活用力を高めるためには，他者との情報のやりとり，相互コミュニケーション活動の活性化が，必要であることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)　移行期からはじめる新しい国語科の授業づくり（編集責任者）	共著	平成21年4月	日本標準	平成20年版学習指導要領実施に伴い、格上げされた言語活動例の具体化を中心に、確かな国語力を育成するための授業づくりのポイントについて解説したものである。 B5版 総頁数133P 編者:伊﨑一夫・阿部秀高 共著者:伊﨑一夫・阿部秀高、他2名 担当:第1章「新学習指導要領が求める国語力とそのポイント」1～5・7・10・11～15(トータル24P)、第2章2節「新学習指導要領にもとづく国語科授業の具体化に向けて」(トータル12P)、2章3節「授業づくり」4～6・8・9・11・13・17・18・21～24(トータル26P)。単著 内容:自ら行った授業実践例に基づき、確かな言語力を育成するための授業づくりのポイントと、求められる指導方法の工夫改善について具体的に解説した。また本書では、確かで豊かな言語力を育成するためには、学級内外他者との伝え合い・コミュニケーションや自己評価・他者評価の場の設定が不可欠であることを指摘し、獲得した言語力を十分に発揮する活用方法とその重要性について強調した。
(4)　子どもと言葉・絵本の世界	単著	平成21年9月	友野印刷	0歳から就学前、さらに小学校低学年までの子どもの言葉の発達過程の概要(「ことば獲得以前の子ども」「ことばを覚え始める子ども」「ことばの意味がわかり始める子ども」「ことばで対話を深める子ども」「ことばでものを考えはじめる子ども」「考えたことをことばにしていく子ども」)を示し、園生活を中心に小学校入学時までの子どもの言葉に関わるさまざまな事例を用いながら、子どもの生活や遊び、子ども同士の関わりが言葉の発達にどのように影響するのか解説した。また、幼稚園教育要領の領域「言葉」の「ねらい」に示された子どもの言葉を育てるために、言葉が育つ環境と要因、保育者の言葉かけや援助のあり方、絵本・紙芝居などの児童文化財の活用方法などについて具体的な方法を提示した。特に絵本の読み聞かせについて詳述している。B5版 総頁数65P
(5)　新小学校国語科重点指導事項の実践開発（編集協力委員）	共著	平成22年1月	明治図書	平成20年度版学習指導要領において示された学び手の学力と学習状況についての現状を丁寧にとらえ、様々な学習課題への対応と、確かな言語力育成の視座を提案している。 B5版横 総頁数120P 編者:小森茂 共著者:阿部秀高・岡本恵太・野村美由紀・横山啓子・伊﨑一夫他10名 担当:編集協力委員として、「書くこと」pp. 32-33, pp. 37-38「読むこと」pp. 72-73,「話すこと・聞くこと」pp. 88-89。単著 内容:編集協力委員として、平成20年度版学習指導要領を基に「重点指導事項例」に該当する「重点指導事項」を選定整理して、特に典型的な「重点指導事項」の果たすべき役割について、そのねらいと指導の工夫改善について、具体例を示しながら解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(6)　「ことば」で伸ばす子どもの学力	共著	平成22年8月	ぎょうせい	平成20年度版学習指導要領において求められる「言語活動」の特質とその具体化への視座を国語・社会・算数・理科・生活の実践事例を用いて解説している。 B5版 総頁数201P 編者:小森茂・角屋重樹 共著者:青木信生・新井宏和・伊崎一夫・石井雅幸・植松仁・大桑雅記・大野恵美・小川幸子・片山守道・角屋重樹・木下博義・小藤強・小森茂・新谷貴晴・菅原一郎・鈴木智裕・忠谷義人・寺本貴啓・中山貴司・成田雅樹・二瓶弘行・原浩一郎・福屋亜希子・森勇介・山田浩美・吉田宗樹・柳地一枝・渡邉弘樹 担当:「お話の目の付けどころを明らかにして、お話紹介カードを書こう」pp.97-101,「『だから』と考えてみよう・『なのに』と考えてみよう」pp.102-106。単著 内容:思考力・判断力・表現力等を育成するためには、国語科をはじめ各教科等の「言語活動の充実」が不可欠であり、国語科の場合には、言葉によって考えたり判断したり、想像したり読み取ったりすることは、具体的には各領域に位置付けられた「言語活動例」で「表現」されることによって可視化される。言語活動の指導と評価のポイントをふまえ、4年生における「読むこと」領域の指導として「ごんぎつね」「一つの花」(光村・東書)を取り上げ、指導方法の工夫改善について具体的に解説した。
(7) 教育フォーラム46 〈言葉の力〉を育てる	共著	平成22年8月	金子書房	平成20年度版学習指導要領の中核理念を成す“言葉の力”の育成をふまえ、その確かで豊かな実現に向け、重要な諸理論を多角的に考察し、さまざまな教科における言語力育成に関する実践的提案を行っている。 A5版 総頁数159P 編者:梶田叡一 共著者:梶田叡一・加藤明・伊崎一夫・鎌田首治朗・増井眞樹・勝見健史・汐海治美・谷本寛文・中島繁雄・金澤緑・米田豊・浅田匡・松田智子 担当:「論理的記述力を高める－お気に入りの本を選び「おすすめの文章」を書こう－」pp.25-35 単著 内容:PISA型読解力を強化するためには論理的記述力が不可欠であり、具体的な根拠に基づき自分の考えを主張する論理的記述力育成の可能性を「読むこと」領域との連携に求め、「読んだ本について、好きなところを紹介する」言語活動を例に、その工夫改善の有効性を論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(8) 豊かな言語活動が拓く国語単元学習の創造Ⅲ 小学校低学年編	共著	平成22年 8月	東洋館出版	国語単元学習と密接に関わる新学習指導要領のキーワード「言語活動」について、その理論と実践のポイントについて論じ、単元学習の精神に貫かれた国語教育の実践例を提示している。 A5版 総頁数239P 編者:日本国語教育学会監修 共著者:倉澤栄吉・大熊徹・坂本喜代子・西村充司・青山由紀・権堂順子・多田和幸・藤田慶三・庭田瑞穂・高島俊幸・稲田八穂・伊﨑一夫・松山清美・大川孝子・中村和弘・蜂須賀美菜・草野剛・大越和孝・寺井正憲・小山恵美子・高野保夫・三浦和尚・桑原隆 担当:「研究－読むことに関して」pp.170-177 単著 内容:具体的な言語活動を通して三領域における言葉の力を効果的に高めてきた単元学習の新学習指導要領における言語力育成の可能性について、具体的な実践例をもとに論じた。考察対象とした実践事例は、小学校低学年における「読むこと」領域に関する言語活動例「読んだ本について，好きなところを紹介すること」を具体化されたものである。単元学習の強みが充分に発揮された実践例を通して、PISA型「読解力」の育成を具現化し、「読書力」の育成を可能にする要件を明らかにした。
(9) 小学校国語科 学習指導案で授業が変わる!―学習指導案を読む・書く・使いこなす	単著	平成23年 ４月	日本標準	国語科の授業づくりの具体化を学習指導案の計画･立案によって行うことを基本方針に、「学習指導案を読み解く」「学習指導案を書ききる」「学習指導案を使いこなす」「教材解釈と授業づくり」「学習指導要領で求められる国語力とそのポイント」を観点として、「言語活動の充実」を担う国語科の役割とその具体化について詳細に解説した。 確かな言語力を育成するには、単元構想の工夫を支える教材解釈の充実、具体的な学習の場においては伝え合い・コミュニケーション活動の活性化、言語力育成に関する評価方法の確立が重要となることを強調した。書写指導における電子黒板等の情報機器活用に関する実践事例にも言及した。 B5版　総頁数135P

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10) 観点別学習状況の評価規準と判定基準［小学校国語］	共著	平成23年 ４月	図書文化	教科の目標から具体的な評価規準の設定や評価技法の選定に至るまでの「分析･具体化の手順」と期末の評価に至る「統合・要約化の手順」を明示し、明確な根拠に基づく評価について論じたものである。 B5版 総頁数223P 監修:北尾倫彦 全体編集:山森光陽、鈴木秀幸 国語編者:田中洋一 共著者:大場弥恵、大月ちとせ、池上優子、川上ひより、福山聡恵、米田直紀、細川大輔、香月正登、田村たまえ、宇賀村康子、大江実代子、新井雅晶、松野美幸、伊﨑一夫、他44名 担当:2年:7「読むこと（説明文）：順序に気をつけて読む」pp.94-95 単著、5年:10「伝統・国語（古典）：伝統的な言語文化」pp.168-169 単著 2年:7においては、「読んで考えたことを書こう『どうぶつ園のじゅうい』（光村図書）」について、「動物園の獣医の一日の仕事の流れを確かめながら仕事内容やそのわけを読み取り、心が引き付けられたところを自分の経験と結び付け、考えたことを書く」ことをねらいとし、「獣医の仕事とそのわけについて、一日の仕事の流れからまとめる学習場面」と、「一番引き付けられたところを基に感想を書く学習場面」とを取り上げ、具体的な評価規準と判定基準を明示した。いずれの指導場面においても、「自分なりの考えを理由を明確にして書くこと」「交流活動を通して学級内他者の良いところを見つけ伝え合うこと」の重要性を強調した。 5年:10においては、「声に出して楽しもう『論語』（光村図書）」について、「３つの論語と解説文を手掛かりに、昔の人のものの見方や感じ方を知り、現代人のものの見方や感じ方と比べる」ことをねらいとし、「３つの論語から最も好きなものを選び、その理由を書く学習場面」と、「交流を終えて、新たな気付きを発表する学習場面」とを取り上げ、具体的な評価規準と判定基準を明示した。いずれの指導場面においても、「自分なりの考えを理由を明確にして説明すること」「交流活動を通して深まった解釈や変化した考えを書き加えること」の重要性を強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(11) 次世代の教職入門	共著	平成23年 5月	大学教育出版	教員の資質向上と研修が求められる社会的な背景を教育基本法等の改正や学習指導要領の改訂と関連付けながら論じたものである。 A5版 総頁数297P 編者:中田正浩 共著者:鎌田首治朗・中田正浩・松田智子・大野光二・山本正・大石隆夫・中田律子・伊崎一夫・住本克彦・杉田郁代・筒井愛知 担当:「第6章学級経営」pp.133-155 単著 内容:学級担任の教師は、児童・生徒相互の人間関係を育てる場としての学級の役割を重要なものとして認識し、個や集団に働きかけ、児童・生徒相互の好ましい人間関係を育てるために学級経営を充実させる。その要として学級経営案は作成される。小学校を中心に、幼稚園・保育所、中学校における具体的な学級経営案の事例をもとに、一人の教師として学級経営デザインができるよう解説した。
(12) 国語実践に学ぶ「基礎・基本習得の技能」	単著	平成24年 8月	株式会社ERP 教育PRO 特集号	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、「言葉の力」の獲得を保障する学習活動について実践的方向を示し、その具体化の手立てと有効性について論じた。学習活動の活性化のためには、単元構想や実際の指導における仕組みや仕掛けの工夫が求められると共に、学習指導要領の指導事項として示されている「言葉の力」の理解と吟味が不可欠であることを強調した。学習指導要領において示された記録、報告、解説、推薦等の言語活動例を取り上げ、それらの意味と意義について、実践事例を挙げながら詳述している。 B5版　総頁数40P
(13) 国語授業へのアプローチ・知っておきたい国語教育の〈ことば〉	単著	平成24年 10月	株式会社ERP ERPブックレット	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」をふまえ、指導事項に取り上げられている基礎的･基本的な用語を取り上げ、文芸理論、分析批評等の観点をふまえ、その意味や意義を解説した。具体的には、「登場人物」「主題」「視点」「ファンタージ教材」「イメージ化」「音読・朗読・暗唱」「形式段落・意味段落」「事実・意見」「説明・解説」「俳句・短歌」「漢字」「書写(トメ・ハネ・ハライ)」などの用語について、具体的な実践事例を示しながら詳述している。物語文教材に関するものを多く取り上げ、詳細な読解に偏りがちな授業の工夫改善への視座を明確にした。 A5版　総頁数86P

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(14) 教育フォーラム51 言語活動―『読み』『書く』の力を中心に	共著	平成25年 2月	金子書房	平成20年度版学習指導要領が目指す確かな学力を身につけるためには、＜言葉の力＞が必要不可欠である事をふまえ、言語活動を通して確かな「読み」と「書く」の力を育む理論と実践のあり方を提案している。 A5版　総頁数135P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・金澤孝夫・渡部久美子・伊﨑一夫・阿部秀高・加藤明・湯峯裕・井上尚美・鎌田首治朗・高木章・蔵あすか・杉田郁代・オチャンテ-村井-ロサ-メルセデス 担当：「文学教材の論理的読解のために－「主題把握」とテキストの多様な情報を関連付けることを－」pp,48-58 単著 内容：PISA型読解力は、単なる言語活動ではなく、目的に応じてより積極的で自覚的な態度･姿勢に基づく言語活動を一貫して求めてきた。PISA型読解力は、情報のインプットからアウトプットまでの一連の論理的思考を要求するため、PISA型読解力においては「自分の考え」を論述することが不可欠となる。このことは文学教材の読解においても重要である。妥当性のある「自分の考え」を持つことに、テキストの文脈的理解と主題把握は大きく関与する。「『ごんぎつね』のしかけを見つける」実践事例の分析を通して、主題把握と、テキストに埋め込まれている多様な情報を関連付けることによって論理的思考力が強化され、「自分の考え」が創出されることを論証した。
(15)教育フォーラム53 文学が育てる言葉の力 文学教材を用いた指導をどうするか	共著	平成26年 2月	金子書房	今までよりさらに高次の「言葉の力」を育成するため、文学作品に惹きつけられる出会いと的確な指導のあり方を提案。 A5版　総頁数148P 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・伊﨑一夫他11名 担当：「テキスト全体の構造的理解を促す文学教材の指導」pp,37-47　単著 内容： 児童生徒に文学の持つ魅力に気づかせ、作品を通して子どもの言葉の世界を深めさせていくためには、物語の構造的理解に関する学習が不可欠であることを、「三年とうげ」（光村3年下・平成23年本）を例に論証した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
(1)　日々の暮らしに一輪の花を－茶花の役割と思いやり－	単著	平成17年11月	三田市教育委員会指定第10回三田市立ゆりのき台小学校・公開教育研究発表会研究紀要「かがやけ！ビーミーっ子」№10 pp.185-192	茶室のしつらえのうち茶花に焦点を当て、その役割と価値について、利休七則の「花は野にあるように」が、簡潔な表現の仕方と生命を尊ぶ心につながることを論じた。季節を大切にする茶の湯では茶花が重要な役割を果たしており、花が咲いていた状態を感じさせる姿に入れることを促す「花は野にあるように」は、ものの本質を簡潔に表現することであることをふまえ、四季折々の自然の風景や移ろいを象徴的に表現することによって、生け花とは違う茶花ならではの味わいが生まれることを、茶道クラブの取り組みを例に強調した。そこから、一輪の花のある暮らしぶりを提言している。
(2)　小学校国語科「読むこと」領域における学習指導の工夫に関する研究―伝え合いを重視した「本の紹介活動」を中心に 【査読あり・修士論文】	単著	平成18年3月	兵庫教育大学大学院	伝え合い学習活動を成立させるためのポイント（①伝え合うべきものを生み出す　②「いいところ見つけ」交流活動　③伝え合いによる成果の整理集約　④新たな価値の自覚化）を先行研究を踏まえた上で抽出し，小学校2年生の「読むこと」領域における学習活動において，そのポイントを充足する学習指導の有効性について「学級内外の他者にお気に入りの本を紹介し合う」という実践によって，検証・確認した。「ことばの力」を駆使した伝え合い活動においては、メタ認知機能が十全に発揮され、目的的・意図的な言語力獲得に有効であることを強調した。 B5版　総頁数120p

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)　小学校国語科「読むこと」領域における学習指導の工夫に関する研究―伝え合いを重視した「本の紹介活動」を中心に 【査読あり】	単著	平成19年3月	「言語表現研究」第23号 兵庫教育大学言語表現学会 pp. 12-23	伝え合い学習活動を成立させるためのポイント（①伝え合うべきものを生み出す　②「いいところ見つけ」交流活動　③伝え合いによる成果の整理集約　④新たな価値の自覚化）を先行研究を踏まえた上で抽出し，小学校2年生の「読むこと」領域における学習活動において，そのポイントを充足する学習指導の有効性について「学級内外の他者にお気に入りの本を紹介し合う」という実践によって，検証・確認した。（尚，本稿は，前出39の修士論文の内容を精査したものであり、「ことばの力」を駆使した伝え合い活動においては、支持的風土に支えられた双方向コミュニケーションの成立が不可欠であり、その内実は「いいところ見つけ」交流活動によって発揮され、醸成されることを付加している。）
(4)　小学校国語科『書くこと』領域における学習指導の工夫―「伝え合い」を重視した入門期の指導― 【査読あり】	単著	平成19年6月	「解釈」 第53巻第5･6号 解釈学会（日本学術会議協力学術研究団体） pp. 40-46	伝え合い学習活動を成立させるためのポイント（①伝え合うべきものを生み出す　②「いいところ見つけ」交流活動　③伝え合いによる成果の整理集約　④新たな価値の自覚化）を先行研究を踏まえた上で抽出し，小学校1年生入門期の「書くこと」領域における学習活動において，そのポイントを充足する学習指導の有効性を，「あのねちょう」と題する自由作文を中心とする実践によって，検証・確認した。「ことばの力」を駆使した伝え合い活動においては、支持的風土に支えられた双方向コミュニケーションの成立が不可欠であり、その内実は「いいところ見つけ」交流活動によって発揮され、醸成されることを強調した。
(5)　一碗のお茶と伝統的な食文化－食育教育へのまなざし－	単著	平成19年11月	三田市教育委員会指定第7回三田市立けやき台小学校・公開教育研究発表会研究紀要 pp. 119-126	「子どもたちが豊かな人間性を育み、生きる力を身につけていくためには何よりも『食』が重要である」という食育教育の重要性について、茶道におけるお茶の効用、文化としてのお茶の作法を切り口に論じた。茶道クラブの取り組みを例に、豊かな食、伝統的な食文化としての茶道の価値について強調した。一碗のお茶には数多くの準備が必要であること、茶道クラブが地域の方の協力を得て運営されていることなどから、日々の食事も見えないところで多数の人々が関わっていることに言及した。さらに、学校だけではなく、各家庭における食育が充実することへの期待についても付加している。
(6)　言葉の力を培う「授業力」を鍛えるポイント	単著	平成19年12月	教育科学「国語教育」№687 明治図書 pp. 36-39	教師に求められる「授業力」の意味とその価値について，具体例を示しながら論じた。好ましい「授業力」のイメージを，「短期決戦型」の学力観と「長期実現型」の学力観とを対比的に示すことによって明らかにした。「長期実現型」の学力観においては、言語力を培う年間指導計画の策定と、効果的な言語力の活用の良さを相互に評価し合う場の設定が不可欠であることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)　小学校国語科『書くこと』領域における学習指導の工夫に関する研究―伝え合いを重視した入門期の指導 【査読あり】	単著	平成20年 3月	「教育実践学論集」 兵庫教育大学大学院博士課程研究科論文集 pp.61-73	伝え合い学習活動を成立させるためのポイントト（①伝え合うべきものを生み出す　②「いいところ見つけ」交流活動　③伝え合いによる成果の整理集約　④新たな価値の自覚化）を，先行研究を踏まえた上で抽出し，小学校1年生入門期の「書くこと」領域における学習活動において，そのポイントを満足する学習指導の有効性を，「あのねちょう」と題する自由作文を中心とする実践によって検証・確認した。「ことばの力」を駆使した伝え合い活動においては、支持的風土に支えられた双方向コミュニケーションの成立が不可欠であり、その内実は「いいところ見つけ」交流活動によって発揮され、醸成されることを強調した。(尚，本稿においては，前出39が紙幅の都合もあり論じられなかった，年間指導計画の有効性及び，就学以前に獲得している言語力との関連，年間指導計画と「伝え合い」学習活動の関連について詳述している。)
(8)　PISA型「読解力」の具体化―工夫改善における三つのポイント― 【査読あり】	単著	平成20年 4月	月刊「国語教育研究」 №432 日本国語教育学会 pp.60-67	新学習指導要領において強調されているPISA型「読解力」育成の具体例の一つとして，高学年文学教材（「ヒロシマのうた」東書６年）に関する実践事例を示し，その有効性について論じた。テキストを理解・評価しながら読む力を高めるための方策として，「お話読み解きシート」（①テキストの設定　②主な出来事　③展開　④表現上の特色　⑤感想　の5項目からなるワークシート）、「ブックレポート」（テキストの構造と良さに関する主張を感想と共に自由形式で出力するもの）を取り上げた。「お話読み解きシート」「ブックレポート」のいずれについても、学級内他者による相互評価を繰り返し、その価値の自覚化を強化することが重要であることを強調した。
(9)　要約・説明力をどう育てるか－「要するに…，要するに…」を繰り返し，自分のフィルターを強化する－	単著	平成20年 4月	教育科学「国語教育」 №691 明治図書 pp.48-51	実生活の様々な場面における言語活動の充実を強調する中教審答申(平成20年1月)において示された要約・説明力に焦点を当て，その手だてに関する具体的な提案を行い，実践的に論じた。6年生の説明的教材，文学的教材に対する学習者の要約事例を具体例として示し，その価値について分析した。妥当性を有し質の高い要約に到達するためには、学級内他者同士の伝え合い活動である双方向コミュニケーションの場が活性化する必要があることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10) 茶の湯における「もてなし」「気遣い」「思いやり」―茶道クラブで学べること―	単著	平成20年11月	三田市教育委員会指定第8回三田市立けやき台小学校・公開教育研究発表会研究紀要 pp. 126-133	茶会の席で人をもてなす際の心構えを説くキーワードである「利休七則」「和敬清寂」「一期一会」の意味と意義について、茶道クラブの取り組みを例に論じた。茶道クラブの体験に対する子どもたちのふり返りや保護者からの感想等から、「もてなし」「気遣い」「思いやり」を抽出し、茶会のしつらえにおける茶花や道具立ての役割を例に、茶席には「もてなし」「気遣い」「思いやり」が具体化されていること、茶道クラブの体験は人と人とが生きていく社会の中での生き方や関係について考える良い機会になることなど、茶道が日常生活や伝統文化を見直す第一歩となることを強調した。
(11) 情報活用力としての「書く力」をたかめる－読み解きシート徹底活用－【査読あり】	単著	平成20年12月	第57回読売教育賞受賞者論文集 pp. 5-22	国語力の中核となる言語能力である「書く力」に焦点を当て、目的や意図に応じて情報を吟味し、必要な情報を適切に効果的に分かりやすく表出するための学習指導の工夫改善の一例として「読み解きシート」を提案し、その有効性を実践的に論じた。具体的には、6年生の文学教材（「風切るつばさ」「ヒロシマのうた」「桃花片」「雪渡り」「海のいのち」）と説明文教材（「イースター島にはなぜ森林がないのか」「マンモス絶滅のなぞ」「言葉の意味を追って」「百年前の未来予測」）を取り上げ、「書く力」を高めるための方策として，「お話読み解きシート」（①テキストの設定　②主な出来事　③展開　④表現上の特色　⑤感想　の5項目からなるワークシート）、「ブックレポート」（テキストの構造と良さに関する主張を感想と共に自由形式で出力するもの）を用いた年間を通した実践の具体と、子どもたちの「書く力」の高まりに関する分析を行っている。「お話読み解きシート」と「ブックレポート」の質的深化は「いいところ見つけ」という相互評価活動によって可能であること、「書く力」の高まりは３学期後半に書かれた卒業論文によって確認できたことを論証している。
(12) 「伝統的な言語文化」高学年の授業づくりへの配慮―年間指導計画に位置付き，と活躍する古典という素材―	単著	平成20年12月	教育科学「国語教育」№701 明治図書 pp. 60-63	平成20年度版学習指導要領において新設された事項「伝統的な言語文化」における配慮事項について，「竹取物語」を例に具体的な提案を行い，実践的に論じた。古文の学習によって，学習者はものの見方や感じ方を広げることや，昔の言葉遣いへの興味関心を高めることができることを明らかにした。指導方法の工夫改善の一例として、教科書の解説文だけではなく、児童図書による鑑賞文を効果的に活用する方法を提案し、その有効性を実証した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(13)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究－絵本の読み聞かせを取り入れた読解指導－	単著	平成22年3月	環太平洋大学研究紀要第３号 環太平洋大学 pp. 43-50	幼稚園の「ことば」領域と小学校入門期の「読むこと」領域において、PISA型「読解力」の育成を可能とする学習指導の工夫改善のポイントを「絵本の読み聞かせ」に求め、その有効性について論じた。「(1)絵本の読み聞かせを継続し、多くの情報を与える」「(2)お話の「つながり」をキーワードにすえ、お話相互の共通性に注目させる」「(3)感じたおもしろさの理由を表出させる場を設定する（幼稚園段階では発話、小学校低学年ではワークシート）」ことの３点を充足する学習指導の工夫改善によって、 読解リテラシーの向上が保障されることを、実践によって検証・確認した。絵本の読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げることによって、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその発達における質的変化を論証の対象とした。
(14)　これからのあるべき国語教室に関する実践的研究 【査読あり・博士論文】	単著	平成23年3月	兵庫教育大学大学院	平成20年度版学習指導要領に対応する国語教室のモデルを提示し、その実現を可能にする要件の有効性を具体的実践に基づき検証したものである。第一章においては、目的的に行われている国語教室に内包される実践的価値を吟味し、国語教室のモデルの枠組みとして、学びの成立を客観性、主体性、社会性の三項からなる「三項性」構造を検証し、「平成20年度版学習指導要領・国語科に対応する国語教室実現への工夫改善のポイント」を導出した。第二章においては、工夫改善のポイントに関する詳細な考察を、具体的な事例に基づいて行っている。第三章から第五章においては、「工夫改善のポイント」を満足する年間を通した指導事例について、その内容を詳述し、「工夫改善のポイント」の有効性について検証している。第三章では「書くこと」領域（小学校低学年）、第四章では「話すこと・聞くこと」領域（小学校中学年）、第五章では「読むこと」領域（小学校高学年）を取り上げている。終章となる第６章においては、本論文のの総括と結論を提示し、「これからのあるべき国語教室」の展望を示した。 A4版　総頁数230p
(15)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(2)－「つなぐ思考」の活性化－	単著	平成23年3月	環太平洋大学研究紀要第４号 環太平洋大学 pp. 65-71	幼稚園の「ことば」領域と小学校入門期の「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「つなぐ思考」に求め、その有効性について論じた。「①絵本の読み聞かせと感想交流を継続する　②「つなぐ思考」を促す接続詞を活用する　③自分の感想を「お気に入り」としてまとめる」ことの３点を充足する学習指導の工夫改善によって、「つなぐ思考〈論理的思考力〉の向上が保障されることを、実践によって検証・確認した。絵本の読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げることによって、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその発達における質的変化を論証の対象とした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(16)　論理的思考を強化し、「つなぐ思考」を活性化する単元開発－「どうぶつの赤ちゃん」を例に－ 【査読あり】	単著	平成23年 4月	月刊「国語教育研究」 №468 日本国語教育学会 pp.10-15	論理的に思考し、論理的に記述するためには、事象と事象とを関連づけ、そこに必然的な結びつきを見い出す思考、情報を「つなぐ思考」が求められることを示し、その有効性について論じた。論理的思考力の強化による言語生活を高める単元開発の一例として、「どうぶつの赤ちゃん」（光村１年）における図鑑作りを取り上げ、「つなぐ思考」を強化することによって、論理的思考は活性化し、自分の考えを主張できる「表現力」へと結びつくことを明らかにした。図鑑作りという制作活動にとどまることなく、作成された図鑑について相互に評価し、吟味し合うことの重要性を強調した。
(17)　言語活動例と指導事項との結びつきを見極める	単著	平成23年 9月	「実践国語研究」 308号 明治図書 PP.19-20	言語活動例を通して論理的思考力を育成するためには、言語活動例と指導事項との結びつきを見極め、教材文のキーワードから単元構想の手がかりを掴み出す必要があることを、具体的な実践事例をもとに論じた。考察対象とした実践事例は、「どうぶつの赤ちゃん」(小学校１年・説明文教材)である。説明文における学びを生かし、「説明する文章を書く」という言語活動を豊かに展開するためには、教材文のキーワードである「自分で」「自分では」に着目した論理的な思考と、論理的な記述が必要であることを明らかにした。論理的な記述の妥当性を高めるためには、学級内他者による相互評価活動の活性化が不可欠であることを強調している。
(18)　板書原論	単著	平成23年11月	「小四教育技術」 平成23年11-12月号 小学館 PP.14-18	板書が「授業の展開に沿って、理解を深め、考え方を強化し、思考を整理するために必要な情報を提供する」ことを、多様な指導事例を示しながら、具体的に論じた。考察対象とした実践事例は、「ごんぎつね」(物語教材)、「動いて、考えて、また動く」（説明文教材）、「短歌と俳句」(伝統的な言語文化と国語の特質)、「施設見学新聞作り」(社会科・総合的な学習)である。教材文の構成を視覚的にとらえること、学習者の考えを価値づけること、学習活動やモデルを的確な提示すること等、言語力獲得における効果的な板書機能の特質を明らかにした。また、電子黒板の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及している。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(19)　国語科の課題－「習得」と連動した「言語活動」の構想－	単著	平成23年12月	「新しい教育」Vol.25 日本標準教育研究所 2011年12月 PP.2-5	平成20年度版学習指導要領が求める「言語活動の充実」は「各教科等を貫く重要な改善の視点」であり、そのために各教科の中核に位置付く国語科が重要な役割を担っていることをふまえ、「習得」と連動した「言語活動」のありようについて、具体的に論じた。考察対象として、「スピーチ」「宝物紹介」「感想文」「読解学習」等、小・中学校の指導事例を全般的に取り上げた。「言語活動の充実」においては、考察対象とした「スピーチ」「宝物紹介」「感想文」等の生成にとどまることなく、それらを用いた学級内外他者による相互評価活動が不可欠であることを強調している。
(20)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(3)－「さぐる思考」の活性化－	単著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要第５号 環太平洋大学 pp.51-60	小学校「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「さぐる思考」に求め、その有効性について論じた。「１テーマ（読者に伝えたいこと）」「２テーマを伝えるためのメインアイデアとこのお話ならではの表現の工夫」の２つの項目によって構成されているワークシートを十分に活用することによって、「さぐる思考」が活性化され、合理的な「自分の考え」が創出されることを、実践によって検証・確認した。「自分の考え」の妥当性と、その質の深化・拡充においては、学級内外他者による相互評価活動が不可欠であることを強調している。
(21)　読書体験の深化・拡充を促す絵本の読み聞かせ(1)－『体感型読書』プログラム 「ももたろう」の特徴と効果－	単著	平成24年10月	環太平洋大学研究紀要第６号 環太平洋大学 pp.91-98	３年目を迎える「地域の教育・文化における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」（学術振興財団22年度科学研究補助金対象研究基盤研究Ｃ）の総括に向け、多岐にわたる実践データの整理・分析を行うための基礎的な視座を明らかにした。具体的には、平成23年2月22日に行った三田市立富士小学校における実践データ（3年生と5年生合計108名に実施）をもとに、読書体験という観点からの分析を試みた。プログラム実施後のアンケート調査等によって、「音楽･映像等の情報を加味し多様な表現活動を保障すること」と「聞き手同士の関わりを活性化すること」の有効性を確認している。
(22)　読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(4)－「いいところ見つけ交流活動」の活性化－	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第７号 環太平洋大学 pp.89-96	小学校「読むこと」領域における学習活動において、論理的思考力の育成を可能にする学習指導の工夫改善のポイントを「自分の考え」の効果的な表出に求め、その表出を支える相互評価活動である「いいところ見つけ交流活動」の重要性と有効性について論じた。妥当性のある「自分の考え」を持つことに、テキストの文脈的理解と主題把握が大きく関与することと共に、テキストの文脈的理解と主題把握の質的深化のためには相互評価活動が不可欠であることを論証した。具体的には、「『ごんぎつね』のしかけを見つける」実践事例を取り上げている。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(23)　いま「学び方開き」のとき－学びの基礎を手ほどきする－	単著	平成25年4月	「小四教育技術」平成25年4月号 小学館 PP.75-80	学級開きの4月が一年間の学び方の基礎を教えるときであることを指摘し、その具体的手法として「朝の会のミニスピーチ」「教科書の仕組みを知る学習」「音読カードの項目の作成」「連絡帳による学習のふり返り」等を提案した。全ての教科学習に共通する学び方として、「話し方」「聞き方」「本読みの仕方」「ノートの使い方」「ふり返りの仕方」などがあり、4月時期に意図的・計画的に指導する必要があることを強調した。
(24)　前学年までの学びを可視化する－「ことばの力」の一覧表を用いて－	単著	平成25年5月	「実践国語研究」 №318 明治図書 pp.11-12	国語科の授業開きのポイントを「前学年までの既習のことばの学び」の確認に求め、既習の学びを意図的・計画的に活用していくことの重要性を指摘した。具体的には、4年生5月単元の説明文学習を行うまでに、3年生までに学習した説明文11教材を再読し、どのような学習が行われたのかをふり返り「ことばの力・一覧表」を作成する学習活動を提案している。「ことばの力・一覧表」の作成が、身に付けた「ことばの力」の能動的・積極的な活用につながることを強調している。
(25)小学校国語科教育の課題と克服に向けて ―「言葉の力」を育む「ノート指導」と「学習で使う言葉」―	単著	平成26年4月	「教育ＰＲＯ」第44巻第8号 日本教育綜合研究所 2014年4月 PP.16-19	国語指導のさらなる工夫改善につながる糸口を、平成25年の「全国学力・学習状況調査」に求め、その具体的方策として、「論理的思考力にかかわる用語の指導」「学習で使う用語の適切な指導」「年間を通した言語活動の継続」「めあて・ふり返りの明確化」「ノート指導の充実」等の重要性を具体例とともに論述した。
(26)「人間教育」に資する「これからのあるべき国語教室」の成立と展開(1) ―「これからのあるべき国語教室」を支える三つの要件―	単著	平成26年4月	「人間教育学会研究紀要創刊号」 2014年4月 pp.47-65 査読有	これからのあるべき国語教室における成立の要件について、その有効性を具体的実践に基づき検証した。国語教室実現への工夫改善のポイントとして、「①教室カリキュラム(年間指導計画)」「②観点表」「③いいところ見つけ交流活動」の３点を導出し、その有効性を具体的な実践事例に基づき検証した。取り上げた実践事例は、「読むこと」領域の物語文の読解指導（小学校高学年）であり、作品の価値を適切にまとめる「ブックレポート」の継続指導を方策とする言語力獲得の経緯とその結果について考察している。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(27)伝統や文化に関する教育の可能性(2) －国語教育のアプローチ－	単著	平成26年 12月	「人間教育学会研究紀要第２号」 2015年12月 pp.177-１84 査読有	「伝統や文化の教育」の現代的意味・意義について、関係法令の規定等をふまえ論述し、教育実践における教科書教材を活用した言語活動の有効性について指摘した。 「伝統や文化の教育」は「人間力」と深く関わっていること、「人間力」は豊かな経験や教養を持つ人間としての魅力であること、「人間力」の基盤に日本の伝統や文化体験が位置付くこと、「人間力」は「伝統や文化の教育」が充実することによって高められること等を強調した。さらに、「伝統や文化の教育」は、５つの基本視点（「(1)学校全体で取り組む」「(2)伝統や文化にかかわる従来の教育実践を生かす」「(3)伝統や文化にかかわる学びをつなげ、深める」「(4)実生活とのかかわりを考える」「(5)体験的な学習と言語活動を関連させる」）によって推進されることを提起した。
(28)「言葉の力」を高める言語活動の活性化	単著	平成27年 3月	「国語兵庫」 №94 青雲舎 pp.6-13	平成26年8月に行った「兵庫県国語教育連盟第57回夏季国語教育研修大会」での講演をもとに、言語力育成に資する単元構想の基本的な考え方について論じた。特に、言語活動の活性化には「前単元までの学び」を積極的に組み込む必要があることを、「三年とうげ」(光村3年)、「ごんぎつね」(光村・東書4年)等における授業実践を取り上げ、具体的・実践的に記述した。
（その他） 「研究報告書」 (1)　絵本を活用した読解指導の工夫に関する研究	単著	平成23年 7月	平成22年度教育研究助成成果報告書 財団法人福武教育文化振興財団 pp.63-64	幼稚園の「ことば」領域と小学校低学年「読むこと」領域において、読解リテラシーとなるPISA型読解力の向上に関する具体化の視座を絵本の読み聞かせに求め、その有効性を実証した。PISA型読解力を効果的に育成するために、幼稚園では自分の感じたおもしろさを言葉で伝え合うこと、小学校では自分の読んだ本について好きなところを紹介する、つまり「おすすめの文章」を書くことを中核に据えた取り組みを年間を通し継続的に行い、「文章を深く読んで分析的に理解してその上で論理的に表出する能力」が効果的に育成されることを論じた。読み聞かせの事例として、幼稚園年少から小学校入門期までを取り上げ、幼児期から小学校低学年に至る子どもの言語獲得とその読解リテラシーの発達における質的変化を対象とした。
「学会発表」 (1)国語科における「伝え合い」学習指導についての実践的研究	－	平成17年 10月	全国大学国語教育学会 第109回岐阜大会 平成17年10月30日(日) 第6会場	伝え合い学習活動を成立させるためのポイントを，先行研究を踏まえた上で抽出し，小学校2年「読むこと」領域における学習活動（「本の紹介活動」）において，そのポイントを満足する学習指導の有効性を，実践によって検証・確認した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「講演」 (1) 新学習指導要領にもとづく授業づくり ―国語科の授業をどう変えるのか	―	平成20年 8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成20年度 国語科教育研修会 平成20年8月22日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等について説明を行った上で，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が，新国語科に対応した国語教室実現への改善のポイントとなることを指摘し，その具体策の要点について解説した。尚，実践事例として，小学校１年生を対象とした通年の作文指導と6年生における教科書教材を活用した作品紹介活動を取り上げた。
(2) 新学習指導要領と国語科授業の創造	―	平成20年 8月	大阪府箕面市教育委員会主催 平成20年度授業カアップ連続講座② （小：国語） 平成20年8月25日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，小学校1年生における年間を通した作文指導と5年生における教科書教材を活用したＰＯＰ作りと作品の推薦活動を実践事例として取り上げながら，新国語科に対応する国語教室実現に向け，「年間カリキュラム」「いいところ見つけ」「言葉の力のメタ認知」が工夫改善のポイントとなることを指摘し，具体化の要点について解説した。
(3) 新学習指導要領と「言語活動の充実」	―	平成21年 6月	鳥取県中部地区小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会 平成21年6月10日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと、その際に求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校６年生における読解指導と、卒業論文を書かせる総合学習とを取りあげた。
(4) 新学習指導要領にもとづく授業づくり ―言語活動の充実が目ざすもの―	―	平成21年 8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成21年度 国語科教育研修会 平成21年8月26日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5) 新学習指導要領と国語科授業の創造	－	平成21年11月	旭川市教育委員会主催国語教育研究大会 平成21年11月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」及び，新国語科の改訂のポイントである「言語活動例の格上げ」「言語活動の充実」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」「PISA型読解力」等を踏まえ，新国語科に対応する国語教室実現に向けての具体的方策を示しながら、具体化の要点と求められる授業技術・方法について詳細に解説した。
(6) 新学習指導要領と「言語活動の充実」	－	平成22年2月	愛知県北名古屋市小学校教育研究会主催 平成21年度教育研修会 平成22年2月12日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，小学校５年生における読解指導と、環境をテーマとする総合学習を取りあげた。
(7) 新学習指導要領にもとづく授業づくり－言語活動の充実－	－	平成22年8月	兵庫県川西市教育委員会主催 平成22年度 国語科教育研修会 平成22年8月5日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「話すこと・聞くこと」領域の年間を通した「スピーチ活動」を取り上げた。
(8) 言語活動の充実と年間指導計画への期待	－	平成22年8月	宮崎県小学校教育研究会国語部会主催 第38回宮崎県小学校教育研究会 夏期研修会 平成22年8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、説明文教材「たんぽぽ」「ビーバーの大工事」（２年）、「くらしの中の和と洋」（４年）、「森林のおくりもの」（５年）等を取り上げた。
(9) 「言語活動の充実」と学校・地域・家庭の教育力	－	平成22年10月	篠山市教育委員会指定研究事業「学力向上実践推進事業」 平成22年度篠山市立味間小学校公開研究発表会 平成22年10月20日	平成20年度版学習指導要領改訂の基本的な考え方である「習得」「活用」「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」を踏まえ、全教科・領域において取り組むべき「言語活動の充実」を具体化するために必要となる指導方法の工夫改善のポイントと求められる教育方法・指導技術について詳細に解説した。実践事例として，各学年の公開授業を取り上げ、それらの授業の成立は、学校・地域・家庭の教育力に支えられていることを強調した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(10) 確かな学力と人間関係をつくりだす力	－	平成22年11月	三田市教育委員会指定研究事業 平成22年度三田市立富士小学校公開研究発表会 平成22年11月26日	豊かな人間関係を培うためには確かな言語運用能力が不可欠であることを踏まえ、当該校の３年にわたる研究の有する価値とその成果について言及した。特に共生教育においては、自己をみとめ、他者とコミュニケーションすることが極めて重要であることを強調した。
(11) PISA型読解力を育む新しい国語の授業づくり	－	平成23年7月	大阪市教育センター主催「学力向上授業研修会」 平成23年7月21日	「思考力・判断力・表現力」と「論理的に考えること」、PISA型読解力と「論理的に考えること」、「論理的に考えること」と「つなぐ思考」等の関連について、新学習指導要領の趣旨をふまえ、詳細に解説した。「論理的に考えること」が培われる国語教室の具体像については、小・中学校の実践事例を取り上げた。
(12) 思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり	－	平成23年11月	福山市教育委員会指定研究事業 平成23年度福山市立東中学校公開教育研究会 平成23年11月4日	論理的思考力を育成するためには、「『ＷＨＹ』『ＨＯＷ』を自問すること」「『質問力』を鍛えること」「関係性を理解して解釈すること」「因果関係・脈絡・つながりに着目させること」等が重要であることを解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、数学、理科、社会、英語、技術家庭、音楽等）を多数取り上げた。
(13) 習得・活用・探求型の授業を創造する	－	平成23年12月	三田市教育委員会指定研究事業 平成23年度三田市立本庄小学校公開研究発表会 平成23年12月2日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、「習得・活用・探求」活動の意義とその具体化の視点について詳細に解説した。具体的な指導事例として、当日の公開授業（国語、算数、社会、音楽、総合学習等）を多数取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
(14) 国語科指導力向上に向けて	－	平成24年7月	奈良市教育センター主催「国語科教育研修講座」 平成24年7月27日	平成20年度版学習指導要領の要である「言語活動の充実」は、学習意欲をもって基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、習得した知識・技能を活用して思考力・判断力・表現力等を育成することに主眼があることを、具体的な実践事例を示しながら解説した。言葉の力を培う国語教室を実現するためには、(1)年間指導計画の構築、(2)相互評価活動の活性化、(3)「言葉の力」のメタ認知の場の設定が重要となることを強調した。
「ワークショップ講師」 (1)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成18年8月	第69回日本国語教育学会全国大会 平成18年8月8日	1年生文学教材「てがみ」を素材として，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。特に低学年の児童同士のコミュニケーション活動を活性化させる手だてについて詳しく解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(2)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成19年8月	第70回日本国語教育学会全国大会 平成19年8月7日	6年生文学教材「ヒロシマのうた」「桃花片」を素材として，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
(3)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成20年8月	第71回日本国語教育学会全国大会 平成20年8月5日	5年生文学教材「大造じいさんとがん」を例に，PISA型「読解力」の具体化への観点とその実例を示した。併せて，確かな国語力育成を目ざす授業の工夫改善の視点として，年間指導計画の重要性，学級内外他者同士におけるコミュニケーション活動の活性化，自己評価活動の質の向上を促す学級経営の成立と教師の支援のあり方について具体的に解説した。
(4)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成21年8月	第72回日本国語教育学会全国大会 平成21年8月4日	2008年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校高学年における「作品紹介活動」を示し、学習指導の工夫改善のポイントと、その際必要不可欠となる指導技術について詳細に解説した。
(5)「PISA型読解力の授業づくり」	－	平成22年8月	第73回日本国語教育学会全国大会 平成22年8月10日	2009年度全国学力調査問題Ｂ問題を例に、PISA型「読解力」の求める国語力と新学習指導要領・新国語科が果たすべき言語力との関連について解説を行った。新国語科にもとづく実践事例として、小学校低学年における「絵本紹介活動」を示し、「論理の接続詞」を活用した絵本紹介の仕方とその意義について詳細に解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(6) 「思考力・判断力・表現力等の育成と授業づくり」	－	平成23年8月	第74回日本国語教育学会全国大会 平成23年8月9日	平成20年版学習指導要領国語科の重要実践課題である「思考力・判断力・表現力の育成」に向け、論理的な思考を促し、強化する必要性を示した。具体例として、絵本紹介(小学校1年)における理由を組み立てさせる接続詞の活用事例、「どうぶつの赤ちゃん」(光村1年)における読解のキーワードを用いた表現活動の成果を取り上げた。「言語活動の充実」には、活動だけではなく適切な評価が必要であることを強調した。
(7) 「『自分の考え』」を表現できる授業づくり」	－	平成24年8月	第75回日本国語教育学会全国大会 平成24年8月7日	「たんぽぽ」(東書2年)、「たんぽぽのちえ」(光村2年)を用いて、形式段落に区切る演習を行い、段落の区切りの理由を明らかにすることが段落相互の関係の理解を深めることを解説した。題名の重要性など、既習の学びを活かして、意図的に学習を組み立てていくことなど、自分の考えを表現するには、基礎的・基本的な学びのステップが必要であり、意図的・目的的な既習の学びの連続性が、明確な「自分の考え」を生み出すことを強調した。
「研修会講師」 (1) 「実践者と研究者のコラボレーションによる国語科授業づくりセミナー －授業びらき・授業つなぎ・授業おさめ－ 」	－	平成19年8月	兵庫教育大学主催の研修講座講師 平成19年8月23，24日	実践事例として，1年生への年間を通した作文指導，絵本等の紹介活動を中核とする読書指導などを示しつつ，授業実践における「意味・価値」を解説し，個々の教師が，確かで豊かな国語授業を自らの実践において生み出すための示唆を与えた。
(2) 「言語活動の充実」と国語科年間指導計画への期待	－	平成22年8月	平成22年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成22年8月26日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践事例として、「読むこと」領域の年間を通した「本の紹介活動」を取り上げた。
(3) 「言語活動の充実」と「国語科」	－	平成23年8月	平成23年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成23年8月25日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げた。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4)「言語活動の充実」と各学校への期待	－	平成24年8月	平成24年度環太平洋大学教員免許状更新講習 平成24年8月23日	平成20年度版学習指導要領・新国語科における「言語活動の充実」をふまえ、新国語科に対応する国語教室を実現するために必要な工夫改善のポイントとして「①年間指導計画」「②いいところ見つけ(交流活動)」「③『言葉の力』のメタ認知」の３点を示し、その具体化について解説した。各学校が抱える指導時数の不足感をふまえ、実践化への具体的提案として、平成23年本小学校国語科教科書から、各領域ごとに代表的な単元を取り上げ、特に「①年間指導計画」の重要性を強調した。また、デジタル教科書の活用方法等、ICTによる授業改善の可能性にも言及した。
(5)学力向上や子どもたちの言語力の向上のために	－	平成25年2月	奈良市教育委員会主催「ならの子ども学力向上プロジェクト事業」教育フォーラム　指導法改善研究部会(授業開発国語部会)の報告に関わる総括指導助言 平成25年2月22日	奈良市独自の学力・学習状況調査の調査結果分析結果をふまえた公開授業の成果を報告する教育フォーラムにおいて総括指導助言を行った。「子どもの学習の課題を解決するための授業の進め方」「小学校と中学校の学びの連続・連携のあり方」について、公開授業の成果の価値を明らかにし、今後の課題を示した。学力向上や子どもたちの言語力の向上のためには、教科書に閉じこもりがちな学習を見直し、実の場を活用した学習が有効となること、日常生活に資する言語力を培うためには、いかに広く多様な情報源に向かわせるか、言語環境の整備、多様な言語情報への目配りが大切であることを強調した。
「シンポジウム」 (1)シンポジウム分科会「国語教育」最優秀賞受賞 者・実践成果報告	－	平成23年6月	読売新聞社主催・読売教育賞第60回記念シンポジウム分科会 平成23年6月4日	第57回読売教育賞国語教育部門最優秀賞実践「情報活用力としての『書く力』をたかめる－読み書きシートの徹底活用－」について、実践の概要と特質について報告し、参会者との意見交流を行った。
(2) 言葉の力を活用する言語活動と国語科授業づくり －小、中学校との連携を視野に－	－	平成24年8月	公益財団法人 中央教育研究所、特定非営利活動法人 日本語検定委員会 主催 第1回「ことばの力」育成シンポジウム in千葉 報告者並びにパネルディスカッション・パネリスト 平成24年8月25日	報告では、「言葉の力」を活用する国語科授業づくりにおいては、「既習の学びを可視化し活用する言語活動が求められること」「既習の学びの積み重ねと積み上げには年間指導計画が重要であること」を、「たんぽぽ」(東書2年)「たんぽぽのちえ」(光村2年)の実践事例をもとに提言した。シンポジウムにおいては、「言葉の力」の習得と活用を小学校と中学校とが連携して行う必要があることを強調した。

教　育　研　究　業　績　書

平成　27 年 3 月 31 日

氏名　梶 田　叡 一

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
社会科学・心理学・教育心理学	自己意識・教育評価・教育思想・人間教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 1．学長として学生のキャリア意識、自己意識を高める講義	平成 10 年 4 月～平成 24 年 3 月	学長として、主に 1 年生・2 年生を対象としてキャリア形成と社会人としての自己意識を高めるために、知識基盤社会を生き抜く人間として必要な資質を育むための講義を行った。 教職、公務員、企業を目指す学生たちにとって、必要な「我の世界」と「我々の世界」の両方において自らの個性を発揮し、それぞれの世界の形成者として活躍できる人間像について、日本の伝統文化、言語力の重要性について説明した。 (京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科心理学専攻・環太平洋大学)
2．学生参加型のワーキング演習	平成 10 年 4 月～平成 24 年 3 月	学生一人ひとりに考えを持たせ、自らの考えを発信することによって、より確かな自己意識の確立を目指した。 特に学習指導要領や日本人のアイデンティティなどをテーマにして、学生同士で活発なディスカッションを行わせることによって、一人ひとりの考えを深化拡充させることができた。 (京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科心理学専攻・環太平洋大学)
3．知識基盤社会における大学教育のあり方についての講義	平成 10 年 4 月～平成 24 年 3 月	中央教育審議会の委員として、日本の教育行政の中心に関わるものとして、これからの知識基盤社会における大学教育として、大衆化された大学教育のあり方を講義した。その中で、学生一人ひとりを「大化け」させる確かな教育力を持った大学教育、講義のあり方について提案し、学長として大学教員に対する教育も行った。(京都ノートルダム女子大学大学院心理学研究科心理学専攻・兵庫教育大学・環太平洋大学)
2　作成した教科書、教材 特になし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 奈良学園大学設置準備委員会委員長任用における理事長の評価	平成 25 年 4 月	学長として、京都ノートルダム女子大学の学科増設と大学院設置、兵庫教育大学の教職大学院設置、環太平洋大学の学科増設など、それぞれの大学を発展させた功績は大きい。学長としてのリーダーシップも高く評価できる。 さらに、文部科学省の中央教育審議会等の役職も長期にわたり務め、現在の学習指導要領や学力状況調査の方向性をアドバイスし、日本の教育界における確かな学力の定着に果たした役割は大きい。 奈良学園大学の設置準備委員会の委員長、さらに学長予定者としては適任書であると判断する。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 近年、文部科学省をはじめとして、年間 30 本以上の講演などを行っている。	昭和54年4月 ～現在に至る	人間教育研究協議会において年二回の実践交流会、自己意識研究会においても定期的に研究会を主催している。
5　その他 特になし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 文学修士 「「２者関係についての一考察　　-Performance の評価をめぐってー」文修 683 号 文学博士 「自己意識の社会心理学的研究～特に対人認知および対人関係の規定因としての自己意識について」論文博第 73 号	昭和41年3月 昭和46年3月	京都大学大学院文学研究科より授与 博士論文提出により京都大学大学院文学研究科博士課程より授与
2　特許等 特になし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 特になし		
4　その他 1．ノートルダム女子大学学長 2．学校法人聖ウルスラ学院理事長 3．学校法人松徳学院理事長 4．国立大学法人兵庫教育大学学長 5．環太平洋大学学長 6．学校法人奈良学園常勤理事(高等教育担当) 7．奈良学園大学学長	平成 10 年 10 月 平成14年4月 ～現在 平成16年4月 ～現在 平成 16 年 12 月 平成22年4月 平成24年4月 平成26年4月 ～現在	学長として、管理運営を行う。 理事長就任以来、学校改革に努め、経営の健全化を図った。現在も理事長として、管理運営を行う。 理事長として、管理運営を行う。 学長として、管理運営を行う。 学長として、管理運営を行う。 常勤理事として、高等教育の改革を行う。 学長として、管理運営を行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1　教師・学校・実践研究	単 著	平成 17 年 8 月	金子書房	教師論・学校論・教育実践研究の方法論について、筆者の年来の主張を体系化したものである。教師に求められるもの、学校教師の養成制度の改革が論じられ、関連する講演記録と座談会記録が収録される。また、自己実現の力をつける学校、真の「エリート」の育成、＜開かれた学校＞が論じられ、発達過程との関連などが考察される。そして「フィールドの知」としての教育実践研究の特質と具体的な着眼点が論じられる。 B6版 205頁
2　和魂に学ぶ ―日本人の源流を求めて	単 著	平成 18 年 12 月	東京書籍	明治以来日本では、「和魂洋才」という言葉がよく語られてきた。しかし、今日の日本社会では、「和魂」がどこかに抜けてしまった「無魂洋才」の知識人があふれていること、「反・和魂」「嫌・和魂」の風潮がここ 60 年あまりずっと続いてきたことを憂い、改めて「和魂の再興」を願い、独自の「日本人論」を提唱するとともに、人間存在そのものを洞察する「人間教育」の重要性を指摘した。 A5 版 78 頁
3　教育フォーラム 40 教師という道 “教師バッシングを乗り越えて	共 著	平成19年8月	金子書房	教育職員免許法、教育公務員特例法の改正など、新たな制度改革の波が押し寄せるなか、団塊世代の大量退職に伴い、教師の新旧交代が急速に進みつつある。変容していく教育現場を背景に、世間の要求は厳しさを増し、教師に対するバッシングも後を絶たない。日本の教育が混迷期にある今こそ、教師一人ひとりが自らに問いかけ直す必要があることを論じた。 A5 判全 139 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、浅田匡、角田元良他 13 名 担当：pp. 6-13「師道再興」を単著 内容：教育者として目指すべき人間像とは」。その輪郭を浮き彫りにし、意識と知識の涵養に役立つ示唆を行った。
4　教育フォーラム 41 新しい学習指導要領―カリキュラム改革の理念と課題	共 著	平成20年2月	金子書房	子どもたちの学力低下などの状況を踏まえ、学校教育の指針となる学習指導要領が生まれ変わる。本書は、新しい学習指導要領において各教科の教育はどのように進められるべきか、小学校古典の学習、授業研究のあり方、言葉の力、特色ある教育課程などについても考えていく。子どもたち一人ひとりに「確かな学力」に基づく「生きる力」を育てるため、いま、何をすべきか。学校現場で奮闘する教師の方々のよりどころとなる考えを示した。 A5 判全 167 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、浅田匡、二瓶弘行他 9 名 担当：pp. 6-15「『確かな学力』を基盤とした『生きる力』を」を単著 内容：今までの学習指導要領における教育の問題を洗い出し、新たなカリキュラム改革が目指す理念と課題を明確にした。

著書･学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　教育フォーラム 42 伝統・文化の教育―新教育基本法・新学習指導要領の精神の具現化を目指して	共 著	平成 20 年 8 月	金子書房	本書は、今後の教育の大きな柱となるその教育の精神の具現化を目指す。古典の指導法、国際理解教育における伝統・文化の教育、稽古の思想、教育の動向と課題などの理論を提示すると共に、地域に根ざした心を育む活動、未来を受け継ぐ取り組み、絵屏風づくり、和食をすすめる食育、武家作法、茶道や武道を通じて心を育む教育など様々な実践を紹介した。 A5 判全 167 ページ　梶田叡一責任編集　共著者：加藤明、中山京子他 9 名 担当：pp. 5-13「我が国の伝統文化の教育」を単著 内容：自国の伝統や文化を踏まえ、世界の多様な伝統・文化へと開かれた教育のあり方を論じた。
6　自己を生き　るという意識 ―〈我の世界〉と実存的自己意識	単 著	平成 20 年 9 月	金子書房	学習指導要領の根底を流れる「生きる力」の真の意味を伝えるために、〈我の世界〉と〈我々の世界〉を生き抜くための基盤作りを行う場である学校教育のあり方の背景に必要となる学問的背景について論じた。 A5 版全 190 頁
7　教育フォーラム 43 “活用”の力とは何か―新しい学習指導要領の理念と実践	共 著	平成 21 年 2 月	金子書房	新しい学習指導要領で求められている“習得”“活用”“探究”の活動の展開において、“活用”の力は今までの教育でも重視されてきたもので、これだけ取り出して考えられるものでもない。これから授業を進めていく上で、教師たちの参考となる各教科での実践を紹介していく。特別寄稿として命・地域の教育力・教師の本分などをテーマとした論稿も収録した。 A5 判全 149 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、鎌田首治朗他 9 名 担当：pp. 6-12「〈活用〉の力とは何か」を単著 内容：“活用”の力とは何かを、他の活動とのつながりの重要性を考察。
8　教育フォーラム 44 「いのち」の教育	共 著	平成 21 年 8 月	金子書房	時を超えて受け継がれた「いのち」をもとに、他の「いのち」との食物連鎖の中で生きていることを実感したい。自己幻想からの脱却と「いのち」の多様性を理解したい。道徳教育や性教育での取り組み、阪神・淡路大震災の体験に基づく貴重な教育実践等を紹介した。 A5 判全 175 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、菅井啓之他 9 名 担当:pp. 10-21「自己幻想からの脱却と〈いのち〉の教育」を単著 内容：自己意識の変革と伝統宗教の見直しを訴えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9　日本の感性 和魂ルネッサンス	単 著	平成 21 年 8 月	あすとろ出版	現代日本人に最も必要な「脚下照顧」として、自分の国と他の国を客観的にとらえる冷静さと、自国文化の深い理解に基づいた自己確立が必要であることを指摘した。そのために、本書では、孔子から老子、荘子、道元、親鸞から千利休、本居宣長といった知の大家たちが書き記した言葉や思想を紹介しつつ、日本人として身につけておきたいたしなみについて言及した。 A5 版 239 頁
10　教育フォーラム45 確かな学力の育成と評価のあり方	共 著	平成22年2月	金子書房	子どもの結果から教育をとらえ、一人ひとりの学力向上につながる取り組みを考えるのが教育評価の思想である。今、学校における評価の意義と活用の再認識が図られている。本書は目標準拠評価や全国学力・学習状況調査など多様な視点から、評価の問題と課題を考察した。 A5 判全 175 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、金澤孝夫他9名 担当：pp. 6-12「『確かな学力』のための評価のあり方」を単著 内容:確かな学力を育成する教育実践につながる理念を論じた。
11　教育フォーラム 46 〈言葉の力〉を育てる	共 著	平成22年8月	金子書房	新しい学習指導要領の中核理念を成す“言葉の力”の育成。全教科・領域において、言語活動の充実が求められている。本書は、その確かで豊かな実現に向け、重要な諸理論を多角的に考察、さまざまな教科における優れた実践を掲載した。 A5 判全 159 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、伊﨑一夫他 10 名 担当：pp. 6-14「〈言葉の力〉を育てるということ」を単著 内容：知的な学びに必須の大前提でありながら、従来の教育活動では意識されにくかった“言葉の力”の育成について解説した。
12　教育フォーラム 47 〈こころ〉を育てる	共 著	平成23年2月	金子書房	どんな素晴らしい学力・知力を身に付けても、“こころ”の育ちが不十分であれば、それらを有効適切に働かせることはできない。具体的にどのような活動を通じ、どのように“こころ”を育てていくか、人格形成という視点から考え、提言した。 A5 判全 157 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、渡邉満他 10 名 担当：pp. 6-17「今こそ本気で〈こころ〉の教育を」を単著 内容：新しい学習指導要領を完全実施していく上で、教育の最も根本的な点について原理的に考察し、提言した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13　教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共 著	平成23年8月	金子書房	国際教育・グローバル教育は日本の学校教育の喫緊の課題である。教育的な願いとねらいをはっきりと持ち、それを実現する活動を準備し、子ども一人ひとりの国際体験・異文化体験を教育的な意味で経験化するために様々な視点から考察、問題提起した。 A5 判全 174 頁　梶田叡一責任編集 共著者：見上一幸、松田智子他 13 名 担当：pp. 6-14「新たな『開国』に向けた資質・能力の育成を」を単著 内容：教育の国際化に向けての資質・能力の育成を論じた。
14　教育フォーラム 49 確かな学力を育てる確かな授業	共 著	平成24年2月	金子書房	「確かな授業」の実現に向け尽力する教師に向けて、そのための理論と実践を紹介した。具体としては、作文を取り入れた算数科の授業、教育実践力のある教師を育むための大学の教員養成教育の実践などを掲載した。 A5 判全 150 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、古川治他 10 名 担当：pp. 6-11「確かな授業を全ての学校の全ての教室で」を単著 内容：新学習指導要領においても強調されている一人ひとりの子どもに確かな学力を保障する単位時間の授業の意義の再確認を示唆した。
15　教育フォーラム 50 〈やる気〉を引き出す・〈やる気〉を育てる	共 著	平成24年8月	金子書房	教師が子どもの“やる気”を引き出し、育てるための方策を、国語・算数・体育・総合的な学習の時間などの教科のかかわり、教材・校内研究、学習塾の取り組みなども参考に考察、提案する。大前提となる教師自身の“やる気”についても論じた。 A5 判全 179 頁　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、松田智子他 12 名 担当：pp. 6-11「〈やる気〉の教育心理学のために」を単著 内容：やる気にあふれた人間に育つための心理学的アプローチに言及した。
16　教育フォーラム 51 いま求められる言語活動 読む力・書く力を重視して	共著	平成25年2月	金子書房	現行学習指導要領において内容に格上げされた「言語活動」の充実に向けて、言語活動を通して確かな「読み」と「書く」の力を育む理論と実践のあり方を提案した。 A5 版全 135p　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、金澤孝夫他 10 名 担当：pp. 6-11「３水準の『読む』『書く』力を」を単著 内容：〈言葉の力〉を真に育成する言語活動のために、「読む」・「書く」の力を具体的に３つの水準に分け、書くことの指導から始める確かな力の育成の理論を提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17　教育フォーラム 52 新しい道徳教育のために －徳性をどう育てるか－	共著	平成25年8月	金子書房	道徳教育をどうするかという課題はここ70年間大きな論議を呼んできた。儒教道徳を基盤とした教育勅語が廃され修身の時間が無くなって以降、学校教育でどのような形で新たな道徳教育の時間を設定するか、という問題である。本書ではその問題を様々な視点から論じている。 A5版全149p　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、渡邉規矩朗他10名 担当：pp. 6-15「道徳教育の新たな充実・発展のために」を単著 内容：道徳教育を巡る現在の状況を述べ、当面する課題を論じた。
18　教育フォーラム 53 文学が育てる言葉の力 －文学教材を用いた指導をどうするか－	共著	平成26年2月	金子書房	文学教材を用いた国語教育では、真の言葉の力は育たないという意見に対し、文学世界との出会いこそ高次の言葉の力を育てるものであるという視点から、多様な論述が展開され論じられている。 A5版全149p　梶田叡一責任編集 共著者：中洌正堯、鎌首治朗他9名 担当：pp. 6-14「文学教材との出会いと＜言葉の力＞」を単著 内容：文学作品に魅せられるきっかけをどう設定するか、3つの水準の＜言葉の力＞をどう育てるか等を論じた。
19　不干斎ハビアンの思想－キリシタンの教えと日本的心性の相克－	単著	平成26年4月	創元社	キリシタン教団の有力な指導者として活躍したハビアンと称する日本人イルマンが後に反キリシタンの立場に転じたのは何故か、という問題を巡って、主著著書の読み解きを通じて論じた。晩年の自称「江湖の野子」を手掛かりに、ハビアンが自己の「内的自然」に誠実であろうとしたことが、キリシタンの教えの受容を妨げたのではないかとの結論を提示し、山本七平のいう「日本教徒」の特質はそこにあると主張した。 B６版　248頁
20　教育フォーラム 54 各教科の学習を支える言語活動 －言葉の力をどう用いるか－	共著	平成26年8月	金子書房	話す，聞く、読むといった言語活動それぞれにについて、どのように配慮すれば言葉の力の育成に繋がっていくかを論じ、国語、算数。社会、理科等の教科での授業を具体的にどのように展開していけばいいのかを述べた。言語的活動をやりさえすれば言葉の力は育つ、といった俗論に対する批判の書である。 A5版全138p　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、金沢孝夫他8名 担当：pp. 6-11「言葉の力を鍛えて“賢さ”の実現を」を単著 内容：我々の考える認知的領域の基本カテゴリーを提示し、言葉の力を鍛えていくうえでの関係性を論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21　教育フォーラム 55 実践的思考力･課題解決力を鍛える －PISA 型学力をどう育てるか－	共著	平成27年2月	金子書房	アクティブラーニングということで実践的諸課題の解決に向けての取組と、そのために必要となる思考力・問題解決力の必要性が言われている今日その具体的な諸方法について各氏が提言し論述している。また、関連する実践報告とそれにたいする指導諸言のコメントも掲載している。 A5 版全 157p　梶田叡一責任編集 共著者：加藤明、鎌田首治朗他 10 名 担当：pp. 6-12「実践的な思考力・課題解決力を鍛えるために」を単著 内容：KJ 法基づく外部探検と内部探検、集団的図解解決法、自己内対話などの方法を論じた。

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　鎌田　首治朗

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学、教科教育学	国語科教育、教育評価、教育方法、教育経営、教員養成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例		
(1) 大教室授業における学生の学ぶ意欲を高めるテキストの活用	平成23年4月～平成23年7月	環太平洋大学次世代教育学部、体育学部共通の講義科目「教職入門」（専門基礎科目1年次配当、2単位）において実践した。初めての大教室授業で、学生（1年生だけでなく、多くの再履修者が受講）の学ぶ意欲を高めるために、15回の内、5回を講演形式にし、学生の学ぶ意欲に火をつけられる具体的な教育実践例から求められる教員の資質・能力を明らかにした。残りの10回は、学生の学びの実態を生かし、90分の授業を①ねらいの確認②テキストの音読（2人組で完璧に読めるよう音読）③重要事項の確認④まとめの話という形式で取り組んだ。そのことにより、学生から「3　(2)」の授業評価で見られる高い評価を得た。
(2)ゼミナールにおける学生のキャリア意欲向上と学びの質的向上の統一的実践	平成23年4月～平成24年7月	環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科の演習科目「学級経営ゼミナール 1（基礎）」「同Ⅱ（応用）」（ゼミナール、3 年次、4 年次配当、各 4 単位）において実践。学生の学びの要求を分析し、その結果、教員を真剣に目指す決意の高さが特徴的であったため、基本的な文献購読の後は、指導力向上を目標に「模擬授業」「面接」をゼミの学びの中に取り込み、ゼミナールにおける「鎌田方式」の形を創り出した。このことにより、学生は、現場で求められる教員の資質・能力を話だけでなく、自らの対応力、実践力を前に具体的に考えることができ、平成 24 年度教員採用試験一次合格者が、のべで 18 名に達した。

(3)双方向、主体的学びをキーワードにした大教室授業の構築	平成24年4月～平成24年7月	環太平洋大学次世代教育学部、体育学部共通の講義科目「教職入門」（専門基礎科目 1 年次配当、2 単位）において実践した。「双方向」「主体的学び」をキーワードに「大教室鎌田方式」といえる教育方法実践構築を目指し、授業改善に取り組んだ。授業形態は、(1)と同様、初めの 5 回は講演、残り 10 回の授業は、90 分の授業を①教員による「問い」の提示②提示された問いに対する自分の解答を各学生がノートに記述③自分の意見を理由【根拠】を明らかにして全員に向け発表（8 名～15 名が発表④③の発表された意見の内から、自分の意見も含めて、最も参考になった意見を決め、発表⑤教員によるまとめの講話で構成した。学生の評価は高く、自らが問いを基に思考した手応えを語る意見が圧倒的多数を占めた。
(4)読む・書くを核にした学力向上の実践	平成24年4月～平成24年7月	環太平洋大学次世代教育学部、体育学部共通の講義科目「日本語表現Ⅰ」（教養科目 1 年次配当、2 単位）において実践した。学生の国語力を半年間でどう高めるかというミッションに以下の教育方法で実践し、成果を上げた。それは、①天声人語等、新聞コラムを①読む②書き写す③平仮名のみで書かれた新聞コラムをカタカナ、漢字交じりに書き直すというものである。但し、丁寧に字を書く意義を伝え、徹底させた。その結果、「人生でこれだけ集中して字を書いたことは初めてです」と多くの学生が述べる、90 分中 50 分は一言も話さず、集中して字を書く学生の姿が生まれ、コラムの要約力と作業持続力の向上が生まれた。
2　作成した教科書、教材		
(1)　『家庭学習の手引き』（共著）京都市教育委員会	平成17年4月発刊。以降、毎年新入学児童保護者の家庭に配布。	『家庭学習の手引き』は、家庭の教育力を高め、児童の家庭学習習慣化の実現と確かな学力向上のために京都市によって作成された。家庭学習の重要性とその効果、各学年における目安の勉強時間（学年×15 分）、親が児童に関わるポイント等を、わかりやすく明記したパンフレットである。作成は、小、中学校校長会、京都市ＰＴＡ連絡協議会等も関わる京都市総がかりのプロジェクトとなった。京都市の公立小学校の全保護者及び全教職員が使用。
(2)　『平成 16 年度　京都市指導計画』（共著）京都市教育委員会発刊	平成18年4月発刊	『平成16年度　京都市指導計画』は、『平成14年度京都市指導計画』の改訂版である。改訂の中心は、年間計画授業時数の変更、発展的な学習の具体化、展開に課題のある単元の改善であった。「平成16年度京都市指導計画国語科４年部会部長」国語科４年生部長として、作成の中心的役割を果たした。ＣＤで京都市立小学校全校に配布され、京都市小学校全教員が国語科授業計画を構想し、作る際に使用。
(3)『平成 20 年度　京都市指導計画国語科移行措置版』（共著）京都市教育委員会発刊	平成21年4月公開	新学習指導要領移行措置を見据えて京都市指導計画の改訂を行った。移行措置に伴う単元内容の差替え、及び指導展開に課題がある単元計画の改訂を行った。京都市教育委員会からの度重なる強い要請を受け、「平成 20 年度京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成委員会委員長」と兼務しながら「平成 20 年度京都市指導計画国語科移行措置版３年部会部長」として改訂を行った。京都市イントラネット上で公開。

(4) 『真の読解力を育てる授業』(再掲)	平成21年5月	各大学における国語科教育や言葉の理解の授業のために、図書文化社から刊行した単著。国語教育学、W.イーザーの読者論、認知心理学、教育評価の理論を援用し、「読むこととは何か」「読む能力とは何か」を解明している。PISA 型読解力ショック、W.イーザーの読者論導入の議論、90 年代のゆとり教育による国語科授業の混乱を整理し、読書力の向上と「目標分析」による国語科授業を具体的に詳説している。
(5) 『改訂教育実践評価事典』(再掲)	平成 22 年 8 月	環太平洋大学時勢代教育学部教授として担当の「学力と評価」の授業のため文溪堂から刊行した共著。学習指導要領改訂を受け、生きる力、確かな学力を子どもたちに育むため、目標分析を中心にした授業づくり、ＰＤＣＡサイクル、形としての目標準拠評価、働きとしての形成的評価を実現するため刊行された本著の中で、第 4 部教育評価の基礎知識の「指導と評価の一体化、ＰＤＣＡ」「診断的評価、形成的評価、診断的評価」「目標分析」「達成目標、向上目標、体験目標」を担当している。
(6)『教職とは?―エピソードからみえる教師・学校』(再掲)	平成24年3月	環太平洋大学次世代教育学部教授として担当の「教育経営学」、各大学における「教職入門」の授業のために、教育出版から刊行した共編著。優れた実践を行ってきた教員から多くのエピソードを集めて、実践から現代の教育とそこで求められる教員の資質・能力を明らかにしようとする著書において、エピソードの監修と理論編を執筆している。
(7)『次世代の教育原理』(再掲)	平成24年10月	環太平洋大学を初め、各大学における「教育原理」の授業教科書として活用することを念頭に置いて刊行した共著。「第 5 章　教育課程と教育方法」を担当した。教育課程編成を座学のものとせず、今の学校現場での編成を知る筆者の利点を活かし、実際的な教育課程編成、それに関わる教員としての構えを説いた。教育方法においては、旧態然とした一斉授業からの授業改革を念頭に、教育評価のあり方と求められる授業のあり方、児童・生徒のやる気スイッチ（関心・意欲）の高め方を具体的に述べている。

３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 平成 21 年度　京都市学校管理職評価	平成 21 年 12 月	京都市教育委員会は、新任教頭、新任校長については「教育長評価」は３を付けるとの説明を行っていた。しかし、新任教頭でありながら、困難な要因の多い学校における学校づくり、学力づくりに対する貢献が認められ、以下の「教育長評価」を受けた（括弧内数字は、京都市教頭職の平均)。 経営能力　３．２（３．１） 意欲　３．６（３．２） 学校経営業績　３．２（３．２） 教育計画・教育活動業績　３．４（３．２） 育成指導　３．６（３．１） また、「教育長所見」は、「校長の意を受け、何事にも丁寧な対応で学校運営に当たっている。教科指導に対して指導力を発揮している」となっており、勤勉手当、昇級とリンクをさせた「成績評価」では、勤勉手当が「Ａ　優秀」、昇級が「Ａ　特に良好」となっている。
(2)平成 23 年度　授業評価		本学が 2 回にわたって行った前期の授業評価アンケートの結果、「教職入門（学級経営学科生)」「教育経営学」において以下の様な評価を受けた。 （ポイントは 4 点満点） 「教職入門（学級経営学科１・２年生、大講義室、200 名)」 １　資料・教育機材の適切さ　３．７４ ２　学習目標の明確さ　３．６２ ３　話し方　３．７１ ４　質問への配慮　３．６１ ５　授業の進度、説明の適切さ　３．７４ ６　参加意欲の促し　３．７０ ７　教員の熱意　３．７７ ８　適切な授業方法、学生の興味　３．６８ ９　有用な知識、スキルの獲得　３．７３ 10　私語・居眠り等　３．６０ 11　授業前後のあいさつ　３．７９ 12　わかりやすさ　３．７３ 13　後輩に勧めたいか　３．７７ 「教育経営学」（３・４年生、中教室、90 名） １　資料・教育機材の適切さ　３．８８ ２　学習目標の明確さ　３．９１ ３　話し方　３．８６ ４　質問への配慮　３．７４ ５　授業の進度、説明の適切さ　３．７９ ６　参加意欲の促し　３．７９ ７　教員の熱意　３．９１ ８　適切な授業方法、学生の興味　３．８４ ９　有用な知識、スキルの獲得　３．８１ 10　私語・居眠り等　３．７９ 11　授業前後のあいさつ　３．８６ 12　わかりやすさ　３．８４ 13　後輩に勧めたいか　３．８４

(3)平成 24 年度前期授業評価	平成23年7月	「教職入門（教育経営学科１年生、大講義室、141名)」 １　資料・教育機材の適切さ　３．５７ ２　教育機器使用の適切さ　３．５３ ３　学習目標の明確さ　３．５３ ４　シラバスに対応　３．３４ ５　話し方　３．６１ ６　質問への配慮　３．６２ ７　授業の進度、説明の適切さ　３．５６ ８　授業への参加意欲の促し　３．３２ ９　教員の熱意　３．７８ 10　適切な授業方法による興味の向上　３．４０ 11　有用な知識、スキルの獲得　３．４０ 12　私語・居眠り等　３．４０ 13　授業前後のあいさつ　３．８２ 14　わかりやすさ　３．４４ 15　後輩に勧めたいか　３．４４
(4)平成 26 年度前期授業評価		「教職入門初等（人間教育学部１年生、大講義室、111 名)」() 内は全体平均 Ⅰ自身の受講姿勢 Ⅰ.(1)自身の受講意欲　３．６３(3.26) Ⅰ.(2)受講マナー　３．６６(3.40) Ⅰ.(3)授業以外の学修活動　３．２９(2.73) Ⅱ講義内容・方法 Ⅱ.(4)シラバス　３．１３(2.97) Ⅱ.(5)(6)は項目調査なし Ⅱ.(7) 説明のわかりやすさ　３．６９(3.20) Ⅱ.(8)聞き取りやすさ　３．７１(3.27) Ⅱ.(9)理解度を確認しながらの授業３．６１(3.13) Ⅱ.(10)私語対策　３．４１(3.13) Ⅱ.(11)授業時間以外の学修活動を行う指導 ３．５７(2.94) Ⅱ.(12)授業に対する熱意や意欲　３．８２(3.31) Ⅱ.(13)有効な時間の使い方　３．７７(3.29) Ⅱ.(14)総合的満足度　３．７３(3.23) 「教職入門中等（人間教育学部１年生、大講義室、52 名)」() 内は全体平均 Ⅰ自身の受講姿勢 Ⅰ.(1)自身の受講意欲　３．８７(3.26) Ⅰ.(2)受講マナー　３．７８(3.40) Ⅰ.(3)授業以外の学修活動　３．４３(2.73) Ⅱ講義内容・方法 Ⅱ.(4)シラバス　３．０４(2.97) Ⅱ.(5)(6)は項目調査なし Ⅱ.(7) 説明のわかりやすさ　３．８５(3.20) Ⅱ.(8)聞き取りやすさ　３．８９(3.27) Ⅱ.(9)理解度を確認しながらの授業３．７４(3.13) Ⅱ.(10)私語対策　３．６１(3.13) Ⅱ.(11)授業時間以外の学修活動を行う指導 ３．７８(2.94) Ⅱ.(12)授業に対する熱意や意欲　３．９１(3.31) Ⅱ.(13)有効な時間の使い方　３．８３(3.29) Ⅱ.(14)総合的満足度　３．８５(3.23)

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 華頂女子短期大学・仏教大学通信制の実習生を指導	平成19年6月	副教頭として、４週間の実習生受け入れのために校内体制を整え、実習受け入れプログラムを実習教官に指導した。実習生には学習指導要領、確かな学力観、教育課程、生徒指導、校内研究等を講話し、指導した。
(2) 平成17年度　尼崎市立園田北小学校校内研究会講演、授業研究年間指導助言	平成17年4月～平成18年3月	年度初めの理論研修会での講演（平成17年5）と年間３本の授業研究会指導助言者として尼崎市立園田北小学校の国語科授業研究を、年間を通して指導した。国語科指導の基礎的基本的な内容、指導案の作り方、教材と単元目標との関係、目標と評価規準を明確にした単元計画づくりの方法、教材解釈、1時間の授業構成について指導した。
(3)「第 13 回授業実践フォーラム」（主催：財団法人総合初等教育研究所）国語部会講演	平成17年6月	「目標と評価規準を生かした単元計画・授業づくり～国語科の目標分析」と題して講演を行った。目標と評価規準を生かした単元計画・授業づくりのためには、教員の読む力、書く力が求められることを述べ、単元目標と評価規準をつくるために目標分析が必要であることを、実例を基にその方法と共に述べた。
(4) 平成17年度　尼崎市立上坂部小学校校内研究講演	平成17年7月	「確かな学力を育てる国語科指導の向上～目標と評価規準を生かした単元計画・授業づくり～」と題する講演を行った。国語科単元指導計画をどのように作成するか、また１時間の国語科授業をどのようにつくるかについて、教員に求められる資質や能力と共に述べた。また、国語科研究の進め方、研究体制の組織の仕方や事後研究会の持ち方等について述べた。
(5)「第20回人間教育実践交流会『*2005*伊丹フォーラム』」（主催：人間教育研究協議会　共催：京都市教育委員会　後援：文部科学省／京都府・大阪府・兵庫県・滋賀県・奈良県・和歌山県・大阪市・神戸市各教育委員会）全体会司会、国語部会コーディネーター	平成17年8月	梶田叡一、加藤明、有田和正、菅井啓之の【基調講演】、【課題講演】、及び全体会を司会。国語部会では、「子ども達自らが国語の基礎基本をつかみ取る授業をもとめて～『海の命』をより豊かに読み味わう～」「伝え合う力の育成～対話を基盤にして～」「生徒の意識のふくらみを大切にした授業設計」等６本の実践発表を組織し、論議を通してテーマ「確かな学力を育てる指導力を」に迫ることができるよう部会をコーディネートした。
(6) 平成 17 年度　和歌山県採用初任者研修会（主催：和歌山県教育委員会）	平成18年1月	平成17年度和歌山県採用初任者のうち、北部地域約200名を対称に行われた初任者研修会で「『確かな学力』を育てる指導方法」と題する講演を行った。教育方法、教育評価理論の重要性、目標と指導と評価の一体化、国語科を例にした単元計画設計方法のポイント、学校図書館の重要性と活用方法について述べた。また、教員として学び続けることの重要性を自らの体験を基に語った。

(7)「第５回　京都フォーラム 2006 in winter」（主催：人間教育研究協議会）国語部会コーディネーター	平成 18 年２月	「国語科指導の方法①―指導案の作り方」と題して講演とワークショップを行った。国語科学習指導案の作り方を、児童観、教材観、指導観のそれぞれの書き方とポイント、単元指導計画の重要性とその書き方、目標と評価規準のつくり方とそのポイントを、具体的に述べた。その上で、ワークショップ形式で参加者と共に学習指導案の作り方を具体的に学び合った。
(8)平成 18 年度　尼崎市立園田北小学校　校内研究講演、授業研究年間指導助言	平成 18 年４月 ～ 平成 19 年３月	平成 17 年度に引き続き、平成 18 年度尼崎市立園田北小学校の校内研究、国語科授業研究を指導した。年度初めの理論研修会での講演（平成 18 年５月）と年間３本の授業研究会指導助言者として、学校経営と学校図書館の重要性、目標と評価規準を明確にした単元計画づくりと授業づくりの方法を実際の授業、教材を通して具体的、且つ平易に指導した。
(9)「第 14 回授業実践フォーラム」（主催：財団法人総合初等教育研究所）国語部会講演	平成 18 年６月	「『確かな学力』を育てる国語科指導法Ⅲ ―目標分析による目標と評価規準を明確にした単元計画づくり」と題する講演を行った。国語科指導法、指導過程を「ヘルバルトの五段教授法」「芦田恵之助七変化の教式」「垣内松三五段階説」「西尾実」「石山修平」「輿水実」等歴史的に振り返り、国語科指導法の重要性について述べ、目標分析の重要性とその方法を、教材を例に具体的に述べた。
(10)「教育セミナー関西 2006＆第 21 回人間教育実践交流会『*2006* 京都フォーラム』」（主催：人間教育研究協議会・日本教育新聞社関西支社 共催：京都市教育委員会　協力：日本教員学学会 後援：文部科学省／京都府・大阪府・兵庫県・滋賀県・奈良県・和歌山県・大阪市・神戸市各教育委員会）国語部会コーディネーター	平成 18 年８月	「言語事項に着目した読みの力を育てる指導」「付けたい力を明確にした授業づくり～構造的授業設計図を活用して～」「聞く力を高める話し合いの授業」「説明文章の読みを深める『書くこと』『読むことの』関連的な指導の工夫」等、全国より６本の実践発表を組織し、議論を通して深め、全体テーマ「教員の資質向上―『確かな学力』を育てる指導力」に迫ることができるよう部会をコーディネートした。
(11)「第６回　京都フォーラム 2007 in winter」（主催：特定非営利活動法人　人間教育研究協議会）国語部会講演	平成 19 年２月	「読むこととは何か（理論編：「ごんぎつね」を通して）、伝え合うこととは何か（実践編：日常指導のポイント）を考える」という題で講演を行った。確かな学力を育てる指導力の向上は、国語科における読む能力の育成と伝え合う力の育成にあることを述べ、文学教材の読み方を語り手の意図を切り口に読む読み方を伝えた。
(12)平成１９年度　尼崎市立梅香小学校校内研究講演、授業研究年間指導助言	平成 19 年４月 ～平成 20 年３月	理論研修会での講演（平成 19 年５月）と年間３本の授業研究会指導助言者として、尼崎市立梅香小学校の国語科授業研究を指導した。指導案の作り方、教材と単元目標との関係、教科書の読み方と活用方法、目標と評価規準を明確にした単元計画づくりの方法、教材解釈、1 時間の授業構成について指導した。

(13)「教育セミナー関西 2007＆第 22 回人間教育実践交流会『*2007* 京都フォーラム』」（主催：特定非営利活動法人　人間教育研究協議会・日本教育新聞社関西支社　共催：京都市教育委員会　協力：日本教員学学会　後援：文部科学省／京都府・大阪府・兵庫県・滋賀県・奈良県・和歌山県・大阪市・神戸市・堺市各教育委員会）国語部会コーディネーター・部会講演	平成 19 年 7 月	「授業力・学校力・人間力の向上をめざして――学習指導要領の改訂とこれからの学校教育」というテーマに迫るため、「各領域相互の関連、つながりの中で書く力を高める」「振り返り（学びの自覚）に着目し、対話力向上を目指す」という２本の発表・討議と、自ら「真の読解力と国語科単元計画づくりの方法」と題する部会講演を行った。読書力向上の取組を学校と全教員が本気で取り組まなければならないこととその取り組み方を具体的に述べた。
(14) 第２０回姫路市夏季国語教育研修会講演（主催：姫路市教育委員会）	平成 19 年 8 月	「真の読解力と小学校・国語科単元計画づくりの方法」と題して講演を行った。知識・理解、技能・表現、思考・判断、関心・意欲・態度の 4 観点の関連、教科書教材の単元の出口を明確にできる読み方、目標と評価規準を明確にした単元計画のつくり方、授業のつくり方について述べ、真の読解力育成には、読書力向上が必要であり、その具体的な取り組み方を述べた。
(15) 平成20年度　尼崎市立浦風小学校校内研究講演、授業研究年間指導助言	平成 20 年 5 月～平成 21 年 3 年	理論研修会での講演（平成 20 年 5 月）と年間６本の授業研究会指導助言者として、平成 20 年度尼崎市立浦風小学校の国語科授業研究を指導した。国語科への疑問に答えながら、国語科の教科特性、新学習指導要領における国語科と言葉の力育成の重要性、指導案の作り方、教材と単元目標との関係、教科書の読み方と活用方法、目標と評価規準を明確にした単元計画づくりの方法、教材解釈、1 時間の授業構成について指導した。
(16) 平成 20 年度　尼崎市立梅香小学校校内研究講演、授業研究年間指導助言	平成 20 年 6 月～平成 21 年 3 月	理論研修会での講演（平成 20 年 6 月）と年間３本の授業研究会指導助言者として、平成 20 年度尼崎市立梅香小学校の国語科授業研究を指導した。教員の疑問に答えながら、昨年度の研究授業に見られた成果と課題、課題に対する解決方法を述べた。新学習指導要領における言葉の力育成と国語科の重要性、指導案に見られる課題、教材解釈とその方法、目標と評価規準を明確にした単元計画づくりの方法、授業構成について指導した。
(17) 第２１回姫路市夏季国語教育研修会講演	平成 20 年 8 月	「新学習指導要領への移行期における国語科学習の進め方――今求められる国語科指導の基礎・基本を明らかに螺旋的反復的学習の徹底を」と題して講演を行い、新学習指導要領の意義とその内容、特徴、確かな学力を基盤にした生きる力の育成の重要性を述べ、言葉の力の重要性、PISA 型「読解力」の説明、論理的表現力、言語運用能力、言語知識、言語活用能力の育て方、国語科授業の構想方法、教材分析法、学校図書館の重要性を具体的に述べた。
(18)「教育セミナー関西 2008＆第 23 回人間教育実践交流会『*2008* 京都フォーラム』」（主催：特定非営利活動法人　人間教育研究協議会・日本教育新聞社関西支社　共催：京都市教育委員会　協力：日本教員学学会　後援：文部科学省／京都府・大阪府・兵庫県・滋賀県・奈良県・和歌山県・大阪市・神戸市・堺市各教育委員会）国語２部会コーディネーター＆部会講演	平成 20 年 8 月	「わたしの国語教室～読解力と記述力の向上～」「習得と活用の繰り返しを意識したスピーチ学習指導」の２本の実践発表を深め、「今求められる国語科指導の基礎・基本～読むこととは何か、新学習指導要領をふまえて～」と題した部会講演を行い、言葉の力の重要性、PISA 型「読解力」の説明、論理的表現力、言語運用能力、言語知識、言語活用能力の育て方、国語科授業の構想方法、教材分析法、学校図書館を具体的に述べた。

(19) 平成 20 年度　姫路市立東小学校校内研究会理論研修講演	平成 20 年 10 月	教員の国語科に対する疑問に答えながら、新学習指導要領の意義とその内容、特徴、歴史性について述べ、確かな学力を基盤にした生きる力の育成の重要性と、求められる国語科授業のあり方について述べた。特に、要請のあった漢字指導の方法については、漢字能力の重要性を話した上で、模擬授業を取り入れ、実際の指導と、その後の児童の漢字練習、点検方法までを具体的に指導した。
(20) 平成 20 年度、21 年度　兵庫教育大学「活用型学習の指導方法開発プロジェクト」教材開発・評価方法開発総括チーム	平成 20 年 10 月～平成 22 年 3 月	兵庫教育大学が活用型学習の指導方法と評価、教材の開発を行うために設立したプロジェクトに学校現場の教員として唯一人参加。主なメンバーは、梶田叡一学長、勝野真吾副学長、川本幸彦副学長、中洌正堯名誉教授、岩田一彦特任教授（プロジェクトリーダー）。教材開発・評価方法開発総括チームで、各教科領域担当チームの方向性を学長、副学長と共に議論し、各教科チームに必要な情報を伝える役割を果たした。
(21) 平成21年度　松原市立恵我小学校夏季理論研修会講演	平成 21 年 8 月	「PISA 型『読解力』」を育てる授業づくりのポイント」と題して講演を行った。教員の PISA 型「読解力」、国語科授業に対する疑問に答える形で、言葉の力の重要性、PISA 型「読解力」とは何か、何が PISA 型「読解力」低下の原因であり、国内における混乱の原因か、どうすれば真に読解力を向上させることができるのか、その方法を単元構想と授業づくりのレベルで具体的に述べた。
(22) 平成21年度　京都市立広沢小学校夏季理論研修会講演	平成 21 年 8 月	「PISA 型『読解力』とは何か」と題して講演を行った。教員の PISA 型「読解力」、国語科授業に対する疑問を受け、それに答える形で、PISA 型「読解力」とは何かについて平易に述べた。確かな学力を基盤にした生きる力の育成が PISA 型「読解力」向上につながること、そのために求められる国語科授業の実現方法を、論理的表現力、言語運用能力、言語知識、言語活用能力の育て方、国語科授業の構想方法、教材分析法を通して具体的に述べた。
(23) 平成21年度　京都市立竹の里小学校研究発表会指導助言	平成 21 年 12 月	「自分の思いや考えを持ち、互いに交流しあい考えを深め広げる子ども」を研究主題に行われた京都市立竹の里小学校研究発表会に指導助言者として招かれ、６年生国語科授業を指導し助言した。学校ぐるみで学力づくりに取り組む京都市立竹の里小学校の成果を確認し、教材分析、単元構想の課題を具体的に指摘し、学校全体の取組を児童が変容するまで徹底的に行う重要性、学校図書館の重要性を指導した。

(24) 平成21年度　高槻市立総合教育センター国語科研修会（主催：高槻市立総合教育センター、高槻市教育委員会）講師	平成22年1月	「真の読解力を育てる授業づくり」と題して講演を行った。児童に論理的表現力、他者と交流する能力を育て、確かで豊かな読み手に育てるポイント、それらを育てる国語科授業の構想方法、目標と評価規準を明確にした国語科単元計画づくりの方法について、現場の教員を指導した。言語運用能力、言語知識、言語活用能力を重視し、書く力、伝え合う力を育て、国語科指導法の基礎・基本と、物語を読み解く力、学校図書館の重要性について解説した。
(25) 平成21年度　京都市立祥豊小学校研究発表会指導助言	平成22年1月	研究主題「人間性豊かに自立する子の育成を目指して」、国語科テーマ「伝え合い、高め合い、ひとり学びのできる子」で校内研究に取り組んできた京都市立祥豊小学校研究発表会の指導助言者として招かれ、3年生国語科提案授業を指導した。「そうぞうをふくらませて書こう」という能力を育てる教材「たから物をさがしに」では、物語のストーリー性についての教員の理解が前提として求められることを、具体例を出しながら指導した
(26) 平成21年度　生徒指導試行実施校経過報告会（主催：文部科学省）	平成22年2月	文部科学省滝充生徒指導研究センター総括研究官の指導の下、ピア・サポート、P.E.A.C.E.メソッドの研究協力校として、「生徒指導試行実施校経過報告会」に参加し、自校の取組成果と課題を発表した。発表では、学級経営、学年経営の進んでいるクラス、学年で成果が上がっていること、P.E.A.C.E メソッドサイクルとそのチェックリストの意味を理解できているところで成果が上がっていること等を具体的に発表し、会議をリードした。
(27) 平成21年度　生徒指導試行実施校経過報告会（主催：文部科学省）	平成22年2月	文部科学省滝充生徒指導研究センター総括研究官の指導の下、ピア・サポート、P.E.A.C.E.メソッドの研究協力校として、「生徒指導試行実施校経過報告会」に参加し、自校の取組成果と課題を発表した。発表では、学級経営、学年経営の進んでいるクラス、学年で成果が上がっていること、 P.E.A.C.Eメソッドサイクルとそのチェックリストの意味を理解できているところで成果が上がっていること等を具体的に発表し、会議をリードした。
(28) 平成22年度　高槻市立桜台小学校理論研修会講演、年間授業研究会3回の指導助言	平成 22 年 5 月、7 月、10 月、11 月	講演「国語科指導の基礎･基本」を行い、国語科指導のあり方、問題点、改善方法、指導案・単元計画の作成方法を授業研究会への指導助言を通して指導した。その中で、教員養成の視点を多く盛り込み、教員に求められている職務内容や教育課題に対する取り組み、教職を法的な視点からもながめつつ、望ましい教員の在り方について指導した。さらなる教職への動機づけと現場教員の責任意識を高め、教員の基礎的能力の育成を重視した。

(29) 平成22年度京都市立久世西小学校理論研修会講演、京都市南支部研究発表会指導助言	平成 22 年 6 月、11 月	講演「豊かな心を育み、より確かに伝えるための書く力」を行い、研究主題の実現のために求められる書くこと領域の授業づくり、日常指導について述べた。教員養成と教育経営〈学校経営、学年経営、学級経営〉の視点を多く盛り込み、学校図書館の重要性を指導し、教員が意欲と責任意識を高められるよう、教員の基礎的能力の育成を重視し、教育改革に応えられる教員のあり方について述べた。南支部研究発表会では6年国語科の指導助言を行った。
(30) 平成22年度兵庫県丹波市立黒井小学校理論研修会講演	平成22年8月	講演「確かで豊かな読み取りを実感させるための『書く力』を高める国語科学習」を行い、読むこと領域、文学作品を扱う単元、読書教育のあり方について述べた。その成否を決めるものが、教員と学校の意欲と責任意識、教員の基礎的能力であることを教員養成と教育経営〈学校経営、学年経営、学級経営〉の視点を盛り込みながら述べた。
(31) 平成22年姫路市立広畑第二小学校理論研修会講演、授業研究会指導助言	平成 22 年 8 月、10 月、11 月	姫路市の国語科教育研究中心校として研究がスムーズに進むよう、講演「国語科の基礎・基本～新学習指導要領、授業づくり」を行った。新学習指導要領がめざす授業改善の方向性を述べ、教育経営の視点から、学校づくりと研究組織のあり方も述べた。研究の成否を決める教員の研究意欲を、教員養成の観点から多角的に述べ、意欲の向上を図った。
(32) 京都市「東山区南部小中一貫校」合同理論研修会講演（京都市立月輪中学校、月輪小学校、一橋小学校、今熊野小学校合同理論研修会講演）	平成22年8月	京都市の次の統合地域である月輪中学校校区の1中学校、3小学校合同の夏季研修会で、講演「言語が育む　確かな学力」を行った。小中一貫教育に求められる学校、教員の姿勢、求められる取組、実践、成果を、めざすべき学校、教員のあり方に関わって述べた。新学習指導要領全面実施、教員養成、教育経営の観点から、生きる力、確かな学力、言葉の力を育成する学校、教員のあり方、学校図書館の重要性について述べた。
(33) 京都市立衣笠小学校理論研修会講演	平成22年8月	京都市の研究中心校として国語科研究が進むよう講演「伝え合う力を育てる国語科の基礎・基本～新学習指導要領、授業づくり」を行った。授業改善の方向性、単元計画づくりの留意点とともに、教員養成、学校経営と学校図書館の重要性の観点を多く盛り込み、学校、教員に求められている取組、求められる学校、教員のあり方について指導した。
(34) 平成22年度尼崎市立浦風小学校理論研修会講演、授業研究会指導助言	平成 22 年 8 月、1 月	講演「説明文指導のあり方と求められる国語科授業～新学習指導要領、授業づくり」を行い、国語科教育の説明文指導の基礎・基本、求められる授業改善の内容、授業・単元計画づくりを新学習指導要領の内容に沿って述べた。研究と学校づくり、教員の成長の関係を述べ、教員の意欲を高めた。授業研究会を通して説明文教材の教材研究のあり方とやり方を述べた。
(35) 平成 22 年度広島県庄原中学校研究発表会講演	平成 22 年 11 月	広島県庄原市の研究先進校として市の指定を受けて行われた研究発表会で講演「言語力を育てる授業づくり～言語活動の充実をめざして」を行った。中学校の授業で課題となる点を具体的に述べ、その問題点を改善の方向を具体的に示した。新学習指導要領全実施上の課題に応えるとともに、小中一貫教育、教育経営、教員養成の課題に応える内容を述べた。

(36) 平成 22 年度 愛知県豊山町研究協議会理論研修会講演	平成 23 年 1 月	愛知県豊山町では教育委員会が主催し、管内全ての小学校、中学校教員を対象に年 1 回の理論研修会を行っている。講演「言葉の力、確かな学力を育てる確かな教師、確かな学校とは――言語活動、言葉の力、新しい学力、確かな学力とは何か」を通して、小学校、中学校がともに一貫して生きる力、確かな学力、言葉の力を育成する重要性を国語科教育、教員養成、教育経営の観点から述べた。
(37) 平成22年度京都市立衣笠小学校研究発表会	平成 23 年 1 月	京都市北支部での研究発表会で講演「『伝え合う力』をどう育てるか――新学習指導要領全面実施に向けて」を行った。「伝え合う力」とは何か、それをどう育てるかについて述べ、その成否を決めるものが学校組織の一員として、学級経営を主体的に行う者としての教員の意欲、あり方であることを教員養成の観点から述べた。
(38) 平成 22 年度 京都市立月輪中学校研究発表会	平成 23 年 2 月	文部科学省、京都市の研究指定を受けた月輪中学校の研究発表会で講演「学力向上を実現する教師の指導と授業の展開～ICT機器の活用と工夫について～」を行った。電子黒板、ICT機器の活用の重要性を述べ、その成否が教員の授業力にかかっていることを具体例を示しながら指摘し、求められる教員の資質・能力を新学習指導要領、教員養成、教育経営の観点から述べた。
(39) 平成 22 年度豊中市立桜塚小学校理論研究会講演	平成 23 年 2 月	講演「学力の基礎・基本を基盤として、国語科における『書くこと』の学習につなげる授業づくり」を行った。研究がスムーズに進むよう国語科教育の基礎・基本、新学習指導要領が求める授業改善の内容を具体的に述べた。また、その成否が教員の資質・能力にかかっていることを具体例をあげて述べた。
(40) 平成 23 年度小・中学校 10 年目研修（豊中市第 1 回目）講演	平成 23 年 4 月	豊中市教育委員会主催の小・中学校 10 年目研修開講の記念講演を行った。10 年目の節目の年は学びの年にできるよう、今教師に求められている資質・能力について児童理解、学力回復、学力保障の実践方法、学級づくりの方法等から述べ、参加者の自己観察を促した。
(41) 平成23年度 姫路市立広畑第二小学校 国語科授業づくりの指導	平成 23 年 4 月～平成 24 年 3 月	自立した読者を育てる小学校国語科・読むことの指導方法、授業のあり方を、読書反応理論と目標分析の手法を活用し、授業づくりのあり方とやり方を指導し、読解力が読書力であることと、学校図書館の重要性を述べた。姫路市立広畑第二小学校は、「平成 23 年度 中播磨地区小学校国語教育研究大会」（平成 23 年 11 月 25 日）の大会開催校であり、その成果が発表された（平成 23 年 11 月 26 日付神戸新聞と読売新聞にて報道）。
(42) 平成23年度姫路市立姫路広畑第二小学校授業研究会指導助言	平成 23 年 6 月	11 月に姫路市で行われる国語科研究大会会場校を指導した。「ごんぎつね」を教材に取り上げた授業を基に、教材文の読み方、単元計画作成のポイント、1 時間の授業のあり方を指導した。

(43) 平成23年度京都市立月輪小学校授業研究会指導助言	平成23年6月	「聞く力」の向上を目指して研究に取り組んでいる月輪小学校の道徳の授業研究会を指導助言した。 道徳の提案授業を基に「聞く力」をどう捉えるか、「聞く力」の指導法等を明らかにしながら、道徳授業のあり方についても指導した。
(44) 平成23年度和歌山県紀ノ川市立調月小学校現職教育講演	平成23年8月	1 部では紀ノ川市立調月小学校の校内研究の進め方を指導した。2 部では、「書く力を高め、話す力などの表現力を豊かにする～体験や学び愛によって言葉の力を育む」と題して紀ノ川市の教員に国語科授業のあり方とやり方について講演を行った。書く力としてどのような指導が学校現場に求められているのかを具体的に述べた。
(45) 平成23年度尼崎市立尼崎北小学校夏季校内研究会講演	平成23年8月	「読解力や伝え合う力を高める国語科指導について」と題して講演を行った。指導案の書き方から単元指導計画のポイント、1時間の授業の構成、あり方を述べ、伝え合う力の捉え方、今の国語科教育の読む能力指導の問題点と克服法について講演を行った。
(46) 平成23年度尼崎市立浦風小学校夏季校内研究会講演	平成23年8月	教員からの質問をふまえて、今求められている国語科授業について講演を行った。指導案の書き方から単元指導計画のポイント、1時間の授業の構成、あり方を述べ、教員が教材文をどう読むべきか、読書力向上の取組、学校図書館の重要性を具体的に指導した。
(47) 平成23年度姫路市立姫路広畑第二小学校指導案検討会指導助言	平成23年8月	11 月の研究発表会で全教員が提案授業を行うため、1年から6年までの全ての指導案24本を指導した。2次を貫く言語活動、3次まで螺旋的に繰り返すことができる言語活動の工夫を求め、単元終了後の螺旋的反復を追求する指導者の姿勢を求めた。
(48) 平成23年度京都市立月輪小学校校内研究会指導助言	平成 23 年 10 月	「聞く力」の向上を目指して研究に取り組んでいる月輪小学校で音楽科の授業研究会を指導助言した。鑑賞における「聞く力」をどう捉え、どう指導するべきかを提案授業で行った指導者の姿を具体的に紹介しながら指導した。
(49) 兵庫県教育研究集会（ひょうご教育フェスティバル）教育課程分科会（総合的な学習）指導助言	平成 23 年 11 月	兵庫教職員組合・兵庫教育文化研究所主催の教研集会「総合学習部会」にて指導助言。求められる総合的な学習の時間の単元、授業作りについて述べた。教員の教材研究、教材開発、児童の関心・意欲を高め、深めるポイント、「わかる」こととは何か等について具体的に指導した。

(50) 平成23年度中播磨地区小学校国語教育研究大会レクチャーフォーラム講演	平成 23 年 11 月	姫路市立広畑第二小学校の研究の意義と成果を述べ、やってはいけない国語科授業と求められる国語科授業とを、1 時間の展開、教材研究のあり方、読むことの内実、読解力が読書力であることと、学校図書館の重要性を説明しながら講演した（平成 23 年 11 月 26 日付神戸新聞と読売新聞にて報道）。
(51) 平成23年度尼崎市立尼崎北小学校校内授業研究会指導助言	平成 23 年 12 月	4 年「物語を読んで、感想文を書こう／三つのお願い」の提案授業を基に、提案授業が達成できたものと求められていることに達しなかったところとを具体的に述べ、読むことの本質、それを生かした展開、指導のあり方、交流の指導のあり方、教材研究のあり方について述べた。
(52) 平成２３年度 京都市教育委員会「豊かな学びリーディングスクール推進事業」研究指定研究発表会指導助言（京都市立朱雀第三小学校）	平成24年2月	研究主題 「意欲をもって学習を進め、共に意欲を持って豊かな学習を拓く子～ 読解力育成に着目した、授業作りと教科を超えた取組 ～」を設定し、京都市教育委員会の研究指定を受け、「PISA 型読解力」育成に焦点を当てた研究発表において、読解タイム部会の指導助言を行った。PISA 型読解力とは何かから、読解力ではなく読書力の育成こそが、PISA 型読解力育成に最も効果的であることを平易に述べた。
(53) 平成23年度京都市立月輪小学校	平成24年2月	２年生･生活科「大きく　大きく　大きくなあれ！（明日へジャンプ）『内容９　自分の成長』」の研究授業を指導助言した。児童の納得を生み出す体験づくりの意義をもつ生活科において、担任と児童との人間関係、担任の児童理解の重要性を授業場面を具体的にとらえて強調した。
(54) 「第 11 回　伊丹フォーラム 2012 in winter」（主催：特定非営利活動法人　人間教育研究協議会）国語科模擬授業コーディネーター	平成24年2月	「言語活動を基盤とした授業づくりとその実践」をテーマに行われたフォーラムで、模擬授業　①国語（伝え「合い」を高める指導　5 年わたしの「とっておきの一枚」授業者　長谷浩也（姫路市立勝原小学校））のコーディネーターを務めた。国語科単元指導計画を作るポイント、1 時間の授業を構築するポイントを参加者と共に平易に深めた。
(55) 平成 24 年度岡山県立備前緑陽高等学校 PTA 総会講演	平成24年5月	「『確かな学力』と『夢実現－心豊かに輝け個性』」をテーマに PTA の研修講演を行った。国際化に乗り遅れている日本の危機、就職で求められる人物、生きる力・確かな学力が目指す人間像を平易に述べ、その根幹には苦労や困難を乗り越えて成長する人間の生き方があることを述べ、我が子の成長のために求められる親の関わり方を述べた。

(56)平成24年度豊能地区10年経験者研修(小学校)	平成24年5月	10年目研修講座開講記念講演（小学校教員対象）で、「節目の10年。これから学校で期待されるもの―教員人生のさらなるステップアップをめざして」をテーマに講演を行った。授業力向上と児童理解力向上を目指し、自身の体験を基に、学校、教員に求められている児童理解、授業改善について具体的に述べた。児童を育てるためには、教員自身が己を磨き、学び、成長させなければならないという話が、多くの 10 年目研修対象教員の学ぶ意欲を高めたと研修担当者は述べている。
(57) 平成24年度豊能地区10年経験者研修（中学校）	平成24年5月	10年目研修講座開講記念講演（中学校教員対象）で、(68)と同テーマで講演を行った。「中1ギャップ」の原因が、生徒の育ちの遅れだけでなく、教員の生徒理解の弱さにあることを述べ、生徒の辛さ・悲しさ・寂しさを敏感にキャッチできる教員の生徒理解力の重要性、これからの中学校教員が授業力向上、授業改善に懸命に取り組む必要の大きさを具体的に述べた。講演後の感想文には、児童理解、授業改善について共感と感動を述べたものが多く、多くの10年目研修対象教員の学ぶ意欲を高めたと研修担当者は述べている。
(58)平成24年度姫路市立広畑第二小学校国語科研究授業指導助言	平成 24 年 10 月	3 年生「一つの花」を教材にした単元名「読書感想文を書こう」の研究授業を指導助言した。学級経営における教員の指導の重要性と教材研究の重要性を述べながら、子どもたちの読書力が育つための授業のあり方とやり方について「みんな学び」に焦点を当て、学校図書館の活用等具体的に述べた。
(59)茨木市国語部会研究授業指導助言（茨木市立玉櫛小学校）	平成 24 年 10 月	茨木市国語部会提案研究授業の指導助言を行った。説明文的な文章（「森林のおくりもの」）を教材にした際の指導の基礎・基本、情報収集・活用をねらいにした単元の指導方法、国語科教科書の使い方、学級経営の重要性とそのポイント等について、授業を基に具体的に述べた。
(60)茨木市・三島地区・摂津三地区合同国語部会研究授業指導助言（茨木市立大田小学校）	平成 24 年 10 月	茨木市・三島地区・摂津三地区合同の国語部会研究授業の指導助言を行った。文学的な文章（「ごんぎつね」）を教材にした際の指導の基礎・基本、多読の指導方法、国語科教科書の使い方等について、授業を基に具体的に述べた。また、読み能力を指導する際の重要な問題である「読むこととは何か」を四つの段階で説明し、教師に求められている指導のあり方と授業のあり方、学校図書館の活用等について述べた。

(61) 平成24年度豊能地区10年目研修閉講記念講演（中学校教員対象）	平成25年1月	10年目研修講座閉講記念講演（中学校教員対象）で、「授業力の向上に向けて――10 年目研修を終えステップアップをめざす先生方へ」をテーマに講演を行った。授業力向上を今後の自己の課題として追究する姿勢とポイントを述べた。生徒実態を理由に授業力向上を疎かにしがちな中学校の校内研究体制を取り上げ、具体的な進め方を述べた。教員自身が自分を磨き、自己の内面世界を確立させていくことの重要性を述べた話から、対象教員に大きな刺激を与え、意欲を高めたと研修担当者は述べている。
(62) 平成24年度豊能地区10年目研修閉講記念講演（小学校教員対象）	平成25年2月	10年目研修講座閉講記念講演（小学校教員対象）で、「授業力の向上に向けて――10 年目研修を終えステップアップをめざす先生方へ」をテーマに講演を行った。授業力向上を今後の自己の課題として追究する姿勢とポイントを述べた。とりわけ、研究の盛んな小学校において陥りやすい問題を校内研究体制とその具体的な進め方を取り上げて述べた。教員自身が自分を磨き、自己の内面世界を確立させていくことの重要性を述べた話から、対象教員に大きな刺激を与え、意欲を高めたと研修担当者は述べている。
(63)吹田市小学校国語研究部講演会	平成25年2月	大阪府吹田市小学校教育研究会国語部研修会で「これからの国語科教育で育てる力――読むことについて考え、作品を読み切り、言葉の力を育てられる教材研究の再構築を」テーマに講演を行った。国語科教育の抱える危機的問題を軸に、読むこと指導の重要性、正解到達主義と正解到達主義批判の双方の問題点を指摘し、ナンデモアリの読むこと指導ではなく、個別で主観的な読みを指導する教師のあり方を、「読むこととは何か」、読書力育成、多読の取組の進め方を軸に具体的に述べた。
(64)平成25年度豊能地区10年経験者研修(小学校)	平成25年5月	10年目研修講座開講記念講演（小学校教員対象）で、「教員人生のさらなるステップアップをめざして――節目の 10 年を迎えた貴方に期待されていること」をテーマに講演を行った。授業力向上と児童理解力向上を目指し、自身の体験を基に、学校、教員に求められている児童理解、授業改善について具体的に述べた。児童を育てるためには、教員自身が己を磨き、学び、成長させなければならないという話が、多くの10年目研修対象教員の学ぶ意欲を高めたと研修担当者は述べている。

(65) 平成 25 年度豊能地区 10 年経験者研修（中学校）	平成25年5月	10 年目研修講座開講記念講演（中学校教員対象）で、(77)と同テーマで講演を行った。「中 1 ギャップ」の原因が、生徒の育ちの遅れだけでなく、教員の生徒理解の弱さにあることを述べ、生徒の辛さ・悲しさ・寂しさを敏感にキャッチできる教員の生徒理解力の重要性、これからの中学校教員が授業力向上、授業改善に懸命に取り組む必要の大きさを具体的に述べた。講演後の感想文には、児童理解、授業改善について共感と感動を述べたものが多く、多くの 10 年目研修対象教員の学ぶ意欲を高めたと研修担当者は述べている。
(66) ノートルダム学院小学校校内研究会講演	平成25年9月	京都で最も有名な私学小学校の一つであるノートルダム学院小学校校内研究会において「対話と聴くことについて考える」と題して講演を行った。「対話はなぜ必要なのでしょうか」と問いかけ、人生の重要な問題には正解がなく解答ではなく回答しか存在しないことを確認し、個人がより豊かで、深い回答に到達するためには、対話しかないことを述べた。その際、他者との対話だけでなく、自己内対話にこそ個人の成長の根源があることを述べた。正解がない、ベストな答えがないとすれば、生きていくためには回答をつくり、対話を通してその回答をより豊かで深いものへと磨き抜く力が必要となるという主張が共感をもって受けとめられた。
(67) 倉敷市立本荘小学校校内研究会講演	平成 25 年 10 月	倉敷市の国語研究校である倉敷市立本荘小学校で「単元を貫く言語活動――『2 文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう／感情　生き物はつながりの中に』を基に」と題して、「単元を貫く言語活動」について講演を行った。目標が曖昧になりがちな国語科指導において、国語科教科書を教師がどのように読み、そこから単元目標を具体化した B 規準例をどのようにしてつくるのかを単元「2 文章と対話しながら読み、自分の考えをもとう／感情　生き物はつながりの中に」を基に具体的に話した。
(68) 京都市立桃山小学校研究発表会講演	平成26年1月	京都市伏見支部の研究発表会場校において「主体的な読みをさせるには」と題して講演を行った。80 年代にイーザーの読者論導入の議論があって〈正解到達方式〉が否定されてから、「多様な読みをどう指導していいかわからない」混乱が起きたが、読みが個別的で、主観的なものであり、解釈は、私なりの世界のとらえ方をもとにした解答ではなく回答としてしか存在しえないこと、それが成長と共に上書きされていくこと、交流によって他者の読みから学ぶ学びがあること、そして読者の解釈には、「内面世界」が反映され、ドクサ（臆見）や矛盾が必然的に孕まれていることなどを例をあげてわかりやすく述べた。
(69) 平成25年度豊能地区10年目研修閉講記念講演（中学校教員対象）	平成25年1月	10 年目研修講座閉講記念講演（中学校教員対象）で、「授業力の向上に向けて――10 年目研修を終えステップアップをめざす先生方へ」をテーマに講演を行った。生徒実態を理由に授業力向上を疎かにしがちな中学校の校内研究の実態例を取り上げながら、中学校教員が授業力向上を今後の自己の課題として追究することの重要性と自己実現における意義、その際のポイントを述べた。教員自身が自分を磨き、自己の内面世界を確立させていくことの重要性を述べた話から、対象教員に大きな刺激を与え、意欲を高めたと研修担当者は述べている。

(70) 平成25年度豊能地区10年目研修閉講記念講演（小学校教員対象）	平成25年2月	10年目研修講座閉講記念講演（小学校教員対象）で、「授業力の向上に向けて――10 年目研修を終えステップアップをめざす先生方へ」をテーマに講演を行った。授業力向上を今後の自己の課題として追究する姿勢とポイントを述べた。中学に比べ研究が盛んな小学校において陥りやすい問題を実態例から述べ、校内研究体制のあり方、その具体的な進め方、ミドルリーダーとして求められる役割と自覚の重要性を述べた。教員自身が自分を磨き、自己の内面世界を確立させていくことの重要性を述べた話に対して、対象教員が大きな刺激を受け、意欲を高めたことを研修担当者は述べている。
(71) 平成26年度豊能地区10年経験者研修（小学校）	平成26年5月	10年目研修講座開講記念講演（小学校教員対象）で、「教員人生のさらなるステップアップをめざして――節目の 10 年を迎えた貴方に期待されていること」をテーマに講演を行った。キャリア形成上の10年目の意味と意義、教師のあり方を規定するものとしての「意欲・姿勢」と、「わかる力」「逃げない力」「教える力」の重要性を自らの実体験を基に具体的に述べた。講演についての前向きな感想が多く見られたと研修担当者は総括している。
(72) 平成26年度豊能地区10年経験者研修（中学校）	平成26年5月	10年目研修講座開講記念講演（中学校教員対象）で、(82)と同テーマで講演を行った。「中1ギャップ」の原因が、生徒の育ちの遅れだけでなく、教員の生徒理解の弱さ、そこから生まれる指導と生徒のミスマッチにあることを述べ、生徒の辛さ・悲しさ・寂しさを敏感にキャッチできる教員の生徒理解力の重要性と、これからの中学校教員が授業力向上、授業改善に懸命に取り組む必要の大きさを具体的に述べた。講演後の感想文には、児童理解、授業改善について共感と感動を述べたものが多く、多くの 10 年目研修対象教員の学ぶ意欲を高めたと研修担当者は述べている。
(73) 平成26年度ノートルダム学院小学校校内研究指導助言、講演	平成 26 年 4 月、6 月、7 月、7 月、8 月、9 月、11 月、平成 27 年 1 月	平成27年2月13日に行われる平成26年度ノートルダム学院小学校研究発表会に向けて、研究と学校づくりに年間を通して指導に入ることになった。立命館、同志社の小学校ができ競争が激化する京都の私学小学校の環境を背景に、授業改善と若手教員の育成をノートルダム学院小学校の学校力向上の戦略において関わることにした。(79)の講演をスタートに、4 月 18 日、6 月 16 日、9 月 25 日は、それぞれ国語科単元計画と授業のつくり方を具体的な教材と単元をあげ学年を変えて若手教員育成のために指導を行った。7 月 14 日は授業研究会の指導助言、8 月 23 日は夏季一日研修会の指導助言を行った。
(74)「第29回　2014年度人間教育実践交流会フォーラム　in　奈良」国語分科会コーディネーター	平成26年8月	NPO 人間教育研究協議会・人間教育学会共同主催、奈良県教育委員会・奈良市教育委員会・三郷町教育委員会・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会・兵庫県教育委員会・京都市教育委員会後援。「言葉の力と学力向上～各教科の学習を支える言語活動～」をテーマに行われたフォーラムの国語分科会でコーディネーターを務めた。言語活動の充実が目的になるのではなく、目の前の子どもたちにつけたい力をどうしてもつけようと決意する教師のあり方が、言語活動の充実を実現することを述べた。

(75) 平成26年度愛知県大口町立大口南小学校	平成27年2月	「『ともに学び合い、確かな学力をもつ子の育成 ～ 学び合いのよさが実感できる授業づくりをめざして ～』という大口南小の研究主題をテーマに午前中6本、午後研究提案授業1本を参観し、講演を行った。「読むこととは何か」という問いを基に、求められる国語科指導のあり方を具体的に述べた。
(76) 平成26年度ノートルダム学院小学校創立60周年記念研究発表会指導助言、パネリスト	平成27年2月	「感じる心・考える力の育成　～対話を通じて学びを深める～」をテーマに行われた「ノートルダム学院小学校　創立60周年記念授業研究発表会」で3部会のうち「聴く部会」指導助言者として、「聴く部会」授業研究協議会で講話、午後の全体会でパネルディスカッションパネラーとして指導を行った。
(77) 平成26年度豊能地区10年目研修閉講記念講演（中学校教員対象）	平成27年2月	10年目研修講座閉講記念講演（中学校教員対象）で、「授業力の向上に向けて――10 年目研修を終えステップアップをめざす先生方へ」をテーマに講演を行った。生徒実態を理由に授業力向上を疎かにしがちな中学校の校内研究の実態例を取り上げながら、中学校教員が授業力向上を今後の自己の課題として追究することの重要性と自己実現における意義、その際のポイントを述べた。目の前の子どもたちにつけたい力をどうしてもつけようとする教員の決意が子どもたちを豊に育て、自らの内面世界を確立させていくことにもつながることを述べた。この話から、対象教員に大きな刺激を与え、意欲を高めたと研修担当者は述べている。
(78) 平成26年度豊能地区10年目研修閉講記念講演（小学校教員対象）	平成27年2月	10年目研修講座閉講記念講演（小学校教員対象）で、「授業力の向上に向けて――10 年目研修を終えステップアップをめざす先生方へ」をテーマに講演を行った。授業力向上を今後の自己の課題として追究する姿勢とポイントを述べた。国語単元学習、大村はまの実践を取り上げながら、目の前の子どもたちにつけたい力をどうしてもつけようとする教員の決意が子どもたちを豊に育て、自らの内面世界を確立させていくことにもつながることを述べた。中学に比べ研究が盛んな小学校において陥りやすい問題を実態例から述べ、校内研究体制のあり方、その具体的な進め方、ミドルリーダーとして求められる役割と自覚の重要性を述べた。この話から、対象教員に大きな刺激を与え、意欲を高めたと研修担当者は 述べている。

(79)平成 26 年度愛知県大口町立大口中学校地区対象合同研究会	平成27年3月	中学校現場が抱える実態から目をそらさず、その中において研究体制と教員の意欲をどう高めるかに貢献できるため、「求められる授業研究と教師のあり方―授業研究の役割と学習指導案の書き方、読み方―」と題して講演を行った。授業研究を中学校が行うべき理由【根拠】、生徒にとっての授業の存在の大きさ、教師のあり方を左右する研究のあり方を講演→パネルディスカッション→疑問に答える講演という3部形式で行った。
(80)茨木市立春日小学校校内研究会	平成27年4月	「春日小・書くことの課題を考える――『書くこととは何か、書く指導のあり方とは何か』から」と題して講演を行った。春日小の研究主題と教員の実践上の疑問を受けて、書くこととは何かを考え、指導のあり方を具体例をあげながら平易に話した。
(81)平成27年度豊能地区10年経験者研修(小学校)	平成27年4月	10年目研修講座開講記念講演（小学校教員対象）で、「教員人生のさらなるステップアップをめざして――節目の 10 年を迎えた貴方に期待されていること」をテーマに講演を行った。キャリア形成上の10年目の意味と意義、教師のあり方を規定するものとしての「意欲・姿勢」と、「わかる力」「逃げない力」「教える力」の重要性を自らの実体験を基に具体的に述べた。講演についての前向きな感想が多く見られたと研修担当者は総括している。
(82) 平成27年度豊能地区10年経験者研修(中学校)	平成27年5月	10年目研修講座開講記念講演（中学校教員対象）で、(95)と同テーマで講演を行った。「中1ギャップ」の原因が、生徒の育ちの遅れだけでなく、教員の生徒理解の弱さ、そこから生まれる指導と生徒のミスマッチにあることを述べ、生徒の辛さ・悲しさ・寂しさを敏感にキャッチできる教員の生徒理解力の重要性と、これからの中学校教員が授業力向上、授業改善に懸命に取り組む必要の大きさを具体的に述べた。講演後の感想文には、児童理解、授業改善について共感と感動を述べたものが多く、多くの 10 年目研修対象教員の学ぶ意欲を高めたと研修担当者は述べている。
5　その他		
(1) 特定非営利活動法人　人間教育研究協議会事務局	平成17年4月～平成 26 年12月	梶田叡一中央教育審議会副会長を代表に、加藤明中央教育審議会専門委員を副代表におく NPO 法人「特定非営利活動法人　人間教育研究協議会」の事務局を務める。日本の教育改革実現、確かな学力を基盤にした生きる力の育成のために奮闘している。
(2) 『平成19年度　京都市教育課程実施状況調査国語科』問題作成	平成20年2月実施	平成14年度に全面改訂された『京都市教育課程実施状況調査問題』の年度ごと改訂を行った。その改訂の中心は、評価の目的から見た問題の精査とその修正、差替え、及び5年間の実施データを基に正答率に偏りを生じている問題の改訂であった。「平成19年度京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成委員会副委員長」、「同6年部会部長」として、その改訂の中心的役割を果たした。

(3)『平成20年度　京都市ジョイントプログラム国語科』問題作成	平成21年度以降年２回実施	京都市教育委員会によって平成20年度から始められた「ジョイントプログラム」問題作成委員として問題を作成。「ジョイントプログラム」は、中学校で行われていた「学習確認プログラム」に連結する予習用の「おさらいプリント」、「確認テスト」、復習用「ふりかえりプリント」の３つで構成され、その費用を保護者が支払う小学校版自学自習システムのことである。国語、算数の2教科のみで、全小学校５、６年生が年２回行う。
(4)『平成20年度　京都市教育課程実施状況調査国語科』問題作成	平成21年2月実施	平成 19 年度に改訂された『京都市教育課程実施状況調査問題』の年度ごとの改訂を行った。この年度は、「平成 20 年度京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成委員会委員長」となり、京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成の最高責任者として、改訂の中心的役割を果たした。前年度実施のデータを基に正答率に偏りを生じている問題の改訂、評価の目的から見た問題の精査とその修正、差替えを行った。
(5) 特定非営利活動法人　人間教育研究協議会事務局長	平成 26 年 12 月～現在に至る	梶田叡一奈良学園大学長を理事長におく NPO 法人「特定非営利活動法人　人間教育研究協議会」の事務局長を務める。日本の教育改革実現、確かな学力を基盤にした生きる力の育成のために奮闘している。
(6)奈良学園大学人間教育学会事務局長	平成 26 年 12 月～現在に至る	梶田叡一奈良学園大学長を会長におく奈良学園大学人間教育学会事務局長を務める。日本の教育改革実現、確かな学力を基盤にした生きる力の育成のために人間力豊かな教師の育成を目指し奮闘している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格、免許		
(1)小学校教諭１級普通免許状取得	昭和 57 年 3 月	昭五六小一普第一〇七三号　兵庫県教育委員会
(2)養護学校教諭１級普通免許状取得	昭和 57 年 3 月	昭五六養学一普第一六号　兵庫県教育委員会
(3) 学位：修士（学校教育学） 平成 19 年 3 月 23 日 兵庫教育大学大学院 修第 6286 号 「目標と評価規準を明確にした単元づくりの方法――小学校国語科・読むことの場合――」	平成19年3月	80年代半ばのW.イーザーの読者論導入の議論、90年代のゆとり教育提唱、PISA型読解力ショックで生まれた読むこと指導の混乱を教訓化し、整理して、「読むこととは何か」「読む能力とは何か」の解明に取り組んだ。W.イーザーの読者論を初めとする文学批評理論、国語教育学、認知心理学、教育評価の知見を援用、活用し、目標分析試案の形で、読む能力の構成要素を明らかにした。
(4) 学位：博士（教育学）	平成 26 年 9 月	「読むこととは何か」を追究するために、イーザーの読者論を再検討し、「自分を読むこと」観を提示

平成 26 年 9 月 25 日 広島大学院 第 6492 号 「読むことの学習指導における単元設計に関する研究」		した。そのために、主観と客観の問題を考察し、「自分とは何か」という自己意識の問題について考察し、「自分を読むこと」観の内実を高めた。その上で、タキソノミー、改訂タキソノミー、キー・コンピテンシー、マルザーノ・タキソノミーといった能力観の枠組を目標分析試案としてとらえ、読む能力の目標分析試案を提示した。これらをふまえて、「小学校・国語科読むこと単元計画作成チェックリスト」の提示を行い、その実証実験に取り組んだ。
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1) 平成 16 年度　京都市指導計画国語科４年部会部長	平成17年7月～平成18年3月	他の国語科学年部長を国語教育研究会担当校長が務める中、「平成16年度京都市指導計画国語科４年部会部長」国語科４年生部長を任命され、年間授業時数、発展的な学習の実施具体化等の課題に取り組み、指導計画改定の中心的役割を果たした。
(2) 平成19年度、20年度　京都市立月輪小学校副教頭・研究主任	平成19年4月～平成21年3月	副教頭として学校づくりの先頭に立ち、学級崩壊のクラス立て直し、特別支援該当児童が多く学級経営に困難を生じていた2年目教員への指導（2年目教員は、その後見事に成長。次年度は学校づくりの中核教員へと成長）に取り組んだ。研究主任としては、国語科授業改善の取組を進め、100冊読書達成児童を20人未満から96名まで飛躍的に増やし、『京都市立月輪小学校　確かな学力育成年間計画』を作成し、学力づくりに成果を上げた。
(3) 平成 19 年度　京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成委員会副委員長、6 年部会部長	平成19年9月～平成20年3月	平成14年度に全面改訂された京都市教育課程実施状況調査問題の年度ごと改訂を行うため「平成19年度京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成委員会副委員長」、「同6年部会部長」に任命され、改訂の中心的役割を果たした。
(4) 平成19・20年度　京都市立月輪小学校読書力向上プロジェクト委員会委員長	平成19年4月～平成21年3月	副教頭、研究主任の兼職を基に、読書力向上プロジェクト委員会委員長を勤め、図書館の活用と国語科の授業改善と図書館との連携を積極的に取り組んだ。2年間の取組により、平成18年度100冊読書児童9名の学校を100冊読書児童100名を超える学校に飛躍させた。
(5) 平成20年度　京都市国語教育研究会研究企画第 54 回全国国語教育研究大会中学年部会司会	平成20年4月～平成21年3月	平成 20 年度は、研究会が「実生活・実社会に生きる国語力（２）－読解力と記述力を重視して－」を研究主題とした２年次に、内地留学（兵庫教育大学院）を終え３年ぶりに京都市国語教育研究会研究企画に復帰した。研究会の一部にあったメタ認知についての誤解や一面的理解に研究会が翻弄されないように研究会を指導し、小集団学習の研究が進むよう全体の調整を行った。

(6)平成20年度　京都市ジョイントプログラム国語科問題作成委員	平成20年5月～平成21年3月	京都市教育委員会による平成20年度学力づくりの最重要事業であった小学校「ジョイントプログラム」導入、実施のために、「平成20年度京都市ジョイントプログラム国語科問題作成委員」として、「ジョイントプログラム」が児童の生きる力、確かな学力育成につながる事業となるよう中心的役割を果たした　委員は、国語科の場合、国語教育研究会会長、小学校、中学校各国語科指導主事、鎌田の４名であった。貢献した。
(7)平成20年度　京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成委員会委員長	平成20年6月～平成21年3月	平成19年度に改訂された京都市教育課程実施状況調査問題の年度ごと改訂を行うため「平成20年度京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成委員会委員長」となり、京都市教育課程実施状況調査国語科問題作成の最高責任者として、改訂の中心的役割を果たした。
(8)平成20年度　京都市指導計画国語科移行措置版３年部会部長	平成20年9月～平成21年3月	新学習指導要領移行措置を見据えた京都市指導計画改訂のために「平成20年度京都市指導計画国語科移行措置版３年部会部長」に任命され、改訂作業の中心としてその先頭に立った。移行措置に伴う単元内容の差替え、及び指導展開に課題がある単元計画の改訂を行った。
(9)平成20年度、21年度　兵庫教育大学「活用型学習の指導方法開発プロジェクト」教材開発・評価方法開発総括チーム委員	平成20年10月～平成22年3月	兵庫教育大学が活用型学習の指導方法、評価、教材開発を行うために設立したプロジェクトの委員。主なメンバーは、梶田叡一学長、勝野真吾副学長、中洌正堯名誉教授、岩田一彦特任教授（プロジェクトリーダー）。
(10) 平成21年度　京都市立久世西小学校教頭	平成21年4月～平成22年3月	旧同和地区を含み、ベテラン教員に指導力不足教員が多く、組織力が弱く、種々の問題から、困難校として見られていた小学校の教頭として、学校長と共に学校づくりに邁進した。誤った学力観、誤った組織観を見逃さず議論し、指導し、全体に報告、連絡、指示を徹底して行い、徹底的に児童を中心においた学校づくり、校長を中心とした学校運営を推し進めた。その結果、学力向上、学校力向上に大きな成果を収めた。
(11)平成21年度　京都市国語教育研究会研究企画	平成21年4月～平成22年3月	この年度より教頭職に昇任（通常、教頭職に昇任したものは研究企画にならないことがそれまでの国語教育研究会の通例であった）したが、研究会長の第55回全国国語教育研究大会成功のためにと度重なる就任要請を受け、研究企画に就任。55回という節目の年を迎える全国国語教育研究大会成功に向け、小集団学習の研究が進むよう全体の調整を行い、授業研究の指導を時間の許す限り行った。
(12)平成22年度環太平洋大学FD研修講演	平成22年8月	教員採用試験合格者への取組、指導の成果から大学づくりに求められる具体的な改善点を提案した。
(13)平成22年度環太平洋大学FD研修講話	平成23年11月	環太平洋大学の教員採用試験実績が何故高いのかを説明し、次年度以降の戦略のあり方を具体的な提言を紹介しながら講話した。

(14)第２１回　岡山県高等学校弁論大会審査委員	平成 24 年 10 月	岡山県高等学校文化連盟弁論部会主催の弁論大会における審査委員を、山陽新聞社論説委員道広淳氏、国際ソロプチミスト岡山さつき会野海会長らと共に務めた。瀬戸南高校を会場に行われ、県内の高校９校から２０人の弁士が集い、７分という制限時間のなかで意見発表を行った。
(15)日本語検定総合委員会委員	平成24年11月より現在に至る	日本語検定の見直しを行う最高委員会の一員として参加し、日本語検定が小・中・高・大学生の日本語力を育成するものと深化・発展・充実するよう議論に参加している。
４　その他		
(1) 第６回（京都市）教育実践功績表彰受賞	平成 19 年 11 月	「教育実践功績表彰」は、京都市教育委員会が、平成 14 年度から全国に先駆け、それぞれの学校・幼稚園において、熱意溢れる教育活動を実践し、努力を重ねる教職員の功績を称えるため行っている。保護者、市民、経済界等の代表も参画する「教育実践功績表彰選考委員会議」における被表彰者や表彰方法などについての提言をもとに、本表彰制度を実施している。
(2) 米谷優子「日本における読書教育と読書推進策――情報リテラシー教育との関連から――」『園田学園女子大学論文集 第 45 号』(2011. 1) 論文引用実績	平成23年1月	園田学園女子大学論文集 第 45 号（2011. 1）p22-23 にて引用される。日本の読書教育と読書推進策について述べたこの論文は、日本の国語科教育が読解指導に重きをおき学校で組織的に読書教育を取り組んでこなかったというスタンスで論を展開している。その中で、日本の国語科教育における読解指導の混乱を拙著『真の読解力を育てる授業』よりの引用で述べている。
(3) 平成 22 年度環太平洋大学教員採用試験実績	平成23年3月	開学 4 年目初の教員採用試験挑戦を教職センター責任者として陣頭指揮、指導を行い、公立学校 14 名、私立学校 13 名、計 27 名の採用成果を生み出した。
(4) hito*yume 鼎談（梶田叡一、水戸部修治文部科学省教科調査官）	平成23年9月	『hito*yume』は、学校現場に 20 万部配布される文溪堂のフリーペーパー誌である。改訂学習指導要領実施後の日本の小学校国語科授業の現状を基に、指導要領のねらいを生かした授業改善をどのように行うかについて、読むことの言語活動充実の課題を中心に論じ合った。一つの結論として、児童を読者に育て上げる教育観の重要性が確認できたと捉えている。
(5) 平成 23 年度環太平洋大学教員採用試験実績	平成 23 年 12 月現在	2 回目の教員採用試験を教職支援室長として指導し、現時点で公立学校 23 名、私立学校 2 名、計 25 名の採用成果を生み出した。
(6) 市嶋典子「対話的読解授業の試み―学習者が創る文化論に注目して－」『秋田大学国際交流センター紀要』(2012.3) 論文引用	平成24年3月	秋田大学国際交流センター紀要（2012.3）p.45 にて引用される。対話的読解授業の意義と課題を主張したこの論文は、授業の中に対話性を生み出すためには、明確な授業目標が必要になることを述べるため「教師の読み方へ――イーザーの読者論、物語論、自由間接話法」の概要を引用し、それを市嶋の問題意識としている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1『教育フォーラム 36／真の学力向上のために』	共著	平成 17 年 8 月	金子書房	学力向上の実現のために、授業改善に加え、子ども自身の積極的な学習の姿勢を育むための具体的な方策について、すぐれた理論と多様な実践例を通じて提言した共著書。 A5 判、全 148 頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、浅田匡、加藤明、鎌田首治朗、勝見健史、藪田知子、藤本陽三、小林多津子、金澤孝夫、福本義久、板倉聖宣 本人担当部分：「目標分析表と目標構造図をつくるために」（P.36-P.46）を単著。 茨城県下館市立下館小学校（1986）、井上尚美（2004）といった国語科における目標分析の先行研究をふまえ、小学校国語科指導要録の３領域１言語事項を観点においた目標分析を提案し、国語科における目標分析表と目標構造図の作り方の実際を紹介している。
2『教育フォーラム 37／授業力を磨く』	共著	平成 18 年 2 月	金子書房	教師が授業力を磨くための様々な取り組みを、具体的に提言した共著書。 A5 判、全 152 頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、服部英雄、田中博史、菅井啓之、藤本英樹、今堀志津、勝見健史、永田智子、松島るみ、尾崎仁美、鎌田首治朗、中村哲 本人担当部分：「イーザーの読者論と国語科教育」（P.115-P.128）を単著。 共著書の中で特別論文を担当。80 年代中頃日本の国語教育に大きな影響を与えた W.イーザーの読者論を概観した上で、80 年代に起きた国語科教育への読者論導入の議論が持つ問題点を指摘し、文学批評理論と授業理論、実践研究との違いを軸に整理している。その上で、読むことの解明に読者論を活用することが今後の課題であることを示唆している。
3「■読解力を育てる教員は総合熱心が多い？イエス＆ノー」『総合的学習を創る 2006 年 4 月号／“注目の読解力”が育つパワー開発』	共著	平成18年3月	明治図書	総合的学習は、21世紀型学力としての読解力の育成をもっと明確にめざす必要があるとのねらいで「“注目の読解力”が育つ総合パワー開発」を特集した共著書。 B5 判、全 80 頁 編者：樋口雅子 共著者：向山洋一、池野範男、小原友行、森一弘、鎌田首治朗、谷口和也、並木孝樹、高橋正和、與賀田忠倫、北俊夫 本人担当部分：「読解力を育てる教師は、総合に果敢に取り組むすぐれた学び手です」（P.16）を単著。 総合的な学習の時間に前向きな教員と読解力育成に前向きな教員には、児童の学びと育ちに責任を持とうとする姿勢、そのために自らの授業力、教員力を向上させようとする点等で共通点があることを指摘し、PISA型「読解力」ブームやその騒ぎに学校現場が徒に流されることのないよう述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4『教育フォーラム 38 ／いま求められる〈読解力〉とは』	共著	平成 18 年 8 月	金子書房	PISA 読解力調査結果から、全教科をあげて〈言葉の力〉を育む取組みに向けた視点と理論・実践を示した共著書。 A5 判、全 152 頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、澤本和子、足立幸子、吉川芳則、鎌田首治朗、勝見健史、天野拓夫、清水美憲、井上尚美、中洌正堯 本人担当部分：「いま求められる〈読解力〉と目標分析」（P.49-P.61）を単著。 「いま求められる〈読解力〉と目標分析」で、PISA 型「読解力」ショックによる学校現場の動揺を戒め、言葉の力を育てる国語科授業の構想、単元計画、授業づくりのために、読む能力を「小学校　読む能力目標分析観点（試案Ⅰ）」と「単元設計能力目標分析観点（試案Ⅱ）」の形式で提案した。
5『教育フォーラム 41 ／新しい学習指導要領』	共著	平成 20 年 2 月	金子書房	新しい学習指導要領が目指す理念と課題を明確にし、現場教師の拠り所となる考え方を提供した共著書。 A5 判、全 168 頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、二瓶弘行、硲茂樹、田中博史、矢野英明、直山木綿子、松田智子、上月敏子、勝見健史、鎌田首治朗、善野八千子 本人担当部分：「教科を越えて育成すべき言葉の力」（P.122-P.131）を単著。 「教科を越えて育成すべき言葉の力」で、それは何なのか、それをどう育てるのかを、言語力育成協力者会議における言語力の定義と議論をふまえながら述べ、知識と経験、論理的思考、感性・情緒等を基盤とすることの意味、論理的思考の重要性、他者とコミュニケーションを行う上での内面世界の重要性を述べた。
6『教育フォーラム 43 ／〈活用〉の力とは何か』	共著	平成 21 年 2 月	金子書房	注目を集める活用の力とは何かを各教科の実践を通して紹介した共著書。 A5 判、全 152 頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、勝見健史、鎌田首治朗、小寺裕、篭敦子、井上伸一、田中孝志、福井雅大、黒田尚宏、新川靖、小楠徹、金岡成晃 本人担当部分：「物語を読み解く力」（P.37-P.46）を単著。 「物語を読み解く力」で、物語には読者が読み解くべき謎があることを「ごんぎつね」を通して具体的に述べている。まず、物語の謎を読み解く力が教師に求められること、その謎から国語科学習において子ども達が学習し、交流する価値のある謎が見つかること、そして物語を読み解く力が、読解力の中核といえる一貫した解釈を構成する能力といえることを述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7『真の読解力を育てる授業』	単著	平成21年5月	図書文化社	国語教育学、W.イーザーの読者論、認知心理学、教育評価の理論を援用し、「読むこととは何か」「読む能力とは何か」を目標分析試案の形で提案している。PISA型読解力ショック、W.イーザーの読者論導入の議論、90年代のゆとり教育による国語科授業の混乱を整理し、読書力向上のための学校、教師の取り組み方、国語科単元計画づくりの重要性と方法、教師の教材の読み方を具体的に述べている。この試案における読む能力の特徴は、読む能力を読書力と位置づけている点にある。 A5判　全255頁。
8『教育フォーラム 45／確かな学力の育成と評価のあり方』	共著	平成22年2月	金子書房	全国学力・学習状況調査や目標準拠調査などから確かな学力を育てる評価のあり方を述べた共著書。 A5判、全148頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、金澤孝夫、松本清治、岩崎保之、工藤文三、千々布敏弥、古川治、有本昌弘、宮本三郎、山田卓三、鎌田首治朗 本人担当部分：「国語科教育に主題の再生を」（P.124-P.135）を単著。 「国語科教育に主題の再生を」で、文学的文章を読むことにおいて、主題を読みのゴールの一つにおいていないことが、新学習指導要領で重視されている言語活動を誤って捉える危険性を現場に生んでいること、言葉の力、真の読解力、論理的思考力、言語運用能力を育成するために、主題を読みのゴールの一つにおくことの重要性を述べている。
9『教育フォーラム46／〈言葉の力〉を育てる』	共著	平成22年8月	金子書房	全教科・領域において、求められている＜言葉の力＞の育成を、多角的に考察、優れた理論・実践を紹介した共著書。 A5判、全160頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤　明、伊﨑一夫、鎌田首治朗、増井眞樹、勝見健史、汐海治美、谷本寛文、中島繁雄、金沢　緑、米田　豊、浅田　匡、松田智子 本人担当部分：「『読むこと』の指導と〈言葉の力〉」（P.36-P.46）を単著。 「『読むこと』の指導と〈言葉の力〉」で、言葉の力の重要性、言葉の力を育成する上で読むことが果たす役割の重要性、読むことと書くことを表裏一体にして取り組むことの重要性を述べた。その上で、一貫した解釈を構成する能力と読書力を育成する国語科授業、学校の取組の重要性を述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10『教育フォーラム47／〈こころ〉を育てる』	共著	平成23年2月	金子書房	新しい学習指導要領完全実施の上で、どのように〈こころ〉を育てていくかを提言した共著書。 A5判、全160頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤　明、渡邉　満、松田智子、鎌田首治朗、山本美紀、中村　哲、大野光二、髙橋真理、江渕弘明、蔵あすか、中家淳悟、増尾慶裕 本人担当部分：「文学作品との出会いで〈こころ〉の育ちを」（P.48−P.59）を単著。 「文学作品との出会いで〈こころ〉の育ちを」で、新学習指導要領と読むこととは何かから、文学作品でこころを育てることと文学作品の読み方を指導することの重要性を述べた。その上で、読む能力のうち、想像して読む能力とこころの育ちとの重要な関連について述べ、想像して読む能力の３つの下位能力を育てる重要性を述べた。
11『次世代の教職入門』	共著	平成23年5月	大学教育出版	次世代の教員志望者に求められる資質・能力を明らかにしようとする共著書。 A5判、全297頁 編著者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗、中田正浩、松田智子、大野光二、大石隆夫、中田律子、伊崎一夫、住本克彦、杉田郁代、筒井愛知 本人担当部分：「第1章　教職への道－教育とは何か－」（P.1−P.22）「第10章　教員採用試験」（P.219−P.249）を単著。 第1章では、教職を目指す学生に、教職を目指す者に最も求められる資質は意欲・態度であることを述べ、学生に大学時代における自分磨きを強く求め、それが困難、苦労に数多く挑戦し、そこから多くの学びをする重要性を述べた。その上で第10章では、教員採用試験の現状とその取り組み方を述べた。
12『教育フォーラム48／国際教育の課題と展望』	共著	平成23年8月	金子書房	日本の学校教育の喫緊の課題、国際教育・グローバル教育を様々な視点から考察、問題提起した共著書。 A5判、全176頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、見上一幸、松田智子・松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川崎由花、古川治、善の八千子、山本美紀、加藤明、河上隆一、湯峯裕、汐海治美・渡部久美子 本人担当部分：「国際教育の必要性と日本語教育の重要性」（P.38−P.48）を単著。 「国際教育の必要性と日本語教育の重要性」で、国際教育とは何かを述べ、新たな国際教育の重要性、日本語教育と国語教育の違い、日本語教育の必要性について述べた。真の国際化が求められる我が国の進むべき道を考え、日本の若者が真の国際人として成長していける教育を高等教育機関が責任を持って行っていくことの重要性を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13『教育フォーラム49／確かな学力を育てる確かな授業』	共著	平成24年2月	金子書房	「確かな授業」の実現に向け優れた理論・実践を紹介した共著書。 A5判、全152頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、古川治、田中博史、長谷浩也、阿部秀高、金澤孝夫、横須賀薫、高岡信也、鎌田首治朗、渡邉規矩郎、山本美紀 本人担当部分：「『言葉の力』は具体的にどのような内容を持つのか／『言葉の力』の土台となる『読む能力』の考察」（P.106-P.117）を単著。 「『言葉の力』は具体的にどのような内容を持つのか／『言葉の力』の土台となる『読む能力』の考察」では、理解と表現、文字言語と音声言語の特徴をおさえ、学習指導要領の「文章の解釈」を文学批評理論から強化し提案した上で、言葉の力の土台となる読む能力を提案した。
14『教職とは?―エピソードからみえる教師・学校』	共著	平成24年3月	教育出版	優れた実践を行ってきた教員から多くのエピソードを集め、実践から現代の教育とそこで求められる教員の資質・能力を明らかにしようとした共編著書。 A5判、全208頁 編著者：「教職とは？」編集員会（砂田信夫、鎌田首治朗、井上佳和、上原菜穂子、森川浩孝、瀬川葉子、矢野智子、成實孝之、尾松廣明、菊池謙一、冨家直樹） 本人担当部分：理論編「第1章　教職をめざす」（P.2-P.9）「第5章　教員の研修と服務」（P.52-P.59）を単著。 エピソードの監修と理論編を執筆し、理論編第1章では、教職を目指す者に求められる資質を具体的に述べ、教職を目指す者に自分磨きを強く求めている第5章では、教員の服務と教員が自らの職責を自覚し、奮闘することの重要性を述べている。
15『次世代の教育原理』	共著	平成24年10月	大学教育出版	環太平洋大学を初め、各大学における「教育原理」の授業教科書として活用することを念頭に置いて刊行した共著書。 A5判、全159頁 編著者：中田正浩・松田智子 共著者：中田正浩・中田浩司・松田智子・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 本人担当部分:「第5章　教育課程と教育方法」（P.63-P.82）を単著。 「第5章　教育課程と教育方法」を担当した。教育課程編成を座学のものとせず、今の学校現場での編成を知る筆者の利点を活かし、実際的な教育課程編成、それに関わる教員としての構えを説いた。教育方法においては、旧態然とした一斉授業からの授業改革を念頭に、教育評価のあり方と求められる授業のあり方、児童・生徒のやる気スイッチ（関心・意欲）の高め方を具体的に述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16『教育フォーラム 51号／言語活動――「読み」「書く」の力を中心に』	共著	平成25年2月	金子書房	「確かな授業」の実現に向け優れた理論・実践を紹介した共著書。 A5判、全152頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、金澤孝夫、渡部久美子、伊﨑一夫、阿部秀高、鎌田首治朗、湯峯　裕、井上尚美、オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス、蔵あすか、杉田郁代、高木章 本人担当部分：「『言葉の力』－タキソノミー、改訂タキソノミーとキー・コンピテンシー」（P.92-P.109）を単著。 　タキソノミー、改訂タキソノミー、キー・コンピテンシーの３つの教育目標の分類、能力観の枠組を考察し、「言葉の力」観を明らかにする上で継承すべき点を明らかにしようとしたもの。その上で、試案として「言葉の力氷山モデル　鎌田」「言葉の力の確かさと豊かさ　鎌田」の２つの図と「「言葉の力　目標分析試案」Ver.1（2012）　鎌田」の表を提案している。
17『教育フォーラム 52号／新しい道徳教育のために――徳性をどう育てるか』	共著	平成25年8月	金子書房	「新しい道徳教育のために――徳性をどう育てるか」の実現に向け優れた理論・実践を紹介した共著書。 A5判、全152頁 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、渡邉規矩郎、押谷由夫、加藤　明、新川　靖、小楠　徹、増井眞樹、阿部秀高、鎌田首治朗、渡邉　満、蔵あすか、オチャンテ 村井 ロサ メルセデス 本人担当部分：「『我の世界』の形成における国語科・読むことの役割」（P.90-P.105）を単著。 　現在の道徳教育が〈我々の世界〉が求める価値の指導に重点を置く傾向にあることに対して、〈我の世界〉を構築していくためには「読むこと」が果たせる役割が大きいことを言及している。
18『教育フォーラム 53号／言語活動――「読み」「書く」の力を中心に』	共著	平成26年2月	金子書房	「言語活動――「読み」「書く」の力を中心に」の充実とその実現に向け優れた理論・実践を紹介した共著書。 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、中洌正堯、鎌田首治朗、伊﨑一夫、山下敦子、汐海治美、永田里美、湯峯　裕、勝見健史、加藤　明、瀧明知惠子、蔵あすか 本人担当部分：「文学教材の指導のあり方――「注文の多い料理店」を通して」（P.25-P.36）を単著。 読むこととは何かから文学教材がもつ教育的意義を述べ、小学校国語科においては、作品から読者が発見する「謎」を読み切ることができる授業づくりが重要であることを述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19『人間教育を視点にした教職入門』	共著	平成26年12月	大学教育出版	次世代の教員志望者に求められる資質・能力を明らかにしようとする共著書。 A5 判、全 278 頁 編著者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗、中田正浩、松田智子、中田律子、金山憲正、瀧明知恵子、長井勘治、太田雄久、久田孝 本人担当部分：「第 1 章　教職への道－教育とは何か－」（P.1−P.24）「第 10 章　教員採用試験」（P.255−P.277）を単著。 第1章では、教職を目指す学生に、教職を目指す者に最も求められる資質は意欲・態度であることを述べ、学生に大学時代における自分磨きを強く求め、それが困難、苦労に数多く挑戦し、そこから多くの学びをする重要性を述べた。その上で第10章では、教員採用試験の現状とその取り組み方を述べた。
20『教育フォーラム 55 号／実践的思考力・課題解決力を鍛える――PISA 型学力をどう育てるか』	共著	平成27年2月	金子書房	「実践的思考力・課題解決力を鍛える――PISA 型学力をどう育てるか」についての優れた理論・実践を紹介した共著書。 編著者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤　明、鎌田首治朗、大内善一、伊﨑一夫、金澤孝夫、藤井幸一、萩原憲二、宮岸　洋、藤田英治、岡村季光、蔵あすか、井上信子 本人担当部分：「PISA 型学力観を支えるキー・コンピテンシーの理論」（P. 24−P. 37）を単著。 PISA 型学力観を支えるキー・コンピテンシーの理論を概観し、それが生きる力、確かな学力観と共通している部分の多いことと、キー・コンピテンシーの課題について言及している。
㈜学術論文㈜ 1「教師の読み方へ――イーザーの読者論、物語論、自由間接話法」	単著	平成19年1月	兵庫教育大学　近代文学雑志（ママ）第 18 号 P.17～P.34	文学作品を教材として扱うためには、教師はその作品をどう読めばよいのという、授業づくりにとって重要な問題を正面に据えて、教師の読み方を提案している。読みの複数性を捉えきれない〈正解到達方式〉と、「正解到達主義批判」以降の恣意的な読みまで放置する誤りを乗り越えられる教師の読み方を提案している。
2「小学校国語科・読むことの目標分析試案」（査読付）	単著	平成19年1月	教育実践学研究第 9 巻第 1 号2007年 P.9～P.18	田近洵一、井上尚美の目標分析の試案を受け継ぎ、国語科教育学、認知心理学、文学批評理論、教育評価の各理論と成果を活用し、「小学校国語科・読むことの目標分析試案」として読む能力とは何かを提案している。読む能力を読解力（正確に読む能力、一貫した理解を構成する能力、自分の読みを他者と交流する能力）と読書力とで捉えている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3「目標と評価規準を明確にした単元づくりの方法――小学校国語科・読むことの場合――」（修士論文）	単著	平成 19 年3月	兵庫教育大学院	80年代半ばのW.イーザーの読者論導入の議論、90年代のゆとり教育提唱、PISA型読解力ショックで生まれた読むこと指導の混乱を教訓化し、整理して、「読むこととは何か」「読む能力とは何か」の解明に取り組んだ。W.イーザーの読者論を初めとする文学批評理論、国語教育学、認知心理学、教育評価の知見を援用、活用し、目標分析試案の形で、読む能力の構成要素を明らかにした。 B5判131ページ
4「学校づくり可視化と支援ツールの開発的研究(1)――学校づくり・学校評価についての一考察、及び「学校づくり評価規準表(目標分析試案表)」上位観点の設定について――」	単著	平成23年3月	環太平洋大学研究紀要第4号 P.81～P.90	簡便で、的確に学校の状況を把握でき、明確な教育目標を設定（Plan）し、実際に取組を行い（Do）、それを評価（Check）し、修正（Action）する支援ツールの開発的研究第一段階にあたる論文である。学校づくりの可視化に目標分析の手法を導入し、先行研究等の知見から支援ツール作成のための仮の上位観点を作成している。
5「『基礎・基本習得の技能』－読解編－」	単著	平成23年6月	週刊教育PRO　No.22 P.26～P.27	国語科読むこと単元の指導について、基礎・基本に焦点を当てて述べた。「小学校国語科・読むこと目標分析試案」で述べている自動化できるまで育てておくべき事柄を具体的に述べている。それが、音読指導、漢字指導、語彙・話型・文型指導、あらすじ指導であり、それぞれについての具体的な指導方法を説明しているものである。
6「子どもが伸びる漢字指導」	単著	平成23年6月	日本国語教育学会編 月刊　国語教育研究 2011.6　No.470 P.40～P.41	国語科指導において確固たる指導法が未だ定着していない漢字指導について述べており、その意義は大きい。漢字は言葉の力の土台であり、語彙である。その指導方法を分解、意味、空書き（合成）という型式で指導することの重要性を具体的に述べているものである。語彙としての漢字を読むことも、書くことも使うこともできるために求められている指導のあり方を示している。
7「小学校国語科における『読む能力』育成のための目標分析案の構想―文学的な文章の場合―」	単著	平成23年12月	広島大学大学院教育学研究科紀要第二部(文化教育開発関連領域)第60号 P.77～P.86	鎌田(2009)で提案した「小学校国語科・読む能力目標分析試案」を、その後の研究成果を生かして学校現場に活用しやすくするために、その改訂版作成に取り組んだ論文である。改訂版では、読む能力とは何かという難問に対する提案として、読む能力を読書力と体験で構成し、その読解力を一貫した解釈を構成する能力としている。さらに、表の中に授業の構成や単元計画作成のポイント（文学的な文章）を入れ込む等の改訂を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8「『改訂版　小学校国語科・読む能力目標分析試案』の活用―――『注文の多い料理店』の場合―」	単著	平成 24 年 12 月	広島大学大学院教育学研究科紀要第二部（文化教育開発関連領域）第61号 P. 103～P. 112	この論文では、鎌田（2011）で提案した「改訂版　小学校国語科・読む能力目標分析試案」に修正を加え、「『改訂版　小学校国語科・読む能力目標分析試案』Ver.2（2012）」（以下「Ver.2」）を提案した。次に、学校現場がどのように「Ver.2」を活用すればよいのかということを「注文の多い料理店」を教材にして具体的に述べた。文学作品をどのように読み、解釈するのかを述べ、教師が一人の読者として作品を読み切ることの重要性を具体的に述べ、「Ver.2」を活用して単元目標に沿った単元指導計画作成、1 時間の授業構成のあり方を具体的に述べた。
9「イーザーの読者論再考―読むことの基礎理論として何を導き出すのか―」 （査読付）	単著	平成 25 年 12 月	広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部（文化教育開発関連領域第62号 P.　151～P. 160	イーザーの理論の長所についての紹介は多かったのに比べて、短所を確かめるための批判的検討はほとんどなされていないとの指摘もあるイーザーの読者論に対して、これを批判する論を検討、考察し、イーザーの読者論がもつ２つの問題（①「テクスト」による制限問題、②「内包された読者」問題）が、教育へと適用の可能性を示し、読むことの主観性と個別性を示していることを論じている。そして、読むことが自分を読むことであるということを述べている。
10「『人間教育』と教師の仕事―教師の自己実現をめざして―」 （査読付）	単著	平成 26 年 4 月	人間教育学会『人間教育学研究』 創刊号 P.37～P.46	この論文では、人間教育を実践しようとする教師の仕事と、その仕事を行う教師の自己実現についての考察を行っている。具体的には、二つの内容（一つ目は、人間教育を実践しようとする教師の仕事の特徴について、もう一つは、その仕事を行う教師の自己実現とは何で、それはどのように実現されていくのかということについて）を論じている。
11「読むことの学習指導における単元設計に関する研究」 （博士論文）	単著	平成 26 年 9 月	広島大学院	「読むこととは何か」を追究するために、イーザーの読者論を再検討し、「自分を読むこと」観を提示した。そのために、主観と客観の問題を考察し、「自分とは何か」という自己意識の問題について考察し、「自分を読むこと」観の内実を高めた。その上で、タキソノミー、改訂タキソノミー、キー・コンピテンシー、マルザーノ・タキソノミーといった能力観の枠組を目標分析試案としてとらえ、読む能力の目標分析試案を提示した。これらをふまえて、「小学校・国語科読むこと単元計画作成チェックリスト」の提示を行い、その実証実験に取り組んだ。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(その他) 「事典」 1『改訂実践教育評価事典』	共著	平成22年8月	文溪堂	学習指導要領改訂を受け、生きる力、確かな学力を子どもたちに育むため、目標分析を中心にした授業づくり、ＰＤＣＡサイクル、形としての目標準拠評価、働きとしての形成的評価を実現するため刊行された共著書。 B5判、全264頁 編著者：梶田叡一・加藤明 共著者：梶田叡一、加藤　明、長谷浩也、吉村希至、土田圭子、中島繁雄、石井雅幸、上之園公子、尾崎友美、松田智子、鎌田首治朗、勝見健史、金沢碧、有本昌弘、木下博義、古川治、猿田祐嗣、小倉康、立田慶裕、二瓶弘行、田中博史、松浦拓也、寺本貴啓、善野八千子、角屋重樹、米田豊、北川達夫、小楠徹、内田和寿、林義樹、菅千索、森敏昭、田中博之、川崎弘作 本人担当部分：「指導と評価の一体化、ＰＤＣＡ」(P.132-P.133)「診断的評価、形成的評価、診断的評価」（P.136-P.137）「目標分析」（P.148-P.149）「達成目標、向上目標、体験目標」(P.150-P.151）を単著。 本著の第4部教育評価の基礎知識において、教育評価の理論にとっても、共著書発刊の目的からしても重要な「指導と評価の一体化、ＰＤＣＡ」「診断的評価、形成的評価、診断的評価」「目標分析」「達成目標、向上目標、体験目標」の用語解説を担当した。生きる力、確かな学力育成を堅持し、分かりやすく、授業づくりに役立つ解説を述べた。
「学会発表」 1「読む能力の下位観点を考察する―目標と評価規準を明確にした単元計画づくり（国語科・読むこと）のために」	―	平成18年6月	平成18年度兵庫教育大学言語表現学会発表 （於：兵庫教育大学院）	目標と評価規準を明確にした単元計画づくり（国語科・読むこと）の方法論を研究するために、読む能力の下位観点にはどのような能力が考えられるのかを、W.イーザーの読者論、認知心理学、教育評価の理論、国語科教育学を基に考察し、目標分析の手法を活用して提案した。
2「小学校国語科・読むことの目標分析試案」	―	平成18年9月	第111回全国大学国語教育学会宮崎大会発表 （於：宮崎観光ホテル）	国語科教育、認知心理学、W.イーザーの読者論、教育評価の各理論を活用し、読むこととは何か、読む能力とは何かという問題の解明に取り組み、それを「小学校国語科・読むことの目標分析試案」の形で提案した。この時点では、読む能力を読書力と読解力とで構成している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3「小学校国語科・読むことの目標分析試案の実際――『ごんぎつね』を通した単元指導計画作成までのプロセス」	―	平成 19 年 11 月	第 113 回全国大学国語教育学会岡山大会発表（於：岡山大学）	「小学校国語科・読むことの目標分析試案」を実際の単元指導計画作成にどのようにして適用するのかという実際を、「ごんぎつね」を例に挙げて述べている。単元指導計画作成までのプロセスを具体的に提案している。宮崎学会以降の研究により、「小学校国語科・読むことの目標分析試案」は、読む能力を読書力として捉えている。
4「『読むこと』の授業のための目標分析試案 ―小学校国語科の場合―」	―	平成 26 年 11 月	第 127 回全国大学国語教育学会筑波大会発表（於：筑波大学）	ブルーム・タキソノミー、新しいタキソノミーが能力の枠組を提案していることを受け止め、国語科においては田近洵一、井上尚美の研究を継承し、複雑な読むことの能力観を目標分析試案の形で提示しようとしている。 科研費基盤（C）（平成26年度～28年度）「小学校国語科・読むことの単元計画作成チェックリスト開発に関する研究」の基礎研究にあたる。
5「『読むこと』の授業のための目標分析試案（2）－小学校国語科『読むこと』の授業モデル		平成 27 年 5 月	第 128 回全国大学国語教育学会兵庫大会発表（於：姫路）	「『読むこと』の授業のための目標分析試案―小学校国語科の場合―」を受け、「試案（2013）」を基に、その能力観を実際の授業にどう生かすのかを思考し、授業モデル、単元モデルを提案している。 科研費基盤（C）（平成 26 年度～28 年度）「小学校国語科・読むことの単元計画作成チェックリスト開発に関する研究」のチェックリスト作成のための基礎研究である。

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　善野　八千子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	学校・学級経営、生活科、教員の力量形成

教育上の能力に関する事項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ・リフレクションカードを活用した授業のサポート及びグループディスカッションの実施	平成 20 年 4 月～現在に至る	奈良教育大学　講師として担当の「初等教科教育法（生活）」(3 回生)（教職科目、3 年次配当、半期、必修 2 単位)、奈良学園大学　教授として担当の「人間教育開発力実践演習Ⅰ」（1 回生）（専門科目、1 年次配当、通年、選択 1 単位）において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなり、学生自身が毎回の自己の学修成果と課題を明確にできた。 グループディスカッションについては、初回は、ペアワークとし、徐々に 5～6 人グループで行った。テーマに応じた協同的な学びの姿が見られ、話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果からも「自分と違う意見や考えによって理解が深まった」等の学生の満足度がきわめて高かった。
	平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科の教授として担当の「教育学概論」(1 回生)（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、「教育制度論」(専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)、「教職実践演習」(専門科目、2 年次配当、半期、必修 1 単位）において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント及び A 評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。承認や賞賛の体験が乏しい学生にとって意欲の高まりが顕著に見られた。1 枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなることから、学生自身が自己の学習成果と課題を明確にすることができた。 グループディスカッションについては、少人数から徐々に 5～6 人グループで行った。話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果から「自分と違う意見や考えによって理解が深まった」等の意見が 7 割見られた。授業満足度は、全クラス 97%以上であった。
・毎回の復習テストを活用した学習の定着の工夫	平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科の教授として担当の専門科目、「教育制度論」（専門科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）において、学習の定着を図るために、毎回の講義導入において復習ミニテストを実施したところ、履修者の相当数において、当該科目の履修の前後を比較すると、復習の習慣化と学習の定着度が向上した。

・予習レポートの活用と授業設計	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科の教授として担当の専門科目、「教育学概論」(1回生)（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、予習習慣の定着のために毎回の予習レポート「子ども情報カード」を実施した。学生は、シラバスに関連した子どもに関するニュース及び自己の考えを記述してくる。毎回の講義の冒頭で発表させることで、学生同士の関心意欲が喚起できる。また、教員は学生の実態を把握し、配慮した授業設計を行うことができる。履修者の相当数において、予習の習慣化と学習課題に対する関心意欲の向上が見られた。
2　作成した教科書、教材		
・「学校評価を活かした学校改善の秘策」（再掲）	平成17年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「教育原理（平成20年3月まで)、教育学概論（平成20年4月から科目名変更)」(専門科目、1年次配当、半期、必修2単位)、において使用している。教員の資質向上のための学校改善の方策について、評価の運用及び実践事例の内容を示した。学生は、毎回の講義で10分間読解し、本時の目標に関わる章について、気づき及び疑問を発表し、教育の現状及びこれからの教育課題について意欲的な対話が可能になった。
・学校力・教師力を高める学校評価（再掲）	平成22年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「教育制度論」(専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、使用した。教育制度における全容から、とりわけ学校評価の目的及び信頼構築の有様と実践事例の内容を教育制度の視点から示した。学生は、理解の困難な制度についても、公教育における制度のや現代的課題に関心を深めた。また、具体的な学校現場の事例を通して理解した。
・小学校教科用図書「あたらしいせいかつ」	平成23年4月～現在に至る	平成23年度用、平成27年度用小学校生活科　教科用図書　採択された市町村立小学校及び私立小学校の第1学年・第2学年に於いて、使用されている。
・キャリア教育読本「コドモタチへの想い」（再掲）	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「キャリアデザイン演習」(専門科目、1年次配当、半期、選択1単位）において、使用した。就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。
・幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発（再掲）	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「教職実践演習」(専門科目、２年次配当、半期、必修1単位）において、使用した。幼児期から児童期に関わる教員の資質向上のために特に就学前後の課題や生活科の具体的事例について示した。学生は、これからの保育・教育の課題を検討し実践力向上につなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成24年9月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学　幼児教育学科　教授として担当の「キャリアデザイン演習Ⅱ」(専門科目、1年次配当、半期、選択1単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、教育保育現場の実際を知り、就業力向上へもつなげた。

３　教育上の能力に関する大学等の評価		
・奈良文化女子短期大学学長による評価	平成26年３月	当該教員は、短期大学幼児教育学科長として、9年間の教育歴を有している。企画力、実行力に優れており、永年にわたる教育現場及び教育行政での経験を活かし、体験的・参加型の授業を展開しており、学生の授業評価も非常に高い。 さらに、課外においても幼小接続WG合同研究会の代表として月例で６年間（平成26年３月末で55回実施）開催し、学生の質の向上と卒後教育及び現職教職員の合同研究の場として継続している。 日々の教育活動に加え、研究業績も積み重ね、「幼小連携のあり方」、「幼小接続カリキュラム」や「学校評価」について多数の講演や執筆の依頼があり、地域貢献及び社会貢献に寄与している。また、社会活動については、文部科学省委嘱事業として奈良市学校評価事業専門委員や大和郡山市幼稚園教育の改善・充実調査研究運営委員長、奈良市３０人学級指導法改善検討委員などを務め、現在も大阪府私立学校審議会委員、大阪府子ども会議会長代理、大和高田市子ども・子育て会議委員長など公的な委員として活躍している。 豊富な実務経験からそれを基礎として人間教育学部の構想段階から参画し、積極的に関与し重要な役割を担っている。 このような実務経験や専門知識は、奈良学園大学において、予定している授業科目を担当するために充分な教育上の能力を有しているものと評価する。
・奈良文化女子短期大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成26年３月	奈良文化女子短期大学において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると、担当科目授業の方法は、グループディスカッション、ロールプレイ、パフォーマンス評価を加えながら、体験的・参加型授業に努めている。教育学概論、キャリアデザイン演習、教育制度論、教職実践演習の担当教科において、学生の授業評価は全て97%以上である。毎回の復習ミニテスト及びリフレクションカードによるフィードバックを実施している。そのことによって、学生の学びの意欲向上や思考の連続に効果をもたらす工夫改善に努めている。また、学生理解に基づき、就職指導にかかる個別指導を随時、丁寧に行っている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
全国教育研究所連盟共同研究福島県教育センター	平成19年４月24日	教育研究所及び学校教育関係者を対象として、全国教育研究所連盟共同研究に資するための指導助言をした。
兵庫県北播磨地区小学校校長研修会講演の講師（於：会議室）	平成19年５月11日	北播磨地区小学校校長及び教育関係者を対象として、「元気が出る学校評価」と題して、評価を活かした学校経営について、講演した。
摂津市教育委員会教員研修スクール広場「未来」講演の講師（於：摂津市教育委員会会議室）	平成19年５月15日	摂津市における２年次教員を対象として、授業力アップ講座を年間５回担当した。
堺市立五個荘小学校学校協議会（於：堺市立五個荘小学校）	平成19年５月17日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
貝塚市教育フォーラムプロジェクト	平成19年５月22日	学校評価に関する教員意識調査分析とフォーラムの構想について検討・助言した。

奈良市教頭研修会	平成19年5月26日	元気が出る学校評価～文部科学省ガイドラインをどう活かすか～について講演した。
伊丹市学校評価検討委員会(委員長)	平成19年5月29日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
授業実践研究会岐阜フォーラム	平成19年6月3日	学校評価を活かして教師力・学校力を高めるについて講演した。
広島県福山市立内海小学校校内研修会	平成19年6月5日	生活科・総合的な学習における有効な指導や支援について講演した。
伊丹市第1回教育課題研修会	平成19年6月12日	学校力・教師力を高める学校評価について講演した。
明石市第1回ステップアップⅡ特別公開講座	平成19年6月19日	教師力を高める～学校評価を活かして～
日本生活科・総合的学習学会「ちば・旭大会」	平成19年6月23日	千葉県立旭農業高校「総合的な学習の時間の実践」指導助言
大阪教育大学附属池田小学校教科別協議会	平成19年6月27日	生活科分科会において、指導助言
岡山県園長等運営管理協議会	平成19年6月28日	幼稚園における学校評価の活用について講演した。
羽曳野市丹比小学校校内研修会	平成19年7月3日	羽曳野市挙育委員会学校評価研究指定校において、元気が出る学校評価について講演した。
奈良県学校評価研究会	平成19年7月10日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
奈良県市町村指導主事協議会研修	平成19年7月20日	奈良県市町村指導主事を対象に「元気が出る学校評価」と題して、講演した。
人間教育実践協議会「2007京都フォーラム」	平成19年7月29日	元気が出る学校評価～文部科学省ガイドラインをどう　活かすか～について講演した。
福井県坂井市教育講演会	平成19年5月29日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～
岡山県園長等運営管理協議会	平成19年6月28日	幼稚園における学校評価の活用について講演した。
羽曳野市丹比小学校校内研修会	平成19年7月3日	元気が出る学校評価について講演した。
奈良県学校評価研究会	平成19年7月10日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
奈良県市町村指導主事協議会研修	平成19年7月20日	元気が出る学校評価について講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成19年7月27日	「幼小中一貫基本計画策定会議」
人間教育実践協議会「2007京都フォーラム」	平成19年7月29日	元気が出る学校評価～文部科学省ガイドラインをどう活かすか～
福井県坂井市教育講演会	平成19年7月30日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
滋賀県幼小連携講座	平成19年7月31日	これからの幼小連携ー学びと育ちの連続ーについて講演した。
近江八幡市幼稚園教育研究会	平成19年8月2日	今大切にする幼稚園教育と教師の資質向上について講演した。

兵庫県加古川市　学校の活性化をめざす教育経営講座	平成19年8月3日	元気の出る学校づくり～学校力・授業力を高める学校評価を活かして～について講演した。
兵庫県多可町教職員研修会	平成19年8月6日	元気の出る学校づくり～学校力・授業力を高める学校評価を活かして～について講演した。
大阪府貝塚市教育フォーラム	平成19年8月8日	元気が出る授業・学校評価
福井県私立高等学校「学校評価」事業第3回実行委員会	平成19年8月9日	学校評価のあり方について講演した。
兵庫県国公立幼稚園長自主研修会	平成19年8月10日	園長としての管理能力育成演習について講演した。
明石市立大久保中学校校内研修	平成19年8月17日	地域との連携を図る一学校評価を活かして一について講演した。
兵庫県川西市主幹教諭研修会	平成19年8月20日	元気が出る学校づくり～学校力・授業力を高める学校評価を活かして～について講演した。
奈良県幼稚園長研修	平成19年8月24日	学校評価のあり方について講演した。
奈良県大和高田市立高田中学校校内研修	平成19年8月28日	地域との連携を図る一学校評価を活かして一について講演した。
第6回奈良市教育改革推進フォーラム	平成19年8月30日	幼小連携・地域連携のあり方について講演した。
第2回伊丹市学校評価検討委員会(委員長)	平成19年9月11日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
広島県福山市学校組織マネジメント研修	平成19年9月14日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
堺市立五箇荘小学校	平成19年9月25日	堺市学校協議会指定校の校内研修会において、外部評価について講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成19年9月20日	「幼小中一貫基本計画策定会議」第1回認定子ども園検討委員会
和歌山県事務職員研修	平成19年9月27日	学校評価を活かした元気な学校づくり一事務職員の役割一について講演した。
山口県美祢市学校評価推進委員会	平成19年10月11日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
山口県中学校長会秋季研修会	平成19年10月12日	学校力を高める学校評価について講演した。
明日香村立聖徳中学校校内研修	平成19年10月16日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
兵庫県多可町立八千代南小学校	平成19年10月24日	物語文指導及び事後研修会のありかた指導について講演した。
文部科学省推進事業広島県福山市立内海小学校教育研究会	平成19年10月26日	未来を拓く総合的な学習の時間の創造について講演した。
兵庫県加古川市教頭研修会	平成19年10月30日	学校力を高める学校評価について講演した。
静岡県御殿場市校長研修	平成19年11月2日	学校力・教師力を高める学校評価について講演した。

滋賀県長浜市幼稚園教育研究会	平成 19 年 11 月 6 日	これからの幼小連携ー育ちと学びの連続ーについて講演した。
和歌山県教育経営研修講座（管理職）	平成 19 年 11 月 16 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
兵庫県揖龍幼稚園教育研究会	平成 19 年 11 月 20 日	幼稚園力・教師力を高める学校評価について講演した。
大阪教育大学附属池田小学校教科別協議会	平成 19 年 11 月 30 日	研究発表会教科別協議会「生活科」分科会において、指導助言をした。
岐阜市教頭研修	平成 19 年 12 月 7 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 19 年 12 月 11 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」第 2 回認定子ども園検討委員会において、講演した。
奈良県高市郡校園長会研修	平成 19 年 12 月 14 日	これからの学校評価～学校力・授業力を高めるために～について、講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 20 年 1 月 18 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」第 3 回認定子ども園検討委員会において、講演した。
愛知県尾張小中学校評議員会	平成 20 年 1 月 22 日	学校力・授業力を高める学校評価～元気が出る学校づくりをめざして～について講演した。
広島県尾道市立原田小学校校内研修	平成 20 年 1 月 25 日	学校力・授業力を高める学校評価～元気が出る学校づくりをめざして～について講演した。
兵庫県西脇市立日野小学校校内研修	平成 20 年 1 月 18 日	学校力・授業力を高める学校評価～元気が出る学校づくりをめざして～について講演した。
神戸大学附属明石小学校校内研修	平成 20 年 2 月 8 日	評価を通して実践的社会人を育む単元を構築するシステム開発について講演した。
日本生活科総合的学習学会大阪シンポジウム	平成 20 年 2 月 10 日	これからの幼小連携～生活科を基軸とした育ちと学びの連続～について講演した。
山口県教育フォーラム	平成 20 年 2 月 11 日	学力向上をめざして～これからの学校教育～について講演した。
京都フォーラム２００８　IN　WINTER	平成 20 年 2 月 16 日	学校づくり・学校評価について講演した。
伊丹市学校評価検討委員会(委員長)	平成 20 年 2 月 13 日	伊丹市学校評価検討委員会(委員長)
奈良市幼稚園長主任研修会	平成 20 年 2 月 28 日	これからの幼小連携について講演した。
摂津市教職員授業力アップ研修	平成 20 年 2 月 29 日	初任者及び 2 年目教員を対象に、「今だからできる自分磨きーRV・PDCA マネジメントサイクルを活かしてー」について、講演した。
青森県東通村教育委員会教育専門家会議	平成 20 年 3 月 10 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」現地視察指導
青森県東通村教育委員会「幼小中一貫基本計画策定会議」全体会	平成 20 年 3 月 11 日	「幼小中一貫基本計画策定会議」指導助言
岡山県真庭市幼保合同研修	平成 20 年 3 月 22 日	これからの就学前教育～幼稚園と保育園のあり方とその連携～について講演した。
高槻市幼稚園長研修会	平成 20 年 4 月 25 日	信頼される幼稚園づくりのためにについて講演した。

愛知県蟹江町教職員研修会	平成20年5月1日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
奈良県葛城市新庄小学校区教職員研修会	平成20年5月2日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
静岡県管理職研修会（高等学校・特別支援校）	平成20年5月9日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
兵庫県新三田市幼小中教頭研修	平成20年5月15日	「校内研究活性化に向けて教頭・研究主任等の果たす役割」～元気な学校づくりのために～について講演した。
兵庫県高砂市立米田小学校内研修	平成20年5月16日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
静岡県管理職研修会（小・中学校）	平成20年5月20日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
岐阜授業実践フォーラム	平成20年6月1日	「学力向上と学校評価」～新教育課程をふまえて2008年はこう発信する～について講演した。
芦屋市立山手小学校内研修会	平成20年6月3日	これからの生活科について講演した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会指導助言	平成20年6月6日	評価を通して「実践的社会人」を育む単元を構築するシステムの開発「いっしょにどろだんごをつくろう」を通してについて講演した。
奈良学園幼稚園ＰＴＡ講演会	平成20年6月7日	幼稚園から小学校へ育ちと学びの連続について講演した。
大和郡山市幼稚園長研修会	平成20年6月10日	学校評価を生かした元気な幼稚園づくりについて講演した。
福山市立駅家小学校内研修会	平成20年6月13日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
御殿場市管理職研修会（小・中学校）	平成20年6月20日	これからの学校評価「活力ある学校づくり」のためにについて講演した。
福山市立内海小学校内研修会	平成20年6月24日	よく見・よく聴いて、考え、課題追求する子の育成～未来を拓く　総合的な学習の時間の創造～について講演した。
奈良市30人学級指導改善検討委員会	平成20年6月26日	30人学級指導改善について、講演した。
兵庫県管理職研修会（高等学校）	平成20年7月8日	教育活動の充実・改善をめざした学校評価について講演した。
大阪大学看護局教育委員会合同研修会	平成20年7月11日	指導の充実・改善をめざして「教育原理・教育方法」について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成20年7月15日	元気な学校づくり―学校評価を生かして―について講演した。
大阪大学看護局教育委員会合同研修会	平成20年7月18日	教育評価　成長促進指導の効果的な評価をめざしてについて講演した。
教育フォーラム in 東広島	平成20年7月21日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえてについて講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成20年7月25日	学校評価の必要性と目的～元気な学校づくりをめざして～について講演した。

福井県幼小連携研修会	平成20年7月28日	幼児期から児童期への育ちをつなぐ、豊かな教育の創造について講演した。
大和郡山市幼小連携研修会	平成20年7月29日	幼稚園教育と小学校教育をつなぐ～育ちと学びの連続～について講演した。
教職員対象幼児教育講座	平成20年8月1日	これからの幼児教育と小学校教育 ～脳の発達を促す遊びと学びの連続～について講演した。
奈良市幼小連携講座	平成20年8月4日	生活科の中での幼小連携について講演した。
西春日井地区学校運営研修会	平成20年8月5日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
新潟市生活科研究会	平成20年8月6日	「生活科の授業力」～育ちと学びの連続をふまえて～について講演した。
大淀町教職員研修会	平成20年8月8日	学校評価を活かして学校力・教師力を高める～やってよかった学校評価～について講演した。
御殿場市中堅教員研修会	平成20年8月9日	元気な学校づくり～学校経営の参加から参画へ～について講演した。
御殿場市幼保小中連携研修会	平成20年8月9日	幼児教育と小学校教育をつなぐ～育ちと学びの連続～について講演した。
大和郡山市管理職学校評価研修会	平成20年8月11日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
京都フォーラム	平成20年8月17日	「学力向上と学校評価」～新教育課程をふまえて2008年はこう発信する～　について講演した。
京丹後市管理職研修会	平成20年8月21日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
大和郡山市幼稚園教職員研修会	平成20年8月22日	学校評価を活かした元気な幼稚園づくりについて講演した。
伊丹市教職員研修会	平成20年8月25日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
明石市教頭研修会	平成20年8月26日	育ちと学びをつなぐ学校評価について講演した。
御所市教職員学校評価研修会	平成20年8月28日	評価で変わる学校改善への道筋 について講演した。
奈良市教育改革推進フォーラム	平成20年8月29日	幼児教育の改善と充実～30人学級の取組みを通して～について講演した。
奈良市教育改革推進フォーラム	平成20年8月29日	『幼児教育から小学校教育へ学びと育ちの連続』について講演した。
津市香海中学校区学校関係者評価研修会	平成20年9月2日	学校力・教師力を高める学校評価 について講演した。
兵庫県第三者評価訪問	平成20年9月5日	第三者評価者として訪問指導をした。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成20年9月9日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
生駒市教頭研修会	平成20年9月16日	学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。

東通村僻地教育研究会	平成20年9月25日	学校評価のあり方について講演した。
東通村幼小中一貫教育研究会	平成20年9月26日	幼児教育から義務教育へ　学びと育ちの連続について講演した。
津市東橋内中学校区研修会	平成20年9月30日	学校力･教師力を高める学校評価について講演した。
福井市小中学校校長課題別研修会	平成20年10月7日	新学習指導要領対応に向けた学校経営マネジメントと校長の役割について講演した。
福井県私立高等学校第三者評価訪問	平成20年10月9日	第三者評価者として訪問指導をした。
福井県私立高等学校第三者評価訪問	平成20年10月10日	第三者評価者として訪問指導をした。
摂津市味生小学校校内研究授業	平成20年10月14日	伝えあおう　思いを！高めあおう　学びを！～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
文部科学省推進事業広島県福山市立内海小学校教育研究会	平成20年10月17日	探求の力を育む総合的な学習の時間～新学習指導要領をふまえて～ について講演した。
摂津市スクール広場「未来」研修会	平成20年10月21日	子どもにつけたい力と教職員の力量形成～新学習指導要領の改訂をふまえて～について講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成20年10月24日	学校評価における自己評価の進め方～元気の出る学校づくりのために～について講演した。
奈良市30人学級指導改善検討委員会	平成20年10月28日	30人学級指導改善についてについて講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成20年10月30日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
東通村幼小中一貫教育小委員会	平成20年11月4日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
楽しい子育て講座	平成20年11月8日	「小学校に行くまでにしたい10の親子あそびと会話」について講演した。
御所市学校評価研修会	平成20年11月11日	新学習指導要領対応に向けた学校経営マネジメントと学校評価について講演した。
片桐幼稚園第三者評価訪問	平成20年11月27日	第三者評価者として訪問指導をした。
摂津市味生小学校研究発表会	平成20年11月28日	あたたかい心とことばのあふれる元気な学校づくり～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
富士市子育てシンポジウム	平成20年11月29日	「みんなで始めよう！ふじの子育て」について講演した。
和泉市生活科研究会	平成20年12月3日	「生活科の授業力」～育ちと学びの連続をふまえて～について講演した。
兵庫県第三者評価訪問	平成20年12月12日	訪問により第三者評価を実施した。
奈良県保幼小連携講座	平成20年12月25日	幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
岡山県総社市教職員研修会	平成21年1月13日	元気の出る学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。

教員免許更新講習会	平成21年1月18日	教職についての省察・教育政策の動向について講演した。
摂津市保幼小連携講座	平成21年1月20日	幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
JSコーポレーション社内研修	平成21年1月22日	これからの学校教育について講演した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会	平成21年1月23日	生活科分科会「かがみをつかってかたちあそびをしよう」授業リフレクションにおいて、指導助言した。
神戸大学附属明石小学校研究発表会「分科会」におけるこーで	平成21年1月23日	今、必要とされる学校のあり方子どもと教師がともに成長していく単元を構築するシステム「学校・保護者・地域・大学や関係機関などによる知の結集」について講演した。
御所市学校評価運営委員会	平成21年1月27日	次につながる学校評価のためにについて講演した。
西宮市教頭研修会	平成21年1月30日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
羽曳野市立丹比小学校シンポジウム	平成21年2月1日	次につながる学校評価のために～学校、保護者、地域の連携・協働を通して～について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成21年2月3日	幼稚園における学校評価のあり方について講演した。
東京都日野市教職員研修会	平成21年2月9日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
兵庫県第三者評価検討委員会	平成21年2月13日	訪問指導し、第三者評価を務めた。
静岡県磐田市立福田小学校内研修会	平成21年2月16日	学校力・教師力を高める学校評価～元気な学校づくりのために～について講演した。
伊丹学校評価運営委員会	平成21年2月17日	学校力・教師力を高める学校評価～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
子育て支援講座（ｼﾙﾊﾞｰ人材ｾﾝﾀｰ）	平成21年2月18日	子どもの育ちと学びの連続をめざして「小学校に行くまでにしたい子育てあそびと会話」について講演した。
東通村幼小中一貫教育小委員会	平成21年2月23日	認定子ども園：幼児教育と小学校教育をつなぐためにについて講演した。
長浜市幼稚園長研修会	平成21年2月24日	学校評価を生かした元気な幼稚園づくり～新幼稚園教育要領を踏まえて～について講演した。
広島県庄原市教職員研修会	平成21年2月26日	学校評価を活かした学校改善～新学習指導要領をふまえて～について講演した。
2008教育ソリューションフェア	平成21年2月28日	次につながる学校評価とは～学校力・教師力を高めるために～について講演した。
大和郡山市学校評価運営委員会	平成21年3月3日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
文部科学省幼稚園教育の評価改善充実検討委員会	平成21年3月9日	大和郡山市幼稚園における取組報告について講演した。
静岡県総合教育センター主催新任校長研修（小・中）講演（於：静岡県総合教育センター	平成21年5月1日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。

芦屋市立幼稚園教育研究会主催　幼稚園園教育研究会総会講演	平成21年5月12日	元気な幼稚園づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会 講演（於：片桐西幼稚園）	平成21年5月14日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
静岡県総合教育センター主催新任教頭研修（小・中）講演（於：静岡県総合教育センター	平成21年5月19日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県公立中学校長会主催　研修大会講演（於：クレイトンベイホテル）	平成21年5月22日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：片桐幼稚園）	平成21年5月26日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会 講演（於：昭和幼稚園）	平成21年5月29日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立「幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：平和幼稚園）	平成21年6月2日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市立幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：矢田幼稚園）	平成21年6月12日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
山梨県教育委員会主催　学校評価シンポジウム講演（於：山梨県総合教育センター）	平成21年6月16日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：郡山西幼稚園）	平成21年6月18日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会（於：治道幼稚園）	平成21年6月19日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山北幼稚園）	平成21年6月22日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
大和郡山市幼稚園における学校評価を活かしたカリュラム改善研修会講演（於：筒井幼稚園）	平成21年6月25日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
奈良県教育研究所主催　幼稚園経営研修講座講演（於：奈良県教育研究所）	平成21年7月1日	幼稚園における学校評価について講演した。
広島県福山市教育委員会主催　福山市教育支援事業指定校研究事業指導助言（福山市立内海小学校）	平成21年7月2日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
やまぐち総合教育支援センター主催　山口県幼稚園長研修講座講演（於：やまぐち総合教育支援センター）	平成21年7月3日	幼稚園における学校評価について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：矢田南幼稚園）	平成21年7月7日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。
島根県浜田市立金城中学校主催　教育講演会講演（於：浜田市立金城中学校）	平成21年7月12日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　幼稚園における学校評価を活かしたカリキュラム改善研修会講演（於：郡山南幼稚園）	平成21年7月13日	学校評価を活かした学校改善～具体的な改善策の発信をめざして～について講演した。

奈良県教育委員会主催　奈良県私立学校「学校評価」に関する研修会講演（於：奈良県立教育研修所）	平成21年7月14日	私立学校における学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県総合教育センター主催　広島県教職員マネジメント研修・10年経験者研修講演　（於：広島県総合教育センター）	平成21年7月24日	学校マネジメントと組織づくり～学校評価を活かして～について講演した。
川西市教育委員会主催　教育講演会講演（於：川西市文化会館）	平成21年7月28日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大阪市教育委員会主催　校内生活科研修会講演（於：大阪市立磯路小学校）	平成21年8月3日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
愛知県日進市教育研究会主催　教育諸問題研修会講演（於：日進市民会館）	平成21年8月5日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
福井市教育委員会主催　教職員課題研修会講演（於：福井県立大学）	平成21年8月6日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
平成21年度教員免許更新講習　選択「生活」（於：奈良教育大学）	平成21年8月8日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良県教育研究所主催　10年経験者研修講座講演（於：奈良県教育研究所）	平成21年8月1日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
文部科学省委嘱事業奈良市立六条小学校区保幼小連携委員会主催　保幼小連携研修会講演	平成21年8月18日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
堺市教育委員会主催　堺市教育講演会講演（於：堺市消費生活センター）	平成21年8月19日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良市教育委員会主催　第８回教育フォーラム講演（於：奈良市立飛鳥幼稚園）	平成21年8月21日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
御殿場市教育委員会主催　幼保小教職員合同研修会講演（於：御殿場市役所玉穂支所）	平成21年8月22日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
相生市教育委員会主催　学校園経営研修講座（於：相生市立総合福祉会館）	平成21年8月24日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
愛知県丹葉地方小中学校長会主催　学校評価研修会講演（於：犬山市福祉会館）	平成21年8月25日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
明石市教育研究所主催　明石市スーパーバイザー事業講演（於：明石市立高丘東幼稚園）	平成21年9月4日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
広島県海田町立教育委員会主催　授業力向上研修会講演（於：海田町立海田西中学校）	平成21年10月6日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
平成21年度教員免許更新講習　必修「教職についての省察」（於：奈良教育大学）	平成21年10月1日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市教育委員会主催　学校評価担者研修会講師（於：伊丹市総合教育センター）	平成21年10月27日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
三田市教育委員会主催　教育資質向上事業　学校評価に係る研修会講師	平成21年10月3日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　大和郡山市幼小連携合同研修会講演（於：同山市昭和幼稚園）	平成21年11月17日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
摂津市教育委員会主催　摂津市教育課程研究開発委嘱事業研究発表会全体会講演（於：摂津市立味生小学校）	平成21年11月2日	学校評価を活かした学校改善について講演した。

奈良市教育委員会主催　奈良市30人学級指導法改善委員会研究保育指導助言（於：奈良市立富雄北幼稚園）	平成21年11月19日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
岡山県教育委員会主催　園長等運営管理協議会講演（於：岡山県総合教育センター）	平成21年11月27日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市保健福祉部主催　奈良市公私立保育所職員研修会講演	平成21年12月1日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
高知市教育委員会主催　高知市立学校教頭研修会講演（於：アスパルこうち）	平成21年12月4日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
大和郡山市教育委員会主催　大和郡山市幼稚園長・教頭研修会講演（於：市民交流館）	平成21年12月17日	学校評価を活かした学校改善情報発信の在り方～について講演した。
福井県女性校長・教頭会主催　冬季研修会講演（於：ニューサンピア敦賀）	平成21年12月25日	評価を活かした学校改善～教員評価・学校評価～について講演した。
神奈川県厚木市教育委員会主催　厚木市立飯山小・小鮎小学校合同研修会講演	平成22年1月8日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
西宮市子育て支援センター主催　子育て支援研修会講演（於：西宮市子育て支援センター	平成22年1月15日	保幼小連携～遊びから学びへについて講演した。
奈良県指導主事会主催　幼稚園における学校評価研修会講演（於：奈良県立教育研究所）	平成22年1月19日	幼稚園における学校評価について講演した。
大和高田市教育委員会主催　教頭研修会講演	平成22年1月22日	学校評価を活かした学校改善～教頭に求められるもの～について講演した。
広島県三次市教育委員会主催　教務主任研修会講演	平成22年1月26日	学校評価を活かした学校改善～ミドルリーダーの役割について講演した。～
兵庫県立芦屋高等学校授業力向上委員会研修会講演（於：県立芦屋高等学校）	平成22年1月29日	授業力を高める～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県女性校長会主催　学校づくり研修会講演（於：ピュアリティまきび）	平成22年2月8日	元気な学校づくり～学校評価を活かした学校改善について講演した。
兵庫県市町村指導主事学校評価担当者研修会講演（於：兵庫県立研修所）	平成22年2月17日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市教育委員会主催　奈良市30人学級指導法改善委員会研究保育指導助言（於：古市人権文化センター）	平成22年2月23日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
名古屋市共生の会主催　ミドルリーダー育成研修会講演（於：メルパルク名古屋）	平成22年2月26日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
伊丹市公立私立幼稚園・小学校合同研究会　（於：スワンホール）	平成22年3月2日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
ERP　大阪フォーラム　（於：大阪国際交流センター）	平成22年5月2日	「ゆとり教育からの脱却」についてコーディネーターをした。
西播磨地区小学校校長会研修会（於：相生市総合福祉会館）	平成22年5月7日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
富士市立富士中学校区三校合同PTA講演会（於：富士市交流プラザ）	平成22年5月8日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三重県公立小中学校女性校長教頭会研修会(於三重県総合文化センター：)	平成22年5月25日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。

高知県所長・園長研修会(於：高知県教育センター)	平成22年6月11日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市30人学級指導法検討委員会(於:奈良市庁舎)	平成22年6月14日	30人学級を活かした指導の改善
和歌山県幼稚園保育所合同研修「初任者園長研修会(於：和歌山ビッグ愛)	平成22年6月15日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市幼稚園・小学校連携研修会(於：矢田コミニティ会館)	平成22年8月4日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
幼稚園・保育所と小学校連携促進事業夏季研修会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成22年8月5日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
天理市幼稚園教員研修会(於：天理市役所)	平成22年8月10日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
桜井市幼小中学校教職員研修会(於：桜井市中央公民館)	平成22年8月17日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
倉敷市公立幼稚園教職員研修会(於：くらしき健康福祉プラザ)	平成22年8月20日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市30人学級指導者研修会(於：奈良市庁舎)	平成22年8月23日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
滋賀県守山市幼小中学校教職員研修会(於：守山市民ホール)	平成22年8月27日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
豊野地区幼稚園長・指導主事研修会(於：池田市合同庁舎)	平成22年8月30日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成22年度PDCA研修Ⅱ(於：秋田県庁舎)	平成22年9月4日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：　ピュアリティまきび)	平成22年9月27日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
教育セミナー山陰2010　課題講演(於：鳥取県社会福祉人材研修センター)	平成22年10月2日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
葛城市立新庄北小学校附属幼稚園　幼小連携研修会(於新庄北小学校附属幼稚園：)	平成22年10月25日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三田市　第2回　幼・小・中学校教頭研修会(於：三田市総合文化センター)	平成22年10月26日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
学校経営品質向上研究会(於：関西生産性本部)	平成22年11月8日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市30人学級指導法検討委員会(於:奈良市庁舎)	平成22年11月9日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
平成22年度　岡山県国公立幼稚園長研修会(於：ピュアリティまきび)	平成22年11月26日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成22年度　岡山県ブロック公立小中学校副校長・教頭研修会(於：ロマン高原かよう総合会館)	平成22年11月30日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三次市主幹・教頭研修会(於：三次市)	平成22年12月14日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
明日香村人権教育研究会「子どもの学力保障」(於：明日香村立明日香幼稚園)	平成23年1月24日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。

平成 22 年度　学力の把握に関する研究指定校事業研究協議会(於：文部科学省)	平成 23 年 1 月 26 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
磯城郡小学校教育研究会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成 23 年 2 月 16 日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
第３回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 2 月 17 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
海田町新教育課程研修会(於：広島県安芸郡海田町ひまわりプラザ)	平成 23 年 2 月 18 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
姫路市異校種連携研修会(於：姫路市立勤労市民会館)	平成 23 年 5 月 13 日	よりよい保幼小連携の進め方 ～子どもの育ちと学びをつなぐ～について講演した。
平成 23 年度第１回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 6 月 2 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
兵庫県私立小学校学級経営研究会(於：甲南小学校)	平成 23 年 6 月 3 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級経営について講演した。
第 19 回岐阜授業実践フォーラム(於：岐阜羽島文化会館	平成 23 年 6 月 4 日	学校づくり部会助言
奈良市解放保育研究会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 7 月 12 日	元気な保育園づくりのために ～これからの保育者に求められる資質～について講演した。
平成 23 年度第２回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 7 月 26 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
岡山県国公立幼稚園教育研究会　備前支部研修会(於：岡山県加賀郡吉備中央町農業振興センター)	平成 23 年 7 月 29 日	元気の出る学校評価 ～マネジメントツールを生かして～について講演した。
福井県鯖江市小中学校学級経営研修講座(於：鯖江市文化の館)	平成 23 年 8 月 2 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級づくりについて講演した。
八尾市幼保小合同研修会(於：中河内府民センター)	平成 23 年 8 月 5 日	子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼保小連携による教育・保育を通して～について講演した。
兵庫県公立学校女性管理職研修会(於：ウェスティンホテル淡路)	平成 23 年 8 月 8 日	兵庫県公立学校女性管理職を対象に、「学校力・教師力を高める学校づくり」について講演した。
芦屋フォーラム学校づくり部会(於：兵庫県芦屋市立宮川小学校)	平成 23 年 8 月 12 日	育ちと学びをつなぐ学校づくり ～　知・徳・体を育てる　～について講演した。
第３回　滋賀県 10 年経験者研修会(於：滋賀県総合教育センター)	平成 23 年 8 月 23 日	「園における望ましい連携の在り方」 ～子どもの育ちと学びをつなぐために～について講演した。
愛知県豊川市　授業力向上研修会(於：愛知県豊川市　音羽文化ホール)	平成 23 年 8 月 25 日	これからの教師に求められる資質 ～授業力向上をめざして～について講演した。
兵庫県篠山市　主幹教諭研修会(於：兵庫県篠山市市役所庁舎)	平成 23 年 8 月 29 日	元気な学校づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：ピュアリティまきび)	平成 23 年 9 月 30 日	幼稚園における学校評価～マネジメントツール、コミュニケーションツールとしての活用～について講演した。
西宮市幼年教育研修(於：西宮市子育て総合センター)	平成 23 年 10 月 25 日	幼・保・小連携 ～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～につい

		て講演した。
敦賀フォーラム(於：プラザ萬象　大ホール)	平成 23 年 11 月 3 日	「学校・家庭・地域でつなぐ教育・共育・協育 ～敦賀の誇りと教育力を高める」～として、敦賀市教育委員会主催討論会登壇した。
奈良学園幼稚園園内研修会(於：奈良学園幼稚園)	平成 23 年 11 月 8 日	幼児期と小学校以降の教育 ～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
平成 23 年度第４回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年 11 月 14 日	「30 人学級」を活かした指導の改善
幼稚園経営研修講座(於：奈良県立教育研究所)	平成 23 年 11 月 29 日	教育課程編成の工夫と教職員の共通理解 ～育ちと学びをつなぐ園づくりのために～について講演した。
広島県三次市小中学校　校長研修会(於：みよしまちづくりセンター)	平成 23 年 12 月 6 日	育ちと学びをつなぐ学校づくり～マネジメントツールとしての学校評価を活かして～について講演した。
伊賀市教頭会研修(於：伊賀市教育研究センター)	平成 23 年 12 月 9 日	元気の出る学校づくり ～学校評価を活かして～について講演した。
大阪府私立幼稚園連盟　免許更新講習(於：大阪府私学教育文化会館)	平成 23 年 12 月 21 日	幼稚園をめぐる最新事情「幼稚園の信頼構築と改善に生かす学校評価と幼小連携」について講演した。
西宮市幼小連携研修・実践報告会(於：西宮市子育て総合センター)	平成 24 年 1 月 13 日	保幼小連携～実践への提言・助言～について講演した。
奈良文化女子短期大学付属幼稚園教員研修会(於：奈良文化女子短期大学付属幼稚園)	平成 24 年 1 月 17 日	幼稚園の信頼構築と改善に生かす 学校評価について講演した。
八尾市研究指定事業研修会(於：八尾市立東山本幼稚園)	平成 24 年 1 月 31 日	八尾市研究指定校園の教諭・指導主事等を対象に「つたえあい・ひびきあい・まなびあう　～幼小がつながって～」について講演した。
泉北３市１町幼稚園管理職研修(於：忠岡町シビックセンター（忠岡町役場)	平成 24 年 2 月 7 日	泉北３市１町（和泉市・泉大津市・高石市・忠岡町）幼稚園管理職を対象に「元気の出る幼稚園づくり」～幼稚園管理職のマネジメント力と年度末の検証～について講演した。
平成 23 年度第５回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 24 年 2 月 13 日	奈良市内幼稚園・小学校教諭等を対象に「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
猪名川町教頭・副主幹合同研修会(於：兵庫県猪名川町教育委員会室)	平成 24 年 2 月 16 日	猪名川町教頭・副主幹を対象に「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
久米田看護専門学校における特別講義(於：久米田看護専門学校)	平成 24 年 3 月 1 日	看護学生（１・２・３年生）を対象に、「評価を活かして自分を変える～活き活きスキルアップ、シェイプアップ、メイクアップ～」について講演
門真市私立幼稚園・保育園合同研修会(於：門真市仙亭会議室)	平成 24 年 3 月 1 日	門真市私立幼稚園・保育園の理事長・園長等を対象に、幼小連携～育ちと学びをつなぐ学校園づくり～について講演
北葛城郡広陵町幼稚園教員の資質向上にかかる講演の講師(於：北葛城郡広陵町総合福祉会館「さわやかホール」)	平成 24 年 5 月 2 日	北葛城郡幼稚園教育研究会会員を対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造」について講演
敦賀っ子教育審議会にかかる「学び育み委員会」「子どもサポート委員会」合同開催　委員として講話(於：敦賀市立図書館　研修室)	平成 24 年 5 月 15 日	敦賀っ子教育審議会にかかる「子どもサポート委員会」委員を対象に「学びの基礎力」をもとに今後の方向性を提案

桜井市「第２回　子育てセミナー」講師(於：桜井市立中央公民館)	平成24年５月25日	桜井市就学前の幼児とその保護者対象に「第２回子育てセミナー」　において「遊びから学びへ～幼児教育と小学校教育の接続」について講演
平成24年度　西日本私立小学校教員研修会　講師(於：追手門学院小学校)	平成24年５月25日	西日本私立小学校教員を対象として「学級経営分科会」において、「子どもと保護者と教師が育つ学級経営」について講演
兵庫県私立小学校連合会研修会講師 モラル教育の公開授業　指導講演(於：甲南小学校)	平成24年６月1日	兵庫県私立小学校学級経営部会教員を対象として「モラル・マナー・ルールを通して、公開授業　指導講演
第20回授業実践フォーラム　教育課題講座の講師(於：岐阜県羽島市文化センター)	平成24年６月2日	初任者から経験者まで全国から参加の学級担任及び管理職等を対象に「学級づくりの諸課題～子どもと保護者と教師が育つ学級経営～」について講演
三田市教育委員会主催 三田市立保幼小・中・連携推進にかかる研修会　講師(於：有馬富士自然学習センター)	平成24年６月19日	三田市内の小・中校長または教頭、保育所長・私立幼稚園長または教諭　50名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小・中・連携」について講演
第１回宝塚市立小・中・特別支援学校　校長研修会講師(於：宝塚市立教育総合センター)	平成24年６月22日	宝塚市立小・中・特別支援学校　校長等30人を対象に、「人材育成へのマネジメント～　学校改善へのリーダーシップ　～」について講演
天理市教育委員会主催　天理市内保・幼・小・中の連携推進にかかる研修会　講師(於：天理市教育総合センター)	平成24年６月29日	天理市内保・幼・小・中の校園所長２５名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保・幼・小連携」について講演
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成24年７月3日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の形態」について講義
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成24年７月4日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の方法」について講義
全国幼児教育研究協会 主催　中国地区岡山支部研修会　講師（於：岡山衛生会館　三木記念ホール）	平成24年７月7日	中国地区岡山県の幼稚園長・教諭・保育所長・保育士・大学関係者など300名を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かして～」の講演
鳴門教育大学大学院　特別講義(於：鳴門教育大学)	平成24年７月13日	鳴門教育大学大学院授業科目「学習指導と学習評価」及び学部授業科目「教育評価論」における特別講義
平成24年度奈良市「30人学級」指導者研修会　講師　（於：奈良市庁舎　中央棟６階　正庁）	平成24年７月24日	奈良市立幼稚園・小学校教員を対象に『奈良市小・中学校学力・学習調査の結果から見えてくる「30人学級」での効果的指導法』について講演
福井県丹生郡学校教育研究会主催　丹生郡教育講演会　講師（於：越前陶芸村文化交流会館）	平成24年７月26日	福井県丹生郡内小中学校教職員150名を対象に「育ちと学びをつなぐ学校づくり　授業づくり」について講演した。
第３回門真市一貫教育課程研修会　講師（於：門真市教育センター）	平成24年７月27日	門真市立幼小中学校教員を対象に、「就学前と義務教育の連携を深めるために」について講演した。
敦賀市教育委員会主催　敦賀市ミドルリーダー研修会講師（於：敦賀市立図書館）	平成24年８月7日	敦賀市ミドルリーダー40名を対象に、「教員の質の向上～信頼構築のためのスキルアップ、ブラッシュアップ、メイクアップ～」と題して講演
伊賀市教育センター主催　平成24年度伊賀市教育センター研修講座（於：伊賀市教育センター）	平成24年８月10日	伊賀市小中学校及び幼稚園教員４０名を対象として、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」と題して講演

和歌山県福祉保健部主催　平成24年度幼稚園・保育所関係職員合同研修会　講師　（於：和歌山北コミュニティセンター）	平成24年8月20日	公・私立幼稚園の園長及び教員、公・私立保育所の所長及び保育士、認定子ども園の園長及び職員、公・私立小学校の校長及び教員、各市町村教育委員会指導主事、各市町村保育行政担当者240人対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐために～」講演
社団法人　大阪府私立幼稚園連盟主催　免許更新更新講習講師　（於：大阪私学教育文化会館）	平成24年8月22日	大阪府私立幼稚園教員120名を対象に、免許更新更新【必修】講習を担当。「チーム保育に学校評価を取り入れ、小学校につないでいくために」について講義
名古屋市教育委員会指定校事業において、名古屋市立大高南小学校研修会　講師	平成24年8月27日	名古屋市立大高南小学校教員を対象に、「ポジティブプロパガンダを創り出す学校評価」について講演・演習
岡山県教育委員会主催の園長等運営管理協議会講師（於：ピュアリティまきび）	平成24年9月24日	国公立私立幼稚園長を対象に、「幼稚園における学校評価」について講演
奈良市教育委員会主催の30人学級指導法検討委員会において、指導助言（於：奈良市庁舎）	平成24年10月2日	奈良市幼小教員を対象に、「第2回30人学級指導法検討委員会」に委員長として指導助言
三田市教育委員会主催の校園長会及び教育委員等研修会　講師（於：三田市消防本部会議室）	平成24年10月3日	三田市立幼小中校園長、教育委員、指導主事希望する市内私立幼稚園長または公私立保育所長等50名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼・小・中連携」について、講演
大阪私立幼稚園連盟青年振興部主催の研修会　講師（於：大阪私学教育文化会館）	平成24年10月9日	大阪私立幼稚園青年振興部教職員を対象に「学校評価と幼小連携」について講演
長岡京市教育委員会主催の保幼・小・中連携会議研修会　講師（於：長岡京市立図書館大会議室）	平成24年10月26日	長岡京市内保育園・保育所・幼稚園・小学校の教職員等70名を対象に、「発達と学びの連続性を踏まえた幼児期と児童期の接続カリキュラムづくりについて」、講演
岡山県保育協議会主催　保育研究会　講師（於：JA岡山7階ホール）	平成24年10月30日	県内保育所関係者・職員等240名を対象に、「元気の出る保育園づくり～保育の質を高める自己評価を活かして～」について講演
八尾市教育委員会主催の研究指定園　園内研修会講師（於：八尾市立東山本幼稚園(研究指定園)	平成24年11月5日	八尾市幼稚園園長・教諭及び小学校校長・教員並びに指導主事を対象に、「園内保育」について指導助言
福井市教育委員会主催の平成24年度福井市公立幼稚園保育研究会　講師（於：福井東郷公民館）	平成24年11月10日	福井市内公立幼稚園40名小学校教職員及び保育士を対象に、「幼児教育と小学校教育の連携・接続に向けて」について講演
第7回全国高等学校保育教育研究大会　講師（於：千里阪急ホテル）	平成24年11月16日	全国高等学校保育コース担当者等150名を対象に、「生きる力を培う保育者の育成～育ちと学びをつなぐために～」と題して基調講演
生駒市立教育委員会研究発表会　講師（於：生駒市立壱分幼稚園）	平成24年11月20日	幼稚園教諭参加者82名、保育園3名、小学校教諭５名（壱分小1年担任）中学校教諭,高等学校教諭を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校、中学校、高等学校との交流から～」について記念講演。
日本保育協会主催の大阪支部女性部研修会講師（於：薬業年金会館）	平成24年11月26日	日本保育協会大阪支部の保育士90名を対象に、「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐ～」について講演
大阪保育部会北大阪ブロック会主催の年末研修会講師。　（於：ホテル・アゴーラ大阪守口　）	平成24年12月3日	会員園の管理職80名を対象に「育ちと学びをつなぐ保小連携」について講演
有田市教育委員会主催の「実効性の高い学校評価・情報提供の充実・改善に向けた取組」にかかる研修会　講師。　（於：有田市橘家）	平成24年12月4日	有田市立小中学校教員等80名を対象に「学校改善につながる学校評価にするために」について講演

紀の川市教育委員会主催の「豊かな学びと育ちをつなぐ保幼小合同研修会」講師。（於：紀の川市立安楽川保育所）	平成25年1月22日	紀の川市立保育所、私立幼稚園、紀の川市立小学校　園長・校長・教頭・教職員等　約70名を対象に、「遊びから学びへ　育ちをつなぐ生活科」について講演
宝塚市教育委員会主催の「宝塚市立学校教頭研修会」講師（於：宝塚市立教育総合センター）	平成25年1月29日	宝塚市立学校教頭24名をを対象に、「学校力改善の秘策～元気の出る学校づくりのために」について講話と演習
奈良市教育委員会主催の平成24年度奈良市30人学級指導法検討委員会に委員長として出席。（於：奈良市庁舎）	平成25年2月8日	奈良市30人学級指導法検討委員を対象に最終報告及び「30人学級」での期待できる効果についての集計結果検討などについて指導助言をした。
奈良文化女子短期大学幼小接続フォーラムの企画及び総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成25年2月24日	幼小接続フォーラムの参加者（保育士・幼稚園教諭、小学校教諭及び管理職、教育委員会、教育関連企業等139名を対象に「幼児教育と小学校以降の育ちと学びをつなぐ」について講演
敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校校内研修会の講師。（於：敦賀南小学校）	平成25年2月26日	敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校教職員25名を対象に、「元気の出る学校づくり～家庭・学校・地域をつないで～」について講演
阪南市教頭会主催の小中学校教頭会の講師（於：阪南市商工会館）	平成25年2月28日	阪南市立小中学校の教頭等16名を対象に、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
社会福祉法人成光苑主催の7ヶ園合同研修会の講師（於：ホテル阪急エキスポパーク）	平成25年3月26日	社会福祉法人成光苑の理事、園長、保育者等120名を対象に「幼保小の連携」について講演
大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習会【必修】の講師（於：エル・おおさか（大阪府立労働センター））	平成25年8月6日	大阪府私立幼稚園免許状更新講習者を対象に免許更新講習【必修】を担当。
京都府教育委員会主催の平成25年度「保育技術専門講座Ⅰ」及び「新規採用者研修『幼稚園教諭２』講座」の講師（於：京都府教育センター）	平成25年8月8日	教諭（幼稚園及び特別支援学校の幼稚部　国立・私立を含む）90名を対象に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」について、講演及び演習。
奈良市教育委員会主催の平成25年度第1回「30人学級」指導者実践交流会の講師（於：奈良市教育センター）	平成25年8月12日	奈良市内幼稚園教諭及び小学校教員等を対象に指導助言及び講演。
安堵町教育委員会主催の夏季職員研修の講師（於：安堵町立中学校会議室）	平成25年8月13日	安堵町中学校小学校教職員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい連携・接続のあり方～」について講演。
丹波市教育委員会主催の丹波市小学校長会研修会の講師（於：丹波市山南住民センター）	平成25年8月27日	丹波市小学校校長25名を対象に「元気の出る学校づくり」について講演。
第2回高校と大学の連携フォーラム in 大阪のパネルディスカッション、コーディネータ　（於：内田洋行セミナールール）	平成25年8月31日	大阪府及び奈良県内高等学校関係者、教育関係者120名を対象に「日本の教師を育てる～教育三都物語～」について、パネルディスカッションにおいて、コーディネータ
愛知県教職員組合主催の第63次教育研究愛知研修会記念講演の講師。（於：愛知県産業労働センター（ウインクあいち））	平成25年10月19日	市町村教育長・愛知県小中学校長役員・PTA代表・教員代表等450名を対象に「子どもたちの健やかな成長をめざして～力と夢を育てる地域ぐるみの学校づくり～」をテーマに記念講演。
鳥取県中部委員会主催の平成25年度鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士等の合同研修会の講師（於：倉吉未来中心センター）	平成25年10月30日	鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士名を対象に、「元気の出る園づくり～園評価を活かして」をテーマに記念講演。
愛知県知多郡武豊町教育委員会主催の教育講演会の講師（於：武豊町立武豊中学校体育館）	平成25年11月22日	武豊町６小中学校教職員を対象に「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成25年11月29日	大阪市私立幼稚園連合会、幼稚園教諭を対象に「幼小連携」をテーマに講演
久米田看護専門学校主催の講師会の講師（於：社会医療法人　生長会　府中病院　セミナーホール）	平成25年11月30日	実習指導者、専任教員、非常勤講師他60名を対象として、「学生・教員・学校が輝く教育評価」をテーマに講演

尾張地区女性役職会主催の研修会の講師（於：名古屋国際会議場）	平成 25 年 12 月 15 日	尾張地区女性役職会研修会参加者 450 名を対象として、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校研修会の講師（於：堺市立浜寺石津小学校）	平成 26 年 2 月 7 日	日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校教職員を対象に、第三者評価をふまえた総括会として、「未来を切り拓く子どもを育てる―日本初等理科教育研究会堺大会での成果と課題―」と題して講演
東海市立教員研修センターTEC21 主催の東海市立教員研修の講師（於：東海市立文化センター）	平成 26 年 2 月 7 日	東海市立小中学校教員 60 名を対象として、「元気の出る学校づくり」をテーマに講演。
奈良文化女子短期大学第 2 回幼小接続フォーラムの総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成 26 年 3 月 2 日	保幼小教職員・教育関係者等 120 名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに総括講演。
鳥取県東部地区幼稚園等の教員及び保育士の合同研修会 講師（於：鳥取県立福祉人材研修センター）	平成 26 年 5 月 14 日	保幼小教職員・教育関係者等 200 名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会の講師	平成 26 年 6 月 14 日	大阪府立高等学校第７ブロックＰＴＡ連絡協議会主催のＰＴＡ総会講演会において、保護者・校長・教頭・教員 150 名を対象に「高校生活をどう過ごさせるか」をテーマに講演
人間教育学会「学校間接続分科会」の講師	平成 26 年 8 月 4 日	人間教育学会「学校間接続分科会」において、
三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会の講師（於：愛知県岡崎市民会館　甲山会館）	平成 26 年 8 月 5 日	三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会において、小中教員 250 名を対象に「力と夢を育てる学校づくり・授業づくり～総合的な学習を通して」をテーマに講演。
阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会の講師（於：阿久比町勤労福祉センター・エスペランス丸山)）	平成 26 年 8 月 6 日	阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会「教育講演会」において、小中教職員 200 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会の講師（於：ホテルモントレ　ラ・スール）	平成 26 年 8 月 21 日	日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会において、小学校教員 80 名を対象に「元気の出る学級づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して」をテーマに講演。
豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会の講師（於：アクア文化ホール）	平成 26 年 8 月 28 日	豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会において、公私立小学校、幼稚園、公立・民間保育園、児童発達支援センター、認定こども園、所属長及び教職員 180 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい幼保小連携・接続のあり方～」をテーマに講演。
和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会の講師（於：和泉市立北池田小学校）	平成 26 年 8 月 29 日	和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会において、教職員 30 名を対象に「元気な学校づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して～」をテーマに講演
寝屋川市教育委員会主催の研修会の講師（於：寝屋川市立北幼稚園）	平成 26 年 9 月 17 日	寝屋川市教育委員会主催の研修会において、小学校教員、公私立幼稚園教諭・保育士 100 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前後の接続を中心に～」をテーマに講演。
日本精神看護協会主催の看護実習指導者の資格取得の講師（於：日精看　京都研修センター）	平成 26 年 10 月 21・22 日	看護実習指導者の資格取得を目指すもの 80 名を対象に、教育方法研修会における講師
神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成 26 年 11 月 10 日	神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会において、公私立幼稚園教諭 150 名を対象に「元気の出る園づくり～子どもの育ちと学びをつなぐ～」をテーマに講演。

沖縄県庁主催の平成 26 年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成 26 年 11 月 17 日	沖縄県庁主催の平成 26 年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会において、公立、公私立幼稚園長、教諭・市村教育委員会指導主事、宮古島市教育研究所指導主事を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かした保育改善を通して～」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 26 年 12 月 3 日	大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会において、私立幼稚園教諭 80 名を対象に「元気の出る園づくり～どもの育ちと学びをつな～」をテーマに講演。
大東市主催の保幼小研修会の講師（於：大東市民会館）	平成 27 年 1 月 27 日	大東市主催の保幼小研修会において保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、園長、行政等 300 名対象として、「育ちと学びをつなぐ保幼小連携」をテーマに講演。
第 58 回大阪府私立幼稚園教育研究大会（免許更新講習）の講師（於：大阪国際会議場（グランキューブ大阪）	平成 27 年 3 月 26 日	大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習において、大阪府私立幼稚園・園長・教職員，近畿地区私立幼稚園教諭 100 名を対象に「幼稚園の信頼構築と改善～学校評価と幼小接続・連携をもとに～」について、講義を担当。
5　その他		
・奈良市 30 人学級指導法改善検討委員会	平成 20 年 6 月～平成 25 年 3 月	奈良市における幼稚園・小学校の委員に対する 30 人学級指導法改善に関する指導助言及び研究のまとめの監修、並びに夏期研修会の講師を務めた。
・国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定校事業企画委員	平成 21 年 5 月～平成 22 年 7 月	総合的学習と生活科の関連を中心に、指定校に対して、指導助言をした。
・大阪府私立学校審議会委員	平成 22 年 7 月～現在に至る	大阪府内私立学校にかかる審議事項を検討した。
・大阪府子ども施策審議会委員	平成 25 年 6 月～現在に至る	大阪府子ども施策にかかる審議事項を委員長代理として検討した。
・大和高田市子ども子育て会議委員	平成 25 年 6 月～現在に至る	大和高田市子ども子育てにかかる審議事項を会長として検討した。
・大阪府行政評価審議委員	平成 26 年 6 月～現在に至る	大阪府教育施策にかかる審議事項を委員として検討した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　項	年月日	概　　要
１　資格、免許 (1)　小学校教諭２級普通免許状 (2)　小学校教諭１級普通免許状 (3)　修士（学術）	 昭和50年３月 平成３年11月 平成16年３月	 大阪府教育委員会　昭４９小２普第１６０１号 大阪府教育委員会　平３小１普第５０７号 大阪教育大学大学院　第３５０６号 論文題目「学校教育自己診断」を活かした学校改善の研究
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 なし		
４　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １.学校評価を活かした学校改善の秘策－汗かく、字を書く、恥をかく－	単著	平成 16 年 8 月 平成 22 年 2 月 第 5 版	教育出版	学校経営の実態と改善方策について、自身の長年の教職経験と 4 年間の管理職経験、現職研修担当指導主事の経験をもとに綴った学校を元気づける方策を論述した。学校評価の基礎基本、これから求められる学校評価、大阪府教育委員会の「学校教育自己診断」の活かし方について、実態を読み解き、学校に課題共有や問題展開の実感、信頼感によって、「学校教育自己診断」は頼りがいのあるツールとなることを示した。第 1～7 章の構成において、学校経営・学級経営の基本を説いた。今、求められる学校評価のあり方と課題について今後、教育に関わる者へも当事者意識の啓発となる具体的実践例を提示した。 A5 版　全 209 頁
２．企画・立案・運営に役立つ　初任者研修マニュアル	共著	平成 17 年 9 月	ぎょうせい	団塊の世代の退職を迎え、新任教員の大量採用が始まった時代において、教育課題の変化とともに内容の見直しが求められる初任者研究を、企画・立案・運営する立場で具体的にまとめた。 A5 版　全 223 頁 編者：高倉翔・八尾坂修 共著者：浅井英雄、伊藤啓二、浦部利明、及川芙美子、川満順二、倉本哲男、佐々木正峰、佐藤真、善野八千子、高倉翔、田上稔、玉井康之、千々布敏弥 、西川敏之、橋本由愛子、増田健太郎、宮崎英憲、八尾坂修、山崎保寿 本人担当部分:第 5 章初任者研修の実際　第 3 節 4 教材研究の方法と実際・5 指導技術・6 師範授業参観　144～155 頁を単著。 初任者研修の現状と課題などを明らかにしながら、初任者研修の実施責任者である教育委員会・教育センターなど、及び平成１７年度から全面実施されている拠点校指導教員・校内指導教員を含む校内研修担当者が、「新しい時代の初任者研修」の構築を目指しつつ、主体的に「初任者研修の企画・立案・運営」を行うに際しての「役立つ事例」を提供した。大学と連携したゼミナール形式の実践的な初任者研修の有効性も論じた。
３．学校力・教師力を高める学校評価	単著	平成 19 年 8 月	明治図書	今日の社会的要請と学校の責任を説明し、学校改善に生かす学校評価の基本として RV・PDCA サイクルをふまえた評価結果の生かし方を具体的事例をふまえて論考した。また、改善策チェックカード自己評価書・外部評価書作成のポイントと留意点について提示した。具体的な実践校のフィールドリサーチに基づき、「サンキューカード」「あいさつ運動」の実際について、地域との連携のあり方について、学校が教育目標を明確にして評価に活かすプロセスについても考察した。 A5 版　全 128 頁

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．教育フォーラム 40 教師という道“教師バッシング”を乗り越えて	共著	平成 19 年 8 月	金子書房	制度改革と世代交代のうねりの中、高まり続ける世間の要求にもまれながらも日々の実践に邁進する現役教師のために、今こそ必要な心得と資質向上に役立つ示唆を提供した。教師として不可欠な「使命感」と「職務遂行力」、現在の教師は大丈夫か、「師道」の再確認及びまず「師道」の再興を説いた。 A5 版　全 140 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤明、浅田匡、角田元良、寺崎千秋、陣川桂三、中山京子、善野八千子 本人担当部分：特別寄稿「学校評価を活かした幼小連携」113～125 頁を単著。 学校評価を活かした幼小連携について、カリキュラム、教師・学校の質の向上をめざして論じた。子どもの発達と学びの連続性の確保を願い、幼児教育と小学校教育との段差を解消するためにも学校評価が子どもの育ちと学びの連続を保障するツールとして活用していく方法を「カリキュラムの質の向上と幼小連」「教師力向上と幼小連携」「学校力向上と幼小連携」の点から示した。さらに、教師力を高める実践研究のあり方及び実践研究の手順・教育課程全体を視野に入れての課題の設定や教科の指導力を高める学校評価の方法について論じた。
５.グローバル教育の理論と実践	共著	平成 19 年 9 月	教育開発研究所	「グローバル教育」の理論と実践を，学会創立 10 周年を機に，総力を挙げて体系的に整理・集大成した。2008 年改訂新学習指導要領でも強く求められる“グローバル教育の新しい方向性”を示唆した。解説は，入門・概論テキストとして活用できるように論じた。 A5 版　全 232 頁 共著者：魚住忠久、宮崎正勝、佐藤有、山崎宏、今谷順重、石坂和夫、木村一子、金子邦秀、宮本光雄、西村公孝、浅沼茂、吉村功太郎、加藤幸次、栗原久、猪瀬武則、佐藤幸也、宮原悟、岩崎裕保、宮原悟、久野弘幸、森茂岳雄、六角英彰、臼井良雄、多田孝志、山光春、鹿野敬文、藤原孝章、疋田晴敬、戸田清子、岡昌春、松永博司、谷口育史、桑原敏典、善野八千子、鴛原進、土屋武志、大橋直樹、寺林民子、伊藤裕康、川与志夫、中山博夫、本多千明、鈴木武嗣、生野桂子、三輪昭子、山北淳、中島常彦、辻本千鶴子、阿部信太郎、米田伸次、中島久枝、鈴木正幸 本人担当部分：第 9 章グローバル教育における評価活動　第 3 節「自己評価・相互評価・指導的評価」　92～104 頁を単著。 自己評価・相互評価・指導的評価について、学校評価項目の一部が「教育課程の評価」を例に目標と指導と評価の一体化をすすめるマネジメントサイクルを示した。グローバル教育の評価としては、人権尊重、市民としての資質、見方考え方感じ方コミュニケーション能力、価値観、世界観、判断力、行動力等の力がどれだけついたかという到達目標に準拠して、総括的・形成的評価をすすめるために、自己評価と相互評価を生かした事例について述べた。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６．教育フォーラム 41 新しい学習指導要領－カリキュラム改革の理念と課題－	共著	平成 20 年 2 月	金子書房	子どもたちの学力低下などの状況から学校教育の指針となる学習指導要領が生まれ変わることをふまえ、今までの学習指導要領における教育の問題を洗い出し、新たなカリキュラム改革が目指す理念と課題を明確にした。その上で、各教科の教育はどのように進められるべきか、小学校古典の学習、授業研究のあり方、言葉の力、特色ある教育課程などについても考察した。子どもたち一人ひとりに「確かな学力」に基づく「生きる力」を育てるため、いま、何をすべきか。学校現場で奮闘する教師の方々のよりどころとなる考えを提示した。 A5 版　全 168 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一 加藤明、浅田匡、二瓶弘行、硲茂樹、田中博史、矢野英明、直山木綿子、松田智子、上月敏子、勝見健史、鎌田首治朗 善野八千子 本人担当部分：第 13 章「特色ある教育課程の編成のために―学校評価の意義―」132～144 頁を単著。 特色ある教育課程の編成のための学校評価の意義について論じた。学習指導要領で改訂された内容の実施、授業の１単位時間の運用や時間割の弾力的な編成等を各学校で責任をもって創意工夫していくこと、開かれた学校，特色ある学校づくりの観点から，家庭や地域社会との連携を積極的に図りながら，教育程編成のための理論と実践を結びつけ学校評価システムを確立の重要性を説いた。特色ある教育課程編成のための学校評価システム及び学習指導要領改訂と学校評価の項目の見直しについて、新たな知見を示した。
７.教員免許更新ガイドブック－基準の講義内容と履修－	共著	平成 21 年 1 月	明治図書	教員免許更新ガイドブックとして、基準の講義内容及び履修の手引きとなるよう、教員免許更新 30 時間の講義内容を提示した。教員免許更新=講義内容(教職についての省察、子どもの変化についての理解)、 教員免許更新=カリキュラム作成基準(踏まえておくべきこと、カリキュラム作成上の留意点、教員免許更新=試験問題予想(教職についての省察、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力についての理解に関する事項等を提示。 A5 版　全 272 頁 編著：山極隆、千々布敏弥 共著者： 及川芙美子、善野八千子、大竹晋吾、佐藤敬子、嶋崎政男、平山諭、小島宏、陣川桂三、高木展郎、佐藤晴雄、齋藤勉、押谷由夫、本村一宏、牟田尚敏、倉本哲男、山極隆、大野裕己、久米昭宏、元兼正浩、狩野浩二 本人担当部分：第 1 章講義内容　１節教職についての省察（２）専門職たる教員の役割について、22～32 頁を単著。 専門職として求められることについて理解を深化させ、受講後には個々の教員の実践的指導力の育成が図られる研修効果をめざして論じた。さらに実践的指導力を高めるため、実践の構造化や臨床的な実証研究の構築の必要性を説いた。すべての教員が受講する必修内容としての「教育の最新事情に関する事項」を中心に内容を構成し、主として受講する教員に自ら学ぶ手掛かりをまとめた。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．キャリア教育読本「コドモタチへの想い」	共著	平成22年11月	奈良学園キャリア開発センター	就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。幼児教育学を活かせる保育士･幼稚園教諭以外の分野（主にビジネス）について一定の認知・理解を示した。 A5版　全119頁 編者：奈良文化女子短期大学キャリア教育センター 共著者：石田秀朗、善野八千子、益田美保、島野恭子、田平友子、河井佐紀、杉井涼香、遠山健、李初子、加藤優里、松村友紀、廣岡由香里、福田寿美代、羽野麻里子、福本千春 本人担当部分：第1章保育者を目指すあなたへ～「子どもの笑顔をつくるスペシャリストになる」とは？　6～9頁を単著。 保育者を目指すための要件について2点について整理した。子どもを理解するための日常的な生活から子どもへの関心を持つ方策、子どもに関連する番組、ニュース、書籍や絵本をとした方法及び実際に、子どもに関わる施設でボランティア活動を通して、観察・体験について述べた。また、笑顔でいるための自己コントロールについて、時間の管理、健康管理、経済管理から説いた。少子化の進行、育児サービスの多様化に伴って生じている幼稚園と保育所の抱える問題、幼稚園と保育所の一元化の動き、「保幼小連携」への取り組みにも言及した。
９.子どもの育ちと学びをつなぐ～保幼小連携ＷＧの取組を通して～	共著	平成23年3月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学が組織する幼小連携WGの合同研究会の取組について、代表としてまとめた。組織開発の経緯、参加者の振り返りを通して、汎用性のある接続カリキュラム着手の意義及び活用のあり方を示した。 A5版　全185頁 共著者： 善野八千子、前田洋一、荒井恵子、梅田真寿美、南尚美、阪本さゆり、中田章子、熊井祥子、前田嘉余子、大山夏生 本人担当部分：第1章pp.5-18,第3章pp.33-37,第6章pp.80-85,第7章pp.86-90,第8章pp.92-101,第9章pp.102-116,第11章pp.156-162,第13章pp.167-175を単著。 幼小連携の必要性及び進まない理由について言及し、現状について整理した。また、その解決策としての本学のシンクタンクとしての役割として本研究会を設置した経緯について発信した。育ちと学びをつなぐためには、幼児教育と小学校以降の教育に関わる専門家として互恵性と継続性、発展性の重要性について論じた。幼小接続カリキュラムを作成するための手順とその実際について示した。入学前の3週間試案については、３つのカテゴリーと5領域を整理して、小学校教員にも理解が進むように示した。さらに、生活科の適応指導及びスタートカリキュラムを視点とした入学後の4週間の日案を検討した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０.幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発～子どもの育ちと学びをつなぐ～	共著	平成 23 年 4 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、その課題を明らかにした。、特に、就学後の生活科を中心とした汎用性のあるカリキュラムを開発。 子どもの育ちと学びの「連続性・一貫性」のためには、どのような組織開発が必要とされ、実現可能か、またいつまでにだれが何をどのようにしていくことが重要化について解説。 A5 版　全 136 頁 共著者： 善野八千子、前田洋一 本人担当部分:第 1 章必要なことは、「連続性・一貫性」5～17 頁、第 3 章接続カリキュラム作成のための組織開発 31～34 頁、第 5 章～10 章入学後接続カリキュラムの実践 61～128 頁を単著。 現職の教員と保育者をつなぎ、資質向上にも寄与する研究成果をまとめた。具体的なカリキュラム作成の手順として、生活科を中心とした小学校入学後の目標設定や活動内容について汎用性の実際のカリキュラム作成のプロセスについてもフォーマットを提案した。 適応指導を中心に入学前の３週間 18 日分の日案を提示し、入学後はじめての７つの課題を検討した。学習自立・生活自立・精神自立の 3 つの自立に分類し、生活科のの自立の基礎をはぐくむ方法と内容に整理した。さらに学校園として接続カリキュラムに取り組むための組織開発についても示した。
１１．教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	日本の学校教育の喫緊の課題である国際教育・グローバル教育は。子どもたちの生活自体は国際色豊かなものとなり、学校や地域でも積極的な取り組みが行われている。しかし、具体的に教育においてどのように国際性をとらえ、育てていけばよいのかは理解が深まっていないのが実情に言及した。 A5 版　全 176 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川﨑由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、加藤明、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子 本人担当部分：第９章「幼小接続期における国際教育」81～90 頁をを単著。 幼小接続期における国際教育について、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立のためには何が必要であるかを論じた。学習指導要領改訂では「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」の教育内容の主な改善事項の一つとして「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられたことから、新しい学習指導要領のめざすものの具体例を示した。また、幼小接続期における国際教育の必要性とその体験を経験化する方法を示した。 教育的な願いとねらいをはっきりと持ち、それを実現する活動を準備し、子ども一人ひとりの国際体験・異文化体験を教育的な意味で経験化するために様々な視点から考察、問題提起した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２.学校管理職の経営課題５　学校をエンパワーメントする評価	共著	平成23年10月	ぎょうせい	学校評価を経営改善に生かす視点を探った。学校経営のビジョン、カリキュラム経営、組織マネジメントから学校評価に至るまで、学校経営に必要な重要トピックスを詳解。 A5版　全頁数194頁 編者：天笠茂、大脇康弘 共著者大脇康弘、加藤崇英、相澤良明、善野八千子、小島宏、八尾坂修、根津朋美、白井達夫、猪股亮文、京都市教育委員会 本人担当部分：第４章「マネジメントのツールとしての学校評価」56～76頁を単著。 学校評価のこれまでの経緯を解説し、課題と改善のためのシステムを示した。第三者評価とは何か、また第三者評価を活かして学校のポジティブプロパガンダをいかに創るかをフロチャートで提示した。学校をエンパワーする評価のあり方、マネジメントツールとしての学校評価のうち、自己評価の手法、学校関係者評価、第三者評価を中心に整理した。加えて、学力を育てる学習評価と授業評価及び教師力を育てる教員評価、カリキュラム・アセスメントについて論考した。
１３.子どもの育ちと学びをつなぐⅡ～幼小連携ＷＧの取組を通して～	共著	平成24年3月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学幼小連携ＷＧ合同研究会の平成23年度の取組をまとめた。幼小接続カリキュラム（就学前）を開発を試みるとともに、入学前の3週間を再検討した。 全頁数185頁 共著者：善野八千子、前田洋一、筒井通子、阪本さゆり、南尚美、前田嘉余子、大山夏生、定豊子、田村豊、荒井恵子、角田道代、 本人担当部分：第1章「幼小連携WG合同研究会の取り組みと意義」6-11頁、第4章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム52-82頁、を単著。 幼小連携WG合同研究会の取り組みと意義について、これまで生活科移行期において、カリキュラム作成の経験からの方法論と組織開発につながる発展性を価値づけた。また、指導者が困っている入学直後の状況からでなく、学習者の側からみた就学後の子どものとまどい要因6点を提示した。 学びの基礎力とのマトリクス作成により、ワークショップで活用し、幼児教育と小学校教育者による合同の教育課程の理解及び検討の方策についての具体的な道筋を示した。
１４．教育フォーラム50＜やる気＞を引き出す･＜やる気＞を育てる	共著	平成24年8月	金子書房	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を、教科のかかわり、教材・校内研究、学習塾の取り組みなども参考に考察、提案した。 A5版　全頁数179頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、松田智子、金山憲正、善野八千子、勝見健史、久田　孝、錦織　彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村　哲、瀧明知惠子、浅田　匡 本人担当部分：第9章「子どもの＜やる気＞をつなぐ幼小接続」34～46頁を単著。 子どもの＜やる気＞をつなぐこと、育ちと学びをつなぐことの共通の問題から論述した。意欲・モチベーション、＜やる気＞に関するデータ及び諸説を考察・整理した。幼小接続

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１５.子どもの育ちと学びをつなぐ－幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成－	共著	平成 24 年 9 月	MJ-Book	に必要な 3 要素及び脳が＜やる気＞を出してくれる４つの条件などの知見を示した。幼少期の子どもの意欲については、その正体と環境について、幼小接続期における＜やる気＞を引き出す実践事例について、考察した。 幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、生活科移行期から取り組んできた経緯を考察した。就学前後を接続する汎用性のあるカリキュラムを改善する視点を明確にした。 A5 版　全 131 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、定豊子、阪本さゆり、南尚美、大山夏生、前田嘉余子、田村豊 本人担当部分：第 1 章幼小接続のためになすべきこと、できること 8-17 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 58-87 頁、第 5 章育った力を学ぶ力へ 88-99 頁を単著。 現職の小学校教員と保育者をつなぎ、資質向上にも寄与する実践研究について、考察した。入学後のとまどいについて、調査し課題を解決する 6 つの視点を明らかにした。自立の基礎力との「とまどいマトリクス」を開発し、研修で活用できるように試みた。入学前の 4 週間の週案の作成ポイントのフォーマットを提示した。それを活用した研修プログラムとしてワークショップ研修の方法や活用についても示した。また、「一日体験入学の」活動事例について、紹介し今後の発展課題を明示した。
１６.夢と力を育てる新しい学校づくり	共著	平成 25 年 4 月	教育出版	課題解決型・問題解決型の取組は多く見られ、課題に対応した学校づくりは実施されているが、10 年先、20 年先の社会で活躍する子どもたちが常に夢をもち、未来に向かう力をつけることのできる学校経営の在り方が提案されているとは言い難い。新たな知見と実例をふまえ、未来志向型の学校づくりの提案。 A5 版　全 136 頁 共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分:第 1 章忙しい木こりの物語(1-4 頁)、第 2 章こんな学校が日本の教育を変える(5－14 頁)、第 7 章「一石五鳥プラン」と「仕事のＡＢＣ」（84－106 頁)、第 8 章幼稚園における学校評価(107－116 頁)、第 9 章さらなる外部評価アンケートの改善（117－136 頁）を単著。 子どもに力をつける新しい学校づくりを目的として、教員の資質向上が子どもの学校文化を創る力になることを論考した。学校訪問記や評価を改善に生かした事例等のフィールドリサーチや分析から考察。スクールリーダーやミドルリーダー、急速に増大する新任教員大量採用時代に向けて、学校づくりの発信転換の必要性を説き、学校教育関係者はもとより地域住民や教員を目指す学生等と共に熟考し、行動変容を可能にする知見を示した。
１７．教育フォーラム 54『各教科等の学習を支える言語活動』	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	言葉の力を育てるため単元目標構造図や年間指導計画の活用などを考えながら、国語・算数・社会・理科・生活科・総合的な学習の時間などに特有の言語活動について、教師が

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				どのような点に留意した指導を行えばよいのか、具体的な実践を踏まえて考察した。教師にできること・すべきことの提案。 A5 版　全頁数 140 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、金澤孝夫、櫻本明美、金山憲正、中田正浩、川俣徹、松田智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ村井ロサメルセデス 本人担当部分：第 10 章「幼小接続におけるこれからの言語活動」98～109 頁を単著。 幼小接続期の対話と姿勢について、育ちと学びをつなぐ課題から論述した。親子、教師と子ども、教師同士の 3 点からデータ及び諸説を考察・整理した。
（学術論文） １.グローバル時代の教員の資質向上を考える-モンゴル教員研修を中心として一	単著	平成 17 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要第 36 号 p. 41 ～p. 52	大阪大学と JICA（国際協力事業団）の連携事業の短期専門家として教員再訓練実施指導をモンゴルにおいて実地指導を通して得た知見をまとめた。教員研修現場に立ち会い、指導・助言・特別講義を省察し、モンゴルにおける現職教員研修と学校視察を通したグローバル時代における教員の資質向上について、調査報告及び考察をした。モンゴルの教育視察を通して、初等教育の現状把握と分析から、初等教育の発展にとっての課題と協力目標及び達成の政策、教育制度、行政、大学から小学校まで学校等に携わる職員や研究者及び指導法の改革を考察した。
２.生活科における教師力―「振り返り」を通して命を育む活動の分析から一	単著	平成 18 年 12 月	奈良文化女子短期大学研究紀要第 37 号 p. 35～p. 48	生活科における教師力について、「振り返り」を通して命を育む活動の第 2 学年「自分たんけん～わたしの成長ものがたり～」の実践（和泉市立小学校）を分析をもとに論じた。その結果、「学び続ける子どもを育む教師力」が、キーワードであり、「単元構想力」「単元構成力」「単元修正力」が重要であることを仮説を元に検証した。生活科における教師力について明らかにするため、単元構成の在り方に着目し考察した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３.受講生に変容をもたらす総合演習の探求	単著	平成19年12月	奈良文化女子短期大学研究紀要第 38号 p.67～p.78	担当科目「総合演習」において、「学園祭展示に位置づけた中間発表」と「他者評価及び相互評価」について検証した。2005年度授業分析と2006年度授業の実際から考察した。さらに、受講生に変容をもたらしたと思われる授業を特定し、課題設定力の変容と情報収集・活用力の変容について明らかにした。幼児教育の専門性を有する教員養成において求められる「子どもの育ちの連続」めざした「保幼小連携」についての理解と実践力であるという文脈において、学生に実践力をつける「総合演習」はいかにあるべきかを2点の仮説をもとに論考した。
４.保幼小連携の課題解決に向けた考察	単著	平成20年12月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第39号 p.57～p.68	保育所保育指針及び幼稚園教育要領並びに学習指導要領が告示され、改訂にあたっての幼児教育と小学校教育の接続に関する特色を整理した。また、これからの保幼小連携に求められるものを考察し、課題解決にせまる方策として、幼児教育関係者と小学校教育に関わる両者の教育課程上の連携が重要であることを提言した。その方策として、入学前に位置づける保幼小連携合同授業や学校評価を通した学校園の特色に位置づける組織開発等を提案した。
５.幼稚園における学校評価項目作成の試み	単著	平成21年12月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第40号 p.83- p.99	幼稚園における学校評価項目作成を目的とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して「私が親ならこんな幼稚園に通わせたい」ことを記述するアンケート調査を実施し分析した。大項目を分類・整理し、さらに、受益者としての保護者の願いや期待を取り入れて精査した結果、幼稚園における学校評価項目として望ましい88の評価項目を提示した。提示した評価目の実施による検証が課題として残され、継続研究の方向性と展望を示した。
６.幼小接続期におけるカリキュラムの開発	単著	平成22年12月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第41号 p.49- p.67	幼稚園と小学校両者による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、両者の教職員の連携活動を推進する組織開発のあり方を探った。そして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を通して、構成要素と作成の手だてについて明らかにしつつ、教育課程の理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するために必要な組織のあり方や方向性等の知見を示した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７.幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅱ	共著	平成23年11月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第42号p.49～p.67	幼児教育と小学校以降の教育に関わる双方による教育課程の理解を中心にした「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究をまとめた。今回は、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム作成」の中で、とりわけ就学後の就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成し、活用方法を提示した。 本人担当部分：就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成した。このことにより、幼小連携を一層推進し、生活科の授業改善につなげる方策を示した。 共著者：善野八千子、前田洋一
８.幼稚園の学校評価における外部アンケート項目作成の試み （査読付）	共著	平成24年7月	日本学校教育学会「学校教育研究」 NO.27p.93～p.105	幼稚園における保護者の満足度に関する研究を3カ年にわたり継続し、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。質問項目の作成を目的とする調査A､質問項目の精選を目的とする調査Bから、信頼の決定要因を究明した。また、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。作成された簡便な質問紙は経営状況を弁別しうることを検証した。 本人担当部分：質問項目の作成を目的とする調査A、質問項目の精選を目的とする調査Bを実施し、信頼の決定要因を検討した。また、対象幼稚園全園を訪問指導し、経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。 共著者：前田洋一、善野八千子
９.幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～入学後の子どもの戸惑いに着目して～	単著	平成24年11月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第43号p.49～p.67	「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究である。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、とりわけ就学直後の課題を「とまどい」の視点から調査した。それらを解決する「生活科」カリキュラム開発または改善の手がかりとなるツールを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善の手立てとして、研修会でも活用できることを示唆した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０．「人間教育」の典型― 幼小連携・接続教育の価値 ― （査読付）	単著	平成 26 年 3 月	日本人間教育学会学会誌 Vol.1	教育の連携性と教育の一貫性をふまえ、幼小連携・接続,の価値について述べた。また、これまでの研究の知見から幼小接続期におけるカリキュラム開発の方法について提示した。さらに、幼児期の教育と小学校における,生活科との連続性について論述した生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。
１１.人間教育に資する「これからの幼小接続教育」の展開(1) －自己成長への気づきを促す生活科の実現に向けて－ （査読付）	単著	平成 27 年 3 月	日本人間教育学会学会誌 Vol.2	「これからの幼小接続の基軸となる生活科教育」の工夫改善となる３つの要件を導出した。さらに,これら３つの要件。生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。これら３つの要件を充足する実践事例「生活科成長単元第 2 学年自分たんけん」の分析による検証を行い,その有効性について解明した。
（その他） 「研究報告書」 1.社会の変化に対応した新たな教育課題等に関する調査研究報告書 （文部科学省委嘱研究）	共著	平成 18 年 3 月	全国教育研究所連盟	文部科学省委嘱研究（教育課程及び指導の改善等に関する調査研究事業） A４版　全 125 頁 共著者：千々布敏弥、善野八千子、山岡道夫、淺野忠克、阿部信太郎、鈴木啓文、村松剛、森哲仁、開田凉子、中島徹、大西邦夫、久世均、久米昭洋 本人担当部分：第Ⅰ部新たな教育課題を取り上げる意義第 1 章新たな教育課題とは何か第１節新たな教育課題とは「学校評価を活かして学校力・教師力を高める～」6～13 頁を千々布敏弥と共著。第Ⅱ部新たな教育課題に関する研修第 1 章新たな教育課題に関する研修の現状 60～62 頁を千々布敏弥と共著。
2.幼稚園における学校評価手引き書 （文部科学省委嘱研究）	共著	平成 21 年 3 月	大和郡山市教育委員会	文部科学省委嘱事業（幼児教育の改善・充実調査研究事業平成 20 年度）大和郡山市運営委員長として幼稚園における学校評価手引き書を作成した。実践協力委員に対して全編にわたって指導し、監修にあたった。 A４版　全 56 頁　監修：善野八千子

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「収録集」 １．関西セミナー関西2007人間教育実践交流会　京都フォーラム収録集「授業力・学校力・人間力の向上 ～学習指導要領の改訂とこれからの学校教育～」	共著	平成19年10月	日本教育新聞社	テーマ「授業力・学校力・人間力の向上 ～学習指導要領の改訂とこれからの学校教育～」を設定し、各方面の識者が講演した収録集。「これからの教科指導と授業づくり」、「学校評価部会」「教師力向上部会」等の構成。 共著者：浅田匡、布村幸彦、初田幸隆、角谷重樹、成山治彦、松田智子、梶田叡一、鎌田首治朗、菅井啓之、善野八千子、小楠徹、浅野良一 A４版　全207頁 本人担当部分：「学校評価を活かして学校力・教師力を高める～」144～165頁を担当。 学校評価とのかかわり、「やってよかった学校評価」信頼構築・授業改善に活用するツール、学校自慢、子ども自慢を通して、信頼性、客観性、妥当性のある評価がいつでもだれでも伝えられるか、その根拠としての学校評価のシステムについて論じた。また、外部評価委員が検証する４つのポイントをまとめた。
２．関西セミナー関西2008人間教育実践交流会　京都フォーラム収録集「新学習指導要領とこれからの学校 ～習得・活用・探究型学力と言語力の育成～」	共著	平成20年11月	日本教育新聞社	新学習指導要領とこれからの学校～習得・活用・探究型学力と言語力の育成～を大テーマに掲げた各講演収録。「新学習指導要領とこれからの教育」「学校、家庭、地域をつなぐ学校評価」課題別講演等をまとめた。 A４版　全300頁 共著者：加藤明、金森越哉、浅田匡、甲斐睦朗、天笠茂、梶田叡一、勝見健史、鎌田首治朗、天野拓夫、陸奥田維彦、土田圭子、六車陽一、秋吉博之、三木史子、松田智子、寺田博幸、前田美智代、阿部扶早、飯塚晃三、金岡成晃、古川治、善野八千子、溝口聡、田村壽秀、山口晋、初田幸隆、友野遙子、中村哲、北村昌江、小楠徹、久保弘子、浅野良一、渡邊規五郎、池島徳大、丹波洋子 本人担当部分：「学力向上と学校評価～新学習指導要領をふまえて～」144～165頁を担当。 「学校評価」の講演をもとに、学力向上と学校評価について、新学習指導要領をふまえて述べた。特に、学校評価研究指定校の取組を紹介し、データに基づいた学校改善の検証をフィールドリサーチ事例を示し知見を詳述。
「書評」 １．深川八郎著『授業改善の評価と方法－授業評価の事例的分析研究－』	単著	平成21年3月	教育行政研究第36号　学会創立記念号（その3）関西教育行政学会誌	『授業改善の評価と方法』についての書評。授業評価の事例的分析研究について、要約し紹介した。特に、評価後のフィードバックが授業者にも評価者にも明確な形で示される優れた取組や各学校の研究テーマについてリフレクションを深める中で、評価活動における次の課題を共通理解して新たな取り組みの筋道を作ることが重要である点を評価した。 A4版　全105頁 本人担当部分：83～85頁を単著。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「事典」 １.改訂　実践教育評価事典	共著	平成 22 年 8 月	文溪堂	新学習指導要領と新指導要録を基本据えた教育評価の基礎知識的な用語を解説。 A4 版　全 264 頁 共著者：梶田叡一、加藤明、長谷浩也、吉村希至、土田圭子、石井雅幸、上之園公子、尾崎友美、松田智子、鎌田首治朗、勝見建史、金沢緑、有本昌弘、木下博義、古川治、猿田祐嗣、小倉康、立田慶裕、土田圭子、二瓶弘行、田中博史、松浦拓也、寺本貴啓、善野八千子、角谷重樹、米田豊、北川達夫、小楠徹、内田和寿、林義樹、菅千索、森敏昭、川崎弘 本人担当部分:「学校評価」188－189 頁を単著。 学校評価について、学校評価のガイドラインの改訂から進め方まで解説。
「依頼原稿」 １．４月から始める学校評価のスケジジューリング（中学校編）	単著	平成 18 年 4 月	Ｂnesse 教育研究開発センター ＶＩＥＷ２１ ４月号中学版	学校評価を活用して授業実践に取り組む中学校に対する提言。「学校力」を生み出す学校評価 本人担当部分：中川中学校の実践から学ぶこと 12～19 頁を単著。
２．４月から始める学校評価のスケジジューリング（小学校編）	単著	平成 18 年 4 月	Ｂnesse 教育研究開発センター ＶＩＥＷ２１ ４月号小学版	学校評価を活用して授業実践に取り組む小学校に対する提言。「学校力」を生み出す学校評価 本人担当部分：渋江小学校の実践から学ぶこと 12～19 頁を単著。
３.提言　学校研究を推進する校長の役割とは	単著	平成 18 年 4 月	ぎょうせい５月号 悠（はるか）	学校研究を推進する校長の役割について、次の５点について述べた。研究推進の牽引力と組織開発型マネジメント力の研鑽について示した。 本人担当部分:『特集　学校研究システムを支えるシステム』30～31 頁を単著。
４．３つの間を工夫し、子どもの育ちの連続を社会の変化への対応につなげる教育課程の弾力的運営	単著	平成 18 年 7 月	明治図書 学校マネジメント ８月号	学習指導要領のいわゆる「はどめ」規定の見直しや授業時数の弾力化の問題、学習指導要領の特別措置への弾力的対応などについて、まとめた。今後の検討課題に対して、子どもの育ちの連続と社会の変化に対応した教育課程の２つの視点から「人間・時間・空間」の３つの「間」を視点に、教育課程の弾力的運営について述べた。 本人担当部分:『現場主義で読み解く新教育課程の方向』50～51 頁を単著。
５．自己評価書・外部評価書の作成と活用	単著	平成 18 年 7 月	教育開発研究所 教職研修８月号	自己評価書・外部評価書の作成と活用について述べた。改善の方向を示す評価書の作成のために自己評価の例、外部評価の例、自己評価及び外部評価の結果の示し方、評価を行う項目や指標の参考例を示した。ガイドラインの概要③を具体化するため、自己評価書・外部評価書作成のポイントと留意点及びその活用について具体例と表を提示した。学校評価をどう工夫・改善するかについて検討した。 本人担当部分：54～57 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６.外部評価をとり入れた学校評価の改革	単著	平成18年10月	明治図書 学校マネジメント 11月号	ガイドラインが示す自己評価と外部評価にもとづき、よりよい学校づくりのためのツールの一つとして活用する方策を示した。「外部評価書作成のための自己評価書を作成でない」ことを確認し、外部評価を活かして変えることの４点（１）授業の工夫改善をする（２）エネルギーのベクトルをそろえる（３）ポジティブプロパガンダをつくる（４）ＡＣＴＩＯＮＰＬＡＮを作成するについて具体的に論じた。新課題に取り組む経営計画の戦略について検討した。 本人担当部分：50～51頁を単著。
７．外部評価の充実	単著	平成19年1月	兵庫県立教育研修所『兵庫教育』第58巻第10号NO.671	外部評価の充実のために、「相違を総意に、そして創意に」をキーワードとして準備段階から機能するための要件及び外部評価の目的や役割と機能する人選について示唆した。「自己評価が適切に行われ、改善に向けた取組が適切か」の検証や外部評価書のまとめ方について具体例を示した。 本人担当部分：12～17頁を単著。
８.元気の出る学校評価を効果的に進めるために	単著	平成19年2月	言語教育文化研究所学校経営方略 05号	学校評価の効果的な進め方について、「信頼される学校づくり」を目的として論考した。学校評価をツールとして活かし、学校改善・学校改革のプロセスを学校の内外に示し、学校と地域住民、保護者・児童生徒との客観的評価結果のズレを明らかにし、評価項目の設定の説明結果の分析から改善方策を示した。さらに、目標・計画に基づく実践へ―学校教育目標の共有と具現化からポジティブプロパガンダの分析考察について説いた。 本人担当部分：10～11頁を単著。
９.教育再生の論点と公教育改変の方向	単著	平成19年2月	明治図書 学校マネジメント ３月号	「学校評価部会の方向性を読む」として、学校評価のためのガイドライン策定を受け、「学校評価の推進に関する調査研究協力者会議」が専門的な知見の提供している内容について整理した。また、「クレーマーを育てない学校評価」として学校が組織的、継続的に改善しているかを検証する必要性を示した。 本人担当部分：34頁を単著。
１０.「させられる評価」から「ポジティブな評価」へ	単著	平成19年4月	明治図書『現代教育科学』NO.607	「学校の自己評価」を生かして教育再生を図ることを目的とし、「させられる評価」から「ポジティブな評価」への提言をした。「学校が元気になるため」に実施する学校評価のために、回収率を高め評価結果に客観性・信頼性が生みだす重要性を説いた。そのために学校評価計画や評価項目の設定理由や内容の説明及び回収時期の予定等を事前に周知する努力をしていくことも示した。 本人担当部分：「学校の自己評価」で教育再生を図る14～19頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１.改正　教育基本法「家庭教育と幼児教育、保護者地域と」	単著	平成 19 年 5 月	明治図書学校マネジメント５月号	改正教育基本法において、新たに規定された大学、私立学校、家庭教育、幼児期の教育、学校・家庭・地域の連携協力などについて述べた。特に、幼保一元化・幼小連携等の滑らかな連接が求められる中、校区で学校評価結果から就学前の保護者のニーズや幼児教育の課題について共有する契機となることを示唆した。本人担当部分：32～33 頁を単著。
１２.外部評価の充実と期待される成果	単著	平成 19 年 11 月	全日本中学校長会中学校 NO.650　平成 19 年 11 月号	外部評価の充実と期待される成果について、地域住民・保護者と共に学校のポジティブプロパガンダを広げるための方策を述べた。学校評価が、アカウンタビリティを果たし学校改善のために活用するツールであることから自己評価だけでは自らの取り組みを評価しにくい側面があることを強調した。評価結果を検証し、評価を行うこととその情報提供によって外部評価者から学校を改善するためのアドバイスや知恵を得ることの重要性を説いた。 本人担当部分：14～17 頁を単著。
１３.「活用力」アップの具体化望む	単著	平成 20 年 2 月	教育新聞 2/25 付	活用力を高める取り組みと結果の情報発信の方策について提言した。国際学力調査（PISA）で、日本の子どもの学力「活用力」が年々低下していることから、全国学力調査（文科省実施）における順位が公表され課題が明確になった。各学校は、PISA 型学力及び新学習指導要領で強調される活用力をつけること、そのための具体的な取り組み及びプロセスとその成果を示す重要性を示唆した。 本人担当部分：1 面　オピニオンを単著。
１４. 元気の出る「学校評価」と校内研修のポイント	単著	平成 20 年 7 月	明治図書学校マネジメント８月号	元気の出る「学校評価」を生かした校内研修のポイントについて、述べた。「学校評価」と新教育課程との関連においては、「特色ある学校づくり」と学校評価について及び学校評価システムの構築と結果公表の方策のプロセス案を提示した。また、「特色ある学校づくり」は、学校評価結果に表れる自校の誇りを強化するプロセスであることについても示した。 本人担当部分：54～55 頁を単著。
１５.学校評価に生かす学テ結果の分析･診断のポイント	単著	平成 20 年 8 月	明治図書学校マネジメント９月号	学力テスト結果を活かした教師力の診断・評価について論じた。指標と学力テスト実施され、授業改革が一層求められていることから、「教師力の評価・診断」とは、教師は結果から分析して効果的なアクションプラン作成の評価であるとした。また、子どもの学習意欲を引き出す教師の意欲が「教師力の診断・評価」と考え、結果を生かした改善策や各都道府県で実施されてきた事例も参考に提言。 本人担当部分：44～45 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１６.心を育てる学級経営	単著	平成20年11月	明治図書「学級経営」12月号	保護者との連携の進め方について、「アットホームなネットワークでフットワークよく」として、提言した。プロセス評価とクイックレスポンスで築く信頼構築について、「保護者が求める教師像」という小学校の保護者対象の調査（2007）結果をもとに論じた。クレーマーをサポーターに変えていくいくための発想と具体的提案を行った。 本人担当部分：8頁を単著。
１７．みんなで始めよう！ふじの子育て講演記録	単著	平成21年1月	富士市教育委員会	子ども、学校、保護者、地域の教育の当事者が連携している事例及び効果を挙げている事例について紹介した。また、調査結果をもとにふじの子育てに対するアドバイスとして提言した。平成20年度教育シンポジウムみんなで始めよう！ふじの子育て開催記録 本人担当部分：21～43頁を単著。
１８.教育ソリューションフェア２００８【分科会１】学校リーダー向けセミナー	単著	平成21年2月	日本教育新聞社	学校力・教師力を高めることを目的として、次につながる学校評価とは何かについて、論じた。これまでのフィールドリサーチや聞き取り調査から学校評価の結果をフィードバックさせ、信頼構築のツールとして改善に活かそうとしているか、学校評価の実施そのものが目的となっているかの違いを明確にした。 本人担当部分：13～16頁を単著。
１９.東通村における学校評価・保幼小連携	単著	平成21年3月	教育出版	東通学園における保幼小連携の課題解決に向けて、スタートカリキュラムの編成及び総合的に学ぶ幼児教育の成果を小学校教育に生かす事例、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導について論じた。また、「東通村保幼園(仮称)」と「東通村小学校」を接続するための提言をまとめた。 本人担当部分：15～19頁を単著。
２０.仕事のＡＢＣ～苗代ってなんですか～	単著	平成21年5月	明治図書学校マネジメント6月号	「教職員意識のギャップ＝ビックリ例」として、新任教師に対する自然体験不足以前の知識不足、教材研究不足についての実態について具体事例をあげた。規範意識以前の社会のマナー・ルール・モラルを「親育て」をも担っていく教師に身につけさせていく必要とともに経験豊富な教員へのエールを送った。 本人担当部分： 12～13頁を単著。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２１.マル得情報をキャッチするアンテナの立て方	単著	平成 21 年 9 月	明治図書学校マネジメント 10 月号	情報の収集・活用・編集・発信の一連の流れについて整理し教師にとって重要な「生きる力」として、「学校評価」に関する関係法令学校評価に関する学校教育法・学校教育法施行規則の規定　学校評価の推進関する調査研究協力者会議学校評価及び情報提供の実施状況（調査結果）及び学力向上の具体策発信と実行について、7 点に整理して提示した。 本人担当部分：15～16 頁 を単著。
２２.学校評議員制度の変革点と現場への影響予測	単著	平成 22 年 1 月	明治図書学校マネジメント２月号	変革点として評議員制度に関連する教育の無償化と「学校理事会」の設置２点を予測して論じた。学校教育の無償化がもたらすもの学校格差を生み出さない学校評価の「学校理事会」の設置についての課題と教育情報の可視化とアーカイブ化の必要性を示した。 本人担当部分：14～16 頁を単著。
２３.子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小連携Ｉ接続カリキュラム作成のポイント	単著	平成 22 年 11 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 40 巻第 43 号	幼稚園教育と小学校「生活科」教育についてを、「遊びから学び」へという視点から検討を加えた。１点目に、発達に即した「育てたい姿」と「内容」を設定すること。２点目に、子どもにとっての環境の変化や違いを知ること。３点目には、子どもにとっての新しい環境の変化や違いを「時間・空間・仲間」で整理することを読み解いた。特に、就学前５歳児２月末から、入学後１年生４月・５月第１週までの「接続期７週間モデル案」のうちの、小学校入学後第１週の生活科スタートカリキュラムの一例から、その重要性を示した。 本人担当部分：36～ 38 頁を単著。
２４.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム①	単著	平成 24 年 5 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 11 号	異校種の保育・教育現場をつなぎながら、子どもの育ちをつなぐ研究と実践の往還を実現していく装置としての組織開発について、示唆した。これまで、2009 年から着手した継続研究を整理し、課題と展望を示した。 また、幼児教育と小学校教育をつなぐ「幼小接続カリキュラム（就学前）（就学後）」のカリキュラムを作成するプロセスを示唆。 本人担当部分：32～37 頁を単著。
２５.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム④	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 15 号	新幼稚園教育要領の基本理念である、「生きる力」の基礎をはぐくむことから、幼児教育終了段階で身に付けたい「知・徳・体」、学びの基礎力の基本事項を解説。幼小接続カリキュラム（就学前）の作成にあたり、目標を示した。さらに、生活科につながるカリキュラム作成のための視点を「時間、空間、人間、もの、技能、心情」の 6 項目であると示し、縦軸に、「知・徳・体」、横軸に、「時間、空間、人間、もの、技能、心情」のマトリクスを考案。また、「学校ごっこ」と就学後の子どもの体験と遊びの重要性についてまとめた。 本人担当部分：33～37 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２６.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑤	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 16 号	入学前の「一日体験入学から、学校ごっこへ」について、幼児教育と生活科の接続について、考察した。入学前後のとまどい要因は、6 点あることを示した。時間・空間・人間・もののちがいについて、小学校入学時点との相違点について、解説。「より意義のある一日体験入学」の活動について、幼児教育のねらいと小学校生活科のねらいを併記して、目標に対応した活動としての評価を検討した。活動名「もうすぐいちねんせい」、単元名「あたらしい 1 年生をしょうたいしよう」に関連して提示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
２７.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑥	単著	平成 24 年 8 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 17 号	筆者の提案を元に実施した八尾市立東山本幼稚園からの聞き取りと記録を通して実践例を示し考察した。また、学校園の組織として連携を継続するために幼小接続は、管理職の問題意識や役割が非常に大きいことから、保育所から小学校に連携を申し出る手続きは、子どもの入学先や可能な相手校を選択して、主体的に働き掛けていくことの必要性を提言した。公私立の園と小学校の交流限定などの制約実態や子どもの交流の前に、まず教職員の交流から始める方策を示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
「学会発表」 １.生活科における教師力―「振り返り」活動を通して―	共同	平成 18 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 15 回大会（於:富山大学)	生活科における教師力について明らかにするため、第 2 学年「自分たんけん～わたしの成長ものがたり～」の実践を分析した。 子どもの「振り返り」活動の気づきの質を高める教師力とは何かについて、単元構成の在り方に着目した。評価項目と指標、及び子どもの見取り観察表を指導し助言しながら実践を支援し、観察した。その結果、生活科における教師力の要素を考察した。 本人担当部分：実践を分析考察し、生活科における教師力について明らかにした。 共同発表者：善野八千子、上田晋郎
２.幼稚園から大学までのキャリア教育	共同	平成 18 年 7 月	日本カリキュラム学会第 17 回大会（於：奈良教育大学)	幼児教育から大学教育までを見通したキャリア教育の開発を目的として、幼児教育から大学教育を見通した目標論と必要性を論じ、人間形成の課題と学力形成の課題を設定した。先行研究の紹介と分析及び幼児教育から大学教育までを見通したカリキュラム開発・試案を提示した。 本人担当部分：先行研究の紹介と分析及び幼児教育と大学教育におけるキャリア教育のカリキュラム開発・試案を提示した。 共同発表者：西村公孝、善野八千子

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．実践力をつける「総合的学習」の探求―保幼小連携を視座した「総合演習」の授業づくりを通してー	単独	平成 19 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 16 回大会（於：千葉大学）	幼児教育の専門性を有する教員養成において求められる「子どもの育ちの連続」めざした「保幼小連携」についての理解と実践力であるという文脈において、学生に実践力をつける「総合演習」はいかにあるべきかを 2 カ年の実践を通して探求。 (1)課題設定能力を育成するために-先行研究から学ぶ機会を導入することによって意欲を喚起し、具体的な活動の見通しやイメージをもつことができる。(2)表現力、評価能力を高めるために①学園祭展示を中間発表として位置づけことによって他者から学び、子ども理解に基づく問題解決ができる、2 点の仮説をもとに考察した。
４．「保幼小連携を視座した生活科の授業づくり」	単独	平成 20 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 17 回大会（於：山形大学）	幼児教育と小学校教育に関わる専門性を有する教員の資質は「子どもの育ちの連続」めざした保幼小連携についての理解と実践力であることから、これまでの実践力をつける「総合演習」の探求で得た知見をもとに、「保幼小連携を視座した生活科の授業づくり」ついて示唆した。実践力をつける「総合演習」から保幼小連携を視座した生活科の授業づくりを試行した。また、受講生に変容をもたらしたと思われる授業の特定をし、2 年間の実践を比較分析し、考察した。
５.幼稚園における学校評価項目作成の試み	共同	平成 22 年 6 月	日本教育経営学会第 50 回大会（於：静岡大学）	幼稚園における学校評価項目作成を目的とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して調査した。項目を分類し、さらに、望ましい 88 の評価項目を提示した。幼稚園満足度と評価項目カテゴリーとの関係を因子分析し、検証した。評価項目作成のアンケート調査研究及び考察した。 本人担当部分：幼稚園における学校評価項目作成を目的とした現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して実施した調査方法について、受益者側から項目を作成する知見を述べ、評価項目作成のアンケート調査結果を考察から得た結果について、詳述した。 共同発表者：善野八千子、前田洋一
６.子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発	単独	平成 22 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 19 回大会（於：立命館小学校）	幼小による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を試みた。ポスターセッション型実践交流を推進した取り組みの問題点を整理した結果、校区の特性によって異なる取り組みを解決するためのカリキュラム作成の必要性を説いた。その構成要素と作成の手だてについて明らかにし、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するための組織開発を提案した。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７. グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～	単独	平成 22 年 9 月	日本グローバル教育学会第 18 回大会（於:鳴門教育大学）	シンポジウムにおいて、グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～と題して、１．グローバル社会時代の子どもに育成する資質能力　２．経験知をふまえた理論や具体的提案　３．学校づくりの基軸となる学校評価～教育情報の可視化とアーカイブ化～　４．グローバル社会に時代に対応した学校づくりと教師の力量形成について、提案し示唆した。とりわけ、教師の力量形成における知見として、学校評価の参画者として学校への愛着と誇りを持った教員の育成について提案した。
８. 子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発～「幼小接続７週間モデル案（第２次）」作成を通して～	単独	平成 23 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 20 回大会（於:岐阜聖徳大学）	幼小連携にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的とするとして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム幼小接続７週間モデル案（第２次）」作成した。作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について知見を述べた。具体的には、就学後の 18 日案、第１週～5 週までの生活科を基軸とした実践事例を提示した。適応指導のみの考えでない幼児教育の育ちをつなぐための新たなスタートカリキュラムの考えを提案した。
９. 子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～「入学後の子どものとまどい」に着目して～	単独	平成 24 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 21 回大会（於:徳島大学）	子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「幼小接続カリキュラム（就学前）」を作成。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、「とまどい」マトリクスを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善手立てとして、幼児教育と小学校教育に関わる教員の混合グループワークショップにおいて、研修会でも活用できることを示唆した。
１０．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅳ）～「入学後の子どもの戸惑い」を見通した一日体験入学～	単独	平成 25 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 22 回大会（於: 神戸大学附属小学校・附属明石小学校）	継続研究の４年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」の作成プロセス及びその一例として「一日体験入学」の活動案を提示した。とりわけ、「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。
１１．「子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小中の接続－」	単独	平成 26 年 8 月	人間教育学会「学校間接続分科会」（於:奈良学園大学）	幼・小・中学校にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に接続を推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的に考察し、「汎用性」のある接続期のカリキュラムモデル作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について、新たな知見を述べた。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　西 辻　正副

研究分野	研究内容のキーワード
教育学，初等中等教育に関する実務	国語科教育，教育課程，学習評価，学校運営，教育行政

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）大学の授業における工夫	平成26年4月 ～ 現在	各時間の冒頭に目標を明確に学生に示し，終了時には目標の実現の状況を振り返る時間をとっている。学生が自ら課題を持ち，ペア，グループで考える時間，学生自らが考えなどを説明する時間を大切にし，主体的に取り組むことができるようにしている。 ＩＣＴも効果的に活用している。 このような工夫を通して，論理的に思考し，判断し，表現する力などの主体的に学び考える力，多様性を共有し，他者と協働する力等を育成することができるようにしている。
2）文部科学省主催事業における講義等の工夫	平成15年4月 ～ 平成26年3月	学習指導要領説明会，各種研究協議会等（一人で１～２日を担当することもある）で講師を務めるときは，パワーポイント等を用いた一方的な説明にならないようにし，参加者の事例発表や，ペアやグループによる協議・演習を取り入れるようにしている。 協議については，模造紙などに協議内容をまとめるようにし，そのまとめを用いて，ミニポスターセッションのように，グループ協議後の交流を行っている。 また，事前提出課題を課すとともに，講義・協議等を各地域の研修でどのように生かしたかについても状況を把握するようにしている。 （文部科学省主催の学習指導要領説明会，各種研究協議会等）
3）外部講演での工夫	平成15年4月 ～ 現在	外部で講演する場合，主催者からは，まず話をし，最後に質疑応答という形を提示されることが多い。私は，それだけではなく，聞き手が聞いているだけということにならないよう，話の途中に課題を提示して考えさせたり，隣の人と私のそれまでの話の内容について対話させたりするなど（グループ活動ができるような場合は，それも行っている），聞き手の活動を必ず入れることにしている。なお，多くの場合，パワーポイントを使用し，印刷した資料も併せて用いている。 各教科等の言語活動の充実や，学習評価について話すことも多い。この時には，聞き手が自分の指導法を振り返ることができるようなワークシート的な資料を用意し，例えば数学の課題を提示し，実際に解いてもらい，数学的な表現について実感を伴って考えるなど，知識を与えるだけのものとならないよう，話の展開や，資料づくりを工夫している。 独立行政法人教員研修センターの研修講座（国語力向上指導者養成研修等）では，事前提出課題も課している。 （独立行政法人，地方公共団体，各学校，各種研究団体等の主催事業）

３）ライブ配信，ホームページ掲載	平成15年4月 ～ 現在	外部での講演の場合，主催者によるライブ配信，講演映像や使用した資料のホームページ掲載が行われている。 （独立行政法人，地方公共団体等）
４）教育機関における教育経験	平成15年4月 ～ 現在	独立行政法人教員研修センター，都道府県，政令指定都市教育センター等の研修講座において，平成15年度以降継続して講師を務めている。 平成20年度には，群馬大学教育学部で非常勤講師を務め，平成26年度からは，奈良学園大学に勤務している。
２　作成した教科書，教材		
１）パワーポイント等による資料	平成15年4月 ～ 現在	講義等に向けて，パワーポイント等で教材や資料等を作成している。内容は，国語科教育，教育改革の動向，学校経営，学習指導要領改訂，言語活動の充実，学習評価の改善などであり，国レベルでの最新の情報を含め，テーマごとに作成している。 また，ＰＩＳＡ調査や全国学力・学習状況調査等，各種調査データを用いた資料も作成している。 （文部科学省，独立行政法人，地方公共団体，各学校，各種研究団体等の主催事業）
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）受講者の評価	平成15年4月 ～ 現在	講演等では，主催者から受講者のアンケート結果を知らせてくれる場合もあるが，どの講演においても，おおよそ７から８割以上の受講者が，肯定的な評価をしてくれている。 （独立行政法人，地方公共団体，各種研究団体等の主催事業）
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）研修指導	平成15年4月 ～ 現在	文部科学省主催の，中央，地方の新学習指導要領説明会，各種研究協議会等の講師として，学習指導要領の普及，啓発，学校教育の改善充実を担っている。 （再掲）独立行政法人教員研修センター，都道府県，政令指定都市教育センター等の研修講座において，平成１５年度以降継続して講師を務めている。
２）研究開発	平成15年4月 ～ 現在	教育課程実施状況調査，特定の課題に関する調査（国立教育政策研究所），全国学力・学習状況調査（文部科学省，国立教育政策研究所）等の枠組みの研究開発の段階から参画し，実施に当たった。 大学入試センターの新しい形式の試験開発研究に参画している（平成24年度に試作した問題の是非を検討する調査を実施。現在分析中。）。関連する，科研，基盤研究(A)「「中等教育の多様化」に対応したコア学力の評価・測定を行うため技術的基盤の構築」「高大接続に資する多面的・総合的な学力評価・測定を行うための新たな技術的基盤の構築」にも参画し，ipad-miniを用いて，映像を視聴して答える試験問題の開発（平成26年度にモニター調査を実施）等を行っている。 フランスバカロレア日本語オプションの枠組み作りと実施にも参画していた（平成15年度～25年度）。
３）講演等	平成15年4月 ～ 現在	独立行政法人，各教育委員会・学校，各種研究団体やＰＴＡ団体等における講演や指導助言等。
５　その他		
１）試験問題の作成等	平成15年4月 ～ 現在	教育課程実施状況調査，特定の課題に関する調査（国立教育政策研究所），全国学力・学習状況調査（文部科学省，国立教育政策研究所），高卒認定試験（文部科学省）等への参画。 大学入試センターの試験開発研究，フランス共和国バカロレア日本オプション，高大接続システム改革会議新テストワーキンググループ等への参画。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）学位 教育学修士	昭和55年3月	大阪教育大学 第497号 修士論文題目「垣内松三　国語読本論の研究」
2）教員免許 小学校教諭１級普通免許状 中学校教諭１級普通免許状（国語） 高等学校教諭２級普通免許状（国語） 中学校教諭専修免許状（国語） 高等学校教諭専修免許状（国語） 免許状更新講習免除証明書	 昭和53年3月 昭和53年3月 昭和53年3月 平成元年8月 平成元年8月 平成21年7月	 大阪府教育委員会　昭52小1普第314号 大阪府教育委員会　昭52中1普第1467号 大阪府教育委員会　昭52高2普第1578号 奈良県教育委員会　平1中専修第2号 奈良県教育委員会　平1高専修第14号 神奈川県教育委員会　平21第1060号
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　教育課程調査官	平成15年4月 ～ 平成26年3月 （平成24年4月からは併任）	小・中・高等学校の教育課程の実施に関する政策に係る基礎的な事項の調査及び研究。国内の教育関係機関及び教育関係者に対し，小・中・高等学校の教育課程の実施に関する専門的な援助及び助言に携わった。教育課程調査官（平成24年4月以降は併任）の職務として携わった主なものは次のとおりである。 この間，小・中・高等学校の国語教育についての研究を継続し，口頭発表及び論文発表をした。
・教育課程実施状況調査，特定の課題の調査等，各種調査の問題作成，実施，分析，報告作成		各種調査の協力者会議を運営し，問題作成，実施，分析，報告作成に当たった。作成した資料は次のとおりである。 ・　平成13年度小中学校教育課程実施状況調査報告書 中学校国語（平成15年） ・　平成14年度高等学校教育課程実施状況調査報告書 国語（平成16年） ・　平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査結果の概要及び教科別分析（平成17年） ・　特定の課題に関する調査（国語）調査結果（小学校・中学校）（平成18年） ・　平成17年度教育課程実施状況調査（高等学校）結果概要　国語　（平成19年） ・　特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果～21世紀グローバル社会における論理的に思考する力の育成を目指して～（平成25年）
・学習評価の改善のための参考資料作成		平成11年改訂，平成21年改訂のそれぞれの学習指導要領に対応して，学習評価の改善のための参考資料の作成を担当し，協力者会議の運営，普及・啓発等に当たった。作成した資料は次のとおりである。 ・　評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（高等学校）（平成16年） ・　評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料　（高等学校　国語）（平成24年）
・研究指定校事業等の担当		教育課程研究指定校や学力把握に関する研究指定校等事業については，計画に基づく実践研究が適切に行われるよう，研究協議会や，学校訪問等を通して，毎年度指導・助言してきた。例えば平成24年度の担当は次のとおりであった。 国語（小・中・高等学校），総合的な学習の時間（高等学校），幼稚園，教科横断（高等学校），思考力・判断力・表現力の育成（高等学校），学習評価（小・中・高等学校） また，国際的な調査の実施，読書活動推進事業（学校図書館活用）などにも参画してきた。

５）国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部　（命）学力調査官 ・全国学力・学習状況調査の企画，問題作成，実施，採点，分析，報告作成	平成18年10月 ～ 平成24年3月	全国学力・学習状況調査の枠組み作りから携わり，問題作成，実施，分析，採点等を担当した。また，次のような資料等の作成に参画した。 ・　平成19年度～平成22年度 全国学力・学習状況調査 解説資料 全国学力・学習状況調査 調査結果概要 全国学力・学習状況調査 報告書 平成23年度は，問題は作成したが一斉実施は中止。
６）文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官 ・学習指導要領の改訂と普及・広報 ・文部科学省主催の各種協議会等の講師 ・月刊誌「中等教育資料」の編集，執筆 ・研究開発学校の指導 ・読解力向上，言語力向上等	平成15年4月 ～ 平成26年3月 （併任）	小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校における教育の教育課程の基準の設定に関する調査並びに教育課程の基準に係る専門的、技術的な指導及び助言に携わった。主な担当は高等学校国語。 平成20,21年の学習指導要領の改訂に取り組むとともに，その普及・啓発を行った。 この間，中央教育審議会初等中等教育分科会の教育課程部会，小・中・高等学校部会，国語専門部会等の資料作成や部会への出席，言語力育成協力者会議等の各種会議の資料作成や会議への出席，学習指導要領作成協力者会議の運営などを通して，学習指導要領の改訂に携わった。職務として執筆，作成に関わった主なものは次のとおりである。 ・　小・中・高等学習指導要領（平成20,21年告示） ・　小・中・高等学習指導要領解説国語編（平成21,22年） ・　言語活動の充実に関する指導事例集（小・中・高等学校編）（平成23・24年） 学習指導要領の告示後は，中央説明会及び各都道府県における地方説明会等の講師として，総則をはじめとした学習指導要領改訂全般にわたる説明，また国語科の改善についての説明を行ってきた。 文部科学省主催で，各年度１又は２回程度開催される各教科等担当指導主事連絡協議会，各教科等教育課程研究協議会等では，国語部会の講師を務めた。同じく文部科学省主催が毎年開催している，全国高等学校入学者選抜改善協議会，全国高等学校教育改革研究協議会等，各種協議会の講師も務めた。 文部科学省教育課程課の月刊誌「中等教育資料」の編集に携わるとともに，ほぼ毎月，高等学校国語に係る内容を中心に執筆を続け，学習指導要領の普及・啓発をはじめ，学習指導要領に基づく指導を見据え，授業の改善について考究してきた(「教育研究業績書」の「研究業績等に関する事項」の「論文」の「その他」の「教育実践書・研究誌等に掲載の論文」参照）。この間，平成21年度は「中等教育資料」の編集長を務めた。 例えば次のような研究開発学校の指導を担当し，実地調査等も行った。 ・　大分県立安心院高等学校 外９校 「世界基準の確かな学力を育成する小中高一貫した系統性ある教育課程の創造」 ・　新潟市立新潟小学校 「地域社会と一体となって持続可能な社会の担い手を育成するための，基礎的資質・技能を育てる教育課程，指導目標，指導内容，指導方法の研究開発」 2003年PISA調査等の結果を受け，PISA･TIMSS対応ワーキンググループ委員として，次の資料の編集，執筆に携わった。 ・　読解力向上に関する指導資料（平成18年） また，文部科学省の言語力育成協力者会議の資料作成や，報告書案の作成にも携わった。

・国語力向上		平成15年度以降，国語指導力向上を目指した文部科学省（15,16年度），独立行政法人教員研修センター（17年度から）主催の研修講座の企画，運営に携わり，講師も務めている。また，文部科学省の教育課程課の学力向上推進事業等の推進校の指導も担当している。 なお，文化審議会国語分科会及び次の小委員会にも出席している。 国語研究等小委員会，漢字小委員会，敬語小委員会，読書活動等小委員会，国語教育等小委員会 これらの分科会，小委員会の審議内容のとりまとめに当たっては，国語担当の教科調査官として意見具申も行った。
・常用漢字表改定への対応		「常用漢字表改定に伴う学校教育上の対応に関する専門家会議」の運営に携わり，「常用漢字表改定に伴う学校教育上の対応について」（まとめ），「常用漢字表の改定に伴う中学校学習指導要領の一部改正等及び小学校，中学校，高等学校等における漢字の指導について（通知）」（平成22年11月30日付け）のとりまとめを担当した。 また，「常用漢字表の改定に伴って追加された常用漢字の音訓及び付表の語についての学校教育における取扱いについて（通知）」（平成23年3月30日付け）のとりまとめも担当した。
・海外事情視察		独立行政法人教員研修センター「平成17年度　国語力向上研修　調査研究団」（平成17年11月）の団長としてドイツ（ベルリン，ミュンヘン），フランス（パリ）を訪問し，教育行政機関，研究機関，初等中等教育学校において，国語力向上の取組について調査を行い，報告書をまとめた。 独立行政法人教員研修センター「平成23年度　教育課題研修指導者海外派遣プログラム　国語力・読解力」（平成23年10月）の団長としてアメリカ（ワシントン，ニューヨーク）を訪問し，教育行政機関，研究機関，初等中等教育学校において，国語力向上の取組について調査を行った。報告書には，アメリカの「Common Core State Standards」の「英語」部分の翻訳を掲載している。
7）群馬大学教育学部講師（非常勤）	平成20年5月 ～ 平成21年3月	「国語科教育法」において，教育課程，学習指導法等について講義した。
8）文部科学省初等中等教育局　視学官	平成24年4月 ～ 平成25年3月	初等中等教育（幼稚園，小学校，中学校，高等学校，中等教育学校及び特別支援学校における教育）全般に係る専門的，技術的な指導及び助言に携わった。
担当業務 （◎は西辻正副が主担当）		6）で述べた教科調査官としての職務に加え，視学官として平成24年度に担当した主な職務は次のとおりである（複数の視学官で担当。◎は西辻正副が主担当）。
・学校教育の実情調査		・学校教育の実情調査 各都道府県を訪問して行う調査。平成24年度分については準備を行ったが事情により実施せず，25年度に延期
・教育課程編成及び実施		・教育課程編成及び実施 学習指導要領の実施，学力向上にかかる対策，学習評価の改善，研究開発学校の指導，教育課程特例校に係る内容などを担当
・指導方法や指導体制の工夫改善		・指導方法や指導体制の工夫改善 習熟の程度に応じた指導，発展的・補充的学習，少人数指導，地域人材の活用，社会教育施設の活用に係る内容などを担当
◎幼児教育の推進		◎幼児教育の推進 幼・小の接続，認定こども園，子育て支援，預かり保育の充実，幼児教育に関する調査研究などに係る内容を担当
・情報教育の充実		・情報教育の充実 情報モラル教育，デジタル教材の作成・活用など係る内容を担当

◎地方教育行政 ◎全国学力・学習状況調査 ・その他の担当 ・担当教科等 ・講演等 ・研究開発学校の指導 ・中央教育審議会等，各種会議への出席		◎地方教育行政 地方教育行政に関する諸課題への対応に係る内容などを担当 ◎全国学力・学習状況調査 平成25年度以降の調査の枠組みや実施に係る内容などを担当 ・その他の担当 コミュニケーション教育，言語活動，学校図書館教育，読書活動，ＮＩＥ，伝統文化に関する教育の充実，生徒指導・教育相談・体験活動の充実に係る内容などを担当 ・担当教科等 国語，書道，家庭，技術・家庭，情報，職業に関する専門教科，総合的な学習の時間，特別活動 中央，地方における教育課程説明会や，上記担当に係る各種協議会，研修会等において講義等を行った。例えば，独立行政法人教員研修センターの，「学校組織マネジメント指導者養成研修」では教育改革についての基調講演等を行った。 次の２校の研究開発学校の指導を担当した。 ・　神奈川県立光陵高等学校 「持続可能な循環型社会の構築に必要な，総合的な考察力と豊かな発想力，実践的読解力，多彩な表現力などの教養を身に付け，論理的思考力とコミュニケーション能力を育成するための教育課程等の研究開発」 ・　新潟市立新潟小学校 「地域社会と一体となって持続可能な社会の担い手を育成するための，基礎的資質・技能を育てる教育課程，指導目標，指導内容，指導方法の研究開発」 中央教育審議会の総会をはじめ，次のような分科会，部会等に出席した。 初等中等教育分科会（教育課程部会，高等学校教育部会等），大学分科会，教育振興基本計画部会，教員の資質能力向上特別部会，高大接続特別部会等。 また，次のような会議等にも出席した。 全国的な学力調査に関する専門家会議，大学設置認可の在り方の見直しに関する検討会議，日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議，障がいのある学生の修学支援に関する検討会議，育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会議，外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定に関する検討会議，文化審議会国語分科会，同分科会の国語課題検討小委員会，日本語教育小委員会等。
９）文部科学省初等中等教育局　主任視学官 ・海外事情視察	平成25年4月 ～ 平成26年3月	初等中等教育（幼稚園，小学校，中学校，高等学校，中等教育学校及び特別支援学校における教育）全般に係る専門的，技術的な指導及び助言に携わる視学官の職務の総括，連絡調整を担当した。 視学官の職務については，その全般を総括するとともに，前年度担当した職務，併任している教科調査官，教育課程調査官の職務も引き続き担当した。 平成25年11月に，外務省・文部科学省が共催した北米・欧州の日本人学校校長会に出席し指導助言を行うとともに，海外の日本人学校の教育について視察。
４　その他		
特記事項なし		

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
１　「日本語学」特集テーマ別ファイル６　IT関連	共著	平成１７年６月 平成２０年８月 （普及版）	明治書院	日本語学に関する「IT関連」に関する論考を収めたもの。 Ａ５判　全261頁　　普及版は全155頁 編者：宮地裕，（普及版は甲斐睦朗も） 共著者：町田守弘，西辻正副，他29名（普及版は13名） 「学校教育におけるメディアリテラシーとことばの教育のこれから」を執筆（単著）。 本人執筆部分　pp.158 － 166 普及版　pp.147 － 155 学校教育全体及び国語科教育におけるメディアリテラシーの育成について考察した。メディアを用いた表現能力の育成と，メディア受容における批判的(ｸﾘﾃｨｶﾙ)な解釈（読み取り）の能力，態度の育成の重要性を述べた。
２　高等学校新教育課程の授業と評価　　国語	共著	平成１７年７月	学事出版	平成15年度から実施の高等学校学習指導要領における授業と評価に関する論考を収録。 Ａ５判　全267頁 編者：田中孝一 共著者：鳴島甫，西辻正副，他27名 「『古典講読』における指導と評価の改善」を執筆（単著）。 本人執筆部分　pp.216 － 226 「古典講読」の指導の改善について考察した。古典に親しむという科目の目標を踏まえ，四季をテーマとした年間指導計画を提案し，同時に観点別評価を用いた評価の方法について述べた。
３　「読解力」とは何か	共著	平成１８年３月	三省堂	ＰＩＳＡ調査における「読解力」についての論考を収めたもの。 Ｂ５判　全111頁 編者：横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 共著者：高木展郎，田中孝一，西辻正副，他18名 「PISAの問題を読み解く」を執筆（単著）。 本人執筆部分　pp.12 － 17 2000年のPISA調査で公開された問題について考察した。問題の特徴として，素材は文章だけではない，単に読んで理解するだけではない，内容だけを問うているのではない等を指摘した。それを踏まえ，調査結果から課題のある問題の特徴を具体的に述べ，理解し，思考し，表現するという過程を踏んだ，指導の改善への方向性を明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　中学校・高等学校ＰＩＳＡ型「読解力」	共著（編者）	平成１９年７月	明治書院	中・高等学校の各教科で連携して取り組む，PISA型「読解力」育成のための効果的な指導についてまとめたもの。外国の事例も紹介している。 Ａ５判　全227頁 監修：田中孝一 編者：西辻正副，冨山哲也 共著者：入部明子，西辻正副，他31名 「高等学校におけるＰＩＳＡ型『読解力』指導の意義と方法」と「高等学校・国語科の実践の在り方＜成果と課題＞」 を執筆（全て単著）。 本人の執筆部分　pp.107 － 112 ，pp.113 － 118 PISA型「読解力」の向上について考察し，基本的な考え方を整理するとともに，『読解力向上に関する指導資料』（文部科学省）に示された７つの「指導のねらい」を実現するため，中・高等学校において，国語科を中心とした実践例を示した。
5　評価規準をどう創るか　中・高等学校編（国語の授業を変える１）	共著（編者）	平成２３年７月	明治書院	国語の授業を変えることをテーマとした全３巻のうちの第１巻。学習評価を指導の改善に生かすという視点で編集した理論編。 Ａ５判　全238頁 編者：西辻正副 共著者：鳴島甫，高木展郎，西辻正副，他5名 全体の編集を担当するとともに，「新教育課程で高等学校国語が目指すこと」，「高等学校国語の指導改善」，「指導要録における評価の観点の史的変遷」を執筆（全て単著）。 本人執筆部分はpp.13-16，pp.166-179，pp.226-238 新教育課程における学習評価の基本的な考え方や改善の経緯を整理し解説した。それらをきちんと理解することで，評価規準の設定や指導計画の作成が教育課程に沿ったものとなることを示した。併せて，学習評価と言語活動についても触れている。
6　評価規準をどう生かすか 高校 国語総合編 （国語の授業を変える２）	共著（編者）	平成２４年７月	明治書院	国語の授業を変えることをテーマとした全３巻のうちの第２巻。「国語総合」における学習評価の改善事例を15例掲載している。 Ａ５判　全173頁 編者：西辻正副 共著者：西辻正副，佐藤和彦，他19名 全体の編集を担当するとともに，「国語総合における指導と評価（事例を読むために）」を執筆（単著）。本人執筆部分 pp.8 － 15 各事例は，次の段階を踏んで作成していることを述べた。 Ⅰ　当該単元の目標を設定し，単元の評価規準を設定する。 Ⅱ　目標を実現するのにふさわしい言語活動，教材を取り上げる。 Ⅲ　当該単元の授業で実際に用いる具体的な評価規準を設定する。 Ⅳ　当該単元の各次における指導と評価の展開（評価方法を含む）を計画する。 更に，「関心・意欲・態度」の評価規準や評価時期を工夫していることも述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７　評価規準をどう生かすか 高校 選択科目編 （国語の授業を変える３）	共著 （編者）	平成２５年 ７月	明治書院	国語の授業を変えることをテーマとした全３巻のうちの第３巻。選択科目における学習評価の改善事例を15例掲載している。 Ａ５判　全185頁 編者：西辻正副 共著者：西辻正副，佐藤和彦，他19名 全体の編集を担当するとともに，「高等学校国語の選択科目における指導と評価（事例を読むために）」を執筆（単著）。本人執筆部分　pp.８ － 15 学力の要素と評価の観点の関係を述べ，領域別に示されていない選択科目の指導事項と評価の観点との対応，指導事項と言語活動の関係について論じた。また，指導事項の十分な理解と指導の重点化，指導と評価の計画を作成するための手順について述べた。
８ 希望の教育　持続可能な地域を実現する創造的復興教育	共著	平成２６年 ３月	東洋館出版社	東日本大震災からの東北の復興支援に携わりつつ，復旧を越えた教育の復興を目指す創造的復興教育にの取組をまとめ，今後の方向性を論じたもの。 Ｂ６判　全262頁 著者：文部科学省 創造的復興教育研究会 この研究会は，文部科学省の有志による任意の研究会（28名）。会長は前川喜平（初等中等教育局長（当時））。西辻正副は，そのメンバーの一員。 全体が共同執筆であり，本人執筆部分の抽出は困難。なお，本人は，全体の文章表現の調整等を行った。
（学術論文等）				
「学会誌等に掲載の論文」				
１　国語科教育の改善へ向けての動き	単著	平成１９年 １１月	「富山大学国語教育」 （富山大学国語教育学会） 第32号　pp.１ － 10	教育課程の改善へ向けての審議の状況を踏まえ，国語科の改善の方向性について考察した。まず，現行学習指導要領の理念，子どもたちの現状と課題を押さえた後，改正基本法等を踏まえた学習指導要領改訂のポイントを６点示し，それぞれについて具体的に述べた。さらに，各教科等における言語活動の充実について述べ，最後に国語科の現状と課題，国語科の改善の方向性について，小・中・高等学校にわたって述べた。
２　高等学校における「生徒の学習の評価」の現状と改善の方向	単著	平成２０年 ３月	「月刊国語教育研究」 （日本国語教育学会） No.431　pp.22 － 27	高等学校学習指導要領（平成11年告示）による「生徒の学習の評価」の現状と改善の方向性について考察した。 現在行われている「評価」の考え方について整理したあと，「目標に準拠した評価の「目標」とは，学習指導要領に示された，目標，内容（指導事項）であるとの認識」「目標としたことの実現を図るために指導し，その実現状況を評価規準に基づいて観点別に評価するという認識」「教員の共通理解のもと指導や評価を行うという認識」「ペーパーテストによる評価だけではなく，日常の学習場面での評価も重視しようという認識」「関心・意欲・態度も育成すべき能力であるとの認識」などが広がっていることを実践例に基づいて述べ，更なる評価の改善のための視点を述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　高等学校学習指導要領改訂案のポイント －国語を中心に－	単著	平成２１年３月	「月刊国語教育研究」（日本国語教育学会）No.443　pp.28 － 31	新高等学校学習指導要領について，改訂の基本的な考え方，国語の改訂案のポイントについて考察した。国語科については，教科の目標の改善，科目構成の改善，各科目の目標の改善，言語活動の充実，言語文化に関する指導の重視，学習の過程と系統性に配慮した内容の改善，読書活動の充実について述べた後，各科目の内容について概略を示した。
4　指導要録における「評価の観点」の史的変遷（査読付）	単著	平成２２年９月	「国語科教育」（全国大学国語教育学会）第68集　pp.75 － 82	指導要録における国語科の評価の観点の変遷を整理し，学習評価の改善の経緯を概観した。その際，それぞれの通知に基づき，枠組みや趣旨についてと，評価の観点と学習指導要領の領域構成との関係についての２つに分けて述べた。その結果，次のような点が明らかになった。 (1) 観点別評価は，学習評価を指導の改善に生かすため戦後すぐに導入されたが，実施上の問題が指摘されるなどの曲折を経て，再び重視されるに至った。 (2) 観点別評価の変遷は，目標に準拠した評価を定着，充実させる歩みであったとともに，学習評価を指導の改善に生かすことの難しさを克服する歩みでもあった。 (3) 国語科の評価の観点は，教科の特性，それぞれの時期に重視した内容を反映している。 　このように，指導要録の改訂は，学習指導要領改訂の趣旨を反映するだけではなく，学校における評価の改善の動きそのものも反映していることを述べた。
5　国語科における「評価の観点の趣旨」の変遷（査読付）	単著	平成２３年３月	「国立教育政策研究所紀要 」　（国立教育政策研究所）第140集　pp.165 － 180	国語科の評価の観点の趣旨に焦点を当て，主に昭和戦後期の評価の観点の趣旨を見直し，それぞれの時期のありようを省みることで，現代につながる意義を見いだした。まず，指導要録における，個人内評価としての「所見欄」の時期として，昭和20年代の評価の観点及びその趣旨の萌芽期から昭和40年代までについて考察した。昭和30年代の教科の目標に基づく評価の観点の趣旨の時期，昭和40年代の学年目標や指導事項も踏まえた評価の観点の趣旨の時期へという推移をみることで，評価の観点の趣旨は，不十分ながらも学習指導要領に着目し続けていたことが明らかになった。その変遷を踏まえ，昭和50年代以降についても考察した。その結果，評価の観点及びその趣旨についても小・中・高等学校の系統性が高まり，情意面に係る評価についても，教科の目標を全面的に受けるという方向性が見られるようになってきたことが明らかになった。
6　これからの時代に求められる能力とその育成に向けた指導	単著	平成２４年１２月	「中西一弘先生傘寿記念論集」（大阪国語教育研究会）pp. 13-22	閣議決定，中央教育審議会や各府省の会議等で提言されている，これからの時代に求められる能力について整理し，これらの能力を育成するために，初等中等教育において育成すべき能力を明確にした。とりわけ，高等学校の学習指導においては，課題を解決したり仮説を検証したりする手立てを生徒に考えさせる，　解を限定しない課題を設定する，教科を超えた知識の関連付けをする，不必要な情報を捨てたり必要な情報を選んだりするなどが，今後特に求められることを論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７　解答形式とパフォーマンスに関する実証的研究 （査読付）	共著	平成２５年３月	「大学入試研究ジャーナル」（全国大学入学者選抜研究連絡協議会，独立行政法人大学入試センター） No.23　pp. 143-150	共著者：安野史子，浪川幸彦，荒井克弘，西辻正副，他８名。共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。 ペーパーテストで測れる能力の，解答形式による違いを実証的に調べた。大学１年生を対象に，同一問題を，数学は多肢選択，自由記述，大学入試センター試験の形式，国語は多肢選択，自由記述，条件付き記述の形式に作り分けて調査した。国語では，多肢選択の正答率が他よりも高い傾向が見られたが，数学では，特定の解答形式が高い（低い）などの特徴は見られなかった。
８　高等学校新学習指導要領の実施　「論理的な思考」についての調査結果の公表	単著	平成２５年７月	「月刊国語教育研究」（日本国語教育学会） No.495　pp.66 － 67	高等学校新学習指導要領の実施に係る現状と課題，国立教育政策研究所が行った特定の課題に関する調査「論理的思考」の結果分析について述べた。
９　教育再生実行会議の第４次提言から－高等学校教育の質保証と高大接続を中心に－	単著	平成２６年２月	「月刊国語教育研究」（日本国語教育学会） No.502　pp.66 － 67	教育再生実行会議の第４次提言に関して，高等学校教育の質保証と高大接続を中心に，その内容と今後の展望について述べた。
１０　PISA2012の結果公表　グローバル化と日本人のアイデンティティに関する教育	単著	平成２６年３月	「月刊国語教育研究」（日本国語教育学会） No.503　pp.66 － 67	PISA2012の結果についての分析と　英語教育改革に関わって，グローバル化と日本人のアイデンティティに関する教育について述べた。
１１　これからの時代に求められる能力とその指導 （査読付）	単著	平成２６年５月	「新しい漢字漢文教育」（全国漢文教育学会） ５８号　pp.10 － 22	６の論考を受けて，これからの時代に求められる能力とその指導について，国語科の指導，取り分け，古典の指導について論じた。具体的な指導改善の視点を示すとともに，古典の授業改善のためには、国語科だけでなく他教科の教員も交えた、授業参観、授業研究を行うことなどを述べた。
１２　平成26年度，文部科学省の重要施策から	単著	平成２６年８月	「月刊国語教育研究」（日本国語教育学会） No.508　pp.66 － 67	平成26年度における文部科学省の重要施策について，初等中等教育局関係予算をを中心にして述べた。
１３　学習指導要領改訂を見据えた動き	単著	平成２６年１２月	「人間教育学研究」（奈良学園大学人間教育学会） 第２号　pp.9 － 21	平成26年9月の時点における，次期の学習指導要領改訂を見据えた動きについて，次の点から論じた。まず，学習指導要領改訂の歴史的経過と，現行学習指導要領の改訂の際に取られた手順について述べた。次に，学習指導要領改訂に向けた個別の検討項目の中から，道徳教育，英語教育などを取り上げ，合わせて今後の見通しについて述べた。３番目に，育成すべき資質・能力を踏まえるという考え方を取り入れた，次期の学習指導要領改訂の方向性と現段階における動きについてまとめた。最後に，次期の学習指導要領改訂の動きの中での授業改善へ向けた考え方について，学習指導要領の趣旨の実現という角度から述べた。
１４　高大接続に資する学力評価測定の試み（国語）	単著	平成２７年３月	「奈良学園大学紀要」（奈良学園大学） 第２号　pp.57 － 68	国語において，解答形式により試験のパフォーマンスに違いがあるのか？ということをテーマに，試験によって測れる能力の解答形式による違いを実証的に調査することを通して，高大接続に資する学力評価測定について考察した。解答形式を，多肢選択形式と記述形式とに分け，さらに，記述形式を自由記述形式と条件を付した記述形式（一部に条件選択形式を含む。）とに細分化し，３つの形式による難易度（得点）の差と，評価内容の違いを規定する要因について分析した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１５　新たな試験の、レベル(難易度)、測定すべき能力の検討	共著	平成２７年３月	「入学者選抜研究に関する調査室研究成果報告書」 独立行政法人　大学入試センター	共著者：安野史子，小牧研一郎，島田康行，高木展郎，藤森裕治，吉田佳恵，岡本和夫，浪川幸彦，西村圭一，根上生也，真島秀行，西辻正副。 Ａ４判 全230頁 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。 高校までの教育と大学教育との接続が課題となる中，新たな試験のモデルを検討し，国語と数学について試みた。国語は，「国語総合」のうち，「話すこと・聞くこと」の内容を測ることを目標にしたコミュニケーション試験，数学は特定の科目内容からの出題でない総合的な出題，社会生活などの現実場面を題材にした数理論理力，問題解決能力などを測ることを目標とした試験とした。また，大学入試センター試験で用いているマークシート及び英語リスニングIC プレーヤーを用いて行う試験とし，現在のセンター試験で測られていない能力をみるオプション的試験という位置付けで考えた
「科学研究費補助金研究成果報告書」				
１　「試験問題の形式とパフォーマンスに関する研究」	共著	平成２７年３月	平成21～24 年度日本学術振興会科学研究費補助金　基盤研究(A)研究成果報告書 「中等教育の多様化」に対応したコア学力の評価・測定を行うための技術的基盤の構築 (課題番号21240069)	研究代表者　安野史子 研究分担者として参画。 Ａ４判　　全370頁 大学入試の数学においては「選択肢形式」の問題は「穴埋め形式」にとってかわり，ほとんど見かけることなく，また，作題経験者も皆無になってきた。そこで，数学問題では，記述形式がより広範な能力が測れることは言うまでもないが，「穴埋め形式」が「選択肢形式」よりも優れていると思い込んでいることはないのかという問題意識から，改めて「選択肢形式」，「穴埋め形式」，「記述形式」の三つの形式による試験のパフォーマンスにどの程度の違いがあるのかを検証した。一方，国語においては，「選択肢形式」と「記述形式」が代表されるが，「選択肢形式」の中には組合せ選択であったり，「記述形式」の中には字数制限やキーワード指定等の条件が付されたりするものがある。そこで，国語についても，「解答形式により試験のパフォーマンスに違いがどの程度あるのか？」を見ることにした。本報告書の内容は，一次分析結果の段階にとどまっているが，そこから見えることも少なくはない。
「教育実践研究誌等に掲載の論文」				
１　読解力の向上を目指した指導の改善	単著	平成１７年１０月	「中等教育資料」 （文部科学省） 10月号　pp. 14 － 17	PISA調査における読解力と，その向上を目指した指導について考察した。国語科で従来用いられてきた「読解」との違いを明らかにし，改善の方向を大きく３点示し，それらをすべての教科で行う必要があることを述べた。その際，現状を評価することから始めることを提言し，過重な負担感を持つことがないよう配慮した。
２　言葉の力を付けるために	単著	平成１８年４月	「やまと」 （奈良県教育振興会） 357･358合併号　pp. 46 － 49	中央教育審議会教育課程部会が平成18年2月に公表した「審議経過報告」で示した「言葉」と「体験」の重視について考察した。言葉が，思考力，判断力，表現力など，生きる力，とりわけ確かな学力を育成する鍵となることについて述べ，言葉の力を身に付ける指導について提言した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３　各教科等の改善／充実の視点 国語 高等学校国語の指導の改善(1)～(55)	単著	平成２０年３月から 平成２６年６月まで	「中等教育資料」 （文部科学省） 平成20年3月号から 平成26年6月号 計110ページ	新学習指導要領に基づく指導を見据え，授業の改善について考察している。高等学校国語科のこれまでの史的変遷についても考究し，指導実態を踏まえ，現在まで，言語活動の充実，古典指導の充実，新学習指導要領の各科目の内容，学習評価などについて述べた。
４　各教科等における新しい教育課程の改善の方向　国語	共著	平成２０年４月	「中等教育資料」 （文部科学省） 4月号　pp. 22 － 25	教育課程の改善の方向について考察した。国語科の現状と課題，それを踏まえた改善の基本方針と改善の具体的事項について述べた。 共著者：西辻正副，富山哲也 西辻は高等学校に係る部分を執筆した。
５　新高等学校学習指導要領で国語科が目指すもの	単著	平成２１年３月	「全国連会報」　（全国高等学校国語教育研究連合会） 第63号　pp. 1 － 3	新高等学校学習指導要領について，改訂の基本的な考え方，国語の改訂について考察した。国語科については，教科の目標の改善，各科目の改善，言語活動の充実による授業改善，古典指導の改善などについて述べた。
６　新しい授業づくり 高等学校国語の授業改善のための視点	単著	平成２１年４月	「中等教育資料」 （文部科学省） 4月号　pp. 82 － 87	高等学校国語の授業改善について考察した。改善のための視点として， １　各教科，科目等の学習の基本となる言語能力を育成すること ２　我が国の言語文化への理解を深めるために，古典の学習に対する関心・意欲を高めること の２点を示し，高校での具体的な実践例を踏まえて述べた。
７　各教科等の展望　国語	単著	平成２１年５月	「中等教育資料」 （文部科学省） 5月号　pp. 26 － 29	新高等学校学習指導要領国語について考察した。改訂の基本的な考え方，改訂の主なポイント（言語活動の充実，言語文化の指導の重視，読書活動の充実など），各科目の要点などを述べた。
８　高等学校学習指導要領の改訂のポイント	単著	平成２１年５月	「やまと」 （奈良県教育振興会） 393・394合併号　pp. 4 － 7	新高等学校学習指導要領について考察した。改訂の基本的な考え方について述べるとともに，共通性と多様性のバランスという高等学校独自の視点などについて述べた。併せて，移行措置についても触れた。
９　教育行政，学習指導等についてのインフォメーション	単著	平成２１年7月から 平成２６年５月まで （原則隔月）	「やまと」 （奈良県教育振興会） 396～454のうち30回 計60ページ	隔月で，国の施策や，中央教育審議会の審議内容など，教育行政に係ることを中心に述べている。例えば次のような内容を取り上げた。 　国の施策や文部科学関係予算について 　中央教育審議会をはじめとした，各種会議の審議内容について 　国内外の各種調査の結果について 　文部科学省や国立教育政策研究所が編集した指導事例集や参考資料について 　アメリカ合衆国の共通スタンダードなど外国の教育の現状について 　各教科等における言語活動の充実や，キャリア教育・職業教育，　コミュニケーション教育の推進など，学校教育の課題について 　教科書の改善について 　学習評価の改善について 　常用漢字表の改定，それに伴う学校教育上の対応について 　文化関係の施策　　など

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０　高等学校国語における学校図書館などの活用	単著	平成２１年１０月	「学校図書館」（全国学校図書館協議会）No.708　pp.50 － 52	高等学校学習指導要領国語（平成21年告示）における学校図書館の活用，読書に関する指導について考察した。学校図書館を計画的に利用すること，学校図書館や地域の図書館などと連携し，読書の幅を広げ，読書の習慣を養うなど，生涯にわたって読書に親しむ態度を育成すること，情報を使いこなす能力を育成することなど，重点的に改善を図ったことについて述べた。
１１　伝統と文化を尊重する教育の充実	単著	平成２２年１１月	「中等教育資料」（文部科学省）11月号　pp.16	新学習指導要領で充実された伝統と文化を尊重する教育について，中・高等学校国語科の視点から，理念と具体的な方策について述べた。
１２　（PISA調査）「読解力」の結果をどう生かすか	単著	平成２３年３月	「中等教育資料」（文部科学省）3月号　pp.14-17	PISA2009年調査の「読解力」の結果について分析し，その結果を踏まえた学習指導の改善について，具体的な事例を交えて述べた。
１３　各教科等の言語活動の充実を目指して	単著	平成２３年３月	『中高一貫教育における「リテラシー」育成カリキュラム実践研究』（横浜国立大学附属横浜中学校，神奈川県立光陵高等学校）pp.7-14	各教科等における言語活動の充実について，その経緯と必要性，学校全体で取り組むための方策，各教科等における具体的な展開，言語活動と学習評価の考え方などについて述べた。
１４　特徴ある結果を示した学校における学習評価の取組	単著	平成２３年７月	「日本教育」（社団法人日本教育会）7月号　pp.14-17	全国学力・学習状況調査（国語，算数・数学）で特色ある結果を示している小学校，中学校各１校について，学習評価という視点からその取組を分析した。
１５　高等学校の学習評価の充実は，なぜ必要なのか	単著	平成２４年３月	全国連会報　第６６号 pp.2-5	高等学校における学習指導と学習評価について，次のような問題点を指摘し，国語科の授業改善について述べた。 ・評価は，「通知簿の点数付け」，「指導要録の評定付け」であるという意識が強い ・授業の目標が明確ではなく，目標に準拠した評価という考え方が定着していない ・生徒の学習の実現状況がよくない原因を生徒に求めがちで，学習評価を自分の指導を省みる契機にしていない そして，授業改善に学校全体で取り組むこと。校長先生のリーダーシップのもと，教師同士の研修を深め，実践事例を確実に継承すること。授業研究等を通じて教師一人一人の力量を向上させて行くことなどについて述べた。
１６　全面実施に向けた各教科等の実践課題　国語	単著	平成２４年４月	「中等教育資料」（文部科学省）４月号　pp.14-15	全面実施に向けた実践課題として ・　教育課程編成への準備が不十分 ・　総則を国語に生かすという意識が低い ・　学習指導の改善が進んでいない ・　学習評価の改善が進んでいない ・　常用漢字改定についての意識が薄れがち の５点を示し，それぞれの課題について，意識改革を含めた対応策を示した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１７　ここがポイント！１３回 高等学校新教育課程の指導と評価　国語	単著	平成２４年 ４月	「中等教育資料」 （文部科学省） ４月号　pp.82-85	新教育課程の下で国語の指導と評価とを十全に行うために，今，各学校で，これまでの指導と評価の営みを省み，行わなければならないことを，教育課程の編成と年間の指導と評価の計画の作成，言語活動の充実，学習評価の改善の３つの視点から述べた。その際，次のような，指導と評価の計画の作成手順を示した。 Ⅰ　当該単元の目標を設定し，単元の評価規準を設定する。 Ⅱ　目標を実現するのにふさわしい言語活動，教材を取り上げる。 Ⅲ　当該単元の授業で実際に用いる具体的な評価規準を設定する。 Ⅳ　当該単元の各次における指導と評価の展開（評価方法を含む）を計画する。
１８　言語活動の充実に学校図書館を生かすために	単著	平成２５年 ６月	「学校図書館」 （全国学校図書館協議会） No.752　pp.14 － 17	児童生徒の現状，確かな学力の育成，言語活動を充実するための支援策，学校図書館の活用と整備などの視点から学校図書館の機能を生かした言語活動の充実について論じ，そのためには，校種間での連携や，児童生徒の多様な実態を踏まえた個に応じたきめ細かな指導を一層心掛けることも必要であることを述べた。
１９　読書に親しむ	単著	平成２５年 １０月	「初等教育資料」 （文部科学省） 10月号　巻頭	更級日記の表現を取り上げながら，時代を超えたものとして，読書に親しむことについて述べた。
２０　義務教育九年間を見通した各教科等の指導の充実	単著	平成２６年 ５月	「初等教育資料」 （文部科学省） 5月号　pp.2-5	「小中一貫教育」についても視野に入れながら、「小中連携」、つまり義務教育九年間を見通した各教科等の指導の充実について，小・中学校の間の違い，学習指導要領の系統性の理解，地域や学校に合った教育課程編成，学び方を学ばせること等の視点から述べた。
「市販誌等に掲載の論文」				
１　「読書への道」をひらく－子どもたちにとっての読書の意義と読書活動推進の営み－	単著	平成１７年 ４月	「日本語学」 （明治書院） 4月臨時増刊号　pp.12 － 20	読書の意義と読書活動推進について考察した。読書活動に関する最近の動きや文部科学省の施策等についてまとめ，大切なのは，大人の導きによって子どもを「読書の道」に導くことであることを述べた。そして，それを主体的，自主的な読書活動にしていく必要があることを述べた。
２　国語科における補充的な学習の充実を目指して－中学校を中心に－	単著	平成１７年 １０月	「月刊国語教育」 （東京法令） 10月号　pp.16 － 19	中学校における補充的な学習について考察した。対象となる生徒，学習の方法，指導上の留意点，学習の評価の方法などについて述べた。学習の評価については，必修教科と選択教科に分けて考えることを述べた。
３　ＰＩＳＡ型「読解力」の育成を目指して－調査結果から読み取れること	単著	平成１８年 ５月	「月刊国語教育」 （東京法令） 5月号別冊　pp.14 － 17	ＰＩＳＡ型「読解力」について考察した。ＰＩＳＡ型「読解力」とは何かを明らかにし，表現の仕方に注目する，評価しながら読む，読み取ったことを再構成する問題などに課題があることを指摘した。それを踏まえ，指導の改善としては，学習指導要領に示している指導事項を身に付けさせることが大切であると述べた。
４　新常用漢字表への期待と問題点　国語教育研究－高等学校の立場から－	単著	平成１８年 ９月	「日本語学」 （明治書院） 9月臨時増刊号 pp.172 － 179	高等学校における漢字指導の現状について考察した。各種調査等の結果を踏まえ，漢字の意味（訓読み）を理解させる指導の重要性について具体例をもとに述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５　いまなぜ読書指導か－言語文化の継承・発展という視点から－	単著	平成１８年１１月	「月刊国語教育」（東京法令）11月号　pp.12 － 15	読書指導を言語文化という視点から考察した。読書の意義を再確認した後，読書に親しむ態度の育成，どのようなものを読むように指導するのか，学習指導要領の中での読書の位置付けなどについて述べ，学校教育全体で指導することの重要性も述べた。
６　小・中・高等学校を見通した古典指導の系統性	単著	平成１９年２月	「日本語学」（明治書院）2月号　pp.14 － 21	古典指導の系統性について考察した。昭和30年代以降の教育課程審議会答申を検証し，小学校から高等学校にかけて系統的に古典に親しむ指導をするべきとの提言が継続的になされていることなどを述べた。
７ 各教科改訂のポイント　「国語」改訂のポイント	単著	平成２１年６月	「月刊高校教育」（学事出版）6月号　pp.28 － 29	高等学校国語の改訂のポイントについて考察した。改善の基本方針，科目構成及び内容の改善，各科目の具体的な内容について述べた。
８　虎の門通信（28）～（６３）	単著	平成２２年４月から平成２６年６月まで	「日本語学」（明治書院）平成２２年４月号～平成２６年６月号まで計100ページ	国語教育の視点から，国の施策や，中央教育審議会の審議内容など，教育行政に係ることを中心に述べている。例えば次のような内容を取り上げている。 初等中等教育関係の主な施策，国語施策 新学習指導要領全面実施に向けた施策 中央教育審議会をはじめとした，各種会議の審議内容 国内外の各種調査の結果 文部科学省や国立教育政策研究所が編集した指導事例集や参考資料 アメリカ合衆国の共通スタンダードなど外国の教育の現状 言語活動の充実や，コミュニケーション教育の推進など，学校教育の課題 学習評価の改善 常用漢字表の改定，それに伴う学校教育上の対応 文化関係の施策　　など
９　高等学校における漢字指導の現状と課題	単著	平成２２年７月	「日本語学」（明治書院）７月号　pp.54 － 64	高等学校における漢字指導の枠組みと，調査結果を踏まえた生徒の実態と指導の改善について述べるとともに，常用漢字表改定に伴う追加字種の字体について整理し，今後の指導に資するよう提言した。
１０　高等学校国語における古典の指導の新しい展開	単著	平成２３年４月	「日本語学」（明治書院）４月号　pp.28-36	古典の指導を変える方策を，教師の意識変革と，新学習指導要領が目指している古典指導との２つの点から提言した。
１１　教材研究についての意識改革	単著	平成２４年４月	「日本語学」（明治書院）４月臨増号　pp.42-53	国語の授業改善を目指し，教材研究の意識改革について論じた。教材研究では次の二つの側面に分けて考える必要があること，とりわけ２つ目を重視することを提言した。 ・　教材の内容に関する研究 ・　教材がもつ，国語の授業に果たす役割についての研究 そして，その教材研究を具体的に指導計画の作成に生かす視点についても述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２　新学習指導要領 Final Step　国語１・２	単著	平成２４年４月	「日本教育新聞」4月2日付け，9日付け	平成25年度から，高等学校国語も年次進行で新学習指導要領が実施される。それに向け，課題と思われる次の点について，各学校における改善を促した。 ・教育課程編成への準備が不十分 ・総則を国語の教育課程編成に生かすという意識が低い ・学習指導の改善が進んでいない ・学習評価の改善が進んでいない
１３　指導事項を重点化し，児童生徒に学習の見通しをもたせる	単著	平成２４年８月	「実践国語研究」（明治図書）NO.314　pp.9-10	指導事項を重点化し，言語活動を通して指導事項について指導すること，児童生徒に学習の見通しをもたせたり，学習を振り返ったりすることが，「できた」を実感でき，やる気が膨らむ学習評価を行うことにつながることを，書くことの指導を例に述べた。
１４　「日本語学」との十年を振り返る	単著	平成２４年１１月	「日本語学」（明治書院）１１月臨増号　p.148	月刊誌「日本語学」の30年の記念号に執筆したもの。この10年間に執筆したメディアリテラシー，読書指導，古典指導（2本），漢字指導（2本），教材研究に係る論考の位置付けを述べた。また，現在連載している「虎の門通信」にも触れた。
１５ 高等学校国語における指導の改善	単著	平成２５年２月	「内外教育」（時事通信）第6223号（2月5日付け）　pp.4-5	指導の改善のポイントとして，育成する言語能力を明確にする，言語活動を通して指導事項について指導する，目標に準拠した評価を観点別に評価規準に基づいて実施する，教員の協働を進めることを述べた。
１６ 高等学校国語における古典の指導改善	単著	平成２６年１月	「内外教育」（時事通信）第6305号（1月21日付け）　pp.4-5	高等学校国語における古典指導が旧態依然として改善されない状況を変革させるために，英語教育の改革についても触れながら，現代語訳に頼らない指導，古典を多読する指導など，新たな視点を提示しながら指導改善について述べた。
１７ 教育課程の編成の意味 高等学校	単著	平成２６年４月	「日本語学」（明治書院）４月臨増号　pp.51-60	国語の各科目をどのような順序で、それぞれ何単位ずつ履修させるのかという科目編成のレベルから、年間、単元、単位時間という各段階での「指導と評価の計画」まで、幅広く教育課程について論じた。校長のリーダーシップの下、全ての教員が、教育課程編成について共通の認識をもつことが大切であることについても述べた。
１８ 「達成度テスト（仮称）」導入の意味とは	単著	平成２６年１２月	「教育科学国語教育」（明治図書）１２月号　pp.16-17	導入が検討されている，達成度テスト（仮称）について，検討の背景，テストの内容，テストの導入に向けての３つの角度から，現状をまとめ，展望について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「辞典・事典・ハンドブック・手引等」				
1　国語科重要用語辞典 「月刊国語教育　2007･5別冊」	共著	平成１９年 ５月	東京法令	Ｂ５判　全147頁 編者：河野庸介 共著者：高木展郎，小森茂 ，西辻正副，他29名 以下の３項目の用語について執筆（単著）。 1-11０ＥＣＤ／ＰＩＳＡ調査，ＴＩＭＳＳ調査 1-12 キーコンピテンシー 1-23学習指導要領－高校国語のこれから pp. 22 － 24，pp. 44 － 45
2　国語科指導開発辞典 「月刊国語教育　2008･5別冊」	共著	平成２０年 ５月	東京法令	Ｂ５判　全147頁 編者：尾木和英，町田守弘 共著者：河野庸介，田中孝一，西辻正副，他26名 言語活動の充実に係る以下の３項目の用語について執筆（単著）。 1-4概念・法則・意図などを解釈し，説明したり活用したりする 1-5情報を分析・評価し，論述する 1-6課題について，構想を立て実践し，評価・改善する pp. 12 － 17
3　初任者研修指導者必携	単著	平成２０年 ９月	第一法規	全３巻の加除式出版物の追録65号。 編集代表：加戸守行，下村哲夫 以下の項目について執筆（単著）。 「担任が知っておきたい高校教育の動向」 pp. 7722 － 7723 中学校教員の初任者として知っておくべき高等学校教育の現状と課題について，キャリア教育等にもかかわりながら述べた。
「研究大会集録等（主なもの）」				
1　国語力の向上を目指して	単著	平成１８年 ３月	全国高等学校国語教育研究連合会　第38回研究大会兵庫大会　大会集録 pp. 40 － 45	国語力の向上への方向性を， ・最新の動向（特に義務教育改革） ・国語力向上のための施策 ・国語力の向上のための指導改善 などという点から述べた。
2　教育課程の改善へ向けての動き	単著	平成１９年 ３月	全国高等学校国語教育研究連合会　第39回研究大会富山大会　大会集録 pp. 28 － 41	教育課程の改善への動きを ・この１年の動向 （中央教育審議会等の動向） ・国語力育成に向けての動き などという点から述べた。
3　教育課程の改善へ向けての動き	単著	平成２０年 ２月	全国高等学校国語教育研究連合会　第40回研究大会栃木大会　大会集録 pp. 43 － 55	教育課程の改善への動きを ・生きる力をはぐくむという理念の継承 ・学習指導要領改訂のポイント ・新しい教育課程の枠組み ・教育内容の主な改善事項 ・国語科の改善事項 ・教育条件の整備 などという点から述べた。
4　高等学校教育が目指すもの	単著	平成２１年 ３月	全国高等学校国語教育研究連合会　第41回研究大会東京大会　大会集録 pp. 16 － 40	高等学校教育が目指すものを ・養育基本法等の改正を踏まえた高等学校学習指導要領改訂 ・確かな学力の育成に向けた高等学校における授業改善の取組 などという点から述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５　新学習指導要領の理解を深める	単著	平成２２年３月	全国高等学校国語教育研究連合会　第42回研究大会神奈川大会　大会集録 pp. 11 － 28	新学習指導要領の理解を深めるために ・言語活動の充実 ・古典指導の改善 などという点から述べた。
６　新学習指導要領における言語活動の充実について	単著	平成２３年３月	東京都立高等学校副校長研究協議会 研究集録第37号 pp. 87-118	各教科等における言語活動の充実について ・新学習指導要領に至るまでの動き ・各教科等における学習活動の現状 ・新学習指導要領における言語活動の充実 ・言語活動の充実とは何か ・言語活動の充実に係る学習評価の改善 などという点から述べた。
７　高等学校教育の改善・充実に向けて	単著	平成２３年３月	奈良県高等学校教務研究協議会 会誌（平成22年度） pp. 45-62	移行期間における高等学校教育について ・移行措置の概要 ・総則の改訂のポイント ・学習評価の改善 などという点から述べた。
８　高等学校国語科における学習指導の改善を目指して	単著	平成２３年４月	全国高等学校国語教育研究連合会　第43回研究大会北海道大会　大会集録 pp. 1-11 （本冊の印刷上の手違いから差し替えたため，別刷）	新学習指導要領の理解を深めるために ・各教科等における言語活動の充実 ・国語科の指導の改善 ・学習評価の改善 などという点から述べた。
９　言語力を鍛える　学校図書館とつくる授業展開	単著	平成２４年３月	千葉県高等学校教育研究会学校図書館部会誌「高校図書館」 pp. 44-63	「言語力を鍛える　学校図書館とつくる授業展開」というテーマに，新学習指導要領における「言語活動の充実」という視点から迫り，次のような内容について述べた。 ・社会情勢等の変化を踏まえた，これからの教育 ・PISA調査の結果 ・学習指導要領改訂の背景 ・言語活動についての規定 ・高等学校における言語活動の充実の具体的な展開 ・高等学校における授業改善 ・言語活動と生徒の学習評価
１０　新学習指導要領の実施に向けて（文部科学省講話）	単著	平成２５年２月	全国高等学校国語教育研究連合会　第45回研究大会大阪大会　大会集録 pp. 16-33	学習指導要領改訂の背景，子どもたちの現状と課題，教育改革，中央教育審議会の答申・報告等，高校教育改革，高大接続，これからの時代に求められる能力，国語科の指導改善，学習評価の改善等について述べた。
１１　これからの時代に求められる能力とその育成に向けた指導	単著	平成２５年３月	徳島県小学校教育研究会報　第81号 pp. 5-12	学習指導要領を基に，21世紀型スキルや21世紀型学力なども含め，これからの時代に求められる能力の育成に向けた指導改善について，国語，算数，理科などを取り上げながら，多様な視点から述べた。
１２　これからの時代に求められる能力とその育成のための指導	単著	平成２５年１１月	第52回全国高等学校教頭・副校長会 総会及び研究協議大会集録 pp. 13-20	第２期教育振興基本計画，教育再生実行会議の提言，高等学校学習指導要領の全面実施に向けた取組（言語活動の充実，道徳教育，理数教育，外国語教育，キャリア教育，生徒指導など），学習評価の改善，教員の資質向上，コミュニティースクール，高校教育改革（高大接続など），特別支援教育などを取り上げながら，多様な視点から述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３　文部科学省行政	単著	平成２５年１2月	第45回全国公立小中学校事務研究大会 石川大会記録集 pp.10-15	第２期教育振興基本計画，教育再生実行会議の提言，学習指導要領の実施，これからの時代に求められる能力，情報化の進展，キャリア教育の推進，土曜日の活用，教員の資質向上，生徒指導の充実，教職員のメンタルヘルス対策，地域とともにある学校づくり，特別支援教育などを取り上げながら，多様な視点から述べた。
１４　高等学校国語の授業改善	単著	平成２６年３月	全国高等学校国語教育研究連合会　第45回研究大会大阪大会　大会集録 pp.12-27	言語活動の充実と学習評価の改善を中心に述べた。特に，授業改善を進めるための方向に力点を置き，これからの時代に求められる能力を示し，そのような力を育成するためには，アクティブラーニングの視点が必要であることを，内外の具体的な指導例を示しながら述べた。
「担当官として職務により編集・作成したもの」				
１　読解力向上に関する指導資料	共著	平成１８年４月	文部科学省 (東洋館出版社)	文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官，PISA・TIMSS対応ワーキンググループ委員として，執筆，編集に携わった。 2003年のPISA調査において「読解力」の得点がOECD平均程度まで低下している状況を受け，指導の改善に資するためにまとめたもの。具体的な指導の改善方向を３点，指導のねらいを７点示し，指導の具体例も掲げた。 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。
２　特定の課題に関する調査（国語）調査結果（小学校・中学校）	共著	平成１８年７月	国立教育政策研究所	国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官として担当。 平成17年1,2月に実施した平成16年度特定の課題に関する調査についての報告書。漢字の調査については，おおむね定着していることが明らかになったが，大切な言葉でも使用頻度や使用範囲が狭い漢字は定着が十分でなく，指導の改善が必要であることを述べた。長文記述については，規定の量は書けているが，自分の考えが明確になるよう段落を構成したり，論の展開に一貫性を持たせることについては課題があることが明らかになった。 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。
３　平成17年度教育課程実施状況調査（高等学校）結果概要・集計表 国語 国語総合	共著	平成１９年７月	国立教育政策研究所	国語：pp.41 - 73 国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官として担当。 平成17年11月に実施した平成17年度高等学校教育課程実施状況調査についての報告書。 国語については，設定通過率を上回る問題が多かったものの，理由や根拠を基に自分の考えを記述すること，古典を読み味わう能力や古典の言語事項，古典の学習意欲などに課題がみられた。資料から読み取ったことを筋道立てて表現する意欲や能力の育成，古典の現代的な価値の理解と，古典に親しむ態度や能力の育成などを提言した。 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫	共著	平成２２年３月	独立行政法人 教員研修センター	言語活動の充実を図るための学習指導を考える（国語），研修講師のための留意点について執筆。職務による執筆であるため明示されてはいないが，pp.26 － 31　pp.75-79を執筆した。 言語活動の充実を図るための学習指導例として，古典（「更級日記」）を教材とした「読むこと」の授業に，「根拠を適切に説明し，自分の考えを書く」いう言語活動を取り上げた指導について述べた。 　また，言語活動の充実についての研修講師となるための留意点を，次の点から述べた。 ・用語の理解 ・「言語活動」を充実するねらいは何か ・「言語活動」の充実は，ゼロから始めることか ・指導において「言語活動」はどこに位置付けられるか ・国語科における「言語活動」と各教科等における「言語活動」，どこが同じでどこが違うか
5　高等学校学習指導要領解説　国語編	共著	平成２２年６月	文部科学省 (教育出版)	文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官として担当。 平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領の国語についての解説書。指導事項や言語活動例等について，用語の定義を丁寧に行いながら解説した。 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。
6　評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料　（高等学校　国語）	共著	平成２４年３月	国立教育政策研究所 (実教出版)	国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官として担当。 国語科の学習評価の基本的な考え方，「国語総合」の評価規準の設定例，評価の事例，評価の総括の仕方などについて解説した。 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。
7　言語活動の充実に関する指導事例集（高等学校版）	共著	平成２４年６月	文部科学省	文部科学省初等中等教育局視学官として担当。 国語科の各科目17事例を掲載し，言語活動を通して指導事項について指導する具体的な展開例を示した。 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。
8　特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果～21世紀グローバル社会における論理的に思考する力の育成を目指して～	共著	平成２５年３月	国立教育政策研究所	文部科学省初等中等教育局視学官として担当。 現在の我が国の高校生の論理的に思考する力の育成状況を把握、分析するための調査を高等学校２年生を対象に実施した結果を分析したもの。 一般的な表現形式による問題(調査Ⅰ)，　数学的な表現形式による問題(調査Ⅱ)により，論理的な思考の過程を６つの活動に分けて実施sた。その結果，「規則、定義、条件等を理解し適用する」「事象の関係性について洞察する」「仮説を立て、検証する」力に係る問題の通過率は、全問題の平均通過率を上回ったが，　「必要な情報を抽出し、分析する」「趣旨や主張を把握し、評価する」「議論や論証の構造を判断する」力に係る問題の通過率は、全問題の平均通過率を下回った。 共同執筆によるものにつき本人担当部分抽出不可能。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表等」				
１　高等学校国語の教育課程の改善に向けて	単独	平成１９年５月	日本国語教育学会 高等学校部会第52回研究会 東京学芸大学附属高等学校	高等学校国語の現状と課題を，小・中・高等学校の教育課程実施状況調査の結果，小学校・中学校の全国学力・学習状況調査の問題等から読み解き，中央教育審議会教育課程部会の審議を踏まえつつ，今後の高等学校国語の教育課程改善の方向性を明らかにした。
２　新高等学校学習指導要領で国語科が目指すもの	単独	平成２１年５月	日本国語教育学会 高等学校部会第56回研究会 東京学芸大学附属高等学校	平成21年3月に告示された新高等学校学習指導要領国語について，新旧対照表等を用いながら，改訂のねらいや，今後の指導改善の方向性について明らかにした。
３　高等学校国語における言語活動と学習活動	単独	平成２４年５月	日本国語教育学会 高等学校部会第62回研究会 東京学芸大学附属高等学校	新学習指導要領を踏まえ，高等学校国語の授業改善，言語活動の充実が求められる背景について、「リテラシーとしての英語」を共通スタンダードに掲げるアメリカの初等中等教育にも触れながら述べた。学習評価に関しては、指導の改善に生かすという意識をもつことを述べた。教師の意識改革が必要であり，生徒主体の授業の実現，目標に準拠した評価を観点別に評価規準に基づいて行うことを強調した。
４　書字文化とこれからの書写書道教育	単独	平成２４年９月	全日本書写書道教育研究会 第５３回東京大会 東京家政大学	新学習指導要領の趣旨を踏まえ，書字文化の現状を概観し，その状況下での，小中学校国語における書写の指導，高等学校芸術における書道の指導について，言語活動の充実との関わりから述べた。
５　学校図書館のこれからの方向	単独	平成２５年７月	全日本小学校学校図書館研究会 夏季研究大会 国立オリンピック記念青少年総合センター	新学習指導要領の趣旨を踏まえ，学校図書館教育の現状を概観し，その状況下での，小学校における学校図書館教育の方向性や，実践課題について，言語活動の充実との関わり，国の施策との関わり等から述べた。
６　学習指導要領の改訂を見据えた動き	単独	平成２６年８月	NPO法人人間教育研究協議会・人間教育学会・奈良学園大学 第29回人間教育実践交流会フォーラムin奈良 奈良学園大学	次期の学習指導要領改訂を見据えた動きについて，学習指導要領改訂の歴史的経過と現行学習指導要領の改訂の際に取られた手順，学習指導要領改訂に向けた個別の検討項目のうち道徳教育，英語教育の今後の見通しを述べた。また，育成すべき資質・能力を踏まえるという考え方を取り入れた，次期の学習指導要領改訂の方向性と現段階における動きと，次期の学習指導要領改訂の動きの中での授業改善へ向けた考え方について，学習指導要領の趣旨の実現という角度から述べた。

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　松 田　智 子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	体験学習と学び、学校と地域社会 特別活動の指導・生活科の指導

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 （1）地域の子育て事業への参加体験を通しての地域社会との連携の具体的促進	平成 19 年 9 月～ 平成 21 年 3 月	学生を地域の児童館学童保育へボランティアとして参加させ、地域の子育て支援事業との連携を授業に組み込んだ。これにより放課後の子どもの姿を観察できた。また、地域の祭りや催しへの参加を通し、保護者や地域住民の願いに触れ、「地域に貢献できる大学」について考える契機となった。地域住民からの感謝のが、学生の達成感と満足感を高め、教育職への就労意欲を喚起した。京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の実践である。
（2）学生の相互評価を導入した成績評価の開発	平成 19 年 9 月 平成 21 年 3 月	保育者として求められる感性及び表現力を育成するにあたり、学生の相互評価を導入した成績評価を実施した。事前の学生との討議で具体的な評価基準を作成し、他者のスピーチを相互に評価した。その成果及び課題を発表者に返す作業を行うことにより切磋琢磨の気風が醸成され、個々の観察力がさらに細かく具体的となった。表現の工夫では、具体物使用や身体表現が広がる等の効果が出た。京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の実践である。
（3）形成的な評価を活用した授業計画の開発	平成 21 年４月 ～現在に至る	シラバス作成時に授業の形成的評価を計画に位置付け、それを基に授業の改善を行う。また、それぞれの授業終了時に３段階の満足度評価（学習者と指導者二者を対象とする）及び自由記述形式のアンケートを実施し、その集計結果を次回の授業でフィードバックして、自己評価に活用する。これにより授業改善のみならず学生とのコミュニケーションツールとしての役割も果たした。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科の実践である。

（4）生活科の体験を通した気づきを表現する過程で言語力を育てる系統的指導	平成 21 年 9 月 ～現在に至る	児童は直接体験を伝え合う中で自分の気付きと友達のそれとを比較し、共通点や相違点を発見する。これは相手意識と目的意識を備えた活動でなければ効果は望めない。そこで生活化の体験と国語科の低学年の「話す・聞く」の能力を系統的に指導する中で子どもの言語力を育てることを紹介した。朝のスピーチを連続的・系統的に取組み気づきの質を高める言語力指導を具体的に提示した。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科の実践である。
2　作成した教科書，教材 （1）学校マネジメント 8 月号　共著(明治図書) 「現場主義で読み解く“新教育課程”の方向」 学習意欲 UP－授業のどこを変えるか【再掲】	平成 18 年 8 月	児童生徒の学ぶ意欲は発達年齢により異なり、その意欲を継続するには，教師の発達を意識した指導が不可欠である。 兵庫県芦屋市立潮見中学校校内研修に使用した。
（2）現代教育科学　№604　　共著(明治図書) 免許更新制度で教員の質は向上するか	平成 19 年 1 月	免許更新制度の趣旨と予想される効果を論じた。環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「教育実習事前事後指導」で参考書として使用した。
（3）道徳と特別活動　№24　　共著（文溪堂） 保護者対応の現在	平成 19 年 8 月	保護者等の苦情・抗議・クレームを分析し、学校と保護者と地域が連携する方策を示した。 京都光華女子大学短期大学部こども学科「総合演習」の授業で参考書として使用した。
（4）教育フォーラム〔41〕　　共著(金子書房) 新しい学習指導要領 -カリキュラム改革の理念と課題－【再掲】	平成 20 年 2 月	新学習指導要領の説明を、設置の背景及び各教科の観点から述べた。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「教育実習の事前事後指導」の補助資料として使用した。
（5）言語力を育てる授業作り ―新学習指導要領対応―【再掲】 共著（図書文化）	平成 21 年 9 月	今までの学習指導要領の教育の問題点を洗い出し、新たなカリキュラム改革が目指す理念と課題を明確にした。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科生活科指導法で参考書として使用した。
（6）教育フォーラム[46]　　共著（金子書房） ―言葉の力を育てる―　【再掲】	平成 22 年 8 月	各教科で新学習指導要領の要請される言語力を育てる方策について述べたものである。 芦屋市幼稚園教育研究会の教育課程の学習会で資料として配布し論議を深めた。
（7）実践教育評価事典【再掲】 共著（文溪堂）	平成 22 年 8 月	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科のゼミナールで、学習指導要領の歴史を把握する際の教科書として使用した。

（８）不登校生支援ハンドブック【再掲】 （学研エディケーショナル）	平成 22 年 12 月	子どもの不登校の事例を挙げて、それについての取り組みおよびその取り組みへの評価を述べたものである。 環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「生活の理解」の事例資料として使用した。
（９）教育フォーラム[46]　　共著（金子書房） －〈こころ〉を育てる―【再掲】	平成 23 年 3 月	個々との教育とは何かを論じ、各教科での心の教育への取り組みの在り方を述べたものである。 環太平洋大学次世代教育学部学級経営学科「学級経営ゼミナール」資料として活用した。
（１０）次世代教職入門【再掲】 共著（大学教育出版）	平成 23 年 5 月	教師としての在り方についてその理念、研修や服務および仕事の内容について述べた。 環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」で確認のための資料として使用した。
（１１）教育フォーラム[50]　　【再掲】 共著（金子書房） －〈やる気〉を引き出す〈やる気〉を育てる――	平成 24 年 8 月	子どものやる気とは何か、各教科におけるやる気の引き出し方について論じた。 環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科「教育実習事前事後指導」の参考書として使用した。
（１２）次世代の教育原理【再掲】 共著（大学教育出版）	平成 24 年 10 月	教育の基本原理と教育思想の歴史、日本の教育行政教育課程と出口であるキャリア教育等について教育の一般原理について述べた。環太平洋大学の「教育原理」の教科書として使用した。
（１３）人間教育を視点にした「教職入門」 共著（大学教育出版）【再掲】	平成 26 年 12 月	教員の本質は人間を望ましい姿に変化させるために心身両面にわたって、意図的計画的に働きかける人格の形成であるという視点に立って教職に就く者の基本理念を述べた。奈良学園大学と武庫川女子大学と環太平洋大学において「教職入門」の教科書として使用した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
⑴学生による自己評価委員会アンケート 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 平成 19 年度前期授業評価	平成 19 年 8 月	「生活と文化」「保育課程総論」の全体を通して５段階で 3.9 の評価を受けた。特に授業の進め方の工夫や授業内容では高い評価を受けた。
⑵京都光華女子大学短期大学部学生による自己評価委員会アンケート 平成 19 年度後期授業評価アンケート	平成 20 年 2 月	「生活と文化」「学齢児保育」の全体を通して５段階で平均 4.0 以上の評価を受けた。特に授業の進め方の工夫では高い評価を受けた。

(3)京都光華女子大学短期大学部学生のアンケートによる平成19年度卒業生 の満足度評価	平成20年3月	学生の満足度は、授業74．2%、先生86．4%、自己の成長度78．3%、友人関係96．2%であった。 総合満足度は 80．0%と大学の学科の中で一番高い満足度を示した。
(4)京都光華女子大学平成 19 年度大学内自己点検教員評価結果	平成20年6月	学長及び学部長から、研究・教育・社会貢献・学内運営のすべての領域において「相当である」との評価を受けた。
(5)京都光華女子大学短期大学部学生による自己評価委員会アンケート 平成20年度前期アンケート	平成20年8月	「保育課程総論」の全体を通して5段階で平均4.2 以上の評価を受けた。特に授業の説明の分かりやすさや教材教具の準備では高い評価を受けた。
(6) 環太平洋大学次世代教育学部教授として採用においての評価	平成21年４月	学校法人創志学園、大橋博理事長から、授業指導の能力のみならず、校長経験や教育委員会で身に着けたマネージメント能力を高く評価され、環太平洋大学の学級経営学科学科長として新規に採用をされた。
(7)環太平洋大学平成 21 年度後期学生による授業評価アンケート	平成22年3月	学生による授業評価 12 項目の平均評価は 3.52（満点は４）である。特に専門基礎である「学校と社会」が 3.77 と高い評価であった。
(8)環太平洋大学平成 22 年度前期学生による授業評価アンケート	平成22年9月	学生による授業評価「生活の理解」満足度 4.00 中の 3.85、「学校学級文化の受容力」満足度 4.00 中の 3.97 であり、高い評価である。
(9) 環太平洋大学教職センター長としての評価	平成23年3月	学長大橋博より、公立学校の教員採用試験の合格者を倍増するように指示を受け、目標を達成した。大学内に教師を目指す組織である「大志会」を設立し、学生の自学自習の支援システムと教職センターの組織を確立したことが高く評価された。
(10) 環太平洋大学平成 22 年度後期学生による授業評価アンケート	平成23年3月	「生活科教育法」3 コマのそれぞれの学生満足度は 4.00 中の 3.76、3.90、3.84 であり高い評価を得ている。「学校と社会」満足度 4.00 中の 3.35 である。
(11)環太平洋大学平成23年度前期学生による授業評価アンケート	平成23年9月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中の 3.91 と 3.70 である。特に 3.91 という評価では授業方法が適切で興味が持てる授業展開の項目が 4.00 と高い評価であった。
(12)環太平洋大学平成23年度後期学生による授業評価アンケート	平成24年3月	「生活科教育法」3 コマのそれぞれの学生満足度は4.00中の3.90であり高い評価を得ている。特に学習指導案の作成に高い評価を付けた。

(13)環太平洋大学キャリアリアセンター長としての評価	平成 24 年 3 月	学長梶田叡一から地方の私立大学である環太平洋大学が、岡山県及び全国を上回る就職率 96,06%を達成したことを高く評価された。特に、キャリアセンターを学生の進路別に 4 つの室に編成し、キャリア支援のシステムを構築したことを評価された。
(14)環太平洋大学の学長補佐としての評価	平成 24 年 3 月	学長梶田叡一から理事長と学長と理事との意思疎通を図るパイプ役を務めるように指示され、その役割を果たした。大学の経営方針作成や新設学科設立の企画に参加し、マネージメント力を学長から評価され、新学長の下でも学長宇補佐を続けるように推薦された。
(15) 環太平洋大学平成 24 年度前期、学生による授業アンケート	平成 24 年 9 月	「生活の理解」2 コマの学生の授業満足度は 4.00 中 3.8 以上であり、具体的な楽興驚異の実践的な事例と結びつけた授業なので、教員養成に役立つとの意見が多かった。
(16)環太平洋大学平成 24 年度後期、学生による授業評価アンケート	平成 25 年 3 月	「生活科教育法」3 コマの学生の最も高い満足度は 4.00 中 3.77 である。具体的な模擬授業や、児童への発問、児童への評価としての褒め言葉などがとても参考になったという意見が多かった。
(17) 奈良学園大学平成 26 年度前期、学生による授業評価アンケート	平成 26 年 9 月	「特別活動の指導法（中等)」の学生アンケートで、4.00 中 3.8 以上の高い満足度を得た。特に授業で講義をまとめてレポートする力が付いたという学生の意見が多かった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)文部科学省の総合的な学習の時間コーディネータ養成研修（和歌山県）の講師 「特別活動職場体験と総合的な学習の時間」	平成 18 年 8 月	総合的な学習の時間の目的と内容を学習指導要領の総則を基に確認した。その中で総合的な学習の意義について確認するため具体例としてキャリア教育との関連で特別活動における職場体験活動を取り上げ、特に中学生の時期に培うべき力について説明した総合と特別活動の違いについても過去の経緯から説明した。また、小学校と中学校の学びの内容と方法、連続性のあり方について、実践例をあげて説明した。 （対象：中学校の総合的な学習担当者及び学年主任約 200 名)。
(2)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校生活科校内研究会指導助言者	平成 18 年 10 月	生活科「秋を見つけよう」という単元で公開授業が行われた。季節の変化を自分の生活経験と結びつけながら学ぶ授業である。秋が来ると紅葉するという既成概念にとらわれているため、ありのままの自然を体感できていない児童に対

		する指導の手立てを助言した。自然を見る際に場所・時間・距離などが違うと見え方が異なること、身の回りの環境への愛着の育み方について指導した。
（3）兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国発表会の生活科部会助言者	平成 19 年 2 月	生活科「秋を見つけよう」という単元で公開授業後の指導助言を行う。子どもが、自分の成長を「人・もの・こと」との関わりの中で認識するためには、教師の指導や声のかけ方について具体的に提案した。自己認識の深化は個人差が大きく、それゆえ児童一人一人の内面を理解し、それに応じた指導が不可欠であると指導した。
（4）第 14 回実践教育フォーラム分科会講師 「保護者対応の現在」	平成 19 年 6 月	マスコミ等で学校教育の弊害と報道されているクレームを、その様態から３つに分類し、それへの基本的な対応について話した。保護者と学校が児童･生徒を中心して向き合うことにより、クレーマーは学校の支持者に転換する可能性を示した。クレームの背後にある思いに共感し、スピード感を持って誠実に対応することが重要であることや、法的な対抗手段についても熟知する必要性を述べた。
（5） 静岡県浜松市教科等研修会 生活科部会講師 「生きる力と生活科」	平成 19 年 7 月	新学習指導要領における生活科の変更箇所についての実践上の課題について述べつつ、今回の改訂の柱である理科分野と健康安全面が重視されることになった社会的な背景についての理解を促した。理科分野重視は国際学力調査ＰＩＳＡと関連付けて説明し、健康安全面では阪神淡路大震災の経験と関連付けながら登下校時における児童の自立の必要性を述べた。生活科の教科書に登下校の安全に関する記述がもっと必要であることを主張した。 （対象：小学校生活科担当教員約 100 名）
（6）文部科学省の総合的な学習の時間第２回コーディネータ養成研修（和歌山県）の講師 「特別活動と総合的な学習の時間Ⅱ」	平成 19 年 8 月	総合的な学習のコーディネータの役割を小学校との学習の連続性に関連づけて述べた。総合的な学習の時間の目的と内容を学習指導要領の総則を基に確認した。その中で特に中学生の時期に培うべき力について、キャリア教育との関連で特別活動における職場体験活動を具体例として取り上げて、総合的な学習の意義について確認した。（対象：中学校の総合的な学習担当者及び教務主任約 200 名）。

（７）日本教育新聞社主催「教育セミナー関西2008」パネリスト 「学習指導要領改訂とこれからの学校教育」	平成 19 年 8 月	加藤明・角屋重樹・成山治彦・松田智子で「授業力・学校力・人間力の向上をめざして−学習指導要領の改訂とこれからの学校教育−」をテーマにパネルディスカッションを行った。保護者・地域から学校の姿が見えるように工夫することや、説明責任を果たさなければ、公立学校は生き残れないことを法的な根拠を基に説明し、そのためのオープンスクールや学校評価の活用の仕方について述べた。
（８）兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校校内研究会の特別活動指導助言者 「学校の集団生活における特別活動の役割」	平成 19 年 10 月	小学校特別活動の学級会の授業を参観し、事後研究会で指導助言を行った。学級の目標を決定し、その取り組みの反省を行うことを通して児童に話合いの基本的なルールの定着を図る授業であった。特別活動における学級活動の目標を確認するとともに、対話と会話の差異、対話の類型について話した。学校教育では共感的な対話が重要であり、これは計画的継続的な学級活動を通して積み上げることが必要であると具体的に指導した。
（９）ベネッセコーポレーション主催 「第１回教師塾」講師 「地域・保護者との連携について」	平成 19 年 10 月	学校において、最近増加している保護者のクレーム対応のワークショップを行った。小さなトラブルを大きなクレームにしない対応として「スピード+面談+共感」が求められる。特に保護者の話を共感的に聴くための対話法について具体的に指導した。また起きてしまったトラブルには組織的な対応が不可欠であることを強調した。作成したクレーム対応チェックシートも活用して参加者の学校の危機管理意識の見直しを図った。
(10) 兵庫県立芦屋高等学校授業研究会 全体会講師「学力向上の授業づくり」	平成 19 年 11 月	兵庫県教育委員会指定「学力向上フロンティアハイスクール事業」を受けての授業研究会である。高等学校の授業は高い専門性を有するため知識伝達型授業が多くなる傾向にあることを踏まえ、教師と生徒の双方向の交流がある授業づくりの意義について話した。また、単元の目的分析や、それに基づく形成的な評価を単元導入前より授業計画の中に適切に配置する必要性を述べた（対象：兵庫県高等学校教員約 50 名）。

(11)兵庫教育文化研究所講師 「総合学習で培う学力」	平成 20 年 2 月	2007 年度の全国学力・学習状況調査における結果分析と総合学習との関連について講演し、基礎基本の学力低下が総合学習に起因するような論調について反論した。また、家庭の教育力が学力に及ぼす影響についても触れつつ、学校と家庭との連携が不可欠であることを主張するとともに、教育には学力保障と成長保障の両立が求められることを国際学力調査ＰＩＳＡの問題と関連付けながら述べた（対象：兵庫県内の教職員約 200 名）。
(12)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究会の特別活動部会助言者 「特別活動と総合的な学習の時間の連携」	平成 20 年 2 月	新学習指導要領における特別活動の意義を道徳及び総合的な学習の時間との関連に焦点を当てつつ指導助言を行った。特別活動を通して受容的な学級文化を形成することが重要であると説明した。現状の特別活動が「満足度や楽しさとは深く関わっているが、資質や能力の育成に十分繋がっていない」との批判も子どもの自発的自治的な活動の克服できると論じた。新内容としての清掃当番の扱いについてその意義と具体的な取り組みを助言した。
(13)大阪市平野区人権教育実践交流会パネラー 「地域全体で取り組む人権教育」	平成 20 年 2 月	平野地区教職員及び地域住民を対象に、学力には子どもの学習環境としての地域の果たす役割が大きいことを全国学力学習状況調査を基に話した。地域の文化を受け継ぎ地域に愛着を持つ子どもを育成することが地域活性化の鍵となること、災害時等に子どもの命を守ることにつながることを論じた。この力を培うことが重要であり、「総合的な学習」「特別活動」における体験学習等と「基礎基本」は相反するものではないことを具体例とともに示した。
(14)兵庫県西宮市立中学校教頭研修会講師 「地域･保護者との連携における教頭の役割」	平成 20 年 2 月	保護者のクレームが学校に大きな影響を与えている。教育活動を日常的に行う学校園にとって「不測の事態」は避けられないものと捉え、クレームをチャンスとして活かす方策としてクレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。また、学校組織の鍋蓋的な構造を乗り越え、組織的に対応することの重要性を説明した。

(15) 兵庫県芦屋市立山手小学校研究会の総合的な学習の時間の助言者 「日本一の学校給食」	平成 20 年 6 月	山手小学校の教職員を対象に助言を行った。テーマ「日本一の学校給食」の課題を児童が決定する過程の公開授業を参観し、授業後の研究協議会において指導を行った。あわせて総合的な学習における言語活動の位置付けについて今後の方向を例示した。
(16) 兵庫県芦屋市朝日ヶ丘幼稚園園内研修会指導助言 「学校評価と日常の保育との関係」	平成 20 年 6 月	朝日ヶ丘幼稚園の教職員を対象に指導した。全クラスの保育参観を行った後の研究会では、それぞれの幼児の発達年齢に応じた内容であるかどうかを踏まえて助言した。また学校評価を園の教育目標と関連付けて実施する必要性について提言した。
(17) 兵庫教育文化研究所教育課程編成講座講師 「各学校独自のカリキュラム編成の留意点」	平成 20 年 7 月	兵庫県下の教職員約 50 名を対象としたカリキュラム編成の講座である。兵庫県の小学校５年生で実施される１週間の自然学校を総合的な学習として位置づける上での留意点として、自然学校における各校のねらいに沿った活動内容や指導方法が必要であることを指導助言した。「体験主義」に陥り「学び」がない体験は経験化されないことを強調した。
(18) 大阪府生駒市青少年健全育成協議会講師 「地域・保護者との連携への視点」	平成 20 年 8 月	大阪府生駒市内の公立小中学校の教職員約 100 名を対象に「保護者と手を繋ぐために」をテーマに講演をした。学校に苦情や要望を述べる保護者が増加した社会的な背景を述べるとともに、学校内部の組織的な弱点を分析と指摘を行った。あわせて、保護者との「共感」とは具体的にどのように振る舞うことであるかにつきロールプレイを活用して提案した。
(19) 兵庫県芦屋市朝日ヶ丘幼稚園園内研修会助言者 「環境構成と教師の役割」	平成 20 年 10 月	年少と年長クラスの保育の参観と事後の協議会において幼稚園の教育要領の５領域と現実の保育内容を関連付けて指導助言を行った。あわせて、幼児教育の「環境を通して行う」意味の再確認と、今日求められている「規範意識の芽生え」を支える保育の方向性について提言を行った。

(20) 兵庫県芦屋市立幼稚園教育研修会講師 「新幼稚園教育要領の改訂のポイント」	平成 20 年 10 月	芦屋市公立幼稚園の園長と主任・行政担当者の約 20 名を対象に、新幼稚園教育要領の改訂のポイントと小学校学習指導要領の関連性について講演した。その中で、教育課程編成上の留意点及び、具体的な編成手順について指導した。特に幼稚園では、教育課程の評価が進んでいない点を指摘した。
(21) 京都市私立幼稚園新規採用教員研修会講師 「幼稚園の教師入門」	平成 20 年 10 月	私立幼稚園新規採用教員約 120 名を対象に「教員の使命感と職務遂行能力とは」をテーマに講演をした。教員の成長を日本の伝統文化継承の過程「守・破・離」に例え、現在学ぶべきことを具体的に話した。また、幼稚園教育は生涯学習の入口であり、ますます重要となる仕事であることを強調した。
(22) 兵庫県芦屋市山手小学校国語科校内研究会助言者 「国語教育における新しい言語活動」	平成 20 年 11 月	小学校４年生国語科文学教材「一つの花」の授業参観と事後の研究協議会で指導を行った。新学習指導要領の重要課題である言語活動を、国語科の中で具体的にどのように指導するかを助言した。また、文学作品における視点と読者の関係について教材研究する必要性を提案した。さらに、確かな教材研究に基づかない話し合い活動は、児童の論理的な思考を妨げる危険性があることを指摘した。
(23) 兵庫県芦屋市立山手小学校研究会の国語科の指導助言 「国語教育における新しい言語活動」	平成 20 年 11 月	小学校３年生の国語科説明文「ズームとアップ」の授業参観と事後の研究協議会の指導を行った。説明文教材であり、論理的に考えを示すのに適切な教材であり、児童の表現を相互評価し、さらにより良い表現を作り上げる授業であった。ただ、相互評価をさせる以前に、子どもに相互評価の規準や評価の視点を指導しなければ妥当な評価は出来ないことを指導した。
(24) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究会の総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習で福祉を取り扱う留意点」	平成 21 年 2 月	福祉教育で地域の高齢者とのかかわりをテーマとして授業参観と事後の研究協議会取り扱った授業 である。歳を重ねて高齢になることをマイナスにとらえがちである児童が多いが、ふれあい体験や探究活動を通して、歳を重ねることの素晴らしさを体感させる取り組みである。体験を文字化して児童が、自分自身の変化をメタに認知できるような場面が必要であると指導した。

(25) 兵庫県芦屋市立山手小学校全国発表会総合的な学習の時間の指導助言 「総合的な学習と環境教育」	平成 21 年 2 月	芦屋川の環境をテーマに、地域住民や専門家と連携した「環境サミット」を子どもたちが開催した。能動的に環境に働きかける姿が事後研究会で参加者より高い評価を受けた。保護者や地域住民、行政関係者等が一体となり児童の当事者意識を高めることができた。総合的な学習と国語科の書く力を連携させ、芦屋川新聞等を発行の機会を多く持ち、日常的に言語力を育成することの重要性を指導した。
(26) 兵庫県河辺郡猪名川町立公立幼稚園長及び校長研修会の講師 「保護者・地域との連携」	平成 21 年 2 月	危機管理の視点から保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。またそのような社会的な背景も考察した。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠である。クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。また、組織的に対応し、教訓を継承することの重要性を説明した。
(27) 兵庫県芦屋市立公立幼稚園園長及び主任研修会の講師 「言語活動と幼小連携」	平成 21 年 3 月	新学習指導要領及び教育要領の実施に伴い、今後もとめられる言語活動の重視及び体験的な活動と知識理解との関係について論じた。県大会で発表する芦屋市の教育課程基底の枠組みについて指導した。また小学校教育との連携をどのように保育のなかに取り入れるかについて説明した。遊びを学びとしてとらえるための指導と評価を提案した。
(28) 兵庫県芦屋市公立幼稚園研修会全体講師 「幼稚園教育要領の改定と芦屋の特色」	平成 21 年 3 月	幼稚園教育要領の改訂のポイントと、その内容が小学校・中学校の教育内容にどのように継続しているのかを解説した。芦屋市の地域性を全校学力状況調査の結果と結び付けて説明した。比較的学力の高い地域に求められる「心をたがやす保育」の方向を提示した。
(29) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期における言語活動」	平成 21 年 6 月	5 領域の「言語」に焦点をしぼった公開保育と事後研究会を行った。豊かな体験を基本とした絵本の読み聞かせ教育を通して、子どもの感性を磨くことに重点をおいた公開保育であった。体験の言語化を援助する教師の指導について、幼児期から小学校低学年までの幼児児童の発達の特徴と関連付けながら論じた。

(30)兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「幼稚園の教育評価と保育内容」	平成 21 年 6 月	幼稚園の教育課程の意義について論じた。例年通りの踏襲になりがちである次年度教育課程には、評価が不可欠であることを述べた。さらに教育評価では地域住民や保護者からの声を反映し、次年度へ返していくPDCAのサイクルの重要性について論じた。外部評価の有効な活用方法について、例示しながら説明した。また、道徳性的な実践力を身につけるためにコミュニケーション活動を重視した保育の研究方法についても論じた。
(31) 第 17 回授業実践フォーラム生活科部会講師 「新学習指導要領の言語活動と生活科」	平成 21 年 6 月	新学習指導要領において生活科の中で言語活動が取り入れられた。それに伴い一部の実践で「見つける・比べる・たとえる」の「たとえる」ことが強調されすぎ、体験感動・内面の納得を伴わない言葉遊びになる危険性があることを指摘した。重要なことは「知的な気づき」であることを再確認し指導した。
(32)奈良市立幼稚園教員研修会 「保護者・地域との連携を支える共感」	平成 21 年 8 月	奈良市立公立幼稚園教諭の約 60 名を対象に「保護者の要望にこたえるために」をテーマに講演をした。園に苦情や要望を述べる保護者が増加した社会的な背景を述べるとともに、園独特の組織的な弱点と強み分析し、それを活かした保護者対応を指導した。幼稚園独特の「共感」とは何かをロールプレイで提案した。
(33)兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師 「生活科における言語活動」	平成 21 年 8 月	兵庫県阪神地区の小学校生活科担当教諭150名を対象に「生活科における言語活動とは－新学習指導要領に基づいて－」の講演を行った。また当日提案された生活科のレポートへの指導助言も行った。生活科の活動や体験が、身近な地域を対象に工夫されているが、その目標が明確でないことを助言した。
(34) 兵庫県猪名川町教職員研修会講師 「保護者・地域との連携」	平成 21 年 8 月	兵庫県猪名川町の教職員約50名社会的な背景とともに、保護者の意見や苦情が学校や園の教育活動へ与えている影響を論じた。現在の経済状況において公的な仕事の従事者に対し厳しい目が向けられることへの自覚を促した。教育活動には「不測の事態」は避けられないが、傾聴する姿勢が不可欠であり、クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・誠意」の重要性を述べた。

(35) 平成 21 年度免許更新講習会講師 「求められる資質と職務遂行能力」	平成 21 年 8 月	新教育課程を実践するうえで教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について講義をした。20代から50代までの年代別に，教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日，教職10年を経過する教師はミドルリーダーとして，学校運営に参画することが求められていることを述べた。
(36) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「道徳性の芽生えと幼稚園教育要領」	平成 21 年 9 月	芦屋市立幼稚園教諭約10名を対象に指導助言を行った。新学習指導要領の道徳教育重視の流れを受けて、幼稚園での道徳性の芽生えを図ることの重要性を述べた。集団的な体験活動での葛藤や、その後の話し合い活動など、幼稚園としてふさわしいものは何かを提案した
(37) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修会講師 「幼稚園における言語活動と環境構成」	平成 21 年 10 月	芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等の教諭約10名を対象に指導助言を行った。新学習指導要領の小学校の言語力育成を受けて、幼稚園としてふさわしい学力は何かを提案した。幼稚園でも「話す・聞く」活動を系統的実施する必要性を助言した。
(38) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修会講師 「保育における話し合い活動の指導」	平成 21 年 11 月	芦屋市立西山幼稚園等教諭約10名を対象に指導助言を行った。話し合い活動を通して思考力を育てる事を目標とした公開保育が実施された。子どもの葛藤場面を保育の中で取り上げ、教師が適切な価値の方向性を示すことの重要性を指摘した。
(39) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「新学習指導要領と授業時間数の増加」	平成 21 年 11 月	兵庫県内の教職員約50名を対象に指導助言をした新学習指導要領が先行実施されて、授業時数の増加指導内容の増加など、教員にとって研修の必要性が高くなっていることを助言した。教科書と教育課程とを同一視していることはいけないこと、教員が各単元の目標分析をすることを提言した。
(40) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校全国研究発表会全体会講師 「言語力を育成する授業の在り方」	平成 22 年 2 月	全国の教員約450名を対象に講演した。携帯電話が子どものコミュニケーションを阻害している実態について話した。携帯電話の弊害を乗り越える正しい言語力を育成するための、授業に求められる話し合い活動について、また対話が成立する学級・学校文化の重要性を提案した。

(41) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「絵本の幼稚園教育における役割」	平成 22 年 2 月	芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等の教諭約10名を対象に指導助言を行った。絵本読み聞かせや親子絵本の会の実施に取り組んでいることの意味づけを行った。絵本に親しむことで、豊かなイメージを持ち、言葉の感覚を養うことを話した。幼児期に培われた言葉が小学校教育にどのように継続されるかも具体例を挙げて論じた。
(42) 兵庫県神戸市小学校教科等研修会総会における生活科講師 「新学習指導要領と生活科の変更点」	平成 22 年 3 月	神戸市の生活科担当者約60名に講話をした。新学習指導要領の変更点について説明する。算数や理科の指導内容が多くなり、生活科の影が薄くなりがちであるが、体験に支えられた納得・実感・本音の理解の仕方が重要であることを再度確認した。また、幼小学校の段差である小１プロブレムを解消するため、入学時のスタートカリキュラムの重要性について提案した。
(43) 兵庫県芦屋市朝日ヶ丘幼稚園園内研修講師 「幼児期にふさわしい言葉の指導」	平成 22 年 5 月	芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園等の教諭約10名を対象に指導助言を行った。４・５歳児の「遊びの中で言葉の力を育む」を狙いとした保育参観も行った。５領域は，幼児期に育てたいことを幼児自身の発達の側面から取り上げたものであるのであること。各領域の内容は総合的に指導するものであり，幼児を取り巻く環境を構成する視点でもある。幼児の活動は「言葉」という領域に偏った指導は好ましくないことを例示した。
(44) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「子どもの人間関係を豊かにする指導」	平成 22 年 5 月	芦屋市立西山幼稚園で４・５歳児の保育を参観しその後，教諭約10名を対象に指導助言を行った。友達や教師と安定した人間関係が築かれることにより情緒が安定すること。幼児が「友達」を理解する過程やその中で育つ他者を思いやる気持ちについて話した。また，そのための保育者の役割を具体的な保育の場面を例に挙げた。
(45) 兵庫県芦屋市幼稚園教育課程研修会講師 「幼稚園と小学校のカリキュラムの連続性」	平成 22 年 7 月	芦屋市立幼稚園教諭100名を対象に「幼稚園と小学校の教育課程の連続性」についての講演を行った。特に幼児期の子どもが，小学校のような形式的な文字の指導なしに，日常生活の中で文字を読み書きできるという現状を認識した保育が重要であることを話した。また，反対に幼児期から字の形や書き順になどを指導する一斉指導は問題があり、幼児期の言葉は知的能力の指標としてとらえがちであるが，日々の豊かな経

		験に基づく総合的な発達の中で言葉が育つことの重要性を指導した。
(46)兵庫県加古川市教頭研修会講師 「地域・保護者との連携と教頭の役割」	平成 22 年 8 月	兵庫県加古川市立学校教頭等50名を対象に「信頼される学校園」をテーマに講演を行った。信頼される学校園づくりには，子どものことを第一におき，何をどのように解決するべきかを保護者とともに考えることを強調した。いわゆる「モンスターピアレント」という呼称が持つ否定的な意味ではなく信頼関係を築く方策を助言した。
(47)奈良市小学校教員夏季研修会講師 「地域・保護者と連携する教師の在り方」	平成 22 年 8 月	奈良市立小学校教諭等30名を対象に「保護者と信頼関係を築くためにやるべきこと」をテーマに講演を行った。奈良市内小学校で起きている具体的事例を取り上げながら，ロールプレーで演習を行い，問題解決への過程を示した。保護者の苦情をや訴えを聞き取り，その裏にある思いや願いを読み取ることの重要性を指導した。学校ができること出来ないことを明確にしつつ対応することが不可欠であることを話した。
(48)兵庫県芦屋市山手小学校校内人権教育研修会講師 「男女平等教育の歴史と学校のジェンダー」	平成 22 年 8 月	芦屋市立山手小学校教員２０名を対象に，人権教育の中で特に男女平等教育に係る授業実践のための基本的な理念について指導助言を行った。ジェンダー問題の歴史及び男女平等教育の現状さらに学校教育における課題について話した。特に教育課程を編成にあたり，意図的計画的に位置付け教育活動全体を通して男女平等教育を推進することや教師自身の研修が重要であることを提案した。
(49) 兵庫県阪神地区小学校教科等研修会生活科部会講師 「心を育む生活科の在り方」	平成 22 年 8 月	兵庫県阪神地区生活科教育担当者200名を対象に実践への指導助言と講演を行った。テーマは「心豊かにたくましく生きる力を育む生活科の実践」である。伊丹市と芦屋市の幼稚園と小学校の連携をねらいとした実践の発表があった。両者の連携はともするとイベントになりがちなので，双方の教育課程に位置付け継続的に関わりを持つことを助言した。講演では，小学校低学年における教科横断的・総合的な指導の必要性を強調した。

(50) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「教育課程と総合的な学習の時間」	平成 22 年 11 月	生活科及び総合的な学習の時間の単元構成について，兵庫県の小学校教員50名に指導助言した。総合的な学習の時間が新学習指導要領で時間数減となるが，それは意義やねらいの後退ではないことを論じた。従来の総合的な学習の時間の問題点である単なる体験活動を乗り越えて，課題解決的な追求的な学習に高めることを事例を挙げながら説明した。
(51) 全国女性校長会近畿地区大会分科会指導助言 「学校運営と女性校長の指導性」	平成 22 年 11 月	近畿小中学校の女性校長50人を対象に，分科会で指導助言を行った。テーマは「新しい時代を拓く学校経営と校長の指導性―家庭・地域・学校の連携と，学校運営への協働・参画―」である。女性校長の数が全国的に減少する中で，女性の特性を生かした学校運営の在り方を，大学における学科運営の具体例を挙げながら話した。公的な学校で常識と考えられている様々な習慣が，世の中の動きに合わなくなっていることを自覚する必要を指導した。細やかな配慮などは、女性校長の特質であるかのようなステレオタイプを乗り越えて、学校経営にあたること示唆した。
(52) 兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修指導助言 「豊かな人間関係を育てる保育」	平成 23 年 1 月	芦屋市立西山幼稚園で４・５歳児の「豊かな人間関係を育てる」をねらいとした保育を参観しその後，教諭約10名を対象に指導助言を行った。道徳性の芽生えを培うには，幼児が他の幼児と関わる中で他人の存在に気づき相手を尊重して行動することが大切であること。また，身近な動植物に親しむことにより豊かな感情が育つことを話した。特に信頼感や思いやりは一直線に育つのではなく，葛藤やつまずきを通してそれを乗り越える体験で育つことを助言した。
(53) 兵庫県芦屋市教育研修所教員研修会講師 「保護者・地域との連携をはかるために」	平成 23 年 2 月	兵庫県芦屋市立小学校・幼稚園教諭等20名を対象に「保護者との信頼関係を大切にする学校園づくり」をテーマに講演を行った。学校園と地域社会・保護者との関係に変化が起きた社会的な背景を，具体例を挙げながら解説した。社会や国民全体の権利意識の高揚や保護者の経験した学校生活などが，大きな要因になっているので，学校の教員の意識改革も不可欠であることを説明した。

(54) 兵庫県芦屋市教育委員会指定研究会講師「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」	平成 23 年 6 月	芦屋市教育委員会の指定研究発表大会である。幼稚園教員約１５０人を対象に講演を行った。テーマは「自分らしさを発揮し友達と響き合う幼児」である。４歳児と５歳児の自我の発達と，他児とのコミュニケーション力の発達に着目して，遊びの中での子どもの心の葛藤とひきだす保育の意義について話をした。また，児童が葛藤しこころを成長させるための，環境としての保育者の役割，その他の環境構成のあり方の重要性について話をした。またこれが，幼児期の道徳性の芽生えであることも指摘した。
(55)兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言「異年齢交流と協同学習①」	平成 23 年 6 月	朝日が丘幼稚園の保育を参観しその後，園の教育方針と保育の方向性の妥当性について，教員6名を対象に指導助言した。本園は4歳児1クラス5歳児1クラスの，単学級の園である。本来ならばさびしくなるところであるが，単学級の利点を生かして，日常的に徹底的な異年齢交流を実施して，子どもを育てている。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用して，5歳児に責任ある行動やおもいやりの心を育むことの意義を論じた。
(56) 岡山県総合教育センター研修講師「新しい生活科の具体的な授業づくり」	平成 23 年 8 月	岡山県内３０人の生活科担当教員対象に「児童の気付きを深めたり広げたりするための，少子の支援の在り方」について，講演と演習を行った。まず，児童の気付きとは何かを学習指導要領の解説書を基に説明した。次に具体的な子どものシートを用いて，「気付きを深める声掛け」「気付きを広げる声掛け」を演習として実施した。広げる深める声掛けも。あくまで単元全体や本時の狙いに沿ったものでないと「いいね」「すごいね」という一般的抽象的なものになり，目標に沿った授業が成立しないと指摘した。
(57)「あしや教育フェスティバル」生活科部会指導助言「若い先生でもできる生活科」	平成 23 年 8 月	生活科の2年生の授業「私の町の素敵をおしえよう」の実践報告の指導助言を行った。芦屋市の生活科担当の教員20名を対象。若い教師が増え，生活科の狙いや学習スタイルが理解できていない。そのため，教科書をそのままなぞる授業が増加している。そこで，生活科が新教科として設置された社会的背景や，理念について指導した。教員の若返る学校現場で，生活科や総合的な学習の時間の指導の危機を指摘した。

(58)京都中央看護専門学校研修会講師 「主体的に学ぶ学生集団作りについて」	平成 23 年 9 月	看護師を養成する専門学校の教員50人を対象の研修会で「主体的に学ぶ学生集団をつくる学級担任の役割」について講演した。看護学校の授業は基本は40人以下で実施されており，個別の対応に配慮はされている点は評価できる。しかし，授業が講義や実習にしても指導者から一方的な指導スタイルものが多くみられる。もし双方向の授業であっても，教師と学生が1対1で双方向に取り組んでいるにすぎない。学生を集団として学ばせる共同学習として学習集団の育成が遅れていることを指摘した。教員の教育方法・技術の見直しが重要であることを論じた。
(59) 兵庫県教育研修集会教育課程部会指導助言 「新教育課程と総合学習」	平成 23 年 11 月	兵庫県の各地から総合的な学習の時間のえレポートが３０本報告をされた。兵庫県内の総合的な学習は,3年生では兵庫県が自然体験補助金を出しているため，安易な体験あって学びなしといわれる学習が目につくことを指摘した。自然体験だけ終わるのでなく，振り返る学習とセットで取り組むことが重要であることを指摘した。高学年では，新学習指導要領の伝統文化の重視の方向性を受けて，地域の伝統文化をテーマに取り組む総合的な学習が多く見られた。
(60) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園園内研修指導助言「異年齢交流と協同学習②」	平成 23 年 11 月	本園は4歳児1クラス5歳児1クラスの，単学級の園である。単学級の利点を生かして，日常的に徹底的な異年齢交流を実施して，子どもを育てている。特に体を動かして異年齢で教え合う昔の遊びを活用して,5歳児に責任ある行動やおもいやりの心を育むことを狙いとしている。異年齢交流を通しての子どもの協同学習に焦点を当て，教師が共通理解しながら子どもの保育にあたるという姿勢は良い。園の方針を教員が共通理解することを指導助言した。
(61)兵庫県芦屋市立西山幼稚園園内研修講師 「自分らしさを発揮し友だちと響きあう幼児」	平成 24 年 1 月	芦屋市立西山幼稚園の教員6名を対象に園内研修の指導助言を行った。2月の生活発表会の出し物を選んでその表現活動を行っている保育を参観した。最後は保護者に見せる作品に完成するため，物語の主題とずれた箇所で，子どもの表現を無理に引き出そうとしている教師の意図の誤りを指摘した。幼児の意識より，生活発表会の流れが重視されると困ることを指導した。

(62) 兵庫県芦屋市立潮見中学校 総合的な学習の時間の講師 「進路選択ためのキャリア教育」	平成 24 年 2 月	芦屋市立潮見中学校の2年生120人を対象に,「今の中学校2年生に伝えたいこと」という「自分の生き方」をテーマに講演会を行った。中学2年生の時期は中学校の中で中だるみに時期になる傾向があり，進路についてまだしっかりとした意識付けができていない。この時期の生徒に，大学で学ぶのに必要な基礎的な学力と，夢を持ち続け実現するための継続的な学び姿勢の大切さを話した。
(63) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「教育目標を日常の保育に反映させる」	平成 24 年 5 月	芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園教諭６人を対象に指導助言をおこなった。進級や入園間もないクラスで、学級づくりの途中のクラスの保育を参観した。４歳児は園の決まりを身につけ。５歳児は年長としての自覚を育成している時期である。この時期に、園としての教育目標を各保育にどのように反映するかを、具体的な保育を事例に指導した。
(64) 平成 24 年度免許更新講習会講師 「今求められる資質と職務遂行能力」	平成 24 年 8 月	新教育課程を実践するうえで教師として求められる「資質」と「職務遂行能力」について教員４０人を対象に講義をした。年代別に，教員経験年数に伴う，学校の校務分掌の中で果たすべき役割について論じた。特に新任教師が増加している今日，ミドルリーダーとして，学校運営に参画することが求められていることを述べた。また、学校としてのチームワークの重要性が今後ますます求められることを指摘した。
(65) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言 「国語科の書くことと生活科の関連」	平成 24 年 8 月	兵庫県芦屋市の教員１５名を対象に、生活科で事実をとらえる目を養うために国語科と合科的に扱った指導実践例の報告があった。国語科指導で事実を見る目や書く力は育っているが、生活科の自分との関係性において植物の成長をとらえる視点の弱さを指摘した。
(66) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育研修会 講師「男女共生教育と教育実践」	平成 24 年 10 月	岩園小学校の教員30名を対象に、男女共生教育について校内研修会の講師を務めた。男女共生教育の歴史とともに、この教育は道徳のみでなく、各教科と連携して、学校教育全体で扱うべきだと助言した。特に隠れた潜在的なカリキュラムに注意するよう指導した。国語科の言葉にこだわって、男女共生の授業実践を提示した。

(67) 兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘幼稚園 園内研修講師 「異年齢交流と協同学習③」	平成 24 年 11 月	朝日ヶ丘幼稚園の教員6人を対象に指導助言を行った。異年齢交流での協同遊びと、その後の話し合い活動の参観をした。話し合い活動では、友だちの良い点を取り上げて発言させ、人間関係を気付いていた。さらに、聞くという姿勢を徹底的に指導されていることを評価した。
(68) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」	平成 24 年 11 月	兵庫県の教員40名に対して実践発表を取り上げ指導助言を行った。総合的な学習の体験の部分がクローズアップされ、探究の部分が消えていることに対し警鐘をならした。総合も年月を重ね、活動がパターン化していると指導した。
(69) 兵庫県芦屋市立岩園小学校人権教育 校内研究会講師	平成 25 年 1 月	男女共生教育の4年生の授業を参観し、その後教職員20人を対象に、事後研修会を行った。国語の男子や女子を形容する形容詞や形容動詞に焦点を当てて、児童がもっているステレオタイプの考え方を、学校教育でどのように指導するかを話した。また、男女共生教育を巡る隠れたカリキュラムについて、具体例を挙げて説明した。
(70) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」	平成 25 年 11 月	兵庫県の教員40名に対して実践発表を取り上げ指導助言を行った。東日本大震災から防災教育が教育課程の中に新たに取り込まれる事例が増えた。総合的な学習や特別活動ので実践が増加したが、各教科とも連携し意識的に教育課程に組み込む必要性を助言した。
(71) 神戸市立小学校生活科部会研究会 講師	平成 26 年 1 月	1 年生の成長単元の授業参観を行い、その後幼稚園・小学校の教員 60 人を対象に講話を行った。生活科の成長単元は児童の自尊感情を育み周囲に感謝の気持ちをもたせることがねらいであること。これは命を大切にすることに繋がることをアンケート調査を基に説明をした。子どもの死生観の境目を意識して教育に当たる必要を述べた。
(72) 兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会 講師①	平成 26 年 5 月	「心豊かに感じ、共に育ちあう幼児を目指して」をテーマに、年長と年少の全クラスの保育参観と指導助言を行った。サブテーマは「自分らしさを発揮し人と関わる力が育つ援助を考える」であった。教員 10 人を対象に講話をした。入園して 1 か月の年少児に年長児が積極的に関わるための環境設定について述べた。

(73) 兵庫県芦屋市立小槌幼稚園研究会 講師②	平成 26 年 6 月	前回の研究会から 1 か月経過後、幼児の人と関わる力の伸長と、教員の指導の在り方の相関性について述べた。4 歳児 5 歳児全クラス保育参観を行い、具体的な教師の振る舞いや声掛けが、保育に及ぼす影響について分析した。テーマは「自分らしさを発揮し人と関わる力が育つ援助を考える」教員の在り方であった。小槌幼稚園等教員 10 名が対象である。
(74) 「あしや教育フェスティバル」生活科部会 指導助言	平成 26 年 8 月	兵庫県芦屋市の教員２０名を対象に指導助言をした。「楽しく体験！生活科」という1年生入学直後の「学校探検」の単元を基に、論じた。さらに生活科を通して1年間の幼・小の交流を教育課程に位置付ける際の留意点について話した。近年、幼稚園と小学校の交流と比べ、保育所との連携が進まない現状と解決方策について提案した。生活科のスタートカリキュラムは、幼保ともに対象であることを確認した。
(75) 兵庫県教育研修集会教育課程部会 指導助言「新教育課程と総合学習」	平成 26 年 11 月	兵庫県の教員５０名に対して、県下各地の実践発表20件を基に指導助言を行った。生活科や総合学習は地域に根差したテーマを採り上げて、児童生徒が課題解決をするという学びのスタイルは定着したが、一方で課題が出ていることを指摘した。生活科は教員の指導による取組の格差、総合学習は学校行事への準備の時間として安易に活用される傾向の危険性を論じた。
5　その他		
1　大学設置･学校法人審議会における教員組織審査による判定	平成 18 年 12 月	京都光華女子大学短期大学部　こども保育学科教授として「生活と文化」「保育課程総論」「基礎演習」「総合演習」「教育・保育実習指導」の科目が担当可と認定
2　大学設置･学校法人審議会における教員組織審査による判定	平成 21 年 2 月	環太平洋大学　次世代教育学部学級経営学科教授として「生活科教育法」「生活の理解」「特別活動の指導法Ａ（初等）」「特別活動の指導法Ｂ（中等）」「学校･学級文化の受容力」「学校と社会」「総合演習」「教育実習事前･事後指導（初等）」「教育実習Ⅰ（小学校）」「教育実習Ⅱ（小学校）」「教育実習Ⅱ（中学校･高等学校）」「教育実習Ⅱ（中学校）」「学級経営学ゼミナールⅠ（基礎）」「学級経営学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」の科目可と認定

3　大学設置･学校法人審議会における教員組織審査による判定	平成 25 年 7 月	奈良学園大学人間教育学部教授として「生活の理解」「特別活動の指導法Ａ（初等）」「特別活動の指導法Ｂ（中等）」「教育原理（初等）オムニバス」「教育原理（中等）オムニバス」「教職実践演習（幼・小）」「教職実践演習（中・高）」「教育実習事前･事後指導（幼）」」「教育実習事前･事後指導（中・高）」「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教育実習Ⅰ（中･高）」「教育実習Ⅱ（中学校）」「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」の科目可と認定
4　中央教育審議会　課程認定委員会における判定	平成 26 年 2 月	「生活の理解」「特別活動の指導法Ａ（初等）」「特別活動の指導法Ｂ（中等）」「教育原理（初等）オムニバス」「教育原理（中等）オムニバス」「教職実践演習（幼・小）」「教職実践演習（中・高）」「教育実習事前･事後指導（幼）」」「教育実習事前･事後指導（中･高）」「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教育実習Ⅰ（中･高）」「教育実習Ⅱ（中学校）」担当可と判定

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年 月 日	概　　要
1　資格，免許 (1)小学校教諭２種免許 (2)小学校教諭１種免許 (3)小学校教諭専修免許 (4)修士（教育学）	 昭和 52 年 4 月 平成　5 年 4 月 平成 10 年 3 月 平成 10 年 3 月	 昭 52 め第 2263 号（京都府教育委員会） 平 5 小 1 第 22 号（兵庫県教育委員会） 平 9 小専第 2035 号（大阪府教育委員会） 大阪教育大学　実践教育学専攻　証第 20 号 論文題目：「生活科新生の試み－新たな防災教育を中心に－」
2　特許等　　なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)兵庫県阪神地区中学校生徒指導連絡協議会幹事	 平成 17 年 4 月～平成 19 年 3 月	 2 年間，芦屋市生徒指導担当校長として阪神地区６市１町の生徒指導校長及び神戸市校長と定期的に情報交換を行い，生徒指導上の問題解決に尽くした。また定期的に，研修会を行い教員の生徒指導上の能力向上に尽力した。
(2)芦屋市小中学校生徒指導連絡会会長	平成 17 年 4 月～平成 19 年 3 月	市内の生活指導担当者が毎月一回、集まって情報交換や問題解決の方策を話し合い、効果をあげた。また神戸市等の近隣の学校の校長及び生徒指導担当者と研修会を実施して生徒指導の能力の向上に努めた

(3)第 57 回兵庫県造形教育研究大会事務局長	平成 17 年 4 月～平成 18 年 3 月	大会テーマは「感動・創造」、各部会テーマはそれぞれ幼稚園が「出会い」、小学校が「ふくらみ」，中学校が「深まり」である。兵庫県下から 700 人の図工及び美術教育に関わる教員が参加し、幼稚園から中学校まで全学年の公開授業が実施され事後研究会がもたれた。
(4)平成 18 年度兵庫県中学校教科等研究会国語部会幹事	平成 18 年 4 月～平成 19 年 3 月	10 月に兵庫県教科等研究会中学校国語部会阪神地区大会を開催した。中学校国語関係者 100 名が参加し、授業研究会と事後研究会を実施した。全体会では地域住民である作家の小川洋子さんと中学生の交流の場を設定し、読書の楽しさを学ぶ機会を設けることが出来た。
(5)国立大学法人兵庫教育大学と株式会社ベネッセコーポレーションとの協同研究総括チーム委員	平成 20 年 10 月～平成 22 年 3 月	「活用型学習」の指導方法及び評価方法等の研究を行う。本研究では習得・活用・探求の意味づけを行い，各教科ごとに活用型学習の開発を行う。研究は各教科に分かれて実施されたが，各教科に属することなく，全体を総括する評価や指導についての研究を行った。
(6)兵庫県芦屋市学力向上推進委員会委員	平成 20 年 11 月～平成 22 年 3 月	平成 19・20 年度の全国学力状況調査の結果を受け、市内の学力向上のためのシステムを提案することを目的とする学識経験者２名、小中の校長２名、教諭２名、行政関係者６名により構成される委員会において、学力向上のために、研究会の充実と小中の連携が不可欠であることを提案した。
(7) 兵庫県猪名川町教育委員会「猪名川の教育・点検・評価報告書（平成 19～24 年度対象)」作成協力者	平成 21 年 9 月～平成 25 年 3 月	猪名川町教育委員会の学校教育の各項目について目標達成度さらに今後の課題について、外部委員として点検評価を行った。学識経験者として，点検評価に 4 年間にわたり関わり指導をした。特色ある学校づくりを目指した猪名川の今後の 5 年間にわたる教育基本構想の基盤となるものである。毎年この評価報告書は，市民に対して公開されている。
(8)兵庫県猪名川町教育基本計画策定委員	平成 22 年 5 月～平成 24 年 3 月	平成 18 年に改定された教育基本法を受けて兵庫県教育委員会策定の「兵庫教育策定プラン」に基づいて猪名川町独自の今後 10 年間の教育のプランを策定するものである。猪名川町における教育の振興方針と施策の体系を示し，町全体の教育振興を図るための基本計画を策定するものである。委員として学識経験者，保護者，学校関係者 10 名で構成されたが，副委員長を務めた。

(9) 兵庫教育大学ベネッセ教員育成研究奨学生選考委員	平成22年4月～平成24年3月	ベネッセコーポレーションが兵庫教育大学の教職大学院で学ぶ学生に対して研究助成を行い，その奨学生の選考を行うものである。毎年初めに，計画書を審査し，年度末にその成果を提出し発表を行った。
(10) 兵庫県立芦屋高等学校の学校評議員及び学校関係者評価委員	平成21年4月～平成26年3月	兵庫県立芦屋高校の学校評議員及び学校関係者評価委員を4年間勤めた。兵庫県立芦屋高等学校の学校行事及び学力向上研究会等に参加し、年度末に学校評価点検を実施し、保護者地域等に公開している。委員は保護者、地域住民、学識経験者、学校関係者など8名で構成されている。
(11) 三田市教育振興基本計画検討委員会委員	平成23年6月～平成24年9月	三田市民や保護者・学校関係者・学識経験者を含む１０名で委員会は構成されている。副委員長として、委員長を補佐し会の運営にあたった。教育基本計画は，三田市の今後 10 年間の教育の方向性を検討する基盤案であり，その作成に尽力した。
４　その他 (1) 環太平洋大学における役職	平成21年4月～25年3月	次世代教育学部学級経営（教育経営）学科の学科長を4年間勤めた。また教職センター長を兼務し，1期生を卒業させ，約70%の学生が教育関係への進路を確保した。さらに平成23年から2年間は，教育経営学科長とキャリアセンター長，学長補佐を兼務した。卒業生の進路は、毎年全国平均を上回り、就職に強い大学として社会的評価を得た。学長補佐として事務職員と教員の連携を強化した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1　著書 (1)学校マネジメント 8 月号「現場主義で読み解く“新教育課程”の方向」	共著	平成 18 年 8 月	明治図書	これからの教育課程について，様々な立場からその方向性と可能性について論じたものである B5 版　全 77 頁　　編者：明治図書 共著者：八重樫憲一・菱村幸彦・長尾章夫・森下恭光・影浦攻・田中博史・田中義之・加藤幸次・田中耕治・片上宗二・小森茂・田近洵一・森一夫・角屋重樹・楚阪博・田中統治・高階玲治・天笠茂・北俊夫・生越昭二・松田智子・他 21 名 （担当：p. 44～p. 45 を単著） 中央教育審議会の指摘を受けて、学習意欲をアップする方策について述べた。児童生徒の学ぶ意欲は教えるという営みなしには成立しない。また学校での学びが私的な家庭教育と一線を画する意味は、その多様性にあるといえる。低学年は「面白そう」という個人的意欲でも育つが、高学年では「大切だからやろう」という社会的な意欲も育てなければならない。また、学ぶ意欲は持続しないので、絶えず学ぶことの意義を子どもに納得させる取り組みも必要であることを論じた。
(2)道徳と特別活動№24	共著	平成 19 年 8 月	文溪堂	道徳と特別活動の充実には家庭・保護者との連携は欠かせない。その方策について論じた。 Ａ５版　全 63 頁 編者　文溪堂 共著者：堺正之・倉持雅夫・山田悦子・長谷留理子・長谷川勝一・古門雅司・松田智子・長谷徹・畠山由香里・大橋健一・杉田洋・谷田増幸・八巻寛治・新井邦二朗・志鎌正敏・他 4 名） （ｐ25～29 保護者対応の現在の部分を単著） 様々な児童生徒の教育活動を日常的に行う学校園にとって「不測の事態」は避けられないものと捉え、保護者のクレームをチャンスとして活かす方策を述べた。保護者と手をつなぐことをねらいとして、クレームに対応する基本姿勢「スピード・面談・共感」の重要性を述べた。共感するには、教師や児童・生徒が保護者や地域と連携するために、社会の実際に目を向ける必要があること、学校として組織的に行動することの重要性を提案した。そのためには特別活動における学校行事や社会体験などを内容に含む特別活動の役割は大きいことを述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3) 教育フォーラム〔41〕新しい学習指導要領-カリキュラム改革の理念と課題	共著	平成20年2月	金子書房	新学習指導要領が出され、各教科の配当時間も変わった。今後の各教科のカリキュラム作成に対する基本的な姿勢について論じたものである。 A5版　全150頁 編集：梶田叡一 共著者：加藤明・浅田匡・二瓶弘行・硲茂樹・田中博史・矢野英明・直山木綿子・松田智子・上月敏子・勝見健史・鎌田首治朗・善野八千子 （担当：p.89～p.99　総合的な学習の部分を単著） 中学校特別活動の学校行事に位置付けられている職場体験活動を総合的な学習と連携して学ぶ指導方法について述べた。さらに総合的な学習のコーディネータの配置の重要性とその役割について述べた。また中学における特別活動を、総合的な学習と連携するために、職場体験と言う実践例をあげ改善ポイントとともに提案した。中学校における特別活動と総合的な学習の時間の関係について、安易に特別活動を総合的な学習に読み替えることへの現状と課題を示した。
(4)「学力」こどもからはじまる教育	共著	平成20年3月	兵庫教育文化研究所「子どもと教育」No128	文部科学省が実施した悉皆の国語と算数の学力テストをどのように受け止めて、今後の目指す学力形成への方法論に結び付けていくかについて調査資料とともに論じたものである。 A４版　全74頁 編者：兵庫教育文化研究所 共著者：桂正孝、福田誠司、遠藤幸弘、神田章吉 松田智子 (担当：p19～20「全国学力学習状況調査」の問題を授業改善に生かすの部分を単著) 単に学力調査を学力テストと決めつけ児童生徒を序列化するものとして反対をするのはよくないことを論じた。新学習指導要領は入り口であり、「目的」からの授業改善を目指しており、学力テストは「評価」からの授業改善と捉えるべきであると提案した。学力調査の問題を研究し、自らの日常の授業を改善する必要性を論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(5)「言語力」を育てる授業づくり－新学習指導要領対応－	共著	平成 21 年 9 月	図書文化	学習指導要領の改訂で言語力の育成が重要な課題として提示された。その意義と各教科における取組について論じたものである。 Ａ５　版　全 157 頁 編者：梶田叡一・甲斐睦朗 共著者：梶田叡一・甲斐睦朗・加藤明・吉川芳則・棚橋尚子・岩田一彦・清水静海・角屋重樹・松田智子・琉田直・高橋美由紀・新富康央 （担当：P,162～167 生活科の部分を単著） 生活科における言語力育成の部分を担当執筆した。生活科においては体験の言語化が重要になる。具体的には小学校の入門期において国語科の「話す・聞く」という領域と連携しながら系統的に継続的に、生活科のスピーチを取り組む過程を紹介した。ものごとをたとえたり比較したりして見ることにより，さらにそれらを言語化して表出することにより，気づきの質が高まることを提示した。そして、文字化したものを、仲間と交流することにより、異なった感じ方に触れ、再度自分の気付きを深めることができるという過程も提案した。
(6)　教育フォーラム[46]　―言葉の力を育てる―	共著	平成 22 年 8 月	金子書房	新学習指導要領に基づき、言語力をどのように育成するかについて各教科からの提案である。 Ａ５版　全 146 頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・伊崎一夫・鎌田首治朗・増井眞樹・勝見健史・汐海治美・谷本寛文・中島繁雄・金澤緑・米田豊・浅田匡・松田智子・他 12 名） （担当：P,136～146 幼児期の言葉部分を単著） 「幼児期にふさわしい学力を考える―言語力の育成を通して―」をテーマに言葉を中心にした幼稚園の教育課程について論じた。言語の役割として伝達としての機能と思考力の機能の二つがあることを提案した。年長児における合意形成を目指した言語活動の経験が自己をコントロールする力や思考力を身につけることを事例を挙げながら論じた。また幼児期につけたい言葉の力として，その特徴と獲得させたい基本的な語彙を幼児の認識力と関連付けながら述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)不登校生支援ハンドブック 事例研究からのアドバイス「校内連携」	共著	平成22年12月	学研エディケーショナル	不登校生を支援するために書かれた，学校の教師とスクールカウンセラーのための著作である。具体的な事例を挙げ，その対策を述べている。 Ｂ５版　全207頁 監修：近藤靖弘 共著者：杉村省吾・富永良喜・本多修・小谷一良・大橋節子・勝田麻津子・倉光修・斎藤文夫・内田伸子・新井肇・亀田憲治・松田智子他９名） （担当：P,12～19　第１章１節校内連携部分単著） 不登校生に対応する際に，担任教師が個人的に対応するのでなく学校がチームとして対応する必要性を論じた。中学校では教科外の特別活動や総合的な学習を学年単位で行うので、不登校を乗り越えるために，校内の意識を変革する必要を論じた。担任個人の対応から校内チームで不登校生に対応することにより、その数を激変させた具体例を挙げながら分析した。また、生徒と年齢の近い学生ボランティアを教科外の特別活動や総合的な学習の時間に活用する必要性を論じた。
(8) 教育フォーラム[47] ―こころを育てる―	共著	平成23年3月	金子書房	心を育てることの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。 A5版　全150頁　監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・渡辺満・松田智子・鎌田首冶朗・山本美紀・中村哲・大野光二・高橋真理・江渕弘明・蔵あすか・中家淳悟・増尾慶裕 （担当：P,38～47総合的な学習で心を育てる部分を単著） 総合的な学習の時間などの教科外活動で心を育てるための単元構成の基本について述べた。探求課題を設定する際には，教師の指導性とともに児童生徒の中の必然性が必要であることを論じた。教科外活動が心を育む根拠として、その活動形態が協同的な集団学習であることや、体験を通してなすことにより学ぶ学習スタイルを具体例とともに例示した。さらに地域住民のニーズを取り上げて課題とすることが多いため，地域全体の振興に役立ち，地域として子どもの心を育てる契機となると提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(9)次世代の教職入門	共著	平成23年5月	大学教育出版	教員の資質向上と研修が求められる社会的な背景を教育基本法等の改正や学習指導要領の改訂と関連付けながら論じたものである。 A5版　全297頁 編者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗・中田正浩・松田智子　・大野光二・山本正・大石隆夫・中田律子・伊崎一夫・住本克彦・杉田郁代・筒井愛知） （担当：P,61～102　第3章「教員の資質向上と研修」、4章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研究と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。教員研修については、初任者研修・大学院修学研修・10年目研修・指導改善研修等について意義と現状について述べた。教員の身分と服務については、地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、具体的な事例を挙げて論述した。将来教員になる者にとって不可欠である、職務上の義務や身分上の義務については、過去の判例を提示しながら教員としての服務の特徴を示した。
(10)　教育フォーラム［48］ ―国際教育の展望と課題	共著	平成23年8月	金子書房	子どもに真の国際性を育てるための教育の指針について述べたものである。 A5版　全158頁監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・見上一幸・松田智子・松田公平・鎌田首治朗・前田洋一・川崎由花・古川治・善野八千子・筒井愛知・山本美紀・加藤明） （担当：p 27～p37　日本における多文化の歴史部分を単著） 国際教育の今後の課題として「多文化共生社会と日本語教育」の焦点を当てて論じた。日本の国際的な政治・経済状況を背景として進行している多文化の実情を述べた。次に日本における日本語教育と多文化共生の歴史を，戦後の韓国・朝鮮人への日本語教育から現在のニューカマーと言われる人々への日本語教育の連続性について考察した。多文化共生という快い言葉に隠された両面性について課題を提示した。さらに，日本語教師が現在の日本で果たすべき役割を，その資質と関連付けながら論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(11)　教育フォーラム 50 号 （やる気）を引き出す （やる気）を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	日本の子どもの学習意欲の低さに焦点を当て、子どもに真のやる気を育てるための各教科での取り組みについて述べたものである。 A5 版　全 169 頁 監修：梶田叡一 共著者：梶田叡一・加藤明・松田智子・善野八千子・金山憲正・勝見健史・久田孝・錦織彰・住友克彦・野田健司・中田正浩・前田洋一・中村哲・瀧明千恵子・浅田匡 （担当：ｐ24～33　総合的学習の部分を単著） やる気に関する２つの全国調査をもとに、子どもがやる気を出すときについて分析した。そのための要素として「体験」と「学習課題の質」と「学び方」について述べた。体験については活動で終わることなく探究活動と結びついたものとなること、学習課題については、子どもの必要感と興味関心と結びついていること、学び方では、探究が広がり深まるような言葉かけと指導が必要であること、最後には、体験の振り返りが重要であることを提案した。
(12)次世代の教育原理	共著	平成 24 年 10 月	大学教育出版	教育の基本原理と教育思想の歴史、日本の教育行政教育課程と出口であるキャリア教育等について教育の一般原理について述べた。 A5 版　全 153 頁 編著：中田正浩、松田智子 共著者：中田正浩・松田智子・中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 （担当：ｐ29～44、ｐ119～134　第 3 章日本の教育思想、第 4 章教師の仕事の部分を単著） ３章では、日本の教育思想について古代から近代に至るまでを述べた。特に古代から近世の種々の学校制度と戦後の民主的な教育制度の確立については、その社会的、経済的な背景と関連付けながら詳しく論じた。 ４章では教師の仕事に内容や目的について論じた。教師の仕事は何か、そのための養成制度の実情、そして採用後の研修制度について述べた。さらに、最近導入された免許更新制度の狙いについても論じた。最後に答申に基づいて、これからの義務教育を担う教員にとっての必要とされる資質について提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(13) 子どもと生活―知的好奇心を育む環境づくり―	共著	平成 25 年 3 月	ふくろう出版	子どもたちの知的好奇心を育む教育について、幼稚園教育要領の環境及び小学校学習指導要領の生活科を軸として、述べたものである。 A5 版　全 170 頁 編著：岡野総子 共著者：岡野総子、松田智子、吉村啓子、大野純子、筒井愛知、平松、金光、辻野、岡田、アンソニー、土谷長子 （担当：ｐ12～21）第１章２節「幼稚園・保育所と小学校の連携を踏まえた教育」の部分単著 幼稚園教育は環境を通して行われると言われているが、その真の意味について問い返した。その過程で、幼稚園保育所の教育と小学校生活科における教育の連続性について問題を提起した。幼児から児童にと環境が大きく変化することにより、子供に及ぼす影響をかんがみ、小学校入学期の子どものスタートカリキュラムの在り方について論じた。具体例として、生活科の単元「学校探検」を例に挙げ、幼小で共通の授業を作り上げていく事例を紹介した。
(14)「学校安全」 －長尾先生と考える 36 のナラティブ－	共著	平成 26 年 6 月	教育出版	子どもたちの命を守り安全で安心できる生活の為に学校は何をできるかを、語り（ナラティブ）の」形で作成したものである。 B5 版　全 157 頁 編著：長尾彰夫 共著者：長尾彰夫、松田智子、小林忠三、浜條信彦松井典夫、若狭孝太郎、神田英幸、前馬晋策、丸山涼子、植木美佳、砂田信夫、中井尚人、佃繁、伊原正俊、藤田大輔、諏訪清二、村川雅博、立田慶裕 担当：（ｐ100～101）「帰ってきたキャロリン」（ｐ104～107）「武庫川大橋の向こうは世界が違う」（ｐ112～117）「この町で生き続ける子どもとともに」の部分単著阪神淡路大震災の当時１年生を担任していた筆者の目から、被災地の子どもや教師の生活現状を当事者の立場で述べるとともに、その危機を乗り切るための生活科の授業の特質を生かして取り組んだ「町探検」の実践を述べたものである。東日本大震災から３年が来ようとしているが、被災地の故郷を子どもがどのように把握しているかが、震災復興の要になると論じたものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（15）人間教育を視点にした「教職入門」	共著	平成26年12月	大学教育出版	教員の本質は人間を望ましい姿に変化させるために心身両面にわたって、意図的計画的に働きかける人格の形成であるという視点に立って教職に就くものの基本理念を述べた。 A5版　全279頁 編者：中田正浩 共著者：鎌田首治朗・中田正浩・松田智子　・中田律子・金山憲正・瀧明知恵子・長井勘治・太田雄久・久田隆） （担当：P,62～101　第3章「教員の資質向上と研修」、4章「教員の身分と服務」部分を単著） 教員の研修義務と教師の身分と服務の部分を担当執筆した。初任者研修・大学院修学研修・10年目研修・指導改善研修等の目的と現状の課題について述べた。指導改善研修は、各都道府県の実態も参考にした。教員の身分と服務については、学校教育法や地方公務員法や教育公務員特例法を基にしながら、日常に起きる具体的な事例を挙げて論述した。将来教員になる者にとって不可欠である、職務上の義務や身分上の義務については、過去の判例を提示しながら教員としての社会人としての常識を述べた。
（学術論文） (1)免許更新制度を校長として考える 「免許更新制度は学校の教師力アップの契機となるか」	単著	平成19年1月	明治図書 現代教育科学№604 p.62～p.64	現職教員の免許更新制度を、教師の生涯学習という視点から現状と課題を論じた。教師の資質能力の保持向上を教員の自己研鑽と現場研修に任せていくのは、教職員の多忙な現実を考慮すると困難が多い現状であると述べた。さらに教師の授業力のアップは、個人のやる気とか資質というレベルでは解決できないことを強調した。今求められるのは、教師が生涯学び続けることができるようなシステムづくりである。また教員免許更新制度を効果あるものにするために、その時期や方法、研修の内容の検討、経済的・人的な支援などがなければ実質的な効果は困難になることを論じた。この制度が、不適格教員の排除を目的とするものでないことも再度確認した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(2)公立義務教育学校における保護者対応の現在 －保護者の要望・抗議・クレームの分析を中心に－	単著	平成20年12月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要第46集 p167～194	公立の義務教育学校で増加している保護者の要望・抗議・クレームについての社会的な背景を分析した。また、保護者と教員双方のそれらの問題についての認識のずれを、現代社会の様相と関連付けて明らかにした。各学校で起きているその様態をもとに「要望・抗議・クレーム」を整理して分類した。さらにその論点を踏まえて、学校組織としての鍋蓋構造の弱点を指摘するとともに、予防策や対応について例示した。予防のキーワードは「スピード・面談・共感」であることを具体的に論じた。また、教師一人一人が保護者と連携するだけでなく、学校組織として日常的に顔を合わせて交流できるシステムづくりが必要であることなど、学校と保護者も含んだ地域社会との将来的な連携のあり方も具体的に提案した。
(3) 幼稚園教育課程編成の現状と課題（１） －Ａ市立公立Ｂ幼稚園の教育課程の現状を通して－	共著	平成24年12月	環太平洋大学研究紀要第6号 （ p135 ～ p140）	幼稚園における教育課程の意義を説明し、その具体的な活用についてＡ市の教育課程の基底及びＢ幼稚園の教育課程指導計画を分析し報告したものである。Ａ市の教育課程基底が各幼稚園に及ぼす影響を、平成 22 年から 23 年にかけてのＢ幼稚園の研究紀要をもとに明らかにした。それを通して、公立幼稚園における文言化された教育課程が、現実の日常の保育にどのように効果的に作用しているかを分析した。そのための園や学年や学級の教育目標にどのように反映しているかを考察した。また、教育課程のＰＤＣＡサイクルの実情についても言及した。結果として、私立の幼稚園が、教育課程を言葉として残すことが、困難であるとされる要因も分かった。 （松田智子・土谷長子） 担当部分：Ａ市のＢ幼稚園に３年間継続的に保育参観に入り、教育目標が保育にどのように具現化しているか観察し分析した。Ａ市の教育課程の基底の改定に対して指導助言者として参画した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4)特別活動の防災行動に果たす役割の一考察	単著	平成25年4月	環太平洋大学研究紀要第7号（p151～p162）	防災教育の目的と、それに対しての特別活動の位置づけと役割を明確にした。さらに防災教育を巡る日本国民の意識の現状を示した。その低さを克服するために、初等・中等義務教育機関が特別活動を通して防災教育に果たす役割について具体的に述べた。また、初等・中等の義務教育の特別活動の内容項目や目的と関連付けながら、防災避難行動について東日本大震災の釜石市の中学生の避難行動具体例を挙げながら論じた。さらに現状の避難訓練の効果と特別活動の改善点とに焦点を当てて、防災教育の充実方策を提案した。今後の防災教育については、小学校から中・高校までその発達段階に応じた取り組みを紹介し、特別活動と各教科の関連性を論じた。さらに特別活動や総合的な学習を通し地域と日常的に結びつく広範な活動の重要性も論じた。地域といかに、人間関係一体感を持てるかが、災害時の子どもの生死を分けることも述べた。
(5) 特別活動で築く人関関係力 - 防災教育の実践を通して -	単著	平成25年4月	教育PRO第43巻第9号（P6～P10）	特別活動の特質・特性である「集団活動であること」「なすことによって学ぶ」この２つが、地震大国日本に住む国民にとって、命を守るうえで重要な役割を果たすことを述べた。上記の特色をもつ特別活動の狙いである望ましい人間関係の構築が、学校内にとどまらず地域住民まで広がり、地域と連携する防災を下支えすることも述べた。さらに望ましい人間関係を形成する能力を育成するための方法とその過程について言及した。最後に、特別活動は体験活動が重視されるため、イベント的に終わってしまう危険性があり、活動の後に振り返り、子ども一人一人が内省化する必要があることを具体的に例示した
(6) 内面世界の形成を促す人間教育原理への一考察 - ソクラテスの問答法に焦点を当てて -	単著	平成26年4月	「人間教育学研究」創刊号 奈良学園大学人間教育学部 （p7～p14）	教育という言葉の意味を東洋と西洋の歴史的な起源から追求した。東洋では孟子により、西洋ではギリシアのアテネで初めてこの言葉が登場する。この時代は人類文化の思想的な夜明けという社会的な背景があった。教育の目的は「子どもたちを善くしようとする働きかけ」であり、それは今日も同様である。ソクラテスの対話により「無知の知」を相手に自覚させる「問答法」は、内面世界に配慮した教育の実現への示唆を含んでいる。ソクラテスの問答法を段階的に分析し、今後の日本の教育の在り方について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)Death　Educationによる人間教育 －絵本の分析を通して―	単著	平成26年12月	「人間教育学研究」第２号 奈良学園大学人間教育学部 （ｐ59～ｐ70）	社会の情勢の変化とともに世界的な死生観は変遷し、同時に日本人の死生観も変わっていった過程を振り返った。現代日本で子どもの命を守るには、学校教育で行われている生命尊重の教育だけでは不十分であり、死と向かい合う教育（Death　Education）が必要であることを社会的な背景と関連付けて述べた。子どものためのDeath　Educationには､絵本という芸術作品は適切な教材であるため、デーケンの提唱したDeath Educationの基本的な５つの目標に合致する絵本を分析して提案した。絵本の検証には、子どもの参加した読み聞かせ等が、今後求められる。
（その他） 「事典」 (1) 実践教育評価事典	共著	平成22年8月	文渓堂	教育評価の意味と歴史、日本の学習指導要領の目的と社会的な背景を踏まえた変遷、各教科での評価のあり方と方法、さらに評価用語の詳しい解説を述べたものである。 Ｂ５版　全261頁 監修：梶田叡一・加藤明 共著者：梶田叡一・加藤明・長谷浩也・吉村希至・土田圭子・石井雅幸・上之園公子・尾崎友美・鎌田首治朗・金澤緑・米田豊・角谷重樹・北川達夫・菅千索・勝見健史・松田智子・他15名 （担当：P,126～129・P,138～139・P,190～191教育評価の基礎知識「教育評価史（日本)」「教育評価史（西洋)」「学習指導要領と指導要録」「カリキュラム評価・カリキュラム改善」の用語概略と説明を単著） 日本の教育界に残る心情や印象で教育を語る実践を乗り越えるために本書は執筆された。「結果」を重視した地に足を着けた教育をするために各用語についての基本的な解説を行った日本と西洋の教育史では、それぞれの学習の評価の方法や観点に焦点を当てて、評価の歴史を論じた。学習指導要領と指導要録の項では，社会的な背景と明治以降の日本の教育界動向を関連付け，なぜ学習指導要領が変遷してきたかを述べた。学習評価と指導の改善に視点を当てて論じた。カリキュラムの項ではPDCAサイクルについて述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「報告集」 (1)教育セミナー２００７報告集	共著	平成 19 年 10 月	日本教育新聞社 P56～p82	「授業力・学校力・人間力の向上を目指して一学習指導要領の改定とこれからの学校教育」についてセミナーをおこなった記録である。 B5 版　全 205 頁 共著者：加藤明、角谷重樹、成山治彦、松田智子 浅田匡、布村幸彦、梶田叡一、他 6 名 (担当は p62～66、p76～78) 学習指導要領の目標を実現するために必要なことはたとえ大学であっても教職員集団としてのチーム力が求められることを具体的に話した。また公立学校の校長だった立場から、公立高校だからこそできる挑戦と、教職員間のコミュニケーション力をアップする方策について具体的に論じた。また保護者・地域住民との連携にもコミュニケーション力が重要であることを論じた。そのためには、学校と地域が相互に参画するシステムづくりが､学校管理職の役割であることも述べた。
(2) いのちの教育カリキュラムモデルの開発と実践	共著	平成 27 年 1 月	いのちの教育実践研究会	「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書である。科学研究費補助金（基盤研究(B)）課題番号 24330254（平成 24 年～26 年） A４版　全 245 頁 監修：古川治、杉田郁代 共著者：梶田叡一・近藤靖弘・渡邉満・古川治・五百住満・松田智子・大谷武彦・谷田増幸・住本克彦・杉田郁代・三木澄代・久保弘子・瀧明知恵子・森一郎・松井典夫・他 6 名 （担当：P,96～107　第 4 章学校安全・防災教育部会第 3 節　生活科と特別活動における防災教育を単著） 地震大国である日本における、防災教育の目的と必要性について述べるとともに、防災教育における義務教育の役割について述べた。さらに生活科と特別活動が目的と内容と学習方法において、防災教育に貢献できる可能性を提案した。生活科の単元を防災教育と関連付けて 5 つに分類し、実践事例を挙げるとともに児童の姿の変容を示した。特別活動では避難行動の特質を過去の災害から分析し、避難集団内の人間関係の状態がその結果を左右することを述べた。特別活動のキーワードは、集団における良好な人間関係の構築であることを確認した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「指導助言資料」 (1)特別活動の学級活動の公開授業の助言レジメ「対話で子どもが高め合うとは」	単著	平成 19 年 2 月	兵庫県芦屋市立朝日ヶ丘小学校 A４　４頁	小学校５年生特別活動の学級活動の授業を参観後、レジメを参加者に配布し分科会で指導を行った。授業の題材は「5 年１組さよならパーティーをしよう」である。参観後、対話と会話の違いについて焦点をあて、相互共感的な行為を誘発する対話の在り方を論じた。さらに、集団として、ともに創造する対話を成立させる３つの力として、「聴く力」「要約力」「プレゼン力」が求められることを論じ、そのための教師の役割として、環境設定としての共感し合える学級文化づくり、子どもの発言に対しての教師のコメント力を強調した。よりよい人間関係を構築するには、特別活動の学級活動を通して、話し合ったり、共通点や違う点を見つけたり、折り合いをつけたりする子どもの心の動きを洞察し、教師が具体的に指導することが重要である。
(2) 生活科における言語力育成―幼稚園・保育所とのつながりに視点を置いて―	単著	平成22年8月	阪神地区小学校生活科教育研究会（伊丹市立産業情報センター） A 4,10 頁	話し言葉が中心の幼稚園から書き言葉が中心の小学校へ幼児が進級した際に起きる、小１プロブレムを言語活動に焦点を当てて論じた。幼稚園では語を単位とした指導になりがちで、語数の質を高めるには、活動や体験を通して、その後の意味や背景を考えさせることが重要であることを述べた。これには「絵本」を通しての指導が有効であることや、「聴く指導」といっても、だまって静かに読み聞かせを聞くことだけを是とする考え方を改めるように注意した。絵本を通して論理的な思考を育む必要性も論じ、そのための読み聞かせの在り方を話した。
「学会発表」 (1)教師主導のトライやるウィークから生徒の意欲と目的意識を生かした体験活動への改善視点	単独	平成 19 年 2 月	人間教育研究協議会第６回京都フォーラム（京都・京都ノートルダム女子大学）	中学校特別活動の職場体験における、生徒の主体的な選択能力育成の取り組みについて提案した。「トライやる・ウィーク」は兵庫県教育委員会が 10 年をかけて中学２年生全員に実施している職場体験であり、生徒・保護者・地域の支持が高い。調査でも生徒に良い影響が出ている。しかしキャリア教育との位置付けの違いや教師間の共通理解の不足によりマンネリ化傾向を生み出している。生徒が自ら主体的に職場を選択し、目的意識を高めることによる体験活動の改善方策を提案した。現在は教育課程上、中学校の特別活動として位置付けられているが、他教科や総合的な学習と連携すること、さらに体験だけになりがちである特別活動にこそ形成的な評価が必要だと論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(2)保育士養成における人間力育成	共同	平成 19 年 9 月	全国保育士養成協議会第 46 回大会（鹿児島・城山観光ホテル）	短期大学１年における基礎演習をキャリア教育基礎講座と位置付けて「人間力養成講座」とした。京都独自の和文化体験・箸育・掃除道・日本語検定・日常のマナー等を取り入れた基礎教育内容を紹介した。学生の評価等も提示した。担当部分は、学生の評価観察記録の整理分析である。 （吉村啓子・松井裕子・松田智子・土谷長子・智原江美・高橋浩輔・下口美穂・岡野総子）
(3)平成 19 年度全国学力・学習状況調査の分析	単独	平成 20 年 2 月	人間教育研究協議会主催「第７回京都フォーラム 2008」（京都・京都ノートルダム女子大学）	文部科学省が平成 19 年度に実施した全国学力･学習状況調査におけるＢ問題について、その出題意図と結果分析及び授業改善について提案した。国際学力調査ＰＩＳＡとの共通性及び差異について具体的な問題を例示しながら述べた。学力定着において，学習指導要領が入口の狙いを明確にする役割を，そして学習状況調査は出口の目標を意識する役割を担っていることを強調した。B 問題は、思考力や判断力が求められ、従来の暗記中心の学習では対応できないことを述べた。教科内外で培った、話し合いの力を基盤におく必要を論じた。
(4)保育士養成教育と卒業時の満足感との関係	共同	平成 20 年 9 月	全国保育士養成協議会第 47 回大会（北海道・函館国際ホテル）	免許・資格取得のための独自教科のみならず「基礎演習」で掃除の仕方や箸育や礼儀作法等を実施している。また伝統文化（歌舞伎・西陣織・正しい日本語）等の授業を行っている。この特徴あるカリキュラムに対する実証的な検証を行った。こども保育学科の学生の満足度評価を行い大学全体の結果との比較を参考にしながら特徴を明らかにした。担当部分は、学生満足度評価の実施分析である。(吉村啓子・松井裕子・松田智子・土谷長子・智原江美・高橋浩輔・下口美穂・岡野総子)。
(5)「今なぜ命の教育が必要か」パネラーとして提案発表	共同	平成 22 年 12 月	第 2 回いのちの教育実践交流会（大阪･御堂会館）	幼稚園や小学校特別活動のウサギの飼育当番を通して「いのちを大切にする幼児・小学校低学年教育」の実践例を報告した。多くの幼稚園や小学校では小動物の飼育活動をしている。そして当番活動は特別活動の係の仕事として、教師が順番に決めていることが多い。本実践は，自主的なウサギ当番と学級活動の話し合い活動を通して「ウサギの世話は命を預かることである」と気付きへの経過を具体化した。話し合いを通して子どもが高まるには、教師の指導性が不可欠であることを、強調した。 （古川治，松田智子，久保弘子，津田一司，山口光一，渡邉満，市川真奈美）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(6)メンタリングの実際と課題 パネラーとして提案発表	共同	平成23年2月	日本教師学学会第12回大会（兵庫・甲南大学）	多様な領域での「教師」の成長・発達を対象とした本学会では，他領域で実践・研究が進められているメンタリングに着目し，教師教育・看護教育・学校経営・eラーニングの立場からシンポジウム形式で発表をした。発表のテーマは「学校におけるメンタリング機能の実際」であり，担当部分は公立学校の初任者研修における指導教員と初任者との関係をメンタリングの視点からの分析である。現状の初任者研究は1年で終了だが、メンタリングの観点からは、3年ほどの継続が望ましいことを提言した。 （田村由美・松田岳士・河村美穂・石原逸子・松田智子）
(7)幼稚園と小学校低学年対象の命を大切にする教育とは パネラーとして提案発表	共同	平成24年1月	第3回いのちの教育実践交流会(兵庫・六甲荘)	いのちの教育のカリキュラム化について提案した。幼稚園児の命の教育は「小動物の飼育」や「植物の栽培」を通して行われることが多い。これらは，親しみを持つだけでなく，自分の心を癒しおちつけ，いたわりの気持ちを持つようになるからである。その心の働きが命を大切にする契機となると提案した。一方、生活科では，学習指導要領改訂の趣旨に登場する「安全教育を充実」することに着目し、通学路をテーマに取り上げた単元を構成し提言した。具体的には「寄り道のすすめ」を生活科の中に取り入れることを提案した。担当部分は、幼稚園・小学校低学年の指導部分である。 （古川治，松田智子，津田一司，山口光一，三木澄子）
(8) 生活科における命の教育の単元開発	単独	平成24年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第21回大会（徳島・徳島大学）	東日本大震災の教訓として地域全体での防災教育の大切さが確認された。生活科は小学校1年生で学校での安全の一部として通学路を教材とする。現状では、通学路の扱いは安全な登校を目指すものであり、取り扱う時間が少ない。通学路の安全と限定するのでなく、地域のよく使用する道や避難通路や避難場所も組み入れた単元を構成する必要性を提案した。モデルとして「楽しい帰り道」という単元計画を例示した。 現在の生活科の教科書で提示されている災害事例が通学路の危険個所や、大雨や不審者等に偏っている傾向があり、東日本大震災の津波に対する記述も求めた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(9)領域「環境」における授業研究 ～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	共同	平成24年9月	全国保育士養成協議会第51回大会(京都・京都文教大学)	授業の中に自然や環境に触れ合う体験活動を組み入れ、さらに発展学習として関係する課題を与えた。提出された課題に対するフィードバックを通して学生同士が交流するための時間を毎回確保した。このような学習サイクルの繰り返しが、学生の意欲をどのように刺激し、授業への参加態度等が変化させるかを検証したものである。「環境」の授業における、学生の授業への参加態度や課題等への取組態度の分析を担当した。 （岡野聡子・松田智子）
(10)防災からいのちの教育を考える分科会のコーディネーター	共同	平成25年2月	第4回いのちの教育実践交流会 (兵庫・六甲荘)	東日本大震災が起こった際に、学校にいた子どもを100%救助することができた体験と教訓について、多賀城市教育委員会学校教育課長から提案発表があった。それを受けて大震災発生の場合における学校と地域との望ましい関係の構築について舞子高校の防災担当諏訪教諭から助言があった。従来のワンパターンの退屈な避難訓練を特別活動と考えるのは、時代錯誤であると助言があった。コーディネーターとして、会場の参加者の意見と提案者と助言者の意見をまとめた。特別活動の学校行事を核としつつ、自主的集団避難行動をうながすような「これからの防災教育の方向性について」のまとめを行った。 （麻生川敦・諏訪清二・松田智子）
(11)生活科と特別活動における防災教育	単独	平成27年1月	いのちの教育実践交流会第6回シンポジウムin兵庫 (兵庫・六甲荘)	阪神淡路大震災後に兵庫県教育委員会が、新たな防災教育がどのような教科や領域と結びつき実践されたかを調査した。その結果、特別活動・生活科・道徳などと関連が深い実践が多いことが明らかとなった。本発表では特別活動と生活科に焦点を当てて、目的と内容と学習方法の視点で防災教育との関連性を論じた。生活科では単元を5つに分類し、目標を防災教育と関連させ、実践を紹介した。特別活動では災害時の一時避難活動の重要性と避難集団内の人間関係の状態がその結果を左右することから、集団における良好な人間関係の構築の重要性を確認した。特別活動で、何か集団活動をすれば良好な人間関係が培われるのでなく、その目的や、児童生徒の自主性が重要であることを論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(12)絵本の分析を通してのDeath　Education（死への準備教育）	単独	平成27年2月	日本教師学学会第16回大会(日本女子大学)(p50～51)	死生観の転換期である5歳から7歳の児童を対象に、Death　Educationに有効な絵本を紹介した。日本では医療が進み、子どもが死と向き合う期間が長くなるとともに、災害等で親しい人と死別を体験する機会が増加していることを述べた。さらに病院での死が増加し、子どもたちが命について実感を持ったものとして受け入れることができる環境に乏しい。このことが、子どもの健全な死生観の発達に揺らぎを引き起こしている。子どもの発達段階に応じた絵本を分析的に紹介した。

教 育 研 究 業 績 書

平成27年3月31日

氏名　小竹　光夫

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教科教育学	国語科教育　書写書道教育　教育方法　学習理論と評価 教師教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　項	年　月	概　要
1　教育方法の実践例		
・速書力育成に向けた聴写の方法についての改善	平成１７年度～平成１９年度	兵庫教育大学学校教育学部の学生を被験者として、情報化時代に適合する速書力（音声言語を聞き取りながら書写する字数の向上）についての実験、測定を行った。書き写すだけでなく、キーワードを抽出しながらメモとして記録する。そして、その資料を中心に情報を再生産していくというサイクルの重要性について試論をまとめた。また、その具現化として、兵庫県相生市立相生小学校の児童を対象とした実験授業を公開し、新しい時代の書写力の育成として評価された。
・書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫した授業方法の改善	平成２０年度～現在に至る	・兵庫教育大学学校教育学部の学生、兵庫教育大学学校教育研究科の院生を対象とする講義、演習において作成した資料の中で、書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫した。具体的には、ともすれば「書き方の伝授」に陥りがちな書写・書道の学習において、常に対人という意識を盛り込み、「文字を書くことはコミュニケーションの一環として重要な行為である」との視点を中核とした授業方法を提示した。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、講義及び演習において作成した資料の中で、書写・書道教育での学習内容を、一般の日常生活の中に敷衍して活用できるよう工夫している。特にテキストとなる学習資料には具体的な事例を数多く導入し、「文字を書くことはコミュニケーションの一環として重要な行為である」との視点を重要視している。
・学生の授業に対するコメントへの対応	平成２年度～現在に至る	・大部分の授業科目において、毎時の提出物を課しているが、それに添えられるコメントに総て回答を返すことを試みている。最小学生数５名、最大学生数２３０名、対応によって学生の学習意欲が促進されている。回答字数、平均60字。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、授業コメントに対する回答は継続しており、授業評価においても学生たちの支持を受けている。
2　教材・学習資料の作成	平成２年度～現在に至る	・着任以来、兵庫教育大学学校教育学部、兵庫教育大学学校教育研究科の総ての授業科目に関して授業資料（教材等々を含んだサブノート形式）を、毎年度、学習者に適合させながら作成してきた。毎年実施される本学の授業評価においても、毎回、総ての授業科目を対象として実施される授業評価においても、この授業資料に対する評価は高い。兵庫教育大学学校教育研究科の「書写教育論」

		（現「文字の手書き行為実践研究」）、「書写教育論演習」（現「文字の手書き行為実践研究演習）） での授業資料は、半期で平均１００ページの冊子となる。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、授業資料の改善・工夫は続けており、平成２６年度開設科目「書写・書道入門」においては、総ページ数１０１の大冊となった。
３　教育上の能力に関する大学等の評価（兵庫教育大学学校教育学部学生、兵庫教育大学学校教育研究科院生、並びに奈良学園大学人間教育学部学生による授業評価）	平成１４年度～現在に至る	・本学のＦＤ推進活動の一環である学生による授業評価においても、各授業科目ともに平均４以上（全体平均３．７程度）の評価を維持している。特に学生側から、改善に関する指摘等はない。 ・奈良学園大学人間教育学部に着任後も、各授業科目ともに平均４以上（全体平均３．７程度）の評価を維持している。特に学生側から、改善に関する指摘等はない。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
ひょうご講座講師 伝統文化とその教育力 －トラディショナルからインターナショナルへ－	平成１７年度	兵庫県の主催する文化教養講座。対象は一般市民、社会人である。伝統文化を古典的なものとして回顧するのではなく、今の国際化時代に適合するように視点の転換を行うことの重要性と、具体的な事例について論述し、伝統文化への理解を深めた。
王寺町リーベルカレッジ	平成２６年７月	奈良学園大学と王寺町が連携して行う公開講座の第６回を担当し、「カメラを持ってでかけよう～路傍の語り部との対話」というテーマで、石碑等書的文化財について講話を行った。
免許状更新講習講師 「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する国語科授業づくり	平成２１年８月	現代日本語の特質などについて理解を深めるために、古い日本の文化や言語とその歴史的な変遷等との関連について考えながら、国語教育の基礎事項を見つめ直した。具体的には、新しい指導要領の内容で示される「昔の人のものの見方や感じ方」を知り、「語感、言葉の使い方に対する感覚」を磨き、「時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違い」や語句・文字の「由来や特質」に関心を持ち、理解を深めるために、どのような指導が可能か、その方策などについて論述し、演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）	平成２１年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
芸術科書道の理論と実践	平成２１年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書

		写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）	平成２１年１２月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）	平成２２年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
芸術科書道の理論と実践	平成２２年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）	平成２３年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
芸術科書道の理論と実践	平成２３年８月	芸術科において、書道選択生の減少や学習指導を維持することの難しさ（体制・環境を含めて）が話題となることが多い。生徒数の少子化による自然減はあるとしても、それ以外の要因が考えられる場合は早期の点検と対策が必要であろう。本講習においては、いわゆる学習指導のあり方という基礎的・基本的な部分から始めて、中学校国語科書写との接続や硬・毛筆の関連学習についての一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）	平成２４年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛

		筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
文字を手書きすることの意義と価値（書写）	平成２５年８月	文字離れと言うことが社会問題のように取り上げられて久しいが、「文字を書く」という立場での解決策は、数多くは提示されていない。本講習においては、国語科書写が果たすべき役割と授業実践の在り方を理解すると共に、学習者のみならず指導者自身が文字言語への興味関心を高め、文字を手書きすることの重要性を再認識していくことができるような学習展開を明らかにした。さらに、硬・毛筆の関連学習についても、一層の理解が深められるような講義・演習を行った。
国語	平成１９年８月	我々は当たり前のように「国語」という言葉を使っており、そして使い慣れてしまっているため、漠然と学習指導を行っているのではないかとの投げかけから始めた。極論すれば、「国語の力」をどう育て、高めていくかについての方策についても、具体的に提示できないのではないかとさえ感じられるとの問題提起をもとに、一体、「国語」とは何か、「ことば」とは何か、「文字」とは何かを考える場を設定した。原点に立ち返って考えることの必要性、検証し確認していく場として位置づけられるよう設定した。
国語	平成２４年８月	我々は当たり前のように「国語」という言葉を使っており、そして使い慣れてしまっているため、漠然と学習指導を行っているのではないかとの投げかけから始めた。極論すれば、「国語の力」をどう育て、高めていくかについての方策についても、具体的に提示できないのではないかとさえ感じられるとの問題提起をもとに、一体、「国語」とは何か、「ことば」とは何か、「文字」とは何かを考える場を設定した。原点に立ち返って考えることの必要性、検証し確認していく場として位置づけられるよう設定した。
研修会・講習会講師 兵庫県中学校書写教育研究大会	平成１６年１０月～平成２０年１０月	研究大会の助言者として継続的な研修・指導に取り組んだ。また研究大会当日は講師として講演を行った。 大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
中・西播地区小学校書写研究大会	平成１７年１０月	新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにするとともに、学校教育現場における研修体制の構築の必要性を求め、周知徹底を図った。
兵庫県相生市教育アドバイザー事業	平成１８年６月	授業改善の教育アドバイザー・講師として加わった。主として国語における言葉の力を高めるための試みについて理解を深め、最終的には小学生を対象とした示範授業を行い、授業研究を行った。
中・西播地区小学校書写研究大会	平成１９年１０月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２０年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。

兵庫県中学校書写教育研究大会	平成２０年８月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
第１７回墨華香まちフェスティバルみなぎの書道展	平成２０年９月	審査委員（審査委員長）を務めた。出品点数１万点余りの最終審査と、講評を行った。
兵庫県立高砂南高等学校高大連携事業研修会講師	平成２１年１月	教師教育に関する現職教育の研修会講師。教師としての基本姿勢、授業等に取り組む視点や態度の構築について論述し、理解を深めた。
鳥取県高等学校書道教育研究会総会	平成２１年５月	総会講師として、２１世紀の書道教育の方向性について論述し、現職教員の意見交流に際して助言を行った。
兵庫県上郡町立山野里小学校授業研究会	平成２１年６月	国語科の授業研究会講師・助言者。「スイミー」の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２１年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２１年９月	書写の授業研究会講師・助言者。低学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
第９回兵庫県芸術三科合同研究大会シンポジウム「生きる力を拓く芸術教育」	平成２２年５月	シンポジスト。高等学校のおける芸術教育の在り方と展望について提案し、討論を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年５月	書写の授業研究会講師・助言者。高学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２２年５月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。国語科書写を基盤とした書道学習の展開について実践授業を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年５月	書写の授業研究会講師・助言者。中学年の公開授業を観察し、以降の授業研究において助言を行った。
たつの市立西来栖小学校授業研究会	平成２２年８月	書写の授業研究会講師・助言者。示範授業を行い、以降の授業研究において助言を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２２年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。
多可郡書写指導研修会	平成２２年８月	多可郡の小・中学校書写担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
明石市立小・養護学校書写教育担当者会研修会	平成２２年１０月	明石市の小学校書写担当者、及び養護学校書写教育担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、示範授業と毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２２年１０月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。地域性を生かした書道学習の展開について実践授業を行った。

播磨西地区小学校書写教育研究大会	平成２２年１０月	大会講師として講演を行った。新しい時代の国語科書写の方向性について明らかにし、具体的な事例とともに周知徹底を図った。
兵庫県立出石高等学校地域オープン講座	平成２３年２月	高等学校２年生に、地域の一般参加者を加えたオープン講座で授業講師を務めた。工芸的な分野（墨流し）とのコラボレーションを図った作品の創作について実践授業を行った。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２３年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。の事例を提示し、実践・演習を行った。
明石市立小・養護学校書写教育担当者会研修会	平成２３年１０月	明石市の小学校書写担当者、及び養護学校書写教育担当者を対象として、書写教育の在り方を論述し、示範授業と毛筆書写に関する基礎的な演習を行った。
兵庫教育大学附属中学校　キャリア総合科目「書道」	平成２４年４～１０月	キャリア選択科目の特別講師として務めた。中学校２・３年生の選択履修者に対し、基本的な毛筆の運用、篆刻、染色等々を指導し、発表会へと導いた。 特別講師催短期研修。小・中学校における国語科書写の学習について論述し、具体的な演習とともに理解を深めた。
京都市立明親小学校授業研究会	平成２４年８月	「書くことに喜びを感じる授業」というテーマのもと、小学校３年生を対象とした示範授業を行った。授業後、授業研究会の助言者を務めた。
京都市立南浜小学校授業研究会	平成２５年８月	「書くことに喜びを感じる書写の授業」というテーマのもと、理論的な部分の口述と演習を行った。の事例を提示し、実践・演習を行った。
東京都教職員センター　平成２４年度教科等・教育課題研修	平成２５年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―言語活動を重視した授業の特色と改善―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。
奈良学園大学オープンキャンパス体験授業	平成２６年７月	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、体験授業「漂ってみよう～不思議な手書き文字の世界を！」の授業者として示範を行い、具体的実践の方法を提示・公開した。
ビーンズツリー２１・ビーンズ２１合同研修会	平成２６年８月	大阪府下の校長、並びに管理職の合同研修会において、「今、求められている授業改革」というテーマで講演を行い、実践に対する質疑応答に応じた。
東京都教職員センター　平成２４年度教科等・教育課題研修	平成２６年８月	連携研修「書写・書道Ⅰ・Ⅱ　―書写・書道の指導法研究―」の講師として、授業改善の方法等について指導し、具体的な実践について演習を行った。
第３回三田市小学校国語担当者会並びに三田市教育研究グループ国語部会研修会	平成２６年１０月	三田市立三田小学校神野佳代子教諭の提案授業「サラダを作ってりっちゃんに伝えよう（１年生）」を観察し、事後研究会において言語活動を中心とした授業研究のあり方について助言し、講話を行った。
５　その他 兵庫教育大学における 学位（修士）指導実績	平成２年度～平成２４年度	学位論文テーマと指導内容 小学校書写教育１名（副査） 小学校における文字習得に関しての研究であった

		ので、低学年の文字教育について助言・指導を行った。 中学校書写教育１名（副査） 毛筆執筆法に関しての研究であったので、歴史的変遷や意義・価値について助言。指導を行った。 高等学校書道教育１名（主査） 漢字仮名交じりの書に関しての研究であったので、教材の価値や指導法、ならびに論拠とする古典の設定の方法について助言・指導を行った。 作家論（須田剋太・河東碧梧桐）２名（副査） 作品鑑賞の方法や、書道史的価値、さらには他の書家との比較研究の方法について助言・指導を行った。 情報化時代の言語機能３名（副査１、主査２） コンピュータの活用について、情報リテラシーについて助言・指導を行った。さらに、文字の手書き行為と印字・活字文化の捉え方について助言・指導を行った。 言語事項と「読むこと」「書くこと」「聞くこと」１名（主査） 国語科と近接する部分であるので、言語事項に関する基本的な理解と、各領域との関連について助言・指導を行った。特に各個が独立して存在するのではなく、密接な繋がりの中で機能していくことについて、参考資料等をもとに助言を与えた。

職務上の実績に関する事項		
事　項	年　月	概　要
１　資格、免許	昭和４６年３月	中学校教諭２級普通免許状（国語）
	昭和４６年３月	高等学校教諭２級普通免許状（書道） 15年０単位の申請で高等学校教諭１級普通免許状（書道）
	平成元年4月	法改正による 中学校教諭２種免許状（国語） 高等学校教諭専修免許状（書道）
２　特　許		なし
３　実務の経験を有する者についての特記事項		なし
４　その他		なし

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項					
著書、学術論文等の名称		単著 共著 の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　要
（著書）					
1	明解　書写教育	共著	平成 21 年 4 月	全国大学書写書道教育学会編	教員養成における小・中学校書写指導の在り方、実践についてまとめ、編成されたものである。総ページ数１４１ページ。執筆分担を行っている。該当ページは以下の通りである。 Ｂ５版　全１４１頁 共著者　加藤祐司　浦野俊則　鈴木慶子　宮澤正明　久米公　押木秀樹　青山浩之　広瀬裕之　小竹光夫　長野秀章　松本仁志　松本貴子　津村幸恵　杉崎哲子 本人担当部分　pp. 12-14 単著 内容　「Ⅱ　書写授業の理論と実践　1-（2）～（3）」主に小学校の実践をまとめて解説した。
2	実技教育・実習ガイドブック	共著	平成 25 年 3 月	兵庫教育大学　実技教育研究指導センター	小・中学校における実技に関わる教科目について、指導者の実技力・授業力向上の観点から、学習指導の在り方を論じている。特に実技教育に関する教育実習の手引きが皆無に近いことから、本学学校教育センター（教育実習担当）との連携をとりながらまとめ上げている。 Ａ４版　全９２頁 共著者　河邊　昭子　初田隆　永木耕介　松下健二　前芝武史　新山真弓　小竹光夫 本人担当部分　pp. 77-91 単著 内容　書写指導のあり方についての手引きとなる内容を執筆した。
3	見つける　わかる　できる ３Step で変わる 実技教科指導ガイドブック	共著	平成 26 年 4 月	明治図書出版株式会社	小・中学校における実技に関わる教科目について、指導者の実技力・授業力向上の観点から、学習指導の具体的方法を提示・提案している。特に実技教育に関する教育実習の手引きが皆無に近く、教員になるという段階から、教員として高まるという分野までを包括した総合的な見地から論述している。 編著　小竹光夫 著者　兵庫教育大学実技教育研究指導センター Ａ５版　全１５１頁 共著者　上原禎弘　河邊昭子　初田隆　筒井茂喜　永木耕介　前芝武史　新山真弓　小竹光夫 本人担当部分　pp. 01-05 単著 pp. 09-10 単著 pp. 13-29 単著

著書、学術論文等の名称		単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　要
					pp. 119-140 単著 pp. 147-149 単著 内容　書写指導のあり方、ならびに教育話法・板書指導について執筆した。
4	文字を手書きすることの意義と価値	単著	平成 26 年 4 月		
（学術論文）					
1	生き生きと表現し，生活の中に生かす書写学習の構築―兵庫県佐用町立佐用小学校における実践の歩み― （査読付）	単著	平成 18 年 3 月	実技教育研究（兵庫教育大学附属実技教育研究指導センター） 第 20 号 pp. 89-104	本来、文字を手書きすることは楽しいことであるはずである。しかし、かつての習字教育の残痕か、多くの場合は修練や反復練習という習得・定着のための道筋が重要視され、学習者は修練の場に置かれる。本論で扱った佐用小学校の場合には、単なる習得や定着だけでなく、手に入れた書写知識や技能を日常生活の中で活用していくかという、いわば「出口保障」の書写指導が展開された。指導助言者として関わった２年間の中での指導者・学習者の変容を明らかにし、活用（生活の中に生きて働く書写力）の必要性について論じている。また、学校教育現場における研修体制の構築の必要性と、方法の在り方について提示した。
2	「聴いて書く」という学習の深化を目指す実証的研究 （査読付）	共著	平成 19 年 2 月	学校教育学研究（兵庫教育大学学校教育研究センター） 第 19 巻 pp. 109-119	多くの書写・書道の学習場面においては、いわゆる「手本」を見て書き習うという学習形態が一般的である。しかし、人間が文字を手書きし、文・文章を活用しながら言語生活を展開していく上では、そのような手本に依存した書写は存在しない。特に大量の情報が流通する現代、単に「見て書く」というだけでなく、「聴いて書く」や「まとめて書く」という高次な書写が求められている。 共著者　小竹光夫，神野佳代子 内容　本論では現状の分析と考察を行い、日常生活で多用される「聴いて書く」という学習のモデルについて提示した。共著者神野佳代子は兵庫教育大学言語系の大学院生であり、国語科教育や言語事項に関連した全般について指導・助言を行った。
3	書写における授業観察の視点 （査読付）	単著	平成 25 年 3 月	言語表現研究（兵庫教育大学言語表現学会） 第 29 号 pp. 29-41	いわゆる実技系の書写学習においては、「優れた実技力を持つ指導者が、良き授業者である」との意識が多くの部分で流通している。そのため、実技力向上に偏りがちで、授業研究もなされない状態が続いている。そのような中、効率的な書写を行うための書写力の習得の場である授業を対象として分析と考察を行い、授業観察の視点に関する必須の要件について論じ、提案を行っている。

著書、学術論文等の名称		単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　要
4	文字を手書きすることの意義と価値	単著	平成 26 年 4 月	人間教育学研究（人間教育学会）創刊号 pp. 79-88	「書は人なり」という言葉が安易に口にされ、それがまるで手書き文字の価値であるかのように言い伝えられている風潮がある。確かに人間の手によって創出される文字は、さまざまな様相・要素を帯びているが、その磨かれないままの性を個性と位置付けることは、多くの誤解を生じさせる危険性を含んでいる。本論では、その「書は人なり」という文言を起点としながら、文字を手書きするという行為に客観的な妥当性を与えようとしている。
（その他）					
「研究報告書」					
1	小学校における「ことばの力」の育成	共著	平成 21 年 3 月	平成 20 年度　大学院カリキュラム改革プロジェクト研究報告書（兵庫教育大学）	PISA 型読解力が問題点として指摘され中、児童・生徒の論理的思考力や想像力の必要性が喫緊の課題となっている。学習指導要領で言う「ことばの力の育成」は、その源ともなるものであるが、それは児童・生徒に対してだけ向けられるものではあるまい。本プロジェクト研究では、実際の教育現場での授業実践実践を対象として、指導者である教師側の言語力育成を主眼として問題提起を行っている。主要には、 ①導入時の指導者側話法 ②題材提示時における指導者側の話法 ③児童への発問の際の話法 ④児童の発言に対する話法 の４項目から考察し、大学院授業科目新設への提案、提言を行っている。 （研究代表者　小竹光夫） （共同研究者）野本立人、伊崎一夫、神野佳代子、名村嘉将、阿部秀高、高田正大

著書、学術論文等の名称		単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　要
2	教員養成プログラムにおける「創発のメソッド」の構築	共著	平成23年3月	科学研究費　挑戦的萌芽研究報告書 プロジェクトコード KA21653101 総ページ数118	急速な情報化の中、国際化・グローバル化という課題も、極めて容易な形で実現可能な時代を迎えている。そのため、いわゆる日本人としての自覚や意識は、鍛えられないままに大海に放り出されようとしているかに見える。卑近な例であるが、「全国学力・学習状況調査」の集計・分析データも「数字」として一人歩きする場合が多く、「活用」や「習得」の部分で問題とされた「自らの思考や行動を論理的に客観視できないという脆弱さ」は指摘されるものの、数字を開示するという論議や短絡的な競争理論への危惧の中に埋没しがちであり、日々の学習指導の在り方という具体性には至っていないのが現状であろう。換言すれば、自らの思考や行動を論理的に客観視できないという脆弱さとは、人間という個体としての行動と知の不整合、遊離でもあると考えられる。以上のような欠落によって、「国際的な競争の中で勝ち抜いていく力」の必要性が叫ばれる今日において、競争以前の自らの存在や価値を明らかにすることさえ不可能としている。「PISA型読解力」でさえも国語科における「読解力」と重ねられ、教育現場では混用が生じている場合もある。本研究においては読解リテラシーに偏りがちな「PISA型読解力」を本来の立場から見直し、数学的・科学的なリテラシーを含めながら再検証していく立場をとる。その上に立って、「児童生徒が社会の中で生き抜いていく過程において、必要とするであろう活用力」の総体を明らかにし、その中から教員養成課程において教師側の資質として扱うべき問題を抽出し、教員養成プログラムの具体的な授業実践の中で変容を測定し、効果を検証して報告書としてまとめた。 （研究代表者　22年度　梶田叡一 23年度　小竹光夫） （共同研究者）米田豊、堀江祐爾、濱中裕明

著書、学術論文等の名称		単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会発表等の名称	概　要
「学校・研究室紀要、教育実践論文」					
1	話してみませんか, 書写のこと	単著	平成 16 年 1 月～平成 19 年 7 月	書道美術新聞（萱原書房）	いわゆる書き方教育のみに止まって学習の活性化が図れない現状に対し，新たな視点での書写・書道教育の在り方や方法を提示した。書写・書道教育に関わる実践者を対象として，文字を手書きすることに関しての提言，及び具体的な学習指導の在り方と授業研究の視点，さらには実践の中から導き出せる理論と理論構築の方法について，月 1 回の連載で論述した。平均原稿量 400 字詰め原稿用紙×10 枚、連載総数計は 43 回である。
2	文字を手書きすることについての…備忘言志録	単著	平成 22 年 1 月～平成 24 年 3 月	書道美術新聞（萱原書房）	情報化時代の到来によって，文字を手書きする分野（書写・書道教育）には，混迷と混乱が起こり始めている。以前のように「実用」というキーワードでは押し切れなくなった文字を手書きすることの必要性を，意義と価値という視点で再構築し，理論と実践を融合させていこうとする目的の下で論述されている。特に対象を書写・書道教育に関わる実践者（教員・社会教育分野での指導者）としているため，平易かつ一般的な用語を用いた論述を進めている。新聞発刊に合わせた月 2 回の連載で，平均原稿量 400 字詰め原稿用紙×10 枚、連載総計は 48 回である。
「初等・中等教育関係の教科書の編集・執筆」					
1	**小学校教科書** 『新版　書写』 『書写』 『書写』	単著	平成 14 年版～現在に至る	教育出版株式会社	編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。 編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。 編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。
	『小学　書写』	編著	平成 14 年版～25 年版	教育出版株式会社	編集委員として全体のプロット作成に関わった。また個々の教材の設定、並びに解説について執筆した。平成 14 年版については、毛筆手本教材の揮毫を行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成 27年3月31日

氏名　渡邉　規矩郎

研究分野	研究内容のキーワード
教育学、史学、社会学	教員の資質向上、歴史・伝統文化、日本の芸道、民俗・信仰

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 （1）ライフワークとしての伝統文化・先哲の学問を生かした授業	平成19年4月～23年3月	終生の学問として、大学卒業後も、日本の歴史・伝統・文化に関する学問（水戸学、崎門学、神道などの日本学）を平泉澄博士、田中卓博士らに師事して学び、また、日本学協会、藝林会の同友と切磋琢磨しながら研鑽してきた。この学問の蓄積を生かし、兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の教授として担当の「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）の授業、特に「自己啓発」の分野について、先哲の生き方、学問に対する姿勢を中心に講義を行い、院生の人間としての修養、自己啓発につなげた。院生でも始めて学ぶ事柄が多く、高い関心を示した。
	平成23年4月～24年3月	兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の非常勤講師として、教授時代と同じ「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）の授業を担当、特に「自己啓発」の分野について、先哲の生き方、学問に対する姿勢を中心に講義を行い、現職教員が多数を占める院生の自己啓発に努めた。
	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の教授として担当の「日本の伝統文化」（教養科目、１年次配当、半期、選択２単位）の授業では、長年蓄積した学問を平易に講義することに努めた。学生は、前提となる日本の歴史や人物について全くと言っていいくらい知らない。そこで、歴史のエポックと人物をクローズアップするシラバスを作って授業。学生は、初めて知ることばかりなので、興味と関心を示し、アンケートの感想からも学生の満足度は高い。
（2）実務経験を生かした授業 ・マスコミ人としての経験を生かした指導	平成19年4月～24年3月	兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の教授として担当の「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」（専門科目、２年次配当、必修２単位）、「学校経営専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）、「教育行政専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）の授業で、昭和41年以降にマスコミ人、特に教育ジャーナリストとして直接に経験したことを、「生き証人」として臨場感を持って行った講義は、学部からのストレート入学組の院生にも現職教員の院生にも共に好評であった。
	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の教授として担当の「時事問題」（専門基礎科目、３年次配当、半期、選択２単位）、「マスメディア論」（教養科目、４年次配当、半期、選択２単位）の授業では、ジャーナリストとしての物の見方・考え方、取材経験を存分に生かして平易に講義することに努め、アンケートの感想からも学生の満足度は高い。

事項	年月日	概要
・神道人としての経験を生かした指導	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の教授として担当の「日本の伝統文化」（同上）の授業では、神社宮司として身につけている古典、宗教学、宗教史、神道神学、有職故実、倫理学などの学問、神職としての経験や知見を生かした講義を適宜行っている。授業の感想からも学生の満足度は高い。
・武道や技芸の経験を生かした指導	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の教授として担当の「日本の伝統文化」（同上）の授業で、武道（弓道３段、居合道２段、銃剣道初段）、技芸（詩吟、書道＝段位等なし）や礼法などの素養は、関連した内容を教える際に大いに役立っている。平成２４年度から中学校で武道が必修化になったことに伴い、教員志望の学生は特に関心を持って受講している。
（3）蓄積した実物資料を活用した取り組み	平成19年4月～現在に至る	大学の担当授業においても、半世紀近い取材活動の中で保有しているナマの現物資料、画像、録音資料、新聞・雑誌記事などを講義に取り入れて提示することで、院生、学生が観念的な理解で終わることなく、より具体的に理解していくことに役立っている。
（4）その他、教育効果を高める取り組み ・ディベートやディスカッションの導入 ・学生の発表を基にした授業 ・院生・学生の授業評価の活用 ・視聴覚教材の活用 ・プリント資料の提供	平成19年4月～現在に至る	兵庫教育大学大学院においても、環太平洋大学においても、授業改善が共通の課題として取り組まれる中、一方的な講義でなく、双方向・学生参加型の授業を適宜適切に導入することに努めた。また、パワーポイントなどを活用することで、視聴覚に訴えて学生の理解の促進を図ってきている。

事　　項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材		
・冊子「教育の灯火」	平成19年4月～24年3月	昭和63年から平成元年にかけて、関西にゆかりのある教育の先達（森信三、弥吉管一、今井鑑三、東井義雄、田村一二、戸田唯巳、梅原猛、重松鷹泰、西岡常一、福井謙一）に「教育を聞く」インタビュー取材を行い、『日本教育新聞』に連載した。これを冊子（Ａ４判３３頁）に編集し直し、自作教材として兵庫教育大学大学院の「教員の社会的役割と自己啓発」の授業で使用し、学習効果が高まった。
・ハンドブック「教育課題シリーズ」	平成19年4月～24年3月	現場教師に役立てるため、平成１６年度にハンドブックを企画、専門研究者に執筆を依頼して、日本教育新聞社から「教育課題シリーズ」として発行した。①授業改革と通知表（梶田叡一）②学校の危機管理（若井彌一）③個に応じた指導（北俊夫）④信頼される学校づくりへの学校評価（天笠茂）⑤子どもが育つみちすじ（服部祥子）⑥教師として成長すること（浅田匡）⑦これからの総合的な学習（角屋重樹）⑧学校教育を変える（若月秀夫）⑨学校改善と組織改革（佐古秀一）の９冊。この冊子を兵庫教育大学大学院学校教育学研究科の「教員の社会的役割と自己啓発」、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」、「学校経営専門職インターンシップ」、「教育行政専門職インターンシップ」の授業で教材として用い、当該授業はもちろんのこと、学校教育研究科全般に活用できるものと高い評価を得た。
・教育セミナー収録集　全13集	平成19年4月～24年3月	平成８年から私が責任者となり、日本教育新聞社関西支社と人間教育研究協議会が共催して始めた教育セミナーの収録集を平成２０年まで毎回、日本教育新聞社から発刊した。この全１３集は、国の教育改革の動向、その時々の教育課題と研究実践を凝縮したようなものとして意義がある。これを適宜、兵庫教育大学大学院の授業で活用するとともに、院生研究室にワンセット寄贈して利用に供した。
・自作資料「自己啓発ということ～先哲遺文から～」	平成19年4月～現在に至る	吉田松陰「松下村塾の規則」「松下村塾の聯」「松下村塾記」、橋本景岳（左内）「啓発録」を収録した冊子を自作して兵庫教育大学大学院の「教員の社会的役割と自己啓発」の授業、環太平洋大学の「日本の伝統文化」の授業で用い、院生や学生は、先哲の志とそれを培った学問の深さに驚嘆、非常な刺激となった。
・先哲の遺文の講義の打聞等	平成19年4月～現在に至る	学卒後、恩師や先輩より受けた先哲の遺文の講義の打聞や録音テープ起こし記録などを兵庫教育大学大学院の「教員の社会的役割と自己啓発」の授業、環太平洋大学の「日本の伝統文化」の授業で用い、院生や学生は、先哲の学問とその底流に流れる日本の歴史・伝統・文化を理解するのに役立っている。
・日本の学校教育の歩み（年表）	平成21年9月～現在に至る	兵庫教育大学が設置した「教材文化資料館」の展示委員として、明治以降の「日本の学校教育の歩み」 を年表として作成し、パネルとして同館にかかげ展示した。教育内容行政の変遷を中核にしたもので、パネル以外でも学内で広く活用されている。
・自著の新聞・雑誌記事、論文、評論、紀行、エッセイ	平成19年4月～現在に至る	長年にわたり新聞・雑誌に執筆してきた記事や論文、地域の自治会誌に連載中の紀行文などを授業に活用したり、レポートの参考に供したりしている。
・講義用補助教材	平成19年4月～24年3月	学校不信、学級崩壊、指導力不足教員、モンスターペアレンツなどの問題、各業種の職業倫理や時事的課題、マスメディアの現状など、マスコミの世界に籍を置いている立場から得られる情報や資料を院生、学生に提示して高い評価を得ている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・採用決定の際等における評価内容	平成19年4月	教職大学院の新しい教育のスタートにあたり、教育ジャーナリストとしての長年の経験とそれを生かした教育に対し、大きな期待が寄せられた。
	平成23年4月	教育をはじめ幅広いジャーナリスト活動が認められ、「マスメディア論」、「時事問題」の授業を担当。また、水戸学や崎門学など日本の歴史・伝統・文化に対する継続した学問研究が評価され、「日本の伝統文化」の新設科目を担当することになった。
・大学設置・学校法人審議会の教員審査	平成19年7月	大学設置・学校法人審議会の兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）の教員審査で、「教員の社会的役割と自己啓発Ａ」、「教員の社会的役割と自己啓発Ｂ」、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」、「学校経営専門職インターシップ」、「教育行政専門職インターンシップ」の５科目担当の教授として可の判定を受ける。
・自己点検・評価での評価結果	平成19年4月～24年3月	大学での授業経験がなかったが、「案ずるより産むが易し」で、おおむね満足のいく授業ができた。院生は現職教員が多く、共に学ぶことができ、新たな研究実践のスタートにもなった。
	平成23年4月～26年3月	大学院の授業は４年間経験したが、学部の授業は初めてで、最初は戸惑いが多かった。学生の基礎学力が予想以上に低いことに対し、教える内容が高く、量も盛り沢山だった。今は学生の実態に合わせた授業が思い通りできるようになっている。

事　　項	年月日	概　　要
・学生による授業評価	平成19年4月～24年3月	授業の節目と期末に評価と感想を求めた。院生の満足度は総じて高かった。例えば、平成20年6月24日の「教育政策とマスコミ」の授業に対して院生は「本授業の振り返りや考察等」の中で、「新たな学びが多々あり有難かった」、「講義は自分が全く知らなかった話が多く、それらを十分理解できるだけの基礎知識がなかったことで、理解・納得ができない部分もあったが、非常に興味深かった」、「講義は渡邉先生だからこそできる、興味深い話であった」など、興味・関心をそそる授業と評価している。
	平成23年4月～26年3月	毎学期の中間で学生アンケートをとり、後半の授業に生かすとともに、年度末にはリフレクションペーパーを作成している。平成２３年度の学生アンケートでは、「日本の伝統文化」の授業に対して学生は「先生の授業はとても楽しい」、「いろんな歴史について学べる」、「非常に細かく丁寧に教えてくれる」、「日本の歴史の深さがよくわかった」など、かなり満足した感想が書かれている。 また、「時事問題」と「マスメディア論」の授業に対しては、「日本や世界が抱えている問題について学ぶことができた。社会に出るときに必ず役に立つ知識だと思う」などと受け止めている一方、授業方法面で、学生参加型の場面が少ないことに対する不満もあった。
	平成24年4月	環太平洋大学では、今年度から国際教育学科が誕生した。同学科は、英語力はもちろん日本の伝統文化に対する理解を柱の一つにしている。１年生は入学直後から1年間、ニュージーランドに留学して英語力を磨いてくるが、渡航直前に「日本および日本人の特質」について講義した。ニュージーランドに行って、「日本の特色は？日本文化の本質は？」などと、日本について聞かれることを想定した授業であった。関西空港を出発するとき、女学生のひとりが「先生の日本の伝統文化の授業を受けるのを楽しみに、ニュージーランドで１年間、英語を頑張ってきます」と言って旅立った。学生は、たいへん重要な意味をもつ科目であることを認識している。これに応えるために授業改善に努めなければならない。
・学長による評価	平成22年3月	兵庫教育大学の特任教授の任期は３年であったが、高い評価を得て、学長裁量の特例で１年延長して授業に当たることになり、任期満了後も、非常勤講師を請われたため、現任大学と調整して１年間、昼間と夜間の授業を行った。
	平成23年4月	兵庫教育大学での実績およびジャーナリストとしての経験が評価されている。また、日本の伝統文化を「総合的に捉えた学問をしてきた数少ない人」との高い評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （マスコミ関係） （１）教育研究への参画 ・人間教育研究協議会（梶田叡一代表）のメンバーとして現場教師と月１回の研究会、年２度の教育実践交流会の実施	昭和60年～現在	昭和59年度から人間教育研究協議会に入会、ＮＰＯ法人になった平成１８年からは監事。平成１０年から日本教育新聞社の教育セミナーと連携した活動を展開し、教職員の研修に役立っている。
・教育評価の実践的研究	平成5年～現在に至る	教育評価実態調査委員会（梶田叡一代表）のメンバーとして、平成５年に通知表の全国調査を行い、分析や考察を加えた研究レポートを発行。また，特色ある通知表をとりあげた冊子を作成して学校現場に配布して評価改善に役立ててきた。その後も，引き続き通知表を中心にした評価研究を継続。現在は，科研費などを受け、梶田叡一、古川治、浅田匡らと共同研究を行っている。
・道徳教育の振興指導	平成10年度～18年度	平成8年度以来、大阪府道徳振興会議の委員として指定地域・学校の指導助言にあたるとともに，シンポジウムなどのパネリストなどを務める。
・京都市が生き方探究教育の具体策として進める「スチューデントシティー・ファイナンスパーク」事業に参画	平成18年3月～現在に至る	運営推進委員会委員。施設開所までに先行の品川の学校視察。目下、実施経過を見守りながら、評価と改善に向けて検討会議を重ねている。
・「京都こどもモノづくり事業」に参画	平成19年4月～現在に至る	推進委員会委員。こどものモノづくりへの興味・関心を高め，創造性を育むことを目指している。
5　その他		
・兵庫教育大学大学院における指導実績	平成19年4月～23年3月	教員として「教員の社会的役割と自己啓発」（共通科目、１年次配当、半期、必修２単位）、「教職員職能開発と研修プログラムの開発」（専門科目、２年次配当、必修２単位）、「学校経営専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）、「教育行政専門職インターンシップ」（専門科目、２年次配当、選択必修10単位）を担当。 単独授業の「教員の社会的役割と自己啓発ＩＩ」では、次の内容で講義・演習を行った。

事　　項	年月日	概　　要
		①学校教育の現代的課題解決へ向けて 〈学校教育と地域社会の協同〉 ・地域住民の学校運営への参画、児童生徒の問題行動等への対応、豊な体験活動の推進などの課題を通して、地域に開かれた信頼される学校づくりを考える。 ②教員の社会的・職業倫理に関する事例研究 〈学校教育と教員に関する問題事例の検証〉 ・学校不信や教員不信の背景を多角的に考察、社会的問題化した問題事例を討論によって検証・分析し、未然防止策や対応策を考える。 ・学級崩壊や指導力不足の問題事例などを検証・分析し、その対応策を考えるとともに、職業的倫理、職能的成長のあり方について討論を通して考察を深めていく。 〈教員の社会的役割に関する事例研究〉 ・教員が果たしてきた社会的役割について、歴史的に事例をもとに考察するとともに、諸外国の事例も取り上げ、不易な部分を明らかにする。 ・教員が果たすべき今日的な役割について、実践事例を紹介、これからの社会的役割を考える。 〈教員の職業倫理に関する事例研究〉 ・教員の職業倫理について、日本の歴史・伝統に基づく職業倫理観や諸外国の比較事例をもとに考察、これからの教員の職業倫理を考える。 ③教員の自己啓発についての事例研究 ・先哲の自己啓発の事例をもとに、教員の自己啓発、修養について自らの問題として考える。複数担当授業では、主に教育政策、教員の資質向上、マスコミ対応などに関する課題を指導した。
・兵庫教育大学における授業外の教育実績	平成19年から毎年8月	教員採用試験を受ける学生を対象にした「教育時事セミナー」の講師として、最新の教育時事問題を解説している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （1）教員免許 中学校教諭１級普通免許状（社会科） 三重県教育委員会（昭40中普第107号） 高等学校教諭２級普通免許状（社会科） 三重県教育委員会（昭40高２普通第114号） （2）資格 ・神職資格　階位「明階」（第16855号） ・社叢インストラクター ・弓　道　３段　（小笠原流） ・銃剣道　初段 ・居合道　２段　（夢想神伝流）	 昭和41年３月 昭和41年３月 平成18年10月 平成21年５月 昭和41年３月 昭和43年４月 昭和46年３月	 神社本庁から試験検定により授与 社叢学会から認定 日本弓道連盟 日本銃剣道連盟 日本剣道連盟
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）教育セミナーの全国展開の責任企画・運営	平成8年～現在に至る	平成８年から、日本教育新聞社関西支社主催の「教育セミナー」をスタートさせ、１７年目となる。この教育セミナーを全国各地に広げ、現在は全国十数カ所で開催しており、同セミナーの創設者として、企画全般と実施・運営を担っている。熱心な教育関係者の参加を得、教育改革への寄与、教員の資質向上という時代の要請に応えていると高く評価され、文部科学省からも同省の講師派遣で全面的な支援を受けている。

事項	年月日	概　　要
（２）マスコミ関係 ・『日本教育新聞』の関西支社記者として	昭和59年4月～平成24年12月	全国版の記事執筆や連載「ＴＴ最前線」、「幼児教育最前線」の担当。本紙座談会なども企画、鼎談「茶道を通しての人づくり―世界に開かれた日本人の育成」（中曽根弘文、千宗之、梶田叡一）、対談「伝統文化を継承するために」（河合隼雄、千宗室）の司会を務めた。 「関西版」を創設、編集長として、新しい視点からの人権・同和教育の企画連載、教育の先達に教育を聞く「教育の灯」のリレーインタビューなど、関西からの教育発信を試みた。 また、教育実践懸賞論文募集を手がけ、それが後に「教育セミナー」の開催に発展していった。 国立民族学博物館、国際日本文化研究センターのプレス懇談会に出席、梅棹忠夫、梅原猛をはじめ研究者と交流するとともに、国際シンポジウムなどの傍聴が許された。 日本教育新聞社の出版を一手に引き受け、「生活科の評価はどうするのか」（人間教育研究協議会）、「学校５日制Ｑ＆Ａ―家庭・地域で子どもを育てる風土を」（大阪学校５日制研究グループ）、「学びと育ちの評価―通知表全国調査リポート」（教育評価実態調査委員会）、「師魂教才－教育道に生きる」（上寺久雄）、「教育はこれからがおもしろい」（野口克海）、「私流文章教室」（佐藤良和）、「いじめ解決への教育的支援」（池島徳大）、私の出会った少年たち―非行への新しい視点」（藤川洋子）、「日本の教育文化を考える」（浅田匡）、「生きる力が育つ２１世紀の創作劇活動の　勧め」（佐藤良和）のほか、「教育セミナー収録集」（全１３集）（平成８年～平成２０年）を編集・刊行した。
（３）講演等の活動 ・甲陽会伊丹支部夏季研修会 ・京都フォーラム2008 ・京都フォーラム2009 in winter ・日本教師学学会第10回大会 ・日本教師学学会第11回大会インタビュー ・芦屋フォーラム 2020 ・和文化教育第６回全国大会シンポジウムの司会 ・教育勅語渙発120周年記念　基調講演・鼎談（湊川神社、日本学協会主催） ・日本教師学学会第12回大会総合の司会 ・日本教師学学会第13回大会の運営 ・日本教師学学会第14回大会の運営 ・日本教師学学会第14回大会自由研究発表	平成17年7月 平成20年8月 平成21年2月 平成21年2月 平成22年2月 平成22年8月 平成22年10月 平成22年10月 平成23年2月 平成24年3月 平成25年3月 平成25年3月	教育改革と学校の責務 教員問題をめぐる背景と構図 和文化教育に望むもの 教師学の１０年 梶田叡一氏の記念講演を受けてのインタビュー 伝統文化教育で子どもたちに何を伝えるべきか 現代を潤す江戸文化の彩り 日本の教育を考える 甲南大学にて開催 早稲田大学にて開催 秋田大学にて開催 伝統文化に関する教育の重要性と課題
４　その他 （１）社会活動 ・地域における自治会・公民館活動 ・社叢インストラクターとしての活動	平成9年～現在に至る 平成21年～現在に至る	自治会だよりの執筆などで協力。 社叢のみならず森林調査研究と保全活動を行っている。また、社叢学会の研究として、沖縄の御嶽（うたき）や伝統祭祀のフィールドワークを手掛け、沖縄と本土の古代祭祀のつながりを探っている。
（２）教員免許状更新研修講師 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当 ・必修科目「教育政策の動向A」担当	平成21年8月 平成23年8月 平成24年8月 平成25年8月 平成26年8月	京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学 京都ノートルダム女子大学
（３）公開授業の実施	平成22年6月	兵庫教育大学教職大学院（教育実践高度化専攻）が神戸市総合教育センターで実施。学校経営コース専門科目「教職員職能開発と研修プログラムの開発」（現職教職員対象）の公開授業を行った（授業担当者：浅野良一、廣岡徹、渡邉規矩郎）。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
１．教育フォーラム49 確かな学力を育てる確かな授業	単　著	平成24年2月	金子書房	本書は「確かな授業は目下の急務」との課題意識のもとに、確かな学力を育てるための実践的な提案を試みたもの。 Ａ５判150頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤明、古川治、田中博史、長谷浩也、阿部秀高、金澤隆夫、横須賀薫、高岡信也、鎌田首治朗、渡邉規矩郎、山本美紀 本人担当部分：「伝統文化の教育～子どもたちに何を伝えるべきか」（P118～P127） 戦後60余年を経てようやく教育基本法が改正され、伝統文化を尊重する教育が復活した。自国の歴史を民族の生命の流れとして受けとめ、それを縦糸にしながら、歴史に裏打ちされた伝統文化を捉えていくことができれば、教育基本法が目的とする「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」ができ、さらに我が国の歴史・伝統文化の継承者としての自覚を持つようになる。こうした視点のもとに、①前提となるものの見方・考え方②自らの立脚点としての歴史・伝統文化③日本人の内面的変化の特徴「美・聖・善・真」④国民性とゴッホが見た日本人⑤武道のこころと文武両道を考える―を柱に論考。
２．教育フォーラム〔52〕 新しい道徳教育のために～徳性をどう育てるか～	共　著	平成25年8月	金子書房	「道徳教育をどうするか」という課題は、敗戦以来、重いものとして日本社会にのしかかっている。「修身」に替わる道徳教育の原理が確立されない現状の中で、新しい道徳教育のあり方の基本課題について、様々な視点から論考を寄せている。 Ａ５判　149頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、渡邉規矩郎、押谷由夫、加藤明、新川靖、小楠徹、増井眞樹、阿部秀高、鎌田首治朗、渡邉満、蔵あすか、オチャンテ・村井・ロサ・メルセデス 本人担当部分：「日本的徳性とは何か」（ P16～P26）を単著 日本的徳性について、①模倣でなく「純日本」を志向した聖徳太子②三種の神器と三徳（正直・慈悲・智恵）の思想③浄・明・正・直とつつしみ・つつしむ（敬）④教育勅語に基づき修身教科書で扱われた徳目－の５項目を掲げて考察。日本の精神文化は、日本古来の神道思想を土台に日本に同化した仏教・儒教によって生まれた結晶であり、日本的なるものとして、その中から神道のみを取り出して論ずることは、日本の歴史・伝統を無視するもので、道徳の基準も歴史そのものに即して考えるべきものと結論づけている。 著者が７０歳の節目を迎えて、地域の「自治会だより」に連載した紀行文や随筆をまとめたもの。 Ｂ５判　103頁
３．紫の風	単　著	平成25年12月	紫風庵	
（学術論文） １．指導要録・通知表にみる戦後学力観・評価観の変遷	共　著	平成22年3月	平成19年度～平成21年度科学研究補助金（基礎研究（Ｃ））課題番号19530733「指導要録・通知表にみる学力観の変遷に関する研究」研究成果報告書 Ａ４判　全267頁 P. 27～P. 82 P. 121～P. 136 P. 191～P. 200	「通知表にみる学力観の変遷に関する研究」のテーマで、平成19年度から21年度の３ヵ年間に科研費を受けた研究成果をとりまとめた。当初の研究を深め、戦後の学力観の変遷を探る過程で、昭和55年度版指導要録の作成過程が焦点になり、第１部「指導要録の改訂にみる学力観のターニングポイント～キーパーソンへのインタビューを通じて～」（宮本三郎，中島章夫，武田紀男，田中吉兵衛，陣川桂三，小島宏，村松啓至，梶田叡一の８氏をインタビュー）と第２部「通知表の評価観点にみる学力観の変遷」に特化した。 Ａ４判　全267頁 研究代表者：古川治 研究分担者：浅田匡、梶田叡一、後藤真一、西森章子、細川和仁、渡邉規矩郎 本人担当部分：「宮本三郎インタビュー」「陣川桂三インタビュー」「新聞論調にみる教育評価の動向」を単著
２．教師学の10年～教育問題をめぐる背景と構図～	単　著	平成23年3月	日本教師学学会誌「教師学研究」第10号　P. 51～P. 55	勤評闘争直後より、教育ジャーナリストとして、教育改革の推移，学校教育の政策や動向，教育実践の流れを見てきました。その経験をもとに、教師研究の課題や，設立10周年を迎える本学会の今後に期待すること等について、教育界の現状をふまえての講演録。内容の柱は①教員養成の現状と課題②学校不信，教員不信をめぐる状況③教育報道の姿勢の問題④国の教育政策の立案の課題⑤教師教育を取り巻く地方教育施策の課題⑥教育現場の指示待ち姿勢などを論述。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．教育における伝統文化の役割に関する一考察	単　著	平成25年3月	環太平洋大学「研究紀要」第７号 P. 243～P. 248	温故知新、彰往考来は今を生きる者にとって最も大切なことである。過去から現在に至る筋道を知らずして現在は分からない。現在が分からないとこれから未来へと進むことができない。過去というものを確実に理解し、自分の歩んで来た道を振り返ることにより将来を決定しうる。過去を本当に知り得て、初めて未来への道が開けていく。先人、子孫の声を聴くことが不可欠な所以である。本研究論文では、日本の伝統文化の源流としての森と水を軸にしながら、奈良のお水とりなどを例に教育における伝統文化の役割を考察。
４．ＮＩＥを取り入れた教育実践研究～大学２年生を対象とした時事教養Ｉの授業実践を通して～	共　著	平成26年3月	環太平洋大学「研究紀要」第8号 P. 147～P. 154	環太平洋大学の２年次の学生に必修科目として開講されている「時事教養Ｉ」の主担として行った授業の実践を振り返って考察・分析したもの。 共著者：渡邉規矩郎、仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、岡野聡子、正木友則 本人担当部分：「はじめに」の部分を執筆。この授業科目が取り入れられた背景やねらいなどについて執筆した。
５．「人間教育」を培うもの～伝統文化教育への期待～	単　著	平成26年4月	人間教育学会「人間教育学研究」創刊号 P. 15～P. 23	国民教育の中心となるものは伝統文化の教育であり、さらにその骨髄となるものは歴史でなければならない。歴史こそは国民教育の中核である。歴史は自由の人格が永久にわたる創造的開眼の世界である。教育もしかり。したがって、「人間教育」は自由なる人格を創造するものでなければならない。―こうした考えを前提にして、本論文は、人として日本に生まれた厳粛な事実を踏まえ、歴史や先賢に対する不遜な態度を戒め、古典や言葉の継承の重要性を説く。そして、本人が受けた先哲遺文講義とその打聞を紹介した上で、師承の学問について言及、伝統文化を護り伝える人間教育の重要性を強調している。
６.学校現場からの教育改革：想起データ分析⑴～ブルーム理論と梶田叡一～	単　著	平成27年3月	「奈良学園大学紀要」第２集p. 181～p. 197	1970年代から80年代にかけて、さまざまな学習理論が出現し、それに呼応する実践が試みられた。具体的には、梶田が取り上げた学び方学習、極地方式、範例学習、発見学習、仮説実験授業、主体的学習、バズ学習、集団学習、完全習得学習、教育工学をはじめ、個性化・個別化教育、モジュール学習、水道方式、放送教育、カリキュラム論などである。それぞれの学習理論の提唱者と学校現場及び研究会における実践者の双方の代表的人物に直接インタビューによる聞き取り調査を進めている。その聞き取りをまず「学習ノート」の形で発表する。その初回で、ブルーム理論を日本に紹介し、各地の実践者と共に取り組んだ経緯を肩っており、授業研究が低調になっている今日の教育界に示唆するところは大きい。
（その他） 「学会研究発表」				
１．教員問題をめぐる背景と構図	単　独	平成20年8月	人間教育研究協議会：京都フォーラム2008 於：京都ノートルダム女子大学	中央教育審議会の昭和４６年答申以後の教員の資質向上をめぐる審議会の度重なる答申や建議、そしてそれに基づく国を中心とした施策を取り上げながら、教員問題は「百年河清を待つ」がごとき状態で推移してきたことを研究者として、また身近に見てきた記者の目からとらえたところを解説。
２．和文化教育に望むもの	単　独	平成21年2月	人間教育研究協議会：京都フォーラム2009in winter 於：ノートルダム学院小学校	日本人の感性、国民性というものはどこから生じたか。また、歴史のおける文化の起伏を解説。また、名だたる武将が詩歌管弦を好んでいたことを紹介し、「みやび」ということと「従容として死につく」武士のたしなみと武士道などについて言及。さらに弓道と禅を学んだ外国人学者を例にして、日本文化は日本人固有のものではないことを強調した。
３．教師学の１０年	単　独	平成21年2月	日本教師学学会第10会大会 於：園田学園女子大学	教師学会が発足した平成10年当時は、師範学校の校長が去り、師範学校的な現場における後継者育成が過渡期を迎えた教師教育における岐路であったとの見解に立ち、一方で文部科学省、自民党、日教組の政治的関係を織り込みながら１０年を振り返る。
４．伝統文化教育で子どもたちに何を伝えるか	単　独	平成22年8月	人間教育研究協議会：芦屋フォーラム2010 於：芦屋市立宮川小学校	教育基本法が改正され、学習指導要領で伝統文化に関する教育の重視が打ち出されたのを受けて、この内容の扱いが、今までの社会科や郷土教育の延長はならないことを、日本文化の源流にある精神性を特に問題にした。
５．現代を潤す江戸文化の彩り	共　同	平成22年10月	和文化教育学会第６会全国大会：シンポジウム 於：江戸東京博物館	江戸文化の見方と伝統文化に関する教育の眼目と共通性を踏まえ、江戸に開花した文化が現代の人々や社会を潤す様相を指摘し、これからの文化創造の方途を冒頭で提案。司会者として、今後の地域づくりと学校づくりに意義ある討議になるよう留意した。 共同発表者：山折哲雄、中村哲。渡邉規矩郎、滝口正哉、市川寛明、田中隆文
６．伝統文化に関する教育の重要性と課題～大学における授業を通して考える～	単　独	平成25年3月	日本教師学学会 第14回大会 於：秋田大学	大学において２年間「日本の伝統文化」の授業を担当する一方、以前には教職大学院において伝統文化を加味した授業を行った。それら基づいて、学生等が伝統文化を学ぶ意欲はあるものの、その土台となる日本の歴史や人物に対する知識が貧弱なことなどを提起し、高校以下の伝統文化の教育への課題と充実に向けての方途を探る。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「主な講演等」 1．日本の教育を考える	単　独	平成22年10月	日本学協会 教育勅語渙発120周年記念講演会 於：湊川神社	基調講演で「道は高く美し、約にして近なり～学びと育ちの原点を問う～」との演題で、日本の伝統的な学問について話した。また、鼎談では、教員の資質向上や家庭教育、大人の責務について日ごろの考えを開陳した。
「報告書」 1．学校現場からの教育改革への新しいアプローチの開発	単　著	平成21年3月	兵庫教育大学学内科研報告書	教育改革は学校を基盤に行われるのが本来の姿。そこで、授業研究が盛んだった1970年代から80年代にかけて、学校現場に大きな影響を及ぼした学習理論を提唱した研究者と実践者10人から聞き取り調査を行い、その想起的データをもとに教育改革への理論や教育実践を分析・考察した。Ａ４判・全７頁
「研究誌」 1．教育改革を問い直す	単　著	平成17年7月	財団法人日本学協会『日本』第55巻7月号 P. 38～P. 43	中教審を舞台に義務教育改革を目指した審議が急ピッチで進められているが、最終的には教育改革の主役は学校、担い手は教師である。学力低下問題でも教師の自主性・自律性の重要性が指摘されたように、教師自身が改革の担い手として、自らの学校と授業を変えていくことが教育改革を成功させる鍵となる。教師の資質向上に期待する一方で、国には、ナショナルスタンダードとしての教育課程の基準の改善に向けて、全国の大学と連携して開発研究を行うシステム・ネットワークを構築し、教育研究者がこぞって参加する体制の確立を提言する。
2．友は甦る	単　著	平成18年6月	歌集『泰山木Ⅳ』の序文 P. 3～P. 7	小林朔郎歌集「泰山木」の題２集、３集と序文を書いてきた。第４集（Ｂ６判221頁）は著者の奥さんの追悼歌集となったので、日本人の死生観や幽界冥界ということにふれながら、私本人の妻を亡くした体験と重ね合わせながら記述。吉田松陰の「死友に背かず」ということの真意に迫り、友の甦り、復活に言及しながら、生きる者の責務を説いた。
3．今月の課題「いのちの尊さを実感させる教育」	単　著	平成18年9月	財団法人日本学協会『日本』第56巻9月号 P. 10～P. 13	子殺し・親殺しをはじめ、人のいのちにかかわる事件が続発している。その背景として、生命や人間の尊厳に対する無感覚、規範意識の低下や社会性の不足等が指摘されている。これらの問題を解決するためには、子どもたちに「いのちの尊さ」を実感させる教育が求められる。全国に先駆けた取り組みを重ねてきた兵庫県の教育プログラムを紹介しながら、知育・徳育・体育の調和のとれた全人教育に向け、まず根や幹を育てる教育を足下から始めることを訴える。
4．今月の課題「改正教育基本法と新学習指導要領」	単　著	平成20年3月	財団法人日本学協会『日本』第58巻3月号 P. 10～P. 13	改正教育基本法は、今日、教員一人ひとりの資質の向上が求められていることなどを踏まえ、第9条に独立の規定を設けた。旧法の規定に加え、教員が自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励むべきことや、養成と研修の充実が図られなければならないことを新たに規定した。また、教育を総合的に推進する国の振興計画をつくる規定を盛り込んだ。改正教育基本法を受けて改訂された新学習指導要領は、前２回の改訂の間に緩み、見失われてしまった学校、教師の存在意義、教育の本質を見直すことが、今回の大きなテーマとなっている。その意味で、いわゆる「ゆとり教育」からの180度の転換ということができる。新学習指導要領を実効あらしめるのは、やはり教師力の向上と教育サポート体制の如何にかかっていることを強調する。
5．教育再建への諸課題	単　著	平成20年12月	日本教師会『日本の教育』12月号 P. 46～ P. 50	6月29日に住吉大社で行われた大阪楠公祭後の講話を整理・加筆したもの。教育改革の最大課題は、教員の資質向上に尽きる。学校現場自らもこれをトップにあげる。しかし、この問題は百年河清を待つがごとき堂々めぐり。医師養成にはインター制度がある。教員養成にも、早急に中教審四六答申で打ち出された試補制度の導入が望まれる。少子化の今日こそ教育制度の抜本改革を行う絶好のチャンスであると強調する。
6．今に生きる勉学の心得～仁科芳雄博士の弟にあてた手紙から～	単　著	平成21年7月	日本教師会『日本の教育』7月号 P. 1～P. 2	原子核物理学の父として知られる仁科芳雄博士が明治43年4月7日、岡山県立岡山中学校を卒業後、第六高等学校の入学試験の準備中に、岡山の下宿から津山中学校の寄宿舎にいた最愛の弟に手紙を書いた。この弟にあてた手紙は、徳育、知育、体育の３つの修養と「主義のある人になれ」という勉学の心得を懇切丁寧に説いたもの。学力低下が叫ばれる今日の教育へのメッセージとしてこれを紹介する。この手紙に見る勉学の心得は、今までは当り前のこととして行われてきた。それだけに、当り前のことが当たり前に行われる教育の再生を願わずにはおれない。
7．道は高く美し、約にして近なり～学びと育ちの原点を問う～	単　著	平成22年12月	日本教師会『日本の教育』12月号 P. 1～P. 2	平成22年は教育勅語渙発120周年に当たり、10月30日前後には、各地で記念行事が行われた。筆者は、湊川神社での記念行事「日本の教育を考える」で基調講演、その後の鼎談に参加した。本稿は、そこで話した内容の概要を改めて記述したもの。日本の教育にバックボーンがなくなったことから説き起こし、学校教育の現状と影、教育の崩壊と大人の責任などに言及、親・大人が鏡・手本になる社会を取り戻すこと、教師が高い志を持つ教育界に再建しなければならないと訴えた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．風来坊の旅枕① 良寛さんを敬慕した村上三島との出会い	単　著	平成24年12月	『教育ＰＲＯ』12月４日号 P.14～P.15	禅僧良寛は、西行を慕ってその跡をたどった。その西行は弘法大師・空海を慕ってその跡を踏んでいる。文化勲章受章者で書壇の巨匠・村上三島は、良寛の生き方に惚れて良寛の生まれ故郷の出雲崎に良寛の歌碑を建てる。村上三島の書と人となりに出会った筆者は、大三島に村上三島記念館を訪れ、そして良寛の生き方にあらためて感動し、出雲崎に思いを馳せる。 本著は、日本の伝統文化を体現した先人およびそれを育んだ自然にふれた心の旅を綴ろうとする紀行的エッセイ。本稿をスタートに月１回の長期連載。
９．風来坊の旅枕② 越後・出雲崎で良寛さんの俤を偲ぶ	単　著	平成25年１月	『教育ＰＲＯ』１月15日号 P.34～P.35	良寛の生地と晩年を送った越後・出雲崎を訪れ、良寛記念館や良寛が修行した国上山の五合庵や乙子神社の草庵、良寛が眠るお墓をたずねながら、良寛の人と思想に迫る。あわせて芭蕉が奥の細道の旅で立ち寄った出雲崎の風物を描く。
10．風来坊の旅枕③佐渡で真野御陵を拝し越後長岡へ	単　著	平成25年2月	『教育ＰＲＯ』２月19日号 P.24～P.25	佐渡は良寛の母が生まれた島。芭蕉が「荒海や佐渡によこたふ天の川」と順徳天皇をはるかに偲んで名句を詠んだ島である。その佐渡島に渡り、順徳天皇の真野御陵を拝して承久の変を回顧。さらに、越後・長岡に伸ばし、山本有三の「米百俵」のモデル・小林虎三郎、河井継之助、山本五十六などの偉人の事跡をたどりながら、長岡に息づく伝統的な気骨にふれる。
11．書評「新・日本学誕生～国際日本文化研究センターの25年～」	単　著	平成25年２月	『日本教育新聞』３月11日付 読書面	国際日本文化研究センターが設立されたのは昭和62年５月のこと。筆者はこの日文研に注目し、設立準備時代から今日まで、取材を通して見守ってきた。その立場から、四半世紀の歩みを綴った本書を紹介。
12．風来坊の旅枕④ 春を告げる奈良のお水取り	単　著	平成25年3月	『教育ＰＲＯ』３月19日号 P.26～P.27	奈良の「お水取り」が終わると春が来る。関西の人々は、毎年この春の兆しを待ちわびる。その「お水取り」を東大寺二月堂の前の閼伽井屋の石畳に約３時間座って、目の前で拝観した。実に荘厳で神秘的な光景だった。この「お水取り」は修二会という儀式の中のひとつだが、その修二会の練行の模様も「お水取り」に先だって拝観する機会に恵まれました。その感動とともに、この儀式に流れる日本の伝統文化にふれる
13．風来坊の旅枕⑤ さまざまなことを思ひ出す桜かな	単　著	平成25年4月	『教育ＰＲＯ』４月23日号 P.28～P.29	西行や芭蕉が愛してやまなかった桜を追って、京都、東京、尾道を旅しながら感じたこと、桜や自然を観る眼にも言及。
14．風来坊の旅枕⑥ 遠野から釜石・大槌・山田へ	単　著	平成25年6月	『教育ＰＲＯ』６月４日号 P.32～P.33	東日本大震災の地を訪れた本人が目にした岩手県の釜石、大槌、山田の悲惨な生々しい状況と復興にかける様子をリポート。
15．風来坊の旅枕⑦ 花巻で宮沢賢治にふれる	単　著	平成25年7月	『教育ＰＲＯ』７月16日号 P.30～P.31	宮沢賢治のふるさと花巻を初めて訪れた感慨を下敷きに、賢治ゆかりの地と親交のあった高村光太郎の詩碑などを訪ねる。
16．風来坊の旅枕⑧ 能登が呼んでる思い出の能登が	単　著	平成25年8月	『教育ＰＲＯ』８月27日号 P.30～P.31	能登は亡き妻としばしば訪れた思い出の地である。それを回顧しながら、西田幾多郎記念館、折口信夫父子の墓、勇壮な輪島の御陣乗太鼓の響きなどを伝える。
17．風来坊の旅枕⑨ 西郷隆盛遠流の沖永良部島	単　著	平成25年9月	『教育ＰＲＯ』９月17日号 P.26～P.27	敬愛する西郷隆盛が島流しされ、「敬天愛人」の思想を形成した沖永良部島を航路でおとずれ、西郷の足跡をたどる。
18．風来坊の旅枕⑩ 日本一のガジュマルのある小学校	単　著	平成25年10月	『教育ＰＲＯ』10月15日号 P.30～P.31	沖永良部島の小学校校庭に日本一のガジュマルの木がある。その小学校では木の下で緑陰学習を繰り広げ、祖先の労苦を偲ぶ体験活動を行っていた様子を綴る。
19．東井先生の一燈を頼む	単　著	平成25年11月	東井義雄生誕100年記念追悼文集『いのちのふれあい』 ｐ.23	「村を育てる学力」で一世を風靡した東井義雄を顕彰する記念文集の１ページに東井と出会った思い出をもとに、東井の教育者魂の継承を訴える。
20．風来坊の旅枕⑪ 仁科芳雄博士の勉学の心得	単　著	平成25年11月	『教育ＰＲＯ』11月19日号 P.32～P.33	原子物理学の父と呼ばれる仁科芳雄博士が受験勉強を控えた弟に与えた勉学の要諦を紹介するとともに、博士の先祖が因縁浅からぬ関係であったことに思いを馳せる。
21．風来坊の旅枕⑫ 函館の坂のある風景と乞食の万平	単　著	平成25年12月	『教育ＰＲＯ』12月17日号 P.32～P.33	函館の坂のある風景は美しい。函館山からは百万ドルの夜景が見える。その函館に石川啄木と親交のあった乞食の万平の供養塚があり、そのエピソードを紹介。
22．風来坊の旅枕⑬ 先覚者が眠る箱館を往く	単　著	平成26年2月	『教育ＰＲＯ』２月４日号 P.32～P.33	函館には、高田屋嘉兵衛をはじめとする先覚者が眠る。石川啄木もこの地に墓がある。それらを訪れ、函館の地の持つ意味を考えてみた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23. 風来坊の旅枕⑭ 土方歳三と新島譲の開明の志	単　著	平成26年3月	『教育ＰＲＯ』３月４日号 P.32～P.33	函館といえば五稜郭の戦いで戦死した土方歳三、そして海外渡航した新島襄が忘れられない。両人の志は吉田松陰の志に通じている。その開明の志を旅の中で偲ぶ。
24. 風来坊の旅枕⑮ 中江藤樹の大洲と木蝋の内子	単　著	平成25年4月	『教育ＰＲＯ』４月１日号 P.32～P.33	愛媛県大洲町は中江藤樹が青年時代を送り志を立てたところ。県立大洲高校は今も藤樹精神を建学の精神にし継承している。隣町の内子町は木蝋で栄えた町で、古い町並みは、伝統文化そのもの。両町を散策して感じることは多すぎた。
25. 風来坊の旅枕⑯ 四国札所巡拝と白峰御陵	単　著	平成26年5月	『教育ＰＲＯ』５月20日号 P.28～P.29	四国八十八か寺と別格二十か寺を車で巡拝した。その中で、崇徳上皇が眠る白峰寺と四国遍路開祖の河野衛門三郎を特筆しながら、西行の追慕姿などに及ぶ。
26. 風来坊の旅枕⑰ 越前一乗谷に映える合歓木	単　著	平成26年6月	『教育ＰＲＯ』６月３日号 P.32～P.33	越前朝倉氏が栄華を極めたのちに、親族の裏切りにあって滅んでいった一乗谷遺跡で朝倉氏の「夢の跡」を偲ぶ。
27. 風来坊の旅枕⑱ 橘曙覧と橋本景岳を仰ぐ	単　著	平成26年7月	『教育ＰＲＯ』７月１日号 P.28～P.29	幕末の越前が生んだ先哲といえば、歌人の橘曙覧と安政の大獄で亡くなった橋本佐内。この二人のゆかりの地を訪れて、改めて志の高に啓発される。
28. 風来坊の旅枕⑲ 京都御所の恵方・隠岐の島	単　著	平成26年8月	『教育ＰＲＯ』８月５日号 P.22～P.23	隠岐の島は、古くから政治犯が流された地。京都御所の恵方に当たるという。流刑の地とは想像できない、明るく豊かで文化のあふれた島の様子を探訪する。
29. 風来坊の旅枕⑳ 遠流の島・隠岐の旅	単　著	平成26年9月	『教育ＰＲＯ』９月16日号 P.26～P.27	隠岐の島は、後鳥羽上皇、後醍醐天皇の配流の地である。後鳥羽上皇はこの地でお隠れになる。今回の旅は、佐渡島に次いでの慰霊の旅でもあった。
30. 風来坊の旅枕㉑ 歴史は哀し鎌倉の旅	単　著	平成26年10月	『教育ＰＲＯ』10月21日号 P.26～P.27	頼朝が京都を避けて幕府を開いた鎌倉。そこには、静御前が義経を慕って舞った舞台があり、義経が兄の怒りを解こうと精魂を傾け「腰越状」を書いた寺もある。大塔宮護良親王を祀る鎌倉宮には親王を幽閉して殺した土牢がある。鎌倉は素敵なところだが、歴史をたどるとあまりにも哀しい。
31,神宮と伝統文化の教育	単　著	平成26年10月	神宮司庁『瑞垣』第229号 p.82～p.91	「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」とは西行が伊勢の神宮に詣でた時の有名なうたである。２０年に一度の式年遷宮を終えた機会に、体験をまじえながら、神宮のもつ意味を伝統文化の視点で考察した。
32. 風来坊の旅枕㉒ 建国物語発祥の地を訪ねる	単　著	平成26年11月	『教育ＰＲＯ』11月18日号 P.22～P.23	神話に出てくる天孫ニニギミコトが降臨された地とされている高千穂町とその隣の五ヶ瀬町を訪れ、高千穂神社や神秘的な天安河原、国見山の情景を描く。
33. 風来坊の旅枕㉓ 沖縄との出会いと南部戦線	単　著	平成26年1月	『教育ＰＲＯ』1月20日号 P.28～P.29	沖縄を第二の故郷とする筆者のが、沖縄と出会うようになったきっかけを紹介。沖縄線から70年を迎えるにあたり、南部戦跡の悲劇に思いをはせる。
34. 風来坊の旅枕㉔ 嗚呼「原城」殉教の址	単　著	平成27年2月	『教育ＰＲＯ』2月3日号 P.26～P.27	南島原市の原城は島原の乱の終焉の地。領民3万7千人が88日間立て籠もった。その城跡にたたずみ、地霊に鎮魂の祈りをささげげ、30年ぶりの島原の城下町を散策する。
35. 風来坊の旅枕㉕ 小雪舞う五島列島・福江島	単　著	平成27年3月	『教育ＰＲＯ』3月17日号 P.26～P.27	長崎の五島列島の福江島を初めて訪れ、五島最古の常崎教会や遣唐使最後の寄港地である三井楽の空海記念碑を見る。同島は日本一の椿の自生地、日本原産の椿が中国やヨーロッパにもたらされた経緯も解説。
「社叢インストラクター」 １．社叢学会認定「社叢インストラクター」としての活動	単　独	平成21年5月～現在に至る(平成26年5月更新)	社叢学会 沖縄民俗学会	社叢のみならず森林調査研究と保全活動を行っている。また、社叢学会の研究として、沖縄の御嶽（うたき）や伝統祭祀のフィールドワークを手掛け、沖縄と本土の古代祭祀のつながりを探っている。

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　金 山　憲 正

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
算数科教育法	算数科における指導内容に関する研究 問題解決学習の指導過程に関する研究 指導方法に関する研究

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
1．数学的な考え方を育てる算数科の授業法	平成９年４月 ～ 平成20年３月	大阪教育大学教育学部２部の算数科教育法（４年生、５年生 ６０名クラス）において授業担当。 教職をめざしている学生に教育現場の実態と現場に立つときの心構えを教科指導の面から理解させることをねらった実践である。特に、教師主導の教え込み型の授業から脱却して問題解決型の授業を展開することで、子どもの主体的な学習活動が推進され数学的な考え方が育つのであることを徹底的に理解させるようにした。 問題解決型の授業をするためには、教師の教材研究が大きく影響することや子ども同士が話し合い活動により、よりよい解決を導き出していくための条件になる学級集団づくりの大切さを具体的事例で示すように心がけた。 現場に出る前に、学生にとって十分に理解し切れていなかった「問題解決型の授業」について取り上げ考えさせたことは、教師になったときに思考力・判断力を育てる授業を創造していく上で効果的であったと考える。
2．算数科の授業について実践授業を通した指導	平成17年４月 ～ 平成19年３月	大阪市小学校教育研究会算数部部長として、指導要請を受けた市内の約 30 校の算数の授業改善についての指導を行った。 主に以下の内容を指導した。 ・指導案作成段階での授業者への指導と助言 ・授業参観後の校内全体会の討議会での指導と助言 ・討議会終了後における授業者への個人的な指導方法についてのアドバイス 研究授業実施に当たっては各校が事前にかなり討議を重ねていることが多かったため、ほとんどの学校において授業後の討議会の内容はかなり程度の高いものとなっていた。
3．思考力・判断力・表現力を育てる問題解決型での授業展開のしかたについての指導	平成19年４月 ～ 平成26年３月	近畿大学附属小学校で学力向上を担当する副校長として、全教員に対して毎月の研修会で「問題解決型の授業を取り入れる理由」「問題解決型の授業の基本的な学習段階」「課題の吟味と提示の仕方」「見通しの持たせ方」「筋道立てた解決への取り組ませ方」「よりよい解決に向けての集団での話し合いの場の持たせ方」などを教員の習熟度に合わせて解説を積み上げていった。 また、研修会に合わせて実施する公開授業においては、事前の指導案作成や教材研究の段階から個別に指導に当たり、教員が授業のねらいを十分に把握して実践に臨むことができるようにした。 これまで多くの教員が解説型を中心とした授業展開しかできていなかったが、児童が既習の学習内容を使って主体的に解決活動に取り組む指導が出来るように多くの教員が育ってきたという成果を上げた。

２　作成した教科書、教材		
１.講義用補助教材「算数レクリエーション」【再掲】	平成９年４月 ～ 平成20年３月	大阪教育大学教育学部２部の算数科教育法（４年生、５年生 ６０名クラス）において非常勤講師として担当した授業で使用。主に数学的な考え方を育てる素材の開発に関する講義で、どの学年のどの単元に用いると効果的な学習活動が期待できるかを考えさせた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１．教育長による評価	平成18年３月１日	大阪市教育委員会の学校長に対する教育長評価において、10年以上の校長経験を十二分に生かした充実した学校経営が高く評価され「業績の評価」「能力の評価」の両面において「Ａ」評価、「総合評価」においても「Ａ」評価の結果を得た。
２．大阪教育大学教育学部学生による授業評価アンケート結果における評価	平成19年２月21日	大阪教育大学において実施された受講学生による授業評価アンケートによると、本人が担当の「算数科教育法」は、「受講して良かった」との回答が約90%あり、学生の満足度の高い結果となっている。
３．教育長による評価	平成19年３月５日	大阪市教育委員会の学校長に対する教育長評価において、業績の評価項目の「学校の経営」「人の管理・育成」「地域連携と渉外」および、能力の評価項目の「経営的視点」「課題設定・解決」「組織運営」「危機・安全管理」の項目において「Ａ」評価を得た。特に、「学力の向上」と「評議員の活用などによる外部評価の取り組み」については全市の模範となるとの高い評価を受けた。
４．学長による評価	平成23年３月14日	平成 19 年度から近畿大学附属小学校副校長として附属小学校の授業観及び授業スタイルの見直し、基礎・基本の学力を育成するための指導をめざした教育改革を行った。また、習熟度別学習指導、チームティーチングによる指導、個に応じた指導のあり方などについての現職教育を行った。その結果、全国学力実態調査においても子どもの学力が著しく伸びたことから他の教育関係者や保護者からも高い評価を得るとともに、人事評価においても「Ａ」評価を受けた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１.「学級作りのポイント」「授業作りのポイント」「児童理解のあり方」「板書・発表のさせかたとノート指導」などのテーマで講話	平成11年４月 ～ 平成19年３月	大阪市立日東小学校長として８年間、毎月実施する教員研修会に於いて、「学級作り」や「充実した指導の実践」などをテーマにして全教員対象に講話をし、共通理解を図った上で日々の教育実践に取り組み、大きな成果を得ることが出来た。 また、研修会の内容や学校が進もうとしている方向を「校長室便り」で地域や保護者に発信することにより、学校の取り組みに対する理解が得られ学校運営に対して高い評価を得た。
２.「問題解決学習の進め方」「学級経営のあり方」「机間指導・ノート指導のあり方」「子どもが主体的に学習へ取り組む授業の創造」「幼稚園と小学校の連携を図った指導」などをテーマに講話	平成19年４月 ～ 平成26年３月	近畿大学附属小学校副校長として、また、児童の学力向上と教員の資質向上の責任者として、毎週水曜日に行われる教員研修会において、教師主導の学習指導から児童主体の学習指導への転換を目指した授業創造のため毎回解説を行っている。授業作りの土台ともなる学級作りについても作成したテキストを使用して講話をしたりグループディスカッションを取り入れたりして教員の資質の向上を図り、今では全学級で問題解決型の授業が行われるようになってきている。 平成２２年度の校舎移転で、附属幼稚園と同じキャンパスになったことを機に、附属幼稚園に対して小学校を見据えた幼児期における算数の基礎的指導のあり方について指導助言も続けている。
３.「２００９近畿大学公開講座」における講師 テーマ『算数で育てたい力と指導法』で講演	平成21年 ８月28日	「問題解決型の学習の果たす役割」や「子ども自身が算数を創り出していく学習」について具体例を通して講演した。その中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力の育成の重要性を強調した。

４．新学習指導要領（算数）における実践上の課題で講演	平成 21 年 12 月 25 日	新算数教育研究会主催・第 34 回セミナー(於：箱根・ホテル小涌園、参加者４００名)の全体会において講師として講演。 ・教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨（算数科に特化して） ・見通しを持たせるための指導順序と単元構成の工夫 ・表現力を育てるためのノート指導のあり方と例 全国から主に算数教育に関心を持っていたり先導的立場を担ったりしている教員の集いであるため、教科の内容についてかなり掘り下げた提案になった。しかし、思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨からして重要なことであるとの受け止めを多くの参観者がしていたことが、後の懇親会の話し合いで判断できた
５．「２０１０近畿大学公開講座」における講師テーマ『算数科で育てなければならない力』で講演	平成 22 年 9 月 10 日	学校教育では算数科でどのような力を育てることを重視しているのか、そのための授業をどう展開する必要があるのかについて教科書で扱われている具体的な内容を取り上げて講演した。 また、幼稚園で学んでおくと小学校入学時の算数の学習に効果がある数概念や図形概念形成のための事例についても紹介した。
６．ゆるみ教育からの決別－算数科の指導を例に－で講演	平成 23 年 5 月 23 日	西日本私学連盟主催平成 23 年度研修会(於：近畿大学附属小学校、参加者１００４名）の全体講演会において講師として講演。 ・新学習指導要領で育てたいと目指している学力は、教え込みの解説型の授業からは育たない。問題解決型の授業を展開する必要性を強調。 ・問題解決型の授業をするためには教師のたゆまない教材研究が必要で、余程の強い気持ちで日々の教育活動に取り組まないと実現しないことを強調。 児童数減少を現実の問題として認識している現場の教師や管理職を対象とした話であったため、熱心にメモを取る姿が多く見られ、各校が教育内容の充実で勝負するためにも教師の児童理解と教材研究が重要であることを認識したようにとらえることができた。
７．若手教員の資質向上をねらった研修に活用するため「問題解決学習の基本的な考え方」「学級作りの基本」「地域・保護者との連携のあり方」などを集約し「新任教員のためのハンドブック」を作成	平成 24 年 4 月	毎月行っている教員の研修課員テキストとして使用するため、学級経営に関する事項、いろいろなケースでの子どもに接する際の留意事項、家庭訪問の留意事項、事故が起こった場合の対処の仕方などをＱ＆Ａ形式でまとめた物をＡ４版７４頁にまとめて全教員に配付し、それを学校の基本方針として共通理解を図り実践に取り組んでいる。そのため、保護者からは学校の対応にブレがなくなり統一したものになってきていると高い評価を受けている。
５　その他		
１．第 74 回～第 84 回 算数・数学教育研究発表会での指導での指導	平成 10 年 6 月 ～ 平成 20 年 6 月	大阪数学教育会主催の算数・数学教育研究発表会において、小学校「低・中・高学年分科会」の各分科会のうち１の分科会の指導助言を毎年務める。
２．大阪教育大学附属平野小学校の算数科の研究についての指導	平成 2 年 4 月 ～ 平成 21 年 3 月	大阪教育大学附属小学校の研究推進指導助言者として、授業研究面での指導および教材研究面での指導を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格、免許		
１）小学校教諭一級普通免許	昭和 46 年 4 月	昭和 46 小一普第１６０号（大阪府教育委員会）
２）中学校教諭一級普通免許（数学）	昭和 46 年 4 月	昭和 46 中一普第１２２８号（大阪府教育委員会）
３）高等学校教諭二級普通免許（数学）	昭和 46 年 4 月	昭和 46 高二普第３２８号（大阪府教育委員会）
４）司書教諭	昭和 46 年 1 月	昭和 46 年 12 月 1 日　第４９９５６号（文部省）
２　特許等		
なし		

３　実務の経験を有する者について特記事項		
1.　大阪教育大学（２部） 非常勤講師 （兼職）	平成９年４月 ～ 平成20年３月	大阪教育大学教育学部２部の算数科教育法（４年生、５年生　６０名クラス）において授業担当。 教職をめざしている学生に教育現場の実態と現場に立つときの心構えを算数科の教科指導の面から理解させることをねらった授業である。特に、教師主導の解説型の授業から脱却し、子どもの積極的な算数的活動への取り組みによって課題を解決していく問題解決型の授業への転換を図ることが、思考力・判断力・表現力を育てる学習であることを強調。そして、そのような主体的な学習活動が推進されてはじめて数学的な考え方が育つのであることを理解させるようにした。 そのような授業を展開していくためには、教師の教材研究が大きく影響することや子ども同士が話し合い活動によってよりよい解決を導き出していくための条件になる学級集団づくりの大切さを具体的事例で示していった。 教育現場に出る前に、「問題解決型の授業」について取り上げ考えさせたことは、教材分析をする際の心構えを持たせるという大きなねらいがあった。 特に、小学校低学年の教材分析にあたっては幼児期に数概念や図形概念形成のためにどのような経験をしているかを把握することの大切さと、経験が不十分な場合の対処の方策も具体例で考察させた。
2.　大阪市立日東小学校 校長	平成11年４月 ～ 平成19年３月	赴任５年前から、隣接する病院を移転させその後に学校の敷地を拡張させるという計画があったが、教育委員会と地域との間で手詰まりの状態であったのを解決させることが使命であった。この件に関しても、市会議員、地域有力者、役所間への働きかけを学校側主導のもとに行い、計画を実現させた。 在籍中の８年間、前任校同様に毎月教員研修会を実施し、「学級作りのポイント」「授業作りのポイント」「児童理解のあり方」「教材研究のあり方」「板書の仕方・発表のさせ方」「地域・保護者との連携のあり方」などのテーマで講話をし、教員の資質の向上と児童の学力向上を図った。特に平成16年からは一人ひとりを大切にした学習指導を目指した「習熟度別指導」の実践に取り組み、「児童の実態把握の仕方」「個に応じた指導のあり方」「コースの決定の仕方」等についても研修会で講話し教師の研鑽を深めていった。これらの実践については、全てその内容を「校長だより」として地域・保護者にも発信し学校の取り組みを広報することにより、地域・保護者からの協力を得ることもできた。 また、次の役職にも就き教育環境の整備、教育力向上の面でも貢献した。 ・大阪市校長会「幹事校長」（平成16年度） ・大阪府校長会「理事校長」（平成17・18年度） ・大阪市小学校教育研究会算数部「部長」（同上） ・日本数学教育学会「大阪府代表者」（同上） 算数部部長として、年間約40校の学校へ授業研究の指導にあたった。さらに、平成16年には算数研究発表全国大会、平成18年には近畿算数・数学教育研究発表大阪大会の会場校として全学級において公開授業ができるまでに教員の資質を高めた。

3.　近畿大学附属小学校 副校長	平成19年4月 ～ 平成25年3月	本附属小学校には、「児童の算数の学力向上を達成させること」と「教員の資質を向上させること」が主たる使命としての赴任であった。そこで、まず、教員研修の充実と共に研究・教員組織の改革を提起し、大改革を実施した。 具体的な改革の内容は、「高学年への教科担任制の導入」「第3学年から第6学年までの算数科はチームティーチングで複数の教員によるきめ細かな指導体制の導入」「教員全員が自分の得意な教科を専門教科と位置づけその教科の研修を深める研究体制の導入」などである。 また、毎週水曜日を研究会の日として設定し、その日に研究授業を実施し、後の研究等議会で指導法について討議し指導力の向上を図るようにした。毎回の討議会の残り 30 分では指導法について解説をして、よりよい指導のあり方を全教員に理解させるように努めている。 特に、教え込み教育からの脱却し、問題解決学習の展開での授業へと質の転換を図ってきた。現在では全クラスで問題解決学習の展開での授業が実践されるようになってきている。その成果は、全国学力状況調査における結果で、国語・算数のＡ・Ｂ問題とも全国平均を 10 ポイント以上上まわっていることからも判断することができると考えている。 教職経験８年未満の教員に対しては、別に「若手研修」と名付けて、「学級経営のあり方」「保護者との対応のあり方」「事故の対処の方法」「学級内で起きたトラブルへの対応法」など、具体的な事例を想定して考えさせるなどの研修で解説をしていっている。さらに、これまでの公立学校での校長時代に講話をしてきたことを「新任教員のためのガイドブック」として冊子にまとめ、それをテキストにも活用しながら研修を進めており、若手教員の育成についても成果を上げてきている。
４．近畿大学附属幼稚園教員対象指導講座の講師	平成22年4月 ～ 平成25年3月	平成２２年度の校舎移転で、附属幼稚園と同じキャンパスになったことを機に、附属幼稚園教員に対して小学校を見据えた幼児期の子どもに数概念や図形概念を育てる算数の基礎的指導のあり方について指導助言を継続的に行った。例えば、幼児期の子どもに対する図形の指導では、「さんかく」を提示して袋の中に入っているいろいろな形の厚紙の中から手探りで見つけさせるゲームを通して、図形の構成要素を楽しみながら意識させたり、数概念に関しては、どのカードの裏にシールが貼られているかを当てるゲームで順序数と集合数の違いを意識させたりする指導の具体例を通した演習形式で研修を実施してきている。
５．近畿大学附属小学校・幼稚園教員の指導力向上指導員	平成25年4月 ～ 平成26年3月	平成 25 年 4 月より、近畿大学附属小学校「教員指導員」として、附属小学校・幼稚園の教員に児童・幼児が主体的に学習に取り組む指導のあり方の基礎・基本を模擬授業形式で講話している。特に、児童・幼児の発達の段階を踏まえた集団の生かし方や指導者のはたらきかけについて、具体的な事例を通した研修に取り組んでいる。 また、学級経営のあり方、保護者との対応のあり方、事故の対処の方法、学級内で起きたトラブルへの対応法など、教科指導の他にも日々の教育活動において心がけなければならないことについても適宜指導助言を行っている。

６．奈良学園大学人間教育学部 准教授	平成26年４月 ～ 現在に至る	「数の理解」の授業では、小学校算数科で扱う教育内容の背景や関連内容を中心に扱う。数量や図形などの基本的な概念や基礎的な知識に対する理解を深めるとともに、算数のよさを知り、数学的思考力や判断力、表現力を養う授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように、具体的な活動を入れながら考察していく。そして、数学的に見通しをもって算数を指導する力量を育成すること、子どもたちの数学的思考力を涵養する力量と算数科の教材を開発する力量を育成することの３つを主なねらいとして授業を進めている。 「基礎ゼミナールⅠ」の授業では、学生の自己表現力の育成に加えリメディアル教育を分担し、学生個々の習熟度に応じたテキスト作りと、その解説を作成している。
４　その他		
１）大阪市学力向上プロジェクトの算数科推進委員	平成17年４月 ～ 平成19年３月	大阪市の児童の学力向上をめざし、教員の資質向上と学校教育現場の教育実践の取り組みの改善を「算数」の教科について、実態把握と改善策の立案、現場指導の役割を担った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書)				
1.活用力を育てる！算数授業プラン&ワークシート	共著	平成21年4月	明治図書	低・中・高学年編の３冊で構成され、４つの活用力を育てるワークシートやすぐに役立つ展開例を提案。 Ｂ５版　全１３６頁（３冊） 編者：金本良道 共著者：一ノ瀬喜子、吉田博、岩崎浩、笠置道宏、赤沢マキ、金山憲正、松岡克典、岸田初美、森洋子、中井美貴子、森本明、野津吉宏、植村徳治、谷口孝臣　　他３０名 本人担当部分：低学年編では第１学年「大きい数」(P42～P45）のうち「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 中学年編では第３学年「重さ」第４学年「分数」(P84～P87）の事例について、また、高学年編では第６学年「立体の体積」(P108～P111）の事例について「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 「大きい数」では、具体物を数えた個数を「何十といくつ」と表したことから類推して、100をこえる数の場合も「百といくつ」と表すことができることを理解させ、数の仕組みと表現のよさに気づかせる指導を提案。 「重さ」では、長さ、体積、重さの単位について振り返り、それぞれに共通する関係や類似性を見いだし、見いだした関係や類似性を基にして、新たな単位を予想する活動を取り入れた指導について提案。 「分数」では、和が１より大きくなる同分母分数の加法の計算の仕方を図や数直線を用いたり、単位の考えを基にしたりして考える活動を取り入れた指導について提案。 「立体の体積」では図形の面積の求め方で学習した形を変えたり、図形の半分と見たりといった知識、技能や考え方を用いて、角柱や円柱の体積の求め方を情報機器を用いて説明する活動を取り入れた指導について提案。
2.「小学算数」 (教師用指導書研究編)	共著	平成23年4月	日本文教出版	全学年を通した体系に重点を置いて、各領域別の系統的な解説とその数学的背景を明らかにするとともに、新しい指導方法、数学的考え方とその指導、教育機器など現在の算数教育における主要な問題点について示す。 Ａ４判　全２８６頁 編者：日本文教出版社編集部 共著者：小山正孝、中原忠男、金山憲正、重松敬一、﨑谷真也、狭間節子 本人担当部分：「総論」(P2～P12）を単著 「確かな学力の向上を目指した算数科の学習指導」の章では、算数の学習指導の基本的な考え方として、「基礎的・基本的　な知識・技能の習得と活用」「思考力・表現力の育」「学ぶ意欲」について述べている。また、続いての「確かな学力が身につく算数の学習指導」の章では「問題解決型学習の意義」「算数の学び方の指導」「表現力の育成」「学習意欲の向上」「学習環境の整備」など新学習指

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				導」の章では「問題解決型学習の意義」「算数の学び方の指導」「表現力の育成」「学習意欲の向上」「学習環境の整備」など新学習指導要領のねらっている学力の育成について述べている。 　また、小学校低学年の指導に於いては、幼児期に経験した概念形成の過程を踏まえて指導に当たることが不可欠なため、幼小の連携を図ることの必要性を述べるとともに、幼児期の児童の発達段階に即した指導形態についても解説している。
３.教育フォーラム 50 「やる気」を引き出す・「やる気」を育てる	共著	平成24年8月	金子書房	教師が子どもの「やる気」を引き出し、育てるための方策を、国語・算数・体育・総合的な学習の時間などとの教科の関わり、教材・校内研究の取り組みなどを考察、提案する。大前提となる教師自身の「やる気」についても論じる。 　Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、勝見健史、久田孝、錦織彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村哲、瀧明知惠子、浅田匡 本人担当部分：「子どもの〈やる気〉が出る算数授業のために」（P47～P57）を単著 　知識及び技能の定着を確かなものにしたり思考力・判断力などの能力を育成したりする際の大前提となる主体的な学習活動は子どもの「やる気」が推進力となって推進されるものである。「やる気」が学習活動を充実させ、充実した学習活動は考えることの楽しさや数理的に処理することのよさに気づかせる。そして、これが次の学習に向かって意欲的に取り組もうとする学習態度になって現れてくる。この「やる気」をどうすれば引き出すことができるのかを具体的な実践事例を通して紹介。 幼稚園卒園から間もない低学年の初期に於いては生活に根ざした活動や遊びの中から問題に出会い楽しみながら解決するような学習形態での指導が発達段階に即している。そのことを集合数と順序数の概念や違いについて遊びを通して認識させる「なんばんめ」の実践事例で紹介するとともに、幼児の数概念を育てる上での着眼点や留意点を解説。 　さらに、個が認められる集団作りが「やる気」を育てる上で重要な役割を果たすことと、その集団作りのポイントについても紹介。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.算数指導のポイント	単著	平成25年1月	株式会社ＥＲＰ	算数的活動を重視した学習展開がなぜ求められているのかを学校教育法及び学習指導要領の改訂のねらいを踏まえて述べてある。 教師主導の指導から、児童の主体的な解決活動が中心となる学習へと授業の質の転換が求められていることを強調している。 また、実際の学習場面で取り入れられる算数的活動の具体例を挙げて紹介すると共に、それぞれの活動のねらいと指導する際のポイントと留意点を解説している。なかでも、身体を使った具体的な操作活動が主となる低学年の算数的活動は幼児期の経験が大きく影響するので、幼稚園での学習との関連づけの着眼点と不十分な場合の補充指導についても解説している。 さらに、情報機器を用いたプレゼンテーションやアニメーションと算数的活動を結びつける効果的な指導についても紹介している。 Ａ５版　全６８頁
５.教育フォーラム 54 各教科の学習を支える言語活動－言葉の力をどう用いるか	共著	平成26年8月	金子書房	新しい学習指導要領で強調されている「知的な力」、「確かな学力」を育てていく土台となる「言葉の力」をどう捉え、どうのように用いていくことが各教科の学習の充実につながるのかを考察し提案する。「言葉の力」はコミュニケーションの力であるが、それ以前に、認識の力、思考の力、判断の力であることについて論じている。 Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、金澤孝夫、阿部秀高、桜本明美、大畑健実、川俣徹、蔵あすか、 本人担当部分：「算数の授業に言語活動を生かす」（P47～P57）を単著 算数科における言語活動とはどのような活動のことなのかを最初に明らかにしていくことから論を進めている。そこで、算数の言語は言葉以外にも、数、式、図、表、グラフといったものも含まれるので、それらを使って考えたり説明したり伝え合ったりする活動を算数での言語活動と捉えた。思考力・判断力・表現力等を育成するためには、算数の言語活動をどのように取り入れて授業展開することが大切なのかを実践を通した具体的例を示して提案している。
６.人間教育を視点にした教職入門 第６章 教員の仕事	共著	平成26年12月		激動する社会、急変する教育界の中で、次世代の社会を担い、自律して問題解決能力を持つ子どもを育てることのできる資質・能力を身につけ、地球的視野から持続可能な社会の発展と構築に貢献する教師の心構え、あり方などについて、人間教育を視点にして述べている。 Ａ５判　全２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩、鎌田首次郎、松田智子、中田律子、金山憲正、瀧明知恵子、長井勘治、太田雄久

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「小学校教員の仕事」（P110～P120）を単著 「生きる力」を育てることを目指して各学校が掲げている教育目標達成に向けて教師が努力していかなければならないことを、「教科等の指導に関わる仕事」「生活指導の関わる仕事」「校務分掌として位置づけられた仕事」のそれぞれについて、具体的な事例を交えて解説している。教師一人ひとりが自分の役割を自覚し、学校が組織として機能するよう心がける必要があることを説いている。
7．人間教育を視点にした教職入門 第９章 教育実習の意義と心得	共著	平成26年12月	大学教育出版	激動する社会、急変する教育界の中で、次世代の社会を担い、自律して問題解決能力を持つ子どもを育てることのできる資質・能力を身につけ、地球的視野から持続可能な社会の発展と構築に貢献する教師の心構え、あり方などについて、人間教育を視点にして述べている。 Ａ５判　全２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩、鎌田首次郎、松田智子、中田律子、金山憲正、瀧明知恵子、長井勘治、太田雄久、 本人担当部分：「教育実習の意義と心得」（P235～P253）を単著 教育実習は、教師として教壇に立っときの心構えや必要となる指導技術などについて体験を通して学ぶ貴重な機会になることを事例を挙げて解説している。また、教育実習での経験は、将来の教師として自己のあり方を厳しく問い、教職に向けての真剣な学びを始める契機となるので、教育実習への参加には、日常の講義に出席する際の心構えとは全く異なる性質の決意が求められることの理解を図ることをねらって説いている。
（学術論文）				
１．領域の内容・習熟の程度に応じた指導の工夫	単著	平成18年2月	大阪市小学校教育研究会算数部　平成17年度　研究紀要　P1～P16	「習熟度」というものを、あくまでも学習のある時点で、ある事柄が分かっているか、できているかという学習の達成度、到達度を問題にするのであると捉えた。現時点で、達成度、到達度が低くても補充指導によって到達する可能性があるという立場での指導のあり方を提起した。「習熟度別指導における学習の進め方の工夫」「コース設定とコースに応じた学習の展開」「補充的な学習や発展的な学習の効果的な生かし方」「効果的な情報機器の用い方」「習熟度別指導における評価」「子どもの実態把握と年間指導計画の作成」「保護者への説明」などについて提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２.学力調査結果を授業改善に生かす取り組み	単著	平成18年6月	「日本数学教育学会誌」第８８巻第6号 P22～P28	的確な評価は、一人ひとりの児童に対して学習状況や進歩の度合いを明確に示したり、つまずきに対する適切な指助言を可能にしたりする。評価と指導を表裏一体とすることにより、児童の学力向上を確実なものにすることが期待できる。そのためには的確な学力調査で実態を正しくとらえる必要がある.この的確な学力調査のあり方を問題作成では「出題問題の検討」「観点別評価項目の設定」「予備調査の実施と問題修正」と、結果処理の流れ及び実施結果の活用法について提案。
３.考える力・表現する力を育てる算数科の指導	単著	平成19年2月	大阪市小学校教育研究会算数部　平成18年度　研究紀要 P1～P16	「考える力・表現する力」を既習の知識、技能、数学的な考え方や問題解決の学び方を駆使して自分の考えを持ち、簡潔・明瞭・的確に表したり、説明したりする力と捉え、この力を育成するための指導のあり方を提起した。「単元全体が連続した探究活動となるような指導計画の作成」「個に応じた指導方法の改善」「評価を生かした指導の工夫」を中心にした授業改善について提案。 また、小学校低学年では、幼児時代に数や図形についての概念をどのように身に付けてきたのかを見極めた上での指導が必要であるため、幼稚園における学習活動を紹介し、それを踏まえた低学年らしさを生かした指導方法を提案。
４.活用を重視した算数科の授業	単著	平成23年5月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.18 P12～P15	活用する力は問題解決活動そのものにおいて主役の役割を演じているので、問題解決の過程こそ思考力を鍛錬する絶好の場となることを強調。また、練り上げの段階は、得られた結果をも含めて、一人ひとりの解決について友達と討論したり、伝え合ったりすることになり、言語活動のためのよい場面であることも強調。さらに、その活動を支える基盤となる信頼関係で結ばれた学級集団作りについても紹介。 今回の学習指導要領の改訂を機に、思考力・判断力・表現力の育成をめざして、「活用」を重視した問題解決型の授業の充実に本腰を入れて取り組むことを提案。 さらに、基礎的・基本的事項の確実な定着はそれらの事項を機会あるごとに活用することによってより効果的に達成されることを例示し、日々の問題解決学習における活用を重視した指導の必要性を強調。
５.思考力アップのための算数的活動のポイント	単著	平成25年4月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.9 P22～P25	平成23年度から完全実施されている学習指導要領で重点を置いて取り上げられている「算数的活動」について、重点が置かれた背景と実践に取り組む際の留意事項を具体的な例を通して紹介。特に、「学習課題や問題提示の仕方の工夫」「よりよい考えに高めるための工夫」「解決した活動が次の新たな活動へと発展するように工夫」の３つはどの事例にも共通するものとして提案。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				具体的な事例として、第 3 学年の「小数のたし算・ひき算」で小数の計算の意味や計算の仕方を、具体物を用いたり、言葉、式、図などを用いたりして考え説明する活動について提案。また、「三角形と角」で二等辺三角形や正三角形を定規とコンパスを用いて作図する活動について提案。
６.思考力アップのための算数的活動のポイント(2)	単著	平成25年5月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.10 P12～P15	数量や図形の意味を実感を持ってとらえたり、思考力、判断力、表現力等を高めたりできるようにするとともに、算数を学ぶことの楽しさやよさを実感できるような指導を創造するための算数的活動の生かし方を提案。 具体的な事例として、第 4 学年の「面積」で、長方形を組み合わせた図形の面積の求め方を、具体物を用いたり、式、図などを用いたりして考え説明する活動について提案。一見複雑に見える図形の面積でも、分割したり、一部を移動させたり等と工夫することにより、正方形や長方形の面積の公式を活用して求められるようになることを実感させるためのポイントを解説。また、「四角形」で、平行四辺形、ひし形、台形で平面を敷き詰めて、台形の性質を調べる活動を紹介。平行四辺形やひし形を敷き詰めた図形の中に他の図形を認めたり平行線の性質に気づかせたりする活動を通して、図形の見方や感覚を豊かにすることをねらった指導のポイントを解説。
７.算数嫌いをつくらない授業	単著	平成25年11月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.26 P9～P13	子どもは算数の内容や考え方などを人に教えられることより、自分で考えたり見つけたりすることの方が好きである。そのような子どもに充実感や達成感を抱かせようとすれば、教師が教科書の内容を一方的に説明し、その後に少しばかりの練習問題を課すといった解説型の授業スタイルから脱却する必要があることを強調。主体的な学習活動を生み出すためには、授業スタイルを解説型から問題解決型へと転換を図ることの必要性を強調。
８.思考力・判断力・表現力を育成する算数授業 －算数的活動を支える教材研究－	単著	平成26年9月	奈良学園大学研究紀要 第１集 ｐ37～ｐ46	思考力・判断力・表現力を育成するには主体的な問題解決活動を中心に授業を組み立てることが前提であり、指導者としては、子供が既習の知識・技能・考え方などを工夫して活用できるように指導の流れを筋の通ったものにする必要がある。１時間の授業展開はもちろん、単元全体を見通すと共に単元間のつながりを考慮した指導計画を作成するための教材研究について、第６学年「円の面積」を例に取り上げ、算数的活動が主体的に展開するような単元構成の工夫について論じる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９.思考力を養う操作活動	単著	平成26年10月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　特集号 P34～P37	既存の知識を教えそれを覚えさせる学習からは事物･事象に積極的にはたらきかけ、考えたりそれを表現したりしようとする子どもが育つことは期待できない。考える楽しさや工夫することのよさを授業において味わわせることが、主体的に問題解決に取り組む子どもを育てることになる。 第２学年の単元「1000 までの数」において、十進位取り記数法の原理、また、第 3,5 学年の図形の定義･性質の理解を深める指導のねらいとポイントについて解説している。
(その他)				
「依頼原稿」 １.授業中における事態に対応するには （算数）【シリーズ】	単著	平成21年4月 ～ 平成22年3月	日本文教出版	教育情報誌「ＲＯＯＴ」第１巻～第４巻 教育現場で算数の授業中に遭遇する事態にどのように対処すればよいのか、その対処法を具体例で提示。「見通しが持てない子どもにはどのようすればよいか」「早く解決できて時間があまっている子どもにはどうすればよいか」などの内容。特に、経験の浅い教師がこの原稿を参考にして適切に対応することにより一人ひとりの児童が充実した学習活動に取り組んでいけることを願っての提案。 また、話し合い活動を通して各自が考えた解決方法をよりよいものに練り上げていくための学習集団をどのように育てていけば良いのかについても提案。 さらに、幼児期における学習および生活経験が十分でないことが原因と考えられる第１学年の数概念や図形概念の理解に関する学習内容におけるつまずきに対する予防と補充指導についても例示。
「教材作成」 １.分数のかけ算・わり算の計算の仕方の説明教具	単独	平成18年10月	近畿算数･数学研究大会 公開授業	第６学年の単元「分数のかけ算」「分数のわり算」で使用する情報機器を活用した教具である。動画作成ソフトとグラフィックソフトで整数×分数と整数÷分数の計算の方法をアニメーション化し、それをパワーポイントで提示することにより、考えられる色々な計算方法の原理の理解を深めることをねらい作成。
２.等積変形の説明教具	単独	平成21年12月	新算数教育研究会	第５学年の単元「図形の面積」の指導において、三角形は底辺と高さが同じであればどのような形の三角形であっても面積も同じであることを理解させるための教具である。子どもにとって高さにあたる頂点が底辺の外に出ている三角形の面積についての理解に抵抗が見られる傾向にある。そのため、少しずつ長さが短くなっていく細い線を何本も積み重ねて三角形を作り、アニメーションでその 1 本ずつを移動させ底辺も高さも同じ三角形に変形していくことにより、底辺と高さが同じであれば面積も同じであることを理解させるとう情報機器を活用した教具となっている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３.円の面積の求め方の説明教具	単独	平成23年5月	西日本地区私学連盟研究大会	第６学年「円の面積」の単元で使用する教具である。円の中心を通る直線で等分し、それを等積変形して平行四辺形や三角形にすることを実際に紙にかいたものを用いて操作させたり示したりすることは困難なことである。そこで、グラフィックソフトを用いて円を 32 等分したり 64 等分したりして作成したおうぎ形をアニメーションで平行四辺形や三角形に等積変形して示すことにより、円の求積公式である半径×半径×円周率の理解を確かなものにすることをねらって作成した。
４.計算の習熟を図るプリント作成ソフト	単独	平成23年5月	西日本地区私学連盟研究大会	第 1 学年から第６学年までの計算領域で扱われる全ての計算について任意に入力した数値を用いて計算問題の式が作成できるソフトである。数範囲は整数・小数・分数の全て、また、演算も単純な四則はもちろんあまりのあるわり算や商を四捨五入で処理する問題や解答も数値の入力で自動作成されるようにしてある。作成にあたってはエクセルの関数を用いているので一般的に何処ででも活用することが可能な自作ソフトである。
５.「活用力」育成のためのデジタル教材	共同	平成25年6月	株式会社 ｅ教育研究社	第１学年～第６学年の算数の全単元について、学習指導要領に示された「活用力」育成のための指導用メディアミックス型デジタル教材を作成。授業プリントとデジタル教材コンテンツを合わせて利用することによりPISA型学力を育てることをねらいとした教材である。 教授資料はＢ５判全２６７頁 編者：梶田叡一 共著者：加藤明、金山憲正、中島繁雄、松浦武人 本人担当部分：第５学年・第６学年の「活用問題」「実践問題」「発展問題」(P118～p267)の 95 教材を単著。各単元に対応したデジタルコンテンツを作成。 活用問題では「読解力」を重視した内容を扱い、ヒントや解き方はオンマウスでポップアップするようにしてあるため、ICT 教育でも活用が図れるよう工夫してある。
「学会発表」 １.新学習指導要領(算数)における実践上の課題	―	平成21年12月	新算数教育研究会 第 34 回セミナー （於：箱根・ ホテル小涌園）	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた算数科学習指導の要点を提案。活用を重視する指導では指導内容の関連を明らかにし、既習のどの内容が発展するのかを捉えて単元構成することの重要性を「円の面積」の事例で発表。また、表現力を育成するための「ノート指導」のあり方を「分数のわり算」の実践を取り上げて紹介。以上の事例をもとに、思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた指導のあり方を発表。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.算数科における問題解決学習の充実	－	平成23年5月	第53回西日本地区私学連盟研究大会（近畿大学附属小学校）	新学習指導要領で育てたいと目指している学力は、教え込みの解説型の授業からは育たないとの理由で問題解決型の授業を展開する必要性を強調すると共に、問題解決型の授業をするためには教師のたゆまない教材研究が必要で、余程の強い気持ちで日々の教育活動に取り組まないと実現しないことを提案。 　また、併設の幼稚園がある小学校が多いので、幼児期においての数概念や図形概念の理解に関する指導がどのように行われることが小学校における算数学習の充実に結びつくのかを、小学校の「数あてゲーム」や「なんばんめ」「おはなしづくり（たしざん・ひきざん）」を例にして解説。 　その他の具体的な例として、「円の面積」を指導する際、その求め方の手がかりとなる既習事項が現行の教科書の展開では見あたらないことになるので、単元構成を工夫し、第5学年の「図形の面積」と第6学年の「円の面積」の間に「正多角形の面積」の指導を導入した指導展開例を発表。
3.時代のニーズに応えた学校運営	－	平成24年4月	平成24年度近畿大学附属関係校研究大会（近畿大学）	組織面については、小学校高学年における教科担任制、一年担任制、習熟度別学習態勢の導入、及び、各教員への研究教科の割り振りなど、基礎・基本の確実な定着を目指ための学校の取り組むべき方向と方策を提案。 　また、小学校教育と幼稚園教育の関連を図り、より充実した小学校教育の創造を目指す幼・小連携の需要性と必要性を強調。 教育内容面では、日々の教育実践において、「問題解決学習の進め方」「学級経営のあり方」「机間指導・ノート指導のあり方」「子どもが主体的に学習へ取り組む授業の創造」など、思考力・判断力・表現力を育てるための教育をどう実践していくべきかを提案。
4．算数的活動を取り入れた指導	－	平成25年10月	「人間教育研究協議会」平成25年度定例会	思考力を高めるための授業作りに欠かすことのできない算数的活動について、重視される理由・取り入れるために必要となる教材研究・展開の方法などを具体的な実践例と結びつけての発表内容である。 　第1学年「じゅんばん」、第4学年「わり算の筆算」、第5学年「図形の面積」を具体的な例として取り上げ、どのような操作をどのような目的でどの段階で取り入れるかを、実際に例示して発表した。 算数的活動とはどのようなものであるのかが理解できたという声を多くの参加者から聞くことが出来た。
5．教材研究をする際に知っておかなければならない「算数のことば・用語」	－	平成25年12月	教師力向上研究会（第4回総会）	算数指導に当たって指導者が「算数のことば・用語」をしっかりと理解しておかなければ十分な教材研究をすることができないということを伝えることをねらいに発表。 第1学年で式を最初に導入する際に、センテンス型とフレーズ型の区別を意識させておく必要性や第4学年のあまりのあるわり算では、等分除と包含除のいずれの問題場面で導入することが適切であるのかなど、教材研究と算数の用語の理解は切り離して考えることができないことを強調。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				参加者からは具体的な例での説明で算数用語の大切さを痛感したとの感想が多く、発表の役目を果たしたと考えている。
６．算数的活動を取り入れた指導のポイント	－	平成26年2月	「人間教育研究協議会」フォーラム in 大阪	学習指導要領で算数的活動が重視されている理由に基づいて、算数的活動を取り入れた授業を実施する際のポイントについて発表。 算数的活動というものが単に作業的活動や体験的活動を意味しているのではなく、思考活動が伴わなければ価値がないことを、具体的な例を通して発表した。第１学年の「ひきざん」では、減加法と減減法の考え方をブロックの操作を通して理解させるポイント、第６学年「分数のわり算」では既習の小数のわり算と結びつけて考えさせたり数直線を用いて考えさせたりする際の指導のポイントを発表した。 参加者からは、目的を持って操作をさせることの重要性と思考活動が算数的活動の中心になることが再認識できたので、自分が指導する際には今日の話を参考に教材研究をしたいとの声をもらった。
７．算数の授業で言語活動を充実させる	－	平成26年6月	教師力向上研究会例会	何のために言語活動を充実させるのかを明確に捉えた上で実践に取り組まなければ十分な成果が期待できないため、まず教科の目標を実現する手立てとして言語活動を充実させるのであることを大前提に発表をした。 特に、算数の言葉と言われている式について、「式に表す活動」「式をよむ活動」の具体例を取り上げ、抽象化の過程や一般化の過程をどのように構成していくことが言語活動を充実させることになるのか、その指導のポイントについての発表をおこなった。
８．思考力・判断力・表現力を育てる分数指導 －分数のわり算を中心に－	－	平成26年8月	教師力向上研究会 サマーセミナー	思考力・判断力・表現力を育てるには問題解決型での指導が望ましい。そして、問題解決型の指導では既習の学習内容と関連づけることが求められる。しかし、関連づける既習の学習内容が本時の解決に結びつく内容でなければ逆に子どもを混乱させることになる。 既習内容の中からどの内容を想起させるのか、想起させるためにはどのような手立てが必要なのかなどについて、「分数のわり算」を取り上げて発表した。特に、教材分析の重要性と指導内容の関連を明確にすることの重要性を強調。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　土 谷　長 子

研究分野	研究内容のキーワード
教育学・社会学・生活科学	教育学・特別支援教育・社会福祉学・生活科学一般

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ・ビデオ教材の活用	平成18年4月～平成26年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の准教授として担当した「乳児保育Ⅰ」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、市販の「乳児保育の実際」のビデオを用い、保育所における乳児保育の実際を視聴しながら保育の内容を理解することができるよう、各トピックについて解説をしながら学生自身が書きこめるレジメを用意し、授業を行っている。学生自身がさまざまな乳児の様子や保育の実際を映像で見るとともに、それぞれの項目についての知識を幅広く獲得するのに効果をあげている。
・児童文化研究におけるビデオの活用	平成18年4月～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当した「乳児保育Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、選択1単位）において、学生たちが制作した手づくりの乳児用おもちゃを保育所乳児に提供し、その遊んでいる様子をビデオで撮影、授業の資料としている。学生自身が作ったおもちゃがどのように乳児の遊びにかかわっているかを見ることによって、さらに自分たちでおもちゃや遊び方の工夫をする参考となり、実習や現場での実践に直接役立つ効果が上がっている。
・教材研究を活用した指導計画の指導	平成18年4月～平成23年3月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当した「保育実習事前事後指導」（専門科目、1年次、半期、選択2単位）において、保育内容を提示して、それに基づき教材研究を行ったうえで、保育計画を立てていく演習を行った。全員が同じ保育内容に取り組むことで、それぞれの工夫が共有でき、教材研究を行う際に注意すべきことや、そのうえで保育計画を立てることの重要性を具体的に身に着けることが出来たという点で効果が上がった。
・ビデオ教材の活用	平成26年4月～現在に至る	関西国際大学で担当している「乳児保育Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、市販の「乳児保育の実際」のビデオを用い、保育所における乳児保育の実際を視聴しながら保育の内容を理解することができるよう、各トピックについて解説をしながら学生自身が書きこめるレジメを用意し、授業を行っている。学生自身がさまざまな乳児の様子や保育の実際を映像で見るとともに、それぞれの項目についての知識を幅広く獲得するのに効果をあげている。
・児童文化研究におけるビデオの活用	平成26年4月～現在に至る	関西国際大学で担当している「乳児保育Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、学生たちが制作した手づくりの乳児用おもちゃを保育所乳児に提供し、その遊んでいる様子をビデオで撮影、授業の資料としている。学生自身が作ったおもちゃがどのように乳児の遊びにかかわっているかを見ることによって、さらに自分たちでおもちゃや遊び方の工夫をする参考となり、実習や現場での実践に直接役立つ効果が上がっている。

２　作成した教科書，教材 ①　「わかりやすい仏教保育総論」（チャイルド社）（社）日本仏教保育協会編（再掲）	平成18年４月～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科の准教授として担当する「特別保育」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、宗教保育についての講義を行う際、仏教行事の意味や意義について知ることができるため、仏教保育のイメージを獲得するのに効果的である。
②「子どもと保護者への効果的な「声かけ・応答」」（金芳堂）横井一之・吉弘淳一編集　（再掲）	平成20年9月～平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当する「総合演習」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用した。実践活動として子育て広場参加のボランティア活動を取り入れていたが、その事前のガイダンスの中で、乳児に対する言葉かけの大切さや具体的な語りかけの在り方について、このテキストを用いて指導を行ったところ、実践の場で効果的に生かすことができた。
③「新　乳児保育への招待」（北大路書房）髙内正子編集（再掲）	平成21年4月～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科准教授として担当する「乳児保育Ｉ」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において使用している。とくに妊娠期から出産に至る経過、乳児に関わる行事や乳児保育の歴史的背景、保育所保育指針における乳児保育について、このテキストを中心に紹介し学ばせることで、乳児についての興味関心を高め、乳児保育の実践について身近に学ぶ意欲を高める効果が上がっている。
④「新　乳児保育への招待」（北大路書房）髙内正子編集（再掲）	平成26年4月～現在に至る	関西国際大学で担当する「乳児保育Ｉ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において使用している。とくに妊娠期から出産に至る経過、乳児に関わる行事や乳児保育の歴史的背景、保育所保育指針における乳児保育について、このテキストを中心に紹介し学ばせることで、乳児についての興味関心を高め、乳児保育の実践について身近に学ぶ意欲を高める効果が上がっている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ・学内自己点検評価における認定	平成23年度	京都光華女子大学短期大学部学内自己点検評価において優良（優秀・優良・相応・要努力・要改善の5段階）の評価として認定をされる。授業担当コマ数が20コマを超えながら、担当授業において、学生の習熟度をみながら進度を調整したり、教材を工夫するなど理解が深まるようにしたこと、また演習科目については、各科目での学習内容を確認しながら保育現場で直接役立つような学習ができるようにしたこと、実習科目については、学外実習等において学生との連絡調整を密にしていったことが評価された。

・授業アンケートによる評価	平成18年度～平成25年3月まで	京都光華女子大学短期大学部の学生授業アンケートにおいては、平均4.3以上の評価を得ている。24年度前期評価においては平均が4.56（短期大学部全体平均4.26）であった。学生のレベルに合った授業内容を心掛けており、学生の自由記述からは「わかりやすい」「役に立った」「興味を惹かれる内容だった」などの評価を得ている。
・大学設置・学校法人審議会における教員組織審査	平成17年8月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、京都光華女子大学短期大学部こども保育学科専任助教授「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」「特別保育」「保育実践演習」「保育所実習Ⅰ」「施設実習Ⅰ」「保育実習事前事後指導」「保育所実習Ⅱ」「施設実習Ⅱ」「総合演習」「教育実習事前事後指導」「教育実習（観察実習）」「教育実習（実践実習）」「障害児保育Ⅱ」「保育内容総論」「保育内容Ⅱ（人間関係とコミュニケーション）」「基礎演習」の資格ありと判定。
・大学設置・学校法人審議会における教員組織審査	平成25年7月	大学設置･学校法人審議会の教員組織審査において奈良学園大学 人間教育学部 准教授として「幼児理解」「保育課程総論」「子どもと健康」「子どもと人間関係」「教育実習事前事後指導（幼）」「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教職実践演習（幼・小）」「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」担当可と判定
・大学設置・学校法人審議会における教員組織審査	平成26年2月	中央教育審議会の課程認定委員会における教員審査において奈良学園大学人間教育学部准教授として「幼児理解」「保育課程総論」「子どもと健康」「子どもと人間関係」「教育実習事前事後指導（幼）」「教育実習Ⅰ（幼）」「教育実習Ⅱ（幼）」「教職実践演習（幼・小）」担当可と判定
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
保育所内研修講師	平成18年4月～平成22年3月	高槻市内の法人保育所内の研修において、法人内研修の在り方を模索し、研修の企画運営に対して助言を行ってきた。
京都市中京区「子どもの虐待未然防止」研修会講師	平成23年3月	京都市中京区社会福祉協議会・中京区民生児童委員会・中京区子育て支援ネットワーク主催の「子どもの虐待未然防止」研修会において講師を担当。地域でできる児童虐待の予防・早期発見・早期対応等の啓発を目的とする講演を行った。
京都市右京区子ども支援センター子育て支援ステーション会議講師	平成23年9月	京都市右京区子ども支援センター主催の子育て支援ステーション担当者会議において、地域の子育て支援に対するの各ステーションの取り組みについての研修コーディネーターとして参加し、助言を行った。
和歌山県御坊市要保護児童対策地域協議会講演会講師	平成24年11月	御坊市要保護児童対策地域協議会対象者における、地域の虐待未然防止に関する講演会で講師を務め、地域の虐待防止についての提言を行った。
５　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
保母資格	昭和57年3月	第九七九
幼稚園教諭一級普通免許状	昭和57年3月	昭和五六幼一普第三八一号
社会福祉士資格	平成5年5月	資格登録（第02175号）
幼稚園教諭専修免許状	平成9年3月	平八幼専第一三号
修士（教育学）	平成9年3月	聖和大学　第142号 論文題目：インスリン依存型糖尿病児の自己像－描画法を用いて－
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
４　その他		
教務委員会委員	平成18年4月～ 平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部教務委員として、学科立ち上げ時の教務担当として役割を担った。
FD・自己点検委員会委員	平成18年4月～ 平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部FD・自己点検委員として、学内教員評価やFD活動の在り方検討に協力するとともに、平成20年度に行われた短期大学基準協会による認証評価に際し、手続等の業務の一端を担った。
短期大学基準協会第三者評価ALO（連絡調整責任者）	平成20年4月～ 平成22年3月	京都光華女子大学短期大学部が短期大学基準協会による第三者評価を受けるにあたって、その連絡調整責任者として、大学と短期大学基準協会並びに審査者との連絡調整の役割を担った。
生活委員会委員長	平成22年4月～ 平成25年3月	京都光華女子大学短期大学部生活委員委員長として、学生生活における諸問題の整理や学校行事等についての検討を取りまとめた。また寮務委員も兼務している。
教務委員会委員	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部教務委員として、学部立ち上げ時の教務担当として役割を担っている。また保育士資格取得希望者へ向けて、奈良文化女子短期大学の科目等履修に関して準備を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　実習に役立つ表現遊び	共著	平成17年4月	北大路書房	実習生や新人の保育者が保育に取り入れやすい表現遊びを取り上げ、一部には指導案や型紙をつけるなど、すぐに役立つ副教材として使用できるものとした。 （B5版　全96ページ） 岡本拡子編著 岡本拡子・居原田洋子・小寺玲音・瀧川光治・土谷長子・野﨑之暢・野﨑美香子 本人担当箇所：「第1章つくって遊ぼう　4起き上がりこぼし・9糸電話　第3章自然と遊ぼう　3砂粒の中の宝探し（いずれも指導案を含む）」 （pp. 9-10, pp. 19-20, pp. 45-46, p. 79, p. 84, p. 89）を単著
2　乳児保育への招待：胎児期から２歳まで	共著	平成17年4月	北大路書房	これまでの乳児保育テキストの内容にくわえ、特に胎生期からの発達や乳児保育の歴史についてより詳しく取り上げた。命の大切さを理解し、乳児に対するより深い理解をめざしたテキストである。 （A5版　全220ページ） 高内正子編集 高内正子・河野利津子・水谷孝子・岡田るみ子・新治玲子・土谷長子・菱谷信子・橋本真紀 本人担当箇所：「第7章　保育所保育指針における乳児保育」（pp. 122 － 133）を単著 保育所保育指針に示された乳児保育の取扱いについて、指針にしたがって示した。
3　やさしく学べる　保育実践ポートフォリオ	共著	平成17年6月	ミネルヴァ書房	幼稚園や保育所での実習において求められる記録を取る力や、指導案を作成する力を効果的に身につけることを目的としたテキストである。 （B5版　全167ページ） 植原邦子編著 吉村啓子・土谷長子・井上真美子・森久佳 添田久美子編集協力 本人担当箇所「第2章　観察記録をとろう」（pp. 40-69）「第4章　実践しよう　1　作って遊ぶ（魚釣りあそび）」（pp. 130-146）を単著 第2章においては観察記録の取り方について基本から学習し、どのように表現したらいいのかについて、実際にワークすることによって力を養うことができるようにした。また第4章－1においては、学生が実際に指導案を作って保育実践をするというシミュレーションのもと、どのような指導案や準備が必要であるのか気づくことができる内容とした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　保育を学ぶ人のために	共著	平成18年4月	世界思想社	保育を学ぶ学生はさまざまな領域分野の学習をする必要がある。それらの学問分野がどのように系統化されているのかを意識しながら、学生にとって保育の理解を深めることができるように、その全体像を示した。 （B6版　全342ページ） 片岡基明・吉村啓子編 深堀聡子・佐藤直之・吉田明弘・瀬戸昌子・片岡基明・吉村啓子・土谷長子・岩崎隆彦・高橋孝輔・下口美帆・足立正 本人担当箇所：「第3部第1章第1節乳児保育」「第3部第1章第3節障害児保育」「第5部保育実習第2章実践する力」（pp.135-146,pp.162-177,pp.307-327）を単著 保育所保育における乳児や障害をもつ子どもたちの保育についての概要を述べた。またでは実習の意義や流れ、そして実習に際しての準備や心構えを述べている。
5　実習に役立つ表現遊び２	共著	平成19年4月	北大路書房	実習で行うあそびとその指導を紹介した平成16年度に発行した、「実習に役立つ表現あそび」の第二弾。前作同様、実習において参考となる遊びとともに指導案の例を紹介し、実習の際に役立つものを目指している。実習生が手にとってすぐ使えるものを目指して編集したものとなっている。 （B5版　全129ページ） 岡本拡子編著 藍原佳子・伊藤美佳・居原田洋子・岡本拡子・岡本依子　小寺玲音・柴田智世・清水桂子・卜田真一郎・新開よしみ・瀧川光冶・滝澤真毅・多胡淳子・土谷長子・野崎之暢・野崎美香子・馬場耕一郎・広瀬健一郎・本田美佐枝・　松嵜洋子・宮内洋・矢萩恭子・八幡眞由美・吉永早苗・吉原美代子 本人担当箇所：「第1部第1章－4」「第3章」（pp.10-11、p.78）を単著 新聞紙を用いたかくれんぼあそびを紹介した。指導案を例示では、紙コプターの指導案を紹介している。
6　子どもと保護者への効果的な「声かけ・応答」	共著	平成20年3月	金芳堂	保育者の専門性を生かした支援として求められているソーシャルワーカーとしての役割を担うために欠かせない、子どもや保護者に対することばかけや声かけについて、具体例を示しながら解説した。実習生から経験の浅い保育者のために役立つもととした。 （A5版　全215ページ） 横井一之・吉弘淳一編集 荒船真由美・上續宏道・久米憲子・倉橋弘・小杉裕子・佐藤博美・土永典明・土谷長子・新川朋子・新川泰弘・西内香織・橋本景子・東野泰之・堀健治・松田幸恵・本山ひふみ・安田誠人・山野孝治・横井一之・吉弘淳一 本人担当箇所：「第5章　乳児におけるかかわりと留意点」(pp.58-71)を単著 乳児に対する声かけの例を示し、言葉を話さない乳児にどのようにかかわったらよいか、具体的に紹介している。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　改訂　社会福祉士の倫理　実践ガイドブック	共著	平成21年1月	中央法規出版	2005年6月に採択された、社会福祉士の倫理綱領を解説するガイドブックである。2007年に出版された「社会福祉士の倫理　倫理綱領実践ガイドブック」を踏襲し、2008年に改正された「社会福祉士及び介護福祉士法」に従って、実践現場で利用しやすいものに改訂を行った。（編集者のため、本人担当部分抽出不可） （A5版　全191ページ） 日本社会福祉士会編集（編集委員　委員長土谷長子　岡田誠・竹沢昌子・滕憲之・山本進） 岡田誠・三橋俊一・南川久美子・宮嶋淳・山本進
8　新　乳児保育への招待	共著	平成21年3月	北大路書房	2008年の保育所保育指針の改定に伴い、「乳児保育への招待」の改訂を行った。 （A5版　全209ページ） 高内正子編集 高内正子・大元千種・水谷孝子・岡田るみ子・新治玲子・土谷長子・菱谷信子・橋本真紀 本人担当箇所：「第7章　乳児の年齢別発達と保育の実際」（pp. 123-138）を単著 保育所保育指針の改定の流れを解説するとともに、保育内容については、実践の場においては、旧保育指針の内容が参考になることを踏まえ、新たな今日的問題を取り入れながら解説を加えた。
9　保育内容総論	共著	平成22年5月	近大姫路大学教育学部通信課程	保育者養成のための通信教育課程における保育内容総論のテキストである。読んで理解しやすい内容となるよう配慮し、幼稚園・保育所における保育の中心となる保育内容についてその考え方やあり方の基本をまとめた。 (B5判　全242ページ) 土江茂博編集 土江茂博・前田佳代子・土谷長子・小崎恭弘・谷口ナオミ 本人担当箇所：「第３章子どもの発達と保育の内容」「第５章保育課程と指導計画」「第６章　保育の評価と記録」（pp. 36-51 pp. 98-134）を単著 それぞれ「子どもの発達と保育の内容」「保育課程と指導計画」「保育の評価と記録」について、実際の乳幼児の姿をできるだけイメージしながら学べるよう、また保育現場にも応用できるように保育内容の実際について示した。
10　実践的保育原理	共著	平成24年4月	三晃書房	保育原理という保育の基礎・知識を学ぶにあたって、実践的な保育場面との連携をすることによって、より効果的な学びを目指したテキストとなっている。 （B5版　全191ページ） 上野恭裕編著 上野恭裕・田爪宏二・三宅茂夫・大井佳子・永井理恵子・平井タカネ・渡辺桜・土谷長子・阿部真美子・角野幸代・福原史子・田岡由美子・荘司紀子・鈴木俊之・大沼良子・渡辺一弘・金村美千子・浅見均 本人担当箇所：「第3章Ⅱ生活・遊びを通しての総合的な保育とは」（pp. 86-94）を単著 遊びの理論を示しながら、保育の中での遊びと生活について具体的に考えていくことができるように示した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11　乳児保育演習ガイド	共著	平成24年4月	建帛社	保育所保育に求められるニーズのうち、乳児保育への期待は近年高まりつつある。保育所に通う子どもたちの低年齢化や、地域における子育て支援をはじめとする在宅乳児への支援はすでに顕在化したニーズとなっている。これらを担おうとする保育者を養成するにあたって、それらの課題に対して処することができる知識や技術の習得が求められている。こうした要請にこたえるために、より分かりやすいテキストを目指して編まれている。 （B5版　全153ページ） 髙内正子・梶美保編著 池田りな・新治玲子・土谷長子・中村千晶・中村宏子・細井香・宮﨑つた子・森知子 本人担当部分：「第12章乳児保育と環境」「第14章乳児保育と保育所保育指針」（pp.113-123 pp.137-143）を単著 第12章においては乳児室における物的・人的環境の在り方を具体的に示した。また第14章では、保育所保育指針における乳児保育の考え方とその方針を示し、近年話題になっている幼保一体化の制度における乳児保育について考えることができるような内容とした。
（学術論文） 1幼稚園教育課程編成の現状と課題（1）―A市公立B幼稚園の教育課程の現状を通して―	共著	平成24年10月	環太平洋大学異研究紀要第6号 pp.135-140	それぞれの幼稚園で編成される教育課程について、その意義を確認し、編成における配慮事項を整理した。また公立幼稚園の教育課程の事例を通して、その現状を検討し、効果的に保育と教育課程が結び付くための方策を提案した。 （本人担当部分抽出不可） 共著者：松田智子・土谷長子
2　教育(保育)課程と指導計画	単著	平成24年3月	教育PRO	幼稚園や保育所における教育課程や保育課程について、そのあり方について言及するとともに、その課程に基づいた指導計画についてどのようにあるべきかを論じた。また養成課程における実習生が指導計画に取り組むとき、効果的な指導計画作成のために求められることやその意味について論じた。
3　保育所におけるアレルギー対応給食と食育	単著(研究ノート)	平成26年12月	人間教育学研究第2号	食物アレルギーの実態を踏まえ、それに対応する保育所給食の実践について紹介を行った。特に年少児を対象とした給食においては、誤食等を防ぐための配慮が求められている。そのため、アレルギーのある子もない子も同じものを食べることができることを目指した取り組みが始められている。こうした現状をレポートし、報告を行った。
（その他） 「学会発表」 1　（ポスター発表）人間力育成のための「基礎演習」	共同	平成18年9月	全国保育士養成協議会第45回研究大会発表論文集（pp.190-191）	(全体概要)保育者を目指す学生にとって必要な「基礎学力」「生活上の基礎技能」を学習する機会を設ける必要から、本学が「基礎演習」の中で実践している取り組みとその成果を紹介した。授業はそれぞれの意義や実践課題について手作りの教材を用いて、学科教員全員がティーム・ティーチングで取り組んだ。その結果として学生にとってもそれぞれの課題の意義が高く評価されるとともに、教員全員が学生の状況を把握し、また教員自身の振り返りの場ともなったことが効果としてあげることができた。 （吉村啓子・松井祐子・土谷長子・智原江美・高橋耕輔・下口美帆・岡野聡子・高澤空男）（本人担当部分抽出不可）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　（ポスター発表）保育士養成における人間力育成	共同	平成19年9月	全国保育士養成協議会第45回研究大会発表論文集（pp.190-191）	（全体概要） 保育者を目指す学生にとって必要な「基礎学力」「生活上の基礎技能」を学習する機会を設ける必要から、本学が「基礎演習」の中で実践している取り組みとその成果を紹介した。授業はそれぞれの意義や実践課題について手作りの教材を用いて、学科教員全員がティーム・ティーチングで取り組んだ。その結果として学生にとってもそれぞれの課題の意義が高く評価されるとともに、教員全員が学生の状況を把握し、また教員自身の振り返りの場ともなったことが効果としてあげることができた。 （吉村啓子・松井祐子・土谷長子・智原江美・高橋耕輔・下口美帆・岡野聡子・高澤空男）（本人担当部分抽出不可）
3　（ポスター発表）保育士養成における人間力育成	共同	平成19年9月	全国保育士養成協議会第46回大会発表論文集pp.114-115	（全体概要）京都光華教育についての実践報告である。京都光華教育はⅠ、Ⅱ、Ⅲという三部構成となっている。Ⅰは短期大学における基礎的教育に関すものである。Ⅱは「生きる力」に関するものである。Ⅲは京都文化・伝統文化を学ぶというものである。それらの内容・教育方法などを具体的に提示した。その結果、本学科の取り組みが、他大学の保育者養成教育のヒントや刺激になるものであったと確信された。（吉村啓子・松井祐子・松田智子・土谷長子・智原江美、高橋孝輔・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）
4　保育者のための0JTプログラムの開発と実践（1）	共同	平成19年5月	日本保育学会第60回大会発表論文集pp.586-587	（全体概要） 保育所における0JT研修の試みである。法人内3か所の保育所保育士を対象に、保育士としての専門性を高めるとともに保育士自身が自らの自尊感情を高め、それを日々の保育業務に生かしていけるようにするためのプログラムを工夫実践した。その結果、自尊感情が高くなるとともに、保育を考える視点や意欲が高めることができた。管理職とともに、中堅職員が自ら研修を計画実践できる力を培うことができるよう、継続して実践、検討を行う予定である。 （土谷長子・橋詰啓子・前田佳代子）（本人担当部分抽出不可）
5　保育者のための0JTプログラム（2）－研究保育と自己評価の分析-	共同	平成20年5月	日本保育学会第61回大会発表論文集	（全体概要）60回大会の発表の続報として、0JTの研修を重ねることで実践が深まり、その中で考える力や意欲を高めることができ、またチームワークの向上にもつながっていった成果を報告した。自己評価についても自尊感情がさらに高まり、また特に中堅保育士が後輩を指導する力が高まっていることが確認された。今後、職員自身が研修をプログラムできる力を養うことができるよう、継続実践をしていく予定である。（橋詰啓子・土谷長子・前田佳代子）（本人担当部分抽出不可）
6　保育士養成教育と卒業時の満足感との関係	共同	平成20年9月	全国保育士養成協議会第47回大会発表論文集（pp.260-261）	（全体概要） 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科においては、保育士資格、幼稚園教員免許状取得のために必要な科目のみならず、保育者としての資質向上を目指して多彩な科目を開講している。また教員はその中で、きめ細かな対応をすることで、学生がよりよく育っていける環境を整えているが、さらなる教育の効果を目指すために、その評価分析を行った。学内での比較となるが、他学科に比べて全体的に学生の満足度は高く、またその満足度に影響する因子は、授業、先生、成長度であり、本学科が目指している教育効果が一応の評価を得ていることがわかった。（吉村啓子・中瀬惇・松井祐子・松田智子・土谷長子・智原江美・高橋孝輔・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　より良き教育を目指すカリキュラム・マップの作成～FD活動の一環として～	共同	平成21年9月	全国保育士養成協議会第48回大会発表論文集（pp. 222-223）	（全体概要） 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科において授業科目の精選や補充を行うための基礎資料としてカリキュラム・マップを作成した。カリキュラム・マップは科目ごとに設定された到達目標とディプロマ・ポリシー各項目の対応表であり、この作成過程を通して、本学の教育活動において保育士養成校に共通する最低到達目標を設けることが求められているのではないかと思われた。また本学の問題としては、教養教育についての取組みを今後の課題とすべきであろうことが明らかとなった。（吉村啓子・中瀬惇・松井祐子・梅岡さと江・土谷長子・智原江美・高橋孝輔・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）
8　現場が求める人材像-聞き取り調査をふまえて-	共同	平成22年9月	全国保育士養成協議会第49回大会発表論文集（pp. 174-175）	（全体概要） 本学における実習・就職支援室においては、学生の実習と就職を直接支援することに加え、学生の終息早紀である保育所や幼稚園が求める人材像についての情報を収集し、進路支援に役立てている。そこから見えてきた養成校として求められる教育内容としては、人柄が最も重視されており、ピアノについては「弾き歌い」の技術を求めていることが分かった。一方、学生が短大生活で自らの能力を評価した結果においては、協調性について高い評価をしているが、今後は考える力や踏み出す力の育成にも目を向ける必要があることが明らかとなった。 （吉村啓子・梅岡さと江・辻野孝・松井祐子・高橋孝輔・智原江美・土谷長子・下口美帆・岡野聡子）（本人担当部分抽出不可）
9　地域子育て支援事業と連携させた授業における学生の学び	共同	平成23年９月	全国保育士養成協議会第50回大会発表論文集（pp. 468 - 469）	（全体概要） 京都府子育て支援事業として京都三条会商店街と共催している、子育て支援広場における授業の一環としての学生参加の意義について考察した。それぞれの専門分野から学生に学びのポイントを示し、それに対する取り組みの成果について述べた。担当する乳児保育においては、子育て広場に来場する母親と乳児を観察することで、基本的信頼関係について考え、実感できるなど、保育所保育の中では出会うことができにくい場面に出会うことができた。またその他造形分野や幼児体育の分野についても、それぞれに学生にとって有意義な機会をもつことができたことが明らかとなった。 （土谷長子・智原江美・下口美帆）（本人担当部分抽出不可）

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　中 田　正浩

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学・学校教育学	教科教育（社会科）　学校経営　教師教育　大学授業論 ＮＩＥ

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 「教職入門」	平成 19 年 4 月～7 月 ～ 平成 21 年 4 月～７月 （前期授業）	本学において、平成 19 年度・302 人、平成 20 年度・342 名の受講生を 4 クラス編成とし、少人数授業を実施した。 講義内容は、”実践的指導力“を育成するために、指導者の現場経験を最大限に生かした取り組みを行った。 例えば、「学校園における危機管理の在り方」では勤務校で経験した「病原性大腸菌Ｏ－157・堺市立新金岡小学校のビデオ（読売テレビ）」を事例として危機管理の在り方に対処する技法を身に着けさせた。 （環太平洋大学次世代教育学部・体育学部）
「学級経営実践論」	平成 19 年 10 月～3 月 ～ 平成 21 年 10 月～3 月 （後期授業）	本講座は、学級経営学科の選択科目である。受講者が、平成 19 年度・109 名、平成 20 年度・100 名と希望者が殺到したので、3 クラスと 2 クラスに分けて少人数授業を実施した。 講義内容は、教育実習はもちろんのこと、”学校支援ボランティア“に参加（本学科では 1 年次から参加）した際にも役に立つように、学級崩壊・いじめ・不登校など生徒指導上の問題を意識的に取り扱った。モンスターペアレントについては、ケーススタデーを使ってのロールプレイイングを行った。 このような授業方法は、学生に好評で中身の濃い講義となった また、毎時間ごとにレポートを課し、その内容は講義内容の要約やコメント及び次週の課題提出を義務付けた。レポートの提出率は、毎回 90%を超えていた。 （環太平洋大学次世代教育学部・学級経営学科）
「岡山市学校ボランティア」への大学創立 1 年次から参加	平成 19 年 10 月～平成 25 年 3 月	環太平洋大学の学生を、教職インターンシップの一環として、1 年次から岡山市内【のちに倉敷・瀬戸内市等へ拡大】の幼・小・中学校へボランティア派遣を教員側の意向で行った。岡山市の講習には約 50 名ほどが毎回受講し、実際に参加したのは三分の一程度であった。 送り手として、1 年次から教育現場に送り出すことに躊躇したが、学生の大半が教員への道筋を発見したと方向があった。 平成 22 年度 4 月からは、学生ボランティアの派遣業務を教員採用支援室に移管し、平成 23 年度からはカリキュラムの中に正式に位置づけられ、単位化も図られることとなった。 （山陽新聞 2008・2・18：朝刊掲載） （地元テレビのオニビジョンも取材と放映）

２　作成した教科書、教材 教育現場から見た教職員の不祥事 「教育現場に求められるこころと品格」（単著） 　Ｐ１１２	平成20年４月	教育とは教員が持つ専門的知識はもとより、児童･生徒との信頼関係の上に成り立つものであるが、近年、指導力不足教員・社会人失格教員等の問題を抱えた教員が続出し、教育界全体への不信を招いている。 本書では、次世代の教育を担う学生に、教員生活において不祥事を起こさせないように、指導者の教育行政及び管理職経験を生かして作成した「教職入門」の教科書である。
『教職論』教員を志す全ての人へ　　（共著） 第２章　教員の仕事と役割 第８節　保護者・地域・関係機関と教員 Ｐ９１～Ｐ１００	平成21年３月	教育の目的を実現するためには、学校園・家庭・地域社会間での相互連携や協力が必要であることは以前から叫ばれてきたことである。 今回、改正された教育基本法第13条に「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び努力に努めるものとする」とあり、今一度学校園と保護者・地域社会と関係機関との関係について考えてみた。
「次世代の教職入門」（編著） 　Ｐ２３～Ｐ５９	平成23年５月	本著は、編著者（中田）が４年間の「教職入門」講座を担当する中で、教員を志す学生にとって指標となりうることを願って、環太平洋大学次世代教育学部の実務家教員（＝教育現場の実践者等）で執筆したものである。 編集において特に配慮した点は、「章」の冒頭に単元の要約をしるし、単元末には”学習課題”を設定したことである。本著の末には、”資料編”として日本国憲法をはじめ、教育六法（重要項目のみ）と幼・小・中学校の学習指導要領を掲載したことである。
「次世代の教育原理」 　Ｐ１～Ｐ１２ 　Ｐ４５～Ｐ６２	平成24年９月	本著は、編著者（中田）が２年間の「教育原理」の講座を担当する中で、教員を志す学生にとって指標と成り得ることを願って、環太平洋大学次世代教育学部の実務家教員等で執筆したものである。 編集においてとくに配慮した点は、「章」の最初に、単元の要約を記し、単元末には学習課題を設定した。また本著の最後には、重要な教育用語及び人名の索引も掲載した。
「社会科教育論　～若い社会の先生方に～」 Ｐ１～Ｐ８３	平成25年４月	本著は、社会科の目標と、生徒の生き方を結び付けて、「社会科教育法」を論じたものである。若い社会科教師が教科を指導するにあたり、著者の経験から躓くであろうポイントを中心に取り上げて解説を行った。 また先輩教員の授業を参観しながら、自分の社会科授業のスタイルを作り上げていく過程を、詳細に綴った社会科教師の成長過程の書である。 例えば、公害問題から地域に密着した自主教材の作成方法やその視点、さらに生徒に対して、社会科を自分の生活改善をしていく教科であること自覚させるための方策を論じた。 ＮＩＥの社会科における有効な導入方法や、細やかなノートの書き方指導に至るまで、具体的に実践的な取り組みや、作成した学習指導案を数種類掲載した。ただ理論に走る書物ではなく、理論と実践を結び付けた社会科教育論の書である。 この著書は、奈良学園大学人間教育学部の「社会の理解」「社会科教育法」の講義の中で使用する教科書でもある。
「人間教育を視点とした教職入門」	平成 26 年 12 月	本著は、奈良学園大学に新しく赴任した大学教員、他大学教員、院生、元幼稚園園長で編集され、編集の視点として人間教育学部のアドミッションポリシーの“人間教育”を第一にした教職の入門書である。

		執筆者の全てが幼・小・中・高の教員経験者である。 内容構成も全 10 章から成立しており、前半の 5 章は理論編、後半の 5 章は実践とし、各章末には”ミニ教育辞典”とした現代的教育用語の解説を挿入した。各章の頁には、学生が予習する際の単元概要が容易に把握できるよう、ポイントを明らかに提示している。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 環太平洋大学教員専攻委員会報告書から	平成 17 年 12 月	小学校長を 2 年、中学校長を 6 年、堺市・大阪府教育委員会（小・中学校社会科・同和教育等を担当）指導主事等、小・中学校の学校現場の経験が 37 年間と抱負である。また 2 回目の大学院修士課程で教育課程を専攻しており、理論研究と現場実践からみて、教育実習、学級経営、教師論などは、多彩な授業展開が期待できる。 第 1 回目の大学院修士課程では、社会科教育を専攻しており、中学校社会科教諭 19 年間の実務経験、さらに共著ではあるが中学校「地理」の教師用指導書及び「日本史」の指導解説書、教育論文など著書も多数あり、社会科教育法も講師として十分担当できる。
環太平洋大学・学生による授業評価	平成 19 年度 前期 後期	（平成 19・20 年度は 5 点満点表記） 「教職入門」　4.03（302 名） 「学級経営実践論」　4.44（108 名）
	平成 20 年度 前期 後期	「教職入門」　4.16（3４2 名） 「社会の理解」　4.17（89 名） 「学級経営実践論」　4.62（100 名） 「社会科教育法」　4.14（110 名）
	平成 21 年度 前期 後期	（平成 21 年度より 4 点満点表記） 「教職入門」　3.5（276 名） 「社会の理解」　3.8（41 名） 「学級経営実践論」　3.7（59 名） 「社会科教育法」　3.67（112 名）
	平成 22 年度 前期 後期	「教職入門」　3.9（332 名） 「社会の理解」　3.75（７９名） 「教師コミュニケーション論」3.56（12 名） 「学級経営実践論」　3.７1（5８名） 「社会科教育法」　3.68（107 名）
	平成 23 年度 前期 後期	「歴史学」　3.90（13 名） 「社会の理解」　3.53（59 名） 「社会科教育法」　3.63（134 名） 「教育原理 B(中等)」　3.34（150 名）
	平成 24 年度 前期 後期	「社会の理解」　3.69（40 名） 「社会科教育法」　3.43（152 名） 「教育原理 B(中等)」　3.3７（258 名）
奈良学園大学・学生による授業評価	平成２６年度 後期	「社会の理解」　3.12（111 名） 「教育原理 A(初等)」 「教育原理 B(中等)」 ＊両教科ともオムニバスのため 授業評価は実施せず

南九州大学編集委員会による論文査読依頼 （南九州大学編集委員会委員長　外山英男）	平成 26 年 10 月 27 日	南九州大学編集委員会・外山英男委員長より、【論文題目】「小学校成立と村落共同体の再編成―鹿児島県旧知覧村の事例から―」【著者】植村秀人の論文査読の依頼を 10 月 27 日付出で中田が受けた。 11 月 21 日付にて論文の審査報告を、南九州大学編集委員会宛に提出をした。 【提出書類：南九州大学研究報告投稿論文の審査報告・著者へのコメント（別添 4 枚）合計 6 枚】
4　実務の経験を有する者についての特記事項 講座名「学校教育法制論」　先週専門科目講師 兵庫教育大学大学院　　学校教育研究科	平成 17 年 10 月	兵庫教育大学学校教育学部３回生に、教育現場で生起している“教職員の不祥事問題”を具体的事実に基づき、教育法規に裏付けされた教職員の服務全般について講義を行った。 講義内容は、具体的に新聞に報道された記事を使いながら、何が法律に抵触しているかなど、学生同士が話し合いながら授業を進めたので、好評であった。
講座名「教員研修経営論」教育経営専門科目講師 兵庫教育大学大学院　　学校教育研究科	平成 18 年 2 月 8 日	このゲストティチャーは、担当者の学長昇進で平成 21 年度で終了する。 兵庫教育大学大学院生（M2）に対して、管理職在職中に経験した大阪府の「教職員評価・育成システム」の概略説明に引続き、具体的に院生にも“自己申告書”への記入をさせた。 その”自己申告書“をもとに、大学院生が相互に校長と教諭の立場で評価者訓練を体験させた。
5　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 剣道三段	昭和 38 年 11 月	日本剣道連盟より授与
中学校教諭一級普通免許状（昭和四一中一普通第 142 号）	昭和 42 年 3 月	国語・社会　三重県教育委員会より授与
高等学校教諭二級普通免許状（昭和四一高二普通第 22 号	昭和 42 年 3 月	国語・社会　三重県教育委員会より授与
バレーボール国際公認コーチ	昭和 56 年 7 月	国際バレーボール連盟より授与
修士（教育学）	昭和 63 年 3 月	兵庫教育大学大学院　　修第 1471 号
中学校教諭専修免許状（平 6 普第 24 号）	平成 6 年 12 月	社会　大阪府教育委員会より授与
修士（学校教育学）	平成 18 年 3 月	兵庫教育大学大学院　　修第 5861 号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 なし		
4　その他 （環太平洋大学における職務上の実績） 「学力向上対策委員会」　委員長	平成 19 年 4 月～平成 21 年 3 月	本委員会は、環太平洋大学の学生が入学試験を受験せず（ＡＯ・推薦入試等）に入学する者が多く、入学者の学力についても幅が広く大学教育を進めるうえでの障害となっていた。

		これらの問題を解決するために、一年次には、国語・数学・英語の能力別補講を課外講座として実施することで、学力の底上げを図った。この一連の企画・立案・実施までを委員長としての任務に当たった。
「教職センター運営委員会」　委員	平成19年4月～平成21年3月	本委員会では、唯一の学校現場の出身者ということで、教育実習に関わる”実習の手引“”実習日誌“の執筆・作成・編集に当たった。 また委員長の補佐役として、本委員会をけん引した。
「教職課程委員会」　委員	平成19年4月～平成21年3月	本委員会は、新設大学の教職課程委員会の委員として、学校現場（小・中学校）出身者の立場からの発言を主に行った。 例えば、教育実習の時期や受け入れ側の立場に立ったのが主であった。
「女子バレーボール部」　部長	平成19年4月～平成23年3月	中学校の教員時代は、女子バレーボール部を指導（中学校校長では、日本で唯一の国際公認コーチ）していた経験から、環太平洋大学のバレーボール部長を務めた。 出来る限り公式試合には参加し、監督と保護者、学生間の潤滑油として、監督を側面からサポートを行った。
「『育自力』向上委員会」　委員長	平成 19 年 11 月～平成 20 年3月	本委員会は、環太平洋大学の学生の大半が、中学・高校時代に運動部に所属しており、教室での学ぶ事への志が欠如していた。(居眠り・メール・私語など) そこで、クラス代表とクラブの主将を集め、大学における広義の受講態度等について討議させた。そこで、集約された内容が『IPU 講義ルール』として提言され、毎年作成される学生便覧にも掲載された。 その会の委員長として、学生間の討議・指導を経て、提出された提言を『IPU 講義ルール宣言』として集約されるまでの過程を、教員側を代表して指導に当たった。
「入試委員会」　委員	平成20年4月～平成23年3月	本委員会は、学科・学部を代表して、委員の立場で学科の入試問題の作成や入試における面接官として業務の推進に尽力をした。
「次世代教育学部学級経営学科」　学科長	平成20年4月～平成 21年3月	前職の経験（小・中学校校長）を、大学の学科運営に活かすべき方法として、大学の役割である「教育」・「研究」・「社会貢献」野バランスをとること、日本で最初の学級経営学科の果たすべき役割と学生のニーズに合わせて、より実践的な授業改革を提供すべき努力を払った。
「人権教育推進委員会」　委員	平成20年4月～平成 21年3月	本委員会は、教育行政（堺市・大阪府）で、学校園の同和・在日外国人問題を担当していた経験を生かし、人権教育に経験のない委員長を補佐しながら、環太平洋大学の人権教育の基礎作りと推進に当たった。
「教務委員会」　委員	平成20年4月～平成25年3月	本委員会は、教育実習の内規づくり・入学者の単位認定・授業時間割の変更・公欠などの事務的な内容についての審議を委員として行った。

「教員免許更新委員会」　委員	平成 20 年 10 月～平成 25 年 3 月	本委員会は、次世代教育学部として、平成 21 年度からの教員免許更新制の講習開設の企画を行い、大学におけるホームページで情報提供ができるまでを、学部責任者として、制度そのものが円滑に導入できるように取り組んだ。
「次世代教育学部」　学部長	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	地方における新設大学の運営には、定員充足率の向上など厳しいものがあるが、前職の経験（教育行政・小・中学校の管理職）を生かしながら、既存の枠にとらわれない学部経営（教授会等）のあり方と大学の基礎作り（計会議・経営協議会等）に、積極的に参画した。
「次世代教育学部学級経営学科通信教育課程」課程長	平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月	生涯学習の実現に向けて、特に教職を希望する学習者の夢を叶えるため、通信という手法を通して、それぞれのニーズに応えた学習スタイルと学習の機会を提供すべく努力を図った。
「通信教育課程委員会」　委員長	平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月	本委員会では、シラバスやスクーリング日程表の作成や、入学許可に関わる学則変更などの諸々の協議事項について審議する際のまとめ役として、任務に当たった。
「自己点検評価委員会」　副委員長	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	本委員会は、平成 23 年度の認証評価に向けての準備で、平成 19 年度～平成 23 年度の自己点検報告書の作成に取り掛かるなど、内容・進行計画について取り掛かった。
「FD 実施推進委員会」　委員 「FD 実施推進委員会」　委員長	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	本委員会は、教育理念・目標の達成に向けて、より具体的な課題でもある”教員の教授能力“を大学全体の課題として捉え、「学制による授業アンケート」（一講座＝3 回）実施の具体化を委員として推進している。委員長は平成意 22 年 4 月より拝命した。
「研究倫理委員会」　委員	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	本委員会は、研究活動の不正防止に関する規定に基づき、人権感覚を持った研究が、本学において進められるように、環境の整備に委員として尽力をした。
「研究戦略検討委員会」　委員	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	本委員会は、平成 21 年度の科研費応募状況と獲得状況の検討を行うとともに、本学教員に対して申請の奨励を行うべき方法について、委員として参画した。
「危機管理委員会」　委員	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	本委員会は、本学においても様々な危機があり、平素から教職員が危機管理意識をもって日常の教育・業務活動に取り組むことが出来るように条件整備を行った。 本学の危機管理機能が正常に働いているか、日常の危機管理体制の整備、緊急時対応マニュアルの作成等、委員会が機能しているかを、委員として取り組んだ。
「教職課程委員会」　委員長	平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月	本委員会は“教員免許の質の保障”に関わって、ＦＤ研修で委員長として教職員に啓発研修を実施、また『履修カルテ』の作成、「教職実践演習」のシラバス作成などに取り組んでいる。

（奈良学園大学における職務上の実績） 「広報委員会」　委員	平成25年6月 ～ 平成26年3月	学校法人奈良学園の理事長室広報担当（嘱託職員）として、大阪府・岡山・三重各県の高校へ、奈良学園大学・人間教育学部・保健医療学部のPR活動に従事した。
「入学試験問題検討委員会」委員	平成25年6月 ～ 平成26年3月	本委員会は、入試問題を作成する委員で構成されており、奈良学園大学一期生の入試問題（現代社会）の作成委員を委嘱された。
「FD委員会」　委員	平成26年4月 ～ 平成27年3月	本年度、新しく赴任した奈良学園大学においても、前大学の経験を活かして、FD 委員として委嘱された。
「入学試験問題検討小委員会」　委員	平成26年4月 ～	本委員会は、入試問題を作成する委員で構成されている。本年度は、昨年度の入試問題作成の経験を買われ、奈良学園大学二期生の入試問題（日本史）の作成委員を委嘱された。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1「認可申請中　次世代に繋ぐ生命　　ＩＰＵ環太平洋大学発信へ」	共著	平成18年6月	東京書籍株式会社	本書は、環太平洋大学へ着任予定の教員が、次世代を担う多くの優秀な青年を育てるべく夢を容について論じたものである。 「新たなる旅立ちに向けて共に学び合おう」という題目で、教師のみならず、教科書研究や教員指導など様々な形で教育に携わった経験を、次世代の若い教師の卵に伝えるべきことを述べたものである。 （Ｂ４判・３３８頁） Ｐ１７６～Ｐ１７９を単著 （分担部分） 執筆・監修　大橋博　中田正浩　他５３名
2「教育現場に求められるこころと品格 ～事件から見た教職員の不祥事防止～」	単著	平成20年4月	大学教育出版株式会社	本書は、筆者（中田）にとって最初の単著である。教育とは、教員が持つ専門的知識はもとより、児童・生徒との信頼関係の上に成立するものである。しかし、近年は指導力不足や社会人失格などの問題を抱えた教員が続出し、教育界全体への不信を招いている。 本書の内容は、教職員編不祥事を未然に防止するため、「非違行為」における懲戒処分の状況、不祥事の具体的事例を9項目、不祥事の根絶を目指した都道府県教委の新たな防止策を述べたものである。 （Ｂ４判・全１０１頁） ［山陽新聞：２００８・５・１４　紹介掲載］ ［朝日新聞：２００８・８・６　紹介掲載］
3「教職論　教員を志すすべてのひとへ」	共著	平成21年2月	ミネルヴァ書房株式会社	本書は、本学の学生の教科書として使用していたのだが、内容として欠けている点を指摘したところ、執筆者の一人から執筆依頼があり、書き上げたものである。 内容としては、保護者との関係づくりは、モンスターペアレントや家庭訪問など具体的な対応方法、地域の関係づくりでは、自治会との連携、民生委員・保護司など地域人材之活よ、関係機関としては警察・消防署・福祉事務所及び児童相談所とのかかわりについて集約をした。 （Ｂ４判・全２４１頁） Ｐ９０～Ｐ９９を単著 「第2章　教員の仕事と役割 第8節　保護者・地域・関係機関と教員」 宮崎和夫　臼井英治　中田正浩　伊藤一雄 杉浦健　鈴木邦治　高橋一夫　寺尾滋明

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				羽生隆英　原清治　　前原健三
４「次世代の教職入門」	共著	平成 23 年 5 月	大学教育出版株式会社	本書は、編著者(中田)が環太平洋大学で 4 年間「教職入門」講座を担当する中で、教員を志す学生にとって指標と成り得ることを願って、次世代教育学部の実務家教員(=教育現場の実践者)等で執筆したものである。 単元は１０章で構成されており、各小単元の冒頭にはその単元の内容を要約し、章末には学習課題が設定されているので予習や復習を容易にすることが可能である。また、書の巻末には資料編として日本国憲法をはじめ教育六法、学習指導要領等を掲載されている。 （Ｂ４判・全２９７頁） Ｐ２３～Ｐ５９を単著 「第 2 章　日本の教育制度と教員養成の歴史」 中田正浩　松田智子　鎌田首治朗　大野光二 山本正　大石隆夫　中田律子　伊崎一夫 住本克彦　杉田郁代　筒井愛知
5「教育フォーラム５０<やる気>を引き出す･<やる気>を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房株式会社	本書は、梶田叡一氏が顧問の「人間教育実践交流会」の会委員で執筆したもので、記念すべき第 50 回フォーラム用に編纂されたものである。 内容は、子どもの<やる気>スイッチはどこにあり、どうしたら入れることが出来るのか。古典的なアメとムチの方法ではもちろん、内発的動機づけだけを重視してもうまくはいかない。教師が子どもの<やる気>を引き出し、育てるための方策を各教科との関わりについて提案したものである。 筆者は、子どもの<やる気>ではなく、大前提となる教師自身の<やる気>について論じたものである。 筆者は、子どもの<やる気>ではなく、大前提となる教師自身の<やる気>について論じたものである。 （Ｂ４判・全１７９頁） Ｐ１１５～Ｐ１２３を単著 「教師の<やる気>を引き出し・<やる気>を育てる学校経営」 梶田叡一　野田健二　中田正浩　松田智子 金山憲正　錦織彰　勝見健史　中村哲 加藤明　久田孝　前田洋一　住本克彦 浅田匡　瀧明知恵子　善野八千子
6「次世代の教育原理」	共著	平成 24 年 9 月	大学教育出版株式会社	本書は、編著者（中田）が 2 年間の「教育原理」の講座を担当する中で、市販の書籍では難しすぎた。そこで、本学の学生に学びやすい教科書として本学部の実務家教員（教育現場の実践者等）で執筆をしたものである。本学の二学部の学生で、教員を志す学性にとって指標と成り得ることを願って編集された。 単元は９章で構成されており、各小単元の冒頭にはその単元の内容を要約し、章末には学習課題が設定されているので予習や復習が容易にすることが可能である。 （Ｂ４判・全１５９頁） Ｐ１～Ｐ１２を単著 Ｐ４５～Ｐ６２を単著 「第１章　教育とは何か」 「第４章　教育行政」 中田正浩　松田智子　鎌田首治朗　住本克彦 中田浩司　久田久　岡野聡子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７「社会科教育論 ～若い社会の先生へ～」	単著	平成 25 年 ４月	株式会社ＥＲＰ（ＴＭシリーズ）	本書は、社会科の目標と生徒の生き方を結びつけて、社会科教育法を論じたものである。若い社会科教師が教科を指導するにあたって、著者の経験から言えば躓くであろうポイントを取り上げて解説をしたものである。 また先輩教員の授業を参観しながら、自分の社会科授業のスタイルを作り上げていく過程を綴った社会科教師成長の書でもある。 例えば、「公害問題」から地域に密着した自主教材の作成方法や視点、さらに生徒に対しては社会科を自分の生活改善をしていく教科であることを自覚させるための方策までを論じた。 次に、社会科教育にＮＩＥの有効な導入方法や細やかなノートの取り方指導に至るまで、実践的な取り組みや著者自身が作成した学習指導案を幾種類か掲載した。理論だけに走る書物ではなく、理論と実践とを結び付けた“社会科教育論”の書である。 （Ｂ4 判・全 110 頁）Ｐ１～Ｐ１１０を単著 中田正浩
８「教育フォーラム５４ 各教科の学習を支える言語活動　～言葉の力をどうも散るか～」	共著	平成 26 年 8 月	金子書房株式会社	本書は、梶田叡一氏が代表を務める「人間教育研究協議会」の会員で執筆したものである。 現行の学習指導要領のポイントの一つに”言語活動の充実“が挙げられている。この目的を達成さるために、各教科等の学習を支える言語活動をテーマに、会員が各々執筆したものである。 筆者が担当したのは、小学校における社会科授業においてである。まず冒頭には社会科における「言語活動の充実」の意義を述べ、次いで、「言語活動の充実」を図るために有効な手段としてＮＩＥを導入した。そして、それらを具現化したものが授業指導の在り方であった。 具体的な取り組みは「戦国の世から江戸の世へ」という単元を、登場する人物の３人（信長・秀吉・家康）の武将の働きとその働きを比較できるように発展的学習として歴史新聞にまとめさせる内容で会った。 （Ｂ4版・136 頁）　Ｐ６４～Ｐ７４を単著 梶田叡一　中田正浩　松田智子　善野八千子 加藤　明　金澤隆夫　阿部秀高　金山憲正 川俣　徹　蔵あすか　櫻本明美 オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス
９「人間教育を視点とした教職入門」	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版株式会社	本著は、平成23年に出版した「次世代の教職入門」が第二版を重ね約２千部を売り切り品切れとなったため、装いを新手目、新たに勤務した大学教員６人と教職経験者３人を加えて編集された。 この書は、人間教育学部のアドミッションポリシーでもある”人間教育“を視点にした教職の入門書である。 内容構成は、全10 章から成り立ち、前半5 章を理論編、後半5 章を実践編とし、各章末には“ミニ教育辞典”として現代的教育用語10 個の解説をしている。 各所の頁には、学生が予習するために単元の概要を解説し、予習のポイントも明らかにしている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				著者の分担箇所は、理論編の第２章「我が国における教育制度と教員養成の歴史」と第５章「教職員の不祥事と不適切教員」を担当した。 (B4版・全　２７９頁) Ｐ２６　～Ｐ６０　　を単著 Ｐ２０８　～Ｐ２３３　を単著 第2章「我が国における教育制度と教員養成の歴史」 第5章「教職員の不祥事と不適切教員」 中田正浩　松田智子　鎌田首次郎　金山憲正 瀧明知恵子　長井勘治　太田雄久　中田律子 中田浩司
(学術論文) １『自律的学校経営』を視点としたスクールリーダーの養成プログラムの一構想　～大阪府・堺市の場合～」 (修士論文)　(査読有)	単著	平成 17 年 12 月	兵庫教育大学大学院	本研究論文は、スクールリーダー（＝学校指導者）が21世紀における『自律的学校経営』を行うにあたり、教諭時代からの実践知及びＯＪＴだけでは対応しきれなくなっている。 この状況を打破するために幅広い理論知や専門的職務遂行能力を身に着けさせるための養成・研修システムとカリキュラムモデルを堺市レベル（＝堺市教育センター）で構想したものである。 （A4版・全１１７頁）　Ｐ１～Ｐ１１７を単著 中田正浩
２「日本の教育思想（1）　～江戸時代の教育制度から見えてくる教育思想～」	単著	平成 25 年 4 月	「環太平洋大学紀要」第7号	本論文は、日本の教育思想について本学の紀要にシリーズで登校したものである。 まず (1) では、江戸時代の教育制度を眺めたときに上からの教育（支配者層）と下からの教育（被支配者）に分けられることを述べたものである。 具体的には、支配者層の昌平坂学問所（幕府）や犯行（地方の各藩）と被支配者層の郷学・私塾・寺子屋などを挙げることができる。 本論では、江戸時代の多様な教育制度と学問の背景から見えてくる教育思想（儒学・国学・洋学を明らかにした。） Ｐ１０１～Ｐ１１０を単著 中田正浩
３『人間教育』を支えるもの―学校教育における「人間教育」を子供の視点から―」	単著	平成 26 年 4 月	「人間教育学研究」創刊号	本論文は、戦後の民主主義教育を総括しながら、次世代の学校教育の場における『人間教育』が本当に実践されているのだろうか。いないのか、そのことを検証したものである。 併せて、著者の40年にわたる教員生活を通して人間教育を阻害している根源を、学校教育全般とそこで学ぶ子供の視点に立って振り返ってみたものである。 Ｐ２５～Ｐ３５を単著 中田正浩
４『スクールリーダーの資質能力向上について』 「第1回　体罰・いじめに関する第三者委員会の報告書から見えてきたこと」	単著	平成 25 年 5 月 21 日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論文は、教育誌『教育PRO』に平成25年5月から平成26年4月まで、11回にわたって「スクールリーダーの資質能力の向上について」の論文を連載したものである。 本論文は、第1回ということで筆者の自己初回と当時”いじめ・体罰”に関する問題について第三者委員会からの報告書についてのコメント及び校長としての際照り限度の資質能力は、リーダーシップと実行力であるとして実行力であるとして、筆者の実践してきた活動や経験を述べたものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				Ｐ１９～Ｐ１９を単著 中田正浩
「第２回　民間人校長と日本の管理職養成について」	単著	平成25年6月4日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論文は、第一に学校教育法施行規則第９条のニによる『校長資格の緩和』により誕生した”民間人校長”の実態と課題について述べ、併せて日本の管理職の養成システムの事例として、兵庫教育大学が兵庫県教育委員会と連携して実施した「学校管理職・教育行政職特別研修」の受講生主体の参加型研修について論じたものである。 Ｐ２６～Ｐ３０を単著 中田正浩
「第３回　アメリカの学校指導者養成システムについて」	単著	平成25年7月2日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論文は、筆者が兵庫教育大学大学院の修士論文を作成する際、アメリカの学校指導者養成システムについて調査・研究のため訪問したテネシー州のヴァンダービルト大学とカリフォルニア州立大学・フレズノ校で取り組んでいる学校指導者養成プログラム（教育管理職免許状カリキュラム】について紹介したものである。 Ｐ２４～Ｐ２９を単著 中田正浩
「第４回　教育提言～教育コラボレーション・堺プラン～」	単著	平成25年6月18日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論文では、堺市教育委員会とＮＰＯ法人「南大阪地域大学コンソーシアム」とが募集した「堺市の教育研究と実践」（＝堺市の教育提言）において優秀書を受賞した論文「学校指導者養成・研修システムの外部機関との連携について～堺プラン～」を詳細に論じたものである。 Ｐ２２～Ｐ２７を単著 中田正浩
「第５回　学校指導者に求められる“危機管理能力”について」	単著	平成25年7月2日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論では、学校指導者に求められる”危機管理能力”とは何か、教育現場における危機感とは何か、学校現場に潜む機器・管理などについて、筆者が校長時代に経験した危機管理の具体的事例（腸管出血性大腸菌Ｏ－１５７の取り組み）を通して、学校の状況・説明責任問うについて詳細に論じたものである。 Ｐ１８～Ｐ２５を単著 中田正浩
「第６回　教職員評価と人材育成　①　」	単著	平成25年9月3日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論では、教育現場における人事考課として、１９５８年から実施された“勤務評定制度”の成立背景やその功罪（勤評反対闘争のハンストやでも、旧加藤壮・裁判闘争など】及び年代を経ることで、評定することが形骸化してしまった。勤評制度に代わり２００４年度に新たに導入された「評価・育成システム」について述べたものである。 Ｐ２０～Ｐ２４ 中田正浩

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「第７回　教職員評価と人材育成　②　」	単著	平成25年9月17日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論は、前回に引き続き「教職員評価と人材育成」について述べたものである。 21 世紀に入るや各都道府県教育委員会が公務員制度改革の動向を踏まえながら、”教職員評価と人材育成①“で述べた勤務評定制度に代わって、新しい評価システムとして”自己申告制度と人事考課制度“を導入した。 内容は、教職員評価制度の成果と課題として、システムが果たして教職員の意欲や資質の向上につながっているのかなど、筆者が校長時代に経験したことを論じたものである。 Ｐ２２～Ｐ２５を単著 中田正浩
「第8回　学校・家庭（保護者）地域・関係機関の連携について　①　　」	単著	平成25年11月5日	『教育ＰＲＯ』 ＥＲＰ株式会社	本論では、校長・教頭を対象に「学校・家庭・地域・関係機関の連携について」のアンケートを実施した。その結果から、見えてきたものをベースに、各都道府県教育委員会が作成した保護者対応のマニュアルを紹介した。併せて、筆者が岡山県教育委員会の依頼による研修会で取り上げた内容について論じたものである。 Ｐ２４～Ｐ２９を単著 中田正浩
「第9回　学校・家庭（保護者）地域・関係機関の連携について　②　　」	単著	平成25年12月3日	『教育PRO』 ERP株式会社	本論は、前号の「学校・家庭（保護者）地域・関係機関の連携について」に引き続き、開かれた学校づくりを目指して地域社会及び関係機関との連携を進めるうえで、筆者校長時代に取り組んできたことで、具体的に地域社会の人材である保護司・民生委員・児童委員の活用などを織り込んだ関係機関との関係づくりについて論じたものである。 ＰＰ１６～Ｐ２１を単著 中田正浩
「第10回　教育課程の編成について　①　」	単著	平成26年2月18日	『教育PRO』 ERP株式会社	本論では、校長の職務内容としての権限に「教育課程の編成権」があり、その「教育課程（カリキュラム）の編成権」について述べたものである。 まずは、教育課程という文言が「いつの時代から使用されたものなのか」（１９５１年版の学習指導要領【一般編】）から始め、その教育課程の編成こそが“自律的学校経営＝特色ある学校づくり”につながることを論じたものである。 Ｐ２４～Ｐ２９を単著 中田正浩
「第11回　教育課程の編成について　②　」	単著	平成26年4月15日	『教育PRO』 ERP株式会社	本論では、前号に引き続き「教育課程の編成権」について校長・教頭にアンケートを実施した。その実施結果を踏まえながら、筆者が最後に赴任した学校では教育課程が適正に実施されていなかったので、その適正化にかなりのエネルギーを費やした経験を述べたものである。 Ｐ１６～Ｐ２１を単著 中田正浩
５「社会科教育における『地理教育』の諸問題」～小学校社会科における『地理教育』への提言～	単著	平成26年9月	奈良学園大学紀要」第1集	本論文は、小学校から高校に至る教育課程における”社会科地理教育“（＝歴史や公民と関わりながら社会科の一部を構成する教育）の現状を概観し、戦後の社会科教育の中で地理教育が学習指導要領の改訂と歩んできた過程、また次世代を目指す小・中・高校における地理教育に関する諸問題（実態と課題）について考察すると共に、地理教育の未来に向けて書・中・高校へ一貫したカリキュラム作りへの提言を行うものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				Ｐ１～Ｐ９を単著 中田正浩
６「新設大学における教師教育の高度化とそのジレンマ　～６年間の軌跡～」	単著	平成 26 年 9 月	日本教師教育学会「課題研究Ⅲ：教師教育の高度化」研究報	論文は、昨今の教員養成における諸制度改革が進行する中で、特に”教師教育の高度化“に逆行するような、私立大学の教員養成課程が安易に教員免許取得を大学の売りにしてよいものだろうかと、平素より大学教員としてジレンマを感じていた。筆者の所属していた大学は、経営方針として学生にダブル・トリプルの免許取得を奨励していた。複数免許取得の場合は、修得単位数が広く浅くなりやすく、教員に求められる専門的知識及び各教科等の指導力を十分に養成できるのか、長年にわたり疑問に感じていたことを、集約したものである。 Ｐ２６２～Ｐ２６３・Ｐ２７８～Ｐ２８０を単著 中田正浩
７「校長公募制度（「民間人校長等登用制度」）の実態と課題について」	単著	平成26年10月	兵庫教育大学大学院研究誌「教職の先達」　第2号	本論文１９９０年代以降、規制緩和と地方分権をキーワードに、教育改革の一環として学校経営についても、学校外から”民間人校長の導入”が図られることとなった。 その民間人校長に対する筆者の問題意識を述べるとともに、民間人校長の導入経緯・法的根拠や任用者の前職と募集方法及び選考方法、研修期間と研修内容について縷々論じたものである。 しかし、民間人校長が導入されて１０余年が経過した時点で、退職・更迭・トラブルが大阪市で続出していることから、その導入は拙速ではなかったのかという批判も少なからず教育界には存在している。 このテーマを、今後は科研費で応募し実際に校長との面接やアンケートによって、明確な民間人校長の功罪を明らかしたい。この論文はその序章に過ぎない。 Ｐ５２～Ｐ５９を単著 中田正浩
８「中学・大学教員として教育実践研究活動」	単著	平成 26 年 10 月	兵庫教育大学大学院研究誌「教職の先達」　第2号	本小論文は、兵庫教育大学大学院及び同窓会から大学院修了生（中田正浩）の中学・大学教員として、日々の教育研究活動に対して、「平成25年度嘉野賞」受賞に至るまでの記録を集約したものである。 48年間を4期に分けて、その期間と職歴、備考欄に教育実践研究活動のあらましを一覧表や研究成果の著書・論文等を写真データで提示し、また著作一覧の一部も掲載した。 Ｐ２４～Ｐ２７を単著 中田正浩
９「人間教育を視点にした幼・保・小の連携」	単著	平成２６年１２月	人間教育学研究」第2号	本論文は、小学校へ進学する子供たちにとって、何が段差となるのだろうかという視点から「保育所・幼稚園から小学校へ」の連携について、小学校 1 年生の子どもの様子や日常の声などを集めることで、子どもが感じている段差について述べたものである。 論中では、第 2 章で「連携」と「交流」の具体的実践例を挙げながら、第 3 章では、教職員の相互理解へと発展させ他内容となっている。 ｐ２３～ｐ３０

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） １「教職員の不祥事問題防止のための具体的方策　―教育委員会の取り組みについて―　」	―	平成18年10月14日	日本教育行政学会 第41回大会 （於:国立オリンピック記念青少年記念総合センター）	本発表は、教職員の不祥事問題防止のための具体的方策として、都道府県・政令指定都市の各教育委員会の取り組みについて、啓発冊子・リーフレットの作成状況「懲戒処分の基準」・「懲戒処分の公表基準」の策定状況、「不祥事防止対策委員会」の設置状況をアンケート結果に基づき発表を行った。 Ｐ３０～Ｐ３１
２『『自律的学校経営』を視点とした学校指導者の養成プログラムの一構想　～政令指定都市堺市の場合～」	―	平成19年6月3日	日本教育経営学会 第47回大会 （於：玉川大学）	本発表は、兵庫教育大学大学院修士論文の『『自律的学校経営』を視点としたスクールリーダーの養成プログラムの一構想　～堺市の場合～」の第5章を発表したものである。 新たな学校指導者養成の必要性と動向、新しい学校指導者養成システムを“堺市教育会”を中心に“堺市教育せんた―”と“堺市職員能力開発センターと”南大阪地域大学コンソーシアム“とのコラボレーションによって構築したものである。 併せて、養成プログラム・モデル【学校経営基礎科目・自律的学校経営科目・スキル向上科目・実地体験科目・ポートフォリオ作成】について発表をした。 Ｐ６８～Ｐ６９
３「ＮＩＥ導入による教職科目への教育効果について　～『学級経営実践論』を通して～」	―	平成23年11月26日	日本ＮＩＥ学会 第8回大会（於：鳴門教育大学）	本発表は、新聞等の活字メディアをあまり購読しない学生の実態改善のため『学級経営実践論』の講義を活用してＮＩＥ実践を行った。 毎授業時の３分間プレゼンを中心とし、元中学校教員のキャリヤを生かした『学生に興味・関心を持たせつつ、実力を養成する仕掛け』が組み込んだ内容を報告した。 Ｐ３０
４「小学校社会科におけるＮＩＥのすそ野を広げるために―教員免許更新講習を通して―」	―	平成25年11月24日	日本ＮＩＥ学会 第１０回大会（於：名古屋学院中学校・高等学校）	本発表は、小学校におけるＮＩＥ実践者のすそ野を拡大するために、教員免許更新講習において小学校社会科の授業改善に生きるＮＩＥの魅力や取組のポイントを理論的実践的に提案した。 また、併せて岡山県内の大学教員で組織されているＮＩＥ大学部会の実践交流についても報告を行った。 Ｐ４４
５「新設大学における教師教育の高度化とそのジレンマ」	―	平成26年3月23日	日本教師教育学会 第8回例会 「課題研究　Ⅲ教師教育の高度化　」　（於：大阪教育大学天王寺キャンパス）	本発表は、小学校教員及び中高の体育科教員養成を主たる目的に設立された、岡山県内の新設大学（私立）の１期生から３期生までの、４年間の取り組みについて発表をした。 報告内容の第一点は、前述の卒業生（教員採用試験合格者）の追跡調査として、学校訪問及び面接・アンケート（本人・校長）を実施した結果及び第二点は、当学会の研究趣旨である”教師教育の高度化”に相反するダブル・トリプル免許の取得推奨の是非論についてであった。
６「校長公募制度（民間人校長）等登用制度）の実態と課題について」		平成26年10月11日	日本教育行政学会第49回大会 （於：東京学芸大学）	本発表は、兵庫教育大学大学院同窓会の研究誌「教職の先達」第2号（発行：平成26年10月）に掲載された論文を本学会で発表したものである。 発表内容は、校長公募制度における実態と課題である。民間人校長制度が平成10年9月の中教審答申「今後の地方教育行政の在り方」の第3章「学校の自主性・自律性の確立について」において、“校長・教頭への適材の確保の一環として任用資格の見直し”が提唱されたことにより、教育界に新たに民間人校長が具体的に登用された。 それから、約１０余年経過した現在、民間人校長を積極的に登用している大阪市を中心に、いろんな問題が生じてきている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				今回は、校長公募制度の実態と課題について述べることとした。
７「小学校教員養成課程における教職科目のＮＩＥへの取り組み～新聞記事の意図的導入～」		平成26年12月６日	日本NIE学会第11回仙台大会（於：東北福祉大学）	本発表は、新しく赴任した奈良学園大学人間教育学部の学生が、余りにも活字離れが激しいので、その解消方法として新聞記事を活用することとした。日常生活の中で、自然に学生が活字に慣れ親しむとともに、新聞記事を通して現代的教育課題に積極的にアプローチできる学生の育成に努めている方法を、具体的に報告するものである。 新聞活用の講義は、「教育原理初等A」「教育原理中等B」の二科目である。 「教育原理初等A」では、学生自ら教育に関する記事を選択させて、指定のレポート用紙に記事を添付させ、キーワード及び記事の要約、１分間スピーチの原稿などを集約して毎回提出させる。「教育原理中等B」は、授業者から新聞記事を前時に配布し、自宅学習で記事を読み込んだり、 新たに自ら関係する記事を探したりして、授業に臨む。授業では討議の柱を中心に班別にブレインストーミング、ディベート、プレゼンテーションなどの手法を採用する。 発表内容としては、上記の二科目の実態とその成果について報告をした
「教育提言」 １『自律的学校経営』を視点としたスクールリーダーの養成プログラムの一構想　～堺市の場合～　」	単著	平成18年3月	『堺の教育研究と実践』 堺市教育委員会 ＮＰＯ法人南大阪地域大学コンソーシアム	本提言は、堺市の政令指定都市昇格を機会に、堺市独自のスクールリーダー養成スキムを既存の「堺市教育センター」を核に「堺市職員能力開発センター」「ＮＰＯ法人南大阪地域大学」と財政支援団体として「堺市教育会」らをコラボレーションせることで、将来のスクールリーダーを望む教員に足して、スキルアップやキャリヤ開発のためのカリキュラムモデルの構築を堺市に提言したものである。 講評として、最も論旨が明確で読みやすい文章構成になっていると評価され、優秀賞〔第一位〕に選出された。 Ｐ７１～Ｐ７４を単著
「講演・研修会」 １「学校に対する苦情・不当な要求等への対応研修会」	―	平成21年11月	岡山県教育委員会研修指導課　生徒指導班	本研修会は、学校への苦情や不当な要求等により、教職員の保護者等への対応はますます困難になっている。適切な対応の在り方について研修を行うことで、その苦情等に教職員がより適切に対応することが出来るようにする。 グループ演習を通じて、不当な要求の問題に対して実態を踏まえながら、その対応策と未然防止のために必要なことについて参加者とともに協議した。 学校で生起している、保護者や地域の方からの苦情・不当な要求等への対応について、苦情の理解や予防・対応の準備等を教育行政・管理職の経験をまじえながら、具体的に講義と演習の両面から指導した。
２「学校に対する苦情・不当な要求等への対応研修会」	―	平成22年8月	岡山県教育委員会研修指導課　生徒指導班	本研修会は、昨年に引き続き学校への苦情や不当な要求等により、教職員の保護者等への対応はますます困難になっている。適切な対応の在り方について研修を行うことで、その苦情等に教職員がより適切に対応することが出来るようにする。 グループ演習を通じて、不当な要求の問題に対して実態を踏まえながら、その対応策と未然防止のために必要なことについて参加者とともに協議した。 学校で生起している、保護者や地域の方からの苦情・不当な要求等への対応について、苦情の理解や予防・対応の準備等を教育行政・管理職の経験をまじえながら、具体的に講義と演習の両面から指導した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３「学校に対する苦情・不当な要求等への対応について」	―	平成23年12月	岡山県新見市内高等学校生徒指導連絡協議会	本講習会は、新見市内の県立・私立高校の生徒指導担当教員を対象に、生徒指導連絡協議会が実施したものである。 学校への苦情や不当な要求等により、教職員の保護者等への対応はますます困難になっている。 適切な対応の在り方についての研修を行うことで、その苦情等に教職員がより適切に対応することが出来るようにする。 グループ演習を通じて、不当な要求の問題に対して実態を踏まえながら、その対応策と未然防止のために必要なことについて参加者とともに協議した。 学校で生起している、保護者や地域の方からの苦情・不当な要求等への対応について、苦情の理解や予防・対応の準備等を教育行政・管理職の経験をまじえながら、具体的に講義と演習の両面から指導した。
４「学校を変える管理職の力～次世代の学校づくり～　」	―	平成25年1月	岡山県加賀郡吉備中央町教頭会	本研修会は、吉備中央町における小・中学校の教頭先生13名の参加で実施されたものである。 テーマにあるように、「校長が変われば学校が変わる」とよく学校関係者が使うフレーズであるが、実際には、学校を変える力は教頭であると、講演者（中田）の教頭経験から話し始めた。そして、日本教育の状況（文部科学省・中教審等の動き）などについて述べるとともに、残りの30分は、今教頭として教育現場で直面している問題や課題について質問を受けて、それに回答していった。非常に有意義な2時間であった。
５「学校を変える管理職（教頭の力～次世代の学校づくり・人づくり～」	―	平成26年9月	加古川市教育委員会 加古川市教頭会	本研修会は、兵庫県加古川市内における小・中学校・特別支援学校の教頭先生４０名＋教育委員指導主事２０名の参加で実施されたものである。 講演内容は、次の４本柱と“教職員の不祥事について”は、演習として４０分程度グループに分けて話し合いと発表形式で実施した。 講演の４本柱は、１．OECDの調査から見えてきたこと、２．私の教頭時代、３．管理職として積極的に取り組んだこと、４．退職後の生き方を模索など約６０分の講義を行った。
「教員免許更新講習」 １「今、求められる学校のあり方」 『教師に求められるこころと品格』	単独	平成21年8月	環太平洋大学・教員免許状更新講習	本講習会では、岡山県における教職員の不祥事が毎年増加傾向にあり、このテーマについては時期を得たものであった。 教育活動において教員に求められる職業倫理と教師個人の資質としての品格を踏まえた上で、教職に対する信頼を損ねる不祥事について、講演者（中田）の著作である「教育現場に求められるこころと品格」から、教職員に対する懲戒処分等の状況及び不祥事の事例について一コマ講義を行い、残りの一コマは不祥事防止のための具体的方策として、事例に基づいて討議課題を課すことで、不祥事が他人ごとではなく自らの周囲で生起していること知る機会となった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2「今、求められる学校のあり方」 『保護者との関係に困った教員のために』	単独	平成23年8月	環太平洋大学・教員免許状更新講習	本講習会では、学校への苦情や不当な要求等により、教職員の保護者等への対応はますます困難になっている。 適切な対応の在り方についての研修を行うことで、その苦情等に教職員がより適切に対応することが出来るようにするグループ演習を通じて、不当な要求の問題に対して実態を踏まえながら、その対応策と未然防止のために必要なことについて参加者とともに協議した。 学校で生起している、保護者や地域の方からの苦情・不当な要求等への対応について、苦情の理解や予防・対応の準備等を教育行政・管理職の経験をまじえながら、具体的に講義と演習の両面から指導した。
3今、求められる教科指導（1・2）」 『新学習指導要領の実施とＮＩＥの活用』	単独	平成23年8月	環太平洋大学・教員免許状更新講習	本講習会は、新学習指導要領がすでに4月から小学校では実施されているが、特に社会科改訂の経緯・趣旨・要点（目標・内容）等の再確認をお行い、次いで、ＮＩＥの活用ということで、参加者はコンピュウター室において”歴史新聞づくり“に挑戦をした。この様子は、翌日の山陽新聞に取り上げられた。
4「今、求められる小学校教育（1・2）」 『授業づくりに生かすＮＩＥ教育』	単独	平成24年8月	環太平洋大学・教員免許状更新講習	本講習会は、前年度から新学習指導要領が実施されているが、そのポイントの一つに「言語活動の充実」がうたわれ、それを受けて、各教科・領域で新聞活用が教材として教科書に提供されている。 そこで昨年に引き続き小学校社会科の授業づくりにＮＩＥの導入によって、児童に興味・関心を持たせる方法論を、「社団法人日本新聞協会」発行の『新聞活用の工夫提案』を使用して、参加した先生方に講義を行った。次いで二コマ目はコンピューター室において、新聞づくりに挑戦をした。 この様子は、翌日の山陽新聞に取り上げられた。
「新聞掲載・放送放映」 1「学校支援ボランティア　地域貢献に一役　環太平洋大学の次世代教育学部生」	一	平成20年2月	山陽新聞（岡山版） 記者:山崎英樹	掲載内容は、指導する学生を早い段階から教育現場の雰囲気を知らせるために、岡山市の学校支援ボランティアを募集し、市内の学校園に参加させた。 その結果、人手の不足している学校園側も大変喜び、学生にとっても一つひとつの経験が学生の力となり、相乗効果を生み出しているところを、新設大学で一期生が地域貢献を果たしているということで、取材を受け掲載されたものである。
2「教職員不祥事を中田講師〔環太平洋大学〕が本刊行	一	平成20年5月	山陽新聞（中国地方） 記者:大島望	掲載内容は教職員の不祥事をテーマにした『教育現場に求められるこころと品格』（大学教育出版）を単著で刊行したところ、6段組みで紹介をされたものである。 具体的な内容は、著者が教師として赴任してから教育委員会の指導主事、校長を経てまでの経験を基に、問題点や防止策を事例ごとに指摘し、「不祥事の現実をみせることで、過ちを無くす取り組みにつなげたい」とまとめている。
3「教員不祥事防止策をまとめる　元中学校校長事例集め出版」	一	平成20年8月	朝日新聞（全国版・生活面） 記者:中塚久美子	掲載内容は、堺市の中学校長や大阪府・堺市教育委員会の指導主事など、37年間の教員経験のある環太平洋大学講師の中田正浩氏が、教員らの不祥事の実例を集め、、防止ポイントをまとめた。「事件から見た教職員の不祥事防止　教育現場に求められるこころと品格」（大学教育出版）を出版したところ、全国版の3段組みで紹介された。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４「岡山県内における教職員不祥事に関するコメント」	一	平成22年1月	NHK岡山放送局 記者：山田紗規子	放映内容は、平成２１年４月から年末にかけて岡山県内の教職員が不祥事にて１０名が懲戒免職処分となった。この異常事態について、岡山県内でこれだけ不祥事が発生するには教員に何か問題があるのか、管理職や教育委員会の指導が甘いのかなどの質問に対して、コメントを求められた。 １月１８日の午後6時１０分から岡山県愛に放映された。
５「高校無償化　公立優遇格差を助長　奨学金拡充優先を」	一	平成22年7月	読売新聞（岡山版） 記者:黒田聡子	掲載内容は、民主党が２００９年御衆議院選挙の公約に掲げ、今年度４月から開始された高校授業料無償化について、小・中学校の管理職経験があり、教育行政にも長く携わった中田に、制度の是非論についてインタビューを受けたもので、具体的事例を挙げながらコメントしたものである。
６「あいさつや掃除　学生と励行」	一	平成22年8月	読売新聞（全国版） 大学の実力・社会性を育てる③ 記者:松本美奈	掲載内容は、「大学の実力」調査において、社会性を育てる手段として、あいさつや清掃の励行を挙げる大学の中で、本学で実施していることを中田ゼミの学生が教育実習先で、児童の登校時における挨拶や毎朝学校の周囲を清掃し、子どもを迎えた話と中田自身の講義の中での取り組みについて紹介されたものである。
７「教員免許更新へ講習　小学校教員が紙面作り」	一	平成23年8月	山陽新聞（全県版） ＮＩＥ　教育に新聞を 記者:船越元洋	掲載内容は、「ＮＩＥ」活動に取り組んでいる岡山県内の学校を紹介している掲載欄に、環太平洋大学で実施された教員免許状更新講習で、中田がテーマ「新学習指導要領とＮＩＥの活用」の中でＮＩＥを取り上げたことが紹介された。
８「出張講義の教員一目で　環太平洋大学紹介パンフ作る」	一	平成23年8月	山陽新聞 記者:小谷章浩	掲載内容は，環太平洋大学が本年度より、岡山県内の幼稚園・小・中・高等学校等の教育現場に講師を派遣する活動を社会貢献の一環として開始した。 講師の25人は次世代教育学部の所属教員で、テーマなどを紹介するパンフレット「次世代教育学部教員による出張講義と派遣のご案内」を紹介したものである。
９「日本ＮＩＥ大学部会セミナー　活用実践例を報告」	一	平成23年12月	山陽新聞 記者：中田秀哉 山本雅子	掲載内容は、日本ＮＩＥ学会第８回徳島大会（於：鳴門教育大学）における岡山関係者（環太平洋大学・川崎医療大学等）の発表内容を詳細に報告されたものである。
１０「岡山でＮＩＥ大学セミナー　活用実践例を報告」	一	平成24年8月	山陽新聞 記者:瀬尾由紀子	掲載内容は、県ＮＩＥ推進協議会の大学セミナーとして山陽新聞社本社で開催された。 そのセミナーにおいては、大学の講義の中で新聞を活用した事例として、３人（環太平洋大学・ノートルダム清心大学・川崎医科大学の３大学）の教員が各々の取り組みについて発表された内容が掲載された。
１１「新聞をもとに真剣議論　奈良学園大学、対話力育む授業」	—	平成26年10月	朝日新聞 記者：浦島千佳	掲載内容は、「教育原理Ｂ（中等）」の講座で教育に関する新聞記事を活用して、学生同士で議論をしながら、自らの意見を簡潔に伝えたり、人の話を聞いたりする力を養うのが目的である。 新聞に掲載されたテーマは「全国学力調査の公表の是非について」であった。学生たちは関連する記事を家庭学習で読み込んだうえで、公表側と非公表側に分かれてディベートを行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　山 本　美 紀

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
教育学（教育学・教科教育学） 芸術学（芸術学・音楽学・芸術史･芸術一般）	各教科の教育（音楽）、教材開発、教科外教育音楽学、 芸術・文化政策

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
・パワーポイントと連動した学生配布用ワークシートおよび資料の作成 ・インターネット上での授業内容の公開 ・インターネットを利用した授業のフォローアップ	平成 17 年 4 月～平成 17 年 9 月	神戸女学院大学音楽学部音楽学科の非常勤講師として担当の「器楽史」（専門科目、3 年次配当、半期、2 単位、選択 2 単位）において、歴史的に希少価値の高い資料を扱う必要性から、視覚教材などを含めパワーポイントの機能を駆使した授業を行った。また、学生の質疑応答は口頭だけでなく、インターネットも利用し、その内容を加えて「Blackboard」（授業内容に関しての情報を学生に提供するサイト。日々更新される。）上に「先週のノート」としてアップした。その結果、学生の具体的理解が促進され、ニーズに即した満足度の高い授業となった。
・講義・演習授業の効果的連携	平成 18 年 4 月～平成 20 年 9 月	大阪キリスト教短期大学神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽講義」（専門科目、1 年次配当、半期、選択 2 単位）において、明治期の日本に赴任した宣教師による初期の音楽教育史および唱歌について講義。さらに同短期大学専攻科神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽演習」（専門科目、2 年次配当、通年、選択 2 単位）と連動させ、教会における音楽活動が今日の音楽教育の原型を提供していることを踏まえ、歌唱指導の模擬授業や指揮法・編曲法をはじめとした音楽教育法の実践演習を行った。その結果、日本における音楽教育の歴史的事項を押えながら、地域の音楽活動拠点となる教会での音楽活動について学生たちにとって応用性の高い講義となった。
・講義・演習授業の効果的連携 ・視聴覚教育技術の利用	平成 23 年 4 月～現在に至る	教育学部専任准教授として、「音楽の理解」（講義）において、音楽の専門用語及び音楽の思考法について徹底した理解の定着を行う。その知識を、「音楽科指導法（教育法）」（演習）での学習指導要領の内容理解につなげ、模擬授業の指導案作成及び実施に際して、具現化できるよう指導を行った。特に、合奏指導に関する模擬授業については、楽譜の編曲指導、楽器の演奏法など、より実践に則したものとなるよう、小学校での大学生によるボランティア指導の様子などの記録ビデオを使用し、学生によりイメージを持ちやすく指導を工夫した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
・視聴覚教育技術の利用	平成 20 年 10 月～平成 21 年 9 月	関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位）において、グレゴリオ聖歌の原曲と楽譜、またその現代における応用例を、視聴覚教材を用いて講義した。特に、グレゴリオ聖歌は音楽教育として初期に用いられたものでもあるため、各国図書館に保存されている画像を提示の上、旋律線をアップル社のアプリケーションなど最新機器を用いて再現した。その結果、学生たちにはより具体的な理解が促進されたと同時に、教職を希望する学生の受講者も多かったため、音楽教育法の歴史的体験も可能となり、満足度の高い授業となった。
・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授		環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）において、特にⅠ・Ⅱを実習必修科目と設定。科目の到達目標を実習で使用できる音楽能力の確保（ピアノ基礎と弾き歌い）と設定し、各自のレベルに応じて完全個別レッスンを実施。 　さらに、音楽系科目「音楽の理解」（専門科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位）「音楽科教育法」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「表現 B（音楽表現）」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）と教科内容を連動。学生がスパイラルに多様な音楽的能力をつけられるよう工夫した。その結果、学生の理解と音楽的実力が伸び、実習先からも実習生に高い評価を得られるようになった。
・演習・実習の効果的な活用 ・楽器奏法の教授	平成 23 年 4 月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「表現 B（音楽表現）」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）において、小学校学習指導要領、幼稚園教育要領を詳説したうえで、いかに具体的教育実践へ落とし込んでいくか、実例を挙げて解説。指導案作成指導とともに、模擬授業を実施し、教育法の実践的活用を具体的に指導した。その際、初等教育で使用する楽器（カスタネット・タンブリン・鈴・ピアニカなど）や小学校で使用するリコーダー等の基本的な奏法も、授業で活用できるよう指導した。その結果、音楽科教育や幼児への音楽表現の指導に対する理解が深まり、実習先からも高い評価を得ると同時に、2 次試験対応能力が向上し、学生の教員採用試験、公務員試験（専門職）合格に貢献した。
・レポートの活用 ・オフィスアワーの活用	平成 23 年 4 月～現在に至る	大学におけるリメディアル教育やキャリア教育の一環として取り組まれてきた「学習支援講座（国語）」「小論文講座（基礎）（応用）」「基礎ゼミ」、「教職表現力演習Ⅰ、Ⅱ」では、レポートの提出による学生の文章力の向上に貢献してきた。 　特に「教職表現力演習Ⅰ」では、教職に必要な基礎的日本語運用能力の向上を、同Ⅱでは教職に必要な文章スキルを基盤とした、社会的文章構成力を培い、各テーマに即した文章作法を指導した。さらに

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
		オフィスアワーでは、自由なディスカッションも取り入れ、学生たちの個々の問題意識を文章に活かす指導を行った。その結果、学生の段階的な日本語運用能力が向上し、論理的思考力の育成に貢献した。
・大学教育と連動した地域への実践教育	平成23年4月～平成25年3月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「子育て支援実践演習Ⅰ」（コア科目、2 年次配当、通年、選択 4 単位）、「子育て支援実践演習Ⅱ」（コア科目、3 年次配当、通年、選択 4 単位）において、地域貢献のための実践教育を実施。学生たちの、地域の子育て支援ができる技能や発想力、また企画運営のための即戦力を育成する実践教育を行った。その結果、学生たちのコミュニケーション能力の向上がみられ、地域の評価を高めた。
・授業用コミュニケーションシート（大福帳）の活用	平成26年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽の理解」（専門科目、1 年次配当、半期、選択 2 単位）において、学生とのコミュニケーションの確保・出席の確認・学習内容の習熟状況の確認のために、「授業用大福帳」を導入。各授業終了時に授業内容についての質問の他、学習方法についての質問を記入させ、次回授業に返すようにしている。中には、大学生活全般についての質問なども含まれる場合もあり、学生の出席状況の把握に努めるだけでなく、生活状況の把握にも役立てることができている。
2　作成した教科書、教材		
・講義用補助教材（視聴覚教材） ・学生配布用ワークシート	平成17年4月～平成17年9月	神戸女学院大学音楽学部音楽学科の非常勤講師として担当の「器楽史」（専門科目、3 年次配当、半期、2 単位、選択 2 単位）において、歴史的に希少価値の高い資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。
	平成18年4月～平成18年9月 平成20年4月～平成20年9月 （隔年開講）	大阪キリスト教短期大学神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽講義」（専門科目、1 年次配当、半期、選択 2 単位）において、歴史的に希少価値の高い資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。
	平成20年10月～平成21	関西学院大学神学部の非常勤講師として担当の「キリスト教と音楽」（専門科目、2 年次配当、半期、選択 2 単位）において、歴史的に希少価値の高い資

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
	年３月 平成21年４月 ～9月	料や、フィールドワークで独自に採取した資料を扱う必要性から、パワーポイントによる視聴覚教材および、学生配布用のワークシートを作成した。ワークシートは日付順にファイルすることで最終的に講義ノート（参考書）として完成するようになっており、学習ポイントが明らかになるよう工夫を行った。その結果、学生は復習が可能となり、試験対策時にもポイントを押えた学習が可能となった。
・編曲演習用楽譜教材	平成19年４月 ～平成20年３月 （隔年開講）	大阪キリスト教短期大学専攻科神学部の非常勤講師として担当の「教会音楽演習」（専門科目、2 年次配当、通年、選択 2 単位）において、歌唱指導の模擬授業や編曲法などに用いるための、楽譜教材を作成。基本的な和音運用による穴埋め式のものから、自由に編曲できるまでの教材を作成した。その結果、学生は段階的に編曲の力をつけることができるようになり、各自の音楽実技の能力に応じた編曲が可能となった。
・『小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる』（再掲）　山本美紀 著　ヨベル社（平成 22 年 12 月出版） 【全 96 ページ＋別冊課題 48 ページ】	平成23年４月 ～平成24年３月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（専門科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）のためのテキストである。前半で音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説を行っている。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。
・『幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記』（再掲）山本美紀／岡田美紀編著　ヨベル社（平成 22 年 10 月出版） 【全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】	平成23年４月 ～平成24年９月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現Ｂ（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、幼稚園保育園に関する音楽が関わる学校行事運営において、必須項目について解説した。音楽に関する項目について執筆。 巻末には幼児教育の現場で使用されやすい楽曲の伴奏用楽譜と、小学校の低学年用共通教材の伴奏用楽譜を収録している。基礎的楽典内容などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容担当、山口聖代：編曲担当）
・『新装改訂版　小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	平成24年４月 ～平成26年３月	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「音楽科教育法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に小学校共通教材の編曲された伴奏用楽譜、および図表解説

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
		を追加。さらに授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて解説を強化した。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて、課題を別冊付録として添付し、学生が授業の復習をできるように工夫した。
・『新装改訂版　幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽表現で紡ぐ歳時記と役立つ楽器』(再掲) 山本美紀／岡田美紀編　ヨベル社 (平成 25 年 3 月出版) 【全 B5 判　全 175 頁＋別冊課題 32 頁】	平成 25 年 4 月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部の専任准教授として担当の「表現 B（音楽表現）」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）、「音楽の理解」（専門基礎科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）および「器楽演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」（専門基礎科目、1・2 年次配当、半期、選択 2 単位）のためのテキストである。前刊で「表現 B（音楽表現）」に使用したことをふまえ、小学校低学年用音楽科共通教材、幼稚園教材とともに、現場で用いられやすい基礎的な楽器群について解説を行う。音楽に関する項目について執筆。また別冊には従来の内容に加え、指導案作成用の用紙を添付。授業の復習とともに、実践的な理解ができるように工夫した。（山本美紀／岡田美紀：行事に関する内容、筒井はる香：楽器に関する内容、山口聖代：編曲担当）
・『人間教育としての音楽科教育 ―知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】	平成 27 年 3 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科教育について、人間教育の視点に立った指導法について解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできる「人間教育」としての音楽教育の可能性に焦点をあてたもの。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・神戸女学院大学音楽学部「器楽史」 学科責任者による授業評価	平成17年4月 ～平成17年9月	本学科の重要科目の担当者として、2005年4月より当科目を担当。1-2 年次の発展科目として位置づけられている当科目を、単に歴史を学ぶ座学的な内容であった科目に新たな視点を与えた。講義は氏の研究、活動経験、あるいは綿密な授業計画に支えられ、問題提起・討論を含んだ形で展開され、音楽家としての現代社会との関わりにまで言及した内容となっている。そのため、学生自身の進路への疑問にも直接的にかかわるものとなり、学生の出席率が高い。生徒からの信頼も厚く、エネルギー満ちた、活気ある授業との評価が定着しつつある。
・大阪キリスト教短期大学神学部「教会音楽講義」 学科責任者による授業評価 ・大阪キリスト教短期大学専攻科神学専攻「教会音楽演習」 学科責任者による授業評価	平成18年4月 ～9月 平成20年4月 9月 （隔年開講） 平成19年4月 ～平成20年3月（隔年開講）	平成18年10月より、神学科において「教会音楽」（半期）を担当し、平成19年4月からは、専攻科神学専攻において、「教会音楽演習」（通年）をも担当している。聖書の時代から現代に至るまでの教会音楽の歴史に通暁しており、研究に裏打ちされた優れた講義を行っている。またオルガンの奏法や、讃美歌・聖歌の編曲と合唱など、実技指導にも優れた能力を発揮している。授業に対する学生の評価も高いものがある。大学の教育として、高い教育効果があると思われる。
・関西学院大学神学部「キリスト教と音楽」 平成 20 年度秋学期　学生による「授業に関する調査」結果より（５ポイント満点）	平成 20 年 10 月～平成 21 年３月	１．出席状況：4.1 ３．授業の学習目標が明確：4.9 ４．シラバスに合致：4.7 ５．話し方が聞き取りやすい：5.0 ６．授業での作業量が適当：4.7 ７．内容理解のための授業方法の工夫があった：4.7 ８．担当者の熱意を感じた：5.0 10．全体として満足：4.9
・環太平洋大学次世代教育学部「音楽科教育法」 「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成23年9月	受講生：154名クラス数：2クラス（2コマ） １．資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.39 ２．毎週の学習目標は明確：3.30 ３．話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.46 ４．質問したり、意見を述べたりする配慮：3.23 ５．授業の進度や説明は適切：3.34 ６．授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.34 ７．教員の授業に対する熱意が感じられた：3.36 ８．この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.29 ９．この授業で有用な知識やスキルを習得できた：3.38 10．この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3.35 11．この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちりと行われていた：3.46 12．この授業はわかりやすかった：3.29 13．総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3.30

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
・環太平洋大学次世代教育学部「表現Ｂ(音楽表現)」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成24年3月	受講生：99名クラス数：2クラス（2コマ） １．資料及び白板や教育機材の使用は適切：3.21 ２．毎週の学習目標は明確：3.33 ３．話し方は明瞭で、声量も適切で聞き取りやすい：3.30 ４．質問したり、意見を述べたりする配慮：3.27 ５．授業の進度や説明は適切：3.24 ６．授業への参加意欲が促されるような工夫がされていた：3.18 ７．教員の授業に対する熱意が感じられた：3.39 ８．この授業は適切な方法で展開され、興味を持つことができた：3.28 ９．この授業で有用な知識やスキルを習得できた：3.36 10．この授業では私語・居眠り・携帯電話などの迷惑行為はほとんどなかった：3.43 11．この授業は開始・終了時のあいさつを含めきっちりと行われていた：3.40 12．この授業はわかりやすかった：3.18 13．総合的に見てこの授業は満足でき、受講を後輩に勧めたいと思う：3.18
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の理解」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成27年3月	講義内容・方法：3.29 総合的満足度： 3.44
・奈良学園大学人間教育学部「音楽の世界」「授業評価アンケート」より（4ポイント満点）	平成27年3月	講義内容・方法：3.53 総合的満足度：3.83
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
・地域連携による教育活動 企画／制作 第8回神戸元町ミュージックウィーク主催公演「元町から生まれた音楽―スクエア・ピアノと神戸中央合唱団」 主催：元町商店街連合会／元町ミュージックウィーク実行委員会　協力：神戸女学院大学音楽学部	平成 17 年 10 月 11 日	今年震災後 10 年を迎える神戸元町ミュージックウィーク委嘱企画。神戸を発祥とする、神戸女学院秘蔵のスクエアピアノ(日本最古のスタインウェイ製)と、神戸中央合唱団による。文部省唱歌をはじめ、学習指導要領において歌唱共通教材や旧鑑賞教材に取り上げられてきた作品を中心としつつ、生涯教育の視点に立ち、地域の文化的背景を考慮した、音楽表現教育の実践を行う。出演者:添田 ゆみ(ピアノ)、中村 健（ピアノ/指揮）神戸中央合唱団
・国際交流及び地域連携による教育活動 企画／制作 愛知万博関連企画　ダイナミック・スイス ・プロジェクト「静寂の間」	平成 17 年 10 月 12 日 平成 17 年 10 月 13 日 平成 17 年 10 月 16 日 平成 17 年 10 月 17 日	チューリヒ芸術大学講師ユルゲン・クルーシェ（Juergen Krusche）ら主催「静寂の間」silent place events 公演の東海・関西地区のオーガナイズを担当（全6会場のうち4会場を担当）。出演者、場所のマネージメント及び、企画／制作に携わる。本企画は、愛知万博関連芸術企画及び現代スイスの文化を紹介する「ダイナミックスイス・プロジェクト」の一つに位置づけられており、スイス大使館およびスイス・プロ･ヘルベティア文化協会助成活動。主催／企画：ユルゲン・クルーシェ　共催：スイス・プロ・ヘルヴェティア文化協会　スイス大使館
・地域の大学や文化施設等との連携による教育活動 企画／制作 神戸女学院創立 130 年記念　神戸女学院音楽科(現音楽学部音楽学科)100 周年記念「－日本最古のスタ	平成 17 年 10 月 15 日	神戸女学院草創期のスクエア・ピアノと、現在の神戸女学院大学音楽学部アウトリーチ履修生による。文部省唱歌をはじめ、学習指導要領において歌唱共通教材や旧鑑賞教材に取り上げられてきた作品

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
インウェイが語る－　元町音楽物語　神戸女学院秘蔵のスクエア・ピアノの展示と演奏」 主催：神戸女学院 共催：神戸市立博物館		を中心とした企画を行う。本企画は、博物館でのスクエア・ピアノの展示を伴い、生涯教育の視点に立ち、地域の文化施設による地域の文化的背景を考慮した、音楽表現教育の実践を行う。
・地域の公的機関との連携による教育活動 プロデュース・企画・講師を担当 NHK 神戸放送局 委嘱作品「NHK 公開セミナー　うみをあげるよ ～絵本とリズムで体験するファンタジー～」	平成 18 年 7 月 9 日	NHK 神戸放送局（トア・ステーション）において、「NHK 公開セミナー　うみをあげるよ ～絵本とリズムで体験するファンタジー～」を企画。幼児から小学校低学年の児童とその保護者対象としたものであり、村上勉「うみをあげるよ」の絵本を軸にしながら、小学校音楽科歌唱共通教材、および旧鑑賞共通教材から抽出した音楽で構成。マリンバのコンサート、およびボディーパーカッションによるワークショップを展開。親子のふれあいと共に、子どもの発達に応じた音楽的表現の発露の機会として、参加者に好評を得る。（2 回公演）
・地域の公的機関との連携による教育活動 京都フィルハーモニー室内合奏団 プロジェクト会議メンバー	平成 22 年 1 月より現在まで	京都フィルハーモニー室内合奏団の「子どものためのコンサートシリーズ」拡充にあたってのプロジェクト会議。ここでの内容が、コンサートに反映されていくものである。企画会議メンバーとして、子どもの発達に応じた、地域の教育機関としてのオーケストラの在り方について、提言する。 第 1 回：平成 22 年 1 月 7 日 第 2 回：平成 23 年 3 月 17 日 第 3 回：平成 23 年 8 月 5 日
・免許更新講習（幼稚園教諭免許）	平成 23 年 7 月 25 日 平成 24 年 8 月 23 日	幼稚園教諭免許更新に関する講習会を実施。わらべ歌を用いた音楽表現活動や、様々な楽器を用いた表現活動、ボディーパーカッションによる音楽表現などについて、即実践可能な講習を行う。音楽的技能だけでなく、身の回りの様々な素材に着目した講習内容であり、満足度の高い授業として受講者の多い科目である。
・平成 23 年　芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育－新教育課程とその実践－」 （於）芦屋市立宮川小学校 主催：非営利特定団体　人間教育研究協議会 教科部会「音楽」コーディネーター	平成 23 年 8 月 12 日	「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。コーディネーター発表主題：音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる　―広がる教室とこころの育ち ―
・備前市立西鶴山小学校（岡山県教育研究会　音楽部会 研究指定校）スーパーバイザー 研究授業テーマ「音楽科教育と他教科連携」	平成 24 年 4 月 1 日～25 年 3 月 31 日	岡山県教育研究会音楽部会研究指定校である備前市立西鶴山小学校スーパーバイザーに就任。校内研修・研究授業などにおいて指導助言を行う。「音楽科教育と他教科連携」をテーマに、地域の教育資源としてのアウトリーチの活用と育成、また学校によるコンサートホールや美術館博物館など公共施設の活用について指導助言を行うとともに、施設の学校対応について具体的な提案を行い、両者のコーディネートに携わる。 校内研修会講師：平成 24 年 4 月 24 日、6 月 8 日、6 月 29 日、平成 25 年 2 月 27 日 研究指導助言：平成 24 年 10 月 25 日、平成 25 年 1 月 8 日（於：環太平洋大学）、

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
		公開研究中間発表会 講師：平成 25 年 2 月 27 日 公開研究大会：平成 25 年 11 月 6 日
・備前市立西鶴山小学校　PTA 主催 教育講演会 「希望となる音楽 ―人種差別を超えて」	成 25 年 1 月 17 日	備前市立西鶴山小学校　PTA 主催による講演会であると同時に、6 年生・5 年生の「道徳」と「音楽」の授業時間に相当するものとして計画された。 児童が日ごろあまり触れる機会のない、他国の人権問題としてアメリカの人種問題をとりあげ、「ゴスペル」と言われるジャンルのうち、人種問題に付随した形で発展してきた「黒人霊歌（ブラック・スピリチュアル）」について講演する。公演では途中に代表的な「ゴスペル」の鑑賞・体験としてのワークショップを取り入れた。地元放送局・新聞社にとりあげられる。
・研究実践授業 「音楽から生まれるダンス―ダンスはどんなふうに生まれるの？」	平成 25 年 2 月 15 日	科学研究費補助金 基盤研究 B による、研究実践授業。備前市立西鶴山小学校 3 年生の児童を対象に、来年度の校内コンサートに向けて、作品理解を深めるための事前指導として行う。 ＜内容構成＞ ・レクチャー　物語から音楽へ 『ももたろう』のルーツとも言われているインドの民話『ラーマヤナ』の物語と、それをもとに生まれた弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』を紹介し、子どもたちの身近な物語と、弦楽四重奏曲をつなぐ。 ・ワークショップ　音楽から生まれるダンス 実際に弦楽四重奏曲『ソヴァン・マチャ』から生まれたダンスを映像で観た後、第 3 学年音楽科教科書にあるビゼー作曲「アルルの女」より≪鐘≫を鑑賞した後、音楽のイメージからダンスを創作する。
・地域の公的機関との連携による教育活動 三郷町公開セミナー（三郷町村役場） 「地域と大学をつなぐボランティア・ワークの可能性」	平成 26 年 10 月 10 日	本セミナーでは、学校と地域との連携による教育の在り方について、「ボランティア」をキーワードに講演を行った。具体的な事例として、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する地域連携による芸術教育プログラムをとりあげ、ボランティアとは何か、受け入れる際の注意点や、確認すべきこと柄など、実際のケースに応じた内容から、地域との連携による教育的可能性の広がりについて解説した。
・展覧会シンポジウム・パネリスト 『會舘の時代　－中之島に華開いたモダニズムとその後』（東京大学 比較文学比較文化研究室、表象文化論研究室主催） 山本美紀「朝日会館から大阪フェスティバルホールへ　アウセイ・ストローク　－文化装置のデザイナーとしての音楽マネージャー」	平成 27 年 3 月 14 日	1926 年から 1962 年までかけて存在した「大阪朝日会館」とその機関誌『會舘藝術』の、関西のモダニズム運動をけん引した働きについてのシンポジウムと展覧会。その中で、文化施設・機関雑誌として、社会的に果たした教育的役割と啓蒙的役割、またその後の生涯教育との関連性について解説を行う。特に音楽マネージャーと日本人スタッフによって達成された地方公演は、遠征地での児童たちとの関わりを可能とし、洋楽受容をより身近なものとして受け止めることを可能にした点に注目した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
5　その他 ・科学研究費補助金 基盤研究Ｃ　研究分担者	平成 22 - 24 年度	「地域の教育・文化施設における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」 研究経費：平成 22 年度　2,100 千円、平成 23 年度 600 千円、平成 24 年度　600 千円
・科学研究費補助金 基盤研究Ｂ　研究代表者	平成 23 - 25 年度	「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」 研究経費：平成 23 年度　3,000 千円、平成 24 年度 2,500 千円、平成 25 年度　2,500 千円
・平成 23 年度 学内特別研究費（環太平洋大学）研究分担者	平成 23 年度	「英語社会で活躍をする際の心理的障害に関する実践研究　－国際学会参加支援を通して－」 研究経費：294 千円（単年度）
・平成 25 年度　公益財団法人　ローム　ミュージック　ファンデーション　「音楽に関する研究への助成」代表者	平成 25 年度	「音楽・舞踏・メディアアートを用いた芸術教育コンテンツの作成」 助成金額：300 千円（単年度）
・平成 25 年度　公益財団法人 両備樫園記念財団助成金	平成 25 年度	「岡山孤児院音楽幻燈隊にみる音楽教育的意義－日本にもたらされた音楽教育の多面性－」 助成金額：150 千円（単年度）

職　務　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
1　資格、免許 ・中学校教諭 第一種免許	平成 3 年 3 月 31 日	音楽　平二中一第 1740 号 兵庫県教育委員会
・高等学校教諭 第一種免許	平成 3 年 3 月 31 日	音楽　平二高一第 1882 号 兵庫県教育委員会
・中学校教諭 専修免許	平成 10 年 3 月 31 日	音楽　平 9 中専第 2176 号 大阪府教育委員会
・高等学校教諭 専修免許	平成 10 年 3 月 31 日	音楽　平 9 高専第 2223 号 大阪府教育委員会
・修士（芸術）	平成 10 年 3 月 24 日	大阪教育大学　第 2258 号 論文題目：音楽企画－舞台裏の詩学－
・博士（文学）	平成 14 年 9 月 17 日	大阪大学　第 17270 号 論文題目：聖化する音楽祭－グロカリゼーションとしての祝祭研究－
2　特許等 なし		

職　務　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事　　項	年月日	概　　要
3　実務の経験を有する者について特記事項 ・国際日本文化研究センター 共同研究員	平成15年6月 ～現在に至る	鈴木敏美氏の研究班「近代中国東北部（旧満州）文化に関する総合研究」及び「出版と学芸ジャンルの編成と再編成 －近世から近代へ」等に参加。共同研究員として関連研究会に出席。
・歌詞対訳 ベートーヴェン：交響曲第 9 番　ニ短調　Op125 第 4 楽章「歓喜によせて」＊京都市交響楽団 第 557 回　定期演奏会　パンフレット	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団委嘱：自主第九公演用初の新対訳を作成。ハインリヒ・フォン・シラー作　「歓喜によせて」 平成 24 年にも再掲される。
・歌詞対訳 京都市交響楽団ニューイヤーコンサート＊京都市交響楽団 第 550 回　定期演奏会　パンフレット	平成 24 年 12 月	京都市交響楽団委嘱：ヨハン・シュトラウス（息子）作　「こうもり」より≪公爵様、あなたのようなお方は≫（アデーレのアリア）新対訳作成
4　その他 ・論文の引用実績（被参照／引用実績） 森山貴仁・川本彩花・野島那津子「メディアによる文化的公共圏の再編成 ―戦後における音楽祭の日米比較を中心に―」京都大学グローバル COE『親密件と公共圏の再編成をめざすアジア拠点』次世代研究 26 GCOE ワーキングペーパー	平成22年9月	＜被参照／引用文献＞ 山本美紀 論文「戦後の国際日本における国際音楽祭の受容に関する一考察」（「研究業績等に関する事項」【学術論文】8） 山本美紀 博士学位論文『聖化する音楽祭―グロカリゼーションとしての祝祭研究―』　（「研究業績等に関する事項」【学術論文】6）
・論文の引用実績（被参照／引用実績） 前川 公美夫『明治北海道映画史』	平成24年3月	＜被参照／引用文献＞ 山本美紀 論文「興行としての宣教」国際日本文化研究センター（「研究業績等に関する事項」【学術論文】9）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる	単著	平成22年12月	ヨベル社	音楽科教育法講義の際に使用されることを想定し、作成。音楽科教育史および、学習指導要領実現のための授業実践について解説。また、授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて解説をおこなう。さらに、各学年の学習指導要領内容のポイントを実際の音楽教育単元とつなげて解説を行い、指導案作成について解説している。小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる【B5 判　全 96 ページ＋別冊課題 48 ページ】。
2　教育フォーラム 47 ＜こころ＞を育てる	共著	平成23年2月	金子書房	心を育てることの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。本人担当部分：「共感する心を育てる音楽科教育－音楽の力とこころの育ち」【pp. 60-69：単著】 これまで音楽が「物語」と「体験」とどのように結び付けられ、何が達成されてきたのかを、文部省唱歌と関係が深い 18 世紀イギリスの讃美歌活動を手掛かりに検証する。次に、現在筆者が研究課題として取り組む「体感型読書」（平成 22 年度科学研究助成対象研究課題）における、音楽を「物語」と「体験」に結びつける小学校音楽科の授業実践を紹介し、現在の音楽科教育が「心を育てる」ことにつながるための要素と課題を提示・検討する。 共著者：梶田叡一、加藤明、渡邉満、松田智子、鎌田首治朗、山本美紀、中村哲、大野光二、高橋真里、江渕弘明、蔵あすか、中家淳悟、増尾慶裕【A5 判　全 157 ページ】
3　教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成23年8月	金子書房	国際教育の意義と、その指導について論じたものである。本人担当部分：「音楽教育を通じて異文化理解教育を－ウィグモア・ホールの教育プログラムに学ぶ」【pp. 103-116：単著】 ウィグモア・ホールは、ロンドンにあって地域密着型のホールとして、アーティストの育成・紹介で終わらず、聴衆側である地域のニーズを掘り起こし、それぞれの世代や関心に応じる努力を重ねてきた。それは異文化理解の過程そのものである。本稿は平成 23 年 2 月の視察をふまえ、実際の活動がどのようであったかを紹介しながら、ウィグモア・ホールで 20 年間積み重ねられてきた教育プログラムを、異文化理解の観点からとらえる。 さらに、同ホールでは地域の幼稚園や小学校に授業で活用できる「デジタル教材」を用意しており、児童生徒を対象としたコンサートと連携するしくみを構築している。その例をあげながら、日本の幼児教育における「表現」また小学校音楽科教育での導入の可能性について考察した。 共著者：梶田叡一、加藤明、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川﨑由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子【A5 判　全 174 ページ】
４ 幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記	共著	平成 23 年 10 月	ヨベル社	幼稚園教育及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、表現指導について解説したもの。掲載楽曲はすべて、幼児教育や保育の現場でよく歌われたり演奏されたりする音楽作品を中心に取り上げた。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この１冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での子どもの表現の既習内容をふまえた教育ができるように配慮されている。また音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行っている。各該当科目の講義の際に使用されることを想定し、作成した。さらに、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲を挙げて内容を解説を行い、指導案の作成へとつなげられるようにしている。１年間の学校生活や行事に沿った構成となっている。全体レイアウト、及び音楽に関する項目【pp. 7-9, 12-15, 18-21, 24-27, 30-33, 36-39, 42-45, 48-51, 54-57, 60-63, 66-69, 72-75, 78-81, 84-87, 90-93, 96、別冊課題：全 21 ページ分：単著】について執筆。 共著者：山本美紀　岡田美紀【B5 判　全 157 ページ＋別冊課題 23 ページ】
５ 教育フォーラム 49 特集　確かな学力を育てる確かな授業	共著	平成 24 年 2 月	金子書房	確かな学力を育むの意味と、どのような指導が必要であるかについて論じたものである。本人担当部分：「ウィーンにおける音楽科教育にみる光と影　―「夢の街」が夢から醒めるとき―」【pp. 128-139：単著】 ウィーンにおける、地域密着型音楽ホールでの教育プログラムの調査に基づき、劇場や演奏団体が行っている教育プログラムの実例を提示すると共に、分析を行う。本論稿の特徴は、教育プログラムの受容側を中心に調査を行ったことである。学校の教師が、どのようにホールや文化施設での教育プログラムを生かしているのか、その実体を通し、学校で行われている音楽科教育をはじめとした芸術教育の持つ意味を改めて考える機会とした。 共著者：梶田叡一、加藤明、田中博史、鎌田首治朗、長谷浩也、阿部秀高、金澤孝夫、横須賀薫、高岡信也、古川治、山本美紀、渡邉規矩郎【A5 判　全 150 ページ】
６ 【改訂新版】小学校で培う音楽の力 ―共感する心を育てる	単著	平成 24 年 4 月	ヨベル社	前刊で実際に音楽科教育法講義の際に使用したことをふまえ、内容に編曲された楽譜、および図表解説を追加。さらに授業実践に必要な知識としての楽典および、技術としての指揮法、合唱指導法、編曲法などについて解説を強化した。。また、各学年の学習指導要領内容のポイントを、実際の音楽教育現場の単元とつなげて解説

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				を行い、指導案作成について具体的な解説を行う。指導案作成用の課題プリントを添付。実際に指導案作成→模擬授業実施→ふりかえりが行える内容となっている。 【B5 判　全 123 頁＋別冊課題 48】
7　ヨベル新書 4 メソディストと音楽－ 現代讃美歌の源流と私たちの讃美　－	単著	平成 24 年 6 月	ヨベル社	グレゴリオ聖歌やルター派の聖歌など従来の讃美歌の世界は、産業革命と共に激変した。新しいコミュニティー（公共）の形成は、新しい讃美歌を必要としたのである。 　本書は、旧来の世界観が崩壊しつつある社会において、どのような讃美歌が必要とされ、どのように広がっていったのか、社会システムの変革と共に解き明かすものである。 　＊明治初期に日本において宣教師として、また今日に残る多くのミッション系大学の創設に関わったオルチンの宣教活動・音楽活動をまとめた「興行としての宣教― G.オルチンによる幻燈伝道をめぐって」を収録。【新書版全 124 頁】
8　【改訂新版】幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現－音楽でつむぐ学びの歳時記＜伴奏譜・楽器解説付き＞	共著	平成 25 年 3 月	ヨベル社	幼稚園における音楽表現遊び及び、小学校音楽科教育に共通して必要かつ基本的なソルフェージュ知識や、弾き歌い、表現指導について解説したもの。特に、新版では保育園・幼稚園や小学校での行事に用いられることの多い楽器類の、正しい取扱い説明と指導の際の留意点などを明記した項目を追加した。掲載楽曲はすべて、幼児教育や保育の現場でよく歌われたり演奏されたりする音楽作品である。また幼少連携を意識して「小学校音楽科共通教材」の音楽も掲載し、この 1 冊で、幼稚園教諭にとっては小学校での学びを意識した表現指導に、また小学校教諭には保育園・幼稚園での子どもの表現の既習内容をふまえた教育ができるように配慮されている。音楽に関する学校行事運営において、必須項目についても解説を行っている。各該当科目の講義の際に使用されることを想定し、作成した。1 年間の学校生活や行事に沿った構成となっている。さらに、幼稚園要領の「表現」について、具体的な曲を挙げて内容解説を行い、指導案の作成へとつなぐ。巻末に指導案作成用課題シートを添付。指導案作成→模擬授業実施→ふりかえりができるようにした。 全体レイアウト、及び音楽に関する項目を執筆【pp.7-9,12-15,18-21,24-27,30-33,36-39,42-45,48-51,54-57,60-63,66-69,72-75,78-81,84-87,90-93,96、別冊課題：全 32 ページ分）：単著】。 共著者：山本美紀　岡田美紀、筒井はる香 【B5 判　全 175 ページ＋別冊課題 32 ページ】
9　絵本がひらく＜体感型読書＞の世界	共著	平成 25 年 3 月	ERP 文庫	本書は、学校教育の中や図書館などでこれまで行われてきた従来の「読み聞かせ」による読解力や表現力の育成を一歩進め、幼児や、児童生徒の互いの共感力を育てるために、「体感型読書」の導入を進める手引書である。本人担当部分：幼稚園での表現遊びに使える音楽と絵本

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の組み合わせ等、音楽に関する記述。【pp. 20-25、27-48:担当執筆】近代日本の国語科教育（読本）と連携してきた音楽科教育（唱歌）との関連性から、音楽を用いつつ五感を使って読み聞かせをあじわう方法とともに、その実践報告を含んでいる。小学校の国語科教材と音楽科教材「音楽劇」の連携を含め、現場で導入しようとする教師にとっても、参考になるよう構成されているものである。 編著者：伊崎一夫、山本美紀、ライナーノーツ：山口聖代【A5 判　全 80 ページ】
10. 『人間教育としての音楽科教育 ―知覚・感受から共感へ』（再掲）山本美紀 著　ヨベル社（平成 24 年 4 月出版）	単著	平成 27 年 3 月	ヨベル社	奈良学園大学人間教育学部の専任准教授として担当の「音楽科指導法」（コア科目、2 年次配当、半期、必修 2 単位）に合わせ、さらにこの数年でより具体化した学習指導要領と授業内容をふまえた音楽科教育について、人間教育の視点に立った指導法について解説を行う。 特に、現行の音楽科学習指導要領において問題となっている「知覚」「感受」の解釈と実践に焦点を当て、音楽用語としての独特な位置づけから、互いのコミュニケーションへとつなぐために「共感」をキーワードとし、音楽だからこそできるな「人間教育」としての音楽教育の可能性に焦点をあてたもの。 【全 123 頁＋別冊課題 48 頁】

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） １「現代に生きるメソジストと音楽― グローバル・ソング Global Song（グローバル・ヒムノディ Global Hymnody）の視点から ―」（査読有り）	単著	平成 20 年 2 月	『ウェスレー・メソジスト研究』第 8 号（ウェスレー・メソジスト学会） pp.67-80	「歌うメソジスト」と言われたメソジストの指導者であったジョン・ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持っていた。本稿は、このようなメソジストの讃美歌の伝統を『Global Song』『Global Hymnody』を手がかりに考え、今日の学校教育に活かしていく方策を検討する。『Global Song』『Global Hymnody』とは、現在世界各地で展開されている、讃美歌を「自分たちのものとして」とらえようとする、新しい讃美歌の創作や、それに付随した活動の総称である。そこでは土着の、あるいは伝統的旋律を用いたものや、それを現代的な旋律に翻案したものなど、様々な試みが展開している。信徒教育の意味を持ったメソディストの讃美歌には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が盛り込まれており、今日の日本における学校教育目標と重なる点は多い。本稿では、ウェスレーの歌唱指導の理念と現代の日本の音楽科教育目標との共通点の分析とともに、『Global Song』の視点を援用しつつ、「自分たちの歌」として歌唱教材が今日の音楽科授業において成立するための基本的条件を明らかにし、具体的な方法論を示した。さらに、日本での讃美歌の伝統と唱歌との関わり、また現代の讃美歌創作に引用された伝統的な旋律や「わらべうた」をとりあげ、現代日本の音楽科教育における『Global Song』『Global Hymnody』をの可能性を検討する。
２「群れを導く歌―初期メソディストにおける讃美歌の意味―」（査読有り）	単著	平成 22 年 3 月	大阪大学大学院文学研究科　文化表現論　音楽学　『阪大音楽学報』第 8 号　pp.165-180	メソディストとは、英国国教会司祭ジョン・ウェスレー（John Wesley 1703-1791）によって英国で展開された信仰復興運動メソディズム Methodism を推進したグループの名称である。彼らがあらゆる機会に歌うことから「歌うメソディスト」との呼び名もあった。ジョン・ウェスレーは、讃美歌の歌詞とその歌唱方法の指導によって信徒を教育し、組織を整えていった。一方信徒は、歌うことで信仰を表明するだけでなく、共同体の一致を、実現していたのである。本研究では、讃美歌に反映された道徳心や規範意識を分析し、新たな共同体を形成していく過程において讃美歌の果たした役割を明らかにした。また、その歌唱指導方法から今日の音楽科授業に応用可能な要素を抽出し、教育的意義を考察した。
３「会衆歌と公共性―ウェスレーの宗教体験と初期メソディストの讃美歌を巡って―」	単著	平成 22 年 3 月	環太平洋大学 『紀要』第 3 号 pp.79-90	メソディストは、産業革命によって社会構造が激変する中、地方からの労働者を中心に新たな絆で結ばれ、社会現象ともなった信仰復興運動であるメソディズム Methodism を推進したグループである。指導者ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、その讃美には、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映されている。本

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				論ではウェスレーの歌唱指導の理念と、現代の日本の音楽科教育目標との共通点の分析を行い、教育的配慮に着目し「公共性」の視点から、今日の音楽科授業において活用していく具体的な指導方法を提示した。
４　音楽科教育における他分野教育との連携への考察：音楽と物語― 展覧企画『木を植える人』から体感型読書『スイミー』へ―	単著	平成 23 年 3 月	環太平洋大学 『紀要』第 4 号 pp.57-64	本論稿は、現在継続中の「体感型読書」プログラムの構築 に関わる、本年度の研究についての実践報告及び「体感型読書」構想に至る、これまでの筆者の研究実践「展覧企画」プロジェクトとの関連性を明確にしようとするものである。「体感型読書」とは、「音声言語を主とする従来の語り手に対して、音楽・映像等の情報を付加し多様な表現活動を保障すること」と、「受動的になりがちな聞き手に対して、物語の再創造の保障と聞き手同士の関わりを活性化すること」の両面が成立する双方向の読書活動である。本論考では、実際に行った音楽科教育内での教育実践をふまえ、物語と音楽、さらにそこから広がる子どもあった胃の言語活動について述べた。能動的な物語の受け止めを可能にする「体感型読書」プログラムの構築により、音楽科教育と他分野教育との連携から生まれる言語活動の充実の可能性について述べ、今後の本研究における課題と展望について示した。
５ The Study for The digital Teaching Materials which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan.― The Outlook and The Issues― (Full Paper) （査読あり）	共著	平成 23 年 3 月	SITE 2012-Society for Information Tecnology & Teacher Education International Coference 2012In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education p.153	本稿は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての論文である。「わらべうた」とは伝統的な子どもの遊び歌であり、非常に少ない音による単純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に持つことにより、教師はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必要とすることなく、音楽の授業を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとは言い難い。 本人担当部分：実態調査と分析、論文執筆。大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、音楽科教育におけるデジタル教材の今後の活用についても提案事例を示し論述した。 共著者：山本美紀、寺尾正、竹下裕来 【教員教育・情報技術教育国際学会　プロシーディング】
６　ウィーンにおける劇場と音楽団体による音楽教育の試み ―課題と展望―	単著	平成 24 年 3 月	環太平洋大学 『紀要』第 5 号 pp.57-64	多くの日本人が持っているウィーンのイメージは、音楽を背景に人々が行き交い、幸福に充ち溢れているというというものだ。しかし、EU の中の１つの国となり、通貨も「シリング」を手放して「ユーロ」となったことで、「ウィーンはウィーン」でなくなる危機が訪れている。 本論文では、たとえ伝統的に芸術文化が豊かな

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				地であっても、絶えず教育活動や啓もう活動を行っていかなくては、文化水準が維持できないことを、平成 23 年度に行ったフィールドワークの分析から明らかにした。さらに、ウィーンの学校教育での「音楽教育」が持つ「伝統文化」についての教育課題と、日本の音楽科教育における「伝統音楽」に関する教育課題を比較。伝統の継承と、新しい文化創造の基盤づくりとしての音楽科教育を論じる。教育が決定する将来の文化水準から、その持つ意味の重さと共に、持続可能な地域文化育成のための具体的な施策について提案。
7　学校と社会文化施設との連携を考える―地域連携が『生きる力』へとつながるために ―	単著	平成 24 年 4 月 3 日・10 日合併号	雑誌『教育プロ』第 42 巻 第 8 号 通巻 1693 号 pp.6-10（5000 字）	紙面「オピニヨン」に掲載。ここ 10 年ほど学校教育現場では、様々な連携が行われてきた。それぞれの立場で実際に「連携」に携わってきた人々には、「そろそろ振り返り時がきた」との実感がある。本稿では特に、「ゲストティーチャ―」や「出前授業」「アウトリーチ」に着目し、「学校と地域との連携」について最近の 3 つの事例を特に芸術科教育について挙げ、今後の「学校と地域連携」について考える機会とした。　難しい時代を生き抜いていかなくてはならない子どもたちだからこそ、「生きる」ということに不可欠な「潤い」や「慰め」となる本物の「芸術文化」に触れる機会は必須である。そのためにも生涯に渡って「能動的な鑑賞体験」をどのように整えていくのか、方向性をしめした。
8　草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観―「ファウンダリー・コレクション」Foundery ollection』より ―	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学 『紀要』第 6 号、pp.39-45	先行研究として、Francis B. Westbrook による、”Some Early Methodist Books”の中にある’The Foundery Tune Book’を手掛かりに、Foundery Collection について、実際に使われている音楽の分析を通し、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。 Foundery Collection は、再版されることがなかったことから、ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされている。しかし、実際に楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとしたものであることが推測される。 現代の学校音楽科教育においては、実は「音楽のリテラシー」が非常に落ちて行っていることが課題となっている。楽譜とは何か、誰のための楽譜であるのか、その対象がはっきりしたとき、このように楽譜が違った姿をもつということは興味深いことである。今は絵による楽譜など、現場で様々な工夫が行われれている時代である。今日の現場教師たちが生んだ「図像楽譜」と 18 世紀のウェスレーらによる楽譜を比較検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育における役割について考察を行う。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9　初期メソディストの讃美歌集にみる、会衆歌としての意義とジョン・ウェスレーの音楽教育 ―『ファンダリー・コレクション Foundery Collection』を中心に― （査読あり）	単著	平成 25 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 13 号、pp. 27-45	メソディストは、青山学院大学、関西学院大学の創設理念の基礎をなすキリスト教の一派である。その活動は、ボランティアの発端を作ったともいわれ、信仰に基づく社会福祉的活動を特徴とする。その中には公教育も含められ、メソディストの創立者ウェスレーにとって大きな関心事であり、自身も学校を作り現在もその学校はイギリスの名門校である。 本稿では特に初期の 3 冊のメソディストの讃美歌集の分析を通し、一般庶民が楽譜を読める力（音楽リテラシー）を身につけることにより、どのように楽譜そのものが変わってきたのか、楽譜そのものの表記方法の変化、および当時の学校教育の資料から読み解こうとするものである。
10 地域の音楽資源の活用によるこどもの表現活動充実への一考察 ―初等教育における音楽体験の場の創造をめぐって―	単著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学 『紀要』第 7 号、pp. 43-51	こどもの感性と表現に関する領域として設定されている「表現」において、音楽はそれだけで存在するのではない。「表現」が音楽や図画工作、体で表現すること、演じることなどを含む内容であることが示すように、様々な要素の介在によって豊かに感じる心を育てるものである。本稿では、表現のたのしさを子どもが十分に理解するための支援として、どのような方法があるか、イギリスでの幼児対象のワークショップでの実践例の分析を踏まえ、幼稚園での表現教育のために、どのようにワークショップやアウトリーチ活動を導入し、利用できるか考察を行う。
11　≪やすかれ、わがこころよ」に≪フィンランディア≫が使用される理由－賛美歌における楽曲の意味をめぐって－ [5382 文字]	単著	平成 26 年 2 月	『礼拝と音楽』、pp. 26-29	シベリウス作曲≪交響詩フィンランディア Op26≫からの旋律を伴う≪やすかれ≫は、多くの日本人信徒の愛唱讃美歌の一つである。作曲者のシベリウスは音楽史上では「国民楽派」に分類される作曲家であり、讃美歌に転用された部分には、別の歌詞がついて≪フィンランド頌歌≫と言われ「第 2 の国家」としてフィンランド国民の愛国の歌になっている。特に、シベリウス作品の「交響詩」には「音詩」という意味があり、旋律に文学的・詩的内容が直接的に表現されていることを示すものである。つまり讃美歌に使用された≪フィンランディア≫は、音楽の含有する意味がかなり限定された旋律なのである。これほどに特別な意味を持つ個性的な旋律が付けられた≪やすかれ≫の原詩の全容は、「主が共にいます平安」というよりもむしろ、苦難に立ち向かう「戦いの歌」である。日本語歌詞を追うだけでは、なかなか思いをはせることが少ないと思われる≪やすかれ≫の「戦いの歌」という側面に、本稿では、翻訳過程で変化していく歌詞内容と、音楽が内包する意味との関係性から論じたもの。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12　「人間教育」と音楽の力― 讃美歌に託された神学と教理 ―	単著	平成 26 年 3 月	人間教育学学会『創刊号』、pp. 39-45	明治初期の音楽教育の導入において、讃美歌を源泉とする「唱歌」はそれぞれが近代国家にふさわしい「新しい日本人」をどのように明治政府が考えていたか、明確に示している。しかし実際の導入に当たっては、「音楽」は「体育」と同様、 それまでの日本の教育には含まれない教科でもあり、困難を極めた。明治以降現代にいたるまで、教育現場に携わる人間にとってギリシャ・ローマ時代からの西洋社会における音楽やそれを教育することの持つ意味が十分理解される機会はほとんどなかったと言っていいだろう。しかし、西欧社会においては、時代が変わり、施政者が変わっても、音楽は共同体を疑似体験させ創出させる 1 つの重要な媒介であり、それにより共同体となった集団を望む方向に向かわせることができることから、重要な教育科目であり続けた。その延長線上に、ジョン・ウェスレーのメソディスト運動の中の讃美歌教育を捉え、音楽教育における普遍的目的を論述したものである。
13 1890 年代の岡山孤児院における音楽事象と人間教育 －先駆的器楽教育実践の近代音楽史における位置づけを目指して－	単著	平成 27 年 3 月	人間教育学学会『人間教育学研究』、pp. 163-172	石井十次は、近代日本において「児童福祉の父」とされる人物である。中でも、岡山孤児院音楽幻燈隊の活動は、巡回公演を通じて日本人に西洋音楽や「音楽隊」を紹介した、画期的な活動であった。本稿では、岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる音楽事象がどのようなものであったのか具体的な内容を検討し、さらに今日の近代音楽史研究の成果、及び岡山孤児院音楽隊をめぐっての先行研究の再検討を行った。その結果、先行研究の定説に反し、音楽隊活動が必ずしも救世軍の影響を受けたものではないことを明らかにし、当時の日本に於ける一般的な音楽状況を反映した可能性が強いことを指摘した。
14 教員養成系大学における人材育成の視点から考える音楽科教育と地域連携　－学生の「教員に求められる資質」形成につなげるために－	単著	平成 27 年 3 月	奈良学園大学『紀要』第 2 集、pp. 167-179	平成 23 年度から 25 年度にかけて、筆者は「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」を行ってきた。その研究成果を踏まえた上で、現在本学学生によって行われている活動に至る、筆者のこれまでの研究と共に、実際の文化施設におけるボランティアがどのようなものであり、さらにそこでどのような力が必要とされているのか、教員養成系大学の教育課題として提示する。さらには、このような主体的な地域連携を通して、学生の資質能力の向上に資する教育の方向性を示したもの。
15 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって	単著	平成 27 年 3 月	京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会（アジアと宗教的多元性研究会）『アジア・キリスト教・多元	岡山孤児院やその音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況から結成直前の

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
			性』、pp. 101-125	音楽的内容を明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を探った。その結果、①キリスト教音楽における１ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかも子どもの手によって始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。
（その他） 【研究報告書】 １ 「地域の教育・文化施設における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」	共著	平成 25 年 3 月	日本教育総合研究所 平成 22-23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C（課題番号 22531043 5002）	H22 年度から 24 年度に、地域の文化施設や小学校などで実施した「体感型読書」プログラムの実践報告と、プログラム開発に関わる研究報告である。本人担当部分：音楽部分についての解説および、音楽を物語に結び付ける際の教育的効果について考察を執筆。【pp. 18-26、27-50：担当執筆】体感型読書とは、絵本の読み聞かせに音楽やダンスなどを組み合わせ、子どもたちに絵本や芸術を深く体験させる新しい芸術鑑賞方法である。当システムの研究と、芸術鑑賞教育プログラムの構築により、子どもの表現力を伸ばすと同時に他者理解力を高め、共感力の育成を目指した。授業や、地域の子どもを対象とした実践例を紹介。子どもの音楽表現に、「物語性」がいかに影響力をもちうるかを明らかにしている。さらに、地域の教育・文化施設で実施可能な、小･中音楽科および国語科教材を紹介。共著：伊崎一夫、山本美紀、山口聖代【A5 判　全 80 ページ】
【書評】 １ 『教会音楽ガイド』 【4000 字】	単著	平成 24 年 9 月	日本賛美歌学会紀要第 5 号 pp. 46-50	本書は、2010 年 7 月に日本基督教団出版局から刊行された（編者は越川弘英、塚本潤一、水野隆一）。1975 年『教会音楽ガイド』以来の教会音楽についての『讃美歌 21』に対応する参考書である。35 年間の礼拝や讃美の変遷をふまえ、教会における音楽活動を様々な立場で担う信徒や教師にむけ書かれている。書評では、内容をふまえつつ今日の教会がもつ課題を讃美の側面から明らかにすると同時に、讃美を共有することの現代における意義を論じる。また、教会が地域の音楽教育の場として長い歴史の中で担ってきた働きを再び担う必要性を説く。
２ 更新伝道会出版委員会編 『チャールズ・ウェスレー讃美歌 30 選』 【7000 字】	単著	平成 26 年 3 月	日本ウェスレー・メソジスト学会『ウェスレー・メソジスト研究』第 14 号、pp139-148	本書は、2013 年に更新伝道会出版委員会から刊行されたチャールズ・ウェスレーによる讃美歌集である。UMH（合同メソジスト教会讃美歌集）で採用されているチャールズ作詞の 50 曲のうち、「最初はメロディーの美しい、これまで歌われていなかったもの、心に響く詩のものを基

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				準に、そこから少しずつ「教団や他の教派の讃美歌に入れられていないもの（一部を除く）を拾い上げ」加えられていったという 30 曲を選んで編まれたという。 本書評では、現代におけるチャールズ・ウェスレーの讃美歌の意義を明らかにするとともに、特に新しい旋律が付けられた作品について、作曲者の紹介や旋律的特徴の解説を行った。
３ 梶田叡一著『不干斎ハビアンの思想－キリシタンの教えと日本的心性の相克』創元社	単著	平成 26 年 6 月 16 日	日本教育新聞 平成 26 年 6 月 16 日付け 15 面	副題にある「心性」とは、文字通り「心の性（さが・特質）」であると同時に、学問的には、特定の時代の集団的なものの考え方や感じ方を意味し、現代の歴史学や社会学、さらに第二バチカン公会議や著者が意識する「宗教多元主義」において重要な用語である。本書はハビアンの代表的著書の幾つかを、おのおのが書かれた目的に沿って読み解いたものである。 書評では著者による精神的・信仰的位相の分類『習俗』『信』『行』『覚』について注目し、精神性の教育の重要性と今日的意義について述べる。
【評論・解説】 １ プログラム邦訳 愛知万博関連企画　ダイナミック・スイス ・プロジェクト「静寂の間」	共著	平成 17 年 10 月 12 日－17 日	法然院（京都）、徳林寺（名古屋）、神戸市立博物館（神戸）、秦家（京都）	チューリヒ芸術大学講師ユルゲン・クルーシェ（Juergen Krusche）らが主催する「静寂の間」silent place events 公演コンセプト解説の邦訳。本企画は、愛知万博関連芸術企画及び現代スイスの文化を紹介する「ダイナミックスイス・プロジェクト」の一つに位置づけられており、スイス大使館およびスイス・プロ･ヘルベティア文化協会の全面的バックアップをうけたものである。主催／企画：ユルゲン・クルーシェ 共催：スイス・プロ・ヘルヴェティア文化協会 スイス大使館 作曲家によるライナーノーツの翻訳、及び現代音楽の中に行おける本作品の意義について解説を担当。共著者：山本美紀、ユルゲン・クルーシェ（Juergen Krusche）
２ 評論　「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美　①メソジストと音楽」	単著	平成 20 年 1 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 1 月号 p.2 連載	1 年にわたる連載。18 世紀イギリスの社会と、教育課題について解説。さらに、メソジストにとって音楽が担った教育的役割について、概説する。
３ 評論　「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美　②メソジストの音楽の源流（１）」	単著	平成 20 年 3 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 2･3 月合併号　p.2 連載	メソジストの音楽の源流である、モラヴィア教団とその音楽について解説。特に、モラヴィア教徒にとっての音楽の教育的役割について、後のメソディストとの比較を行う。
４ 評論　「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美　③メソジスト音楽の源流(2)」	単著	平成 20 年 4 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 4 月号 P.2 連載	メソジストの音楽のもう一つの源流、英国国教会の聖歌について解説。国教会の地域に根付いた信徒教育の方法論を分析、聖歌を歌うことの伝統的意義を明らかにした。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ④メソジストと讃美の意味」	単著	平成20年5月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 5 月号 P.2 連載	メソジストの伝統における、讃美歌の意味を解説した。特に、メソジストに求められた、社会の構成員としての規範意識や道徳観を讃美歌の歌詞から明らかにした。
6 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑤会衆と讃美」	単著	平成20年6月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 6 月号 P.2 連載	キリスト教の伝統とメソジストの会衆讃美について比較分析を行う。さらに、ジョン･ウェスレーが信徒たちに行った厳格な歌唱指導について、その目的と課題、評価の視点を明らかにした。
7 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑥讃美とリバイバル」	単著	平成20年8月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 7･8月合併号 P.2 連載	キリスト教の歴史における、讃美とリバイバル運動との関連性について解説。本稿では、リバイバルを教育目標の再設定と捉え、現代における教育課題の設定とその達成のための方法論を考察した。
8 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑦現代の讃美とメソジストⅠ」	単著	平成20年9月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 9 月号 P.2 連載	キリスト教の現代の讃美歌研究の動きと、第 2 バティカン公会議の影響について解説する。信徒教育としての「讃美」の捉え方の変換点と共に､その影響を受けた大きな流れをとりあげる。
9 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑧現代の讃美とメソジストⅡ」	単著	平成20年10月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙10月号 P.2 連載	アメリカの合同メソジスト派の新しい讃美歌への取り組みの一つとして「グローバル・ソング Global Song」とその概念と実践について紹介。『Global Song』『Global Hymnody』とは、現在世界各地で展開されている、讃美歌を「自分たちのものとして」とらえようとする、新しい創作や、それに付随した活動の総称であることを解説。
10 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑨讃美による希望」	単著	平成20年11月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙11月号 P.2 連載	「グローバル・ソング Global Song」の考え方の基礎となった､ジョン･ウェスレーの讃美理論を解説。信徒教育の意味を持ったメソディストの讃美歌に確認できる、音楽を通して共有される「集団的記憶」と「希望」について、教育的視点から分析する。
11 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑩グローバル･ソングの可能性」	単著	平成20年12月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙12月号 P.2 連載	「グローバル・ソング Global Song」の実践とその課題の提示。前稿での議論をふまえ、ウェスレーの歌唱指導の理念と現代の日本の音楽科教育目標との共通点の分析するとともに、『Global Song』の視点を援用しつつ、「自分たちの歌」として歌唱教材が今日の音楽科授業において成立するための基本的条件を明らかにし、具体的な方法論を示した。
12 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑪現代の讃美とメソジストⅢ」	単著	平成21年1月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 1月号 P.2 連載	カリフォルニアから来日したゴスペル・グループ「ライト＆ライフ アウトリーチ・バンド Light and Life Outreach Band」の来日ツアーのリポートおよび、彼らにとっての「アウトリーチ」の意味を解説。アメリカにおける音楽科教育が､教会を中心に広がっている点に注目し､小中学校音楽科教育が生涯教育へとつながり、「生きる力」の基盤を構成する要素となるための条件を分析した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13 評論 「メソジストの音楽－伝統と私たちの讃美 ⑫最終回：讃美の共有」	単著	平成 21 年 3 月	日本フリーメソジスト教団『全き愛』紙 2･3 月合併号 P.2 連載	レクイエムに象徴される、「共同体」の意味について。独りで歌う時にも、他者とのつながりを意識できるためには、その歌を他者と共有した体験が必要である。本稿では、大切な人を失った悲しみを共有するための「レクイエム」の意味について、「会衆歌」の視点から解説。共同体において「歌を共有する」ことの大切さを示し、これからの音楽科教育に求められる、「共同体の共有体験の場」としての音楽科授業の重要性を示唆した。
14 プログラム解説 京都市交響楽団 第 529 回 定期演奏会 [4500 字]	単著	平成 21 年 10 月	京都市交響楽団 第 529 回 定期演奏会 パンフレット pp. 5-8	モーツァルト≪交響曲第 36 番ハ長調「リンツ」≫、ブルックナー≪交響曲第 9 番ニ短調≫（ノヴァーク版）についての解説を担当。 プログラムを構成することが、美術館における「企画展」と共通点があることをふまえ、2 人の作曲家が取り上げられた理由を示す。モーツァルトはザルツブルク、ブルックナーはリンツとそれぞれオーストリアの都市を代表する作曲家であり、名前を冠する音楽祭も開催されている。当日演奏された作品を分析しつつその背景ににもふれ、2 人のそれぞれの都市での位置づけを明らかにした。
15 プログラム解説 京都市交響楽団 第 536 回 定期演奏会 [4500 字]	単著	平成 22 年 6 月	京都市交響楽団 第 536 回 定期演奏会 パンフレット pp. 5-8	ウェーベルン≪大管弦楽のための 6 つの小品 op. 6≫、ウェーベルン≪管弦楽のための 5 つの小品 op. 10≫、マーラー≪交響曲第 7 番ホ短調「夜の歌」≫ マーラーは世紀末ウィーンを代表する大作曲家であり、大型の作品を多く書いた。作曲家であったが、生活のために指揮者としても成功していた。対するウェーベルンはマーラーにあこがれ、同じように指揮者として働きながら、シンプルなそぎ落とされた作品を制作した作曲家である。 年齢は差があるものの、世紀末ウィーンと現代をつなぐ音楽の様式の端境期に位置した 2 人の作曲家の生涯を、作品の特徴に焦点をあてて解説を執筆。
16 プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団 173 回定期公演 [4500 字]	単著	平成 22 年 12 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 173 回定期公演 パンフレット pp. 2-3	「京フィルの第九　　―日韓交流！アジアからの発信―」 ベートーヴェン：≪献堂式≫序曲　ハ長調 op. 124 ：交響曲第 9 番　ニ短調 ≪合唱付き≫op. 125 ≪献堂式≫は、「交響曲第 9 番」初演時に同じプログラムにあがっていた作品である。寒い時期に初演され（10 月）、かなり長い演奏会であったが、聴衆は最後までがまんし聴いて、最後に万雷の拍手でベートーヴェンを称えたという。しかしすでにベートーヴェンの耳は聞こえなくなっており、助手に聴衆の方を向かされようやく拍手が「見えた」という。 本解説では、日本で「第九」が初演された坂東にある小学校・中学校が入学式・卒業式で「歓喜に寄せて」を歌うことを紹介し、すでに日本

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の地域文化を担い、同郷のアイデンティティーの元になっている「第九」の存在にもふれ、解説を行った。
17 プログラム解説 京都フィルハーモニー室内合奏団 174 回定期公演 [3550 字]	単著	平成 23 年 1 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 174 回定期公演 パンフレット pp.3-5	「ニューイヤーコンサート『アメリカ＆ラテンアメリカ』」 H.ヴィラロボス：ブラジル風バッハ第 2 番 G.ガーシュイン： ラプソディー・イン・ブルー A.コープランド：アパラチアの春 L.アンダーソン：セレナータ ：ゴールデン・イヤーズ ：ブルー・タンゴ ：舞踏会の美女 世界に名高い、いわゆる「ウィーン・フィルによるニューイヤーコンサート」は、ワルツやポルカを中心に、きらびやかな新年の祝祭を演出する。しかし、今回は「アメリカもの」を中心とした、明るく楽しい新年の祝いである。特にアンダーソンは日本で教育を受けた者であれば、小学校や中学校でほぼ鑑賞教材で取り上げられたことがあるだろう。イメージをしやすい彼の作品の魅力を中心としつつ、「新世界」アメリカがどのような音楽文化をはぐくんでいったのか中心に、新しい年への期待を込めて解説。
18 京都フィルハーモニー室内合奏団 175 回定期公演[3550 字]	単著	平成 23 年 3 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 175 回定期公演パンフレット pp.3-5	「古典派への道程 Vol.12」モーツァルト：ディヴェルティメント　ニ長調　K.136　ファゴット協奏曲　変ロ長調 K.191 ハイドン：交響曲第 101 番　ニ長調　Hob.Ⅰ:101　≪時計≫ 2 人の作曲家は、同時代人であり、生前にも面識があった。彼らの時代は、作曲の依頼主の社会的立場の交代期にあたり、それはオーダーそのものが変わる意味を持っていた。 時代の変わり目に、貴族・市民と依頼主が変わることによる作品に与えた影響と、それでも変わらない彼らの作品の特徴について解説。
19 京都フィルハーモニー室内合奏団 176 回定期公演 [3550 字]	単著	平成 23 年 4 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 176 回定期公演 パンフレット pp.3-5	「ロシア！」 P.チャイコフスキー：弦楽セレナーデ S.プロコフィエフ：古典交響曲 L.ストラヴィンスキー：組曲「プルチネッラ」 この日のコンサートに取り上げられた作曲過3 人を結びつけるのは、「ディアギレフ」である。彼はバレエ・リュスを率いて、多くの新しい才能を見出し、後世に残る芸術作品を生み出した。本解説では、ディアギレフが彼らとどのような関わりを持ち、何を見出し生み出していったかと言う視点から、作品それぞれのもつ魅力を解説していった。
20 京都フィルハーモニー室内合奏団 177 回定期公演 [4500 字]	単著	平成 23 年 6 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 177 回定期公演 パンフレット pp.3-5	「フランス！」 ルーセル：シンフォニエッタ オネゲル：ピアノ小協奏曲 ラヴェル：クープランの墓 ビゼー：アルルの女

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				フランス音楽を生んだ「フランス」を、科学立国との共通点として「センス」をキーワードに読み解く。さらに、多少年が前後するものの、同時代人の作曲家として、4 人がどのような社会情勢の中で作曲家として自分の仕事を見つめ、進めてきたのか解説を行った。
21 京都市交響楽団第550回定期演奏会 [4300字]	単著	平成23年9月	京都市交響楽団 第 550 回　定期演奏会　パンフレット pp.7-10	モーツァルト：舞踊音楽「レ・プティ・リアン」K.Anh.10（299b） シベリウス:ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 op.47 ラフマニノフ：交響的舞曲 op.45 　作曲家にとって「故郷」とは、音楽ににじみ出る、特別なタームである。モーツァルトは故郷ザルツブルクが息苦しく、シベリウスは故国の独立のため音楽をもって戦った。ラフマニノフは政治の混乱によって亡命せざるを得なかった。 　本公演は指揮者である外山雄三の 80 歳の祝いも兼ねていたが、彼の選んだ作品のうちラフマニノフのそれは、作曲家が死ぬ間際に、多くのロシア人亡命演奏家がいたフィラデルフィア管弦楽団のために書いた特別の作品である。作曲家自身のオーケストラ団員への感謝の言葉が、そのまま外山の京都市交響楽団メンバーへの感謝の言葉であったと言える。
22 京都フィルハーモニー室内合奏団 178 回定期公演 [3700字]	単著	平成23年10月	京都フィルハーモニー室内合奏団 178 回定期公演 パンフレット pp.3-5	「室内オーケストラ名曲選」 モーツァルト： 　弦楽のためのディベルティメント 　ヘ長調　　KV.338 　：ピアノ協奏曲第26番 ニ長調 KV.530 　　「戴冠式」 ストラヴィンスキー： 管楽のための八重奏曲 ニーノ・ロータ：九重奏曲 　「室内オーケストラ」とは、小編成のオーケストラのことであり、大型編成のオーケストラが出てくる前のヨーロッパではごく普通の合奏形態であった。近代になっても、小回りが利くからこそ、多くの作曲家が特殊な編成で響きを確認してみるなど、実験的な場として用いてきた経緯がある。演奏会では、「室内オーケストラ」という編成を縦糸に、イタリア音楽を横糸にして企画されたものであり、共通項とともに各作品のもつ実験性や特徴を中心に解説を行った。
23 京都フィルハーモニー室内合奏団 179 回定期公演 [3000字]	単著	平成23年11月	京都フィルハーモニー室内合奏団 179 回定期公演 パンフレット pp.3-5	「ベートーヴェン！」 ベートーヴェン： 　ヴァイオリン協奏曲ニ長調 op.61 　交響曲第5番ハ短調 op.67「運命」 　ベートーヴェンの人生は、幼いころから苦悩に満ちたものだった。子どものころは、子どもに英才教育をほどこしてモーツァルトのようにしたいと思うアルコール依存症の父親からの暴力、青年期には進行型の難聴を患い、中年以降は甥の養育権をめぐる親族の争いと甥の自殺未

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				遂、とどれも現代に通じる、逃れることのできない苦悩ばかりである。そのような中で、ベートーヴェンはそれらを正面から受け止め、戦っていくことと並行して作品を生み出していった。ベートーヴェンの生涯とともに、彼にとっては実験的な「協奏曲」ジャンルの解説、それをふまえた「交響曲」の位置づけに焦点をあて解説を行う。
24 京都フィルハーモニー室内合奏団 180 回定期公演 [3500 字]	単著	平成 23 年 12 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 180 回定期公演 パンフレット pp.2-3	「京フィルの第九」 ベートーヴェン： ≪コリオラン≫序曲ハ短調 op.62 交響曲第 9 番 ニ短調 ≪合唱付き≫op.125 ベートーヴェンは自身の難聴がすでに完治しないことを確信したとき、音楽家としての将来に絶望し、有名な『ハイリゲンシュタットの遺書』を書く。まさに、音楽家としてこれからという 32 歳の時である。しかしその内容は、「死」からの決別であり、「自分の為すべきことを成し遂げるまでは、決して死なない」という、遺書の形をとった決意表明であった。≪コリオラン≫は遺書を書いた後の作品であり、「傑作の森」と呼ばれる彼の創作の黄金期に書かれたものである。また、交響曲第 9 番は「為すべきことを為す」のを続けてきたベートーヴェンの晩年の作品であり、ブラームス、マーラーなど、彼に続く多くの作曲家に影響を与え続けてきた。人の人生を支え得る音楽の持つ力を証明する作品として、解説を執筆。
25 京都市交響楽団第 557 回定期演奏会[3600 字]	単著	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団 第 550 回　定期演奏会　パンフレット	モーツァルト：フルートとハープのための協奏曲 ハ長調 K.299 ダマーズ：フルート、ハープ、弦楽のためのデュオ・コンチェルタントベートーヴェン：交響曲第 9 番 ニ短調 ≪合唱付き≫op.125 EU（欧州連合）のいわゆる連帯の歌は、ベートーヴェン「交響曲第 9 番」4 楽章の合唱「歓喜に寄せて」である。耳が不自由だったベートーヴェンの中では、常に「音楽」と「言葉」が同じ意味を持ってあり、言葉を交わしていたと考えられる。「歓喜の歌」の楽曲構成から、第九でベートヴェンの内的言語の可能性に基づき、楽曲解説を行った。
26 京都フィルハーモニー室内合奏団 182 回定期公演 [3700 字]	単著	平成 24 年 3 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 182 回定期公演 パンフレット pp.3-5	「古典派への道程」 ヴィヴァルディ： 弦楽のための協奏曲 ト短調　RV.157 4 つのヴァイオリンとチェロのための協奏曲 ロ短調　RV.580 ～≪調和の霊感≫Op.3 より第 10 番～ ピッコロ協奏曲　ハ長調　RV.443 モーツァルト: セレナータ・ノットゥルナ　ニ長調　K.239 ハイドン： 交響曲第 45 番 嬰ヘ短調 ≪告別≫Hob.Ⅰ-45 3 人の作曲家は、日本人が義務教育機関に音

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				楽科の教科書で必ず目にする作曲家たちである。そのため、名前を見ただけでは古い印象がぬぐえない。しかし彼らの作品は、作曲された当時には時代の先端をいく作品であり、現代のコンサートで聴いたとき、むしろ「新しさ」を感じる場合が多い。本解説では、彼らの作品の持つ「新しさ」の要素を、独自性と共に解説し、長く人々に愛される「古典」というジャンルの普遍性について考える機会とした。
27 京都フィルハーモニー室内合奏団 183 回定期公演 [3700 字]	単著	平成 24 年 4 月	京都フィルハーモニー室内合奏団 183 回定期公演 パンフレット pp. 4-6	「ロマンティシズムあふれた　ヨーロッパン音楽探訪」 E.グリーグ：組曲「ホルベアの時代から」Op.40 R.G.シュトラウス：クラリネットとファゴットのための二重小協奏曲　ヘ長調 B.B.V.バルトーク：弦楽合奏のためのディベルティメント プログラムの 3 曲は、いずれも作曲家の危機的状況の直前・直後に生まれた作品である。不思議と、音楽史の過去の時代の様式に則ったスタイルで書かれていることが共通する。 人間は、危機的に状況に陥ると、過去の幸せだった時代を巨大回顧して危機を乗り越えようとするという。作曲家が作品創作当時、どのような危機的状況にあったのか、またどうしてその作品スタイルをとったのかに注目し、解説を行う。
28 京都フィルハーモニー室内合奏団 184 回定期公演[3000 字]	単著	平成 24 年 6 月 24 日	京都フィルハーモニー室内合奏団 184 回定期公演 パンフレット pp. 4-6	「ドイツ・オーストリアの栄光と苦悩」 ハイドン：交響曲第 7 番 ハ長調「昼」Hob. Ⅰ:7 ワーグナー：ジークフリート牧歌 シュレーカー：室内交響曲 京都フィルハーモニー室内合奏団の創立 40 周年記念コンサートである。取り上げられた 3 人の作曲家は、時代と作風の変化の時代に生きた作曲家であった。中でもシュレーカーは、リヒャルト・シュトラウスと拮抗する人気を誇った作曲家であったが、ナチスドイツの台頭により心痛のあまり亡くなってしまった。彼の作品は、あまり演奏されることがなく、作風の理解や解釈が進んでいない。本作品は、彼がウィーン・アカデミーの教授陣の演奏会のために作曲したものである。それぞれの作曲が創作した時代背景、またその必然性について触れながら、「作曲の理解と時間」をテーマに作品解説を執筆した。
29 辻井伸行(ピアノ) 垣内悠希 指揮 京都市交響楽団 [3500 字]	単著	平成 24 年 9 月 20 日	京都市／京都コンサートホール（公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団）	ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第 2 番　ハ短調 op. 18 チャイコフスキー:交響曲第 4 番　ヘ短調 op. 74 本プログラムと全く同じプログラムで行われたコンサートに、アシュケナージ指揮によるものがある。そのコンサートはアシュケナージが亡命先のイギリスから、初めて祖国に戻った際のコンサートであり、非常に政治的なものであ

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ると同時に、アシュケナージの祖国への思いを象徴するコンサートであった。2 つの作品は、そのために選ばれたものである。両作品の持つ、ロシア土着の音楽の魅力と、それを生かしつつ洗練された手法をもって作曲された作品の魅力について解説を行う。
30 京都フィルハーモニー室内合奏団 185 回定期公演[3500 字]	単著	平成 24 年 10 月 21 日	京都フィルハーモニー室内合奏団 185 回定期公演パンフレット pp. 3-5	「ドビュッシー生誕 150 年とフランス音楽」C. グノー：小交響曲 D. ミヨー：打楽器と小管弦楽のための協奏曲 C. ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲（シェーンベルク編曲）　管弦楽のための 3 つの交響的素描「海」　（J. ユー編曲）【世界初演】 ドビュッシー生誕 150 周年を記念してのコンサートでは、ドビュッシーの作品を編曲した 2 曲と、ドビュッシーの才能をいち早く認めたグノー、生前のドビュッシーと親交のあったミオーとをとりあげる規格である。特に≪海≫は、楽譜の初版の表紙が葛飾北斎「神奈川沖波裏」の大きな波の絵が用いられた。また、2012 年に歌舞伎の猿之助襲名披露の中で演じられた『黒塚（安達原）』と、バレエ・リュスとの関係を解説。バレエ・リュスはドビュッシーの≪牧神の午後の前奏曲≫作曲のきっかけとなったバレエ団である。日本とフランスが、文化的に深い影響関係にあったことをふまえ、曲目解説を行った。
31 京都市交響楽団　特別演奏会 「第九コンサート」 [4200 字]	単著	平成 24 年 12 月 27 日 ・28 日	京都市交響楽団	ワーグナー 舞台神聖祭典劇「パルジファル」第 1 幕への前奏曲 楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」第 1 幕への前奏曲 ベートーヴェン 交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」op. 125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される ワーグナーはベートーヴェンの後継者として自分を位置づけ、ベートーヴェンの生誕 100 周年の祝いに有名な「ベートーヴェン論」を発表した。そして、ワーグナーが自分の音楽作品のために作った「バイロイト祝祭劇場」のこけら落としには、自身の作品とともにこの「第九」を演奏し、「ドイツ音楽芸術の至高」を目に見える形で表そうとしたのである。 「第九」作曲当時のベートーヴェンの状況と、対照的な後世の社会的・政治的な「第九」理解を比較しつつ、周りの状況がいかにあろうとも変わらぬ、「第九」が表現しようとする「連帯」と「歓喜」について解説。
32 京都フィルハーモニー室内合奏団 187 回定期公演[3500 字]]	単著	平成 25 年 2 月 22 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	ヨハン・セバスティアン・バッハ ブランデンブルク協奏曲全曲 BMV1046-1051 バッハの若い時代において、自身のポートフォリオとして作成した協奏曲集の全曲演奏会に向け、バッハ一族の音楽的特徴とともに、17 世

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				紀に活躍した古楽器ついても解説を行う。 　現代におけるバッハの意義についても言及した。
33 京都フィルハーモニー室内合奏団 188 回定期公演[3500 字]	単著	平成 25 年 4 月 21 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	武満徹≪ファンタズマ／カントスⅡ≫ ベートーヴェン≪ピアノ協奏曲第 3 番 Op. 37≫ プーランク≪シンフォニエッタ≫ 　現代音楽の巨匠 2 人が、映画音楽の作曲経験があったことから、映像と音楽との関係にふれつつ解説を行った。
34 京都市交響楽団第 568 回定期演奏会 [4300 字]	単著	平成 25 年 5 月 24 日	京都市交響楽団	ベートーヴェン≪序曲「コリオラン」op.62≫ ブルックナー≪交響曲第 8 番ハ短調≫ ［ノヴァーク版 第 2 稿（1890）］ 　鍵盤楽器奏者として出発し、ウィーンで成功した 2 人の作曲家について、作曲家としてのアイデンティティーを踏まえた解説を行った。
35 京都フィルハーモニー室内合奏団 189 回定期公演[3200 字]	単著	平成 25 年 6 月 17 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	P.チャイコフスキー　≪フィレンツェの思い出≫　Op.70　ニ短調 A.E.ヒナステラ≪協奏的変奏曲　Op.23≫ 　出身国の音楽的伝統が色濃く反映された作曲家とその作品について、民族共通の音楽性と共に、作曲家の独自性を観点に解説を行う。
36 京都市交響楽団第 572 回定期演奏会 [4600 字]	単著	平成 25 年 9 月 6 日	京都市交響楽団	F.メンデルスゾーン序曲≪フィンガルの洞窟≫ ロ短調　Op.26 L.ベートーヴェンピアノ協奏曲第 1 番ハ長調 Op.15 L.ベートーヴェ交響曲第 3 番　変ホ長調　≪英雄≫　Op.55 　新しい時代の影響が作品に色濃く反映された作品を並べたプログラムである。音楽作品が聴衆や技術革新や社会そのものの影響を強く受けつつ、作曲家を通して世に生み出されていることについて、作品に基づき解説する。
37 京都フィルハーモニー室内合奏団 190 回定期公演[3200 字]	単著	平成 25 年 10 月 27 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	J.L.F.メンデルスゾーン,B. ≪弦楽のための交響曲第 9 番　ハ長調≫ G.マーラー≪交響曲第 1 番　ニ長調　「巨人」 Op.23　≫ 　オリンピックが東京で 2020 年に開かれることが決定されたことを受け、スポーツと音楽との関係について、「祭典」をキーワードに解説。どちらの作曲家もユダヤ系であったことから、宗教的な背景もふまえ、解説を行う。
38 京都フィルハーモニー室内合奏団 192 回定期公演[3200 字]	単著	平成 26 年 3 月 16 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	H.I.F.von ビーバー≪バッターリア≫ W.A.モーツァルト≪フルート協奏曲 第 1 番ト長調　K.313 (285c)≫ F.J.ハイドン≪交響曲第 103 番 変ホ長調 Hob. Ⅰ:103「太鼓連打」≫ 　3 つの作品に共通の、「作品と依頼人との関係性が強い」側面に光をあて、解説を行う。また、ウィーンが自己の伝統として、音楽文化を教育していこうと積極姿勢を示していることに

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ふれ、音楽的伝統と教育、また聴衆と作品との関係性について、解説を行う。
39 京都フィルハーモニー室内合奏団 194 回定期公演[3500 字]	単著	平成 26 年 6 月 29 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	ブリッジ　≪アイルランドの旋律 －ロンドンデリーの歌－≫ ラター≪弦楽のための組曲≫ ブリテン≪フランク・ブリッジの主題による変奏曲≫作品 10 コープランド≪劇場のための音楽≫ 　コープランド以外は、イギリスを活動拠点とした比較的新しい作曲家によって構成された演奏会の解説。「イギリス的」なるものと「アメリカ的なるもの」との差と共に、伝統的な旋律が現代の作曲家によって新たな作品として提示される過程とその意義について言及する。
40 京都市交響楽団　特別演奏会 「第九コンサート」 [2400 字]	単著	平成 26 年 12 月 27 日 ・28 日	京都市交響楽団	バーバー≪弦楽のためのアダージョ≫ M.ラヴェル≪亡き王女のためのパヴァーヌ≫ ベートーヴェン 　交響曲第 9 番ニ短調「合唱付」op.125 ＊歌詞対訳　一部改訂、再録される 　バーバー・ラヴェルの両作品は、現代にも映画に使用されるなど比較的有名な作品である。 　今年は「ベルリンの壁」が崩壊して 25 周年にあたり、その式典で歌われたのがやはり≪歓喜によせて≫であった。「第九」が表現しようとする「連帯」と「歓喜」について、現代の世界状況と合わせて解説。
41 京都フィルハーモニー室内合奏団 197 回定期公演[3200 字]	単著	平成 27 年 3 月 14 日	京都フィルハーモニー室内合奏団	モーツァルト「フィガロの結婚」より≪序曲≫ ベートーヴェン 　ピアノ協奏曲第 4 番 Op.58 　交響曲第 8 番　Op.93 　3 曲は共に、時代を反映した作品である。 解説では、フランス革命前夜の雰囲気が色濃い「フィガロの結婚」、ナポレオンのヨーロッパ席捲を背景としたベートーヴェンの作品群を、それぞれに関連性アルタ作品との比較によって解説した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
【歌詞新対訳作成】 １ ベートーヴェン:交響曲第 9 番　ニ短調 Op125 第 4 楽章「歓喜によせて」	単著	平成 23 年 12 月	京都市交響楽団 第 557 回　定期演奏会　パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ハインリヒ・フォン・シラー作　「歓喜によせて」新対訳作成
２ ヨハン・シュトラウス（息子）喜歌劇「こうもり」より ≪公爵様、あなたのようなお方は≫（アデーレのアリア）	単著	平成 24 年 1 月	京都市交響楽団 第 551 回　ニューイヤーコンサート　パンフレット	京都市交響楽団委嘱 ヨハン・シュトラウス（息子）作 「こうもり」より ≪公爵様、あなたのようなお方は≫（アデーレのアリア）新対訳作成
【演奏会企画】 １ 主催:元町商店街連合会／元町ミュージックウィーク実行委員会　第 8 回神戸元町ミュージックウィーク主催公演 「元町から生まれた音楽―スクエア・ピアノと神戸中央合唱団」	共同	平成 17 年 10 月	神戸新聞松方ホール	今年震災後 10 年を迎える神戸元町ミュージックウィーク委嘱企画。神戸を発祥とする、神戸女学院秘蔵のスクエアピアノ（日本最古のスタインウェイ製）と、神戸中央合唱団による。文部省唱歌をはじめ、学習指導要領において歌唱共通教材や旧鑑賞教材に取り上げられてきた作品を中心としたコンサートの企画協力と解説およびアートマネージメントを担当する。　出演者：添田 ゆみ（ピアノ）、中村 健（ピアノ/指揮）神戸中央合唱団　協力：神戸女学院大学音楽学部　マネージメント：山本美紀
２　愛知万博関連企画ダイナミック・スイス ・プロジェクト「静寂の間」	共同	平成 17 年 10 月 12 日 10:00-, 12:00-14:00-、 16:00-、18:00-	法然院（京都）	チューリヒ芸術大学講師ユルゲン・クルーシェ（Juergen Krusche）らが主催する「静寂の間」silent place events 公演コンセプト解説の邦訳。本企画は、愛知万博関連芸術企画及び現代スイスの文化を紹介する「ダイナミックスイス・プロジェクト」の一つに位置づけられており、スイス大使館およびスイス・プロ・ヘルベティア文化協会の全面的バックアップをうけたものである。主催／企画：ユルゲン・クルーシェ 共催：スイス・プロ・ヘルヴェティア文化協会 スイス大使館 コンサート会場のマネージメント、演奏者のプロデュース、著作権処理、解説執筆を担当 共同者：ユルゲン・クルーシェ（Juergen Krusche）、山本美紀
３　愛知万博関連企画ダイナミック・スイス ・プロジェクト「静寂の間」	共同	平成 17 年 10 月 13 日 16:00-、 18:00-、20:00-	徳林寺（名古屋）	
４ 神戸女学院創立 130 年記念　神戸女学院音楽科（現音楽学部音楽学科）100 周年記念－日本最古のスタインウェイが語る－　元町音楽物語　神戸女学院秘蔵のスクエア・ピアノの展示と演奏 主催：元町商店街連合会／元町ミュージックウィーク実行委員会　協力：神戸女学院大学音楽学部	共同	平成 17 年 10 月 15 日 11:30- 13:30- 15:30-	神戸市立博物館：エントランスホール	神戸女学院草創期、宣教師に送られたスクエアピアノと、現在の神戸女学院大学音楽学部アウトリーチ履修生による。文部省唱歌をはじめ、学習指導要領において歌唱共通教材や旧鑑賞教材に取り上げられてきた作品を中心とした企画を行う。本企画は、博物館でのスクエアピアノの展示を伴い、地域の文化施設による生涯教育の機会となった。企画協力と作品解説およびアートマネージメントを担当する。出演者：神戸女学院大学音楽学部「音楽によるアウトリーチ」履修生　　構成・コメント：中村健(音楽学部教授)

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 キリスト教保育連盟第 92 回 関西部会大会エキシビション「街まき」	共同	平成 18 年 3 月	聖和大学：講堂	キリスト教保育連盟からの招聘をうけ、日々の教育に応用可能な要素によるコンサートを行う。城戸みゆき作「街まき」を台本として、アニメーション（城戸）とマリンバ・打楽器演奏（内山光知子）で構成。効果音として使用した各種の楽器紹介や、ボディーパーカッションなどの講習も行い、身近な素材を使った楽器による教育現場に活かせるアイディアを提供した。企画開発、著作権処理、マネージメント、プロデュース、解説を担当。 共同者：山本美紀、荒島智子 主催：キリスト教保育連盟 関西部会
6 NHK 神戸放送局 委嘱作品「NHK 公開セミナー うみをあげるよ ～絵本とリズムで体験するファンタジー～」	共同	平成 18 年 7 月 9 日　2 回公演（11:00-、14:00-：定員各 40 組）	NHK 神戸放送局	NHK 神戸放送局（トア・ステーション）において、「NHK 公開セミナー　うみをあげるよ ～絵本とリズムで体験するファンタジー～」を企画。幼児から小学校低学年の児童とその保護者対象としたものであり、村上勉「うみをあげるよ」の絵本を軸にしながら、小学校音楽科歌唱共通教材、および旧鑑賞共通教材から抽出した音楽で構成。マリンバのコンサート、およびボディーパーカッションによるワークショップを展開し、講師を務めた。親子で楽しめる歌唱指導、およびボディーパーカッションの指導を行い、子どもの発達に応じた音楽的表現の発露の機会として、参加者に好評を得る。メディアを通じ学校教育の拡大した音楽科教育の可能性を探る（プロデュース／企画開発／講師を担当）。 主催：NHK 神戸放送局 共同者：山本美紀、NHK
7 キエフ･ナイチンゲール合唱団トーク＆コンサート	単独	平成 18 年 11 月	日本フリーメソジスト桜井聖愛教会（大阪）	2000 年にドゥルージバの要請によって発足したキエフ第 29 音楽学校生徒による合唱団の来日コンサート。彼らのレパートリーと共に、日本の小学校音楽科歌唱教材を含むレパートリーでコンサートを構成し、好評を博す。
8 トーク＆バリア･フリー　デュオコンサート「チェルノブイリから－愛と平和を考える－」	単独	平成 19 年 12 月	日本フリーメソジスト桜井聖愛教会（大阪）	チェルノブイリで自ら被爆体験を持つ医師の講演会とともに、ハンディキャップを持つアーティストによる合同コンサートを企画。困難な状況下でも、希望を得て新たに歩みだす勇気を生み出す「生きる力」育成を目指す。 講演：ザムラ・ヴァレンティナ、　ライブ：バリアフリーデュオ★ぢゃすたら
【演奏会等】 1 NHK 神戸放送局 委嘱作品「NHK 公開セミナー うみをあげるよ ～絵本とリズムで体験するファンタジー～」	単独	平成 18 年 7 月 9 日　2 回公演（11:00-、14:00-：定員各 40 組）	NHK 神戸放送局	NHK 神戸放送局（トア・ステーション）において、「NHK 公開セミナー　うみをあげるよ ～絵本とリズムで体験するファンタジー～」を企画。幼児から小学校低学年の児童とその保護者対象としたものであり、村上勉「うみをあげるよ」の絵本を軸にしながら、小学校音楽科歌唱共通教材、および旧鑑賞共通教材から抽出した音楽で構成。講師として、ワークショップ・コンサートに出演。　　主催：NHK 神戸放送局

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２ 中小企業庁「平成 21 年度　地域商店街活性化事業」 KOBE ミュージック・ウォーク 2010 コンサート出演	共同	平成 22 年 3 月	元町商店街 特設ステージ	ヴィオラとピアノによる､ライブコンサート(グループ名：Maris Stella）。小学校音楽科歌唱共通教材、および旧鑑賞共通教材から、抽出した音楽で構成。好評を得る。 主催:ＫＯＢＥミュージックウォーク 2010 実行委員会 後援：兵庫県／神戸市／(財)神戸国際観光コンベンション協会／(財)神戸市民文化振興財団／(社)神戸港振興協会／神戸商工会議所／神戸新聞社／サンテレビジョン／ラジオ関西 ヴィオラを担当
【競争的資金の 獲得状況】 １ 学校法人瓜生山学園京都造形芸術大学平成 15 年度特別研究助成	分担者	平成 15 年度	学校法人瓜生山学園京都造形芸術大学	獲得金額：600,000（単著年度） 展覧企画「木を植える人」に関連する、学習指導要領を踏まえた芸術鑑賞教育活動、およびアヴィニョン／エディンバラ両国際フェスティバル参加への助成。
２ 平成 22 年度 科学研究費補助金 基盤研究 C （独立行政法人　日本学術振興会） 「地域の教育・文化施設における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」	分担者	平成 22 年度 ～平成 24 年	（独立行政法人　日本学術振興会	獲得金額：1,600,000／3,200,000 （間接経費:960,000 含まず。3 年間） 絵本の読み聞かせに音楽やダンスなどを組み合わせ、子どもたちに絵本や芸術を深く体験させる新しい芸術鑑賞方法である「体感型読書」システムの研究と、芸術鑑賞教育プログラムの構築を目指す。特に、地域の教育・文化施設で実施可能な､小･中音楽科および国語科教材開発を最終目的とする。（研究代表者：伊崎一夫、研究分担者：山本美紀）
３ 平成 23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 B （独立行政法人　日本学術振興会）「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」　研究代表者	代表者	平成 23 年度～ 平成 25 年	独立行政法人日本学術振興会	獲得金額：個人 4,500,000／ Total 金額 8,000,000（間接経費：2,400,000 含まず。3 年間）　本研究は学校と地域既存の文化施設とを連動させ、地域に根差した「連携型プログラム」の研究と開発を行うものである。「文化施設」とは、コンサートホール（音楽専用ホール）や美術館、博物館あるいは地域でこれらの役割を担う市民会館などを指し、「連携型プログラム」とは、学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する芸術文化活動プログラムを指す。両者の協力体制を「連携型プログラム」として〈持続可能な地域文化力〉育成のための施設の有効活用と人材育成の方法論を示し、文化体験を保障するシステムの構築と環境の整備を目指す。
４ 平成 23 年度 学内特別研究費 （環太平洋大学） 「英語社会で活躍をする際の心理的障害に関する実践研究 －国際学会参加支援を通して－」 研究分担者	分担者	平成 23 年度	環太平洋大学	獲得金額：98,000／294,000 被験者の国際学会参加のための心理的障害を克服するための、英語研修プログラムの作成に携わる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５ 平成 25 年度　音楽に関する研究への助成「音楽・舞踏・メディアアートを用いた芸術教育コンテンツの作成」	代表者	平成 25 年度	公益財団法人 ローム　ミュージック　ファンデーション	助成金額：300,000 本研究は、「コンサートホールと学校をつなぐ教育プログラム研究会」に対し、その教育プログラムに用いるコンテンツ作りのために助成されたものである。本助成により、学校教育課程とリンクした、スクールコンサートの制作と事前事後指導用の指導案開発、また教材開発を行うものである。
６ 平成 25 年度　公益財団法人 両備樫園記念財団　助成金「岡山孤児院音楽幻燈隊にみる音楽教育的意義－日本にもたらされた音楽教育の多面性－」				助成金額：150 千円（単年度） 本研究は、岡山孤児院で行われた「音楽幻燈隊」に関わる一連の事業及び活動を、教育史的観点から研究しようとするものである。中井十次が音楽を取り入れたのは、宣教師からの直接的勧めによるものであると考えられる。日本の公教育での音楽教育及び宣教師によるミッションスクールでの音楽教育と孤児院内での音楽教育との比較検討を通して、岡山孤児院における音楽幻燈隊及び音楽活動を音楽教育的視点から分析、その意義と日本における位置づけを目指す。
【学会発表】 １　日本における欧米型劇場文化の導入と影響――ジョージ・オルチン（George Allchin 1852-1935）の幻燈伝道を中心に	単独	平成 17 年 12 月	大阪大学	大阪大学の講義にて、ゲスト講義。日本におけるアートマネージメント史について概観すると同時に、ごく初期の西洋音楽受容の状況について、特に現代の音楽科教育につながる視点から解説した。オルチンは明治時代初期に来日した宣教師であり、同志社、神戸女学院、梅花など、各種のキリスト教系学校の創設に関わった人物である。彼の活発な宣教活動は、教育活動の延線上にあるものであり、常に学校教育が理想的モデルとなっていた。また、彼のオリジナル幻燈伝道のための作品「ほととぎす（放蕩息子）」「世は情け（善きサマリア人）」は、人間としての道徳観や規範意識を育てる内容であり、多くの日本人の心を捉えていた。彼の幻燈伝道のプログラム構成の目標と課題、評価点を分析し、今日の音楽科教育との共通点また、授業に応用可能な点を示す。
２「明治期における伝道集会とエンターテイメント― ジョージ・オルチン（ George Allchin 1852-1935）による幻燈伝道集会をめぐって」	単独	平成 19 年 4 月	福音主義神学会　神戸神学館	オルチンは明治時代初期に来日した宣教師であり、同志社や神戸女学院など、各種のキリスト教系学校の創設に関わった人物である。彼の活発な宣教活動は、教育活動の延線上にあるものであり、常に学校教育が理想的モデルとなっていた。このような彼の活動の実態は、昨今のキリスト教とセットになった文化のグローバル化の議論とは、全く逆のものであった。本論では、日本文化の中で奮闘した宣教師ジョージによる、オリジナル幻燈伝道制作に注目したものである。彼の伝道活動において想定されたのは、学校に通う児童生徒、保護者たちであり、あくまでも日本の豊かな風俗や文化的背景を尊重したものだった。彼の幻燈伝道で用いられた音楽と、そこに込められた道徳観や規範意識を明ら

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				かにしつつ、日本との比較分析を行った。それにより、今日の「文化のグローバル化」の問題を、音楽科教育における授業実践の課題と絡めて検討し、学習指導案を提示した。
３「現代に生きるメソジストと音楽－グローバル・ソング Global Song（グローバル・ヒムノディ Global Hymnody）の視点から」	単独	平成19年9月	日本ウェスレー・メソジスト学会　於：関西学院大学	初期メソディストの指導者であったジョン・ウェスレーにとって、讃美歌の歌詞とその歌唱方法は、信徒教育の意味を持ち、他の派とは違った理解があった。本稿では、そのようなメソディストの伝統における讃美活動を、『Global Song』あるいは『Global Hymnody』を手がかりに考える。『Global Song』『Global Hymnody』とは、現在世界各地で展開されている、讃美歌を「自分たちのもの」としてとらえようとする、新しい讃美歌の創作や、付随する活動の総称である。メソディストの讃美歌の歌詞と奨励される歌唱方法は、社会の構成員として求められる道徳心や規範意識が反映されたものであり、今日の日本における学校教育目標と重なる点は多い。本発表では、ウェスレーの歌唱指導の理念と現代の日本の音楽科教育目標との共通点の分析とともに、『Global Song』の視点をヒントに、今日の音楽科授業において歌唱教材が「自分たちの歌」として児童生徒に受け入れられるための基本的条件を明らかにし、具体的な指導方法を提示した。
４「チャールズ･ウェスレー生誕300年を記念して」	単独	平成19年11月	日本フリーメソジスト教団 西部教区 信徒大会　於：日本フリーメソジスト加古川キリスト教会	チャールズ･ウェスレー作の讃美歌を中心とした、メソジストの伝統的讃美歌のレクチャー。チャールズ・ウェスレーはジョン・ウェスレーの弟であり、6000とも言われる詩歌を残している。チャールズの詩をジョンはそのまま使用したわけではなく、大胆な編集の手を加え、それを当時の流行歌など、比較的覚えやすいメロディーに乗せて信徒に提供していった。歌詞に込められた信徒教育の目標とともに、ジョンの歌唱指導方法について詳説。さらに、現代の音楽科教育で採用されている楽曲をとり上げ、歌詞の内容的な共通点を分析するとともに、行われている歌唱指導との共通点を明らかにし、各人に応じた発声法とともに、合唱の際に必要な技法について実践とともに解説を行う。
５「静かにささやく声」	単独	平成21年7月	関西学院大学 神学部チャペル　講演	明治初期に来日した宣教師オルチンの、幻燈伝道活動の裏にあった彼の音楽を媒体とした教育理念を､宣教レポートの記述から明らかにする。彼の幻燈伝道は学校教育においても度々実践され、教材として用いられたものは道徳的な内容のものが多い。キリスト教精神に基づく道徳観を日本の風俗に変換するために用いた彼の手法において、音楽は教育効果をさらに高めるために必要なものであった｡音楽科教育が単著に｢音楽」に限られた教育目標を持つものではなく、「生きる力」として人間を支えていく力となっていくと想定されていたことを、オルチンの記述から考察する。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６ 「18 世紀メソディストにおける讃美歌と公共性-個人的体験から共同体の一致体験へ-」	単独	平成21年10月	第60回日本音楽学会全国大会　大阪大学	メソディスト運動とは、英国国教会司祭ジョン・ウェスレーJohn Wesley によって 18 世紀末半ばから英国で展開された信仰復興運動である。その特性は、ウェスレーの個人的な信仰的覚醒がその発端となっている点であり、「会衆歌」（共同体の歌）として設定された讃美歌にその影響があることだ。ジョン・ウェスレーは讃美歌の歌詞とその歌唱方法の指導によって、信徒を教育し、組織をと整えていった。そのようなメソディストの讃美歌には、込められた道徳心や規範意識があり、新しい時代の「公共圏」の創造に大きな役割を果たした。本発表ではウェスレーの歌唱指導の理念と現代の学習指導要領における音楽科教育目標との共通点を分析し、音楽科授業において共同体験としてそれらの具現化への道筋を示した。
７ 音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる ― 広がる教室とこころの育ち ―(「再掲」)	単独	平成22年8月	主催：非営利特定団体人間教育研究協議会（於）芦屋市立宮川小学校	第 26 回人間教育実践交流会　2011 年　芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育－新教育課程とその実践－」「音楽」部会コーディネーターとして、発表者の選定ほか運営を行う。日本各地で個々に始まりつつある音楽科教育における「出前授業」をはじめとした専門家のアウトリーチ活動の受容状態や、文化団体の教育プログラムについて概観し、分析を行った。本発表は実践成果を共有することにより、子どもたちのこころの育ちを、芸術文化をキワードに支援し実現していくための連携について、問題提起するものである。
８ The Study for The digital Teaching Materials Which used “Warabe-uta” into Music Education of Japan. ― The Outlook and The Issues― (Full Paper)	共同	平成24年3月	SITE 2012--Society for Information Tecnology & Teacher Education International Coference 2012 In Austin Texas Association for the Advancement of Computing in Education （査読あり）	本発表は『「わらべ歌」を用いたデジタル教材の活用』についての発表である。「わらべうた」とは伝統的な子どもの遊び歌であり、非常に少ない音による単著純な構造を持つ。「わらべ歌」を音楽教育に持つことにより、小学校や幼稚園教諭はピアノをはじめとした特別な音楽の技術や技能を必要とすることなく、それぞれ音楽科授業あるいは音楽表現の指導を進めていくことができるという利点がある。一方、日本のデジタル教材の開発は、十分に研究が進んでいるとは言い難い。本論考で山本は、大阪教育大学寺尾研究室で作成された当該教材について、現場での使用の実態を調査し、日本全体的なデジタル教材の普及率と比較検討を担当した。同時に、今後の課題を示すと共に、音楽科教育におけるデジタル教材の今後の活用についても提案事例を示し論述した。 【教員教育・情報技術教育国際学会　プレゼンテーション】山本美紀／寺尾正／竹下裕来 教員教育･情報技術教育国際学会 ＊発表については、単独発表
９ コンサートホールにおける「教育プログラム」の構造と作品アプローチ－ウィグモア・ホール	単独	平成23年11月	2011 年　日本音楽学会第62回　全国大会(於)東京大学	本研究発表は、英国における地域密着型コンサートホールの運営する「教育プログラム」の分析を通して、１つの音楽現場における作品へのアプローチの実態を検証し、作品受容における

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Wigmore Hall（英国：ロンドン）の教育プログラムを中心に－				方向性の広がりと可能性を示そうとするものである。とりあげたウィグモア・ホールの教育プログラムは、人生の全ステージにおいて、多様な関心とレヴェルにあった音楽享受のレディネスを保証する、戦略的な構造となっている。中でも特徴的なのは、地域の幼稚園や小学校に授業で活用できる「デジタル教材」を用意しており、児童生徒を対象としたコンサートと連携するしくみを構築していることである。そのような努力の結果、同ホールのスクールコンサートは通常のコンサートでは演目にのりにくいレパートリーや難解とされる作品を扱う内容となっている。本発表では、ホール運営における戦略的な構想と扱われる作品の新たな意義づけを通し、幼児期の表現活動、また音楽科教育内での受容の実態にたつ音楽作品へのアプローチの可能性を示すものである。
10「草創期メソディスト讃美歌集にみるウェスレーの芸術観―『ファウンダリー・コレクション Foundery ollection』より ―	単独	平成24年9月	日本ウェスレー・メソジスト学会　於：日本基督教団銀座教会	先行研究として、Francis B. Westbrook による、”Some Early Methodist Books”の中にある’The Foundery Tune Book’を手掛かりに、Foundery Collection について、実際に使われている音楽の分析を通し、ウェスレーの芸術観と音楽教育について考察したもの。 Foundery Collection は、再版されることがなかったことから、ウェスレーにとっての「失敗作」「試験作」という意見方がされている。しかし、実際に楽譜を確認すると、記譜法などの通常との違いは、音楽教育を受けていない当時の一般の人々にとって、わかりやすく表記しようとしたものであることが推測される。 　楽譜とは何か、誰のための楽譜であるのか、その対象がはっきりしたとき、このように楽譜が違った姿をもつということは興味深いことである。今日の現場教師たちが生んだ「図像楽譜」と 18 世紀のウェスレーらによる楽譜を比較検討を通し、楽譜の持つ意味と芸術教育における役割について考察を行う。
11 シンポジウム「地域発、生活発、共同体発、1950年代以降のキリスト教各派の新しい讃美歌― 伝統と信仰の普遍性を越えて ―」コーディネーター	共同	平成24年11月24日	日本音楽学会第 63 回全国大会（於）西本願寺 聞法会館	18世紀イギリス産業革命時に起こった「メソディスト運動」は、社会システムの変換から新しい信仰共同体と讃美歌が生まれることを示している。そのような共同体の誕生や社会的要請と讃美歌創作との関係は、現代も相変わらず続いている。特に第2次世界大戦後1950年代から現代に至る、讃美歌創作をはじめとした教会音楽に認められる変化は、カトリック／プロテスタントにかかわらず、歴史的に激しく大きなものである。讃美歌集の変化の中で特に顕著なものに、「こども讃美歌」の扱いがある。音楽リテラシーの低下は、現代において世界的な問題でもあることから、本パネルでは、教会内外で音楽活動に携わるキリスト教各教派からのパネラーによって、1950年代以降の変遷のそれぞれの音楽的特徴をふまえつつ、地域の音楽教育の場としての教会と讃美歌の果たす役割についてシ

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ンポジウムを行った。 コーディネーターおよび､17 世紀～18 世紀イギリスにおける音楽と文化について発表を担当。 コーディネーター：山本美紀パネリスト：小栗献（関西学院大学礼拝音楽非常勤講師）、長畑俊道（立教小学校音楽科教師）、林祐美子（エリザベト音楽大学教授）、山本有紀（松山東雲女子大学子ども学科教授）
12 共同発表「教育プログラム」としての作品創作の試み －中村滋延　「悲しみの島」プロジェクトと教科領域への挑戦－	共同	平成 24 年 11 月 25 日	日本音楽学会第 63 回全国大会 （於）西本願寺 聞法会館	研究代表を務める「学校・文化施設による＜持続可能な地域文化力＞を育む『連携型プログラム』の開発研究」（科学研究費補助金（基盤研究 B）における、コンテンツ作成に関する研究発表である。本研究プロジェクトでは、現在、中村滋延作曲弦楽四重奏曲集「悲しみの島」より≪ソヴァン・マチャ≫、同氏作メディアアート、創作舞踊（楳茂都梅弥月氏）をコラボ―レションさせた、幼稚園対象および、小学校音楽科教育用コンテンツ創作に取り組んでいる。 本発表では、発達段階に即したプログラム開発の創作過程及び､その実践より得た成果から、幼少連携を視野に入れた、教科の領域を超えて能動的に芸術を受け止めていく力を育む、教育方法の方向性について、考察を担当、発表した。 発表者：山本美紀、中村滋延、根岸一美
13 初期メソディストの讃美に託されたもの ―個人的体験から共同体の信仰告白へ ―	単独	平成 25 年 9 月 14 日	日本賛美歌学会第 13 回全国大会 （於）青山学院女子短期大学	ウェスレーは会衆のために、最初の讃美歌集『ファンダリーに集う会衆のための旋律付き讃美歌集』“A Collection of Tunes set to Music as they are　commonly sung at the Foundery”を出版し、その後約 20 年たって 2 冊目の讃美歌集『讃美歌選集』(1761 年､Select Hyms with Tunes Annext）を出版した。本発表では、まずウェスレー作成した「讃美の心得」‘The Directions for Singing‘を概観後、『ファンダリー・コレクション』と『讃美歌選集』に収められた讃美歌の比較を通し、ウェスレーが讃美にどのような役割を託していたのか考察し、讃美歌と教育との関わりについて発表を行った。
14 園・学校とホール・芸術文化団体とによる連携型教育プログラム研究 ― 持続可能な地域文化力をはぐくむために ―	単独	平成 25 年 10 月 12 日	日本音楽教育学会第 44 回　全国大会 （於）弘前大学	学校教育課程における音楽科教育は、様々な音楽や音楽活動に触れる重要な入り口となる役割は果たしているが、それを理解するための「要素」の必要性と、音楽の美しさへの道筋ができていない。これらの課題に取り組むべく、①芸術作品聴取への取り組み、②教科領域の越境と可能性、の 2 つの観点から、連携型教育プログラム研究での成果を分析し、教育期間を超えても、自分で芸術作品聴取の可能性を広げ続ける経験の基盤づくりについて提言を行った。
15 ホール･芸術文化団体と学校とによる「連携型教育プログラム」開発をめぐって－ドラマが導く音楽芸術体験の深化－	単独	平成 25 年 11 月 2 日	日本音楽学会第 64 回全国大会（於）慶応大学	本発表は、ホールやオーケストラ団体などといった地域既存の文化資源と教育機関との連携による、「連携型教育プログラム」の開発をめぐって、ある「ドラマ」が受け手の芸術体験の深化にどのような役割を果たすのか考察するも

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				のである。連携型教育プログラム」が目指すのは、単に子どもたちが「盛り上がる」ことではなく、他の芸術プログラムに対しても、主体的受容姿勢につながる強い動機となる芸術体験の積み重ねを実現することである。「連携型教育プログラム」とは、学校と多様な文化施設とがふさわしい形で連動し、〈持続可能な地域文化力〉を高めることに寄与する芸術教育プログラムをさす。今回の発表では子どものための「連携型教育プログラム」開発をめぐり、音楽芸術の様々な入り口について「ドラマ」をキーワードに発表。
16 音楽マーケットとしての「日本」の始まり―アウセイ・ストロークのジャパン・プロモートをめぐって―	単独	平成 25 年 11 月 24 日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	アウセイ・ストローク（1887-1956）は、雑誌『会館芸術』のスポンサーである朝日新聞社社主村山家をうごかし、フェスティバルホールのこけら落としに「大阪国際フェスティバル」の開催を勧めた「きっかけ」となった人物である。本発表では、「大阪国際フェスティバル研究」に関わる史料や、研究の可能性を提示することにより、戦後日本の音楽界の土台をつくった音楽マネージャーの仕事について、概観したもの。
17 朝日会館から大阪国際フェスティバルへ　―ストロークの残像と影響―	単独	平成 26 年 7 月 13 日	『会館芸術』研究会発表 東京大学駒場キャンパス	大阪国際フェスティバルは、かつて日本における音楽祭の代名詞であり、実質的には日本初の国際音楽祭である。本発表では、提唱者であるアウセイ・ストロークが、どのような音楽祭を志向し、スポンサーである朝日新聞社社主村山一族に提示していたのか明らかにするとともに、ストロークの死後、その影響がどの程度まで大阪国際フェスティバルに残っていたのか、講演内容から考察したもの。 日本の洋楽受容、およびクラシック音楽の基本的イメージを構成した彼の仕事は、日本近代音楽史に重要な足跡を残している。
18 シンポジウム「地域と音楽　―コミュニケーション力を有する相互作用型コンテンツ形成と音楽芸術をめぐって―	共同	平成 26 年 12 月 12 日	日本音楽学会第 65 回全国大会（於）九州大学 大橋キャンパス	コーディネーターとして。パネリストは尾本章（非会員：州大学）大久保充代（非会員：八尾市文化ホールプリズムホール館長）中村滋延（西日本支部：九州大学教授）このパネル企画のテーマにある、「相互作用」の「相互」とは今回の場合は、「音楽作品」と「環境」を念頭に置いていた。音楽作品とは、作品そのものであるのに対し、環境には演奏会場や地域、演奏者、聴衆、企画者などが含まれる。環境の直接的影響をうけて作品がつくられ、さらに新しいジャンルが成立しつつあるという現代の事情として、それらを全体的なコンテンツとして包括的に分析する視点や方法論が今後必要とされているというのが本パネルの持つ課題意識である。本パネルでは「コンテンツ研究」を考えるために、コーディネーター及び 2 人のパネルから作品の「有り様」が変化した事例を提示、さらに作曲家の中村氏からは、「コミュニケーション力のあるコンテンツ」の要素を作る立場から、

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				また、尾本氏には作品を巡る環境であるホール建築（音響設計）と環境に関わる人材育成の立場から話題提供をいただいた。
19 岡山孤児院における音楽的事象と教育　―石井十次の「音楽」の用い方―	単独	平成 26 年 12 月 12 日	同志社大学人文科学研究所第 1 研究会近代日本とキリスト教 （於）同志社大学 啓明館　第 1 合同研究室	岡山孤児院において音楽幻燈隊活動の前提となる背景を、関わる多様な先行研究の検討及び、今日の近代音楽史研究の成果を踏まえながら明らかにすると共に、岡山孤児院音楽隊を舞台に展開した、近代日本音楽教育史と近代音楽史、及び近代日本宗教史研究のトライアングルな状況が持つ研究課題について示ことを目指した。 その結果、これまでの「音楽隊活動は救世軍の影響であった」という定説を覆し、当時の一般的な西洋音楽消費とそれほど変わらなかったことを明らかにした。また、孤児院内の音楽活動が、「シグナルとしての利用→呼び込みとしての利用」と変化していったことを明らかにした。
20 岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教 Band 文化の萌芽をめぐって	単独	平成 27 年 3 月	京都大学アジアと宗教的多元性研究会- （於）京都大学 キリスト教学研究室	岡山孤児院やその音楽隊についての研究は、これまで音楽的事象に着目してこなかったことで、取りこぼした点や誤解してきた点だけでなく、さらなる広がりを持った研究領域との接続が困難であった。本稿では、楽隊が始まる以前の岡山孤児院の日常的音楽状況から結成直前の音楽的内容を明らかにした。さらに、石井十次や聴衆となった大衆が触れたキリスト教を背景とした音楽状況の特性を探る。①キリスト教音楽における 1 ジャンルである器楽音楽が、「バンド文化」として関西で、しかも子どもの手によって始まったこと、②当時の豊かな世俗曲（謡も含め）を背景としたキリスト教音楽が存在したことを明らかにした。さらに今後の研究として、近代日本の音楽文化の大衆化と、西洋音楽の Tune 文化の歴史について課題を明示した。
21 シンポジウム 「會舘」という文化装置―『會舘藝術』と大阪朝日会館	共同	平成 27 年 3 月 14 日	『会館芸術』研究会主催シンポジウム 東京大学駒場キャンパス	パネリストとして参加。 パネル発表（仮題）「朝日会館と大阪フェスティバルホール－箱を文化装置化するということ」 ＜パネリスト＞岡野博（東京大学博士課程）、前島志保（東京大学准教授）、ヘルマン・ゴチェフスキ（東京大学准教授）、高山花子（東京大学博士課程）、山本美紀（奈良学園大学准教授）、 ＜コメンテーター＞渡辺裕（東京大学教授）

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　増 井　眞 樹

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
道徳教育 心の教育	道徳教育の指導法，コミュニケーション活動， 教育相談，学級経営

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ○生徒指導にむけた心の教育研究	平成 19 年 4 月 ～平成 25 年 2 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，生徒指導に係る心の教育の研究では，心の仕組みやクリティカルシンキングについて取り組み，人間は先入観や決めつけに影響されて行動することを再認識し，それ以降の生徒指導の根幹をなすものとなった。そのことが，生徒理解を一層深めることとなり，それに基づいた青少年健全育成協議会運営において評価を得ることができた。また，市内中学校の生徒指導担当者への指導・助言を行ってきた。環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2 年次配当，半期，選択 2 単位）では，実際に具体物を示し，思い込みや潜入観でものを見ることが多いことを体験させた。この研究の講義を通して，学生は，これまで無意識に過ごしてきたことを意識的にみることができ，意欲的に授業に臨むようになり，ものの見方考え方が深まった。
○児童生徒にかかる教育相談の実践研究	平成 19 年 4 月 ～平成 25 年 2 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，教育相談の実践研究を行い，予防・開発的プログラムとして，SST やアサーション，ストレスマネジメントの実践を芦屋市内の小・中学校で行った結果，児童生徒の人間関係が和やかになったり自尊感情が高まっていったりする結果を得ることができた。その成果を踏まえて，環太平洋大学次世代教育学部「教育相談の理解」（専門科目，3 年次配当，半期，選択 2 単位）において，学生に実際に，SST やアサーション，ストレスマネジメントスキルを体験させ，意義・方法を理解させるとともに，学生自身の生き方を考えさせたり，より良い生き方に気づかせたりした。また，兵庫教育大学大学院サテライトや適応教室，市立教育文化センターにおいて，児童・生徒及び大学生，中・高等学校教員，中学生の保護者の教育相談を担当した。
○中学校の不登校生徒の教育相談研究	平成 19 年 4 月 ～平成 25 年 2 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，教育相談の実践研究を行い，精神分析的理論および自己理論の理解を深め，その他のカウンセリング理論を含めた折衷理論の立場で実践を行ってきた。来談者（不登校生）中心の方針で，生徒の心を開いていった。兵庫県立神出学園において，不登校生の指導にあたり，その後は，芦屋市内の適応教室及び民間のフリースクールにおいて，教育相談に携わってきた。
○参加型の道徳の授業方法	平成 21 年 4 月 ～平成 24 年 9 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，公立小・中学校の初任者の学級において，役割演技やエンカウンターの手法を取り入れた授業を展開し，児童・生徒が主体的に他者の気持ちを考え，自分の生き方に活かそうとする成果が得られた。これを踏まえ，平成 24 年からの甲南女子大

		学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，模擬授業として実施したところ，学生が参加型の授業の効果を実感し，学生アンケートの結果からも好評を得ている。
○中学校におけるいじめ，不登校の問題解決研究	平成21年4月～平成25年3月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，討議活動を中心とする道徳を研究。「意見交換をしながら相互理解を深め，自己の変容を図る」活動，「話し合いによって，道徳的な判断力を高める」活動についての実践研究を行った。実習中学校において，「ディベート」，「モラルジレンマ」授業，「討議活動（ディスクルス）」へ展開した道徳の授業を実践。資料「だれが拾うの」「わたしのせいじゃない」の実践では，無関心や他人のせいにする行動から「いじめ」がおきる，これから考えていきたいという意見が出された。自分の考えを明らかにすることで，考えを深めることができた生徒が見られた。
○話し合い活動を通した学級づくり	平成21年4月～平成25年3月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻在学中，ハーバーマスの「コミュニケーション理論」を研究，児童生徒に対応する「話し合い活動の約束」を検討。公立小・中学校の機能しづらくなった学級において実践したところ，効果が現れ，学級を回復させることができた。とりわけ，中学校におけるいじめや不登校の問題解決のための学級づくりに資することができた。環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2年次配当，半期，選択 2 単位）「教育相談の理解」（専門科目，3年次配当，半期，選択 2 単位）では，内容の指導は勿論のこと，指導においても，「話し合い活動」を取り入れ，話型や「話し合い活動のマニュアル」を示し，学生の意見交流の機会を多く設定した。その結果，現在の児童・生徒を取り巻く教育課題について自分の考えを述べる学生が増加している。個性的な考えや考え抜かれた考えを次の授業で紹介した。
○研究発表会の導入	平成23年9月～平成 24 年11月	環太平洋大学次世代教育学部「学級経営実践問題」（コア科目，2年次配当，半期，選択 2 単位）では，コミュニケーション力を高めるために，毎時間「話し合い活動」を導入し，意見を述べる機会を設定し，自分の考えを確立するように進めてきた。更に自分の考えを全体（約 100 人の学生）に対してアッピールするために，発表会を導入した。授業中に各人の課題を明らかにし，解決方法を探るため，提示した資料などに意欲的に質問する学生が見られた。また，授業後に，グループで発表会の準備を進め，途中経過の資料を持って相談に来る学生も見られた。発表の方法は，パワーポイントによる説明の他，クイズ形式や紙芝居等，小・中・高等学校の現場を意識した方法も見られた。
○班活動・授業コメントの導入	平成23年9月～平成 24 年11月	環太平洋大学次世代教育学部「教育相談の理解」（専門科目，3年次配当，半期，選択 2 単位）では，班編成し，小・中学校の現場の即戦力を視野に入れ，カウンセリングの手法やエンカウンターの実践の演習を行うために，毎時間実施した。班編成していることで，迅速に活動を展開することができる上，100人を超える受講生であるが，班の課題も明らかになり個別指導も可能になった。最初は，活動に消極的であった班も他の班の影響を受け，活動できるようになりつつある。更に，毎時間終了前に授業コメントを書かせることで，活動の意義の確認が可能になった。

○主体的に取り組み道徳の時間の実践指導	平成26年4月～	芦屋市内山手小学校，浜風小学校及び門真市立古川橋小学校における「道徳の時間の指導方法」の校内研修において，児童が主体的に取り組める授業方法について指導助言。 この授業で何をするのか「めあて」を明らかにする。テーマ発問を試みる。 話し合いのルールを児童の合意によって決めさせる。理由を必ず付して発言させる。 他の人の意見を聞きながら，テーマについての自分の考えを明らかにさせる。 問題解決学習の再考として，道徳の時間の指導方法を見直す。
２　作成した教科書、教材 ○話し合い活動の約束	平成20年4月～7月	ハーバーマスのコミュニケーション理論に基づき，意見には必ず理由を付す，理由が正当であれば，その意見に賛成するという考え方を中心にした「話し合い活動の約束」を作成。初任者研修会において，小・中学校の道徳の時間の指導案作成および話し合い活動についての指導を行った。小・中学校現場でも，初任者の学級で活用し，平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，その実践例を示した。
○道徳読み物資料「ストライプ」	平成21年6月	絵本「ストライプ」を道徳授業用資料に編集。児童・生徒の心に響く場面の絵を拡大し，全校朝会の講話に活用。平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）においては，価値の設定，場面の選択など，自作資料作成の資料として示した。
○兵庫県道徳副読本「こころはばたく」「心きらめく」「心ときめく」「心かがやく」	平成21年8月～平成23年3月	道徳担当代表校長として，兵庫版道徳教育副読本作成検討委員の任に就き,「兵庫についてどのように伝え，心豊かな子どもを育むか」という課題に沿って，小・中学生用資料作成検討の仕事に携わってきた。平成24年からの甲南女子大学の「道徳教育の指導法」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）においては，道徳教育の資料として活用することの大切さを説諭し，本資料活用を奨励する授業を行ってきた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ○環太平洋大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成23年9月～平成24年2月	環太平洋大学において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると，本人が担当の「学級経営実践問題」「教育相談の理解」の評価では，4段階評価で4，3を合わせると，9割を占めている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 ○道徳教育を推進するための中核となる指導者の養成を目的とした研修（ブロック別指導者研修，近畿・中国）	平成18年8月	独立行政法人教員研修センター，広島県教育委員会主催による地方研修講座。「道徳教育の現状と課題」「生命をテーマとした道徳教育の実践」「豊かな心とその教育」「中央研修で学んだこと」「学校全体で取り組む道徳教育」「心に響く道徳教育」「道徳教育の授業づくりと道徳教育の評価」「道徳教育の充実にむけて」「研修講師となるために」等のテーマについて，講義・演習の研修を受けた。研修後，市内小・中学校の道徳教育担当者へ伝達講習を行った。
○道徳指導案の指導	平成 16 年～平成23年	朝日ヶ丘小学校・山手小学校では，夏休みに道徳の時間の授業研究，指導案の検討を行い，9 月の参観日は道徳の時間を公開していた。朝日ヶ丘小学校教頭時代から山手小学校校長を終えるまで，毎年，各学級の道徳の時間の指導案の指導を行った。

○若手教職員の会で講話，指導助言	平成17年4月～平成23年3月	校長1年目より，兵庫県教育委員会からの事業に応募し，助成金を受けて，毎月1回，若手教職員の研修会を開催し，学級開きから，教室経営，学級経営，授業研究，児童理解，保護者対応等について，講話し，若手教職員の資質向上に尽力した。連絡帳への返事の書き方，保護者から苦情が入った時の家庭訪問の仕方など具体的に細かく指導を行った。また，話し合い活動を中心とした道徳の時間の指導方法の研修も進めた。学級崩壊などの問題の発生が抑えられた。
○不登校児童生徒及び保護者の教育相談	平成17年5月～20年3月	朝日ヶ丘小学校及び山手中学校の不登校児童生徒，保護者に対する教育相談，担任への助言を続け，家庭訪問，保健室登校，放課後登校などの方策を児童生徒の協力を得て，学校への復帰や高校への入学へと繋いできた。
○地域青少年の非行等問題行動に対する指助言	平成19年5月～現在に至る	中学校校区の校長並びに保護司として，少年院への訪問・面談を行うとともに，毎月2回，保護観察中の少年の指導にあたっている。作文指導や話し合いを続け，再犯防止に努めるとともに自分の生き方を考えさせ，新たな進路に向けて歩ませることができている。また，保護者とも面談し，対象者本人の今後の生活について指導助言している。
○兵庫県夏季道徳研究会分科会指導助言	平成19年8月	第2分科会「豊かな心を育む道徳の時間の指導方法」において，指導助言。
○芦屋市教科等研究会　道徳部会の開催	平成20年5月～平成23年3月	芦屋市教科等研究会　道徳部会長として，新学習指導要領における道徳教育の全体計画及び年間指導計画作成について，各学校の担当者へ指導を行い，本市の道徳教育振興に尽力した。
○市内幼稚園保護者対象に講話	平成21年11月	小学校入学を控えた園児の保護者対象に小学校に向けて，「保護者の心構え，家庭で育てる心」について講話を行った。①様々な友達がいる。違いを認め合えることが大切。②困っている子どもには，そっと手を貸す子どもに育てたい。③子どもは親の姿を手本としている。親がまず，おおらかに他の子どもと接することを実践したい。④自分の子どもに困り感が見られる時は，堂々としていたい。親の不安に対して子どもは敏感である。等の内容であった。
○市内中学校の道徳の時間の指導助言	平成23年4月～平成25年3月	芦屋市学校支援相談員として，市内中学校の道徳の授業の指導案作成指導及び授業後の指導助言を行う。
○甲南女子大学人間科学部総合子ども学科学生対象に講義	平成23年11月	「これからの道徳教育」と題して，甲南女子大学人間科学部総合子ども学科3･4年生の学生を対象に①現在の道徳の時間の指導の課題，②現在の子どもを取り巻く諸問題に対応した道徳教育の在り方について講義を行った。特に，資料分析の重要性とメールを通したいじめの問題に触れた。
○キワニスクラブにおいて，地域における道徳教育の講話及びイベントの審査員	平成23年11月	ライオンズクラブと同じく，世界的に活動している奉仕団体の芦屋支部の会員を対象に，地域における道徳教育（地域社会の中で一般の人が子どもたちを育てる意義）のテーマで講話を行った。人と人をつなぎ，地域の子どもを心豊かに育てるという視点の内容であった。その後，当クラブは，人と人をつなぎ，弱者を支援する企画を募集し助成するイベントを開催。当イベントの審査員として，参加。高校生大学生の3組が受賞された。
○芦屋市立朝日ヶ丘小学校「人権教室」授業者	平成24年1月	第4学年対象 人権啓発資料DVD「プレゼント」

		「いじめ」はダメと言える勇気
○芦屋市立精道小学校「人権教室」授業者	平成25年1月	第4学年対象 人権啓発資料DVD「プレゼント」 傍観者もいじめと同じ
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成25年6月	第3学年「やくそくげんまん」 人権教育の視点から
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成25年 10月	第1学年「じろうのひとこと」 道徳の時間の展開の工夫
○芦屋市立潮見小学校「人権教室」授業者	平成26年1月	第4学年対象 人権啓発資料DVD「プレゼント」 傍観者もいじめと同じ
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成26年6月	第4学年「なくしたかぎ」 道徳の時間の展開の工夫
○芦屋市立浜風小学校道徳教育研修会	平成26年8月	第1～6学年の9月の参観授業に向けた指導 第1学年「およげない　りす」 第2学年「ぶらんこ」 第3学年「言葉のまほう」 第4学年「わたしたちのリレー」 第5学年「手品師」 第6学年「もうこんな思いはいやだ」 テーマ発問を考えた指導（全体指導と学年別指導）
○芦屋市立浜風小学校道徳授業研修会の講師	平成26年 10月	第1学年「はしの上のおおかみ」 第3学年「窓ガラスの魚」 第5学年「最後の贈り物」の授業参観・事後研究会 テーマ発問を考えた指導
○芦屋市立山手小学校道徳授業研修会の講師	平成26年 10月	第1学年「どうしたの？」友達を大切にするって・・ テーマ発問を考えた指導
○門真市立古川橋小学校道徳研修会の講師	平成26年 11月	道徳の授業方法について ・人権教育について ・問題解決的学習 ・テーマ発問について
○門真市立古川橋小学校道徳授業研究会の講師	平成27年1月	第1学年「ともだちほしいな　おおかみくん」 の授業参観・事後研究会，授業方法講話
○芦屋市立潮見小学校「人権教室」授業者	平成27年1月	第4学年対象 人権啓発資料DVD「プレゼント」 みんな仲良くするにはどうするのか
5　その他 な　し		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 小学校教諭一級普通免許状 中学校教諭二級普通免許状　国語 修士（教育実践学） 小学校教諭専修免許状　平二二小専修第１８号	 昭和48年3月 昭和48年3月 平成22年3月 平成22年7月15日	 昭四七小一普第944号（兵庫県教育委員会） 昭四七中二普第1001号（兵庫県教育委員会） 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻 修第7044号 「小学校における道徳性育成のための心の教育総合プラン―『話し合い活動』を通した道徳の授業づくりを核にして」 兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 ○教育研究発表会開催 ○伝統・文化体験事業の実施 ○学校ボランティアの会設立 ○地域における道徳教育の推進 ○総合単元型道徳教育の実践のコーディネート	 平成17年～平成19年 平成18年～現在に至る 平成18年5月～平成20年3月 平成19年～現在に至る 平成19年5月～平成20年3月	 朝日ヶ丘小学校の校長として，毎年2月に教育研究発表会を開催。「共に学び，高め合う子」を研究テーマに全学級授業公開し，全国から500人を超える参観者を得た。研究発表会当日以外にも全国から校長会や市町教育委員会指導主事，大学生等の見学者を受け入れた。道徳では，市内中学校教師のための参観授業を行い，小・中学校の教師の交流を図った。 朝日ヶ丘小学校校長として，文部科学省・兵庫県による「伝統・文化体験事業」を受け，助成金で茶道具を揃え，茶道クラブを設立した。また，第6学年の総合的な学習の一環として，茶道・作法を位置付け，校区内の茶道家元の茶室で所作を体験させ，道徳の時間の深化・統合を進め，「相手を敬う心」の育成に努めた。茶道クラブは，現在も継続され，月1回の指導に出向いている。 道徳教育の充実推進のため，朝日ケ丘小学校長として，図書やクラブ，英語、家庭科など種々のボランティアを募集した。更に，教職員との連絡を密にするため，学校ボランティアの会を設立した。道徳の時間の充実とともに，地域における道徳教育の推進の一助にもなった。 山手中学校区における道徳教育の推進充実のために，地域の行事（夏祭り，もちつき大会等）に児童を多数参加させるとともに，問題行動に係る中学校生徒の演奏活動を祭りのステージ部門に参加させたり，会場準備や片づけの手伝いをさせたりして，青少年健全育成に努めた。行事に参加の市長や市会議員から高い評価を得た。その後も各行事に参加協力し，地域の青少年の育成に尽力している。 第6学年の総合的学習の時間の一環として，本物に出会うことを体験させるため，コーディネートとして教職員を支援した。ジャグリング大道芸人を招き，「何事もあきらめずに練習すれば，できるようになる」という講話と実演をしていただいた。思春期の入り口にいる児童の心をとらえ，保護者に披露す

		る会を児童が主体的に計画することになった。また，茶道家元の茶室で所作を体験し，「人を敬う心」についての話を聞かせていただいた。さらに，日本料理の板前から本格的なだしの取り方を実際に教えていただく中で，「最高のものを作ろうという意志が大切」という話を聞かせていただいた。本物との出会いから，豊かな心の育成に資することができた。
○学校評価にかかるコミュニティースクールの位置付け	平成19年7月 ～ 平成20年3月	地域コミュニティースクールの代表者とともに近畿内のコミュニティースクール先進校を見学し，自校の学校評価委員会への参加のあり方を検討した。 外部評価を学校運営に反映させるべくシステムの構築を図った。
○授業研究発表会開催	平成21年2月	山手小学校校長として，「自ら考え，学び合い，創り出す子の育成―対話力を育てる授業の創造―」を研究テーマに授業研究発表会を開催。兵庫県下から300人の参加者があった。
○阪神地区道徳教育研究協議会研究大会開催	平成21年10月	山手小学校校長として，自校にて，阪神地区研究大会の会長として大会を開催。阪神間の小・中学校より400人を超える参加者があった。近隣の大学生の参加・事後研究も行った。また，県下の道徳教育研究校からの視察や講師派遣の依頼もあった。
○授業研究発表会開催	平成22年12月	山手小学校校長として，芦屋市基礎学力向上研究指定を受け，授業研究発表会を開催。兵庫県下から300人を超える参加者があった。
4　その他 な　し		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　ワンポイントアドバイス－子どもへの支援の手立て－	共著	平成 19 年 5 月	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	発達障害の児童生徒への指導･対応についての具体的な方法についてまとめたものである。現場の子どもの様子と教職員の日頃の対応を一つ一つ詳しく想像し，兵庫県教育委員会の資料を参考に，自校の児童に適応するものを作成。毎年，年度初めに新しい教員に配布し，研修の機会を持ち，児童生徒理解を深めた。 A4 判　　全 41 頁 共著者名　守本明範，増井眞樹 本人担当部分　「学習面」P2～20 を共著 学習面において，読むことが苦手・書くことが苦手・文章の理解が困難・計算が苦手な児童にどのように対応するか。学級経営において，教師が無意識のうちに行いがちな事例を挙げて，説明している。また，児童の困り感がどこにあるか，その原因の分析，好ましい対応例やツール等の項目についても述べている。「発達障害を抱える児童に適応する対応は他の児童にも通用する」という教師としての基本的な児童理解の考え方や具体的な方法についてまとめたものである。年度初めに学級経営の方策についての研修時間を持って活用を図ってきた。
2　心の教育プラン集	共著	平成 22 年 3 月	兵庫教育大学　教職大学院　学校教育研究科教育実践高度化専攻心の教育実践コース	生徒指導上の諸課題に対応できるように教育プログラムの開発を目的に作られたプラン集である。 A4 判　　全 151 頁 編者　　渡邉満 共著者名　長谷部義郎，藤井謙介，増井眞樹，渡辺かおる，泉健一郎，枝川拓矢，垣内志織，佐々木千佳，重近世都子，谷川理恵，西川恵輔，畑本有貴子，益本光章，松永美恵， 本人担当部分　道徳性育成のための心の教育総合プラン－「話し合い活動」を通した道徳の授業づくりを核にして－　(P23～33) を単著 ① 話し合い活動で深まる道徳の時間コールバーグの道徳的規準を活用し，ジレンマ資料を活用 ② 特別活動における児童生徒が育つ話し合い活動 学級会活動の方法をマニュアルを示して指導 ③ 根拠を示す計画案で児童生徒が育つ児童会活動 児童が主体的に考え抜いた計画案作成 ④ 総合的な学習の時間 児童生徒の興味関心を高めるキャリア教育

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） １　小学校における道徳性育成のための心の教育総合プラン－「話し合い活動」を通した道徳の授業づくりを」核にして（修士論文）『査読付』	単著	平成 22 年 3 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教育実践高度化専攻	本論文の「学級経営」においては，特別支援の必要な児童生徒への対応を含めた学級づくりの実践研究。支援の必要な児童生徒への対応とともに，学級全体にルールが確立している。「心のしくみがわかるプログラム」では，クリティカルシンキングから身の回りの思い込みに気づき，合理的に物を見ようとする態度や違いを良さと考える姿勢の育成に関する実践研究。「よりよい人間関係の構築」においては，エンカウンターの手法やアサーティブな対応の活動を通してよりよい学級づくりの実践研究。（A４判　86 頁）
２　子どもの心に向き合う道徳の授業づくり	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号（P147～152）	道徳の時間の授業は，実施されるようになったが，児童生徒の心にせまる授業は難しい。なんとしてもこの価値を伝えたい，考えさせたいという指導者の思いが弱いようだ。そこで，筆者は，資料選択，価値内容の提示方法，道徳的価値判断基準の検討，話し合い活動の方法について，検討したものである。
３　ユニバーサルデザインを取り入れた学級経営	単著	平成 25 年 3 月	環太平洋大学研究紀要第 7 号（P185～190）	発達障害の児童に対する指導は，他の児童にも通用するのではないかという仮説を立て，ユニバーサルデザインという視点で，学級経営の実践問題を解決していった報告。 ＡＤＨＤと診断された児童の様子とその対応の実際,指導者の考え方の変革，ユニバーサルデザインでどの児童も活動しやすくなった。
４　主体的に取り組む道徳の時間―「人権教室」の実践から―	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第１集（P199～205）	人権擁護委員として，公立小学校で実施している「人権教室」はややもすれば児童は受け身のまま過ごしてしまう。児童が主体的に取り組める方法を探る。 ① 授業のめあてを明確にする。 ② わかりやすい発問にする。繰り返さない。 ③ 児童にとって「聞く」以外の活動の場を設定する。 ④ 考えるための資料や言葉を用意しておく。 ⑤ 「ふりかえり」を行い，気付いたこと，理解したこと，考えたことを意識させる。 その上で，児童がわかっていることを発問しないということの必要性を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　学校における道徳教育と人権教育	単著	平成 27 年 3 月	「人間教育学研究」第 2 号	道徳の教科化を控え，学校では新しい道徳教育の模索を始めている。これまでの学校における道徳教育を見直す時，人権教育の経緯を整理する必要がある。 ① 学習指導要領が示す道徳教育と「人権教育啓発に関する基本計画」と「人権教育の指導方法等の在り方について〔第 3 次とりまとめ〕」が示す人権教育 ② 道徳教育・人権教育の歴史的経緯から見えること ③ 道徳の時間における道徳教育と人権教育の指導方法の比較 今後の道徳教育の指導については，人権教育の経緯を踏まえ，課題解決学習的方法やテーマ発問などを考慮したものが必要である。
（その他） 「調査報告」 1　道徳教育を推進するための中核となる指導者の養成を目的とした研修（ブロック別指導者研修，近畿・中国）報告	単著	平成 18 年 9 月	芦屋市教育委員会	「道徳教育の現状と課題」「生命をテーマとした道徳教育の実践」「豊かな心とその教育」「中央研修で学んだこと」「学校全体で取り組む道徳教育」「心に響く道徳教育」「道徳教育の授業づくりと道徳教育の評価」「道徳教育の充実にむけて」「研修講師となるために」等についての報告（A4 判 24 頁）
「研修資料」 1　教育相談の記録 「あのとき　こうしておけばよかった」	単著	平成 20 年 3 月	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	教育相談を行った児童・生徒・保護者・教員に関する記録を分析し，教育相談の基本姿勢及び課題をまとめた。①幼稚園から小学校への変化に適応できず，不登校になった事例，②両親の不和により情緒不安定になり不登校になった事例，③母親の病気により心労から子どもを虐待し，④不登校になった事例，塾・スポーツクラブにおける成績の不振から，不登校になった事例，⑤放任から家出を繰り返した事例の記録。 児童生徒理解を図る方法，保護者の心を開く方法，基本的な教育相談の姿勢（傾聴・容認・共感的理解・肯定的配慮），学校の体制，関係機関との連携などについてまとめたものである。 この冊子は，職員研修会において，児童生徒理解や職員の共通理解を図るためにも活用し，地域や学校における生徒指導及び青少年健全育成に役立てることができた。 A4 判　　全 10 頁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　生徒指導の手引「問題行動の芽を小学校で見つけよう」	単著	平成21年8月	芦屋市立山手小学校	校内研修会用資料として作成。中学校で問題を起こした生徒の小学校の時の様子とその時の教師の対応を振り返り，中学校での問題行動を防ぐために，小学校でできることはなかったのか検証したもの。 小学校教師の児童への対応の甘さが問題行動の芽を育てたのではないかという意見や中学校における生徒理解が不十分ではないかという意見が出された。 A4判　4頁
「研究発表」 1　教育研究発表会開催	—	平成17年～平成19年	芦屋市立朝日ケ丘小学校	朝日ヶ丘小学校の校長として，毎年2月に教育研究発表会を開催。「共に学び，高め合う子」を研究テーマに全学級授業公開し，全国から500人を超える参観者を得た。研究発表会当日以外にも全国から校長会や市町教育委員会指導主事，大学生等の見学者を受け入れた。道徳では，市内中学校教師のための参観授業を行い，小・中学校の教師の交流を図り，その指導助言を行った。
2　伝統・文化体験事業の実施	—	平成18年～現在に至る	芦屋市立朝日ヶ丘小学校	朝日ヶ丘小学校校長として，文部科学省・兵庫県による「伝統・文化体験事業」を受け，助成金で茶道具を揃え，茶道クラブを設立した。また，第6学年の総合的な学習の一環として，茶道・作法を位置付け，校区内の茶道家元の茶室で所作を体験させ，道徳の時間の深化・統合を進め，「相手を敬う心」の育成に努めた。茶道クラブは，現在も継続され，月1回の指導に出向いている。
3　授業研究発表会	—	平成21年2月	芦屋市教育委員会 芦屋市立山手小学校	山手小学校長として，「自ら考え，学び合い，創り出す子の育成―対話力を育てる授業の創造―」を研究テーマに授業研究発表会を開催。合わせて，芦屋市教育委員会の「基礎学力向上」の指定を受け，国語・算数を中心に全学級の授業公開を行った。兵庫県下から300人を超える参加者があった。
4　阪神地区道徳教育研究協議会研究大会開催	—	平成21年10月	兵庫県教育委員会 芦屋市教育委員会	山手小学校校長時，阪神地区道徳教育研究協議会会長として，本校にて，研究大会を開催。全学級の授業公開を行い，阪神間の小・中学校より400人を超える参加者があった。近隣の大学生の参加・事後研究も行った。また，県下の道徳教育研究校からの視察や講師派遣の依頼もあった。
5　授業研究発表会開催	—	平成22年12月	芦屋市教育委員会 芦屋市立山手小学校	山手小学校校長として，芦屋市教育委員会の「基礎学力向上」の指定を受け，国語・算数・道徳を中心に授業研究発表会を開催。兵庫県下から300人を超える参加者があった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６　人間教育実践交流会　フォーラム　in 大阪	―	平成 25 年 8 月	人間教育研究協議会	人間教育研究協議会が「これからの知育・徳育はどうあるべきか？」というテーマで実践交流会を行った。道徳分科会において，「今，もとめられる道徳教育」を発表。
７　人間教育実践交流会　フォーラム　in 奈良	―	平成 26 年 8 月	人間教育研究協議会	人間教育研究協議会が「言葉の力と学力向上～各教科の学習を支える言語活動～」というテーマで実践交流会を行い，道徳分科会のコーディネーター及び「道徳の学習を支える言語活動」として「話し合い活動」について発表。
８　奈良学園大学　公開シンポジウム「食と教育」	―	平成 26 年 11 月	奈良学園大学	食育推進基本計画の策定により食育は推進されているが，目標値の達成までは程遠い現状である。教育・健康・文化の視点から次世代を担う子どもの食育に焦点を当てたシンポジウム。教育の面から，学校給食をはじめとする食育について述べる。

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　岡野聡子

研究分野	研究内容のキーワード
幼児教育、キャリア教育	子どもと環境、生活の理解、キャリア教育、子育て支援

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 (1)メールアドレスの使用による学生相談	平成 18 年 4 月～現在に至る	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、保育学生のキャリア支援を担当した。学生のキャリア発達を促すためには、自分の話を親身に聞いてくれる人が必要となる。そのため研究室のメールアドレスを学生に周知し、いつでも質問に応じられる体制を整備した。学生の疑問に対して即時対応が可能であり、そのことによって学生は指導者を身近に感じるだけでなく、研究室に来訪する回数も増え、進路決定に対する意欲が高まった。
(2)学内掲示板を利用した学生の質問への回答	平成 18 年 6 月～平成 23 年 3 月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、キャリア支援の一環として、1 年生の 4 月から 2 年生の 3 月まで合計 5 回の進路希望調査を実施した。その中に自由記述欄を設け、進路相談を含め、日常生活の中での悩みや疑問を匿名式で書かせた。回を重ねるごとに自由記述への書き込みが増え、それらの質問に対する回答を 3 日以内に学内の掲示板に貼り出した。掲示板での回答方式により、学生同士の情報共有化を推進しただけでなく、自分の抱えている悩みが他の人も抱えている悩みであったということを知るきっかけとなり、学生内の安堵感を作り出すことができた。
(3)視聴覚教材の活用	平成 24 年 4 月～平成 24 年 7 月	環太平洋大学こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。保育を専攻する学生は、子どもと接する経験が豊富であるとはいえず、また教科書の記述や講義だけでは、学生は子どもに対するイメージがわきにくいため、ビデオ教材を適宜使用した。映像を通して子どもの実像を実感し、理解を深めるように工夫している。また、ビデオ教材は学生が受身的に観て終わりということになりやすいので、ビデオ視聴前に課題を与え、問題意識を持ってビデオ教材を視聴させるようにしている。なお、その課題に対する解答へは、採点をして返却をしている。それらの過程により、学生の子どもに対するイメージが豊富になり、教育効果が上がっているといえる。
(4)体験学習を取り入れた授業	平成 24 年 4 月～平成 24 年 7 月	環太平洋大学こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。授業内において幼稚園や保育所にて実際に活用できる教材研究を体験的に行わせる工夫をした。その結果、学生アンケートにおいても就職後にすぐに使用できるものであると好評を得た。
2　作成した教科書、教材 (1)「弾き歌い・絵本・製作・折り紙」(保育実務教材)	平成 20 年 2 月	幼児の適切な環境構成のための指導者に求められる具体的な教育方法・技術に視点をあてて教材を作成した。幼稚園や保育園に就職を考えている学生のために、実践ですぐに役立つ保育技術集を作成し，音楽及び図工の授業で活用した。 （監修）高橋孝輔・下口美帆、 （作成者）岡野聡子 （発刊元）京都光華短期大学部こども保育学科 （総頁数）54 ページ

(2) 平成 23 年度キャリアデザイン「一般企業就職希望者へのキャリア支援教材」（教材）	平成 24 年 5 月	平成 23 年 9 月 26 日～平成 24 年 1 月 31 日までに講義をした内容を「一般企業就職を目指す学生のための支援教材」としてまとめ、作成した。一般企業就職希望者（3 年生 106 名）を対象として、企業研究の方法やエントリーシート・ＳＰＩ試験対策などの教育課程外にあたるキャリア支援の提供も手厚く行った。キャリア教育の本来的目的である就労意欲の向上を実現するために外部講師の充実も図った。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学キャリアセンター （総頁数）186 ページ
(3) 仏教保育行事「まことの保育」 ～学校法人安居院 あぐい幼稚園の実践事例から～ （教材）	平成 24 年 6 月	私立園は、園独自の保育方針や保育カリキュラムを持っている。その中で、保育に仏教思想を取り入れている園は数多くみられる。特に仏教保育を展開している私立園に就職を希望している学生のために、仏教保育とは何か、生活の中での仏教保育の取り入れ方、仏教三大行事（降誕会・成道会・涅槃会）、行事で使用する楽譜集等も含め、一つの冊子としてまとめた。仏教系私立保育園を目指す学生に貸出をし、好評を得ている。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学こども発達学科 （総頁数）37 ページ
(4)「キャリアデザイン　サブノート」（教材）	平成 24 年 9 月	本学の後期に開講される「キャリアデザイン」は、４つの分室（教職支援室、幼保施設分室、公務員支援室、企業等就職支援室）に分かれて指導を行っている。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。 そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （作成者）小野憲一、岡野聡子、大野光二、三木澄代、久田孝 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）64 ページ
(5)『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』 （教科書）（再掲）	平成 25 年 2 月	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 （単著・共著）単著 （判型）A5 判 （総頁数）71 ページ （出版社）ＥＲＰブックレット
(6)『子どもの生活理解と環境づくり ～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』 （教科書）（再掲）	平成 25 年 3 月	2005 年の中央教育審議会答申では、幼児期教育の意義と役割を「学校教育の始まりとして幼児教育をとらえれば、幼児教育は、知識や技能に加え、思考力・判断力・表現力の基礎を育成する役割を担っている」とした。そのことによって、幼児教育のあり方が、学校教育をより意識したものに変化してきていることがわかる。本書では、幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を

		を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 (単著・共著) 共著 (判型) A5判 (総頁数) 166ページ （出版社）ふくろう出版 (担当頁) pp.1-12、pp.134-137、pp.140-142、pp.137-140 (翻訳担当) (担当部分) 第1章第1節、第5章第3節1、2-2・3 第5章第3節2-1の翻訳 (編著者) 岡野聡子・筒井愛知 (分担執筆者) 松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代 平松茂・馬場告一郎・中道美鶴・岡田美紀 土谷長子・アンソニー・ウォルシュ
(7)「キャリアデザイン　サブノート ～改訂版～」（教材）	平成25年4月	前年度に作成したキャリアデザインサブノートに、自己理解や業界研究、社会の理解の開設、就職活動の資料を新たに加えて作成した。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （編集・著者）岡野聡子 （共著者）小野憲一、石渡嶺司、三木澄代、大野光二 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）90ページ （担当頁）pp.2-9、pp.34-45、pp.51-86
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科学科長による評価	平成19年3月～平成23年3月	こども保育学科共同研究室実習・就職支援室にて、実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援を行った。こうした学生支援だけにとどまらず、研究助手として幼稚園や保育所への実施調査に携わったことや幼稚園現場の実情を講義内で講演したこと、全国保育士養成協議会等にて研究発表を行っていたことで、幼児教育における教育的・研究的な能力を有していると毎年評価をされた。
(2)環太平洋大学学長補佐/キャリアセンター長/教育経営学科長による教員評価	平成24年7月	5年間の幼稚園教諭の経験を活かして、理論と実践を結びつけ「子どもと環境」の科目を担当していることを評価された。内容としては、授業にて理論と体験的な活動を取り入れて保育指導方法を示す工夫をしていることや、毎回のレポートや課題を学生に課し、それに対する学生へのフィードバック等、実務経験や授業改善への姿勢が、科目を担当するための教育的な能力を有していると評価された。
(3)授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境 大学名：環太平洋大学	平成24年7月	「子どもと環境」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。5点尺度（不必要である（1点）から必要である（5点）まで）にて回答を求めた。回答結果は、①教科書の用語の確認:4.028(SD=0.839)、②授業内の本読み:3.676(SD=0.868)、③授業内の配布資料:4.408(SD=0.761)、④映像学習:4.535(SD=0.646)⑤体験活動:4.676(SD=0.708)、⑥室外授業 4.338(SD=0.918)、⑦グループワーク:4.436(SD=0.8)、⑧授業後の発展学習:3.859(SD=0.997)、⑨提出課題のフィードバック:3.944(SD=0.918)であった。体験活動に対する評価が最も高く、また、96%の学生が本講義を受けて自分のためになったと答えた。
(4)授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：環太平洋大学	平成25年7月	FD活動の一環として、「生活の理解」学生による授業評価アンケートを実施した。履修者数は209名、回答者数は172名（有効回答率：82.2%）であった。質問紙は15項目から成り立ち、①学生自身の取り

		組みについて、②担当教員や指導方法等について 4 点尺度で実施した。評価結果の平均評定は 3.419 であり、総合的満足度は 3.445 であった。また、教材研究の授業内容を多く取り入れたこともあり、「授業への参加意欲が促されるような工夫がされていましたか」について 3.47 の評価をもらうことができた。
(5)授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ 大学名：奈良学園大学	平成 26 年 7 月	「キャリアデザインⅠ」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。履修者数は 109 名、回答者数は 106 名（有効回答率：97.2%）であった。質問紙は、14 項目から成り立ち、①自身の受講姿勢、②講義内容・方法、③総合的満足度について、4 点尺度で実施した。評価結果の平均値では、①自身の受講姿勢は 3.26（全体平均 3.13）、②講義内容・方法は 3.17（全体平均 3.15）、③総合的満足度は 3.37（全体平均 3.23）であった。受講生が 1 年生ということもあり、授業のテーマ・学習目標・授業の流れについて授業ごとに解説を加えるなど工夫をした。
(6)授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅡ 大学名：奈良学園大学	平成 27 年 1 月	「キャリアデザインⅡ」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。履修者数は 109 名、回答者数は 101 名（有効回答率：92.6%）であった。質問紙は、14 項目から成り立ち、①自身の受講姿勢、②講義内容・方法、③総合的満足度について、4 点尺度で実施した。評価結果の平均値では、①自身の受講姿勢は 3.32（全体平均 3.26）、②講義内容・方法は 3.23（全体平均 3.28）、③総合的満足度は 3.43（全体平均 3.36）であった。職業研究をテーマとして、企業で働く人を外部講師としてお呼びし、業務内容や働く上で求められる資質・能力についてお話しいただいた。アンケートの自由記述では、さまざまな業界の人から直接働くことについて聞くことができたと述べられていた。
(10)授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：奈良学園大学	平成 27 年 1 月	「生活の理解」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。履修者数は 54 名、回答者数は 51 名（有効回答率：94.4%）であった。質問紙は、14 項目から成り立ち、①自身の受講姿勢、②講義内容・方法、③総合的満足度について、4 点尺度で実施した。評価結果の平均値では、①自身の受講姿勢は 3.29（全体平均 3.26）、②講義内容・方法は 3.37（全体平均 3.28）、③総合的満足度は 3.65（全体平均 3.36）であった。振り返りシートにて学生からの授業内容に関する質問を書かせ、次回の授業内にて全ての質問に対する回答を行った結果、学生の受講意欲の高まりがみられた。アンケートの自由記述においても、教員の質問への回答が丁寧であるという評価が多くみられた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)兵庫県芦屋市立西山幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 1 月	兵庫県芦屋市立西山幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「幼児同士の育ち合い学び合いを育む」である。年長 2 クラス・年少 2 クラスの公開保育（劇遊び）を参観した。日常生活の中で取り上げた絵本への興味関心を深めるために、絵本を題材とした劇遊びを保育に取り入れた。幼児の発達に合わせたふさわしい活動を展開するためには、教員がどのような環境構成をする必要があるかについて，教員 8 人を対象に指導助言を行った。
(2)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 5 月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「新学期の保育の指導計画や教師の援助の在り方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。異年齢児の活動において、遊びを工夫して創りだすことや他の幼児の考えにふれ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わえるような援助について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。

(3)亀岡市議会「緑風会」会派視察における講師	平成 24 年 10 月	特定非営利団体岡山市子どもセンターは、岡山市内にある岡山国際児童年記念公園こどもの森の敷地を 2008 年から借りて、「冒険遊び場：おかやまプレーパーク」という子どものための遊びの広場の運営をしている。「おかやまプレーパーク」の運営および取り組みについて、①子どもの遊び場を確保する必要性、②ＮＰＯの取り組みと現状（ボランティアマネジメント）という２つの視点を用いて講演をした。おかやまプレーパークの運営は、市民ボランティアが中心となって活動を行っており、ボランティアマネジメントの重要性を言及した。
(4)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成 24 年 11 月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の助言指導として携わる。研究テーマは、「2 学期の幼児の発達に合った援助のあり方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長 1 クラス・年中 2 クラスの保育を参観した。運動会を終え、クラスとしての集団のまとまりがより一層感じられた。日常の保育における集団遊びについて、体験をより確かなものにするために振り返りの時間を設けること、集団遊びをイベントのように取り扱うのではなく、継続的・組織的に行い、積み上げていくことの重要性について、教員 6 人を対象に指導助言を行った。
(5)岡山市子どもセンター・研究協力者	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	岡山市子どもセンターは、平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月まで、岡山市庭園都市推進課主催のＥＳＤプロジェクトから助成金（年間 200 万円）を獲得し、都市公園での遊び空間の創造をテーマとして、子どもの遊びの広場を展開した。筆者は、研究協力者として、公園を活用してできる遊びを提案したり、保護者アンケートを通して満足度を測定し、報告書にまとめる役割をになった。平成 24 年度は、5 ヶ所でプロジェクトを実施し、平成 25 年度は、6 ヶ所で行った。
(6)岡山市中央中学校・出張講義講師	平成 25 年 3 月	岡山市立岡山中央中学校の 1 年生に対して総合的な学習の時間を用いて、出長講義の講師として携わる。講演テーマは、「将来を考える３つのポイント」である。中学１年生は、普通学級 88 名、特別支援学級 10 名を対象として行った。何のために働くのかについて考察した後、20 問表や価値観シートを用いて自己理解を深めた。また、生徒による職業調べから、それらの職業に就くには、具体的にどのような学習をする必要があるかを解説した。最後に、学校卒業後の職業生活におけるライフイベント（結婚、出産、年収、転職等）の平均値をもとに解説した。
(7)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成 26 年 8 月	gid 関西交流会において、「就職に関する「ストレス」を考える～ストレスチェックを通して、自分のストレス耐性を知ろう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では、ストレス耐性チェックを通して、自分が持つストレスを客観視し、ストレス解消法ではなくストレスと上手に付き合う方法の提案をした。また、性同一性障害の方が持つ就職活動・職場の人間関係での悩みについて事例を取り上げ、自己開示を含めたグループワークも実施した。実施場所は、大淀コミュニティセンター（大阪）で行い、受講生は 18 名であった。
(8)特定非営利法人男女共同参画ネット尼崎（尼崎市女性・勤労婦人センター）・出張講義講師	平成 27 年 3 月	2015 あまがさき女性フェスティバル記念講演会にて、「カナダのコミュニティハウスに学ぶ　支えあいのまちづくり」をテーマとし、90 分間の講演を行った。多文化共生の国カナダには、子どもから高齢者まで、さまざまな人々が利用するコミュニティハウスがある。そのコミュニティハウスの成り立ちとそこで実施されているサービスとプログラムについて紹介した。また、カナダのコミュニティハウスから学べることとして、コミュニティオーガニゼーションの概念を「人、もの、こと、ところ」、そして「時間の共有」という具体的内容に置き換えて

		述べた。社会保障の制度化が進む中で、福祉行政の専門分化が起こる過程についても解説した。実施場所は、尼崎市女性センター・トレピエで行い、受講者は40名であった。
5　その他 (1)NPO法人ウエルス会報誌 2012年 夏号 「園庭の芝生化事業の推進と幼少期における身体機能の形成について」	平成24年6月	教育現場における園庭・校庭の芝生化事業は、1970年頃から始まり、現在では、研究機関や自治体、ＮＰＯ法人等による芝生化の実践や調査がされている。本会報誌では、調査研究の概要や園庭や校庭の芝生化が子ども達にもたらす4つの教育効果（外遊びの増加、情操の安定、芝生の弾力性がスポーツ活動に安全性と多様性をもたらすこと、環境教育の生きた教材として活用できること）を言及した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)幼稚園教諭二種免許状取得	 平成 11 年 3 月	 免許状番号　平 10 幼二め　第 804 号（京都府教育委員会）
(2)プロジェクトワイルドエデュケーター資格取得	平成 18 年 7 月	財団法人公園緑地管理財団：資格番号なし
(3)保育：子育てアドバイザー（初級）	平成 21 年 4 月	特定非営利法人保育：子育てアドバイザー協会： 認定番号　第 10001024 号
(4)修士（都市政策）	平成 23 年 3 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻（都市政策修士 第 730 号）「修士論文題名：現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを　めぐって～」
(5)小学校教諭二種免許状取得	平成 23 年 7 月	免許状番号　平二三小二第六号（京都府教育委員会）
(6)生涯学習コーディネーター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 31110009 号
(7)生涯学習 1 級インストラクター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 11110009 号
(8)メンタルケアカウンセラー資格取得	平成 25 年 7 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第 134014563 号
(9)キャリアカウンセラー資格取得	平成 25 年 9 月	日本キャリア教育学会：認定登録第 214 号
(10)メンタルケア心理士資格取得	平成 25 年 10 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第 134014563 号
(11)准ケアストレスカウンセラー資格取得	平成 25 年 11 月	財団法人職業技能振興会：ＪＣ-080018
(12)ガイダンスカウンセラー資格取得	平成 26 年 12 月	スクールカウンセリング推進協議会 認定番号：第 14030010 号
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科こども保育学科共同研究室内実習・就職支援室担当	 平成 18 年 3 月～ 平成 23 年 3 月 （5 年間）	 実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援に携わる。実習支援では、教育実習事前事後指導の教員補助として園内における環境構成の指導や指導案の指導の他、実習園との連携協力を構築して実習後の学生へのフィードバック体制を確立した。就職支援では、京都市内の園を中心として毎年 2 月に 30～40 園を訪問し、保育現場が求める人物像の聞き取り調査を実施した。その調査結果を活かして、就職支援プログラムの構築に役立てた。
(2)環太平洋大学キャリアセンター運営委員会委員	平成 24 年 4 月～ 平成 26 年 3 月	環太平洋大学キャリアセンターは４つの分室（教職支援室・幼保施設分室・公務員就職支援室・企業等就職支援室）に分かれて進路支援をしている。月に 1 度キャリアセンター運営委員会を開催し、各分室との連携を図っている。また、環太平洋大学の場合、体育会に力を入れている学生も多く、4 年生の前期が終わるまで進路決定を引き延ばす学生の姿が見られ、そうした学生に対して、ゼミ担当教員も含めて支援を実施した。
(3)環太平洋大学教職課程委員会委員	平成 24 年 4 月～ 平成 25 年 3 月	学生の介護等体験実習が円滑に運営できるように、実習の事前事後指導およびオリエンテーション、個別指導に携わる。集団指導では、介護等体験実習を終えた学生を招いてパネルディスカッションを行うと共に、実習簿やお礼状の書き方の指導を担当した。個別指導では、特別支援施設での実習生 8 名、社会福祉法人での実習生 10 名を担当した。

(4)環太平洋大学幼児教育言語力育成研究会代表	平成 24 年 4 月～現在に至る	2008 年に改訂された学習指導要領では、「言語活動の充実」が育成すべき重要項目の第一として取り上げられた。そのことを受け、現場における言語活動の充実を特に幼児を対象として調査することを目的として岡山市立大野幼稚園や岡山市立江西幼稚園の園長先生とともに研究会を立ち上げた。幼稚園の教育現場と大学組織が協同して、幼児期における言語活動の充実に関する調査を実施している。
(5)環太平洋大学ハラスメント委員会委員	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	本学では、アカデミック・ハラスメントやジェンダー・ハラスメント、パワーハラスメント等を総合的に取り扱う部としてハラスメント委員を設置している。今年度は、ハラスメントのない教育研究環境づくりの一環として、オープンスペースを利用して学生相談を行うことや、学生が研究室内にいる場合は、ドアを開けておくなど、誤解やトラブルを未然に防ぐ対策をとった。
(6)奈良学園大学キャリアセンター運営委員会委員	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良産業大学から名称変更された奈良学園大学は、2 学部 2 学科（人間教育学部・保健医療学部）が新設された。それに伴い、大学組織も改変され、平成 26 年 4 月に就職支援課からキャリアセンターへと名称変更および業務内容の変更や統合がなされた。新体制のもと、学生のキャリア形成支援体制の確立にむけた会議を重ねているところである。また、人間教育学部では、教員採用試験支援室として教職センターを設置し、運営を行っている。
4　その他 (1)特定非営利法人岡山市子どもセンター おかやまプレーパーク運営委員	平成 24 年 3 月～現在に至る	特定非営利法人岡山市子どもセンター（岡山市北区久米 348）の事業の一つである「おかやまプレーパーク」の運営委員に着任し、月に 2 度、岡山国際児童年記念公園こどもの森へ出向いて活動を行なっている。『自分の責任で自由に遊ぶ』ということをモットーとし、子どもがのびのびと思いっきり遊べるように敷地内の禁止事項（例えば、木登り禁止等）をなくし、やりたい遊びを実現できる遊び場の確保に力を注いでいる。年間事業計画の見直しや助成金の申請、行政と交渉をする際の助言役を務めている。
(2)特定非営利活動法人ウエルス　理事	平成 24 年 5 月～現在に至る	特定非営利法人ウエルス（京都府亀岡市）の顧問に着任し、幼稚園や保育所における自然環境としての園庭の芝生緑地化推進活動の助言を行っている。園庭の芝生化により、子ども達の遊び方の変化や外遊びの増加、それに伴う健全な肉体形成等、芝生化によってどのような教育的効果があるか、共同研究を行っている。（住所：法人事務所:〒621-0805　京都府亀岡市安町大池 11　日進ビル 101）
(3)陶芸ギャラリー吾子　代表	平成 24 年 10 月～現在に至る	京都市東山区泉涌寺地区は、陶芸職人の町として知られているが、職人の高齢化が深刻な問題となっており、その地に根付いた文化が途絶えようとしている。そのため、地域振興の一環として、10 月よりギャラリーの開催している。展示作品は、陶器に関わらず絵画なども展示している。地域のお祭りがある際には、無料で開放し、音楽会なども行っている。（京都市東山区泉涌寺東林町 17-29）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「著書」 1『次世代の教育原理』	共著	平成24年10月	大学教育出版	2011 年から小学校・中学校・高等学校と順次完全実施される新学習指導要領の意図を汲み取りながら、教職を目指す学生に教育の基礎・基本的な知識と教養を身に付けさせるための入門書である。 A5 判　全 159 ページ 編著者：中田正浩・松田智子 共著者：中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 本人担当部分：第 7 章「キャリア教育とは」(pp.102-117)を単著 本人担当部分： キャリアの語源やキャリア教育が導入された背景などを概観しながら、キャリア教育で育成すべき能力を取り上げ、小学校・中学校・高等学校で取り組むべきキャリア教育の目標と内容について解説した。キャリア教育とは特別な教育活動ではなく、日常の教育活動を通して、子ども達の学ぶ態度や意欲を育てながら、児童・生徒が社会とのつながりを見出していくための教育であることを学生にわかりやすく解説している。
2『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』	単著	平成25年2月	ERP ブックレット	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 A5 判　全 71 ページ
3『子どもの生活理解と環境づくり～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成25年3月	ふくろう出版	幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の 3 つの視点を用いて事例を取り上げながら解説した。 A5 判　全 166 ページ 編著者：岡野聡子・筒井愛知 共著者：松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ 本人担当部分： 第 1 章「幼児教育から小学校教育へ」第 1 節「幼児教育と領域「環境」」(pp.1-12)、第 5 章「社会環境とのかかわり」第 3 節「異文化を理解することとは」「1.異文化理解と異文化交流」(pp.135-137)、「2-2) 文化の獲得」(p.140-141)、「2-3 持続発展教育の考え方」(pp. 141-143) を単著。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分の概要： 　第１章第１節では、幼児教育の基本を述べ、領域「環境」と小学校教育「生活科」のねらいおよび内容について解説をした。教育内容の連続性への理解を深めるために、領域「環境」と「生活科」のねらい（目的）や内容を表にしてまとめ、幼児教育と小学校教育にて求められていることの違いを示した。 　第５章第３節では、幼児期における異文化理解と異文化交流のあり方や現在の状況について解説した。また、国際化の流れの中で必要となる概念であるＥＳＤ（持続発展教育）について言及し、その概念を用いた教育方法について解説をした。
「学術論文」 １　現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みをめぐって～（修士論文）	単著	平成23年3月	大阪市立大学大学院	ブリティッシュ・コロンビア州にあるネイバーフッドハウス協会は、「人々の交流」を目的として行政サービスや物的環境の調整を展開しており、そこで取り組まれるサービスやプログラムは、個人と個人を結びつける「ハブ」のような役割を担っている。セツルメントの文化を受け継ぐ現在のネイバーフッドハウスの取り組みや、特に１つの施設で人のライフサイクルを見越した複合的なサービスを展開できる環境構成に注目し、日本の行政サービスとの違いを論じた。 A4 判　全 48 ページ
２　保育士養成校における就職活動の特徴と課題～就職支援の実践から見えるもの～	共著	平成23年12月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要 第 49 集(pp. 1-6)	保育者を目指して本学に来た者は、目的意識をはっきりと持って入学してくる者が多く、保育職内定率も 100%である。しかし、授業や実習指導を受ける中で、保育職への不安が学生の間で広まるため、1 年生の 4 月からキャリア支援プログラムを実践した。その実践から、卒業後の支援（特に早期離職者への対応）にも言及した。 代表者：吉村啓子 共著者：岡野聡子 本人担当部分：1 年生の 4 月から実施したキャリア支援プログラムの企画および実施、評価を担当した。
３　非営利団体における社会サービスの提供に関する一考察～カナダのバンクーバー市におけるゴードンネイバーフッドハウスの取り組み～	単著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第 5 号(pp. 31-39)	社会事業の専門分化が進むにつれ、需要と供給をスムーズに行うために子ども・高齢者・障害者といった分野ごとの支援体制が確立されてきた。 　本稿で取り上げたカナダのバンクーバーにおけるゴードンネイバーフッドハウスは、専門的な福祉ニーズの提供を事業の主軸にするのではなく、地域に住む人々を結びつける基盤（コミュニティ・ベースド）としての「交流の場」から醸成される相互扶助関係の構築に注目をした事業を展開している。その在り様をミッションステイメント・サービスとプログラム内容・運営資金・ボランティアスタッフの４つの観点から考察した。
４　環太平洋大学におけるキャリア支援体制の確立にむけて（Ⅰ）	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第 5 号（pp. 61-68）	大学のキャリア教育をめぐる昨今の動向をみると、就職に至るまでの支援過程の議論が活発であり、「キャリア形成支援」という言葉で表現されている。今後の課題は、キャリアセンターでの支援において、学生一人ひとりのキャリア形成を図ることを意識して支援を行う必要があることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：杉田郁代 本人担当部分：本学キャリアセンターのキャリア支援プログラムの企画および実施を行い、評価をした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成24年12月	環太平洋大学研究紀要第６号（pp.1-8）	言語活動の充実に関する研究は、小学校教育における事例研究が多く、幼児期における研究は管見するあたり少ない。本研究では、幼児期における言語活動とは何かを概観し、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され保育実践として取り組まれているか、岡山市公立幼稚園教諭を対象としてアンケート調査から考察を試みた。第 1 章では、学校教育において「言語活動の充実」が取り上げられた背景を述べ、言語活動の充実について総評を行った。第 3 章では、調査結果をまとめ、その分析を行った。調査結果（有効回収率：38.7%）では、伝達力や思考力を意識した保育を行っていると回答した者の割合は６割を超えた。伝達力、思考力を意識した保育実践では、伝達力よりも思考力を意識した保育実践のあり方に戸惑いが見られた。言葉にかかわるカリキュラムを園内で作成しているケースは 32.5%、小学校「国語科」との連携を図っている園が 43.2%であった。「言語活動の充実」は、保育実践として取り組まれてはいるが、園独自でされており、今後は事例研究などを通して、保育の質の均一化も含めた検討も必要となってくることが明らかとなった。第 4 章では、言語活動の充実をめぐる保育現場の戸惑い等の課題も含めて評価を行った。 代表者：岡野聡子 共著者：大野鈴子 本人担当部分：質問紙の作成およびアンケート結果の分析と考察を行った。
６　幼児期における科学的思考を育む環境づくりに関する一考察	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第７号（pp.97-105）	本稿では、5 歳児を対象として、池田・戸北（2004）の科学の基礎的発言の分析手続を用いて、日常生活では出会わないゾウリムシを観察させることによって、幼児期における科学的萌芽および知的好奇心を育む教育環境の整備について検討した。 第１章では、科学的思考の萌芽に関する先行研究を取り上げ、この研究が小学校教育課程の生活科や理科教育の分野で実施されてきたことを述べ、幼児を対象とした科学的思考の萌芽に関する研究の少なさについて言及した。第２章では、池田・戸北（2004）や加藤（2007. 2008. 2009）の科学的思考の萌芽の分析手法を概観し、本稿で扱う分析手法を解説した。第４章では、実践の分析結果を考察し、科学の基礎的な発言へと移行する可能性がある一時的な表現の発言や対象物を身体で表現しようとする姿が目立ったことや、対象者の１名のみが科学の基礎的な発言をしたことに対し、対象物が身近でなかったこと、そうした物事に触れる体験が少なかったことに起因するのではないかと考えられた。今後の課題として、幼児の「知的な気付き」の発言を促す環境づくりについて、教師の態度に着目をして検討を要することが明らかとなった。 代表者：筒井愛知 共著者：岡野聡子、平松茂 本人担当部分：分析手法の検討を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　体験活動と授業後の発展学習を重視した保育内容「環境」の授業展開―大学 2 年生前期授業における実践事例から―	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第 7 号（pp. 29-36）	領域「環境」における授業展開では、「身近な環境とかかわる力の育成」を学生に具体的に理解させるため、講義形式の授業だけではなく、体験活動を取り入れている事例も多く見られる。本稿では、体験活動の他に授業後の発展学習課題を学生に与えることによって、領域「環境」への理解や幼児教育に関する学習意欲の向上が見られるかについて、授業評価アンケートや授業後の感想文から分析を行った。 アンケート結果からは、本授業が「役立った」と回答した者は、95.8％であった。体験活動では、実際に自然や素材と触れ合うことで、具体的に授業の趣旨を理解することができたという感想が多くみられた。発展学習では、提出された課題をまとめて授業中に配布をするなど、他者の考えに触れることができるフィードバックについて高く評価していた。授業後の感想からは、「子どもの様子やどのような遊びを取り入れるべきか自分で考えることができた」とあり、子どもの理解に対して一定の学習効果が見られた。学生自身の体験を通して、子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りのあり方を学べた点が大きかったといえる。その一方で、授業後の発展学習の交流（フィードバック）の方法が今後の課題であると思われた。
8　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価に向けて―「聞く力」を量的に捉える試み―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第 8 号（pp. 115-122）	子どもの育ちを可視化し、教育実践が効果的に行われたかを教員が振り返るためには、教育効果の測定と評価が必要である。しかし、幼児教育は、小学校以降の教科の学習と異なり、遊びを通して総合的に学習されるため、「見えない教育」と言われ、その教育効果を量的に測定したものは管見するあたり数が少ない。本調査では、京大ＮＸ5-8 を用いて、内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の測定を試みた。調査対象者は、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉の教育以外に力を入れているＢ園の園児を対象とした。結果は、課題ごとに素点を出し、換算表に従って偏差値に変換した。言語性という項目を設け、2 要因分散分析を行った結果、Ａ園とＢ園には違いがなく、課題の主効果（$F(3,42)=4.481, p<.01$）のみ有意であった。本調査の取組から、園の取組の違いを結果に反映しにくいなど、測定の難しさが浮き彫りになった。また今後は、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の測定について考える必要がある。 代表者：岡野聡子 共著者：吉村啓子、大野鈴子 本人担当部分：第 1、2、3、5 章部分
9　NIE を取り入れた教育実践研究―大学 2 年生を対象とした時事教養Ｉの授業実践を通して―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第 8 号(pp.　147-154)	学生の基礎学力の向上は、本学にとっても大きな課題であり、この課題解決の一つとして、新聞の利用による教育の導入を平成 25 年 4 月からはじめた。授業は学部単位で行い、420 名が履修をした。授業内容は、山陽新聞社による講義と現在注目されている新聞記事を題材（出生前診断やユニクロ世界同一賃金、アベノミクス等）を使用した講義を実施した。また、講義内に 3 回の試験を行い、講義後には学生アンケートを実施した。試験は、難易度が同程度の試験問題を使用しが。試験結果を分析すると、分散値にそれぞれ有意差は出ていないが、1 回目と 2 回目、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				2回目と3回目、3回目と1回目の平均点の間に有意差が見られ、点数が上昇していることから、基礎学力（ここでは言語力）と教養が身に付いたということが言えると思われる。また、学生アンケートからは、これまで新聞を読まなかった学生も新聞に関心を持てるようになったことが明らかとなった。 代表者：渡邉規矩郎 共著者：仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、 岡野聡子、正木友則 本人担当部分：第2章部分
１０　都市公園における子どもの遊び場環境づくりの可能性―ＮＰＯと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を通して―	単著	平成26年10月	奈良学園大学研究紀要第1号(pp. 11-23)	本稿は、子どもの遊び場環境の変化にふれながら、おかやまプレーパークの積み上げてきた実践と今回のプロジェクトの事業評価・考察を行うことを目的としている。筆者は、2013 年 3 月から NPO 法人岡山市子どもセンターのプレーパーク運営委員となり、都市公園における子どもの遊び場環境作りに携わってきた。2012 年 4 月から NPO 法人岡山市子どもセンターは、岡山市庭園都市推進課と協働して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施する運びとなり、筆者は、プロジェクトに参加をし、2年間に渡って記録を取りまとめてきた。実践記録を用いて、「遊び場の設定と専門性の有無のマトリクス」を作成し、遊び場の設定と遊びの種類がどのような人員配置によって運営がされていたかを分析した。今回の分析結果として、緑の遊び場（ESD）プロジェクトの目的である「子どもが岡山市における中心市街地の公園の魅力を遊びを通して発見し、原風景として子どもの記憶にとどめてもらいたいという願い」には来場者アンケートの回答も含め、十分応えられているものの、「公園内との緑とのかかわりを深めるための遊び場づくりを目的とした」では、合計53種類の遊びのうち 8 種類の設定であり、15%の実施率であったことが浮き彫りとなった。今後の改善点として取り上げるべき項目が明らかとなった。
１１　キャリア教育とキャリア支援の相互展開による実践と課題について―キャリア教育・キャリア支援における教職員連携の取り組みから―	単著	平成26年12月	人間教育学研究第2号 pp. 131-138	大学におけるキャリア教育やキャリア支援は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。 キャリア教育は、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力の育成を目指して、教員主導のもとにカリキュラムの構成・授業の実施がされてきた。一方のキャリア支援は、従来の就職課で実施してきた就職活動に直結する学生支援を職員が担っている。昨今では、こうしたキャリア教育とキャリア支援を全学的・体系的に見直す動きがある。すなわち、教職員が職務分掌の枠を超えて連携するということである。本稿では、Ｋ大学を事例とし、キャリア教育とキャリア支援の連携について、その実態と課題を明らかにすることを目的としている。 まず、Ｋ大学が育成する人物像について述べた後、キャリア教育とキャリア支援の全体図を提示し、その実態を俯瞰した。次に、キャリア形成科目において、キャリア支援にあたっている職員のヒアリングで得た情報等をもとに、キャリア形成科目のカリキュラムの見直しおよび改善結果を提示した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				そのことで、キャリア教育内で把握できなかった個々の学生のニーズを把握することができ、キャリア支援につなぐ体制を整備することが可能となった。今後の課題は、就職活動準備は 3 年生の後期から本格的にはじまるのだが、学習意欲の低下が見られる 1,2 年生に対し、早期のポジティブ・アクションが 3 年生以降の進路を決める上で重要となると思われる。
１２　子育て支援の多様化に関する一考察―子育て支援施策の揺らぎを越え、「チルドレン・ファースト」の舞台へ―	共著	平成27年3月	幼年児童教育研究第 27 号兵庫教育大学幼年教育コース（pp. 115-126）	本稿では、子育て支援の変遷について国の施策を概観しつつ、その中で、子育て支援の対象者や実施運営主体が多様化していく様子を整理し、子育て支援の今後の課題について検討することを目的としている。「子育て支援」という言葉が行政の諸文書に登場してから 25 年目を迎えるが、その間、子育て支援の実施主体の多様化から、子育て支援が誰によって、どのように実施されているのかが見えにくい状況が生じているという課題があり、本稿において子育て支援の類型化を試みた。類型化では、横軸に支援の実施主体として公的主体、民間主体を取り上げ、縦軸に支援のニーズとして個別的ニーズ、社会的ニーズを取り上げて分類した。その分類に従って、子育て支援の具体的事例を取り上げ、今ある子育て支援の現場が持つ課題について論じた。子育て支援の変遷や事例の考察から、子育て支援は多様な実施主体の活動によって量的拡大をしてきたが、今後は子育て支援の質的保障の検討や点の支援を面の支援へとつなげ、子育て支援のネットワーク体制を確立することが求められると同時に、子どもの最善の利益を考えた「子どもの育ち」における議論の深まりの必要性が明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：佐伯岳春、吉富裕子、馬場陽子 本人担当部分：第 1、2、3-（1）、4 章
「学会発表」 1　人間力育成のための「基礎演習」	共同	平成18年9月	全国保育士養成協議会第 45 回研究大会,研究発表論文集 （p. 190－191）	現代の学生は数年前の学生に比べ、「人間力」が低いと言われている。このような保育者は,保育の人的環境として重要な役割を担うことは難しい。この「人間力」を①基礎学力、②生活上の基礎技能と捉え、それらを育成するための授業内容と方法を考案し、基礎演習の授業内で実践した。学生のアンケート結果では、「基礎学力」が「生活上の基礎技能」よりも必要性を低く評価していたため、「基礎学力」の必要性を学生自身に感じてもらうため、今後、教材のさらなる工夫が求められる結果となった。 代表者：吉村啓子 共同者：松井祐子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子、高澤空男 本人担当部分：授業実践の補助および、質問紙表の作成を行った。
2　保育士養成における人間力育成	共同	平成19年9月	全国保育士養成協議会第 46 回研究大会,研究発表論文集 （p. 114-115）	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科では、保育者の資質として養成したい人間力の項目に①基礎学力の向上、②生活上の基礎技能の育成を掲げている。教育内容は、辞書の引き方・お箸の持ち方なども含めた実学教育、季節に応じた植物（あさがおやひまわりなど）を学生に育てさせ、季節感を知ることや植物への関心を持たせる環境教育実施について言及した。 代表者：吉村啓子 共同者：松井祐子、松田智子、土谷長子、智原

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：季節に応じた植物を学生に育てさせ、植物への関心を持たせる環境教育の実施について言及した。
３　保育士養成教育と卒業時の学生満足感との関係	共同	平成20年9月	全国保育士養成協議会第 47 回研究大会,研究発表論文集 （p. 260－261）	カリキュラムを工夫し、学生に対する丁寧な教育を実践しているが、その効果については実証的な検証が必要である。教員側の思いだけでなく、学生の客観的な評価を参考にするため、学生満足度調査を実施した。重回帰分析の結果 本学における全ての学科の中で、こども保育学科のカリキュラム内容や教職員の保育職におけるキャリア支援は、学生から高い評価を受けていることが確認された。 代表者：吉村啓子 共同者：松井祐子、松田智子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：カリキュラムの検討および、質問紙表の作成を行った。
４　より良い教育を目指すカリキュラム・マップの作成～ＦＤ活動の一環として～	共同	平成21年9月	全国保育士養成協議会第48回研究大会,研究発表論文集 （p. 222-223）	本学において、養成するべき保育者像に適合した教育が実施できているか検討するため、科目ごとの到達目標とディプロマ・ポリシーの各項目の対応表（カリキュラム・マップ）を作成した。結果からは、保育士資格取得の科目には、幅広い教養を身につけるというディプロマ・ポリシーに沿う必修科目が少ないことが明らかとなった。そのため、教養として位置づけている日本の伝統文化教育なども教育実習事前事後指導で取り入れ、保育を学ぶ者の教養の質を高められるように実践も行った。 代表者：吉村啓子 共同者：中瀬惇、松井祐子、梅岡さと江、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：カリキュラム・マップの作成を担当した。
５　カナダにおけるネイバーフッドハウスの調査から学ぶもの　～日本における「子育て支援」の特徴を通して～	単独	平成22年7月	大阪市立大学大学院創造都市研究科教員・院生共同研究シンポジウム	ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市で行われている地域の子育て支援のフィールド調査結果も含め、日本における子育て支援の現状と課題を述べた。ネイバーフッドハウスにおける子育て支援が親の支援をより強化した内容になっており、専門の労働相談員の常駐や雇用プログラムの開催、誰もが共用で利用できるコミュニティキッチンなどの物的サービスの環境がホリスティック（包摂的）に整えられている特徴について言及した。
６　保育現場が求める人物像～聞き取り調査をふまえて～	共同	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集 （p. 175-176）	社会に通用する人材を育成するには、学生の就職先が求めている人材像を正確に把握し、それを踏まえた教育内容を構築することが必要である。そのため、保育現場への聞き取り調査および学生アンケート調査を実施した。保育現場が求める人物像の結果では、主体性やコミュニケーション能力を重視するといった語彙が上位に並び、ピアノや絵画制作等の保育技術に関する項目よりも多かった。学生アンケートの結果からは、ピアノや絵画制作といった保育技術の習得に重きを置いていることが確認された。今後もキャリア支援の一貫として、社会人基礎力に示されている「人間性の育成を重視した教育」をより一層行う必要が明らかとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				代表者：吉村啓子 共同者：梅岡さと江、辻野孝、松井祐子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分：聞き取り調査の実施および分析を担当した。
7　学生の進路決定を支援する～実習・就職支援室の活動報告～	共同	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集（p. 176-177）	幼稚園・保育士養成施設として、早期のキャリア支援の重要性について言及した。具体的には、保育現場が求める人物像の調査や保育技術の指導、年 3 回の進路調査を踏まえた個人指導などである。2 年間という短い学生生活の中で、就職活動に費やす時間を有効活用するためにも、早期のキャリア支援プログラムの構築は必要であることが確認された。 代表者：岡野聡子、共同者：吉村啓子 本人担当部分：キャリア支援プログラムの構築を担当した。
8　幼児期における言語力育成と保育者の役割	単独	平成24年3月	日本教師学学会第13回研究大会、発表要旨集（p. 24-25）	幼児教育において人的環境としての保育者の役割について提案した。環境に働きかける体験を，保育者がどのように捉え，幼児に言葉がけとして返していくかは保育の中では重要である。特に絵本や遊びを繰り返す中で幼児は多くに力を獲得していく。細切れの知識ではなくそれぞれの繋がりの中で，体験の繋がりや意味に気付いていく。この経験の積み重なりが，幼児自身の自信となり，自分を取り巻く環境政界に対しての信頼となる。そのためには，幼稚園としてどのようなカリキュラムが必要かについて，4 歳児と 5 歳児の具体てきな教育課程を示しながら提案した。 日本教育新聞社の平成 24 年 4 月 16 日付第 12 面にて取り挙げられた。
9　領域「環境」における授業研究～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	共同	平成24年9月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会,研究発表論文集（p. 268-269）	領域「環境」の授業では、身近な環境とかかわる力の育成を学生自身に具体的に理解させるため、講義形式の授業と体験活動を取り入れている事例が多くみられる。本講義では、体験活動を取り入れつつ、授業内で取り扱った内容への理解を深めるための発展課題を授業後に学生に与えた。授業アンケートから、学生自身が体験を通して子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りを学べた点は大きかったと言える一方で、授業後の発展学習の交流の在り方の工夫が今後の課題として残った。 代表者：岡野聡子 共同者：松田智子 本人担当部分：授業実践を評価し、特に発展課題のあり方を考察した。
１０　大学生のキャリア意識とキャリア支援体制の確立に関する研究-環太平洋大学 3 年生を対象としたアンケート調査を踏まえて-	共同	平成24年10月	日本キャリア教育学会第 34 回研究大会,研究発表論文集（p. 86-87）	大学時代は、学生から職業社会への移行期にあたり、自分の将来や人生を考え計画できる力を身につけることがキャリア教育の目的となる。本学では、教育課程内外に捕らわれず、教職員が一丸となってキャリア支援体制を確立しようとしている。そこで、学生のキャリア意識に関する実態を把握するとともにキャリア教育の効果測定も含め、「大学生の職業観に関するアンケート調査」を 3 年生のキャリアデザイン履修者 346 名（回収数 264 名、回収率 78.6%）に実施した。調査結果では、職業・仕事に関する情報源において、学校での授業が 84.1%と最も多く、次に先生との会話が 81.5%を占めるなど、就職先の情報源としての役割を教職員が十分に

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				果たしていることがわかった。しかしながら、大学卒業後の進路では就職希望者が 84.5%であるにもかかわらず、将来就きたい職業の具体名の記述を求めると、未回答が 43.2%との結果であった。このことから、大学は就職を考えるための情報は与えているが、各職業の具体的なイメージ形成という点では学生に対して十分な手助けができていないのではないかと考察できる。今後は、各職業の具体像を提示することが重要であることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共同者：小野憲一 本人担当部分：調査結果の分析および考察を担当した。
１１　幼児期における言語活動の充実とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	単独	平成25年3月	日本教師学学会第14回大会発表要旨集（p. 60-61）	幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、また保育実践としてどのように取り組まれているのか、伝達力や思考力の育成に関する具体的な実践事例にも着目をしながら岡山市内の公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を通して考察することを目的としている。岡山市内にある公立幼稚園合計 68 ヶ園の 459 名の教諭（常勤・非常勤問わず）を対象、調査時期は、2012 年 9 月 11 日～9 月 22 日の 12 日間である。質問紙の有効回答数は 178 票、有効回収率は 38.7%であった。 「言葉」にかかわるカリキュムを年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている園や、言葉のカリキュラムを園独自で作成している園もあるなど、幼児期における言語活動の充実は着実に進んでいるともいえる。今後は、幼児教育が学校教育のはじまりとして意識される中で、小学校の教育内容との連携・接続を考えた保育実践のあり方をより一層模索する必要があるだろう。
１２　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ｉ）～大学 2 年生時の開講科目「生活の理解」のアンケート調査から～	単独	平成25年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第22回全国大会兵庫大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～（p. 262）	本学では、生活科を学ぶにあたって、教材への理解や生活科の内容を学ぶために「生活の理解」を 2 年生の前期に開講し、生活科の指導法については、3 年生の後期に開講をしている「生活科教育法」を受講することになる。生活科を学び始めたばかりの学生にとって、生活科に対するイメージがどのようなものであり、また、授業を受講する中で、生活科への理解がどの程度深まるかについて、量的・質的調査の両面から明らかにすることを目的としている。 第一回目のアンケート調査では、「生活科」という科目を聞いたことがあるかという問いにて、58%が「ある」と答え、42%が「ない」と答えた。また、小学校時代に「生活科」を学んだことがありますかという問いでは、61%が「ある」と答え、12%が「ない」、27%が「忘れた」と回答した。「生活の理解」に対するイメージを自由記述にて回答を求めたところ、「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と 43%の学生が回答しており、生活科のキーワードともいえる「気付き」や「体験活動」といった言葉は現段階において見られなかった。また、学 生の中には「生活」という言葉を聞いて、衣食住をイメージする者も多く、「家庭科との違いは？」と質問をする学生もいた。今後も調査を続け、全 15 回の授業終了後に学生の生活科に対するイメージがどのように変容したか明らかにしたい。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１３　キャリア形成科目における授業改善と評価―「キャリアデザイン」における新たな取り組みの授業実践報告―	単独	平成25年10月	日本キャリア教育学会第35回研究大会，研究発表論文集（pp. 64-65） 名古屋大学・東山キャンパス	本学の 3 年次に開講している「キャリアデザイン」（2 単位・卒業必修科目）では、進路選択に必要な知識を身に付けるためだけでなく、自己理解を深める中で自己表現力を高めることを目的としている。本発表では、平成 24 年度の授業内容本学学生を対象としたキャリア意識調査からキャリア教育における授業の在り方を再検討し、平成 25 年度の授業実践に活かしたことの事例発表を行った。
１４　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価を考える（Ⅰ）―幼児期の「聞く力」を量的に捉える試み―	共同	平成26年3月	日本教師学学会第15回大会発表要旨集（p. 80-81）、環太平洋大学	幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価について、京大ＮＸ5-8 を用いて内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の内的要素を量的に捉える試みを発表した。今回の調査結果からは、各課題において、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉以外の教育に特に力を入れているＢ園に有意な差を見ることができなかった。今後は、言語活動の充実において、「聞く力」の測定だけでなく、「話す力」、「伝え合う力」の測定方法および評価方法についても検討する必要があると考えている。 代表者：岡野聡子 共同者：吉村啓子 本人担当部分：調査実施、結果の考察を担当した。
１５　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究Ⅱ～岡山型一貫教育の中における岡山市立大野幼稚園の取り組み～	単独	平成26年5月	日本保育学会第67回（近畿ブロック）発表要旨集（p. 542）、大阪総合保育大学	岡山市における言語活動の充実を軸とした幼小中連携教育の実践を取り上げ、その中における岡山市公立幼稚園の言語活動の充実あるいは言葉の教育の保育実践の取り組みにおける考察を発表した。岡山市は、平成 14 年から岡山市地域協働学校施策を始め、その中で家庭・学校園・地域社会の三者協働による教育システムの構築や幼小連携および小中一貫教育を推進してきた。また、岡山型一貫教育と名付けた教育活動は、幼児期からの学びの連続性に着目し、幼小中連携教育の実践を行ってきたことが特徴であると言える。岡山市立大野幼稚園は、平成 23～25 年度まで、『園生活を楽しむための力の育成』を主題とし、副題に大野幼稚園の指導の重点である「言葉のキャッチボール（話す・聞く・伝え合う）を楽しむ幼児をめざして」を掲げ、実践研究に取り組んできた。指導上の工夫では、指導案に「話す・聞く・伝え合う」の項目を設け、教師が日々の教育・保育活動で意識できるよう配慮した。設定保育の工夫として、降園前の一日の振り返りにおいて、話し方の指導および聞き方の指導、特に話し手の内容を理解して聞いているかを確認しながら聞く力の育成を行っている。また、全教員が研究協議会に参加し、情報共有化に努めている。教師は、日々の教育・保育実践を行う中で、日々の活動が子どもの育ちにどのようにつながっていくかといった「見通しのもてる教育活動」は、教師の教育活動へのやる気や意欲を向上させる意義を含んでいる。「見通しのもてる教育活動」を実践するには、幼小中の教師が集うことのできる研究協議会等を整備することが重要である。
１６　プレーパークと行政の協働による「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」の実践報告～岡山市街地の公園を利用した子どもの遊び場づくり～	単独	平成26年9月	こども環境学会合同セミナー、研究発表・活動報告梗概集第 3 号（pp. 46-47）、名古屋工業大学	本発表は、ＮＰＯ法人岡山市子どもセンターと岡山市庭園都市推進課が協働で実施した「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012、2013」の活動内容および事業評価について振り返り、都市公園を利用した子どもの遊び場環境づくりの実践報告を行った。2012 年度は 5 箇所の公園にて

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				子どもの遊び場を設定し、2013 年度は 7 箇所に増設した。「子どもが遊ぶ」という視点から見た各公園が持つ課題を提示し、その課題をどのように解決したか本プロジェクトの実施写真を用いて解説した。本プロジェクトの参加者は、年間 2000 名に上っており、保護者アンケートからは、「今後も是非参加したい・参加したい」と 95.2%が回答している。
１７　多世代間交流を可能とする場作り～カナダにおけるゴードンネイバーフッドハウスの事例を通して～	単独	平成26年10月	日本世代間交流学会第5回全国大会要旨集 (p.72)、姫路商工会議所	本発表は、自主企画シンポジウム 1-Aにおける「子育て支援をめぐる世代間交流―高齢者の参加を中心に―」の話題提供者として登壇した。カナダバンクーバー市ウエストエンド地区に位置するゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを紹介し、多世代間交流を可能とする場作りについて考察した。ゴードンネイバーフッドハウスでは、子育て支援や高齢者支援、雇用支援等、約 30 種類のサービスやプログラムの大半を一時滞在者の留学生から現地の大学生、そしてウエストエンド地区に住むゴードンネイバーフッドハウスの利用者がボランティアスタッフとなって提供している。一つの施設内に多様なサービス提供の場を配し、ここを訪れる全ての人が「与え与えられる」といった互恵性を醸成する場の可能性について述べた。
１８　奈良学園大学におけるキャリア教育の取り組み（Ⅰ）―大学１年生を対象とした「キャリアデザインⅠ」を通して―	単独	平成26年11月	日本キャリア教育学会第36回研究大会・研究発表論文集 (pp.73-74)、琉球大学	奈良学園大学は、奈良産業大学から名称変更をし、従来の学部学科を一新する形で人間教育学部と保健医療学部を設置した新設大学である。筆者は、人間教育学部に属し、キャリア形成科目を中心に担当をしている。本発表では、人間教育学部における 1 年次のキャリア教育の授業実践を報告することを目的とした。人間教育学部は「教育の三つのポリシー」を掲げると同時に、人間教育学部が目指す教育者像である「社会の中で一人の人間として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする、柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた教育者」である。これらのポリシーに適う人材育成をするために、１年次では、①自己を知る、②社会を知る、③人生設計の 3 つのユニットに分けて実施した。履修者は 110 人いるため、学部教員に協力をしてもらい、10 グループに分けて活動を行った。グループ学習での学びの成果は、スピーチコンテストという形で確認をした。 １年次の学びでは、各ユニットを通して、まず自己を振り返る活動と他者を知る活動であったと言える。また、5 月に進路希望調査を実施したところ、教師のみを志望している者が 53 名（51.5%）であり、なんとなく教職を志望した学生像が浮き彫りになる結果が見えた。
１９　大学のキャリア教育におけるNIE活用の展望～大学２年生を対象とした「時事教養Ⅰ・Ⅱ」の授業実践～	共同	平成26年12月	日本NIE学会第11回仙台大会・発表要集録 (p.40)、東北福祉大学	大学におけるキャリア教育は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すためのプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。環太平洋大学では、1 年次から「社会人基礎力の育成」をテーマとしてキャリア教育に取り組んでいる。「時事教養Ⅰ・Ⅱ」は、キャリア教育の充実を目的とし、授業において試験的にＮＩＥを導入することとした。本発表では、その実践内容と成果について報告することを目的としている。ＮＩＥにて取り扱うテーマ設定および内容を構築するに際

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				し、職業観や勤労観にふれられる内容を盛り込んだ。実践の成果では、①新聞活用を通して社会情勢に関心を持て、読書量が増えたこと（学生アンケートから）、②基礎学力の向上（内容確認テストの有意差から）、③意見の質の向上（振り返りシートから）が見られた。 代表者：岡野聡子 共同者：仲田輝康 本人担当部分：授業実践および実践結果の考察を担当した。 備考：本発表内容は、平成 26 年 12 月 24 日の山陽新聞に掲載された。
「報告書」 １　幼児期における「言語活動の充実」とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成25年2月	発行：環太平洋大学	幼稚園教育要領改訂（2008）にて取り上げられた「言語活動の充実」が、実際の保育現場においてどのように実施されているのか岡山市内の公立幼稚園に勤務をしている教諭を対象としてアンケート調査を実施した。本報告書では、特に伝達力・思考力を育成するための保育実践について、自由記述からの考察を行った。自由記述では、伝達力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者は 68.4%、思考力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者が 60%であった。また、自由記述による伝達力を意識した保育実践に関する具体的な取り組みへの回答が 146、思考力では 137 であった。その内容からは、思考力への取り組みに対する保育者の戸惑いがみられるものが多くあるという結果であった。 A4 判　全 37 ページ 代表者：岡野聡子 共同者：大野鈴子 本人担当部分：アンケート質問紙票の作成および分析、考察を担当した。
２　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012～岡山市における中心市街地の公園の利活用について～	共著	平成25年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012」	私たちを取り巻く社会環境は、都市化や情報化の進行によって急激な変化を遂げてきた。そうした社会環境の変化は、子どもの育ちにも影響を与えていると言われている。緑の遊び場プロジェクトでは、子どもを中心とした公園の利活用を目的とし、子どものための移動式の遊び場の提供を行った。５つの公園を会場として、約 2000 人が利用した。プロジェクトでは、自然物（木の実や葉っぱ）を用いたコラージュ製作や木工作、公園内に生えている樹木の名前などを当てるクイズや探検マップの製作など、遊びながら公園に親しみをもてる仕組みを提案・実践をした。本プロジェクトは、岡山市庭園都市推進課からＮＰＯ法人岡山子どもセンターが 200 万円の助成金を受け取り、実施した。 A4 判　全 55 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　言葉の保育カリキュラム～幼児期における「言語活動の充実」の工夫～	単著	平成25年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成24年度教育研究助成成果報告書	幼稚園と大学が連携をして、幼児期における言語活動の充実を図るため、岡山市にある大野幼稚園と江西幼稚園と環太平洋大学が連携をして、言語活動の充実に関するアンケート調査を実施した。そのアンケート結果をもとに、伝達力・思考力の育成に着目をして、言語活動における指導方法や環境構成等のあり方について報告書としてまとめた。 A4判　全2ページ 本人担当部分：pp.10-11
4　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2013～子どもの自由な遊び場を目指して～	共著	平成26年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト2013」	2013年度は、5つの公園から7つの公園に規模を拡大して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施した。また、前年度の活動に加え、大人が集える場作りの工夫も施した。たとえば、七輪カフェを設けたり、机やベンチを設けて、保護者の方や地域の高齢者の方など、多世代が集える場作りである。子どもを中心としたプロジェクトを通して、多様な立場の人々が出会える空間としての都市公園の利活用方法についても報告書の中で紹介をしている。 なお、本報告書を用いて、こども環境学会第3回合同セミナー（2014.9）にて活動の発表を行い、奈良学園大学研究紀要（2014.10）では、事業の総合評価も行った。 A4判　全51ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター
5　伝達力・思考力を育む言葉の保育カリキュラムの開発～幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価にむけて～	単著	平成26年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成25年度教育研究助成成果報告書	本研究は、平成24年度の本助成金を利用して得たアンケート調査結果をもとに、幼稚園と大学が連携を取って幼児期の教育現場における言葉の保育カリキュラムの作成の検討および開発をすることをねらいとしている。当初の計画では、言葉の保育カリキュラムの作成まで行う予定であったが、現場での多様な実践の一つ一つが幼児の教育効果を高めているのかについて量的に捉える必要があるため、今回の研究では、 伝達力・思考力を育む上でも重要となる「聞く力」についての教育効果測定を試みた。結果として、園の取り組みの違いを結果に反映しにくいことなどから、測定の難しさが浮き彫りになったことを報告書としてまとめた。 A4判　全2ページ 本人担当部分：pp.8-9
「その他」 1　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅱ）～大学2年生前期開講科目「生活の理解」受講後アンケート調査から～	単著	平成26年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第23回全国大会埼玉大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～（p.216）	平成25年度の4月10日の第1回「生活の理解」を開講した際、本科目で何を学ぶのかイメージを問うたところ、43%の学生が「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と答え、家庭科のイメージが強いと回答する学生もいた。全15回の受講を通して、生活の理解に対する学生のイメージがどのように変容し、また前期で得た学びが、どの程度定着しているのかを明らかにするため、質問紙法を用いて追跡調査を実施した。受講半年後の平成26年1月21日の調査結果（有効回答率：65.9%）から、授業で一番印象に残っている内容として、身近なも

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				のへの興味関心を高める活動が 47%、自然体験活動に関するものが 39%、その他が 4%、無回答は 14%であった。最も多かった活動内容に関する記述は、グミづくりであり、その印象に残っている理由とて、「美味しくなかった」や「(普段食べているグミに）砂糖がどれだけ入っているのか知った」とあり、自身にとっての予想外や発見が、半年経過した後も記憶に残っていることが示された。また、他科目との関連性では、科目名を取り上げた者が 57%おり、無回答は 37%であった。最も多かった記述は、「子どもと環境」であった。(※学会発表予定であったが、体調不良のため辞退し、発表内容は要旨集に掲載されている)
２　大学のキャリア教育におけるＮＩＥ活用～事例紹介～	単独	平成26年12月	第1回大学ＮＩＥ研究会 場所：キャンパスプラザ京都 6F 第2講習室　京都文教大学サテライト教室	今回の発表では、基礎学力向上の課題を解決すること、キャリア教育を充実させることを目的として設置された時事教養Ⅰ・Ⅱの科目をめぐって、ＮＩＥ活用の在り方や教材の作成方法について述べた。授業実践では、実際に授業で使用した「第８回若者の離職を考える」を取り上げ、教材作成方法や受講生の感想、実施後の教員側の感想について述べた。授業実践を振り返る中で、学生に教材を与え、無理やり読ませ、考えさせ、書かせ、対話することにこだわるよりも、ある程度一方的に知識として教える場面を増やし、考える力の土台作りをするというのも一つの選択肢であると提案した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　岡 村　季 光

研究分野	研究内容のキーワード
心理学	青年心理学，教育心理学，居場所，対人関係，自己

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
1.　キャリア教育の実践	平成16年４月～平成26年３月	奈良保育学院にて進路指導を継続的に行うため，常勤教員全員がオムニバスに担当する「課題研究」を開講した。授業では，学生の基礎能力向上のため履歴書作成（含．自己ＰＲ，志望動機），業者添削による小論文指導，漢字の学習を主に担当した。１回生後期～２回生前期に至る開講を行い，学生の進路への意識づけを喚起することができた。
2.　ｅ－ラーニングを用いたプレゼンテーション発表実践	平成21年10月～平成22年３月	帝塚山大学経営情報学部の「教育相談」履修学生を対象に，インターネット教育支援サービス・TIESを用いて当該機関補佐員の協力の下，授業内で学生がプレゼンテーション発表を行っている様子を動画撮影し，履修学生内の範囲で公開した。その結果，自己のプレゼンテーション方法について省察を促すことができ，互いの学習内容を授業外でも参照・共有することができるようになった。
3.　障がいへの理解及びＩＴ技能向上への実践	平成23年４月～平成26年３月	奈良保育学院の学生を対象に障がいへの理解及びＩＴ技能向上を目的として「情報処理法」担当教員と連携し，「精神保健」並びに「保育・教職実践演習」授業内で継続的にＰＣ並びにWord，Webメール，PowerPointを使用させた。具体的には課題として発達障がいに関する書籍を自らで探して少なくとも３冊以上読み，その内容及びコメントを所定様式のWordで入力し，ファイルをWebメールにて添付し送付するように求めた。さらに同種の書籍を読んだ者同士ペアを組ませ，PowerPointを作成・発表を求めた。知的障がい児・者施設実習の前後に当該実践を行った結果，学生の障がいに対する理解が進み，さらにＰＣを用いたレポート及びメールの作成スキル，プレゼンテーションスキルが向上した。
4.　ピアヘルパー対策講座の担当	平成23年10月～平成26年３月	奈良保育学院にて平成23年度後期より３年間ピアヘルパー資格取得志望者の募集並びに対策講座の担当を行い，カウンセリング概論・カウンセリングスキル・青年期の課題とピアヘルパーの留意点について授業を行った。その結果，３年間で志願者83名中66名の合格者，合格率約80％の実績を出した。
２　作成した教科書，教材		
1.　教育心理学テキスト共同執筆 『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』（再掲）	平成21年10月～現在に至る	『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』を共同執筆した。帝塚山大学で担当する「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用している。
2.　発達心理学テキスト共同執筆 『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』（再掲）	平成23年10月～平成26年３月	『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』を共同執筆した。奈良保育学院で担当する「保育の心理学Ｉ」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用している。

事項	年月日	概要
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1.　帝塚山大学における授業満足度アンケート結果	平成26年度	教員の授業運営についての項目（７項目，４件法）は，前期において教員全体の平均3.30に比し当該教員の平均は3.54であり，７項目全てが教員全体の平均より0.38～0.07ポイント上回っていた。 後期において教員全体の平均3.32に比し当該教員の平均は3.67であり，７項目全てが教員全体の平均より0.46～0.23ポイント上回っていた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1.　奈良保育学院における教育相談業務	平成13年４月～平成26年３月	奈良保育学院にて学業成績不振者本人及び保護者を呼び出し，学校心理学の見地に基づく学業指導を行った。また，学校不適応を訴える学生の相談業務を随時行い，同時に予防的教育相談業務として遅刻・欠席が目立つ学生等，いわゆる“気になる”学生の把握及び対応を常勤教職員同士で連携を図りながら行っている。
2.　奈良女子高等学校への教育相談補助	平成13年４月～平成18年３月まで	学校法人白藤学園の系列である奈良女子高等学校にて教育相談の担当教職員・保健室の養護教諭と連携し，学校心理士の立場から週１回３時間教育相談室に在籍する生徒のサポートを行っていた。
3.　奈良女子高等学校への出講	平成21年４月～平成26年３月	学校法人白藤学園の系列である奈良女子高等学校保育コースにて「保育演習」の授業を各学年に週に１時間担当することを拝命した。１・２年生には発達心理学及び教育心理学の基礎的内容を教授し，３年生には教育実習及び福祉を専門とする教員と連携し，各自の専門性に応じた授業の展開を企画・実践している。
５　その他 1.　奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績	平成12年４月～平成26年３月	奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科にて（平成12年４月～非常勤講師，平成13年４月～平成26年３月教育職員として），以下のような科目を担当した。 「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（平成12年４月～平成26年３月。平成23年10月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。 「教育心理学」（平成12年10月～平成26年３月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「教育心理学」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において教育・保育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育・保育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（平成13年４月～平成26年３月。平成23年４月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修１単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概要
奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績（続き）		「精神保健」（平成13年４月～平成23年９月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「精神保健」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において子どものメンタルヘルスに関する授業を行い，それによって，学生に発達障がいについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）」（平成13年10月～平成26年３月。平成24年10月～科目名変更予定） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）（専門科目，２年次配当，半期，必修１単位）においてカウンセリングの理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生にカウンセリング・マインドを育成する教育効果があった。
2. 大阪薫英女子短期大学 児童教育学科における教育実績	平成17年４月～平成19年９月まで	大阪薫英女子短期大学 児童教育学科の非常勤講師として，以下のような科目を担当した。 「乳幼児心理学」（平成17年４月～平成19年９月まで） 大阪薫英女子短期大学 児童教育学科の非常勤講師として担当の「乳幼児心理学」（専門科目，２年次配当，半期，選択１単位）において，乳幼児の発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に乳幼児への捉え方を変え，どのように乳幼児にかかわっていけばよいのかを考えさせる教育効果があった。
3. 帝塚山大学経営情報学部における教育実績	平成17年10月～平成24年３月まで	帝塚山大学 経営情報学部の非常勤講師として，以下のような科目を担当した。 「教育心理学」（平成17年10月～平成24年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（平成18年４月～平成23年９月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育現場における生徒・進路指導の理論と実際の現場の様子を紹介する授業を行い，それによって，学生に教育における生徒・進路指導のあり方について理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成18年10月～平成24年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリングマインドの必要性について理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概要
4.　帝塚山大学現代生活学部における教育実績	平成22年４月 ～現在に至る	「教育心理学」（平成22年４月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成22年10月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリングマインドの必要性について理解させる教育効果があった。
5.　奈良学園大学人間教育学部における教育実績	平成26年４月 ～現在に至る	「教職表現力演習Ｉ」（平成26年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部の「教職表現力演習Ｉ」（専門科目，１年次配当，通年，必修２単位）において，新聞記事や評論文等を参照する，あるいは講話を聴き文章を作成する授業を展開した。それによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力のうち特に「書く力」である「文章表現力」の基礎を身につける教育効果があった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1. 修士（教育学）	平成13年３月	奈良教育大学　第817号 「修士論文題名：自己及び他者との関係における『居場所』の個人差」
2. 教員免許	平成13年３月	中学校教諭専修免許状（社会）取得（学校心理学付記）（平12中専修第20号，奈良県教育委員会）
3. 学校心理士	平成16年11月	第82689号 （平成26年12月更新，平成31年12月まで有効）
2　特許等		（な　し）
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 教務全般の企画・運営	平成13年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院にて教務係としてカリキュラム・時間割・年間行事の編成，成績管理，入試業務，奨学金業務，紀要編集委員その他関連する事務処理を主任の立場で活動した。
2. 学年担当（担任）	平成13年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の学年担当（担任）を受け持ち，学生の日常における生活指導，学校心理学の見地に基づく成績不振者への学業指導及び学校不適応を訴える学生及びその保護者の相談等を受け持った。
3. 学生自治会顧問	平成14年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院学生自治会の顧問として学生主催の新入生歓迎会，学院祭（体育祭・文化祭），送別会等の企画運営を監督した。
4. 進路指導	平成16年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の進路担当教員と連携して進路指導の科目（「課題研究」）を立ち上げ，１回生から２回生にかけて継続的に進路活動を行う体制を築いた。
5. 広報・募集活動	平成20年４月 ～平成26年３月	奈良保育学院の募集活動の一環として業者と連携してパンフレット・ポスター・ホームページ作成にかかわり，他教員と分担して近隣の高等学校へ訪問し広報活動を行った。
6. 広報委員会における活動	平成26年４月 ～平成27年３月	奈良学園大学にて広報委員会に所属し，委員として大学案内の内容，オープンキャンパスの内容企画，今後の広報活動及び戦略について検討を行った。
7. 教務委員会における活動	平成26年４月 ～現在に至る	奈良学園大学にて教務委員会に所属し，委員としてＧＰＡ基準，試験要領の検討，追・再試験に関する取り扱い，入学前他大学等既修得単位の認定，特別警報発令時の臨時休校措置の基準検討，保育士資格取得に関する整備について活動している。
4　その他		
1. 平成17年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第44回研究大会活動	平成16年６月 ～平成17年９月まで	平成17年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第44回研究大会委員に任命され，シンポジウム分科会の運営補助及びポスター発表会場の座長を務めた。
2. 平成24年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第51回研究大会活動	平成23年６月 ～平成24年９月まで	平成24年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第51回研究大会委員に任命され，シンポジウム分科会の運営補助に携わった。
3. 関西心理学会事務局及び常任委員活動	平成25年４月 ～現在に至る	関西心理学会事務局及び常任委員に任命され，学会事務局及び常任委員会の運営に携わっている。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－	共著	平成21年３月	小林出版	教育心理学の基礎的事項を簡潔に解説し，教職を目指す学生の参考書として有益であるように構成されている。改訂版では最近の教育心理学のトピックや教員採用試験などで出題される重要項目を追加した。 Ｂ５判　全259頁 編　者：豊田弘司 共著者：稲森涼子・森田健宏・向居　暁・岡村季光・沖林洋平・豊田裕美・豊田弘司（ＡＢＣ順） 本人担当部分：「第２章　児童・生徒の理解（Ⅱ）－知的能力の理解－」のうち「１．知能（intelligence）とは」及び「２．知能検査（intelligence test）とは」（pp.32-42.）の部分を単著。 知能とは様々な能力の総合体であるという定義のもと，一般知能（ｇ）に関する解釈を中心に古典的知能観，すなわち一般知能（ｇ）を想定したスピアマンの２因子説と想定していないサーストンの多因子説を紹介した。その後，新しい知能観で提唱されている概念の比較検討を行った。また，教育相談等で現在よく用いられているビネー式知能検査（田中・ビネー知能検査Ⅴ）及びウェクスラー式知能検査（ＷＩＳＣ－Ⅲ）の概略を説明し，検査結果の適切な利用方法を述べた。
2. やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－	共著	平成23年３月	ナカニシヤ出版	胎児期から老年期まで生涯発達の段階ごとに，各章で発達のとらえかた，発達心理学の基礎的な内容を解説し，人生の節目に出逢いと別れを繰り返しながら対人関係が成長していく過程が紹介されている。 Ａ５判　全237頁 編　者：浜崎隆司・田村隆宏 共著者：荒木美代子・岡村季光・岡本かおり・加藤孝士・澤田友希・田村隆宏・朴　信永・浜崎隆司・丸山（山本）愛子・森田泰介・森野美央・八島美菜子・湯澤美紀（50音順） 本人担当部分：「第３章第２節　拡がる子どもの世界」（pp.67-79.）の部分を単著。 第１にことばの発達において，ことばを話し始める前に乳児が他者に意思疎通を図ろうとする具体例，初語が出てからの発語量とことばの理解度の関係，２語文の習得を始めとした文法の習得，文字の読み書きを習得しことばを楽しむ幼児の様子を紹介した。第２に遊びの発達において，乳幼児における遊びの重要性，乳児自身の体を用いた遊び，表象機能の発達に伴う見立て・ふり遊びとその具体例，ひとり遊びから集団遊びへの移行と特徴を紹介した。
3. 教育フォーラム第55号「実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA型学力をどう育てるか」	単著	平成27年２月	金子書房	実践的な諸課題に向けての解決をどう図っていくのか，そのために必要となる思考力や問題解決力をどのような形で鍛えていくか，実りある着実な学習活動の展開を具体的に提案している。 Ａ５判　全160頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊﨑一夫・井上信子・大内善一・岡村季光・梶田叡一・加藤　明・金澤孝夫・鎌田首治朗・蔵あすか・萩原憲二・藤井幸一・藤田英治・宮岸　洋（50音順） 本人担当部分：「一人ひとりの「居場所」をどうつくるか」（pp.111-121）の部分を単著。 これまでの先行研究から居場所を「個人性－社会性」「主観性－客観性」の軸で捉えることが可能であることを示した。また，実証的研究の知見から「居場所がない」と感じる者に精神的な安定・安心を感じるような経験を提供すること，居場所感を毎日感じられる経験を積み重ねること，大人や仲間の支えにより成長・自立を図ることが重要であることを示唆した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 1. 奈良保育学院における領域「表現」の取り組みについて　―その独自性と学生の育ち―	共著	平成18年12月	奈良保育学院研究紀要第12号 pp. 11-25.	奈良保育学院では領域「表現」の取り組みの一環として，授業で“動きによる表現”を採用してきた。本研究では，第１著者による保育内容「表現」への取り組み始めから作品完成・舞台発表に至る過程及び過去20年間の作品を時系列に検討した結果，鑑賞者である子どもとの感動の共有をみいだし，学生間のコミュニケーションや他教科との連携等，保育者育成における教育的効果が示唆された。 共著者：増原喜代・岡村季光 （第１著者による作品の分析を担当）
2. 保育学生における“子どものためのオペレッタ”創作に関する一研究　―学生生活における適応感及び充実感の関係―	共著	平成18年12月	奈良保育学院研究紀要第12号 pp. 27-38.	学生が記述した２年間をふりかえるレポートから，オペレッタ創作過程における感覚，感情及び他者とのやりとりを示す表現を抽出した。さらに適応感及び充実感を数量的に測定し，学生のレポートとの関係を検討した。その結果，オペレッタ創作は学生生活の中で重要な位置づけと認識し，特にオペレッタ創作を重要視している者は他者との連帯感，学校に馴染んでいる，集団の中に溶け込んでいる等の居心地の良さを感じていた。 共著者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
3. 居場所（「安心できる人」）と情動知能が孤独感に及ぼす効果	共著	平成19年11月	奈良教育大学紀要第56巻１号 pp. 41-45.	本論文では『居場所』とは「自分が安心していられる場所」と定義づけ，『居場所』の一側面である「安心できる人」と情動知能が孤独感に与える影響を重回帰分析により検討した。その結果，情動知能が高い場合には『居場所』による孤独感の違いはないが，情動知能が低い場合には居場所による孤独感の違いが生じた。本研究から一律に『居場所』をもつことが重要なのではなく，個人の特性に応じた対応が必要であることが示唆された。 共著者：豊田弘司・大賀香織・岡村季光 （データの結果に基づく考察部分を担当）
4. 大学生における他者意識と情動知能の関係	共著	平成20年３月	奈良教育大学教育実践総合センター紀要第17号 pp. 29-34.	大学生における他者意識と情動知能における他者情動の認識と理解の関係を検討した。その結果，内的他者意識，空想的他者意識と関連があり，外的他者意識はほとんど関連性はなかった。また，他者意識と恋愛感情の関係を情動知能の水準ごとに検討した結果，女子において外的他者３つの他者意識がいずれも狂気的感情の関連性があり，空想的他者意識は情動知能の水準が低い者ほど狂気的感情及び熱愛的感情と関連のあることが示された。 共著者：豊田弘司・森田泰介・岡村季光・稲森涼子 （データの結果に基づく考察部分を担当）
5. 奈良保育学院における領域「表現」の取り組みについて　―表現作品発表会の教育的意義―	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 23-32.	奈良保育学院作品発表会当日，舞台上や会場で作品発表する学生と客席で鑑賞する保育園・幼稚園児をそれぞれビデオカメラで撮影し，作品の同じ場面におけるそれぞれの映像を比較することで，両者の反応を観察・検討した。その結果，学生の表現に子どもが動きを合わせるなど，同じ場と空間を共有し，表現されたものに共感している反応が顕著にみられた。 共著者：増原喜代・岡村季光・岩城正幸・谷本一榮 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 保育者養成における領域「表現」と人間関係づくりグループワークの関係	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 33-38.	身体表現作品創作と同時期に，カウンセリング・マインド育成の一環として，人間関係づくりの習得を目的としたコミュニケーションのグループワークを身体表現作品発表までに実施した。その結果，身体表現作品創作及び身体表現力とグループワークの理解度評価に正の相関がみられた。本研究は他教科目との有機的関連を検証した点において教育的意義のあるものと言えよう。 共著者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
7. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―発表の場で学生と鑑賞者は何を共有しているのか―	共著	平成20年12月	奈良保育学院研究紀要第13号 pp. 39-43.	本研究では学生と鑑賞する子どもの両側面から，舞台発表の場で両者が共通のイメージを想起しているか否かを検討した。具体的には学生による舞台発表の数日後，保育現場で発表会のことを子どもに想起させ，絵画を描かせた。その結果，学生側が想定していた身体表現が子ども側に印象づけられたことが明らかとなり，舞台発表の場において作品を媒介とした学生－子ども間の意識の共有が示唆された。 共著者：岡村季光・増原喜代・岩城正幸・谷本一榮・坂本　渉 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
8. 青年期における『居場所』の射程	単著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 29-38.	本論文では居場所における字義的定義から一般的に居場所がどう捉えられているのかを概観し，「居場所がない」という表現と関連が深いとされる不登校の問題を考察した。さらに居場所研究における実証的研究から，今後居場所を理解するための枠組みと可能性について展望した。具体的には近年注目されている「ひとりで過ごす居場所」や愛着（アタッチメント）との関連が考えられる。
9. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―鑑賞者の反応に関する検討―	共著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 7-14.	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を３か年度にわたり行った。その結果，1)おおよそ７割の学生が子どもの反応を見ていた，2)反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3)幼稚園・保育園児は素直な反応を出しているのに対し，中学生は自意識を感じ素直な反応が乏しいなど，年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，学生側は発達段階による反応の差異を受け入れていることが伺えた。 共著者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
10. 平成19年度熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待防止における意識に関する調査研究　―就労有無との関係―	共著	平成22年12月	奈良保育学院研究紀要第14号 pp. 15-22.	第１筆者が平成19年度に熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待に関する保護者の意識調査を実施。第２筆者が保護者の意識傾向について分析した。その結果，1)育児疲れ・孤独感・相談相手の有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。2)就労有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。上述の結果から，社会とのつながりが希薄になっている保護者へのサポートの必要性が示唆された。 共著者：谷口　卓・岡村季光 （データ分析を担当）
11. 中学校の職場体験が現在の進路決定に及ぼす影響　―保育学生と一般学生の比較から―	単著	平成24年12月	奈良保育学院研究紀要第15号 pp. 65-69.	中学校時のキャリア形成を探索的に研究するため，近年さかんに行われている中学校時における職場体験の有無・内容が現在の進路決定に及ぼした影響を保育を専攻する学生（保育学生）と他を専攻する学生（一般学生）で比較検討した。その結果，現在の専攻を考えた時期は一般学生より保育学生の方が早い傾向にあり，保育学生の方が一般学生と比して，現在考えている進路内容に中学校時の職場体験の影響があると自覚する者が多いことを見いだした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―学年間における相互評価に関する検討―	共著	平成24年12月	奈良保育学院研究紀要第15号 pp. 51-55.	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
13. 「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成26年９月	奈良学園大学研究紀要第１号 pp. 191-197.	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の安心感を高く評定するものは，ひとりで過ごすことに肯定的な捉え方をしていることが示唆され，ひとりで過ごす感情・評価との関係が明らかになった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
14. 保育学生におけるコラージュ作品の形式分析及び作品印象に関する基礎的研究	共著	平成26年12月	奈良保育学院研究紀要第16号 pp. 103-110.	本研究の目的は，コラージュ作品の表現特徴を多方面にわたり分析し，さらに作品印象に関してテキストマイニングを用いて定量的に検討することであった。保育専門学校に所属していた１回生367名を対象に検討した結果，先行研究とほぼ合致する結果が得られ，コラージュ療法における表現特徴が，心理臨床のアセスメントに有益な指標をもたらすであろうことが示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
15. コラージュ作品と性格特性の関係：表現特徴とエゴグラムパターンの検討	共著	平成27年３月	人間教育学研究第２号 pp. 157-162.	本研究の目的は，性格特性とコラージュ作品の関連を検討することであり，387名の専門学校生にエゴグラム（TEGII）及びコラージュ作品制作を実施した。その結果，エゴグラムパターンにより切片数，余白，作品の満足度に違いがみられることが明らかになった。すなわち，1)切片数が多い者は心的エネルギーが高い性格特徴である可能性が，2)余白が多い者は心的エネルギーが低く，依存的で気分・感情の不安定さを伴う性格特徴である可能性が，3)満足度が低い者は自己否定の構えを持っている可能性が，それぞれ示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（その他） 「学会抄録」 1 保育者養成における領域「表現」への取り組み　その(3)　―オペレッタ制作への意味づけと学生生活における適応感及び充実感の関係―	共著	平成17年９月	全国保育士養成協議会第44回研究大会研究発表論文集 pp. 154-155.	オペレッタ（身体表現作品）創作過程における感覚，感情及び他者とのやりとりを示す表現を抽出し，適応感及び充実感との関係を検討した。その結果，身体表現作品創作を重要視している者は他者との連帯感，学校に馴染んでいる，集団の中に溶け込んでいる等の居心地の良さを感じていた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
2 青年期後期の「安心できる人」における同性友人選択と学校適応感の関係	共著	平成18年３月	日本発達心理学会第17回大会発表論文集 p. 282.	「安心できる人」の多重選択で，特に現所属学校以前に出会った同性友人及び以降の同性友人の選択状況と学校適応感の関係を検討した。その結果，現所属学校以降の同性友人を選択した群の方がしなかった群より学校適応感が高かった。 共同発表者：岡村季光・豊田弘司 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
3 居場所（「安心できる人」）と情動知能が孤独感に及ぼす影響	共著	平成18年３月	日本発達心理学会第17回大会発表論文集 p. 283.	『居場所』の一側面である「安心できる人」と情動知能が孤独感に与える影響を検討した。その結果，情動知能が高い場合には『居場所』による孤独感の違いはないが，情動知能が低い場合には居場所による孤独感の違いが生じた。本研究から一律に『居場所』をもつことが重要なのではなく，個人の特性に応じた対応が必要であることが示唆された。 共同発表者：豊田弘司・岡村季光 （データの結果に基づく考察部分を担当）
4 居場所（「安心できる人」）と統制の位置が孤独感に及ぼす影響	共著	平成19年３月	日本発達心理学会第18回大会発表論文集 p. 552.	「安心できる人」と内的統制傾向が孤独感に与える影響を検討した。その結果，内的統制傾向の強い者は，例え安心できる人を“自分”と選択しても孤独感を強く感じる傾向は少ないことが明らかとなった。 共同発表者：豊田弘司・岡村季光 （データの結果に基づく考察部分を担当）
5 居場所（「安心できる人」）と随伴・非随伴経験との関係	共著	平成19年３月	日本発達心理学会第18回大会発表論文集 p. 675.	「安心できる人」の選択と随伴・非随伴経験量の違いを検討した。その結果，以下の点が明らかになった。すなわち，1)「安心できる人」の選択と内的統制の水準により随伴経験量が異なる。2)居場所と情動知能の水準により非随伴経験量が異なる。 共同発表者：岡村季光・豊田弘司 （データの結果に基づく考察部分を担当）
6 「居場所」（安心できる人）を規定する要因―内的作業モデルによる検討―	共著	平成19年９月	日本教育心理学会第49回総会発表論文集 p. 126.	対人関係の表象として挙げられる愛着理論の内的作業モデルに着目し，安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果，安心できる場面の想定として「自分１人でいる」「家族といる」「友人といる」いずれの場面も「回避」尺度が予測変数として有意であることが明らかとなった。 共同発表者：岡村季光・豊田弘司 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
7 人間関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響（１）－友人関係による検討－	共著	平成20年３月	日本発達心理学会第19回大会発表論文集 p. 358.	「自分ひとり」「家族といる」「友人といる」それぞれの場面において安心感を評定し，友人関係尺度との関連を検討した。その結果，「自分ひとり」の場面においては「ふれあい回避」低・「気遣い」低群の方が安心できる評定が高く，「友人といる」場面においては「ふれあい回避」低・「気遣い」高群の方が安心できる評定が高かった。 共同発表者：岡村季光・豊田弘司 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8 人間関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響（２）－家族関係による検討－	共著	平成20年３月	日本発達心理学会第19回大会発表論文集 p.359.	「自分ひとり」「家族といる」「友人といる」それぞれの場面において安心感を評定し，家族との親密性との関係を検討した。その結果，家族との親密性が強いほど，「家族といる」場面での評定が高かった。 共同発表者：豊田弘司・岡村季光 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
9 保育士養成校における作品発表とその鑑賞者との関わり	共著	平成20年５月	日本保育学会第61回大会発表論文集 p.371.	身体表現作品発表会当日，舞台上や会場で作品発表する「表現する学生」（表現者）と客席で「鑑賞する子ども」（鑑賞者）をそれぞれビデオカメラで撮影し，作品の同じ場面におけるそれぞれの映像を比較することで，両者の反応を観察・検討した。その結果，表現者と鑑賞者が，同じ場と空間を共有し，表現されたものに共感している反応が顕著にみられた。 共同発表者：増原喜代・岡村季光 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
10 保育者養成校における身体表現作品をめぐって―発表の場で学生と鑑賞者は何を共有しているのか―	共著	平成20年５月	日本保育学会第61回大会発表論文集 p.372.	学生と鑑賞者の両側面から，舞台発表の場で両者が共通のイメージを想起しているか否かを検討した。その結果，学生側が想定していた身体表現が鑑賞者側に印象づけられたことが明らかとなり，舞台発表の場において作品を媒介とした学生－鑑賞者間の意識の共有が示唆された。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
11 Classification of Ibasho “Person who eases your mind” in female undergraduates	単著	平成20年７月	Poster presented at XXIX International Congress of Psychology, Berlin	女子大学生らに「安心できる人」の多重選択を数量化３類により検討した結果，“自分ひとり”“家族”“友人・恋人”の３群に分類できることを見いだした。
12 「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成21年３月	日本発達心理学会第20回大会発表論文集 p.366.	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の場合の評定と「孤独・不安」尺度は中程度の負の相関であった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
13 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―鑑賞者の反応に関する検討―	単著	平成21年５月	日本保育学会第62回大会発表論文集 p.287.	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を行った。その結果，1)おおよそ７割の学生が子どもの反応を見ていた，2)反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3)年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，発達段階によりその差異を受け入れていることが伺えた。
14 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の選択　―家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性との関係から―	単著	平成22年３月	日本発達心理学会第21回大会発表論文集 p.348.	青年期女子における安心できる人の評定と家族・友人との親密性及び関係的自己の可変性の関係を検討した。その結果，自己の否定的変化意識と安心できる人の評定に関連がみられた。
15 「居場所」（安心できる人）の評定と対人態度の検討　―ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルとの関連から―	単著	平成24年３月	日本発達心理学会第23回大会発表論文集 p.655.	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果“自分ひとり”の評定と各尺度間に関連が見いだされた。
16 本学院における表現活動発表会への取り組み（２）－オペレッタ（身体表現作品創作）に注目して－	共著	平成24年９月	全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集 pp.494-495.	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17 青年期後期における危機的場面の対人志向 ―成人愛着スタイルとの関連―	単著	平成24年11月	日本教育心理学会第54回総会発表論文集 p. 610.	危機的場面における対人志向評定及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，危機的場面において男女とも“自分ひとり”の評定が低くなったことを見いだし，状況により「安心できる人」が変わる可能性が示唆された。また，“自分ひとり”の評定と「親密性の回避」は弱い正の相関，他者への対人志向評定と「親密性の回避」はいずれも弱い負の相関であった。
18 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定－抑うつに耐える力との関連－	単著	平成26年11月	日本教育心理学会第56回総会発表論文集 p. 486.	「居場所」（安心できる人）における危機的場面の安心できる程度の評定と抑うつに耐える力の関連を検討した。その結果，“自分ひとり”の評定を高くつけた者は“孤独に耐える力”が高く，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”の評定を高くつけた者は“不安に向き合う力”が高かった。ひとりの時間を志向しつつ，友人に安心感を持つことで自身の問題を直視し不安に向き合うことが示唆された。
19 中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の基礎的研究 ―ひとりで過ごす感情・評価の関係から―	単著	平成27年３月	日本発達心理学会第26回大会発表論文集 P5-045.	中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，平常時において“自分ひとり”，“子ども”，“孫”といる場面において評定を高くつけた者は，“孤独・不安”において，得点が高かった。また，危機的状況においては“自分ひとり”でいる場面で評定を高くつけた者のみ“孤独・不安”得点が高かった。特に中年期以降においては，“自分ひとり”のみならず，“子ども”“孫”の存在が「居場所」に影響を及ぼす可能性が示唆された。
「学会発表」				
1. 保育者養成における領域「表現」への取り組み　その(1)	共同	平成17年５月	日本保育学会第58回大会発表論文集 pp. 184-185.	第１共同発表者による保育内容「表現」への取り組み始めから作品完成・舞台発表に至る過程及び過去20年間の作品を時系列に検討した結果，鑑賞者である子どもとの感動の共有をみいだし，学生間のコミュニケーションや他教科との連携等，保育者育成における教育的効果が示唆された。 共同発表者：増原喜代・岡村季光 （第１共同発表者による作品の分析を担当）
2. 保育者養成における領域「表現」への取り組み　その(2)　―学生はオペレッタ制作をどのように意味づけているのか―	共同	平成17年５月	日本保育学会第58回大会発表論文集 pp. 186-187.	学生が記述した２年間をふりかえるレポートから，オペレッタ（身体表現作品）創作過程における感覚，感情及び他者とのやりとりを示す表現を抽出した。その結果，身体表現作品創作は学生生活の中で重要な位置づけと認識していることが明らかとなった。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
3. 保育者養成における領域「表現」への取り組み　その(4)	共同	平成18年５月	日本保育学会第59回大会発表論文集 pp. 408-409.	第１共同発表者が実践してきた領域「表現・身体表現」の教育的意義について考察した。具体的には作品創作は説明的な表現よりも身体表現を重視した方が豊かな感性と創造性が求められる点をみいだした。 共同発表者：増原喜代・岡村季光 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
4. 保育者養成における領域「表現」への取り組み　その(5)　－オペレッタ制作への意味づけと学生生活における適応感及び充実感の変化－	共同	平成18年５月	日本保育学会第59回大会発表論文集 pp. 410-411.	学生生活における適応感及び充実感をオペレッタ（身体表現作品）創作開始前後に測定し，学生生活をふりかえるレポートとの関係を検討した。その結果，以下の点が明らかになった。すなわち，1)レポートに舞台発表前に緊張した・苦労した等の記述がみられた者は，学生生活において居心地の良さが向上していた。2)身体表現作品創作への拒否感や後悔を示す記述がみられた者は，課題・目的の存在が希薄になっていった。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
5. 保育者養成校における授業「身体表現」と学生の学習プロセス―作品創作とその発表―	共同	平成19年５月	日本保育学会第60回大会発表論文集 pp. 618-619.	第１共同発表者が実践してきた領域「表現・身体表現」の教育的意義について考察した。具体的には創作作品を発表する場は学生に真に仕事を成し遂げる意味を理解する機会を与えている点を見いだした。 共同発表者：増原喜代・岡村季光 （第１共同発表者が実践した創作作品の考察部分を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6. 保育者養成における領域「表現」と人間関係づくりに関するグループワークの関係	共同	平成19年５月	日本保育学会第60回大会発表論文集 pp. 620-621.	身体表現作品創作と同時期に，カウンセリング・マインド育成の一環として，人間関係づくりの習得を目的としたコミュニケーションのグループワークを身体表現作品発表までに実施した。その結果，身体表現作品創作及び身体表現力とグループワークの理解度評価に正の相関がみられた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）
7. 居場所と適応に関する研究と教育への貢献：居場所と愛着の関係 （会員企画 ラウンドテーブルRT5-1　話題提供）	共同	平成24年３月	日本発達心理学会第23回大会発表論文集 p. 63.	本ラウンドテーブルでは，居場所の研究者が個々の課題を出し合い，定義や方法論について練り合うとともに，教育への貢献できる研究への方向性を探る意図で企画された。第３話題提供者は“安心できる人”の選択または評定と心理的距離及び成人アタッチメントスタイルとの関連に関する研究報告を行った。その後，居場所感の要因検討並びに居場所感を感じられる教育のあり方について討議が行われた。 企画：豊田弘司 話題提供者：豊田弘司・石本雄真・岡村季光・則定百合子
8. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定―ひとりで過ごす感情・評価及び関係的自己の可変性との関係から―	単著	平成25年11月	関西心理学会第125回大会発表論文集 p. 82.	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び関係的自己の可変性との関係を検討した。その結果，友人への安心感評定が低いと自己が変化することに対して怖い，嫌だ，うまくできないという思いがやや高まる傾向を見いだした。また，自分への安心感評定が高いと自己が変化することに必要性を感じる等，変化に対して肯定的に捉えていた。
9. 「自分ひとりの居場所」を志向する要因の検討―「安心できる人」の評定とひとりで過ごす感情・評価及び満たされない自己との関係から―	共著	平成26年11月	関西心理学会第126回大会発表論文集 p. 36.	「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって３群に分け，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び満たされない自己との関係を検討した。その結果，“自分ひとり”に安心できる評定を高くつけた者の中にも，他者への評定を比較的低くつけている者は対人関係に苦痛を感じ，対人交渉の逃避をしていることが示唆された。また，自分だけ，または一部の者のみに安心感の評定を高くつけた者は自他共に安心感の評定が高い者と比して日常生活においての目標に喪失感や停滞感を感じていた。 共同発表者：岡村季光・高木悠哉 （データ収集・分析・結果・考察部分を担当）

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　熊 田　岐 子

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
外国語教育、英米文学	英語教育、異文化理解、映画英語、 早期英語教育、児童文学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 「映画英語リスニング・システム」とシャドーイングをブレンドした授業	平成 20 年 4 月～ 平成 21 年 7 月	創価大学の非常勤講師として担当の「英語 B」（共通科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）、都留文科大学外国語教育センターの非常勤講師として担当の「英語 ListeningⅠ・Ⅱ」(2 年次配当、前後期半期、選択 2 単位)、環太平洋大学の講師として担当の「英語Ⅰ（基礎)」(教養科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位)にて実施した教育方法である。英語コミュニケーション力の素地となるリスニング力をアップさせるために個々の弱点を集中的に補強する e-learning システム「映画英語リスニング・システム」とシャドーイングを併用した授業を CALL 教室において行った。 （本授業の紹介を映画英語教育学会発行『映画英語教育研究』第 14 号に掲載。またその一年間の運用結果は、外国語教育メディア学会第 49 回全国大会において「シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習」として発表した。さらに、外国語教育メディア学会第 49 回全国大会で発表したものに加筆・修正をして、都留文科大学外国語教育研究センター発行『外国語教育研究』第 4 集（平成 22 年 3 月発行）に掲載。）
工学部 ESP(English for Specific Purposes)の英会話授業	平成 21 年 4 月～ 平成 21 年 7 月	創価大学の非常勤講師として担当の「English Communication for Engineering」（共通科目、1 年次配当、半期、必修 2 単位）で、工学部で必要な知識を英語で理解することを目指した工学部初年次生用英会話授業を行った。ペア・ワークやグループ討論を行い、英語コミュニケーション能力と共に、プレゼンテーション力を育成。本科目の定期試験として、グループ単位でパワーポイント等を用いた英語プレゼンテーションを課した。授業使用テキストは Garnet Education より発行されている『Starting Skills in English』。また工学部に適した内容の Reading 資料も使用。

幼稚園や小学校での英語指導を視野に入れた、他者を意識する英語コミュニケーション能力開発のための英会話授業	平成 22 年 4 月～平成 22 年 7 月	環太平洋大学の講師として担当の学部共通の教養科目「英会話」(教養科目、1 年次配当、前期、必修 2 単位)において実施（英語レベルの異なる 4 つのクラスを担当)。英語圏からやってきた留学生等を想定し、自己紹介からそれらの友人たちとの会話などの日常的な表現をテーマとして扱った。初級英会話に必要な文法・語彙等を使用しながら、表現したいことを伝える英会話力の育成を図った。対象学生が、幼稚園教諭や小学校教諭の教職課程に在籍する学生がほとんどであるため、将来に必要な能力であることを前提に指導。自分の意見を伝えるだけでなく、相手の文化的背景も学習することで、相手との意思疎通を図る英語コミュニケーション能力の開発を目指した授業となった。授業アンケート結果は 3.65/4.00 であった。
国際理解教育における異文化を身体的に理解する「異文化コミュニケーション論」の授業	平成 22 年 4 月～平成 25 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科で講師として担当する「異文化コミュニケーション論」（専門基礎科目、1 年次、前期、英語教諭免許必修 2 単位）で実施。異なる文化背景を持つ人々が、お互いを尊重するという異文化理解を英語指導者がどのように指導すべきかをテーマとした授業である。非言語的な要素を身体的に理解し、相手がどのような気持ちになるのかを学習する形態である。それにより、言語と非言語を組み合わせる方法を考察。受講生は、中高英語教諭免許志望者に加えて、小学校教諭免許取得希望者・幼稚園教諭免許取得希望者である。
映画シャドーイングを活用したリメディアル英語授業	平成 22 年 9 月～平成 23 年 2 月	環太平洋大学の講師として担当の学部共通の教養科目「英語Ⅰ（基礎)」(教養科目、1 年次配当、後期、必修 2 単位)において、実施した。リスニング力、リーディング力、語彙力の強化を目的とした、映画と音読を活用する英語授業を行った。学生の英語に対する興味・関心・意欲を養いながら、英語教育学のインプット仮説・アウトプット仮説の理論を用い、英語が特に苦手な学生対象のリメディアル授業を展開した。その結果、英語に自信がついたとの声が多く寄せられている。英語初級者学生が集まるクラスにおける授業アンケート結果は 3.82/4.00 となっている。
「小学校外国語活動の指導法」の授業	平成 22 年 9 月～平成 25 年 2 月	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科で講師として担当する「小学校外国語活動の指導法」（専門基礎科目、3 年次、後期、選択 2 単位）において実施。外国語活動が全国の小学校で一斉導入されることを受けて開設された科目。第二言語習得論などの理論から模擬授業までの実践を扱っている。本授業の特色としては、小学校の現状を踏まえて、学級担任の主導を目指しながら行う英語指導補助教員とのティームティーチング形態の模擬授業を実施。また、幼稚園でも、英語を集中的に学習する形態が見られることから、幼稚園・小学校・中学校・高等学校での連携から外国語活動の役割について指導している。このような教員間の連携を重視しつつ、児童が英語を好きになる授業案作成を促している。

映画比較に基づいた「英米文学」の授業	平成 23 年 4 月～平成 25 年 7 月	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科で講師として担当している「英米文学」（専門基礎科目、1 年次、前期、中・高英語免許必修 2 単位）において実施。原典のみを利用する授業では英文が理解できず、学生のレベルからあまりにもかけ離れてしまった場合には、「文学は嫌い」ひいては「英語も嫌い」と考える学生を生み出してしまう可能性さえある。そこで筆者は一年次教職課程科目「英米文学」を担当するにあたり、「原典と映画」、「映画と映画」を比較し、英語力をつけながら文学を味わうことを目的とした授業を行うことにした。さらに、英語教員希望者用授業であるため、その工夫についても言及している。（本授業の紹介を映画英語教育学会第 17 回全国研究大会で口頭発表済み）
2　作成した教科書、教材 『ダイ・ハード 4.0　スクリーンプレイシリーズ』（共著） フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 20 年 9 月 17 日	映画『ダイ・シリーズ』の最新作。ニューヨーク市警のマクレーン警部補は、ハッカーを FBI に連行するよう命じられ、サイバー・テロに巻き込まれていく。 本人担当部分：全 176 ページ中 18－175 ページの語句解説、62-85 ページの翻訳、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。コラムでは、登場人物たちが発する彼ら特有の短い言葉にも多くの意味が含まれていること、また、アメリカ以外の人間が使う World Englishes としての様々な英語表現にも触れたことで異文化コミュニケーションスタイルを観察するのに適した英語学習教材となった。 （平成 21 年 1 月創価大学「英語Ａ」、平成 23、24 年環太平洋大学「映画とテレビの英語」、「異文化コミュニケーション論」において異文化理解教材として紹介。また、「教育実習事前・事後指導」において異文化理解教材として発展する方法を指導。）
『リトル・ミス・サンシャイン　スクリーンプレイシリーズ』（共著） フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 21 年 6 月 24 日	コンテストに出場するために、カリフォルニアに向け、個性豊かな一家全員でミニバスに乗り込む。容貌に悩む少女の成長を描き、家族の絆を問いかける作品である。 本人担当部分：全 184 ページ中、pp.104-137 の翻訳・解説、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 語句・文法事項の解説部は、中学生以上の英語学習者が文法事項や文化背景を理解できるように配慮して作成し、コラムは異文化理解を念頭において作成。アメリカの日常英会話が楽しめ、さらに登場人物の言葉の選び方（オフィシャルな場所における丁寧な英語とプライベートで使う俗語など）から、言葉によって、アメリカ人の本音と建前が垣間見られる映画であることを述べた。 （平成 23 年環太平洋大学「映画とテレビの英語」、「異文化コミュニケーション論」において異文化理解教材として紹介。また、「教育実習事前・事後指導」において異文化理解教材として発展する方法を指導。）

『ダークナイト　スクリーンプレイシリーズ』（共著） フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 22 年 7 月 14 日	映画『バットマン』シリーズの人気作。ゴッサムシティにジョーカーが現れて、人々を恐怖に陥れていく。 本人担当部分：全 252 ページ中、pp.61-151 の翻訳・解説。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。アメリカが作り出したヒーローの姿を知ることから、学習者がアメリカ文化を学べる内容となった。 （平成 22 年、23 年、24 年度環太平洋大学「映画とテレビの英語」において紹介。英語の文化圏の人々が小さなころに読んだコミックにおいて表現されている善悪に関する価値観などに触れた。）
文部科学省検定済み教科書　高等学校外国語科用（共同） 『Screenplay English Expression Ⅰ』 フォーイン　スクリーンプレイ事業部 （再掲）	平成 24 年 3 月 1 日　文部科学省検定済み	学習指導要領の移行に伴って発行される平成 25 年度以降の高等学校外国語科用教科書。映画を使用して、異文化理解と英語表現習得を目的とした教科書であり、学習の動機付けになる多面的な教科書に仕上がっている。本教科書の「著作関係者」として奥付に記載。
４ 『例文で自然に身につく！頻出準英単語 2000+ web アプリ付』（共著） 国際語学社 （再掲）	平成 26 年 10 月 25 日	例文で自然から自然に身につくように作られた Web アプリ付き英語学習書。」 本人担当部分：英語コーパスを利用して、英検 2 級を目安に頻出単語 2000 語を選出。本書に登場する他の単語を利用しながら例文 300 程度を作成。（岡崎弘信編著者、執筆者岡崎弘信、武田亜希子、福田衣里、川端泰湖、熊田岐子、他 2 名）
３　教育上の能力に関する大学等の評価 創価大学「英語Ａ」授業アンケート結果	平成 21 年 3 月	創価大学において授業アンケート結果が公開されているが、学生の満足度は平成 20 年度後期 4. 35/5.00 であった。
都留文科大学「英語 Listening Ⅰ」授業アンケート結果	平成 21 年 9 月	シャドーイング教材と映画 e-learning を併用した授業の平成 21 年度前期授業アンケートの最終項目「総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったか」は 4.88/5.00 であった。
環太平洋大学における 2010 年度前期担当科目の授業アンケート結果	平成 22 年 9 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 1 年次必修科目「英会話」3.65/4.00 2 年次必修科目「英語Ⅱ」3.48/4.00 1 年次「異文化コミュニケーション論」3.56/4.00
環太平洋大学における 2010 年度後期担当科目の授業アンケート結果	平成 23 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英語Ⅰ」3.82/4.00 「映画とテレビの英語」3.75/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.50/4.00 「国際交流実習Ⅰ（基礎）」3.40/4.00
環太平洋大学における 2011 年度担当科目の授業アンケート結果	平成 23 年 7 月 平成 24 年 2 月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」3.47/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.57/4.00 「英米文学史」3.75/4.00

環太平洋大学における2012年度担当科目の授業アンケート結果	平成24年7月 平成25年2月	授業アンケート最終項目「後輩にこの授業を勧めたいと思うか」の結果は以下の通りである。 「英米文学」2.86/4.00 「異文化コミュニケーション論」3.24/4.00 「英米文学史」3.50/4.00 「小学校外国語活動の指導法」3.33/4.00 「映画とテレビの英語」3.90/4.00
環太平洋大学における2013年度担当科目の授業アンケート結果		
奈良学園大学における2014年度担当科目の授業アンケート結果	平成26年8月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ＩＡ」3.35/4.00 「英会話ＩＢ」3.32/4.00
奈良学園大学における2014年度担当科目の授業アンケート結果	平成27年2月	授業アンケート最終項目満足度の結果は以下の通りである。 「英会話ⅡA」3.34/4.00 「英会話ⅡB」3.15/4.00 「英会話ⅡC」3.28/4.00
４　実務の経験を有する者についての特記事項 教育講演会講師　「映画やテレビを活用した英語学習法」	平成23年10月27日	吉備中央町立吉川小学校において行われたおかやま教育週間の取り組みとしての教育講演会に講師として招待された。対象は、地域の中学生、保護者、地域住民、小・中学校の教員。映画やテレビを利用して、ある場面を異文化理解教材とし、英語学習教材とする方法を紹介。
小学校職員研修会講師「外国語活動の指導法」	平成23年10月28日	岡山市立操明小学校における職員研修に講師として依頼された。外国語活動の指導法に関しての職員研修講師を行ったﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを取り入れつつ、目的のある授業づくりをする方法を紹介した。
５　その他 特になし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 修士（英文学）	平成15年3月19日	創価大学　修第24号 論文題目「*The Scarlet Letter*：The Pursuit of “Some Sweet Moral Blossom”」
中学校教諭専修免許状　外国語（英語） （平15中専第10306号）	平成15年3月31日	東京都教育委員
高等学校教諭専修免許状　外国語（英語） （平15高専第10337号）	平成15年3月31日	東京都教育委員会

J-SHINE 小学校英語準認定指導者資格	平成 22 年 6 月	NPO 法人 J-SHINE において認定される小学校英語指導者資格。平成 22 年 6 月に指導者資格を取得。本資格は、外国語活動の一斉導入に備えて作られたものあり、地域人材の育成・確保を目的としている。現在、文部科学省認定の英語指導者資格がなく、本資格に類似した資格はない。
２　特許等 国内特許取得 特許権者	平成 25 年 9 月	「多読・速読学習システム、多読・速読学習装置、多読・速読学習プログラム」、特願 2008-074778、特許公開 2009-229780、特許第 5369463 号（新田晴彦・木戸和彦・熊田岐子、他 2 名）
３　実務の経験を有する者について特記事項 特になし		
４　その他 環太平洋大学の姉妹校、ニュージーランドにある「International Pacific College」への短期研修の引率	平成 22 年 2 月 14 日から 3 週間帯同	International Pacific College への留学関係とその準備授業「国際交流実習Ｉ」を担当。さらに短期留学する学生を３週間 IPC へ引率・帯同した。ニュージーランドでは、学生の授業参観やアクティビティの参加、また環太平洋大学との連携についての打ち合わせを現地で行った。
外国語（英語）活動に係るフィールドワーク 岡山市立江西小学校	平成 22 年 9 月 14 日～12 月	フィールドワークとして、5,6 年生の授業研究、および担任とのティームティーチングで 3 年生の英語活動の支援を行った。また、ゼミ生を引率したり、「小学校外国語活動の指導論」のための資料作りを行った。実状として、就学前から英語を習っている児童もおり、その中で外国語活動で英語に初めて触れた児童への指導法が、今後の検討事項として挙げられる。
文部科学省認定 平成 24 年度教員免許更新講習の授業担当	平成 24 年 8 月 22 日	環太平洋大学における教員免許更新講習（中高英語教諭対象）において、「今、求められる英語教育（２）　オーセンティックな素材の活用法」を 2 コマ担当。中学・高等学校の教科書で基本的な英語知識を習得しながら、使える英語へとつないでいく方法として、オーセンティックな素材を用いた授業づくりの提案と指導のポイントについて紹介。
文部科学省認定 平成 25 年度教員免許更新講習の授業担当	平成 25 年 8 月 21 日	環太平洋大学における教員免許更新講習（中高英語教諭対象）において、「今、求められる英語教育（２）　認知言語学による文法のイメージ形成指導」を 2 コマ担当。中学・高等学校の教科書で認知言語学における前置詞イメージや文法イメージを利用しながら、使える英語へとつないでいく授業づくりの提案と指導のポイントについて紹介。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 『ダイ・ハード 4.0 スクリーンプレイシリーズ』	共著	平成 20 年 9 月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題：Die Hard 4.0 監督：Len Wiseman 判型・総頁数：A5 版、176 ページ 　映画『ダイ・シリーズ』の最新作。ニューヨーク市警のマクレーン警部補は、ハッカーを FBI に連行するよう命じられ、サイバー・テロに巻き込まれていく。 本人担当部分：全 176 ページ中 18－175 ページの語句解説、62-85 ページの翻訳、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 　中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。コラムでは、登場人物たちが発する彼ら特有の短い言葉にも多くの意味が含まれていること、また、アメリカ以外の人間が使う World Englishes としての様々な英語表現にも触れたことで異文化コミュニケーションスタイルを観察するのに適した英語学習教材となった。 （岡崎弘信監修、橋本信一、馬場亜希江、熊田岐子）
2 『リトル・ミス・サンシャイン　スクリーンプレイシリーズ』	共著	平成 21 年 6 月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題：Little Miss Sunshine 監督：Jonathan Dayton 　　Valerie Faris 判型・総頁数： A5 版、184 ページ 　コンテストに出場するために、カリフォルニアに向け、個性豊かな一家全員でミニバスに乗り込む。容貌に悩む少女の成長を描き、家族の絆を問いかける作品である。 本人担当部分:全184ページ中、pp.104-137の翻訳・解説、コラム「この映画の英語について（共著）」を担当。 　語句・文法事項の解説部は、中学生以上の英語学習者が文法事項や文化背景を理解できるように配慮して作成し、コラムは異文化理解を念頭において作成。アメリカの日常英会話が楽しめ、さらに登場人物の言葉の選び方（オフィシャルな場所における丁寧な英語とプライベートで使う俗語など）から、言葉によって、アメリカ人の本音と建前が垣間見られる映画であることを述べた。 （岡崎弘信監訳、熊田岐子、橋本信一、大月敦子、長島敏子、川端泰湖）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 『ダークナイト　スクリーンプレイシリーズ』	共著	平成22年7月	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	原題： THE DARK KNIGHT 監督： Christopher Nolan 判型・総頁数：四六変形、 252 ページ 映画『バットマン』シリーズの人気作。ゴッサムシティにジョーカーが現れて、人々を恐怖に陥れていく。 本人担当部分：全252ページ中、pp.61-151の翻訳・解説。 中学生以上の英語学習者用であることを踏まえて、意訳ではなく、直訳に近づくように工夫。アメリカが作り出したヒーローの姿を知ることから、学習者がアメリカ文化を学べる内容となった。 （角山照彦監修、角山照彦、藤本幸伸、熊田岐子）
4 『例文で自然に身につく！頻出準英単語2000+　webアプリ付』	共著	平成26年10月	国際語学社	例文で自然から自然に身につくように作られたWebアプリ付き英語学習書。」 本人担当部分：英語コーパスを利用して、英検2級を目安に頻出単語2000語を選出。本書に登場する他の単語を利用しながら例文 300 程度を作成。(岡崎弘信編著者、執筆者岡崎弘信、武田亜希子、福田衣里、川端泰湖、熊田岐子、他2名)
（学術論文） 1 “ The Minister's Black Veil”―人間の「宿命」をめぐって―	単著	平成18年3月	『ふぉーちゅん』第17号　欧米言語文化学会，pp.57-64	平成17年10月日本ナサニエル・ホーソーン協会東京支部研究会での口頭発表「“The Minister's Black Veil” についての一考察」に加筆・修正を加えたもの。19世紀アメリカ文学史上、イギリスの影響を受けつつも、アメリカ独自の文学を確立したとして重要な役割を果たしているナサニエル・ホーソーンの短編について論じている。フーパー牧師の黒いヴェールの意味を、肉体と精神という宗教的観点から論じた。
2 初年次教育で英米文学を読むための工夫	単著	平成21年3月	『外国語教育研究』第 3 集都留文科大学外国語教育センター，pp.21-31	英米文学を大学の初年次生の授業で扱うのは困難である。しかし教養から考えると文学を読んでほしいというのが教員側の願いであろう。そこで内容検討に加えて英文レベル（語彙レベルとリーダビリティ）を測定することにより、例として初年次生でも読める英米文学を探せることを具体的方法と作品を提示しつつ述べた

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 ホーソーン児童向け作品『ワンダー・ブック』の対象年齢―「黄金に変える手」を中心に―	単著	平成21年3月	『英語英文学研究』第64集創価大学英文学会，pp.97-109	作品の序文で「子どもの理解を得るために、調子を下げなければならないと常に考えているわけではなかった」と述べながら、ホーソーンは一般読者向けよりも簡易な文章を用いたことを英文レベルの検証から論じた。同時に小さな子どもには少々難しい文体であることもわかってきている。枠物語で聴き手とされる子どもたちには就学前と見受けられる子どもおり、小学校への準備も設定に含めて、物語の聴き手である子どもたちの描写と会話を分析した。本稿では、小さな子どもでも想像力を発揮し、物語を楽しんでくれるというホーソーンの期待が感じられると結んだ。
4 『ワンダー・ブック』において子どもの年齢が設定された物語―年少向け「不思議な水差し」と年長向け「キマイラ」―	単著	平成21年9月	『英語英文学研究』第65集創価大学英文学会,pp.175-187	ホーソーン児童向け作品『ワンダー・ブック』の年少の子どもたちに語られた「不思議な水差し」（“The Miraculous Pitcher”）と年長の子どもたちに語られた「キマイラ」（“The Chimæra”）を比較し、その子どもの年齢に従って、物語の内容と英文レベルに差があるのかを分析した。本稿で扱った年少の子どもたちには、会話や描写から就学前児童も含まれると言える。彼らの好奇心と無邪気さは、物語理解を助けている。対して、年長の子どもたちは、大人びており、これから女性としてどのような物語を繰り広げるのか期待させる面がある。今回検証した子どもの発達段階と実態に加えて、19世紀当時の子どもが受けた教育（幼稚園と小学校を対象）についても検討が必要である。
5 シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習	単著	平成22年3月	『外国語教育研究』第4集都留文科大学外国語教育研究センター，pp.13-21	平成21年8月外国語教育メディア学会全国大会での Poster Presentation に加筆・修正を施した論文。昨今の教育界では、日本人学習者の英語コミュニケーション力の向上が大きな課題となっているが、コミュニケーションをとるためには相手の言葉を理解しなくてはいけない。そこで平成20年度にシャドーイング・マネージャーが付属された『スクリーンプレイで学ぶ映画英語シャドーイング』を使用した音読練習、および e-learning「映画英語リスニング・システム」を使用する授業を行い、かなりの成果をあげることに成功した。本稿ではこの英語授業の手順と一年間の運用結果、その改善点を考察している。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 英米文学作品を大学の英語授業に取り入れるために	単著	平成22年3月	『英語英文学研究』第66集 創価大学英文学会，pp.97-106	平成21年5月第一回北東アジア言語教育学会で行ったPoster Presentationを発展させた論文。内容や英文に対する感覚だけで教材を選択するのではなく、英文レベルを実際に測定し、その数値から昨今の大学生のレベルに合ったものを選んでいく方法を提案した（英文レベルはリーダビリティ面、およびv8anを利用した語彙面から計測）。一般読者向け作品から児童文学作品まで英文レベルを測定し、難解な英文を書くと言われている作家の作品でも、現在の大学生や初級英語学習者の英語力に見合ったものを英語教育現場に導入できる可能性を示唆。また、よく知られている児童文学の英文レベルと内容分析から、幼児や児童が受けてきた教育が表面化したと言える。
7 ホーソーンの児童文学に見る理想的なコミュニティ	単著	平成23年9月	『英語英文学研究』第69集 創価大学英文学会，pp.67-77	『少年少女のためのワンダー・ブック』は、古典神話に基づいたゴシック的な要素を含む児童文学であり、現在も児童文学研究者が彼の作品に注目し続けている。また、作品の発行部数からも、19世紀後半におけるボストン教育委員会からの推薦教科書リストに名を連ねているところからしても、この作品を再考する意味はあると考えられる。児童文学として注目され続けているこの作品を、本稿では、第一に作品の歴史的背景、第二に共同体形成という社会的観点から大人にとっての『ワンダー・ブック』の意義を考究した。
8 大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要第5号，pp.69-77	近年大学生の学術能力が低下していることは大きな問題となっている。特にリテラシーは学術能力の基礎であるため、その低下が懸念されている。そこで、大学教育において、試験的に「協働型読書プログラム」を作成し、2年次の大学生対象に実施した。結果として、読書量に関しては効果があった。したがって、初年次教育において、本プログラムを運用することはさらに効果的であると予測できるのである。 調査の実施、データの提供、英語での要約作成を担当。 （高木悠哉、松岡律、熊田岐子、住本克彦、筒井愛知）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９ 外国語活動における「異文化間コミュニケーション能力」の養成 ―童話を教材として―	単著	平成 24 年 12 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号，pp.99-106	国際理解教育の流れに応じて、幼稚園や小学校で異文化交流などが行われるようになった。現在では、外国語活動も教育課程の取り組みの一つとして周知されたと言える。国際理解教育の中心である異文化理解は、第二言語習得におけるコミュニケーション能力の伸長に必要な資質として、もしくは異文化理解分野の基礎理論として議論されてきた。本稿では Byram (1997) の「異文化間コミュニケーション能力（ICC)」を中心に据え、 異文化を理解する「能力」とは何なのか、 小学校の教育課程においてどのように育成できるのかを日本の国際理解教育の視点から再考。本稿では、教材として童話の使用を挙げているが、幼稚園において英語絵本の使用などが見られることからも、英語教育の連携において適した提案だと考える。
１０ 文学の描写を明示・暗示する映画の教育的応用（査読あり）	単著	平成 26 年 3 月	映画英語教育研究第 19 号，pp.137-152	映画は異文化理解教材でもあるが、文学を題材とした映画は、指導法によっては読解指導を効果的にするものである。本稿では、テキストを前置詞・副詞という空間表現に着眼して児童文学を読み進め，劇活動を行った後，文学の描写を明示し，暗示しさえする映画の特徴を生かした読解指導の効果を計測した。授業毎時に提出されたポートフォリオには，文学的な読みが深まっていく一方で，映画に関する記述が減少していく様子が現れていた。これは，文学と映画の違いや，映画を通じて文学への振りかえりを行っているためであることがグラウンディッドセオリーを行った結果として示された。本稿は，児童文学と映画を結びつけ，認知言語学を仲介として，文学を教育へ取り入れる提案と実証の一歩になったと考えている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） ［学会発表等］ 1 “The Minister's Black Veil” についての一考察	単独	平成 17 年 10 月	日本ナサニエル・ホーソーン協会　東京支部研究会(日本大学) (発表実績 NHSJ Newsletter24 号, p.11)	「“The Minister's Black Veil” についての一考察」に加筆・修正を加えたもの。19 世紀アメリカ文学史上、イギリスの影響を受けつつも、アメリカ独自の文学を確立したとして重要な役割を果たしているナサニエル・ホーソーンの短編について論じている。フーパー牧師の黒いヴェールの意味を、肉体と精神という宗教的観点から論じた。
2 初年次教育で英米文学を読むための工夫	単独	平成 21 年 2 月	都留文科大学外国語教育研究センター合同研修会 (都留文科大学)	平成 21 年 3 月『都留文科大学外国語教育研究』に掲載した同タイトルの論文内容を報告。英米文学を大学の初年次生の授業で扱うのは困難である。しかし教養から考えると文学を読んでほしいというのが教員側の願いであろう。そこで内容検討に加えて英文レベルを測定することにより、初年次生でも読める英米文学も探せることを述べた。
3 「映画英語リスニング・システム」と映画シャドーイングをブレンドした授業	共同	平成 20 年 6 月	映画英語教育学会　第 14 回全国研究大会（創価大学） （発表要旨：『映画英語教育研究』第 14 号　映画英語教育学会, pp.79-80, 平成 21 年 3 月）	英語の授業をしていると、英語文法は理解できていて英文を読むことはできるのに、「英語を思うように聞き取れない」という学生たちの声をよく耳にする。この問題を解決していくために開発された「映画英語リスニング・システム」を授業に取り入れた。さらにシャドーイングを併用することによって、学習効果をあげるという内容の授業を紹介。発表内容、発表、本発表要旨の主担当である。(熊田岐子・岡崎弘信)
4 英米文学作品を大学の英語授業に取り入れるために	単独	平成 21 年 5 月	第一回北東アジア言語教育学会（新潟県立大学） （発表要旨：Poster Session p.5　Web 公開 (http://www.iuj.ac.jp/language/conference/near/Documents/Poster%20Sessions.pdf#search)	ポスターセッション枠で発表。内容や英文に対する感覚だけで教材を選択するのではなく、英文レベルを実際に測定し、その数値から学習者のレベルに合ったものを選んでいく方法を提案した。一般読者向け作品から児童文学作品まで英文レベルを測定し、難解な英文を書くと言われている作家の作品でも、現在の大学生の英語力に見合ったものを英語教育現場に授業教材として選べる可能性があることを述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５ シャドーイング・マネージャーを利用した効果的な音読練習	単独	平成 21 年 8 月	外国語教育メディア学会第 49 回全国研究大会発表（流通科学大学） （発表要旨：『外国語教育メディア学会　第 49 回全国研究大会発表要項集』，pp. 306-307、平成 21 年 8 月）	外国語教育メディア学会第 49 回全国研究大会発表（流通科学大学）において単独で行ったポスター発表である。昨今の教育界では、日本人学習者の英語コミュニケーション力の向上が大きな課題となっているが、コミュニケーションをとるためには相手の言葉を理解しなくてはいけない。そこでシャドーイング・マネージャーが付属された『スクリーンプレイで学ぶ映画英語シャドーイング』を使用した音読練習、および e-learning「映画英語リスニング・システム」を使用する授業を行い、かなりの成果をあげることに成功した。本発表ではこの英語授業の手順と一年間の運用結果を報告。
６ 映画比較に基づいた「英米文学」の授業	単独	平成 23 年 8 月	映画英語教育学会第 17 回全国研究大会（名古屋学院大学） （発表要旨：『映画英語教育学会 2011 年第 17 回大会要項』，p. 20）	原典のみを利用する授業では英文が理解できず、学生のレベルからあまりにもかけ離れてしまった場合には、「文学は嫌い」ひいては「英語も嫌い」と考える学生を生み出してしまう可能性さえある。そこで筆者は一年次教職課程の必修科目「英米文学」を担当するにあたり、「原典と映画」、「映画と映画」を比較し、英語力をつけながら文学を味わうことを目的とした授業の実践報告と成果報告。さらに、英語教員希望者用授業であるため、その工夫についても言及している。
７ 文学テクストのイメージ形成を目的とした映画の活用	単独	平成 25 年 8 月	映画英語教育学会第 19 回全国研究大会（相模女子大学） （発表要旨：『映画英語教育学会 2014 年第 19 回大会要項』，p. 25）	本発表では、文学テクストを原作とした映画を活用する指導を提示する。文学テクストは、読者が文章のみでイメージできるよう、繊細な言語表現に溢れており、英語授業で扱うべき要素を多分に含んでいる。しかし、英語学習者が文学テクストを読む際に、どのような舞台が背景として描かれ、登場人物は何を見て、どのように動くのかという登場人物の物理的空間認知や身体動作を具体的にイメージするのは決して容易ではない。一方、映画は、文学テクストのすべての場面ではないにしろ、描写を明示することに長けており、物理的空間や登場人物の身体動作の具現化が得意である。また、映画は、登場人物の心情を非言語的な要素（表情やジェスチャー、距離など）によって伝えようと工夫されており、この点も活用すれば、映画の長所を生かした指導となる。この指導を３カ月（週１度）続け、英語学習者（大学生）が得た気づきの変容から、映画がもたらす効果を検証する。この結果から、文学テクストを教材とする英語授業において、映画をどのように活用できるかを考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８ 空間表現の身体的理解による英語文学読解指導	単独	平成 25 年 8 月	第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会(北星学園大学) （発表要旨：『第 39 回全国英語教育学会北海道研究大会発表予稿集』，全国英語教育学会，pp. 468-469.）	文学は、言語的・内容的特徴から、英語授業で用いる価値があるものの、実際に使用するには難しい。しかし、前置詞・副詞という空間表現（at, on など）に着目すれば、文学のイメージを獲得する読解指導となる。文学の談話空間は、現実世界と同様に立体的であり、談話が入る「容器（container)」のようなものである。そのため、文学では、物語舞台や登場人物の身体動作などの描写に必要な空間表現が、文学ならではの言語表現で包まれている。本発表では、音読しながら、空間表現に着目して登場人物の身体動作を演じることにより、文学を体感する読解指導を提示する。本指導を英語学習者（大学生）に実施した結果、空間表現を通して、文学がよく読めるようになったという成果が得られている。また、文学を通して、空間表現の背景にある日常言語の概念体系を身体的に理解できる。本発表では、本指導の効果を検証した。
９ 空間表現の身体化による文学的な読みの深まり	単独	平成 25 年 11 月	日本教科教育学会第 39 回全国大会（岡山大学） （発表要旨：『日本教科教育学会全国大会論文集』，pp. 130-131）	本研究の目的は、空間表現に備わる身体性に着目し、文学教材を使って英語学習者が空間表現を知識だけでなく、身体を動かして習熟する読解指導の効果を検証することである。特に、読解指導の効果として、登場人物の心理や社会的関係という文学的な読みの気づきの伸びを調査する。調査協力者 44 名（大学生）に対して、空間表現の身体化による読解指導を約３カ月間に渡って実施した。空間表現の身体化のために、読解指導には、登場人物の動作などを身体を動かして演じ、文学を音読する劇活動を取り入れた。読解指導の結果、調査協力者の文学的な読みが深まっていく様子が示された。
１０ 英語文学劇活動における協同学習の効果 An Effect of Cooperative Learning in Drama Activity of English Literature	単独	平成 27 年 3 月	日本教師学学会第 16 回大会（日本女子大学）	英語文学は，英語授業では取り扱いにくいという認識が一般的である。しかし，指導法さえ工夫すれば英語文学の特徴を生かして，英語授業に取り入れることができる。本発表では，英語文学読解指導に含んだ劇活動がどのような効果をもたらしたのかを協同学習の観点から検討する。結果として，協同学習が学習ループをもたらし，クラス全体がまた一つの協同学習グループとなったことにより，読解指導効果が強められた点を報告した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
［教科書］ １ 文部科学省検定済み教科書　高等学校外国語科用『Screenplay English Expression Ⅰ』	共同	平成 24 年 3 月 1 日文部科学省検定済み	フォーイン　スクリーンプレイ事業部	学習指導要領の移行に伴って発行される平成 25 年度以降の高等学校外国語科用教科書。映画を使用して、異文化理解と英語表現習得を目的とした教科書であり、学習の動機付けになる多面的な教科書に仕上がっている。本教科書の「著作関係者」として奥付に記載。
［講演等］ １ 教育講演会講師　「映画やテレビを活用した英語学習法」	単独	平成 23 年 10 月	岡山県吉備中央町立吉川小学校	吉備中央町立吉川小学校において行われたおかやま教育週間の取り組みとしての教育講演会に講師として招待された。対象は、地域の中学生、保護者、地域住民、小・中学校の教員。映画やテレビを利用して、ある場面を異文化理解教材とし、英語学習教材とする方法を紹介。
２ 小学校職員研修会講師「外国語活動の指導法」	単独	平成 23 年 10 月	岡山県岡山市立操明小学校	岡山市立操明小学校における職員研修に講師として依頼された。外国語活動の指導法に関しての職員研修講師を行った。ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを取り入れつつ、目的のある授業づくりをする方法を紹介した。
３ 日本教科教育学会第 39 回全国大会第３２分科会座長	単独	平成 25 年 11 月	日本教科教育学会第 39 回全国大会（岡山大学）	第３２分科会その他の部門において，座長を務めた。分科会の口頭発表は，「理科授業研究の実態に関する考察（１）」，「高校生の英文和訳プロセスに関する事例研究」，「小学校国語科教員養成に関するコア・カリキュラムの開発研究」，「積雪寒冷地域における体力向上を目的とした授業プログラムの有効性の検討」であった。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　高 木　悠 哉

研究分野	研究内容のキーワード
実験心理学	摂食行動，消費者行動，発達，社会的勢力，住居音環境

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）学生の意見を速やかに反映した講義改善	平成23年～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科の科目「心理学」「発達心理学（初等）」「コミュニケーションの心理学」において，学生が主体的に授業に取り組めるよう，授業アンケートを毎週実施している。毎回の講義で改善した方が良い点などを自由に記述させ，そのすべての意見を毎週授業前にパワーポイントで紹介している。取り入れるべき意見，取り入れるべきでない意見について，講義者がその理由を述べることで，学生の意見を毎回の講義に組み込むことができ，学生が納得の上でスムーズな講義の進行が可能となる。また，同時に講義者自身も学生に分かりやすい講義の方式を学習することが可能となる。
2）講義に対する質問，疑問へのフィードバック	平成23年～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科の科目「心理学」「発達心理学（初等）」「コミュニケーションの心理学」において，講義中に適宜，質問や疑問などを書き留めさせ，次回の講義の最初にそれらへの回答を順次発表している。これにより，各学生の講義の理解を促進させるとともに，前回の授業の復習を促すことにつながると感じている。また，学生自身も，疑問点を残さず講義に臨める，といった満足感を得られる，という感想を持っている。
3）実習方式による最新の知見の取り入れ	平成23年～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科の科目「心理学」「発達心理学（初等）」において，単に教科書の知識を紹介するのみならず，その分野の新しい論文の実験を実際に実習形式で学生に経験させている。これにより，知識が如何にして得られているのかを体験することが可能になり，学生の学ぶ意欲が促進されると考えている。また，自身で将来的に卒業論文を作成する際，着想をどのように実験計画に還元していくかのイメージをつかませることも意図している。
4）多種の評価形式の取り入れ	平成23年～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科の科目「心理学」「発達心理学（初等）」「コミュニケーションの心理学」において，小テスト，中間テスト，実習での参加態度などの定常点を取り入れることで，学生の評価の多様化を目指している。これにより，単に講義を覚えてテストに臨むのではなく，毎回の講義を集中して取り組む学生が増加したと感じている。
2　作成した教科書，教材 1）心理学実験演習教材およびレポート作成マニュアル	平成19年～平成21年	大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科，「心理学研究法基礎演習Ａ」において，特定のテーマに基づき食行動の実験を行う手続き，留意点などをまとめた教材を作成した。食の発達的観点を取り上げた，食行動実験は女子大学生の興味が高いテーマであり，伝統的な心理学の実験演習よりも，学生が積極的に参加したと考えられる。また，心理学のレポート作成の際の基本的な知識，注意点をまとめたマニュアルを作成し，基本的な事項で学生の評価を低下させることなく，レポートの内容の優劣をより正確に判断することが可能となった。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）学生による授業評価アンケート結果における評価	平成24年	環太平洋大学授業評価アンケートの結果において，担当する全講義科目（「心理学」「発達心理学（初等）」「コミュニケーションの心理学」）4段階中3以上の評価を得た。特に，講義の分かりやすさにおいては，150人以上の講義科目でも3.5以上の評価を得ており，人数の多い講義でも安定した教育力を発揮できていると考えている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （公開講座） 1）医療の現場と心理学 「大阪樟蔭女子大学公開講座」	平成22年11月	医療現場で活躍する心理学のスペシャリストと言えば，「臨床心理士」であり，その活躍する現場は「精神科」を思い浮かべる人が多い。しかし，心理学の研究フィールドは非常に多彩であり，数多くの研究者が医療現場で研究に従事している。この公開講座では，心理学を専攻する学生及び一般の方向けに，耳鼻咽喉科で聴覚心理学者として医師と共同研究を行っている自身の事例を紹介しながら，医療と心理学のコラボレーションから発生する社会貢献について詳説した。
（ワークショップ） 1）ダイエットへの心理学的アプローチ　その2 「日本心理学会第72回大会ワークショップ」	平成20年9月	小学生から老年期まで幅広い年齢層で，ダイエットを行うことが一般的となっている。これを心理的側面から注目すると，単に肥満や痩せといった発達心理学上の問題解決への手がかりを提供できるだけでなく，現代人の美意識や心理的発達の有り様などの意味を見出すことができる。本ワークショップでは，心理発達に寄与する食行動，食への意識の研究知見についての研究知見の動向を発表，議論した。現代の学校での児童・生徒のやせ願望傾向についての警鐘も提示した。 発表者：可知悠子，葦原摩耶子，鈴木公啓，高木悠哉 指定討論者：田中久美子
（研究交流シンポジウム） 1）食事セッション内減少の規定因とその応用可能性について 「同志社大学文学研究科心理学専攻，北海道医療大学心理学研究科，研究交流会」	平成20年3月	幼児期から老年期までの健康的な食行動の実現は，健康的な身体状態に寄与するのみでなく，健康的な心理発達をももたらす。本シンポジウムでは，人間の発達過程の根底となる食行動の基礎的なメカニズムを発表するとともに，発達過程においてそれが一定に保たれること，さらに，食行動の個人差が就学前の子どもから青年期へ至る発達過程において異なる影響をもたらす，といった研究について概説，議論した。 発表者：高木悠哉，山崎真理子，漆原宏次
5　その他 1）大阪樟蔭女子大学における教育実績	平成19年～平成21年	大阪樟蔭女子大学の非常勤講師として「心理学研究法基礎演習A」（実習科目，半期2単位）を担当した。 心理学における基本的な実験手法を修得し，伝統的な心理実験を実習形式で行った。また，のみならず，自身の専門分野の最新の実験研究を実習に組み込むことで，学生の興味，演習への参加意欲を高める効果が得られた。実験を経験した後に，レポートを作成するのみならず，最終講義でミニ学会と称して，各グループで実験結果と考察をポスター形式で発表させ，ディスカッションさせた。このような実習の工夫により，総じて学生のレポートの完成度は高く，また，心理実験自体への興味が促進された。
2）奈良県立医科大学　耳鼻咽喉・頭頸部外科における教育実績	平成22年4月～平成23年3月	奈良県立医科大学，　耳鼻咽喉・頭頸部外科において，各医局理解のためのゼミ形式の研修を共同で担当した。耳鼻咽喉・頭頸部外科における聴覚実験を主として担当し，学生に実際の実験からデータ分析，レポート作成までを指導した。医学部生ということもあり，臨床経験を重視する姿勢が強かったが，基礎的なデータ　修得の重要性についての理解を促進することが出来た。

３）環太平洋大学における教育実績	平成23年4月～現在に至る	環太平洋大学次世代教育学部において常勤講師として以下のような科目を担当した。 心理学　(2時間／週，半期) 発達心理学（初等）　(2時間／週，半期) コミュニケーションの心理学　(2時間／週，半期) 家族関係の教育力　(集中講義) これら講義科目においては，基本的に教科書は使用せず，毎回オリジナルのパワーポイントで講義を行った。単に講義するのみでなく，学生の意見や疑問を出来得る限り講義前に全受講学生に紹介し，それらに回答をおこなった。また，講義科目は座学となりがちであるので，学術論文の内容を実際に授業で体験させる，といった実習も加えた。全体として，学生の授業の理解度は高く，心理学への興味も促進することが出来たと考えられる。 基礎ゼミナールⅡ（2時間／隔週　通年） （平成23年4月～平成24年3月） 2年次にす始まるゼミ形式の講義である。社会情勢の把握の仕方や新聞，TVの読み解き方，社会常識の高め方などを実習形式で学習する。独自の提案として図書館利用の活用促進を意図し，読書した本を5分間のプレゼンテーションで発表する読書コンテストを実施した。コンテストでは，各クラス代表の選定から，学科単位での最優秀者を決定し表彰した。単に本を読了するだけでなく，それを他者に説明することの難しさ，重要性を学生が理解できたと考えられる。 ゼミナールⅠ・Ⅱ（2時間／週） 3・4年次対象のゼミナールでは，各自の興味に応じて心理学の研究テーマを決定し，実際にデータを修得しながら，ゼミ論，卒業論文作成を学生に求めた。特に重要視したのは，担当者のテーマを押し付けるのではなく，自主的に研究テーマを決定させることであった。主な研究テーマとしては「幼・小における食行動と発達について」「学齢期における性意識の発達」「児童の発達と情緒発達について」などである。結果として，卒業論文執筆者においては学内の諮問会にて高い成績を修めた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）博士(心理学)	平成21年3月	同志社大学　甲第372号 博士論文題目：人間の摂食行動の数量モデルとその応用可能性についての実験的検討
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）日本学術振興会　特別研究員（DC2） 受入研究機関：同志社大学	平成20年4月～平成21年3月	日本学術振興会特別研究員(DC)として，同志社大学において食行動のペースの変化を心理学習理論に基づき定式化する基礎研究に従事した。主として研究員としてデータ収集，分析，等を担当した。成果は，3回の国内学会発表，1回の海外学会発表，平成21年度　特別研究員奨励費　報告書にまとめられた。
2）日本学術振興会　特別研究員（PD） 受入研究機関：同志社大学	平成21年4月～平成22年3月	日本学術振興会特別研究員として，同志社大学において食行動のペースの変化を心理学習理論に基づき定式化し，心理発達において健康な食行動を実現するための応用研究に従事した。主として研究員としてデータ収集，分析，等を担当した。成果は，１編の論文(行動科学 48. p91-101)，平成21年度　特別研究員奨励費　報告書にまとめられた。
4　その他 なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1．）発達心理学入門～人間発達の科学的理解～	単著	平成25年4月	株式会社ERP TMシリーズ	幼稚園・小・中学校教育現場で，教員，家族は体験的に子ども発達を理解し，また，それを日々サポートしている。そのような実践的な発達の理解が重要である一方で，科学的な視点から子どもの発達をとらえることもまた重要である。本著では，生まれてから死ぬまでの人間の発達過程において，発達心理学分野がもたらした種々の実験的な知見を紹介することで，人間の発達過程の科学的な法則性を各学校現場における幼児・児童・生徒理解に活用されることを目指した。 B5判，63頁
（学術論文） 1．）人間の摂食行動のセッション内減少:食べるペースの減少過程を記述する数式の一般性の検討(査読付)	共著	平成17年9月	行動分析学研究 Vol．20（1）p40～52	幼児から老年に至るまでの発達段階に応じた摂食行動は生理的な要因(例えば血糖値の上昇)によって終了することが良く知られているが，心理的な要因(たとえば，食物への飽き，味など)によっても終了することについての研究は少ない。本研究では，心理学習理論の馴化仮説に基づき，人間の短期間の摂食行動が心理的な原因によって終了する可能性を検討した。これは学校や幼稚園でのメニューなどは栄養的な観点で決定されているが、誰と食べるか、食の組み合わせ、摂食の時間などにより、適切な食事量がコントロールされることが検証された。結果として，これらの学習の要因が食事量を決定することが示された。 本人担当部分：計画，データ収集，分析，執筆 共著者：高木悠哉・青山謙二郎
2．）人間の摂食行動のセッション内変動の研究 ： 食べるペースを累積摂食量の1次関数として記述する試み (修士論文)	単著	平成18年3月	同志社大学	児童から青年までの摂食行動の終了を規定する原因は，一般的に食べた後に働く飽和の摂食後の諸要因（たとえば，血糖値の上昇）と考えられている。本研究では，人間の食べるペースの推移を詳細に記録することで，食べ止めるまでに働く飽和の摂食後の諸要因以外の原因の可能性を検討した。結果として，様々な食物，異なる条件下において，食べるペースは累積摂食量の1次関数としてよく記述できた。摂食後の諸要因は一般に遅延を伴うため，食事中の食べるペースの低下を示すこの数式を理論的に説明できない。本研究の結果は，食事に対する馴化が短期間の食事の終了の原因である可能性を示した。同時に，食行動に深く関わる古典的，オペラント条件付けの諸理論の人間の食行動に適用できるかの可能性を論じた。この研究は学校における食行動を単に発達段階における「好き嫌い」で片づけるのではなく、食育の指導に心理学的な知見を入れることの重要性を示唆するものである。 A4，全47頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.）テレビを見ながら摂食させた場合の食事セッション内での摂食行動の減少過程に関する検討(査読付)	共著	平成20年11月	行動科学 Vol. 47, p19-30.	健康的な食行動の獲得は，人間の発達において身体的にも，心理的にも重要である。身体的には肥満による健康被害の防止，心理的には，ストレスによる過食の抑制，低い他者・自己評価をもたらすことの低減が挙げられる。近年，特に子どもの肥満や，ストレスからの過食の引き金として，テレビ視聴中の食事が挙げられている。本研究では，食の発達において，青年期でもテレビ視聴中の食事が摂食行動に影響を及ぼすかを検討した。大学生を参加者とした。結果として，テレビ視聴は食事セッションに影響を及ぼさなかった。就学前から児童期の発達のどの段階で，特にテレビ視聴がネガティブな食行動を形成するのかについて議論した。 本人担当部分：計画，データ収集，分析，執筆 共著者：高木悠哉・青山謙二郎
4.）人間の摂食行動の数量モデルとその応用可能性についての実験的検討 （博士論文）	単著	平成21年3月	同志社大学	本論文は人間の摂食行動の食べるペースの推移に注目し，それを数量モデルにより記述することと，健康な食生活を実現するために，就学前児童から青年期に至る人間の心身の発達に対するその応用可能性を探ることを課題とした。基礎的研究では，食べるペースを累積摂食量の1次関数として記述することの頑健性，有用性について論じた。応用的研究では，ゆっくり咀嚼することやTV視聴といった要因が食べるペースの推移に及ぼす影響を詳細に記述することで，肥満の抑制における常識的な理論に関して否定的な結果が明らかとなった。児童生徒の生涯発達に食生活は重要であり，健康な食行動の獲得が，それぞれに応じた発達段階において他者からの，自己内のストレスを低減させる可能性がある。それを実現するための食行動について論じた。A4, 全136頁
5.）実験前に摂食させることが、その後の摂食行動の食事セッション内減少に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成22年3月	行動科学 Vol. 48, p91-102.	青年期において，ダイエットにより食事量を減少させることは，肥満の防止といった健康な身体的発達の観点からも，高い他者・自己評価を獲得し，ストレスを低減させることからも有用である。本研究では，そのような健康的な食事量を実現する手法として広く認められている，食事前に一定量の食事を摂取させる実験前摂食法の休憩時間の有効性を検討した。参加者は大学生であっが、自己の容姿にこだわる発達時期である中学生や高校生においても同じような傾向が見られると考える。自由摂食，休憩0分，休憩10分の各軍の食事量を県とした。結果として，遅延の必要性は，実験前摂食と自由摂食セッションで摂食させる食物が同じかどうかに依存することが明らかとなった。 本人担当部分：計画，データ収集，分析，執筆 著者：高木悠哉・青山謙二郎

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.）レポート課題への取り組みと遅延価値割引の程度の関係 (査読付)	共著	平成22年9月	行動科学, Vol. 49, 1, 1-9.	報酬の支払いに遅延が伴うことで，人はその報酬の価値を割り引くことが知られており，こうした現象は遅延価値割引（セルフコントロールの指標）と呼ばれている。本研究では，大学生を対象とし，学業場面でのレポートを提出する際の毎日の勉強時間と，価値割引の程度との関係性が，大学1・2年生でどのように発達するかを検討した。結果として，１年生では，遅延価値割引の程度とレポートに取り組む時間との間に相関は見られなかった。しかし２年生では，遅延価値割引の激しい学生ほどレポートに取り組む時間が短いという予測と一致した傾向が認められた。つまり，青年期において，年齢が増加するほどセルフコントロールの出来るものがより学業に邁進することが示された。青年期のセルフコントロールをより行うことで，発達とともに学習意欲への動機づけが上昇する可能性を議論した。児童期でも同様の動機づけが報告されるところであるが、その時期を適切に把握することにより、有効な学習指導に反映できると考える。 本人担当部分：計画，データ収集，分析，執筆 共著者：青山謙二郎・高木悠哉
7.）大学教育への導入に読書を用いることの有効性に関する試験的検討	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号，p69-77.	本研究の目的は，試験的に1ヶ月間の協働型読書プログラムを作成，実施することで，大学教育への導入に読書を用いることがメタ認知の発達に有効であるかを検討することであった。実施前の読書量を基準として，高読書量群，低読書量群に調査参加者を群分けし，プログラム実施前後の読書に対する態度，メタ認知の変化を学年ごとに検討した。本研究結果より，協働型読書プログラムの初年次教育への導入がメタ認知の発達に有効であり，大学生の自己の発達において，学習の動機づけを促進する可能性が示された 本人担当部分：計画，データ収集，分析，執筆 共著者：高木悠哉・松岡律・熊田岐子・住本克彦・筒井愛知
8.）社会的勢力が自己意識，被服行動に及ぼす影響の検討	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要 第6号,p169-176.	他者への影響力を自身が保持しているという主観的感覚は，社会心理学において，社会的勢力と呼ばれ，従来から学童期，青年期の公的・私的自己意識に影響することが欧米で示されている。本研究の目的は，主観的な他者への影響力の程度が，公的・私的自己意識，被服行動に及ぼす影響を検討することであった。対象は大学生であり，結果として，勢力感が中程度の場合に公的・私的自己意識が被服行動に及ぼす影響を低下させることが示された。日本人では，青年期において，適度な勢力間を保持するものは，それを，ファッションという行動に表現し，自己意識を発達させていくことが考察された。昨今は、発達加速が起きており、小学校高学年から、このような影響が見られることも議論された。 本人担当部分：計画，データ収集，執筆 共著者：高木悠哉・赤間健一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.）社会的勢力が自己欺瞞，原因帰属に及ぼす影響についての検討	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第７号 p.229-235.	Eriksonの示す発達段階の青年期において，自己に対して適切な認識を獲得することが，将来的な社会適応につながることは繰り返し示されている。本研究では，大学生(18歳～22歳)を対象として，他者に影響力を持つと主観的に感じている程度（勢力感）の違いが，過剰にポジティブな自己概念，および動機づけにおける原因帰属過程に影響を及ぼすかどうかを検討した。結果として，大学生では，高勢力者ほど，過剰にポジティブな自己概念を形成し，物事の結果について自身の能力に帰属することが明らかとなった。青年期において，過剰な勢力感の発達は，壮年期における社会適応にネガティブな影響を及ぼす可能性が議論された。 本人担当部分：計画，データ収集，執筆 著者：高木悠哉・赤間健一
10.）発達と行動 ～子どもが作る「自分を見つめる心の目」に関する研究動向～	単著	平成25年4月	「教育PRO」第9号 株式会社ERP p.12-15	人間の生涯発達において，自己概念の形成は永遠の発達的課題である。本稿では，児童期、特に小学校高学年の自己概念の発達過程を検討した論文をレビューし，近年明らかとなっている，児童期の自己の過大・過小評価の発達的変化と学校適応に関する研究を概観した。次いで，青年期で研究が盛んな他者への影響力認知が，児童期の自己概念，自己評価の発達過程に及ぼす影響についての研究の方向性を議論した。
11.）Evaluation of speech intelligibility in short-reverberant sound fields.	共著	平成26年8月	Auris Nasus Larynx p.343-349	発達段階において，一般的に可聴域は加齢とともに低下することが知られている。特に加齢とともに高周波は可聴が難しくなる。また，環境も音の理解度の低下に影響する。本研究では，高周波域をカットすることで劣化させた，単音節語音の理解度が，異なった８つの環境での聞き取りにどのように影響するかを検討した。結果として，高周波域のカットは単音節語音の理解を低下させ，また，その程度は環境の要因によって異なった。従来，語音聴力検査や，それに基づく補聴器のフィッティングは，聴力検査室で行われているが，部屋の大きさや内装は異なっている。そのため，医学的には聴力検査室の標準化に本研究が寄与する可能性がある。また，高齢化社会に向けて，老年期の人々が快適に講演を聞くことが可能なホールや教室の標準化に寄与する可能性が示された。 本人担当部分：研究計画，データ収集 共著者：Ryota Shimokura, Toshie Matsui, Yuya Takaki, Tadashi Nishimura,Toshiaki Yamanaka, Hiroshi Hosoi
12.）昼食内容の記録がその後の間食の摂取量に及ぼす影響	共著	平成26年度掲載決定	心理学研究	食べ過ぎの防止は，各発達段階で重視されており，心身の健康な発達を目指す食育論でも検討されているが，その実証研究は極めて少ない。本研究の目的は，直前に取った食物の記憶を思い出すことで，食べる量を減少させることができると考えたHiggs(2002)を参考に，携帯電話で直前の食事内容を記録することが，次の食事時の摂食量のより多くの減少につながるかを大学生を対象に検討した。結果として，昼食内容を記録することは，次の食事での食事量を減少させた。今後は，各年齢層に応じた携帯電話使用での食事のコントロール法について議論が望まれる。 本人担当部分：研究計画，データ収集 共著者：山崎真理子・高木悠哉・齋藤 瞳・佐藤豪・ 青山 謙二郎

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13.）学校段階を基準とした動機づけ始発方略の獲得時期に関する探索的研究	共著	平成26年度	人間教育学研究　第２号 p.151-159	動機づけ調整方略とは，特定の活動や，目標を達成するという意思を始発，維持，あるいは補うためにおナウ行為と定義されている。具体的には，課題に対しやる気の出ない時にどうやってやる気を出しているかを問う。本研究では，回想法を用い，小，中，高，大学のどの学校段階で，現在使用している動機づけ調整方略を獲得したのかを，大学生に調査した。結果として，報酬や罰といった，相対的に低次の調整方略が小学校から獲得され，中，高において，価値を見出すといった高次の調整方略は中，高校で獲得されることが示唆された。大学から，新たに獲得し，使用していると報告したものは少なく，学校段階初期でのやる気の出し方の工夫が必要であることが示唆される。 本人担当部分：研究計画，データ収集，論文執筆
（資料） 1.）質問紙を用いた住宅内透過騒音の音評価に関する研究	単著	平成22年12月	日本音響学会騒音・振動研究会資料	本研究の目的は，住居の壁を通して漏れ聞こえてくる騒音（透過騒音）を分類し，日常生活で人が感じる騒音のどのような要因が不快感に繋がるのかを心理学的な聴覚の知覚理論から質問紙法を用いて検討することであった。結果として，透過騒音はよくとおる，ひびく，高い，などの「透過因子」よくとおる，ひびく，高い，などの「透過因子」に分類された。また，場面により，幼児から大人までの様々な世代別により，透過騒音の因子が不快感に及ぼす影響が異なることが統計的に明らかとなった。子どもから成年への発達段階においてストレスとなる不快な透過騒音は，世代により評価が異なるため，子供を抱えた世帯，中年夫婦の世帯，など，世帯の構成員を踏まえた住居の壁材を工夫することで，快適な住居環境を実現できる可能性が示された。
「国際学会」 1.）Within-Session Changes in Human Eating Behavior.	共同	平成17年5月	31st Annual Association for Behavior Analysis Convention (Hilton, Chicago, USA)	実験室で摂食させた場合，人間の食べるペース(単位時間当たりの摂食量)は徐々に減少していく。本発表では，その摂食ペースの推移を累積摂食量の１次関数で記述することの有用性と，それらから想定される，味に対する飽きが食べやめる原因である可能性を検討した。これは小学校や幼稚園での給食の残量の調整や、どのような環境でなら人間の食べるペースが持続するかを課題としたものである。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.）Effects of Pace of Eating on Within-Session Decreases in Human Eating Behavior.	共同	平成19年5月	33rd Annual Association for Behavior Analysis Convention (Manchester Grand Hyatt, San Diego , USA)	発表者の研究から，様々な実験操作を用いてゆっくり摂食させた場合の食べるペースの推移は，最初の食べるペースが速いときはその低下が激しく早く食べ終わり，より遅いペースのときは低下の程度が緩やかで長く食べ続け，結果的に総摂食量が同等になることが見いだされた。このパターンが，児童期からの食物摂取の心理発達に重要である可能性が議論された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
3.）Effects of Pace of Eating on Within-Session Decreases in Human Eating Behavior by Instructing Participants to Chew Each Mouthful Over 30 Times.	共同	平成20年8月	2008 Society for the Study of Ingestive Behavior Meeting (AgroParis Tech, France)	30回以上噛んでゆっくり摂食させた場合に，具体的に噛む回数をしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しない。また，そのような場合でも，実験時間を短くした場合には，摂食量が減少することも明らかとなっている。これら自身の研究をまとめ，よく噛ませることが摂食量および摂食ペースの推移に及ぼす影響を検討した。日本の学校給食では、発達途上の児童生徒が、最近よく噛み食事をすることは脳の発達を促すとして固いメニューが多くなる傾向があるが、どれぐらいそれを噛むかについては、基礎研究が求められることである。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
4.）The effect of reverberation time on loudness of monosyllable speech sound.	共同	平成22年9月	13 thKorea-Japan Joint meeting Otorhinolaryngology-Head and Neck Surgery (Seoul, Korea)	音響工学の領域では，語音明瞭度が部屋の響きである残響時間の影響を受けることが良く知られている。一般的に，残響時間が長くなれば語音明瞭度は悪くなる。しかし， ラウドネス(主観的な音のおおきさ)と残響時間との関係性を検討した実験は少ない。本研究では，様々な残響を語音に畳み込み，語音のラウドネスを比較した。結果として，長い残響時間ほどラウドネスは大きくなった。加齢に伴う聴覚認知への影響について議論された。 本人担当部分：計画，発表 共同発表者：高木悠哉,下倉良太,柳井修一,西村忠己,細井裕司
「国内学会」 1.）人間の食行動のセッション内減少を記述した数式の一般性	共同	平成16年10月	関西心理学会第116回大会「於京都ノートルダム女子大学」	本発表では，動物実験から得られた数式を人間の摂食行動に適用可能かを検討した。鶏つくねを男性参加者に10分間摂食させた場合，食べるペースは，動物実験と同様に，累積摂食量の１次関数としてよく記述できた。また，従来の数式よりも妥当な解釈であることが示された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
2.）スープを食材とした人間の食行動のセッション内減少	共同	平成17年7月	日本行動分析学会第23回年次大会「於常磐大学」	個体の食物を用いた場合，食べるペースの推移が累積摂食量の１次関数として記述可能なことが明らかとなっている。本発表では，液体の食物を用いた場合を検討した。その結果，液体の食物を用いた場合でも，個体と同様，摂食ペースは累積摂食量の１次関数としてよく記述できた。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.）食べるペースに違いをつけることが摂食行動のセッション内減少に及ぼす影響	共同	平成18年9月	日本行動分析学会第24回年次大会「於関西学院大学」	児童生徒や大学生にゆっくり摂食させると食べる量が減少することはよく知られているが，その実験研究には矛盾がある。本発表では，ゆっくり摂食させることが食べるペースの推移に及ぼす影響を検討した。その結果，最初の食べるペースが速いときはその低下が激しく早く食べ終わり，より遅いペースのときは低下の程度が緩やかで長く食べ続け，結果的に総摂食量が同等になることが明らかとなった。心理発達段階においてどの発達段階からこのような現象が見られるのか議論された。学校給食における給食の適切な時間の参考となる研究である。どの時期の子どもになら影響がでるのかを検証する必要がある。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
4.）30回以上噛ませて摂食させることが摂食行動の食事セッション内減少と総摂食量に与える影響	共同	平成19年9月	日本健康心理学会第20回大会「於早稲田大学国際会議場」	具体的に噛む回数を決めてゆっくり摂食させた場合，摂食量が減少することが他の研究者によって示されている。本研究では，30回以上噛んでゆっくり摂食させた場合にも，同様の結果が得られるかを検討した。結果は，具体的に噛む回数を多くしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しないことが明らかとなった。幼児期や児童期に「よく噛むこと」を指導すると、給食の残量が増えると言われるが、噛む回数よりは、発達段階に応じた食事時間が摂取量に影響を与えていると議論された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
5.）住宅内透過騒音尺度作成の試み（1）	共同	平成22年9月	第314回日本耳鼻咽喉科学会大阪地方連合会例会（大阪）	住宅内において隣室から漏れ聞こえてくる音は非常に小さいにもかかわらず，その不快感は大きい。本研究では，柳井(2010)が開発した住宅内透過騒音尺度の因子構造をとらえ直し，音の評価を透過・遮断の2因子，評価による不快感を１因子とする尺度の因子構造の妥当性を柳井(2010)と同様の5つの場面を想定させ検討した。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，下倉良太，柳井修一，己・細井裕司
6.）隣室を音源とする透過騒音の因子構造同定の試み	共同	平成22年9月	日本音響学会2010年秋季研究発表会(吹田)	本研究では，柳井(2010)が開発した住宅内透過騒音尺度の因子構造をとらえ直し，音の評価を透過・遮断の2因子，評価による不快感を１因子とする尺度の因子構造の妥当性を柳井(2010)と異なる5つの場面を想定させ検討した。結果として，透過・遮断因子および不快因子の妥当性が確認された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，下倉良太，柳井修一，己・細井裕司

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.）隣室から聞こえる透過騒音の研究～音の評価と不快感について～	共同	平成22年11月	第55回日本聴覚医学会総会(奈良)	柳井(2010)が開発した透過騒音質問紙は，先行研究で音の評価2因子(透過・遮断)と不快感1因子に統計的に分類可能であり，妥当性が高いことが示されている。本研究では，特定の透過騒音5種類を想定させた場合の，因子間の因果関係の違いを分析した。結果として，漏れ聞こえてくる音によって，透過・遮断因子が不快感におよぼる影響が異なることが明らかとなった。小学校や中学校における仮設校舎における、集中力の欠如等との関係も議論された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，下倉良太，柳井修一，細井裕司
8.）大学生の定期考査に向けた学習時間およびその成績と遅延・確率価値割引の程度との関係	共同	平成23年11月	関西心理学会第123回大会（京都）	報酬の支払いに遅延が伴うことで，人はその報酬の価値を割り引くことが知られており，こうした現象は遅延価値割引と呼ばれている。従来から，喫煙者においてこの価値割引の程度が激しい，などの知見から価値割引はセルフコントロールを測定する指標の一つと考えられている。本研究では，学業場面でのレポートを提出する際の毎日の勉強時間と，価値割引の程度との関係性を検討した。 本人担当部分：データ分析，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
「ポスター発表」 1.）食行動の多様性効果の検討～ポテトチップスの提示量の多様性の効果の検討～	共同	平成17年9月	日本心理学会第69回大会「於慶應義塾大学」	多くの種類の食物を摂食すると，単一の食物を食べるときより多く食べる，という多様性効果を提示量の側面から検討した。一般に食物の多様性はその種類によってもたらされるが，本研究では提示量をランダムにする実験操作でも，食事量が増加するかを検討した。学校給食で低学年では特に「三角食べ」という単一の食物を続けて食べないマナー指導をしているが、これを摂食量と関連付け分析することも必要である。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
2.）栄養を摂取することが，その後の食行動のセッション内減少と摂食量に及ぼす影響	共同	平成18年11月	日本心理学会第70回大会「於九州大学」	実験直前に一定の食物を摂食させることが，その後の食べるペースの推移と摂食量に及ぼす影響を検討した。結果として，直前に異なる食物を実験前接触させることは，その後の食事量に全く影響を与えなかった。したがって，食事直前に何かを摂食刷ることは，後の食事量に影響を及ぼさず，一定の時間間隔をあけてから摂食すべきであることが示唆された。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.）TV視聴が摂食行動の食事セッション内減少に及ぼす影響	共同	平成19年8月	日本行動分析学会第25回大会「於立教大学」	TVを視聴しながら摂食させることが摂食ペースの推移および総摂食量に及ぼす影響について検討した。一般にTV視聴をしながら摂食することは食事量の増加をもたらすと欧米では考えら得ているが，本実験研究ではそのような結果が得られなかった。したがって，TV視聴が食事量に及ぼす効果は何らかの要因（例えばCM）に限定されている可能性が議論された。しかし、就学前児童においては、保育園等からTV市町の影響が報告されており、乳児期から青年期に至る発達段階ににより食事に及ぼす影響が異なることは分析が求められる 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
4.）栄養を摂取することが，その後の食行動のセッション内減少と摂食量に及ぼす影響2～実験前に同じ食物を摂食させることが，その後の食事セッションでの摂食行動にもたらす効果の検討～.	共同	平成19年9月	日本心理学会第71回大会「於東洋大学」	実験直前に一定の食物を摂食させることが，その後の食べるペースの推移と摂食量に及ぼす影響について，特に実験前とその後の摂食セッションでの食物を同じにした条件で検討した。結果として，直前に異なる食物を実験前接触させることは，その後の食事量に全く影響を与えなかった。したがって，食事直前に何かを摂食刷ることは，後の食事量に影響を及ぼさず，一定の時間間隔をあけてから摂食すべきであることが示唆された。この一定程度の時間間隔は、心身発達段階に応じて異なることが考えられる。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
5.）30回以上噛ませて摂食させることが食事セッション内減少と総摂食量に与える影響.	共同	平成20年8月	日本行動分析学会第26回大会「於横浜国立大学」	本研究では，30回以上噛んでゆっくり摂食させた場合の食べるペースの推移について，口頭発表その４，とは異なる実験時間を用いて検討した。結果として，具体的に噛む回数をしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しないことが明らかとなった。学校給食などで児童に噛む回数を多くする指導を行うと摂取量が減少するのは、噛む回数以外の要因（食事時間制限・他の子どもとの関係）などが関係すると議論された 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
6.）主観的に不快を感じない程度に噛ませて摂食させることが、摂食行動の食事セッション内減少と総摂食量に及ぼす影響	共同	平成20年9月	日本心理学会第72回大会「於北海道大学」	自身の従来のよく噛んで摂食させる研究では実験者が噛む回数を設定していた。それに対して本研究では，参加者に予備実験を行うことで不快を感じない程度の回数を決定して実験を行った。結果として，具体的に噛む回数をしても，多くかむ条件が長く食べ続け，必ずしも摂食量は減少しないことが明らかとなった。 本人担当部分：計画，調査，発表 共同発表者：高木悠哉，青山謙二郎
7.）直前の食事の記憶の鮮明さが後の味覚評定での摂食量に及ぼす影響	共同	平成22年8月	日本心理学会第74回大会「大阪大学」	直前の食物の記憶の想起の鮮明さが，その後の味覚評定での摂食量に影響を及ぼすかを検討した。結果として，用紙に書くことで想起させても，さらに写真を見ながら想起させても，群間の総摂食量の平均値は同様だった。 本人担当部分：計画，発表 共同発表者：高木悠哉，山崎真理子，青山謙二郎

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8.）飲料の摂取が認知課題の遂行に及ぼす影響の検討	共同	平成22年8月	日本心理学会第74回大会「大阪大学」	特定の栄養素を含む飲料が，人間の認知活動に影響することはよく知られているが，水の摂取が認知課題に影響することは，まだ検討があまりない。本研究では，大学生を対象に，水を摂取する場合としない場合とで認知課題の成績を比較した。課題は３種類を１セットとし，計４セット実施した。本実験では先行研究とは異なり，水を摂取することの効果は見られなかった。 本人担当部分：計画，発表 共同発表者：山崎真理子，高木悠哉，青山謙二郎
「ワークショップ」 1.）ダイエットへの心理学的アプローチ　その2	共同	平成20年9月	日本心理学会第72回大会「於北海道大学」	小学生から老年期まで幅広い年齢層で，ダイエットを行うことが一般的となっている。これを心理的側面から注目すると，単に肥満や痩せといった発達心理学上の問題解決への手がかりを提供できるだけでなく，現代人の美意識や心理的発達の有り様などの意味を見出すことができる。本ワークショップでは，心理発達に寄与する食行動，食への意識の研究知見についての研究知見の動向を発表，議論した。現代の学校での児童・生徒のやせ願望傾向についての警鐘も提示した。 発表者：可知悠子，葦原摩耶子，鈴木公啓，高木悠哉 指定討論者：田中久美子
「シンポジウム」 1.）食事セッション内減少の規定因とその応用可能性について	共同	平成21年3月	同志社大学文学研究科心理学専攻，北海道医療大学心理学研究科，研究交流会 「於北海道医療大学」	幼児期から老年期までの健康的な食行動の実現は，健康的な身体状態に寄与するのみでなく，健康的な心理発達をももたらす。本シンポジウムでは，人間の発達過程の根底となる食行動の基礎的なメカニズムを発表するとともに，発達過程においてそれが一定に保たれること，さらに，食行動の個人差が就学前の子どもから青年期へ至る発達過程において異なる影響をもたらす，といった研究について概説，議論した。 発表者：高木悠哉，山崎真理子，漆原宏次

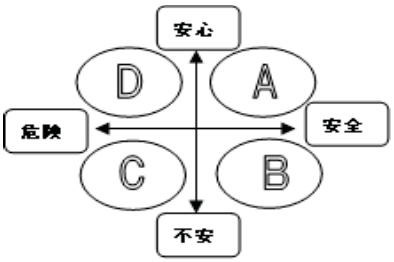
教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 3 月 31 日

氏名　松 井　典 夫

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
教育学	教育の方法と技術・教科教育（図画工作科）・学校と安全

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ・ワークシートを活用した図画工作科の授業	平成１６年４月～平成２０年３月	図画工作科は、知識の観点がなく、したがって学力をはかるテスト類はない。評価の方法について、いつも課題になるが、作品のみを取り上げて評価を行う、いわゆる作品主義になると、図画工作科という教科が持つ魅力を半減させてしまう。そこで、児童自らが学習の履歴をつづるワークシート集「夢への扉」を使用し、学習の過程をポートフォリオ形式で振り返ることができる方法を取り入れ、評価に生かした。それにより、指導者は４観点(造形への関心・意欲・態度、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力)の中で、その題材における観点の重点を絞り、評価と一体となる授業実践を行い、学習計画を立てることが可能となった。
・「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌　第 3 巻 1 号 p62-66　松井）を用いた安全教育	平成２１年度～現在に至る	 安全教育で目指すべきところは、「安全で安心」であるＡのカテゴリーである。しかし、このカテゴリーに児童の状態がいれば、安全教育の役割が達成されたかと言えばそうではない。知識や技能が備わっていない状態であるなら、真の安全・安心とは言えないだろう。たとえば、防犯ブザーの例で言うと、防犯ブザーの学習をする前なら、Ａの位置（「防犯ブザーは持っていれば安全で安心だ」）にいた児童も多数いるだろう。「防犯ブザーはいざという時に、不審者を撃退することができる。それを持っていれば安心だ」と感じている状態である。しかし、学習を進めるうちに、実は持っているだけでは安全とは言えないことに気付き始める。児童は「安全を守るものだけど、それだけではだめだ。自分にはいざという時に使うことができない」というＢの状態や、あるいは、「まったく安全とは言えない。頼るのはこわい」というＣの状態へと移行し始める。このように、これまで何の疑問を持たずに「安全」だと過信し、「安心」しきっていた状態のＡの位置では、児童の生涯にわたる「安全」「安心」とは言えない。まずは「真実」を知ることが、安全教育の大きな役割のひとつと言えるだろう。しかし、この学習をした時点で、児童はＢやＣの位置にとどまらず、ベクトルは再び、真の意味でのＡに向かい始めているの

		である。児童の中では、「この学習をしたから自分の考え方が変わった」あるいは、「防犯ブザーの使い方をしっかり学んだから、いざというときに自分がどのような心理状態になるかわかった」というように、「安全・安心」を真に見つめることができるようになるのである。その状態や児童の変容を客観的に測るマトリクスとして、「安全安心様相図」を考案した。
２　作成した教科書、教材 ・図画工作科ワークシート集「夢への扉」（再掲）	平成１６年４月～平成２０年３月	大阪教育大学附属池田小学校図画工作科主任として担当した図画工作科の授業において、ワークシート集を作成した。毎時の児童の作品制作過程を画像にしてワークシートに貼り付け、本時の振り返りを毎時記入させるとともに、次回の計画を立てさせた。そのことにより、児童は自らの学習履歴を振り返りながら、目標を持って授業に臨むことができるようになった。また、本教材は教育実習にも活用し、教育実習生は、児童個々の能力や個性を的確に把握し、指導案作成や授業実践に生かすことができた。
・安全教育実践指導略案集（再掲） ・安全教育実践考察集（再掲）	平成２２年２月	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生の参考資料として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成２１年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成２１年度に実践した安全教育の授業（防犯・生活安全・地震災害・交通安全・火災・水難災害）の指導略案を作成し、それぞれの授業後に考察した内容を記録した考察集を作成し、平成２１年度の大阪教育大学附属池田小学校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。安全教育に対する必要性の実感は、メディアを賑わす事件や事故、災害の後は教育現場において高まる観があるが、どのような実践をすればよいかわからないというのが、教育現場で聞かれる多くの声である。その一助にと作成したものである。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ・大阪教育大学附属池田小学校　学校教育診断	平成１７年度～２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年４回にわたって、児童対象と保護者対象に分けて、学校教育診断を実施している。およそ３０項目の質問事項に対して、マークシート式で回答し、その他の要望等を記述式で回答する。結果はホームページにおいて公開され、授業参観時に全保護者が閲覧できるように冊子化もされる。その結果において、児童、保護者ともに、毎年度高い評価を得ている。
・大阪教育大学附属池田小学校　個人評価	平成１７年度～２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度４月に個人目標を設定し、３月に管理職面談を経て個人評価を受ける。この結果は給与に反映される。 この個人評価において、毎年度高得点を得て、高い評価を得ている。

４　実務の経験を有する者についての特記事項 ・大阪教育大学教育実習生指導	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度９月に基本実習生およそ５０名、１１月に併修実習生およそ５０名を受け入れ、指導に当たっている。 平成１７年度から２０年度においては図画工作科主任として、特に美術科の学生を受け入れ、授業実践、指導案作成、生活指導等の指導に当たった。また、平成２２年度、２３年度においては学校安全主任として、全教育実習生を対象とした安全講話を行うとともに、将来、教師になったときのための経験として、不審者対応訓練の見学、参加を指導した。また、平成２５年度においては、教生指導部長として、全教育実習生の指導、相談に当たってきた。
・豊中市教育委員会：「ニューステージ研修」図画工作科講師	平成１８年８月	豊中市教育委員会が主催する、教職経験５年目までの教員を対象とした研修で、図画工作科の研修講師を務めた。大阪教育大学附属池田小学校において、図画工作科の公開授業を行い、授業後、その授業を指導案から振り返り、ねらいなどを話すとともに、と図画工作科の教育方法・技術に関する講話を行った。その後、参会者からの質問を受け付け、授業参観時の作品の展示についての質問を受けた。
・時事通信社：教員採用試験対策講座 図画工作科講師	平成１８年８月	時事通信社が主催する教員採用試験対策の図画工作科の講師として、年２回、計４回講師を務め、講座用テキストの編集にも携わった。ここでは、試験対策の用語、美術史をはじめとする知識面はもとより、実践の様子を紹介し、図画工作科の授業内容についての講義も行った。特に学習指導要領の理解と、授業を結び付けて考え、理解することができるように意識して講義した。
・豊中市教育委員会：「ニューステージ研修」講師	平成１９年８月	教職経験５年未満の豊中市の教員を対象に、図画工作科の研修講師を務めた。それぞれ参加教員が持ち寄った学習指導案を指導し、授業づくりを参加教員とともに進めていった。その参加教員の授業実践を参観し、指導助言を行うなど、計５回の研修を行った。
・摂津市教研図画工作科部会：研修講師	平成１９年３月	摂津市の教育研究会、図画工作科部会で研修講師を務めた。「自分らしさを育む図画工作科の授業」と題し、９０分の講演を行った。特に評価と一体となることを意識した授業実践について提案し、ワークシート集「夢へのとびら」を用いた授業実践と評価方法を紹介した。
・高槻市立磐手小学校：安全教育授業　指導助言	平成２０年２月	大阪教育大学附属池田小学校の教育研究協議会で行った、BLS 教育(一次救命処置)の公開授業「命のバイスタンダー」を見た参会者が、BLS 教育に関心を持ち、その指導案に基づいて、高槻市立磐手小学校の４年生を対象に授業実践を試みた。その授業実践を参観し、指導助言を行った。当該授業者は、前職が救命士であり、一次救命処置の指導内容は充実したものだったが、児童の理解とスキルの向上、それに伴う「命の重さ、大切さの実感」の重要性について話した。

・帝塚山学院小学校：安全教育授業　指導助言	平成２０年２月	同様に、大阪教育大学附属池田小学校で行ったＢＬＳ教育(一次救命処置)の公開授業「命のバイスタンダー」を見た参会者が、その授業に関心を持ち、当校に訪れたため、授業内容や授業方法について指導助言を行った。その後、当該教員が帝塚山小学校４年生を対象に授業実践を試みた。その授業実践を参観し、指導助言を行った。その教員は、授業記録を書籍化した。
・名古屋市立井上小学校：安全研修講師	平成２１年８月	名古屋市教育委員会主催による、安全担当者の夏期研修の講師を、名古屋市警察とともに務めた。当校教員が不審者対応訓練を行い、その訓練を参観した後、名古屋市警察とともに不審者対応訓練の指導助言を行った。訓練は、よくない部分での同僚性が強く出てしまったものであり、その点についての助言も行った。
・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成２１年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者を対象に、講演を行った。ここでは主に、不審者対応訓練による教職員の安全意識の向上と、「お金のかからない」安全対策、例えば机上整理による可視性の向上や、スリッパではなく靴を履くことによる、安全意識の向上について提案した。
・豊中市立南桜塚小学校：夏期研修会講師	平成２１年８月	豊中市立南桜塚小学校の教員夏期研修会。当校の教職員は、それまで教職員対象の不審者対応訓練を行ったことがなかった。そこで訓練の方法や手順をコーディネートし、その後、「学校安全に必要なもの～安全管理と安全教育～」というタイトルで、不審者対応訓練の指導助言、及び講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の様子をビデオ視聴することによって、参考になるようにした。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会南部大会講師	平成２２年８月	京都府教育委員会主催の、安全指導者研修会で、「学校安全と安全教育」というタイトルで、学校安全管理と、安全教育に関する講演を行った。ここでは主に、教職員の安全意識を向上させることが、学校安全につながるという内容で話した。京都府下南部の教員約１００名が参加した。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会北部大会講師	平成２２年８月	上記、南部大会の３日後に、北部大会において、同様の講演を行った。京都府下北部の教職員役１００名が参加した。
・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者研修を対象に、講演を行った。守口市教育委員会の依頼で、前年度に引き続き開催された研修会である。前年度の内容に加え、大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件の概要を伝え、そこから教訓として学んでほしい内容、特に ID カードの役割について強調する内容とした。
・豊中市立南桜塚小学校区：夏期研修会講師	平成２２年８月	豊中市立南桜塚小学校区の教員夏期研修会において、「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、講演を行った。前年度は当校のみの教員研修会だったが、前年の講演内容から、中学校区の小学校と中学校も参加することとなり、三小学校・一中学校の教員を対象に行った。小中学校の教員が混在することもあり、特に東日本大震災における「釜石の奇跡」を資料として取り上げ、小中学校の連携の大切さを紹介した。

・羽曳野市立古市南小学校：夏期研修講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、羽曳野市立古市南小学校夏期研修会において、講演を行った。安全管理においては、教職員の安全意識の向上と、ID カードの大切さや意味について話し、安全教育については、大阪教育大学附属池田小学校で実践している授業について紹介した。
・日本損保協会：防災ダック座談会パネリスト	平成２２年１０月	日本損保協会主催の防災ダック座談会において、神戸市消防局安全担当者、京都大学教授とともにパネリストを務め、安全管理と安全教育に関する座談会を行った。発表では安全教育の授業内容、特に安全マップの授業について紹介した。聴衆は、現職教師、警察、消防関係、一般市民であった。
・大阪教育大学附属池田中学校：安全研修講師	平成２２年１２月	同じキャンパス内にありながら、附属池田中学校では、教職員対象の不審者対応訓練が行われていなかった。そのことを憂慮した当時の教務主任に相談を受け、講師として赴いた。不審者対応訓練の意義と方法を提案し、実際に訓練を行い、事後講評を行った。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２３年５月	「学校安全と安全教育」というタイトルで、９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校で行っている、教職員対象不審者対応訓練の映像を資料として使用し、訓練による二次的な効果としての、教職員の安全意識の向上について話した。本研修には、宮崎県下の安全担当教職員役２００名が参加した。また、本講演には関西テレビが同行取材を行い、後日、一部が放映された。
・豊中市立第５中学校：安全研修講師	平成２３年８月	豊中市立第５中学校において、不審者対応訓練のコーディネート、及び講演「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」を行った。当校は、教職員による不審者対応訓練は初めてであったため、最初は同僚性が弊害となり、戸惑う様子が見られたが、講演後、「今まで安全のことを考えてこなかった自分が恥ずかしい」という言葉が聞かれた。
・守口市立梶中学校区：安全研修講師	平成２３年８月	夏期休業中に行われた教職員の研修会で、守口市立梶中学校区の梶中学校、梶小学校、藤田小学校、３校の教職員全員が参加した研修会で、講師を務め、９０分の講演を行った。「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」というタイトルで行い、附属池田小学校事件や阪神・淡路大震災を題材に、教訓から学ぶことの必要性を説いた。
・竜王町教育委員会：教職員夏期研修会講師	平成２３年８月	滋賀県の竜王町教育委員会が主催する、教職員夏期研修会において、安全研修の講師を務めた。竜王町の教職員、約５０名が集まった。「学校安全と安全教育」というタイトルで講演を行い、火災・地震災害・交通安全・水難災害・防犯の各カテゴリーにおける安全教育の実践例を紹介し、安全教育が及ぼす児童への影響について話した。
・守口市教育委員会：安全指導者講習会講師	平成２３年８月	守口市教育委員会主催の安全指導者研修会の講師は、平成２１年度から続く、３年目になる。年度ごとに各校の安全担当者が変わっており、毎年研修会を開くことの必要性を実感した研修会でもあった。本研修会では、例年、大阪教育大学附属池田小学校の教職員対象不審者対応訓練のビデオを題材として使用し、訓練の必要性と２次的な効果（教職員の安全意識の向上）について述べるようにしている。

・竜王町教育委員会：竜王町校長教頭会講師	平成２３年８月	本研修会は、竜王町の校長、教頭会であるため、学校安全にかかわる際の管理職の役割について内容を構成した。「学校安全のリーダー性について～管理職の役割～」というタイトルで講演を行った。従って、これまで講演した内容を管理職向けに再構成し、不審者対応時の管理職の役割や、ID カードを徹底することの必要性、教職員の安全意識を向上させていくことの必要性と方法について提案した。
・豊中市立桜塚小学校区：３校合同研修会講師	平成２３年８月	例年、豊中市立南桜塚小学校で開催している夏期研修会を拡大し、同校区の豊中市立第３中学校、桜塚小学校、南桜塚小学校の３校合同で開かれた研修会で、およそ１００名が参加した。「子供たちの命を守るために必要なこと～学校安全設備と安全教育～」と題し、お金がかからないで、見落としている学校安全についてと、安全教育に関しては、東日本大震災を題材に話し、マンネリ化しない避難訓練について話した。
・大阪教育大学附属池田中学校：校内研修会講師	平成２３年１２月	平成２２年度に引き続き、２年目の研修会である。初年度は初めての不審者対応訓練であり、戸惑いがちな様子がみられたが、２度目とあって、教職員の安全意識が飛躍的に向上し、積極的に研修会に参加している様子が伺えた。訓練後、訓練の振り返りを指導助言した。当校はまた、今回の訓練の様子をビデオ撮影し、後に校内研修で振り返りを行った。
・大阪教育大学メンタルサポートセンター：講演	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田小学校事件後に、児童のメンタルケアを目的として設置された、大阪教育大学メンタルサポートセンターが開催した学校安全フォーラムにおいて、大阪教育大学附属池田小学校の「安全科」に関する紹介と、安全教育の実践内容の紹介、学校安全に関する講演を行った。全国から約２００名の参加者があった。
・豊中市教育委員会：管理職研修会講師	平成２４年２月	豊中市教育委員会が主催する管理職研修会で、平成２４年度においては学校安全に関する研修会を計画され、実施されたものである。管理職が対象ということで、これまでの講演内容を管理職対象のものに再構成した。また、主催者側の要望もあり、ワークショップも取り入れた。ワークショップでは、不審者対応時にどのように教職員を動かすか、どのようなリーダーシップを発揮いするかという内容で行った。
・岬町立岬中学校：夏期研修会講師	平成２４年５月	岬中学校における本研修会は、強く記憶に残るものであった。まず教職員の安全意識が非常に高く、それは安全担当者の熱心な姿勢からくるものであると推察された。当日実際に行われた不審者対応訓練では、防火扉を有効に使い、教職員同士で声を掛け合いながら不審者の居場所を限定していくという、大変工夫されたものであった。一人の教員の熱意やリーダーシップがうまく作用している様子が伺えた。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２４年５月	平成２３年度に引き続き、２年目の宮崎県での講演となった。前年度は、内容については講演者に一任されたが、当年度の講演は、地震災害についてのもという要請があった。東日本大震災をうけてのものと思われる。「釜石の奇跡に学ぶ～避難訓練についての再考～」と題し、休み時間に避難訓練をすることなどの重要性について話した。

・大阪教育大学：「学校安全の日」事業講師	平成２４年６月	大阪教育大学柏原キャンパスにおいて、学部生、及び大学院生、２００名を対象に、「安全な学校を作る教師になるために」というタイトルで講演を行った。将来、教師になったときの、子供たちを守る方法と意味について話した。この講演は、朝日、読売、毎日新聞の取材を受け、後日各紙に掲載された。
・守口市教育委員会：幼稚園長研修会講師	平成２４年７月	守口市の幼稚園長を対象に、「子どもたちの命を守るために」というタイトルで９０分の講演を行った。ここでは、交通安全を題材として取り上げ、幼稚園から小学校に上がった時の交通事故の増加に関する資料を示し、幼稚園児に対する安全教育の必要性と方法について話した。
・守口市立金田小学校：安全教育研修会講師	平成２４年７月	守口市立金田小学校において、安全教育の模範授業を行った。参会者は、守口市立小学校の各安全担当者、及び管理職が、合計５０名程度だった。授業は第６学年を対象とし、「命の避難訓練　～釜石の奇跡に学ぶ～」というテーマで行った。予め、授業クラスの児童対象にアンケート調査を行い、避難訓練に対するマンネリ感を払しょくすることをねらいとした授業を行った。児童の下校後、参会者を対象に授業の振り返りも含め、９０分の講演を行った。
・守口市立寺方小学校：安全研修会講師	平成２４年７月	「これからの学校安全」というタイトルで、寺方小学校の教職員対象の夏期研修会で、９０分の講演を行った。学校安全設備・教職員の安全意識・安全教育の３つの柱が大切であることを述べた。学校安全設備については、大阪教育大学附属池田小学校事件の教訓から、校門の一門化についてと ID カードの必要性について、教職員の安全意識については不審者対応訓練について、安全教育については、東日本大震災を題材にして講演を行った。
・滋賀県日野町教育委員会：安全研修会講師	平成２４年８月	日野町立小学校の教職員、約８０名を対象に、１２０分の講演を行った。「これからの学校安全」というタイトルで行い、学校安全設備・教職員の安全意識・安全教育の３本柱について話した。特に安全教育では、「もしも休み時間に地震が起こったら?」という実践について話し、避難訓練の方法改善について強調した。
・彦根市立佐和山小学校：教職員夏期研修会講師	平成２４年８月	「これからの学校安全」というタイトルで、滋賀県の彦根市立佐和山小学校の教職員、約２０名を対象に、１２０分の講演を行った。安全教育については、当時発表された中教審答申において、学校安全部会が、保健体育などの教科に分散していた防災教育について、学校活動として独立させ、将来的な教科化も見据えて位置づけを明確にするように文部科学省に求める方針を打ち出したことを話題に話した。
・豊中市立南桜塚小学校：夏期研修会講師	平成２４年８月	平成２１年度から続く、４年目の豊中市立南桜塚小学校の夏期研修会である。「これからの学校安全」と題し、安全教育については特に東日本大震災における、「釜石の奇跡」を題材とした。取材した釜石東中学校の、大震災時２年生だった生徒の言葉、「奇跡なんかじゃない。自分たちは避難訓練をしていたから助かったんだ」という言葉を紹介し、避難訓練の再考と方法改善の必要性について話した。

・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２４年１２月	守口市立八雲中学校において、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業として、東日本大震災を教材とする授業を行った。またその後、教職員を対象に、「子どもたちの命を守るということ」と題し、９０分の講演を行った。ここでは、授業の振り返りも含めて、「釜石の奇跡」について紹介し、教訓から学ぶべき内容について話した。
・岡山県備前市立三石小学校：ＰＴＡ人権教育小中合同研修会講師	平成２５年６月	備前市立三石小学校において、午前の人権教育参観で第４学年において、「溺れかけた兄妹」という、作家の自伝的作品を題材にした安全教育（水難災害）の授業を行い、午後からＰＴＡ人権教育小中合同研修会で、「命を大切にする教育」と題し、安全教育と学校安全に関して、教員・保護者を対象に９０分の講演を行った。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	当校での安全研修講師は、５年続けてのものである。豊中市立南桜塚小学校の安全研修会において、当校の不審者対応訓練のコーディネート、及び指導助言を行うとともに、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。当校では、３年間の安全研修で教職員の安全意識も向上し、全員が ID カードを着けるようになったという、校長先生からのお話があった。
・茨木市立穂積小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	茨木市立穂積小学校の安全研修会において、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の紹介と、「安全科」の授業実践を紹介し、具体的な安全対策について述べた。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２５年１２月	守口市立八雲中学校において、前年度に引き続き、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業を行った。当日は、全校生徒による地震災害の避難訓練も行われ、見学をした。授業内容は、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」であり、いじめを題材とした授業を行った。授業後、教職員を対象に、いじめに関する講演を９０分行った。
・守口市教育研究会　生活・総合部会：指導助言	平成２５年１２月	守口市教育研究会生活・総合部会において、当研究会の担当者による地震災害の安全教育の授業を参観し、その指導助言を行うとともに、「これからの学校安全と安全教育」と題し、６０分の講演を行った。ここでは、担当者の授業実践の内容を絡め、教科教育と安全教育の類似点と相違点について話し，児童にとって有効な安全教育の必要性について話した。
・寝屋川市立堀溝小学校：安全研修講師	平成２６年６月	寝屋川市立堀溝小学校において、５，６年生を対象に、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」と題して安全教育に関する授業を行い、児童下校後に、教職員対象に、『「有効な」安全教育とは　～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」を例に～』と題し、９０分の講演を行った。ここでは、本当に児童にとって「安全で安心な学校」とは何かについて話し、いじめについての取り組みの必要性と方法について話した。

・岬町立淡輪小学校：安全研修講師	平成２６年 ８月	本研修会は、平成２４年５月に行われた、岬町立岬中学校の研修会に参加していた、淡輪小学校の安全担当者の依頼によるものであった。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで、１２０分の講演を行った。特に大阪教育大学附属池田小学校事件の詳細を話し、そこから教訓として学ぶべき事柄を話した。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修講師	平成２６年 ８月	平成２１年度から続く、南桜塚小学校の６年目の研修会講師である。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで９０分の講演を行った。特に、学級崩壊やいじめといった、教育の現代的課題について話した。当校では、学校安全については過去５年間話していたため、安全に対する意識は向上し、取り組みを強化している様子であった。そこで一度立ち止まって考えたとき、子供たちにとっての「安全で安心な学校」とは、まずいじめなどがない学校であることを考えていくことを進めた。
・寝屋川市立第７中学校区「いのちの教育」研修会：講師	平成２６年 ８月	寝屋川市の第７中学校校区である、第７中学校、南小学校、堀溝小学校の３校合同で開催された、「いのちの教育」研修会で、１２０分の講演を行った。「いのちの教育としての安全教育～“Smile School“の提案～」と題し、大阪教育大学附属池田小学校において実践した研究授業「Smile School～『いじめと命』未来に向けて考えよう～」の実践内容と、授業実践時の児童の反応を中心として、いじめについて子供たちが向き合う方法について話した。
・三郷町ひまわりセミナー：講師	平成２６年 １１月	現在勤務する奈良学園大学人間教育学部がある、奈良県生駒郡三郷町における、一般向けのセミナーで９０分の講演を行った。当日は、三郷町の町長、教育長、地域の小学校校長、市民ボランティア団体、一般の町民等、様々な人が参加した。「子供たちの命を守る「安全・安心」～町と大人の役割～」と題し、事件や事故、災害の実例を挙げながら、どのようにして子供たちの命を守るのかという、地域の大人の役割について話した。
・豊中市立豊南小学校：初任者研修指導助言	平成２６年 １１月	豊中市立豊南小学校の初任者教員の、校内研究授業（国語・算数）の研究授業を参観し、授業後に指導助言を行った。当該教員は２年生を担任しており、特に、発達的課題を持った児童がいる学級における、一斉授業のあり方、方法について指導助言を行った。
・豊中市立豊南小学校校内安全研修：講師	平成２６年 １２月	当校ではこれまで、校内の安全研修を行ったことがなく、研修のあり方、不審者対応訓練について、教職員の安全意識の向上についての講演依頼によって行った。当校教員約３０名に９０分の講演を行った。大阪教育大学附属池田小学校事件の教訓を例に挙げ、児童の安全を守るために学校、教職員が取り組んでいくべき内容について話した。
５　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 小学校教諭一種免許状 平８小一第２３７８号	 平成９年 ３月	 大阪府教育委員会
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 大阪教育大学附属池田小学校教諭 ・図画工作科主任 ・第５学年主任 ・第６学年主任 ・第４学年主任 ・第２学年主任 ・学校安全主任 ・学校安全主任 ・図画工作科主任	 平成１７年～ 平成２１年度 平成２０年度 平成２１年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２５年度	 大阪教育大学附属池田小学校における、主たる校務分掌を記した。着任後すぐに、５年間図画工作科主任になり、教科論を記した。また、その後４年間学年主任の業務においては、新任指導も含め、円滑な学年経営に努め、成果を残してきた。学校安全主任は、当該校の要とも言える。その任に就き、学校安全の推進、保持、発信、また、安全教育の推進と、責務を果たしてきた。
４　その他 「研究助成」 １．下中科学研究助成(下中科学財団) 『ＡＥＤを使用した小学生における「命の教育」の有効性に関する実証的研究』	 平成２０年 ３月	 本研究は、ＡＥＤ（自動体外式除細動器）を用いた授業実践が、児童に命の大切さを実感させるために有効であることを検証しようとするものである。日本においては慶應義塾一貫校においてＢＬＳ教育が実施されているのみである。ただし、慶應義塾においてもＡＥＤを使用した実践はまだされておらず、日本においては先行事例が見当たらない。そこで本研究においては、ＢＬＳのスキルを学ぶ中で児童にＡＥＤを体験させ、バイスタンダーとしての意識を育みながら、そこに、実体のない『命』というものの大切さを実感させることを目的とする。
２．下中科学研究助成(下中科学財団) 『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究』	平成２２年 ３月	安全意識調査を行ったとき、安全学習を実施したクラスの児童と実施していないクラスの児童では、回答結果に差異が生じる様相が見られた。この差異は、感覚的には感じてはいても、実証的に研究された事例はない。本研究においては、１年生から６年生までの児童の安全学習履歴と安全意識、けがや事故の状況を調査することにより、その差異を明らかにすることによって、安全教育の必要性と価値に実証性を持たせることを目的とした研究。
３．科学研究助成金（奨励研究） 独立行政法人日本学術振興会 『児童の発達段階に応じた安全教育プログラムの開発に関する実証的研究』	平成２４年 ６月	安全教育における、発達段階についての研究はまだ未開発である。しかし、発達段階を考慮しなければ、真に効果的な安全教育はなされない。本研究では、公立小学校の協力校等で授業実践を行い、そのデータをもとに、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムを作成することを目的とする。

４．日本教育弘済会教育論文　奨励賞受賞 『安全教育のレリバンスに関する研究』	平成２５年 ２月	大阪教育弘済会の教育論文に応募したところ、個人部門で上部団体の主催する日本教育弘済会の教育賞に推薦され、奨励賞を受賞した。 １つの授業を低、中、高学年で実施し、安全教育と児童の発達段階の妥当性を検証した論文である。
５．科学研究助成金(奨励研究) 独立行政法人日本学術振興会 『安全教育のレリバンスに関する実証的研究』	平成２５年 ６月	これまでの安全教育の現状と課題として、小学校６か年というスパンにおける、児童の学齢の差異を考慮した安全教育プログラムの開発がされてこず、避難訓練や「いかのおすし」に代表される標語的用語などによる安全指導内容が見直されてこなかった。また、日常の山積する課題対応に追われる多くの公立学校において、年間で実施可能で、かつ有効な安全教育プログラムの開発がされてこなかった。ことが考えられる。これらのことから、安全教育内容の有効性の検証と開発・児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・年間で実施する安全教育プログラムの開発が、緊急の課題と言える。これらを、『安全教育のレリバンス(妥当性)』と総称し、授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育の発展と頒布に寄与しようとするものである。
６．ＪＲ西日本あんしん財団研究助成 「児童の発達段階を考慮した『有効な』安全教育プログラムの構築に関する実証的研究」	平成２７年 ４月	これまでの研究として、「安全教育の有効性とレリバンスに関する実証的研究～大阪教育大学附属池田小学校『安全科』の実践から～」として、防犯概念・防犯スキル・自然災害・交通安全の各カテゴリにおける、児童の学齢と安全教育内容のレリバンス(妥当性)について研究を進めてきた。その中で、申請者が考案した「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌（第３巻第１号）P62-66 2010　松井)を用いて実践、検証した結果、学年に応じた有効な安全教育内容が明らかになってきた。しかし、その研究の中で新たな課題が見えてきた。そこで本研究においては、安全教育内容の有効性の検証と開発・複数小学校を対象にした児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・児童、教職員、学校に応じた安全教育プログラムの開発を行う。これらを授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育カリキュラムの開発と頒布に寄与しようとするものである
「海外視察」 ・アメリカの学校安全視察：デンバー(コロンバイン高校・小学校１校・中学校１校)ロサンゼルス(小学校１校・高校１校・ロサンゼルス市警スクールポリス)	平成１８年 １０月	コロンバイン高校においては、過去に当該校で発生した、生徒による銃乱射事件における概要、残された教訓を、校長から聞き取ることができた。そこで聞いた話を、学校安全に生かしていくことができた。
・中国：華東師範大学附属小学校	平成１９年 １０月	華東師範大学附属小学校において、当該校４年生児童を対象に安全教育の授業を実施した。四川大地震を経験した中国において、地震災害時の避難の方法について、日本と中国を比較しながら、よりよい方法を探る授業を行った。
・台湾：花蓮実験学校視察	平成２１年 ３月	大阪教育大学附属池田小学校との姉妹校提携の締結に訪れ、朝礼の様子、図画工作科と音楽科の授業視察を行った。
・台湾：台中教育大学教育国際シンポジウム	平成２４年 １１月	台中教育大学において開催された教育国際シンポジウムに参加し、台中教育大学、及び屏東教育大学を視察した。
・カンボジア：メコン大学	平成２６年 ２月	奈良学園大学人間教育学部生および看護医療学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １.『資質・能力を育む新図画工作科授業づくりのアイデア集』 （３年生編）	共著	平成19年8月	明治図書	本シリーズは、図画工作における資質や能力の育成を目指して、教材のアイデアや授業づくりのポイントを中心に構成している。本書３年生編では、子どもたちの発達段階を考慮した、４５の実践例を紹介している。 Ｂ５判　全１１６頁 編者：岩崎　由紀夫・竹井　史 共著者：大津雅子・松井典夫・福岡知子・松山辰也・岩永宏紀・竹田五月・青田伸一・遠藤光広・中野貴之・中田稔・日岡健二・西尾正寛・小野寺信子・高橋香苗・河野敬重・杉原世紀・荒治和幸・福田裕美・辻政博・内藤宏子・西村真二・久田雅子・小笠原範泰・玉置一仁・田中弘子・武田信吾・山田和美・住田正彦・岡田隆史・今西雅美・今村和代・丸野譲・濱口由美・福森真一 本人担当部分:「いろいろ絵具でマイストーリー」 （１４頁－１５頁）を単著 　本実践は、絵画のモダンテクニックの基礎を学んだ上で、さらにそれらの技能を自分なりに変容させ、表現したい「色合い」「感じ」を作り出すために、児童が工夫する授業実践である。学習指導要領における、「Ａ表現（２）」に該当する内容である。中学年においては、材料や用具の経験を生かし、表したい方法や用途を見つけて表す内容が大切である。 　様々な用具、材料の準備が、授業者においては肝要であることも記述した。 「紙テープの変身」（２２頁－２３頁）を単著 　学習指導要領における、「Ａ表現（２）」に該当する内容である。本実践は、硬さ、色などが違う様々な種類の紙テープを題材とし、それらの特徴を生かし、自らの表現したいイメージに合うものを選択し、造形表現活動を行う授業実践である。硬さを生かして立体的に表現したり、貼付の工夫をするなど、個々に工夫を繰り返しながら、「発想や構想の能力」と「創造的な技能」が融合する題材である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２『いのちの教育』	共著	平成21年 10月	東洋館出版	平成１３年６月８日に発生した児童殺傷事件。それ以来、安全教育と道徳を中心として、児童の安全と安心のために取り組んできた８年間の教育・授業実践を２６例載せた。教育関係者がすぐにでも実践できるように、指導計画や板書例を掲載し、授業による児童の変容についても、具体的に記述した。 Ｂ５判　全１２４頁 編者：大阪教育大学附属池田小学校 共著者：藤田大輔・佐々木靖・浅田正志・井上伸一・岩井伸夫・岩井陽介・江原悦子・小原愛子・垣内幸太・鎌田菜絵・岸本卓也・坂下剛・佐藤学・田中毅・竹本和也・辻匡美・冨田有香・長野純子・中村晶子・西江なお子・西村恭美・能川正人・土師尚美・林美恵子・孕石泰孝・平田葵・升村誠志・松井典夫・松浦恵・松原梨沙・薬師寺美江・矢藤学・柳井友裕・山崎聡・龍神美和 本人担当部分：「いのちをつなぐ機器ＡＥＤ」(１１５頁－１１８頁)を単著 本教材は，ここ数年で普及率が大幅に上昇しているＡＥＤ（Automated External Defibrillator)［自動体外式除細動器］についての知識理解を深め，また，生命と常に向き合う職業を持つ人の話を聞き、交流することによって，豊かな人間的感性と生命に対するリアルな認識を身につけていくきっかけとするものである。児童にＡＥＤの使用認可に至るまでの人々の努力について考えさせ，また，実際にＡＥＤを体験することによって、ハードがあるから安心なのではなく，使用する（命を助けようとする）ことの勇気について考えることによって，実体のない「いのち」の尊さに実感を持たせることがねらいである。 「命のバイスタンダー」 (１１９頁－１２２頁)を単著 命を大切にしなければならないということは，誰しも分かっていることである。しかし，命というものには実態がないだけに，実感を持つことは難しい。子どもたちにとっては尚更である。そこで本教材では、一次救命処置のスキルを学び、もしも傷病者が自分の目の前にいたとき、「何かできるだろう」と思う自分から、「何もできないけど、自分にできることをさがして行動したい」と思える自分に変容させることをねらいとした。怖いと思う自分。何もできない無力な自分。でも、できる限りのことはしたいと考える自分。そのような自分を自己認識することが、実感を伴った命の大切さの実感へと結びつくと考えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．学校安全　３６のナラティブ	共著	平成２６年3月	教育出版	子供たちの命を守り、安全で安心できる生活のために、学校は何ができ、また、何をすべきかという命題のもとに、学校安全に関わる著者陣が原稿を寄せてできた本。この安全・安心に関する問いかけに対しては、すでに多くの解説書や教材集、マニュアル本等が刊行されている。しかしそれらは、ともすれば上からの押し付けのような論が多い。そこで本書では、各著者が「私はこう考えている」「私はこんな体験をした」という、お話風の「語り（ナラティブ）」として編集された。 Ｂ５版　全１５７頁 編者：長尾彰夫 共著者：小林忠三・浜條信彦・松井典夫・若狭孝太郎・神田英幸・前馬晋策・丸山涼子・植木美佳・砂田信夫・中井尚人・佃繁・松田智子・伊原正俊・藤田大輔・諏訪清二・村川雅弘・立田慶裕 本人担当部分 「スリッパとＩＤカード」（pp14-15）を単著 概要 　校内に配備された多数の防犯ブザー，赤外線システム，玄関の二重扉，可視性を重視した透明度の高い校舎。それらはお金がかかるものである。しかし，「お金がかからない学校安全」は，見落としていることがたくさんある。そこで本項では、スリッパや ID カードの重要性、他にも，職員室の机上（可視性・校内安全に対する雰囲気），教室の机の物かけ（いざという時の弊害），教室の窓側のロッカーの上（可視性・安全性），放送の使用方法（緊急時の連絡が可能か），安全マニュアルの見直し（実現可能性・教職員の安全意識），教職員の訓練の実施（子どもたちの安全・教職員の安全意識）などを紹介し、見落としがちな学校安全の重要性について書いた。 「安全な公園は危険な公園？」（pp18-19）を単著 概要 　危険予知力と危険回避力は，矛盾することもあるということについて、入り口が一つの公園と、入り口が二つある公園の安全性比較から書いた。「危ないな」と感じると同時に，子どもは自分の身を守る方法も考える。例えば，路上駐車の車があり，まわりに人がいないとき，「車の陰から人が出てきたら」や「車に連れ込まれたら」と考えるのが危険予知であり，その車から離れて歩いたり，とっさに道を変えるのが危険回避である。ここに矛盾はないが、公園の例の場合，「逃げる」という意識（危険回避）が優先してしまうのである。 「わるい人とはどんな人？」（pp25－27）を単著 概要 こんな人が悪い人だという答えは，どこにもなく。こんな人を見たら，すぐに逃げましょうと教えることも，するべきではない。既成の概念を崩し，正解がないことを知り，それでも行動しなければならないことを知り，

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				今，教室で頭を振り絞って考えておくことが大切なのである。その思考と体験の蓄積が，「最も適切な行動」を生み出す礎になると考える。「知らない人にはついていかないようにしましょう」と，指導することは，果たして子どもたちの安全を保障する教えなのだろうか。「この行動が安全だ」と教えるだけでは，逆に不安全な結果を招く可能性もある。ただ対処する方法を教えるだけでは，安全を生み出す力に結びつかないばかりか，その方法は，果たして正解だと，断言できるものではない。既成の概念や教えを正しいと思い込むことの怖さを書いた。 「いかのおすしとおはしも」（pp48－49）を単著 概要 　「いかのいすし」や「おはしも」に代表される、安全標語は、どれも大切なことだが，その一方で、どれも子どもたちは，当たり前に「知っていること」である。そして、「いかのおすしを指導したから安全だ」「いかのおすしを思い出せば安全だ」「いざというときには，いかのおすしが役に立つ」という考えを持つ。しかし大切なのは，「ついていかない」という指導ではなく，「知らない人ってどんな人」かを学習し，思考し，判断材料を蓄積することである。「大声を出す」と指導するのではなく，大声を出すことの難しさを体験，実感させることである。「何かあったらすぐ知らせる」と言葉を覚えさせるのではなく，どのタイミングで，どこに，どんな方法で知らせるのか，考え，体験することである。安易に「言葉」だけで指導するのは，逆に「不安全」を生み出す可能性があるということについて書いた。 「休み時間に地震が起きたらどうしよう」（pp54－57）を単著 概要 　多くの学校園での避難訓練は，「2 時間目の授業中」という想定で行われる。実施時期にしても同様で，1 月に避難訓練をしていると，「今年は 7 月にやってみよう」とはなかなかならない学校現場の現状がある。そこでここでは，休み時間に地震が起こることを想定した学習と，実際の休み時間の避難訓練の取り組みについて紹介した。児童に予め、休み時間に遊ぶ場所と、もしもそこで地震が発生したら、どのように避難するかを想定させ、避難訓練で検証する授業を紹介した。児童はその時、予め想定した行動とは違う行動をした児童がいた。それが正解かどうかは結果しか物語らないが、とっさに判断をする体験の積み重ねの重要性を書いた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「いろいろな不審者対応訓練」(pp62－65) を単著 概要 　これまで，いろいろな学校で不審者対応訓練の講師を務めてきたが、その中で,「この学校は素晴らしい！」と思えたのは，数少ない。それだけに，校内で行う不審者対応訓練は難しく，また，その難しさに気づいていない学校が多いように感じられる。本項では、小中４校での訓練の様子と実態を紹介し、そこから、不審者対応訓練の困難性と必要性について述べた。 「火災現場に戻らない､は正解か」(pp74－77) を単著 概要 　火災現場に「戻らない」というのは，命を守る上で大切なことである。しかし，絶対に戻ってはいけないのだろうか。本人の判断で戻り，大切な命を救った人もいる。ここでは，災害現場での葛藤と判断を体験する授業について書いた。安全指導は，セオリーを教え込みがちである。そのセオリーが現場で，いざという時に大いに知識として役立つことだろう。しかし安全学習は，その時，その場に応じて知識や体験を活用し,「最も適切な判断をすることができる力」を育むことである。その力は，単なる知識ではなく，様々な場面で臨機応変に対応することができ，子どもたちの，生涯にわたる安全・安心を保障していくものであるということを、火災現場での葛藤を考えさせる授業を例にして書いた。 「命のバイスタンダーの授業から」（pp82－87）を単著 概要 「命は大切」なことは，誰もが言い，誰もがわかっていることである。しかし，実体のない命に対して、それは本当に実感できるものではなく、子供たちにとってはなおさらである。そこで子どもたちに，命に触れることの怖さ，命に対する畏れを感じさせることによって,「命の大切さ」の実感を育むことを目的とした,『命のバイスタンダー』の授業を考案し，実践した。 辞書でバイスタンダーという言葉を検索すると,「傍観者」となる。言い換えると,「やじうま」である。道端で突然目の前の人が倒れたところを想像したとき，ただの「傍観者」となるのか，その人の命のために「何か」をしようとするのか。 　この実践では，ある教材を使用したことによって生じた，子どもたちの大きな変化が,「命の大切さの実感」へと結びついた。 「溺れかけた兄妹を教材にして」（pp108－111）を単著 概要 　有島武郎の自伝的短編『溺れかけた兄妹』を題材にした、水難災害の授業を紹介することから、助けたいという「道徳的心情」と，二次災害の恐れとの狭間に生じた葛藤、そこから学ぶものについて述べた。児童の授業の中での言葉に､「その時になってみないとわからない。」という言葉があった。この言葉は，

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				授業の中で判断し，自分の立場を明らかにすることができず，その場しのぎの言葉のように聞こえる。しかし，波の高さ，周りの状況，大切な人を助けたいという，その場の切迫した状況。それらが相互作用し，判断するのだという臨場感を子どもたちが感じていたからこその言葉であったように感じられ、子どもたちは，安全な行動と，命を守りたいという心情の間の葛藤を「実体験」したのであり、そこに安全教育で大切な、実体験からくる学びの大切さについて書いた。
（学術論文） １.『マイ　サイン　プレート』	単著	平成１８年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要 ｐｐ４０－４３	平成１７年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。 「鑑賞による発想の広がりは、表現の変容へと結びつくのかを、児童の活動と作品から検証する」という研究課題を持って公開授業を行った。図画工作科における評価の観点の、「鑑賞の能力」を、絵画の鑑賞という狭義に留めず、「発想や構想の能力」に結びつける、幅広い「鑑賞」の捉え方を提案した。街中に無数に存在する看板に注目させ、そのデザイン性や形状、色の組み合わせなどに注目し、表現活動へと結びつけた。
２.『主体的な活動で豊かな感性を育む図画工作科の学習Ⅱ』	単著	平成１８年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 ｐｐ９０－９４	大阪教育大学附属池田小学校の各論、図画工作科論を記述したもの。 論旨としては、小学校教育における図画工作科は、美術家を育てるためのものではなく、教科教育として、表現力や技能などの能力を育むとともに、表現することの楽しさ、喜びを実感したり、協同的に学ぶことによって、生涯学習としての能力育成が肝要であることを述べた。そこで、評価の観点における「鑑賞の能力」に着目し、その観点を起点とした協同的な学習が、個々の造形表現活動の能力を育成すると記述した。
３.『造形表現活動における子どもの変容 ～鑑賞活動を起点とした個と集団の関わりから～』	単著	平成１８年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 「とごころ」 ｐｐ９３－９８	造形表現活動とは、自らを表現する自己表現活動である。自己表現の達成は、子どもたちにとってひとつの「夢」である。そこで記録集「夢へのとびら」を作成し、自分らしい「夢」を達成するために、鑑賞活動を起点として研究活動を進めてきた。学習指導要領における、「２内容　Ｂ鑑賞（１）イ」の事項に注目した内容となっている。本稿では、記録集「夢へのとびら」を紐解きながら、造形表現活動における児童の変容について記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.「自分らしさを育む図画工作科の授業」	単著	平成１８年７月	広島大学附属小学校「学校教育」ｐｐ２４－２５	広島大学附属小学校研究組織が発刊している「学校教育」への投稿。 高学年で実践した、『壁画アーティストになろう』の実践から、「自分らしさ」を発揮して表現活動を行うことの重要性について提言した。自分らしさとは、発想や構想に技能を生かすことができたときに達成に向かう。自然の土を使いその土の色を生かしたり、アクリル絵の具で着色して絵画を造形する本実践は、児童個々の思いが表現され、「自分らしさ」と個々のこだわりが存分に反映された造形表現活動となった。
５.『いのちを守る機器ＡＥＤ～つながるいのちの実感～』	単著	平成１９年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ54－57	平成１８年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の学習指導案。「いのちの尊さを実感するために、人(産婦人科医)やもの(ＡＥＤ)と出会い、学ぶことは、自尊感情を育むのに有効である」という仮説を立て、実証する公開授業を行った。本実践では、ＡＥＤを題材とし、そのボタンが持つ意味の大きさから、いのちの尊さの実感へと結びつけた。
６.『自分らしさを表現する図画工作科の学習～創造的な技能と鑑賞活動を起点として～』	単著	平成１９年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要「とごころ」ｐｐ４６－４７	造形表現活動において、児童が「自分らしさ」を発揮しながら主体的に活動を展開することが大切である。しかし、それは「好きなように」とは異なった意味を持つ。児童が題材に対して豊かなイメージを持ち、その活動に没頭したとき、技能がついてこないために活動を投げ出してしまう姿を見ることがある。そこで、表現をより豊かにする鑑賞活動を起点として、「創造的な技能」をベースとした「自分らしい」造形表現活動を主題とした研究報告を記述した。
７.『ＢＬＳ(Basic Life Support) 教育の可能性～スキル学習と命の実感の融合～』	単著	平成１９年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要「とごころ」ｐｐ３５－４０	ＢＬＳ(Basic　Life　Support)教育の１年目の研究報告。命の大切さは、わかってはいても「命」というものに実体がないだけに、実感することは容易ではない。命の大切さの実感を育むための教育活動として、ＡＥＤを用いた授業を考案し、実践した結果を報告した。ＡＥＤのボタンは誰にでも容易に押すことができる。しかし、そのボタンの重みを感じる感性が、小学生にはあり、初等教育段階での命の学習の有効性を実感した実践だった。
８.『命のバイスタンダー　～そばにいる人として～』	単著	平成１９年１１月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ５４－５７	平成１９年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の学習指導案。 この年、授業モデルとして「かまえる・のぞむ・ひらく・ふかめる・ふりかえる」の５段階モデルを考案し、指導案に反映させて提案した。実践においては、前年度の公開授業「いのちをつなぐ機器ＡＥＤ」の反省から、ＡＥＤをトピック的に扱うのではなく、ＢＬＳ教育全般を通して、命の大切さの実感へと結びつけた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９.『心模様　～版で表す心の「感じ」～』	単著	平成１９年１１月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ７４－７７	平成１９年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。多色刷り版画を題材とし、思考と試行を繰り返す公開授業を行った。表したことに合わせて材料や用具の特徴を捉え、思考し、試し、進めようとする活動は、児童が表現しようとしている個々の「感じ」を表す上で大切な活動である。
１０.『わたしの部屋のルミナリエ』	単著	平成２０年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ35－38	平成１９年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。主たる題材として、ブラックライトを使用した。紙粘土と蛍光塗料で作成した作品を、別室に作った暗室で、ブラックライトに照らしてイメージと照合し、「試し」「作り変える」場の設定の重要性を提案した。
１１.『ＢＬＳ教育の可能性Ⅱ～第６学年「命のバイスタンダー」の実践から～』	単著	平成２０年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要「とごころ」ｐｐ５３－５６	ＢＬＳ(Basic　Life　Support)教育の２年目の研究経過報告。 本稿では、ＢＬＳ教育の初年度、ＡＥＤのみを用いて学習活動を行った結果を述べ、そこから見出された課題として、ＡＥＤのみをトピック的に扱うのではなく、ＢＬＳ(一次救命処置)全般において学習することが、より学習効果を高めるという仮定からの研究報告。行った実践から、Hidden curriculum としての命の大切さの実感が、より高まったことを、実証的研究として報告した。
１２.『変幻自在のミラーワールド　～１枚のアルミ板から～』	単著	平成２１年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ66－69	平成２０年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の図画工作科学習指導案。アルミ板は、切ったり曲げたりする材質による特性や、鏡のように何かを映す特徴など、多彩な可能性を秘めた材料である。主となる材料を限定し、その特徴を生かして発想・構想する試みは、創造表現の能力やデザインの能力を高めるのに有効である。
１３.『命のバイスタンダー　～私が本当にできること～』	単著	平成２１年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ３５－３８	平成２０年度　大阪教育大学附属池田小学校研究協議会における、公開授業の学習指導案。前年度の公開授業では、命の重さの実感を高める教材として、消防署の協力により入手できた、実際のＡＥＤのボイスレコーダーを使用した。非常に効果的な教材だったが、公立小学校等で授業をすることを考えたとき、汎用性が低い。そこで本実践では、同様の場面で画像を用いた授業を行い、その効果を検証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１４.『ＢＬＳ教育と命の実感の融合の可能性Ⅲ　～「命のバイスタンダー」の授業方法の変遷と命の実感を育む効果の検証～』	単著	平成２１年３月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要「とごころ」ｐｐ９３－９８	ＢＬＳ(Basic Life Support)教育に携わって３年目であり、その軌跡を記述したもの。紐解くと、汎用的な BLS 教育カリキュラムを模索し続けた結果、BLS 教育の内容が年々シンプルになった。このことは、BLS のスキル学習を行うだけでも、命の大切さの実感へと近づける有効な手立てであることを示している。本稿では、過去の指導内容を比較検討し、そこから児童の変容を読み取り、より汎用性のある教育方法を記述した。
１５.『Self Defense～震災の教訓から～』	単著	平成２２年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ４６－４９	研究協議会における公開授業の学習指導案。安全教育においては、命の大切さの実感の醸成と、実感を伴う体験活動が肝要である。本実践では、阪神淡路大震災の教訓を教材に、起振体験をもとに、6434 という死者数を、１枚の画像から考えさせ、その悲しみの実感をもとに、安全な行動に対する実践力へと結びつけた。
１６.『安全科の授業における児童の「安全・安心」の様相の変容に関する研究』(査読付)	共著	平成２２年３月	日本セーフティプロモーション学会誌第３巻１号ｐｐ６２－６６	本論文では、児童の安全・安心に対する意識の変容を客観的に調査する『安全安心様相図』を発表した。「命のバイスタンダー」の実践において、児童の変容を『安全安心様相図』を用いて継続的に調査し、安全教育が及ぼす児童への影響、効果を明らかにした。 著者／松井典夫・淺田正志・佐々木靖・藤田大輔 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した
１７. 特集巻頭言「安全科と International Safe School」	単著	平成２２年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」ｐｐ１２－１７	大阪教育大学附属池田小学校研究誌「とごころ」の発刊にあたって、巻頭言を書いたものである。文部科学省教育課程特例校としての「安全科」の発足経緯と、教科としての安全科の意味、また、日本で初めてだったＷＨＯ International Safe School の認証の経緯とその意味を記述した。
１８.『命の避難訓練』	単著	平成２３年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ３５－３６	本学習指導案では、「命の重さ、尊さに対する実感を伴った避難訓練こそ、児童にとって必要な避難訓練である。命の避難訓練は、訓練事前の、災害に対する学習の深まりがあってこそ成立する」諏旨を書いた。実態調査では、児童の中で「火災」と「避難訓練」が結びついていないという結果を示し、そこから、スモークマシンによる煙体験による指導方法を提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１９．命の大切さの実感を育む「安全科」の授業『命の避難訓練』	単著	平成２３年６月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ２４－２７	本実践報告は、マンネリ化しがちな避難訓練について、本当に「命を守る避難訓練」になっているかを再考・提案する授業実践についての報告である。授業後の協議会で、児童が火災の中でも大切な命を助けに戻りたいと発言したことについて、「安全指導としては、戻ってはいけないと教えるべきだ」という意見が出されたことを例に、「安全指導」と「安全学習」の相違について述べた。
２０.『安全教育と防犯①　学校安全の現状と課題「災害はひとごと」という意識を超えて』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」 №１１８０　平成２３年１０月１０日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	「学校は安全な場所ですか」 　この問いに対して、学校関係者はどのような答えを出すだろう。さらに「あなたの学校は安全ですか」という問いに対してならどうだろう。その問いに対して、私が代りに答えを出させてもらうなら、こう答える。 「あなたの学校は、たまたま昨日今日が無事に終わっただけで、明日もしも学校に入って事を起こそうとする人間がいたら、容易に入り、多くの犠牲者を生むでしょう。あなたの学校は、子どもたちの命を守ることができないのです。それが今の現実です」と。８人の子どもの命を失った、私たち大阪教育大学附属池田小学校の、悔恨と痛恨から生み出されてきた学校安全の取り組みに、１人でも多くの人が耳を傾け、安全で安心な学校生活と、人を傷つけない、傷つけられない子どもたちが育つことを願い、稿を起こした。
２１.『安全教育と防犯②　学校安全管理と教職員の安全意識』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」 №１１８１　平成２３年１０月１７日号 ｐｐ２４－２５ 日本教育新聞社	お金がかからない安全管理は多くある。それらの安全管理は、学校に「見えない防壁」を作る。しかし、一般的に、多くの学校園には見えない壁はなく、侵入は容易であり、事を起こし、逃げることも容易である。私は講師等で訪れる学校では、必ず「壁」を見る。「壁」とは、校門のガードであり、校舎の周囲であり、教職員集団の意識であり、管理職のリーダーシップである。ＩＤカードも見るし、履物も見る。スリッパで教職にあたること自体が、プロ意識に欠けることであり、端から子どもたちの命を守るのだという意識が欠けていると言わざるを得ない。教職員全員が、明日からスリッパをやめて、いざという時に動くことができる履物に変えることは、お金のかからない大切な安全管理である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２２.『安全教育と防犯③　不審者対応訓練について　～「訓練」の失敗から次の課題を見出す～』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」№１１８２　平成２３年１０月２４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	大阪教育大学附属池田小学校では、年間５回の教職員対象不審者対応訓練を行っている。この５回という回数に、多くの人は驚く。しかし、私たちにとっては決して多くはないと感じている。それは、何度やっても失敗し、課題を見出すからである。 平成２２年度の当校の安全研修会で、「公開不審者対応訓練」を実施した。私たちは、安全の取り組みを発信する責務を強く自覚しながらも、訓練を公開することに躊躇を覚えたまま数年を過ごした。躊躇を覚えた理由は、参会者の安全を確保する自信が持てなかったからである。それほどまでに、私たちの訓練は激しい。そしてついに昨年度の２月。公開不審者対応訓練を実施することができた。私は、コーディネートする立場だったので、客観的に参会者の表情や様子を見ていた。その表情や雰囲気で、私は公開訓練の成功を確信した。誰もがその圧倒的な緊迫感と迫力に、自身の学校園で取り組んできた訓練との違いを実感している様子だった。そして、それぞれが各地の学校に帰り、公開訓練のことを伝え、取り組んでもらえることを、私たちは願い、期待できる公開訓練となった。
２３.『有効な安全教育とは何か？　～体験と実感で子ども自身の判断を育む～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」№１１８３　平成２３年１１月７日号 ｐｐ２４－ｐ２５ 日本教育新聞社	安全教育とは、命の教育である。誰もが、「命は大切なものだ」と潜在的にはわかっている。しかし、命にはその実体がないだけに、実感することは容易ではない。その大切さに対する実感は，大人はもちろん、ましてや児童が容易に持ち得るものではない。したがって、実体のない命に対する実感は、家庭はもちろんのこと、教育活動の中で育んでいくべきものである。しかし、有効にプログラムされた安全教育を実践している学校は、どれほどあるだろう。１年生で警察を呼んで行う交通安全教室と、年間数回の避難訓練で良しとしてはいないだろうか。それで、児童が自らの命を守り、自他の生命を尊重する心情、実践力を育むことができるだろうか。それでも安全教育に取り組むことができないのは、「時間がない」「何をしていいのかわからない」「国語や算数と違い、やらなくてもだれにも文句は言われない」からである。 大阪教育大学附属池田小学校では、「安全科」を設置し、全学年で年間３５時間の安全教育を実施している。その一例を紹介した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２４.『安全教育と防犯⑤　これからの学校安全に向けて　～安全に「絶対」はなく不断の努力が必要～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」 №１１８４　平成２３年１１月１４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	今現在、すべての学校園が「安全管理マニュアル」を作成し、校内に携えているはずである。それは、義務化されたために書いたもので、実践的ではないものも多い。しかし大切なことは、「改訂を続けること」である。一度作って安心してしまってはいないだろうか。少なくとも年に一度、できれば不定期に改訂し、より実践的、現実的なマニュアルにしていくことが必要である。そして大切なことは、私たち教育者は、学校安全の既存する考えや概念を問い続け、研究し続け、前に進み続けなければならないということである。安全指導上、「良し」とされてきたことが、実際の場面で本当に児童の生命を守る術となっているのか。立ち止まり、目を逸らしていては、大切な児童の命を、失ってしまう可能性を、多くの事件、事故、災害が教えてくれているはずである
２５.「自己変容の認識と非言語コミュニケーションツールとしてのネームプレートの活用」	単著	平成２３年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ４８－４９	安全科の授業において、その客観的効果を測定するために、「安全安心様相図」(H22 松井)を考案した。授業の中で、安全安心様相図にネームプレートを置かせ、その変容を読み取り、安全教育の効果について測定することが目的だったが、ネームプレートを置く行為そのものが、児童の自己変容を認識させる有効な手立てだということがわかってきた。
２６.『釜石の奇跡に学ぶ』	単著	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田地区合同研究協議会研究紀要 ｐｐ３５－３６	平成２３年度研究協議会で行った、公開授業指導案。小中高合同研究会で、安全科の授業を中学生に行うことにより、小中高連携をはかる目的で行った。実際に釜石市を訪れて教材研究を行い、「釜石の奇跡」を題材とした。日頃の避難訓練が自分たちの命を救ったというインタビューをもとに、「有効な避難訓練とは何か」を考えさせる授業を行った。
２７.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」２０１３．№.３．巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２８．『美術における「鑑賞教育」のあり方～小学校図画工作に焦点を当てて～』	単著	平成２５年２月	週刊「教育ＰＲＯ」№１７１６　平成２５年２月５日号 ｐｐ６－１０	「美術鑑賞」という言葉から、どのような様子を想像するだろう。「鑑賞教育」とは何か。多くの学校の美術教室には、世界の有名絵画がポストカードになった、鑑賞カードがある。カードを鑑賞し、著名な芸術家の名前と作品を一致させることが鑑賞教育ではない。本稿では、小学校図画工作科における鑑賞教育のあり方について再考し、提案した。児童が新たな課題や素材に出会った時、そこから何を生み出そうとしているかという、「個の認識」の萌芽が見られる。それはまだ、イメージが具象化していない段階であり、自由闊達なものである。そして造形表現活動を始めた時、そのイメージは次第に具象化し、題材の具現化が始まる。この時、「個の認識」はいったん完結したように感じられるが、それは自己中心的なものであり、高次の自己認識とは言い難い。そこで鑑賞活動を取り入れる。例えば、個々の作品をグループで鑑賞し、意見を交流し合う。その時、思いの他、自らのイメージが伝わらない、あるいは具象化されていないことに気付く。鑑賞活動による他者評価は、妥協したり、曖昧だった認識を強化したり、高めたりするのである。
２９．人間教育と美術の力－美術体験と学校教育－ Human education and The dynamic of Art －Art experience and education at schools－　　（査読付）	単著	平成２６年４月	人間教育学会誌「人間教育学研究」創刊号ｐｐ８９－９５	図画工作・美術教育において、学習指導要領などに随所に現れる「自由」「創造的」「個性的」「喜び」という用語から教科としての特性と課題が見える。それらの用語は，図画工作・美術の他教科にはない特性を表すと同時に，捉えようによると教科としての「ゆるみ」に繋がりかねない。そこで本稿では、図画工作・美術教育の課題を歴史的背景から紐解くと同時に、図画工作・美術科が持つ教科としての特性を、鑑賞教育を中心とした特徴的な実践から論じた。
３０．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅰ ～ＩＣＴを活用した絵画教育の可能性～ Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education -Possibility of Painting Education Using ICT-	単著	平成２６年９月	奈良学園大学研究紀要第１集 ｐｐ１０９－１１５	戦後の美術教育史の中で、絵画教育が敬遠され、衰退してきた感は否めない。その理由として、絵画教育は、「上手」「下手」と２局的に、即時的に、そして結果的に評価されるため、授業者にとっても児童にとっても、それぞれの理由で積極的に取り組む関心・意欲・態度を逸してきたのだと考えられる。 そこで本稿では、新たな絵画教育の方法として、ＩＣＴ機器を活用した動画による鑑賞活動を取り入れた授業実践を紹介し、その授業の方法から、新たな絵画教育の方法や、美術教育の価値について論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３１．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅱ ―　小中連携教育の意義と課題　― Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education ―　Significance and Problems of elementary and junior high education cooperation ― （査読付き）	単著	平成２６年１２月	人間教育学会誌 「人間教育学研究」 第２号 ｐｐ１２１－１２９	小学校と中学校の義務教育期における教育の役割は、人間教育の観点での土台を築くものである。その重要性から、学校教育活動は小学校と中学校の連携を念頭に置き、共に理解し、共に手を携えた教育を実践する試みが多くなされている。 本稿においては、大阪教育大学附属池田地区合同研究会における具体的な取り組みから、小中連携の課題と意義について考察した。 小中連携の意義とは、その実践を行った小学生の、中学校以降の学力、生活の様子、いじめの実態などの経年観察が必要であり、また、小中連携を行った学年とそうでない学年の比較研究、そして小中連携教育の方法面での効果の実証研究が必要であり、多岐にわたる。今後においては、協力校との連携を進め、小中連携教育の研究をさらに進めなければならない。
３２．学校安全・安全教育	単著	平成２７年１月	平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金（基盤研究（Ｂ）課題番号 24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 「いのちの教育 カリキュラムモデルの開発と実践」 ＰＰ７７－９５	本稿は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について述べた。
（その他） 「教材の作成」 １．図画工作科ワークシート集「夢への扉」	単著	平成１７年４月～平成２０年３月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属池田小学校図画工作科主任として担当した図画工作科の授業において、ワークシート集を作成した。毎時の児童の作品制作過程を画像にして、ワークシートに貼り付け、次回の計画を立てさせた。そのことにより、児童は自らの学習履歴を振り返ることができるようになった。また、本教材は教育実習にも活用し、教育実習生は、児童個々の能力や個性を的確に把握し、指導案作成や授業実践に生かすことができた。
２．教職表現力演習ノート	共著	平成２７年４月	奈良学園大学	西辻正副・山本美紀編 岡村季光・岡野聡子・高木悠哉・松井典夫著 奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「教育指導案・考察集の作成」 １．安全教育実践指導略案集 ２．安全教育実践考察集	単著	平成２２年２月	大阪教育大学附属池田小学校	本指導略案集と実践考察集は、現職の教員、及び教育実習生を対象として作成したものである。大阪教育大学附属池田小学校は、平成２１年度より、文部科学省教育課程特例校として、「安全科」を設置した。当該校「安全科」主任として、平成２１年度に実践した安全教育の授業の指導略案を作成し、授業後の考察集を作成し、平成２１年度の当該校教育研究協議会において、参会者に配布し、教育実習生に配布した。安全教育に対する必要性の実感は、教育現場において高まっている観があるが、どのような実践をすればよいかわからないというのが、多くの声である。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表(抄録)」 １.『小学校におけるＡＥＤを用いた『命の教育』の有効性に関する実証的研究』	単独	平成２０年９月	日本安全教育学会 第１０回記念大会 (於　玉川大学)	本実践では、児童にＡＥＤの使用認可に至るまでの人々の努力について考えさせ，また，実際にＡＥＤを体験することによって、ハードがあるから安心なのではなく,使用する(命を助けようとする）ことの勇気について考えることによって，実体のない「いのち」の尊さに実感を持たせることを目的とした。実践を通して、初等教育段階でＢＬＳ教育を行うことの可能性を見出すことができた。それは、児童が持つ純粋な感性である。児童は例えマネキンに対してであっても、救命処置を自らが行うこと意味の大きさを実感したのである。その中でこそ、自分ならどんなことができるのかという、実感を伴った思考が生まれるのである。
２.『児童の直感に基づいた危険予知・回避能力を育む安全学習の在り方　～児童の実態と犯罪機会論の比較から～』	単独	平成２１年９月	日本安全教育学会 第１１回大会 (於　東京学芸大学)	安全マップの学習は、マップを作ることが目的ではない。真の目的は、児童の危険回避能力・危険予知能力を育み、自ら犯罪機会を避けることができる力を育成することにある。学習のとしては、立正大学の小宮理論をもとに、「入りやすく、見えにくい」という視点を確立することによって、危険予知・回避力を育むことを目標としてきた。しかし、学習を進め、児童の実態を観察するうちに、「入りやすく、見えにくい」という言葉では測りきれない、児童の危険に対する感覚が明らかになってきた。そこで、児童の実態に則した安全マップの学習を構築すべく、研究を進め、発表した。
３.『安全科の授業における児童の変容に関する研究』	単独	平成２１年１１月	日本セーフティプロモーション学会第３回学術大会　(P69)	本研究は、ＡＥＤ（Automated External Defibrillator)［自動体外式除細動器］を含めたＢＬＳ（Basic Life Support）に関するスキル学習を通して知識理解を深めることによって，豊かな人間的感性と命に対する実感を育むことを目的としている。　事前アンケートでは、児童は、もし目の前に傷病者がいたらという質問に対し、990%の児童が、何らかの方法で傷病者を助けると答えた。しかし、BLS のスキルを習得した結果、「助ける」と答える児童は激減した。このことは、児童が「助けたい」という思いを持ちながらも、命に関わることの恐れを実感したことに他ならない。初めて、児童は自分が本当にできることを実感を持って考える。
４.『安全教育カリキュラムの構築に関する研究　～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～』	単独	平成２２年９月	日本安全教育学会第 11 回宮城大会 (於　宮城教育大学)	平成 13 年児童殺傷事件を契機として始めた安全教育は、防犯のカテゴリーに特化した安全教育だった。しかし、子どもたちの目の前にある危険を考えたとき、安全教育を交通安全や災害安全教育を抜きにして語ることはできない。そこで防犯、生活安全、交通安全、災害安全、命の大切さを実感する授業、の５カテゴリーを安全科において実践している。しかし、カリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対する適時性（知識・技能・行動・情緒面において）を抜きにしては語れない。そこで、本研究においては、本校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対する適時性を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築について発表した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究	単独	平成２２年１０月	日本教育大学協会研究集会（於　島根県サンラポーむらくも）	本発表は、日本教育大学協会が主催したものであり、第３分科会「附属学校の改革と実践の動向」で「安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究」として発表したものである。特に、安全教育の有効性について、「安全安心様相図」を用いた授業実践と、児童の変容について発表し、安全教育の有効性の実証について発表した。交通安全学習については、学習前は「安全安心様相図」では、多くの児童が図の中心付近に多くポイントしていたが、授業後は「不安・危険」のカテゴリーに多くポイントした。このことにより、授業による児童の変容が明らかになったという内容を発表した。他に、水難災害、命を実感する授業の実践についても、授業前と後の、児童の変容を視覚的に見ることができる内容で発表した。
６．児童の発達段階における安全教育の有効性に関する実証的研究	単独	平成２３年１１月	日本セーフティープロモーション学会　第５回学術大会（於　大阪教育大学）	本研究においては、一つの実践を低・中・高学年で行い、その相違を明らかにし、発達段階ごとの安全教育カリキュラムの作成につなげることを目的としたものである。防犯ブザーの使用方法に関する授業を題材とした。防犯ブザーは、すべての児童が通学リュックに装着している。しかし、防犯ブザーに対する意識、使用に対する構えなど、低・中・高学年では大きな相違が見られると予想される。そこで、「安全安心様相図」を用いて実態を調査するとともに、同授業を３学年で行い、児童の授業時における記述などをもとに調査を行った。考察として、学年が上がるにつれて、リスクマネジメントに対する自我が発育する。しかし、それは実態を伴わない場合が多い。低学年では自尊感情を育み、中学年では実践的な、そして高学年では自己意識の再構築をねらいとする授業構成が肝要であると述べた。
７．安全教育のレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	単独	平成２４年７月	日本カリキュラム学会第２３回大会（於　中部大学）	本研究では、「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会 2011 松井）を用いて、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の授業実践による児童の変容を客観的に実証することにより、安全教育内容と児童の発達段階の妥当性を検証しようとしたものである。これまで安全教育においては、児童の発達段階を考慮した学習内容が検討され、研究されてこなかった。したがって、避難訓練をはじめ、交通安全学習など、どの学年に適しており、どの学年で行うのが妥当であるという検討がされてこなかったため、「有効な」安全教育であったかという疑問が生じる。本研究で、安全教育と児童の発達段階の妥当性を実証することにより、有効な安全教育プログラムを作成していくことを目標とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．安全教育のレリバンスに関する研究	単独	平成２４年１０月	日本安全教育学会第１３回大阪大会（於　大阪教育大学）	中央教育審議会学校安全部会において、「防災科」あるいは「安全科」として、安全教育を教科化する方針が打ち出された。これまではひとつの「視点」であった安全教育を、体系的に学ぶことができるようにという発想であり、東日本大震災による災害から、教育が一歩前に進もうとする顕れといえる。しかし、安全教育で最も大切なのは、「重要性の認識」もさることながら、「効果的な学習をすること」にあると考える。これまでの安全教育は、安全だと信じ、考えてきたことを疑ってこなかった。例えば児童に当たり前のごとく「安全指導」として教えてきた、「揺れたら机の下に身を隠す」ことや、「いかのおすし」「おはしも」をはじめとする言葉などにおいても、一層吟味し、指導方法、内容を考え直さなければならない。そこで本研究においては、「効果的な安全教育」であるために、安全教育のレリバンスに着目した。今後、教科化するにおいても、また、安全教育を推進していく上でも、そのカリキュラムの構築において、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証した。
９．安全教育カリキュラムのレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	単独	平成２４年１１月	第６回アジア地域セーフコミュニティ会議	大阪教育大学附属池田小学校では、平成 21 年度より、文部科学省の教育課程特例校に認定され、「安全科」を設置した。安全教育のカリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築の礎とすることを目的とした。「安全安心様相図」を用いた調査から、低高学年に比して、中学年が著しく違う様相を示した。このことは、発達段階的には防犯ブザーに依存（信頼）する段階でありながら、ブザーが実際には鳴らなかったり、鳴らすタイミングに迷う自分と改めて向き合ったことによる一時的なショックがあると考えられる。また、低高学年においては類似した様相を示したが、記述内容を見ると、高学年における防犯ブザーに対する依存心（信頼度）の低さが伺えた。これらのことから、同授業を年代別で実施した結果、年代による相違が明らかとなった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０．学校安全と防災教育といのちの教育	共同	平成２７年１月	いのちの教育実践交流会　第６回シンポジウムｉｎ兵庫	本研究発表は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものに基づいて発表したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について、実践結果を交えながら発表した。
「年鑑」 １.『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究-第６学年「命のバイスタンダー」の実践から-』	単著	平成２２年７月	財団法人下中記念財団 2010 年報　pp14-17	平成１９年度、２１年度における下中科学研究助成金の取得により、その研究成果を下中科学記念財団年報に寄稿したもの。 安全教育の効果や実効性は、これまでは授業者の実感による主観的なものでしかなかった。それを『安全安心様相図』を用いて客観的に児童の変容を測定し、分析した結果を発表した。
「リーフレット」 １.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

教　育　研　究　業　績　書

平成 26 年 3 月 31 日

氏名　瀧明　知惠子　印

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キーワード
教科教育学 教育学	①　教科教育（音楽）歌唱・合唱・ピアノ伴奏法等 ②　音楽科教育 ③　学校教育・教員養成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 1）教科音楽において主体性・創造力を育むグループ発表	平成 25 年 4 月～7 月	幼稚園採用試験の課題曲であった数曲を練習し、幼稚園現場で即、生かせるよう「振付をつけた歌の発表」を課題とした。5 人グループで振付を創作し主体的に練習を進め「発表の審査」も課題の一つにし、意見交流することで互いに高めあい、教師の指導助言にもしっかり耳を傾けた。武庫川女子大学の実践
2）教科音楽において授業内容の定着を図る取り組み	平成 25 年 4 月～7 月	楽典の知識理解が全体的に低い状況が見られたため、毎時間始めの 10 分、反復練習を取り入れるとともに、基本事項を精選し、繰り返し教えることで、まとめのテストでは 60％未満の点数は 0.5％の学生にとどまった。集中して学ぶ姿勢が実力をつけることにつながった。 武庫川女子大学での実践。
3）教科音楽において自己評価を生かした授業づくり	平成 25 年 4 月～7 月	授業の最後毎回自己評価を記載させている。「授業内容・力が発揮できたところ・できなかったところを文章表記・最後にＡ～Ｅの評価」自分自身の取り組みを確認させ、授業への意欲付となっている。どの学生も熱心に書き、次回のより良い授業づくりに生かしている。武庫川女子大学での実践。
4）音楽科指導法において、アウトリーチを活用した授業づくり	平成 25 年 9 月～26 年 3 月	限られた授業時間の中で、音楽授業をより充実させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを学生に考えさせる。地域のホール・専門家・学校がつながりあうことで、音楽科教育はより豊かになる。そこで、実際、地域の邦楽活動家に、授業参加を依頼し、アウトリーチを活用した授業の実践を行う。学生にアウトリーチを活用した授業づくりについて学ばせる。

５）教科器楽Ⅰ	平成 26 年 4 月～7 月	30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスンにグループレッスンの時間も取り入れる。特に初見演奏の際に、グループで行うことにより、比較的早く曲の全体が体得できる。また、階名読みは宿題にするが、読み辛い生徒はグループの教えあいにより、比較的速くできるようになる。仲間意識が高まるとともに、ピアノの技能も初心者の学生にスムーズに身につけさせることができた。
６）教科器楽Ⅲ	平成 26 年 4 月～7 月	30 年余り、教育現場で音楽教育を行い、会得してきた教育内容と指導方法を生かした授業を推進する。ピアノ個人レッスン・連弾・合唱のオムニバス形式での授業において、合唱を受け持つ。呼吸法、発声法をパターン化し、毎回繰り返すことにより、少しずつ音域・音量等の力をつけさせる。パターンの応用を各校種学年に応じて考えさせ、指導者となったときの備えとさせた。合唱では 2 重唱、3 重唱、独唱にも挑戦させ、個性特性を発揮させるとともに技能を伸長する。
７）音楽科指導法	平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月	４～5 名のグループ分けを行い、模擬授業の指導案作成・討議・実践準備を行わせ各グループに、模擬授業を実施させる。特に導入部に視点を当て、いかに興味関心を持たせる授業づくりをするかを考えさせる。協力しあうことで、指導案・授業力の向上を図ることができた。
８)器楽演習Ⅰ	平成 26 年 9 月～平成 27 年 3 月	集団で高め合う時間と個人の実技を高める時間を設定し、意欲を喚起する。初めてピアノに取り組む学生が約 80%だったが、どの学生にもバイエル 90～100 番の技能をつけるために、3 回の実技テストを行い、全員 103 番を弾けるようになった。
２　作成した教科書、教材 1）若い教師に伝えたいこと[再掲] ～範を示せる教師であれ～週刊教育ＰＲＯ 2）新任教師に伝えたいこと[再掲] ～生徒指導の心得～週刊教育ＰＲＯ 3）新学習指導要領における音楽科教育 ～音楽教育に献身してきて思うこと～　教育フォーラム 50 号[再掲] 4）新学習指導要領における、音楽科授業への提案[再掲] ―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む　　週刊教育ＰＲＯ 5)音楽科を核とした合唱活動の広がり週刊教育ＰＲＯ[再掲]	 平成 23 年 3 月 平成 23 年 6 月 平成 24 年 8 月 平成 24 年 9 月 平成 24 年 10 月	 教育実習生や新任教員へ校長として教育活動の核となる教科経営、学級経営について要点をまとめた資料。武庫川女子大学文学部教育学科・非常勤講師として講義で活用する。 教師としての心構え、生徒指導の在り方についてまとめた資料。校長として教育実習生や新任教員の指導に活用した。 新学習指導要領における音楽科教育のあり方、可能性（歌唱・器楽指導等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。奈良学園大学器楽演習・武庫川女子大学文学部教育学科講義の中で活用する。 新学習指導要領における音楽科教育の可能性（歌唱・ピアノ伴奏法・弾き歌い等）をまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。奈良学園大学器楽演習・武庫川女子大学文学部教育学科講義の中で活用する。 学校における合唱活動をいかに広げ、充実させるか（歌唱・ピアノ伴奏等）についてまとめた資料。市内音楽研究会、研究授業などで活用。奈良学園大学器楽演習・武庫川女子大学文学部教育学科講義の中で活用する。

6)「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営　～小規模校の特色を生かして～」 週刊教育ＰＲＯ［再掲］	平成 25 年 1 月	新学習指導要領における学校教育のあり方について、音楽教育の年間計画・指導案のたて方、生活・学習規律の指導の仕方、音楽行事への準備の仕方・注意点などについてまとめた資料。武庫川女子大学文学部教育学科音楽科指導法の中で活用する。また、教育実習生指導において活用する。
7)「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著［再掲］	平成 25 年 2 月	音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～合唱劇の取り組みから～」を単著 生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、学年全体で活動できる「合唱劇の取り組み」についても積極的に授業に取り入れていく。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏法、様々な器楽演奏指導等、新教育課程における指導法を創意工夫する。奈良学園大学器楽演習・武庫川女子大学文学部教育学科音楽科指導法の中で活用する。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1)武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として採用される際の、文学学部長及び学科長の評価。	平成 25 年 4 月	武庫川女子大学文学部教育学科の非常勤講師として、「教育音楽」「初等音楽科指導法」において教鞭をとる。採用に対し声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。
2)武庫川女子大学の非常勤講師（音楽科教育）として、音楽科指導法担当者としての文学学部長及び学科長の評価。	平成26年４月	武庫川女子大学文学部教育学科の非常勤講師として、「器楽Ⅰ・Ⅲ」「初等音楽科指導法」において教鞭をとる。特に「音楽科指導法」において、現場経験を生かした現場に即した指導法が高く評価され、この授業のまとめ役、推進役として他教員の指導助言も依頼を受けている。
3)奈良学園大学の講師（音楽科教育）として、器楽演習Ⅰ・Ⅱ、器楽・合唱法担当者として採用される際の、学部長の評価。	平成26年４月	奈良学園大学人間教育学部の講師として、「器楽演習Ⅰ」において教鞭をとる。採用に対し、長らくの中学校現場の経験、声楽家としての活動や、合唱におけるピアノ伴奏指導や発声指導の工夫が高く評価され採用された。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)西宮市立音楽連盟副会長として研究授業について指導助言と実技指導を行う。	平成14年～平成24年	年２回研究授業を参観し、研究協議において指導助言を行うとともに、新教育課程における音楽科のあり方について、発声法・パートリーダーの育成等について指導助言を行う。 西宮市立浜脇中学校　合唱指導「涙を超えて」 西宮市立上ヶ原中学校　合唱指導「マイバラード」観点別評価の研究会も行う。 西宮市立平木中学校　鑑賞指導「運命」（新任教員研究授業） 西宮市立瓦木中学校　器楽指導（アルトリコーダー） 西宮市立真砂中学校　鑑賞指導「ジャズ演奏」 西宮市立鳴尾中学校　合唱指導「夢の世界を」 他

2)兵庫県教育委員会より中学校教育課程研究集会における指導助言者を命ぜられ、音楽科教育課程について講話を行う	平成18年8月	音楽教科にかかる動向について豊かな人間性の育成における音楽科の果たすもの、音楽科教育が育む力を明確にした題材構成と指導の在り方について講話する。80名の音楽教諭が参加し各市の取り組み発表にも指導助言を行う。
3) 兵庫県教育委員会より新学習指導要領（音楽科）伝達講師に任命され、文部科学省の伝達講習会を受け、県下の講師を務めた。	平成20年8月	文部科学省の伝達講習会においては、新指導要領の特色となる所など、注意して聴き取る。音楽科改訂の要点として．内容の構成の改善、「共通事項」の新設、歌唱教材の提示、我が国の伝統的な歌唱の充実、和楽器の指導、創作の指導内容の焦点化・明確化、鑑賞領域の改善が挙げられるが、質問時間を有効に活用し、疑問点、もう少し聞きたいところなど積極的に質問した。阪神音楽科研究会では阪神間の中学校音楽教諭 50 名近くが熱心な態度で聞き入った。できる限り、例など示しながら、また、その趣旨を明確にしながら伝達し、質疑応答の時間を設け、その後、Q&A の資料も作成した。西宮市でも実施し、より理解が深められたのではないかと思う。その後も、若い教員のために勉強会を続け、音楽科における新指導要領にそった授業実施に貢献することができた。
4) 大阪府教職員自主研修支援事業 大学オープン講座（夏季講座）の講師を務める	平成26年7月	講演テーマ＜心を育む歌唱・合唱指導～歌声ひびく学級づくり～＞講演内容は①音楽行事と学級指導　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイス　③心と歌声を合わせ美しい音楽表現を目指す学級づくり
5) 王寺町主催＜り～べるカレッジ＞における講師を務める	平成26年10月	講演テーマ＜日本の心の歌　～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞　内容は①日本の心の歌　「童謡・唱歌」の歴史、作詞者・作曲者についてや、曲の内容などの講話　②呼吸法や発声法、響きある歌声づくりへのワンポイントアドバイス
6) 平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）課題番号 24330254 における「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」授業実践・研究協議での講師を務める。	平成26年10月	「いのちの教育」において、「心についてのアンケート」を実施するとともに、兵庫県道徳副読本「心かがやく」より『語りかける目』の実践研究など、授業研究の指導案作成・研究授業における指導助言を行う。
5　その他 特になし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 中学校教諭一級免普通許状音楽 高等学校教諭一級普通免許音楽 中学校教諭専修免許状音楽 高等学校教諭専修免許状音楽 養護学校教諭二級免許状	 昭和50年3月 昭和50年3月 平成8年 3月 平成8年 3月 平成8年 3月	 昭四九中一普第九六三号 （兵庫県教育委員会） 昭四九高二普九九五号 （兵庫県教育委員会） 平七中専第一五六号 （兵庫県教育委員会） 平七中専第二五三号 （兵庫県教育委員会） 平七中専第二五三号 （兵庫県教育委員会）
２　特許等 ・特になし		
３　実務の経験を有する者について特記事項 1)西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し、西宮の音楽教育の充実・発展に尽力する。 2)西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「くすの木コンサート」の運営に貢献する。 3) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内音楽祭」の運営に貢献する。 4) 西宮市中学校音楽連盟副会長として会長を補佐し「西宮市内合唱祭」の運営に貢献する。 5)兵庫県教員採用試験（音楽）試験官として任命され、7年間にわたって、実技試験内容や評価の在り方について研究を深める。	 平成14年～ 平成24年 平成14年～ 平成24年 平成14年～ 平成24年 平成14年～ 平成24年 平成15年～ 平成21年	 西宮市内の音楽教育活動のより充実発展を目指す。 西宮市立中学校卒業生の音楽活動発表の場である「くすの木コンサート」の充実に力を入れ、西宮市出身の若い音楽家の活動の場を広げる。 1年に1回行われる「西宮市内音楽祭」（各学校吹奏楽・合唱発表）の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。 1年に1回行われる「西宮市内合唱祭」の充実に力を入れ、より発展を目指し、活性化に努める。 ７年間、小学校教員採用試験の実技試験（歌唱と器楽とピアノ演奏）の試験官を務めた。その間、実技試験内容の歌唱曲の選曲を拍子感や音域、詩の内容、曲想の面から検討し見直した。また、発声指導の時間をとり、短時間で声の調子を整えさせるよう、発声内容や注意点の内容について工夫した。「新曲」の作成においては、基本的な単純拍子・複合拍子でメロディーは 1 段目で難易度を低くし、2段目は臨時記号を入れるなど難易度を上げるよう配慮した。また基本的なリズムパターンを何カ所かに入れることとし、しかも曲としてまとまりのある曲となるよう、3･4名で20曲程度作成した。評価項目、評価基準については、毎年検討会をもち、意見交流しながら共通理解を深めた。後半の 3 年間は音楽実技試験官のまとめ役をし、実技試験がスムーズに実施されるよう尽力した。

6)西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表 20 名を引率し、中国を友好訪問し、音楽科授業の参観交流授業を行う。	平成 22 年 12 月	第 23 回団長を務める。尖閣諸島問題で日中関係が微妙な年であったが、礼を持って交流し、友好親善の目的を果たす。音楽授業を参観し、音楽科における日中合同音楽授業を行い交流を深める。
7)兵庫県西宮市音楽教科書採択委員として尽力する。	平成 23 年 7･8 月	西宮市教育委員会より音楽教科書採択委員会の委員長を命ぜられ、採択委員会を開き、採択結果を西宮市教育委員会に報告する。
8)西宮市校園長会の会長として幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため尽力する。	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	会長として、幼稚園・学校・中学校・高校の連携を深めるため、校園長との連絡調整・とりまとめを行う.特に音楽科教育の連携に力を入れる。
9)文部科学省共催、独立行政法人教員研修センターにおける学校評価指導者養成研修会において修了証書を授与される。	平成 24 年 7 月	現任校における学校評価の取り組み、及び成果と課題について発表すると共に、他府県の取り組みや、文科省の講演より多くのことを学び、学校経営に生かす。
4　その他 特になし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）特集<やる気>を引き出し、育てる（教育フォーラム 50 号）	共著	平成24年8月	金子書房 人間教育研究協議会	教師が子どもの<やる気>を引き出し、育てるための方策を考察し、教師自身の<やる気>についても論じる。Ｂ５判　全179 頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、松田智子、浅田　匠、中村　哲 瀧川知惠子、ほか6名 担当部分 「新学習指導要領における音楽科教育 ～音楽教育に献身してきて思うこと～」を単著 中学校教育における音楽科の果たす役割を強く実感している。生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数にとどまった。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、新しい課題についても積極的に授業に取り入れていく必要がある。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏、和楽器を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における指導法を創意工夫すると共に、地域の音楽文化を生かし、小・中学校の９年間の連続した取り組みも意識し、新教育課程における年間計画を創意工夫していかねばと考える。 p.　146～155
2）「新学習指導要領実施・活気あふれる学校運営～確かな学力・情操豊かな人間性を育む～」	単著	平成26年1月	株式会社ＥＲＰ	新学習指導要領全面実施の中、梶田叡一氏による「『やる気』をいかに喚起するか、より良い学習環境をいかにつくっていくか」を課題とした学校運営について述べる。まず、学校教育目標を見直し、第１章では確かな学力の定着のために、生活・学習規律の醸成を踏まえた心の居場所となる学級づくりと学びがいのある授業づくりについて、第２章では情操豊かな人間性を育むため、音楽活動を核とした、仲間とともに築き上げる行事への取り組み、音楽教育の在り方、また参画と共同の取り組みについて、さらに第３章では学校評価を生かした活気あふれる学校づくりについて述べ、課題解決の方策に迫る。 全 72 頁　Ａ5 判

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3)「人間教育を視点にした教職入門」	共著	平成26年12月	大学教育出版	「人間教育を視点にした教職入門」においては「次世代の教職入門」を変化する教育情勢に対応し、新しく編集し直す。人間教育を視点とし、理論編、実践編から教職の道を説く。 Ｂ５判　全　279頁 編集代表　中田　正浩 中田　正浩、鎌田首治朗、松田智子、金山憲正、長井勘治、瀧明知惠子、ほか3名 担当部分 第5章第3節<中学校教員の仕事> 思春期の真只中にある生徒たちが自ら課題を克服できるよう、見守り、自信を持たせ、希望を持って学校生活が送れるよう、中学校教員として為すべき仕事内容について述べる。 学習指導要領の主な内容、学校教育目標の成り立ちについて、学習規律の醸成を大切にした学びがいのある授業づくりについて、中学校教員の１日についてなど、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。p.　120～129 第6章第3節<中学校の学級経営> 社会的問題ともなっている「いじめ」「不登校」など、多くの課題を抱える中学校現場で、生徒たちが安心して心豊かに学校生活を送ることができるよう、生活の基盤である学級集団づくりについて述べる。 学級の意義について、心が通い合い、お互いに高め合い、支え合う学級づくりについて、学校目標と学年・学級目標の関わりについて、望ましい集団活動を通して生き方の自覚をふかめさせる特別活動について、3 年間を見通し、成長に応じた学級活動年間計画をたてる必要性、協力しあって創りあげる体育行事、音楽行事の大切さなど述べる。 p.　160～170 第7章第2節<中学校の生徒指導> 物質的豊かさの中で育つ生徒たちは、忍耐力、自主性、自立性が弱くなるなどの状況が見られる。生徒一人一人の可能性を開き、主体的に判断・行動し、積極的に自己をいかしていけるよう生徒指導を充実させていくことが大事である。生徒指導の目標について、生徒のおかれている現況について、生徒理解の大切さについて、生徒たちが心豊かに学校生活が送れるよう開発的な生徒指導の具体的活動について、生徒の主体性を生かす生徒会活動について、スクールカウンセラーと連携した教育相談についてなどから、長い現場経験で学級担任・学年主任・教頭・校長として勤めた経験を生かし、重要なポイントを述べる。 p.　190～199

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) 特集<文字が育てる言葉の力>文学教材を用いた指導をどうするか（教育フォーラム53号）	共著	平成27年2月	金子書房 人間教育研究協議会	<文字が育てる言葉の力>において、言葉の力を育てるための方策を考察し、各教科領域における文学教材を用いた指導をどうするかについて論じる。B5判　全　147頁 編集代表　梶田叡一 梶田叡一、加藤　明、鎌田首治朗、伊崎一夫、勝見健史、瀧明知惠子、ほか6名 担当部分 「音楽を通した感動体験から豊かな心を育む　～合唱劇の取り組みから～」を単著 生徒たちに豊かな音楽活動を体験させることは、人間形成にかかせないものである。新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数にとどまった。限られた授業時数の中で、これまでの授業を見直し、新しい課題についても積極的に授業に取り入れていく必要がある。歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏、和楽器を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における指導法を創意工夫すると共に、地域の音楽文化を生かし、小・中学校の9年間の連続した取り組みも意識し、新教育課程における年間計画を創意工夫していかねばと考える。p. 146～155

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（論文等） 1）「若い教師に伝えたいこと～範を示せる教師であれ～」	単著	平成23年3月	週刊教育ＰＲＯ 3.20・27 株式会社日本教育総合研究所	音楽教育や演奏活動を通して、体験し学び取ったことなど、教育活動の一端を若い教師に伝えた。まず、教育活動の核となる教科経営、学級経営について述べる。生徒の学力を向上させ、豊かな人間性を身につけさせるために、教師は身近な大人として常に範を示せる存在でありたい。地域社会の中で愛され信頼される教師であるために、常に自己研鑽に励み、自己を磨く努力をすることを提案した。 p. 16～17　　Ａ４判
2）浜甲子園中学校学校経営方針及び学校評価のまとめ	単著	平成23年12月	西宮市立浜甲子園中学校研究紀要	「学校経営方針」「学校評価のまとめ」 平成22年度、浜甲子園中学校研究のまとめ。 学校評価（教職員・生徒・保護者・地域）を実施し、学校評価委員を含む地域連携協議会にてその結果について様々な意見をいただく。また、第三者評価として古川治甲南大学教授に学校関係者評価委員会に入っていただき、ご意見もいただいた。その成果と課題をまとめ論ずる。次年度の学校運営に生かしていくべく本校の強みを明らかにし、改善点を具体的にあげ次年度の方向性を論ずる。 Ａ４判　全　８頁
3）～家庭・地域と連携して進める兵庫の道徳教育～ 「兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」	単著	平成24年5月	月刊「兵庫教育」５月号 道徳教育の推進 兵庫県教育委員会発行	兵庫県版道徳教育副読本『心かがやく』を活用して」 兵庫県教育委員会は、道徳教育副読本を作成している。本校は副読本の効果的な活用を図る授業づくり、学校・家庭・地域が一体となって進める道徳教育の実践研究指定校となった。全教師の共通理解のもと推進し、教材研究を深める。道徳教育を学校が中心的な役割を果たし計画的に推進し、三者で深めていくこと、副読本を活用し３学年の成長を見通した道徳教育年間計画の整備を行っていくことなど述べている。 p.　18～21　Ａ４判
4）「新学習指導要領における、音楽科授業への提案―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」	単著	平成24年9月	週刊教育ＰＲＯ 9.18 株式会社日本教育総合研究所	「新学習指導要領における、音楽科授業への提案―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む」 新学習指導要領において音楽科ではこれまで通りの授業数は確保している。しかしながら、中学校では個人選択授業が無くなり、総合的な学習の時間は小・中学校とも減少し、実質的には音楽教育の場は減少していると言える。限られた授業時数の中で授業を見直し、伝統音楽など授業に取り入れていく必要がある。地域の小・中学校の９年間の連続した取り組みも意識し、歌唱法、合唱づくり、ピアノ伴奏を含む器楽演奏指導・鑑賞等、新教育課程における年間計画について提案した。 p.　12～13　　Ａ４判
5）「音楽科を核とした合唱活動の広がり	単著	平成24年10月	週刊教育ＰＲＯ 10.16 株式会社日本教育総合研究所	音楽科の活動を広げ、深め、歌声の響く学校を目指すために限られた時間の中で、基本は授業で指導し、音楽的行事を成功させ、生徒たちに成就感や達成感を味わわせることの重要性を論じた。多くの感動体験を通して生徒たちの音楽に対する感性がより育まれ、心をより強くより豊かに育てる。そのため大きな声で生き生きと歌うための発声法、歌唱法、合唱づくり、音楽をより豊かにするピアノ伴奏法、編曲についてなどその手順や配慮せねばならないことについて、具体的に論じた。 p.　22～23　　Ａ４判

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6)「活気あふれる学校運営～小規模校の特色を生かして～」	単著	平成25年1月	週刊教育ＰＲＯ 12.13 株式会社日本教育総合研究所	「活気あふれる学校運営 ～小規模校の特色を生かして～ 浜甲子園中学校において活気あふれる学校を目指し取り組んできた成果のまとめを紹介する。生徒の主体性を生かす生徒会活動、トライやる・ウイークの取り組み、総合的な学習の時間における、特色ある活動としてマリン体験、開かれた学校への取り組みとして緑化サポート（環境づくり）・音楽科における授業サポート（和楽器等支援）における取り組みを紹介する中で、確かな学力をつけ、豊かな情操を育む教育活動の在り方を論ずる。 p.20～23　　Ａ4判
7)特集<やる気>を引き出し、育てる（教育フォーラム54号）	単著	平成26年8月	金子書房 人間教育研究協議会	<各教科等の学習を支える言語活動>において、各教科領域全体で言葉の力を育てるための方策を考察し、子どもに真の「賢さ」を育てるために教師にできること・すべきことを提案する。 Ｂ5判　全　138頁 編集代表　梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法人人間教育研究協議会活動だより 第29回　2014年度人間教育実践交流会　in奈良　「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の内容説明とともに、今年度の活動について紹介する。 p. 128～130　　Ｂ5判
8)音楽科教育におけるｱｳﾄﾘｰﾁに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～	単著	平成26年8月	学校音楽教育研究 発表要旨集録	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチ（洋楽器演奏者、和楽器奏者、声楽家、アンサンブル等）を活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。 Ａ4判　P. 90　資料4ｐ
9)「School music education in Japan and Italy」 日本から見たイタリアの学校音楽教育 ～イタリアでの実地音楽教育調査から～	単著	平成26年9月	ScuolaPrimaria “ErmenegildoPistelli” ピステリ小学校（幼小・中学校の一体型学）	在イタリア日本大使館一等書記官西池万葉氏の紹介を受け、イタリアの初等科音楽教育研究会に出席する。実地音楽教育調査から、第1に義務教育における音楽教育のカリキュラムの比較、第2に義務教育における音楽授業の実践研究、第3に音楽科を核としたプロジェクトの立案についてなどまとめ、在イタリア日本大使館とピステリ小学校へ報告する。日本においてもイタリアにおいても、より豊かな音楽教育活動が実施できるよう、研究を深めていく。 Ａ4判　全7ｐ
10)音楽科教育の有益性における一考察～歌唱・合唱活動を通して～	共著	平成27年1月	奈良学園大学人間教育学部	学校だからこそ得られる音楽を通した感動体験は、生涯にわたって「生きる力」の育成を図ることにつながっていくものと考える。学校教育における音楽科教育の歴史から、音楽科教育に託されたものや、その有益性について示すとともに、どのように活性化させていくのか考察する。発達段階に応じた発声法・歌唱法、パート練習の仕方、パートリーダーの育成、合唱指揮法、ピアノ伴奏法など、理論とともに具体的に述べ、活動手順を示す。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				p. 47～55　A４判
11)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発事例」	単著	平成27年1月	平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）課題番号24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書	「いのちの教育部会」では、幼・小・中・高等学校の成長に応じたカリキュラムを作成し（中学校を担当する）、各時期のねらいを設定した。「いのち」に関わる教育活動の大切さを検証するとともに、どのようなプロセスをたどって生徒が「いのち」の大切さを実感するのか、公立中学校において「いのちの教育」を実践研究する。その際、取り組みの前後にアンケートを実施し、分析・考察する。（研究協力者） p.60～69　A４判
12)「西宮市立山口中学校における実践」	単著	平成27年1月	平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）課題番号24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」＜いのちの教育部会研究報告書＞	共著者・眞鍋美穂 公立中学校における「いのちの教育」の実践研究について報告する。2013年実施の「心のアンケート」（児童・生徒のいのちに対する意識の実態Ⅱ）におけるクロス集計結果内容を反映させた実践「ホメホメシャワー」について、道徳における兵庫県道徳副読本「心かがやく」より『語りかける目』の実践について、「『ありがとう』と言われる一日をすごそう」についてなど。（研究協力者） p.17～26　A４判
13)「中学校における『いのちの大切さ』を実感させる実践研究の考察と課題」	単著	平成27年2月	同上	「いのちの教育」の実践研究について、取り組み前後に「心のアンケート」実施し比較調査を行う。 そのクロス集計において、いくつかの項目で、生徒の心の動きがみられた。今後、学校全体で共通理解し進めていくことが大切である。 限られた時間の中で、学習を深めていくために道徳や総合的な学習の時間、各教科など連携させて、年間を見通した計画的組織的な取り組みが必要である。（研究協力者） p.41～43　A４判
14)特集＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞ （教育フォーラム55号）	単著	平成27年3月	金子書房 人間教育研究協議会	＜実践的思考力・課題解決力を鍛える＞　においてPISA型学力をどう育てるかにおいて、実践的な課題解決をどう図っていくか、思考力や問題解決力をどのように鍛えていくか、アクティブラーニングをどう組み入れていくかなど考察し実りある学習活動の展開を提案する。 B５判　全　157頁 編集代表　梶田叡一 担当部分 特定非営利活動法人 間教育研究協議会活動報告とまとめ 第29回2014年度人間教育実践交流会　in奈良　「言葉の力と学力向上～各教科等の学習を支える言語活動～」の発表内容をはじめ、１年間の活動のまとめを記載する。 p. 147～149　　B５判

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15)「人間教育を支える音楽科教育　～」	単著	平成27年3月	奈良学園大学人間教育学会誌	本論文では、人間教育を支えるものとしての学校教育における音楽科教育の意義・果たすものについて論じる。その際、豊かな表現を工夫し、総合的な表現活動へと発展させた「合唱劇」の実践を通して考察する。歌唱・合唱の指導、ピアノを始め器楽伴奏の指導についてもふれる。今後の課題を探るとともに人間形成に大きく関わる音楽科教育が、学校教育の中で、より活性化していくための方策を考察する。 Ａ4判　全　10頁
16)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察～地域の音楽文化とつながる～」	単著	平成27年3月	武庫川女子大学紀要	現行の学習指導要領において、音楽科の授業時数は確保しているが、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。音楽科教育をより豊かにし、心の育みが行っていけるよう地域の音楽文化（大学音楽学部・和楽器グループなど）とのつながりを考察する。 p. 25～30　Ａ4判
17)「音楽科教育におけるアウトリーチに関する一考察	単著	平成27年3月	学校音楽教育研究 日本音楽教育実践学会紀要	音楽活動を通して感動体験を味わわせることは、一人ひとりの豊かな心を育み、生きる力を培っていくものと考える。音楽科教育の活性化のために、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。そのことにより生徒たちの歌唱や器楽の表現力をより高めることとなる。音楽科教育をより豊かにするため、音楽の専門家や和楽器の演奏団体、地域の大学などとのつながりを考察する。 p. 18～21　Ａ4判
18)「いのちの教育カリキュラムモデルの開発～音楽科教育における成就感・自尊感情の育み～」	単著	平成27年3月	平成24年度～平成26年度科学研究費補助金（基盤研究B）課題番号24330254 「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書	「いのち」に関わる教育をより深めていくために、音楽科における「いのちの教育」の可能性について考察する。音楽科で取り組んできた「合唱活動」において表現活動の基盤となる合唱は、音楽を苦手とする生徒にとっても、仲間とともにその美しさを共有できる場である。伴奏には様々な楽器演奏を加え、さらに豊かな表現を創りあげることができる。仲間と協力して活動する大切さを学びとり、連帯感が育まれ、より意欲的な生活態度につながっている。今後、教育現場への提案・実践研究を進め、より具体性のある教材を発信していきたいと考える。 p. 119～132　Ａ4判

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「学会等発表」 1）人間教育実践交流会 西宮フォーラム発表 「音楽教育の果たすもの～　音楽科における総合的な学習の時間」	単独	平成17年 11月	人間教育研究協議会 西宮市立東高校	音楽科を核にした総合的な学習の時間として合唱組曲への取り組みを紹介する。日本教育新聞に掲載される。 Ａ４判　全　５頁
2）音楽科の絶対評価について	単独	平成18年 8月	兵庫教育大学音楽学会 兵庫教育大学 新学会通信９号	音楽科実技の絶対評価の規準について具体的な経験をもとに論じた Ａ４判　全　２頁
3）「学校づくり～小中連携・一貫教育～」コーディネーター	単独	平成18年 8月	人間教育研究協議会 京都ノートルダム女子大学	「小中連携教育の可能性」西宮浜小・中学校の音楽行事等、連携教育活動について紹介する。小中学音楽科の授業をはじめ、連携教育の９年間を通した学力の育成を論じる。 Ａ４判　全　４頁
4）課題「新しい時代を創造する豊かな心と確かな学力を育む学校運営」	単著	平成21年 8月	阪神地区女性学校運営研修会	幼・小・中学校、教育委員会において、各学校園が運営上の諸問題について、どのように改善するか交流する。 テーマ 「学校・家庭・地域社会の力強い連携のもと生徒の自立を支援する」をテーマに、新しい教育課程づくりについて述べる。 ①確かな学力を基盤とした生きる力を育成する新教育課程の創意工夫　②家庭・地域社会と連携を深め、豊かな教育環境づくりについて、など特色ある教育課程づくりについて述べる。 阪神地区女性学校運営研修会
5）人間教育実践交流会　西宮フォーラム発表 新教育課程における音楽科授業への提案―音楽を通した感動体験から豊かな心を育む―	単独	平成23年 8月	人間教育研究協議会 兵庫県私立百合学園小学校	新教育課程における音楽科授業への提案として、小学校からは「生き生きした歌声を」、中学校からは「合唱活動を通して豊かな心を育む」、大学では「デジタルコンテンツの授業への活用」など、ことばの力を生かした音楽表現力の育成について考察する Ａ4判　P. 68～69
6）音楽を通した感動体験から豊かな心を育む～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	単独	平成25年 8月	第18回日本音楽教育実践学会　発表要旨集録 お茶の水女子大学	音楽科を核とした合唱劇の取り組みについて、発声・合唱・独唱・ピアノ伴奏を含め、感動的な取り組みの流れと共に、豊かな心の育成の関わりについて論じる。学校教育において音楽科教育活動は、いじめ、不登校、暴力行為等、問題を抱える生徒たちの心をなごませている。心の豊かさや、情緒の豊かさを育む教育活動を進めていく大切さを論じる。 Ａ4判　P. 84　資料4ｐ
7）人間教育実践交流会　大阪ミニフォーラム発表 「学級指導と音楽行事」	単独	平成26年 2月	人間教育研究協議会 内田洋行大阪オフィス	ミニフォーラムのテーマ「言葉の力と学力向上」を受け音楽部会では「学級指導と音楽行事」をサブテーマとする。音楽科教育を支えるものとして言葉の力があり、歌詞の読み取りなど言葉の力を育みながら、学級での合唱づくりや行事への取り組みについて発表するとともに、意見交流を行う。 資料4ｐ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8) 音楽を通した感動体験から豊かな心を育む ～音楽科を核とした合唱劇の取り組みから～	単独	平成26年3月	日本学校音楽教育研究	個性や創造性を発揮することが求められつつある中で、生徒一人ひとりの多様な能力の伸長を目指すという観点からの対応を図り、心の豊かさや情緒の豊かさと言った視点での教育活動を進めていかねばと考える。音楽科を核とした合唱劇の取り組みから音楽科教育の充実発展を考察する。 Ａ4判　P. 117～118
9)奈良フォーラム発表 テーマ ＜言葉の力と学力向上＞～音楽科の学習を支える言語活動　～	単独	平成26年8月	人間教育研究協議会 奈良学園大学	限られた授業時間の中で、音楽活動をより充実・発展させていくために学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを行っていきたいと考える。学校と地域の音楽文化とのつながりを考察する。 A4判　P.45 資料4p
10) 音楽科教育におけるｱｳﾄﾘｰﾁに関する一考察 ～地域の音楽文化とつながる～	単独	平成26年8月	第19回日本音楽教育実践学会 熊本大学	現行の学習指導要領において、実質的には音楽科教育の場は減少していると言える。限られた授業時間の中で、アウトリーチを活用し、学校教育だけでは実現しない音楽の授業を検討し、教育内容が広がっていくようなカリキュラム作りを研究する。
11)「日本における初等科音楽教育」	単独	平成26年8月	Scuola Primaria ″Ermenegildo Pistelli″ ピステリ小学校 （幼・小・中学校の一体型学）	イタリアの初等科音楽教諭音楽授業研究会にて発表。日本での初等科音楽教育について、基本内容と指導法について、発達段階に応じた歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞指導法について、具体的な例をあげながら示す。指導のためのピアノ、歌唱、弾き歌いの上達法、楽典の基本事項も資料として示している。イタリアの初等科音楽教育についての発表を受け交流を深める。 A4　4p

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
合唱指導･審査員 1) 西宮市立中学校音楽科教育研究会副会長として学年・全校合唱研究発表会の実技指導を行う。	単独	平成17年6月	西宮市立鳴尾中学校	西宮市立鳴尾中学校における研究授業を参観し、呼吸法・発声のさせ方、パート練習・パート合同練習のさせ方とピアノ伴奏の実技指導を行う。
2) 西宮市立中学校音楽科教育研究会副会長として学年・全校合唱研究発表会の実技指導行う。	単独	平成17年11月	西宮市立苦楽園中学校	中学校の学年・全校合唱「時の旅人」等の研究発表を参観し、講評する。音楽科を核とした総合的な学習の時間において学年・全校合唱に取り組む実技指導行う。
3) 宝塚市立音楽科教育研究会副会長として研究授業（合唱指導）の指導・助言を行う。	単独	平成18年11月	宝塚市立御殿山中学校	宝塚市立御殿山中学校において音楽科研究授業（合唱指導）において指揮法など事前指導を行い、実施する。研究協議では美しい発声法、バランス、言葉の発音などの実技指導をする
4) 宝塚市立音楽科教育研究会副会長として宝塚市立中学校合唱祭において、企画運営に関わるとともに、講評を行う	単独	平成18年11月	宝塚ベガホール	宝塚市立中学校12校が集う合唱祭の運営に力を尽くす。会場ほぼ400席満席の中、各校の美しいハーモニーが響いた。より豊かな曲想づくりや、心と歌声を一つにして歌う素晴らしさなどについて講評する。
5) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクール審査員	単独	平成19年10月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、結果だけでなく発声や伴奏の指導方法に触れて、講評する。
6) 西宮市立中学校音楽科教育研究会副会長として市内中学校の合唱指導法研修会実技指導	単独	平成19年11月	西宮市立苦楽園中学校	西宮市立苦楽園中学校の全校・学校合唱「大地讃頌」等の取り組みを参観し、合唱指導法研修会においてピアノ伴奏実技指導・講評を行う。
7) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールの審査にあたる。	単独	平成20年10月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、子どもの発達段階に応じた声変わりの時期における適切な指導と無理のない発声についてについて講評する。
8)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成21年9月	京都こども文化会館小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノをはじめとする、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。「ビリーブ」等、合唱指導指揮・ピアノ伴奏の指導を行う。
9) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクール、審査にあたる	単独	平成21年10月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成22年7月	京都こども文化会館小ホール	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「心の瞳」など。
11) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたる。	単独	平成22年10月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
12) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成22年11月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに講評を行う。審査にあたり、ピアノ伴奏や、発声、ハーモニーのバランス等を考慮し審査、講評する。
13) 西宮市立中学校中学生中国友好訪問団団長として市内中学校代表20名を引率し、表敬訪問の際、合唱を指揮	単独	平成22年12月	中国紹興市元培中学校	中国友好訪問において表敬訪問の際、合唱曲「時の旅人」「茉莉花」（中国語）の指揮を行い、合唱を披露し絶賛される。また音楽授業を参観するとともに、音楽科における日中合同授業を行い交流を深める。
14)「初秋のコンサート」	共同	平成23年9月	京都　レスパス・エラン	共同開催。ヴァイオリン・ピアノ・歌唱による演奏会。幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画する。「コスモス」等、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。
15) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて校長として指導するとともに審査にあたる。	単独	平成23年10月	鳴尾文化ホール	審査にあたり、発声・ハーモニー、曲想などを考慮して優秀賞・最優秀賞を授与するとともに講評を行う。ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
16) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。	単独	平成23年11月	鳴尾文化ホール	西宮市立中学校合唱祭において、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。
17)「初秋のコンサート」	共同	平成24年9月	京都　レスパス・エラン	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱において、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサートを企画し、合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「マイ　バラード」等。
18) 西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査を行う。	単独	平成24年10月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに、ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
19) 西宮市立中学校合唱祭において実行委員長を務め、各校	単独	平成24年11月	鳴尾文化ホール	実行委員長を務め会の充実のため音楽監督にあたり、各校への賞の授与とともに全体の講評を行う。市内音楽教諭が実技指導を通して学び合う場でもあり、各校への指導助言も行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
への賞の授与とともに全体の講評を行う。				
20)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成25年9月	京都市立国際交流会館	ヴァイオリン・ピアノ・歌唱・合唱を披露するコンサートを企画運営する。幼児から大人までの年代層の出演者によるコンサートである。独唱するとともに歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「この道」等。
21)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクルにおいて審査委員として審査及び講評を行う。	単独	平成25年10月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに、ピアノ伴奏・及び指揮優秀者の表彰も行う。
22)西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査委員長として審査及び全体に講評を行う。	単独	平成26年10月	鳴尾文化ホール	西宮市立浜甲子園中学校合唱コンクールにおいて審査にあたり、優秀賞・最優秀賞を授与するとともに全体に講評を行う。
23)「小さなコンサート　～ピアノ・バイオリン他～」	共同	平成26年10月	京都市立国際交流会館	ソロ・アンサンブル・ヴァイオリン・ピアノによる、幼児から大人まで、幅広い年代層の出演者によるコンサート。出演者による合唱指導指揮、歌唱・ピアノ伴奏の指導を行う。「ビリーブ」等。
24)アウトリーチを生かした授業展開・コンサートづくりについて指導助言を行う。	単独	平成27年2月	宝塚市立末広小学校	宝塚市立末広小学校におけるアウトリーチを活用した音楽研究授業及び、まとめのコンサート・研究協議が行われる。アウトリーチを生かした授業・コンサートづくりについて指導助言を行う

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他・音楽活動） 1)樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平成10年～平成20年	フェニックスホール（平成10年～20年）	武庫川女子大学音楽学部後援 2年に1回、出場者を募り、コンサートを開催する。企画・運営を行う。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾、バイオリンアンサンブル他、演奏役員として音楽監督を務めた。毎回200人程度の観客がおとずれる。
2)童謡・唱歌・わらべ歌研究会主催「第13回童謡・唱歌・わらべ歌コンサート」開催	共同	平成17年11月	豊中市立アクア文化ホール	特集「昭和のあけぼの・明治10年代の曲」 重唱（「秋のメドレー」）するとともに、合唱指導指揮をする。約200名の観客とともに歌いあう。
3)歌い継ぐ　～日本の心の歌　～の演奏活動	共同	平成19年11月	介護老人福祉施設 夢御殿山	介護老人福祉施設にて音楽演奏会（歌・ピアノ・フルート・琴）を2名で行うとともに童謡唱歌「もみじ」等の指揮をし、会場と共に歌う。歌・ピアノを担当する。
4)西宮市女性学校運営研修会にて歌唱指揮を行う	共同	平成19年12月	芦屋モノリス	西宮市女性学校運営研修会にて、研修を深めるとともに、歌唱指揮を行う。
5)歌い継ぐ～日本の心の歌　～「花の会」として音楽活動する。	共同	平成19年12月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」（歌・ピアノ・フルート・琴演奏）を結成し、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。 （歌とピアノ担当）
6)鳴教会研修会（武庫川女子大学卒業生教諭の会）及び総会において歌唱指揮を行う。	共同	平成20年12月	武庫川女子大付属高校音楽ホール・芸術館	鳴教会総会及び研修会において、武庫川中・高等部の「合唱部づくり」の講和と演奏、会員交流を行うとともに、親睦を図るため、歌唱指揮を行い、友に歌い合う。教員50名が集う。
7)歌い継ぐ　～日本の心の歌　～音楽活動を行う	共同	平成21年3月	介護老人福祉施設 夢御殿山	「花の会」において歌・ピアノ・歌唱指導を担当し、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。
8)西宮市女性学校運営研修会にて歌唱指揮を行う	共同	平成21年7月	芦屋モノリス	西宮市女性学校運営研修会にて、研修を深めるとともに、歌唱指揮を行う。
9) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成21年7月	介護老人福祉施設 シルバーコースト	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「浜辺の歌」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
10) 音楽活動 歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成21年12月	介護老人福祉施設 ケアハウス花屋敷	「花の会」として介護老人福祉施設にて音楽演奏を行うとともに童謡唱歌「ペチカ」等を会場と共に歌う。独唱するとともに、歌の指導指揮を行う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11) 鳴教会研修会及び総会において歌唱指揮を行う。	共同	平成21年12月	武庫川女子大付属高校視聴覚室	鳴教会総会及び研修会において、「子どもたちの環境」の講話を受け、会員交流を行うとともに、歌唱指揮を行い、共に歌い合う。
12) 音楽活動　歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成22年7月	介護老人福祉施設夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。お琴・フルートの伴奏で独唱し、会場の人たちへの指揮を行う。
13) 樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平成22年12月	兵庫県芸術文化劇場小ホール（平成22年～26年）	武庫川女子大学音楽学部後援 2年に1回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300人の観客がおとずれる。
14) 音楽活動　歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成23年1月	介護老人福祉施設花やしき	「花の会」として、介護老人福祉施設にて音楽演奏を行う。「冬景色」等、唱歌を会場と共に歌う。会場の歌のピアノ伴奏や琴・フルートとのアンサンブルなど行う。
15) 音楽活動　歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成23年1月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに童謡唱歌を会場と共に歌う。「雪の降る街を」等、独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
16) 音楽活動　歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成23年7月	介護老人福祉施設夢御殿山	「花の会」において、介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「花かげ」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。独唱披露し、歌の導指揮も行う。
17) 音楽活動　歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成24年8月	宝塚市福祉協議会仁川デイサービスセンター	「花の会」において音楽演奏会を行う。歌唱を担当し、「茶摘み」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。歌の指導指揮も行う。
18) 第63回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において「国歌斉唱」の伴奏を務める。	単独	平成24年10月	大阪国際会議場	大阪で行われた第63回全日本中学校長会研究協議会・近畿中学校長会研究協議会式典において、「国歌斉唱」の伴奏を務め、全国から参集した中学校長の歌声が会場中に響き渡った。
19) 音楽活動　歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成24年12月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設にて音楽演奏会を行うとともに「ふるさと」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。 独唱披露し、歌の指導指揮も行う。
20) 音楽活動　歌い継ぐ　～日本の心の歌　～	共同	平成25年7月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	「花の会」　として、介護老人福祉施設にて音楽演奏を行うとともに「朧月夜」等、童謡唱歌を会場と共に歌う。歌唱・ピアノを担当する。
21) 敬老会コンサートに出場する	共同	平成25年9月	介護老人福祉施設夢御殿山	介護老人福祉施設での敬老会コンサートに出場する。講和を行うとともに、童謡唱歌「浜辺の歌」等を会場の指導指揮を行い、会場と共に歌う。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22) 音楽活動 ＜日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平成26年6月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	「花の会」として、音楽演奏を行うとともに童謡唱歌「朧月夜」等を会場と共に歌う。会場の指導指揮も行う。
23) 敬老会コンサートに出場する	共同	平成26年9月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	「花の会」として、敬老会コンサートに出場する。講話・演奏（フルート・琴）とともに歌唱指導を行う。童謡唱歌「もみじ」等を会場と共に歌う。
24) 樂朋会（武庫川女子大学音楽学部卒業生の会）演奏役員として、「樂朋会演奏会」を行う。	共同	平26年12月	兵庫県芸術文化劇場小ホール	武庫川女子大学音楽学部後援 2年に1回、出場者を募り、コンサートを開催する。独唱、アンサンブル、ピアノ独奏・連弾を行う。バイオリンアンサンブル他、演奏役員として貢献する。300人の観客がおとずれる。
25)音楽活動 ＜日本の心の歌～童謡・唱歌・わらべうたを歌い継ぐ～＞	共同	平成27年3月	介護老人福祉施設ケアハウス花屋敷	童謡・唱歌・わらべうたの講話と演奏を行うとともに歌唱指導を行う。2名で行い、歌唱・ピアノを担当する。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　阿尾　あすか

研究分野	研究内容のキーワード
国文学	日本中世文学、韻文学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）・中間・期末テストの問題作成 ・学期末テストの作成	平成13年4月1日～平成14年3月31日・平成14年9月1日～平成16年3月31日 平成25年4月1日～平成25年9月30日・平成26年4月1日～平成26年9月30日	東大寺学園中等高等学校国語科の非常勤講師として、中学二年の現代国語・古典文法を、奈良学園中等高等学校国語科の非常勤講師として、高校一年の古文演習、高校二年の現代国語を担当し、中間・期末試験においてはいずれも問題を作成し採点を行った。 摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」、奈良学園大学の講師として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」を担当し、期末テストを作成実施および採点した。
4）・講義終わりでの小テストや振り返りカードの記入による学生の理解度の把握	平成25年4月1日～平成25年9月30日 平成26年4月1日～平成26年9月30日	摂南大学の非常勤講師として「古典文学に学ぶ」を、奈良学園大学の講師として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」を担当した。摂南大学では講義終わりに、その単元について小テストを行い、学生の理解度を確認した。理解度が各学生によってばらつきがある場合は、次週講義で再度、その項目について補足説明を行い、学生全員の理解度が一定の程度に到達するように努めた。 また、奈良学園大学の講義では、講義の終わりに振り返りカードに、その回で学んだ知識の確認事項と自由記述の欄を設け、学生の理解度の把握と講義内容に対する要望を確認することとした。理解にばらつきのある事項については翌週に補足説明を行い、要望に関しても翌週の講義中に口頭で回答し、妥当なものについては講義に反映させるようにつとめた。
5）・ペアワークや学生の発言の紹介など学生の参加を取り入れた講義	平成26年4月1日～平成26年9月30日	奈良学園大学の助教として「文学（日本の文学／文学の成立と展開）」の講義を担当し、講義中に物語内容に関する読解について、ペアワークを行ったり、振り返りカードで的を得た作品内容への意見などについて講義中に紹介するなどした。これらを行い、学生の積極的な講義参加および学習意欲を引き出すことにつとめた。
6）・学生のチームワーク、コミュニケーション力、発言力を高める講義	平成26年４月1日～平成27年3月１日	奈良学園大学の助教として「人間教育実践力開発演習」の講義を複数の教員とともに担当し、学生のコミュニケーション力や発言力などを高めるグループワークや輪読などの活動を行った。これらによって学生の人間的成長を促すことができた。
2　作成した教科書，教材		
1）伏見院	平成25年10月1日～平成26年3月31日	京都大学文学部での講義「東洋文化系ゼミナールⅡ」において、副次テキストとして使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良学園大学採用にあたっての学長の評価	平成26年4月	過去の業績より、高度な研究知識を持ちながら、柔軟に学生の現状に合わせた講義ができることが窺えた。今後の活躍が期待される。
2）奈良学園大学での授業評価	平成26年4月1日～9月30日	大学での学生への授業評価アンケートの結果で、講義内容はわかりやすく学習速度も適切であったことが評価された。また、感想としては、「パワーポイントやDVDを使用してわかりやすかった」との声が聞かれた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）なし		

事　　項	年月日	概　　要
5　その他		
1）摂南大学での古典文学史の講義	平成25年4月1日～平成25年9月30日	摂南大学経営学部の非常勤講師として、「古典文学から学ぶ」の講義を担当した。学部二回生を対象とし、物語文学を中心とする、古代から平安時代までの古典文学史について講義した。イラストやパワーポイントを多用して、学生の古典文学への興味関心を引き出すこと、古典文学への知識を身につけさせることを目標とし、実際に受講した学生からは「古典文学についての興味がわいた、これからも読んでみたい」などの声が寄せられ、目標を達成することができた。
2）京都大学での和歌史の講義	平成25年10月1日～平成26年3月31日	京都大学文学部の非常勤講師として、リレー講義「東洋文化系ゼミナール」を担当した。学部全体を対象とし、古典文学史、特に勅撰和歌集史について講義した。勅撰和歌集の成立と性格、それに関わる研究を把握し、卒業論文の作成に向けて問題設定ができるように講義を行った。受講学生からのレポートも、勅撰和歌集の個々の性格を理解した上で問題設定を行うことができており効果があった。
3）奈良学園大学での古典文学の講義	平成26年4月1日～平成26年9月30日	奈良学園大学の講師として、「文学」および「日本の文学・文学の成立と展開」の講義を担当した。人間教育学部、ビジネス学部、情報学部を対象とし、物語文学を中心とした古代から中世までの古典文学史について講義した。パワーポイントやプリント、古典にまつわる現代の映画や芸術作品を紹介するなどして、学生が古典への苦手意識を無くし、基礎的な古典文学の知識を取得できるように講義を行った。受講学生の古典文学への興味、関心を引き出し、古典文学作品への知識を獲得するなどの教育的効果があった。
4）人間教育実践力開発演習Ⅰ	平成26年4月1日～平成27年3月31日	奈良学園大学の講師として、「人間教育実践力開発演習Ⅰ」を担当し、教職を目指す学生を対象に、教員として求められる企画力、コミュニケーション力、創造力を高めることを目標に講義を行っている。学生が自発的に発言し、積極的に他者とコミュニケーションをはかろうとするようになるなどの教育的効果があった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事　　項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）高等学校教員免許（国語Ⅰ種）	平成12年3月	平11高一種第511号
2）修士（文学）	平成14年3月	京都大学第3427号、論文題目「嵐と鐘―「風雅和歌集」を中心として―」
3）博士（文学）	平成20年3月	京都大学第445号、論文題目「風雅和歌集の歌風と展開」
2　特許等		
なし		

３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）日本学術振興会特別研究員（DC２、PD） 「京極派和歌表現の比較文学的研究」	平成17年4月～平成19年3月	平成17年4月から平成18年3月までの期間、京都大学大学院文学研究科に所属し、日本学術振興会特別研究員DC2としての研究活動を行った。平成18年4月から平成19年3月までは東京大学大学院文学研究科に所属して、同研究員PDとして研究活動を行った。両研究機関での活動実績として、学会発表を二回行い、論文を三本発表した。論文はうち一本が推薦によるもの、うち一本が査読付論文である。
２）研究プロジェクトでの事務および報告書の編集作成	平成20年7月～平成22年6月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの研究会の事務及び報告書の編集作成に携わった。なかでも、平成20年度研究成果報告書付録の『源氏物語歌寄せ』については、刊行によって一部に知られるのみであった『源氏物語作例秘訣』との関係についても大きく知られることとなった。
３）科学研究費補助金若手研究（B）「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禅文化の流入」	平成21年4月～平成22年9月・平成23年11月～平成24年3月	国文学研究資料館において、機関研究員在籍時の平成21年4月から平成22年6月までの期間および特定研究員在籍時の平成22年7月から平成24年3月までの期間、科学研究費補助金若手研究（B)に採用され、中世和歌とくに京極派和歌の表現に関する研究を行った。途中中断しているのは出産育児によって一年間研究を中止したためである。この間の研究業績は著書が三冊（うち二冊は共著）、報告書が二冊（いずれも共著）、注釈が二本（いずれも共著）、図録が二冊（いずれも共著）である。
４）資料展示の企画参加および展示作業	平成21年11月～平成23年12月	国文学研究資料館において、文学形成研究系の機関研究員として「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの特別展示「物語の生成と受容」（平成21年11月9日～11月23日）の企画に参加、展示にもかかわった。また、特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」（平成23年10月8日～12月4日）においては企画に参加、立ち上げの事務手続きに加わり、陽明文庫展研究会のメンバーとしても展示資料の調査、選定に関わった。同館企画連携部の機関研究員としては、初学者向けの展示「和書のさまざま」（平成22年4月15日～6月18日）の展示作業を担当した。
５）日本学術振興会特別研究員（RPD)「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容―京極派歌人伏見院を中心に」	平成24年4月～平成26年3月	平成24年4月から平成25年3月の期間は信州大学教育学部に、平成25年4月から平成26年3月までの機関は京都大学大学院文学研究科に所属して、日本学術振興会特別研究員（RPD)としての研究活動を行った。この間の業績は、査読付論文が一本、注釈が四本、辞典の項目執筆が一冊（共著）である。
６）韓国学中央研究院「2012年度グローバル時代韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト、「高麗時代の公共性」における共同研究	平成24年8月～平成25年11月	韓国学中央研究院の採択研究プロジェクトにおいて、日本側の共同研究者として参画している。韓国で行われる学術会議に参加、発表を行い、報告書に論文を提出する。この間の業績は、研究発表および討議が二回である。平成27年（2015）夏期に刊行される予定の報告書にも、論文を二本掲載予定である。
４　その他		
１）日本学術振興会特別研究員奨励費（DC２、平成18年度よりPDに中途変更）	平成17年4月～平成19年３月	「京極派和歌表現の比較文学的研究」（人文学17・1480）
２）科学研究費補助金若手研究（B）	平成21年4月～平成22年9月・平成23年11月～平成24年3月	「南北朝期和歌における王朝文化の継承と禅文化の流入」（21720084）代表阿尾あすか
３）日本学術振興会特別研究員奨励費（RPD）	平成24年4月～平成26年3月30日	「持明院統派皇族間での宮廷文化の相承と変容―京極派歌人伏見院を中心に」（人文学・40200）

事　　項	年月日	概　　要
４）韓国学中央研究院「2012年度グローバル時代韓国的価値と文明研究」採択プロジェクト	平成24年8月～平成25年11月	「高麗時代の公共性の研究」１年目：鎌倉時代後期の宮廷文化と公共性、2年目：天皇の記録を通してみた中世的公共性
５）学術雑誌の学会時評における評価	平成16年5月・平成17年11月	学術雑誌の学会時評において下記のように三度、論文が評価された。 『国文学　解釈と鑑賞』平成16年5月号掲載の「学会時評」、中世の項目において、論文「「壁に消えゆく」考―京極派和歌表現の一展開―」（『国語国文』72巻10号）が取り上げられ、「その機能にまでも考察を掘り下げて、出色の歌語論となっている。」との評価を得た。 『国文学　解釈と鑑賞』平成17年11月号の「学会時評」中世の項目において、「炊煙の歌―『風雅和歌集』雑中を中心として」（『文学』6巻4号）が取り上げられ、その内容について「理想郷にある隠者の存在証明を鋭く見て取っている。」との評価を得た。また、『リポート笠間』56号（平成26年5月・笠間書院）の学会時評「和歌」の項目において、論文「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」（『京都大学国文学論叢』30号）が「古筆資料の博捜と考証から新たな見解が提示されている」研究として紹介・評価されている。
６）過去に申請者が所属した国文学研究資料館でのプロジェクトの代表責任者の評価	平成23年5月20日	申請者は同館の「平安文学における場面生成研究プロジェクト」及び「陽明文庫展示研究プロジェクト」に機関研究員として従事し、主に研究や、研究成果報告書の編集作業及び研究会の運営の補助などを行っていた。前者のプロジェクトでは平安物語文学という申請者の専門外の分野を中心とする活動であったものの、中近世和歌に関する広範な知識を生かし、後世における平安物語文学享受について様々に研究提起してプロジェクトに貢献するところが大きかった。企画展示室にも勤務し、展示作業にも関わっていた。アルバイト学生などの協力者との関係も良好であり、業務と両立して自分の研究も行っていた。 今は古典研究者が減少する傾向にあるので、次代に向けて古典文化を担っていく者が積極的に求められる。申請者は今後さらに優秀な研究者として成長していく人物であるので、是非申請をお願いしたい。
７）日本学術振興会特別研究員（DC2)の受入研究者の評価	平成23年5月21日	申請者の持つ専門的知識・技量については、京極派和歌はもちろん中世韻文学に関してもその知識は広範に及ぶ。また、前の勤務先において、平安王朝物語に関わったプロジェクトに参加していたこともあり、物語文学に関する知識も豊富である。表現研究だけではなく、資料研究も手堅く押さえられているところが、申請者の研究者としての強みである。
８）日本学術振興会特別研究員（RPD)の平成24年度受入研究者の評価	平成24年11月26日	当該教員は、伏見院の和歌における『万葉集』の歌句表現摂取について考察を進めている。京極派和歌と『万葉集』の関わりについては指摘はされてきたものの、本格的に表現摂取について考察したものは従来の研究ではまだなかった。応募者にはほかの研究テーマもあり、論文になるのは来年になりそうだが、必ず新たな指摘があるものと期待している。応募者のもう一つの研究テーマとして、京極派の歌学、歌論についての考察があるが、これも近年では歴史的時代的背景からも問題を掘り下げようとしており、視野を広げている。応募者は日本史の若手研究者たちと共に『花園天皇宸記』の解釈研究や、韓国の韓国／東洋政治思想史学会との共同研究も行っており、国文学の枠内を超えた研究ができるものと今後期待する次第である。

事　　項	年月日	概　　要
９）日本学術振興会特別研究員（RPD)の平成25年度受入研究者の評価	平成26年4月18日	研究員は近年、京極派歌壇の指導的存在であり、皇統である持明院統の領袖でもあった伏見院の歌人像を再構築するという大きなテーマに精力的に取り組んでいるが、当該年度において発表した論文、「東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―」は、伏見院の歌人としての実像を知るための大きな手がかりとなるものである。同詠草については、近年その存在が発見され、いまだその性格が明らかとなってはいなかった。研究員は合点や丸印といった符号の付いた和歌について詳細な分析を行うことで、同詠草の実体を明らかにすることに成功した。同詠草の性格が判明することで、伏見院の歌風形成の過程がより明確なものになることが予想される。また、韓国の研究者との共同研究において、文学の立場から中世日本社会の「家」が公共的存在であることを提起しているが、これも中世の天皇家および歌の家と密接に関わる問題であり、持明院統皇統の性格を考える上で大変重要な研究と思われる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
１．伏見院	単著	平成23年6月	笠間書院	中世の京極派和歌の庇護者であり、代表歌人でもある伏見院の和歌三十七首の解釈を通じて、院の和歌表現の特徴と和歌思想について論じた。伏見院の和歌は、王朝古典文学や漢詩文を積極的に摂取した表現、独自の思想に基づいた繊細な自然描写が特徴である。京極派和歌は、法相宗の唯識思想を基としているが、院の場合はそこに神道的な思想が加わる。伏見院には強烈な正統意識と隠遁願望があり、院の思想や歌風もこうした内面に由来すると思われる。 A６判・全113頁
２．『中世近世和歌文芸論集』龍谷叢書15	共著	平成20年9月	思文閣出版	関西の研究者を中心とした、中世近世和歌に関する論文集。 A5判、401頁 編者：日下幸男 共著者：安井重雄・阿尾あすか・長谷川千尋・長谷川薫・大谷俊太・岡本聡・藤本孝一・海野圭介・小高道子・日下幸男・西田正宏・神作研一・盛田帝子・久保田啓一・中川豊・加藤弓枝・万波寿子 本人担当部分「風雅和歌集における烏―京極派的歌材をめぐる一考察」(p24-49) 「風雅和歌集における烏―京極派的歌材をめぐる一考察」を単著 『風雅和歌集』では烏を題材とした歌が他の勅撰集と比べ突出して多く入集している。烏は和歌や王朝文学の世界では雅的な物とみなされなかったが、漢詩文の世界では詩的世界を形成しうる題材として深く浸透している。『風雅和歌集』の烏の歌も漢詩文から表現を摂取することで抒情性を持って詠むことが可能となった。一方で、漢詩摂取と共に、『万葉集』や王朝文学の要素を和歌に取り入れており、漢詩的題材の烏を和歌的素材へと変質させる工夫を行っている。
３．『鳥獣虫魚の文学史　虫の巻』日本古典の自然観３	共著	平成24年1月	三弥井書店	鳥獣虫魚のうち、虫を取り上げ、虫が日本古典文学においてどのように描かれてきたかを様々な視点から論じ、そこから日本人の自然観をあぶりだすことを目的とした論文集。 A5判、373頁 編者：鈴木健一 共著者：鈴木健一、田中仁、室田知香、大井田晴彦、西山秀人、坪井陽子、横田隆志、植木朝子、高柳祐子、山本啓介、横山太郎、天野総一、阿尾あすか、有賀夏紀、金子俊之、牧藍子、牧野悟資、井上泰至、小財陽平、吉丸雄哉、佐藤至子 本人担当部分：「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざまで」（p214-229） 「蚊遣火を詠む和歌―「雅」と「俗」のはざまで」を単著 蚊遣火は現代俳句では季語となっているが、庶民生活に密着した素材であるため、和歌では配慮して詠む必要があった。即ち、喩えや景観の一点景として詠むなど、卑俗な生活実態の部分は切り捨てて朧化して詠まねばならない。蚊遣火は元来「俗」の性質を内包しているため、美を象徴化してゆく和歌では、常に「雅」「俗」のバランスに注意を払わなければならない。だが、「俗」の立場から「雅」をめざす俳諧には適しており、俳句的題材であったと言える。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．『中世詩歌の本質と連関』中世文学と隣接諸学６	共著	平成24年1月	竹林舎	中世和歌における諸問題を扱った論文集。 A5判、全597頁 編者：錦仁 共著者：阿尾あすか、赤木俊介、植木朝子、錺武彦、加藤孝男、久保木秀夫、小林一彦、小山順子、志立正知、鈴木元、寺島恒世、内藤まりこ、中村文、中村成里、錦仁、久野俊彦、平田英夫、平林香織、堀川貴司、松本麻子、松本郁代、丸山陽子、安井重雄、山田尚子、吉野朋美 本人担当部分：「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」（p511-535） 「歌の家の継承と実践―京極為兼・二条為世を中心に―」を単著 鎌倉時代後期、歌の家である御子左家は京極、二条の二家に分裂し、双方が正統性を主張した。京極為兼と二条為世の歌論を検討すると、為兼は詠歌態度についての庭訓を、為世は歌を詠む実践面での庭訓をそれぞれ継承している。両者は歌合の判定においても、継承した家伝に忠実であった。歌学歌論の宗教的傾向を深化させたのが京極派、「道」の伝授を庶幾してゆくのが二条派であり、両者は中世文化を形成する表裏一体と捉えうる。
（学術論文）				
１．炊煙の歌―『風雅和歌集』雑中を中心として	単著	平成17年6月	『文学』（岩波書店）６巻4号p120－132	後期京極派の勅撰集『風雅集』雑中部は、同集の特色である隠遁志向が強い。その中で炊事の煙は、隠者の存在証明として詠まれる。通常の勅撰集では炊事の煙は天皇の仁政の象徴として詠まれ、『風雅集』は例外である。同集の炊煙の表現は陶淵明「帰園田居」を摂取したものと思われ、その背景に禅僧を介しての宋詩および詩話摂取があったと思われる。後期京極派の志向する隠遁は漢詩文的であり、後期指導者花園院の禅宗への系統が影響している。
２．「力あり」ということ『光厳院三十六番歌合』判詞をめぐって	単著	平成18年3月	『京都大学国文学論叢』（京都大学）15号p1－22	後期京極派の光厳院が催行した『光厳院三十六番歌合』の判詞には、和歌表現に対して「力あり」との褒詞が三例見える。この評語は従来の歌合では万葉風の有勁な表現に対してのものだが、同歌合では歌の風格や格調高さに対して用いられている。その背景には、歌壇の指導者であった花園・光厳院の、和歌が人心を融和させ為政者の治世を言祝ぐ働きを持つという政教思想があり、和歌に端正さ、格調高さを求めた和歌観があったと考えられる。
３．花園院と紀貫之―『風雅和歌集』所収の貫之歌を中心に―（査読付）	単著	平成19年11月	『国語国文』（京都大学）76巻11号p1－16	紀貫之は中世の二条派和歌では評価が低く、勅撰十三代集でも京極派の歌集のみが貫之を厚遇している。特に『風雅和歌集』では貫之が藤原俊成に並ぶ歌人として重視されている。それは貫之の独自性の強い語句や発想、表現や観念的な歌風が、後期京極派指導者の花園院の嗜好と一致していたことに起因すると思われる。花園院の和歌観は、初期の京極派に近く、観念志向が強い。観念志向の行き過ぎが、後年の京極派の行きづまりへと結びついたと考えられる。
４．風雅和歌集の歌風と展開（博士論文）	単著	平成20年3月	京都大学	『風雅和歌集』の文学史における歌風の評価は「繊細閑寂化」と「内観性の沈潜」にあるが、この二つの傾向については、後期京極派和歌の指導者で『風雅集』監修者であった花園院の意向が大きい。同院には禅宗への傾倒と共に深まった隠遁志向と、為政者としての儒教的価値観、政道思想による理知的傾向がある。そのような院の嗜好によって隠遁詠は漢詩文の間適を摂取した特異な性質を帯び、内観的な詠歌は「道理」を重んじる理論的なものとなっている。院には強い隠遁願望と為政者としての自覚が常にあった。 A4判、全140頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．東京国立博物館蔵「伏見院詠草」の性格―合点・丸印の意味するもの―（査読付）	単著	平成25年9月	『京都大学国文学論叢』（京都大学）30号p37－54	東京国立博物館蔵「伏見院詠草」は近年伏見院自筆の歌稿と紹介された資料であるが、永仁の勅撰の際の撰集資料とされる「松木切」の一部と推定されたものの、その和歌表現や資料の性格については不明であった。合点・丸印の付いた和歌の表現を中心に検討を行ったところ、それら記号の付いた継紙には京極派歌風成立以前の表現が見られ、記号のない継紙は純然たる京極派歌風の歌がほとんどであった。詞書も勘案すると、和歌に合点・丸印の付いた和歌は永仁期から京極派歌風確立以前の嘉元期以前までの詠草をまとめたものであり、合点・丸印のない継紙に関しては嘉元期以後のものであることが判明した。同詠草は「松木切」以後も、様々な段階でまとめられた伏見院の歌集の草稿の一部が切り継ぎされたものと考えられる。
６．日本文化における教養教育としての「古典文学」利用―『大和名所図会』での名所規定を例として―（査読付）	単著	平成26年12月	『人間教育学研究』（人間教育学会）2号,pp（一）～（一三）	『大和名所図会』の古典文学の引用状況を調査し、検討することで、当時の文人層の基礎教養がどのようなものであったかを明らかにした。
（その他）				
「報告書」				
１．『平成20年度研究成果報告書　物語の生成と受容④』	共著	平成21年3月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成20年度の研究成果をまとめた報告書。 A5判、全294頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：高橋由記、江戸英雄、萩野敦子、阿尾あすか、森田直美、中村康夫 本人担当部分「正徹の『源氏物語』摂取について」（p238-263） 「正徹の『源氏物語』摂取について」を単著 室町時代の歌僧、正徹は、心酔していた藤原定家が『源氏物語』を摂取して歌境を開拓したことに影響を受け、自身も源氏摂取歌を多く残している。しかしながら、物語世界の延長上にある王朝文化の中に生きた定家と、室町の地下歌人である正徹とでは摂取の仕方が異なる。定家は他の王朝物語や和歌も受容して複合重層的な物語的世界を和歌に作りだすが、正徹の場合は摂取した物語場面の世界そのものを和歌で表そうとし、連歌に近い詠歌方法となっている。
２．『平成20年度研究成果報告書　源氏物語歌寄せ』	共著	平成21年3月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成20年度研究成果報告書の付録。江戸時代の歌学書『源氏物語歌寄せ』の翻刻と解題。 A5判、全219頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：平安文学における場面生成研究プロジェクト、阿尾あすか 本人担当部分：「『源氏物語歌寄せ』解題」（p298-218） 「『源氏物語歌寄せ』解題」を単著 『源氏物語歌寄せ』は存在自体は既に紹介されていたが、その資料の性格については明らかにされてこなかった。本書と関係の深いものに、江戸時代中期の堂上派歌人、有賀長伯・長因親子が編纂した『源氏作例秘訣』がある。調査したところ、当該書は作例秘訣の祖本、それも編集の途上にあったものを借り出して写し、編者の使い勝手のよいように独自の改訂を加えたものであったことが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．『平成21年度研究成果報告書　物語の生成と受容⑤』	共著	平成22年2月	国文学研究資料館	国文学研究資料館の「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの平成21年度の研究成果をまとめた報告書。付録として平成21年11月に国文学研究資料館特別展示資料の調査報告と資料解説を付ける。 A5判、全235頁 編集：「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：「一滴集」（p181-183）、「源氏物語わかくさ」（p184-185）、「詠源氏物語和歌」（p186-189）、「源氏物語歌寄せ」（p190-193） 平成21年11月に国文学研究資料館特別展示で展示した、同館所蔵本についての調査報告及び資料解説。各資料の解説は以下の通り。 『一滴集』は正徹の著した『源氏物語』
				注釈書で、国会図書館蔵本の謄写本である。注釈のスタイルや本問引用から、正徹が旅先での『源氏物語』の講釈の急な要請に備えて書かれたものと推定される。 『源氏物語わかくさ』は『源氏物語』の和歌だけを書き抜いた抜書で、孤本である。一部の古活字版や無跋無刊記本に見える特殊な巻名表記があるのが特徴である。 『詠源氏物語和歌』は『源氏物語』の巻名を題とする定数歌で、堀田正睦主催、松平定信ら大名幕臣、古学派の歌人が参加する。屋代弘賢所持本を書写した本をさらに書写したもの。『源氏物語歌寄せ』は『源氏物語』に因んだ和歌の用例とその典拠となった『源氏物語』の本文を書き抜いた江戸中期頃の歌書であり、有賀長伯・長因親子編纂の『源氏作例秘訣』の祖本を編集途中で書写、改訂をくわえたものと推測される。
４．陽明文庫王朝和歌集影	共著	平成24年1月	勉誠出版	平成23年の国文学研究資料館の特別展示「近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承」の図録をもとに索引を付すなどして編集し、単行本化したもの。国文学研究資料館特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（平成21年～平成23年度　代表者・中村康夫）の研究成果報告書でもある。 A4判、全252頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤祥子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懐紙（賦花迎文翰賓）」、「和歌懐紙（見花・折花）」、「和歌懐紙（梅近聞鶯）」、「広沢切（伏見院御集断簡）」、「和歌巻」、「和歌懐紙（侍行幸聚楽第）」、「詠草（立待月・渡月・月前松・寄月旅）」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懐紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「注釈」				
１．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月記（二）―訓読と注釈	共著	平成23年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）6号p175-222	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年二月十一日～三十日条の本文について、宮内庁書陵部のコロタイプ複製を底本として、翻刻、訓読、注釈を加えたものである。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：二月十七日条 十七日条の翻刻、訓読、注釈を担当した。同日条では宮中行事についての注釈を主に加えたが、鎌倉後期の政治情勢を踏まえて記述した。
２．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記―訓読と注釈	共著	平成24年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）7号p241-304	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年三月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人 本人担当部分：三月二十二日条 観音院の仏事、観音院灌頂についての記事を中心に訓読・注釈を行った。
３．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記―訓読と注釈	共著	平成25年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）8号	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：四月十二日条、二十一日条、二十二日「衆議判」の項、二十八日条 二条為基や京極為子の略伝、和歌に関する記事を中心に訓読・注釈を行った。
４．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（一）―訓読と注釈	共著	平成26年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）9号	『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年四月記の本文について、宮内庁書陵部版の自筆本コロタイプ複製を翻刻し、訓読・注釈を加えたもの。 共著者：阿尾あすか、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当部分：五月十五日条
５．『花園天皇日記（花園院宸記）』正和二年五月記（二）―訓読と注釈	共著	平成27年3月	『花園大学国際禅文化研究所論叢』（花園大学）10号	共著者：阿尾あすか、小橋慧子、坂口太郎、中村健史、長村祥知、花田卓司、横澤大典、芳澤元、米澤隼人、窪田頌 本人担当分：五月二十九日条
「翻刻」				
1. 「源氏物語歌寄せ翻刻」	共著	平成21年3月	『平成20年度研究成果報告書　源氏物語歌寄せ』（国文学研究資料館）p1-197	国文学研究資料館蔵『源氏物語歌寄せ』の翻刻。 共著者：阿尾あすか、岩城賢太郎、江戸英雄、小川陽子、金光桂子、高橋由記、中川照将、中村康夫、萩野敦子、森田直美、横井孝、横溝博 本人担当部分：p1-26
２．「『蒙求和歌』第三類本本文〈二〉―恋部から述懐部まで―」	共著	平成25年3月	『京都大学国文学論叢』（京都大学国文学研究室）28号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：81～90 『蒙求和歌』恋部前半、「班女辞輦」から「宋女愈謹」までの翻刻を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．「『蒙求和歌』第三類本本文〈三〉―哀傷部から雑部まで―」	共著	平成25年3月	『京都大学国文学論叢』（京都大学国文学研究室）29号	『蒙求和歌』本文、三類本に分類される山口県立山口図書館蔵本を底本とし、実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵本と対校させながら翻刻を行ったもの。 共著者：阿尾あすか、小山順子、竹島一希、蔦清行、中島真理、濱中祐子、森田貴之、山中延之 本人担当部分：151～160 『蒙求和歌』、「墨子悲糸」から「史魚黜殯」までの翻刻を行った。
「図録」				
１．『特別展示「物語の生成と受容」』	共著	平成21年11月	国文学研究資料館	平成21年11月9日～23日の期間、国文学研究資料館で開催した特別展示の解説図録。 A4判、全49頁 編者：国文学研究資料館「平安文学における場面生成研究」プロジェクト 共著者：中村康夫、伊藤鉄也、江戸英雄、阿尾あすか、吉田小百合、岩城賢太郎、小川陽子、加藤昌嘉、金光桂子、高橋由記、中川照将、萩野敦子、松岡智之、横井孝、横溝博、安藤徹、武井協三、森田直美 本人担当部分：p33-36 22「一滴集」、23「源氏物語わかくさ」、24「詠源氏物語和歌」、25「源氏物語歌寄せ」の解説。
２．『図録展示　近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承』	共著	平成23年11月	国文学研究資料館	平成23年10月8日～12月4日に国文学研究資料館で行われた特別展示の図録。同館の特定研究「陽明文庫における歌合資料の総合的研究」（平成21年～平成23年度　代表者・中村康夫）の研究成果報告書でもある。陽明文庫に伝わる歌合及び和歌に関する資料を中心に展示を行った。 A4判、全257頁 編者：国文学研究資料館 共著者：阿尾あすか、赤澤真理、海野圭介、久保木秀夫、寺島恒世、中村健太郎、中村康夫、名和修、後藤祥子、杉本まゆ子、日比野浩信、舟見一哉、山本登朗 本人担当部分：「詩懐紙（賦花迎文翰賓）」、「和歌懐紙（見花・折花）」、「和歌懐紙（梅近聞鶯）」、「広沢切（伏見院御集断簡）」、「和歌巻」、「和歌懐紙（侍行幸聚楽第）」、「詠草（立待月・渡月・月前松・寄月旅）」、「光厳院三十六番歌合」 室町後期から近世初期にかけての近衛家歴代当主の懐紙、持明院統派天皇の和歌巻を中心に資料解説を行った。
３．『和歌文学大辞典』	共著	ウエブ版：平成25年4月 書籍版：平成26年12月	株式会社古典ライブラリー	共著者：青木賜鶴子・青木太朗ほか 本人担当部分：或所紅葉歌合・摂津守有綱歌合・賭弓歌合・未詳歌合（年次不詳）・後伏見天皇・家親・清雅・経親・家雅・三十番歌合・金玉歌合・歌合（乾元二年五月四日）・正応三年九月十三夜歌会歌・正応二年三月和歌御会・北山御幸和歌・正中三年禁庭御会和歌・為兼卿和歌抄・京極家・伏見院三十首・公蔭・法守法親王・盛親・定宗・一万首作者・山王七社法楽和歌・貞和百首・木綿襷・永仁勅撰議・伏見院宸記・理・風雅・京極派 B5版、全1352頁
４．三室戸寺蔵文学関係資料目録	共著	平成27年３月	和泉書院	共著者：大谷俊太、小山順子、長谷川千尋、豊田恵子、舟見一哉、阿尾あすか、森本晋、龍池玲奈 本人担当部分：p6-7,13-14,17,22-23,27,35,50,55,90,93,100,106-109,117-121 A4版、全222頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「討議」				
１．「王朝物語と歌ことばの変奏　正徹の『源氏物語』摂取について」	共著	平成21年３月	国文学研究資料館『平成20年度研究成果報告書 物語の生成と受容④』p264-281	平成20年10月25日に行われた国文学研究資料館「平安文学における場面生成研究」プロジェクトの第九回研究会での研究報告に関する共同討議の記録。 参加者：阿尾あすか、岩城賢太郎、小川陽子、金光桂子、高橋由記、中川照将、中村康夫、萩野敦子、松岡智之、森田直美、横井孝、横溝博、江戸英雄（司会）
「学会発表」				
１．花園院と詩話　風雅和歌集の真名、仮名序を中心に	単独	平成17年11月	京都大学国文学会（於京大会館）	後期京極派の花園院は、『風雅和歌集』の監修および真名・仮名序を起草している。両序は花園院の和歌観が披歴されているが、和歌表現が美麗でありながら真のないものであったり、心を重視しすぎて表現が粗野になったりすることを誡めるなど、二条派・京極派それぞれの和歌の欠点をあげるものとなっている。こうした和歌観は、花園院が感動した『詩人玉屑』など宋代の詩話に見られる詩歌観とも共通しており影響を受けたと見られる。
２．後期京極派和歌における紀貫之の評価	単独	平成18年7月	和歌文学会例会（於東京大学）	『花園院宸記』において花園院は紀貫之を高く評価している。一方で二条派では貫之はあまり評価されてはいない。二条派における貫之の評価の低さは余情歌を詠まず明確な和歌表現をしようとする貫之の和歌と二条派の庶幾する和歌とが全く逆のものであったからと考えられる。貫之の詠風は、分析的、理知的詠風を志向した後期京極派と共通点が多く、論理性を重視した花園院・光厳院の和歌観の影響があったと思われる。
３．後期京極派和歌における紀貫之の評価	単独	平成17年11月	和歌文学会例会（於東京大学）	後期京極派の花園院は、『風雅和歌集』の監修および真名・仮名序を起草している。両序は花園院の和歌観が披瀝されているが、和歌表現が美麗でありながら真のないものであったり、心を重視しすぎて表現が粗野になったりすることを誡めるなど、二条派・京極派それぞれの和歌の欠点をあげるものとなっている。こうした和歌観は、花園院が感動した『詩人玉屑』など宋代の詩話に見られる詩歌観としても共通しており影響を受けたと見られる。
４．東京国立博物館蔵『伏見院詠草』の和歌表現について―合点・丸印の意味するもの―	単独	平成20年12月	和歌文学会例会（於東京大学）	東京国立博物館蔵『伏見院詠草』の歌頭に付く添削記号を検討すると添削基準が各継紙によって一定ではなく、これらの歌は京極派風表現模索期の歌と推定できる。典型的な京極派風表現の歌を書き連ねているにも関わらず添削の行われていない継紙もあるが、伏見院にとって不遇期の嘉元期のものと推定される。大覚寺統派に政権が移って自派の勅撰集撰進の可能性が薄れたため、途中から添削も行われなくなったものと考えられる。
５．日本宮廷文学の公共性―「勅撰和歌集」という公共事業	単独	平成24年11月	韓日国際学術会議―高麗時代の公共性―（於韓国ソウル・アサン政策研究院）	政治的な視点で見ると、勅撰和歌集は天皇の公共事業として捉えられる。勅撰和歌集の編纂事業は、天皇の治世と安定と繁栄を予祝、または記念する国家事業であり、特に中世においては和歌によって王権の正統性と権威を補完し、誇示するものであった。そこには武家の有り方が深く関わっており、足利幕府が京都に幕府を置いたことにより変容することとなった。勅撰和歌集の編纂事業は天皇家が権能の一部を幕府に与えながらも、政治と文化双方において権威権力を持つことによって成立したのである。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６．「家」という日本の中世的公共性について―「歌の家」を中心に―	単独	平成25年8月	韓日国際学術会議―高麗時代の公共性―（於高麗大学）	「公共性」という言葉は様々な定義で用いることができ、時代によっては示す内容が異なってくる。当該発表では日本の中世独自の「公共性」の一つに、「家」があることを論じた。和歌の「家」である御子左家の継承の正統性をめぐって争った二条家と京極家の様相に注目すると、細部の文学表現までもが「家」の継承の正統性の証左となったことが窺える。現代では「私」の領域にある表現や芸術活動が、中世日本では「公共」のものであったことがわかる。現代日本における伝統芸術が今日、継承の問題で苦しんでいるのも、中世的公共性をいまだ引きずっている部分が多いからではないか。
７．大和の観光名所―古典文学との関わりから（講演）	単独	平成26年9月	平成26年度り～べるカレッジ公開講座（於王寺町地域交流センター）	江戸時代の名所記『大和名所図会』を取り上げ、王寺と三郷、龍田川周辺が江戸期の人々にはどのような場所として捉えられていたかを明らかにした。なかでも和歌の歌枕でもある「龍田川」が、江戸期にはすでに所在不明の場所となってしまっており、歌枕と現実の場所との乖離が進んでいることを指摘した。

教 育 研 究 業 績 書

平成27年5月1日

氏名 安藤邑惠

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
1　教育方法の実践例 1）老年看護概論； 高齢者擬似体験演習の計画・実施	平成7年9月－現在に至る	授業前調査では学生の約75％は高齢者との生活体験ばかりではなく会話さえも経験したことがない現状である。高齢者擬似体験演習の目的は、老年看護学の授業開始に先立ち高齢者を全人的にイメージ化し易くするために行っている。装具は80歳の高齢者の身体的特徴を想定して、眼は色ゴーグルで白内障を、耳は耳栓で難聴を、手先の巧緻性の低下は手袋を着け、四肢には砂嚢を装着し動きや行動の自由度を制約して体験する。学習内容は日常生活行動を行う。例えば箸で食事をする、自販機に小銭を入れ飲料水を購入し、水分補給をする、トイレに座って排泄時の体勢を行うというものである。この体験を通して学生は、なぜ高齢者の行動がゆっくりなのか、なぜ転倒し易いかといったことに気づき、高齢者にどのような配慮が必要か、看護者としてどのようなこころ構えを持たなければならないかを学生自身が引き出している。この体験により学生は以後の講義内容に強い関心とリアルな感覚をもって参加している。
2）老年看護概論； メディア機器を活用した授業	平成7年4月－現在に至る	看護基礎教育においては、経験知の学びよりも理論に力点が置かれている傾向にある。生活経験の少ない学生の理解を深めるには経験知によって生活実態を知らせることも重要と考える。老年看護学は高齢者を対象とするところから老い、加齢、生命、生活という現実の理解を促す事を重視して教育に携わっている。老年看護学概論は抽象的な内容や法的な内容が多く、社会問題と接点をもって伝えて行くために最新の統計資料や高齢者関連の新聞記事等の教材を提供し、解説だけでなく学生との意見交換に用いている。またスライドやVTRによって重要な内容や看護ケアの活動現場をビジュアルに示し理論との統合を図っている。
3）老年看護概論； 学生自身による、「健康な高齢者へのインタビューレポート」を活用した演習（ディスカッション）	平成9年4月－現在に至る	健康な高齢者へのインタビューの目的は高齢者との接点が少ない学生が高齢者の生活ぶりや人生を知り、高齢者理解を深めることにある。インタビューは後期高齢者を対象としている。方法は学生の身近にいる高齢者のある１日を一緒に過ごし、高齢者とじかに触れあう。内容は高齢者が１日をどのように時間を使っているか、高齢者が愉しみにしていることは何か、高齢者の暮らし振りや望んでいること、考えている事を直接聞き、考察を加えてレポートにする。クラスではこの体験の学びを持ち寄りディスカッションしている。その中で後期高齢者の共通性、相違点、個別性を整理することによって、時代的な背景ばかりでなく、ある種の共通した価値観があることに気づいている。高齢者をよりリアルに理解できる効果があり、高齢者との距離が縮まり、尊敬とともに近親感を覚え、高齢者へのポジティブな見方について修正を行っている。

4）老年看護学における授業と 演習・実習の統合化に向けての学習課題	平成9年4月－現在に至る	平成9年度、新カリキュラム移行後、老年看護概論、老年臨床看護、老年看護学臨地実習の3教科が統合して学習が進められるよう授業・演習・実習を関連づけた学習課題を提示している。この課題は各科目の終了時に学習のポイントを示し、系統的に知識を整理している。これは机上の知識から看護実践への活用・応用ができるように、解剖学・生理学・病態学を含め保健・医療・福祉行政も視野に入れて看護援助を関連づけている。これは知識を活用し、ベッドサイドの看護に偏らず、保健・医療・福祉を視野に置いて有機的に関連して学習できるよう配慮している。この学習課題は、実習で看護展開を行う時の参考資料として活用でき、また国家試験の学習手引きとしても活用している。国試対策の補講ではこれらに加え、最新のデータや情報の追加を行う。卒業生は実習中や国試対策に大いに参考になったという反応があった。学生は各自のオリジナルな学習ノートを作成し、内容の追加等は学生が必要に応じて行い、教員は個別指導や資料の紹介をして補い、出題基準も意識づけながら実習カンファレンスのテーマとしても活用している。
5）老年看護学臨地実習指導の展開の工夫 ①３年生（病院・老健）実習 ―導入・指導・まとめ―	平成12年4月－現在に至る。	平成9年度、新カリ変更後、老年看護学臨地実習は、病院と老人保健施設で４週間の臨地実習を行っている。この展開の導入に際しては、受持ち患者は可能な限り、学生の学習課題にそって臨床指導者との詳細な打ち合わせにより選択する。学生には個々の実習目的を明確にし、指導者との共通理解を図った上で、学生が実習に集中できる環境作りをする。内容は実習目的・目標を個々のレベルに合わせて提示し、事例の看護展開と技術演習を実施させる。看護の現場で実際に行わなければならない看護技術の確認や修正等は個別指導を含み、学内演習を必要に応じておこなう。実習記録では、問題解決思考によって展開されているかを確認する。4週間の実習を通して高齢者看護への関心を高めることを重視している。実習最終日は老年看護学のまとめと位置づけ、異なる２施設の実習場で学習してきた学生を一同に会し、受け持ち患者の看護から引き出された高齢者の理解や看護の意味づけを行う。学習方法は、実習グループとは異なるメンバーで構成し、ディスカッションを行う。学習効果は、実習施設の看護の特色は異なるが、高齢者看護の目指すところや高齢者看護の目標や原則を現場体験と関連づけ、個々の大切な要素は共通していること、すなわち老年看護概論で学んだ内容を確認している。また、看護職と介護職との役割の違い、連携の重要さについて現場の事例を教材として理解を深めている。
②３年生/老年看護学実習場面での 学生相談・面接時間の設定	平成12年4月－現在に至る。	老年看護学臨地実習中、4週間の臨地実習を円滑に運ぶために教員配置は、実習時間中助手１人が実習場に常駐し、学生の相談、実習内容・技術の指導にあたっている。教員は2～4病棟で実習する学生10人数人を担当し、患者との関係、病棟と調整を必要に応じて行っている。学生にはいつでも相談にのることを伝えているが相談に来られない学生もいるため、ケア現場を確認したり、指導者との意見交換を蜜にし、学習が進まなかったり、戸惑っている学生には面接時間を設定している。このような環境を設定することよって長期欠席者以外は全員及第している。これ以外にも教員が必要と考えた時は適宜相談・面接時間を設け、円滑な実習ができるよう環境調整をしている。

③老人福祉施設での臨地実習調整 －実習打ち合わせと施設指導者との関わり－	平成8年度-平成17年度 （横浜市大） 平成18年度－現在に至る （岐阜医療科学大学）	本実習は市中の特別養護老人ホーム12-15ヶ所を利用している。本実習の目的は多くの高齢者のケアを通して高齢者の身体的・心理的・社会的特徴と介護保険制度が一人ひとりにどのように利用されているかを学ぶことにある。指導の特徴としては、できるだけ多くの高齢者に接し、人生の最終段階にある人々にどのようにケアすることが一人ひとりのQOLを高めることに通じるかを考える機会としている。 実習施設への指導は、学生に学ばせて欲しいことを明確に伝え、理解を得るために直接教員が出向き担当者と密な調整をしている。具体的には施設指導者が毎日のまとめに短時間でも関わり、学生の疑問に答えてもらうよう、また実習記録に目を通してもらい気づいたことをその時・その場で伝えてもらうように依頼している。学生には実習の総括として「老人福祉施設実習を通して学んだこと」と題し、レポートを課している。実習施設へはこのレポートを送付している。施設は学生の率直の意見や考えを知り、高齢者への直接ケアとともに学生指導に還元され、年を追って学生への理解が深まり。指導内容が向上し、施設の実習環境が整いつつある。
6) ICF(国際生活機能分類)を用いた高齢者理解の授業　－医療モデルから社会モデルの理解に向けて－	平成20年4月-現在に至る。	看護過程の展開を ICF（国際生活機能分類）の枠組みにそった授業内容を工夫した。2005 年の介護保険改正により、ICF は保健・医療・福祉・教育等の職種を越えての「共通言語」になり、これを用いてケアすることが明示された。これは身体障害者だけに留まらず、高齢者の分野においても ICF の概念に基づいたポジティブな視点が重要となる。授業では基本概念をはじめ、「医療モデル」と「生活モデル」の違いや高齢者が「その人らしく生活する」とはどのようなことかを理解することをねらいとした。方法は老人保健施設に入所している脳梗塞をもった利用者を事例として用いた。看護過程の演習をしながらディスカッションを交え、これまで医療モデルの枠組みで思考していた情報収集やアセスメントを社会モデルとして生活の全体像を理解できるよう、すなわち ICF の視点に転化できるよう対比表を用いた。これは臨地実習にも活用を予定しているため、実習記録用紙の形式に則って書き方を含め個別指導し、事例のモデル回答も示した。
7) ICF(国際生活機能分類)を用いた高齢者理解の実習記録用紙の工夫	平成20年9月-現在に至る。	ICF（国際生活機能分類）の概念を用いた実習記録用紙の工夫を行った。ICF 研究会で制作した ICF ケアプラン記録用紙を参考に「医療モデル」と「生活モデル」が併記できるようにした。ICF ケアプラン記録用紙は心身機能・構造、活動、参加の３点を中心として、対象者を中心として多面的に情報を収集し、アセスメントに結びつけることができるという特徴がある。また ICF ケアプラン記録用紙には利用者の望みや家族の望みを記入する箇所や援助計画に対してこれまでの「看護問題」一辺倒でなく、その人の生活の視点から達成したい課題・希望を「生活課題」として付加した。医療の視点に重視される、心身機能・構造だけではなく、生活の視点に立ってその人を総合的に、幅広くアセスメントができ、高齢者の QOL について学習を深めることができた。
8) 高齢者をトータルに理解する手段としての「高齢者総合的生活評価」の導入	平成22年4月-現在に至る	看護ケアのアウトカムとして、実施したケアの効果を可視的に評価できる工夫を行った。ケアのアウトカムは医療経済や人材育成にも重要な視点であり、国試の出題基準にも含まれている。これは看護過程の一部であり、高齢者のケアニーズにどのくらい近づくことができたかを機能、心理・認知、満足

		度に関連する各種の尺度を用い、EBNとして客観的に生活のQOLを査定しケアの優先度や効果を評価する指標となる。今回は学生が理解しやすいように、多くの教科書が採用している6つの視点、「意欲」「ADL」「うつ状態」「認知度」「社会関係性」「生活満足度」を主軸とした。評価時期は実習で高齢者を受持った直後と実習終了直前の2回行った。評価を6つの視点からレーダーチャートに示すことで「看護問題」、「生活課題」が浮き彫りになり、その視点に重点を置き相互の関係を考察しながらケアプランを立てた。レーダーチャートに置き換えることによってケア効果を可視化でき、効果があった原因、効果が少なかった原因を学生自身で考察ができ、高齢者独特の課題、自身の学習不足を自覚し、看護師からの助言等も参考しながら探究心や学習意欲の向上につながった。
2　作成した教科書、教材 1)基礎看護技術の単元「栄養」のカテーテル挿入技術と看護に関する教材	平成元年6月-平成3年3月	本教材作成の目的の対象者は一年生であり、医療現場で行われている患者の特殊な栄養法を視覚的に理解しやすく、手に触れて操作を体験できることにある。教材の特徴は、中心栄養静脈の管理として関連する解剖や器官を実寸大に描き、その上に実物のカテーテルを挿入経路にそって示した。講義では中心栄養静脈の目的、方法、観察項目、注意事項等について行っている。体内でどのような問題が起きやすいかをこの教材を提示することによって医療過誤に陥り易い状況をリアルに学生に知らせることができ、中心栄養静脈の管理上の注意点をはじめ中心静脈圧の測定法、看護上の問題及び看護者の役割の重要性について学生の理解を図った。

2)老年看護概論：老人保健施設の看護を理解するための教材として、「ナースのための地域看護概論　-在宅看護のかけはし-」 （1-4版）（ヌーヴェルヒロカワ）	平成9年4月-平成17年3月	全体の構成は、地域看護が展開される種々な接点を、事例を中心に各方面から述べている。第２版では、厚生省から出された看護師国家試験出題基準にある老年看護学・在宅看護の目標が達成できるよう一部加筆修正した。第３版では、介護保険制度の活用例を補足修正した。老年看護概論では老人保健施設の法的な理解をはじめ、そこでは実際にどのような看護が行われているかの理解を深めるための教材として用いている。また地域で活躍している看護職に何が求められているかの理解を深めるために「老人保健施設・特別養護老人ホーム・通所施設・民間企業、その他における看護の継続性」を1）病院から老人保健施設、2)老人保健施設から在宅療養、3)在宅での継続ケアと高齢者の状況が変化するときに看護がどんな問題を引き受けなければならないかを事例を用い、ケアマネジメントに視点をおきながら看護の展開を述べている。具体的な授業への活用は事例展開と併せ介護保険制度の利用例を示すとともにスライド・ビデオ・写真等視聴覚で臨場感を図っている。P228-233　（再掲） 担当分：第10章老人保健施設・特別養護老人ホーム・通所施設・民間企業、その他における看護の継続性 共著者：（編）眞船拓子・杉本正子、秋山正子、蛇川美紀、荒賀直子、安藤邑恵、飯田澄美子、梅津美香、遠座恵子、大渕律子、奥寺三枝子、奥山則子、他19名
3)科目　老年看護学概論 －外国の高齢者の保健・医療・福祉の教材として－ オーストラリアの高齢者ケアの実情に関する教材の入手	平成10年4月～現在に至る	学生には広い視野を持たせるために外国の高齢者ケア事情を提供する１つとしてオーストラリアを取り上げている。教材はオーストラリアの共同研究者の協力を得て自ら入手したり、現地のケアスタッフとのカンファレンスにより、制度の違い、ナースの活動、社会サービスの利用状況等をVTRやDVDをはじめ看護用品（大腿骨骨折予防パンツ）を紹介している。 インターネットを利用し、オーストラリアの認知症協会や友人を介して、NSWハモンド財団から新しい情報を得ている。学生は日豪の比較はもとより、日本の制度やしくみの課題を考えることにつながった。

4)老年看護学概論：介護保険制度の活用の実際と課題の理解のための教材として「介護保障の課題と展望」（中央法規出版）	平成12年4月−平成17年3月	本書の特徴は介護保障として平成12年度から実施された介護保険制度を中心に、その制度・政策及び処遇のあり方をミクロの論点から検討している。本教材作成の目的は、学生にはなじみが薄い高齢者の法制度の活用を具体的事例を多く用いて理解を図った。実際に展開されている横浜市を地域事例に取り上げ図表を提示し、さらに高齢者に起こり易い疾患や生活障害の具体例を用いて介護保険の活用例とともに仕組みも併せて理解をしやすくしている。授業のへの活用は、高齢者に起きやすい主要疾患別の事例として大腿骨頚部骨折、慢性リウマチで引きこもり、寝たきり状態で医療依存が高いアルツハイマー高齢者の介護、うつ病の生活機能低下がある５つの事例を取上げ、事例の健康上の課題、生活上の課題からアセスメントをし、看護・介護のニーズ把握している。各ケースはケアプランのポイントにそって地域サービスを導入して1週間のプランを組み、介護費用の算定、サービス導入後の利用者及び介護者の状況の変化を示している。社会サービスを利用することによって、利用者は意欲が増し、家族介護者の負担が軽減し両者がよりよい関係を持ちながら介護が継続できることを事例から伝えている。この事例は実際に著者が訪問し継続して把握している。学生にイメージ化ができるように、訪問時に得られた写真やスライドを併せて提示し臨場感を持たせている。 担当分：第２部第３章；横浜市の介護保険事業と介護サービス（Ｐ75-88）、第３部第１章；高齢者のケアアセスメントとケアプランの実際（Ｐ165-184）（再掲） 共著者：三友雅夫、丸紀和子、井上美幸、八島妙子、蔦木チエ子、安藤邑恵、栗原弥生、斎藤信子、佐藤信枝、根本三枝子、谷川和昭、佃公子、高椋清、大森千令

4) 老年看護学臨地実習の実習記録の工夫	平成14年4月-平成18年3月 （横浜市大） 平成18年4月 - 平成25年3月 （岐阜医療科学大学）	これまでの臨地実習記録用紙は、記入事項の重複が多いことが課題であった。実習記録用紙を工夫した目的は、重複を最小限にし、学生の問題解決思考にそっており、かつ必要十分な実習記録用紙をめざして作成した。これは実習の学習過程が看護過程の思考プロセスとなり、記録の負担感が少なく、実習が円滑に進むことをねらいとしている。工夫のポイントは、学生の観察力や直観を大切にし、高齢者の全体像を把握しながら個々の看護問題を追求できるようにした。用紙の種類はⅠフェイスシート、Ⅱ問題リスト、Ⅲ行動計画、Ⅳアセスメント、Ⅴ問題の統合、Ⅵ看護計画、Ⅶサマリーである。学生は患者ケアのプロセスにそって学習を進めると問題解決思考で看護上の問題が導かれ、ケアプランの立案・実施がしやすく、看護の評価もしやすく、臨床の指導看護師からも学生が何を考えているかが把握しやすいとの評価を得ている。実習の進行を見ながら望ましい記録のあり方にそったフォーマットを継続して検討を行う。安藤邑惠、松原純子、青木律子 新設校であり、実際の使用は平成20年9月からであるが、大学の教育理念、学科の教育目標、学生のレディネス、卒業時目標を学科全体で討議した上で、老年看護実習の目的・目標・方法等について実習施設と指導内容の協議を繰り返しながら行った。実習の基本方針を①医療モデルに偏らず、生活モデルも含めた包括的に対象を捉えることができることとした。②実践を重視し問題思考過程がスムーズに展開ができるよう、また記録の負担が重くなりすぎないよう配慮した。具体的にはICF（国際生活分類）にそって情報・アセスメントができ、その人らしさを大切にできるケアプランが立案できる枠組みとした。必要に応じて、既存の生活評価尺度を活用し、学生が自分のケア評価、課題が発見でき、次の実習につなぐことができた。 安藤邑惠、渡邊美幸、上平公子、和田裕子、吉村雅世、木村裕美子、藤吉恵美
5)老年臨床看護：看護実践のアセスメントのための手引書として「ICFの視点に基づく高齢者ケアプロセス」(共著)「学文社」	平成21年3月 （再掲）	高齢者ケアにおいては、病院完結型の医療制度は終わりを告げ、生活の質を保証する療養の場、ケアの質の高い継続した支援が高齢者ケアに求められるようになってきた。改正された介護保険制度では、WHOで20001年に国際生活機能分類（International Classification of Functioning Disability, and Health）（以下ICF）の視点に基づきケアが必要であるという指針を出した。本著はICFの視点に基づき、高齢者ケアプロセスに必要なアセスメントの知識を提示し、根拠あるプランの流れを理解でき、かつ事例展開の演習によって、確かな力をつけることができるように工夫をした。本著では、ICFの第1レベルでの情報収集内容を選りすぐり、ICFの視点で得た情報をマズロー理論、ナイチンゲール理論、ヘンダーソン理論などで展開ができるよう工夫を行った。 B5判、168ページ 編著者：安藤邑惠、小木曽加奈子 担当分：第1章　第3節、第2章　第1節・第2節、第3章　第1節４、第4節　第1節 共著者：阿部隆春、今井七重、佐藤八千代、柴田益江、高野晃伸、田村禎章、樋田小百合、中川千代、中澤秀一、祢宜佐統美、保坂亮、平澤泰子、森由香子、八島妙子、山下科子
教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
3　当該教員の教育上の能力に関する大学等の評価 1)学生による授業評価 ①　老年看護概論	 平成14年7月	 平成14年度から全学的に「学生による授業評価」が実施となる。 老年看護概論は、学生の総合評価では80%が「よい」

	－平成18年3月 （横浜市大）	とし、その理由は「授業の内容が分かりやすくまとまっている」「教科書や配付資料、OHP、VTRなどを効果的に用いている」「教員は授業に熱意を持っている」の項目を高く評価をしている。
	平成19年10月 - 平成25年3月 （岐阜医療科学大学）	学生の総合評価は78～83％が「よい」としている。12評価項目は平均5点中3.6～4.2であり、「わかりやすい」としている。抽象的な内容については「もう少し丁寧に説明してほしい」との要望があり、レジュメに「必要な基礎知識欄」を設け学習のポイントを示した。
②　老年臨床看護（演習）	平成14年9月 －平成18年3月 （横浜市大）	老年臨床看護は臨地（特別養護老人ホーム）実習を視野に演習を行っている。内容は「高齢者擬似体験」「嚥下障害のある高齢者の援助」「体圧と安楽な姿勢」「脳血管障害のある患者の看護過程演習」。演習に入る前に講義を行い、学生はあらかじめ課題に取り組み、それにそって演習を実践する。「学生による授業評価」は総合評価では80％が「よい」としている。その理由は「学生が必要とする時に適切な指導をした」「デモンストレーション・VTRは理解の助けになった」「教員は授業に熱意を持いる」の項目を高く評価をしている。
	平成19年10月 - 平成24年3月 （岐阜医療科学大学）	演習の性格上準備・片付け等も含むため「授業開始時間・終了時間が適切でない」と55％が評価し時間内に授業を完結するための工夫が求められている。
③在宅看護論	平成23年3月 - 平成25年3月 （岐阜医療科学大学）	平成23年4月から科目担当が「在宅看護論」に変更した。具体的なイメージが持てるようにDVDの活用や訪問看護実践者をゲストスピーカーとして起用した。 学生の総合評価は83～89％が「よい」としている。12評価項目は平均5点中3.6～4.6であり、「わかりやすい」としている。演習内容が多く、具体的な内容が多いため「わかりやすかった、身についた」との意見があり、「もう少し繰り返して実施したかった」と技術内容への要望が多かった。
③　老年看護学臨地実習（3年生）	平成14年9月 －平成18年3月 （横浜市大）	老年看護学臨地実習の学生による授業評価は講義と評価項目が異なるが総合評価では「良い」実習としている。項目で見ると「看護実践に手応えがある」「教員の適切な指導」「質問がしやすかった」と評している学生が80％いた。「実習記録の内容が多い」とするものが53％あり課題となっている。学生の思考過程を育成しながら実習記録を削減するための工夫が必要である。
④　老年看護学臨地実習（3－4年生）	平成20年9月 －平成23年3月 （岐阜医療科学大学）	実習に関する授業評価は実施していないが学習状況にそって臨地にて個別指導を行い、「困ったときにいつでも相談に乗ってもらえ、看護が好きになった」と言い、老年看護学の実習目標を達成し卒業、国家試験合格に結びついた。
⑤　在宅看護実習	平成23年9月 －平成24年3月 （岐阜医療科学大学）	実習では具体的場面を多く提示し、法的根拠については授業内容を想起し、個別指導を行った.「困ったときにいつでも相談に乗ってもらえ、看護が好きになった」と言い、老年看護学の実習目標を達成し卒業、国家試験合格に結びついた。
2)学長予定者の評価	平成17年3月 （横浜市大）	研究業績及び実務経験そして大学での教育実績から、「老年看護学」関係科目担当の教授者として適任である。
4　実務家教員についての特記事項		

1)実習指導実績 (1) 老年看護学臨地実習Ⅰ（２年次生）	平成 8年12月 平成 9年12月 平成10年12月 平成11年12月 平成12年12月 平成13年12月 平成14年12月 平成15年12月 平成16年12月 平成17年12月	成人・老年助手6人及び講師の指導の総括及び科目の単位認定を行っている。実習施設は社会福祉法人施設を多く使用している。施設の職員の頻繁な異動や諸事情によって毎年数ヶ所の変更がある。毎年数件の実習受け入れが困難な施設があるため、年間を通して新規開拓に心血を注ぐ。現在14-15施設を利用している。当校の老年看護学臨地実習目標及び方法を理解し、受け入れまでに各施設数回訪問し、きめ細かく折衝を行っている。施設とのコミュニケーションや調整は実習施設確保上からも重要な業務になっている。指導内容は特別養護老人ホームに入所している高齢者の理解と生活援助の実際の提供である。学生数120人を施設指導者との調整及び実技指導を共に行っている。指導期間は60人を2週間にわたって行っている。指導期間は２週間である。
	平成18年5月-平成19年12月 （岐阜医療技術短大学）	短大から4大学部の移行期によりカリキュラムのちがいに伴ってより指導時期が異なるが、老年看護学（老年看護概論・老年臨床看護・老年看護学臨地実習）の指導内容は同質である。
	平成20年9月-現在に至る （岐阜医療科学大学）	４大学への移行期に伴い、カリキュラムの構成のちがいに伴い、指導時期は異なるが、老年看護学に指導内容は同質である。老年看護学実習では今後社会的問題として顕在化する認知症患者の看護を主に学習できるよう実習施設との実習内容について協議した。老人福祉施設での認知症患者の看護は、生理的老化の理解だけでなく認知症患者へ対応についても場面をとらえ直接指導し、カンファレンスにおいても理解を深めている。高齢者ケアは全人的な視点として、医療的な問題と生活課題を把握しプランを立案、実施評価を課し、看護の成果を客観的に判断できる指導をしている。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
(2) 老年看護学臨地実習Ⅱ（3 年次生）	（横浜市立大学） 平成 9年5月-11月 平成10年5月-11月 平成11年5月-11月 平成12年5月-11月 平成13年5月-11月 平成14年5月-11月 平成15年5月-11月 平成16年5月-11月 平成17年5月-11月	実習指導の総括及び科目の単位認定を行っている。指導内容は高齢者の特徴を理解し、健康問題・生活問題に着眼し、その状況に応じた看護を学生は１人の受持を持って継続的に看護し、看護の過程を通して問題解決の思考過程を培っている。例えば患者の観察の仕方、発言の理解、その経過の中での思考の整理、直接的な援助技術等に関わっている。また実習施設や病棟看護師とも患者の援助や学生と患者間の調整を行っている。学生の思考を深めるために、週に1回臨床指導者を交えてカンファレンスを開き、また実習進行上の課題解決に向けて必要時学生の面接指導も実施している。実習期間は3週間を1クール（担当学生数は2グループ、10-12人）とし、5-7クール実施している。指導学生数120人を実習施設担当者4名の担当教員間の調整も合わせて行って行いる。短大生は全員合格し卒業できた。
(3) 老年看護学臨地実習Ⅰ・Ⅱ (3･4 年次生)	平成18年5月-19年12月（岐阜医療技術短大） 平成20年9月-平成24年3月（岐阜医療科学大学）	実習指導の総括及び科目の単位認定を行っている。指導内容は高齢者の特徴を理解し、健康問題・生活問題に着眼し、その状況に応じた看護を学生は１人の受持を持って継続的に看護し、看護の過程を通して問題解決の思考過程を培っている。例えば患者の観察の仕方、発言の理解、その経過の中での思考の整理、直接的な援助技術等に関わっている。また実習施設や病棟看護師とも患者の援助や学生と患者間の調整を行っている。学生の思考を深めるため

		に、週に1回臨地実習指導者を交えてカンファレンスを開き、また実習進行上の課題解決に向けて必要時学生の面接指導も実施している。1～3期生は、全員目標達成した。
(4) 在宅看護臨地実習 (3･4 年次生)	平成23年4月-現在に至る （岐阜医療科学大学）	担当科目の変更があった。実習指導の総括及び科目の単位認定を行っている。臨地での指導は場所・時間に制約があり、授業内容を反映するために、臨地実習指導者を交え、訪問看護場面との突合せができるようカンファレンステーマを提示しディスカッションの時間をもっている。全員が目標達成できるよう学生の進捗状況に応じて個別指導についても配慮している。全員目標達成し、履修できた。
2)研究論文指導 看護総合セミナー指導	平成9年4月- 12月	平成9年度（必修）：指導人数6名 1）代替療法を看護実践に生かすための一考察；ホリスティックメディスンの観点から気功の有効性を実践家の協力を得て、気功の開始前後のバイタルサインの変化を手がかりに、心の変化との関係を実験的に取り組んだ。
	平成9年4月- 12月	2)高齢者の保健行動の実際について；高齢者が健康維持のためにどのような保健行動をとっているかを在宅いる70歳以上の人、8名に面接調査を行った。保健行動に対して積極的な行動をとっている人は自立的であり、保健行動に対して消極的な人は依存的な生活を送っていることが分った。
	平成9年4月- 12月	3)地方都市における高齢者の主観的幸福度と幸福関連要因；主観的幸福度スケールとADL，身体状況、社会的状況をスコア化し、その関連性を分析した。対象者は地方都市在住の65歳以上96人に調査した。主観的幸福度との関連ではADL、身体状況が高く関連していることが分った。
	平成9年4月- 12月	4)高齢者のアイデンティティの背景を知る；65歳以上の高齢者3名にインタビューをし、最も影響を与えたライフイベントを分析によって抽出した。アイデンティティの構築はライフイベントを体験することによってその人に意味づけされ、それらが積み重なってその人らしさが構築されていくことを引き出している。
	平成9年4月-12月	5)ライフヒストリーから対象を考える；高齢者がこれまで多くの体験を重ねてきたことは時代的な背景の上に重ねられ、その人の生き方を作り出していることをインタビューの分析から導いている。
	平成9年4月-12月	6)徘徊のある痴呆性高齢者のエネルギー代謝と水分出納；１日中徘徊する痴呆性高齢者を対象者としそこに生じる看護問題としてのエネルギー代謝と水分出納に注目し、歩数から距離・代謝量及び水分出納を算出した。結果、エネルギー代謝では150-250Kcalの不足となり体重は3ケ月で１Ｋｇ減少していた。水分は介護者が適宜、補うことで１日の過不足はなかったが消費エネルギー量が思いの他多いことが分った。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
	平成10年4月-12月	平成10年度（必修）：指導学生8名 1)在宅高齢者の介護支援；介護保険制度の創設を前に在宅高齢者がどのような制度やサービスを活用することにとって生活をどの様に変化するか、家族の介護負担がどのように変化するかを、実際に社会サービスを活用している方を訪問し要介護者と主介護者にインタビューを行っている。
	平成10年4月-12月	2)高齢者の咀嚼機能と食事援助について；82歳と21

		歳女性を対象に同じ質・量の食事を摂取し、それぞれの咀嚼回数を測定した。食事内容は野菜、肉類、魚類、ご飯類別に測定した。結果、高齢者は同時間内での咀嚼回数は少なく、口に運ぶペースも遅く咀嚼に時間を要することが分った。
	平成10年4月-12月	3)高齢者の転倒-ハイリスクを事例を通して考える-;高齢者の歩行の特徴から転倒の原因を特別養護老人ホームに居る高齢者を対象に歩行の原理から分析している。転倒の原因は高齢者自身が持っているリスクと環境要因が重なって生じることが分かり、看護職の環境調整が重要であることを学んでいる。
	平成10年4月-12月	4)在宅高齢者の服薬コンプライアンスを考える;35歳から85歳までの方25人に面接方式で調査を病院の循環器外来で行った。結果35歳から64歳までの若年者に比べ、65歳以上高齢者は医師の指示とおり服薬できていた。高齢者のコンプライアンスが高いのは生命に直結する薬剤が多いこと、社会的要件として家族を含めた指導を外来看護師がきめ細かく指導していることに関連していることが分った
	平成10年4月-12月	5)高齢者の健康をライフヒストリーから考える;高齢者が健康観をどのように持って精神的健康を維持・向上しているかを3人のインタビューから分析した。健康観は人生の中で形成されたパーソナリティーによって支えられているが、周囲の人的環境による影響も多いに関連していることを導き出している。
	平成11年4月-12月	平成11年度（必修）：指導人数8名 1)高齢者のノーマライゼーションをセルフケア要件から考える（2名の共同研究）;高齢者の食事と排泄のセルフケア要件から高齢者の生活をノーマル近づける観察・分析から援助のあり方を導いている。その内容は人的・時間的・金銭的要件が必要であることが分った。
	平成11年4月-12月	2) オムツをしている高齢者の排泄の自立への援助を考える;オムツをしている高齢者がその人らしい生活を送るには看護者としてどのような援助をしていったらよいかを排尿パターン、水分出納から失禁の特徴をしり、高齢者の希望に向かって援助を行った実践例を述べている。
	平成11年4月-12月	3) 高齢者の排泄行動と自立への支援;オムツの使用は介護者の意図によってされることを指摘し、高齢者の排尿に関する残存機能を引き出すには、看護者の精神的な支援が大きく影響することを、実践例でしめしている。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
	平成11年4月-12月	4) 在宅で看護を必要とする高齢者の理解（2名の共同研究）;在宅の一人暮らしと高齢者二人暮らし方を訪問によってADLを中心にスケールを使用し、看護の必要度を客観的に分析した。高齢者の健康生活を整えるには保健・医療・福祉のネットワークや社会資源の活用が有効であることを理解している。
	平成11年4月-12月	5) 高齢者の日常生活行動における身体の生理的変化（2名の共同研究）;65歳以上の高齢者3名、65歳以上で寝たきりの方3名、成人女性3名を対象者とし、食事・排泄・入浴の直前・直後-60分後まで、10分間隔で体温・脈拍・血圧を経時的に測定し比較した。結果入浴は心機能への負担が大きく中でも寝たきりの人への変動は他の高齢者に比べ著しく、入浴時の観察の大切さを学んだ。
	平成12年4月-12月	平成12年度（選択）：指導人数6名 1) 高齢者の死とその後のパートナーに対する援助

		について；高齢者の死がパートナーに与える影響をインタビューによって分析した。パートナーのその後の人生を支えていくには周囲特に家族の温かい思いやりや声かけやこれまでの役割を継続してもつことによって希望が持てるようになることを導いている。
	平成12年4月-12月	2）高齢者の歩行の援助-転倒の予防を視野において-；高齢者の躓き易さ、歩行バランス崩れやすい原因を高齢者と若者との歩行姿勢を実験的に取組んだ。その行動の違いを写真により分析した。歩行姿勢の違いは、膝の角度、けり足の角度は高齢者の方が小さく膝の上がりも少ないことが分った。この研究は学生が卒業後に日本看護リハビリ学会で発表した。
	平成12年4月-12月	3）高齢者のアルコール依存症患者の看護；長年のアルコール依存によって複数の臓器疾患を持ちながら自己の生き方に懸命に取り組んでいる高齢者のインタビューから予防的・治療的・維持的介入を見学実習を通して学んでいる。
	平成12年4月-12月	4）高齢者と生きがい；高齢者福祉センターの事業に参加している高齢者３人にインタビューし高齢者が考えている生きがいはなにかを分析している。高齢者が生きがいと考えているのは、好きな趣味を仲間と共有できることであり、その仲間がお互いを気遣っていることが心の支えであることを導いている。
	平成12年4月-12月	5）臭いと看護-高齢者の療養生活における臭いと清潔-；高齢者の清潔行動、入浴習慣、洗髪、歯磨き、下着交換について聞き取り調査を行った。高齢者独特の臭いは清潔行動が自身で十分に取れなくなることによって生じることを実習体験と合わせて比較している。
	平成12年4月-12月	6)難病患者の生活を支えるとは-内なる力・外なる力-；後縦靭帯骨化症の患者を事例とし、この方が持っている内なる力はいつの希望をもって前向きに受け止めていること、そしてこの方を取り巻く環境要因の外なる力は家族をはじめ患者会や社会保障サービスによって支えられていることを導いている。
教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
	平成13年4月-12月	平成13年度（選択）：指導人数2名 1）介護問題への意識の現状と家族の介護負担について；中高年女性、137人を対象にアンケート調査を行なった。結果、介護意識としてサービスを活用して自身の生活も併せて守って生きたいとするものが80%以上あった。また介護を引き受けるに当っての問題と考えていることは、介護に関する知識がない不安、重介護になった時の対応に自信が持てないこと、介護の代替がないことを不安と思っていることを見出した。 2)人が生きる目的は何かを考える-ハンセン病患者を通して-；ハンセン病患者が置かれている状況を文献や全生園の夏季研修に参加し、患者からライフヒストリーを聞き、人が人として生きていくということを哲学的に考察した。それは人として存在を認め、尊重し合い、心が満たされること、人との豊かな関係性によって生きる希望が持てると導いている。
	平成14年4月-12月	平成14年度（選択）：指導学生数1名 1)高齢者と自尊心；75歳の高齢者の嘆きの言葉や、振る舞いがどのような事由から発しているかを１週間、生活を共にし、研究者が気になった言動を観察し、その背景をしり、高齢者の自尊心が何であるかを分析した。結果、今まで生きてきた時間の長さ、

		経験の多さ、子供を育てた自負が自尊心の中心にあることが分かった。なぜ高齢者を尊敬しなければならないかを学生自身の観察・体験から参加観察によって導いている。
	平成15年4月-12月	平成15年度（選択）：指導学生数2名 1）高齢者と生活環境―人的・物的環境変化における高齢者の適応障害について事例検討を通して考える―；入院して間もない高齢患者を受け持ち、その高齢患者が失見当を起こしたことに着眼して、なぜこのようなことが起こるのか、看護者はどのように対応すれば良いかを丁寧に観察記録し、高齢者の特徴と環境要因を合わせて理解し、看護者は早期に安心できる存在として関わりことが良策である。 ことを導いている。
	平成15年4月-12月	2）高齢者と動物とのふれあい；動物（ペット）はなぜ高齢者（病んだ人々）を癒すだろうと疑問を持ち、動物がもっているプラスの要因とマイナスの要因を整理し、現在開発途上であるアニマルアクティビティについて日本の現状を検索し、実際に行っている施設に見学・参加した。動物とのふれあいと看護の接点を模索している。
卒業論文指導（必修）	平成19年4月-12月 （岐阜医療技術短大）	平成19年度(必修)指導学生数6名 6名がグループで「中高年者の高齢者のイメージと介護意識」に取り組んだ。学生個々が進行に配慮しながら、文献検討、研究計画、論文作成と学生間の共同学習が強化され、慣れないグループワークを駆使して20ページの論文を完成させた。研究する愉しみも同時に実感で来た。全員が履修できた。
看護基礎セミナー（必修）	平成18年4月-22年7月 （岐阜医療科学大学）	指導学生数7人 目的は1年生を対象にアカデミックスキルを身につけることにあり、特にディスカッション、文章表現を重視して開講される。テーマは、前期は関市の事象を写真に取り、その中からグループで課題発見や文献を調べ、自己の意見を述べ、レポートにする一連の学習プロセスを指導する。後期は、書籍を教材に、精読、文章理解、レポートと文書指導を行った。学生の要望や視野を拡大するために行政や関係職種に働きかけ、学生は高校と異なった学習法への関心を高くし楽しく学ぶヒントを獲得できた。学習成果は、スライドソフトのパワーポイントで作成しプレゼンテーションを行いて評価会を受けた。
卒業研究指導（必修）	平成21年度 （通年）	指導学生数５人 4年間の看護学の集大成として、各自の問題意識、から文献検索、文献検討によって研究計画作成、発表まで行う。この間の個別指導に対応した。本学は研究計画までを課題としているが、文献検索、文献レビューを重視し、そこからの問題意識によって課題に取り組むことを指導している。本年度の研究テーマは「高齢者と服薬行動と課題」「介護を引き受ける中高年者の認知症高齢者のイメージ」「排泄ケアのジレンマ」「高齢者の口腔ケアの策定」「認知症高齢者の生活環境」である。テーマの選定は学生が関心を持った視点で取り組んでおり全員修得できた。
	平成22年度 （通年）	指導学生数４人 本年度、学生が取り組んだテーマは「臨場感のある看護過程の学び方-情報収集から問題発見へ」（2名で）、「地域に住む『閉じこもり』予備群の実態-インタビュー調査から」、「認知症におけるタッチングの効果-手と手の触れ合いがもたらすリラク

		ゼーション効果-」であり、全員修得でき、看護師国家試験合格した。
	平成23年度 （通年）	指導学生数６人 　本年度、学生が取り組んだテーマは、「嚥下訓練を継続することで得られる効果-食事をおいしく食べる為に-」、「脳血管性認知症患者の徘徊による身体的影響」、「高齢末期がんの在宅療養者を支える家族への看護-家族介護者へのインタビューを通して-」、「寝たきり高齢者の有効な口腔ケアの検討-スポンジブラシとガーゼの比較-」、「老々介護における主介護者の介護負担感に関する実態調査」、「認知症に対するアニマルセラピーの有効性-認知症の周辺症状の変化と身体的変化-」であり、全員修得し、看護師国家試験合格した。
	平成24年度 （通年）	指導学生数5人（卒研テーマ入力） 　本年度、学生が取り組んだテーマは、個々の問題意識に立脚し「ガン患者の終末期ケアにおける看護職の専門性に対する意識」、「看護師のバーンアウトに関する研究-ターミナルケアに従事する看護師と一般病棟に勤務する看護師の比較-」、「在宅療養支援時に伴う病棟看護師のジレンマ」、「老老介護における主介護者のQOL－社会的側面に着眼して－」、「受持ち患者の死亡体験における看護学生の感情変化」、であり、全員修得しでき保健師・看護師国家試験合格した。
3)公開講座・社会教育講座等の講師・指導 (1)平成6年度 　横浜市臨床指導者講習会講師 　「老人看護学の考え方と実習指導」	平成7年1月	横浜市立大学看護短期大学部の開校に先立って、学生指導に携わる臨床実習指導者の育成、質の向上を目的に神奈川県、横浜市立大学看護短期大学部主催で224時間の講習会が行われた。対象者は市立病院、地域で活動している中堅看護師である。担当領域の内容は老人看護学実習の考え方や高齢者理解と共に学生理解の仕方、学生指導の視点として指導計画・指導のポイント・指導評価の実際について講義した。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
(2)横浜市立大学リカレント講座講師 「老人性痴呆を考える」	平成7年6月	「老人性痴呆を考える」をテーマに行政・政策、横浜市立大学が企画・実施・運営している市民公開講座である。医療の現状、患者理解をシリーズで開催された。その中の痴呆性患者の理解と看護の実際について担当した。講義の内容は痴呆性患者の心理、行動特性の理解について具体例を提示し看護・介護上の問題解決のヒントと関わり方の基本的な考え方及び高齢者ケアの姿勢について講義した。
(3)横浜市社会福祉協議会主催 　老人福祉施設スタッフ研修講習会講師 　「高齢者の理解」	平成7年9月	横浜市内の老人福祉施設に勤務する看護職20人を対象に福祉施設に置ける看護職の位置づけ、役割を中心に、福祉職の寮母・介護福祉士及び他の職種との情報の共通化・連携とそれらに関わる職務上の責任・制約について講義した。
(4)横浜市臨床指導者講習会講師 　「老人看護学の考え方と実習指導」	平成7年11月	神奈川県、横浜市立大学看護短期大学部主催により、看護の臨床実習指導者の育成、質の向上を目的に224時間の講習会が行われた。対象は市内の病院、地域で活動している中堅看護婦である。担当領域である老人看護学実習の考え方、老人の理解と学生指導の視点（指導計画、指導評価）及び老人臨床看護の授業内容を紹介し老人看護実習の理解を図った。
(5)横浜市社会福祉協議会主催 　老人福祉施設スタッフ研修講習会講師 　「高齢者の理解」	平成8年9月	横浜市内の老人福祉施設に勤務する看護職20人を対象に福祉施設に置ける看護職の位置づけ、役割を中心に、福祉職の寮母・介護福祉士及び他の職種との情報の共通化・連携とそれらに関わる職務上の制

		約について講義し、看護職がよく戸惑う看護場面の事例を提示し検討を行った。
(6)横浜市社会福祉協議会主催 ホームヘルパー２級講習会講師 「高齢者・障害者の心理」	平成9年11月	在宅サービスの担い手であるホームヘルパー約100名に、人は本来心地よく生活したいと思っている心理のありかを心理の基本的理論をもとに概説し、高齢者・障害者が持ちやすい心理状態とその背景、特異的な反応に対する対処法を具体的に講義した。
(7)神奈川県警友病院 看護研究指導	平成10年4月-平成11年3月	神奈川県警友病院の看護研究指導を行った。主な研究テーマは、高齢者の服薬、自己管理と看護、MRSAと手指洗浄の効果、婦人科手術患者の退院指導、外来における看護記録法の改善するための研究企画・計画-院内発表まで各病棟の担当者と研究の相談・指導を１年間行った。
(8)横浜市福祉局主催 横浜市立特別養護老人ホーム寮母現任研修講師 「介護技術」	平成10年9月 平成11年8月 平成12年8月 平成13年4月 平成13年8月 平成14年4月 平成14年8月 平成15年4月 平成15年8月	4月は横浜市立老人ホームに勤務する新採用の寮母等20人を対象に、介護場面で良く遭遇する場面での介護スキルを講義と演習を取り入れて基本的な介護技術が実践できるように行っている。内容は体位変換、臥床者・麻痺のある高齢者の介護技術及び緊急時の基本的な手当てを中心に行っている。8月は職員のスキルアップを目的に、日頃の介護実践の振り返りから慣れで行っている介護技術を再確認できるように事例を用いてグループワークし、そこから新たな発見・気づき促す研修を行った。

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
(9)横浜市立大学リカレント講座講師 「これからの在宅看護」	平成11年2月	横浜市立大学が企画・実施・運営している市民公開講座である。介護保険制度の開始を1年後に控え市民理解をはかる目的で開催された。担当部分は、研究代表者（地域看護学教授 真船拓子氏）とともに行った。内容は在宅サービスメニューを印象づけることをねらい寝たきり、痴呆高齢者の事例を取り上げ参加者が介護当事者となった場合を想定しグループワークによってシミュレーションを行った。
(10)横浜市西区民生委員児童委員協議会研修講師 「介護保険と民生委員の役割」	平成11年4月	介護保険制度の開始を1年後に控え、介護保険制度の理解とその中での民生委員に期待するニーズ発見機能、生活支援機能、人権擁護機能のあり方を中心に地域住民へのインフォーマルな関わりが高齢者のQOLを高める鍵になっていることを具体例を用いて理解を図った。
(11)横浜市西区社会福祉協議会 ホームヘルパー２級講習会講師 「高齢者の心理の理解」	平成12年11月	在宅サービスの担い手であるホームヘルパー約60名に、高齢者理解の一環として、高齢者・障害者が持ちやすい心理状態、特異的な反応に起因する背景や関わる人々の関係性について基本的理論をもとに概説し、ケアを通して介護者共々心地よく生活していくにはどのように対処することが好ましいかを実例でディスカッションしながら展開した。
(12)横浜市立病院看護職員合同研修 専門領域コース講師 「老年看護概論」「痴呆性高齢者の看護」	平成14年10月	市立病院看護職員合同研修の専門領域コース研修の目的は、看護師の臨床実践能力の向上をめざし、中堅看護師の育成図ることとし、市立病院看護部が企画運営している。講義の内容は、高齢社会の背景・課題を理解し、高齢者が持ちやすい看護や介護問題を提示し、他職種との連携の中で看護職に求められている課題を検討した。
(13)横浜国立大学教育人間科学部特別講師 科目　人間と生活環境	平成15年1月	高齢者ケアで困難をきたすのが痴呆性高齢者のケアである。環境適応が低い痴呆性高齢者のケアは、

「高齢者ケアと生活環境」		少人数でなじみの人々で構成されるグループホームのような環境が推進されている。痴呆性高齢者がグループホームに入居した直後から自立までを日常生活行動の尺度を用いて、時間経過の中で変化をもたらした要因・結果を示し、グループホームの有用性を講義した。
(14)横浜市立大学生涯学習講座 リカレント講座　「実践！高齢者介護」 －誰にもできる介護テクニック－	平成15年9月	少子高齢社会では誰もが介護を引き受けなければならない状況があり、そのような時に戸惑わない様に、多くの市民に心得ていて欲しい介護の知識と技術を実践を組み込んで展開した。パート1では生活の基本は姿勢・移動動作である。本講座では 姿勢・移動動作の基本的な意味と労力が少なく安全な移動動作介助を紹介し、受講者にも実際に体験してもらい介護の秘訣を紹介した。パート2では、寝たきり予防と褥瘡予防について行った。褥瘡の発生のメカニズムの病態を知らせ、その主原因の体圧が臥床したときどのようになっているか、体位変えたときどのように変化するかを実際に体圧計を用いて測定し、褥瘡予防のために用いる安楽物品の用い方、安楽な体位の工夫を実際に受講者が行ってポイントをつかんでもらった。
教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
(15)横浜市立大学教員養成課程 介護等体験申し込み説明会講師 「施設実習にでる時の自覚と心構え」	平成15年2月 平成16年2月 平成17年2月	看護・介護の経験のない学部生が教員免許取得のために福祉施設実習を行うため実習オリエンテーションとして行う。学生にとっては初めてケアをする立場に立つ体験者・援助者として、対人ケアの基本理念、人を尊重する姿勢、学習者としての心得について具体的事例を用いて講義している。
(16)横浜市立大学リカレント講座 「家族力を引き出す介護と看護」 企画・運営・講師 ①「家族看護理論」で学ぶ家族ケア ②「エコマップ」を活用した家族への支援を考える	平成16年8月	大学の地域貢献事業の一環として位置づけられている。本講座のねらいは少子高齢社会のおける家族をめぐる様々な状況の中で改めて「家族」が問われていることを問題意識として本講座を企画・運営するとともに講師も勤めた。多様化する家族の機能・役割を家族看護理論をふまえ、事例を用いて家族環境や関係を図示によって目に見える形にしていく「エコマップ」を活用し、参加者自ら家族問題を発見し、解決に向かう糸口をワークショップ形式で行った。参加者からは講義だけでなくワークシップで参加者相互の意見が聞け、楽しく学べたという評価を得ている。
(17)横浜市福祉局主催　自己啓発スクール （ベイシックスクール） 第２回生活課題別研修会講師 「これだけは知っておきたい基本的医療知識」-高齢者にまつわるトピックスを中心に-、服薬管理、高齢者虐待への対応、	平成16年 9月	本研修会は横浜市内の高齢者ケアの仕事に携わっている介護職・看護職を対象に、福祉局が地域の高齢者ケアの向上を意図して開催している。本講座は特に介護職ではケアの現場で求められる判断が難しい医療場面を取り上げ、高齢者に起こりやすい病気の知識や援助技術とともに資格に伴う業務範囲、役割について事例を提示しながら講義した。
(18)横浜市老人クラブ連合会主催 友愛活動推進員チーム代表者研修会講演、講師 「ステキな人生を生き生きと」-コミュニケーションの意義と効用-	平成16年 9月	市内の老人クラブで友愛活動を行っているチーム代表者の集いの研修会である。本講演のねらいは、日頃、コミュニケーションを主に友愛活動行っていることを伝達過程としての意義、生理学的・心理学的・社会学的意義から活動への賞賛とともにその効用として生き甲斐に結びついていることを中心に述べた。
(19) 特養ホーム/ハートタウン平成の杜（岐阜県関市）の職員学習会講師	平成19年4月－平成20年3月	目的は「介護現場に活かされる知識と技術」について3回の講義・演習を行った。内容は、「嚥下のメカニズムと看護・介護」「フィジカルアセスメントと緊

		急対応」「安全な移乗介助」であり、講義と演習を行い、現場の方にも一緒に参加してもらった。
(20) のぞみの丘ホスピタル（岐阜県美濃加茂市）の職員研修会講師	平成20年4月28日	目的は「接遇のあり方と実際」である。接遇についての理念は理解しているが､適切な場面で適切に行動化できていない現状の分析と対応について講義･演習を行った。
(21) 模擬講義「在宅看護」（本学にて）	平成26年12月10日	大和高田市の高校2年生30名を対象に模擬講義を行った。看護学に関心が高く、本学をすでに希望している生徒もあり、多くの質問が出た。講義の後、本学の見学を希望し案内をした。
5　その他 1) スウェーデン市スンズバル地区における高齢者の在宅ケア　（参加観察調査）	平成 9年 8月	高齢者ケア対応が進んでいる人口10万人の中都市、スウェーデン市スンズバルの地域ケア現場に参加観察調査を行った。ケアの基本理念「人をトータルにみる、ケアの利用者の決定権を尊重、ノーマライゼーションの徹底、自立支援、介護の質的向上」を具現化した政策の中で高負担ながらも住民合意の中で医療福祉行政が行われていた。痴呆性高齢者はグループホームケアによって痴呆の症状が穏やかになったり、可能な限り在宅で生活したい高齢者のニーズに24時間対応が行われていた。それは看護師、ホームヘルパー、医師がチームを組んで夜間パトロールなど柔軟に取り組んでおり、看護師、 ホームヘルパーは自身のライフスタイルを守りながらパートタイムで仕事をし、介護される人も介護に当たる人も満たされた人生を送っている。2000年から開始される介護保険制度下での高齢者ケアのあり方への示唆を得た。
教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
2) オーストラリアの高齢者ケア　最新事情（参加観察調査）	平成 7年 8月	オーストラリアは1985年に高齢者ケア改革を実施して10年を経過し、独特の制度構築を進めている。オーストラリアと日本は中福祉・中負担という共通点があるがオーストラリアは縦割り行政ではなく行政と民間と非営利の組織が統合化され経済効率を考慮しながらきめ細い効果的な在宅ケアを定着させていることが特徴と言える。その実態を関連機関とともにケース訪問を通して調査していた。
3) オーストラリア、シドニー郊外、クーリンガイ地区における痴呆性高齢者ケアの実態１　（調査研究）	平成10年 8月	アルツハイマー症候群患者と主介護者の健康・生活状況を中心に、オーストラリアの高齢者地域ケアシステムの分析を通して日本の同対策の示唆を得るために行った。アルツハイマー症候群患者と同居している主介護者の健康・生活状況について訪問し聞き取りを行った。対象数は8事例である。調査項目は患者には痴呆レベル、生活機能評価・社会サービス活用度、主介護者には介護内容・健康とQOL、介護者自身のための生活時間である。結果、痴呆患者と介護者は地域と密な連携を持って生活している。看護の役割は医療と地域福祉を連携すること、患者・家族及び地域住民の健康教育を推進すること、住民参加の地域ケア計画を作成すること、そしてケアマネージャーの役割、権限を強化すること等が示唆された。
4) 在宅痴呆性高齢者の家族介護者における社会資源活用の実際１（調査研究）	平成10年 9月	横浜市内在住の在宅アルツハイマー症高齢者を介護している家族介護者60名に聞き取り調査を行った。聞き取りの主な内容は、介護年数、介護関係、社会サービスの利用状況、介護者が行っている介護内容、介護者の介護満足度等である。結果は家族介護者は高齢の方が多く、さらに介護度が高く介護困

		難を持っている。身近に相談者をえる情報を持っていない人が多い。そのため自身の生活時間が少なく、介護負担を重く感じていることが分かった。成果として報告書「在宅アルツハイマー症高齢者の家族内交流と社会資源の活用における日豪の比較」を提出した。（平成10年度横浜市研究奨励交付金による研究である）
5）オーストラリア、シドニー郊外、クーリンガイ地区における在宅痴呆性高齢者の家族介護者における社会資源活用の実際2（調査研究）	平成11年 3月	オーストラリア、シドニー郊外、クーリンガイ地区の在宅アルツハイマー症高齢者の家族介護者54名に聞き取り調査を行った。介護者は40-50歳代の人が多く、痴呆の進行は中程度である。介護者は社会サービスの情報が十分に周知され生活満足感は高かった。オーストラリアの高齢者システム（HACC）はよく機能し、地区間の関連機関の連携がとれており、きめ細かく個別ニーズへの対応が行われているため家族介護者は、自分の生活時間を維持しながら介護に当たっており、介護負担感は少なくむしろ満足度が高いことが分かった。成果として報告書「在宅アルツハイマー症高齢者の家族内交流と社会資源の活用における日豪の比較」を提出した。（平成10年度横浜市研究奨励交付金による研究である）
6)介護老人保健施設における ICF の視点でのケアの実態とケア実践者の職務満足度との関係（調査研究：共著）	平成21年3月 財団法人ユニベール財団	介護老人保健施設におけるICFの視点を用いたケア尺度を2回の予備調査を経て作成を行った。それを用いて、ケア実践者（看護職・介護職）のケアに対する充実度や職務満足度の関連性を検証した。介護老人保健施設では「心身機能・身体構造」よりも「活動と参加」へのケアが多かったが、セルフケアに偏ったケア内容であり、その人らしさを反映したケアの実践が希薄であることが示唆された。また、その人らしさを反映した高齢者への支援は、ケア実践者のケアに対する充実度につながる。ケアに対する充実度は職種による違いがあり、看護職では職務満足度が高くなるが、介護職は他の要因に影響を受けることが明らかとなった。（財団法人ユニベール財団研究助成金による研究である）A4版本文18ページ、付録資料21ページ 研究代表者：安藤邑惠、研究分担者：小木曽加奈子、阿部隆春、平澤泰子、原田正美

職務上の実績に関する事項	年　月　日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許	昭和54年 4月	第356877号
2　特許等		
3　実務家教員についての特記事項 1)専門学校教員（看護系） (1)三井記念病院高等看護学院専任教員	昭和61年4月- 平成3年5月	専任教員として勤務。主な担当は講義では「老人看護」「成人看護学：呼吸器障害を持った患者の看護」「基礎看護学：患者の環境整備と技術、生体情報を整える看護技術」である。看護の実習指導では、成人看護実習として、脳外科病棟、一般外科病棟、呼吸器病棟で行った。精神看護実習では精神病院で実習指導を行った。
(2)老人看護学臨地実習場の開拓・実施	昭和61年9月-平成3年3月	老人看護学が昭和62年度から基礎看護教育カリキュラムに創設されるに当たって全国の看護専門学校に先駆け、在宅サービスの１つである巡回入浴サービスを看護実習の一環として参加できるための交渉・準備、実施を東京都千代田区福祉課と調整し、学生が巡回入浴サービスのバスに同乗する許可をとり在宅高齢者の自宅に職員と同行して学習した。学習効果は高齢者・家族にとって入浴サービスが重要な役割を持っていること、地域のネットワークが重要であることを体験によって理解を深めた。

(3)聖和看護専門学校 （専任教員・教務主任）	平成3年6月－平成7年 3月	設置母体は医療法人の看護専門学校であり、3年課程と2年課程の2課程を併設していた。長期の教務主任欠員が生じていたところに赴任した。多種の学務運営に支障をきたしていた。教務主任の役割として、慢性的な専任教員の欠員を補充し各科目担当の責任者を設けた。実習施設からの実習停止が申し渡された時は、学校と実習施設側、双方の実習体勢の整備・調整し実習再開の労を執ったり、実習施設の新規開拓をした。国試合格率の低下では全教員が担当学生を受け持って集中学習・補習の支援をし、合格率100％を3年連続達成した。また慢性的な非常勤講師の欠員により時間割の変更が多々あり副学校長の協力を得て講師の確保や折衝を行い諸々の支障を解決に向けて尽力した。専任教員としては、講義では「老人看護学」、「基礎看護学：生体機能を整える看護」の単元を受け持った。実習は成人内科系・外科系及び精神看護の実習施設に出向き臨床指導、カンファレンスに当たった。
2)看護短期大学部（助教授） (1)担当科目のシラバスの作成 （老年看護概論・老年臨床看護・老年看護学臨地実習）	平成6年9月－平成１8年3月 （横浜市大）	横浜市立大学看護短期大学部開校に伴って就任前より老人看護概論、老人保健、老人臨床看護のシラバスを 松原純子教授とともに作成した。老人看護学の理論構築はマズローのニード論、ヘンダーソン看護論を基盤にエリクソンの発達課題を加味して構築した。高齢者看護は生活志向を核として高齢者の理解、加齢による影響が高齢者の生活にどのような変化をもたらすか、また高齢者が疾患や痴呆、寝たきりになった場合にどのような問題が起きてくるかを看護のアセスメントの視点から展開できるよう組み立てた。松原純子教授退職後の平成11年3月－平成14年3月までは適任者がえられなかったが、激しく変化する高齢者の保健医療福祉行政の推移を見ながら、新しい法制度等を追加しながら行っている。
職務上の実績に関する事項	年　月　日	概　　要
(2)老年看護学臨地実習施設の開拓・調整	平成7年9月－平成11年3月	横浜市立大学看護短期大学部開校に伴って、指定規則で定められている4週間の老人看護学の実習場との調整を図る。2年次生では1週間の実習である。この実習の対象者は生活障害を持っている高齢者であり、看護の学習の場として横浜市内の特別養護老人ホームを見学し担当者と検討の上、学生が学びやすい14施設を依頼している。3年次生は病気を持っている高齢者、何らかの生活障害をも持っている高齢者の理解と看護を深めるための適切な実習施設の開拓として、老人保健施設等を対象に実習体制を整えるためのマネージングを松原純子教授とともに行った。平成11年度から市立脳血管医療センター老人保健施設に年間を通して老年看護学臨地実習を行うことができるようになった。
(3)学内　実習委員会（副委員長）	平成 7年4月－平成8年3月	看護短期大学部創立期であり実習施設との関係性が乏しく、平成8年度からの臨地実習開始に控え、看護短期大学部の実習の理念組み立て方、各科目の特徴とともに実習病棟の確保、教員と指導者間との意思の疎通など詳細について進める必要があり、委員長を助け、資料作成、施設との日程等準備を進めた。不都合なく実習開始を迎えた。
(4)老年看護学臨地実習 （老人福祉施設）の開拓・調整	平成7年4月－平成17年3月	社会福祉法人の特別養護老人ホームの実習場、施設は個々の事情があり、毎年安定していない。学生120人の実習場を確保するために、より好ましい教育環境としての施設を確保しなければならず、年間を通して施設とのきめの細かい調整を図り、実際に施

		設を視察しそこで行われている介護・看護を知り望ましいケアを実施している施設を選択している。
(5) 老年・在宅看護学実習場の協力・開拓	平成18年4月−現在に至る	岐阜医療科学大学は地域的な特性があり、遠方で受け入れ学生数が少なく、教員が出向いての指導は時間的な負担が多く、学生一人の指導時間が十分取れない。この対策として、実習場の指導者にもきめ細かい説明や配慮をもとめ、協力が得られ実習のまとめを最終日に確認し、目的達成ができるようスケジュールを工夫している。 実習指導時間を十分確保する為に、利便性がよく、受け入れ態勢が整っている施設の開拓は今後も継続していく。
(6)学内　教務委員会（副委員長）	平成8年4月−平成9年3月	看護短期大学部創草期でありカリキュラム運営に当たって十分にシステムが整っていない部分があり、学生の単位履修手続き、視聴覚教材の使い方、出欠確認方法、学生の成績管理、非常勤講師との調整等日々の細々したこと、非常勤講師との調整等日々の細々したこと一つ一つが重要な問題を持っており、委員長を助けまた学務事務との調整を行いながら一つの事柄が機能できるようにフローチャートやマニュアル等作成し、運営が円滑に行くための準備を進めた。
(7)平成10年度横浜市介護認定等モデル事業に係わるに西区介護認定審査会委員（副委員長）	平成10年10月−11月	介護保険制度実施1年前のモデル事業として介護認定審査会において第2次判定として100人の審査を7人の審査委員とともに行った。調査員の第1次判定とかかりつけ医の意見書のずれ、調査員による第1次判定のばらつき、サービスの過剰導入による自立阻害等を指摘した。

職務上の実績に関する事項	年　月　日	概　　要
(8)学内　研究委員会（委員長）	平成11年4月−平成12年3月 （横浜市大）	当学では「海外派遣審査」について学部内の基準が明確でなく海外派遣に公平性を欠くことが指摘されていた。海外派遣に関連する諸規程が多く煩雑なこともあり、それらを読み合わせ、教員からの意見も反映し、規程間の整合性を図った「看護短期大学部における海外主張審査マニュアル」を作成した。結果、マニュアルに従って必要書類を整えられ、審査は円滑に進められた。また年報作成について、開校以来、年報等を作成してこなかったため、該当部署がなく、当委員会が中心になってとりまとめることとなった。また平成10年度までの各教員や委員会の活動を年報としてまとめるために自己点検項目にそって編集し冊子を作った。看護短期大学部後援会から要請によって後援会研究助成金交付者推薦の推薦基準を作成し、公募した。結果2件の公募があり基準を満たしていたので推薦し教授会に提案し承認された。
(9)老年看護学教授欠員による授業・実習の運営について	平成11年4月−平成18年3月 （横浜市大）	前任者の教授松原純子氏退官（平成11年3月）以降、後任人事が数回の公募が行われたにも関わらず平成14年3月の約3年間、適任者が得られなかった。その間の授業や実習を円滑に運営するための科目認定者としての非常勤（臨時）講師の雇用を再三進めてきた。老年看護学を志向する人材が少なく人材獲得に奔走した。たびたび変更する非常勤（臨時）講師の指導、監督しながら急場を凌いできた。老年看護学の講義や演習・臨地実習指導を円滑に展開するための打ち合わせ、指導資料の検討等、詳細の調整を行い学生に不都合が生じないよう細心の配慮をし、大過なく学生教育を行うことができた。平成14年4月以降は臨床経験豊かな人材が得られ意思疎通も良く科目研究「実習場面で学生が困まったこと」をテーマに取り組み、学会発表にまで運ぶまでになった。

(10)学内　実習委員会（副委員長）	平成13年4月−平成14年3月 （横浜市大）	委員長は看護職教授であるが新採用者のため不慣れなことが多く、委員長を助け実習施設との調整、実習に関わる諸業務を委員長代理として役割を果たした。具体的には実習施設間の調整、学生の実習配置、教授会提案事項の検討、実習指導者講習会の開催等をメンバーと共に行った。年度の後半、委員長は体調を崩し長期欠勤のため委員長代理として役割を果たし新年度担当者に引き継いだ。
(11)学内　教務委員会（副委員長）	平成14年4月−平成15年 3月 （横浜市大）	平成17年度からの独法化をにらんで新しい業務が予測される中、委員長を助け、非常勤講師や専任教員の長期欠勤に伴う時間割の年間運営に携わった。この業務は、教員との折衝、学生への周知、内部教員との時間割の配置等、学生の履修に支障が出ないよう綿密な調整を要した。非常勤講師の入れ替えや専門科目に教員欠員があり、次年度時間割編成を完成させるまでに時間を要した。また大学全体で学生による授業評価が実施の方向に進み、看護短期大学部案として授業版・演習版・実習版を試作し検討後、教授会承認を得、年度末に全科目対象に実施した。

職務上の実績に関する事項	年　月　日	概　　要
(12)学内　自己点検委員会（委員長）	平成14年4月−平成15年3月 （横浜市大）	自己点検については平成13年度に続き2年目であり、今年度の目標は内容を充実させることにある。指標は短期大学基準協会「短期大学の自己点検・評価」を基本にし、教育・研究では各領域毎に点検・評価をすることに合意ができた。３月末の冊子作成を目ざし教職員の協力の下に完成し関連部署と共に公立短期大学協会加盟校に送布した。
(13)　学内　教務委員会（副委員長）	平成15年4月−平成16年3月 （横浜市大）	委員長は専門基礎科目担当する教授であり、看護学のカリキュラム運営は初めての経験で、不慣れなことが多く委員長を助け年間の時間割運営、看護師国試対策、学生の履修に関わること、学習支援等携わった。ことに専門科目の中で講師以上の教員欠員があり、学生の科目履修に関わる重要な事態が生じ、人事委員会の協力を得、その窓口として関連の非常勤講師や助手と調整し当該学年の学生全員が科目履修できた。前年文科省査察後の指摘があり、卒業単位の見直し、夏休み期間の一斉確保、仮進級制度の創設に伴う学則改正があり委員長を助け次年度の運用が円滑に動くために「授業概要」の編集など中心的になって役割を果たした。
(14)生涯学習推進委員会	平成15年4月−平成17年3月 （横浜市大）	市大本部の委員会であり、大学の社会貢献活動の一つとして位置づけられている。看護短期大学部の特徴を持った企画が期待されており、講義のみでなく体験学習をも組み入れている。役割は会議に出席し、全学の意向を把握し、全教員への周知と共に協力を得、看護短期大学部として、リカレント講座は２本、市民講座は１本を教員の協力の下に企画、運営した。高齢者介護関連は安藤が企画運営及び講師を行った。
(15)学内　学生生活委員会（委員長）	平成16年4月−平成17年3月 （横浜市大）	学生の円滑な学生生活を支援するために、健康管理、奨学金に関わること、課外活動に関わること、担任教員との調整、就職・進学に関わること、その他学生の福利厚生に関することを活動の中心とし、現在活動中である。平成16年度は、メンタル面に課題を持ち、学業不振に陥る学生が目立ち、本大学キャンパスへのスクールカウンセリングの常設に向け、大学当局に働きかけている。平成17年度には創設予定。

(16) 岐阜医療技術短期大学（教授）	平成18年4月－平成20年3月	岐阜医療科学大学（教授）との併任で閉校になるまでの期間、3年生、2年生の教育、及び学内運営に携わった。担当は老年看護学（老年看護概論・臨床看護・臨地実習）、卒業研究に携わった。 短大最終の学生のため、国家試験全員合格に向けて学習支援を行った。
(17) 岐阜医療科学大学（教授） (18) 学内　セクシャルハラスメント防止委員会（委員長）	平成18年4月－現在に至る 平成18年4月－平成25年3月	岐阜医療技術短期大学（教授）との併任で学部1期生からの教育、学内運営に関わった。老年看護学（老年看護概論・臨床看護・臨地実習）、基礎セミナー、総合看護学、卒業研究、学科運営に携わった。 学部最初の卒業生であり、大学あげての総意もあり、国家試験全員合格に向けて学習支援を行った。 老年看護学実習においては従来使用していた実習施設に不測の事態が生じ、新たな施設の開拓を行った。 セクシャルハラスメントの予防対策について教職員合同委員会、学園委員会と連携をとりながら、パンフレットを作成し、教職員の勉強会を設け、周知に努めた。
(19) 学科内　4年生/学年担任 （学年主任）	平成18月－現在に至る	担任制、持ち上がり制をとっている。学生一人ひとりの学習環境の整備や支援を、4名の学年担任と定期的に会議を持ち、学年の課題を検討し学科長はじめ他教員の協力を得て解決を図っている。また年に数回、学生と面談し学生の状況を把握している。必要に応じて保護者と連絡を取り学校と担任との意思疎通を密に取っている。就職相談、国家試験に向けての学習相談にも応じた。また個別の経済的な相談は学生課をはじめ関係部署と調整を図り卒業にこぎつけた。看護師国家試験は100％合格した。
(20) 学科内　臨地実習分科会（分科会長）	平成20年4月－平成22年3月	看護学科における実習全体のとりまとめを行った。7領域の実習配置計画は、年度、学年をまたぐこともあり、複雑であり実習施設との交渉、学内での調整を蜜に行った。学生に対しては、実習前のオリエンテーションを企画し、周知できるよう時間を十分とって行った。実習がスムーズに移行できるために、準備から実施、その後の進捗状況の把握を行った。学内では実習指導に関わる教員勉強会を開催し本学の実習の課題を共有した。課題については継続的に検討、意見交換を行っていくことを共有理解し次年度へ引き継いだ。対外的には実習施設の実習指導者との意見交換会を年1回開催している。
(21) 学外 岐阜県医療審議会委員 (22) 学内　セクシャルハラスメント等防止委員会（委員長）	平成21年1月－ 平成22年12月 平成22年4月－現在に至る	メンバーは医師会、歯科医師会、薬剤師会の代表、医療を受ける立場の代表、学識経験者、計22名で構成されており、学識経験者として参加した。平成21・22年度の県内の医療圏における病床等の整備計画について審議した。 学園・大学規程は平成22年4月から改正施行され、セクシャルハラスメント等の内容が拡大されたため、さらに予防対策について教職員全員が周知しできるように研修会、勉強会を企画している。 合同委員会、学園委員会と連携をとりながら、パンフレットの改正や関連学習教材の充実に向けて活動する。

(23) 学内　就職委員会（委員）	平成22年4月-現在に至る	3学科協力体制で行う。他学科の模擬面接、小論文指導、エントリーシートの添削など、学生が自信をもって就職試験に望めるようアドバイスをおこなう。 また、看護学科主催の実行委員として就職セミナーを開催し、看護学科在校生に就職指導とともに、病院看護部からの訪問者の対応などを行い、学生への情報開示をし、適宜、就職相談に対応する。
(24) 学外 関市総合計画審議会委員 関市老人福祉計画推進委員会委員	平成23年6月-平成24年3月	メンバーは、医療機関代表者、学識経験者、福祉関係代表者、被保険者代表者、費用負担関係者、関係行政機関等18人で構成された。審議内容は、第4･5期老人福祉計画（平成23･24年度）を高齢者等実態調査結果に基づいて、サービス整備状況、運営状況等を検討し、第5期実施計画まで策定した。
(25) 学内　3 期生（4 年生） 担任（副学年主任）	平成23年4月 - 現在に至る	卒業要件の取得、看護師・保健師国家試験の支援を行う。4月には保護者会の企画、個別面接や就職相談も適宜おこなう。学年全体の生活指導も合わせて行う。平成23年度は82名全員卒業し、看護師国家試験は100％合格した。
(26) 第 43（平成 24 年度）回日本看護学会－地域看護－学術集会学会準備委員会委員	平成24年5月 - 平成24年9月	メンバーは岐阜県看護協会長（橋本氏）をはじめ県下の看護系関係者（看護協会・行政・臨床・教育）16人によって構成された。平成24年9月6･7日（長良川国際会議場）に開催される本学会の準備委員会委員として、演題抄録の選考及び採択の決定、テーマ別の群分類等に参画した。
4　その他 (1)国立療養所東名古屋病院	昭和54年4月-昭和58年3月	結核の重症病棟に勤務した。実践した看護は低肺機能で呼吸困難を伴った患者の看護である。具体的には慢性呼吸不全で人工呼吸器を装着している患者の看護。抗結核薬治療を受けている患者の看護。結核薬の耐性菌を保有している患者の看護。喀血を繰り返す患者の看護、低肺機能で呼吸困難を伴い生活機能が低下している患者の看護などにあたった。
(2)タイ国カンボジア難民救済派遣 （出張）	昭和57年6月-9月	国立東名古屋病院在職中、厚生省からの派遣要請に応じ参加した。参加目的は看護職になって３年目であり、異国の地において異なった視点から看護を見つめ、看護の共通性と異文化の地での看護の相違を自己の体験から学ぶことにあった。派遣地はタイ国プラチンブリ県サケオ地区である。チームは医師、看護師、検査技師等32名のメンバーで構成された。派遣地での主な活動場所は、サケオ地区、タイ・カンボジア国境近くのカオイダンキャンプである。派遣業務はカンボジア戦争被災者の医療救護として、外科的医療に伴う看護を行ったが医療体制が充分整わない現地では内科的、産科的な医療も必要とされ、時には熱帯特有のマラリア患者の看護にも携わった。誰もが辛いときは労りを求め、その中に現地特有の生活習慣やしきたり等も配慮しなければならないことを身をもって学んだ。
(3)筑波メディカルセンター病院	昭和59年4月-昭和61年3月	外科混合病棟に勤務。主に消化器外科、呼吸器外科、整形外科、脳外科の術前オリエンテーションを始め術前処置等周手術期を中心とした看護を実践した。術直後から回復・自立期にある患者の看護。高齢者で手術を受ける患者の看護。脳血管障害で麻痺の後遺症を持った患者の運動や言語リハビリ訓練。沈下性肺炎の予防に関する呼吸指導。術後の早期離床指導。消化器手術を受けた患者には食事生活指導。退院後の家族指導などにあたった。

(4) 三井記念病院高等看護学院（専任教員）	昭和61年4月－平成3年5月	設置母体は、総合病院である三井記念病院である.修業年数２年の進学コースである.教育と臨床とのコミュニケーションが良く授業,実習,研究においても協力的であり学生の就職希望も多い.教員への臨床からの支援も多く,学生の卒論調査ばかりでなく、研究協力も良く、臨床で行われる器材を用いて臨場感のある授業展開を行った.職場内では学生生活指導、数ヶ所ある学外の実習指導は教員でローテーションしながら教員間で事例検討等をおこない、指導の質の向上を目指した.担当教科は「基礎看護学」「成人看護学」「老人看護学」「卒業論文」である.
(5) 聖和看護専門学校（専任教員・教務主任）	平成3年6月～平成7年3月	設置母体は,精神科を主とする大内病院である。修業年数３年（レギュラー）コースと２年コース（勤労学生）がある。業務は教務主任であり、非常勤講師との折衝、実習場の開拓、授業、学業が円滑に運べない学生の指導や保護者との折衝等多岐にわたっている.特に授業の円滑化、学業環境の整備に心がけ、学生が学業に専念できるよう調整を行った.
(6) 横浜市立大学看護短期大学部看護学科（助教授） 組織変更にて校名変更 (7) 横浜市立大学医学部看護学科（助教授）	平成7年4月－平成17年3月 平成17年4月－平成18年3月	新設看護学科3年課程。新設のため学習環境は、十分な整備がなされていないこともあり、各種の委員会を設け、備品や物品の片付けをはじめ授業開始までに間に合うように整えた。 平成17年4月から4年課程となり、教員数も充実し、WGを編成し研究活動の幅を広げることが出来た。 学会参加、論文作成の指導にも携わった。
(8) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学併任岐阜医療技術短期大学看護学科（教授） (9) 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科（教授）	平成18年4月－平成20年3月 平成20年4月－平成26年3月	岐阜医療技術短期大学看護学科学生の講義、実習、卒論指導にも2年間携わった。平成20年3月閉校。 平成20年度から学部生指導に当たった。教授会に参加し、個人情報保護委員会メンバーに参加し、またセクシャルハラスメント委員長を担い学部運営に貢献した。
(10) 奈良学園大学保健医療学部看護学科（教授）	平成26年4月－現在に至る	学部新設校であり、新設のため学部機能や運営が未整備の点があり、委員会、WGを設け教員全般で取り組み、学部機能や学生の学習環境を事務方の協力を得て進めている。大学全体の評議会に委員として参加、学部では学生生活部会長として学生生活全般及び学習環境の調整をWG活動を通して学部運営に貢献している。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Ⅰ．著書 1　最新看護学教育ガイダンス	共　著	平成2年1月	医歯薬出版 A5判　全568頁。	平成元年看護師養成指定規則改訂に伴い高齢者の健康問題に対応できる教授内容をガイダンスにした。成人期と異なり老化によって生じる機能の低下と不可逆性による生活行動のセルフケア不足に対して支援方法の教授内容をガイダンスとして織り込んだ。又老年看護学で重点をおいて教授する老年期に罹患する疾患とその治療を受けている時の援助技術についても例示した。 編集：日本看護学校協議会 共著者：山田里津、石井八重子、大竹芳子、横山トヨミ、吉谷須磨子、安藤邑惠 本人担当分：「看護師教育課程　老人看護学」(P.249～253)を単著。
2　最新看護学教育ガイダンス ＜臨地実習編＞	共著	平成9年6月	医歯薬出版 B5判　全287頁	新カリキュラムによる看護師教育の臨床実習における指導の要点をガイダンスした。 新カリキュラム改正により実習時間が減少した部分の実習を質的に落とさないで効果的な体験させ、理論と統合の意味づけをするための教材の活用や学生の体験の教材かを意図して関わる場面の具体的方法についてガイダンスとしてまとめた。 また病院で実習させるだけでなく効果的に展開するための具体的な施設による方法を課程別かつ科目別に体系的にまとめた。 監修：山田里津 共著者：山田里津、伊須田栄子、横山トヨミ、安藤邑惠、田中博子、雑賀美智子、大竹芳子、杉原喜代美、森美智子、佐々木俶 本人担当分：「2.基礎看護学実習（2・3年課程）」（P.107～126）

3	ナースのための地域看護概論　−在宅看護のかけはし− （第1〜3版） （再掲）	共著	平成9年12月	廣川書店 。B5判　全267頁	看護は病院に留まらず地域で展開されるようになった。在宅－地域を統合して学ぶことを考慮して地域看護が展開される種々な接点を事例を中心に各方面から述べている。1)病院から老人保健施設、2)老人保健施設から在宅療養、3)在宅での継続ケアと高齢者の状況が変化するときに看護がどんな問題を引き受けなければならないかを事例を中心に看護の展開を述べている。 編集：眞船拓子・杉本正子。 共著者：秋山正子、虻川美紀、荒賀直子、安藤邑惠、飯田澄美子、杉本正子、眞船拓子　他28名。 本人担当分：「第10章老人保健施設及び特別老人ホームにおける地域活動」(P.197〜213)単著
4.	最新看護学教育ガイダンス　第2版	共著	平成10年8月	医歯薬出版 B5判　全268頁	平成9年度看護師養成指定規則改訂に伴い人間理解、生命の畏敬、患者の人権、人格の尊重、QOLを高められる能力を育成することを基本に、新しい時代に対応できる看護師に必要な視点を授業展開とした。 監修：山田里津　編集：日本看護学校協議会、 共著者：山田里津、天満照郎、安藤邑惠、加藤征、朝倉正、立石修、村瀬茂、小林顕、保科定頼、吾郷普浩、西垣克、矢野章永、藤沢里子、伊須田榮子、長尾節子、笠原ケサエ、野川とも江、山川美喜子、森美智子、大竹芳子、横山トヨミ、神郡博 本人担当分：①「人間と人間生活の理解」、（P.36〜41）を単著。社会的存在としての人間理解、家族社会学に力点をおき、幅広く人間理解や家族が理解できるよう授業展開ができるよう組み立てた。②「老年看護方法論」(P.155〜171)単著。、老年看護学の教育方法として、老年期の生理的機能の変化に伴う健康生活の維持・増進のための支援方法の視点を示した。老年看護方法は、高齢者看護の目的論、対象論、方法論の3つの観点から生活行動のセルフケア理論を、また痴呆、寝たきり高齢者の支援方法を育成するための効果的な看護技術の教授法をガイダンスにした。

5. ナースのための地域看護概論 −在宅看護のかけはし−第2版 （再掲）	共著	平成12年1月	廣川書店 B5判 全267頁	看護は病院に留まらず地域で展開されるようになった。在宅－地域を統合して学ぶことを考慮して地域看護が展開される種々な接点を事例を中心に各方面から述べている。第2版では、厚生省から出された看護師国家試験出題基準にある老年看護学・在宅看護の目標が達成できるよう一部加筆修正した。 編集：眞船拓子・杉本正子。 共著者：秋山正子、虻川美紀、荒賀直子、安藤邑惠、飯田澄美子、杉本正子、眞船拓子　他28名。 本人担当分：「第10章老人保健施設・特別養護老人ホーム・通所施設・民間企業、その他における看護の継続性」(P.167～173)単著。 1)病院から老人保健施設、2)老人保健施設から在宅療養、3)在宅での継続ケアと高齢者の状況が変化するときに看護がどんな問題を引き受けなければならないかを事例を用いケアマネジメントに視点をおきながら事例を用いて看護展開を示している。
6. 介護保障の課題と展望（再掲）	共著	平成14年2月	中央法規出版 B5判　全289頁。	2000年からの介護保険導入により介護環境は激変し、医療保障・社会福祉の両制度によって、介護サービスは肥大化したニーズに対応しきれなくなり、介護の社会化に対してさらなる介護制度体系化、システムの構築が課題になっていることを問題意識としてマクロからミクロまでを事例中心に課題と展望を述べている。 監修：三友雅夫、編集：丸紀和子、八島妙子、共著者：丸紀和子、井上美幸、八島妙子、蔦木チエ子、安藤邑惠、栗原弥生、斎藤信子、佐藤信枝、根本三枝子、谷川和昭、佃公子、高椋清、大森千令。 本人担当分：「第2部第3章　横浜市の介護保険事業と介護サービス」（P.75～88）単著 横浜市の課題は、後期高齢者の増加に伴って要介護が急増する。介護サービスメニューは市独自でも準備しているがマンパワーの数・量共に不足することが最も懸念される。それに伴って費用が膨らみ財政を圧迫する。「第3部第1章高齢者のケアアセスメントとケアプランの実際」（P.165～184）　単独。 主要疾患別の事例として、大腿骨頚部骨折、慢性リウマチで引きこもり、寝たきり状態で医療依存が高い、アルツハイマー高齢者の介護、うつ病と生活機能の低下がある5つの事例を取上げた。

				事例は生活機能の低下状態と介護力のアセスメントからニーズ把握した。各ケースのケアプランのポイントにそって地域サービスを導入して1週間のプランを組み、介護費用の算定、サービス導入後の利用者及び介護者の変化の状況を述べている。サービスを導入することによって利用者は意欲的に変化し、介護者の介護負担が軽減でき、要介護者ともよい関係で介護が継続できることが分かった。
7. ナースのための地域看護概論 -在宅看護のかけはし- 第3版 （再掲）	共著	平成14年3月	ヌーヴェルヒロカワ B5判 全285頁	本書の目的は、在宅－地域を統合して学ぶことを考慮して地域看護が展開される種々状況にある事例を中心にその特性を指摘している。第2版に引き続き厚労省から出された看護師国家試験出題基準にある老年看護学・在宅看護の目標が達成できるように配した。第3版においては地域保健医療、介護保険制度等の関連する法律など最新の情報を取り入れ、現場感覚を伝える工夫をした。 編著者：眞船拓子・杉本正子。 共著者：秋山正子、安達啓子、虻川美紀、荒賀直子、安藤邑惠、飯田澄美子、他30名 本人担当分：「Ⅴ-2老人保健施設・特別老人ホーム・通所施設・民間企業、その他における看護の継続性」(P.228～233) 単著。1) 病院から老人保健施設、2)老人保健施設から在宅療養、3)在宅での継続ケアと高齢者の状況が変化するときに看護が引き受けなければならない課題を具体的な事例を用いて、ケアマネジメントに視点から看護の展開を述べている。第3版では介護保険が根付き新しい仕組みから看護・介護の課題を述べている。

8.　特集「身体拘束ゼロ」を創る-患者・利用者のアドボカシー確立のための知識と技術-テーマ：「高齢者擬似体験を通して学んだ高齢者に対する看護学生の認識の変化」	共著	平成16年12月	中央法規 P.166～171 B5判　全212頁	月刊誌『おはよう21』の特集「『身体拘束ゼロ』を創る」のシリーズを再編集し１冊にまとめた。身体拘束廃止の先駆的な取り組みを中心に関連の深い認知症高齢者の転倒、骨折その予防用品、不適切対応の実態調査、さらには介護スタッフの心理状況の調査等を含め介護に携わる人々への示唆を記載している。 テーマ：「高齢者擬似体験を通して学んだ高齢者に対する看護学生の認識の変化」 を共著。 看護学生が高齢者理解を深める授業演習として取り入れている「高齢者疑似体験」によって学生がどのような認識で理解したかを演習レポートの分析から行った。結果①身体の不自由さの実感、②不自由さからくる自己の健康を実感、③不自由さからくる心理面への影響、④過去の経験の振り返り、⑤経験の意味づけ、⑥今までの高齢者観の修正の６つに分類された。またこの６つは①～⑥へと順序性をもって学生の高齢者理解が進んでいくことが分かった。 編著：高崎絹子 共著者：有田秀子、安藤邑惠、泉キヨ子、今井秀子、内野聖子、大島敏子、金井純代、北川和秀、小島みさお、坂井志麻、千田睦美、千葉由美、鳥海房枝、永井洋子、中田晴美、服部紀子、東村志保、牧本道子、山下和彦 本人担当部分：共同研究につき抽出不可能。

9.　介護と衣生活	共著	平成17年2月	同文書院 B5判　全159頁。	高齢者や障害者の立場にたった衣服に関する最新の提案を心理学、社会福祉学、看護学、被服学、介護等の専門的な視点から論じ、介護現場の人々にもわかりやすく図表写真等を多く用いて平易な言葉で簡潔にまとめている。 編著：小林茂雄、田中美智。 共著者：河合千恵子、石原治、山田寛、八島妙子、安藤邑惠、金谷喜子、高椋清、丸紀和子、浜崎満治、内尾文俊、小野寺敦志、柳澤元子 本人担当分：「第4章高齢者健康・衛生と被服　3.人体の汚れと衛生－皮膚の汚染－」　(P.49～57) 　単著。人体の汚れとして、汗・垢、尿・便などの排泄物が衣服に付着し、そこで生じる皮膚防御作用の均衡が乱れ、雑菌の繁殖がもたらす皮膚への影響や高齢者には大敵な褥瘡の発生との関連について述べた。高齢者介護にとっては欠かすことの出来ないオムツの構造、選び方、使い勝手についても言及している。長期に高齢者介護を行う介護者にも活用できる様にわかりやすく、系統的に編集している。
10.　高齢者が気持ちよく暮らすには	共著	平成17年8月	技報堂出版 B6判　全176頁。	高齢者在宅や高齢者施設では温熱環境調整の考え方、その基準についての指標が明確でなく困惑している現状があることを問題意識として高齢者が生活している場で根拠をもって温熱環境調整に活用でき、言葉遣いは平易でわかりやすい内容になるよう編纂した。メンバーは建築学、温熱工学、環境科学、家政学、看護学等の専門分野で構成している。机上論ではなく、実験研究、実態調査等に基づいて高齢者が種々な温熱環境下でどのように影響を受けるか、対策はどうするかを在宅高齢者と高齢者施設の生活環境の視点から温熱環境の基準や比較的多く用いられる温熱環境調節（冷暖房）機器の原理と使用法も実態に即して提案している。 日本建築学会編。編集代表者：五十嵐由利子、北原博幸。共著者：安藤邑惠、五十嵐由利子、大渕律子、北原博幸、高橋啓子、都築和代、橋本修左、梁瀬度子。 本人担当分:P39－47、49－63、166。

11. ナースのための地域看護概論 - 看護の継続をめざして- 第4版第1刷	共著	平成18年1月	ヌーヴェルヒロカワ B5判　総310頁 付録「整理ノート」	看護は病院に留まらず地域で展開されるようになった。在宅－地域を統合して学ぶことを考慮して地域看護が展開される種々な接点を事例を中心に各方面から述べている。第2版に引き続き厚労省から出された看護師国家試験出題基準にある老年看護学・在宅看護の目標が達成できるように配した。第3版においては地域保健医療、介護保険制度等の関連する法律など最新の情報を取り入れ、現場感覚を伝える工夫をした。介護保険制度の改正に伴って補足、修正した。 編集：真船拓子、杉本正子編 共著者：相木直美、秋山正子、安達啓子、虻川美紀、荒賀直子、安藤邑惠、飯田澄美子、内田恵美子　他38名 本人担当分：P.228－233。
12. ICFの視点に基づく高齢者ケアプロセス	共著	平成21年3月	学文社 B5判　全159頁。	高齢者ケアにおいては、病院完結型の医療制度は終わりを告げ、生活の質を保証する療養の場、ケアの質の高い継続した支援が高齢者ケアに求められるようになってきた。改正された介護保険制度では、WHOで20001年に国際生活機能分類（以下ICF）の視点に基づきケアが必要であるという指針を出した。本書はICFの視点に基づき、高齢者ケアプロセスに必要なアセスメントの知識を提示し、根拠あるプランの流れを理解でき、かつ事例展開の演習によって、確かな力をつけることができるように工夫をした。本著では、ICFの第1レベルでの情報収集内容を吟味し、ICFの視点で得た情報をマズロー理論、ナイチンゲール理論、ヘンダーソン理論などで展開ができるよう工夫している。 編著者：安藤邑惠、小木曽加奈子 共著者：阿部隆春、今井七重、佐藤八千子、柴田益江、高野晃伸，田村禎章，樋田小百合，中川千代，中澤秀一，祢宜佐統美，服部紀子，彦坂亮，平澤泰子，森由香子，八島妙子（50音順） 本人担当分：第１章3節（8-23），第2章第１節・3節（38-42），第3章1節（46-53），第4章第1節（96-114）。全編集作業。

13.	ナースのための地域看護概論　－看護の継続をめざして－ 第4版・第5刷	共著	平成23年1月	ヌーヴェルヒロカワ	上記11.の同名の書と主旨・内容は同じであるが、介護保険制度の改正に伴って担当分の加筆修正を行った。 編著者：眞船拓子、杉本正子。共著者：秋山正子、足立啓子、虻川美紀、荒賀直子、安藤邑恵、飯田澄美子、杉本正子、眞船拓子他他38名。 本人分担分：「第3章Ⅴ.地域活動の実際と看護の継続性」(2.介護老人保健施設における看護活動、P256-262)
14.	認知症がある人をケアすること；BPSDによる生活場面の困難さ	編著 共著	平成24年6月	学文社 B5版　全246頁	認知症ケアの歴史的経過を知り、現在の高齢社会における認知症の課題を明らかにした。本著は、認知症の種別により、ケアのあり方も異なることを踏まえ、認知症高齢者の生活場面での困難さ、非薬物療法の実際などをより多く紹介している。また、認知症ケアを実践するうえで、パーソンセンタードケアやセンター方式を紹介している。具体的な困難場面を想定して、その対応の1例も紹介している。 監修・編著者：佐藤八千子、小木曽加奈子 編著者：阿部隆春、安藤邑恵、祢宜佐統美、平澤泰子、山下科子、著者：今井七重、今津尚人、梅田雅子、齋藤隆司、齋藤妙子、田村禎章、高木房代、温水理佳、彦坂亮、本荘鈴子、森由香子、渡邊美幸、吉田章子 本人担当分：第5章第1節、第2節（P105-128）
15	高齢者ケアの質を高めるICFを活かしたケアプロセス	共著	平成27年3月	学文社 B5版　全218頁	類書「ICFの視点に基づく高齢者ケアのプロセス」の内容を踏まえ、高齢者を取り巻く社会環境、ケアの概念と多職種の連携、ICFの概念と活用方法等の紹介。さらに高齢者ケアの場や病状や生活状況に伴う変化に応じて、1事例を＜回復期リハビリテーション病院＞＜在宅＞＜介護福祉施設（特別養護老人ホーム）＞という3つの療養の場でケアプロセスを展開している。同じ対象であっても療養の場の特徴を踏まえたアセスメントの方法や必要なケアが異なることを理解できるよう工夫した。 編著：小木曽加奈子、阿部隆春、安藤邑恵、 今井七重、佐藤八千子、平澤泰子他13名 本人担当分：第1章第2節、（P8-14）

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概　　要
Ⅱ．学術論文 1.　糖尿病患者の食事指導－食事療法に意欲をもつまでの過程－	共著	昭和54年12月	国立療養所 東名古屋病院 院内研究会 P.1～10	青年期の患者が疾病を理解し食事療法を積極的に受け入れるまでの過程を看護者と患者の日常会話の場面を再構成して分析した。その結果、日常食べていた食事と病院で食べている食事についての認識の形成に問題があることが分かった。患者が具体的に食事の質・量の変化を体験するためには食事内容をノートにつけることによって食事療法の重要性を認識する動機づけとなることが分かった。 共著者：安藤邑惠、中井裕子、広部美幸、渡辺静子 本人分担分：共同研究につき抽出不可
2.　症状の回復に伴い心理的変化を顕著に示した結核患者	単著	昭和55年6月	国立療養所 東名古屋病院 院内研究会	重症肺結核患者の入院時から症状が安定し、患者が病気を受け止め回復意欲を持つまでを位相にして心理的変化のプロセスを見た。症状によって生活行動のセルフケアの自立が低い時と半代償性になった時、個別性のある生活行動や精神的支援を重点にした看護のあり方について述べている。本人分担分：P.22～30
3.　重症結核病棟における消毒薬手洗い効果の検証	共著	昭和57年10月	国立療養所 東名古屋病院 院内研究会	重症結核病棟での院内感染予防対策を考えるとともに患者ケア後の手指に付着した耐性結核菌や雑菌が従来使用しているクレゾール薬液の手指洗浄が有効か否かについて実験検証している。結果は耐性結核菌の検出なかった。雑菌に関しては機械的な手指の洗浄で除去されることを検証した。病棟研究の一環として参加した。P.9～18 共著者：中井裕子、安藤邑惠、広部美幸、渡辺静子 本人担当分：共同研究につき抽出不可能。
4.　全身清拭における患者のニードの充足と看護者の要因 （査読付き）	単著	昭和59年12月	第12期生日本看護協会看護研修学校研究論文集 A4判　全537頁。 P1-11	全身清拭を必要とする患者は清拭にどのようなニードがあるのか、それを満ためには看護者にはどのような配慮、要因があればよいかをケアの実施者および患者を一組にして調査した。個別性の理解、信頼関係が患者のケア満足に深く関わっていることを指摘している。

5. 「基本的生体情報の測定と観察」の授業にグループワークを取り入れて	単著	昭和62年6月	日本看護学校協議会雑誌 18(2) P.63～65	2課程の基礎看護技術の教授方法。既習の知識、技術を生かし、楽しくかつ効果的な学ばせ方の一方法として、バイタルサインの測定データと患者の主観的な情報の活用法を授業に取り入れた。その結果、技術に生かす情報が集団ダイナッミクスの作用によってかわり、技術と情報との活用関係が理解でき学生の認識が変わった。
6. 介護従事者の“適合性基準“に関する研究	共著	昭和63年3月	シルバーサイエンス研究、（厚生省厚生科学研究助成金）昭和63年度研究報告書 P.314～315	介護従事者の適性を行動特徴と自己像からそれぞれ11因子を洗いだした。またこれらの因子間の関連性についても検討した。「適材適所」の概念から質の高い介護従事者を得るため、教育するための診断尺度の開発を目的とした基礎研究である。看護の立場から介護従事者が心理的に追い込まれる状況や困難な介護場面の状況を提供し質問紙や分析にあたって共同研究者らとディスカッションを行った。 共著者：三友雅夫、筒井美沙子、井上隆二、井田政則、永田俊明、安藤邑惠 本人担当分：共同研究につき抽出不可
7. ひとりくらし・ねたきり老人の生活実態とニード・サービスの調査	共著	平成2年2月	秩父市 NO.1：A4版/全156頁 NO.2：A4版/全193頁	秩父市からの委託研究の一部である。 秩父市の独り暮らし・寝たきり老人の生活実態調査から保健・医療・福祉のニードを概観し、施策について考察している。 共著者：永田俊明、岩田浩子、瀬戸口久美子、中村孝、安藤邑惠 本人担当分：「No.2 独り暮らし老人の実態」のアンケート質問紙作成、配布、回収、データ分析、論文作成。No.2　P.17～57を単著。
8. 基礎教育における老人の看護授業展開の視点：コースアウトラインの試案	単著	平成2年6月	日本看護学校協議会雑誌 21(1) P.26 ～27	新カリキュラムにおける老人看護学の教授内容について検討をした。学生が受け持った老人患者の学習状況を分析し、老人患者の特徴をふまえた看護実践が展開できる教授案、GIO、ＳＢＯ、チェックポイントを具体的に試案した。
9. 臨床実習における基礎看護技術の展開と実習評価	単著	平成3年6月	日本看護学校協議会雑誌 22(1) P.82～96	看護婦養成２年課程の学生は准看護師養成所により教育の格差がある。基礎看護技術の授業計画は入学時准看護学校での習得状況を調査したうえで成立している。授業と臨床実習を一貫した理念のなかで看護の知識、技術、態度をどの様に学ばせているかを述べている。

10. 老親の介護と看護師の職業意識	単著	平成3年12月	日本看護学校協議会雑誌 22(2) P. 114～116	看護師が自分の老親の介護を引き受けなければならい時、自らの職業を、就業をどの様に考えているかを調査した。現時点では仕事と介護の両立は難しいとしながらも社会福祉サービスを活用し、労働条件の整備がされれば仕事を続けたい。看護師の職業に誇りを持ち自己実現の意欲が高い事が分かった。
11. 介護福祉士の専門性に関する実践による調査研究事業報告書	共著	平成5年3月	介護福祉研究会	介護福祉士養成校におけるカリキュラムの教育内容を実務についている寮母の業務を参加観察し、実態とカリキュラムの妥当性を検証し、介護業務の専門性を検討した。介護の専門性は生活が快適にできるように身の回りを整え、周囲の人間環境をも調整することの重要性が指摘された。 （全45頁） 共著者：三友雅夫、安藤邑惠、鈴木力雄、中島繁子、森山治、永田俊明 本人担当分：研究計画、データ収集、分析、論文作成にあたるも共同研究につき抽出不可能。
12. 在宅障害老人のケアシステムの検証−Ａ特別区の事例分析による検証−（査読付き）	単著	平成5年3月	立正大学社会学・社会福祉学論叢第26号 P. 89 ～115	福祉８法改正に伴う福祉の動向をふまえ、都内Ａ区の事例を取り上げ保健・医療・福祉のサービスの展開を検証した。保健・医療・福祉の連携、一体化したサービス運営の確立に向けて検討している。
13. 基礎看護技術の評価の実際　　２年課程	単著	平成5年6月	日本看護学校協議会雑誌 第24巻1号 P. 117～123	基礎看護教育（２年課程）における基礎看護技術の習得過程と評価方法を示し、２年課程の学生が持ちやすい問題を指摘し、指導対策の検討を行った。
14. ナースの資質と養成教育 −資質・適性評価基準と現行カリキュラム検討− （査読付き）	単著	平成5年12月	立正大学社会学・社会福祉学論叢　第27号 P. 71～82	先行研究から得られた看護職の望ましい資質、適性因子は行動特徴では「指導性」「持続性」、自己像では「自己信頼性」、「決断性」、動機づけでは「外向型」の要素を持った者ほど柔軟に状況対応ができると言う示唆が得られた。
15. ナースの資質と養成教育（修士論文） （査読付き）	単著	平成5年12月	立正大学大学院 全110ページ	看護基礎教育は看護師の質的向上が求められているなかでどのような要因が深く関連しているかを2500名の看護師を対象に行動特徴、自己像、動機づけ、状況対応について質問調査を行った。結果は因子分析、相関分析、ｔ検定、分散分析、多重比較検定を行った。基礎看護教育においては、学生に自己の信頼性に焦点をあてて教育を行うことが望ましいと言う示唆を得た。 （400字詰め原稿用紙換算337枚）

16. ケース分析によるナースの適性検討　－看護学生の指導体制を志向して－（査読付き）	単著	平成6年12月	立正大学社会学・社会福祉学論叢第28号 P.1～10	先行研究で明らかになった適性の構成因子から「適性が高い」、「適性が低い」と評価されている学生各３名を適性の構成因子である「行動特徴９因子」「自己像９因子」及びYG性格検査、東大式エゴグラム、面接調査を合わせて用いた。適性の高い学生は適性の構成因子がバランス良く保たれている。適性が低い学生は特に自己の信頼性が低く、劣等感を強くもっており、教育・指導に対する示唆が得られた。
17. デイサービス利用促進モデル研究報告	共著	平成7年3月	（財）埼玉県シルバーサービス情報公社 全147頁	埼玉県の委託研究である。デイサービスの登録利用者のニーズ調査、サービスの現状の実態調査、モデル施設でのサービスの利用状況の実際を調査した。地域の課題としてデイサービスの適正配置、手続きの簡素化、柔軟なサービスの選択、送迎交通の機動性について指摘された。 共著者：三友雅夫、安藤邑惠、上野公子、江口信枝、後藤幸子、丸紀和子、森山治、八島妙子、森岡豊 本人担当分：研究計画、データ収集、分析、論文作成にあたるも共同研究につき抽出不可。
18. 高齢者看護の問題	単著	平成7年12月	高齢者の温熱環境シンポジウム（2）P.20～23	高齢者が高温・低温に曝されることによって受ける影響を看護生理学の視点から問題点を指摘した。高温下では細胞内液が減少し、予備力が低下しているため脱水になりやすく、低温下では気温の変化に体内適応力が低いため高血圧や脳出血に陥りやすい。予防的な対処が必要である。
19. 広域老人給食システム構築研究事業報告	共著	平成8年3月	（財）埼玉県シルバーサービス情報公社 B5判　全147頁	埼玉県の委託研究である。地域の給食サービスの実施状況の把握、給食サービスのニーズ調査、広域老人給食システムの構築及び検討を目的に調査を行った。給食サービスの課題は、配食数、配達時間、配食する人手の確保、財源、疾病と食事内容、保温、料金と食事内容のバランス等が浮き彫りになった。 共著者：三友雅夫、安藤邑惠、上野公子、江口信枝、越智久恵 後藤幸子、鈴木力雄、高内誠宏、谷川和昭、檀原美紀、中島繁子、永田俊明、丸紀和子、森山治、森岡豊、八島妙子 本人担当分：データ収集、分析、論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。

20. 老人保健施設における医療福祉関連職の職務ストレッサー （筆頭論文）	共著	平成8年3月	保健福祉事業研究所 Part1：A4版/全84頁 Part2･3：A4版/全159頁	老人保健施設に働く介護者186名と看護者168名を対象に介護に対する心理的負担感を比較した。内容はケア業務の負担感、対高齢者ケアの苦手意識、環境内認知障害、ローカス・オブ・コントロールで構成した。主な結果は介護職は身体的な生活援助に、看護職は環境内認知障害に負担感を感じていた。 共著者：安藤邑惠、児泉肇、後藤幸子、高椋清、三友雅夫、森岡豊嗣、上野公子、江口信枝、小野賢一、鈴木力雄、谷川和昭、永田俊明、丸紀和子、森岡豊、森山治、八島妙子 本人担当分：データ収集、分析、論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。
21. 横浜市における高齢者地域ケア対策と保健・福祉の人材育成対策との関連性の分析	共著	平成8年5月	横浜地域ケア研究会 A4判/全47頁	在宅で地域のケアを受けながら療養している８組の高齢者その介護者に対して在宅生活のアセスメントをし、現在行われているケアの内容を検討した。症状悪化を予防するには継続した観察により変化の兆候を察知する専門的な能力の必要性に示唆を得た。 平成7年度横浜市立大学研究奨励交付金（研究代表者：眞船拓子）による研究の一部である。 共著者：眞船拓子、加藤基子、安藤邑惠、山下正毅、中西美和子、浅野恵美子、原三枝子、羽生幸枝、都築保子 本人担当分：データ収集、分析、論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。
22. 在宅要援護高齢者のケアマネジメント-高齢者の健康レベルと介護力（査読付き）	単著	平成8年12月	立正大学社会学・社会福祉学論叢第30号 P.89～100	地域の在宅サービスを受けながら生活している要援護高齢者及び介護者３組の現状をアセスメントし、ケアマネジメントに加えることが望ましい機能とその内容を検討したケース 研究である。この３組は家庭介護力「比較的十分」とされているケースであるが、要高齢者の健康レベルが低いとセルフケアは低く、介護者の体力・知識が十分必要であると言う関係性が分かった。

23. 在宅介護支援センターにおけるケアマネジメント機能の分析研究	共著	平成9年3月	保健福祉事業研究所 A4版　全388頁	介護支援センターのケアマネジメント機能」の現状分析を目的に1)505施設長を対象とした活動状況の実態調査、2)ケアマネジメント機能を構成する因子及びこれらに影響を与えている要因について604名のスタッフを対象に調査研究を行った、3)モデル施設10ケ所の事例研究で構成している。今後の課題として①ケアマネジメント機能の向上、②地域の連携強化の必要性が明確になった。 共著者：三友雅夫、安藤邑惠、後藤幸子、高椋清、森岡豊嗣、八島妙子、矢野一郎、上野公子、江口信枝、越智久恵、鈴木力雄、高内誠宏、趙敏廷、谷川和昭、中島繁子、西脇明子、畑千津子、廣田浩子、丸紀和子、森岡豊、森山治、八島妙子 本人担当分：データ収集・分析・論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可能。
24. 成人の環境適応特性と看護介入の効果判定に関する看護生理学的研究（筆頭論文）	共著	平成9年9月	横浜市立大学看護短期大学部看護生理学研究会 A4判　全85頁	環境条件と看護介入によって生じる生体反応を人体側の尺度を用いて両者の関係を検討するため基礎的生理学的研究である。測定温は深部温・末梢皮膚温・を中心に４ヶ所プロットしてその変化を検討した。本年は環境を入浴及び低温室に設定し経時的体温、血圧、脈拍測定からその変化をみた。横浜市研究奨励交付金（研究代表者：安藤邑惠）によって行った研究である。 共著者：安藤邑惠、松原純子、江川正人、野村明美、青木律子、五木田和枝、中馬妙子、平井和恵、山田艶子、渡辺浩子、川島美勝 本人担当分：研究計画・データ収集・分析・論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。
25. 在宅介護支援センターにおけるケアマネジメント機能の因子構造 （査読付き）	単著	平成9年12月	立正大学社会学・社会福祉学論叢第31号 P.65～74	目的はケアマネジメント機能における課題を検討することにある。1475施設の在宅介護支援センターに勤務している実務者を対象に45項目のケアマネジメント機能尺度を作成し、因子分析を行い６因子 を抽出した。良く機能している因子は、ケアプラン、ケアの継続、ケース発見であり、続いて連携システム、業務基準、最も機能が弱かったのはインフォーマル・ケアであった。

26. 開発途上国から医療協力のために求められてきた看護職に関する研究	共著	平成9年12月	国際看護研究会 A4判　全67頁	開発途上国で看護職として国際協力活動の実態を明らかにし、国際医療協力としてどんな力量を備えた看護職が求められており、看護教育に何が求められているかを明確にするための基礎的研究である。 第19回国際協力学術奨励（研究代表者：森淑江）による研究である。 共著者：森淑江、根本恵子、柳澤理子、田中博子、戸塚規子、安藤邑惠、矢嶋和江 本人担当分： データ収集・分析・論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可能。
27. 在宅アルツハイマー症高齢者の家族内交流と社会資源の活用における日豪比較（筆頭論文）	共著	平成11年3月	日豪高齢者ケア研究会 A4判　全109頁	日豪在宅アルツハイマー症高齢者114名に聞き取り調査を行った。日本の方が、年齢が高く、痴呆が進んでいる。介護負担感も大きく、介護者は社会サービスの情報が十分に周知されなく生活満足感も低かった。豪の高齢者システムのHACCが日本に比べてよく機能していることが分かった。 平成10年度横浜市研究奨励交付金（研究代表者：安藤邑惠）による研究である。 共著者：安藤邑惠、眞舩拓子、前田信雄 本人担当分：研究企画・調査計画、データ収集・分析・論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。
28. 身上監護支援における具体的ニーズに関する調査報告	共著	平成12年3月	身上監護支援研究会 A4判　全171頁	高齢者の身上配慮事項について地域医療に携わっている医師・看護師・ソーシャルワーカー359名に調査表で回答を得た。調査内容は医療・福祉サービス、日常生活関する3分野32項目の相談内容である。3職種は身上監護32項目の相談すべてに関わっており、中でも医療・福祉サービスに関する相談内容が多かった。しかし高齢者の人権や自己決定、プライバシー、権利擁護に関する意識はまだ十分認識されてない現実がある事がわかった。 平成11年度社会福祉・医療事業団の助成（研究代表者：大井川裕代）による研究である。 共著者：大井川裕代、志田小寿恵、奥野純子、藤井千枝子、安藤邑惠、村尾俊明 本人担当分：研究企画・調査計画、データ収集・分析・論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。

29. 在宅高齢者の冬季暖房と健康に関する実態調査（査読付き）	共著	平成13年11月	三重看護学誌 第14巻1号 P.93～98	関東地域の高齢者143人に冬期における暖房方法、住宅の温熱感と乾燥感、健康状態について調査を行った。暖房機器は移動式の物が多いく、1種ではなく複数使用している。皮膚痒みは70％の人が訴え、風邪引き易さについても30％人が訴えており、健康と乾燥環境との関連が具体的になった。 共著者：大渕律子、安藤邑惠、橋本修左 本人担当分：研究企画・調査計画、データ収集・分析・論文作成を担当するも共同研究につき抽出不可。
30. 高齢者地域ケアシステムに関する日豪比較－在宅のアルツハイマー症候群患者と主介護者の健康・生活の質の分析を通して－（査読付き）	共著	平成14年2月	新潟医学会雑誌 第116巻第2号 P.78～89	本研究の目的は、アルツハイマー症候群患者と主介護者の健康・生活状況の日豪比較を中心に、オーストラリアの高齢者地域ケアシステムの分析を通して日本の同対策の示唆を得ることにある。方法は、アルツハイマー症候群患者と同居している主介護者の健康・生活状況について訪問し聞き取りを行った。対象数は8事例である。調査項目は患者には痴呆レベル、生活機能評価・社会サービス活用度、主介護者には介護内容・健康とQOL・自身のための生活時間である。結果は、痴呆患者と介護者は地域と接点がある生活像を描く必要がある。経済・施策文化等高齢者の地域ケアシステムに関わる諸状況を整える必要がある。看護の役割として医療と地域福祉を連携すること、患者・家族及び地域住民の健康教育を推進すること、住民参加の地域ケア計画を作成すること、そしてケアマネージャーの役割、権限を強化すること等が必要であることが示唆された。 平成10年度横浜市研究奨励交付金（研究代表者：安藤邑惠）による研究の一部である。 共著者：眞舩拓子、安藤邑惠、あずさ瀬間（オーストラリア在住） 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析・論文作成携わるも共同研究につき抽出不可。

31. 介護をめぐる事件・事故に関する新聞報道の検討（査読付き）	共著	平成14年6月	こころの健康 第17巻1号 P.45～56	研究目的は、新聞記事の二次抄録を用い介護をめぐる事件・事故の検討を行い、高齢者の生活・自己決定を支援するための課題を提言することである。介護をめぐる事件・事故の内容は、火事、不慮の事故、裁判、介護提供者、死亡記事、総説に分類できた。記事の概要から示唆される生活支援のための課題は①高齢化率の増加に伴うトータルケアに必要性②事故を予防する技術の進歩とネットワークの必要性③家族介護の限界と要介護者への援助④保健・医療・福祉施設における人権意識の向上⑤人権擁護とオンブズマンの必要性である。自己決定能力を支援するためには意思表明能力、判断力、行為能力を専門職が提供していく必要があることが示唆された。 平成11年度社会福祉・医療事業団の助成研究（研究代表者：大井川裕代）の一部である。 共著者：藤井千枝子,志田小寿恵、奥野純子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析・論文作成を担当するも共同研究につき抽出不可。
32. 高齢者疑似体験を通して学習する内容の分析－体験順序の違いによる学習内容の比較－	共著	平成15年3月	横浜市立大学看護短期大学部	研究目的は学生120名が一斉に体験することが出来なく２クラスに分かれて体験しており、学習内容に相違があるか否かを検証するために取り組んだ。体験方法は身体に装具を付けて生活行動を行う。学生の体験した内容を記述したレポートを１文１義にし、類似性の高い語彙を分類化した。分類に当たってはヘンダーソン看護論の枠組を用い４つの内容、①高齢者イメージ、②高齢者の状態及び必要な看護③体験から学んだ内容に伴う気づき④教育方法の検討である。結果、学習順序による学習内容の相違は見られなかった。データ使用は承認が得られた116名について分析した平成14年度横浜市立大学研究奨励交付若手人材育成推進費（研究代表者：有田秀子）による研究の一部である。　A4判　全75頁 共著者：有田秀子、服部紀子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析・論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。

33. 5分間の「高齢者疑似体験」を通して捉えた高齢者の状態－ヘンダーソン看護論の枠組からみた学習方法（査読付き）	共著	平成15年8月	第34回日本看護学会論文集（看護教育）P.79～81	老年看護学の授業演習で「高齢者疑似体験」を取り上げ高齢者の身体的特徴を実感することを目的に行った。学生全員が体験できるためには施設、設備の関係から実質５分間の制約の中で学生が高齢者の状態をどのように捉えているかを演習後のレポートを分析した。分析方法はヘンダーソン看護論、基本的欲求に影響をもたらす常在条件、病理的状態の枠組みにそって分類した。結果、ヘンダーソン看護論の枠組みすべてに記述があった。記述の多かった項目は「社会的ないし文化的」、「感覚機能」「加齢変化」あった。記述が少なかった項目は「疾患・障害」であった。５分間であるが演習目的は達成できているが「疾患・障害」については課題を残した。 平成14年度横浜市立大学研究奨励交付若手人材育成推進費（研究代表者：有田秀子）の一部である。 共著者：有田秀子、服部紀子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、データ収集、分析に携わるも共同研究につき抽出不可。
34. 「高齢者疑似体験」を通して学んだ高齢者に対する看護学生の認識の変化	共著	平成16年１月	おはよう２１ P.66～69	看護学生の高齢者理解を深める授業演習で高齢者疑似体験は学生がどのような認識で理解したかを演習レポートの分析から行った。結果、①身体の不自由さの実感、②不自由さからくる自己の健康を実感、③不自由さからくる心理面への影響、④過去の経験の振り返り、⑤経験の意味づけ、⑥今までの高齢者観の修正の６つに分類された。またこの６つは①～⑥へと順序性をもって学生の高齢者理解が進んでいくことが分かった。平成14年度横浜市立大学研究奨励交付金若手人材育成推進費（研究代表者：有田秀子）の一部である。 共著者：有田秀子、服部紀子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、データ収集、分析に携わるも共同研究につき抽出不可。
35. 初学者が採血の技術を習得するための学習支援教材の開発　－人工皮膚・人工血管装置モデル教材－	共著	平成17年5月	科学研究費補助金（基盤（C）(2)）研究成果報告書（課題番号15592252） A4判　全30頁。	市販の採血モデルは①腕モデル、②装着モデルは材質が硬く注射針の刺入時に抵抗があり、そのまま採血を実施すると血管を貫通する危険性があることを問題意識とし、注射針の刺入圧が人体に近く、学生教材として安全性が高く、安価で入手しやすい教材を開発することを目的とした。

				③開発モデル試作には、人工皮膚はアメゴム板及びネオプレーンゴム0.5mm、人工血管としてシリコーン管及びエリコーン管2mm～3mmを各種組み合わせた材料12種を作成しそれぞれ刺入圧を測定した。 ④対照として研究者らの人体刺入圧を測定した。刺入圧測定はエアパック式接触圧計と研究者らが開発した測定器を組み合わせて行った。結果、市販の①腕モデルの刺入圧は平均7.25KPa、市販の装着モデルは平均9.77KPa、③研究者らの開発モデルは平均5.88KPa、④人体では平均1.86KPaであり、開発モデルが人体により近い採血教材として活用できることが確認できた。価格においても市販の採血モデルは20万円以上するが開発モデルでは5000～6000円と安価で作成できることが分かった。 平成15・16年度科学研究費補助金（基盤C・2）（研究代表者：野村明美）による。 共著者：野村明美、結城瑛子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、実験計画・データ収集・分析・論文作成に携わるも共同研究につき抽出不可。
36. 老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った援助内容の分析－「飲食」への援助に焦点をあてて（査読あり）	共著	平成17年12月	第36回日本看護学会論文集－看護教育－ P105-107	目的は学生が困った「飲食」への援助内容を明らかにし、その結果をもとに授業内容・方法を検討する。方法は同意が得られた学生14名の、高齢者の「飲食」に関する具体的援助場面の記述を意味内容ごとに整理分類した。結果、脳血管障害患者では、患者理解が不十分で個別的な介助ができず食事を摂取してもらえないことが実習初期に困った内容としてあがっていた。2週以降は誤嚥しないようにゆっくり食べる、適量を口に入れて食べるといったよりよい食行動への援助方法が見いだせず困っていた。 共著者：服部紀子、安藤邑惠、有田秀子 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集 スーパーバイズ

37. 老年看護学臨地実習で学生が「困った」看護援助の分析－「排泄」への援助の内容とその対処（査読あり）	共著	平成17年12月	第36回日本看護学会論文集 －看護教育－ P158-160	目的は学生が「排泄」場面で困ったことへの内容を明らかにし、その結果をもとに授業内容・指導を検討する。同意が得られた学生15名の高齢者の「排泄」に関する具体的援助場面の記述を意味内容ごとに整理分類した。結果、排泄環境の調整、おむつ交換、失禁ケアの場面で困っている。対処法は看護師とともに実践に参加し場面を学ぶ。個別的な方法は説明を受けたり、技術練習を繰り返して解決に向けて学んでいる。88%は実習中に解決している。解決できない内容は、学生自身の課題や患者との関係に起因しており必要に応じて個別面接等を行う。 共同研究者：青木律子、安藤邑恵、服部紀子 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析、スーパーバイズ
38. 老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った援助内容の分析－「活動」への援助に焦点を当てて（査読あり）	共著	平成 17 年 12 月	第36回日本看護学会論文集 －看護教育－ P191-193	学生が脳血管障害を持つ高齢者の「活動」に関連する援助を通して「困まった」と感じている内容を考察し、授業の内容・方法を検討することを目的とした。最も「困ったこと」は姿勢を変える移動動作、ついでアクティビティ援助であった。これは高齢者の障害やこれまでの活動が多様であり、複雑であることがおもな要因となっている。授業では高齢者の多様性と安全を保証する技術を配慮する必要性の示唆を得た。 共同研究者：安藤邑恵、服部紀子、青木律子 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析・論文作成
39. 老年看護学臨地実習で学生が「移乗介助」で困ったと思っている内容の分析 - 脳血管疾患の左麻痺高齢者への援助に焦点を当てて - （査読あり）	共著	平成19年1月	第37回日本看護学会論文集 - 看護教育 - P291 - 293	脳血管疾患による左麻痺のある高齢者の「移乗介助」に関して学生が困ったと思っている内容を分析し、授業方法の検討資料とする。看護系短大生で同意の得られた17名のレポートを質的に分析した。困った状況は、患者の姿勢の「不安定での介助姿勢」でアセスメントから計画が適切でなかった。対処法は、指導者や教員から指導を受けて解決に向けている。授業では学生が、障害がもたらす重心の不安定さを理論と実践でイメージでき、安全が確保できる工夫を指導展開が必要である。 共同研究者：安藤邑恵、服部紀子、青木律子 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析・論文作成

40.　老年看護学臨地実習で学生が困った清潔援助の分析（査読あり）	共著	平成19年１月	第37回日本看護学会論文集 －看護教育－ P285－287	「清潔」援助において、学生の「困った体験」に焦点をあて実習指導の示唆を得ることを目的し、 看護系短大生で同意の得られた16名のレポートを質的に分析した。困っているのは「清潔」と患者の状態、残存機能の活用や清潔による疲労とADLの拡大など複雑な状況を考慮した援助が多かった。また患者の心理的状況への配慮が不足への対応に苦慮していた。授業では、多様な状況設定を体験し、豊かな発想、工夫を提供する必要がある。 共同研究者：服部紀子、安藤邑恵、青木律子、島田今日子 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析、スーパーバイズ
41.　老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題－ICFの視点から考える看護の展開－（査読あり）	共著	平成20年1月	第38回日本看護学会論文集 －看護教育－ P278－280	目的は老年看護学臨地実習で使用している実習記録の内容をICF（国際生活機能分類）の視点で分析し、真の意味で学生が対象を「全人的理解の上に立った援助」ができる教育的課題や工夫の糸口を見つけるための基礎資料とする。対象者は同意が得られた看護系短期大学生3年次生33名。介護老人保健施設実習（90時間）の実習記録33部を分析した。情報収集で内容が多い領域は「心身機能」「身体構造」「活動と参加」であり、アセスメント及び看護計画の記述は情報収集よりも減少している。学生の実習記録の特徴として、「心身機能」「身体構造」に関連する内容が多く、従来の医療に志向した傾向にあることが確認できた。実習指導に際して、その人らしく全人的な生活を支援する指導のあり方を工夫することが課題となった。 共同研究者：安藤邑恵、小木曽加奈子 本人担当分：研究企画、調査計画、調査票考案、調査実施、データ分析、論文作成

42.　老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題―認知症高齢者の生活機能領域からの分析― （査読あり）	共著	平成20年1月	第38回日本看護学会論文集 －看護教育－ P281－283	介護老人保健施設の認知症病棟実習で使用している実習記録の内容を生活機能領域から分析し，学生の対象理解や援助の捉え方の傾向を把握する目的で研究を行った。調査対象者は看護系短期大学生3年次33名。老年看護臨地実習，全180時間の内，老人保健施設実習（2週90時間）の実習記録33部を分析した。「心身機能」については「尿路・性・生殖等」及び「神経筋骨格と運動等」はすべての学生が，情報収集ができた。 心身機能は看護の展開が出来ている学生が多かった。「身体構造」については，「消化器系等の構造」「尿路生殖器の構造」「運動等の構造」は看護の展開ができている学生が多かった。今後の多方面から情報収集のできる実習指導体制の工夫が必要である。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、調査計画、調査票考案、調査実施、データ分析、論文作成
43.看護学生の老年期の性意識－老年者のオムツ着用の弊害から波及する問題－	共著	平成20年3月	岐阜医療科学大学紀要　第2号 P21－31	オムツ着用」に関連してSD法及びRLによる内容を質的に分析した。結果は高齢者のオムツの弊害によって蒸れ、皮膚炎などによって局所の痒み部分を掻く行為を自慰行為と誤認しやすい。学生は先入観でなく、高齢者の行動の情報収集を十分行う必要性に関する表現が多かった。学生は知識をえることで先入観は肯定的なイメージは変化した。 共著者：松村三千子、上平公子、泉川孝子　安藤邑惠 本人担当分：研究全般に関するスーパーバイズ
44.看護学臨地実習記録の内容分析と課題―ICFの視点から考える看護の展開― （査読あり）	共著	平成21年3月	岐阜医療科学大学紀要　第3号 P29－35	介護老人保健施設の看護職4名と介護職4名にICF（国際生活機能分類）における「活動と参加」領域に対する認識についてのインタビュー調査を質的に分析を行った。結果、看護職は利用者の情報収集・アセスメントを充実させる視点が強く、介護職は生活の直接ケアに重点をおきながらも安全で楽しく過ごせることへの視点が強いことが分かった。 共著者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、計画書作成、調査票考案、調査実施、データ分析、スーパーバイズ

45. ICFにおける「心身機能・身体構造」の領域に対する看護職と介護職の認識の違い -介護老人保健施設のケア実践者に対するインタビュー調査から-	共著	平成21年3月	岐阜医療科学大学紀要第3号 P29-36	老人保健施設の看護職と介護職に対するインタビュー調査からICFにおける「心身機能・身体構造」の領域に対する看護職と介護職の認識の違いが明らかにするため研究を行った。1年以上介護老人保健施設に勤務する看護職4名及び介護職4名を対象にした。 「心身機能・身体構造」に該当する看護職の語彙数は429，介護職は190であった。看護職は，「心血管系・血液系・免疫系・呼吸器系の機能」に関する語彙数が最も高く，医療的な側面からのサポートに関する視点が強かった。介護職は「消化系・代謝系・内分泌系の機能」に関する語彙数が最も高かった。食事摂取に関することや排泄（排尿）に関することは日々の生活に欠かせない分野への直接的な支援･援助に関する視点が強かった。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析、スーパーバイズ
46. ICFにおける「活動と参加」の領域に対する看護職と介護職の認識の違い～介護老人保健施設のケア実践者に対するインタビュー調査から～	共著	平成21年3月	岐阜医療科学大学紀要第3号 P37-48	ICF における「活動と参加」の領域に対する看護職と介護職の認識の違いが明らかにするため研究を行った。1 年以上介護老人保健施設に勤務する看護職 4 名及び介護職 4 名を対象にインタビュー調査を行った。 「活動と参加」に該当する語彙数は看護職 541 語彙数，介護職 430 語彙数であった。「活動と参加」のケア内容は，介護老人保健施設における看護職と介護職は共通した視点と異なる視点があることが分かった。介護老人保健施設におけるさまざまな療法への関心は看護職が高いことは，高齢者の現在ある機能を維持・更新させるための療法への期待として考えられる。これらの療法は認知症高齢者への周辺行動を沈静化させるためにも活用されていることが多く治療に重きを置く医学モデルの思考が伺える。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ

47　加齢・障害擬似体験を活用したアクティビティ企画運営演習の学習効果　（査読あり）	共著	平成21年3月	日本老年看護学会誌 Vol13,(2) P87 - 96	研究目的は、老年看護学演習「アクティビティの企画運営」を受講した看護学生（2年生）42名の課題レポートをもとに学習内容を質的に分析し、演習効果と課題を明確にすることである。学習内容は「参加高齢者が持っている力を生かすための支援」「参加高齢者の安全を確保するための支援」「アクティビティを楽しめなかった原因」、「参加高齢者間の交流を促進するための支援」「アクティビティにおける看護の役割」の５カテゴリーが形成された。演習効果は、演習後の意見交換によって看護者、高齢者、観察者役割体験よって達成できなかった企画運営について気づくことができた。課題は、安全確保の支援、高齢者間の交流促進の内面的アプローチ、意図的、効果的に高齢者が持っている力を生かすための教育的支援の必要性が明らかになった。 共著者：服部紀子、安藤邑惠、青木律子 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ
48. 介護老人保健施設におけるケア実践者の離職意向～看護職と介護職の認識の違い～ （査読あり）	共著	平成21年4月	第 39 回日本看護学会論文集-看護管理- P108-110	本研究は，介護老人保健施設における看護職と介護職の離職意向の違いを調査し，効果的な労働環境改善方法を検討するための基礎的資料を得ることを目的とした。郵送法による質問紙の返却があった看護職48名（96.0%）・介護職44名（88.0%）を分析対象とした。介護職の約半数は離職を考えたことがあった。「働くにあたっての労働環境」は看護職と介護職の意見が異なり，看護職では『ケアに対する施設の方針との相違』が最も多かった。「ケア実践におけるケアの考え方」の『医療機関ではない老健での医療のあり方に対する戸惑い』からも看護職が目指すケアが実施できないジレンマが伺える。「他のスタッフ及び利用者との関わり」は他職種との連携の悪さを示しているが，介護職は意識していないという認識のずれも示した。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ

49	介護老人保健施設における認知症ケアに対する職場教育の課題について	共著	平成22年3月	岐阜医療科学大学紀要第4号 P27-32	本研究目的は介護老人保健施設における認知症ケアに対する職場教育の課題を看護職と介護職の視点から明らかにすることである。対象者1,000名（看護職500名，介護職500名）のうち、看護職28名（5.6%）、介護職29名（5.8%）の「認知症ケアの職場教育」に関する自由記述の回答を質的な分析対象とした。一文一義の語彙数は看護職77、介護職69であり，「組織のスタイルと構造」看護職43（55.8%）・介護職45（65.2%），「認知症教育のあり方」看護職34（44.2%）・介護職24（34.8%）の２つの領域となった。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子 本人担当分：研究企画、調査計画、データ収集・分析、スーパーバイズ
50.	看護学生における高齢者理解の構造-ライフヒストリーのインタビューを基にした内容分析-（査読有）	共著	平成22年2月	教育医学 55 巻 3 月	看護学生における高齢者へのライフヒストリーのインタビューによる高齢者理解の構造を明らかにすることを目的とし，看護学生 20 名のインタビューから「高齢者に対する印象や学生の考え」について内容分析をした。文脈単位は 261，記述総数は 444。分析の結果、40 サブカテゴリーから 10 カテゴリーが形成され，さらに 4 つの領域に分析できた。＜高齢者の過去に関する内容＞，＜高齢者の現在に関する内容＞，＜学生が抱いた高齢者像＞，＜学生自身が自分のあり方を考える＞であった。結果、学生の高齢者理解のプロセスは、①時間軸として「過去から現代へ…そして未来へ（時間軸）」，②相互作用として「関わり合うことによって生まれる学び（相互作用）」の 2 方向から成立していることが明らかになった。 共同研究者：小木曽加奈子、安藤邑惠 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ

51　介護老人保健施設入所者の介護に対する家族の現状と求められる役割について-介護老人保健施設に勤務する看護職の視点から-（査読有）	共著	平成22年4月	第 40 回日本看護学会論文集-地域看護- P154-156	研究目的は、介護老人保健施設入所者の家族の現状と,求められている役割を看護職の視点から明らかにすることである。アンケート回答 309(61.8%)名のうち,「家族との関わり」に関する記述があった27(5.4%)名の自由記述を質的分析した。看護職の平均年齢±SD は，46.51±7.19 歳であり，女 27 名（100.0%）。回答内容を一文一義とし，総数の 64 語彙は 5 カテゴリーを形成し，さらに,「介護が必要な高齢者の生活の場所」と「在宅生活の難しさ」の 2 つの領域となった。現在の高齢者の生活を支える社会制度下では，在宅での家族による介護には限界があり,施設の利用が高齢者の終の棲家として選択されている場合が多いことが明らかとなった。 共同研究者：山下科子,小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ
52. 介護老人保健施設におけるケアスタッフの仕事全体の満足度・転職・離職の要因：職務における9つの領域別満足度との関連を中心に（査読有）	共著	平成22年12月	社会福祉学 51 巻第 3 号 P103-118	本研究目的は，介護老人保健施設のケアスタッフの仕事全体の満足度･転職・離職の要因を9つの領域別満足度との関連を中心に明らかにすることである。看護職249票（49.8%）・介護職284票（56.8%）を有効回答。ロジスティック回帰分析において，看護職では,仕事の満足度は9つの領域の中の『業務の内容』と『労働条件』に関係があり，介護職では，『業務の内容』・『労働条件』・『職場における管理』に関係性がみられ，転職は，両職種ともに同じ傾向がみられ，『職業に対する誇り』に関係性がみられた．両職種とも職務満足度の傾向は類似性があり，『業務の内容』と『労働条件』に関係がみられ，転職や離職の意思決定に影響があることが示唆された。『職場における管理』が離職に関係性があることを示した。 共同研究者：小木曽加奈子、阿部隆春，安藤邑惠，平澤泰子 本人担当分：研究企画、データ収集・分析、スーパーバイズ

53	ICFの視点に基づく高齢者ケアプロセスの実践	共著	平成22年11月	日本福祉図書文献学会誌第9号 P139-142	本書は平成19年度財団法人ユニベール財団の研究助成を受けた調査研究の過程で得られた見地を、高齢者ケアに関わる人々から高齢者ケアプロセスについて実践的で活用し易い書籍として編纂した。高齢者のQOLを保証する専門職として，看護師と介護福祉士を目指す学生等にとって，高齢者ケアプロセスの展開を身につけることは必修である。また看護職・介護職がお互いのケアの専門性を尊重し，連携ができることをねらい，ICFという共通言語を用い双方が認識できることを重視し，高齢者ケアプロセスが理論体系を踏まえて展開できることを目的とした。 共同研究者：安藤邑惠、小木曽加奈子 本人担当部分：編纂計画、執筆計画、編集作業
54	国際生活機能分類に基づく第1レベルの分類による高齢者ケア実践　（査読あり）	共著	平成23年3月	教育医学56巻3号 P283-291	研究目的は､介護老人保健施設における高齢者ケアに対する看護職と介護職の実践内容を ICF に基づく第１レベルの分類を用い特徴を明らかにすることである｡アンケート調査により看護職 249 票(49.8%)･介護職 284 票（56.8%）を分析した。心身機能・身体構造の領域でにおいては，看護職は，精神機能のアセスメント・尿失禁の種別の把握と適合したケアの選択・皮膚の観察とトラブル予防に関するケア実践が多かった。介護職は，高齢者の感覚機能や心疾患の状態を把握し,具体的なケアに結びつける傾向があることがわかった。 共同研究者：小木曽加奈子、阿部隆春，平澤泰子，安藤邑惠 本人担当分：研究計画、調査計画、考察等スーパーバイス。
55	介護老人施設で暮らす軽度認知症高齢者の日常での経験 （査読あり）	共著	平成23年3月	横浜看護学雑誌 VOL4(1)63-70	介護老人施設で暮らす軽度認知症高齢者の日常での経験内容を明らかにすることを目的とし､5人の対象者に半構造化面接を実施し、質的帰納的分析を行った。結果、「世話になって生活するしかない」、「安心して暮らせる」、「出来るだけ世話にならずにできることをする」、自分の「行動の意味を分かってもらえないとしている」という経験をしている。対象者は新しい自分らしさをつくりだす途上であり、ケアに当たるものはそれを見出す支援の必要性が示唆された。 共著者：服部紀子、安藤邑惠、中里知弘、池田沙矢香、青木律子 本人担当部分：研究計画の企画、デ－タ分析。

56	Moore機能的認知症評価尺度による認知症高齢者のBPSDの変化 -認知症の症状に関する機能評価尺度を用いて-	共著	平成23年3月	岐阜医療科学大学紀要5号 P9-19	目的は中程度認知症高齢者7人を対象にBPSD変化を生活の中での変化を知るためにMoore認知症評価尺度を用いて調査した。結果「排泄」に関連するケアは増加、感情のコントロールに関する内容は減少傾向に、「徘徊」に関する内容はケア介入によって軽減する傾向にあることが分かった。 本研究は日本生命財団助成金による研究の一部である。研究代表者：小木曽加奈子、 共著者：安藤邑恵,阿部隆春、平澤泰子、山下科子 本人担当分：研究計画案策定、調査介入、スーパーバイズ。
57	認知症高齢者のケアに対する「環境因子」に関する看護職と介護職の認識の違い -介護老人保健施設のインタビュー調査から-	共著	平成23年3月	岐阜医療科学大学紀要5号 P1-8	介護老人保健施設の看護職と介護職に「環境因子」に関するケアについての認識の違いを明らかにすることを目的とし4名にインタビューを行い、質的分析した。看護職は認知症ケアに関わる介護職に苦手意識を持っている。介護職は自然環境や人に対して肯定的な態度を示して入ることが分かった。 本研究は日本生命財団助成金による研究の一部である。研究代表者：小木曽加奈子 共著者：安藤邑恵, 本人担当分：研究計画案策定、調査介入、スーパーバイズ。
58	DVD作成 陰部洗浄とおむつ交換（研究題名：基礎看護教育の技術項目を自己学習できるシミュレーション教材の構築）	共著	平成23年3月	平成21年度科学研究費補助金（若手研究）の研究助成金にて作成 課題番号：20791660	排泄物としての尿（緑茶）、便（チョコレート＋小麦粉）が付着している高齢者の陰部洗浄とおむつ交換の場面を老年看護の視点からDVDを作成した。本DVD は事例設定、画像学習前ワークと画像学習後ワークの3部構成としてプログラミングを行い、技術を確認しながら学習ができる。 研究代表者：渡邊美幸、研究協力者：安藤邑恵、小木曽加奈子、樋田小百合、 本人担当分：研究計画案作成、技術行動プロセスの指導、スーパーバイズ

59	認知症ケアにおけるケア実践者のケア充実感と職務満足度の関係について -ICF の視点に基づく「認知症ケア内容尺度」の開発-	共著	平成23年9月	平成 21・22 年度財団法人日本生命財団助成金 A4版　本文121頁、資料43頁	ケア実践者が困難を感じている認知症高齢者像に焦点をあて、全人的なケアの思想と手法を ICF の視点から分析し「認知症ケア内容尺度」を策定した。本研究は，介護老人保健施設における看護職と介護職の認知症ケアとケアの充実感・職務満足度・離職志向との関連性を知ることを目的とし 5 つの調査を実施した．ケア充実感の傾向は，両職種ともに同様な傾向がみられ，認知症ケア実践とケア充実感は関係があることが明らかになった． 職務における相関関係は，すべてに相関関係がみられ，認知症ケア充実感の各質問項目間も強い相関関係がみられた．看護職，介護職ともに仕事の全体満足度と転職・離職意向は，マイナスの相関を示した．また，看護職，介護職とも転職意向と離職意向はプラスの相関がみられた．仕事の全体満足度が高いと転職・離職意向が低くなり，転職の意向と離職の意向は関係があることが示された． 研究代表者：小木曽加奈子 研究分担者：安藤邑恵，阿部隆春，平澤康子，山下科子、研究協力者：今井七重、佐藤八千子、樋田小百合、祢宜佐統美、棚橋千弥子、柴田由美子 本人担当分：研究計画、調査介入、スーパーバイズ。
60	介護老人保健施設における認知症高齢者のBPSDに対する認識の傾向 -デルファイ法を用いた意見の収束の試み-	共著	平成26年7月	ソーシャルワークぎふ　第20号 62-73 岐阜県社会福祉士会誌	本研究目的は、認知症の「易怒・興奮」「拒薬・拒食・拒絶」「行動的攻撃（暴力）」「不潔行為」について利用者の良い反応を得られたケアに着眼し、デルファイ法を用いて3段階の意見集約を行った。対象者は老人看護学分野の研究者8名とした。結果「行動的攻撃（暴力）」の具体的な言動をどのようにとらえるかについては十分な意見収束は得られなかった。 研究協力者：小木曽加奈子、安藤邑恵、佐藤八千子、 本人担当分：研究計画、調査介入、スーパーバイズ。

61	地域で暮らすことを視野に入れた認知症高齢者への家族の関わり -介護老人保健施設における看護職と介護職の認識-	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要第7号 P35-45	研究目的は、介護老人保健施設における認知症家族への関わりに対する看護職と介護職の認識を分析することにより、在宅転帰に対する課題を明確にすることである。対象者は看護職21名、介護職23名に「認知症高齢者への家族のかかわり」に関する自由記述を、テキストマインド法を用いて分析した。結果、看護職は少ない家族情報のなかで家族の疾患の理解不足やクレーム等について対応し、介護職は家族が疾患として理解できるよう家族支援を行っており、家族のエンパワメント効果をもたらし、在宅転移の可能性を示唆した。 共著者：安藤邑惠　小木曽加奈子 本人担当分：研究計画、調査実施、分析、論文作成
62	地域で暮らすことを視野に入れた認知症高齢者への家族の関わり -介護老人保健施設における看護職と介護職の認識-	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要第7号 P35-45	研究目的は、介護老人保健施設における認知症家族への関わりに対する看護職と介護職の認識を分析することにより、在宅転帰に対する課題を明確にすることである。対象者は看護職21名、介護職23名に「認知症高齢者への家族のかかわり」に関する自由記述を、テキストマインド法を用いて分析した。結果、看護職は少ない家族情報のなかで家族の疾患の理解不足やクレーム等について対応し、介護職は家族が疾患として理解できるよう家族支援を行っており、家族のエンパワメント効果をもたらし、在宅転移の可能性を示唆した。 共著者：安藤邑惠　小木曽加奈子 本人担当分：研究計画、調査実施、分析、論文作成
63	医療系大学生の相互依存様式に対する意識 -看護学科,臨床検査学科,放射線学科の比較-	共著	平成26年3月	岐阜医療科学大学紀要第8号 P87-98	研究目的は、医療職を希望している学生に対して、相互依存における意識の在り方の違いの有無を知るために、ロイの適応モデルを基づいた質問調査を行った。対象は看護学科、臨床検査学科、放射選技師学科の同意をえられた1,016名の学生である。結果、3学科共通して相互依存が最も高かった。学科間で有意差のある概念は疎外、関係統合、重要他者であった。看護学科は関係的統合が最も高く、疎外では他学科より高かった。 共著者：藤生君江　中野照代　安藤邑惠　山田小夜子　吉川一枝

64	「その人らしさ」・「関係性」・「個別性」を生かした認知症ケアと職務満足度の関係	共著	平成26年6月	社会福祉科学研究所　第3号 P47-58	研究目的は、介護老人保健施設スタッフの「その人らしさ」・「関係性」・「個別性」を生かした認知症ケアの実践と職務満足度の関係性を知ることである。対象は看護職629名、介護職734名を質問紙調査を行った。結果、認知症ケア実践が高ければ仕事全体の満足度は高い。職種の違いは、看護職では「職業に対する誇り」との関係が、介護職では、「関係性」「個別性」大切にした関わりは「職業に対する誇り」との関連がみられなかった。 小木曽加奈子　阿部隆春　平澤泰子　佐藤八千子　棚橋千弥子　柴田由美子　祢宜佐統美　安藤邑惠　今井七重 本人担当分：研究計画、分析、論文校正　スーパーバイズ
65	看護系大学生の相互依存様式における意識 -学年による比較-	共著	平成27年3月	岐阜医療科学大学紀要第9号 P41-57	研究目的は看護系大学生の身近な人との相互依存に対する意識の強さとその構造をロイの適応モデルを用いて検討する。対象は同意が得られた看護系大学生368名に質問紙調査で行った。結果は平均値による学年比較は、全学年において相互依存が最高値を示し、最低値を示したのは1-3年次生で愛情充足、4年次生では重要他者であった。クラスター分析では学年が進むにつれて、意識変化を反映し、相互依存によって将来の安定しているキャリア継続につながっていることが明らかになった。 共著者：藤生君江　中野照代　安藤邑惠　山田小夜子　吉川一枝　渥美陽子 本人担当分：研究計画、調査実施、分析、論文作成

著書,学術論文等の名称	単著,共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学会発表） 1. 高齢者の福祉サービス動向と課題 -秩父市のケースデータを中心として-	共著	平成元年11月	日本社会福祉学会 第37回全国大会（東京）	秩父市在住の独り暮らし老人の背景,福祉サービスの利用状況,サービスを受ける老人の意識を調査し,民間サービスあり方とその課題について考察している. 共著者：中村孝,安藤邑惠,瀬戸口久美子,三友雅夫 本人担当部分：秩父市のケースデータを中心としてその２.ひとり暮らし老人のニード・サービス部分の分析.
2. 臨床実習における基礎看護技術の展開	単著	平成2年3月	日本看護学校協議会研究会（東京）	准看護師教育における看護技術の学習状況には学校差,個人差があり,一様の教授展開では対応が難しい.看護技術の項目により,自己学習,技術テスト,シミュレーションなど組み合わせている.臨床実習での関わり方についても述べている.
3 介護従事者の適性	共著	平成2年11月	日本社会福祉学会 第38回全国大会（神戸）	特別養護老人ホームに勤務する介護職を対象に介護従事者の適性に,行動特徴,自己像,動機づけ,状況対応行動が関連するという仮説のもとに質問紙を勘案し調査した.行動特徴項目と自己像項目からそれぞれ８因子を抽出した.また因子間の相関をみた.寮母の特徴として,行動特徴の自信的,持続的,固執的と自己像としての決断的,妥協的とが深く関連していることが分かった. 共著者：三友雅夫,瀬戸口久美子,安藤邑惠 本人担当分：介護職のケース分析
4. 臨床実習における基礎看護技術の展開と実習評価	単独	平成3年3月	日本看護学校協議会研究会（東京）	２年課程の学生は准看護師養成所により教育の格差がある.看護の最も基盤となる基礎看護技術の授業計画は入学時准看護学校での習得状況を調査したうえで成立している.授業と臨床実習を一貫したなかで看護の知識,技術,態度をどの様に学ばせているかを述べている.
5. 老親の介護と看護師の就業意識	単著	平成3年7月	第３回日本看護学校協議会学会　（東京）	看護師が自分の老親の介護を引き受けなければならい時,自らの職業を,就業をどの様に考えているかを調査した.現時点では仕事と介護の両立は難しいとしながらも社会福祉サービスを活用し,労働条件の整備がされれば仕事を続けたい.看護師の職業に誇りを持ち自己実現の意欲が高い事が分かった.

6. 在宅老人の医療・福祉ニードとサービス -特別区の事例を中心として-	単著	平成3年10月	日本社会福祉会第39回全国大会　（鹿児島）	都内Ａ区を対象地に設定し,行政既存データによる分析から保健・医療・福祉の問題を量的に明らかにしさらに,要重介護・看護を必要とする在宅障害老人６ケースを疾病の経過,家族関係,障害の状況,医療・福祉ニード,行政サービスの現状などについて分析・考察した.在宅障害老人を取り巻く行政サービスとしての保健・医療・福祉のあり方について検討している.
7. ナースの適性評価基準の検討	共著	平成4年10月	日本社会福祉学会第40回全国大会　（長野）	社会的に要請されているマンパワーの中で看護職にどのような適性が求められるかを行動特徴,自己像からそれぞれ10因子を抽出した.因子間の相関,自己制御性,状対応行動,動機づけ,キャリア間の因子の多重比較をおこなった.看護職の人材を適材適所で活用する上での評価準作りの基礎研究である. 共著者：三友雅夫,中島繁子,安藤邑惠 本人担当分：共著研究につき本人担当部分抽出不可能
8 基礎看護技術の評価の実際・２年課程	単著	平成5年3月	日本看護学校協議会教育研究会　（東京）	基礎看護教育（２年課程）における基礎看護技術の習得過程と評価方法を示し,２年課程の学生が持ちやすい問題を指摘し,指導対策の検討を行った.
9. ナースの資質と養成教育－資質・適性評価基準 －	単著	平成5年9月	日本社会福祉学会第41回全国大会（東京）	看護師養成教育の発展のための前段階として看護職の資質・適性評価基準の検討を先行研究「ナースの適性評価基準の検討」をベースとしてその結果の検討を中心として精度を高めるための追加調査を行い,看護職の適性構成因子の抽出について再検討を行った.適性因子は行動特徴,自己像,動機づけ,状況対応行動の４つで構成している.因子間の相関,多重比較検定等を行った.抽出された因子によって教育効果を高める手掛かりを得た.
10. ケース分析によるナースの適性検討 -看護学生の事例分析を中心に-	単著	平成6年10月	日本社会福祉学会第42回全国大会（京都）	先行研究で明らかになった適性の構成因子から「適性が高い」,「適性が低い」と評価されている学生各３名を適性の構成因である「行動特徴９因子」「自己像９因子」及びYG性格検査,東大式エゴグラム,面接調査を合わせて用いた.適性の高い学生は適性の構成因子がバランス良く保たれている.適性が低い学生は特に自己の信頼性が低く,劣等感を強くもっており,教育・指導に対する示唆が得られた.

11. コミュニティ・ケアの組織化と課題（その２）-ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽ登録利用者と登録未利用者の比較-(筆頭論文)	共著	平成7年10月	日本社会福祉学会第43全国大会　（千葉）	デイサービス登録利用者722名と登録未利用者256名 の生活実態を比較し,現状の問題点を指摘した.登 録利用者より登録未利用者の方が「年齢が高い」,「日常生活動作能力への依存度が高い」,「寝たきり状態」,デイサービス以外の在宅ケアの利用頻度が多かった. 共著者：安藤邑惠,八島妙子 本人担当分：デイサービス登録利用者と登録未利用者の比較の分析.
12. 在宅要援護高齢者のケアマネジメント	単著	平成8年10月	日本社会福祉学会第44全国大会（名古屋）	地域の在宅サービスを受けながら生活している要援高齢者及び介護者３組の現状をアセスメントし,ケアマネジメントに加えることが望ましい機能とその内容を検討したケース研究である.この３組は 家庭介護力「比較的十分」とされているケースであるが,要高齢者の健康レベルが低いとセルフケアは 低く,介護者の体力・知識が十分必要であると言う関係性が分かった.
13. 高齢者地域ケアのマネジメント機能の確立をめざして-横浜地域ケア研究会からの学び-（筆頭論文）	共著	平成8年10月	第55回日本公衆衛生学会（大阪）	研究会活動から横浜市が抱えている地域ケアの課題を検討した.連携システム確立の遅れ,サービス全般に関わる内容・周知・人材 不足,医療と関連した福祉サイドの内容の希薄,行政主流等が指摘できた. 共著者：安藤邑惠,加藤基子,眞船拓子,二見良之本人担当分：横浜地域ケア研究会からの学びの分析
14.在宅療養をしている高齢者のマネジメント－健康問題のアセスメントを中心とした看護機能の検討－	共著	平成8年12月	第16回日本看護科学学会（東京）	4段階の健康レベル(1.健康もしくは安定,2.病状安定もしくは継続療養中,3.病状悪化,4.重症もしくはターミナル)のある在宅高齢者を各2例選択して在宅ケア,アセスメント表を用いて看護を行った.その結果,訪問看護の機能としては健康レベル2～3段階にある高齢者のアセスメントを目的とする観察と経過の変化に関連する観察行為が多かった.又直接的援助内容では介護者の精神的支援の項目が多かった. 第16巻2号　P.208-209 共著者：加藤基子,眞船拓子,安藤邑惠 本人担当分：健康問題のアセスメントを中心とした看護機能の検討

15. 入浴による体温の変化に関する研究　−異なる部位及び湯温による反応の違い−	共著	平成9年7月	第23回日本看護研究学会（福岡）	人体の温度環境適応特性に対する生体反応を知る基礎的研究の一環である. 無拘束環境体温計を用い, 中年女性９名を対象に43℃及び40℃の湯温に入浴をした時の直腸温, 腰部温, 足背温の変化を入浴直後, 10分後, 30分後の推移とその比較し測定部位の特性を確認した. 共著者 : 平井和恵, 青木律子, 安藤邑惠, 五木田和枝, 中馬妙子, 野村明美, 山田艶子, 渡辺浩子 本人担当分 : 異なる部位及び湯温による反応の違い
16. 入浴が生体に及ぼす影響−40℃と43℃の湯温の違いによる直腸温の変化−	共著	平成9年7月	第23回日本看護研究学会（福岡）	人体の温度環境適応特性に対する生体反応を知る基礎的研究の一環である. 無拘束環境体温計を用い, 中年女性９名を対象に43℃及び40℃の湯温に入浴を　した時の直腸温の変化を入浴直後, 10分後, 30分後　の推移とその比較し湯温による生体の反応の違いを　確認した. 共著者 : 中馬妙子, 青木律子, 安藤邑惠,　五木田和枝, 野村明美, 平井和恵, 山田艶子, 渡辺浩子本人担当分 : 40℃と43℃の湯温の違いによる直腸温の変化
17. 入浴が生体に及ぼす影響−40℃と43℃の湯温の違いによる腰部皮膚温の変化−	共著	平成9年7月	第23回日本看護研究学会（福岡）	人体の温度環境適応特性に対する生体反応を知る基礎的研究の一環である. 無拘束環境体温計を用い, 中年女性９名を対象に43℃及び40℃の湯温に入浴をした時の直腸温, 腰部温, 足背温の変化を入浴直後, 10分後, 30分後の推移とその比較し測定部位の特性を確認した. 共著者 : 五木田和枝　青木律子, 安藤邑惠,　中馬妙子, 野村明美, 平井和恵, 山田艶子, 渡辺浩子本人担当分 : 40℃と43℃の湯温の違いによる腰部皮膚温の変化
18. ４℃低温下における体温変化の研究	共著	平成9年7月	第23回日本看護研究学会（福岡）	人体の温度環境適応特性に対する生体反応を知る基礎的研究の一環である. 無拘束環境体温計を用い, 中年女性９名を対象に４℃の低温環境実験室に入った時の直腸温, 腰部温, 足背温の変化を入室直後, 10分後, 30分後の推移とその比較し測定部位の特性を確認した. 共著者 : 渡辺浩子, 安藤邑惠, 野村明美, 青木律子, 中馬妙子, 平井和恵, 山田艶子, 渡辺浩子 本人担当分 : ４℃低温下における体温変化の分析

19. 国際救急医療チームと看護の役割（筆頭論文）	共著	平成9年7月	第12回日本国際保健医療学会　（茨城）	発達途上国を中心とした海外の大規模災害に緊急医療活動を行うJMTDRにおける看護職がどのように関わってきたかを過去の記録から抽出した.過去15年 に看護職が参加したのは23回,地域では中近東が最も多く,援助目的では自然災害が最も多く,中でも地震,飢餓が多かった.派遣に関わる看護職の役割,教育,処遇等を考える基礎的研究である. 共著者：安藤邑惠,金田信子,戸塚規子,森淑江本人担当分：看護の役割に関する分析,発表
20　青年海外協力隊看護職隊員の派遣要請に関する研究Ⅰ-派遣要請の分析－	共著	平成9年7月	第12回日本国際保健医療学会　（茨城）	国際医療協力において相手国からどのような看護職が求められてきたかを明らかにするための基礎的研究である.過去10年の派遣延べ数は791名,要請地域ではアジア地区が最も多く,職種では看護婦が最も多く,業務経験では２～10年であった.求められている業務内容は母子保健活動が多かった.共著者：根本恵子,柳澤理子,田中博子,矢嶋和江,安藤邑惠,金田信子,戸塚規子,森淑江本人担当分：データ収集,分析
21　青年海外協力隊看護職隊員の派遣要請に関する研究Ⅱ －要請に対応した隊員の分析－	共著	平成9年7月	第12回日本国際保健医療学会　（茨城）	同上,研究Ⅰ-派遣要請の分析－で行った分析に基づき要請に対応した隊員の分析を行った.要請に対応した隊員は570名,充足率72.1%,派遣数はアジア地域が多く,職種は看護職79.0%の充足率であった.最も少ないのは看護教員で充足率33.3%であり,充足率の改善の工夫が求められていることが明らかになった. 共著者：根本恵子,柳澤理子,田中博子,矢嶋和江,安藤邑惠,戸塚規子,森淑江 本人担当分：要請に対応した隊員の分析
2　看護学生の老人施設 2..実習前後での高齢者に対する態度の変化-効果的な老人実習に向けての考察－	共著	平成9年8月	第28回日本看護学会（看護教育）（大阪）	看護学生115名を対象に学生の老人施設実習前後での高齢者に対する態度の変化に影響を及ぼした要因として学生の生活背景,実習での体験との関連を検討し,高齢者及び高齢者ケアに対する肯定的な態度をはぐくむような実習のあり方について検討した.学生が高齢者の日常生活の援助を実際に体験することによって,高齢者を肯定的な認識に変化した.さらに高齢者の能力を実感できる場面を設定することも有効であることが分かった. 共著者：平井和恵,中馬妙子,安藤邑惠,松原純子本人担当分：効果的な老人実習に向けてのデータ分析・考察.

23. ケアマネジメント機能の分析Ⅰ-因子構造と事例- （筆頭論文）	共著	平成9年10月	第56回日本公衆衛生学会（横浜）	在宅介護支援センター1475施設を対象に45項目の尺度を用いて因子し分析を行った結果,ケアマネジメント機能の因子構造は①連携システム,②ケアの継続,③ケアプラン④業務基準,⑤ｲﾝﾌｫｰﾏﾙ・ｹｱ,⑥ケース発見であった.これを元に脳血管性麻痺患者が設置母体の違いによる支援センターでのケアマネジメント機能がどの様に異なるかを検討している. 共著者：安藤邑惠,八島妙子 本人担当分：因子構造と事例分析
24. ケアマネジメント機能の分析Ⅱ-ケアマネジメント機能に影響する宅介護支援センターの要因-	共著	平成9年10月	第56回日本公衆衛生学会（横浜）	分析から抽出した６因子はケアマネジメント機能の研修,権限,母体サービス母体以外のサービス,評価,ケース会議とどのように影響しあっているかを検討した.結果,評価はどの因子にも強い影響を持っている.研修,権限,ケース会議はこれに続くことが分かった. 共著者：八島妙子,安藤邑惠 本人担当分：ケアマネジメント機能に影響する宅介護支援センターの要因分析
25. オーストラリアの高齢者ケアー①ACATー	共著	平成9年10月	第56回日本公衆衛生学会（横浜）	オーストラリアの高齢者対策の3本柱,ｳｴﾙﾈｽ戦略,ﾘﾊﾋﾞﾘ,地域ケアにおいて施設ケアと在宅ケアが統合され専門職集団のACATによって経済的・効率的マネジメントがされていることを紹介している. 共著者：生田清美子,杉本正子,神保会里, 安藤邑惠 本人担当分：ACATの機能と役割の分析・考察
26. 看護学生の高齢者に対する態度研究-特別養護老人ホーム実習前後の変化から-	共著	平成9年10月	第28回日本看護学会（老人看護）（松山）	看護学生105名を対象に老人ホーム実習前後の高齢者への関心の有無とケアに対する態度に関連した尺度54項目を用いて検証した.高齢者に関心がある学生は高齢者を肯定的に認識し,接近性の高いケアを好む.実習前より実習後の方が高齢者への関心が高くなっており,実習前の動機付けと実習内容は態度と深く関係があり,指導上の示唆が得られた. 共著者：中馬妙子,平井和恵,安藤邑惠,松原純子本人担当分：特別養護老人ホーム実習前後の変化の分析・考察.

27. 在宅介護支援センターの現状分析 （その１）	共著	平成9年10月	日本社会福祉学会第45全国大会　（京都）	在宅介護支援センターの実態を1475施設長を対象に活動状況の特徴を把握した.運営主体は特養ホーム,老健施設の併設が多く,地域的には農村漁村,小都市の設置が多かった.利用者は寝たきり,痴呆高齢者が多かった.施設長は兼任が多く,権限は緊急時のみ利用決定が行えるが殆どは行政の承認・指導の枠にはめられている状況が浮かび上がった. 共著者：越智久恵,安藤邑惠,八島妙子 本人担当分：分析,論文作成
28. 在宅介護支援センターの現状分析（その２）-ケアマネジメントの構成因子- （筆頭論文）	共著	平成9年10月	日本社会福祉学会第45全国大会　（京都）	1475施設の在宅介護支援センターに勤務している実務者を対象に45項目のケアマネジメント機能尺度を作成し,因子分析の結果６因子を抽出した.良く機能している因子は,ケアプラン,ケアの継続,ケース発見であり,続いて連携システム,業務基準,最も機能が弱かったのはインフォーマル・ケアであった. 共著者：安藤邑惠,越智久恵,八島妙子 本人担当分：ケアマネジメントの構成因子の分析,論文作成
29. 在宅介護支援センターの現状分析（その３）-ケアマジメントに影響する要因-	共著	平成9年10月	日本社会福祉学会第45全国大会　（京都）	在宅介護支援センターの活動状況がケアマネジメント機能にどのように影響をしているかをパス解析モデルで構築した.研修はケアマネジメント機能,継続,母体以外のサービスに影響を与えている.権限は継続に強い影響をあたえていた. 共著者：八島妙子,安藤邑惠,越智久恵 本人担当分：ケアマネジメントに影響する要因の分析,論文作成
30. 老人クラブに参加する高齢者の「主観的幸福度」について -Visual An alogue Scaleを用いて-	共著	平成10年10月	第29回日本看護学会（老人看護） （於高知県民文化会館）	高齢者の幸福感は,日常生活行動,情報関連状況,社会背景と,どの程度関与しているかを Visual An alogue Scaleを用い,老人クラブに所属する65歳以上の高齢者89名を分散分析した.自立度が高い人ほど満足感は高く家族関係が親密で,集団行動に積極的な人ほどVisual Analogue Scaleの得点が高い.老人クラブは高齢者の自立度を維持,増進に寄与できる社会的役割があることが分かった. 共著者：中馬妙子,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,分析,論文作成

31. オーストラリアの高齢者ケア －残存機能を引き出す痴呆症ケアー	共著	平成10年10月	第57回日本公衆衛生学会（岐阜）	オーストラリアの痴呆症専門ケア施設において参加観察法を用いて行った.施設の理念は,自立を育み,その人らしく生活できる環境提供,持っている能力を発揮できることにあり,その具現化によって高齢者は満足した生活を送っている.ケアは多面的に行われ日本の高齢者ケアへの示唆を得た. 共著者：古川典代,安藤邑惠,生田清美子 本人担当分：データ収集,分析,論文作成
32. The Comparison between Australia with Japan in which the life style of the main care giver co-residence with Alzheimer's patients（アルツハイマー患者と同居している介護者の生活状況に関する日豪比較）	共著	平成11年9月	‘99オーストラリア国際アルツハイマー研究学会（於PERFORMING ARTS CENTRE IN AUSTRALIA）	本研究の目的は,日豪のアルツハイマー患者と同居している介護者の生活状況を比較し,その要因を明らかにすることである.方法は日豪の訪問調査で得られたアルツハイマー患者の中からＭＭＳ尺度による痴呆レベル及び主介護者と家族関係が類似する８事例を買い物,身だしなみ,入浴,排泄,活動,情緒の６生活機能の及び医師の診察,訪問看護,ホームヘルプ,デイケア,ショウトステイ,ボランティアの６社会資源について比較した.結果,ボランティアの活用は主介護者の健康維持に,貢献しているが日本の主介護者は社会資源の活用が少なく生活満足度が低い.日本では男性の主介護者の介護教育・研修の機会が少なく女性の主介護者に負担が大きいことが分った 共著者:眞舩拓子,安藤邑惠,前田信雄,小林理恵子,Azusa Sema,Richard Fleming 本人担当分：データ収集,分析,論文作成
33. THERMAL REACTIONS ON WOMEN ON THE CHANGE IN ENVIRONMENTAL TEMPE RATURE（環境の温度変化に対する女性の生態反応に関する研究）（筆頭論文）	共著	平成11年11月	第２回人間－生活環境国際会議（横浜）	平均年齢39歳,女性７名を対象に,人が25℃から4℃の環境におかれた時の体温を中心にバイタルサインの変化を経時的に取り,看護提供時に関わる示唆を得ることを目的とした.直腸温は安定.腰部温は環境の温度変化に連動するが4℃の環境解除後20分以内に平常温に回復.皮膚末梢温は環境温と密接に連動し,4℃の環境解除30分後も平常温に回復しない.血圧,脈拍も皮膚温と相関関係があり温度変化に応じた着衣への配慮の必要性の示唆を得た. 共著者：安藤邑惠,野村明美,青木律子,五木田和枝,中馬妙子,渡辺浩子,松原純子 本人担当分：データ収集,分析,論文作成

34. 高齢者の暖房方法と乾燥感との関連について	共著	平成12年9月	日本建築学会学大会学術講演概集（P99～100）（東京）	関東地域の高齢者181人に冬期における暖房方法,住宅の温熱感と乾燥感,健康状態について調査を行った.暖房機器は移動式の物が多く,1種ではなく複数使用している.皮膚痒みは70%の人が訴え,風邪引き易さについても30%人が訴えており,皮膚の乾燥に対処していた人は75～82%あり皮膚が弱いとか回答しているものが80%近くいた.暖房によると乾燥環境と健康の関連が具体的になった.（平成12年度住宅総合研究財団の研究助成による研究の一部） 共著者:高橋啓子,五十嵐由利子,安藤邑惠,大渕律子,大森淳一,北原博幸,橋本修左,梁瀬度子 本人担当分：企画・データ収集・分析・論文作成
35. 足浴時における湯温と浸ける足の深さが心身に及ぼす影響（筆頭論文）	共著	平成12年11月	第24回人間－生活環境系シンポジウム報告集 P189～192 （東京）	40℃,43℃湯温と浸ける足の深さを７cm,16cmの組み合わせによる足浴の効果は浸ける深さが同じ場合は湯温が高い方が快適である.また湯温は同じ場合は浸ける深さが深いほど保温効果がある.循環動態からは湯温が低い方が変動が少なく,穏やかであることが分かった. 共著者:五木田和枝,野村明美,結城瑛子,渡辺浩子,松原純子,川島美勝 本人担当分：企画・データ収集・分析・論文作成
36. 病人の看護と高齢者の介護-高齢者の特徴を理解した睡眠への援助-	単著	平成13年1月	第2回日本睡眠環境フォーラム　（横浜）	高齢者の睡眠障害とその援助について述べている.高齢者の身体的特徴からは各機能の低下・衰退によりホルモンや免疫機能のバランスが崩れ,生活リズムの変調によって睡眠・覚醒のリズムが乱れる.これは生体だけでなく,心身への大きく影響をもたらし高齢者においては容易に痴呆症に移行する.
37. 冷足浴が体温・血圧・脈拍・心身等に及ぼす影響についての検討	共著	平成13年6月	第27回日本看護研究学会（金沢）	10℃冷水に16cm足浴を10分間浸けることによる生体反応の変化を知る.直腸温の変化はほとんどないが手背では30分後に0.7℃上昇し心地良くなってくる.血圧は足を浸けた直後,収縮期血圧も拡張期血圧も上昇し,刺激が大きいことが分かった.「主観的反応」としては冷却部位の疼痛が５～６分で軽減することが分かった. 共著者：野村明美,安藤邑惠,青木律子,五木田和枝,結城瑛子,中馬妙子,渡辺浩子 本人担当分：企画・データ収集・分析・論文作成

38.　５分間の「高齢者疑似体験」を通して学生が捉えた高齢者の状態－ヘンダーソン看護論の枠組みから見た学習内容－	共著	平成15年8月	第34回日本看護学会 －看護教育－ （金沢）	高齢者理解を支援する１つの方法である. 装具をつけ加齢に伴う身体的な変化を擬似的に体験し, 高齢者の心理や生活に及ぼす影響を実体験の中から理解し看護者としての配慮について学習することを目的としている. 本研究は５分間という制約の中で学生が高齢者の状態をどのように捉えているかを質的な分析で行った. 分析の視点はヘンダーソン看護論の枠組みにそって行った. 結果,「社会的ないし文化的状態」「感覚機能」「加齢変化」の関連する内容が多かった. 学習内容が少なかったのは「疾患・障害」であった. 体験で学習できない内容は講義の中で補足する必要があることが示唆された. データの使用は承認が得られた116名について分析した.（平成14年度横浜市立大学研究奨励交付若手人材育成推進費によって行った） 共著者：有田秀子, 服部紀子, 安藤邑恵 本人担当分：研究企画・データ収集・分析
39.　５分間の「高齢者疑似体験」の学習内容の分析（筆頭論文）	共著	平成15年11月	日本老年看護学会第８回学術集会 （神戸）	高齢者理解を支援する１つの方法である. 装具をつけ加齢に伴う身体的な変化を擬似的に体験し, 高齢者の心理や生活に及ぼす影響を実体験の中から理解し看護者としての配慮について学習することを目的としている. 本研究は５分間という制約の中で学生が高齢者の状態をどのように捉えているかを質的な分析で行った. 分析の視点はヘンダーソン看護論の枠組みにより, 常在条件と病理的状態, 及び援助の内容は基本的欲求項目によって行った. 結果,「身体的能力」「感覚機能」の内容が多かった. 「病理的状態」の内容は少なかった. 高齢者援助の内容は「安全」や「危険回避」に関する内容が多かった. 体験は具体的な内容の学習は多くできるが抽象的な内容は少なく, 講義や他の演習との関連も視野に入れた指導上の配慮を要することが指摘された. データの使用は承認が得られた116名について分析した.（平成14年度横浜市立大学研究奨励交付若手人材育成推進費による研究成果の一部である） 共著者：服部紀子, 青木律子, 安藤邑恵, 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析,

40. 擬似体験を通して学生が捉えた援助を必要とする高齢者の状態	共著	平成16年12月	第24回日本看護科学学会学術集会（東京）	本研究目的は,学生が高齢者擬似体験で捉えた援助を必要とする高齢者の状態を明確にし体験方法を検討するものである.研究手法は質的分析を行った.結果は移動動作,感覚機能,加齢変化,気質・情動に関連する内容を捉え,高齢者のペースに合わせる,安全な方に導く,危険因子を予測して注意を払う声かけを行うことを援助内容としていた.体験方法に関する考察は,高齢者の心理・社会面にを織り交ぜた体験方法を講義とともに構築する必要があることが分かった.平成14年度横浜市立大学研究奨励交付若手人材育成推進費（代表者：有田秀子）によって行った成果の一部である 共著者：有田秀子,服部紀子,安藤邑恵 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
41. 老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った援助内容の分析－「活動」への援助に焦点を当てて	共著	平成17年8月	第36回日本看護学会－看護教育－（宇都宮）	老年看護学実習で学生がケアにおいて「活動」の援助場面で困ったと感じる状況を把握し対処法や指導法について考察する.同意が得られた15名の自由記述を意味内容ごとに分析した.結果,活動の直接援助場面では,学生はその時の対処法は,看護師と一緒に場面に参加したり,相談している.生活体験が少ない学生には知識と共に学内演習をはじめ体験場面を設定することの重要性がわかった. 共著者：安藤邑恵,服部紀子,青木律子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文
42 老年看護学臨地実習で学生が「困った」と思った援助内容の分析－「飲食」への援助に焦点をあてて	共著	平成17年8月	第36回日本看護学会－看護教育－（宇都宮）	老年看護学実習で学生が「飲食」の援助場面で困ったと感じる状況を把握し対処法や指導法について考察する.同意が得られた15名の自由記述を意味内容ごとに分析した.結果,飲食の直接援助場面では,学生はその時の対処法は,看護師と一緒に場面に参加したり,相談している.生活体験が少ない学生には知識と共に学内演習をはじめ体験場面を設定することの重要性がわかった. 共著者：服部紀子,青木律子,安藤邑恵 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

43. 老年看護学臨地実習で学生が「困った」看護援助の分析－「排泄」への援助の内容とその対処	共著	平成17年8月	第36回日本看護学会－看護教育－宇都宮（17. 8.4）	老年看護学実習で学生が「排泄」援助場面で困ったと感じる状況を把握し対処法や指導法について考察する. 同意が得られた15名の自由記述を意味内容ごとに分析した. 結果, 排泄の直接援助場面であり, その時の対処法は看護師と一緒に場面に参加したり, 相談している. 生活体験が少ない学生には知識と共に学内演習をはじめ体験場面を設定することの重要性がわかった. 共著者：青木律子, 安藤邑恵, 服部紀子 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, スーパーバイズ
44. 初学者が採血技術を習得するための学習支援教材の開発 －人工皮膚・血管装着モデル教材の刺入圧測定－	共著	平成17年7月	第31回日本看護研究学会, 札幌（17. 7. 21）	市販の採血モデルは材質が硬く注射針の刺入時に抵抗がある. 血管に近い感触を理解させ, 安全に訓練ができる人体に近い教材を開発することを目的とした. 材料はシリコーン管を用いて刺入圧を測定し人体への刺入圧に近い結果が得られることが確認できた.価格も１万円以内と安価にできることが分かった. 共著者：野村明美,結城瑛子, 安藤邑恵,山口みのり 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, スーパーバイズ
45. 老年看護学臨地実習で学生が「移乗介助」で困ったと思っている内容の分析 - 脳血管疾患の左麻痺高齢者への援助に焦点を当てて -	共著	平成18年8月	第37回日本看護学会 - 看護教育 - 松山（18. 8.3）	脳血管疾患による左麻痺のある高齢者の「移乗介助」に関して学生が困ったと思っている内容を分析し, 授業方法の検討資料とする. 看護系短大生で同意の得られた17名のレポートを質的に分析した. 困った状況は, 患者の姿勢の「不安定での介助姿勢」でアセスメントから計画が適切でなかった. 対処法は, 指導者や教員から指導を受けて解決に向けている. 授業では学生が, 障害がもたらす重心の不安定さを理論と実践でイメージでき, 安全が確保できる工夫を指導展開が必要である. 共著者：安藤邑恵, 服部紀子, 青木律子, 島田今日子 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, 論文作成

46. 老年看護学臨地実習で学生が困った清潔援助の分析	共著	平成18年8月	第37回日本看護学会‐看護教育‐松山 （18. 8.3）	「清潔」援助に当たって学生の「困った体験」に焦点をあて実習指導の示唆を得ることを目的とし,看護学生で同意の得られた16名のレポートを質的に分析した.困っているのは「清潔」と患者の状態,残存機能の活用や清潔による疲労とADLの拡大など複雑な状況を考慮した援助が多かった.また患者の心理的状況への配慮が不足への対応に苦慮していた.授業では,多様な状況設定を体験し,豊かな発想,工夫を提供する必要がある. 共著者：服部紀子,安藤邑恵,青木律子,島田今日子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ

47	老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題 －ICFの視点から考える看護の展開－	共著	平成19年8月	第 38 回日本看護学会－看護教育－千葉 （19. 8. 10）	研究目的は老年看護学実習で学生が高齢者を全人的理解の上に援助ができるための教育的課題を明確にすることにある.結果, 「身体機能・構造」の内容は多く,その人らしい生活を支援する「活動と参加」「環境」に関連する内容が少なく認識が浅いことが分かり,指導に際しての示唆を得ることができた. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,
48	老年看護学臨地実習記録の内容分析と課題 －認知症高齢者の生活機能からの分析－	共著	平成19年8月	第 38 回日本看護学会－看護教育－千葉 （19. 8. 10）	研究目的は介護老人保健施設認知症病棟で使用している実習記録を生活機能領域から分析し,学生の対象者理解や援助の捉え方の傾向を把握し,指導課題を明確にする.同意が得られた学生33名の老年看護学実習記録のアセスメントシートを項目別に分析した.結果,医学モデルを象徴する「心身機能・構造」はほぼ満たされていたが,社会モデルであるその人らしさや個別性を象徴する「環境因子」「個人因子」についての内容は十分でなかった.認知症高齢者に対する全人的な理解を基盤とする看護の展開においては指導内容や指導体制の工夫が必要である. 共著者：小木曽加奈子　安藤邑惠 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,スパーバイズ
49	老年看護学演習における加齢変化および障害擬似体験による学習効果－「レクリエーション企画・実践」演習後のレポートの分析から－	共著	平成19年11月	第 12 回日本老年看護学会学術集会神戸 （19. 11. 10）	研究目的は老年臨床看護の「レクリエーションの企画・実践」演習における参加者の疑似体験の学習内容から学習効果を検討し,演習の教授活動について検討することにある.対象は同意の得られた看護系大学生43名とし,課題レポートを質的に分析した. 学生は自分の感覚を遮断して疑似装具装着することで不自由さと同時にさまざまな感情を体験している.看護の現場で集団レクリエーションを実施することによって身体機能のみならず精神・心理社会面につい学ぶ機会となる.教育課題としては高齢者のADLの正しいアセスメントとレクリエーション内容との選択指標を検討する必要がある. 共著者：青木律子　服部紀子　安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ

50	中高年の健康状態と生活の満足の関係について-ボランティア活動に参加している中高年の意識調査から-	共著	平成20年10月	日本看護学会-地域看護- （静岡）（20.10.11）	研究目的は,ボランティア活動に参加している中高年の健康状態と生活の満足に対する傾向を把握する.対象者は,同意が得られた 60 歳以上 100 名の記入式アンケート回答を分析した.対象の傾向は無職が 67%,活動の場は作業所,授産所が 35%と多く,複数の施設を掛け持っていることが分かった.健康状態は 10 段階で 7.23 と比較的健康を保っていた.健康状態と生活満足は相関係数.630 と相関関係が見られた.最もストレスを感じていることは,「社会や行政に対する不満」が 20.9 と最も多かった. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子,阿部隆春,平澤泰子,勅使河原隆行,原田正美 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,論文作成
51	ボランティア活動に参加している中高年のコーピングについて	共著	平成20年10月	日本看護学会 - 地域看護 - 静岡（20. 10.11）	精神保健ボランティア活動に参加している中高年のコーピング機能の傾向を把握する.対象者は,同意が得られた 60 歳以上 100 名が回答したコーピング尺度を分析した.コーピング尺度の下位尺度の「問題焦点型」は平均値 13.21,「情動焦点型」は平均値 8.45,「回避・逃避型」は平均値 18.80 であった.情動焦点型と回避・逃避型は相関係数.432 と相関関係がみられた.コーピング尺度の下位尺度は平均値が高く,コーピング機能が優れているという結果を得た.中高年者は定年など生活の大きな変化を迎える時期である.自発的に精神保健ボランティア活動に参加するという能動的な行動は,さまざまなストレスに対するコーピング能力との関連性があることが分かった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠,勅使河原隆行,原田正美,平澤泰子,阿部隆春 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ

52	ICF（国際生活機能分類）における『活動と参加』のケアの実際-介護老人保健施設のケア実践者のインタビュー調査から-	共著	平成20年10月	日本福祉学会全国大会　岡山（20.10. 12）	研究目的は,1CF における「活動と参加」領域のケア内容についての実態を把握することにある.対象は介護老人保健施設に勤務する看護職・介護職各２名とし,半構造化インタビューにおけるフィールドノートで得られたケア内容を質的に分析した.「活動と参加」の領域は,カテゴリー「セルフケア」が３分の１を占め,サブカテゴリーの上位を占めた“利用者のメッセージを受け取る”“心の潤いの工夫”は,その人らしさを大切にした支援・援助のあり方に対する内容である.入所者は,何らかの介護が必要な状態であり,セルフケアを中心として日々のケアが提供される.ケア実践者は,施設が利用者にとって過ごしやすいような人的環境や物質的環境に着目していることが分かった.本研究は岐阜医療科学大学研究倫理委員会の承認を得て実施した.財団法人ユニベール財団研究助成（代表　安藤邑惠）の研究成果の一部である. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠,平澤泰子,阿部隆春,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
53	ICF（国際生活機能分類）における『環境因子』のケアの実態-介護老人保健施設のケア実践者のインタビュー調査から-	共著	平成20年10月	日本福祉学会全国大会（岡山）2008. 10. 11	研究目的は,介護老人保健施設における ICF の「環境因子」のケアについての実態を把握することにある.対象は介護老人保健施設に勤務する看護職･介護職各２名とし,半構造化インタビューにおけるフィールドノートで得られたケア内容を質的に分析した.ICF が提唱する「その人らしさを尊重する,理解する」は,毎日ケアを行っているケア実践者が重要であると認識している姿勢が現われている.ケア実践者が忙しい業務の中にあっても高齢者に穏やかに接し,利用者の笑顔を励みに,高齢者のケアに携わっている実態が浮かびあがっている.また高齢になるほど体温調節が困難になり,環境の変化によって風邪を引きやすく,夏などはうつ熱,脱水症に容易に陥ることを理解した上でケア実践者は,健康管理を行い,高齢者の日々のケアを実践にあたっている実情がある. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子,平澤泰子,

54	介護老人保健施設におけるICFの視点での「ケアに対する充実度」の尺度作成	共著	平成20年6月	日本老年社会科学会　大阪 （20．6．27）	阿部隆春,勅使河原隆行 本人担当分:研究企画,データ収集,分析,論文作成 研究目的は,介護老人保健施設で行われているケアの実態をICFの視点でその特徴を知り,ケア実践者の「ケアに対する充実度」を測定するための尺度作成の資料である.対象は介護老人保健施設に勤務する看護職・介護職で同意が得られ,アンケート回答に欠損値のない有効回答45部について分析した.アンケート内容は27項目,135質問をリッカート法にて行った.結果は主成分分析法による共通性は.733～.974 と高い共通因子であった.信頼性係数は,標準化されたクロンバックの３領域のα係数は①.955,②.979,③.966 と高い内的整合性が認められ,この尺度は採択可能であると考える
55	介護老人保健施設におけるケアの実態；ＩＣＦの「心身機能・身体構造」領域の分析	共著	平成20年6月	日本老年社会科学会（大阪） （20．6．27）	共著者：阿部隆春,小木曽加奈子,安藤邑惠,平澤泰子,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ 研究目的は,介護老人保健施設のケアの実態をICF の視点から「心身機能・身体構造」領域の特性を知ることにある.対象は介護老人保健施設に勤務し,同意の得られた看護職及び介護職各 2 名に,半構造化インタビュー内容を KJ 法によって分析した.「心身機能・身体構造」の８つのカテゴリーのうち『精神機能』の語彙数が最も多く,利用者には認知症をはじめとする精神機能への配慮が必要な場合が多いことを示している.次いで『心血管系・血液系・免疫系・呼吸器系の機能』の語彙数が多く,加齢による心肥大によって心不全に配慮が必要な場合が多い.心臓疾患は生活行動の制限に直結することが影響していると考える.『神経筋骨格と運動に関連する機能』の語彙数が多いことは,介護が必要な場合は,利用者の現存機能を正しく評価することが重要というケア実践者の認識の強さを示している.

					本研究は岐阜医療科学大学研究倫理委員会の承認を得て実施した財団法人ユニベール財団研究助成（代表者：安藤邑恵）の研究成果の一部である. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子,阿部隆春,安藤邑恵,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
56	ICF における「環境因子」のケアに対する看護職と介護職の認識の違い－介護老人保健施設のケア実践者に対するインタビュー調査から-	共著	平成 20 年 11 月	日本老年看護学会（金沢　石川県立音楽堂）（20. 11. 9）	老人保健施設で行われている ICF の「環境因因子」に関連するケアを看護職と介護職の認識の違いについて検討する資料にする.対象者は 4 名に半構成的インタビューを質的に分析した.結果,看護職は医療面,介護職は生活を豊かにする側面の認識が高いことが分かった.「サーービス・制度・政策」に関する内容は両者認識が高かった. 共著者：安藤邑恵,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,
57	認知症高齢者のケアに対する看護職と介護職の認識のちがい～「心身機能・身体構造」に着目をして～	共著	平成 21 年 3 月	第13回日本看護研究学会東海地方会学術集会（豊明）2009.3.	介護老人保健施設の看護職と介護職に対するインタビュー調査から認知症高齢者のケアに対する ICF の視点での「心身機能・身体構造」の領域に対する看護職と介護職の認識の違いを明らかにすることを目的とした.対象者は看護職 4 名と介護職 4 名である.看護職は,認知症の行動心理学的徴候（Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia 以下 BPSD）に対して，充分な観察を行う必要性が高いと認識していることが明らかになった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑恵 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
58	介護老人保健施設における「ICF の視点でのケア内容」尺度の検討	共著	平成 21 年 6 月	第51回日本老年社会科学会,（横浜）2009.6.	本研究は，ICF の視点を踏まえたケア内容を尺度として汎用できるかの検討を行うことを目的とした.調査対象期間は，2007 年 11～12

					月.介護老人保健施設に勤務する介護職,看護職96名を対象にアンケートを実施した.76名の回答（回収率81.2%）のうち，欠損値なしの有効回答45名（有効回答率57.6%）を分析対象とした.信頼性係数は標準化されたCronbach のα係数.955～.979 と高い内的整合性が認められた.また ICF3 領域は強い相関関係が見られた.本ケア内容の尺度は共通性,信頼性，内的整合性が認められ統計的に尺度として汎用できることが検証できた.介護老人保健施設での利用者の全人的ケアには3領域の視点でのケアが重要であることが分かった. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子，阿部隆春,平澤泰子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
59	介護老人保健施設におけるケア実践者の高齢者ケア充実感－ケア充実感の高いグループと低いグループの特性について－	共著	平成 21 年 6 月	第51回日本老年社会科学会, （横浜） 2009.6.	高齢者にとって質の高い生活は，自分らしい生活の維持であり，ケア実践者の充実感が関連していると考える.本研究の目的は,介護老人保健施設で働くケア実践者の充実感を検証することである.1,000人に調査を実施し，看護職309票(61.8%)，介護職340票(68.0%)，計649票(64.9%)を有効回答とした. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子，安藤邑惠,阿部隆春，山下科子
60	介護老人保健施設のケア実践者における職務満足度 －看護職と介護職の意識の比較から職務環境改善を考える－	共著	平成 21 年 6 月	第 51 回日本老年社会科学会, （横浜）	本研究は，介護老人保健施設で働く看護職と介護職の職務満足の違いを調査し効果的な労働環境改善を検討することを目的とした.対象者1,000名(看護職500名･介護職500名)にアンケート調査し有効回答は，649 票(64.9%)であり，看護職309票(61.8%)，介護職340票(68.0%)であった.看護職･介護職は,仕事に対する誇りややりがいや職員間のチームワーク，協力に高い満足感を感じている.両職種とも心理的な面が仕事への支え，意欲に繋がっていることが窺えた. 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子，安藤邑惠,

					平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
61	認知症高齢者のケアに対する看護職と介護職の認識の違い～「活動と参加」に着目をして～	共著	平成 21 年 8 月	第 35 回日本看護研究学会, （横浜）	介護老人保健施設の看護職と介護職に対するインタビュー調査から ICF における[活動と参加]の領域に対する看護職と介護職の認識の違いを明らにすることを目的とした.2007 年 11 月～2008 年 2 月に,1 年以上勤務する看護職 4 名及び介護職 4 名を対象に実施した.[活動と参加]に該当する看護職の語彙数は 681，介護職は 564 であった.両職種ともセルフケアに対する語彙数が多いが，サブカテゴリーは，看護職は『食べること』に集中しており,一方介護職は分散傾向であった.看護職と介護職の差異が最も大きいカテゴリーは「学習と知識の応用」であり，看護職は『療法の機会』のみならず,『意思を表出する』,『ニーズを引き出す』ことなど現在ある機能を維持・向上させることに努力している姿が伺える. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
62	A Correlation of Job Satisfaction and Sense of Fulfilment from caring at the Nursing Home-Recognition among Nurses and Care Workers-	共著	平成21年8月	The 13th Korea－Japan Health Education symposium & The 57th Japanese Society of Education and Health science, Kyunghee University	As for the elderly care, the labor shortage of the care spot has been a social problem. Therefore, this study was aimed at clarifying the differences and the common features among nurses and care workers who work at the nursing homes from the viewpoints of sense of fulfilment from caring and job satisfaction. The questionnaire collection rate was 309 responses from nurses (61.8%), 340 responses from care workers (68.0%). For both nurses and care workers, it was clear that sense of fulfilment from caring increased as job satisfaction became high. In terms of job satisfaction among nurses, there was a correlation with the age and the number of years. On the other hand, in terms of job satisfaction among care workers, there was no correlation with the age and the number of years. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，阿部隆春,

					平澤泰子, 田久浩志, 河口尚子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
63	The examination of the characteristics of the care of the elderly provided by care workers in nursing homes using factor analysis	共著	平成21年8月	The 13th Korea－Japan Health Education symposium & The 57th Japanese Society of Education and Health science, Kyunghee University	The purpose of this research is to analyze the nature of the care provided by care workers in nursing homes in terms of "the ICF-based measurement of the nature of care" by factor analysis and examination of its characteristics. We collected the questionnaires from 340 care workers (68.0%). Their average age and its standard deviation was 34.58±11.117syears old. We took a factor analysis by the varimax rotation that was a principal component analysis. We deleted items which showed factor loading of under 0.400 and adopted the constituent items of the factor concerned. In the end we adopted 16 factors in 66 items. The percentage of accumulation contribution in the 66 items was 67.812%.We found the commonality in which care workers respected the person as an individual in ten items, so we named the first factor in ten items as "support that respects people as individuals". 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子, 平澤泰子, 阿部隆春, 田久浩志 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
64	A Relation of Participants' Health Condition and their Life Satisfaction in Moral Volunteer Activity-Research of Participants' Opinion Roll-	共著	平成21年8月	The 13th Korea－Japan Health Education symposium & The 57th Japanese Society of Education and Health science, Kyunghee University	We aimed at clarifying the relation between the participants' health condition in the moral volunteer activity and the degree of their life satisfaction. We carried out the questionnaire to 253 people who participated in "the meeting of a moral volunteer" in A prefecture and agreed with the meaning of this research. We evaluated a degree of their health condition and their satisfaction in 10 steps. There were many women 209 (82.6%) as overwhelmingly as a male 42 (16.6%). Age has most 60years-old generation 81 (32.0%). About experience which took the volunteer lecture, and many 185 (73.1%) were taking a lecture. They was making

					health condition good, thinking the present experience beneficial and raising the degree of their life satisfaction. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子, 安藤邑惠, 阿部隆春 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
65	高齢者の暮らしを支えるシステムの課題～介護老人保健施設に勤務する看護職の視点から～	共著	平成 21 年 9 月	第40回日本看護学会-老年看護-（福島）	介護老人保健施設のケアを高齢者の暮らしを支える社会システムの視点からの課題を明らかにすることを目的とした.介護老人保健施設に勤務している看護職43名の「社会で高齢者を支えるしくみ」に関する自由記述を分析対象とした.看護職の平均年齢±SDは46.02±8.31歳であり,女42名（97.7%）,男1名（2.3%）.190語彙数は11カテゴリーを形成し,更に類似性の高いカテゴリーを集めて「高齢者を社会全体で支える」,「施設ケア体制」,「これからの高齢者ケアのあり方」の3領域となった. 共著者：山下科子,小木曽加奈子, 安藤邑惠, 平澤泰子, 阿部隆春 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
66	ICF の視点に基づく高齢者ケアプロセスの実践	共著	平成 21 年 9 月	第12回日本福祉図書文献学会全国大会,（京都）	高齢者の QOL を保証する専門職として,看護師と介護福祉士を目指す学生等にとって,高齢者ケアプロセスの展開を身につけることは必修である.また看護職・介護職がお互いのケアを尊重し,連携ができることをねらい,ICF と言う共通言語を用い双方が認識できることを重視し,高齢者ケアプロセスが理論体系を踏まえて展開できることを目的とした.入所期間が短くなり,ケアのアウトカムを出なければならない看護・介護現場で,今後は,エビデンス（根拠）に基づいたケアが重要となり,アセスメントツールの活用はケアプロセスの一助となる. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
67	Recognition in Care for the Elderly among Nurses and	共著	平成21年9月	The 1st International Nursing Research	We analyze the recognition in care for the elderly among nurses and care workers from the viewpoint of ICF. The questionaire collection rate was 309 votes for nurses (61.8%), care worker 340 votes (68.0%). We

	Care Workers -Content Analysis Based on International Classification of Functioning, Disability and Health-			Conference of World Academ of Nursing, （神戸）	classified ICF in three domains of ″ body functions and body structures ″ ″ activities and participation ″″environmental ″. As for the post of nursing, care to the infection prevention and the evacuation control was high in ″body functions and body structures″.″The tool from viewpoint of ICF″ which we made will be able to use generally. It will be an indicator to investigate whether daily supplied care is the one which the people are respected. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイス
68	ボランティア活動に参加している中高年者の健康状態と生活の満足	共著	平成21年10月	日本社会福祉学会第 57 回全国大会（東京）（2009.10. 11）	研究目的は,ボランティア活動に参加している中高年の健康状態と生活の満足に対する傾向を把握することである.対象は同意が得られた60歳以上の100名のアンケート回答を分析した.調査内容は,ボランティア活動の状況と健康状態,生活の満足,ボランティア活動を行っていてストレスと感じていること（自由記述式）である.健康状態と生活の満足とは相関があり,中高年者がネットワーク人材として活躍できるためにはまず,健康維持･増進をはじめ各種の福祉活動を推進する施策・環境整備が今後の課題となる. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子,阿部隆春,平澤泰子,勅使河原隆行 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成
69	介護老人保健施設における施設運営管理について-認知症ケアに焦点をあてて-	共著	平成21年10月	日本社会福祉学会第57回全国大会（東京）2009.10. 10	看護職と介護職の視点から，認知症ケアを実践する上での施設運営管理の課題を明らかにすることによって，効果的な労働環境改善方法を検討するための基礎的資料を得ることを目的とした.同意が得られた看護職48名・介護職 52 名の認知症ケアにおける施設運営管理に関する自由記述を質的分析の対象とした.介護老人保健施設は,利用者個々に合わせた療養の場や医療の場として活用されることが求められており，認知症ケアにおいては，柔軟にケアが提供できるように施設のハード

					面の整備とソフト面の整備が必要である.また，マンパワーの不足が深刻であり人手不足から業務に追われている現状がある.ケア実践者の働く環境を整備することが重要となる. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠,阿部隆春,平澤泰子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイス
70	認知症ケアに対する現場教育の課題について～介護老人保健施設の認知症ケアに着目をして～	共著	平成 21 年 10 月	第 40 回日本看護学会-看護教育-,（岡山）	介護老人保健施設における認知症ケアに対する現場教育の課題を看護職と介護職の視点から明らかにすることを研究目的とした.2008 年 4 月～5 月.認知症ケアを実践している看護職 28 名・介護職 29 名の認知症ケアの現場教育に関する自由記述を本研究の分析対象とする.両職種ともマンパワーに関する内容が多く，現場教育を充実することが必要だと感じている.看護職はケア実践者個々の能力差を感じており，パーソンフッドとウエルビーイングを高めるパーソンセンタードケアの実践の側面が希薄であると感じている.施設内の教育体制として，看護職は認知症専門職の配置が必要と考えている. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，阿部隆春,平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイス

71	児童虐待に対する意識調査-「親が子供に対してしつけのためにする体罰」に焦点をあてて-	共著	平成21年10月	日本社会福祉学会第57回全国大会　法政大学多摩キャンパス　2009.10. 11	「親が子どもに対してしつけのためにする体罰」をどう思うか」ということから「適切な行使」意識を明らかにすることを目的とした.対象は同意を得られた253名のアンケート回答を分析した.精神保健ボランティア集会の参加者の74.1%は 50 歳以上であり,男女別では,女性は82.6%である.叱ったり褒めたりする しつけに対して,しつけのための体罰を「どんな場合でも否定的」と考える人は 26.9%であり,「やむをえない,条件付で肯定する」と考 える人は62.1%である.回答なしは,11.1%であった.本調査結果を一般化はできないが,親が子どものためにするしつけのための体罰を肯定的と見る意識の存在が多いことが窺えた. 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子,安藤邑惠,平澤泰子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成,スーパーバイズ
72	認知症ケアにおけるICF の視点による環境因子の認識　- 看護職と介護職の比較-	共著	平成21年11月	第29回　日本看護科学学会学術集会(千葉・幕張)　(21. 11. 27)	介護保険上の新たな課題の１つとして，認知症高齢者の増加があり,「環境因子」に関連するケアは生活機能と障害への外的影響をもたらす背景因子として重要な課題の１つである.ICFの分類にそって，認知症ケア実践者のインタビュー内容を分析することにより，環境因子に関連するケアに対する看護職と介護職の認識の違いが明らかになったためここに報告する.介護老人保健施設に勤務する看護職 4 名及び介護職 4 名.データ収集として,半構造化インタビューにおける逐語録で得られたケア内容を分析対象とした.「環境因子」に該当する語彙数は看護職397，介護職 186 であり,『生産品と用具』『自然環境と人間がもたらした環境変化』『支援と関係』『態度』『サービス・制度・政策』の 5 カテゴリーに分類した. 共著者：安藤邑惠,小木曽加奈子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,論文作成

74	介護職の視点からの介護老人保健施設における高齢者ケアの課題	共著	平成21年11月	人間福祉学会2009inぎふ，（岐阜）	介護老人保健施設における高齢者ケアの課題を介護職の視点から明らかにすることを目的に研究を行った.介護職500名のうち,340票（68.0%）の回収があり,その内の70名（14.0%）による認知症ケアの課題に関する自由記述の回答を本研究の分析対象とする.279語彙は,17カテゴリーを形成し，「介護する側の現状」「目指したい高齢者ケアのあり方」「高齢者ケアの難しさ」「社会全体の中での高齢者ケア」の4つの領域となった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
75	介護老人保健施設スタッフの転職意向と職務満足度との関連-看護職と介護職の比較から-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護老人保健施設の看護職と介護職の転職意向が低いスタッフはどのような職務満足と関連があるのかを検討することを目的とした.回収したアンケートのうち,「高齢者以外の仕事がしたい」に欠損値がない介護職 338（67.6%）名，看護職305（61%）名を有効回答とした.看護職は，転職意向と年収には関連性が強いことが明らかになっており，介護職においては，職務満足項目として高齢者ケアの仕事への誇りをもつこと，利用者に直接サービスを提供すること，安心して働き続けられる職場への改善が，定職率の向上に繋がることが示唆された. 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
76	介護老人保健施設で支える高齢者ケアの現状と課題認識-介護職の想いをことばに-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護職が高齢者ケアの現状をどのように認識し,社会に向けてどのような課題を認識しているか,を明らかにすることにより,介護現場の理解を深める一石としたく調査を行った.自由記述の回答内容うち「高齢者ケアを社会で支える人材として思うところ」に関する記述のあった46名を分析対象とした.第1カテゴリーは現在の施設ケアは，介護職の善意に依存し人手不足による介護業務の過重，施策がもたらす施設ケアと在宅ケアのアンバランスを，第2カテゴリーは，施策・制度の見直し，身近な地域の体制の

					改善，将来の介護環境に対する不安や危機感を指摘し，早急な対策を切望している. 共著者：安藤邑惠, 小木曽加奈子，平澤泰子，阿部隆春，山下科子 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, 論文作成,
77	介護老人保健施設入所者とその家族との介護職の関わりについて―家族とともに支える介護-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第 52 回大会（愛知）	介護老人保健施設に勤務する介護職の施設入所者の家族に関する認識を分析することにより，家族との関係において求められる役割についての基礎的な資料を得ることができたためにここに報告する. 由記述の中に，「家族との関わり」について記述があった 17 名を分析の対象とした. 記述内容は 39 語彙に分類でき，4 カテゴリーを形成した. 家族による介護は限界があり，施設への入所などの利用も必要となっている. 入所により，家族との関係が希薄となり，施設での介護に依存的になっている現状が明らかになった. 共著者：山下科子, 小木曽加奈子，安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, スーパーバイズ
78	介護老人保健施設における転職意向の低い介護職員とケア実践との関連-ICFの視点でのケア実践に着目をして-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第 52 回大会（愛知）	介護職員の転職率が高い昨今，転職意向の低い介護職員とケアの実践内容との関連を明らかにするため，郵送法にて調査を行った. 介護職「高齢者ケア以外の仕事がしたい」項目に欠損値がない 338 票（67. 6%）分析対象とした. 転職意向が低い介護職は，年齢や収入，勤続年数の関連性はなく，ケア実践における「活動と参加」の領域，特に日常生活の活動的な生活の支援の実践に関連が深い. 利用者の個別性を大切にするケアが転職の低減に役立つことが明らかになった. 共著者：平澤泰子, 小木曽加奈子，安藤邑惠,，阿部隆春 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, スーパーバイズ

79	介護老人保健施設におけるケア充実感とケア実践の関連性-看護職と介護職の認識の違いに着目をして-	共著	平成22年6月	日本老年社会科学会第52回大会（愛知）	介護老人保健施設のケア実践者である看護職と介護職に対して，ケア充実感とICFの視点におけるケア実践の関連性を看護職と介護職の認識の違いに着目をして明らかにすることを目的とした.常勤勤務でありケア充実感の質問項目に欠損値がない看護職274票（54.8%）・介護職314票（62.8%）を有効回答とし分析対象とした. 看護職は，生命に直結する循環管理を行うことでケア充実感が高くなるが，介護職では，入浴などのセルフケア・身体を洗うことが充実感を低めることが明らかになった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
80	生活全体に配慮が必要な認知症高齢者のBPSDの変化-認知症の症状に関する機能評価尺度を用いて-	共著	平成22年8月	第58回日本教育医学会学術集会（大阪）	ケア実践者が困難性を感じている認知症高齢者像として，「認知症の症状に関する機能評価尺度（以下，認知症尺度）」を用い，生活全体に配慮が必要な30点以上の認知症高齢者に焦点をあて調査をし，BPSDの変化に対する基礎的資料を得ることを目的とした.対象者は，認知症尺度30点以上の利用者7名である.認知症が高度であると，セルフケアに関する生活全般の配慮が必要であり，改善はみられない傾向が明らかになった．しかし，記憶と問題行動のチェックリストなどの精神的な混乱は関わりによって改善傾向がみられることが明らかになった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，阿部隆春，平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
81	介護老人保健施設における看護職のケアの方向性-「ICF の視点でのケア尺度」を用いた因子分析から-	共著	平成22年9月	第41回日本看護学会-老年看護-,（奈良）	介護老人保健施設で実施している看護職の高齢者ケアの方向性を「ICF の視点でのケア尺度」を用いて，統計的手法の因子分析によってその方向性を検討することを目的とした.回収され不備票を除く309票（61.8%）を有効回答とし，分析対象とした.因子分析の結果，9因子44質問肢となり，Cronbachのα係数は0.858～0.908と高い内的整合性が認められた.看護職は，高齢者ケアにおける「自立支援」や「尊厳の保持」などの基本理念を大切にし，全人的に高齢者を理解しケアを実践していることが明らかになった. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠，平澤泰子，阿部隆春 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ

82	看護介護課長の視点における家族支援のありかた介護老人保健施設の認知症高齢者に着目をして~	共著	平成22年9月	第 41 回日本看護学会-老年看護-,（奈良）	認知症高齢者とその家族への支援の課題を看護職の視点から明らかにすることを目的とした. A県のプリセプター制度を取り入れている介護老人保健施設を対象とした.インタビューで得られたデータはテキストマインド法を用いて分析を行った.認知症高齢者の家族は，戸惑いや不安を抱えながら施設ケアを利用している現状があり，看護介護課長はケアスタッフは，家族が受け入れがたい現実を家族と共に受け止めるなど支援を行うことが必要だと認識していることが明らかになった. 共著者： 山下科子,小木曽加奈子，安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
83	認知症ケアにおける介護老人保健施設の課題;インタビュー調査による看護・介護課長の視点から	共著	平成22年11月	第 15 回日本老年看護学会，群馬県民会館	介護老人保健施設（以下，老健）の看護・介護課長の視点から認知症ケアにおける施設の課題に対する基礎的な資料を得ることを目的とした.プリセプター制度を取り入れている 2 施設を対象としインタビュー調査を行った.133語彙は，20サブカテゴリーから成り，6カテゴリーを形成し，更に「老健という施設の役割に対する課題」「認知症と向き合うケア実践への課題」の2つの領域となった認知症という疾患に着目をするのではなく，1人の高齢者として捉え，ケアを考えるという思考が伺える. 共著者：小木曽加奈子,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
84	看護学生における高齢者に対する陰部洗浄とおむつ交換の学びの傾向	共著	平成23年6月	日本老年社会科学会第53回大会,（新宿）	研究目的は,陰部洗浄・おむつ交換の演習において看護学生の学びの内容を明らかにすることとし,Ａ大学看護学科３年生（男子13名，女子68名）の計81名に調査を行った.陰部洗浄とおむつ交換の演習で意識したこととして351内容を得た.学生が意識して行った内容は，22個のサブカテゴリーと６個のカテゴリーが形成された.学生は演習で難しかったことや上手くいかなかった内容を今後の課題として意識していた. 共著者：渡邊美幸,小木曽加奈子，安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
85	介護職のケアの特性と領域別職務満足度の相関関係-介護老人保健施設における介護ケア特性 16 因子と領域別職務満足度の相関関係-	共著	平成23年6月	日本老年社会科学会第53回大会,（新宿）	研究目的は,介護老人保健施設では，介護度が高い利用者が多くなる傾向にあり，高齢者ケアの向上には，ICF 視点での介護職ケア内容の検討を行った.6 因子と 9 領域別職務満足度の Peason の相関係数（両側）1%水準で有意 0.3 以上は第 1 因子と「職員間相互の影響」.310,「職場における管理」.386,「制度・法律の変化への対応」.325.第 3 因子と「職業に対する誇り」.338 であった.

					「その人らしさを尊重した援助」と職員間の助け合い協力，ケア方法の満足，現場が対応できている等及び，「人格を尊重した援助」は仕事をしていることに誇りを持っていると関連している. 共著者：阿部隆春, 安藤邑惠，小木曽加奈子，平澤泰子，山下科子 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, スーパーバイズ
86	介護老人保健施設のケアスタッフの教育支援や研修；プリセプター制度を取り入れている施設の調査から	共著	平成23年10月	日本社会福祉学会第 59 回全国大会，（千葉）	研究目的は介護老人保健施設における認知症ケアの「ケアスタッフへの教育支援や研修」の内容を明らかにするために, 1 人 30～45 分程度の半構成的面接で行った. 語彙数は 83，14 サブカテゴリーを形成し，5 カテゴリーとなった. 語彙数 30 を示したサブカテゴリーは,『現場職員による職員教育』『現場職員による新人教育』『施設の現場は介護が主体』で構成され，“皆がいい関わりをするためには，その職員達が実践する”“周りのスタッフに助けてもらって新人は成長していく”“医療行為は多いけれど介護が主”であることが示された. カテゴリーは,「生活の場における介護の視点の重要性」とした. 共著者：平澤泰子, 小木曽加奈子，阿部　隆春，安藤邑惠 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, スーパーバイズ
87	国際生活機能分類の視点を用いた「認知症ケア尺度」開発プロセス	共著	平成23年10月	日本社会福祉学会第 59 回全国大会，（千葉）	研究の目的は，生活全体に配慮が必要な認知症高齢者に対する「認知症ケア尺度」の原案（3 領域，27 項目，135 質問）を作成する. 開発した「認知症ケア尺度」（3 領域，27 項目，81 質問）の信頼性を検討する，ことである.「看護版」と「介護版」はいずれも下位項目尺度は安定した数値として 0. 800 以上を得ることができ尺度の信頼性を検証できた. 各尺度の質問は一部違いがあり,「看護版」は医学的視点が強い尺度としての特性を持ち,「介護版」は日常生活をサポートするスキルに対する視点が強い尺度としての特性を持った. 共著者：小木曽加奈子, 阿部隆春，平澤泰子，佐藤八千子，棚橋千弥子，柴田由美子，祢宜佐統美，安藤邑惠 本人担当分：研究企画, データ収集, 分析, スーパーバイズ

88	認知症高齢者ケア充実感と９つの領域別職務満足度の関係；認知症ケア実践者である看護職と介護職に着目をして	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第54回大会,（長野）	認知症高齢者の増加とともに重度化が問題となっている．認知症は重度となるとBPSDにより，ケアの困難性が増し，ケア実践者のケアに対する充実感及び職務満足度が低い可能性がある．本研究目的は，認知症ケアに対する充実感と職務満足度の関係を明らかにした.認知症ケア充実感と仕事全体の満足度は，両職種とも関連が強かった.認知症ケアの充実感を高めるためには，それぞれの職種の違いを認識し，職務の細かな領域に着目をしていくことが重要であることが示唆される. 共著者：小木曽加奈子,阿部隆春，平澤泰子，山下科子，安藤邑惠，佐藤八千子，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイス
89	認知症高齢者ケアに携わる介護職の職務満足度と転職,離職との関係について；介護職としての通算勤務年数に着目して	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第54回大会,（長野）	本研究の目的は，介護職の通算勤務年数と職務満足度，転職，離職の関連の検討である.通算勤務年数，仕事全体の満足度,転職，離職の Pearson の相関係数は，転職と離職は.365 であった．仕事全体の満足度と転職は-.350,離職は-.332 と負の相関を示した．通算勤務年数と転職は-.114 と負の相関を示し 1%水準で有意であった. 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子，平澤泰子,山下科子，安藤邑惠，佐藤八千子，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
90	介護老人保健施設における介護職の認知症ケアに対する認識	共同	平成24年6月	日本老年社会科学会第54回大会,（長野）	本研究は介護老人保健施設の介護職の認知症ケアに対する認識を明らかにすることを目的とした.有効回答は87名（87.0%）.「心身機能・身体構造」の領域は7つの因子で構成され,αは.627～.788であった．「活動と参加」の領域は8つの因子で構成され,αは.741～.903であった．「環境因子」の領域は3つの因子で構成され,αは.732～.835であった．共著者：佐藤八千子,小木曽加奈子，阿部隆春,平澤泰子,山下科子，安藤邑惠，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
91	看護職員による認知症高齢者ケアの重要性の認識		平成24年6月	日本老年社会科学会第54回大会,	介護老人保健施設における認知症ケアの重要性の認識とその実践の違いについて，看護職員の視

	と実践の違い	共著		（長野）	点から明らかにすることを目的とした.重要と認識していても，実践に及んでいないことが多いことが明らかになった.＜心身機能・身体構造＞は，認知症の BPSD への対応についての実践は希薄な傾向がみられた.＜活動と参加＞は，生活を豊かにする視点のケアが希薄な傾向がみられた.＜環境因子＞は，重要性の認識があっても，実践が伴わないことが多く，課題が多い領域であることが明らかになった. 共著者：山下科子,小木曽加奈子，平澤泰子，阿部隆春,安藤邑惠，佐藤八千子,樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
92	介護福祉士養成における介護福祉実習の問題点；介護福祉実習に事前に修得すべき点に焦点をあてて	共著	平成24年6月	日本老年社会科学会第54回大会，（長野）	本研究の目的は，養成校が介護福祉実習施設を実施するにあたり，学生が事前に修得すべき点を明らかにすることである．実習生は実習の前に,学内でしっかり介護技術の基本を身につけ,コミュニケーションを通して利用者を深く理解し学ぼうとする姿勢が求められていることが明らかになった.そして,養成校は,「求められる介護福祉士像」が学生に根づくように,介護福祉士の理想を掲げ指導をしていかなくてはならないことが示唆された. 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子，，山下科子,阿部隆春,安藤邑惠，佐藤八千子,樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
93	認知症高齢者のケア実践における看護職と介護職の相違―ICF の視点「環境因子」に着目して―	共著	平成24年8月	第 60 回日本教育医学学会，（筑波）	介護老人保健施設に勤務する認知症高齢者をケアする看護職，介護職の認知症ケア実践の相違を ICF の視点「環境因子」に着目して研究を行った.看護職有効回答 719 名（46.8%），介護職有効回答 765 名（49.8%）であった.共に「自然環境と人間がもたらした環境変化」が最も高く，「サービス・制度・政策」の平均値が最も低かった．実践について最も差が見られたのは，「支援と関係」で看護職のほうが介護職よりも平均値が高かった.看護職の 5 つの「環境因子」項目の Pearson の

					相関係数は，.493**～.659**と全て 1%水準で有意であった．介護職の 5 つの「環境因子」項目の Pearson の相関係数も,.485**～.683**と全て 1%水準で有意であった. 共著者：阿部隆春,小木曽加奈子,平澤泰子，山下科子，安藤邑惠，佐藤八千子，今井七重，祢宜佐統美，樋田小百合 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
94	看護職員が認識する国際生活機能分類に基づく認知症高齢者のケア	共著	平成24年8月	第 60 回日本教育医学学会 （筑波）	本研究では，介護老人保健施設における認知症ケアの認識について，ICF の視点で作成された「看護職版認知症ケア尺度」を用い，看護職員の視点から明らかにすることを目的とした．有効回答は 85 名（85.0%）であった．＜心身機能・身体構造＞は,4 因子から構成され,,＜活動と参加＞は,6 因子から構成され,＜環境因子＞は 2 因子から構成された.因子分析の結果，すべての質問項目は，因子寄与率が 0.400 あり，除外が必要な質問項目はなかった．また，各因子におけるα係数においても 0.800 以上あり，探索的な方法であるが，一元性と信頼性を確保することができた. 共著者：山下科子,小木曽加奈子,平澤泰子， 阿部隆春， 安藤邑惠，佐藤八千子，今井七重，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
95	介護職員による認知症高齢者ケアの重要性の認識と実践の違い―国際生活機能分類に基づくケアの視点からの検討―	共著	平成24年8月	第 60 回日本教育医学学会 （筑波）	研究目的は,在宅復帰を目標としている介護老人保健施設における介護職員の認知症高齢者ケアの重要性の認識とその実践の違いについて，国際生活機能分類に基づくケアの視点から明らかにすることである．介護職員は認知症ケアを重要であると認識していても，実践には及んでいないことが多いことが明らかになった．＜心身機能・身体構造＞においては，認知症の BPSD への対応についての実践は希薄な傾向がみられた．＜活動と参加＞においては，「セルフケア」の面では認識と実践の差が小さかったが，「その人らしい生活の確保」といった視点のケアでは差が大きく，ケ

					アの希薄な傾向がみられた．＜環境因子＞においては，重要性の認識があっても，実践が伴わないことが多く，課題が多い領域であることが明らかになった． 共著者：平澤泰子,小木曽加奈子,山下科子，　阿部隆春，安藤邑惠，佐藤八千子，今井七重，樋田小百合，祢宜佐統美 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
96	介護老人保健施設における介護職員による「その人らしさ」と「関係性」を大切にしたケアの実際	共著	平成24年10月	第 60 回日本社会福祉学会 （兵庫）	本研究は高齢者の生活支援・援助を行う機会が多い介護職に着目をし，パーソン・センタード・ケアが提唱する「その人らしさ」と「関係性」を大切にしたケアの実践を ICF の視点を用いて明らかにすることを目的とした．心身機能・身体構造の領域では，感情失禁や興奮に対応するケアを行うことと，何を言っているか分からない利用者に対しても心から耳を傾けるという実践が，「その人らしさ」と「関係性」と関係があった．活動と参加の領域でも，コミュニケーションの大切さが示されており，認知症高齢者の BPSD を低減させるためには，非言語的コミュニケーションの活用が重要であることが示唆される．また，環境因子としては介護職員自身の態度として，利用者にとっては何が大切か考えることや利用者のペースに合わせる実践がされていた． 共著者：小木曽加奈子,平澤泰子,阿部隆春，佐藤八千子,棚橋千弥子，柴田由美子，祢宜佐統美,安藤邑惠 本人担当分：研究企画,データ収集,分析,スーパーバイズ
97	介護の専門性を学ぶ介護教育の工夫-介護実習施設		平成26年6月	老年社会科学 第 56 回大会	目的は介護実習現場の職員に着眼して教育課題を明らかにする．同意の得られた看護職・介護職 24 名に半構造的面接法を行った．結果,抽出された 3 カテゴリーは「介護に関する知識と経験を育

	に勤務する看護職・介護職のインタビュー調査から-	共著		（岐阜）	む」「高齢者に対する尊敬の念を育む」「教育方法の工夫により介護の力を育む」である. 介護現場の工夫は教育現場での指導内容との乖離があり教育内容や技術方法についての課題があることが分かった. 山下科子　小木曽加奈子, 平澤泰子　阿部隆春 安藤邑惠　佐藤八千子　祢宜佐統美　今井七重 本人担当分：研究企画, 分析, スーパーバイズ
98	介護現場における業務と人員配置の課題-介護現場に勤務する看護職・介護職のインタビュー調査から-	共著	平成26年6月	老年社会科学第 56 回大会（岐阜）	介護現場における課題を介護保険上の異なった 3 施設の認識を明らかにする. 対象施設に勤務し, 同意の得られた看護職・介護職 24 名に半構造的面接法を行った. 結果, 療養型は「ベッドサイドケアをする時間が少ない」, 老健は「看護職の配置が不十分」, 特養は「看護職の配置が不十分」のカテゴリーが抽出され, 医療的ケアが増える中, 介護職と看護職がどのように役割分担をしていくかが課題として問われている. 阿部隆春 小木曽加奈子 平澤泰子　安藤邑惠 佐藤八千子 山下科子　祢宜佐統美　今井七重 本人担当分：研究企画, 分析, スーパーバイズ
99	介護福祉士養成課程において現場が必要と認識する医療的ケア-介護老人保健施設で勤務する看護職・介護職のインタビュー調査から-	共著	平成26年6月	老年社会科学第 56 回大会（岐阜）	研究目的は護現場が「介護福祉士養成教育において必要と認識する医療的ケア」を明らかにする. 介護現場で勤務し, 同意が得られた看護職・介護職8名を対象に半構造的面接を調査した. 分析は1内容 1 記録とし関連のある用語を集約し, 結果 7 カテゴリーを形成し, ネーミングした. いりゅ的ケアについては, 治療の継続のための医薬品の知識や技術が高く求められていることが分かった. 平澤泰子　小木曽加奈子　安藤邑惠　佐藤八千子　山下科子　祢宜佐統美　今井七重　阿部隆春 本人担当分：研究企画, 分析, スーパーバイズ
100	介護福祉士養成課程において現場が必要と認識する医療的ケア-介護老人保健施設で勤務する看護職・介護職の認識の違い-	共著	平成26年6月	老年社会科学第 56 回大会（岐阜）	研究目的は介護現場に着目して,「介護福祉士養成教育において必要と認識する医療的ケア」に対する看護職と介護職の認識の違いを明らかにする. 介護現場で勤務し, 同意が得られた看護職・介護職 8 名を対象に半構造的面接を調査した. 分析は 1 内容 1 記録とし関連のある用語を集約した. 結果 8 カテゴリーを形成し, ネーミングした. 介護老人保健施設は夜間常駐のない看護職と夜間勤務する介護職との連携の重要性が指摘された.

101	介護老人保健施設におけるケア実践者が実践する認知症高齢者の「その人らしさ」を大切にした関わり	共著	平成26年11月	第 34 回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	佐藤八千子　平澤泰子　小木曽加奈子　安藤邑惠　山下科子　祢宜佐統美　今井七重　阿部隆春 本人担当分：研究企画, 分析, スーパーバイズ 研究目的は認知症の人をケアする実践者が行う「その人らしさ」を大切にした関わりを質問調査した. 対象は同意が得られた看護職・介護職 99 名である. 結果,「その人らしさ」大切にしたケア状況の平均値は看護職 3.0±0.71, 介護職±2.80 であった. テキストマインドを用いた分析では, 看護職 16 キーワード, 介護職 18 キーワード を中心とした有向レイアウトは両職種とも同様な傾向を示し,「その人」を大切にしてケアを実践していることが分かった. 小木曽加奈子　今井七重　安藤邑惠

教　育　研　究　業　績　書

平成　　年　　月　　日

氏名　　印

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	小児看護学、がん看護学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）看護学科教育方法の実践例		
①「小児看護方法Ⅰ・Ⅱ」における実践	平成11年～ 平成19年3月	三重県立看護大学講師として、講義内容はあらかじめシラバスで示し、授業内容に関しては学生が既習の知識を想起でき、また知識同士をつなげられるようなレジメ作りの工夫をした。 方法Ⅱにおいては15回の授業計画とシラバスを作成し、看護過程の展開では事例の作成と演習計画を立案し実施した。
②「小児看護学概論」における実践	平成19年10月～ 平成20年3月	奈良県立医科大学小児看護学教授として、「子どもの理解」「小児を取り巻く各種法整備」「子どもの発達段階とその時期の獲得課題」「各発達段階別にみた日常生活の援助」、「母子保健の動向と小児保健統計」について14回の授業計画とシラバスの作成を行った。“参加型授業”にするため、予め学生に発達段階を割り当て、その発達段階ごとに身体的特徴を調べさせ、発表するという授業を行った。
	平成20年10月～ 平成21年3月	奈良県立医科大学小児看護学教授として、「小児看護の対象である子どもとその家族の理解」「子どもを取り巻く各種法整備」「小児の身体的・心理的・社会的発達の理解」について15回の授業計画とシラバスの作成を行った。“参加型授業”にするため、予め学生にテキストに沿った範囲を割り当て、その範囲ごとに身体的、心理的、社会的特徴を調べさせ、発表するという授業を行った。
	平成21年	平成21年はカリキュラム改正に伴い、概論の授業は開講されなかった。
	平成22年 4月～7月 平成23年 4月～7月	奈良県立医科大学小児看護学教授として、学生の到達度を高めるため、講義の組み立てを主として形態・機能別（呼吸器系、循環器系、消化器系、排泄系、精神運動系）の発達と遊びの種類と意義及び日常生活援助（抱き方、あやし方、衣類の選択、着脱方法、おむつ交換、清潔）の授業計画とシラバスの作成を行い、援助論へつなげられるような土台作りを行った。また、学生の児の日常生活理解を深めるため、調乳、離乳食、衣類の交換、おむつ交換、清潔援助および抱き方について演習を行った。

事項	年月日	概　　要
	平成24年10月～ 平成25年1月	岐阜医療科学大学看護学科教授として学生の到達度を高めるため、講義の組み立てを主として形態・機能別（呼吸器系、循環器系、消化器系、排泄系、精神運動系）の発達と遊びの種類と意義及び日常生活援助（抱き方、あやし方、衣類の選択、着脱方法、おむつ交換、清潔）の授業計画とシラバスの作成と講義を行い、小児臨床看護へつなげられるような土台作りを行った。特に、日常生活援助においては演習を行ったが、学生が主体的に取り組めるようにTeam Based Learnig法を取り入れ、学生に好評を得た。
③「小児看護学援助論」における実践	平成19年4月～ 平成20年3月	奈良県立医科大学小児看護学教授として、小児の発達区分毎の健康問題、入院生活が児およびその家族にもたらす影響および特殊な状況下にある児の看護（20回）と看護過程に関する授業（8回）を計画しシラバスの作成を行った。前者については講義を行い、看護過程については白血病児の事例を作成しNANDAの分類によるアセスメントシートを使用し演習の指導を行った。
	平成20年4月～ 平成21年3月	奈良県立医科大学小児看護学教授として、主として形態・機能別の看護および特殊な状況下にある児の看護（16回）と看護過程に関する授業（12回）を計画しシラバスの作成を行い、前者については講師の授業案作成の指導を行い、看護過程については白血病患児の事例をNANDAの分類によるアセスメントシートを使用し演習の指導を行った。
	平成21年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学小児看護学教授として、主として形態・機能別および特殊な状況下にある児の看護（18回）と看護過程に関する授業（10回）の計画を立てシラバスを作成し、前者については学生に予め予習範囲を提示し、単元のテーマにそって予習した内容をグループで討議し発表するという方法を用いた。小児看護の特殊技術については演習を行い知識と技術が統合されるよう事前課題を課し演習を行った。看護過程は白血病患児の事例をDVDとともに作成し、NANDAの分類によるアセスメントシートを用い演習の指導を行った。
	平成24年 4月～7月	岐阜医療科学大学看護学科教授として健康破綻を来した児の看護に関する特殊技術について、看護方法の演習を行った。看護過程の展開においては、学生の理解を促すため、ヘンダーソンの理論に基づき事例のアセスメント、問題点の抽出について解答例を作成した。
④「看護経営」における実践	平成19年 10月～11月	奈良県立医科大学看護経営科目担当者として7回の授業計画とシラバスの作成を行った。看護経営は座学ではなく、実際の体験を重視するため、演習として附属病院に来られている患者に対し顧客満足の視点から聞き取り調査を行い、グループ討議、発表を行いそこから“看護経営”を考えるという演習を行った。

事項	年月日	概　　要
	平成20年 10月～11月	奈良県立医科大学看護経営科目担当者として7回の授業計画とシラバスの作成を行った。看護経営は座学ではなく、実際の体験を重視するため、潜在顧客としての4回生の学生に附属病院に就職を決めた（決めなかった）理由について聞き取り調査を行い、グループ討議、発表を行いそこから“看護経営”を考えるという演習を行った。
	平成21年 10月～11月	奈良県立医科大学看護経営科目担当者として7回の授業計画とシラバスの作成を行った。看護経営は座学ではなく、実際の体験を重視するため、演習として潜在顧客としての近隣住民に対し附属病院の良いところ、改善した方が良いところについて聞き取り調査を行い、グループ討議、発表を行いそこから“看護経営”を考えるという演習を行った。
	平成22年 10月～11月	奈良県立医科大学看護経営科目担当者として7回の授業計画とシラバスの作成を行った。看護経営は座学ではなく、実際の体験を重視するため、演習として受講している学生の身近な人に今まで病院を受診して良かったところ、改善した方が良いところについて聞き取り調査し、グループ討議、発表を行い、看護経営を考えるという演習を行った。
⑤「小児看護学実習」に対する実践	平成11年10月～ 平成12年1月 平成12年10月～ 平成13年1月	三重県立看護大学講師として重症心身障害児病棟、急性期疾患病棟および腎疾患を中心とした慢性期病棟における実習指導を90時間合計7グループの学生に対し行った。重症心身障害児病棟では呼吸管理、栄養、排泄、清潔援助の具体的な援助方法および障害を持っていても成長をし続けていることを念頭に置いた遊びを通しての感覚刺激について学ぶことができるよう指導した。両病棟ともNANDAの分類によるアセスメントシートを使用し、急性期病棟では病態が生命に及ぼす影響について、慢性期病棟では疾病と生活の共存という視点から看護が展開できるよう指導した。
	平成13年10月～ 平成14年1月 平成14年10月～ 平成15年1月 平成15年10月～ 平成16年1月 平成16年10月～ 平成17年1月 平成17年10月～ 平成18年1月	三重県立看護大学講師として急性期病棟における実習指導を90時間7グループの学生に対し行った。NANDAの分類によるアセスメントシートを用い、病態の理解と病態が生命に及ぼす影響 の視点から看護過程展開ができるよう指導した。また、学生が看護観を構築する一助とするため、臨床の看護師から“私が行っている看護”というテーマで各グループに対し“臨床講義”を行ってもらい、学生からは看護師さんからの話を聞くことができ良かった、看護師からは日ごろ自分の行っている看護をふり返る機会になって良かったという、双方ともに実習効果を高める機会を作った。

事項	年月日	概　　要
	平成18年10月～ 平成19年1月	①重症心身障害児、肢体不自由児施設における実習指導を90時間3グループ、②急性期病棟の実習指導を90時間4グループの学生に対し行った。①②ともにNANDAの分類によるアセスメントシートを用い重症心身障害児、肢体不自由児においては呼吸管理、栄養、排泄、清潔、ポジショニングの具体的な援助方法と障害を持っていても成長をし続けていることを念頭に置いた遊びを通しての感覚刺激の視点および福祉施策との連携から看護過程展開ができるよう指導した。急性期病棟では病態の理解と病態が生命に及ぼす影響の視点から看護過程展開ができるよう指導した。また、①②グループとも臨床の看護師から“私が行っている看護”というテーマで看護師から各グループに対し“臨床講義”を行ってもらった。双方ともに実習効果を高める機会になった。
	平成19年10月～ 平成20年3月	奈良県立医科大学小児看護学の教授として小児看護学実習90時間（NICU半日間の見学実習を含む）10グループのシラバス、実習要項、評価表および実習指導要領を作成し、学生に対して実習指導を、助教に対して実習指導方法を指導した。制癌剤を使用し免疫低下状態にある児に対する看護をNANDAの分類によるアセスメントシートを用い発達段階にある特徴を押さえながら看護過程が展開できるよう指導した。また、病棟の看護師がどのような看護観のもとに看護しているのかを学生に理解してもらうために、グループ毎に看護師から臨床講義を行ってもらい、双方ともに実習効果を高める機会になった。
	平成20年10月～ 平成21年3月 平成21年10月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学小児看護学の教授として小児看護学実習90時間（NICU半日間の見学実習を含む）12グループ（急性期疾患2G）のシラバス、実習要項、評価表および実習指導要領を作成し、学生に対して実習指導を、助教に対して実習指導方法を指導した。制癌剤を使用し免疫低下状態にある児に対する看護をNANDAの分類によるアセスメントシートを用い発達段階にある特徴を押さえながら看護過程が展開できるよう指導した。また、病棟の看護師がどのような看護観のもとに看護しているのかを学生に理解してもらうために、グループ毎に看護師から臨床講義を行ってもらい、双方ともに実習効果を高める機会になった。
	平成22年10月～ 平成23年3月	奈良県立医科大学小児看護学教授として小児看護学実習90時間（NICU1日間の見学実習、小児科外来の見学を含む）14グループ（血液疾患10G、重症心身障害児2G、急性期疾患2G）の シラバス、実習要項および実習計画を立案した。実習要項については実習目標に対する行動目標と評価項目を作成し、学生が何を達成したらよいのかが分かるように具体的内容を記述した。
	平成24年9月～ 平成25年2月	岐阜医療科学大学看護学科小児看護学教授として90時間の実習に関する実習要項を見直し、保育園実習と病院実習に関する目的・目標を明確にし、行動目標の作成と記録用紙及び評価表を新たに作成した。保育園及び急性期病棟における10グループの実習指導を行い評価した。

事項	年月日	概　　要
⑥「卒業研究」に対する実践	平成12年～19年 各年4月～翌年1月（通年科目）	三重県立看護大学小児看護学卒業研究担当教員として毎年3～４名の学生に対し、主として聞き取り調査、質問紙調査による研究の文献検討、研究計画書の作成、研究の実施、データ処理、SPSSによるデータ分析、論文作成および発表について指導を行った。
	平成19年～23年 各年4月～翌年1月（通年科目）	奈良県立医科大学看護学科、小児看護学卒業研究担当者として毎年4～5名の学生に対し、主として聞き取り調査、質問紙調査による研究の倫理審査申請、文献検討、研究計画書の作成、研究の実施、データ処理、SPSSによるデータ分析、論文作成および発表について指導を行った。
	平成24年4月～11月（通年科目）	岐阜医療科学大学看護学科、小児看護学卒業研究担当者として学生6名に対し研究計画書作成までの指導を行った。
⑦「看護学特論」	平成19～22年 各年6～7月	奈良県立医科大学看護学科小児看護学特論担当者として毎年4名の学生を受け持ち、30時間の中で文献検討、研究計画書作成、質問紙調査用紙作成の指導を行った。
⑧「総合看護学実習」	平成12年～18年 各年5～6月	三重県立看護大学の小児看護学、総合看護学実習担当者として、各年学生5名を受け持ち、小児がんを主とする血液疾患病棟、腎疾患を主とする慢性期病棟および急性期疾患病棟において180時間（4週間）の実習指導を行った。
	平成19年～22年 各年5月	奈良県立医科大学小児看護学、総合看護学実習担当者として、小児がんを主とする血液疾患病棟で実習する、各年4～5名の学生の90時間（2週間）の実習の、課題の明確化、実習計画立案および実習指導を行った。
	平成24年6月	奈良県立医科大学小児看護学、総合看護学実習担当者として、小児急性期病棟において学生2名、90時間の実習指導を行った。
⑨「統合看護学演習」	平成24年10月	岐阜医療科学大学看護学科小児看護学教授として統合看護学（卒業試験）の試験問題（40問）を作成した。
２）医学部医学科教育方法実践例		
①「医学特別講義Ⅲ 」	平成20年～22年 各年2時間	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、奈良県立医科大学医学部医学科第3学年で開講されている「地域基盤型医療学習」を円滑に進めるために、「小児看護について」というテーマで、言語的コミュニケーション手段が未発達な児とコミュニケーションをはかる方法および小児を看護する上で大事にしていること（プリパレーション、子どもの啼きなど）について実践を交え2時間の講義を行った。
②「修士課程教育方法」の実践例	平成16年～17年 各年7月～翌年1月	三重県立看護大学の講師として生活習慣系小児看護学履修学生に講義を行った。

事項	年月日	概　　要
③「修士課程学生指導」研究計画書作成指導	平成18年4月～平成19年3月	平成18年度に修士課程の学生のテーマ設定と研究計画書作成に関わった。テーマの設定は学生が過去に行った研究を発展することができた。
④修士課程「教育方法の演習」の実践例	平成18年7月～平成19年3月	三重県立看護大学の講師として生活習慣系小児看護学履修学生の研究テーマの選定と研究計画書作成の指導を行った。
⑤「ボデイワーク 」	平成9年4月18日,10月17日各2時間	三重県立看護短期大学講師として、成人臨床看護Ⅱにおいて、非言語コミュニケーション、声を届ける、リラクゼーション等の演習を行った。
⑥「Inquiry Based learning（IBL）」	平成10年11月10日,24日（合計8時間） 平成11年11月2日,8日,9日,15日,16日（合計12時間） 平成12年10月30日,11月3日（合計8時間） 平成13年10月29日,11月5日（合計8時間） 平成15年5月15日,29日（合計8時間）	三重県立看護大学看護学部看護学科講師として、チュートリアル教授法を実施。事例を用い、学生を少人数のグループに分け、「重要な情報」、「仮説」、「必要な情報」、「調べる項目」の順にチューターガイドに基づきIBLを行った。
⑦「デイベート」	平成14年5月31日、6月7日（合計4時間）	三重県立看護大学看護学部看護学科講師として、小児看護学概論　単元「小児の生活」の中でデイベートを実施
	平成15年5月9日、16日（合計4時間）	三重県立看護大学看護学部看護学科講師として、小児看護学概論　単元「小児の生活」の中でデイベートを実施
⑧「通信」の発行	平成13年5月14日、7月2日	四日市大学環境情報学部環境情報学科非常勤講師として、「高齢者福祉論a」において、受講生が多かったため、講義内容を共有することと、教育内容に対する関心を高めるため、科目に対するアンケート結果やレポートの内容を整理したものを通信という形で配布した。
2　作成した教科書、教材		
1）VTR	平成10年3月	三重県立看護大学看護学科小児看護学講師として、小児看護方法Ⅱの授業において、テレビ放映された番組を教材用ビデオに編集（小児看護用7種類）し、学生の理解が深まるよう工夫をしている。学生からは分かりやすいと良い評価を得た。授業内容は毎回レジメを作成し、パワーポイント及びVTRを適宜組み合わせて使用した。
2）実習指導マニュアル	平成19年9月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、小児看護学実習の指導をする助教に対し、学生や患児の安全を第一に考えた「実習指導マニュアル」を作成した。

事項	年月日	概　　要
３）実習要項	平成19年5月 平成20年5月 平成21年5月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、小児看護学実習（3年次配当、2単位）の要項、記録類および評価表の作成を行った。
	平成22年5月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、小児看護学実習（3年次配当、2単位）の要項および記録類の校正を行った。
	平成24年5月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、小児看護学実習（3年次配当、2単位）の要項、記録類、評価表の作成を行った。
４）看護過程資料の作成	平成21年9月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、患児・家族からの情報収集をしやすくするため、どのように質問（尋ねる）したらよいかについて、NANDAの分類の領域毎に、「NANDAの分類Ⅱに基づいた看護アセスメントの枠組みと情報収集の視点」という資料を作成した。
	平成21年9月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、学生の小児看護学実習目標（9項目）の到達度を高めるため、「小児看護学実習行動目標および評価項目」を作成した。
５）看護過程事例の作成	平成19年9月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、小児看護学援助論の看護過程演習のための白血病患児の事例を作成した。
	平成21年9月	奈良県立医科大学医学部看護学科小児看護学教授として、小児看護学援助論の看護過程演習のための白血病患児の事例をテレビで放映されたものをもとに作成した（5分程度）。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）自己点検・評価	平成13年12月	三重県立看護大学の自己点検・評価により評価を受けた。
２）修士課程の研究指導の適正	平成19年12月	奈良県立医科大学大学院医学研究科修士課程設置申請（看護学専攻、小児健康生活支援学特別研究）において「○合」判定。
	平成23年8月	奈良県立医科大学大学院修士課程設置申請（看護学専攻、小児看護学）において「○合」判定。
３）修士課程学生指導　研究計画書作成指導	平成18年4月～ 平成19年3月	平成18年度に修士課程の学生のテーマ設定と研究計画書作成に関わった。テーマの設定は学生が過去に行った研究を発展することができた。
４）学生による教員の授業評価	平成12年前期 ～ 平成18年後期	三重県立看護大学の学生による授業評価において全項目5点満点のところ最低3.5点以上を維持した。14年度からはレジメの作成を工夫し、全項目が4点以上になるようにした。その結果「授業が分かりやすい」「ためになる」の評価を得た。

事項	年月日	概　　要
	平成19年～21年 後期	奈良県立医科大学の学生による授業評価において、課題に関する項目（課題の量、提出期限など）は3点代もあるがそれ以外は“ややそう思う”“そう思う”の評価を得ている。授業進度の途中で、授業に関する意見を求め、その内容を検討し微修正を常に行っている。
4）教員相互による授業評価	平成15年～19年 3月	三重県立看護大学の教員による相互授業評価を受け、レジメの内容が斬新であるという評価を得、平成16年9月の学内討論会「学生と共に創る教育」の中で実践例として紹介した。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）看護教員養成講習会講師		
①三重県看護教員養成講習会講師	平成11年8月9日 ～平成10月6日	小児看護学演習60時間担当
	平成14年 10月～11月	看護教育演習（小児看護学）10時間担当
②奈良県看護協会　実習指導者講習会講師	平成19年9月 平成20年9月 平成21年9月 平成22年8月 平成23年9月 平成24年9月 平成25年9月	看護理論3時間担当 看護理論3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当 看護経営3時間担当
2）その他の研修会講師		
①ホームヘルパー養成研修講座講師	平成12年9月27日	2級「住宅・福祉用具に関する基礎知識」2時間　JA小牧（小牧市）
	平成14年6月23日	3級「医学の基礎知識」2時間　社会福祉法人　宏育会（四日市市）
②企業等の自主研修講師	平成11年12月20日	「福祉機器のマーケティング戦略とメーカーの問題点」南部鉄工業共同組合（愛知県）2時間
	平成13年8月4日	「乳幼児の発達」ひばり保育園」（四日市市）2時間
③三重県立看護大学関連	平成17年～19年	高校の総合学習の時間に進路先決定に関する模擬授業として「小児期の不慮の事故とその予防」の内容で三重県内3校の高校生徒に対し授業を行った。
	平成18年7月	三重県立看護大学のオープンキャンパスに来場した高校生およびその保護者に対し「医療処置時における子どもへの説明―小児看護におけるプリパレーション―」のタイトルで模擬授業を行った。
④奈良県立医科大学関連	平成20年7月14日	奈良県立橿原高校の3年生に対し進路先決定の動機づけの目的で「小児期に起こりやすい事故とその予防」について模擬授業を行った。
3）研究指導	平成19年5月～ 平成24年3月	奈良県立医科大学小児科病棟の看護師に研究指導を行い、日本小児がん看護研究会（第5回：平成19年）、近畿小児がん研究会（第33回：平成23年）と小児がん看護学会誌で発表した。

事項	年月日	概　　要
4）公開講座		
①三重県立看護大学主催	平成10年10月24日	三重県志摩庁舎において「福祉用具市場の現状と課題」について講演した。
②みえアカデミックセミナー主催	平成17年10月2日	三重県三杉町において「健康と福祉―思いを伝えることから始めよう」というタイトルで講演した。
③三重県立看護大学開学10周年記念事業（講演）	平成18年7月	地域に生活する子育て中の母親に対し「楽しもう！子育て生活」のテーマで講演を行った。内容はNHK（日本放送協会）の東海北陸版のニュースで放映された。
④奈良県立医科大学公開講座　くらしと医学	平成19年9月8日	橿原文化会館において「知って生かそう　福祉関連商品」というテーマで地域住民を対象に講演を行った。
⑤平成20年度「教職員のための夏の公開講座」	平成20年8月6日	奈良県立医科大学において公立学校の教職員を対象に「疾患を持った児童の生活上の理解」というテーマで講演を行った。
⑥奈良学園大学公開シンポジュウム「食と教育－食と教育・食と健康・食と文化の視点から－」（シンポジスト）	平成26年11月8日	王寺町地域交流センターリーベルホールにおいて食と健康というテーマでシンポジストとして発表した。
5　その他		
1）三重県准看護師試験委員	平成16年5月～平成19年3月	試験問題の検討、合格判定その他試験実施に関する内容の検討。
2）マニュアル作成	平成21年3月	在宅児を訪問する訪問看護ステーションの職員を対象とした研修会「長期療養児童在宅医療・在宅訪問推進研修会」（主催：奈良県周産期医療対策協議会）の「在宅訪問医療マニュアル」作成にかかわった。
3）研究助成金等交付	平成21年9月	2009年度、住居医学大和ハウス寄付講座「病室環境研究」助成金交付（テーマ：小児科外来における特徴の海外病院との比較、200千円）。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許		
1）看護婦免許	昭和51年5月	第300621号
2）任用資格（8種） 社会福祉主事、精神薄弱者福祉士、児童福祉士、児童指導員、家庭児童相談室主事、身体障害者福祉士、精神衛生相談員、社会教育主事	昭和59年3月	
3）教員免許 中学校教諭一級普通免許状「社会」 高等学校教諭二級普通免許状「社会」 高等学校教諭専修免許状「公民」 中学校教諭専修免許状「社会」	昭和59年3月 平成7年3月	昭58中一普第4215号 昭58高二普第4955号 平6高専第188号 平6中専第35号

事項	年月日	概　　要
4）修士(社会学)	平成7年3月	修士学位論文題目：シルバービジネスのマーケティング－四日市市における実態調査を中心にして－
5）博士（学術）	平成18年9月	甲第46号 博士学位論文題目：看護情報として使用する測定値に影響を与える因子の分析―成人女性の呼吸機能および出生後早期の新生児体温測定値からの検討―
6）米国NLP（神経言語プログラミング）協会 認定証	平成21年7月	神経言語プログラミング、マスタープラクティショナー
7）マインドマップ基礎講座終了証書	平成19年12月	ブザン・ワールドワイド・ジャパンによるマインドマップ基礎講座修了認定
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）看護師 国家公務員等共済組合連合会名城病院勤務	昭和51年4月～ 昭和58年6月	看護婦として眼科・皮膚科・泌尿器科混合病棟に10ヶ月、小児科病棟に6年4ヶ月勤務。小児科病棟では先天性の心臓疾患を持つ児の術前、術後の看護、代謝疾患（1型糖尿病、先天性代謝異常）および急性期疾患の看護を行った。
2）三重県立看護大学地域交流研究センター 県民局活動	平成9年4月～ 平成12年3月	津県民局管内における、在宅の重症心身障害児を訪問し、生活、保健、福祉上の問題点とそれらの連携について助言を行った。
3）三重県立看護大学地域交流研究センター プロジェクト	平成13年4月～ 平成17年3月	「高校生の骨強度向上因子と生活習慣病予防教育の研究」プロジェクト共同研究員。三重県内の高等学校を訪問し骨検診とアンケート調査を行い、生活習慣、ストレス、運動習慣、食習慣から骨強度に影響を与える因子を分析した。
4）継続教育事業	平成14年5月15日 ～12月25日	「三重県立病院看護職員臨床看護研究研修会」研修担当。県立病院看護職員の看護研究活動への指導。
	平成15年5月7日 ～12月20日	平成15年度三重県立病院看護職員臨床看護研究研修会「看護研究Ⅰ」担当
	平成18年1月18日	県立病院看護研修（看護研究指導者コース）、テーマ「効果的な研究発表のために」というタイトルで研修生に指導した。
5）プロジェクト共同研究員	平成23年4月～ 平成25年3月	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター、教育―研究―実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発。
6）企業提携	平成13年12月～ 平成16年3月	福祉用具開発企画プロジェクト（日本福祉大学、㈱イノアックコーポレーション共催）
7）産官学連携	平成15年1月～ 平成16年6月	三重の21世紀リーディング産業展実行委員（平成15・16年度2期）

事項	年月日	概　　要
8）委嘱（三重県工業技術振興機構） ①審議会委員	平成10年6月～ 平成11年3月	平成10年度先導的技術開発等支援事業に係る「福祉用具開発審議会」の審議会委員
②「研究会専門委員」	平成10年6月～ 平成11年3月	平成10年度先導的技術開発等支援事業に係る「研究会専門員」
4　その他		
（委員会活動）		
1）三重県立看護大学関連	平成9年4月	広報委員会委員（平成11年3月まで）
	平成11年4月	研究紀要委員会委員、人権委員会委員（平成13年3月まで）
	平成13年4月	広報公開講座委員会委員（平成15年3月まで）
	平成15年4月	広報公開講座委員会委員（平成17年3月まで）
	平成17年4月	ファカルティ・ディベロップメント委員（平成19年3月まで）
2）奈良県立医科大学関連	平成19年4月	学務委員会委員（現在に至る）
	平成19年4月	カリキュラム部会委員（現在に至る）
	平成19年4月	助産コース選考委員（平成23年3月まで）
	平成19年4月	実習部会委員（平成20年3月　まで）
	平成21年7月	実習部会委員（現在に至る）
	平成19年4月	ファカルティ・ディベロップメント委員会委員長（現在に至る）
	平成21年4月	国家試験対策部会委員長（平成20年3月まで）
	平成19年6月	入学試験委員会編入学学科試験委員（平成24年3月まで）
	平成22年4月	大学院医学研究科修士課程（看護学）設置準備委員会委員（平成24年3月まで）
3）岐阜医療科学大学関連	平成24年4月	国家試験対策ワーキング長（現在に至る）
	平成24年4月	国際交流委員会副委員長（現在に至る）
	平成24年4月	4年生学年主任（現在に至る）
4）奈良学園大学関連	平成264年4月	奈良学園大学評議員（現在に至る） 学生支援センター長　学生委員長（現在に至る） 国家試験対策委員長（平成26年3月まで） 教務部会部会長（現在に至る） 実習部会副部会長（現在に至る）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1. 介護の禁句・介護の名句	共著	平成10年8月	黎明書房	福祉・看護・保健の領域におけるサービス の提供者が、利用者と分かりあえる関係をつ くるため、両者間のコミュニケーションについて考察した。コミュニケーションの検討方 法としては項目ごとに事例（状況設定）を設け、その中でのコミュニケーション内容を 示し、望ましいコミュニケーションのあり方 とその根拠を示した。 A5判　全214頁 編著：星野政明、増田樹郎 共著者：秋野由美子、池田由紀、石村由利子、伊藤桜、伊藤千代子、稲垣利久、岩田香織、 興津悦子、奥山みき子、越智厚美、小沢いくよ、加川知映子、上本野唱子、川出富貴子、 河原宣子、北島健吾、黒田裕子、小林文子、 三枝清美、酒井恵美子、佐藤富美子、菅恵美子、杉浦静子、曽我幸子、田窪美子、坪井希 恵、長池由美、長尾淳子、鍋島修治、西尾陽 子、八田勘司、濱井桂子、原優子、東八重子 、藤井美津子、藤田千晶、藤本幸三、増田康 弘、水谷成子、森下利子、柳沢理子、山下千 鶴子、山田葉子、山本かのこ、吉川順子、渡邊陽子 本人担当部分：「利用者の不安や不満を理解する」、「自立を促したいときの声かけ」の項目の事例を提示した。P.40-P.41、P.88-P.89
2. 介護福祉士養成シリーズ①『介護の基礎』	共著	平成22年10月	黎明書房	介護の考え方について理解するとともに、介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ、介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的として著した。介護の意義や役割、介護サービスのあり方など介護の考え方について、初めて学ぶ人でも分かるようていねいに解説。介護福祉援助実践で活用できるコミュニケーションの知識と技術についても詳しい説明となっている。 A5判　全204頁 編著：守本とも子、星野政明 共著者：守本とも子、星野正明、三浦辰哉、原田理恵、溝上五十鈴、土田耕司、羽柴香恵、河野喬、新谷奈苗、吉村雅世、西薗貞子、西元康世、甲田宗嗣、上本野唱子、石崎利恵、川合百合子 本人担当部分：第11章「介護におけるコミュニケーションの基本」というタイトルで、高齢者とコミュニケーションを図る上での留意点について記述した。P.152-P.161

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
1. 出血児の看護の実際　小児白血病11例のケアをとおして	共著	昭和56年11月	へるす出版 小児看護 第4巻第12号 P.1638-P.1641 A4判	急性白血病患児の出血と感染防止のための効果的な援助を11事例をもとにまとめた。白血病治療の制ガン剤は白血球減少や血小板減少を招く。また、同時に用いられる副腎皮質ホルモンは易感染になりやすい。出血と感染は急性白血病患児の予後を左右するため、確実な方法での予防行為や異常の早期発見が必要である。出血については、出血の早期発見および誘因となる行為の予防であり、感染防止は感染経路の遮断、身体の保清であった。 本人担当部分：11事例の抽出、出血予防と対処 共同執筆者：笠井時子、上本野唱子
2. 清潔の文化人類学的考察―現代人の意識と実態―	共著	昭和58年12月	三重県立看護短期大学紀要第4巻 P.39-P.88 B5判	日本人の伝統的な清潔意識（穢れ、汚れ意識）が看護援助の中において具体的にどのように生かされ展開される必要があるかを掴むため、高校生から一般社会人1489名、医療施設300箇所を対象に郵送による調査を実施した。調査内容は、現代人の清潔意識と清潔行動、水と清潔、色と清潔、情緒レベルの清潔である。その結果、清潔意識と清潔行動は深く結び付いていたが、清潔意識と汚れ意識は必ずしも一致しなかった。 本人担当部分：データの分析、考察の一部 共同執筆者：川出富貴子、楠美智子、明神啓子、吉井勢津子、臼井徳子、沼田享子、加藤ふみ子、村瀬津美子、田中貴美子、山田富子、早川礼子、落合みどり、松下正子、上本野唱子
3. 再構成にみる母親の育児態度の変容と学生の関わり―愛情を受けられないまま育った6歳の発育不良の子供を通して―	共著	昭和59年12月	三重県立看護短期大学紀要第5巻 P.57-P.66 B5判	小児看護実習中、6歳の子どもに愛情を持つことができない母親とその児を、学生が受け持った。この母子に学生が関わったこと、入院という異なる環境におかれたことから、母親が児に愛情を持って接することができるようになった。この過程を学生がおこなった再構成および記録類から考察した。学生の母親に対する態度は否定から理解、承認へ変化していた。相手を認め理解する態度が問題解決につながることを示した事例であった。 本人担当部分：データの整理、考察の一部 共同執筆者：臼井徳子、川出富貴子、上本野唱子
4. 先天性心疾患に細気管支炎を併発した患児のタッピング・吸引の一方法	単著	昭和60年6月	へるす出版 小児看護 第8巻第6号 P.764-P.770 B5判	先天性心疾患（単心室・完全大血管転移）に細気管支炎を併発した、意識のない、人工呼吸器を使用している11ヵ月児の、気管内分泌物を効果的に排泄させる方法について述べた。効果的な方法は、気管内吸引、タッピング、体位変換であった。気管内吸引は定期的に、しかも無菌操作に注意し、時間をかけないことと、タッピングは２方向から行い、肺尖部 および腋窩も十分に行なうことであった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 臨床実習意欲に関する調査―意欲の変動と要因について―	共著	昭和60年12月	三重県立看護短期大学紀要第6巻 P.95-P.103 B5判	臨床実習を効果的に行なうには知識だけではなく、学生の主体性と意欲的な取り組みが必要である。実習指導の効果的な方法について知るため、実習中である本学3年生にたいし、実習意欲とそれに関係する因子についてアンケート調査をおこなった。実習意欲は低い傾向であったが最終日に向けて高く、一日のうちでは、開始前より終了後の方が高かった。意欲に関する因子で出現率が高かったのは看護過程、患者、身体的問題であった。 本人担当部分：データの収集・整理、考察の一部 共同執筆者：加藤ふみ子、上本野唱子、田中貴美子、辻川真弓、西田良子、早川礼子、村瀬津美子、松下正子、山田富子
6. 小児看護実習における保育所実習の学習効果	共著	昭和61年12月	三重県立看護短期大学紀要第7巻 P.69-P.77 B5判	小児看護実習では健康な児を知るための保育所実習と病児を看護する病院実習の2つの実習を行なっている。病院実習での保育所実習の効果の活用について知るため、学生によかった面・悪かった面について質問紙調査を行い、ブルームの教育目標にそって分類をおこなった。保育所実習が病院実習に役立ったと回答した学生は約4分の3であった。ブルームの分類では認知領域が最も多く、ついで精神運動領域、情意領域の順であった。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：上本野唱子、臼井徳子、川出富貴子
7. 学生からみた看護場面における再構成の有効性	共著	昭和62年12月	三重県立看護短期大学紀要第8巻 P.127-P.135 B5判	小児看護実習では援助者のあり方に気づけることを主眼に、再構成を用いた実習指導を行なっている。再構成の評価が教師の一方的なものに陥らないため、再構成を行なうことについて、学生を対象に質問紙による調査を実施した。再構成の場面を書くことについての回答は、書くことにより自己の振り返りができたが多く、場面検討後の気持ちについての回答は、気持ちがホットした、すっきりした、気持ちが軽くなった、が多かった。 本人担当部分：データ収集、データ整理 共同執筆者：臼井徳子、上本野唱子、川出富貴子
8. 小児看護実習における拒否からの学び	共著	昭和63年12月	三重県立看護短期大学紀要第9巻 P.95-P.102 B5判	小児看護実習中の学生は受けもち児から時々拒否される場合がある。患児の拒否は生命の危機感を感じたときや援助者の愛情不足を感じたときの表現として現われている場合がある。実習中の学生が遭遇した、特に深刻と思われる拒否を3つ取り上げ、記録類から原因を検討した。拒否にあう原因は学生が患児に対し恐怖心や先入観を持った時、自信がない時であった。自分の態度を振り返り、子どもへの理解が深まった時、関係が好転した。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：上本野唱子、臼井徳子、川出富貴子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 看護教育における情意領域へのアプローチ	共著	平成1年12月	三重県立看護短期大学紀要第10巻 P.135-P.142 B5判	B.S.ブルームは教育目標を認知領域、情意領域、精神運動領域の3領域に分類している。看護教育では、1980年の全国大会で発表された後この領域の概念が明確になった。情意領域は態度、価値観および信念などを含み、看護教育において重要な位置を占めると思われるが、これまで取り組みがあまりなされてこなかった。その原因をさぐると共に、情意領域に影響を与えていると思われる感動について考察した。 本人担当部分：文献検索、資料収集 共同執筆者：川出富貴子、臼井徳子、上本野唱子
10. 若年女子学生の健康習慣と健康度との関係に関する研究	共著	平成2年12月	三重県立看護短期大学紀要第11巻 P.1-P.6 B5判	健康水準と健康習慣実行率の密接な関連が1972年、Breslowらにより報告された。健康習慣の実施は、成人病発症に関連して注目されてきたことから、若年齢からの健康生活習慣にたいする動機づけを促す資料を得るため、18－32歳の女子学生を対象に、健康習慣実行状況と簡易化Cornel Medical Index(CMI)を用いた調査をおこなった。健康習慣実施項目数の低いものが多く、CMIとの関連では適正体重維持に有意差が認められた。 本人担当部分：データの整理、成績、考察の一部 共同執筆者：臼井徳子、上本野唱子、草川好子、川出富貴子
11. 対象・援助者間における態度の変容	共著	平成2年12月	三重県立看護短期大学紀要第11巻 P.65-P.72 B5判	小児看護実習では再構成を用い学生の実習中の態度のあり様について検討している。母親から虐待を受けていた4ヵ月児を学生が受け持ち、付き添いであった祖母の態度も好転していった。その好転の過程を学生の再構成をもとに考察した。祖母の患児にたいする態度は否定的な想いから肯定、理解へと変化していき、同時に児も安心し落ち着くようになった。学生の態度も自信のなさから自信を持った態度に変化していた。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：上本野唱子、臼井徳子、川出富貴子
12. 病名告知時の母親の受けとめ方とその後の変容	共著	平成3年12月	三重県立看護短期大学紀要第12巻 P.71-P.78 B5判	小児癌の子どもを持つ母親が病名を告知された時点から、その後の心理過程を知るために、小児癌と診断され、調査時に生存している児20名の母親を対象に面接調査をおこなった。病名を告知された母親の受けとめ方は冷静が4名であり、不穏は16名であった。さらに調査時における母親の心理をフィンクとコーンによる危機モデルにより分類した。20名全員が第一段階および第二段階を通過していた。 本人担当部分：データ収集、結果、考察の一部 共同執筆者：川出富貴子、臼井徳子、上本野唱子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 未熟児室実習における学習効果―記録類の内容分析を通して―	共著	平成3年12月	三重県立看護短期大学紀要第12巻 P.93-P.99 B5判	未熟児室実習は開始前の学生の不安は大きいが、半日も実習すると“かわいい”“感動した”ということばが聞かれるようになる。実習に対する態度がこのように変化する要因を、学生の記録類をもとに、B. Berelsonにより開発された手法を用い内容分析をおこない、さらに認知領域、情意領域、精神運動領域に分類した。結果は認知領域が多く、情意領域と精神運動領域はほぼ同数であった。 本人担当部分：データの整理、結果 共同執筆者：臼井徳子、上本野唱子、川出富貴子
14. 小児看護実習における情意領域の検討（第1報）	共著	平成6年1月	三重県立看護短期大学紀要第14巻 P.31-P.35 B5判	効果的な小児看護実習をすすめるためには情意領域へのアプローチが重要である。情意領域の核となるのは“感動”であると考え、小児看護実習中の学生の感動記録を量的に分析し、週別比較、グループ間比較、年度間比較をおこなった。週別比較において、両年度共、実習経過1週目の感動数が他の週に比べ有意に多かったが、他の比較では有意な関連はみられなかった。感動喚起やグループダイナミクスについての検討が必要と考える。 本人担当部分：データ整理、統計処理、結果 共同執筆者：橋爪永子、上本野唱子、臼井徳子、川出富貴子
15. 小児看護実習における情意領域の検討（第2報）	共著	平成6年1月	三重県立看護短期大学紀要第14巻 P.35-P.39 B5判	効果的な小児看護実習を行なうため、小児看護実習中の学生の感動記録をB. Belerusonの内容分析の手法を用い、質的に分析した。感動は大きくは“外的な存在に心を動かされたもの”(A)、“自分自身が対象になっているもの”(B)に分類できた。さらに(A)はB.S. Bloomの教育目標領域の認知領域、情意領域に分類でき、(B)は受け持ち患児との関 係樹立プロセスに分類できた。感動は極めて個人的なことであることがわかった。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：上本野唱子、橋爪永子、臼井徳子、川出富貴子
16. 日本人の限界寿命に関する統計的検討	共著	平成6年1月	三重県立看護短期大学紀要第14巻 P.53-P.60 B5判	近年の平均寿命の伸びは70歳代以上の死亡率の改善によるものが大きく、最長寿者の年齢は増加の傾向を示してはいない。今後わが国は高齢社会の一途をたどると予測され、限界寿命の予測は福祉政策を考える上で重要である。最近9年間の死亡率から回帰直線を求め、外挿法により限界寿命および年齢誤差の推定をおこない、男子は103.7－104.8歳、女子は103.3－104.5歳の値を得た。天寿全うの場合は115歳位が予測された。 本人担当部分：文献検索、データ整理 共同執筆者：冨田泰子、坂口けさみ、上本野唱子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. 小児慢性病棟実習における学生の感動についての検討	共著	平成6年12月	三重県立看護短期大学紀要第15巻 P.9-P.13 B5判	効果的な小児看護実習を行なうため、慢性期病棟の実習について、感動の内容と受けもち児との関係を学生の実習日誌をもとに分析した。感動の内容は週を経る毎に受けもち児に対する増加がみられた。受け持ち児との関係は、感動有が患児との関係も良く、実習中の気持ちも良いと回答した者が多かった。感動の具体的な内容は、学生と患児との関わりが多く、ブレスローのカテゴリー分類では、情意領域の感情的態度が多かった。 本人担当部分：データ整理、統計処理 共同執筆者：橋爪永子、上本野唱子、臼井徳子、川出富貴子
18. Survey of the Recent Works on the Human Milk Composition Appered During Past Five Years. Ⅰ Milk Compositions as Nutrients for Infants	共著	平成6年12月	三重県立看護短期大学紀要第15巻 P.39-P.51 B5判	看護短期大学の母乳研究チームはこれ迄、母乳成分と産科学的因子（出生時体重・性別・母親のカウプ指数・母親の年齢）との関連を研究してきた。今回、その研究を深めるため、1988－1993年までの５年間の国際誌の文献検索を行い、乳汁成分の分析に意味のある170の文献を得た。その中でも特に、乳児栄養に関する蛋白質と炭水化物、脂質組成、カルシユム、鉄　ミネラル、ビタミンについて紹介した。 本人担当部分：文献検索、データ整理 共同執筆者：Fumio Tanaka、Setuko Yosii、Syoko Kamimotono、Mitiko Kusunoki、Kiyomi Kitamura
19. Survey of the Recent Works on the Human Milk Composition Appeared During Past Five Years. Ⅱ Various Aspects of Milk Composition	共著	平成6年12月	三重県立看護短期大学紀要第15巻 P.39-P.51 B5判	看護短期大学の母乳研究チームはこれ迄、母乳成分と産科学的因子（出生時体重・性別・母親のカウプ指数・母親の年齢）との関連を研究してきた。1報では、乳児栄養の観点から乳汁成分についての文献検討をおこなった。2報では、現在興味がもたれている各種領域での見解（未熟児栄養・人類学的・疾患のある母親からの母乳栄養・乳汁中の薬物・免疫成分・ホルモンの影響）について、過去5年間の文献から紹介した。 本人担当部分：文献検索、データ整理 共同執筆者：Fumio Tanaka、Setuko Yosii、Syoko Kamimotono、Mitiko Kusunoki、Kiyomi Kitamura
20. 小児慢性病棟実習における学生の感動についての検討	共著	平成6年12月	三重県立看護短期大学紀要第15巻 P.9-P.13 B5判	効果的な小児看護実習を行なうため、慢性期病棟での実習日誌をもとに、感動について分析をおこなった。感動を有したものは、実習最終日には他のどの日と比較しても有意に多かった。感動内容は週を経る毎に受けもち児に対する内容の増加がみられた。実習中の気持ちと患児との関係は週を経る毎に良くなっていた。実習中の気持ちが良かったものと患児との関係が良かったものは、感動有が有意に多かった。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：上本野唱子、橋爪永子、臼井徳子、川出富貴子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21. シルバービジネスのマーケテイング―四日市市における実態調査を中心にして― （修士論文）	単著	平成7年1月	三重大学大学院	高齢期の生活の質の向上のため、高齢者向け商品・サービスの認知と利用状況を、四日市市に在住する一般住民45－84歳、4000人に対しアンケート調査を行い、民間企業7社と行政に対しヒアリング調査を行なった。一般住民の認知・利用状況は低い傾向にあった。ヒアリング調査における認知拡大上の問題点は公的規制の緩和、特定業者の優位性、販売経路の閉塞性、要援護者か健康者かのどちらか一方を対象にした2局分化型であった。 A4判　全60頁
22. 四日市市におけるシルバービジネスのマーケテイング	共著	平成7年3月	四日市地域経済研究所自主調査研究No.36 P.1-P.26 B5判	高齢期の生活の質の向上のため、高齢者向け商品・サービスの認知と利用状況を、四日市市に在住する一般住民45－84歳、4000人に対しアンケート調査を行なった。認知に有意な関連が認められたのは、人口密度とモラール得点（高齢期の主観的幸福感）の高い人および活動の型であった。商品・サービスの認知の拡大には情報が大きく関与する。帰属集団の多さと集団間移動の活発な人に情報伝達役割を担ってもらう必要がある。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：今尾雅博、上本野唱子
23. 血圧測定技術教育に関する研究血圧測定一致程度と視覚情報との関係 （査読付）	共著	平成7年6月	医学書院 看護教育第36巻第6号 P.518-P.523 B5判	血圧測定値の信頼性を高めるための手段上および技術教育上の留意点を得ることを目的に、血圧測定中の水銀柱の挙動とコロトコフ音とを同時収録したVTR30本を検討した。測定値の一致性が得られ難かったのは、被検者の最高血圧に比して水銀柱を上げすぎた条件、および低い最低血圧の条件であった。この両者は、測定者の注意集中維持時間が長くなる状況であるため、適正な水銀柱の高さと注意集中維持訓練の必要性が示唆された。 本人担当部分：データ整理、統計処理、結果、考察 共同執筆者：林文代、辻川真弓、臼井徳子、松下正子、上本野唱子、草川好子、河合富美子、杉浦静子
24. 慢性病棟における小児看護実習についての検討(2)―再構成の側面から―	共著	平成7年12月	三重県立看護短期大学紀要第16巻 P.51-P.55 B5判	小児看護実習効果を慢性病棟と急性病棟間で比較するため、1看三年生（61年度33名急性病棟、6年度50名慢性病棟）に対し再構成の分析と質問紙による調査を実施した。動機についての検討では両年度とも「自己の言動に対する振り返り」が最も多くみられ、再構成を行なうことによる気づきでは、慢性病棟の「考えの広がり」が有意に多かった。看護過程段階では、急性病棟では実施が多く、慢性病棟では情報収集が多かった。 本人担当部分：データ処理 共同執筆者：臼井徳子、橋爪永子、上本野唱子、川出富貴子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25. シルバービジネスと公的規制―ウエルネスからみた医療制度の課題― （査読付）	共著	平成7年12月	三重大学社会科学学会法経論叢第13巻第1号 P.23-P.52 A5判	シルバービジネスの関連調査において、シルバービジネスの供給、需要推進上での問題点に低価格志向と健康志向が明らかになった。健康志向をウエルネス（心身の良好状態の維持管理および回復）ととらえ、それを遂行する上での1つの課題となるものとして、現行医療制度をとりあげ、ウエルネスとの関連で考察した。その結果、医療関連の公的規制の存在、顧客志向の欠落、医療消費者の情報不足および意識改革が明らかになった。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：今尾雅博、上本野唱子
26. 在宅介護基礎調査 老年者向けサービスに対する一般住民の意識 （査読付）	共著	平成8年2月	医歯薬出版 月刊総合ケア第6巻第2号 P.64-P.68 B5判	老年者向けに供給されている民間サービスのうち、12種類についての認識状況を三重県Y市に在住する一般住民（向老者群・老年者群各2000名）を対象に質問紙調査を行い、認識に関連していると思われる属性について検討した。両群の認識に関連している属性はPGCモラール（高齢期の主観的幸福感）高得点群であった。この他に向老者群は健康群と年収500万円以上であり、老年者群では活動型と年収300万円以上であった。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：上本野唱子、冨田やす子、川出富貴子
27. 3歳児をもつ母親の育児不安と子どものイメージについて	共著	平成8年2月	三重大学医療技術短期大学部紀要第4巻 P.217-P.225 B5判	3歳児を持つ母親の、育児に関する気がかりや不安（以下不安と略）を明らかにするため、3歳児検診に訪れた母親を対象に、育児に関する不安の有無、内容および子どもに対するイメージについて調査を行なった。不安が多くみられた母親は当該児が第1・2子にあたり、子ども数が少なく、25－35歳の母親であった。不安の内容は、成長発達に関するものが多くみられ、不安を持っている母親は子どものイメージを低く持っていた。 本人担当部分：データ収集、統計処理 共同執筆者：杉本陽子、前田郁子、臼井徳子、上本野唱子、橋爪永子、川出富貴子
28. 合併症産婦の母乳成分の研究―蛋白質、中性脂肪、乳糖― （査読付）	共著	平成8年3月	母性衛生学会誌第37巻第1号 P.82-P.89 B5判	正常分娩例（妊娠を正常に経過し、分娩を経膣及び帝切で行なった者）と、異常分娩例（妊娠中に中毒症や糖尿病などを合併し、分娩を経膣及び帝切で行なった者）の妊産婦31名の産褥1日目から60日目までの母乳成分を分析した。異常分娩例の乳汁が正常分娩例乳汁より低い値を示したのは、初乳の総蛋白質濃度であり、異常分娩例間での乳汁比較では糖尿病合併群の乳糖濃度が最も高い値を示していた。 本人担当部分：データ整理 共同執筆者：北村キヨミ、吉井勢津子、坂口けさみ、上本野唱子、楠美智子、田中文夫、村田睦男、鈴木皓久子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29. 合併症産婦の母乳成分の研究（Ⅱ）―カルシウム、マグネシウム― （査読付）	共著	平成8年6月	母性衛生学会誌第37巻第2号 P.230-P.235 B5判	正常分娩例（妊娠を正常に経過し、分娩を経膣及び帝切で行なった者）と、異常分娩例（妊娠中に中毒症や糖尿病などを合併し、分娩を経膣及び帝切で行なった者）の妊産婦31名の産褥１日目から60日目までの母乳成分を分析した。カルシウム濃度は正常分娩例より異常分娩例の乳汁の方が高値を示し、マグネシウム濃度は正常および異常分娩例乳汁ともに差異は認められなかった。 本人担当部分：データ整理 共同執筆者：北村キヨミ、吉井勢津子、坂口けさみ、上本野唱子、楠美智子、田中文夫、村田睦男、鈴木皓久子
30. 看護における芸術的側面に関する考察 （査読付）	共著	平成8年7月	メヂカルフレンド社 看護展望第21巻第8号 P.95-P.105 B5判	看護ケアにおける芸術的側面（内面から発した心のこもった行為）を5つの事例（『精神病者の魂への道』シュヴィング著、精神病院に入院中の患者との関わり、透析シャント造設術を受ける場面、骨髄穿刺の場面、腰椎穿刺の場面）をもとに分析した。この事例をとおして芸術的側面に相互主観的な第二人称的対応と、「母なるもの・愛」という母性性原理をみいだした。看護芸術は援助者－クライアント間の共同の芸術であると考察した。 本人担当部分：事例分析 共同執筆者：川出富貴子、中井とし、上本野唱子
31. 妊娠・分娩に伴う排泄（排便・排尿）情況の変化について （査読付）	共著	平成10年3月	日本母性衛生学会 母性衛生第39巻1号 P.32-P.37 B5判	妊娠・分娩経過に伴う排便・排尿状況を骨盤底筋群弛緩の観点から、M県の市立病院に分娩目的で入院した妊婦412例、女子学生89例を対象に質問紙調査を行なった。排便の規則性のないもの、排便困難などの排便異常、肛門出血などの症状は女子学生及び初産婦に肛門不快症状の脱肛は経産婦に、排尿異常の尿失禁は経産回数に伴い増加することから、妊娠・分娩に伴う排便・排尿異常には骨盤底筋群弛緩が関与していることが推察された。 本人担当部分：統計処理 共同執筆者：坂口けさみ、武井とし子、富田泰子、上本野唱子、浅川圭子、天野信一
32. 呼吸機能訓練の術後呼吸機能に及ぼす効果について―第二報　体位変化に伴う呼吸機能評価― （査読付）	共著	平成11年8月	学習研究社メデイカル出版事業部 月刊ナーシング P.140-P.142 A4判	手術後の体位変化に伴う呼吸機能を評価するため、健康な女子学生を対象に座位、半座位、仰臥位でのFVC、FEV1.0、PEFの測定を行い、各体位とも5回測定をした内の後半3回の測定値から検討した。FVC、FEV1.0は仰臥位の呼吸機能低下が優位であり、体位による呼吸機能低下が認められたが、PEFの呼吸機能は体位による差は認められなかった。術後の呼吸機能を評価するには以上のことに注意をして行なうことが知られた。 本人担当部分：論文作成 共同執筆者：上本野唱子、天野信一、富田泰子、坂口けさみ、浅川圭子、大川恵美、竹下ちづる

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
33. 育児書に記載されたおむつに関する内容の検討 「査読付」	共著	平成11年12月	三重県立看護大学紀要第3巻 P.129-P.134 A4判	母親のおむつの選択には入院中の体験や情報の関与が考えられるため、育児書を情報源の一つとして捉え、布、紙おむつ両方の記載内容を21の項目について6冊の育児書から分析した。各育児書の執筆者は医師、助産婦、保健婦、管理栄養士であり、おむつ記事に関する頁数は2-7.1であった。記載内容にはバラツキと曖昧さがみられ、とくにおむつの選択基準になると考えられる、長所と短所の記述は同一ではなかった。 本人担当部分：資料整理 共同執筆者：二村良子、臼井徳子、橋爪永子、上本野唱子、川出富貴子
34. 外科実習におけるクリテイカルパスの教育効果 （査読付）	共著	平成12年1月	医学書院 看護教育第41巻1号 P.47-P.52 B5判	周手術期看護実習においては、容態の変化が激しいため、学生は看護過程の立案が困難である。そのため、実習に自作のクリテイカルパス導入してきた。今回、導入後の学生に対する教育効果を評価するため、質問紙調査を行なった。実習期間中、全員の学生がクリテイカルパスを使用していた。クリテイカルパスを導入することによって学生は、患者の経過に対する知識レベルでの理解は深まっていたが、実践にはつながっていなかった。 本人担当部分：論文作成指導 共同執筆者：杉崎一美、上本野唱子、辻川真弓、吉井勢津子
35. 福祉用具カタログのコミュニケーション戦略からみた有効性の検討 （査読付）	単著	平成12年5月	日本福祉工学会誌 第2巻 P.37-P.39 A4判	国内の介護ベッド、車椅子及び海外のベッドと車椅子のカタログに対し、コミュニケーション戦略からみた有効性について検討するため、介護経験のある53から61歳までの介護経験のある女性6名に対しグループ・インタービューを行い、その後クリエイター・プランナーによりカタログの分析を行なった。有効であると思われた分析結果は、表紙には商品名を入れること、編集と構成は見易く、分かりやすい内容とすることであった。
36. 福祉用具の医療領域への導入を考える	単著	平成12年11月	医学書院 看護学雑誌 第64巻 第11号 P.1028-P.1034 B5判	人口の高齢化が進む中、さまざまな福祉用具が開発され供給されているが、その福祉用具を病気の治療現場で使用することについての利点について検討した。医療領域への導入が好ましい福祉用具は①除圧用具②寝返り補助器③車椅子であり、それ以外に④既存ベッドを電動ギャッジベッドに改良することを取り上げた。以上の用具は治療中の患者が自分で意志決定し、闘病意欲を高めるため自立を促すのに役に立つと推測した。
37. 小児看護技術演習「離乳食」についての検討 （査読付）	共著	平成12年12月	三重県立看護大学紀要第4巻 P.103-P.107 A4判	小児看護方法1の「小児の生活の援助」の離乳食演習がどのような学習効果となっているのかを知るため学生100名にアンケート調査と実習記録の内容を16のカテゴリーから分析した。離乳食作りの理解と自分にもできるという回答はともに80%以上あり、内容分析では「離乳食作り」に関するものが123件、「手作りの味」に関するものが153件と多くみられた。演習の狙い以外の効果として将来の子育ての活用が挙げられていた。 本人担当部分：実習記録内容分析 共同執筆者：臼井徳子、二村良子、橋爪永子、上本野唱子、川出富貴子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
38. 慢性腎疾患病棟における感冒罹患の実態 （査読付）	共著	平成13年2月	日本小児看護学会誌 第10巻 第1号 P.87-P.91 A4判	感染予防行為を効果的に行なう方法を検討するため、慢性腎疾患病棟に入院し、ステロイド療法を受けた患児49名の感冒症候群罹患の機会を診療記録類から収集し、慢性腎炎、ネフローゼ症候群に分け分析を行なった。両群の罹患者と非罹患者間には有意な差は認められなかった。慢性腎炎の罹患機会は治療終了から3ヵ月までが多かったが月別には有意な差は認められず、ネフローゼ症候群では少量投与、中止後の冬の罹患機会が多かった。 本人担当部分：論文執筆 共同執筆者：上本野唱子、橋爪永子、二村良子、臼井徳子、川出富貴子
39. 病院内での患者の自立と看護用具	単著	平成13年5月	医学書院 看護学雑誌第65巻第5号 P.431-P.434 B5判	福祉用具の活発化に伴い、医療の現場でも看護用具の導入が試みられている。通常深く考えること無く使用されている看護用具は患者の自立を目指して使用されるが、自立を高めるためには患者・援助者間に存在する「贈与の感覚」の見直し、双方向的なインフォームド・コンセントの構築、援助者の被援助者に対する関心を高めることである。看護用具の活発な使用のためには、援助関係を等価にすることが必要であることを総論的に述べた。
40. 呼吸機能訓練の術後呼吸機能に及ぼす効果について―第3報 呼吸機能の日内変動― （査読付）	共著	平成13年5月	学研 月刊ナーシング 第21巻6号 P.138-P.141 B5判	手術後の呼吸器合併症を予防するため呼吸機能訓練が行なわれているが、その呼吸機能訓練の評価を行なうため、成人女性のFVC、FEV1.0、PEFを6、12、18、22時に測定し、日内変動を検討した。FVC、FEV1.0およびPEFの日内変動は6、12、18、22時の順に大きくなる傾向を示したが、FEV1.0についてのみ22時の測定値は6時の測定値よりも有意に大きな値を示した。呼吸機能を評価するには日内変動も考慮して行なうことの必要性が示唆された。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：上本野唱子、天野信一、冨田泰子、坂口けさみ、村嶋圭子
41. 呼吸機能訓練の術後呼吸機能に及ぼす効果について―第4報　肺活量の変化に伴うPEFの変化― （査読付）	共著	平成13年6月	学研 月刊ナーシング 第21巻7号 P.140-P.142 B5判	手術後の呼吸器合併症を予防するため呼吸機能訓練が行なわれているが、その呼吸機能訓練の評価を行なうため、成人女性の肺活量を500mlから最大3000mlまで減少した時のFEV、PEFの変化について検討した。FEV、PEFとも排気量500mlから減少し始め、排気量を増加するに伴いFEVとPEFの値も減少し、両者には0.93以上の高い相関を認めた。PEFの測定値からFEVを推測することは可能であることが示唆された。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：上本野唱子、天野信一、冨田泰子、坂口けさみ、村嶋圭子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
42. 呼吸機能訓練の術後呼吸機能に及ぼす効果について―第1報健常者の呼吸機能評価― （査読付）	共著	平成13年9月	へるす出版 臨床看護 第27巻第10号 P.1551-P.1555 B5判	手術後の呼吸器合併症の予防のため行う呼吸訓練の効果の評価を行なうため、成人女性を対象にPEF、FVC、FEV1.0を5日間、各5回測定し、変動係数(CV) 、変動率から検討した。各測定値は測定回数につれ増加の傾向を示し、CV及び変動率は減少し、5回測定の後半3回の測定値が適していると考えられた。5日間の測定では5日目の後半3回の測定値の信頼度が高く、日を変えての測定では慣れの効果を考慮すべきであることが分かった。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：上本野唱子、吉井勢津子、天野信一、冨田泰子、 坂口けさみ、浅川圭子、佐藤恵美、 伊藤邦子
43. ネフローゼ症候群急性期の看護	共著	平成13年10月	へるす出版 小児看護 第24巻第302号 P.1547-P.1550 B5判	ネフローゼ症候群の急性期の看護を実践に基づいてまとめた。急性期の看護は長期的な入院の初期にあたる極めて重要な時期であるため、児の発達段階や親子関係も考慮し看護を行なう。そのため、治療の援助と同様に生活の援助も重要な看護となる。生活の援助は医療者への信頼を基にした児自身の自立であることから、医療者側は説明と同意を十分に行ない、患児やその家族では看護への家族参加と母子分離であることを述べた。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：上本野唱子、桑原ちはる
44. 直腸瘤の深さからみた骨盤底筋群の弛緩について―第1報　排泄障害との関連性について― （査読付）	共著	平成15年6月	母性衛生第44巻2号 P.182-P.189 B5判	骨盤底筋群の弛緩状態と排泄機能障害の関連を知るため、外科外来を受診した17～89歳の女性患者448例の直腸瘤の深さを測定し、便秘、尿失禁、脱肛などとの関連を検討した。便秘を認めるものは全体の半数近く、尿失禁を認めるものは全体の40%強であり、直腸瘤の深さは便秘を認めるもの、尿失禁を認めるもの、便秘・尿失禁ともに認めるもので有意に深く、女性の排泄機能障害は骨盤底筋群弛緩の関与が推測された。 本人担当部分：データ処理、統計検討 共同執筆者：坂口けさみ、楊箸隆哉、上条陽子、本郷実、上本野唱子
45. 児慢性病棟における学習内容に関する検討―実習記録の分析から― （査読付）	共著	平成15年12月	三重県立看護大学紀要第7巻 P.65-P.69 A4判	慢性病棟での実習の意義や方法を再考するため、腎疾患病棟で実習した学生29名分のレポートと実習日誌232枚を「中心的意味」「学び」から分析し、両者ともに共通する7つのコアカテゴリーが生成された。前者では「対象の理解」、後者では「ケアとしてのかかわり」に関する内容が多く、“褒める”“声かけ”が多数を占めていた。従来、これらのことは援助のポイントとされていたが、援助技法として認定できることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、結果 共同執筆者：臼井徳子、村端真由美、橋爪永子、上本野唱子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
46. 正常新生児の出生後早期における行動状態が体温変動に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成18年8月	「臨床体温」編集委員会、臨床体温　第24巻1号　2006 P.50-P.55 A4判	出生後間もない時期にある新生児が泣くのは体温上昇の為ではないかと考え、正常に出生した在胎週数37周以上、出生時体重2500g以上、アプガールスコア1分値9点以上の新生児10名の生後2時間から7時間までにおける胸部深部温、末梢（足底）深部温を深部体温計で測定し、同時にVTRで児の睡眠・啼泣行動を録画し睡眠期、活動期に分け関連を検討した。児の胸部深部温は睡眠期に低下し、活動期に上昇していた。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：上本野唱子、藤原孝之、　山本巌、山内正憲
47. 看護情報として使用する測定値に影響を与える因子の分析―成人女性の呼吸機能および出生後早期の新生児体温測定値からの検討― （博士論文）	単著	平成18年9月	信州大学大学院工学系研究科	看護師が行う測定値に影響を及ぼす要因の検討を、成人女性の呼吸機能の測定値と出生後7時間までの新生児の体温と行動状態及び体格の差から行ない、成人女性の呼吸機能の検討からは、被験者の“学習効果”が、新生児の体温については頭囲／体重、胸囲／体重、体重／体表面積の大きさが、体温と行動状態の関連からは行動状態の活発な児の方が体温に影響を及ぼすことを明らかにし、測定者の条件が同一であっても被検者の条件によって測定値は変化することを見出した。 A4判 全44頁
48. Cross-Sectional Survey Study on the Relationship between Dairy Product Intake and Bone Density among Adult Women, High School Girls, and High School Boys, both With and Without Exercise （査読付）	共著	平成19年6月	Nutrition research Vol.27、2007 P.618-P.624 A4判	女子・男子高校生（15～18歳）4761名の相対骨密度値を右踵骨で骨強度測定超音波法により測定し、運動習慣と乳製品の摂取頻度との関連を検討した。男子生徒の牛乳摂取と運動群、非運動群の相対骨密度はいずれの群も増加を示した。女子生徒では運動群の牛乳摂取頻度の多かったものが増加したが、牛乳摂取が「毎日」であったものの骨密度は大きく低下した。運動習慣のある女子高校生では牛乳摂取頻度は骨密度低下に影響することの示唆が得られた。 本人担当部分：骨強度測定、アンケート調査、データ整理 共同研究者：Setsuko Yoshii、Shoko Kamimotono、Shiho Sawai、Masako Backman Matsushita、Fumio Tanaka、Darunee Rujkorakarn
49. Influence of Physical Characteristics on Temperature Profile in Normal Neonates at an Early Neonatal Stage （査読付）	共著	平成19年7月	Journal of Human Environmental System Vol.10, No.2, 2007 P.63-P.69 A4判	同一環境下で看護されている児であっても体温が低く推移する児とそうでない児がいる為、体温と体格との関連を検討した。正常出生した在胎週数37週以上、出生時体重2500ｇ以上、アプガールスコア1分値9点以上の新生児10名の生後2時間から7時間までの体温を胸部深部温、抹消（足底）深部温を深部体温計で測定した。測定期間中の体温の推移が低く経過した児は体表面積／体重指数が有意に大きく、頭囲は有意に小さかった。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：Shouko Kamimotono、Kesami Sakaguchi、Takayuki Fujiwara、Iwao Yamamoto

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
50. 化学療法を受ける患児の口内炎発症と白血球数との関連 （査読付）	共著	平成21年4月	小児がん看護　第4巻 P.37-P.41 A4判	化学療法を受ける児の口内炎発生状況を知るため、13名の診療記録から口内炎発症と白血球数、使用薬剤の組み合わせ、治療コースおよび年齢から検討した。口内炎の発症と白血球数との関連はなく、有意であったのは、年齢の高い児であった。発症の高い傾向を示したのは、多剤併用、1コース目の治療であった。化学療法中の児の口内炎発症は年齢、治療薬剤の組み合わせおよび治療コースなども考慮する必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、データ処理、結果、考察、論文執筆における指導 共同研究者：大牟田美幸、高木梢、辻奈緒子、和田容子、西薗貞子、上本野唱子
51. 出生後早期新生児における啼き声の音声分析による検討 （査読付）	共著	平成21年8月	臨床体温　第27巻1号 P.42-P.45 A4判	啼泣と体温上昇について検討するため、生後2時間半から7時間までの胸部と足底の深部温および行動状態を記録し体温上昇に伴う啼き（上昇群）とそうでない啼き（非上昇群）について音声分析により解析した。1回5秒間の啼泣中の発声回数は上昇群の方が多く、発声時間、息継ぎ時間ともに上昇群の方が有意に短かった。体温上昇に繋がった啼泣は発声回数が多く、発声時間、吸気時間ともに短い、激しい頻呼吸状態であった。 本人担当部分：データ収集、データ分析、論文執筆 共同研究者：上本野唱子、山内正憲
52. 看護師がとらえた慢性疾患を持つ学童への看護ケアの意味	共著	平成24年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要第7巻 P.75-P.81 A4判	慢性疾患を持つ学童への看護ケアの意味を看護師の体験から明らかにすることを目的に、慢性疾患病棟に勤務する看護師16名に半構成面接を行い、内容を質的帰納的に分析し、5カテゴリー（①子どもに寄り添う関係②慢性疾患をもつこどもと関わることへの喜びの実感③慢性疾患を持つ子どもの看護の本質に触れる④子どもの成長発達の一課程へのかかわり⑤慢性疾患を持ちながら成長するこどもの将来的な見通し）とサブカテゴリー15、コード43を抽出した。 本人担当部分：論文執筆指導 共同研究者：別所史子、山田晃子、上本野唱子
53. 小児慢性疾患外来における看護ケア実践のプロセスと外来看護の専門性	共著	平成24年3月	小児看護　第35巻第3号 P.375-P.379 A4判	小児慢性疾患外来における家族に対する看護ケア実践のプロセスを明らかにし、外来看護の専門性について検討するため、外来に勤務する看護師5名に対し面接調査を行い、内容分析を行った。得られた結果は5大カテゴリー（入院とは異なる信頼関係構築プロセス、医師と患児・家族との信頼関係の存在、子どもを理解する手がかり、外来受診全体のプロセスに対して留意する、在宅で子どものケアを担う家族）と11サブカテゴリー、31コードが抽出された。 本人担当部分：論文執筆指導 共同研究者：別所史子、田崎あゆみ、山田晃子、上本野唱子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
54. 東大寺における「親子レスパイトケア」の取り組み―障がい児とそのきょうだい支援を通して―（査読付）	共著	平成25年2月	日本看護協会出版会 家族看護学 第11巻第1号 P.155-P.161	対象の児とその家族が離れてレスパイトケアを受けるのではなく、きょうだい（姉や弟）と共にレスパイトケアを受けたきょうだいの、レスパイトケア時における支援の在り方を2日間のケアを通して検討したところ、きょうだいのレスパイト時における支援のポイントは、家族が揃って時間を共有すること以外に①きょうだいがケアの受け手になることの重要性②きょうだいの発達段階に応じた支援③障がいのある子どもも一緒に過ごすであった。 本人担当部分：論文執筆指導 共同執筆者：山田晃子、入江安子、別所史子、上本野唱子、富和清隆
（その他）				
（実践報告）				
1. 小児科病棟・外来における特徴の海外病院との比較	共著	平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要第7巻 P.61-P.66 A4判	台湾の大学附属病院へ見学に行った際、小児病棟・外来が心理的準備、気晴らし、リラクゼーションに加え病院へ来訪する人に対し“教育”の側面も有していると思われたため、国内の小児専門病院、NPO子ども健康フォーラムのプロジェクトによる病院、官学共同事業による病院及び独自の取り組みをしている病院を選び視察、ヒアリングをし、比較したところ、国内の小児病棟、外来においては教育的側面を有しているものは見当たらなかった。 本人担当部分：論文執筆 共同研究者：上本野唱子、宇佐見祐未、山田晃子、別所史子
2. 重症心身障害児とその家族のレスパイトケアの検討―東大寺における「親子レスパイトケア」の取り組みを通して―	共著	平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要第7巻 P.82-P.87 A4判	現在のレスパイトケアは各種制度により、児のみを預かりの対象にして行われている。2010年7月に東大寺（奈良県奈良市）において、東大寺建立の精神と東大寺の持つ独特の雰囲気を楽しんでもらおうと、各種の制度にとらわれない“親子レスパイトケア”を実施した。親と子両方が同時に体験できる試みは、様々な分野のボランティアの協力を必要とするが、双方ともに身体を休めることになり、効果の大きいことが考えられた。 本人担当部分：論文執筆指導 共同執筆者：山田晃子、入江安子、別所史子、上本野唱子、富和清隆
（解説）				
1. ケーススタディで学ぶ「小児科外来」 第1回　小児科外来の特殊性と看護の役割	共著	平成14年10月	日総研出版、外来看護新時代2002、第8巻1号 P.1-P.6 B5判	小児科外来の特殊性を、小児の疾患特徴、疾患の背景にあるものから述べた。小児科外来は一般的な疾患と長期にわたる慢性的な疾患を持った患児や家族を対象にする。一般外来の急性疾患の児に対しては、症状に対する看護を行いながら伝染性の疾患の潜伏に留意し、慢性疾患の児には、保健指導や疾患の管理の評価を行う。外来看護師の看護の役割は多岐であるが、多様なニーズを知るためには「真実の瞬間」を多く作ることにある。 本人担当部分： 論文執筆 共同執筆者：今井可奈子、上本野唱子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. ケーススタディで学ぶ「小児科外来」 第2回おはなしNOTEを活用した看護の質の向上	共著	平成15年1月	日総研出版、外来看護新時代2002、第8巻2号 P.101-P.106 B5判	現在、子育て中の母親が、育児の悩みを持った時、相談をする人や場所も不足している。そのため、小児科外来を受診している母親と医療者がお互い横の繋がりがを持つことを目的に外来に、誰でもが記入できる「おはなしNOTE」を置いた。NOTEには患児や患児の母親の記載があり、必要に応じ医師や看護師もそれに応える形で記載していった。結果、小児外来を受診する児や児の母親と医療者のコミュニケーションが良くなった。 本人担当部分： 論文執筆 共同執筆者： 今井可奈子、上本野唱子
3. ケーススタディで学ぶ「小児科外来」 第3回　時間外診療を希望する母親の情報の解釈について	共著	平成15年4月	外来護新時代2002、第8巻3号 P.135-P.139 B5判	小児外来における時間外診療を希望する母親の背景は時代と共に変化しているため、児の成長発達段階と身体的特徴のみを踏まえた診療諾否をするのではなく、母親の育児環境の背景も知って受診の諾否をすることも必要である。その場合は家庭看護の方法や応急処置の方法を伝えるだけで解決する場合もあるため、母親の訴えを注意深く聞き、人間関係やキーパーソン存在の有無などを知って対応することが必要である。 本人担当部分： 論文執筆 共同執筆者：今井可奈子、上本野唱子
4. ケーススタディで学ぶ「小児科外来」第4回　小児科外来における診察の順番変更	共著	平成15年8月	外来看護新時代2002、第8巻4号 P.135-P.139 B5判	小児科外来を受診する児の中には①一目で緊急性が高いと分かる児、②一般人には分からないが医療者には緊急性が高いと分かる児、③他の患児が感染の危険に晒される可能性のある児、④患児の身体状況よりも家族のいらいら感が募っているものなど様々な児や家族が受診する。そのため、各状況に近い事例を用いて、児や家族の心理や身体状況を考慮した診察順番変更のポイントについて解説した。 本人担当部分：　論文執筆 共同執筆者：今井可奈子、上本野唱子
（報告書）				
1. 調査のまとめ―訪問看護ステーションに向けての調査―	単著	平成11年3月	（財）三重県工 業技術振興機構、高齢者の生活環境調査および福祉・医療用具使用実態調査報告書 P.71-P.72 A4判	福祉用具の開発をする上での問題点を、在宅において訪問看護婦を利用している高齢者が現在利用している福祉用具の種類と問題点について、訪問看護婦を対象に質問紙調査を行なった。福祉用具の問題点としては、住環境とマッチするものが少なく、使用においてはなんらかの注意と工夫の必要があること、福祉用具が高価であること、購入前に試用の機会がなく、個人のニーズに即したものが得られにくいことの指摘がみられた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 幼い子を持つ母親の仲間づくり活動と「育児の楽しさ度」に関する実態調査研究報告書―0.1.2歳児を持つ母親の子育てサークル活動から―	共著	平成13年3月	2000年度 三重県女性センター調査研究支援事業報告書 P.1-P.64 A4判	三重県内の都市部で活動している2歳未満児を持つ子育て支援サークルに加入している母親82名と、その設置者25名に対し「育児の楽しさ」についての調査を行なった。母親は子育てサークルを気軽に外出できる場所、子どもと母親の仲間づくりの場と考えており、サークルに参加することに楽しさを感じていることが分かった。設置者はサークルを情報交換の場と母親のストレス解消の場と捉えていたが自主性が乏しいと感じていた。 本人担当部分： 調査、データ整理 共同研究者：石川佳奈子、岡崎聡子、松浦尚美、小倉知子、笹の内あゆみ、梶 美保、上本野唱子、豊田和子
3. 高校生の骨強度向上因子と生活習慣病予防教育の研究	共著	平成16年3月	地域交流研究センター研究開発プロジェクト研究成果報告書 平成12-15年度 三重県立看護大学 P.1-P.137 A4判	三重県の高校生の骨強度とそれに影響を及ぼすと考えられる食生活、睡眠時間、運動習慣、ストレスなどの関連を知るため、子高校生2722名、男子高校生2175名、成人1616名の骨強度を超音波法で測定し関連を検討した。有意に関連していたのはわかめ、ヨーグルトの摂取、小・中学時代の運動習慣、睡眠時間の長さ、現在の体重であり、骨強度が最高に達するまでの23歳頃までの生活習慣を整える必要のあることが分かった。 本人担当部分：アンケート調査、骨強度測定、データ整理、統計検討 共同執筆者：吉井勢津子、上本野唱子、沢井志穂、田中文夫、草川實、米沢亀代子、和田文子、中野和代、金田典男
4. 「少女マンガ」と「少年マンガ」の内容分析	共著	平成16年3月	三重県高等教育機関連絡会議 少子化を受けての意識、制度両面における若年層に対する支援策に関する基礎研究 「人気マンガにおけるジェンダー観・家族観に関する調査」に基づいて研究報告書 P.54-P.63 A4判	マンガ分析は、少女マンガ9冊、少年漫画20冊を分析し、質問紙調査は小学生から大学生に対し、「クレヨンしんちゃん」、「ONE PIECE」について行い、将来の生活設計、両誌の受容について検討した。マンガ分析において女性は「伝統的な日本の男性が好む女性像」として描かれ、質問紙調査では、働く母親や戦う女性に対する男性と女性との間での意見の相違がみうけられ、さらには「好ましい男性像」も異なっていた。 本人担当部分：マンガ分析、調査分析、マンガ分析の結果、考察の執筆 共同執筆者：岩本美砂子、麻野雅子、上本野唱子、梶美保
（書評）				
1. 「感性の看護論」 近森扶 美子著	単著	昭和61年1月	医学書院 P.88－P.89 B5判	看護理論は外国で構築されたものが多く、日本の文化、風土を加味して作られているのは少ない。この本は、臨床の現場から体験に基づいて生み出された看護論で構成されている。日本の文化、風土を加味して作られた、看護を自然科学としてではなく、人間科学としてとらえた画期的なものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（看護師国家試験模擬試験問題作成）				
1. 国家試験模擬試験作成状況設定問題1事例3題作成	単著	平成22年7月	メディカコンクール2011年度受験者対象第2回 メディカ出版 P.68-P.69	メディカ出版が行っている「メディカコンクール2011年受験者対象第2回看護師国家試験対策テスト」の「川崎病」1事例の状況設定問題2題の試験問題を作成した。
2. 国家試験模擬試験作成状況設定問題1事例3題作成	共著	平成22年11月	メディカコンクール2011年度受験者対象第3回 メディカ出版 P.129-P.130	メディカ出版が行っている「メディカコンクール2011年受験者対象第3回看護師国家試験対策テスト」の「熱性けいれん」1事例の状況設定問題3題の試験問題を作成した。 本人担当部分：出題内容の検討、選択肢の検討、フィードバック内容の検討など出題全般に関する編集。 共同担当者：上本野唱子、山田晃子
（学会発表）				
1. 心疾患患児を持つ母親の次回妊娠・分娩に対する意識と出産の実態	共同	昭和60年10月	日本母性衛生学会第26回大会（岡山市）	先天的な異常を認められた児を出産することや、発育途上における障害の発見は母親にとって、次回の妊娠や出産に影響を与える。異常児を出産したことのある母親は次回の妊娠・出産にたいしてどのような事を不安に思っているかの意識と実態についてアンケート調査をおこなった。次回の妊娠・出産は異常児出産の不安とは関連がなく、患児の将来を予測しての現実的な問題との関連で決定されていることが分かった。 本人担当部分：データ整理、統計検討 共同発表者：坂口けさみ、上本野唱子、伊藤セツ子、浜地裕子
2. 心疾患患児を持つ母親の養育の実態	共同	昭和60年10月	日本看護学会第16回小児看護（名古屋市）	心疾患患児は小児期の養護と管理のあり方が将来に大きな影響を与える。患児を養育する母親は患児の疾病の程度や、発達段階により様々な問題を有している。その問題を把握するため、養育の実態について小児循環器外来に通院中の患児の母親にアンケート調査を実施した。養育の大変さと関連がみられたのは手術終了者であった。手術が無事終了するまでの児の管理と、母親の支援が大切であることがわかった。 本人担当部分：論文作成 共同発表者：上本野唱子、坂口けさみ、伊藤セツ子、浜地裕子
3. 小児看護実習領域における情意領域の検討（第1報）	共同	平成5年7月	日本小児看護研究学会第3回（神奈川市）	効果的な小児看護実習を行なうためには情意領域へのアプローチが重要である。情意領域の核となるのは“感動”であると考え、小児看護実習中の学生の感動記録を量的に分析し、週別比較、グループ間比較、年度間比較をおこなった。週別比較において両年度とも実習経過1週目の感動数が他の週に比べ有意に多かったが、他の比較では有意な関連はみられなかった。感動喚起や、グループダイナミクスについての検討が必要と考える。 本人担当部分：データ整理、統計検討 共著者：橋爪永子、上本野唱子、臼井徳子、川出富貴子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 小児看護実習における情意領域の検討（第2報）	共同	平成5年7月	日本小児看護研究学会第3回（神奈川市）	効果的な小児看護実習を行なうため、小児看護実習中の学生の感動記録をB. Belerusonの内容分析の手法を用い、質的に分析した。感動は大きくは“外的な存在に心をうごかされたもの”（A）、“自分自身が対象になっているもの”（B）に分類できた。さらにAはB. S. Bloomの教育目標領域の認知・情意領域に分類でき、Bは受け持ち患児との関係樹立プロセスに分類できた。感動はきわめて個人的なことであることがわかった。 本人担当部分：論文作成 共同発表者：上本野唱子、橋爪永子、臼井徳子、川出富貴子
5. 合併症妊産婦の母乳主成分の分析	共同	平成5年7月	三重母性衛生学会第8回（津市）	合併症産婦25名の母乳成分（総タンパク質・中性脂肪・乳糖）の分析を行い、正常産婦の母乳成分と比較した。乳汁の分析方法は、総タンパク質はビュウレット法、乳糖はPark-Jhonson法、中性脂肪は臨床検査キットを用いて比色法により行なった。合併症妊産婦の値の方が低かったのは、総蛋白質と乳糖であり、変化が少なかったのは、中性脂肪であった。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：福島千恵子、新田祐貴子、堀珠美、白木澄代、南出美春、鈴木皓久子、北村キヨミ、坂口けさみ、吉井勢津子、上本野唱子、田中文夫、村田睦男
6. 小児看護実習における情意領域の検討（第3報）	共同	平成6年7月	日本小児看護研究学会第4回（神戸市）	効果的な小児看護実習を行なうため、慢性期病棟での実習日誌をもとに、感動について分析を行なった。感動を有した学生は、実習最終日には他のどの日と比べても有意に多かった。感動内容は、週を経る毎に受け持ち児に対する内容が多くなっていた。実習中の気持ちと患児との関係は週を経る毎に良くなっていた。実習中の気持ちが良かったものと、患児との関係が良かった学生は感動有が有意に多かった。 本人担当部分：論文作成 共同発表者：上本野唱子、橋爪永子、臼井徳子、川出富貴子
7. 合併症妊産婦の母乳組成の分析	共同	平成6年11月	三重母性衛生学会第9回（津市）	合併症産婦14名、異常分娩18名、その内帝王切開で分娩した20名の母乳成分（総タンパク質・中性脂肪・乳糖・カルシウム・マグネシウム）の分析を行い、正常産婦の母乳成分と比較した。正常、異常分娩とも差が認められなかったのは、中性脂肪、乳糖、マグネシウムであった。正常および異常分娩との比較において差が認められたのは、総蛋白質とカ ルシウムであった。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：北村キヨミ、吉井勢津子、上本野唱子、坂口けさみ、楠美智子、田中文夫、村田睦男、鈴木皓久子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8. 合併症妊産婦の母乳組成の分析	共同	平成6年12月	日本看護科学学会第14回（大宮市）	合併症産婦14名、異常分娩18名、その内帝王切開で分娩した20名の母乳成分（総タンパク質・中性脂肪・乳糖・カルシウム・マグネシウム）の分析を行い、正常産婦の母乳成分と比較した。正常、異常分娩とも差が認められなかったのは、中性脂肪、乳糖、マグネシウムであった。正常および異常分娩との比較において差が認められたのは、総蛋白質とカルシウムであった。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：北村キヨミ、吉井勢津子、上本野唱子、坂口けさみ、楠美智子、田中文夫、村田睦男、鈴木皓久子
9. 慢性病棟における小児看護実習についての検討（Ⅰ）―小児看護技術経験の側面から―	共同	平成7年7月	日本小児看護研究学会第5回（相模原市）	小児看護実習は慢性期病棟を使用しているが、対象や疾患の限定により学習効果の偏りが危惧された。そのため、1看3年生98名の実習経験録（5年度48名465枚、6年度50名576枚）を見学及び実施内容と回数について分析し、慢性病棟と急性病棟及び外来との比較検討をおこなった。慢性病棟の実施は、慢性病棟の見学、外来、急性病棟の見学及び実施と比較して有意に多く、経験項目では、診療の補助技術が有意に多かった。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：臼井徳子、橋爪永子、上本野唱子、川出富貴子
10. 3歳児をもつ母親の育児不安と子どものイメージについて	共同	平成7年10月	母子精神保健研究会第14回（津市）	3歳児を持つ母親の、育児に関する気がかりや不安（以下不安と略）を明らかにするため、3歳児検診に訪れた母親を対象に、育児に関する不安の有無、内容および子どもに対するイメージについて調査を行なった。不安が多くみられた母親は当該児が第1・2子にあたり、子ども数が少なく、25－35歳の母親であった。不安の内容は、成長発達に関するものが多くみられ、不安を持っている母親は、子どものイメージを低く持っていた。 本人担当部分：データ整理、統計処理 共同発表者：杉本陽子、前田郁子、臼井徳子、上本野唱子、橋爪永子、川出富貴子
11. 消化管術後患者の口腔内常在菌の動態について―第一報、口腔内細菌叢の変化から	共同	平成9年7月	23回日本看護研究学会（久留米市）	術後の口腔内清潔の方法を検討するため、28名の胃管挿入時における口腔内細菌叢を術前、術後1週間、2週目において検討した。術前の口腔内細菌は常在菌が86％を占めていたが、術後は病原性細菌の存在を多数認め、2週目になっても存続する細菌は少なくなかった。特に、感染症の原因とされている緑納菌は術後3日目に29％、2週目に25％を占めていた。胃管挿入時の口腔内清潔は呼吸器感染症の予防の為にも必要なことが分かった。 本人担当部分：データ整理、考察 共同発表者：浅川圭子、上本野唱子、吉井勢津子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 消化管・骨・筋系術後患者の口腔内常在菌の動態について―第2報、口腔ない細菌叢の変化から	共同	平成10年7月	第24回日本看護研究学会（引前市）	周手術期の口腔内清潔の方法を検討するため、胃管挿入を伴う消化管手術患者10名と胃管挿入を伴わない整形外科患者9名の術前、術後3日、術後2週間の口腔内細菌叢を検討した。消化管手術患者の口腔内細菌叢は術前から病原菌を認め、特に術後3日、2週間共にMRSAを認めた。整形外科患者の口腔内細菌叢は術前に2例病原菌を認めたが、以後は認められなかった。口腔内細菌叢の変化の原因に胃管挿入が考えられた。 本人担当部分：データ整理、考察 共同発表者：浅川圭子、吉井勢津子、上本野唱子、坂口けさみ
13. 外科実習におけるクリテイカル・パスの評価	共同	平成10年7月	第24回日本看護研究学会（引前市）	周手術期看護実習においては、容態の変化が激しいため、学生は看護過程の立案が困難である。そのため、実習に自作のクリテイカルパス導入してきた。今回、導入後の学生に対する教育効果を評価するため、質問紙調査を行なった。実習期間中、全員の学生がクリテイカルパスを使用していた。クリテイカルパスを導入することによって学生は、患者の経過に対する知識レベルでの理解は深まっていたが、実践にはつながっていなかった。 本人担当部分：論文作成指導 共同発表者：杉崎一美、上本野唱子、辻川真弓、吉井勢津子
14. 直腸瘤深さからみた骨盤底筋群の弛緩状態と加齢、分娩、排泄障害との関連性について	共同	平成10年7月	第24回日本看護研究学会（引前市）	骨盤底筋群の弛緩状態を示す直腸瘤の深さを、外科外来を受診した448例を対象に加齢分娩回数、便秘、尿失禁から検討した。直腸瘤の深さが有意であったものは、便秘を認めるものと認めない者、尿失禁のある者と無い者、便秘・尿失禁共に認める者と認めないもの、脱肛を認める者と認めないものであり、加齢、子宮摘出者は関連性は認められなかった。分娩回数では25から64歳の分娩回数3回の者は2回の者に比して有意に深かった。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：坂口けさみ、山崎章恵、湯本敦子、武井とし子、上本野唱子、天野信一、富田泰子、浅川圭子
15. 加齢、分娩の排泄（排便・排尿）機能に及ぼす影響―直腸瘤深さからの検討―	共同	平成10年10月	第39回日本母性衛生学会（前橋市）	外科外来を受診した女性患者448例の直腸瘤の深さと加齢、分娩回数、及び便秘、尿失禁との関連から調べた。便秘は全体の約半数に、尿失禁は40%に認められたが、加齢との関連はなかった。排泄異常を認める者の直腸瘤の深さは深いことから、女性の排泄異常には骨盤底筋群の弛緩の関与が考えられた。直腸瘤の深さは加齢とは関連がなかったことから、分娩に伴い一時的に深くなるものと考えられた。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：坂口けさみ、山崎章恵、湯本敦子、武井とし子、上本野唱子、天野信一、富田泰子、浅川圭子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 尿流量動態の変化からみた妊産褥婦の排尿機能と排尿障害	共同	平成11年10月	第40回日本母性衛生学会（横浜市）	妊産婦118例、対象群35例の尿流量動態を用いて分析し、臨床的排尿機能の変化と骨盤底筋群との関連を検討した。臨床的排尿機能は妊娠経過と共に増加し、分娩1ヶ月後には改善が認められたが約10%には遺残した。排尿動態の各パラメーター値は妊娠末期には有意に低下し、分娩1ヶ月に至っても最大尿流量率、最大流量時までの尿量の低下を認めた。尿流量動態所見から、妊娠・分娩に伴う骨盤底筋群弛緩の実態が示唆された。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：坂口けさみ、武井とし子、湯本敦子、上本野唱子、天野信一、富田泰子、浅川圭子
17. 福祉用具市場の現状と課題	単独	平成11年11月	第2回日本福祉工学会（甲府市）	「高齢者の生活環境調査および福祉・医療用具使用実態調査において、現在使用している福祉用具の問題点を分析し、あわせて、市場調査、企業への聞き取り調査を行なった。福祉用具利用者の問題点は利用者の個人の特性に合っていない、使用する上での情報の欠如がみられ、商品においては商品の完成度が考えられた。企業への聞き取り調査では製品完成に関する問題、マーケテイング戦略の欠如が考えられた。
18. 技術演習「離乳食」についての検討	共同	平成12年7月	第10回日本小児看護学会（東京都）	小児看護学の中で、小児の食の援助として離乳食づくりの演習を取り入れている。それの学習効果について質問紙を用い検討を行なったところ、14のカテゴリーが抽出された。離乳食づくりは学生にとって取り組み易い課題であること、演習に対する期待が高いこと、演習の体験を自分の生活や将来の自分と関連させたりしていることなどから、学習効果は高く、期待している演習内容であることが分かった。 本人担当部分：データ整理 共同発表者：臼井徳子、二村良子、橋爪永子、上本野唱子、川出富貴子
19. 小児慢性腎疾患病棟における感冒罹患の実態	共同	平成12年7月	第10回日本小児看護学会（東京都）	感染予防行為を効果的に行なう方法を検討するため、慢性腎疾患病棟に入院し、ステロイド療法を受けた患児49名の感冒症候群罹患の機会を診療記録類から収集し、慢性腎炎、ネフローゼ症候群に分け分析を行なった。両群の罹患者と非罹患者間には有意な差は認められなかった。慢性腎炎の罹患機会は治療終了から3ヶ月までが多かったが月別には有意な差は認められず、ネフローゼ症候群では少量投与、中止後の冬の罹患機会が多かった。 本人担当部分：論文執筆 共同発表者：上本野唱子、橋爪永子、二村良子、臼井徳子、川出富貴子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20. アメニティ・タウンに関する提案と考察	共同	平成12年12月	第3回日本福祉工学会（習志野市）	これからの超高齢社会の到来に備え高齢者や障害者にやさしい街作りを模索するため、アメニティ・タウンのシステムについて考察した。具体的な内容として①高齢者・障害者の支援②健常者・障害者・高齢者が共に働く職場③バリアフリーの住宅、町づくり④高度なコミュニケーション⑤美しい町並みを備えた街づくりをあげ、これらを実現するためのモデルになるのではないかと思われる福祉マンションについて言及した。 本人担当部分：データ収集 共同発表者：古川進、上本野唱子
21. Correlations between Dietary Habits and Bone Density of Japanese High School Girls	共同	平成14年3月	The International Conference Traditions, Evidence and Innovations in Nursing（Phuket、Thailand）	三重県内に在住する女子高校生15～18歳、865名の踵骨における骨強度をAOS-100で測定し、運動クラブ所属者と非運動クラブ所属者の食習慣との関連を検討した。運動クラブに属しているものは非運動部所属の者より骨強度は高く、定期的に食事を摂取しているもの、ヨーグルト、ワカメを週４回以上摂取しているものはそうでない者より骨強度は高かった。非運動クラブ所属の者では、1週間のインスタント食品の摂取回数が多いものは骨密度は低かった。 本人担当部分：骨強度測定、データ処理 共同発表者：Shoko Kamimotono、Fumio Tanaka
22. Correlations between Life-Style and Bone Density of Japanese High School Boys	共同	平成14年3月	The International Conference Traditions, Evidence and Innovations in Nursing（Phuket, Thailand）	三重県内に在住する男子高校生15～18歳、718名の踵骨における骨強度をAOS-100で測定し、質問紙によるライフスタイルと骨強度との関連を検討した。運動部に属しているものは非運動部所属の者より骨強度は高く、両群においても牛乳を毎日摂取しているものはそうでない群より骨密度は高かった。運動群の骨密度は春菊の摂取は高く、大豆、人参は低かった。非運動群においてはインスタント食品、トマト摂取者の骨密度は低かった。 本人担当部分　：骨強度測定、データ処理 共同発表者：Fumio Tanaka、Setsuko Yoshii、Shoko Kamimotono、Masako Backman Matsushita、Shiho Sawai
23. 電動車椅子使用時の官能評価	共同	平成14年10月	日本社会福祉学会第50回記念全国大会（東京都）	障害を有し、電動車椅子サッカーを行なっている10歳～55歳以上の男女109名を対象に電動車椅子利用時の動作について検討を行なった。日常最も良く使用している車椅子と競技で使用している車椅子は異なっていた。電動車椅子利用時の「急加速時」、「バックする時」および「高速ターン」の動作を「恐い」、「どちらでもない」および「恐くない」群で検討した所、急加速時はそれ以外の動作と比べて、有意に恐くないことが分かった。 本人担当部分　：論文執筆 共同発表者：上本野唱子、星野政明

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24. 身体障害者の自動車運転免許取得に対する意向	単独	平成14年11月	第5回日本福祉工学会（甲府市）	障害を有し、電動車椅子サッカーを行なっている16～55歳以上の男女116名を対象に、自動車運転免許の取得意向と、購入したい車について調査を行なった。免許の取得は72.3%の人が取りたいと思っていた。購入したい車のタイプについては、40%の人がキャブワゴンタイプと回答していたが、スポーツタイプ、ミニバン、ワゴン、2BOXコンパクトはいずれも約20%代であり、近似の回答となっていた。障害の有無は購入希望車種には影響しないことが示唆された。
25. Effect of Milk Intake on Bone Density of High School Students and Adult Women	共同	平成15年11月	The 11th Asian Congress of Pediatrics & The 1st Asian Congress on Pediatric Nursing（Bangkok、Thailand）	三重県内に在住する高校生男女15～18歳、5000名と成人女性1100名の踵骨における骨強度をAOS-100で測定し、質問紙によるライフスタイルと運動部所属・非所属群に分け骨強度との関連を検討した。男子は運動、非運動部群に関わらず、牛乳の摂取が骨強度に関連していた。女子の骨強度は、非運動部群の変化はなかったが、運動部群は毎日摂取群と比べて週2－3回以上摂取群で高く、週1回以下は最も低かった。 本人担当部分　：骨強度測定、データ処理 共同発表者：Fumio Tanaka、Setsuko Yoshii、Shoko Kamimotono、Masako Backman Matsushita、Shiho Sawai
26. Nutritional Factors Related to Bone Density of Japanese High School Girls	共同	平成15年11月	The 11th Asian Congress of Pediatrics & The 1st Asian Congress on Pediatric Nursing（Bangkok, Thailand）	三重県内に在住する女子高校生15～18歳、2722名の踵骨における骨強度をAOS-100で測定し、運動・非運動クラブ所属群と質問紙による1週間の食物摂取頻度との関連を検討した。両群の骨強度が低下したのはインスタント食品であった。運動部所属群は食事摂取が1日2回摂取群より3回摂取群の方が高く、両群においては魚の摂取が週1回以下のものより週4回のものの方が高かった。オレンジと海藻の摂取は骨強度を上昇させていた。 本人担当部分：骨強度測定、データ処理 共同発表者：Shouko Kamimotono、Kazuyo Sakata Yoshiko Sakuramoto、Miyuki Nishida、Kanako Suzuki、Setsuko Yoshii、Shiho Sawai、Fumio Tanaka
27. Mental Factors Related to Bone Density of High School Students	共同	平成15年11月	The 11th Asian Congress of Pediatrics & The 1st Asian Congress on Pediatric Nursing（Bangkok、Thailand）	三重県内に在住する高校生15～18歳、男子2175、女子2722名の踵骨における骨強度をAOS-100で測定し、運動・非運動クラブ所属群と質問紙による生活習慣の関連を検討した。運動部群の悩みがあるものは悩みが無いものより骨強度は高く、楽観的なものより悲観的なものの方が骨強度は高かった。睡眠時間は運動群の6～8時間の方が8時間以上群より高かった。女子の非運動群は反対の結果であった。 本人担当部分：骨強度測定、データ処理 共同発表者：Miyuki Nishida、Yoshiko Sakuramoto、Kazuyo Sakata、Shouko Kamimotono、Kanako Suzuki、Setsuko Yoshii、Shiho Sawai、Fumio Tanaka

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28. Effect of Exercise on Bone Density of High School Students	共同	平成15年11月	The 11th Asian Congress of Pediatrics & The 1st Asian Congress on Pediatric Nursing（Bangkok、Thailand）	三重県内に在住する高校生15～18歳、男子2175、女子2722名の踵骨における骨強度をAOS-100で測定し、男女別に運動・非運動クラブ所属群と質問紙による生活習慣の関連を検討した。骨強度は、運動部群は非運動部群より高かく、女子の骨折は非運動群で著明であり、1日の歩行時間と比例した。男女共の運動群においてはアスレチックよりバスケットの方が高く、男女の運動、非運動共に小、中学校における定期的な運動をしているものは高かった。 本人担当部分：骨強度測定、データ処理 共同発表者：Kanako Suzuki、Kazuyo Sakata、Yoshiko Sakuramoto、Miyuki Nishida、Shouko Kamimotono、Setsuko Yoshii、Fumio Tanaka
29. 出生後早期新生児に帽子を被せることによる体温、行動状態への影響	共同	平成19年8月	日本臨床体温研究会第22回学術集会（札幌市）	出生児早期にある保温方法を検討するため、出生児体重2500～3600ｇ、在胎週数37～41週および8時～午後5時半の間に出生した正常新生児20名（コントロール10名）に、出生後2～7時間まで帽子を被せ、その間の胸部と末梢の深部体温と行動状態（睡眠、覚醒、啼泣）を検討した。体温変化は両群で有意ではなかったが、帽子を被せた群は啼泣が少なく、覚醒状態が有意に多く、体重減少は少ない傾向であった。 本人担当部分　：論文執筆 共同発表者：上本野唱子、西元康世、西薗貞子、山内正憲
30. 化学療法を受ける患児の口腔炎発生と白血球数との関連	共同	平成19年12月	第5回　日本小児がん看護研究会（仙台市）	化学療法を受ける児の口内炎発生状況を知るため、13名の診療記録から口内炎発症と白血球数、使用薬剤の組み合わせ、治療コースおよび年齢から検討した。口内炎の発症と白血球数との関連はなく、有意であったのは、年齢の高い児であった。発症の高い傾向を示したのは、多剤併用、1コース目の治療であった。化学療法中の児の口内炎発症は年齢、治療薬剤の組み合わせおよび治療コースなども考慮する必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、データ処理、結果、考察、論文執筆における指導 共同研究者：大牟田美幸、高木梢、辻奈緒子、和田容子、西薗貞子、上本野唱子
31. 出生後早期新生児における啼き声の音声分析による検討	共同	平成20年8月	日本臨床体温研究会第23回学術集会（札幌市）	啼泣と体温上昇について検討するため、生後2時間半から7時間までの胸部と足底の深部温および行動状態を記録し体温上昇に伴う啼き（上昇群）とそうでない啼き（非上昇群）について音声分析により解析した。1回5秒間の啼泣中の発声回数は上昇群の方が多く、発声時間、息継ぎ時間ともに上昇群の方が有意に短かった。体温上昇に繋がった啼泣は発声回数が多く、発声時間、吸気時間ともに短い、激しい頻呼吸状態であった。 本人担当部分：データ収集、データ分析、論文執筆 共同研究者：上本野唱子、山内正憲

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32. 看護・保育学生の福祉用具に対する認識の検討	共同	平成20年11月	日本福祉工学会　第12回学術講演会（甲府市）	福祉用具に対する認識状況を知るため、保育学生（専門課程110名、短大生110名）、看護学生（大学3年次生80名）に対し、質問紙調査により福祉用具、離乳食、調理された食品及び遊び道具について高齢者、小児どちらに使用する認識が高いかについて検討した。看護と保育専門課程の学生は類似の傾向を示し、ほとんどの項目において高齢者が使用するという認識が高かった。保育短大生においては遊びに関して子どものものと認識していた。 本人担当部分：データ分析、論文執筆 共同発表者：上本野唱子、守本とも子
33. 化学療法中、後の患児の味覚の実態～健常児との比較を試みて～	共同	平成23年2月	第33回近畿小児がん研究会（神戸市）	小児がんの子どもの化学療法中における味覚障害の実態を知ることを目的に、入院して化学療法を受けている学童期の患児5名、化学療法後外来に通院している患児6名及びコントロール群として健康な児4名を対象として濾紙ディスクによる味覚定性定量検査による検査を、左右鼓索神経、舌咽神経別に甘味、塩味、苦味、酸味について行った。化学療法を受けている児の非味覚検知は2例であり、有意差を認めたのは舌咽神経側の苦味についてであった。 本人担当部分：研究方法から論文執筆に至るまでの研究指導 共同発表者：志野友香、岩本さやか、高木梢、築脇陽子、峯尚美、大川美加、久保田優、永井亜矢子、上本野唱子
34. 看護系大学と実習病院との連携・協働を構成する要因に関する研究組織長間の連携に関する事例分析を通して （文部科学省H23年度助成事業「教育―研究―実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」の一部	共同	平成24年12月	第32回日本看護科学学会学術集会（東京）	看護系大学、大学の実習施設の看護系組織長間の連携状況に関し、附属病院との連携を構成する要素を明らかにし、教育機関と臨地実習施設との連携状況を診断・評価するツールの開発に向けた資料とするため、6大学の看護学部長及び附属病院の看護部長に対しインタビューを行い質的に分析し、その要素として①大学側の要素（1要素）②病院側の要素（1要素）③大学・病院間の連携の要素（6要素）④環境的要素（2要素）の4つを見い出した。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：河部房子、黒田久美子、野地有子、北池正、小山田恭子、上本野唱子、福本良之、若杉歩
35. 大学と実習病院との組織間連携がもたらす指導者間の連携に関する事例分析 （文部科学省H23年度助成事業「教育―研究―実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」の一部）	共同	平成24年12月	第32回日本看護科学学会学術集会（東京）	看護系大学、大学の臨地実習における附属病院との連携を構成する要素を明らかにし、教育機関と臨地実習施設との連携状況を診断・評価するツールの開発に向けた資料とするため、A大学の実習指導教員1名、同附属病院の実習指導者1名のインタビュー記録を、両者の連携状況を知るため質的に分析し、①両組織の構成員が相互理解する場②柔軟な対応③信頼に基づく効果的な役割分担④教員／指導者のポリシー⑤高いモチベーションの要素を見出した。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：小山田恭子、黒田久美子、河部房子、野地有子、北池正、上本野唱子、福本良之、若杉歩

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36. 看護系トップ管理者に焦点をあてた看護教育－実践連携評価ツールの開発（文部科学省H23年度助成事業「教育―研究―実践をつなぐ組織変革型看護職育成支援プログラムの開発」の一部）	協同	平成25年8月	日本看護学教育学会第24回　学術集会（千葉市）	臨地実習における看護系大学と実習施設との連携状況や課題を評価するための評価ツールを作成し、それの妥当性の検討を表現の適切性、内容の不測の有無、ツール活用の有用性について、大学のトップ管理者5名に対しインタビュー調査を行った結果、ツールの有用性に関して、現状の振り返りになる、病院側とのコミュニケーション促進につながる、新たな課題は明らかにならないという意見があり、意見に基づきツールの修正を行った。 本人担当部分：インタビュー調査結果の検討および修正 共同発表者：河辺房子、黒田久美子、野地有子、小山田恭子、上本野唱子、赤沼智子、池袋昌子、西山正恵、粟井直子

教　育　研　究　業　績　書

氏名　中　川　晶

研究分野	研究内容のキーワード

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
特記事項なし		
2　作成した教科書，教材		
特記事項なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）大阪産業大学「教え上手な教員」に最上位で選ばれる。	平成１８年３月	大阪産業大学「教え上手な教員表彰制度」とは、毎年1回、学生のみの投票で教え上手な教員の選考を行なうもので、教育上多大な努力や工夫等を総合的に評価し受賞者が決定される。
2）		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）薬事日報第11014号p16-19「心身症治療に用いる漢方処方の実際」寄稿	平成２３年８月５日	
2）第11回日本良導絡自律神経学会近畿ブロック講習会「臨床家にとって必要な心理学」	平成２４年５月１３日	
3）日本良導絡自律神経学会中部ブロック医療技術研究会「セルフコントロールのすすめ」講演？	平成２４年６月１７日	
4）日本良導絡自律神経学会中部ブロック医療技術研究会「鍼灸臨床に必要な精神医学」講演？	平成２４年９月１６日	
5　その他		
特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）医師免許（第294139号）	昭和６０年６月	
2）臨床心理士（登録番号10535）	平成１５年４月	
3）精神科専門医認定試験合格	平成２１年１０月	
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）守口市「高齢者教養講座」において年１回のストレス対策講座	平成１８年 ～平成２１年	
2）新聞記事「被害者ケア」サンケイ新聞夕刊寄稿	平成２１年1月９日	
3）新聞記事「脱白衣、小児科・心療内科に広がる動き」朝日新聞寄稿	平成２１年１２月２６日	
4）講演「ぐっすり眠るコツ」生駒市社会福祉協会	平成２２年3月６日	
5）新聞記事「内科医から心療内科医へ」日刊ゲンダイ寄稿	平成２２年3月２１日	
6）奈良いのちの電話公開シンポジウム「死にたい声に寄り添って」	平成２４年3月２５日	
7）安芸高田市自殺予防対策講演会「心の健康と睡眠」	平成２４年3月２９日	
8）新聞記事「こころ安らぐ絵の世界」サンケイ新聞寄稿	平成２４年4月２７日	
9）講演「うつ病の正体」奈良市自殺対策市民講演会、奈良市保健所	平成２４年9月１５日	
4　その他		
特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1.うつを遠ざける15の方法	単著	平成22年4月	PHP研究所	うつ病に関する啓蒙書。精神医学的なうつ病のメカニズム、病因論、治療法、予防法についての解説をした後、うつ病にならないための著者の発案による15の方法を論じた。全体は181頁
12.死にたい声に寄り添って	共著	平成24年3月	社会福祉法人 奈良いのちの電話協会	奈良いのちの電話相談、40周年を記念して出版された。実際に電話相談にあたったスタッフや相談員養成講座での講師陣によって執筆された。統計データ、現場の声、自殺予防対策など多岐に渡る内容。 A5版　全287頁 本人担当部分 第2部第2章「病気と自殺」p225-238を共著。 30年に渡る筆者の臨床経験のなかで、精神の病気を苦にしての自殺例や、振り返ってどうすれば自殺を防げたかを考察した。また自殺の辛うじて防止出来ていると思われる症例を通じて、精神の病気と自殺の関係を論じた。 編者：清水新二 共著者：飯田順三、辻村康範、中川晶、石田陽彦、川上範夫、川野健治、斎藤友紀雄
（学術論文）				
1.週一回の運動教室は高齢者の健康増進に役立つ	共著	平成17年4月	Japanse journalof physical and sports medicine vol.54(2)	大東市において70才以上の老人を対象に体操教室を行い、筋力、柔軟性など様々な身体検査を行い、週一回の運動が老人の体力向上に効果があることを実証した。筆者は心理面での効果について共同研究を行ったが、心理面でも抑うつ症状が減少するなど良い効果が得られた。 共著者：桂良寛、中川晶、大槻慎吾
2.「笑い」について	共著	平成18年1月	綜合臨床vol55no1	「笑い」については近年報告が多いが心理学的な論が多いなかで、本論は生物学的な指標を用いて「笑い」を研究したものである。結果として「笑い」は様々な心理が潜んで居る可能性があり、一括して「笑い」の生物学的研究という範疇は困難であることが分かった。今後は「笑い」を再分類する手法を開発していく必要があるという考察を加えた。 本人担当部分：心理テストと生理学的指標（クロモグラニンAによる笑いの研究 共著者：大槻慎吾、中川晶
3「医の倫理-バイオエシックスとどうつきあうか-」	単著	平成19年3月	臨床鍼灸 Vol.20 No.3	現代のバイオエシックス理論の臨床的側面を鍼灸臨床に適用。鍼灸師は生命倫理への関心が一般の医師より薄いが、観血的治療という観点からすれば、生命倫理と無関係ではいられない。本論は現代生命倫理学の方向性を見据えながら鍼灸臨床における生命倫理の必要性を論じた。

4.「物語的思考の可能性」	単著	平成19年7月	日本保健医療行動科学会年報 Vol.22	物語的思考とは著者の造語である。現代はそれに対する思考法として分析的思考が優位である。分析的思考は論理的ではあるが、行動変容につながることは少ない。本論では物語的思考はナラティヴ・アプローチの一つであり、ナラティヴ・ベイスト・メディシンの日本における展開の可能性を論じた。
20.NBM(Narrative Based Medicine)	単著	平成21年	medical forum CHUGAI Vol.13. No.3	近年、NBM(Narrative Based Medicine)がプライマリーケア医にとって重要であるという認識が急速に広がっている、しかしNBMとは何かについての合意が我が国ではまだ、見られない。本論は我が国におけるNBMの定義について論じた。
21.ナラティヴ・ベイスト・ベディシン	単著	平成22年6月	現代のエスプリ　515 クライエントの問題を解決する面接技法	理論と共に発達する面接技法の章の一つ。臨床心理士向けのナラティヴ医療について。「ヘルスケアの現在と未来」というタイトルの中の論文の一つで、ナラティヴ・アプローチの具体的方法。その方法として著者の提唱している「治療的身体化」Therapeutic somatizationの適用を可能性について論じた。
5.ナラティヴ・アプローチの技法	単著	平成22年6月	日本保健医療行動科学会年報	具体的なナラティヴ・アプローチの方法論について、人類学、教育学、精神医学からの文献を集約して今後のナラティヴのあり方を模索した。具体的な手法としては著者が、K.Tomm や J.Launerの質問法を我が国の文化に即した変法を開発した。現在その手法は医学、看護の世界ばかりでなく、法曹界や教育の現場にも広がりつつある。
23.子ども家庭支援専門職へのナラティヴ・アプローチ講座における学びのプロセス	共著	平成22年6月	日本保健医療行動科学会年報　2010.vol.25	幼稚園、保育園など幼児教育の専門家を20名募集して5回に渡るナラティヴに関する講演に参加させて、ネットによるフィードバックを行い、テキストマイニングの手法を用い学びの過程を分析した。 本人担当部分：講演者として参与し、分析の一部を担当 共著者：新川泰宏、中川晶　吉弘純一
24. ナラティヴを書く	単著	平成22年8月26日	こころの科学	臨床を書く」という特集の一つの論文。臨床における「書く」という行為をナラティヴ医療の側から考察した論文。記録というためにカルテはあるのだが、もう一方では医師の思索の源泉としても有効である。つまりカルテは患者の物語を読み解く糸口となり得る。そのためにはカルテの書き方そのものにナラティヴ・アプローチを導入しなければならない。
25 うつの治療と臨床心理士	単著	平成24年7月10日	臨床心理学	

26　日本保健医療行動科学会の活動	単著	平成26年	行動医学研究 Vol.20,No.2,p58-62	日本保健医療行動科学会のこれまでの活動を振り返り、活動の意義についての論考。
6　ナラティヴ･ワーク	単著	平成26年	日本保健医療行動科学会年報 2014.vol.228No.2,p26-30	ナラティヴ･アプローチの我が国に適応したモデルを提唱。ナラティヴ医療の実践に即したナラティヴ･クエッショニングについて論考。
28.日本保健医療行動科学会の歩み	単著	平成27年	日本保健医療行動科学会年報 2015.vol30,No1,p2-4	日本保健医療行動科学会のこれまでの歩みを概観し、今後の方向性を模索する。

（その他） （翻訳）				
1.A.フランシス 「精神科鑑別治療学」	共著 11人 筆頭著者	平成1年12月	星和書店	A.フランシスは精神科医なら必ず備えている図書「DSM-Ⅳ」の編集主任である。本書は筆者の属する阪大学医学部精神医学教室と理療法研究
2.「大切な人がこころの病気にかかったら」レベッカ・ウーリス When Someone You Love has A Mental Illness　????	共著 医学監訳	平成15年12月	PHP研究所	精神病患者本人や精神科医向けの本は多いが家族や友人が精神病にかかった時の対処法を書いた本は少ない。本書は家族のために書かれた良書と言える。
（学会発表）				
1.笑いと不安の関連性について	共同	平成18年	第38回日本心身医学会近畿地方会	吉本新喜劇を観た観客500名の唾液、コルチゾール及びクロモグラニンＡの測定を行い、笑いが自律神経系に影響を及ぼすことを証明した。特に笑いはカテコラミン系に特に影響が大きいことが証明された。また不安は笑いの後に心理テストで低下していることが、これまで言われていたが、身体レベルでも変化が証明できた。 本人担当部分：調査 共同発表者：山本千恵、中川晃、大槻慎五
2.About Reciprocal Story Telling Method	単独	平成27年	The 7th International Conference of Behavioral Science	ロンドンで行われた国際保健医療行動科学会大会にて発表。双方向性の物語創出技法という新しい心理療法を提唱し、論考した。

（調査報告、紹介、書評）				
1.新型うつ病にご用心	単著	平成20年1月	月刊弁護士報	
2.躁うつ病とうつ病とは違うのか	単著	平成20年3月	月刊弁護士報	
3.パニック障害という困った病気	単著	平成20年5月	月刊弁護士報	
4.ストレスと病気の関係	単著	平成20年8月	月刊弁護士報	
5.最近のうつ病診断と治療装置	単著	平成27年	月間大阪弁護士会	うつ病の生化学的診断および光トポグラフィーによる診断の批判的論考。
6.うつ病最前線、うつ病における客観的診断とこれからの治療とは	単著	平成26年9月	.労働法学研究会報第65巻第17号p.52-65	最新のうつ病の客観的診断法と磁気を用いた治療法について解説、論考。
(辞書の執筆・監修など)				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年５月１日

氏名　守本　とも子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	在宅脳卒中患者、在宅酸素療法患者、介護者、QOL

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
１）体験型学習の導入	平成4年10月～平成9年4月	小坂病院看護専門学校の専任教員として担当の「基礎看護学演習」（専門科目、1年次配当、半期、必修、3単位）において学校内に設置された段差とスロープおよびエレベータを使用し、看護学生に車椅子移送の学内演習をおこなった。その際に学生は患者役と看護婦役を交互に体験し、演習終了後にそれぞれの感想や学びをまとめた。それらの成果を相互に発表する機会を設け、学生全員の共有の学びとすることができた。また、演習終了後、車椅子移送における体験学習についてのアンケート調査を行い、それらの結果を次回の演習に生かせることができた。
２）チュートリアル教育の導入	平成10年4月～平成14年4月	広島国際大学保健医療学部看護学科の助教授として担当の基礎科目「チュートリアル」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修、1単位）において、受講学生5人と少人数で実施した。テーマも学生の自主性に委ね、問題解決能力を培うための文献検索、ミーティング、時には学外施設などに出向き学習することなど、学生主体の学習方法を取り入れた。このメリットとして以下のことがあげられる。 1. 自主的に課題に取り組み、問題点を把握し、かつ追及する姿勢を養うことができた。 2. 関連する諸科学を照覧し、理論を構築したり、問題を解決できる能力および継続的に自己学習する態度が養われた。 3. 学生のアンケートの結果からも、満足度が高かった。
３）ディベートを取り入れた学習法	平成10年4月～平成14年4月	広島国際大学看護学科の助教授として担当の「在宅看護論」（専門科目、3年次配当、半期、必修、2単位）で在宅高齢者の看護について、ディベートを用いた講義をおこなった。1つのテーマ、問題をめぐって討論することで、学生は高齢者看護についての考え方が明確になった。また、ディベート評価表用紙を作成し、学生に評価させるようにした。学生が自らを振り返り、評価をすることで、説得力ある議論の展開の方法を学ぶことができた。このメリットとして以下のことがあげられる。 1. 学生の主体的志向態度の育成を強化することができた。 2. 自己の思考と他人の思考を比較することによって反省的思考が養われた。 3. 協力する態度やリーダーシップ、また、意見の異なる学生に対しても寛容な態度がとれるなど、人格形成に役立った。 4. 自己の意志を伝達する表現方法の訓練ができた。

事項	年月日	概　　要
4）メーリングリストを活用したレポート作成指導	平成12年4月～ 平成14年8月	広島国際大学看護学科の助教授として担当の専門科目「在宅看護論」（専門科目、3年次配当、半期、必修、2単位）・三重県立看護大学看護学科の助教授として担当の「成人看護学」（専門科目、3年次配当、半期、必修、2単位）の講義に関するレポート指導について、メーリングリストを開設し、受講者全員を登録した。これを用いて、レポートの添削、指導等を行った。このメリットとして以下のことがあげられる。 1.学生の主体的志向態度の育成を強化することができた。 2.自己の思考と他人の思考を比較することによって反省的思考が養われた。 3.協力する態度やリーダーシップ、また、意見の異なる学生に対しても寛容な態度がとれるなど、人格形成に役立った。 4.自己の意志を伝達する表現方法の訓練ができた。
5）疑似体験学習の導入	平成14年4月～ 平成20年3月	関西学院大学社会学部社会福祉学科の非常勤講師として、身体障害の特徴を理解するために「体験くん」の補助具を活用した。具体的には難聴体験のための補聴器、関節可動域の障害を体験するための下肢装具、視力障害体験のためのグーグルなどである。実施後のアンケート結果より、学生からは身体障害の疑似体験は障害のある人を理解するために大変有意義であったとの評価を受けた。
6）視聴覚教材のための資料作成	平成20年4月～ 現在に至る	関西学院大学人間福祉学部人間福祉研究科の非常勤講師として視聴覚教材のための資料を作成した。具体的には人体解剖・人体機能、疾病や加齢について、難解な用語の解説や重要事項のまとめなどを資料として作成し、各授業ごとに資料の配布を行った。
2　作成した教科書、教材		
―教科書―		
1）「車椅子移送」における　体験学習の指導内容の検討「わかる授業をつくる看護教育技法3、―シュミレーションや体験学習をとりいれた授業評価―」（再掲）	平成12年3月 医学書院 全196頁 P.166-P.174	小阪病院看護専門学校の専任教師として担当の「基礎看護学演習」（専門科目、1年次配当、半期、必修、3単位）において体験型学習を行うため、車椅子移送における段差・スロープの設置をおこなった(平成4年10月)。また、看護学生にそれらの教材を使って、車椅子移送の学内演習を行った。その際に学生は患者役と看護婦役を交互に体験し、演習終了後にそれぞれの感想や学びをまとめた。これらの演習の過程を「車椅子移送における体験学習の方法」の授業案のひとつとして紹介した。また、教材としての段差とスロープの設置方法について紹介した。 単著
2）在宅看護における感染症と対策 ―在宅医療における感染防止対策―「ナースのためのインフェクション」（再掲）	平成12年5月 TECHNO COMMUNICATIONS 全189頁 P.136-P.143	在宅療養患者の特徴と在宅で発症しやすい感染症、在宅での感染経路、感染予防（一般的な感染予防、器具の消毒、ゴミ・廃棄物の処理、衣類・リネンの消毒）について説明した。また、感染経路と感染予防については、病院・施設と在宅との相違点について述べ、筆者の体験から事例をあげて、在宅での感染問題について述べた。 単著
3）実力アップ！資格試験ファイル	平成14年11月 看護学生 第50巻第9号 メヂカルフレンド社 P.40－P.52	準看護師資格試験対策（科目：老年看護学）として、1）1問1等形式による重要ポイントのまとめ、2）実際に出された問題の解答・解説、3）出題形式に沿った予想（創作）問題を通して、必要な知識を身につけることをねらいとした。問題の解答・解説においては、解法のコツ、及び関連事項が無理なく学べる記述・構成を考えた。 単著

事項	年月日	概　　要
4）先天性疾患と家族心理臨床 「家族のための心理学」（再掲）	平成17年4月 保育出版社 B5版 全233頁	第8章1節　P.142-P.146 「身体的疾病と家族の心理臨床」 家族の身体的疾病の羅患事態において生ずる家族の心理臨床的な問題を取り上げ、それへの適切な対策をとり、家族の精神的健康の維持向上を促すことについて、具体的な事例を示して実践に役立つように理解を図った。 単著
5）QOLを高める専門看護、介護を考える(上巻) （再掲）	平成17年4月 中央法規 B5版 全136頁	第4章　P.97-P.116 第5章　P.119-P.132 本書は利用者のQOLを高める看護・介護領域での専門援助に焦点を絞り、広く国内外の最新の研究成果や実践例などを取り上げて紹介するとともに、高齢者施設での看護と介護の専門援助についてその内容・方法を具体的に解説した。保健医療現場の第一線として看護・介護実践に従事する者が、対象者のニーズに応じた専門援助の知識と技術をより一層高めることを目的とした。 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編集：守本とも子、　星野政明
6）QOLを高める専門看護、介護を考える(下巻) （再掲）	平成17年8月 中央法規 B5版 全138頁	第7章1節1　P.19-P.20 第8章　P.76-P.84 第10章　P.111-P.123 本書は上巻の続編として、広く国内外の最新の研究成果や実践例などを取り上げて紹介するとともに、高齢者施設での看護と介護の専門援助についてその内容・方法を具体的に解説した。保健医療現場の第一線として看護・介護実践に従事する者が、対象者のニーズに応じた専門援助の知識と技術をより一層高めることを目的とした。 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編集：守本とも子、星野政明
7）介護概論 ―利用者へのサービスの質の向上を目指して―（再掲）	平成18年11月 黎明書房 B5版 全260頁	第4章2節 P.58-P.70 3節 P.82-.P89 4節 P.89-P.97 第5章1節 P.133-P.138 第7章1節 P.186-P.192 社会福祉基礎構造改革後の福祉サービスの最大のテーマのひとつに「利用者へのサービスの質の向上」がある。福祉サービスの質のもっとも重要な要素は、サービスを提供する人的資源の質の向上であると考えられる。利用者の意思・意欲を十分に把握した支援の構築と具現化に向けて、高い専門性に裏付けられた専門職としての能力の確立を目指すことを目的とした。 編著:守本とも子、星野政明
8）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第14版第1刷（再掲）	平成18年5月 医学書院 全348頁	第5部　第1章　A「生活環境を整える」P.64-P.74 本章では生活環境を整えるための技術の習得を通して、病床環境を多角的にとらえ、患者の安全・安楽への配慮を具体的な行為として実践できる力を養う。同時に、患者の病床環境に対していつも自然に目配りができ、安全や安楽を阻害する因子を早期に発見し、即座に対応できる感性を養う。 第5部　第1章　C「衣服を用いる」P.121-P.127 本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義、社会的意義、心理的意義があることを理解する。また、対象に応じた衣生活をアセスメントし、適切な援助ができるための方法を習得する。 共著
9）事例から学ぶ 子どもを育む母親援助の実際（再掲）	平成19年3月 保育出版社 全175頁 P.133-P.135	Case39「体が弱い」P.133-P.135 本書は保育者を養成する大学の教員と豊富な保育経験者により、保育状況で起こりやすい問題について想定し、保育者を目指す学生や現場の保育者の母親援助の実践に役立つ援助技術について解説した。 共著

事項	年月日	概　　要
10）コンパクト福祉系講義 医学一般（再掲）	平成19年3月 金芳堂 全211頁	第23章Ⅰ 「施設入所認知症高齢者に対する緩和ケアモデル」 P.156-P.160 医療と福祉の接点である介護について、介護者のQOLを考えた援助ができるような深い専門知識を身につけるとともに、現代社会での医療・医学にマッチした医学一般についての教本として制作した。 共著
11）看護学実践 ―Science of Nursing― 老年看護学（再掲）	平成19年4月 日本放射線技師会出版会 全261頁	Chapter 2　高齢者の理解　「加齢と老化」 高齢者の心と身体について加齢現象の視点から理解するとともに、高齢者の特徴を十分できるように記述した。 P.45-P.52 監修：川野雅資 編者：守本とも子
12）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第14版第6刷　（再掲）	平成20年4月 医学書院 全348頁	第5部 第1章 A「生活環境を整える」P.64-P.74 本章では生活環境を整えるための技術の習得を通して、病床環境を多角的にとらえ、患者の安全・安楽への配慮を具体的な行為として実践できる力を養う。同時に、患者の病床環境に対していつも自然に目配りができ、安全や安楽を阻害する因子を早期に発見し、即座に対応できる感性を養う。 第5部 第1章 C「衣服を用いる」P.121-P.127 本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義、社会的意義、心理的意義があることを理解する。また、対象に応じた衣生活をアセスメントし、適切な援助ができるための方法を習得する。 共著
13）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第1刷（再掲）	平成21年2月 医学書院 全495頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32 本章では生活環境を整えるための技術の習得を通して、病床環境を多角的にとらえ、患者の安全・安楽への配慮を具体的な行為として実践できる力を養う。同時に、患者の病床環境に対していつも自然に目配りができ、安全や安楽を阻害する因子を早期に発見し、即座に対応できる感性を養う。 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192 本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義、社会的意義、心理的意義があることを理解する。また、対象に応じた衣生活をアセスメントし、適切な援助ができるための方法を習得する。 共著
14）国際看護への学際的アプローチ（再掲）	平成21年3月 日本放射線技師会出版社 全211頁	第1章「異文化理解のための看護理論」P.7-P.18 世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し、看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。 監修：守本とも子 編者：堀内美由紀
15）新・QOLを高める専門看護、介護を考える （再掲）	平成21年3月 中央法規出版(株) 全204頁	第2章「高齢者への痛みへのアプローチ」P.61-P.91 第3章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」P.113 第5章第1節1「高齢者施設入居中の認知症高齢者へのアプローチ」P.169-P.178 第6章「認知症高齢者への安全テクニック」P.169-P.175 高齢者の生活に視点をあて、最新の研究報告などをもとに、日常生活支援から高齢者への安全対策、さらにQOLを高める方策としての遊び療法について述べた。 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編著：守本とも子、星野政明 編集

事項	年月日	概　　要
16）介護の基本・コミュニケーション技術 （再掲）	平成22年9月 黎明書房 全202頁	本書は介護の考え方について理解するとともに、介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ、介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とする。 編者：守本とも子、星野政明
17）生活支援技術・介護過程（再掲）	平成22年6月 黎明書房 全219頁	第10章「終末期の介護」P.159-P.168 終末期における介護の意義と目的、対象者のアセスメント、医療との連携、ブリーフケアについて述べ、終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探る。 編者：守本とも子、星野政明（編著）
18）老年看護学 Geriatric Nursing （再掲）	平成22年12月 PILAR PRESS 全288頁	第2章　高齢者の理解　「加齢と老化」P.2、P.57-P.65 本書は高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた「老年看護学」（監修:川野雅資、編集：守本とも子,2007年）の改訂版である。国家試験対策のテキストとしても活用されてきた旧版の内容をさらに掘り下げ、高齢者の疾病構造の変容、健康に関連した高齢者のニーズの多様性などを考慮して、老年看護の実践に向けて、看護学生の必携のテキストとなっている。 監修：川野雅資 編著：守本とも子
19）医療福祉学の道標（再掲）	平成23年1月 金芳堂 全200頁	第2章 C「生活の変化と保健･医療･福祉の統合」P.23-P.26 第13章 A 「少子高齢社会での医療福祉」P.163-P.165 C 「介護福祉から医療介護福祉へ」P.170-P.172 G 「情報化社会における医療福祉」P.184-P.185 本書は現代医療の課題を探求・解決していこうとすると同時に医療というフィールドにおける「社会福祉的視点の意義」について考察する。また、医療ソーシャルワーカの側から今日の医療・福祉に存在する課題を解明し、生活問題に制度的にも心理的にも対応できる「ソーシャルワーク」「ソーシャルワーカー」のあり方と方法を解説する。 監修：日野原重明他2名 編集：星野政明他2名 共著
20）子ども家庭のウェルビーイング（再掲）	平成23年3月 金芳堂 全128頁	第1章 A「少子化の進行と家庭・地域の変容」P.1-P.5 第3章 B「子ども家庭福祉の実施体制」P.39-P.41 現代社会における子どものウェルビーイングを追及するため、子供を取り巻く社会福祉的問題や今日的課題を明らかにするとともに、子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説する。 編集代表：星野政明 編集：真鍋顕久、三友雅夫 共著
21）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第15版第8刷 （再掲）	平成24年2月 医学書院 全495頁	第2部 第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32 本章では外部環境を病床環境に限定し、「病床環境の調整」と「ベットメーキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には、病床の温度と湿度。光と音、病室の色彩、空気の清浄性とにおい、人的環境の調整のほか、ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 第2部 第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192 本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義、社会的意義、心理的意義があることを理解する。また、対象に応じた衣生活をアセスメントし、適切な援助ができるための方法を習得する。 共著

事項	年月日	概　　要
22）介護実習入門（再掲）	平成24年3月 黎明書房 全128頁	本書において対象者への実際的な福祉的援助の方法を学び、専門職としての基盤を構築することが可能であると考える。 編集：守本とも子、星野政明
23）系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第16版 （再掲）	平成25年2月 医学書院 全508頁	第1章　A「環境調整技術」P.9-P.21 本章では療養生活の環境を構成する要素を理解し、病室・病床のアセスメントと調整について学ぶ。また、ベット周囲と病床の環境整備、ベットネーキング、リネン交換の実際について学ぶ。 第6章　B「清潔・衣生活援助」P.192-P.200 衣類を用いることの生理的・社会的・心理的意義を理解する。また、衣生活に関するニーズのアセスメントや援助の実際について学ぶ。 共著
24）介護福祉学辞典（再掲）	平成26年10月 ミネルヴァ書房 全829頁	「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ、障害児に関する介護、福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また、障害児に対する介護について、近現代史から、ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し、障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき、活動することができるための展望と課題について考察した。 P546-547 分担執筆
25）高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得（再掲）	平成26年10月 すぴか書房 全140頁	第3章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72 本章では、せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく、とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって、せん妄の知識は必須だと言える。 第4章「せん妄が起きてしまったら」P73-86 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく、さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し、症状への適切な対応を学ぶ。 編者：守本とも子 共著
26）これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために（再掲）	平成26年11月 ピラールプレス 全163頁	第3節「国際協力機関の取り組み」P22-28 国際協力のいくつかの方法について知り、世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。 監著：守本とも子 共著
27）看護職をめざす人の社会保障と社会福祉（再掲）	平成27年4月 みらい 全211頁	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また、すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 編者：守本とも子
―教材―		

事項	年月日	概　　要
1）ビデオ教材の作成	平成5年10月～ 平成9年3月	小阪病院看護専門学校の専任教師として担当の「基礎看護学演習」（専門科目、1年次配当、半期、必修、3単位）における清潔の援助（全身清拭・洗髪）のビデオ教材の作成をおこなった。作成の目的は、学生に学内にある物品や設備を使用して、ビデオにより一貫した技術教育を行い、看護基礎技術の向上をはかることと、学生の自己学習への動機づけを行うことである。このメリットとして以下のことがあげられる。 1. 看護技術のポイントの理解とその理由を考えさせることができる。 2. 具体的なイメージが可能である。 3. 繰り返し視聴する
2）ビデオ教材の作成	平成12年10月～ 平成14年3月	広島国際大学保健医療学部看護学科助教授として担当の「在宅看護論」（専門科目、3年次配当、半期、2単位）において、国家試験用教材として、CAIの導入をおこなうための開発プロジェクトのメンバーとして参画した。主にドリル演習型のCAIの開発のための情報収集、ニーズの分析を担当した。この教材を使用することのメリットとして、以下のことがあげられる。 1.学生の主体的学習を促進することができる。 2.学生個々のペースに合わせて学習できる。 3.学生が自分の学習の弱点に気づき、その克服に向けてさらに学習を深めることができる。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
―海外研修学生引率―		
1）アメリカ　ロサンゼルス UCLA Hospital, USC-Children's Hospital	平成17年8月	奈良県立医科大学医学部看護学科　海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー：癌治療について、異文化看護について スタディビジット：USC-Children's Hospital、アサートン、UCLA－Hospital
2）タイ　チェンマイ市 チェンマイ大学看護学部　学術交流	平成18年8月	奈良県立医科大学医学部看護学科　海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー：Health care delivery system in Thailand、Psychiatric and mental health nursing in Thailand、Current HIV/AIDS situation in Thailand 他 スタディビジット：Chiang May Psychiatric Hospital、Local health care service Office of the Education Ministry(HIV/ AIDS Mission)、Church of Christ in Thailand 他
3）タイ　チェンマイ市 チェンマイ大学看護学部　学術交流	平成19年8月	奈良県立医科大学医学部看護学科　海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー：Introduction of nursing midwifery education in the Faculty of Nursing, Chiang Mai University、Reproductive health in Thailand 他 スタディビジット:Local health care service (khun Kong Health Care Clinic) Community reproductive facilities、Location Clinic Chiang Mai Health promotion Hospital 他

事項	年月日	概　　要
4）タイ　チェンマイ市 チェンマイ大学看護学部　学術交流	平成20年8月	奈良県立医科大学医学部看護学科　海外研修学生引率 プログラムオリエンテーション レクチャー: Elderly in Thailand、Health status of children in Thailand、 Health care service and health promotion of children in Thailand　他 スタディビジット：Elderly club at Faculty on nursing、 Day care center FON CMU, Pediatric Units, Pediatric Intensive Care Unit, Nursery, and Well baby clinic at university hospital、 Traditional Thai Massage Center　他
―講演―		
1）(財)健康管理・開発センター 健康管理自己開発講座研修会　講師	平成9年6月24日	(財)健康管理・開発センター主催の健康管理自己開発講座研修会の講師を務め、「成人病とストレス」と題した講演を行った。 対象：(株)栗本鐵工所の管理職および従業員、約30人 会場：ホテルスポーツ住之江会議室（大阪市住之江区）
2）(財)健康管理・開発センター 健康管理自己開発講座研修会　講師	平成9年9月3日	(財)健康管理・開発センター主催の健康管理自己開発講座研修会の講師を務め、「老人介護」と題した講演を行った。 対象：住之江競艇場職員、約150人 会場：住之江競艇場会議室（大阪市住之江区）
3）社会福祉法人東大阪市社会福祉協議会 登録ヘルパー研修会　講師	平成10年3月4日	社会福祉法人東大阪市社会福祉協議会主催のヘルパー研修会の講師を務め、「女性と健康管理」と題した講演を行った。 参加者：約370人 会場：東大阪市立文化会館（東大阪市）
4）広島県福山市町づくり健康推進事業 エンジョイヘルスアップ大作戦　講師	平成11年10月10日	広島県福山市町づくり健康推進事業、エンジョイヘルスアップ大作戦で企画された研修会の講師を務め、「生活習慣病とその予防対策」と題した講演を行った。 参加者：約300人 会場：広島県福山市ともの浦公民館
5）島根県看護協会 島根県看護協会教育事業委員会研究会　講師	平成14年2月28日	島根県看護協会主催の教育事業委員会研究会の講師を務め、「高齢者の摂食・嚥下障害患者へのアプローチ」と題した講演を行った。 参加者：看護職員約80人 会場：島根県松江市看護協会会館
6）三重県健康管理事業センター　講演会　講師	平成14年11月9日	三重県健康管理事業センター主催の講演会で講師を務め、「在宅老人の介護と看護の実際」と題した講演を行った。 参加者：約50人 会場：三重県南島町文化会館
7）島根県看護協会 島根県看護協会教育事業委員会研究会　講師	平成15年8月30日	島根県看護協会主催の教育事業委員会研究会の講師を務め、「高齢者の摂食・嚥下障害患者へのアプローチ」と題した講演を行った。 参加者：看護職員約100人 会場：島根県松江市看護協会会館

事項	年月日	概　　要
８）大阪府三原町消防本部　研修会　講師	平成15年12月2日	大阪府三原町消防本部主催の研修会で講師を務め、「ストレスと成人病予防」と題した講演を行った。 現代人におけるストレスの現状、原因と成り立ち、及び解消法について具体的な例 挙げながら説明した。 参加者：80人 会場：消防本部講堂（大阪府南河内郡三原町）
９）島根県看護協会 島根県看護協会教育事業委員会研究会　講師	平成16年8月28日	島根県看護協会の教育事業委員会研究会の講師を務め、「高齢者の摂食・嚥下障害患者へのアプローチ」と題した講演を行った。 会場：島根県看護協会看護研修センター（島根県松江市）
10）箕面市競艇事業部　研修会　講師	平成17年3月3日	箕面市競艇事業部主催の研修会で講師を務め、「職場で気持ちよく働くために―快適な職場環境づくり―」と題した講演を行った。 対象：職員約400名 会場：住之江競艇場中央ホール（大阪府箕面市）
11）奈良県天理市　講演会　講師	平成17年9月7日	奈良県天理市主催の講演会で講師を務め、「高齢者とのかかわり方～高齢者の特徴を知ろう～」と題した講演を行った。 会場：天理市保健センター
12）社団法人奈良県放射線技師会 生涯学習セミナー　講師	平成17年12月4日	社団法人奈良県放射線技師会主催の生涯学習セミナーで講師を務め、「看護学」と題した講演を行った。 対象：奈良県立医科大学医学部看護学科　50名
13）奈良県社会教育センター　友の会 「高齢者のこころと身体をよく知ろう」	平成18年5月25日	奈良県社会教育センター友の会の講演会で講師を務め、「高齢者のこころと身体をよく知ろう」と題した講演を行った。 参加者：150名 会場：葛城市社会教育センター
14）(財)健康管理・開発センター 平成18年度富田林市介護予防事業認知症予防 講演会　講師	平成19年3月18日	(財)健康管理・開発センター主催の平成18年度富田林市介護予防事業認知症予防講演会で講師を務め、「わかりやすい脳の働き　一人の記録と認知症」と題した講演を行った。 大阪府富田林市
15）(財)健康管理・開発センター 平成18年度和泉市ヘルスアップサポーター 養成講座　講師	平成19年3月26日	(財)健康管理・開発センター主催の平成18年度和泉市ヘルスアップサポーター養成講座でスーパーバイザーとして講師を務めた。 大阪府和泉市の住民を対象に個別的な健康相談を受けた。実施後のアンケート調査の 結果、相談内容は壮年期にあっては健康問題が多く、高齢者においては特に独居老人 にメンタルな問題が多かった。 大阪府和泉市
16）(財)健康管理・開発センター　健康講話 講師	平成19年10月11日	(財)健康管理・開発センター主催の健康講和で講師を務め、「女性のうつ　特徴を知ろう」と題した講演を行った。 会場：住之江競艇場（大阪府住之江区）

事項	年月日	概　　要
17）(財)健康管理・開発センター　講演会 講師	平成21年2月24日	(財)健康管理・開発センター主催の講演会で講師を務め、「たばこの害について」と題した講演を行った。 会場：住之江競艇場（大阪府住之江区）
18）奈良学園大学　公開講座 講師	平成26年6月28日	奈良学園大学　公開講座で講師を務め、「高齢者のうつ」と題した講演を90分行った。 対象：地域住民60名 会場：りーべる王寺西西友（奈良県北葛城郡王寺町）
―講習会―		
1）東大阪市　ヘルパー2級養成講習会　講師	平成5年8月	東大阪市主催のヘルパー2級養成講習会で講師を務め、「老人看護の考え方」「要介護高齢者に対するリハビリテーション・介護方法」「簡便な介護用品の作成」について講義および演習を担当した。 参加者：約40人 会場：小坂病院看護専門学校実習室（東大阪市）
2）三重県健康福祉部　講習会　講師	平成14年9月2日	三重県健康福祉部主催の講習会で講師を務め、「看護教育演習・実習・研究のすすめ方について」の講義を担当した。 会場：三重県立看護大学
3）三重県立尾鷲総合病院看護部 看護研究研修会　講師	平成14年7月～ 平成15年3月	三重県立尾鷲総合病院の看護教育の一環である看護教育コースの講師を務める。本研究コースの目的は、看護教育及び研究指導者を育成することであり、研修生5名を3年間の期間を設け、個別指導を行う。事例16例。 会場：三重県立看護大学および三重県立尾鷲総合病院
4）京都第二赤十字看護専門学校 京都第二赤十字臨床指導者研修会　講師	平成14年8月21日	京都第二赤十字看護専門学校主催の臨床指導者研修会において、「現代看護学生の特徴と看護教育」についての講義を行った。 参加者：約30人 会場：京都第二赤十字看護専門学校（京都市）
5）三重県立尾鷲総合病院看護部 看護研究研修会　講師	平成15年5月～ 平成16年3月	三重県立尾鷲総合病院看護部主催の看護研究研修会において、講師および研究指導を担当した。 三重県立尾鷲総合病院の看護師対象に「看護研究とは」「看護研究に関する倫理」「研究方法」等について講演した。また、看護研究を行った病棟（ICUを含む）の研究代表者と面談を持ち継続的な研究指導を行った。研究発表会では講評を行った。 会場：三重県立看護大学および三重県立尾鷲総合病院
6）三重県立尾鷲総合病院看護部 看護研究研修会　講師	平成16年5月～ 平成17年3月	三重県立尾鷲総合病院看護部主催の看護研究研修会において、講師および研究指導を担当した。 三重県立尾鷲総合病院の看護師対象に昨年に引き続き「看護研究とは」「看護研究に関する倫理」「看護研究方法」等について講演した。また、看護研究を行った病棟（ICUを含む）の研究代表者と面談を持ち継続的な研究指導を行った。研究発表会では講評を行った。 会場：三重県立看護大学および三重県立尾鷲総合病院
7）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成17年9月14日 平成17年9月15日	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護の概念」「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター（奈良県橿原市） 時間：9時間

事項	年月日	概　　要
８）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成18年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
９）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成19年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：3時間
10）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成20年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：3時間
11）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成21年9月8日	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
12）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成22年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
13）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成23年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
14）社団法人岐阜県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成24年6月13日 ～7月11日	社団法人岐阜県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護理論」の講義および演習指導を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室、岐阜県県民ふれあい会館第1棟5階（岐阜県岐阜市） 時間：15時間（講義）、15時間（演習指導）
15）日本保健医療行動科学会　講師	平成24年6月	日本保健医療行動科学会主催の講習会において、「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」についての講義を行った。 会場：じゅうろくプラザ（岐阜県岐阜市）
16）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成24年9月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
17）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成25年8月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
18）社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成26年8月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において、「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6時間
―教員養成講座講師―		

事項	年月日	概　　要
1）三重県看護教員養成講習会　講師	平成14年4月～ 平成14年11月	三重県看護教員養成講習会に係る看護教育演習・実習および研究指導を行った。 講習会場：三重県立看護大学講義室
2）大阪府看護協会 大阪府看護教員養成講習会　講師	平成22年	大阪府看護協会主催の大阪府看護教員養成講習会において、「看護論演習」の講義を行った。 受講生：79人 時間：30時間 大阪府看護協会桃谷センター（大阪市天王寺区）
3）社団法人岐阜県看護協会 岐阜県看護教員養成講習会　講師	平成23年6月13日 ～7月27日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県看護教員養成講習会において、「看護論」「看護論演習」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 時間：15時間（講義）、15時間（演習指導） 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室、岐阜県県民ふれあい会館第1棟5階（岐阜県岐阜市）
4）社団法人岐阜県看護協会 岐阜県専任教員養成講習会　講師	平成25年5月20日 ～6月4日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県専任教員養成講習会において、「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：19人 時間：18時間 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室、岐阜県県民ふれあい福寿会館第1棟5階（岐阜県岐阜市）
5）社団法人奈良県看護協会 奈良県専任教員養成講習会　講師	平成25年7月29日 平成25年12月4日 ～12月12日	社団法人奈良県看護協会主催の奈良県専任教員養成講習会において、「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30人 時間：14時間 会場：奈良県看護研修センター、奈良県看護協会ホームナーシングセンター（奈良県橿原市）
5　その他		
―担当教科―		
1）「基礎看護技術」の担当	平成3年4月～ 平成8年3月	小阪病院看護専門の学生を対象に5年間「基礎看護技術」を担当した。講義は栄養・排泄・清潔・感染予防を担当し、基礎看護技術演習ではベットメーキング、罨法、消毒法、救急時の看護として、止血法、包帯法、心肺蘇生法などを担当した。
2）「臨床看護学総論」の担当	平成3年4月～ 平成8年3月	小阪病院看護専門の学生を対象に5年間「臨床看護総論」を担当した。講義内容は主に経過別・症状別看護を担当した。
3）「看護学概論」（学校保健）の担当	平成9年 4月～ 平成11年3月	大阪教育大学教育学部の学生を対象に非常勤講師として2年間「看護学概論」を担当した。「看護学概論」は養護教諭養成のための必修科目で、2単位（2時間×15回）の半期科目である。「看護学概論」の講義内容は健康と看護、看護の対象、環境、栄養と食事、清潔、排泄、薬剤、検査および一般症状の看護についてなどである。

事項	年月日	概　　要
4）「基礎看護技術演習」（学校保健）の担当	平成9年 4月～ 平成11年3月	大阪教育大学教育学部の学生を対象に非常勤講師として2年間、学校保健の一環として、「基礎看護技術演習」を担当した。「基礎看護技術演習」は養護教諭養成のための必修科目で、2単位（2時間×15回）の半期科目である。基礎看護技術演習では、身体測定、ベットメーキング、罨法、消毒法、救急時の看護として、止血法、包帯法、心肺蘇生法を担当した。
5）「在宅看護論」の担当	平成12年4月～ 平成14年3月	広島国際大学保健医療学部看護学科の学生を対象に2年間「在宅看護論」を担当した。「在宅看護論」は必修科目で2単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は在宅での医療を中心として主に地域で生活する在宅療養者への生活の援助である。広島国際大学保健医療学部看護学科の学生を対象に2年間「家族相談援助論」を担当した。
6）「家族相談援助論」の担当	平成12年4月～ 平成14年3月	広島国際大学保健医療学部看護学科の学生対象。「家族相談援助論」は必修科目で2単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は在宅療養患者の家族ケアについてである。危機理論、適応理論などの理論について講義した。主に高齢者における事例展開をもとに講義および演習をおこなった。
7）「ケースマネージメント演習」の担当	平成12年4月～ 平成14年3月	広島国際大学保健医療学部看護学科の学生を対象に2年間「ケースマネージメント演習」を担当した。「ケースマネージメント演習」は必修科目で2単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は社会資源を活用した地域で生活する在宅療養者への援助である。主に高齢者の事例をもとに事例展開の演習をおこなった。
8）「成人看護学概論」の担当	平成14年4月～ 平成14年10月	三重県立看護大学看護学科の3年次の学生を対象に「成人看護学概論」を担当した。「成人看護学概論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は成人期にある人々の特性を理解し、社会の中でよりよく生きるために必要な看護の役割を考える。成人のライフスタイル、成人期に罹患しやすい疾病構造などの特徴を踏まえ、健康の維持・増進や疾病の予防についての生活管理のあり方、看護の役割や機能を学び、看護実践の特性と方法を理解する。また、健康障害を持つ成人における対象理解と看護援助に関する概念について学ぶ。
9）「ターミナルケア」の担当	平成14年4月～ 平成16年3月	三重県立看護大学看護学科の3年次の学生を対象に「終末期看護学」を担当した。「終末期看護学」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は終末期にある人々の特性を理解し、その人らしく「生」をまっとうすることができるために必要な看護の役割を考える。また、トータルペインを理解し、苦痛の緩和への看護援助の実際を学ぶ。さらに、死別による家族の悲嘆を理解し、受容にむけての看護援助について学ぶことである。
10）「総合人間論」の担当	平成15年4月～ 平成16年3月	三重県立看護大学看護学科の3年次の学生を対象に「総合人間論」を担当した。「総合人間論」は選択科目で、1単位（2時間×7回））の半期科目である。講義内容は「人間の生」に関するさまざまな問題について、多面･多角的に考え理解できるように、基礎科目群との共同授業とし、今後の新しい看護の視点や方法を生み出すための基礎とすることである。
11）「介護概論」の担当	平成14年４月～ 平成18年３月	関西学院大学社会学部の学生を対象に「介護概論」を担当した。「介護概論」は必修科目で2単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は高齢者の介護実践の方法と技術についてである。
12）「老年看護学概論」の担当	平成16年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学概論」を担当した。「老年看護学概論」は必修科目で2単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は「加齢に伴う変化」と老年期の人々のQOLの向上をめざす理論と技術についてである。

事項	年月日	概　　要
13)　「老年看護学援助論」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「老年看護学援助論」を担当した。「老年看護学援助論」は必修科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は老年期にある人の健康の増進、疾病の予防といった看護実践の理論と技術についてである。
14)　「社会福祉学」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「社会福祉学」を担当した。「社会福祉学」は必修科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し、それに対する社会福祉制度と最近の政策動向についてである。
15)　「国際看護論」の担当	平成17年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は選択科目で2単位（2時間×30回）の通年科目である。講義内容は学際的視点から世界で展開する看護活動について理解を深め、実際に外国での看護教育・看護活動の演習を通して、新しい看護の視点と可能性を探る。
16)　「看護研究概論」の担当	平成18年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護研究概論」を担当した。「看護研究概論」は必修科目で1単位（2時間×7回）の半期科目である。講義内容は看護研究を進めていく上での基礎的能力を育成するとともに研究的態度および看護観及び研究の意義、研究課題の立て方、研究方法、研究結果のまとめ方、考察、発表の方法についてである。
17)　「看護学特論」の担当	平成18年4月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の学生を対象に「看護学特論」を担当した。「看護学特論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は国内外における看護研究の動向と課題及び国内外で関心のある看護問題や課題についての研究計画書を作成する方法についてである。
18)　「介護概論」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護概論」を担当した。「介護概論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、介護の主たる対象となる高齢者を理解しながら、介護の目的、方法、専門職としての役割を学ぶ、また、それらを基に実践と自己研鑽を積むことのできる専門性を育てることを目的とする。
19)　「介護技術」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護技術」を担当した。「介護技術」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、障害や疾病あるいは加齢により、他の人の支援を必要とする対象者のQOLを高める介護上の援助技術について、その考え方および身体的状況に応じたよりよい介護技術を学ぶ。授業は講義と演習であり、全体の1/2は体験的学習で構成する。
20)　「からだのしくみと生活」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「からだのしくみと生活」を担当した。「からだのしくみと生活」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、対象の自立支援にむけて必要なこころとからだの基礎的な知識を学び、適切な介護の実践ができる能力を養うことを目的とする。
21)　「加齢と障害の理解」の担当	平成20年4月～ 平成25年3月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「加齢と障害の理解」を担当した。「加齢と障害の理解」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、人間の成長と発達における心理や身体機能の変化を学び、それらが日常生活に与える影響について理解することを目的とする。

事項	年月日	概　　要
22)　「看護学原論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学原論」を担当した。「看護学原論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、看護学における主要概念を理解し、看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために、看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また、自己の看護観を形成し、発展させる能力を養うことを目的とする。
23)　「国際看護論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、国際社会の動向を知り、グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化、資源、環境など、多角的な視点について考え、異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
24)　「ターミナル看護」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナル看護」を担当した。「ターミナル看護」はは必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、ターミナルケアの意味を理解し、看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また、ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
25)　「看護理論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、看護の見方・考え方の基礎として、様々な看護理論が現れてきた社会背景を知り、看護理論を学ぶ。代表的な理論家の理論が看護実践の根拠になることや、その活用方法を知る。さらに、理論を研究に活用するための方法について理解する。
26)　「チーム医療論」の担当	平成22年4月～ 平成25年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義は3学科の教員で行う。チーム医療における協調性、責任感、コミュニケーション能力の向上は必須である。また専門分野以外の学習も「学際性」を伸ばすために必要である。3学科共通の科目を持ち学科の壁を越えて本科目を履修することにより医療現場において必要とされる資質を習得することを目的とする。
27)「看護学概論」の担当	平成25年4月～ 平成25年9月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学概論」を担当した。「看護学概論」は必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、看護学における主要概念を理解し、看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために、看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また、自己の看護観を形成し、発展させる能力を養うことを目的とする。
28)　「早期体験演習」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「早期体験演習」を担当した。「早期体験演習」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、看護の対象となる人々や医療チームのメンバーと信頼を築くための基本となるコミュニケーション方法を観察し、その内容について討議を行う。また、外来患者、入院患者、看護師と共に行動し、入院までの流れや病院の仕組み、看護の機能を学習し、将来医療に従事する者として看護の在り方を考える。

事項	年月日	概　　要
29)　「保健医療学概論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「保健医療学概論」を担当した。「保健医療学概論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、全人的ケアに主眼をおいた保健医療学について、その背景や基本的な考え方、諸外国及び日本における現状と実践例、クオリティ・オブ･ライフ（QOL）の視点を含む医療と看護の原点などについて幅広く学び、その後の主体的な学習の礎とする。
30)　「看護理論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、代表的な理論家の理論がどのような医療環境や社会背景のもとに構築されてきたかを知る。また、それらの理論が看護実践の根拠となることを理解し、看護過程の展開に有効に活用する方法を学ぶ。
31)　「チーム医療論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、チーム医療の重要性、看護領域におけるチーム医療の変遷について学ぶ。そして現在のチーム医療のなかでの看護師の位置づけおよび看護師が果たす役割について理解する。また、チーム医療における看護の在り方および今後の課題について考察する。
32)　「基礎看護学実習Ｉ」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「基礎看護学実習Ｉ」を担当した。「基礎看護学実習Ｉ」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、看護の対象となる人々が生活する様々な環境を把握し、対象者のニーズについて考える。また、看護師のシャドーイングを行い、対象者とのコミュニケーション場面や援助場面の観察を通して、日常生活への理解を深め、看護の機能や役割について考える。
33)　「成人看護学概論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「成人看護学概論」を担当した。「成人看護学概論」は必修科目で2単位30時間の半期科目である。講義内容は、人間の成長発達課題における成人期の特質について、身体的・精神的・社会的側面から理解する。また、成人期にある人々の様々な健康障害の原因や要因を学び、健康の回復、あるいは健康の保持増進に向けての看護援助の方法について学ぶ。
34)　「ターミナルケア論」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「ターミナルケア論」を担当した。「ターミナルケア論」は選択科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、ターミナルについての概念、およびターミナル期にある対象へのケアの在り方について学ぶ。各ライフサイクルにおけるターミナルケアの意味を理解するとともにターミナルケアを実践する上での知識と技術を学ぶ。

事項	年月日	概　　要
35）「国際保健医療看護演習」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「国際保健医療看護演習」を担当した。「国際保健医療看護演習」は選択科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、国際保健医療の第一線で活躍する専門家の報告などから世界の健康問題の動向と取り組みを学ぶ。また、伝統や風習などによる健康への意識と健康行動の違いを理解し、そこに求められる保健医療を考える。
36）「卒業研究Ⅱ」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「卒業研究Ⅱ」を担当した。「卒業研究Ⅱ」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、研究計画書の作成、文献レビューを中心に研究の一連の流れを理解する。また、研究を実施する際は担当教員の指導を受けながら「研究倫理」を十分把握したうえで実施する。今後の看護実践の場での看護研究に向けての素地を養う。
37）「社会福祉学」の担当	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「社会福祉学」を担当した。「社会福祉学」は必修科目で1単位15時間の半期科目である。講義内容は、社会福祉の歴史的経緯と今日に至った社会福祉の概念やその背景となる社会の発達、人々を支える価値について学び、理解を深める。さらに、地域における社会福祉職と医療職との連携・協働のあり方と社会福祉援助技術、マンパワーについて学び、社会福祉の基礎的理解を進める。
38）「社会福祉」の担当	平成26年6月～ 平成26年9月	大和高田市立看護専門学校の学生を対象に「社会福祉」を担当した。「社会福祉」は必修科目で１単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し、それに対する社会福祉制度と最近の政策動向について学ぶ。
39）「ターミナルケア論」の担当	平成26年10月～ 平成27年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナルケア論」を担当した。「ターミナルケア論」はは必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、ターミナルケアの意味を理解し、看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また、ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
40）「国際看護論」の担当	平成26年10月～ 平成27年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」はは必修科目で1単位（2時間×15回）の半期科目である。講義内容は、国際社会の動向を知り、グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化、資源、環境など、多角的な視点について考え、異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
―実習指導―		
１）精神科実習指導	平成9年4月～ 平成11年3月	大阪教育大学教育学部の学生を対象に非常勤講師として2年間、学校保健の一環として、「精神科実習」（指導人数40人、指導期間8週）を担当した。精神を病む人の理解を目的に実習指導をおこなった。指導内容は精神科病棟に入院している患者の日常生活の援助である。

事項	年月日	概　　要
2）基礎看護学実習指導	平成10年4月～ 平成14年3月	広島国際大学保健医療学部看護学科の2年次の学生を対象に4年間「基礎看護学実習指導」（指導人数15人、指導間4週）を担当した。指導内容は、病院での療養生活の援助についてである。
3）訪問看護ステーション実習指導	平成12年4月～ 平成14年3月	広島国際大学保健医療学部看護学科の3年次の学生を対象に2年間「訪問看護ステーション実習指導」（指導人数100年、指導期間16週）を担当した。指導内容は在宅で療養する主に高齢者への在宅看護についてである。
4）看護総合実習指導	平成14年6月～7月 平成15年6月～7月	三重県立看護大学看護学科の4年次の学生を対象に「看護総合実習指導」（指導人数5人、指導期間4週）を担当した。指導内容はチームアプローチを含めて、看護の実践的･総合的能力を高める。また、研究的な視点を持って実習を行い、卒業研究につなげながら、研究的態度を養うことである。
5）ふれあい実習Ⅰ指導	平成14年4月	三重県立看護大学看護学科の1年次の学生を対象に「ふれあい実習Ⅰ指導」（指導人数7人、指導期間1泊2日）を担当した。指導内容は学生自らが主体的・積極的に市町村探求を行うことにより、自然・生活文化・歴史・伝統・地域社会と人間との関わりについて考え、さまざまな状況での判断・適応能力を身につける。また、仲間との共同作業や共通体験を通して、今後の学生生活の基盤となる相互の信頼・協力関係を築くことができるようにすることである。
6）ふれあい実習Ⅱ指導	平成14年6月	三重県立看護大学看護学科の1年次の学生を対象に「ふれあい実習Ⅱ指導」（指導人数8人、指導期間2週）を担当した。指導内容は地域に暮らす乳幼児期から思春期の各ライフステージにある子どもに主体的に関わり、子どもの目線で対象を総合的に理解し、子どもの心身の状態や健康が地域特性とどのように関連しているかを理解させることである。
7）ふれあい実習Ⅲ指導	平成14年11月	三重県立看護大学看護学科の1年次の学生を対象に「ふれあい実習Ⅲ指導」（指導人数8人、指導期間4泊6日）を担当した。指導内容は早期から保健・医療・福祉の現場で様々な対象と向き合うことで、地域に暮らす各ライフステージの対象を、生活者としての視点から、総合的に理解させる。また、成人期から老年期にわたる人々の心身の状態や生活について学ぶとともに、人間の日常生活の成り立ちや多様な生活の価値観を理解させ、これらを尊重した援助のあり方と方法を身につけさせることである。
8）ホスピスケア実習指導	平成14年10月～ 平成15年2月	三重県立看護大学看護学科の3年次の学生を対象に「終末期看護実習指導」（指導人数104人、指導期間16週）を担当した。指導内容はターミナル期にある患者に対する看護の役割について理解すること、および患者と家族のためのQOLを高めるような援助について考え、実践することができる能力を養うことである。
9）老年看護学実習	平成18年10月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の3年次学生を対象に「老年看護学実習指導」（指導人数95人、指導期間10週）を担当した。指導内容は老年期にある人の看護、主に高齢者施設における老年看護の視点とその方法を実践的に学び、老年看護の役割・機能を理解させる。
10）総合実習	平成19年5月～ 平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科の4年次学生を対象に「総合実習指導」（指導人数11人、指導期間10週）を担当した。
―学位論文指導―		

事項	年月日	概　　要
1）学位論文指導 （卒業論文指導：学士、修士）	平成12年4月～ 平成13年1月 平成13年4月～ 平成14年1月	学士論文 1.テーマ「在宅重度障害者の介護者の介護負担」 2. テーマ「精神障害者の社会復帰への援助」 3. テーマ「痴呆老人の家族介護負担」 （1～3　指導期間：平成12年4月～平成13年1月） 4.テーマ「ターミナル患者の痛みの軽減への援助」 5.テーマ「ターミナル患者の家族の悲嘆への援助 6.テーマ「ターミナル患者の精神的ケアのあり方」 （4～6　指導期間：平成13年4月～平成14年1月） 以上、広島国際大学保健医療学部看護学科の4年次6名について、研究計画から論文作成全般についての指導をおこなった。
	平成14年4月～ 平成15年1月	学士論文 1.テーマ「近代文学にみる日本人の死生観の変遷」 2.テーマ：「患者と家族ニードの比較にみる在宅終末期患者のQOL」 3.テーマ：「在宅療養における問題点および必要とされる支援についての検討―配偶者による介護を受けている5事例を通して―」 4.テーマ「患者と介護者双方にとって安全で安楽な体位変換の方法―ボデイメカニクスとキネステテイクの比較検討―」 以上、三重県立看護学部の4年次4名について、研究計画から論文作成全般についての指導をおこなった。
	平成15年4月～ 平成16年3月	修士論文 1. テーマ「在宅酸素療法患者の介護者の介護負担」 以上、広島国際大学大学院看護学科の3年次1名について、研究計画から論文作成全般についての指導をおこなった。
―その他―		
1）三重県立大学地域交流センター継続教育授業「県立病院看護職員臨床看護研究研修会」	平成14年5月～ 平成14年12月	1.テーマ「要介護高齢者の在宅に向けての援助―パンフレットを用いての援助―」 2.テーマ「人工呼吸器装着患者の退院に向けて―高齢者介護者への退院指導―」 以上、臨床看護婦2名の研究計画から論文作成、成果発表の全般について指導した。
2）看護教員養成講習会 「看護教育研究」論文指導	平成14年10月～ 平成15年2月	1.テーマ「患者から拒否をされた学生への指導」 2.テーマ「現代学生のアイデンテイテイ確立不足からくる「涙もろさ」に対する関わり」 以上、看護教員養成講習会の聴講生2名に研究計画から論文作成、成果発表の全般について指導した。
3）三重県紀北県民局　研究開発事業	平成14年10月～ 平成15年2月	1.テーマ「透析中の精神症状に対するアロマセラピーの効果」 以上、臨床看護婦1名に研究計画から論文作成、成果発表の全般について指導した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許		
1）幼稚園教諭2級普通免許	昭和53年3月31日	昭52幼2普第3230号
2）保母資格	昭和53年3月21日	第保755
3）看護婦免許	昭和61年5月14日	第568532号

事項	年月日	概　　要
4）養護学校教諭1級普通免許	昭和63年9月25日	昭63養学1普め第10号
5）看護教員資格	平成3年11月29日	第946号 平成3年度厚生省認定による看護教員養成講習会
6）修士（学術）	平成9年3月25日	大阪教育大学第2090号
7）博士（社会福祉学）	平成15年10月15日	関西学院大学（甲社第十四号）
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
―看護師―		
1）奈良県立医科大学付属病院看護師	昭和61年4月～ 昭和63年3月	看護師として精神科、小児科、神経内科に勤務
2）奈良県立心身障害者リハビリテーション センター看護師	昭和63年4月～ 平成3年2月	看護師として精神内科、整形外科に勤務
3）小坂病院看護師	平成3年3月～ 平成3年3月	看護師として精神科に勤務
4　その他		
1）情報処理ワーキンググループ	平成11年2月～ 平成12年4月	学内所有のデジタルデータの掌握をおこなうための調査を行った。また、同時にアンケート調査を行い、学内で共有する必要な共有技術の選定を行った。さらにデータ共有範囲の検討（セキュリティー）を行い、所有権の管理方法についても検討した。技術面では、大学の情報センター職員とともに、教員の研究活動に必要な情報技術の習得のための講義を少人数制（5名程度）で行い、教員への情報提供と情報技術の向上にむけての援助をおこなった。
2）カリキュラム編成委員	平成12年 2月～ 平成13年 4月	平成14年度に向けて、看護学科の教育目的・目標等の検討と平行して現行カリキュラムの問題点を分析した。検討の進め方として、基礎・専門基礎、専門＝科目群・講座単位における全体調整・修正を行った。全体的な方針として、1. 学生のゆとりと選択の自由度を拡大する、2. 効果的な学習・積み重ねを促進する、こととした。それらをもとにカリキュラム編成試案を作成した。また試案は教員全体にはかり、再度調整を行った。
3）情報委員	平成14年4月～8月	三重県立看護大学ホームページの作成、および遠隔授業（ギガビット）導入にむけての作業を実施した。また、新システム導入のため、学部生と教職員に対してwindowsXPのセミナーをおこなった。
4）「人間総合論」カリキュラム企画委員	平成14年4月～ 平成15年3月	三重県立看護大学カリキュラムの一環として、「総合人間論」（平成15年4月より開講、三重県立看護大学3年次前期104名対象、1単位（2時間×7回））の講義・演習内容を検討した。科目概要は「人間の生」に関するさまざまな問題について、多面･多角的に考え理解できるように、基礎科目群との共同授業とし、今後の新しい看護の視点や方法を生み出すための基礎とすることである。
5）三重県立看護大学紀要 掲載論文査読委員	平成14年10月～ 平成15年3月	テーマ「精神障害者の社会復帰を阻む要因について」上記の論文についての査読を行った。
6）大学入試問題作成委員 （三重県立看護大学）	平成14年4月～ 平成14年10月	一般推薦入試、前期･後期課程入試などの問題作成をおこなった。

事項	年月日	概　　要
7）第23回日本看護科学学会 学術集会企画委員	平成14年8月～ 平成15年12月	第23回日本看護科学学会学術集会(平成15年12月6日～12月7日、開催場所：三重県立看護大学)の学内企画委員としてプログラム等の企画をおこなった。
8）国家試験対策委員	平成14年8月～ 平成15年8月	三重県立看護大学3年次生および4年次生を対象に模擬試験の実施を年3～4回実施した。また、国家試験用補講授業の計画・実施を行った。
9）領域別実習作業部会	平成14年8月～ 平成15年7月	実習場所の確保、実習要項の作成、領域別実習のグループ表およびローテーション表の作成を行った。
10）岐阜医療科学大学 研究倫理審査委員長	平成22年4月～ 平成24年9月	岐阜医療科学大学保健科学部看護護学科、放射線技術学科、臨床検査技師学科合同の研究倫理審査委員会において研究倫理審査委員長を務めた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 「車椅子移送」における体験学習の指導内容の検討「わかる授業をつくる看護教育技法3、―シュミレーションや体験学習を取り入れた授業評価―」	共著	平成12年3月	医学書院	看護教育において教育効果の確かめられた具体的な教育技法について解説している。看護学生が看護のイメージをつかみ、看護への興味関心を高め、看護者に必要な知識・技術をつけ、自律した考える看護師の育成に向けての授業創造、授業改善のための教育技法を紹介している。 Ｂ5判 全196頁 編者：藤岡完治、野村明美 共著者：藤岡完治、幸山靖子、守本とも子 （他16名） 本人担当部分：第4章 「体験学習」P.166-P.174を単著。学校内に設置された段差とスロープおよびエレベータを使用し、看護学生に車椅子移送の学内演習をおこなった。その際に学生は患者役と看護婦役を交互に体験し、演習終了後にそれぞれの感想や学びをまとめた。これらの演習の過程を「車椅子移送における体験学習の方法」の授業案のひとつとして紹介した。また、教材としての段差とスロープの設置方法について紹介した。
2. 在宅看護における感染症と対策 －在宅医療における感染防止対策－「ナースのためのインフェクション」	共著	平成12年5月	TECHNO COMMUNICATIONS	在宅および病院における感染とその対策について解説している。感染防御のためのユニバーサルプレコーションからスタンダードプレコーションへのパラダイムシフトについて理解し、新しい感染防止のためのガイドラインを学ぶ。 Ａ4変形判、全189頁 共著者:中塩哲士、沖本克子、守本とも子（他 3名） 本人担当部分：第9章 「在宅看護における感染症と対策」P.136-P.143を単著。在宅療養患者の特徴と在宅で発症しやすい感染症、在宅での感染経路、感染予防（一般的な感染予防、器具の消毒、ゴミ・廃棄物の処理、衣類・リネンの消毒）について説明した。また、感染経路と感染予防については、病院・施設と在宅との相違点について述べ、筆者の体験から事例をあげて、在宅での感染問題について述べた。
3. これだけは知っておきたい看護の禁句・看護の名句	共著	平成15年6月	梁明書房	病院や施設などの看護の現場で専門職の人々に使われがちな不適切な言葉がけ（禁句）の事例を挙げ、禁句の意味を考察した。そして、患者や家族との信頼関係をつくり、患者や家族を励まし、心を癒す禁句に変わる適切な言葉がけを紹介した。 四六版 並製 全238頁 編者：前原澄子、星野政明、川野雅資 共著者：浅子ひかり、荒梅法雄、守本とも子（他95名） 本人担当部分：P.68-P.69を単著。本書では、看護の領域において患者（利用者）を支え、癒し、共に生きる関係を作るために不可欠なコニュニケーションの技法について考察した。看護の専門性が科学化されたとしても、看護における「ケア」の意味は、それに携わる看護職の看護観に表されていく。ケアの本質に照らしてコニュニケーション技法を取り上げ、どのような場合に、どのような関係の中に、ことばが癒しの力を持ち得るかといったことをテーマに論述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 先天性疾患と家族心理臨床「家族のための心理学」	共著	平成17年4月	保育出版社	家族危機の今日的な問題について臨床心理学的な立場から焦点をあて、合わせて生涯発達的、生活環境的な諸要因を視野に入れ、家族と家族関係の心理と病理に関する基本的な問題に対して理論と実践の両面からの知見を紹介している。 B5判　全233頁 編者：小林芳郎 共著者：小林芳郎、榎本博明、守本とも子（他37名） 本人担当部分:8章1節「身体的疾病と家族の心理臨床」P.142-P.146を単著。家族の身体的疾病の羅患事態において生ずる家族の心理臨床的な問題を取り上げ、それへの適切な対策をとり、家族の精神的健康の維持向上を促すことについて、具体的な事例を示して実践に役立つように理解を図った。
5. QOLを高める専門看護、介護を考える(上巻)	共著	平成17年4月	中央法規	利用者のQOLを高める看護・介護領域での専門援助に焦点を絞り、広く国内外の研究成果も含め、実践例を取り上げて紹介するとともに、高齢者施設での看護と介護と介護の専門援助についてその内容と方法を具体的に解説している。 B5判　全136頁 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編者：守本とも子、　星野政明 本人担当部分:（部分執筆） 第4章「高齢者の痛みについて」　P.97-P.116を単著。 日本における高齢者の痛みの考え方について述べた。また、痛みのアセスメントの方法と痛みの緩和、薬剤治療と看護について述べた。 第5章「高齢者の燕下困難へのアプローチ」 P.119-P.132を単著。 燕下障害のメカニズムと観察及び援助方法について述べた。
6. QOLを高める専門看護、介護を考える(下巻)	共著	平成17年8月	中央法規	2000年の社会福祉基礎構造改革による大きな変化に伴い、保健医療分野での制度・施策も急速に変化してきたことを踏まえ、現場の第一線としての看護と介護の実践に従事する専門職者の知識と技術を高めるための内容・方法を具体的に解説している。 B5判　全138頁 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編者：守本とも子、星野政明 本人担当部分：（部分執筆） 第7章1節1「認知症高齢者の入浴テクニック」 P.19-P.20を単著。 認知症高齢者の特徴とそれを踏まえた適切な入浴の援助方法について述べた。 第8章「認知症高齢者への安全テクニック」P.76-P.84を単著。 認知症高齢者の日常生活における事故の防止について述べた。 第10章「高齢者施設における終末期ケアの改善」 P.111-P.123を単著。 緩和ケアモデルへの提言として、緩和ケアへの実践について述べ、POLSTの紹介、チームワークの重要性について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 統看護学講座　専門分野1「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第14版第1刷	共著	平成18年5月	医学書院	本書は看護技術の教科書として最新の方法を紹介している。単なる手順の方法ではなく看護職者が最も重要と考える「臨床判断」の過程を含めて解説し、卒業までのすべての領域実習で手引書として活用できる内容としている。 B5判、全348頁 共著者：守本とも子、藤崎　郁、任和子、有田清子、井川順子、石賀奈津子、岡本啓子、尾崎章子、小林優子、茂野香おる、竹林直紀　(他10名) 本人担当部分: 第1章A「生活環境を整える」P.64-P.74を共著。 主に療養生活の環境（病室、人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世 第1章C「衣服を用いる」P.121-P.127を共著。 主に衣類を用いることの意義、衣生活に関するニーズのアセスメント、病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世
8. 介護概論―利用者へのサービスの質の向上を目指して―	共著	平成18年11月	黎明書房	利用者へのサービスの質の向上を目指した方策を意識的に取り上げ、高い専門性に裏付けられた能力の確立に向けて、とりわけ、介護領域での専門援助について内容と方法を具体的に解説している。 A5判　全260頁 編者:守本とも子、星野政明 本人担当部分：編集 第4章2節「加齢が及ぼす身体的変化」P.58-P.70を単著。 加齢が高齢者に及ぼす影響と加齢から生じる疾患及びその看護について述べた。 第4章3節「高齢者の痛みについて」P.82-P.89を単著。 高齢者の痛みの症状と観察のポイント。適切な痛みへの援助について述べた。 7第4章4節「燕下障害」P.89-P.97を単著。 主に燕下障害の観察とアプローチについて述べた。 第5章1節「高齢者の終末期介護」P.133-P.138を単著。 緩和ケアとターミナル期におけるコミュニケーションについて述べた。 第7章1節「認知症患者のための各種の療法」P.186-P.192を単著。 主にレクレーション療法と活動プログラムの立案について述べた。
9. 事例から学ぶ子どもを育む母親援助の実際	共著	平成19年3月	保育出版社	保育士を目指す学生の教科書として、また現場の保育士が母親援助の実際に役立つように、保育状況の中で起こりやすい問題を取り上げ、解決方法を理解しやすく解説した。 B5判、全175頁 共著者：守本とも子、今井章子、上野恭裕、浜崎隆司、米谷光弘、田中昭夫、水野道子、五十嵐敦子、富田久枝、上村加奈、他(24名) 本人担当部分:Case39「体が弱い」P.133-P.135を単著。 心臓に疾患を持つ子どもに対する母親の対応のあり方と具体的な対応策について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. コンパクト福祉系講義 医学一般	共著	平成19年3月	金芳堂	本書は現代医学の入門書として現代社会での医学・医療にマッチした「福祉専門職を目指す人のための教本」の製作を目的としている。 B5判、全211頁 監修：日野原重明 共著者：守本とも子、藤崎　郁、任和子、有田清子、井川順子、石賀奈津子、岡本啓子、尾崎章子、小林優子、茂野香おる、竹林直紀　(他10名) 本人担当部分:第23章Ⅰ「施設入所認知症高齢者に対する緩和ケアモデル」P.156-P.160を単著。 緩和ケアモデルとして主に個別ケア、事前ケア計画、チームワークについて述べた。
11. 看護学実践 -Science of Nursing- 老年看護学	共著	平成19年4月	日本放射線技師会出版会	時代のニーズに応える実践的な看護の教科書として、サブテキストとして、実習の参考書として、臨床で調べる丁寧な辞書として、など多様に活用できることを意識して製作された。 A5版　全261頁 監修：川野雅資 編者：守本とも子 本人担当部分:編集 Chapter 2　高齢者の理解「加齢と老化」P.4、P.45-P.52を単著。 高齢者の心と身体について加齢現象の視点から理解するとともに、高齢者の特徴を十分できるように記述した。
12. 住居医学	共著	平成19年	米田出版	本書は「病室環境改善」についての調査・研究の成果をまとめたものである。より、現実に即したニーズをとらえ、現存の病室環境をいかに改善するかを考案していくことを目的としている。 四六判、全211頁 監修：吉田修 共著者：吉田修、三村浩史、筏　義人、大﨑茂芳、内山巌雄、尾崎二郎、細井裕司、喜多英二、和中明生、守本とも子、車谷典男 本人担当部分:第10章「デンマークの優れた高齢者住居」P.177-P.192を単著。 日本の現状を背景に、北欧諸国の中でも「高齢者住居」について独自な発展を遂げ、1987年に施設建設を凍結するという政策転換（法律公布）に踏み切ったデンマークの高齢者住宅と日本の画期的な高齢者共生住宅の事例を取り上げ、新しいステージに突入した日本の高齢者住居の有り様を検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第14版第6刷	共著	平成20年4月	医学書院	本書は看護技術の教科書として最新の方法を紹介している。単なる手順の方法ではなく看護職者が最も重要と考える「臨床判断」の過程を含めて解説し、卒業までのすべての領域実習で手引書として活用できる内容としている。 B5判、全348頁 共著者：守本とも子、藤崎　郁、任和子、有田清子、井川順子、石賀奈津子、岡本啓子、尾崎章子、小林優子、茂野香おる、竹林直紀(他10名) 本人担当部分: 第1章A「生活環境を整える」　P.64-P.74を共著。 主に療養生活の環境（病室、人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世 第1章C「衣服を用いる」P.121-P.127を共著。 主に衣類を用いることの意義、衣生活に関するニーズのアセスメント、病衣の選び方、病衣交換の方法について述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世
14. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第1刷	共著	平成21年2月	医学書院	本書は看護技術の教科書として最新の方法を紹介している。単なる手順の方法ではなく看護職者が最も重要と考える「臨床判断」の過程を含めて解説し、卒業までのすべての領域実習で手引書として活用できる内容としている。 B5判、全495頁 共著者：守本とも子、藤崎　郁、任和子、有田清子、井川順子、石賀奈津子、岡本啓子、尾崎章子、小林優子、茂野香おる、竹林直紀(他10名) 本人担当部分： 第2部　第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32を共著。 主に療養生活の環境（病室、人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世 第2部　第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192を共著。 主に衣類を用いることの意義、衣生活に関するニーズのアセスメント、病衣の選び方、病衣交換の方法について述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世
15. 国際看護への学際的アプローチ	共著	平成21年3月	日本放射線技師会出版社	本書は世界でトピックとなっている健康課題とその背景について、国際保健医療活動の実例を紹介し、今後の国際的な活動に必要な知識や思考を深める機会を提供することを目的とした。 B5判、全211頁 監修：守本とも子 編者：堀内美由紀 本人担当部分:（部分執筆） 第1章「異文化理解のための看護理論」P.7-P.18を単著。 世界でトピックとなっている健康課題とその背景を国際保健医療活動の実例を交えながら紹介し、看護の国際的な活動に必要な知識や思考について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 新・QOLを高める専門看護、介護を考える	共著	平成21年3月	中央法規出版(株)	本書は高齢者への理解を深めるため、加齢が及ぼす身体的・心理的変化を学び、加齢が高齢者にどのような影響を及ぼすのか、また、結果としてどのような障害が起こってくるのかを理解する。そして高齢者のQOLを高める日常生活援助について学ぶ。 B5判、全204頁 監修：アンドレア・ストレイト・シュライナー 編者：守本とも子、星野政明 本人担当部分:（部分執筆） 第2章　「高齢者の痛みへのアプローチ」P.61-P.80を単著。 第1節「高齢者の痛みについて」高齢者の痛みの特徴を述べた。第2節「痛みの特定」痛みの特定方法につい主訴、動作、疾患との関連について述べた。第3節「痛みのアセスメントスケール」痛みの質と強さのアセスメントについて著者らが作成したVASスケールを紹介した。第4節「痛みの治療とケアプラン」非薬物、薬物的介入と痛み治療薬の主要なタイプ、ケアプランについて述べた。第5節「倫理的責任」痛みの治療におけるガイドラインと倫理的課題について述べた。 第3章「高齢者の嚥下困難へのアプローチ」P.81-P.94を単著。 第1節「嚥下障害とは」嚥下の生理、嚥下障害のタイプと原因、観察のポイントとチームアプローチについて述べた。第2節「嚥下療法の工夫と技術」食物形態の改善、嚥下方法、筋肉強化訓練、緊急時の対処について述べた。第3節「スタッフの役割」嚥下・食事評価スケールを紹介した。 第5章「QOLを高める日常生活動作への援助」P.113-P.123を単著。 第1節「認知症高齢者の入浴テクニック」入浴中の不穏を低下させるプロトコールと安全策について述べた。 第6章「認知症高齢者への安全テクニック」P169-P.177を単著。 第1節「認知症高齢者について」認知症についての概要と特徴について述べた。第2節「認知症高齢者の行動特性と対策」認知症高齢者の特徴的な行動とそれに対する対処方法を述べた。 第7章「QOLを高める高齢者の遊び療法」P179-P.201を単著。 第1節「遊び療法とボランテイア活動」ボランテイアの集め方、活動の説明について述べた。第2節「遊びマニュアルの使い方」レクレーション遊具のつくり方と使い方及び遊具を紹介する際の注意点について述べた。
17. 介護の基本・コミュニケーション技術	共著	平成22年9月	黎明書房	本書は介護の考え方について理解するとともに、介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ、介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とした。 A5判、全202頁 編著：守本とも子、星野政明 本人担当部分：編集

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18. 生活支援技術・介護過程	共著	平成22年6月	黎明書房	専門職としての基盤を構築することを目的とした。心身の状況に応じた介護を実践するための生活支援の方法とそれらを展開していくための一連の過程として「介護過程の展開」について具体的な内容を盛り込んだ。 A5判、全219頁 編著：守本とも子、星野政明 本人担当部分: 第10章「終末期の介護」P.159-P.168を単著。 終末期における介護の意義と目的、対象者のアセスメント、医療との連携、ブリーフケアについて述べ、終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探った。
19. 老年看護学 Geriatric Nursing	共著	平成22年12月	PILAR　PRESS	本書は高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた「老年看護学」（監修:川野雅資、編集：守本とも子,2007年）の改訂版である。国家試験対策のテキストとしても活用されてきた旧版の内容をさらに掘り下げ、高齢者の疾病構造の変容、健康に関連した高齢者のニーズの多様性などを考慮して、老年看護の実践に向けて、看護学生の必携のテキストとなっている。 本人担当部分：編著 第2章　2. 高齢者の理解　「加齢と老化」P.2、P.57-P.65を単著。 高齢者の生理的機能の変化、疾患の特徴、感覚機能の変化（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、痛覚）また、その他の諸機能として、加齢による心臓、血管、血液、外皮系について述べた。そして、加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。
20. 医療福祉学の道標	共著	平成23年1月	金芳堂	本書は社会福祉学の視点から現代医療の課題を探求、解決していこうとすると同時に医療というフィールドにおける社会福祉的視点の意義への接近を試みた。医療の分野における社会福祉的なものとは何か、という課題に迫ろうとしている。①クライエントの心身の健康、②クライエントの住む時代と社会の状況、③クライエント個人（家族）の生活実態と生活背景と地域の状況、④医療と福祉の援助専門職の理論と技術、⑤医療と福祉の援助専門職の価値観、⑥援助専門職の連携について、の道標を明示することを目的としている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				B5判、全200頁 監修：日野原重明、西三郎、前原澄子、秋山智久 編集：星野政明、高内克彦、土田 耕司 本人担当部分: 第2章 C 生活の変化と保健･医療･福祉の統合 P.23-P.26を単著。 　生活の変化として家計の動向、家族形態の変化、介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第13章 A 少子高齢社会での医療福祉　P.163-P.165を単著。 　今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて、現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ　P.170-P.172を単著。 　介護福祉から医療介護福祉へのパラダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し、今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉　P.184-P.185を単著。 　情報化社会における医療福祉について、特に医療福祉とIT（Information Technology）との関連で述べた。今後、医療福祉のどの分野においてITがどのように活用されていくのか、その意義について考察した。
21. 子ども家庭のウェルビーイング	共著	平成23年3月	金芳堂	近年、子どもの成長、発達を阻害する社会的因子や子どもへの虐待問題など、多くの課題が明らかになっている。子どものウェルビーイングを目ざした子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説している。 B5判、全128頁 編集代表：星野政明 編集：真鍋顕久、三友雅夫 （部分執筆：守本とも子他） 本人担当部分: 第1章 A 少子化の進行と家庭・地域の変容 P.1-P.5を単著。 　少子化の現状と家庭・地域の変容について概説した。また、現代社会における家庭・地域で生活する子どもの生活課題と対策について考察した。 第3章 B 子ども家庭福祉の実施体制 P.39-P.41を単著。 　子ども家庭福祉について、どのような目的でどのような施策が実施されているのか、その現状について述べるとともに、今後の課題についても考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第15版第8刷	共著	平成24年2月	医学書院	本書は「第1部　看護技術総論」「第2部　16領域の看護技術」の2部構成としている。第1部では看護技術の4つの基本原則とその優先順位について説明を行い、第2部では看護技術を16の領域に分けて説明している。改定にあたっては、それぞれの技術についてできるだけ、最新の方法を紹介し、その根拠を示すように心がけている。 B5判、全495頁 本人担当部分： 第2部　第1章 B「病床環境の調整」P.22-P.32を共著。 主に療養生活の環境（病室、人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世 第2部　第5章 C「病床での衣生活の援助」P.185-P.192を共著。 主に衣類を用いることの意義、衣生活に関するニーズのアセスメント、病衣の選び方、病衣交換の方法について述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世
23. 介護実習入門	共著	平成24年	黎明書房	本書は介護の現状について述べ、介護の倫理、介護の原則についてわかりやすく説明している。また、介護施設の概要と入所者の特徴について述べている。次にそれらの知識を踏まえ、介護実習前の基礎知識として、まず、介護実習の意義と目的について述べ、介護を専門職とする人のための姿勢、そしてコミュニケーションの基本とコミュニケーションの実際について知識と技術が同時に学ぶことができるように工夫されている。 最後に介護過程について事例をもとにわかりやすく解説し、介護に必要な援助技術について述べている。 A5判、全128頁 編集：守本とも子、星野政明 本人担当部分：編集

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24. 系統看護学講座　専門分野1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第16版	共著	平成25年1月	医学書院	本書は、多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また、主な看護技術の手順については、動画で見られるように工夫し、動画の活用によって技術習得が容易となり、より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5判、全528頁 共著者：有田清子、有田秀子、井川順子、岡本啓子、尾崎章子、小林優子、坂下貴子、茂野香おる、立野淳子、田中靖代、田村富美子、内藤知佐子、任和子、林静子、比田井理恵、平松八重子、三富陽子、守本とも子、屋宜譜美子、山勢博彰、吉村雅世 本人担当部分： 第1章 A 「環境調整技術」P.9-P.21を共著。 主に療養生活の環境（病室、人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世 第6章 B 「清潔・衣生活援助」P.192-P.200を共著。 主に衣類を用いることの意義、衣生活に関するニーズのアセスメント、病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：岡本啓子、吉村雅世
25.介護福祉学辞典	共著	平成26年10月	ミネルヴァ書房	本書は「介護福祉学」の構築のためのエビデンスを確立することを主たる目的としている。隣接領域の学問を学びつつ介護福祉学特有の学問体系を構築することが重要である。 「介護福祉学辞典」は介護の社会的ニーズに対して、専門的な知識を持って対応できる人材の育成とサービスの向上に寄与するため、教育の根拠となる「介護福祉学」に関する知識・技術の共通理解のツールとして活用できる内容とした。 B5判　全829頁 編者：日本介護福祉学会事典編纂委員会 本人担当部分：P546-547を単著。 「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ、障害児に関する介護、福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また、障害児に対する介護について、近現代史から、ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し、障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき、活動することができるための展望と課題について考察した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26.高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得	共著	平成26年10月	すぴか書房	本書のテーマは「高齢者の」せん妄である。治療者の視点ではなく生活援助者の視点で、「安心をとどける」ためにどうすべきかを述べた。 A5判　全140頁 編者：守本とも子 共著者：野中浩幸、酒井千知、奥百合子（他8名） 本人担当部分： 第3章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72を単著。 本章では、せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく、とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって、せん妄の知識は必須だと言える。 第4章「せん妄が起きてしまったら」P73-86を単著。 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく、さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し、症状への適切な対応を学ぶ。
27.これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために	共著	平成26年11月	ピラールプレス	本書では、発展途上国の現状、リプロダクティブヘルスと母子保健のほか、我が国に滞在する外国人への看護についても取り上げている。また、学生が将来勤務地として希望するであろう発展途上国、および先進国への就業のほか、欧米諸国への就職についても紹介している。 B4判　全163頁 監著：守本とも子 編著：田中和奈 共著者：城戸口友香、高嶋愛里、高橋里沙（他5名） 本人担当部分： 第3節「国際協力機関の取り組み」P22-28を単著。 国際協力のいくつかの方法について知り、世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。
28.看護職をめざす人の社会保障と社会福祉	共著	平成27年4月	みらい	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また、すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 B4判　全211頁 編者：守本とも子 共著者：虎杖真智子、井上深雪、小澤香（他15名） 本人担当部分：編集
（学術論文）				

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1.　The Progressive Variation of Nurses' Professional Identity and Nurse-Patient Relationships Differences between Students and Graduates（査読付）	共著	平成8年9月	Proceeding of the Third International Conference of Health Behavior Science P.173-P.176	SCT（Sentence Completion Test）を用いて看護婦の職業的アイデンティティと対患者関係の発達的変容について、看護学生(143名)と現職看護婦(154名)を比較しつつ、その差異について検討した。本研究により、職業的アイデンティティ形成の過程で重要なことは自己の看護婦としての未熟性の認識とそれに伴う自己向上への努力、さらに、心身を病む患者の理解であった。 本人担当部分：職業的アイデンティティの質問紙の作成と統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto、Ben Yanai
2.　看護婦の職業選択の理由とIdentityの関連について（査読付）	共著	平成9年2月	大阪教育大学紀要 45巻　2号 P.327-P.340	研究目的は看護婦の職業選択の理由と職業的アイデンティティとの関連について明らかにすることである。対象は看護学生143名、看護婦80名であった。職業的アイデンティティの因子分析をおこない5因子が抽出された。職業選択の理由を「やりがいがある」と解答した人は自己向上への意欲が高く、第1因子の「職業的満足度」と関連があった。また、「自分自身を成長させる」と解答した人は職業的満足度が低かった。 本人担当部分：質問紙法による調査と統計解析、及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、櫻井秀雄、山形力生、柳井勉
3.　在宅重度重複障害者（児）の家族の介護負担に関する研究 (修士論文)	単著	平成9年3月	大阪教育大学	在宅重度重複障害者（児）の生活問題、主たる介護者の介護負担、社会福祉の利用状況、福祉への要望などについて調査した。対象は患者と主たる介護者(77組)であった。介護者の介護負担については、介護そのもによる身体的な負担はみられるものの、精神的には、障害が重度であるほど、むしろ介護者（主に母親）にとっては生きがいとなっていた。しかし、将来への不安（介護者が介護できなくなったとき）は大きく、社会福祉施策の重要な課題であることが示唆された。 A4判、全131頁
4.　在宅重度重複障害者の家族における介護負担関連要因に関する研究 （査読付）	共著	平成9年6月	教育医学42巻4号 P.319-P.325	研究目的は在宅重度重複障害者の家族の介護負担関連要因を明らかにすることである。対象は重度重複障害者の主たる介護者77名で、質問紙法による面接調査をおこなった。介護負担関連要因について因子分析をおこない、5因子が抽出された。本研究により、身体的負担は障害の重症度と、精神的負担は良好な家族関係や時間的ゆとりに関連があった。 本人担当部分：調査、統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、柳井勉

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. Relation Between daily physical activity and subjective symptoms in a patient with chronic thromboembolic pulmonary hypertension　(査読付)	共著	平成9年6月	Proceeding of pulmonary Circulation Research, 1997, edited by H. Nagano, Nakata T and Kuno K. Japanese Society for Pulmonary Circulation Research, Chiba P.5-P.11	慢性閉塞性肺高血圧症患者の身体活動と咳、呼吸困難、痰の性状と量、食欲不振、睡眠障害などの自覚症状点数の時系列解析をおこなった。その結果、重症患者の日常身体活動は自覚症状とほぼ0日のラグをもって密接に関係していた。また、日常身体活動と浮腫の症状点数は2日のラグをもって関係していた。身体活動と自覚症状の時系列解析は的確な患者の理解に有効であると考えられた。 本人担当部分：統計解析をおこなった。 共著者:Shimouchi A, Morimoto T, Shirai M, Okano Y, Nakanishi N, Kunieda T
6. 「母親逆転移」現象と職業的アイデンティティの関連性に関する研究 (査読付)	共著	平成10年6月	日本保健医療行動学会年報　第13巻 P.139-P.156	研究目的は、看護婦273名を対象にNurse-Patient Relationship Scaleを作成し、看護婦と患者の感情交流、また職業的アイデンティティとの関連を、患者への母親逆転移といった視点から考察することである。結果より、「職業への肯定的イメージ」は患者に対する肯定的感情に関連していた。また、患者への同一視が看護婦の母親逆転移現象を喚起し、そのことが、ひいてはバーンアウトにつながり、看護婦への臨床心理的スーパーヴィジョンが必要と考えられた。 本人担当部分：調査と統計解析をおこなった。 共著者:山形力生、守本とも子、櫻井秀雄
7. Physical activity of respiratory patients during home oxygen therapy (査読付)	共著	平成10年12月	J. Educ. Health Sci Vol44(2) P.469-P.476	研究目的は、在宅慢性呼吸不全患者の日常身体活動と臨床経過や自覚症状との関連を検討することである。対象は13名、観察期間は平均36週、日常身体活動の評価は万歩計を使用し、自覚症状については酸素療法日誌を利用した。身体活動と肺機能諸値、各種心理テストの得点、介護家族人数との間に相関はなかったが、年齢、外来通院の有無、ならびに臨床経過と密接に関係すると考えられた。 担当部分：調査および統計解析をおこなった。 共著者:Shimouchi A, Igarashi K, Kimura H, Morimoto T, Yoshioka T, Kunieda T,
8. 脳血管障害患者をもつ家族の障害受容 ―障害受容に影響を与える要因の検討― (査読付)	共著	平成11年6月	日本保健医療行動学会年報、第14巻 P.129-P.149	在宅脳血管障害患者と介護者の障害受容に関する62項目の質問紙を作成し、障害受容を構成する因子を検討した。対象は脳血管障害患者と介護者98組であった。因子分析の結果、7因子が抽出され、そのうち6因子が一つのクラスターを形成した。このクラスターの解釈から、介護者の「心理的負担」「孤独感」「障害特性への困惑」の因子を減少させることが、患者・介護者間の疎通性を高め、障害受容のための援助に有効であることが示唆された。 本人担当部分：質問紙の作成と統計解析をおこなった。 共著者:山形力生、櫻井秀雄、守本とも子 、元村直靖

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.　在宅重度重複障害児（者）および主たる介護者におけるソーシャル・サポートの研究（査読付）	共著	平成11年12月	教育医学 第45巻 第13号 P.757-P.766	障害発生の時期から現在に至るまでの在宅重度重複障害児（者）と介護者を取りまくソーシャルサポートの実態を把握、検討し、支援の方策を見出すことを目的とした。方法は在宅重度重複障害児（者）の介護者77名に聞き取り調査をおこなった。結果より、障害の早期診断が医療への信頼と早期の障害の受容につながった。医療・福祉の早期の連携は介護者の経済的情緒的な安定に重要であった。また、福祉サービスでは訪問入浴サービスなどの家庭内での援助に関する希望が少なかった。 本人担当部分：調査、結果の考察および研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、柳井 勉
10.　看護職の腰痛に関する研究（査読付）	共著	平成11年12月	中国ブロック理学療法士学会誌　第13巻 P.49-P.52	大阪府下3病院の看護婦1224名を対象に腰痛の実態とその発生要因について調査した。看護婦に腰痛の発生率が高いことが知られているが、本調査では約8割が腰痛を訴えていた。その原因は、職場での仕事が忙しく休養が取れない、欠勤できないといったことが明らかになった。今後の対策として、管理者が主体となった看護部門全体の腰痛対策が必要であると考えられた。 本人担当部分：調査および結果の考察をおこなった。 共著者:辻下守弘、守本とも子、中嶋律子、白田久美子、任和子、池谷茂隆
11.　在宅重度重複障害者の介護者における主観的健康感・生活満足度に関連する介護負担要因の分析（査読付）	共著	平成12年3月	日本健康教育学会 第7巻 第1・2号 P.3-P.10	在宅重度重複障害者の介護者(77名)に面接調査をおこない、介護者の主観的健康感・生活満足度に関連する介護負担要因を分析した。結果より、障害者と共に生活することへのネガテイブな感情、要介護者の年齢、協力してくれる人がいない、時間的余裕がない、経済的負担といった要因の重要性が示された。また、若い障害者は介護保険制度の対象外でもあり、介護者の高齢化とそれに伴う介護への不安が重要な問題であることが示唆された。 本人担当部分：研究の企画および総括をおこなった。 共著者:守本とも子、柳井勉
12.　「母親逆転移」現象とバーンアウトの関連性に関する研究（査読付）	共著	平成12年6月	日本保健医療行動学会年報 第15巻 P.286-P.296	前回の研究では看護婦の患者への母親逆転移とバーンアウトの客観的関連性を検証するまでには至らなかったため、今回の研究は無作為に抽出した看護婦157名の対患者関係、特に母親逆転移とバーンアウトとの関連性を質問紙などの客観的指標をもとに多変量解析を用いて検討した。結果より、患者への看護婦の母親逆転移は患者の家族に対する否定的感情によって誘発され、バーンアウトの一要因である「職業に対する脱価値化」を引き起こすと考えられた。職場での精神衛生管理において、両者の関係における母親逆転移や投影性同一視といった視点を導入する必要があることが示唆された。 本人担当部分：統計解析および、結果の考察をおこなった。 共著者:櫻井秀雄、山形力生 、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. Perception of Burden Among Family Caregivers of Post-Stroke Elderly （査読付）	共著	平成13年6月	The Japanese Journal of Health Behavioral Science Vol.16.2001 P.169-P.184	研究目的は、脳卒中後遺症患者における介護者の介護負担要因を明らかにすることである。調査対象は患者と介護者（190組）であった。負担の項目は、介護者に対する被介護者の依存度、将来への不安、介護者が自分自身の時間がもてないこと及び介護者の怒りに関することであった。特に介護者への依存が心理的負担の主要な要因となっていた。 本人担当部分：調査、統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、Andrea Streit Schreiner、浅野仁
14. Perception of Burden Among Family Caregiver of Post stroke Elderly in Japan （査読付）	共著	平成13年9月	International Journal Of Rehabilitation Research. IJRR Vol.24, 2001 P.221-P.226	研究の目的は在宅脳卒中後遺症患者の介護負担の構造を明らかにすることである。患者と介護者のペア(計156名)に面接調査をおこなった。介護負担についてはZarit Caregiver Burdenスケールを用い、因子分析をおこなった。その結果、介護者の介護の質に関する自己評価の2項目を除き、介護負担の項目の全てが含まれる1因子が明らかになった。介護の質についての自己評価は他の項目にかかわりなく低かった。介護者の約70%が「もっと世話をしなくては」「もっと上手にしなくては」と感じていた。 本人担当部分：調査、統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者:守本 とも子、Andrea Streit Schreiner、浅野 仁
15. ″Depressive Symptoms Among post stroke Patients in Japan: Frequency Distribution and Factor Structure of the GDS″ （査読付）	共著	平成13年10月	International Journal of Geriatric Psychiatry Vol.16 2001 P.941-P.949	研究目的は在宅脳卒中後遺症患者(n=101)の鬱徴候の程度と特徴を老人鬱測定短縮版（GDS-1）を使って検討すること、また、結果を健康で脳卒中の既往のない高齢者との比較をすることである。調査結果ではGDSスコアは主観的健康感と脳卒中発症後の経過時間に大きく関係していた。また、GDSの因子構造で健康な高齢者との相違点は脳卒中患者においては記憶力の低下と鬱徴候が強く関連していたことである。 本人担当部分：調査および統計解析、論文の構成全体にかかわった。 共著者:Andrea Streit Schreiner　守本とも子、浅野仁
16. The Relationship Between Poststroke Pain and Numbness Symptoms and Depression （査読付）	共著	平成14年6月	The Japanese Journal of Health Behavioral Science Vol.17 2002 P.131-P.148	研究目的は脳卒中後遺症患者の主な後遺症である痛みとしびれの実態を明らかにするとともに、それらの症状が患者の精神状態におよぼす影響について分析することである。患者の半数以上に痛みとしびれの症状がみられた。また、鬱との関係も明らかになった。患者はそれらの症状がみられるにもかかわらず、症状を緩和するための薬物治療をうける割合がすくなく、今後の治療のあり方への示唆が得られた。 本人担当部分：調査、統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本 とも子、Andrea Streit Schreiner、浅野仁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17.　Factor Structure of the Cornell Scale for Depression in Dementia among Japanese Post stroke Patients （査読付）	共著	平成14年9月	International Journal of Geriatric Psychiatry Vol.17, 2002 P.715-P.722	研究目的は脳卒中後遺症患者の鬱兆候について、コーネル鬱スケールを使用して分析することである。このスケールは著者らの翻訳により、本研究において、日本で初めて実施された。気分関連の症状、行動障害、身体症状、周期機能、観念障害といった構成からなり、研究結果より、脳卒中後遺症患者には気分のむらがあることや脳卒中後遺症から発症すると考えられる身体症状が鬱兆候と関連していた。本研究により、脳卒中後遺症患者の鬱症状の構成因子が明らかになった。 本人担当部分：主に統計解析、結果の分析を行った。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子
18.　Caregiver Burden and Health-Related　QOL among Japanese Stroke Caregivers （査読付）	共著	平成14年10月	International Journal of Age And Ageing Vol.32, 2003 P.218-P.223	研究目的は脳卒中後遺症患者の介護者の介護負担要因を明らかにすること、また、介護負担と介護者のQOLの関係を明らかにすることである。研究結果により、介護負担感は患者のADLの状況や身体機能の低下とは関係なく、患者から依存されているという心理的負担と患者の情緒不安であった。また、四六時中患者と生活を共にすることによる介護者の自由時間の制約が介護者のQOLに強く関係していた。 本人担当部分：調査、統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto、Andrea Streit Schreiner、Hitoshi Asano
19.　脳卒中患者と介護者の生活問題とＱＯＬ向上を目指した対策に関する調査研究 （博士論文）	単著	平成15年10月	関西学院大学	脳卒中後遺症患者と介護者のQOL関連要因を明らかにし、QOL向上にむけて介護支援策を検討した。研究結果により、患者および介護者に精神的援助の必要性が強く示唆された。患者と介護者双方に高い鬱徴候がみられ、精神科医による適切な診断と治療の必要性が明らかになった。また、患者と介護者ともに高齢化にともなう疾患を有する割合が高く、特に介護者においては、腰痛、高血圧、膝関節疾患などの有病率が高く、自己の健康管理が不充分であることが明らかになった。 A4判、全164頁
20.　The Relationship Between Mastery and Depression among Japanese Family Caregivers （査読付）	共著	平成15年	The International Journal of Ageing and Human Development Volume 56, Number 4-2003 P.307-P.321	本研究の目的は西日本における脳卒中後遺症患者の家族介護者(N=100) の鬱症状と精神的統御力の関係について明らかにすることであった。結果として、高い精神的統御力を持つ介護者は、精神的統御力の低い介護者に比べて、鬱症状が著しく少なく、介護の休息期間を持っていることが明らかになった。また、介護負担も少ないことがわかった。介護者の年齢、健康状態、介護期間は、精神的統御力に関係がなかった。 本人担当部分：調査と分析部分を担当した。 共著者:Andrea S. Schreiner、Tomoko Morimoto

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21.　Screening for late life Depression: cut-off scores for the Geriatric Depression Scale and the Cornell Scale for Depression in Dementia among Japanese subjects （査読付）	共著	平成15年	International Journal of Geriatric Psychiatry 2003;18 P.498-P.505	本研究の目的は、西日本の高齢者における鬱症状のスクリーニングのため、GDS(Geriatric Depression Scale) とCSDD(Cornell Scale for Depression in Dementia)のカットオフスコアを確認することである。鬱でない日本の高齢者（n=74）とSCＩD-IV診断で重症、あるいは比較的重症でない鬱患者（n=37）についてインタビューによる調査をおこなった。鬱の自覚症状の測定についてはHDRS（Hamilton Depression Rating Score)を使用した。その結果、西日本の高齢者における鬱症状のスクリーニングはGDSのカットオフスコアに類似していることが明らかになった。 本人担当部分：調査、統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Andrea Streit Schreiner、Hiroshi Hayakawa、Tomoko Morimoto、Tatsuyuki Kakuma
22.　終末期看護学実習による看護学生の終末期看護についての意識変化 （査読付）	共著	平成17年7月	日本医学看護学教育学会誌　第14巻 P.50-P.56	本研究の目的は終末期看護学実習による看護学生の終末期看護についての意識変化を明らかにすることである。終末期看護学講義終了後の看護大学看護学科の3年次生104名に対し、実習の前後に終末期において大切だと考えられるケアについての意識調査をおこなった。結果として、「痛みがないこと」「呼吸困難に陥らないこと」など、実習現地で直接目にし、体験した項目に有意な意識変化がみられた。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者:新谷奈苗、守本とも子
23.　看護学生の行動特性 （査読付）	共著	平成17年10月	リハビリテーションと行動分析学　第2巻 P.10-P.13	本研究の目的は看護系学生の行動特性を明らかにし、学生生活における適切な指導のあり方を見出すことにある。対象は4年制看護系大学1学年（平成10年～13年)455名であった。自己記入式の質問紙調査（SCT）をおこなった。その結果、4つのカテゴリーが見出された（①解決型、②非解決型、③中間型、④解決不能型）。特に解決不能型のタイプの学生への生活指導の必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者:新谷奈苗、守本とも子、久保田愛
24.　Assessing family caregiver's mental health using a statistically derived cut-off score for the Zarit Burden Interview （査読付）	共著	平成18年3月	Aging & Mental Health 10(2) P.107-P.111	本研究の目的は日本の家族介護者の精神的な健康を評価するためのカットオフ・スコアを明らかにし、引いては家族介護者の鬱の危険性や介入の必要性の指標を見出すことである。スケールはZBI（ザリット介護負担スケール）及びGDS（Geriatric Depression Scale）を使用した。対象は①脳卒中後遺症患者の介護者（n=80）、②慢性閉塞性呼吸不全患者の介護者（n=48）、③一般的な身体障害を持つ患者の介護者（n=70）の三つの異なったグループに実施された。その結果、カットオフ・スコア24-26は介護者の鬱の危険性を示唆することが明らかになった。 本人担当部分：調査及び解析をおこなった。 共著者:Andrea Streit Schreiner、T.Morimoto、Y.Arai、S.Zarit

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25.　脳卒中患者のQOLに影響を及ぼす要因の研究動向 （査読付）	単著	平成18年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要　Vo2. P.58-P.64	近年の脳卒中後遺症患者の疾患の回復とQOLに影響を及ぼす要因について、主に①身体的機能の喪失，②認識機能の喪失、③情緒不安定、④社会的機能喪失の4領域にわけて述べた。
26.　精神学的障害者の気分アセスメント～ヴィスアルアナローグ気分スケールの日本語版の妥当性～ （査読付）	共著	平成21年5月	日本福祉工学会誌 11(1) P.42-P.48	本研究の目的はヴィスアルアナローグ気分スケールの日本語版(VAMS)の妥当性を調べることにある。 VAMスケールは、脳卒中、アルツハイマーあるいは外傷脳などの神経学的障害をもつ患者の気分を調べるために開発された。典型的な心の健康と気分を測定するスケールは被験者の言語能力を基礎にしている。しかし、これらの検査は神経学的障害者にはしばしば不適切である。したがって、VAMスケールはこの母集団の気分を評価するために開発されたものであり、被験者の認識能力および/あるいは発言能力に依存しているスケールよりも、いくつかの点において有利である。 VAM スケールの妥当性は高齢者の二つの母集団を対象に調査された。 対象は1.ある民間の精神病院から抽出した重症あるいは軽症の鬱病と診断された高齢者（37人）と、2.地域のレクレーションセンターから抽出した精神病の既往歴のない高齢者（74人）であった。 担当部分：統計解析と考察をおこなった。 共著者:守本とも子、Andrea S. Schreiner、早川浩、馬場孝明
27.　Factors Relating to Life Satisfaction and Subjective Healthy Feelings in Respiratory Patients During Home Oxygen Therapy （査読付）	共著	平成21年3月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare vo.1 No.1 March 2010 P.5-P.12	在宅酸素療法中の呼吸不全患者（32名）を対象に面接とBaseline Dyspnea Index(BDI)、Geriatric Depression Scale（GDS）、Modified Barthel Index（MBI）などの質問紙票調査を行い、主観的健康感と生活満足度に有意相関を持つ項目を探索した。主観的健康感は自信、呼吸困難感、疲労感と有意相関を示し、生活満足度は収入、呼吸困難感、日常抱える課題と有意相関を示した。GDS平均値は7.6と高値を示し鬱傾向にあった。以上より主観的健康感の低下は自信喪失とうつ状態を惹起し、呼吸困難は主観的健康感と生活満足度の両者に影響することが示唆された。症状軽減が在宅酸素療法患者の健康関連QOLを向上させると考えられた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、下内章人、馬場隆明
28.　部屋の住み心地に及ぼす物理的・感覚的因子の組み合わせ解析 ―ファジィニュートラルネットワークによる住居環境解析― （査読付）	共著	平成21年6月	日本感性工学会論文誌 Vol.9 No.1 P.97-P.102	本研究により、住居環境、すなわち住居に関する物理的因子(室内環境や室内空間)や感覚的因子(部屋から受ける情感)が住む人の満足感に深く関連していることが明確となった。今回FNN解析により選択された項目から、住居環境を工夫して整えること(例えば、新しいカーテンを取り入れて部屋の色彩を変える、寝室用のフロアライトやテーブルライトの購入により夜間照明を変え、くつろげる雰囲気を作るなど)が、住む人のQOLを高めるために重要な要因であることを示唆していると考えられる。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:牛田泰徳、加藤竜司、守本とも子、本多裕之

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29. Restraint Plus Water-immersion Stress (RWIS)-induced Stomach Ulsers in Mice are Depressed by a Conditioning Heat Treatment （査読付）	共著	平成21年9月	Thermal Medicine vol.25, No.3 September 2009 P.81-P.87	温熱耐性として、あらかじめの温熱処理が重篤な温熱誘導生物影響を抑制することはよく知られている。本論文において、われわれはあらかじめの温熱処理が水浸拘束ストレス(RWIS)による胃壁の損傷を抑制するかどうかを確かめた。RWISによる胃潰瘍は42%発生したのに対して、あらかじめ37℃で温熱処理をすると9%に抑制された。さらに、胃におけるRWIS誘導アポトーシス頻度は13%であったのに対して、あらかじめ温熱処理をすると8%に抑制された。温熱ショックタンパク質(HSP)誘導剤のゲラニルゲラニルアセトン(GGA)も胃潰瘍の発生を抑制したことから、あらかじめの温熱によるHSPがアポトーシス誘導の抑制を介してRWISによる胃壁の損傷を抑制していることが示唆された。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Rikio Yamagata、Akihisa Takahashi、Xiaoming Su、Tomoko Morimoto、Takeo Ohnishi
30. Factors Relating to Life Satisfaction and Subjective Healthy Feelings in Respiratory During Home Oxygen Therapy （査読付）	共著	平成22年3月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare vo.1 No.1 P.5-P.12	在宅酸素療法中の呼吸不全患者(32名)を対象に面接とBaseline Dyspnea Index(BDI)、Geriatric Depression Scale(GDS)、Modified Barthel Index(MBI)などの質問紙票調査を行い、主観的健康感と生活満足度に有意相関を持つ項目を探索した。主観的健康感は自信、呼吸困難感、疲労感と有意相関を示し、生活満足度は収入、呼吸困難感、日常抱える課題と有意相関を示した。GDS平均値は7.6と高値を示し鬱傾向にあった。以上より主観的健康感の低下は自信喪失とうつ状態を惹起し、呼吸困難は主観的健康感と生活満足度の両者に影響することが示唆された。症状軽減が在宅酸素療法患者の健康関連QOLを向上させると考えられた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、下内章人
31. Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care （査読付）	共著	平成22年9月	Proceedings of 6th International Conference of Health Behavioral Science P.260-P.262	本研究の目的は、施設入居高齢者の癒しとQOLの向上を考慮した「温かい介護用縫いぐるみ」の効用を検討することである。コーエンマンスフィールド(CMAI)調査票をもとに縫いぐるみ使用前・後の高齢者の行動の変化を比較した。結果として「同じことを繰り返し言う（質問する）」に有意な差がみられた。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、新谷奈苗
32. Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care(査読付き)	共著	平成22年9月	Sustainable Health Promotion: Dialogue on Well-being & Human Security in Environmental Health P.260-P.262	本研究は高齢者の癒しとQOLの向上のための温かい介護用縫いぐるみを考案し、認知症高齢者が実際に縫いぐるみを使用した後、どのような変化が見られたかをコーエンマンスフィールド（CMAI）スケールを使用して検討した。縫いぐるみを使用する前後1週間の観察をもとに比較検討した。変化の見られた行動は、同じことを繰り返し質問する、机を何度も叩く、といった行動が有意に減少した。高齢者が温かい縫いぐるみを身近におくことは高齢者の癒しに効果をもたらすことが示唆された。 本人担当部分：データーの解析、研究の総括をおこなった。 共著者：Tomoko Morimoto、Nanae Shintani

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
33.　Discussion of emergency notification device for elderly people （査読付）	共著	平成22年11月	Ergonomics for All：Celebrating PPCOE’S 20years of excellence－Lin&Chen(eds) P.495-P.501	高齢者の緊急時の不安を軽減し安心して暮らせる社会を実現すべく，各市町村では家庭用緊急通報機器の貸与による支援をおこなっており、これにより高齢者の不安解消と安全確保，QOL向上を目指している。しかしながらますます需要の拡大が予測されているにも関わらず実際は低い普及率である。本研究ではH市に居住する在宅高齢者を対象に聞き取り調査をおこない，緊急通報機器の使用状況を明らかにし，高齢者にとって活用しやすい機器の開発や，運用方法の改善につなげることを目的とした。 その結果，緊急通報機器の使い方の理解や緊急通報機器の形状について改善すべき点が明確になった。 本人担当部分：調査および結果の考察をおこなった。 共著者:Nanae Shintani、Hiroyasu Nagaoka、Kazuko Horiguchi、Tomoko Morimoto
34.　A questionnaire to determine Nursing and Child care students` Understanding of welfare equipment （査読付）	共著	平成22年11月	Ergonomics for All：Celebrating PPCOE’S 20years of excellence－Lin&Chen(eds) P.529-P.532	子どもと大人の主要な福祉用具への認識について、看護と保育を学ぶ学生間の比較を目的に調査を行った。その結果、認識の違いはカリキュラム等の教育の内容によって影響を受けていることが考えられた。また、因子分析の結果により、双方とも「遊び」が重要なキーワードであることが考えられた。 本人担当部分：研究の企画および結果の考察をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto、Shoko Kamimotono、Nanae Shintani
35.　Study of quality of life (QOL) in home oxygen therapy patients and related factors of actual life situation （査読付）	共著	平成23年10月	East Asian Ergonomics Federation Symposium 2011 (EAEFS 2011) Ergonomics In Asia:Development, Opportunities, and Challenges P.295-P.300	在宅酸素療法は種々の在宅医療の中で最も普及し、その効果は単に患者の生命予後を延長するばかりでなく、人間的な生活とQuality of Life (QOL) を保証するものとして高く評価されている。しかし反面、社会的・精神的・身体的煩わしさのため、社会活動が制限され、閉じこもりがちとなることで抑うつ症状となり，急性増悪を招くという報告もある。そこで生活実態とQOLとの関係をより深め明らかにするため、患者のQOLに影響を及ぼす生活実態の関連要因を検討することを本研究の目的とした。結果、「患者活力」と「患者心の健康」が「肺理学療法理解度」に有意に関連していた。肺理学療法の理解度が高い者は、認知能力も高く自己管理ができており、これが自分の疾患を前向きに受けとめ、活力を維持することにつながっていると考えられ、自己管理能力を身につけるための患者教育を繰り返し行ない、普及させていくことの必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共著者：Nanae Shintani、Tomoko Morimoto

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36.　Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 2012 P.1068-P.1072	夜間自宅で起床中の健常高齢男性39名の心拍変動（RR間隔）と身体加速度を計測した。 身体加速度の低い時間についてのみ、心拍変動データの高周波帯域パワーの規格値（値が高いほど副交感神経優位）を算出した。その値と質問紙より点数化した生活満足度との間に統計的有意な負の相関を確認した。この結果より、生活満足度の高い健常高齢男性ほど、夜間自宅で起床安静時に交感神経系優位にあることが示唆された。 本人担当部分：データー解析と論文の構成を担当した。 共著者：Kohzoh Yoshino、守本とも子、Takahiro Itagaki、shigetaka Iketani、 Masami Nagata、Morihiro Thujishita
37.医療系大学におけるチーム医療の実際ー医療のパラダイムシフトに向けてー （査読付）	単著	平成24年6月	日本保健医療行動科学学会雑誌 Vol.28 No.1 2013 P.2-P.6	チーム医療教育は岐阜医療科学大学の建学の精神である「人間性」「学際性」「国際性」の向上を目的とし、本学の特色を活かした独自のプログラムである。 チーム医療に最も必要とされる資質を担保し、現在の医療現場で通用する”医療人”となることを目標とした教育の充実について考察した。
38. Difficulties of Continuing Work While Getting Chemotherapy for Breast Cancer Patients （査読付）	共著	平成25年6月	医療福祉情報行動科学研究　第3号 2014　P.1-P.8	本研究では、初発の乳がん患者で、手術療法の後に化学療法の2回目を終了した以降の患者から、仕事を継続している患者を対象とし、「仕事を継続してく上での困難」について個別に半構造的インタビューを行った。 この結果、7つのカテゴリー、「治療の副作用からくる身体的苦痛」「仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ」「再発への不安から仕事をセーブする」「職場の配慮不足」「受診のしにくさ」「治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安」「病名告知により同僚に気を遣われる辛さ」で構成されていた。 本人の担当：研究の総括を行った。 共著者：新谷奈苗、小池恵理子、守本とも子
（その他 ）				
―研究報告書―				
1.　「在宅酸素療法における介護支援の検討」	共著	平成14年2月	大和証券ヘルス財団研究実績集25号 P.142-P.147	本研究は在宅酸素療法患者の特性を考慮した効果的かつ効率的な介護支援を検討することである。対象は慢性呼吸不全患者と介護者70組であった。調査結果より、疾患により生ずる症状や障害が患者QOLを低下させていた。また、介護負担として「介護者自身の時間がない」「患者に依存されている」といったことが明らかにされた。介護支援としては症状の緩和と精神医学的介入、リハビリテーションの必要性が示唆された。 本人担当部分：調査及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、下内章人

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.　「在宅脳卒中後遺症患者と介護者のQOL測定スケールの作成と援助プログラムの開発」	単著	平成14年3月	文部科学省学術振興会 文部科学省科学研究補助金（基盤研究C）研究報告書 （平成11年～平成13年）	脳卒中後遺症患者と介護者のQOL関連要因を明らかにし、QOL向上にむけて介護支援策を検討した。研究結果により、主に精神的援助の必要性が強く示唆された。患者と介護者双方に高い鬱徴候がみられ、精神科医による適切な診断と治療の必要性が明らかになった。また、社会福祉サービスの利用率は低く、制度の内容の周知が徹底していないことや疾患に応じたサービスが充分に実施されていないことなどが明らかになった。 A4判、全164頁
3.　「在宅介護の疾患別特性からみた効果的支援の検討」	共著	平成15年6月	大阪ガス福祉財団研究・調査報告書 Vol16 2003 P.23-P.30	本研究は在宅酸素療法患者及び脳卒中後遺症患者の特性を考慮した効果的かつ効率的な介護支援を検討することである。対象は慢性呼吸不全患者と介護者70組、脳卒中後遺症患者と介護者101組であった。調査結果より、疾患により生ずる症状や障害が患者QOLを低下させていた。また、両疾患とも介護負担として「介護者自身の時間がない」「患者に依存されている」といったことが明らかにされた。介護支援としては症状の緩和と精神医学的介入、リハビリテーションの必要性が示唆された。 本人担当部分：調査及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、下内章人
4.　「看護学教育における教育評価方法に関する基礎的研究」報告書	共著	平成16年3月	三重県看護大学学長特別研究費	QOLの概念を主観的健康感と生活満足度ととらえ、永田勝太郎のQOL評価尺度を用いて、在宅重度重複障害者のQOL関連要因を分析し、検討した。その結果、身体的要因として、患者の年齢、副介護者の存在、また、精神的要因として、障害者と生活することへの感情が、重要な要因であった。また、経済的負担、介護に関する情報が少ないことがあげられた。 A4判、全101頁 本人担当部分：研究の企画及び総括をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto、Ben Yanai
5.　「各種高齢疾患における介護支援特性の比較研究」	共著	平成16年8月	平成14年度　三井住友海上火災福祉財団調査研究研究助成８巻　研究報告書 P.151-P.154	本研究は高齢者における代表的な疾患のうち、身体的障害を伴う疾患と内部障害を伴う疾患について焦点をあてた。これらの2種類の疾患の介護負担における相違点を明らかにした。また、それら結果を基礎資料として介護支援の方策を検討し、それぞれの疾患に適した介護支援策を検討した。 本人担当部分：調査および、調査結果の分析を行った。 共著者：下内章人、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.　「高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価」	共著	平成19年3月	平成19年度住居医学共同研究成果報告集 奈良県立医科大学　住居医学大和ハウス寄附講座 P.1-P.11	本研究では、住居環境要因と心理的・身体的QOLの関係性を分析するための基礎資料として住居の快適性評価スケールを作成する。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、青山美智子、浅見恵梨子、上平悦子、岡本啓子、勝井伸子、三毛美恵子、吉村雅世
7.　「部屋の住み心地に及ぼす物理的・感覚的因子の組み合わせ解析」	共著	平成20年3月	平成20年度住居医学共同研究成果報告集 奈良県立医科大学　住居医学大和ハウス寄付講座 P.1-P.9	本研究は実際に住まいする住環境の住み心地と部屋の物理的データーとの因果関係の調査をおこなった。具体的には自宅で睡眠時を除き最も長時間過ごしている部屋の住み心地として30項目の部屋の物理的因子や感覚的因子をVsual　Analog Scale法によってアンケート調査しニューラルネットワークの一手法であるファジーニューラルネットワークで解析した。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者：守本とも子、吉村雅世、上平悦子、三毛恵美子、吉野公三、本多裕之
8.　チエンマイ大学看護学部海外研修報告書	共著	平成20年3月	奈良県立大学医学部 看護学科紀要　Vol.2 P.63-P.70	看護系大学に於ける海外研修の概観を述べた。また、本学での国際看護論の位置づけと変遷について述べ、実際の海外研修の体験をもとに、今後の国際看護論の展望について議論した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:勝井伸子、守本とも子、Phanida Juntasopeepun

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.　「健常高齢男性の住居内QOLと自立神経活動との関連性」	共著	平成21年3月	平成21年度住居医学共同研究成果報告集 奈良県立医科大学　住居医学大和ハウス寄付講座 P.115-P.116	本研究の目的は、健常高齢男性の暮らし・部屋全般や各住居内環境因子に対する主観的評価度と生活の自立神経活動との間の関連性を明らかにすることである。研究結果より、「くらし・部屋」全般に関する項目の中では生活に満足している被験者ほど、HFnuの値が低い傾向が確認された。 「住居内環境因子」に関する項目と心拍変動指数との間には統計的有意な相関を示す組み合わせはなかった。これらの結果から、生活に満足している健常高齢男性ほど、夜間20:00時から20:50までの在宅・覚醒・低運動時に交感神経系有意（精神的にアクティブな状態）にある傾向が示唆された。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：守本とも子、吉村雅世、吉野公三、上平悦子、三毛美恵子、板垣孝寛、 池谷茂隆、永田昌美、辻下守弘
10.「乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発」	共著	平成26年3月	文部科学省学術振興会 文部科学省科学研究費助成金（基盤研究C）研究成果報告書 （平成23年～平成25年） A4判、全27頁	本研究では、乳がんを患い外来で化学療法を受けているものの就労を継続している者を対象として、対象者の抱えている苦悩や課題をインタビューにより明らかにした。またその結果をもとに、患者支援の関係機関が集まり、援助のあり方についての検討を行った。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：新谷奈苗、守本とも子、立川茂樹、岩永誠、堀口和子、中村百合子、小池恵理子、永岡裕康、新谷昌也
―総説―				
1.　痴呆性老人の入浴中の不穏を低下させる対処方法 ―アイオワ大学が開発したプロトコール―	共著	平成12年8月	看護学雑誌 医学書院（東京） 64巻　NO.8 P.728-P.735	痴呆性老人の、特に入浴時にみられる不穏行動の原因を述べ、それらの対処方法について述べた。また、痴呆性老人の過去の入浴状態と身体的状態を理解するための評価記録を作成し、報告した。 本人担当部分：痴呆性老人の入浴時の不穏行動を低下させるための対処方法をアイオワ大学が開発したプロトコールを中心に最近の国内外の研究報告をまじえて紹介した。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子、俵由美子
2.　清潔ケアテクニック ―痴呆性老人の入浴を中心として―	共著	平成13年1月	看護技術 メジカルフレンド社（東京）VOL.47 NO.1通巻689号 P.68-P.72	清潔ケアの方法を痴呆性老人の特性(知覚障害、低体温、泌尿器や膀胱の感染症、理解力の低下と反応時間の遅延など)を踏まえて述べた。痴呆性老人は体温の低下、関節の痛みなどにより、特に入浴を拒否することが多い。入浴前の観察点や痴呆性老人の入浴テクニックとして、入浴前準備、コミュニケーション、プライバシーの保持、看護者との相性などについて述べた。 本人担当部分：特に入浴テクニックについて多角的な視点からの方法を述べた。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.　トピックス「高齢者ケアと介護に関する研究最前線」	共著	平成13年3月	看護学雑誌 医学書院（東京） 第65巻 第3号 P.210-P.212	第53回アメリカ老年学会に参加し、欧米諸国をはじめ、各国の研究報告をもとに、老人看護・介護に関する最新情報を集めた。それらをもとに新しい知見および最新の研究の動向についてまとめ、報告した。 本人担当部分：老人看護・介護に関する情報を主要なキーワード別に検討し、最近、注目されている老人看護の問題点、課題についてまとめた。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子
4.　高齢者における口腔・咽頭部の嚥下困難への対処方法	共著	平成13年7月	看護学雑誌 医学書院（東京） 第65巻 第7号 P.637-P.645	高齢者の嚥下障害について、嚥下の生理、嚥下障害のタイプと原因、徴候と危険性について述べた。またその対処方法としてチーム治療や嚥下療法技術、緊急時の対処療法について説明した。最後に看護者の役割（看護記録と看護計画）について述べた。 本人担当部分：看護記録として嚥下・食事評価スケール、看護計画表、嚥下困難療法の看護評価表を作成し報告した。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子
5.　痛みは5番目のバイタルサインである―(1)高齢者の慢性的な痛みのアセスメント―	共著	平成14年1月	看護学雑誌 医学書院　（東京） 第66巻 第1号 P.78-P.85	高齢者の痛みの特定について（主訴、痛みを示す動作、痛みを引き起こす疾患または条件）述べた。また、代表的な痛みのアセスメントツールであるpain Visual Analogue Scales(VAS)、Face Scale、 MPO(McGill Pain Questionnaire)日本語版およびMcGillスケールの一部であるPresent Pain Intensity(PPI)を紹介した。 本人担当部分：痛みについて国内外の文献をもとにその定義や特定法について報告した。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子
6.　痛みは5番目のバイタルサインである―(2)高齢者の慢性的な痛みの治療とケアプラン―	共著	平成14年2月	看護学雑誌 医学書院（東京） 第66巻 第2号 P.40-P.46	痛みの治療について、非薬物的介入と薬物介入を紹介し、次に加齢が薬物代謝に及ぼす影響を述べた。また、痛みの治療薬について主要なタイプとその副作用を説明し、痛みへの介入の必要性と最後に専門職者の倫理的責任(教育と指導の必要性)について述べた。 本人担当部分：痛みの治療方法と治療薬について説明した。また、本論文全体の構成にかかわった。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.　在宅痴呆高齢者の事故防止と家族介護者の負担軽減―家族介護者指導のためのチェックリストの考案―	共著	平成14年5月	看護技術 メジカルフレンド社（東京）VOL.48　NO.6　通巻708号 P.90-P.95	在宅痴呆高齢者の日常起こり得る様々な事故について、統計的データを示すとともに、日常生活の完全を守るための留意事項を論述した。痴呆高齢者の身体的・心理的的特徴を踏まえ、家族介護者としてどのような対応が必要であるか、起こりうる事象とその原因について理解しやすい内容で示した。本書に記載されている内容を家族介護者が熟知することにより、介護負担が軽減されることが期待される。また、家族介護者が痴呆高齢者に対して、十分な安全への配慮ができ、事故防止が可能となるためのチェックリストを考案し紹介した。 担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Andrea Streit Schreiner、守本とも子
8.　実力アップ！資格試験ファイル	単著	平成14年11月	看護学生 メディカルフレンド社（東京） P.40-P.52	準看護師資格試験対策（科目：老年看護学）として、1）1問1等形式による重要ポイントのまとめ、2）実際に出された問題の解答・解説、3）出題形式に沿った予想（創作）問題を通して、必要な知識を身につけることをねらいとした。問題の解答・解説においては、解法のコツ、及び関連事項が無理なく学べる記述・構成を考えた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.　文献レビュー［QOLの概念］	共著	平成15年	リハビリテーションと行動分析学　JRBA　1 P.12-P.13	QOLの定義について1986年～現在に至るまでの国内外の主なQOL研究者の主張について概観した。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子、Andrea Streit Schreiner、辻下守弘
10.　末期高齢痴呆患者の流動食および経静脈栄養に関する決定と看護師の役割	共著	平成16年1月	看護学雑誌 医学書院（東京） 第68巻(1) P.44-P.47	看護師は家族が治療法に関する情報を得て、良く理解した上でアルツハイマー病患者のケアに対する意思決定することができるように援助する必要がある。そのための看護師の役割について述べた。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Andrea Streit　Schreiner、守本とも子、原等子、寺門とも子
11.　痴呆性高齢者の施設における緩和ケアモデルへの提言―アメリカナーシングホームの実践を通して―	共著	平成16年9月	看護実践の科学 看護の科学社 29(10) P.59-P.66	アルツハイマー型痴呆高齢者の施設における緩和ケアモデルについて、個別ケア、事前ケア計画を中心にアメリカのナーシングホームの例をあげて述べた。また、終末期コミュニケーションのあり方について述べた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Andrea Streit　Schreiner、守本とも子、原等子、寺門とも子
12.　高齢者施設における認知症患者のための活動療法	共著	平成18年3月	看護学雑誌 医学書院（東京） Vol.70 No.3 P.233-P.237	高齢者施設における認知症患者のためのレクレーションの意義及び効果について述べた。主要な活動療法としてペット療法、音楽療法、コラージュ療法、回想療法、化粧療法及び身体的レクレーションについて述べた。 担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:Andrea Streit　Schreiner、守本とも子
13.　アルツハイマー病患者家族介護者へのサポートグループを用いた対処技術指導について	共著	平成20年9月	看護実践の科学 看護の科学社 VOL.33 NO.10 P.72-P.80	対処技術を指導する上でのサポートグループ利用法に注目し、支援グループを指導する看護師のグループセラピーの方法について述べる。特に支援グループを始める前のグループセラピー理論とその技術の必要性を述べる。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:アンドレア・S・シュナイザー、佐伯あゆみ、守本とも子
14.　地域で生きるデンマークの高齢者住居	単著	平成22年5月	大阪保険医雑誌 大阪府保険医協会 第38巻522号 P.30-P.35	北欧諸国のなかでも「高齢者住居」について独自な発展を遂げ、1987年に施設建設を凍結するという政策転換に踏み切ったデンマークの高齢者住居と日本の画期的な高齢者共生住宅の事例を取り上げ、新しいステージに突入した日本の今後の高齢者住居の在り方を検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
―国際会議発表―				
1.　The Progressive Variation of Nurses' Professional Identity and Nurse-Patient Relationships Differences between Students and Graduates	共同	平成8年9月	The Third International Conference of Health Behavioral Science (Tokyo, Japan)	本研究はSCT（文章完成法）を用いて、看護婦の職業的アイデンティティと対患者関係の発達的変容について、看護婦と看護学生を比較検討しつつ、その差異について検討した。対象は看護学生143名、看護婦154名であった。結果より、看護学生は、自己の未熟性を理解しており、それに対し、前向きに対処しようとしていた。一方、看護婦は問題解決試行の意識もみられるが、やや逃避傾向にあった。また、看護学生は患者に対して精神的苦労を思いやる気持が強いが、看護婦は「依存」「わがまま」といった自己中心的な傾向に嫌気が差していることが伺えた。 担当部分：研究の企画および総括をおこなった。(P.105) 共同発表者:Tomoko Morimoto、Ben Yanai
2.　Time series analysis of daily physical activity and subjective symptoms in a patient with chronic thromboembolic pulmonary	共同	平成9年10月	International Symposium: Health-Related QOL and Health Hypertension Care Assessment (Tokyo, Japan)	在宅酸素療法中の呼吸不全患者の臨床経過と万歩計の示す値（Pedometer Reading：以下PR）を対比した。その結果、PR値は呼吸不全の増悪、改善等の臨床経過とほぼ平行に推移し、臨床経過の安定した患者では、PR値もほぼ安定していた。PR値は入院中、在宅日、外来通院の順に大きくなり、年齢と負の相関を示した。PR値は種々の因子に依存するが、在宅酸素療法患者の臨床経過を示すよい指標になると考えられた。 本人担当部分：在宅酸素療法日誌に記載された万歩計の入力と解析をおこなった。また、運動量の関連因子として患者の心理的状態が考えられたため、心理テストの評価をおこなった。(P.36) 共同発表者:Shimouchi A、Morimoto T、ShiraiM、Okano Y、Nakanishi N、Kunieda T
3.　Quality of life among the family caregivers living with mentally and physically disabled patient	共同	平成9年10月	International Symposium: Health-Related QOL and Health Hypertension Care Assessment (Tokyo, Japan)	QOLの概念を主観的健康感と生活満足度ととらえ、永田勝太郎のQOL評価尺度を用いて、在宅重度重複障害者のQOL関連要因を分析し、検討した。その結果、身体的要因として、患者の年齢、副介護者の存在、また、精神的要因として、障害者と生活することへの感情が、重要な要因であった。また、経済的負担、介護に関する情報が少ないことがあげられた。 本人担当部分：研究の企画及び総括をおこなった。(P.43) 共同発表者:Tomoko Morimoto、Ben Yanai
4　Comparative Study Using Time Series Analysis of Daily Physical　Activity and Subjective Symptoms in Chronic Obstructive Pulmonary Disease and Sequel of Pulmonary Tuberculosis.	共同	平成10年3月	Respiratory and Critical Care Medicine 157(3) A749 (Chicago, Illinois)	前回の研究により、身体活動と臨床症状との間に時間的因果関係があることが示唆された。本研究ではさらに症例を増加させ、時系列解析を行った結果、慢性閉塞性肺疾患のうち、特に結核後遺症によるものと、他の原因による慢性閉塞性肺疾患との間には、明らかに身体活動と臨床症状との時間的因果関係に相違がみられることが明らかになった。このことは、原因疾患による臨床経過を示す良い指標になると考えられた。 担当部分：データ-入力及び統計解析を行った。 共同発表者:Shimouchi A、Morimoto T、 Shirai M、 Okano Y

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. Relationships Between Ego-Identity and Quality of Life in Japanese Female College Students	共同	平成10年11月	Quality of Life Research Vol.7(7) (Baltimore, Maryland)	本研究の目的は看護学生における自我同一性とQOLの関係を明らかにすることである。対象は看護学生194名であった。因子分析の結果6因子が抽出された。因子構造の解釈により、自我同一性の高い看護学生は親子関係が良好であり、青年後期における自我同一性の確立に家庭環境の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究の企画および総括をおこなった。(P.640-P.641) 共同発表者:Tomoko Morimoto、Kazuyo Seyama、Akito Shimouti
6. Factors affecting daily physical activity of respiratory patients during home oxygen therapy	共同	平成11年3月	American Journal of Respiratory and Critical care Medicine 159(3): A550 (San Diego, California)	呼吸不全患者の日常身体活動は種々の要因で制約され、逆に、日常の運動過負荷が呼吸不全増悪につながる例もみられる。これらの相互関係は不明なことが多いため、在宅酸素療法中の肺結核後遺症と慢性肺気腫を対象として、日常身体活動と自覚症状の時系列を相互相関係数により解析した。その結果、肺結核後遺症患者では、自覚症状の出現が先行し、日常身体活動が抑制され、他方、慢性肺気腫患者では身体活動の増加が先行し、自覚症状が出現する傾向にあった。 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者:Shimouchi A、Morimoto T、Igarashi K、Kimura K、Shirai M、Nakanishi N、Kunieda T
7. Caregiver burden and health-related quality of life among family stroke Caregivers	共同	平成12年9月	Quality of Life Reserch Vol.9(9) (Amsterdam)	本研究は次の三つの目的で行われた。①脳卒中後遺症患者の家族介護者において、どのような介護負担が健康に関するQOLに関連しているかを決定する。②SF－12（SF－36短縮版）を使用して、脳卒中後遺症患者の家族介護者の精神的・身体的健康を測定する要因を調査する。③日本の脳卒中後遺症患者の家族介護者のSF－12のスコアーが他の国の脳卒中後遺症患者の家族介護者を含む調査結果のスコアーと比較する。であった。日本の家族介護者は無作為に抽出された7つの施設におけるリハビリテーションを受けている外来患者98人の家族介護者であった。結果として、日本の脳卒中後遺症患者の家族介護者には鬱兆候が見られ、精神的負担が優位であることが示唆された。 共同発表者：A.S. Schreiner、T. Morimoto、 H.Asano
8. Caregiver Burden and Health Related Quality of Life (HRQOL) in a Sample of Family Caregivers of Post-Stroke Elderly in Japan	共同	平成12年11月	Gerontological Society of America 53rd Annual Conference (Washington, D.C.)	本研究の目的は介護負担と健康に関連した生活の質との関係を明らかにすることである。対象は在宅脳卒中患者の介護者70名であった。結果より、介護負担は1日平均介護時間に大きく関連していた。教育歴、身体機能レベルに関連はみられなかった。介護者の64.7%が何らかの医学的治療を受けていた。また、患者の63%が健康であると答えたのに比べ、介護者は42.3%であった。さらに介護負担の増加は介護者の特に精神的健康面に大きく関与していた。 本人担当部分：研究の企画、統計解析をおこなった。(P.274) 共同発表者:A. Schreiner、T Morimoto、H. Asano

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. Caregiver Burden And Depression in a Sample of Family Caregiver of Elderly Stroke Patients in Japan	共同	平成12年11月	Gerontological Society of America 53rd Annual Conference (Washington, D.C.)	本研究の目的は、在宅脳卒中患者における鬱徴候について、また、鬱徴候と介護負担の関連について明らかにすることである。脳卒中後遺症患者の介護者（101名）に面接調査をおこなった。なお、鬱徴候の調査については、老人鬱病測定短縮型（GDS-1）を用いておこなった。その結果、被験者の53.6%が鬱徴候（GDSスコア＞6）を示していたにもかかわず、治療を受けていたのは、僅か2例だけであった。また、GDSスコアは、年齢、性別、教育歴、患者の身体的機能レベル、麻痺、とは関係していなかったが、介護者の主観的健康感と関係していた。（P.274） 本人担当部分：研究の企画、統計解析および総括をおこなった。 共同発表者:T Morimoto 、A. Schreiner、H. Asano
10. Pain, Depression, and Mastery in a Sample of Post-Stroke Elderly	共同	平成12年11月	Gerontological Society of America 53rd Annual Conference (Washington, D.C.)	本研究の目的は脳卒中患者の痛み、鬱徴候、と自己統御力について検討することである。対象は脳卒中後遺症患者100名であった。鬱徴候についてはGDS、Cornell Scale、悲しみと痛みについてはvisual analogue scale(VAS)、自己統御力については、Pearlin & Schoolerの質問紙を使用した。その結果、痛みは鬱徴候(GDSとCornell Scale)と関連し、さらに鬱徴候と痛みは脳卒中患者の自己統御力に関連していた。 本人担当部分：スケールの選定と統計解析をおこなった。(P.255) 共同発表者:H. Asano、 T Morimoto、A.Schreiner
11. Caregiver Burden and Health-Related Quality of Life Among Stroke Caregivers	共同	平成13年4月	Pan-Pacific Conference of the International Society for Quality of Life Research (Tokyo, Japan)	Best Poster受賞。 本研究の目的は、在宅脳卒中患者の介護者の介護負担と健康に関連した生活の質について検討することである。対象は無作為に抽出された在宅脳卒中患者の介護者98名における介護負担とHRQOL（SF-12）との関係を明らかにするものである。負担の増加はSF-サブスケールにおいて、特に精神的健康面において有意な関連を示した。最も顕著な負担のタイプは被介護者によって依存されているという気持であった。高学歴は介護負担には関連しなかったが、特に精神的健康面において、HRQOLの向上と関連が見られた。 本人担当部分：研究の企画、統計解析および総括をおこなった。(P.108) 共同発表者:T Morimoto 、A. Schreiner、H. Asano

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.　The Relationship Between Problem-Solving and Identity and QOL in Young Adult Women	共同	平成13年4月	Pan-Pacific Conference of the International Society for Quality of Life Research (Tokyo, Japan)	本研究の目的は青年期のIdentityとQOLを支える一つの要因と考えられる問題解決行動に着目し、問題解決行動特性とIdentityおよびQOLの関連について検討した。対象は看護専門学校194名の看護学生であった。結果より、問題解決行動特性は、努力型、他者依存型、逃避型に分類された。この三つのタイプとQOLの高得点群と低特点群との関連では有意な差がみられた。また、問題行動特性とQOLの「親子関係満足度」との関連がみられ、青年期においても親子関係の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究の企画、集計および総括をおこなった。(P.103) 共同発表者:T.Morimoto、A.Shimouchi、K.Seyama
13.　Factors Related to Life Satisfaction and Subjective Healthy Feelings in Respiratory Patients During Home Oxygen Therapy	共同	2001年 平成13年5月	American Journal of Respiratory and Critical care Medicine Vol.163(5) A56 (San Francisco, California)	本研究の目的は在宅酸素療法患者の主観的健康感および生活満足度に影響をおよぼす要因について検討することである。対象は在宅での酸素療法適応患者30名であった。質問紙法による面接調査をおこなった。その結果、主観的健康感に有意に相関のみられた項目は、「自分の状態は全く価値がないと思う」「呼吸困難の程度」で、生活満足度では、「暮らし向き」「呼吸困難の程度」であった。これらのことから、在宅酸素療法患者の主観的健康感の低下は「自己の存在価値の否定」を惹起していることが考えられた。また、呼吸困難は主観的健康感と生活満足度の双方に関連しており、疾患による症状の緩和が患者のQOLに大きく関与するものと思われる。 本人担当部分：統計解析および考察をおこなった。 共同発表者:ShimouchiＡ、 Morimoto T
14.　The Relationship Between Somatic Pain and Numbness and Depressive.	共同	2001年 平成13年11月	THE GERONTOLOGIST Vol 41 P.280 2001 (Washington, D.C.)	本研究の目的は脳卒中後遺症患者のQOL阻害因子と考えられる「痛み」「痺れ」と「鬱」の関係を明らかにすることである。脳卒中患者とその介護者101組を対象にインタビュー形式で調査をおこなった。鬱スケールにはGeriatric Depression ScaleとCornell Scale for Depression in Dementiaを使用した。痛みは患者の58%、痺れは40%の割合でみられた。痛みおよび痺れは鬱傾向と強い関連がみられた。 本人担当部分：統計解析と考察をおこなった。 共同発表者:Morimoto T、A. Schreiner

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15. Factors Related to the Feeling of Burden in Caregivers for Respiratory Patients During Home Oxgen	共同	平成13年5月	American Journal of Respiratory and Critical care Medicine Vol.165(8) A832 (Atlanta, Georgia)	本研究の目的は在宅酸素療法患者の主観的健康感および生活満足度に影響をおよぼす要因について検討することである。対象は在宅での酸素療法適応患者30名であった。質問紙法による面接調査をおこなった。その結果、主観的健康感に有意に相関のみられた項目は、「自分の状態は全く価値がないと思う」「呼吸困難の程度」で、生活満足度では、「暮らし向き」「呼吸困難の程度」であった。これらのことから、在宅酸素療法患者の主観的健康感の低下は「自己の存在価値の否定」を惹起していることが考えられた。また、呼吸困難は主観的健康感と生活満足度の双方に関与していることが明らかになった。 本人担当部分:統計解析と考察をおこなった。 共同発表者: Morimoto T、Shimouchi A
16. A comparison of depressive symptoms among clinically depressed, post stroke, and healthy older persons	共同	平成14年4月	Gerontological Society of America 55 Annual Scientific Meeting, Poster Session (Boston, MA)	GDS鬱スケール（Geriatric Depression Scale）を使用して、脳卒中後遺症患者及び健康な高齢者のうつ症状を比較検討した。その結果、明らかに脳卒中後遺症患者に鬱徴候が多く見られた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者:A. Schreiner、H. hayakawa、T Morimoto
17. The development of a Faculty Development program in Japanese nursing college by Mutual class evaluation	共同	平成16年8月	17rd Annual Pacific nursing Research Conference (Honolulu, Hawaii)	三重県立看護大学のFD活動は、学内教員の参考授業検討を通して教授方法の開発を中心に実施されてきた。これらの成果を踏まえて本研究では、看護教育評価の開発とその獲得を目指し、教育評価についての先行研究の検討、授業・演習・実習の教育評価に関しての方法論について検討することを目的とした。 担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.201) 共同発表者:Kozo Fujimoto、Masashi Kawano、Tomoko Morimoto、Noriko kawahara、Kana Nakamura
18. Comparative studies on care-giving for the patients with chronic respiratory failure or sequelae of cerebral strokes	共同	平成16年	Am J Resir Crit Care Med 169(7):A725 (Orland, Florida)	本研究の目的は慢性閉塞性呼吸不全患者と脳卒中後遺症患者の介護者の介護負担について比較検討することである。調査結果として、主な脳卒中後遺症患者の介護者の主な介護負担は、「介護者自身の自由な時間がない」ことであり、慢性閉塞性呼吸不全患者の介護者の介護負担は「患者から依存されている」という精神的負担であった。 本人担当部分:統計解析と考察をおこなった。 共同発表者:Morimoto T、Shimouchi A、Asano H
19. Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care	共同	平成22年9月	6th International Conference of Health Befavioral Science Sustainable Health Promotion:Dialogue on Well-being & Human Security in Environmental Health (Kuala Lumpur, Malaysia)	本研究の目的は、施設入居高齢者の癒しとQOLの向上を考慮した「温かい介護用縫いぐるみ」の効用を検討することである。コーエンマンスフィールド（CMAI）調査票をもとに縫いぐるみ使用前・後の高齢者の行動の変化を比較した。結果として「同じことを繰り返し言う（質問する）」に有意な差がみられた。 担当部分：研究の総括をおこなった。(P.86) 共同発表者:守本とも子、新谷奈苗

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20.　Study about quality of life(QOL) of home oxygen therapy patient and related facters of actual life situation	共同	平成23年10月	Proceeding of the 2nd East Asian Ergonomics Federration Symposium (EAEFS 2011)National Tsing Hua University, Hslnchu Taiwan, 4-8 October 2001　P.48	在宅酸素療法患者の生活実態とQOLの関連を明らかにするために、患者のQOLに関連する生活実態の要因を検討した。その結果、患者の活力や心の健康に肺理学療法の理解度が高いことが明らかになった。肺理学療法の理解度が高い患者は認知能力も高く、自己管理ができており、疾患があっても前向きな生活を送っていることが明らかになった。自己管理能力を身につけるためにも理学療法などを積極的に行う患者教育の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究データーの解析、総括をおこなった。 共著者：Nanae　Shintani、Tomoko Morimoto
21.　Difficulty in continuing job for breast cancer patients getting chemotherapy	共同	平成24年3月	30th Congress of the International Commission on Occupational Health (ICOH　2012),Cancun center (Mexico)	乳がんの治療は化学療法を含むことから、副作用による身体的苦痛を伴う。しかし外来通院で治療を受けながら仕事をこなしている患者が多いことから、通院により化学療法を受けている乳がん患者の仕事と治療を継続していく上での困難を明らかにすることを研究の目的とする。 A県内のがん拠点病院で乳がんと診断され、化学療法を受けている患者で仕事を継続している患者6名を対象とし、「仕事を継続していく上での困難」について半構造的インタビューを行った。結果から７つのカテゴリが抽出された。カテゴリは【治療の副作用からくる身体的苦痛】【仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ】【再発への不安から仕事をセーブする】【職場の配慮不足】【病院のシステム上の不便】【治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安】【病名告知により同僚に気を遣われる辛さ】で構成されていた。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：Nanae Shintani、Tomoko Morimoto

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
―国内学会発表―				
1.　看護婦の職業選択の動機とIdentityの関連について	共同	平成6年6月	日本看護研究学会雑誌 Vol.17(6)　東京都	看護婦の職業選択の動機とIdentityの関連について検討した。対象は看護婦223名であった。因子分析によって5因子が抽出された。第1因子「職業満足度」は職業に対して肯定的イメージを持ちつつ、積極的に自己関与していた。第3因子「職業人としての自己向上の減退」は、加齢や臨床経験年数の増加に伴う自己啓発の意欲の低下を示唆していた。なお、看護職選択の動機および理由と各因子の関連性を因子得点の散布図によって調べたところ、今回は見出すことができなかった。 本人担当部分：調査と統計解析をおこなった。(P.189) 共同発表者:守本とも子、山形力生、櫻井秀雄
2.　「車椅子移送」における体験学習の指導内容の検討―学校内に段差とスロープを設置して―」	共同	平成6年7月	第4回日本看護教育学会雑誌 （東京都）	学校内に段差とスロープを設置し、看護学生に車椅子移送の体験学習をおこなった。学生に看護師役と患者役を体験させ、それらの感想をもとに、より適切な車椅子移送の技術を学ぶことを目的とした。結果として、「てこの原理」や「ボディメカニクス」を有効に活用する必要があることが示唆された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。(P.62-P.63) 共同発表者:守本とも子、山形力生
3.　看護婦の対患者関係が、その職業的アイデンティティに与える影響について	共同	平成6年9月	第36回日本教育心理学会発表論文集 （京都市　京都大学）	看護学生143名、現職看護婦130名を対象に看護婦の対患者関係と職業的アイデンティティとの関連性を看護婦と看護学生を比較しつつ検討した。また、看護婦の対患者関係を調べるために看護婦―患者関係尺度を作成した。因子分析の解釈から、対患者関係において過剰に母性的・保護的にかかわろうとするものは、その根底に看護婦の個人史に根ざす母性に対する恋慕が存在することが考えられた。 本人担当部分：調査と統計解析をおこなった。(P.270) 共同発表者:櫻井秀雄、山形力生、守本とも子
4.　看護婦の対患者関係とバーンアウトとの関係	共同	平成6年10月	第58回日本心理学会発表論文集 （京都市　京都大学）	看護婦157名を対象に看護婦の対患者関係を調べるために看護婦―患者関係尺度を用い、バーンアウト尺度との関連性を多変量解析をおこない検討した。因子分析の結果の解釈により家族から見放されている患者に自己を投影しやすく、過剰に母性転移を引き起こした結果、患者に受け入れられず、職業に対して脱価値化を引き起こしたと考えられた。一方、患者に対して無条件に肯定的なイメージを持ちやすい看護婦は情緒的消耗感を抱きにくいと考えられた。 本人担当部分：調査と統計解析をおこなった。(P.59) 共同発表者:櫻井秀雄、山形力生、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.　精神科実習における対患者関係と精神疾患のイメージとの関係性について	共同	平成7年8月	日本看護学教育学会講演集 （千葉県）	精神科実習における対患者関係と精神疾患のイメージとの関連性について、看護学生162名を対象に、看護婦―患者関係尺度と精神疾患に関する質問紙を用いて因子分析をおこない、結果を考察した。精神疾患が生物学的機序より、心理社会的要因によると考える看護学生は、患者への同一視や母性転移を引き起こしやすいと考えられた。 本人担当部分：調査と統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.34-P.35) 共同発表者:守本とも子、櫻井秀雄他、山形力生、瀬山和世
6.　看護婦の対患者関係とその性格特性の関連性について―SY式NPRSとY-G性格検査との比較より―	共同	平成7年9月	第37回日本教育心理学会発表論文集 （茨城県　茨城大学）	初期実習における看護学生(135名)の性格特性が、その対患者関係に与える影響をY-G性格検査とSY式看護婦患者関係尺度（NPRS）の関連性を明らかにしつつ、考察した。結果より、看護学生の自己に対する否定的イメージや精神（情緒）的不安定さが、患者にも投影されやすく、それが患者に対する否定的感情につながりやすいことが考えられた。また、「患者に対する思い入れ」とY-GのA「支配性」と正の相関があり、リーダーシップが強い性格傾向は患者に対して思い入れが強いことが考えられた。 本人担当部分：主に統計解析をおこなった。 (P.579) 共同発表者:櫻井秀雄、守本とも子、山形力生
7.　看護婦―患者関係尺度（NPRS）の文章完成法（SCT）による検証	共同	平成8年9月	第38回日本教育心理学会発表論文集 （茨城県　茨城大学）	個人特性はその固体史に根ざす母子関係などに関連している。それらと看護婦―患者関係尺度で示される母性転移や同一視との関連性について、看護婦―患者関係尺度と文章完成法を用いて、臨床看護婦および看護学生の母子関係と対患者関係との関連を明らかにしつつ考察した。対象は看護学生135名、看護婦153名であった。結果より、患者への否定的感情はストレスや労働条件はもとより、看護婦本人が持つ希薄な家族観が関与していることが明らかになった。 本人担当部分：調査と結果の考察をおこなった。 (P.280) 共同発表者:櫻井秀雄、守本とも子、山形力生、瀬山和世
8.　労働姿勢と腰痛発症との関連について	共同	平成9年3月	近畿理学療法士学会誌27 （大阪市）	職業性腰痛の発生はさまざまな原因が関与していると考えられる。本研究では、最も関与が大きいと考えられる労働姿勢に着目し、ゴミ収集作業中の姿勢変化をビデオにて連続画像記録した。同時にホルダー筋電図にて体幹筋群の筋活動を記録し、両者を比較検討して腰痛発症に関連性の高い労働姿勢の抽出と筋電図学的分析を試みた。その結果、腰痛発症に関連性の高い労働姿勢は、中腰や腰部の回旋、或いは走りながらゴミを投げるという姿勢や動作であり、これらでは、背筋群に強い筋活動が生じていた。従って腰痛発症を予防するには、これらの労働姿勢の改善が必要であることがわかった。 本人担当部分：労働姿勢のビデオ撮影と筋電図の記録及びデータ処理と論文の結果作成をおこなった。(P.38-P.41) 共同発表者:小林和彦、辻下守弘、鶴見隆正、守本とも子、池谷茂隆

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.　在宅重度重複障害者および主たる介護者に対するソーシャルサポートの研究	共同	平成9年6月	日本保健医療行動科学会抄録集（神戸市）	在宅重度重複障害者および主たる介護者(77組)のソーシャルサポートの実態について分析した。結果より、障害者への可能性を引き出す継続的なアプローチと、緊急時に即対応できる福祉制度の確立が必要であることが示唆された。また、障害者への前向きな対応と介護者の高齢化に伴う将来への不安の解消は心理的な介護負担軽減へのアプローチとして重要であると考えられた。 本人担当部分：研究の企画および総括をおこなった。(P.31) 共同発表者:守本とも子、柳井勉
10.　在宅酸素療法患者の身体活動と臨床症状の関係	共同	平成9年6月	日本保健医療行動科学会抄録集（神戸市）	在宅酸素療法患者の身体活動とその実態を明らかにした。また、身体活動と関連すると考えられる因子を分析し、臨床経過や症状との関係を検討した。その結果、身体活動は高齢者で低値を示した。また、外来通院日に多く、通院そのものによる負荷が考えられた。症状の増悪例や不安定例では身体活動にむらがみられた。 本人担当部分：データ入力、統計の解析をおこなった。(P.57) 共同発表者:守本とも子、下内章人
11.　在宅酸素療法中の肺循環障害患者における身体活動と臨床症状の関係、―万歩計と呼吸器症状点数の時差相関係数による解析―	共同	平成9年6月	第9回肺循環研究会抄録集（東京都）	在宅酸素療法適応の肺結核後遺症8例、慢性肺気腫4例、慢性肺塞栓症1例を対象とした。運動療法は施行せず、毎日の歩数と自覚症状を時差相関係数により解析した。その結果、急性増悪例や臨床症状と経過の不安定な例では、毎日の歩数の推移に変動が見られた。時差相関の解析により、症状と毎日の歩数の間に時間的因果関係が認められた。 本人担当部分：主に統計解析と結果の考察をおこなった。(P.7) 共同発表者:下内章人、守本とも子
12.　在宅重度重複障害者の家族における介護負担関連要因に関する研究	共同	平成9年8月	第45回日本教育医学大会抄録集（ソウル市）	在宅重度重複障害者の介護者77名における介護負担関連要因を分析し検討した。その結果、介護者の介護負担は、介護負担関連要因の因子構造により、ADLに関連した介護負担、社会との関係での情緒面に関連した介護負担、そして、障害者と家族をとりまく社会環境（社会資源）に関するものがあげられた。これらの介護負担は介護者の高齢化に伴い、さらに増加することが予測された。 本人担当部分：研究の企画および総括をおこなった。(P.88-P.89) 共同発表者:守本とも子、柳井勉

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13.　ゴミ作業従事者における腰痛症の実態とその作業分析について	共同	平成10年2月	中国ブロック理学療法士学会論文集 （広島市）	ゴミ収集作業従事者に対して職業性腰痛の実態調査と作業分析を試みた。対象はゴミ収集作業員198名である。腰痛による休職の状況、痛みの程度などについて、自記式アンケート調査を実施した。その結果、48.5%が腰痛による休職があり、23.3%が日常生活の中で常に腰痛が存在し、43.4%が下肢症状をもっている実態が明らかとなった。これらの結果より、ゴミ収集作業員の腰痛発症頻度は高く、多くの作業員が慢性的な腰痛で苦しんでおり、腰痛予防のための体操指導や作業姿勢の改善が必要であることが示唆された。 本人担当部分：アンケート用紙の作成および集計と統計処理をおこなった。P.11-P.12 共同発表者:辻下守弘、鶴見隆正、山田圭吾、小林和彦、池谷茂隆、守本とも子
14.　妊婦における夫立ち会い分娩の意志決定要因の分析	共同	平成10年6月	日本保健医療行動科学会抄録集 （東京都）	大阪府の産婦人科外来に通院する妊婦250名の夫立ち会い分娩希望の有無とその意志決定に関する要因の分析をおこなった。その結果、夫立ち会い分娩の希望は全体として少なく、その意志決定の関連要因として、「年齢」「妊娠に対する喜びと期待」及び「夫との良好な関係」が示唆された。また、夫の仕事の都合といった社会的環境要因と夫立ち会い分娩の意義の認識不足が、その意志決定にネガティブに関与していた。 本人担当部分：研究の企画および総括をおこなった。(P.52) 共同発表者:守本とも子、池田聡明、松嶋紀子
15.　ゴミ収集作業員の健康問題について	共同	平成10年6月	日本保健医療行動科学会抄録集 （東京都）	研究の目的は、職業性腰痛の発症と労働者の生活習慣、行動特性、そして心理社会的ストレスとの関連性を明らかにすることである。対象はゴミ収集作業員198名であった。結果として、単相関分析で、腰痛重症度と高い相関を示したのはストレス度、ついで日常苛立ち事、A型特性であった。これらのことから、腰痛予防策に心理社会的な要因をも考慮する必要があると考えられた。 本人担当部分：集計および統計解析をおこなった。(P.64) 共同発表者:辻下守弘、守本とも子、池谷茂隆、小林和彦

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16.　看護職における腰痛の実態	共同	平成11年6月	日本健康教育学会誌 Vol.7　SUPPI （大阪市　国際交流センター）	研究目的は、看護職における腰痛の実態を詳細に調査し、看護職に対する健康教育のあり方を検討することである。腰痛症に関連する因子は多様であり、単一因子を同定することは不可能であったが、職業性腰痛に対して、労働の内容が腰痛発症に大きく関連していることは明らかであった。本調査結果より、腰痛発症率は57％で、腰痛の程度も中等度以上が6割を超えていた。しかし、腰痛の予防に対しては4割近くが、治療に関しては6割以上が、なにも実践していないという現状がみられた。また、本研究では腰痛の程度がGHQと関連していたことから精神的ストレスが原因となっていることも推察された。 本人担当部分：調査の企画、統計解析および研究の総括をおこなった。(P.118-P.119) 共同発表者:守本とも子 中嶋律子、白田久美子、任和子、辻下守弘、池谷茂隆
17.　看護職者の健康状態の意識と精神健康の実態	共同	平成11年6月	日本健康教育学会誌 Vol.7　SUPPI （大阪市　国際交流センター）	研究目的は看護職の健康に対する意識と精神健康状態の実態について分析し、検討することである。対象は6総合病院に勤務する看護職1124名であった。結果より、看護職者の健康の意識は身体的症状や不安・不眠などの自覚症状があると、精神健康も良くないことがわかった。特に年齢的には20～30歳代、経験年数では1年目以内と5～10年以内、配属後1年目以内、1～3年目以内に精神的な不健康状態が見られた。看護職の多くは三交代制勤務であり、このような勤務状況の中で、如何なる健康管理を行うのかが、今後の課題である。 本人担当部分：データ入力、結果の考察をおこなった。(P.122-P.123) 共同発表者:白田久美子、任和子、守本とも子、中嶋律子、辻下守弘、池谷茂隆
18.　看護職者の睡眠状況と精神健康との関係	共同	平成11年6月	日本健康教育学会誌 Vol.7　SUPPI （大阪市　国際交流センター）	研究目的は看護職の睡眠と健康状態との関連について検討することである。対象は6総合病院に勤務する看護職1248名であった。結果より、三交代制勤務者では勤務日と休日の睡眠時間の差が大きかったが、睡眠の質に差はなかった。三交代制勤務者は日勤勤務者に比べてGHQ28での精神健康は低かった。両者とも睡眠の質と精神健康都に関連があった。また、睡眠薬の使用は三交代制勤務者と睡眠の質の悪いものに多かった。精神健康度の低い三交代制勤務者は、睡眠剤を使用して睡眠の質を上げようとしている可能性があり、健康教育の必要性があると考えられる。 本人担当部分：データ入力、結果の考察をおこなった。(P.124-P.125) 共同発表者:任和子、白田久美子、中嶋律子、守本とも子、池谷茂隆、辻下守弘

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19.　看護職における月経前症候群	共同	平成11年6月	日本健康教育学会誌 Vol.7　SUPPI （大阪市　国際交流センター）	研究目的は、夜勤を伴う特殊な勤務形態にある看護職の健康教育の必要性と方向性の検討の一貫として、看護職の月経前症候群（PMS）の実態を明らかにすることである。結果より、看護職のPMS症状の程度は、夜勤をしていないものに比べて、夜勤をしているものの方が強かった。また、夜勤をしているものでは夜勤をしていないものに比べて年齢による症状の程度が変化する傾向にあった。これらのことから、採用時のオリエンテーションの機会などを利用して、PMS症状が出現したり、重症化する前に健康教育を行う必要があると考えられた。 本人担当部分：統計解析および結果の考察をおこなった。(P.126-P.127) 共同発表者:中嶋律子、守本とも子、任和子、白田久美子、池谷茂隆、辻下守弘
20.　チュートリアル教育における学生の自己教育力の傾向	共同	平成11年6月	日本看護研究学会抄録集 Vol.22(3) （浜松市）	本研究は、チュートリアル教育の教育効果を明らかにすることを目的とした。4年生大学看護学科1年生前期のチュートリアル教育前と終了後、梶田の自己教育性調査票とチュートリアルの学習目標を調査項目としてアンケート調査をおこなった。因子分析をおこない、チュートリアル教育前と終了後の比較をしつつ検討した。その結果、終了後に自己統制因子が高められており、チュートリアル教育の効果があったことが示唆された。 本人担当部分：主に統計解析をおこなった。 (P.223) 共同発表者:山口求、守本とも子、片山富美代 、岡本裕子、坪井敬子、 横川由美子、岡山和子
21.　妊娠期における家族サポートの研究	共同	平成11年6月	日本保健医療行動科学会抄録集 （東京都　東京女子医科大学）	夫立ち会い分娩参加における夫への危機サポートのあり方について検討した。対象は大阪府下産婦人科外来に通院する妊婦とその夫250組であった。結果より、夫は出産に関する知識は、ほとんど持ちあわせておらず、そのことが夫の立ち会い分娩に対する不安をもたらしていた。夫への危機サポートととして、夫同伴分娩の意義の理解と漠然とした出産へのイメージから、正しい出産のメカニズムが理解できるよう母親教室に夫の参加を促すことが必要であると考えられた。 本人担当部分：研究の企画および総括をおこなった。(P.34) 共同発表者:守本とも子、中島律子、池田聡明、松島紀子
22.　看護職における腰痛の心理・社会的問題に関する考察	共同	平成11年6月	日本保健医療行動科学会抄録集 （東京都　東京女子医科大学）	本研究の目的は、看護職における腰痛の実態を調査し、看護職の腰痛への対処方法や腰痛発症の要因、そして心理的・社会的問題について検討することである。対象は総合病院に勤務する看護職1224名であった。GHQの不安、不眠、うつ症状、身体症状、社会的側面の項目と腰痛の痛みの程度に有意な関連性が認められた。また、GHQ全体の得点と腰痛の痛みの程度に有意な関連性が認められた。 本人担当部分：統計解析と結果の考察をおこなった。(P.47) 共同発表者:辻下守弘、守本とも子、中嶋律子、白田久美子、任和子、池谷茂隆

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23.　青年後期におけるアイデンティティとQOLの関連について	共同	平成11年6月	第8回日本健康教育学講演集 （大阪市）	研究目的は青年後期のアイデンティティとQOLの関係について検討し、学生のアイデンティティの確立を促すために重要な視点を明らかにすることである。4年生大学看護学科新入生129名を対象とした。因子分析をおこない4因子が抽出された。因子構造の解釈により、アイデンティティの確立を円滑にするうえで、人間関係を含めた生活環境に対する満足度を高めることの重要性が示唆された。 本人担当部分：統計解析と結果の考察をおこなった。(P.302-P.303) 共同発表者:篠田 愛、守本とも子、鈴木美惠子
24.　在宅重度重複障害者と介護者の生活実態及び生活問題の研究	共同	平成11年8月	日本教育医学会第45巻 第1号 （岐阜県）	研究の目的は在宅重度重複障害者と介護者の生活実態を調査し、生活問題を明らかにすることである。身体障害者手帳1～2級と療育手帳Aの交付を同時に受けている在宅重度重複障害者と介護者77組に面接調査をおこなった。結果より、介護者夫婦のプライバシーの場がない、「介護のための夜間の起床」が約6割と高率であることや、介護者の高齢化による身体的介護負担が考えられた。 本人担当部分：研究の企画及び総括をおこなった。(P.152-P.153) 共同発表者:守本とも子、柳井勉
25.　チュートリアルにおける自己教育力の開発	共同	平成11年8月	日本看護学教育学会抄録集 （東京都）	研究の目的は、4年制大学看護学科1年次に実施されるチュートリアル教育の効果について検討することである。1年次看護学生108名にチュートリアル教育前と後の自己教育性に関する項目に自己評価をさせた。その結果、効果の見られた項目は「テーマを正しく捉えられる」「他人の意見に対して自分の考えを持てる」「何が問題かを考えることができる」といったことであり、問題発見の能力への自己評価が高くなっていることが示唆された。 本人担当部分：集計と結果の考察をおこなった。(P.86) 共同発表者:山口 求、片山富美代 、岡本裕子、坪井敬子、守本とも子 、横川由美子、岡山和子
26.　在宅脳卒中後遺症患者の介護負担―日本語版Zarit Caregivers Burden Interview による検討	共同	平成12年6月	日本健康教育学会誌 （千葉県）	本研究の目的は在宅脳卒中後遺症患者の主たる介護者の介護負担について、ザリット介護負担スケールの統計解析をもとに検討することである。因子分析により、「個人的役割に関連した介護負担因子」と「介護技術に関連した介護負担因子」の2因子が抽出された。これらの結果から、介護負担には介護者自身にかかわる役割意識にもとづいた負担感と介護技術の未熟さを認識する負担感があることが示唆された。 本人担当部分：研究の企画、統計解析および総括をおこなった。(P.156-P.157) 共同発表者:守本とも子、A. Schreiner、伊藤成子、浅野 仁

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27.　在宅脳卒中患者の介護者における介護負担と生活の質の関係について	共同	平成12年6月	第15回日本保健医療行動科学大会抄録集 （大阪府　大阪教育大学）	研究目的は在宅脳卒中患者の介護者における介護負担と健康に関連したQOL（HRQOL-Health Related Quality of life）との関係を分析し、介護者の健康生活の向上にむけての対策を検討することである。対象は在宅脳卒中患者と介護者76組であった。結果より、「介護者の健康感が低いほど、憂鬱な気分である」、「患者の依存による心理的負担がある」「患者の問題行動により日常生活での集中力にかける」といったことが示唆された。これらの結果から、介護者に対する精神・心理的な援助が必要であると考えられた。 本人担当部分：研究の企画、統計解析及び総括をおこなった。(P.53) 共同発表者:守本とも子、A.Schreiner、浅野 仁
28.　脳卒中後遺症患者の健康に関連した生活の質の研究―SF12による検討 共同	共同	平成12年7月	日本教育医学会 第46巻　第1号 （茨城県水戸市）	本研究の目的は在宅脳卒中患者の健康に関連した生活の質について、一般的健康関連QOLの代表的な測定尺度であるSF-12を用いて分析し、検討することである。対象は在宅脳卒中患者と介護者81組であった。因子分析の結果3因子が抽出された。因子構造の解釈により、介護者の健康に関する生活の質は、身体的健康、集中力、意欲といった因子に着眼していく必要があることが示唆された。 本人担当部分：研究の企画、統計解析および総括をおこなった。(P.80-P.81) 共同発表者:守本とも子、A.Schreiner、浅野 仁
29.　アロマセラピーの意識に関する研究―女子大学生と社会人女性との比較による検討	共同	平成12年10月	第3回日本アロマセラピー学会抄録集 （大阪府　千里ライフサイエンスセンター）	近年、医療分野においても、ストレス解消法のひとつとして、アロマセラピーが注目されてきている。アロマセラピーについての一般的な認識について、女子大学生（96名）と社会人女性（83）との比較により検討した。アロマセラピーの薬効について「知っている」は学生44%、社会人59%であった。学生のアロマセラピーの認識は「薬効」というよりもむしろ「おしゃれ」感覚であった。このように、アロマセラピーの意識については年齢層による相違があることと、また、その効果についての正しい認識が不十分であることが考えられた。 本人担当部分：集計と結果の考察をおこなった。(P.70) 共同発表者:当摩公子、池田聰明、伊藤絹子、守本とも子
30.　女性の主観的健康感とアロマセラピーの関係について	共同	平成12年11月	第3回日本アロマセラピー学会抄録集 （大阪府　千里ライフサイエンスセンター）	本研究の目的は女性の主観的健康感とアロマセラピーの意識について検討することである。対象は大阪府在住の女性179名（女子大生96名、社会人女性83名）であった。主観的健康感として一般的健康状態、ストレス、気分（憂鬱）について調査し、アロマセラピーの意識（「体験あり」「今後アロマセラピーをやりたい」「薬効効果についての認識」など）との関係を検討した。その結果、アロマセラピーには一般的に心理的な効果を期待していることが明らかとなった。 本人担当部分：統計解析および結果の考察をおこなった。(P.70) 共同発表者:池田聰明、当摩公子、伊藤絹子、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31.　ターミナルケアに関する意識調査	共同	平成15年2月	奈良県看護研究学会抄録集 （奈良県　百年会館）	本研究の目的は医療従事者のターミナルケアに関する意識調査をおこない、今後のターミナルケアの質の改善にむけての示唆を得ることである。調査対象は奈良県の訪問看護ステーション及び大阪府のリハビリ病院に勤務する医療従事者130名であった。調査内容はターミナルケアについての42項目で、大切と思われる程度を「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で設問した。その結果、精神・身体両側面からの援助の重要性が示唆されたが、スピリチュアルケアの認識が低かった。また、「意識がある」についての項目の解答にバラつきがあり、今後の末期医療の方向性についての意識の一致に困難性が見出せた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者:守本とも子他
32.　「社会福祉教育における認知処理方略別の課題提示の試み（1）」	共同	平成15年10月	第51回日本社会福祉学会全国大会報告要旨集 （大阪府）	社会福祉教育の一環として、認知処理方略別の課題を提示して学生の理解を深めることを目的とした。結果として課題を提示することで学生の理解度が高くなることが確認された。(P.383) 本人担当部分：統計の解析をおこなった。 共同発表者:新川泰弘、守本とも子、星野政明
33.　「ターミナルケアの質の改善に向けての検討―看護師の意識調査より―」	共同	平成15年10月	第51回日本社会福祉学会全国大会報告要旨集 （大阪府）	ターミナルケアにおいて、看護師として大切と思われる項目を調査した。結果として、痛みのコントロール、精神的援助、家族への援助が重要な要素であることが明らかになった。(P.373) 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共同発表者:守本とも子、新川泰弘、星野政明
34.　「地域における老年脳卒中後遺症患者、老年うつ病患者、老年健康者のうつ症状の比較」	共同	平成15年10月	第62回日本公衆衛生学会抄録集 （京都）	本研究の目的は地域における老年脳卒中後遺症患者、老年うつ病患者、老年健康者のうつ症状を比較することで、脳卒中後遺症患者における鬱症状の特性を明らかにすることである。結果として、脳卒中後遺症患者は明らかに鬱徴候がみられ、情緒的に不安定な傾向にあることが示唆された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。(P.718) 共同発表者:アンドレア・シュライナー、宮林郁子、早川浩、守本とも子
35.　「終末期看護学実習前後における看護学生のターミナルケアについての意識変化」	共同	平成16年3月	日本医学看護学教育学会誌 （島根県）	本研究の目的は終末期看護学実習による看護学生の終末期看護についての意識変化を明らかにすることである。終末期看護学講義終了後の看護大学看護学科の3年次生104名に対し、実習の前後に終末期において大切だと考えられるケアについての意識調査をおこなった。結果として、「痛みがないこと」「呼吸困難に陥らないこと」など、実習現地で直接眼にし、体験した項目に有意な意識変化がみられた。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。(P.53) 共同発表者:新谷奈苗、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36.　「ターミナルケアの質の改善に向けての検討―第2報―」	共同	平成16年6月	第19回日本保健医療行動科学会学術大会抄録集（大阪府羽曳野市）	本研究の目的は学生、看護師、医師の意識調査をもとにターミナルケアの質の改善に向けての検討をおこなうことである。調査結果より、今後さらなる調査をおこない、職種による認識の違いを明らかにしチームワークを充実させていくことの必要性が明らかになった。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。(P.59) 共同発表者:守本とも子、シュライナーアンドレア、新谷奈苗
37.　「看護学生におけるアイデンティティについて」	共同	平成16年8月	教育医学第50巻第1号（兵庫県）	本研究の目的は看護学生のアイデンティティの構成要因を明らかにすることである。調査結果により、看護学生のアイデンティティに親子関係が重要な要因であることが明らかになった。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。(P.34-P.35) 共同発表者:守本とも子、久保田愛子、新谷奈苗
38.　「看護学生におけるQOLの構成要因について」	共同	平成16年10月	第52回日本社会福祉学会全国大会報告要旨集（東京都）	本研究の目的は看護学生におけるQOLの構成要因について明らかにすることである。調査結果より、アイデンティティの構成要因と同様、親子関係や家庭環境が重要な要因であることが明らかになった。(P.154) 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共同発表者:守本とも子、新川泰弘、星野政明
39.　「看護学生の行動特性」	共同	平成16年12月	リハビリテーションのための行動分析学研究会抄録集（広島県）	本研究の目的は看護系学生の行動特性を明らかにし、学生生活における適切な指導のあり方を見出すことにある。対象は4年制看護系大学1学年（平成10年～13年)455名であった。自己記入式の質問紙調査（SCT）をおこなった。その結果、4つのカテゴリーが見出された（①解決型、②非解決型、③中間型、④解決不能型）。特に解決不能型のタイプの学生への生活指導の必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。(P.10-P.11) 共同発表者:新谷奈苗、守本とも子、久保田愛子
40.　介護福祉専攻学生におけるアイデンティティの構成要因について	共同	平成17年6月	第20回日本保健医療行動科学会大会抄録集（東京都）	本研究の目的は、介護福祉専攻学生におけるアイデンティティの構成要因を明らかにし、効果的な援助内容・方法を探ることである。調査対象は、介護福祉を専攻する短大生92名であった。質問紙は守本ら（1998）の研究から、アイデンティティに関連すると考えられるものを用いた。因子分析の結果、介護福祉専攻学生のアイデンティティを構成する要因として「自己同一性因子」「自己肯定感にもとづく自己実現因子」が明らかになった。これらの因子に着目して、介護福祉専攻学生に対する援助内容・方法を検討する必要が示唆された。 本人担当部分：主に統計解析をおこなった。(P.56) 共同発表者:富永尭史、新川泰弘、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
41.　介護福祉専攻学生における生活満足度の構成要因について	共同	平成17年6月	第20回日本保健医療行動科学会大会抄録集 （東京都）	本研究の目的は、介護福祉専攻学生における生活満足度を構成する要因を明らかにし、介護福祉教育効果の向上を目指すことにある。調査対象は、介護福祉を専攻する短大生92名であった。質問紙は守本ら（1998）の研究から、生活満足度に関連すると考えられるものを用いた。因子分析の結果、「円満な家庭・家族関係因子」「良好な学校生活因子」「自己効力感因子」「健康的な生活と合目的的活動因子」が抽出された。介護福祉を専攻する学生の生活満足度の向上に向けて、これらの因子に着目する必要性が示唆された。 本人担当部分：主に統計解析をおこなった。 (P.57) 共同発表者:新川泰弘、富永尭史、守本とも子
42.　こども学専攻学生におけるアイデンティティの構成要因について	共同	平成17年8月	第11回日・韓健康教育シンポジウム 兼　第53回日本教育医学会大会 教育医学 第51巻　第1号 （ソウル市）	本研究の目的は子ども学専攻学生におけるアイデンティティの構成要因を明らかにすることで、学生のアイデンティティを高める要因を見出し、学生生活指導の方策を検討することである。調査結果より学生間での友人関係と家庭環境が重要な要因であることがわかった。 本人担当部分：主に統計解析をおこなった。 (P.99) 共同発表者:富永尭史、吉弘淳一、新川泰弘、守本とも子
43.　こども学専攻学生における生活満足度の構成要因について	共同	平成17年8月	第11回日・韓健康教育シンポジウム 兼　第53回日本教育医学会大会 教育医学 第51巻　第1号 （ソウル市）	本研究の目的は子ども学専攻学生における生活満足度の構成要因を明らかにすることである。生活満足度を高める要因を見出し、学生生活指導の方策を検討した。調査結果より学生間での友人関係と家庭環境が重要な要因であることがわかった。 本人担当部分：主に統計解析をおこなった。 (P.137) 共同発表者:新川泰弘、吉弘淳一、富永尭史、守本とも子
44.　こども学専攻学生を取り巻く環境とストレス耐性度について	共同	平成17年8月	第11回日・韓健康教育シンポジウム 兼　第53回日本教育医学会大会 教育医学 第51巻　第1号 （ソウル市）	本研究の目的はこども学専攻学生の生活環境要因とストレス耐性の関係を明らかにすることである。ストレス耐性度と環境要因の満足度を点数化し、双方の関係を分析した。調査結果より、友人関係、クラブ活動がストレス耐性度に影響を及ぼす要因であることが示唆された。 本人担当部分：主に統計解析をおこなった。 (P.139) 共同発表者:新川泰弘、吉弘淳一、富永尭史、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
45.　介護用縫いぐるみの効用	共同	平成19年3月	日本医療福祉情報科学会第2回大会　大会妙録集（神戸市　甲南女子大学）	本研究の目的は、施設入居高齢者の癒しとQOLの向上を考慮した「温かい介護用縫いぐるみ」の効用を検討することである。コーエンマンスフィールド（CMAI）調査票をもとに縫いぐるみ使用前・後の高齢者の行動の変化を比較した。結果として「同じことを繰り返し言う（質問する）」に有意な差がみられた。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。(P.11) 共同発表者:守本とも子、吉村雅世、岡本啓子、星野政明、新谷奈苗、馬場孝明
46.　高齢者むけの快適住居環境作りとその臨床的評価	共同	平成20年3月	「住居医学」共同研究成果報告会抄録集（奈良県　奈良医科大学）	高齢者向けの快適な環境作りのための快適性を評価する指標を作成する。快適性を表現すると思われる項目についてアンケート調査（220名）を行い、因子分析をおこなった。結果として三つの因子が抽出された。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者:守本とも子、吉野公三、本多裕之、吉村雅世、三毛恵美子
47.　住居における快適性評価スケールの開発	共同	平成20年11月	日本福祉工学会第12回学術講演会講演論文集 山梨大学（甲府市）	本研究では、住居環境要因と心理的・身体的QOLの関係性を分析するための基礎資料として住居の快適性評価スケールを作成した。その結果、3因子が抽出され、第1因子は“空間”、第2因子は“光”、第3因子は“情緒”と解釈された。また信頼性の検討のため、クローンバックのα係数を算出したところ、各下位尺度とともに0.78以上の内部一貫性がみられた。(P.89-P.90) 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：守本とも子、青山美智代、浅見恵梨子、上平悦子、岡本啓子、勝井伸子、三毛美恵子、吉村雅世、星野政明
48.　看護・保育学生の福祉用具に対する認識の検討	共同	平成20年11月	日本福祉工学会第12回学術講演会講演論文集 山梨大学（甲府市）	福祉用具に対する認識状況を知るため、保育学生（専門課程110名、短大生110名）、看護学生（大学3年次80名）に対し、質問紙調査により福祉用具、離乳食、調理された食品及び遊び道具について高齢者、小児どちらに使用する認識が高いかについて検討した。看護と保育専門課程の学生は類似の傾向を示し、ほとんどの項目において高齢者が使用するという認識が高かった。保育短大生においては遊びに関して子どものものと認識していた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：上本野昌子、守本とも子
49.　在宅酸素療法患者と介護者のQOL ～ 国民標準値との比較～	共同	平成21年3月	日本医療福祉情報行動科学会 第４回大会抄録集（兵庫県　甲南女子大学）	患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために、SF-36v2 質問紙をもちいて、患者と介護者のQOL を把握し、性、年代それぞれの国民標準値と比較した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.15) 共同発表者:新谷奈苗、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
50.　脳血管障害患者の心理適応面の数量化について ～障害受容スケールの作成と臨床的応用～	共同	平成21年3月	日本医療福祉情報行動科学会 第４回大会抄録集 （神戸市）	医療者の経験などによらない客観性の高い、簡便な評価法の検討が必要と考え、脳血管障害患者について障害受容スケールによる数量化の可能性と臨床的応用について述べた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.16) 共同発表者:山形力生、 櫻井秀雄、守本とも子
51.　QOL of home oxygen therapy patients and caregivers comparison with standard value	共同	平成21年8月	第13回日韓健康教育シンポジウム 兼　第57回日本教育医学会大会抄録集 （ソウル市）	本研究では、患者と介護者の在宅生活をよりよい健康生活へ導く方策を検討するために、SF-36V2質問紙をもちいて、患者と介護者のQOLを把握し、性別、各年代それぞれの0-100得点標準値と比較し検討した。 対象者は40歳以上で広島県T市の訪問看護ステーションとH市の総合病院に通院している在宅酸素療法患者とその介護者30組であり、訪問による面接調査を実施した。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。(P.77) 共同発表者:新谷奈苗、守本とも子
52.　あらかじめの温熱刺激によるストレス防御効果について	共同	平成23年3月	日本医療福祉情報行動科学会第6回大会抄録集 （岐阜市）	精神的ストレスの一種として、マウス個体に対する水浸拘束ストレスによる胃潰瘍発生モデルを用い、あらかじめの温熱刺激がその後のストレス暴露への防御効果を示すことを検討した。免疫染色法の解析結果で、あらかじめの温熱処理群では8.2%のアポトーシスの減少がみられた。(P.11) 本人担当部分：結果の分析をおこなった。 共同発表者:山形力生、高橋昭久、守本とも子、大西武雄
53.　地域における福祉講演「QOLを高める高齢者の生き方」（１）―「ストレスに関する学びの検討を中心に―	共同	平成23年6月	日本保険医療行動科学会第26回学術大会抄録集 （大阪府高槻市）	本研究の目的はQOLを高める高齢者の生き方をテーマとした地域住民のために企画した福祉講演への参加による地域住民の学びの成果を検討した。福祉講演での学びを今後の生活の中で具体的に活用していこうと考えているとともに、福祉講演会に参加したことが今後の生きる糧になっていたことが推測された。 本人担当部分：福祉講演会の講師であり、講演後のアンケートの分析を行った。 共同発表者：新川泰弘、守本とも子
54.　在宅酸素療法患者のQOLに影響を与える介護者の支援方策の検討	共同	平成24年3月	日本医療福祉情報行動科学会第7回大会抄録集 （大阪市　メルパルク大阪）	不可逆的に進行する肺病変がある慢性呼吸不全患者の在宅療養生活を維持するためには、気道感染の予防や日常生活活動の適切な制限といった患者自身の自己管理に加え、それを支える介護者の役割が重要である。本研究では、患者のQOLに影響を及ぼす介護者への支援方策を検討することを目的とした。(P.12) 本人担当部分：統計解析及び研究の総括をおこなった。 共同発表者：新谷奈苗、守本とも子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
55.　看護師国家試験の出題基準に沿った講義内容の検討	共同	平成24年6月	日本保健医療行動科学会第27回　抄録集（岐阜市）	本研究では、看護師国家試験出題基準に沿った小項目に対する講義の有無を明らかにし、教授内容の過不足や効果的な教授について検討することを目的とした。(P.78) 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：渡邊美幸、奥百合子、小平由美子、箕浦文枝、守本とも子
―シンポジウム―				
1.　第2回リハビリテーションのための行動分析学研究会シンポジウム「リハビリテーション現場における積極的行動支援」		平成15年8月	主催：リハビリテーションのための行動分析学研究会 岡山県岡山市 岡山大学創立50周年記念会館	シンポジスト 演題：「看護現場におけるQOLの現状と支援策」
2.　第6回QOL研究会夏期セミナー シンポジウム「QOLの基本と応用」		平成16年7月	主催：Quality of Life(QOL)研究会 奈良県橿原市 奈良県立医科大学大講堂	シンポジスト 演題：「在宅酸素療法とQOL」
3.　第10回奈良緩和医療研究会		平成16年10月	共催：奈良緩和医療研究会/奈良県医師会精神神経科部会/日本化薬(株) 奈良県橿原市 奈良県医師会館	一般演題Ⅰ　座長
4.　第21回日本保健医療行動科学会学術大会		平成18年6月	主催：日本保健医療行動科学会事務局 大阪府大東市 大阪産業大学	一般演題ポスター発表　座長
5.　奈良県医科大学・大和ハウス 「住居医学」寄付講座設立記念講演会 シンポジウム		平成18年6月	主催：奈良県立医科大学 奈良県文化会館　国際ホール	シンポジスト 演題：「デンマークの福祉住居」
6.　日本医療福祉情報科学会第2回大会		平成19年3月	主催：日本医療福祉情報科学会 兵庫県神戸市 甲南女子大学	シンポジスト 演題：「介護用縫いぐるみの効用」
7.　第23回日本保健医療行動科学会学術大会		平成20年6月	主催：日本保健医療行動科学会事務局 山梨県甲府市 山梨学院大学	一般演題発表　座長
8.　第56回教育医学会学術大会		平成20年8月	主催：教育医学会 大阪府柏原市 大阪教育大学	一般演題発表　座長
9.　第25回　日本保健医療行動科学会学術大会		平成22年6月	主催：日本保健医療行動科学会 群馬県前橋市　前橋プラザ元気21	一般演題発表　座長

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10.　第41回日本看護学会老年看護　学術集会		平成22年9月	主催：日本看護学会 奈良県奈良市 なら100年会館　大ホール	演題：「高齢者のQOLを追及する―今果たすべき看護の役割」 コーディネーター
11.　6th International Conference of Health Befavioral Science		平成22年9月	主催：International Conference of Health Befavioral Science マレーシア クアラルンプール	演題:"Religious Hypnosis" ファシリテーター
12.　第26回　日本保健医療行動科学会　学術大会		平成23年6月	主催：日本保健医療行動科学会 大阪府高槻市 大阪医科大学看護学部	基調講演：「災害とリスクコミュニケーション」 座長 ポスター発表　座長
13.　第27回　日本保健医療行動科学会　学術大会		平成24年6月	主催：日本保健医療行動科学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	基調講演：「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」 講師
14.　第9回　日本フットケア学会　岐阜セミナー		平成24年9月	主催：日本フットケア学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	一般講演：「フットケアのための足の解剖とケアそして歩行」 座長
―マスコミ―				
1.　新聞	単独	平成19年3月	朝日新聞(株) フロンテイアエイジ	介護用縫いぐるみの効用についての研究結果に関する記事。 施設入所高齢者を対象にコーエンマンスフィールド不穏調査票を用いて縫いぐるみ使用前と使用後の行動の変化を調査した。研究結果と施設のスタッフに対する施設入所高齢者の行動の変化についてのインタビューの内容が新聞に報道された。
2.　新聞	単独	平成20年8月	奈良新聞社 ならリビング	高齢者の住まいに関する記事。これから必要なのは、生きる主体として高齢者を考えることであり、自分の人生は自分でデザインすることが大切である。
3.　新聞	単独	平成20年9月	毎日新聞	介護用縫いぐるみの効用についての研究結果に関する記事。認知症高齢者に遊び療法の必要性を述べた。
文部省科学研究費およびその他の研究助成金				
1.　文部省科学研究費補助金基盤研究Ｃ	代表	平成11～平成13年	文部科学省	研究題名：在宅脳卒中後遺症患者と介護者のＱＯＬ測定スケールの作成と援助プログラムの開発 研究助成金：2,400千円
2.　大和証券ヘルス財団調査研究助成金	分担	平成12年	大和証券ヘルス財団	研究題名：在宅酸素療法患者における介護支援の研究 研究助成金：1,000千円
3.　三井住友海上火災福祉財団調査研究助成金	分担	平成14～平成15年	三井住友海上火災	研究題名：各種高齢疾患における介護支援特性の比較研究 研究助成金：1,800千円

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.　大阪ガスグループ福祉財団	代表	平成15年	大阪ガスグループ	研究題名：在宅介護の疾患別特性からみた効果的支援の検討 研究助成金：500千円
5.　三重県立看護大学学長特別研究費	分担	平成15年	三重県立看護大学	研究題名：看護学教育における教育評価方法に関する基礎的研究 研究助成金：3,000千円
6.　早稲田大学大学院博士後期課程特別奨学金	個人	平成17年	早稲田大学	研究題名：高齢者のQOL向上を目指した癒し効果機器（縫いぐるみ）の開発 研究助成金：500千円
7.　大和ハウス「住居医学」研究奨励金	代表	平成19年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,500千円
8.　大和ハウス「住居医学」研究奨励金	代表	平成20年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,300千円
9.　大和ハウス「住居医学」研究奨励金	代表	平成21年	大和ハウス	研究題名：高齢者向けの快適住居環境作りとその臨床的評価 研究助成金：1,500千円
10.　文部科学省科学研究費補助金　基盤研究C	分担	平成23年～ 平成25年	文部科学省	研究題名：乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発 研究助成金：4,200千円
10.　文部科学省科学研究費補助金　基盤研究C	分担	平成26年～ 平成28年	文部科学省	研究題名：乳がん患者の就労を支える Job recovery path の開発 研究助成金：4,550千円

教　育　研　究　業　績　書

平成 27 年 4 月 1 日

氏名　吉岡　隆之

研究分野	研究内容のキーワード
健康・スポーツ科学、社会医学、看護学	応用健康科学、衛生学・公衆衛生学、臨床看護学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）アートセラピー・フィーリングアーツ （大阪医療福祉専門学校「アートセラピー・フィーリングアーツ」の授業における実践例）	平成17年10月 ～ 平成20年3月	絵画と光彩と音楽を融合させた統合芸術である「フィーリングアーツ(FA)」について、実践内容及び効果について学習し、その後、実際に、医療・福祉・教育施設等における「FA」の講演活動を体験する。また、「FA」を学習・体験する前と後に、自由に絵を描き、前後の絵を比較する。体験後に描かれた絵は明らかに調和的な作品であり、その作品の変化と体験したことを自ら考察することによって、心が調和的になり、優しく明るくなる傾向がみられる。 ※北村義博、吉岡隆之 ※共同実践につき本人担当部分抽出不可能
2）感性・イメージ表現 （神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅰ「感性・身体表現」（2年次配当、選択、2単位30時間）の授業における実践例） （奈良学園大学保健医療学部看護学科の共通教育科目「感性・イメージ表現」（1年次配当、選択、2単位30時間）の授業における実践例）	平成19年4月～ 平成24年9月 平成26年10月 ～ 現在に至る	音楽、光彩（抽象画のステンドグラス風スライド）及び自らの身体を使って、自らの感性・イメージを表現する。具体的には、まず、自らの感性で描いたステンドグラス風スライドを一人あたり50～100枚程度、作製する。次に、各自のイメージに合った衣装を和紙で作製する。最終的に、自らがモデルとなり、各自のイメージに合った音楽に合わせながら、映写機を用いてステンドグラス風スライドによる光彩を、和紙の衣装を着飾った自らの身体に連続的に投射する。 ※北村義博、吉岡隆之 ※共同実践につき本人担当部分抽出不可能
2　作成した教科書，教材 1）ダウン症児「身体発育曲線」及び「縦断型発育基準チャート」作成コンピュータソフト（Excel 2003, Windows XP 対応版）（教材）	平成18年4月	前掲の「ダウン症候群の出生から18歳の身長･体重縦断的成長曲線（教材）」及び「ダウン症学齢期縦断型身長・体重発育チャート（教材）」を基に、ダウン症児と健常児双方の「身長と体重の発育基準曲線」及び「学齢期縦断型身長・体重発育チャート」の上に、自身のグラフが描けるコンピュータソフト（Excel 2003, Windows XP 対応版）を作成した。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅱ「ヘルスプロモーション論」（1年次配当、必修、1単位30時間）の授業で使用していた。 また、大阪成蹊短期大学幼児教育学科（旧児童教育学科）の「子どもの保健Ⅰ（旧小児保健Ⅰ）」の授業等でも使用している。 ※吉岡隆之、藤田弘子 監修 ※共同監修につき本人担当部分抽出不可能 ※大橋博文，藤田弘子 編著，『ダウン症児すこやかノート―成長発達の手引きと記録―』，メディカ出版，大阪（平成18年4月）に付属（後掲）

2) Computer software of the longitudinal growth chart for children with Down syndrome 【English Version】（Excel 2003 English Ver., Windows XP English Ver.）（教材）	平成18年8月	前掲の「ダウン症児身体発育曲線作成コンピュータソフト （Excel 2003, Windows XP 対応版）（教材）」の英語版で、英語版のExcel 2003及び Windows XPに対応している。 平成18年8月にカナダのバンクーバーで開催された第9回ダウン症世界会議における研究発表の際に使用し、参加者のうち希望者に配布した。 ※吉岡隆之、藤田弘子、後和美朝、福嶋美津子、福岡希代子、戸島章雄 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能 ※9th World Down Syndrome Congress (Vancouver, Canada)（平成18年8月）において発表（後掲）
3) フィーリングアーツ社会貢献・文化交流スライド【医療・福祉・教育施設3000回公演プロジェクト】（教材）	平成18年12月 ～ 現在に至る	平成16年4月から開始した「フィーリングアーツ1000回公演プロジェクト」及び1000回公演達成後の平成26年1月以降の「フィーリングアーツ3000回公演プロジェクト」の一環で、国内の医療・福祉・教育施設、被災地等で、患者、高齢者、障がい者、子どもたち、施設のスタッフ、被災者等を対象に行ったフィーリングアーツ公演の様子等に関するスライド教材（約120枚）を作成し、順次更新している。地域での文化芸術交流の意義とあり方を考察し、具体的に、感性の開発や心のケアに関して社会に貢献する方策を模索する上で有用なスライド教材である。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅰ「感性・身体表現」（2年次配当、選択、2単位30時間）の授業で使用していた。 また、フィーリングアーツに関するワークショップや講演等でも使用している。 平成26年4月以降、奈良学園大学保健医療学部看護学科の共通教育科目「文化芸術交流論」（1年次配当、選択、2単位30時間）の授業でも使用している。 ※北村義博、吉岡隆之 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能
4) 物語風禁煙教材【学生編】「明るい人生計画」（Power Point・スライド版）（教材）	平成20年2月～ 平成24年9月	喫煙率の一番高い年代は20歳代と30歳代であり、特に男女共に20歳代の喫煙率は高く、喫煙のきっかけになりやすい大学生の禁煙は、特に取り組むべき問題である。そこで、喫煙を行っている大学生が禁煙へ関心を向け、行動変容につながるような物語風禁煙教材（スライド16枚）を作成した。神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅱ「健康行動論」（3年次配当、必修、1単位30時間）の授業等で使用していた。 ※宮﨑晶子，吉岡隆之 ※指導教員として教材の全般的な監修を行った。 ※2007年度神戸市看護大学研究演習抄録集に掲載
5) 物語風禁煙教材【教師編】「子どものきもち＜学校編＞　～“あること”をやめると・・・～」（Power Point・スライド版）（教材）	平成20年6月～ 平成24年9月	児童生徒の模範となるためにも、また、児童生徒を受動喫煙の害から守るためにも、教師の禁煙は重要である。そこで今回、各種の行動科学理論を応用し、禁煙への行動変容を促すような教師のための物語風教材（スライド19枚＋フィーリングアーツDVD1曲）を試作した。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅱ「健康行動論」（3年次配当、必修、1単位30時間）の授業等で使用していた。 ※和田みなみ、吉岡隆之、北村義博 ※指導教員として教材の全般的な監修を行った。 ※第23回日本保健医療行動科学会学術大会(山梨)において発表

6）フィーリングアーツ国際文化交流ビデオ【ケニア編】（教材）	平成20年8月～現在に至る	平成20年8月に、ケニア・ナイロビのスラム地区にある子ども病院のHIVに感染した子どもたちや医療スタッフ等を対象に行ったフィーリングアーツ公演、ナイロビ郊外やキテンゲラ村の児童養護施設で子どもたちやスタッフを対象にした公演、ケニア看護協会の看護管理者を対象に行ったワークショップ、ケニアの大自然等の様子に関するビデオ教材（約6分）を作成した。国際的な文化芸術交流の意義とあり方を考察し、具体的に人類・社会に貢献する方策を模索する上で有用なビデオ教材である。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅰ「感性・身体表現」（2年次配当、選択、2単位30時間）の授業で使用していた。 また、フィーリングアーツに関するワークショップや講演等でも使用している。 平成26年4月以降、奈良学園大学保健医療学部看護学科の共通教育科目「文化芸術交流論」（1年次配当、選択、2単位30時間）の授業でも使用している。 ※北村義博、吉岡隆之、北村佳大 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能
7）物語風禁煙教材【看護学生編】「看護学生物語」（Power Point・スライド版）（教材）	平成21年6月～平成24年9月	女性看護職の喫煙率は一般女性の約2倍といわれている。今回、看護学生の段階で禁煙をすることが有効と考え、各種の行動科学理論を応用し、看護学生が禁煙に関心をもち、行動変容ができるような物語風禁煙教材（スライド31枚＋フィーリングアーツDVD1曲）を作成した。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅱ「健康行動論」（3年次配当、必修、1単位30時間）の授業等で使用していた。 ※第56回近畿学校保健学会(奈良)において発表（座長賞受賞） ※氏原曜子、吉岡隆之、北村義博 ※指導教員として教材の全般的な監修を行った。
8）フィーリングアーツ国際文化交流ビデオ教材【ベトナム・ホーチミン編】（教材）	平成21年8月～現在に至る	平成21年8月に、ベトナム・ホーチミンにおいて、児童養護施設の聴覚障がいをもつ子どもたちを対象に行ったフィーリングアーツ公演、整形・リハビリテーション病院の医療関係者や患者を対象に行ったワークショップ、現地のインターネットテレビに出演した様子等に関するビデオ教材（約5分）を作成した。国際的な文化芸術交流の意義とあり方を考察し、具体的に人類・社会に貢献する方策を模索する上で有用なビデオ教材である。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅰ「感性・身体表現」（2年次配当、選択、2単位30時間）の授業で使用していた。 また、フィーリングアーツに関するワークショップや講演等でも使用している。 平成26年4月以降、奈良学園大学保健医療学部看護学科の共通教育科目「文化芸術交流論」（1年次配当、選択、2単位30時間）の授業でも使用している。 ※北村義博、吉岡隆之、久永珠美 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能

9) 一般の学齢期の児童・生徒のための「身体発育曲線」及び「縦断型発育基準チャート」作成コンピュータソフト （Excel 2003, Windows XP 対応版）（身長と体重の現量値および年間増加量のパーセンタイル曲線，身長に対する体重パーセンタイル曲線の5つのグラフで構成）（教材）	平成21年12月 ～ 現在に至る	前掲の「ダウン症児身体発育曲線作成コンピュータソフト （Excel 2003, Windows XP 対応版）（教材）」を基に、健常児の部分のみを抽出し、「身長と体重の発育基準曲線」及び「学齢期縦断型身長・体重発育チャート」の上に、一般の学齢期の児童・生徒が自身のグラフを描くことができるコンピュータソフト（Excel 2003, Windows XP 対応版）を作成した。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅱ「ヘルスプロモーション論」（1年次配当、必修、1単位30時間）の授業で使用していた。 また、大阪成蹊短期大学幼児教育学科（旧児童教育学科）の「子どもの保健Ⅰ（旧小児保健Ⅰ）」の授業等でも使用している。 ※吉岡隆之、後和美朝 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能
10) フィーリングアーツ国際文化交流スライド【道程】（Power Point・スライド版）（教材）	平成21年12月 ～ 現在に至る	平成13年以降に行った「フィーリングアーツ国際文化交流プロジェクト」の一環で、海外（カナダ、タイ、米国、中国、インドネシア、ケニア、ベトナム、韓国、パキスタン、フィンランド、フィリピン、ミャンマーなど）の医療・福祉・教育施設や被災地などで行った公演の様子等に関するスライド教材を作成し、順次更新している（約170枚、平成27年4月現在）。国際的な文化芸術交流の意義とあり方を考察し、具体的に人類・社会に貢献する方策を模索する上で有用なスライド教材である。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅰ「感性・身体表現」（2年次配当、選択、2単位30時間）の授業等で使用していた。 また、フィーリングアーツに関するワークショップや講演等でも使用している。 平成26年4月以降、奈良学園大学保健医療学部看護学科の共通教育科目「文化芸術交流論」（1年次配当、選択、2単位30時間）の授業でも使用している。 ※吉岡隆之、北村義博 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能
11) フィーリングアーツ社会貢献・文化交流ビデオ【東日本大震災被災地編】（教材）	平成23年5月～ 現在に至る	2011年5月に、福島県いわき市被災地の避難所（湯本第一小学校）、福島県猪苗代町の避難所となっていた民宿の被災者やスタッフを対象に行ったフィーリングアーツ公演（地元の音楽家とのコラボレーションを含む）、被災地の様子等に関するビデオ教材（約5分）を作成した。大震災被災地での文化芸術交流の意義とあり方を考察し、具体的に、被災地での心のケアに関して社会に貢献する方策を模索する上で有用なビデオ教材である。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅰ「感性・身体表現」（2年次配当、選択、2単位30時間）の授業で使用していた。 また、フィーリングアーツに関するワークショップや講演等でも使用している。 2014年4月以降、奈良学園大学保健医療学部看護学科の共通教育科目「文化芸術交流論」（1年次配当、選択、2単位30時間）の授業でも使用している。 ※北村義博、吉岡隆之、久永珠美 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能

12）フィーリングアーツ国際文化交流ビデオ教材【パキスタン北部大震災（2005年）被災地編】	平成23年8月～現在に至る	平成23年8月に、パキスタン北部大震災（2005年）の被災地バラコットにおいて、小学校の児童や教員、地域の教育関係者を対象に行ったフィーリングアーツ公演、被災地の様子等に関するビデオ教材（約5分）を作成した。大震災被災地での国際的な文化芸術交流の意義とあり方を考察し、具体的に、海外の被災地での心のケアに関して社会に貢献する方策を模索する上で有用なビデオ教材である。 神戸市看護大学看護学部看護学科の看護学の基盤となる科目Ⅰ「感性・身体表現」（2年次配当、選択、2単位30時間）の授業で使用していた。 また、フィーリングアーツに関するワークショップや講演等でも使用している。 平成26年4月以降、奈良学園大学保健医療学部看護学科の共通教育科目「文化芸術交流論」（1年次配当、選択、2単位30時間）の授業でも使用している。 ※北村義博、吉岡隆之、久永珠美 ※共同作成につき本人担当部分抽出不可能
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （国際招聘ワークショップ・講演等） 1）"Feeling Arts" International Workshop: Art Program, 2005 Special Olympics World Winter Games, At White Ring Sports Arena.(Nagano, Japan)	平成17年2月～3月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行った。参加者は一日に延べ数百名であった。日本で初めて開催された、知的障がい者のスペシャルオリンピックスでの講演であった。フィーリングアーツの講演会場は競技会場のフロアであったため、競技の参加選手の多くが、フィーリングアーツの体験ワークショップに参加し、感動とともに音楽と光による表現を学んだ。 ※Yoshihiro Kitamura, Takayuki Yoshioka, Akio Toshima, Michiko Ogawa, Shoko Kumamoto and Yumiko Nohara ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能
2）"Feeling Arts" International Workshop, At Health Science Academy of Klaten (Sekolah Tinggi Ilmu Kesehatan Muhammadiyah Klaten) (Klaten, Indonesia)	平成18年9月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は看護学生と教員（約20名）であり、特に神戸の震災での活動と役割を説明した。参加者は非常に興味深く共感し、評価した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Conducted by Provincial Board of Central Java and Yogyakarta, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd.and Feeling Arts Academy

3) "Feeling Arts" International Workshop, At Central Java Nursing Academy (Akademi Keperawatan Pemerintah Provinsi Jawa Tengah). (Semarang, Indonesia)	平成18年9月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は看護学生と教員（約100名）であり、特に日本の医療施設における芸術の役割ついて講義した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Conducted by Provincial Board of Central Java and Yogyakarta, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd. and Feeling Arts Academy
4) "Feeling Arts" International Workshop, At Nursing Program, Faculty of Medicine, Diponegoro University (Program Studi Ilmu Keperawatan, Fakultas Kedocteran, Universitas Diponegoro) (Semarang, Indonesia)	平成19年3月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は看護学生と教員（約20名）であった。体験した参加者は感動し、新しい癒しの分野研究への刺激になったと評価した。特に神戸での震災地における役割を説明した結果、参加者の関心を引き深い共感と評価を得た。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Conducted by Provincial Board of Central Java, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd., Panasonic Co., Ltd. and Feeling Arts Academy
5) "Feeling Arts" International Workshop, At Central Java Nursing Academy (Akademi Keperawatan Pemerintah Provinsi Jawa Tengah) (Semarang, Indonesia)	平成19年3月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は看護学生と教員（約50名）であった。実際に体験後の感想を聞き、癒しにおけるメンタル的な要素の大切さを説明した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Conducted by Provincial Board of Central Java, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd., Panasonic Co., Ltd. and Feeling Arts Academy

6) "Feeling Arts" International Workshop, At Ungaran Nursing Academy (Akademi Keperawatan Ngudi Waluyo Ungaran) (Semarang, Indonesia)	平成19年3月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は教員（約10名）であった。特に、芸術が思想や宗教を超えて、感動や癒しをもたらすことなどについて議論した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Conducted by Provincial Board of Central Java, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd., Panasonic Co., Ltd. and Feeling Arts Academy
7) Mental Support by "Feeling Arts" International Workshop to Caregivers of the Central Java Earthquake on May 2006, At Bantul RSD Hospital, (RSD Panembahan Senopati Pemerintah Kabupaten Bantul) (Bantul, Indonesia)	平成19年4月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。対象は被災者支援の経験のある医療関係者など約80名であった。体験後、それぞれの感想をわかち合ったが、感動を覚えたり、多くのイメージが浮かんだ参加者、調光操作を希望する参加者など、反応は様々であった。その後、震災地でのフィーリングアーツの活動と役割を説明し、被災地での活用について議論した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※Conducted by Provincial Board of Central Java and Yogyakarta, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd., Panasonic Co., Ltd. and Feeling Arts Academy, Supported by PT Amerta Indah Otsuka
8) "Feeling Arts" International Workshop, At Health Science Academy of Yogyakarta (Jurusan Keperawatan Politeknik Kesehatan Yogyakarta) (Yogyakarta, Indonesia)	平成19年4月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は看護学生及び教員（約30名）であった。インドネシアで制作した新作で実演し、参加者から共感と評価を得た。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Conducted by Provincial Board of Yogyakarta, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd., Panasonic Co., Ltd. and Feeling Arts Academy, Supported by PT Amerta Indah Otsuka

9) "Feeling Arts" International Workshop, At Faculty of Nursing, Indonesia University (Fakultas Ilmu Keperawatan, Universitas Indonesia) (Jakarta, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は看護教員（約20名）であった。参加者は、芸術をケアに活用する新しい方法を高く評価し、インドネシアの看護分野においてフィーリングアーツを活用すべく、共同研究をしたいとの申し出があった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Faculty of Nursing, Indonesia University, PT Amerta Indah Otsuka and Feeling Arts Academy, Conducted by Dra. Setyowati, Ph.D.
10) "Feeling Arts" International Workshop, At Nursing Program, Faculty of Medicine, Diponegoro University (Program Studi Ilmu Keperawatan, Fakultas Kedocteran, Universitas Diponegoro) (Semarang, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は看護の大学院生と教員（約20名）であった。初めて体験するアートに、非常に興味を示す学生が多く、日本に来て学びたいという学生もいた。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by FNursing Program, Faculty of Medicine, Diponegoro University, PT Amerta Indah Otsuka and Feeling Arts Academy, Conducted by Dra. Setyowati, Ph.D.
11) "Feeling Arts" International Workshop for Medical Staffs at Hospital (PS Puri Mandiri Kedoya) (Jakarta, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は医療関係者（約50名）であった。フィーリングアーツのDVDを医療機関で活用することを切望する者も多かった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by PT Amerta Indah Otsuka and Feeling Arts Academy
12) "Feeling Arts" International Workshop for Medical Staffs at Hospital (RSAB Harapan Kita) (Jakarta, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は医療関係者、特に看護師（約50名）であった。ほとんどの参加者が興味を示し、特に芸術を医療現場で活用することに関する質問が多かった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by PT Amerta Indah Otsuka and Feeling Arts Academy

13) "Feeling Arts" International Workshop for Executive Nurses of National Nurses Association of Kenya at Head Office of National Nurses Association of Kenya. (Nairobi, Kenya)	平成20年8月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象はケニア看護協会の看護管理者（約20名）であった。特に、日本の医療施設でのフィーリングアーツの活動を高く評価し、フィーリングアーツをケニアの医療施設でも活用したいとの協力要請があった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by National Nurses Association of Kenya and Feeling Arts Academy, Supported by Life Science Promotion Association and International Council of Nurses
14) "Feeling Arts" International Workshop at the Center of Orthopedist & Rehabilitation, Ho Chi Minh (Trung Tam Chinh Hinh va Phuc Hoi Chuc Nang TP HCM) (Ho Chi Minh City, Vietnam)	平成21年8月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は医療関係者と患者（約80名）であった。フィーリングアーツの調光操作を体験する機会を設けたところ、枯葉剤の後遺症をもつ患者の一人が操作を体験し、是非、日本でフィーリングアーツの勉強をしたいとの申し出があった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Panasonic Co., Ltd. and Feeling Arts Academy, Supported by Otsuka OPV., Co. Ltd., Life Science Promotion Association
15) "Feeling Arts" International Workshop at the Center for Social Research, Chittagong (for Medical, Welfare and Educational Staffs) (Chittagong, Bangladesh)	平成22年8月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。主な対象は教育関係者、医療従事者、医療ボランティアなど（約70名）であった。特に、バングラデシュで貧困者の医療支援をしている外国人医師が感動し、非常に興味を示した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Center for Social Research of Chittagong, Image [Social Welfare Organization of Chittagong] and Feeling Arts Academy, Supported by Life Science Promotion Association

16) "Feeling Arts" International Workshop at Salpaus Further Education (Hanako Seminar, National Educational Project between Finland and Japan) (Lahti, Finland)	平成24年11月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。具体的には、フィンランド国内の職業学校関係者と日本との交流促進を目的としたフィンランドの国家教育プロジェクトの一つ「Hanakoセミナー（ラハティ市のサルパウス職業学校で開催）」の分科会の一つである福祉関係のワークショップ（約40名が参加）で講演を行い、講演後、質疑応答、意見交換等を行った。 ※Yoshihiro Kitamura, Takayuki Yoshioka, Chikashi Nishikawa, Tomoko Morimoto and Mieko Miyake ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy
17) "Feeling Arts" International Workshop at Omnia Vocational College (for Staffs and Students) (Espoo, Finland)	平成24年11月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。具体的には、フィンランドのエスポー市にあるオムニア職業学校主催のワークショップで、主に教職員と学生（約30名）を対象に講演を行い、質疑応答、意見交換等を行った。特に認知症ケアに非常に有効であるとの評価があった。 ※Yoshihiro Kitamura, Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy
18) "Feeling Arts" International Workshop "Art of Healing: Development of the Virtual Feeling Arts System and Application to a Hospice Care Program" at University of Arizona, College of Nursing (for Staffs and Healthcare Professionals) (Tucson, U.S.A.)	平成25年12月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。具体的には、アリゾナ大学看護学部において、アリゾナ大学看護学部准教授のマリー・コイザン博士（Mary Koithan, PhD, RN-C, CNS-BC）の司会で、看護学部および加齢センターの関係者（主に緩和ケア、ホスピスケア、ホリスティックケアに関する専門家、研究者、スタッフ）約40名を対象に、フィーリングアーツを応用して開発中の「感性・イメージ表現療法システム」による講演（交流）、質疑応答、意見聴取を行った。特に、緩和ケア、ホスピスケア、ホリスティックケアに関連して、医療施設の環境改善、認知行動療法、バイオフィードバックなどに応用できるとの評価を得た。 ※Takayuki Yoshioka, Yoshihiro Kitamura and Akio Toshima ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by University of Arizona, College of Nursing, Arizona Center on Aging, University of Arizona, College of Medicine and Feeling Arts Academy. Supported by JSPS KAKENHI Grant Number 24390493

19) "Feeling Arts" International Workshop "Invitation to a Feeling Arts Exhibition" at University of Arizona Health Network (for Staffs and Healthcare Professionals) (Tucson, U.S.A.)	平成25年12月	フィーリングアーツ研究会副代表、研究者、教育者として、癒しの芸術フィーリングアーツの活動、意義等について、実践的観点から実演を交えてワークショップ形式で講演を行い、また効果等について学術的観点から言及した。具体的には、アリゾナ大学ヘルスネットワーク会議室（University Campus MRB 201）において、アリゾナ大学医学部教授、アリゾナ大学医学部加齢センター・アソシエイトディレクター（Associate Director）のジェーン・モーラー博士（M. Jane Mohler, PhD, MPH, NP-c）の司会で、アリゾナ大学医学部加齢センターの関係者約15名を対象に、フィーリングアーツによる講演、質疑応答、意見聴取を行った。特に、参加者のアリゾナ大学医学部加齢センター・共同ディレクター（Co-Director）のマインディ・フェイン医師（Mindy J. Fain, MD）から認知症ケア等にも有効であると高い評価を得た。 ※Takayuki Yoshioka, Yoshihiro Kitamura and Akio Toshima ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Arizona Center on Aging, University of Arizona, College of Medicine and Feeling Arts Academy. Supported by JSPS KAKENHI Grant Number 24390493
（国際文化交流）		
1) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange, At Malipo Rongzhi Hotel (Malipo (Southeast of Wenshan Prefecture of Yunnan), China)	平成17年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、中国の雲南省麻栗坡において少数民族約10名を対象に公演・交流を行った。参加者は「フィーリングアーツは４千年前の壁画に似ている」と興味を示した。 ※Yoshihiro Kitamura, Takayuki Yoshioka, Hitomi Nakao and Kanako Hori ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee
2) Mental Support by "Feeling Arts" Exhibitions to Victims of the Central Java Earthquake on May 2006, At Gading Daton Village of Bantul, (Di Dusun Gading Daton, Desa Donotirto, Kecamatan Kretek, Bantul) (Bantul, Indonesia)	平成19年4月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、平成18年の中部ジャワ大震災の被災地バントゥール村の被災者40名ほどを対象に公演・交流を行った。参加者は光と音楽に感動し、長時間、フィーリングアーツを体験し、癒された様子であった。その後、特に神戸の震災地での活動と役割を説明し、参加者から共感を得た。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Conducted by Provincial Board of Central Java and Yogyakarta, Indonesian National Nursing Association. Supported by Indonesian National Nursing Association. Sponsored by Suntory Ltd., Kyowa Hakko Kogyo Co., Ltd., Panasonic Co., Ltd., Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by PT Amerta Indah Otsuka

3) Mental Support by "Feeling Arts" Exhibitions at Welfare Facility for Old People (Panti Sosial Tresna Werda, Yayasan Karya Bhakti Ria Pembangun) (Jakarta, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。インドネシアのジャカルタの高齢者施設の入所者（約50名）を対象に公演・交流を行った。参加者はフィーリングアーツの公演中に見えた様々なイメージを発表し感動を覚えていた。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by PT Amerta Indah Otsuka, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee
4) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Welfare Facility for Children (Panti Asuhan SOS DESA TARUNA) (Jakarta, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、インドネシアのジャカルタの児童養護施設の子どもたち（約40名）を対象に公演・交流を行った。子どもたちは非常に喜び、フィーリングアーツの体験後、クレヨンを織物のように使いすばらしい絵を描いて見せた。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by PT Amerta Indah Otsuka, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee
5) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Primary School (SD Notre Dame Kembangan) (Jakarta, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、インドネシアのジャカルタの小学校の子どもたち（約50名）を対象に公演・交流を行った。フィーリングアーツの体験後、子どもたちは感性豊かなすばらしい絵を描いた。校長は、子どもたちが授業でグラデーションの技法を習ってないにも関わらず、綺麗なグラデーションを描いていたので驚き感動した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by PT Amerta Indah Otsuka, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee
6) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Primary School (SD Islam Cikal Harapan BSD) (Jakarta, Indonesia)	平成19年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、インドネシアのジャカルタの小学校の子どもたち（約50名）を対象に公演・交流を行った。フィーリングアーツの体験後、子どもたちは、地球や宇宙を感じるような色合いで絵を描き、とてもすばらしく印象的であった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by PT Amerta Indah Otsuka, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee

7) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Medical Clinic in Slum Areas (Child Doctor Clinic in the Kibera Slum Areas) (Nairobi, Kenya)	平成20年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、スラム街の子どものための医療施設で患者とスタッフ（約20名）を対象に公演・交流を行ったが、参加者の中にはエイズを発症した子どもたちも多く含まれていた。子どもたち活気づき周りの看護師や医師にフィーリングアーツの感想を積極的に語っていた。このような施設での公演・交流の必要性を強く感した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by International Medical Collaboration Unit, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Life Science Promotion Association
8) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Welfare Facility for Children (Matumaini Children's Home (Save the Children Centre) (Nairobi, Kenya)	平成20年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、ケニアのナイロビの児童養護施設の子どもたち（約20名）を対象に公演・交流を行った。HIVに感染している子どもたちも多く含まれていた。フィーリングアーツ体験後、子どもたちが描いた絵は、美術教育の機会に恵まれていない為、線描写が多くシンプルで飾り気のないたいへん美しいものであった。 ※ Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Save the Children Centre, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Life Science Promotion Association
9) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Welfare Facility for Children (Saidia Furaha) (Kitengela, Kenya)	平成20年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、ケニアのナイロビ郊外の児童養護施設と保育園の子どもたち（約20名）を対象に、感性開発と自立支援の心のサポートとして公演・交流を行った。フィーリングアーツの公演後に子どもたちが描いた作品は非常にユニークなものが多く、日本のデザイナーに認められ、日本の地域ミニコミ誌の表紙に採用されるほどであった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Saidia Furaha Organization, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Life Science Promotion Association

10) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Welfare Facility for Children (Truong Chuyen Biet Khiem Thinh Hy Vong Binh Thanh) (Ho Chi Minh City, Vietnam)	平成21年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、ベトナムのホーチミンの児童養護施設において聴覚障がいの子どもたち（約300名）を対象に、数グループに分け順次公演・交流を行った。音楽が聞こえない子どもたちは、フィーリングアーツの光の演奏（変化）に感動し、積極的に手を挙げ感想を述べ、その姿に担当の先生たちも驚き、深く感動されていた。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Panasonic Co., Ltd., Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Otsuka OPV., Co. Ltd., Life Science Promotion Association
11) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Primary School (Midcity Model School) (Chittagong, Bangladesh)	平成22年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、バングラディッシュのチッタゴンの小学校の子どもたち（約30名）を対象に公演・交流を行った。公演中に停電したが、子どもたちはフィーリングアーツを見たい一心で電気がつくまでおとなしく待っていた。ほとんど全ての子どもが調光操作を希望するほど、フィーリングアーツに強い興味を示した。 ※ Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Midcity Model School, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Life Science Promotion Association
12) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Welfare Facility for Children (Dong Myung Child Welfare Center) (Seoul, Korea)	平成22年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、韓国のソウルの児童養護施設において小学校4年生～6年生の子どもたち（約20名）を対象に公演・交流を行った。子どもたちはフィーリングアーツに非常に感動し、その感動を絵に描いた。児童養護施設の先生も非常に興味を示した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Dong Myung Child Welfare Center, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Life Science Promotion Association

13) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Primary School (Balakot Public School) in the stricken area of the 2005 Kashmir (Northern Pakistan) Earthquake (Balakot, Pakistan)	平成23年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、平成17年に起きたパキスタン北部大震災の被災地バラコットの小学校で、低学年の子どもたち（約30名）を対象に公演・交流を行った。フィーリングアーツの体験後、子どもたちは感じたことを絵に描いたが、クレヨンをもつのが初めての子が多く、線描写はできたが塗ることには慣れていない様子で、独特の絵が多かった。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Balakot Public School, Save Pakistan Bank and Life Science Promotion Association
14) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange and Workshop at School of Special Education for Slow Learners and Mentally Challenged Individuals (The School of Institute of Behavioral Psychology) (Karachi, Pakistan)	平成23年8月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、パキスタンのカラチの障がい者施設において中高生（約50名）を対象に公演・交流を行った。生徒たちは光に非常に敏感で、集中してフィーリングアーツを体験していた。体験後に描かれた生徒たちの絵は、光や天と地を再現しようとする意志にあふれていた。先生たちはフィーリングアーツの手法を学びたいという気持ちが強く、公演後、熱心に質問をされた。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Otsuka Pakistan Limited, Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee, Supported by Institute of Behavioral Psychology, Otsuka Pharmaceutical Co., Ltd. and Life Science Promotion Association
15) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Primary & Secondary School (Kivimaan peruskoulussa) (Lahti, Finland)	平成24年11月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術 フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、フィンランドのラハティ市のキビマー基礎学校において、3年生の子どもたち（2クラス約45名）を対象に、フィーリングアーツの公演（児童によるイメージ表現（描画）、児童による合唱を含む）を通して交流を行った。公演の後、学校見学（質疑応答を含む）を行い、最後に、校長と共に昼食（給食）をとりながら、質疑応答・意見交換等を行った。 ※Yoshihiro Kitamura, Takayuki Yoshioka, Chikashi Nishikawa, Akira Nakagawa, Tomoko Morimoto and Mieko Miyake ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee

16) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange "Invitation to a Feeling Arts Exhibition" at Welfare Facility for Old People (Villa Hermosa, Tucson, Arizona) (Tucson, U.S.A.)	平成25年12月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、ツーソン（Tucson）市内の高齢者施設のシアタールームにおいて、施設利用者および施設スタッフ約20名を対象に、フィーリングアーツの公演を通して交流を行った。公演の後には施設見学も行い、施設の特徴的な取り組みや先進的な取り組みなどについて質疑応答・意見交換を行った ※Takayuki Yoshioka, Yoshihiro Kitamura and Akio Toshima ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Arizona Center on Aging, University of Arizona, College of Medicine and Feeling Arts Academy
17) Mental Support by "Feeling Arts" Exhibitions to Victims of the Super Typhoon "Haiyan" on November 2013, at Maternity House, Province of Leyte (Palo Maternity House)(Palo, Province of Leyte, Philippines)	平成26年2月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、平成25年11月8日に超大型台風30号（ハイエン、フィリピン名：ヨランダ）に見舞われ、甚大な人的物的被害のあったフィリピン・レイテ島の被災地を訪問・視察し、パロ・マタニティハウス（Palo Maternity House）において、施設利用者および施設スタッフ8名（全員被災者）を対象に、バッテリー式のポータブルDVDプレイヤーとヘッドマウンテッドディスプレイを用いて、DVD版フィーリングアーツを視聴していただき、質疑応答、意見聴取（感想シート記載を含む）、交流を行った。また、施設見学も行い、施設の理念や取り組みなどについて質疑応答・意見交換を行った。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee
18) Mental Support by "Feeling Arts" Exhibitions to Victims of the Super Typhoon "Haiyan" on November 2013, at University of the Philippines Visayas, Tacloban College (Tacloban, Province of Leyte, Philippines)	平成26年2月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、平成25年11月8日に超大型台風30号（ハイエン、フィリピン名：ヨランダ）に見舞われ、甚大な人的物的被害のあったフィリピン・レイテ島の被災地を訪問・視察し、フィリピン大学ビサヤ・タクロバン校の敷地内に一時的に間借りしているフィリピン大学マニラ校健康科学部の簡易シェルターの教員室において、健康科学部の教員および学生6名（全員被災者）を対象に、バッテリー式のポータブルDVDプレイヤーとヘッドマウンテッドディスプレイを用いて、DVD版フィーリングアーツを視聴していただき、質疑応答、意見聴取（感想シート記載を含む）、交流を行った。また、施設等の見学も行い、学部の理念、特徴的な取り組みなどについて質疑応答・意見交換を行った。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee

19) Mental Support by "Feeling Arts" Exhibitions to Victims of the Super Typhoon "Haiyan" on November 2013, at the Guest House in Tacloban City (Welcome Home Pensione)(Tacloban, Province of Leyte, Philippines)	平成26年2月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、平成25年11月8日に超大型台風30号（ハイエン、フィリピン名：ヨランダ）に見舞われ、甚大な人的物的被害のあったフィリピン・レイテ島の被災地を訪問・視察し、ウエルカム・ホーム・ペンション（Welcome Home Pensione）において、スタッフ6名（全員被災者）を対象に、フィーリングアーツの公演（交流）、質疑応答、意見聴取（感想シート記載を含む）を行った。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同講演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee
20) "Feeling Arts" International Art & Cultural Exchange at Welfare Facility for Children (Dream Train Child Development Center) (Yangon, Myanmar)	平成27年2月	フィーリングアーツボランティア委員会副代表、教育者、研究者として、癒しと感性の芸術フィーリングアーツの公演を通して国際文化芸術交流をコーディネートした。具体的には、ミャンマーの子どもたちを人身売買や売春、虐待等から守り、子どもたちの未来を育むために2010年に日本のNPO法人「ジャパンハート」により開設された養育施設「Dream Train」において、2日間にわたり、そこで生活する小学校1年生～4年生の子どもたち延べ59名及び施設責任者・養育者等を対象に、絵画と光彩と音楽を融合させた体感型の統合芸術「フィーリングアーツ」の公演・交流（コントローラーによる調光操作、クレパスによるイメージの描画を含む）、質疑応答、意見聴取（感想シート記載を含む）を行った。また、施設見学も行い、施設の理念や取り組みなどについて質疑応答・意見交換を行った。子どもたちは初めて体験するフィーリングアーツに非常に感動し、その感動を絵に描いた。その絵には日頃気づきにくい子どもたち個性も反映しており、養育施設の先生も非常に興味を示した。 ※Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka ※共同公演につき本人担当部分抽出不可能 ※Sponsored by Feeling Arts Academy and Feeling Arts Volunteer Committee
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.ダウン症児すこやかノート―成長発達の手引きと記録―	共著	平成18年4月	メディカ出版	ダウン症児を授かった親へのメッセージや心構えなどからはじまり、ダウン症に関しての知識、今後起こり得る病気や療育機関についてなど、幅広い視点から説明されている。療育の実践の章では、周産期から乳幼児期、学齢期、青年期とその子の成長を主治医とともに記録していける構成になっている。成長の記録の他に合併症の治療歴や検査結果なども記入できる。付録として、ダウン症児と健常児双方の「身長と体重の発育基準曲線」及び「学齢期縦断型身長・体重発育チャート」の上に、自身のグラフが描けるCD－ROMコンピュータソフト（Excel 2003, Windows XP 対応版）が付属している。 編集：藤田弘子、大橋博文 共著者：藤田弘子、大橋博文、幸田啓子、三浦久美、岩本昭雄、吉岡隆之 A5版　全122頁 本人担当部分：「ダウン症児身体発育曲線について」吉岡隆之、藤田弘子監修、ダウン症児身体発育曲線作成CD-ROM（コンピュータソフト）に収録（A4版1-3頁）を単著。 ダウン症の乳児期、乳幼児期、0～18歳の3つのタイプの「成長曲線（男・女）」及び「学齢期（小学1年～高校3年）発育チャート（男・女）」について、それぞれの概要、健常児との相違、評価方法、評価の際の注意点を詳細にわかりやすく解説した。
2.眼がとらえた情報がこころに与える影響、ルネッサンス京都21「五感シリーズ Ⅳ」	共著	平成21年1月	オフィスエム	「みる」は一番大きなこころの窓と考えられ、内容は先ず虫の目に見る世界から始まる。ついで音と共に移りゆく色彩を見ながらこころをゆすられるフィーリングアーツに、さらに科学の目で私たちの視覚はどのように進化してきたのかをたどる。太古に恐竜に追われて暗闇のなかにかろうじて生き残った哺乳類の中から最後に人類が進化してきたことが、色を視る仕掛けの中から読み取られる。ここからもう一度こころの問題に帰り、先ず心眼ともいうべき武道家の目の鋭さを解き、締めくくりは和菓子である。それは色と形と香り、味など五感を総動員して味わうべきものである。これらの世界を目という狭い窓口にとらわれず、読者の心にまでとどくようにそれぞれの著者の長年の研鑽の成果がこの本で披露されている。 監修:菅原努、編集：大東肇、中井吉英 共著者：福井宏至（teamむしのめ他3名）、北村義博、吉岡隆之、七田芳則、前田比良聖、青木直巳 四六版　全182頁 本人担当部分：第2章「癒しと感性の芸術フィーリングアーツ」（45-81頁）を共著。 絵画と光彩と音楽を融合させた体感型の統合芸術「フィーリングアーツ」について、国内外の教育・医療・福祉施設や被災地での活動内容、癒しの効果に関する研究成果（快いフィーリングの出現、自由なイメージ表現、ナラティヴ・セラピーとしての効果）、子ども向けのプログラムに関する研究成果（特別支援学校や子育て支援施設における研究、イドネシアと日本の比較研究）、ボランティアの体験や著名人からのコメントを紹介した。 （共同執筆につき本人担当部分抽出困難） 共著者：北村義博、吉岡隆之

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文） 1.ダウン症候群の自然成長（その2）：身長・体重スパートの「ずれ」を認識し得る発育チャート （査読付）	共著	平成17年1月	小児保健研究，64(1)，73-81	学齢期ダウン症候群（ダウン症）の発育について、特に身長と体重の発育スパート（発育量の急激な増加）の「ずれ」を認識し、時系列を追って発育の経過観察や評価を行うことが可能な「ダウン症学齢期発育チャート」を構築した。特にダウン症は、男女とも身長と体重のスパートの「ずれ」が標準に比べて大きく、身長スパートの後、遅れて体重スパートが出現する傾向がみられた。この傾向は女子で顕著であった。今回の「発育チャート」は、男女別にそれぞれ身長の現量値、体重の現量値、身長の年間増加量、体重の年間増加量および身長－体重パーセンタイルの5つのグラフで構成した。この5つのグラフを同時に観察することにより、ダウン症の特性、個人の身長・体重の長期的・短期的な発育変化、身長・体重スパートの「ずれ」および身長に対する体重の推移など、発育状況を多角的に、しかも視覚的に把握することができ、学齢期におけるダウン症児童・生徒個々人の身体発育および肥満・痩せ傾向を的確に評価し得ると考えられた。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：吉岡隆之、藤田弘子、後和美朝、福嶋美津子
2.神戸市看護大学におけるネットワークを利用した臨地教育支援の試み	共著	平成18年11月	平成18年度情報教育研究集会講演論文集，17-19	神戸市看護大学における臨地教育や臨床側からの要望が強いリカレント教育を支援するため、インターネットとVPN技術を用いた通信環境を構築して、神戸市立中央市民病院－神戸市看護大学間でオンラインカンファレンスと臨床現場の看護師のため講義映像のストリーミング配信等の実証実験を行った。コンピュータネットワーク技術を実習カンファレンスに応用することにより、遠隔地の実習場においても教員がネットワークを通じてリアルタイムにカンファレンスに参加できるシステムを構築することの可能性と有効性についての評価を行った。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：吉岡隆之、長野勝利、江川幸二、吉永喜久恵、平河勝美、池川清子
3.保健と医療の語りとアート：フィーリングアーツとナラティヴ （学会依頼論文）	共著	平成19年6月	日本保健医療行動科学会年報，22，77-91	「フィーリングアーツ（FA）」は、音楽と光彩と抽象絵画による統合芸術であり、医療、福祉、教育施設などで公演活動が行われている。一方、「ナラティヴ・セラピー（NS）」は、問題を起こしている古い筋書きを別の新しい筋書きに書き換えようとする療法である。この「NS」としての「FA」について、2つの大規模な調査結果やボランティアのナラティヴ（語り）を交えて、「感動」「イメージ」「響き合い」「調和」など、芸術のもつ可能性を含めて考察した。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：北村義博、吉岡隆之

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4.無床助産所実習での学生指導における臨地指導助産師の経験（査読付）	共著	平成23年3月	神戸市看護大学紀要，15，83-90	助産学専攻科で実施する無床助産所実習の臨地指導助産師7名を対象に、実習指導の経験について半構成的面接調査を行い、その内容を意味の類似性に基づいてカテゴリー化した。その結果、「同じ志をもつ後輩を大切にする」「指導をチャンスと捉え大学と共に育てる」「活動･業務範囲内で可能かつ最良の実習内容を計画する」「地域での支援をよりよく経験できるように働きかける」「地域に根付いた助産師特有の助産観を伝える」の5つのカテゴリーに分類された。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：安積陽子、高田昌代、子安恵子、谷川裕子、早瀬麻子、藤井ひろみ、嶋澤恭子、渡邊定博、吉岡隆之
5.Basic study on the clinical application of “Feeling Arts” as a healing method with a biofeedback approach	共著	平成23年10月	Proceedings of the 6th International Conference of Health Behavioral Science: Sustainable Health Promotion, The Executive Committee of the 6th International Conference of Health Behavioral Science 2010 (Kuala Lumpur), 156-158	「フィーリングアーツ（FA）」は音楽と光彩と抽象絵画による統合芸術で、人々の「こころの癒し」と「感性の開発」に効果がある。一方、「バイオフィードバック（BF）」は、自律神経系や内分泌機能などを意識的に制御することを可能にする工学的な手法である。本研究では、「FA」と「BF」を組み合わせて臨床に応用するための基礎的・実験的研究を行い、「FA」によるリラックス効果は「BF」を行うことにより助長されることが示唆された。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：Takayuki Yoshioka、 Natsuki Ikeda、Kimiko Hiramatsu and Yoshihiro Kitamura
6.神戸市看護大学“まちの保健室”の活動評価―利用者のアンケート調査より（査読付）	共著	平成24年3月	神戸市看護大学紀要，16，11-20	日本看護協会が推進する「地域における新たな看護提供システム」としての「まちの保健室」のモデル事業は、少子高齢社会における新たな健康課題への取り組みである。神戸市看護大学では2005年12月に「まちの保健室」を開設し、健康相談に加え、健康に関する各種の講義、演習、健康度測定を組み合わせた活動を特徴としている。本研究では、この神戸市看護大学の「まちの保健室」の活動に関する利用者の満足度やニーズへの適合性について、利用者への質問紙調査を行い、概ね良好な結果を得た。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：池田清子、安藤悦子、岩本里織、沼本教子、宇多みどり、丹野恵一、吉岡隆之
7.癒しの芸術「フィーリングアーツ」のリラックス効果に関する生理学的および心理学的検討（査読付）	共著	平成24年6月	日本保健医療行動科学会年報，27，226-239	フィーリングアーツは音楽と光彩と抽象絵画による統合芸術である。このフィーリングアーツを体験することによる客観的なリラックス効果や不安軽減効果などについて、生理学的・心理学的観点から検討した。その結果、生理学的観点からリラックス効果が認められ、どのような曲や色調の変化の時にリラックス効果が高まるかは、対象者によって大きく異なっていた。また、心理学的観点から状態不安の軽減効果が認められ、普段から不安の高い人ほど効果が大きかった。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：吉岡隆之、北村義博、日野原重明、近森栄子、川口貞親

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（その他） 「国際学会発表」 1. Longitudinal growth chart for suitable assessment of overweight schoolchildren with Down syndrome: Development of useful computer software	共同	平成18年8月	9th World Down Syndrome Congress (Vancouver, Canada), Down Syndrome Quarterly, Vol. 8, Issue 1, p92	学齢期におけるダウン症児の発育を的確にしかも簡便に評価するために，身長と体重の発育テンポの違いや体型を考慮し得る縦断型の発育評価ソフトを開発し，そのソフトを用いてダウン症をもつ高校生54名（男子36名、女子18名）を対象に肥満評価を行った。体型（肥満度）曲線の基準をみると，ダウン症基準で50～90パーセンタイルとされる範囲（以下，イエローゾーン）は標準でいう90パーセンタイル以上の範囲に含まれる。今回のダウン症をもつ高校生54人のうち，このイエローゾーンと判定されたのは23人であったが，このうちほとんどの生徒が実際の皮下脂肪厚では通常範囲であった。これらの結果から，ダウン症をもつ生徒の身体発育や肥満を評価するときには，ダウン症独自の基準を用いる必要があることが確認できた。また，今回開発したダウン症発育基準チャートのコンピュータソフトを用いることで正しい評価が簡便にでき，個人差を考慮した的確な保健指導につながると考えらえた。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：Takayuki Yoshioka, Hiroko Fujita, Yoshiaki Gowa, Mitsuko Fukushima, Kiyoko Fukuoka and Akio Toshima
2.Basic study on the clinical application of “Feeling Arts” as a healing method with a biofeedback approach.	共同	平成22年9月	6th International Conference of Health Behavioral Science (Kuala Lumpur, Malaysia), Conference Programme and Abstracts, p52	「フィーリングアーツ（FA）」は音楽と光彩と抽象絵画による統合芸術で，人々の「こころの癒し」と「感性の開発」に効果がある。一方，「バイオフィードバック（BF）」は，自律神経系や内分泌機能などを意識的に制御することを可能にする工学的な手法である。本研究では，「FA」と「BF」を組み合わせて臨床に応用するための基礎的・実験的研究を行い，「FA」によるリラックス効果は「BF」を行うことにより助長されることが示唆された。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：Takayuki Yoshioka, Natsuki Ikeda, Kimiko Hiramatsu and Yoshihiro Kitamura
3. “Feeling Arts” for Caring and Peace (Trial Experience Corner) (Invited Lecture)	共同	平成24年3月	International Hiroshima Conference on Caring and Peace (Hiroshima, Japan), Programe & Abstracts, p48	ケアリングと平和をテーマに、音楽と光彩と抽象絵画による統合芸術であるフィーリングアーツの体験ワークショップを行った。まずフィーリングアーツを実際に体験する機会をもち、その後、フィーリングアーツの国内外での活動や効果等について、実践的な観点から概説した。また、フィーリングアーツによる体験交流をする中で、昨今の世界経済の破綻、自然災害、宗教や思想の違いによる対立などにより、多く命が失われ、人々の心身が傷ついている世界の現状に思いをはせ、共に平和と傷ついた人々の心身の調和のために祈りを捧げた。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：Yoshihiro Kitamura and Takayuki Yoshioka

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. Art of Healing: Development of the Multimedia Therapy System for Expression of Sensitivity and Image (the Virtual Feeling Arts System) and Application to a Palliative Care Program (Trial Session) (Invited Lecture)	共同	平成26年9月	7th International Conference of Health Behavioral Science (London,United Kingdom), , Conference Programe and Abstracts, pp12-13	緩和ケアにおいて、初期段階を含むあらゆる段階の精神的、社会的及びスピリチュアルな苦痛の緩和を含めたホリスティックなケアについては研究途上の段階で、科学的に根拠があり非侵襲的で安全で簡便な方法はほとんど見あたらない。本研究では、がん患者・家族の苦痛の軽減、療養生活の質の向上に寄与するために、先行研究で得られた知見と緩和ケアの臨床からの強い要望に基づき、医療や福祉の臨床で有用性が認められている芸術交流活動であるフィーリングアーツを、ホリスティックナーシングの観点から、看護技術の手法として緩和ケアに広く応用するための「感性・イメージ表現療法」としてのマルチメメディアシステムを開発した。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：Takayuki Yoshioka, Shizue Suzuki, Koji Egawa, Atsuko Uchinuno, Kiyoko Ikegawa,,Yoshihiro Kitamura and Akio Toshima Supported by JSPS KAKENHI Grant Number 24390493
「国内学会発表」 1.ダウン症発育評価ソフトの開発とその利用―ダウン症をもつ高校生の肥満評価―	共同	平成19年6月	第54回近畿学校保健学会(神戸)，第54回近畿学校保健学会講演集，p21	学齢期におけるダウン症児の発育を的確にしかも簡便に評価するために，身長と体重の発育テンポの違いや体型を考慮し得る縦断型の発育評価ソフトを開発し，そのソフトを用いてダウン症をもつ高校生69名（男子44人，女子24人）を対象に肥満評価を行った。その結果，標準の基準では肥満傾向と判定されるがダウン症の基準では肥満と判定されなかったのは25人で，このうちほとんどの生徒が皮下脂肪厚では通常範囲であり，ダウン症発育評価ソフトの有用性が確認された。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：吉岡隆之，後和美朝，戸島章雄，田中康子，松本季代，菊池彩香
2.癒しの芸術フィーリングアーツ ―子どもの感性をひらく― （体験学習ワークショップ）（招聘講演）	共同	平成20年6月	第55回近畿学校保健学会(大阪)，第55回近畿学校保健学会講演集，pp41-42	絵画と光彩と音楽を融合させた統合芸術「フィーリングアーツ」を実際に体感し，その後，特に子ども向けのプログラム「キッズ・フィーリングアーツ（鑑賞，コントローラーによる調光操作の体験，鑑賞後の描画）」について，特別支援学校，子育て支援施設，児童養護施設あるいは医療施設等における活動の様子や研究成果，インドネシアと日本の比較研究などを紹介し，体験した上での感想や意見を共有し，また「フィーリングアーツ」の可能性について共に考えた。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：北村義博，吉岡隆之
3.教師を対象とした物語風禁煙教材の試作	共同	平成20年6月	第23回日本保健医療行動科学会学術大会(山梨)，第23回日本保健医療行動科学会学術大会プログラム・抄録集，p40	児童生徒の模範となるためにも，また，児童生徒を受動喫煙の害から守るためにも，教師の禁煙は重要である。そこで今回，各種の行動科学理論を応用し，禁煙への行動変容を促すような教師のための物語風教材を試作し，その有効性について基礎的な資料を得る目的で，大学生に教材を視聴してもらった上でアンケート調査を行った。その結果，大部分の人にとって禁煙を意識し得る教材であると考えられた。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：和田みなみ，吉岡隆之，北村義博

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4.看護学生への禁煙支援―行動科学に基づく物語風教材の試作―（座長賞受賞）	共同	平成21年6月	第56回近畿学校保健学会(奈良)，第56回近畿学校保健学会講演集，p17	女性看護職の喫煙率は一般女性の約2倍といわれている。今回、看護学生の段階で禁煙をすることが有効と考え、看護学生が禁煙に関心をもち、行動変容ができるような物語風禁煙教材の作成し，実際に看護学生に教材を視聴してもらった上で，その有効性についてアンケート調査を行った。その結果から，看護学生にとって非常に効果的であると考えられた。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：氏原曜子，吉岡隆之，北村義博
5.フィーリングアーツ ―芸術文化交流活動から感性・イメージ表現療法へ―（体験学習ワークショップ）（招聘講演）	共同	平成24年6月	第27回日本保健医療行動科学会学術大会（岐阜），プログラム・抄録集，p35	芸術文化交流活動から感性・イメージ表現療法へをテーマに、音楽と光彩と抽象絵画による統合芸術であるフィーリングアーツの体験ワークショップを行った。まずフィーリングアーツを実際に体験する機会をもち、その後、フィーリングアーツの国内外での活動や効果等について、実践的な観点から概説した。その後、現在開発中のバーチャル・フィーリングアーツを応用した「感性・イメージ表現療法」について概説し、その臨床への応用について議論を行った。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共同発表者：北村義博，吉岡隆之
「研究報告書」 1.バイオならびに情報科学関連分野の研究動向調査	共著	平成19年10月	平成19年度神戸研究学園都市大学交流推進協議会共同研究概要（平成17年度研究班），Vol.6，pp6-7	幅広い分野の研究者が参加する「生命・情報科学懇話会」を立ち上げ，バイオならびに情報科学関連分野の最新の研究成果について，情報交換・意見交換を定例的に行う機会を設け，当該分野の研究動向を探ると共に，一般の人々を対象とした情報発信のモデルとなる開かれた研究会の運営方法について検討を行った。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：芝崎誠司，井内善臣，秋吉一郎，冨永英夫，長野勝利，吉岡隆之，西山正秋，山本伸一，藤本健司
2.神戸学園都市地域における異世代交流による知の伝達の試み	共著	平成21年10月	平成20･21年度神戸研究学園都市大学交流推進協議会共同研究概要（平成18・19年度研究班），Vol. 7･8，pp12-13	少子高齢・核家族社会の中で，世代を超えた庶民生活文化の伝承（知の伝達）が十分に行われていない現状において，地域の特性を活かした有効な世代間コミュニケーションおよびコミュニケーションツールについて，神戸学園都市地域を対象として，異世代交流座談会および地域住民へのアンケート調査をもとに検討した。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：秋吉一郎，井内善臣，長野勝利，吉岡隆之，藤本健司
3.神戸学園都市地域における異世代間の文化継承方法の研究	共著	平成23年6月	神戸研究学園都市大学交流推進協議会共同研究データベース（平成21年度研究） (URL) http://www.unity-kobe.jp/?page=exchange/resarch/past/2009/02	少子高齢・核家族社会の中で，世代を超えた文化の継承が十分に行われず，異世代文化が地域内に共存している現在の地域社会において，異世代交流による文化の継承はどのような仕掛けによって活性化されるかについて，神戸学園都市地域を対象として，実際に地域文化に関する活動を行っている団体からの意見聴取および地域住民へのアンケート調査をもとに検討した。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能） 共著者：多井　剛，秋吉一郎，吉岡隆之，藤本健司

教　育　研　究　業　績　書

平成27年5月1日

氏名　吉 村 雅 世

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	高齢者、老年看護学、QOL、物語、人間行動科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 ―講義― ・奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」（援助論）（2年次生80名、通年2単位60時間）で講義内容と進行計画及び評価方法等を示すことで、学生に授業の概要を周知すると共に、予習・復習できる内容を示すことで学習効果を高めることを目的とした。 ①シラバスの活用 ②プロジェクターを用いたスライドの活用 ③教科書以外に講義用資料を作成し活用 ④「出席表」によるミニレポートの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	①授業概要、評価方法、教科書・参考図書を示した。 ②教科書の中で重要事項はパワーポイントを用いてスライドにして示した。スライドは資料として印刷し配付した。 ③最新の統計や教科書にない情報、最新の情報などはその都度、別資料を作成し配布して活用した。 学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。 ④学生の理解した内容・程度、授業の感想を知るために活用した。同時に、学生自身が記述することで自己の学びを確認・強化することを支援する方法として活用した。 毎回、出席表として、学び・感想、時にはテーマを示し、学生のコメントを書かせた。学生は熱心に記入していた。学生の記述から学習の程度や状況を確認できた。また、次の時間に一部を紹介したり、補足したり、質問に答えたりすることでフィードバックを行うことができた。その1つに、初講の時に高齢者のイメージを色にたとえて記述してもらい、次の講義で学生が何色を示しているか傾向を統計でフィードバックする方法を活用している。学生は次の出席表の感想で、自分たちが高齢者をどの色でイメージしているか、他の学生はどのようにイメージしているかを知ることができたと感想をのべている。この方法は、後述の「老年看護概論」「介護概論」と、援助の対象が高齢者となる科目を学ぶ学生達に活用している。学生の色イメージの傾向は、灰色、茶　深緑、オレンジをイメージする傾向にあった。この結果を学生に示すことで、自分たちが高齢者をどのように色イメージしているかに気づき、今後の授業を通して、これからの高齢者を心身社会的に理解することに役立つと考える。出席票のコメントから高齢者を肯定的に見ようとする姿勢が感じられた。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ―講義― ⑥講義用教科書の作成と授業への活用 一部執筆（再掲）		⑥授業する内容を１冊のまとめた教科書を作成し活用した。 「老年看護学」の一部を執筆し講義用の教科書を作成した。著書の項目を参照。B5版で、国家試験の老年の領域に関する問題に対応している。疾患を抱える高齢患者看護の知識・事前学習として活用できるものである。特に、事例の演習や実習で活用できる図書であると確信している。
⑦グループワークと発表を活用		⑦自己の学びを表出する場、他者の意見を聞く場として活用した。 他者の考えや力を借りて自己の考えを発展させることを目的とした。毎回10分程度3～4人の学生同士で話し合い、発表する時間を作った。特に、学生が対話し意見を交換することで、人の話が聞ける、自己の思考を外在化する、他者の意見を取り入れる、自己の学びを発展させる、学びを共有する、といった学習効果をねらった。実施後のレポート・感想より学生は他の学生の意見が聞けた、自分と同じ意見の人がいることで自己を肯定できた、自分とは違う意見が参考になった、看護について考えを発展できたといった感想があり、短時間のグループワークは効果があると評価できた。
⑧課題レポートの活用		⑧学生が、自ら課題を持って高齢者理解に取り組むことの支援として活用した。また、45時間の学習時間を効果的に使う方法として活用した。 約3000字程度で、老年看護で特に学びを期待したい点をテーマにした。（例：貴方の高齢者イメージ、老年看護の特徴等）レポートから学生は個々に高齢者の特徴を掴んでいると判断でき、高齢者について記述する機会を作ることは教育的効果があると評価できた。
⑬ナラティブアプローチの視点を取り入れたグループワーク		⑬前述の「⑦グループワーク」をより効果的に実施できる方法として、学生の姿勢を明確にするために「ナラティヴ」論を活用した。 テーマについて語り合い、語られたものを発表する機会を「ナラティヴ」の考え方で指導した。全体で10～15分のナラティヴ・アプローチといえるもので、「学生は発表しなければ」という気持ちから「自分の意見を語る」という気分の転換があると考えている。感想では、「グループ内での語り合いは、他の学生の意見や思いを知ることができ、考えを広げることができた」「全体での発表も様々な考えがあることがわかった」と好評であった。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ―講義― ⑭福祉パーク　体験見学の活用		⑭奈良県立福祉パークが保持する、介護具、自助具、住宅設備を活用し、学校で保持するものよりさらに多くの用具を用いて高齢者体験や生活体験を行い、高齢者理解を深めることを目的とした。奈良福祉パークは学校から車で15分の場所にある介護実習室を持つ施設である。 ここでは、高齢者体験装具を装着して、介護住宅体験、各種車椅子・トイレ・浴室・自助具の体験をおこなう。また、車椅子の自走・他走や視覚障害者として運動公園、模擬交差点などを散策・歩行体験をおこなう。実施後のレポートから、学内ではできない、より生活に近づいた体験ができたという感想があった。
⑮アセスメントツーツの冊子の作成・活用		⑮看護過程を展開する際、多様で個別的なの高齢者の情報収集とアセスメントを助けるツールとなることを目的に作成した冊子である。　領域責任者と共同で作成し活用した。（片面印刷32頁） 高齢者の「日常生活行動」、「感覚器」、「栄養」、「認知機能」をアセスメントすることを助けるもので、観察とアセスメントの視点を示し、実際に記述できるシートを綴った。改良長谷川式認知症簡易スケールや褥瘡のスケール、転倒スケール等も使用した。その後の、「老年看護学実習」で実際に活用し、高齢者理解を深め高齢者の多様性と個別性の理解に役立てることができていたと評価している。
⑱「昭和を活きた高齢者」をテーマにグループワーク、スライドで成果発表の活用。		⑱自分たちとは違う世代の高齢者の理解を深めること、また、積極的な高齢者理解を行うことを目的に「昭和を生きた高齢者」というテーマで6～7名のグループワーク・発表を課題として計画した。 各グループで食事、生活、道具、音楽、娯楽、ファッション、流行、医療、戦争といったテーマを決め、グループワークをおこなった。グループワークの概要は初講時に示し、発表は終講時に行った。成果はパワーポイントでスライドを作成し発表した。発表内容は学生達が体験したことのない、今まで直接関わったことのない、高齢者（後期）の生きてきた社会についてであった。スライドは発表資料として冊子にした。学生に配布するとともに、実習施設へも学生のレディネスとして配布した。レポートでは高齢者の活きた時代に近づけたという感想があった。これらの活動・学びは、次の年の各論実習に生かされ、高齢者の視点で生活を考えることができていると自己評価している。学生の発表内容は一部学生達の同意を得て、オープンキャンパスで掲示している。参加している学生より付き添いの父母から「懐かしい」と好評である。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ―講義― ・奈良県医科大学看護短期大学部「成人看護学実習」（3年生次、4単位　180時間、1グループ8名　5グループ計40名を担当し、以下の取組を行った。 ①毎日、実習開始～終了時間を実習指導の時間とした。学生が必要とするときに必要な指導を行う。 ②看護過程の展開を中心に看護を実践する ③実習マニュアル（要項）の作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	実習調整、学生への実習指導を実施した。指導の内容は、実践の見守り、実習環境の整備・調整、相談、学習支援、看護モデル、安全確保、カンファレンス等である。臨地実習において学生が自己の実習目標を達成できる環境を作る為に、教材や方法に工夫した。実習は、血液・呼吸器内科病棟において、１人の成人期の患者を学生に受け持ち看護過程の展開を実施するもので、成人慢性期の実習であった。 ①学生の実習中は共に病棟で過ごし、常時指導できる体制をとることを目的に行った。 ②看護過程を展開ができることを目的に、実習方法は１人の患者を受持つ方法を用いた。 ③学生が実習に望む際に可能な限り不安や心配を取り除き、実習目標を理解し、実習行動が取れることを意図して作成した。実習要項は、実習の目的、到達すべき目標、具体的な実習方法、注意事項を内容とし「要項を読めば口頭説明は~~は~~不要」というスタンスで作成した。
④実習記録用紙の作成、活用 ⑤実習計画ワークシートの作成、活用		④学生が実習目標を達成できる方法と手順として、項目を吟味して実習記録用紙を作成した。データーベースは単位認定者の助言を下に「科学的看護論」をベースして作成した。記録用紙の項目に沿って記述すれば実習目標が達成できることをねらい作成した。 ⑤学生の実習目標を達成できる環境を作ることを目的に実習計画ワークシートは作成した。指導教員、臨地指導者用の記録である。ワークシートにより担当する8名の学生の行動をは把握すると共に、実習指導者との連携や、他のスタッフとの調整に役立てた。
⑥実習において毎日カンファレンスをおこなう ⑦実習前にバイタルサインの測定についての技術チェックを行う		⑥1日をまとめ、明日の計画を立案する機会を設ける環境として、毎日、カンファレンスを実施した。 ⑦実習に際しての技術確認、基本的看護技術の確認のためバイタルサイン測定の技術チェック、必要な観察事項の事前学習を行った。実習が始まるまでにチェックをして実習に望んだ。 受持患者はほとんどが肺がん、血液のがん患者であった。学生はがん患者との対話に悩みながら徐々に良い関係性を築き、ほとんどの学生が実習最終日までには受け入れられる存在となり、必要な情報が得られ、慢性期看護、がん看護の特徴を学んでいた。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 ―講義― ⑪高齢者のアセスメントツールの冊子制作と活用。		⑪アセスメントツールは、「―講義―」の項で述べたとおり領域責任者と共同開発した。学内の演習で使用し、実習では生活機能のアセスメントのための道具として用いた。 学生の実習に対する授業評価は全体で平均3.5（5点満点）であった。教員の自己評価としては、疾患と加齢による身体機能の低下の両方から生活機能をアセスメントすることに活用できていると評価している。
・岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護学実習」3年生次後期4単位180時間1グループ5名　10グループ計50名担当、4週間の実習期間を「介護老人保健施設2週間」「病院2週間」と計4週間の実習を行っている。 前述の①～⑪に以下を加えた。 ⑫看護過程の展開で、データベースを身体の系統的分類（循環器、呼吸器等）から、ゴードンの11項目の分類を活用した。	平成23年4月 ～現在に至る	⑫老年看護の学習の視点として生活機能のアセスメントに注目することがもとめられている。従来の系統的アセスメントでは学生に生活や心理面のアセスメントにとまどいが見られていた。そこで、ゴードンの11項目を用いて、身体・心理・社会の3側面から高齢者を捉える方法に変更した。学内演習で事例を用いて十分ペーパーシュミレーションを行い、実習で活用している。「病院実習」「施設施設」とも同じ方法で看護過程の展開を実践できるように工夫した。
―その他― 看護専門学校生の講義に関するもの ・診療科に特徴的な診察用具、包帯材料を実際に扱う。	平成3年4月 ～平成5年3月	奈良県医師会看護専門学校看護学校進学コース「耳鼻咽喉科の疾患と看護」（2年持後期：2コマ）において、解剖学的な特徴（感覚器、粘膜、外界とつながっている）と病理学的な特徴（炎症、腫瘍）から、看護の特徴（必要性）・方法について講義した。診療科に特徴的な診察機具・材料（ピンセット　ガーゼ類）を提示し、触れることでリアリティのある学びを工夫した。自由記載の感想から「学びがあった」との記述がみられた。
・出席表による学びの確認 ・補助教材の準備　（文献、他の図書の資料等）	平成7年4月 ～平成8年3月	奈良県立医科大学附属看護専門学校（1年次6コマ）「基礎看護技術」（環境、衣服、清潔）において、教科書のみでは技術を実施する根拠が不足していると考え、複数の根拠を学生に提示できるよう補助教材を作成し使用した。学びの記述がみられた。自由記載の感想から「学びがあった」との記述がみられた。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書・教材		
・「耳鼻咽喉科疾患と看護」の講義用補助教材（プリント資料）	平成2年4月	奈良医師会看護専門学（進学コース）「耳鼻咽喉科疾患と看護」（2コマ） 内容：頭頸部解剖図、喉頭癌患者の喉頭摘出術患者の看護計画表。 耳鼻咽喉科疾患は感覚器であり、疾患の部位・性質で看護の視点が異なるため、 解剖学的理解の強化を目的に理解しやすい解剖図を用いた。疾患と看護では、事例として喉頭摘出術患者を挙げた。
・基礎技術、援助技術についての教材 「基本技術・援助技術チェックリスト」	平成７年4月	奈良県立医科大学附属看護専門学校「基礎看護技術演習Ⅰ・演習Ⅱ」において、専任教員全員が共同で作成した。看護学生の技術の自己研修の手引き書として作成した。 看護技術の項目は3年過程の基礎看護教育でこれだけは習得してほしいと願う項目で、基本技術は「看護行為に共通する技術」、援助技術は「日常生活の援助」と「診療の補助技術」がある。環境、清潔、衣生活、排泄、姿勢と体位、活動・休息、呼吸・循環・体温、入退院時の患者の看護、診察・検査と看護、予薬と看護、安全を守る技術、包帯法の計52項目で63ページの冊子である。『病室の環境整備』では、まず目標として「患者にとって快適に生活できる場であるように、健康の状態にふさわしいものであるように環境整備ができる」と全体の目標を示し、次に、“患者へ説明ができる”、“必要物品が準備できる”“病室内の換気ができる”といった12の行動目標を示し、それぞれの目標ごとにさらに1～５項目のチェック項目を示した。学生は実際に技術を演習したあとで「できる」、「できない」の自己評価を行った。１つ１つの技術をチェックリストで具体的に示すことで学生の技術をフィードバックできるシステムになった。教員も評価の指標に活用した。学生一人一人が52項目すべてを学内演習できる環境を整えるという教員の役割遂行の助けにもなった。
・「基礎看護技術」（環境、衣服、清潔に関する講義）用補助教材（プリント資料）	平成7年４月	奈良県立医科大学附属看護専門学校「基礎看護技術」（環境　衣服　清潔に関する講義）で作成した。 技術の方法論として教科書のみでは一つの根拠しか示せず、より客観的な根拠を複数提示して学生自らが選択できるように補助教材を作成した。環境は生活環境学や人間工学、衣服は家政科関係、清潔は皮膚の生理作用といった解剖・生理学、洗浄剤は化学的側面から客観的な根拠を明確にした。

・「成人看護学実習Ⅰ　慢性期」呼吸器血液内科病棟実習用教材 （実習マニュアル・冊子）	平成10年4月	奈良県立医科大学看護短期大学部助手として「成人看護学実習Ⅰ　慢性期」において作成した。学生が実習の目的・目標・方法を認知・理解でき、達成にはどのような行動が必要かイメージが持てることを目的に作成した。 実習指導ではでは看護課程を展開しフィードバックを繰り替えしながら、看護の質を高める実習をめざした。実習オリエンテーションの道具として実習方法の理解、動機付け、心理的安定になるように工夫した。 内容は病棟の入院患者の特徴、看護の特徴、看護体制、実習指導体制、病棟見取り図、前年実習における受け持ち患者の年齢・病名・治療名、事例報告のテーマである。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書・教材		
・岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習要項（実習の手引き）編集総括	平成23年4月 ～現在に至る	4年間のすべての実習における、実習マニュアルとして作成した。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習委員会委員長として編集を行った。
・事例教材	平成17年4月 ～現在に至る	加齢に起因する疾患と看護、成人期から抱える慢性病と加齢が及ぼす生活機能の障害と看護等が学習できる事例を考案した。 ① 脳梗塞に罹患し介護老人保健施設に入所する高齢者 ② パーキンソン病を抱える高齢者の看護 ③ 慢性閉塞性呼吸器疾患を抱える高齢者の看護 ④ 生活者としての高齢女性の転倒・骨折救急搬送、周手術期、回復期、慢性期、在宅復帰までの健康障害のレベルを追った看護 奈良県立医科医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成し、現在に至る。毎年見直しながら、学生の特性に応じて修正して使用している。
・老年看護学アセスメント・ツールとしてのマニュアル教材（冊子）	平成17年4月 ～平成23年3月	高齢者の身体・精神機能を評価するツールとしてアセスメントマニュアルを共同で作成した。高齢者の感覚機能、栄養状態、認知状態、日常生活機能を評価する方法として、既存の尺度を用いた冊子である。奈良県立医科医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成した。
	平成23年4月 ～現在に至る	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」において、高齢者を総合的に評価する視点から改正した。
・授業毎に授業内容のポイントをまとめたスライドの教材を作成し授業に活用した。（パワーポイントを用いる）	平成16年4月 ～現在に至る	担当する講義の要点をスライドにまとめ講義の教材とした。制度の変更や新しい視点、知見等、変更しながら作成し、活用している。 奈良県立医科医学部看護学科「老年看護概論」「老年看護学援助論」で作成し、活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護概論」「老年臨床看護」において、作成し活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科・臨床検査学科「看護概論」において、作成し活用した。 関西学院大学社会学部社会福祉学科「介護概論」において活用した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」において作成し活用した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書・教材		
・「生活支援技術・介護過程」教科書、一部執筆（再掲）	平成24年4月～9月	介護福祉士養成を目的にした教科書であるが、老年看護では介護施設も看護の場である。老年看護として看護学生が学ぶ内容になるように工夫した。 「介護者の倫理」の執筆を担当した。高齢者ケアに携わる職種の倫理としてまとめたもので、看護職にもあてはまるものである。特に、個人情報、電子情報、実習学生の守秘義務など、近年の社会情勢を考慮した内容を工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」で使用した。
・「介護の基本　コミュニケーション技術」教科書　一部執筆（再掲）	平成24年4月～9月	「睡眠と援助」の執筆を担当した。看護学生も学ぶ内容になるように工夫した。 関西学院大学人間福祉学部　「介護概論」で使用した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・学生の授業評価アンケート結果	平成20年3月～22年3月まで	奈良県立医科大学医学部看護学科　「老年看護学援助論」「老年看護学実習」　で授業評価を行った。 平成20年の「結果は、援助論平均４．０(5段階評価）、実習は３．９であった。評価の高かった項目は「シラバスに沿った内容」「授業への取り組み」であり、低かった項目は「レポート課題が多い」という結果であった。
	平成19年3月	関西学院大学社会学部社会福祉学科非常勤講師　「介護概論」で授業評価を行った。学内ＬＡＮを使用した評価で、5名の学生が評価に参加していた。結果は平均4.2（5段階評価）であった。
	平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護学概論」「老年臨床看護」「老年看護学実習」学生評価を行った。 「老年看護学概論」の評価は平均４．０であった。良かった点では教材がわかりやすかったといったコメントがあった。改善点ではマイクを使っているが聞き取りにくかったと言ったコメントがあった。 「老年臨床看護」の評価は平均４０．１５であった。良かった点と改善点では資料が見やすかった。もっとパワーポインタを使ってほしいと言ったコメントがあった。 老年看護学実習では平均４．２５であった。丁寧に教えてもらった、もう少し関わってほしかったといったコメントがあった。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科　「看護学概論」の学生評価を行った。平均４．７７であった。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
４．実務のい経験を有する者いについての特記事項		
・厚生省近畿地方医務局近畿地区保健婦助産婦看護婦実習指導者講習会（国立大阪病院）	昭和63年9月8日 ～10月21日	指導者講習会に参加した。実習指導に必要な教育学等の講義を受け、グループによる実習指導に関する討議を行った。討議内容はあらかじめ希望したテーマによりグループ編成が行われ、討議し、論文を作成し攻守会の最終日に発表した。私達のグループのテーマはカンファレンスの持ち方であった。「学生が困っている時、その時に必要な指導をすることが指導者に求められる」という結論の元、「啐啄の期」という言葉を提示した。
・奈良県立医科大学附属病院看護部　実習指導	昭和63年4月～ 平成4年3月	耳鼻咽喉科疾患で治療を受ける患者の看護を看護の課程を通して学ぶ実習指導を実践した。１グループ5名の学生が2週間行う実習を年6～7グループ担当した。受け持ちは成人・老年期の患者で、癌疾患を持つ高齢者が多かった。指導内容は学生と患者・病棟との調節、看護課程展開の指導、学生の実践における患者の安全を守る、学生の実施した看護に対する指導等である。 奈良県立五条病院附属看護専門学校の「成人看護学実習」臨床指導を担当した。
	昭和63年4月～ 平成4年3月まで	看護専門学校1年後期の基礎実習1週間を担当した。1グループ5名の学生を担当し、学生の初めての実習環境を整える支援を行った。
・奈良県立医科大学附属病院看護専門学校教員としての実習指導	平成8年4月 ～平成10年3月	母性看護学実習を担当した。産婦人科病棟で実習指導を行った。
	平成8年4月 ～平成10年3月	基礎看護実習Ⅰ、Ⅱを、毎年各1グループ担当した。
	平成10年4月 ～平成11年3月	成人看護実習を担当した。耳鼻科・皮膚科病棟で実習指導を行った。
	平成10年4月 ～平成11年3月	総合看護実習を担当した。泌尿器科病棟で実習指導を行った。
・高校生に対する講義「看護学」	平成17年、 平成18年	奈良女子大学附属中等学校　キャリアガイダンス　講師　看護学　高校生の新路決定のための模擬講義
	平成18年	県立橿原高等学校　「橿高大学」ミニ講義講師　看護学
・研修会講師	平成19年	第67回日本保健医療行動科学会　近畿支部研究会　講師　「老年看護と物語」
	平成19年～平成22年まで	奈良県看護協会臨地実習指導者講習会講師「老年看護学実習」
	平成19年	奈良県看護協会臨地実習指導者講習会講師「看護の概論」
	平成22年5月	平成22年度高取町地域法活支援センター研修会講師　「高齢者ケアとナラティヴアプローチ」
	平成24年3月	平成24年「養成期間と医療機関の連携」事業研修会　講師　「実習指導に望むこと」
	平成24年9月	平成24年中濃地区特別養護老人ホーム看護職能研修会　講師　「高齢者体験から理解する高齢者」

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
・ワークショップ　講師	平成18年6月	第21回日本保健医療行動科学大会、ワークショップにおいて講師を務めた。 コーディネータ：森岡正芳 「ナラティヴとは、研究と実践の現実」において「４つの学問領域から見たナラティヴ・アプローチ」というタイトルで、混乱するナラティヴの考え方を看護者の視点からまとめ、今後の看護実践においてナラティヴの概念を活用することの可能性を話題として提供した。
・シンポジウム　講師	平成19年9月	第３回日本質的心理学会自主シンポジウム「臨床看護におけるナラティヴ：現場における時間性と生の現実」において、高齢看護の立場から「高齢者患者におけるナラティヴ（老い・病いの現実）と時間性」というテーマで話題を提供した。 コーディネータ：紙野雪香 高齢者が語る言葉の中に老いの現実が現れてくる過程を聞き手の視点から描き出した事例を発表した。 　臨床看護の場でナラティヴの考え方やナラティヴ・アプローチをどのように使うかという視点から、高齢看護の場では「高齢者は語ること」で老いの現実を表出している。そして、「看護者が聴くこと」が臨床での看護の実践であることを伝えることを意図した。
・会員企画シンポジウム　講師	平成25年8月	第10回日本質的心理学会　一般企画シンポジウム「今あらためて質を問う」にて、話題を提供した。テーマは「高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと－である。 コーディネーター：森岡正芳 質的データを量的データに変換し分析する傾向にある質的研究をについて、現場の質をもう一度考え直そうとするを趣旨で企画された。心理学、社会福祉学、教育学の立場から話題提供される中で、看護学の立場から現場を質感豊かに描き出すかていを紹介した。平成24年3月の博士論文（奈良女子大学）の一部を加筆修正した。

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
5　その他 ・奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科における教育実績	平成16年4月 ～平成17年3月	奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科講師として「老年看護学Ⅱ」（専門科目、2年次配当通年、必修2単位）において、老年看護の実践論について授業を行った。これにより、学生は老年看護の方法について理解を深め、臨地実習に大いに活用して、老年看護の学びを得ていた。「老年看護学実習」（3年次配当通年必修2単位）において実習指導を行った。「事例研究」（3年次配当後期）において研究計画書作成、論文作成の指導をおこなった、これにより、学生は実習で経験したを出来事を理論的に説明し、今後の可能性・課題を見出していた。
・公立学校法人奈良県立医科大学医学部後看護学科における教育実践	平成17年4月 ～平成23年3月まで	奈良県立医科大学看医学部看護学科講師として「老年看護学援助論」（専門科目、2年次配当通年、必修2単位）において、老年看護の実践論について授業を行った。これにより、学生は老年看護の方法について理解を深め、臨地実習に大いに活用して、老年看護の学びを得ていた。「老年看護学実習」（3年次配当通年　必修2単位）において実習指導を行った。「卒業研究」（4年通年配当）において研究計画書作成、論文作成の指導をおこなった、これにより、学生は実習で経験したを出来事を理論的に説明し、今後の可能性・課題を見出していた。「看護研究特論」（3年次前期）において、研究計画書作成につて指導した。
・関西学院大学社会学部社会福祉学科における教育実績	平成18年4月 ～平成20年3月	関西学院大学社会学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（2・3年次春期選択2単位）において、社会福祉士受験資格としての介護概論の授業を行った。介護の目的論、対象論、実践論について理解を深めた。
・関西学院大学人間福祉学部おける教育実績	平成24年4月 ～平成24年9月	関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（1～4年次春期　選択2単位）、「介護技術」（1～4年次春期　選択2単位）において社会福祉士国家試験内容に基づき介護の目的論、対象論、実践論について授業を行った。文学部、法学部の学生も若干選択していた。学生それぞれが学ぶ目的を持ち、様々な感想を持って学習を深めていた。
・岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科における教育実績	平成23年4月 ～現在に至る	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科教授として「老年看護学概論」（2年次後期、2単位　専門必修）、「老年臨床看護（演習）」（3年次前期、2単位　専門必修）、「老年看護学実習」（3年次後期、4単位専門必修）、「卒業研究」（4年次通年、2単位専門必修）、「アカデミック技法」（1年次前期2単位一般必修）において授業、演習、実習をおこなった。保健科学部放射線学科、臨床検査学科の「看護概論」（3年次後期、2単位　専門選択）において授業を行った。
・岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科実習調整の実績	平成23年4月 ～現在に至る	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 1. 看護師免許	昭和55年4月	第389473号
2. 修士（看護学）	平成15年3月	国立学校法人香川医科大学大学院医学系研究科看護学専攻了 修士（看護学）（香修第十九号） 修士論文題目：ナラティブを看護ケアに導入した老年患者の語りの構造と変化の研究
3. 博士（学術）	平成24年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程 社会生活環境学専攻　人間行動科学講座 博士（学術）（博課第501号） 博士論文題目：看護における「聴き取り」の生態－ナラティヴ・アプローチの可能性と限界
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
・大阪大学医学部附属病院　看護婦	昭和55年4月 ～昭和57年3月	眼科、整形外科、麻酔科の混合病棟に勤務。　眼科は手術を要するハイリスクの眼科疾患や角膜移植・外傷などの救急対応が必要な患者の看護を実践した。整形外科は整形外科病棟の一部として稼働し、麻酔科は痛みに対する看護等を実践した。看護の対象は小児～高齢者まで幅広いが、年齢層は高齢化していた。
・奈良県立医科大学医学部附属病院　第3内科病棟　看護婦	昭和57年4月 ～昭和61年3月	消化器内科、放射線科病棟に勤務。肝臓癌患者が多く、肝臓動脈塞栓術の治療処置や、再発を繰り返し終末期へと移行するがん患者の看護を実践した。年齢層は成人期から老年期の患者であった。
・奈良県立医科大学医学部附属病院　7階南病棟看護婦	昭和62年4月 ～平成3年3月	耳鼻咽喉科、皮膚科の混合病棟に勤務。耳鼻咽喉科では中耳炎や扁桃腺摘出等の手術に対する看護が必要であった。また頭頸部腫瘍の3者併用療法や再発を繰り返し終末期へ移行するがん看護等を実践した。喉頭がんでは声帯の喪失と代替発声獲得への看護等も必要であった。皮膚科では全身皮膚疾患の患者の看護、皮膚がん患者、熱傷の看護などが、皮膚腫瘍・斑痕切除等の手術に対する看護等を実践した。看護の対象は小児～高齢者まで幅広いが、年齢層は高齢化していた。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ・奈良県立医科大学医学部附属病院 皮膚科外来看護婦　看護主任	平成3年4月 ～平成7年3月	皮膚科外来に勤務。診察の援助はもとより、軟膏療法や光線療法、外来手術を受ける患者の看護、膠原病等で長期内服療法中の患者の看護、慢性疾患の生活指導や継続的看護等を実践した。　患者の年齢層は高齢化し、慢性病を抱えながら生活し、老いていくことの現実を実感させられた場である。 外来主任看護師として、外来管理を担当した。診察がスムーズに流れるように人的・物的業務管理を行うと共に、患者様の安全・安楽を守り、納得できる受診になるように環境を整えることを行った。事務方目線で運営されがちと考える総合病院の外来の診療の流れを患者目線で考え、「納得が得られる」を目標に環境を整えた。組織の規則の中で患者様の受診の導線を考え環境を整えた。パンフレットやポスターを使い待ち時間の使い方を工夫した。
・奈良県立医科大学附属看護専門学校　公立学校学校教員	平成7年4月 ～平成9年3月	奈良県立医科大学附属看護専門学校「基礎看護技術」（1年次80名通年）　「環境」、「清潔」を担当。「看護過程の展開」（2年次半期）事例患者のペーパーシュミレーション演習。80名の学生を3名で担当。「看護研究」（3年）3～4名のグループ2つを担当。「各論実習」母性看護実習、成人看護実習　総合看護実習を担当。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
４　その他 ―学内委員会活動―		
奈良県立医科大学看護短期大学部　教務委員会委員	平成9年4月～平成11年3月まで	学生の成績を把握し、学籍簿の作成を行った。
奈良県立医科大学看護短期大学部　学生生活委員会委員	平成11年4月～平成14年3月まで	学生生活について関わった。健康診断、保健室管理、1年生研修旅行等を担当した。
奈良県立医科大学看護短期大学部 実習委員会委員	平成13年4月～平成16年3月	実習に関して関わった。各論実習の実習配置表の作成、学生のグループ分け、統合実習の計画、その他、メンバーで実習に関する問題対応の情報交換、協議していった。
奈良県医科大学医学部看護学科 学生生活部会員	平成16年4月～平成20年3月	学生生活について関わった。健康診断、保健室管理、1年生研修旅行等を担当した。
奈良県医科大学医学部看護学科 実習部会委員	平成20年4月～平成23年3月	実習に関して関わった。各論実習の実習配置表の作成、学生のグループ分け、統合実習の計画、その他、メンバーで実習に関する問題対応の情報交換、協議していった。
岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 実習部会長	平成23年4月～現在に至る	1年生から4年生までの実習を統括する。 実習施設からの相談の窓口となり対応する。
岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 領域実習ワーキング長	平成23年4月～現在に至る	各論実習の統括を行う。特に、実習病院・施設への実習依頼や計画配置の相談等、領域をとりまとめて実習施設との窓口となる。
岐阜医療科学大学保健科学部 研究・倫理委員会委員	平成23年4月～現在に至る	学内教員の研究の倫理審査にあたる。
岐阜医療科学大学保健科学部 教育・研究委員会副委員長	平成23年4月～現在に至る	学内教員の研究活動を支援する。学内で定める研究推進費について審査を行う。教員の学内研究発表や講演等を企画・運営する。
岐阜医療科学大学保健科学部 生涯教育委員会副委員長	平成24年4月～現在に至る	委員会活動として、年6回ほど地域のイベントで地域住民に健康教育を実施している。 シンポジウムやセミナー等を同窓会と協力して企画・運営し卒業生を対象に研究発表の場を設ける活動をしている(25年度から)
奈良学園大学における教員組織活動	平成26年4月～現在に至る	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1.　基礎看護技術Ⅱ基礎看護学〔3〕 系統看護学講座専門分野Ⅰ	共著	平成18年6年 第14版 平成21年2月 第15版 平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版　全490頁 編集：藤崎郁、任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、吉村雅世 （執筆者全21名） 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32 第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。 病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、モデル人形を用いて写真撮影し文章を作成した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。

2.　「介護概論」利用者へのサービスの質の向上を目指して 新課程・国家資格シリーズ	共著	平成18年7月	株式会社日本放射線技師会出版会	介護福祉士を目指す学部生の為の教科書 A5版　全260頁 編著：守本とも子、星野政明 執筆者：新川泰弘、岡本敬子、吉村雅世、瀬山和世、新谷奈苗、林　静子、竹内克彦、廣川恵理、その他5名 本人担当部分：以下の執筆を担当した 第4章介護の展開1 1.「健康と病気」P.56-P.58 　高齢者の健康、高齢者の病気と病い 5.「介護の基本技術」 　観察、与薬、感染予防 基本は看護の基礎技術である。医療行為との違いに注意しながら、対象者が安全で安楽にケアを受けられる技術を示した。血圧測定や与薬では、写真を掲載することで、具体的な方法を示した。 国家試験に対応できる内容とした。 P.70-P.82　P.100-P.107　P.123-P.132

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
3.　看護学実践science of nursing「老年看護学」	共著	平成19年4月 平成22年12月改定	黎明書房	奈良県立医科大学医学部看護学科授業科目「老年看護学概論」、同「援助論」、岐阜医療科学大学「老年臨床看護」で教授する内容を、資料を含め1冊にまとめたものである。内容は看護師国家試験出題基準に対応させた。 A5版　全285頁 監修:川野雅資 編集:守本とも子 執筆者：新谷奈苗　田中麻里、谷村友子、中丸弘子　新川泰弘、吉村雅世　他10名 本人担当部分：以下の章の執筆を担当した。 Chapter3：高齢者の健康生活への看護援助 ⅰ．高齢者の健康　P.60-P.65 Chapter4：主な疾患と看護 ⅴ．内分泌系の疾患　P.144-P.153 ⅶ．泌尿器系の疾患　P.168-P.175 ⅷ．感覚器系の疾患　P.177-P.193 各系統において高齢者に多い疾患を取り上げ、病態、検査、治療、看護を示した。 改訂版ではChapter４を担当した。
4.　介護福祉士養成シリーズ2「生活支援技術・介護過程」	共著	平成22年6月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全219頁 編著:守本とも子、星野政明 執筆者：川口ちづる、山形力生、今村美幸、大崎大資、横井加津志、高畑進一、新谷早苗、三毛美恵子、石崎利恵、山田多賀子、吉村雅世、木村洋子、その他5名 本人担当部分：以下を担当した。 第9章　「高齢者の睡眠の援助」P.151-P.157 自立を促す睡眠の必要性、爽快な目覚めの援助、自立を促す睡眠の介助の実際、について執筆した。日常生活のリズムを整える基本的方法や不眠の際の援助の方法が理解できることを意図して具体的な方法を示した。　　看護の基礎技術「睡眠の援助」を基本にしている。

5.　介護福祉士養成シリーズ1「介護の基本　コミュニケーション技術」	共著	平成22年9月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全202頁 編著：守本とも子、星野政明 執筆者：三浦辰哉、原田理恵、溝上五十鈴、土田耕司、羽柴香恵、河野蕎、新谷早苗、吉村雅世、その他7名 本人担当部分：以下の章を担当した。 第8章「介護従事者の倫理」P.118-P.124 国家資格を持つ者の責任と責務の視点から信用失墜行為の禁止、守秘義務、人権擁護の重要性、及び実践の内容を具体的に示していった。 看護の概論となる看護師の倫理を基本としている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
1.　喉頭摘出者に対する社会的支援の検討―ソーシャルワーク技術の応用― （査読付）			奈良県立医科大学看護短期大学部紀要 Vol.3 P.51-P.58	身体障害者3級となる喉頭摘出者のQOLを高める継続看護は社会福祉の側面からも考える必要がある。そこで、先輩喉頭摘出者がボランティアで運営する患者団体の現状と問題から、また喉頭摘出者の生活・家族・労働活動といった社会的側面から支援の方向性を考えた。その結果ソーシャルワーク技術の中の集団に対する支援として、コミュニティー・オーガニセーション（CO）を取り入れた支援が、喉頭摘出者への継続した看護支援につながると考えた。
2.　臨地実習の教育効果―自己評価と評価者評価の差の縦断的変化― （査読付）	単著	平成11年3月	奈良県立医科大学看護短期大学部紀要 Vol.4 P.44-P.50	学生の臨地実習における専門職としての変化を学生の自己評価と教員評価の差の縦断的変化とし分析した。その結果実習初期に比べ実習の最後に評価の差が小さくなる学生は、実習の全期を通して評価の差が小さくなり、実習を通して自己を客観的に見ることができるという変化を示したと考えた。また学力・態度が中位の学生のほうが上位・下位の学生よりその傾向があると考えた。 本人担当部分：特に研究の計画・実施・結果のまとめに関わり、考察や全体構成を共同で行った。論文作成を行った。 共著者：吉村雅世、上平悦子
3.　ヘンダーソン看護論における構成要素の演習評価 （査読付）	共著	平成12年3月	奈良県立医科大学看護短期大学部紀要 Vol.4 P.123-P.130	学生が苦手とする看護理論の学習に演習を取り入れ評価する事により、教授方法の検討を行った。 健康生活における人間の基本的ニーズ14項目における学生の理解について評価を行い、全体的に「少々不足」「かなり不足」という評価になった。 「清潔」に関する構成要素の意味は不十分と評価された。教員評価はばらつきがあり、原因を考察し、指導基準を明確にした。学生の学びから、演習における思考過程と主観的満足感の要因が明確になった。 本人担当部分：データの分析および考察を共同で行った。 共著者：岩本淳子、松村喜世子、大塚眞代、堀口陽子、木村洋子、吉村雅世、上平悦子、赤木知子

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
4.　看護学生の臨地実習に対するイメージ―手引きから認知するイメージのＫＪ法による分析―（査読付）	共著	平成12年3月	奈良県立医科大学看護短期大学部紀要 Vol.5 P.62-P.67	動機付け・理解・心理的安定のために実施される実習オリエンテーションに用いられるマニュアル（手引き）の効果を評価することを目的にした。 オリエンテーション後の115個の実習イメージを分析し「実習の動機付け」はできていると考えられるが、不安・心配といった否定的なものも多く心理的安定には今後の検討が必要であることが示唆された。 本人担当部分：研究の計画・実施・結果のまとめ・察に関わり、データの質的分析を共同で行った。論文作成を行った。 共著者：吉村雅世、木村洋子
5.　看護学生が持つ精神障害者のイメージについて（査読付）	共著	平成13年3月	奈良県立医科大学 看護短期大学部紀要 Vol.5 P43-P.48	本学の学生が精神障害者にどのようなイメージを抱いているか把握することを目的にする。実習前は「怖い」「暴れ出す」など否定的イメージが多かった。講義や作業所実習を経ることによって「優しい」「几帳面」「まじめ」「私たちと変わらない」という肯定的な記述が増加した。早期に患者―看護者関係を確立し、主体的な実習の実施とイメージの肯定化を行うために、実習の初日に意図的に関わることの必要性が示唆された。 本人担当部分：データの質的分析に参加した 共著者：木村洋子、吉村雅世、東浦雅子、木田美枝子、赤木知子
6.　看護学生が持つ優しさの概念―老年者との同居と関心度から―（査読付）	共著	平成13年3月	奈良県立医科大学 看護短期大学部紀要 Vol.5 P.68-P.74	看護学生の老年者と共存の関係や老人問題への関心度から優しさの概念形成にどのように影響しているかを比較検討した。老年者と同居の有無では優しさ概念に変化がみられず優しさの概念形成に優位に影響を与える要因は、老人問題への関心度であった。裏返して言えば優しい性格の持ち主は老人問題に関心が高いことが明らかになった。 本人担当部分：研究の計画・調査の実施・集計・結果のまとめに関わった。特に結果と統計的処理を行った。 共著者：今井充子、吉村雅世、大塚眞代、森ウメ子、内藤直子

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
7.　看護学生がイメージする優しさの概念と自尊感情の研究―1年生と3年生を中心に（第3法）―（査読付）	共著	平成13年3月	香川医科大学　看護学雑誌 Vol.5 No.1 P.59-P.66	看護学生がイメージする「優しさの概念」とローゼンバーグの「自尊感情」そして「今の身体と心の状況」について青年期にある看護学生を対象に調査し、1年生と3年生を比較した。結果、自尊感情は2学年とも同様な傾向を示し自尊感情は3年生のほうが高得点であった。今の心と体の状況では3年生が高得点であった。優しさのイメージは1年生が得点は高かったが優位な差は認められなかった。 本人担当部分：特に研究の計画・調査の実施・集計・結果のまとめに関わった。 共著者：内藤直子、今井充子、森ウメ子、吉村雅世 、大塚眞代
8.　老年看護学における臨　地実習評価―特養・老人保健施設の過去2年間の自己評価から―（査読付）	共著	平成14年3月	奈良県立医科大学看護短期大学部紀要 Vol.6 P.42-P.49	過去2年間の臨地実習における学生の自己評価を分析・検討した。学生の受け持ち患者は87％が後期高齢者で大半が女性であり155事例で548疾患あり複数疾患を持つことがわかった。学生の自己評価は特養より老健施設のほうが高かった。看護技術の経験回数で多いのはコミュニケーションであるが技術回数と自己評価に関連はなかった。老年者の生活の場である特養や老健施設が臨地実習のよい学びの場であることが確認できた。 本人担当部分：特に研究の計画・調査の実施・集計・結果のまとめに関わった。 共著者：今井充子、吉村雅世
9.　効果的な実習オリエンテーションの検討―学生評価と実習イメージ―（査読付）	共著	平成14年3月	奈良県立医科大学看護短期大学部紀要 Vol.6 P.50-P.57	オリエンテーションに対する学生への効果と評価から効果的なオリエンテーションの方略と用いた実習イメージ尺度の妥当性を検討した。オリエンテーションの後に実習意欲が高まったと評価した肯定群の学生はより実習に対する意欲を高め負担を軽減し心理的安定につながること、また23項目の実習イメージは尺度として使用できるものであることがわかった。 本人担当部分：特に研究の計画・実施・結果のまとめ、考察に関わり、全体構成を共同で行った。論文作成を行った。 共著者：吉村雅世、木村洋子

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文）				
10.　看護実習効果を高める学習者主体の教育法に関する研究―プロセスレコードを用いた看護教育場面の質的分析― （査読付）	共著	平成14年3月	奈良県立医科大学 看護短期大学部紀要 Vol.6 P.65-P.77	プロセスレコードを実習で用いることによって得られた教育効果を質的に分析した。学生が再構成した看護場面を、客観視する学生と教育する立場の教員が共有し、さらに教員かその看護場面を元に学生に働きかけ、教育場面として教員が再構成したものを分析し、学習者主体の重視、EVNの重視、看護ケアの質向上、対人関係の発展、カウンセリング技術の向上と言う観点から効果的な教育法であることがわかった。 本人担当部分：特に分析対象となる看護場面・指導教育場面の事例（2例目）を担当し再構成した。 共著者：高井俊子、堀口陽子、吉村雅世
11.　看護学生が持つ優しさの概念（第2報）―家族・友人との関係・アルバイトの要因から― （査読付）	共著	平成14年3月	奈良県立医科大学 看護短期大学部紀要 Vol.6 P.82-P.87	学生の優しさのイメージ、対人関係に導影響しているか把握することを目的にした。結果優しさのイメージは相手の立場に立ち理解しようとする姿勢ととらえる者が多く、悩みを家族と話し友人関係に満足している学生は優しさの概念の得点が高い傾向を示した。対人関係を通して相互作用や共感性を育み優しさの概念形成に影響することが示唆された。 本人担当部分：研究の計画・調査の実施・集計・結果のまとめと関わった。特に結果と統計処理を行った。 共著者：大塚眞代、吉村雅世、今井充子、森ウメ子、内籐直子
12.　ナラティブを看護ケアに導入した老年患者の語りの構造と変化の研究 （修士論文）	単著	平成14年3月	香川医科大学大学院 医学系研究科 看護学専攻修士論文	A判　全102頁 6名の老年患者に対して3回の半構成的面接を行い、病気の経過、療養に対する思い、今後の希望について自由な語りを、4名の分析者が「物語の構造」と「変化の内容」から分析することで、患者の話しは物語の構造を持つ「物語」であることを解明し、語られた「物語」の内容は看護の目標とする患者の「変化」があることを実証した。 また変化の内容を分析することで、看護ケアにナラティブを導入することによる今後の看護への展望を考察した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文）				
13.　不確かさの概念モデルを用いた老年女性の積極的な変化の考察 （査読付）	単著	平成16年3月	奈良県立医科大学看護短期大学部紀要 Vol.8 P.83-P.88	事例研究。介護老人保健施設への転院を否定的に考える高齢女性への看護について、その心理的変化を不確かさ概念から考察する。その結果、高齢患者の危機を好機へと導く看護者のソーシャルサポートの存在が考察された。
14.　看護ケアにナラティヴ・アプローチを導入した老年患者の語りの変化の研究 （査読付）	共著	平成16年3月	日本看護科学会誌 Vol.24、No.4 P.1-P.10	高齢者の語りの内容がネガティヴなものからポジティヴなものに変化する物語を通して、ケアとして看護者の聴く姿勢をナラティヴ・アプローチとして明らかにしようとした。その結果、高齢患者に対して幾度かのナラティヴ・アプローチを実施することは、身体的状況だけでなく生きることへの新しい意味を見いだすケアであると考察した。 本人担当部分：修士論文を加筆修正した物である。すべてを担当した。 共著者：吉村雅世、内藤直子
15.　高齢者の「病の語り」に見る主観的幸福感の研究 （査読付）	共著	平成16年12月	奈県立医科大学医学部看護学科紀要 Vol.1 P.36-P.45	整形外科病棟に入院している高齢者の病気についての語りの内容と尺度を用いた主観的幸福感との関連の質的記述研究。数値的な主観的幸福感に関係なく「語ること」が高齢者にとって前向きな生き方を表出できる要因と考え、看護者が「聴くこと」の大切さを改めて考察した。 本人担当部分：修士論文の一部である。すべてを担当した。 共著者：吉村雅世、内藤直子、近藤さつき、余野博子、橋口智子
16.　ナラティヴ・アプローチの特徴と看護における視点―複数の学問領域における比較― （査読付）	共著	平成17年3月	日本保健医療行動科学会年報「健康と病の語り」 P.218-P.234	混乱している「ナラティヴ」という概念をナラティヴ論を述べる代表的な著書からその特徴を抽出し看護領域で用いることの可能性を研究した。その結果、「ナラティヴ」の意味は同じであるが「ナラティヴ・アプローチ」の意味が社会学や心理学医療人類学などの学問領域の特徴から定義されていた。看護領域でも、急性期や慢性期、がん看護や老年看護等の特徴からその都度定義して用いることが示唆された。 本人担当部分：特に情報の収集、結果の抽出、論文作成を担当した。 共著者：吉村雅世、紙野雪香、森岡正芳

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
17.　高齢者ケアにおけるナラティヴ的思考研究の動向　―聞き手の姿勢に着目して― （査読付）	共著	平成18年6月	奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 Vol.3 P.36-P.45	看護領域では「ナラティヴ」をどのように定義して用いているか文献レビューを行った。その結果、「ナラティヴ的思考」というより、語り手である患者の特徴を研究するデータとして用いられる傾向があった。ナラティヴ・アプローチの有用性は示唆されるが具体的にその方法を研究するものはなかった。 本人担当部分：データ収集から論文作成までを行った。データの考察を共同で行った。 共著者：吉村雅世、森岡正芳、紙野雪香
18.　４つの学問領域の比較から見たナラティヴ・アプローチ	単著	平成19年3月	日本保健医療行動科学会年報、「保健と医療の語り（ナラティヴ）とアート」 Vol.22 P.11-P.14	「ナラティヴとは？研究と実践の現在」をテーマに行われたワークショップの担当部分を論文としてまとめた。社会学、臨床心理学、医療人類学、医学を背景に持つ著者によって書かれた「ナラティヴ」に関する図書から、それぞれの特徴を抽出することを試み、その実践と言えるナラティヴ・アプローチについて看護者の視点で考察した。ナラティヴ・アプローチはそれぞれの領域で解釈されカウンセリングや診察の場で実践されている。看護の場でも急性期・慢性期、がん・老年と状況によってナラティヴ・アプローチを定義づけて実践に用いる必要性を示唆した。
19.　住居における快適性評価スケールの開発 （査読付）	共著	平成19年6月	日本福祉工学会誌 2008.10巻2号 Journal of The Japan Society for Welfare Engineering Vol.1 No.2 P.89-P.90	性別、年齢を均等に割り振った合計500名の日本人に住居の快適性についてアンケート調査を実施した。年齢別にその人が心地よいと思う快適な住居いついてまとめると共に、アンケート内容を今後のスケールとして用いることの評価を行った。 本人担当部分：主にアンケート作成と調査を担当した。 共著者：守本とも子、青山美智代、浅見恵梨子、上平悦子、岡本啓子、勝井伸子、三毛美恵子、吉村雅世、星野政明
20.　看護の場における「聴く姿勢」に関する文献研究 （査読付）	単著	平成20年1月	公立大学法人奈良県立医科大学 医学部看護学科紀要 Vol.5 P.37-44	看護者が「聴くこと」についてどのように研究・実践されてきたか動向と課題を明らかにした文献研究。ほとんどが特定の疾患を抱える患者の心理面の結果から、その支援として「聴くこと」「傾聴」が必要であると示唆するにとどまり、具体的な「聴くこと」の技術に関する研究は極めてすくないことが明らかになり、「聴くこと」の技能を研究する意義につなげることができた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
21.　看護者のための“聴き取り”技能の開発に向けて ―対話場面の意味生成過程と看護者の自己内対話による物語化― （査読付）	単著	平成21年3月	日本保健医療行動学会年報 Vol.25 P.218-P.234	78歳女性患者へのナラティヴ・インタビューの場面を「聴き手」であるインタビューアー（筆者）の自己内対話として描き出し、聴き取りの場面を可視化した。自己内対話では、高齢者の特徴とも言える聴き取りつらさ（話し語尾が途切れる、同じ話しを繰り返す、代名詞が多い）のなかで、意味を作り出しながら聴き取っていることを明らかにした。この時の看護師の姿勢に「物語化」があると推察し、高齢者看護において日常看護の対話をナラティヴ・アプローチとして検討することの可能性を示唆した。
22.　看護場面の4つの対話における「聴き取り」の特徴―「物語化」を実践する看護師― （査読付）	共著	平成22年6月	公立学校法人 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 Vol.7 P32-44	高齢者の看護において看護師が「物語化」を実践していることを明らかにすることを目的に、実際の看護の場における「聴き取り」の実際を聴取し、可視化した「聴き取り」の特徴を検討した。 76歳と78歳の高齢女性に対する看護場面で、患者と看護師がどのような思いで相手の言葉を受け取り会話をしていたかを、双方へのナラティヴ・インタビューから聴収し、高齢者と対話する看護師の「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、「質問の意味を持つ言葉による対応」が聞き取りの特徴にあることを示唆した。看護師は経験年齢の異なる4名の看護師とした。 本人担当部分：研究計画、データまとめ、論文作成を担当した。 共著者：吉村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博

23.　看護における「聴き取り」の生態 ―ナラティヴ・アプローチの可能性と限界― （博士論文）	共著	平成23年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学専攻行動科学講座	Ａ4判　全131頁 高齢者看護において、発語に特徴を持つ高齢者の話を聴き取る技能として「物語化」に注目した。従来から言われる「傾聴」の技能が看護の場では「物語化」であると考え、高齢者看護における「聴き取り技能」としてナラティヴ・アプローチの可能性を論じた。 76歳女性、78歳女性、67歳男性の3名の高齢者との看護において看護者がどのように患者の言葉を受けとめ、対話を行っているか、また、患者もどのように看護師の言葉を受けとめ対話を継続しているかを双方へのナラティヴ・インタビューから可視化した。患者の気持ちが表出されている場面では、看護師は語尾が途切れる、言葉を繰り返す、代名詞で省略するといった加齢が及ぼす発語の特徴に対し、相手の視点から意味を作り出し「物語化」を実践する傾向があった。この時の看護師は「相づち」や「うなずき」といった対応をしていた。しかし、高齢患者の思いを横に置き、健康回復をめざす看護師の視点から対応することもあった。このことは、看護師は「老いの物語」や「病の物語」を聴き取り、高齢者の多様性や個別性を理解しようとするが、対応は看護師の視点からされる傾向があると考えられた。経験年数の長いベテラン看護師にその傾向があった。高齢患者と対話する看護師の「聴き取り」は1つの「ナラティヴ・アプローチ」といえるが、必ずしも「傾聴」といえないことに、高齢者看護において「ナラティヴ・アプローチ」を活用することの限界があるとした。
24.高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと	単著	平成25年12月	質的心理学フォーラム，2013 Vol.5 P24-31	平成25年9月に開催された、第10回質的心理学会シンポジウム「今あらためて質を問う」の内容が加筆修正され特集として編集されたもの。前23の博士論文研究を一部、加筆した論文である。ここでは、「特集 現場の質感をどう記述するか」という大きなテーマのもと、言葉と思考が相互に絡み合い新しい物語が生成される会話の場面から、看護師の「聴く」ことを分析するために、会話場面を質感豊かに描き出す過程を紹介した。看護の質的研究でも、看護場面を質感豊かに記述し可視化し分析することの必要性を述べた。
25.病院実習における高齢者に対する個別アクティビティケアの効果に関する看護学生への調査	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要　第8号75-85	高齢者介護の場である施設で実施されることが多いアクティビティケアを、医療が行われている病院で看護師が実施することの可能性を明らかにしようとした。今回は、対象を看護学生とし、実習におけるケアをアクティビティの視点から調査研究した。講義科目講義、実習指導と実習後のデータ収集、論文作成を分担して行った。　藤吉恵美、和田裕子、吉村雅世

２６．通所サービスを利用している要介護高齢者の健康づくりのための対処行動	共著	平成26年3月	岐阜医療科学大学紀要　　第9号33-39	通所サービスを受ける高齢者の健康観を調査した。介護を受ける高齢者であっても骨折や転倒予防が健康に対する認識であった。研究計画書の作成、データ収集を担当した。藤吉恵美、和田裕子、田中和奈良、吉村雅世

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） ―解説―				
1.　パーキンソン病患者の看護	共著	平成24年3月	クリニカルスタディ9月号、メジカルフレンド社	パーキンソン病患者の看護について、1つの事例から看護の問題点までをアセスメントし看護計画を立案した過程を、読者である看護学生にわかりやすく説明する内容である。 本人担当部分：事例展開と関連図等の図表を担当した。 共著者：今井充子、吉村雅世
2.　臨地実習で困らないための患者とのコミュニケーションを身につけよう	共著	平成14年	ナーシングカレッジ NCスペシャル 医学芸術社 P.173～P.179	看護学生を対象読者とした雑誌。「実習で困らないための患者との対応術、実習で困ったときの対応術」というコラムで慢性リウマチ患者との対応について、また、高齢者が「死にたい」を言う言葉を発したとき、どのように考え対応するかを事例をもとに説明する内容である。 本人担当部分：内容の口述。（記者が執筆を担当した。） 共著者：松崎有子、吉村雅世
3.　なぜから理解する看護技術　排泄ケア手技を併用して効果を得る便秘の援助	共著	平成15年8月	ナーシングカレッジ 1月号 医学芸術社 P.36～P.41	看護学生対象の雑誌。排便・便秘のメカニズム、臨床で行われている排泄の援助（摘便・浣腸）を紹介する。 まず、便秘のメカニズムを解剖・生理学的に示し、便秘に関する知識の習得（便秘の原因・誘因）を狙った。 便秘のメカニズムを理解した上での解決策としての援助方法（薬物的・物理的）を示した。 本人担当部分：内容の口述。（記者が執筆を担当した） 共著者：松崎有子、吉村雅世

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
その他 ―国内発表―				
1.　音声喪失に伴う代用発声習得の期間・年齢から見た看護の一考察 （査読付）	共同	平成10年2月	近畿地区看護研究学会発表 近畿地区看護研究学会集録集 P.107-P.110	無喉頭者の生活と代替発声習得の状況を奈良県の喉頭摘出者団体の会員を対象に実態を調査し、入院中・退院後の看護を検討した。その結果、平均年齢68歳。代用発声法は電気式人工喉頭が多く、人工喉頭による発声法の習得は6ヶ月未満が多い。食道発声法は65歳以上の高齢者は6ヶ月以上かかるものであった。早期に代用発声を習得できるよう関わることが、高齢で障害を持つ喉頭摘出者のQOLを高めることがわかった。 本人担当部分：研究の計画・実施・結果のまとめを行い、考察と全体構成を共同で行った。 共著者：吉村雅世、高橋英子
2.　老化が自立互助運営の障害者団体に及ぼす影響 -奈良県の喉頭摘出者団体の現状と課題-	単独	平成11年6月	日本老年社会科学会第41回大会 日本老年社会科学誌第21巻第2号 P.205	奈良県における喉頭摘出者の会における会員の年齢の変化、発声法別の指導員の年齢の変化から、高齢化問題と対策を検討した。その結果、喉頭摘出者の会は64.6歳(S56)から71.4歳(H10)に、運営役員の平均年齢は65.1歳（H1）から72.6歳（H10）と高齢化している。今後、会の運営と新たな喉頭摘出者に代用発声法を指導することに支障をきたすことも予想され、自立互助を尊重しつつ外部支援の検討が必要であるとした。
3.　看護学生の持つ優しさイメージ―自尊感情の3学年別比較― （査読付）	共同	平成12年11月	第31回日本看護学会看護教育 第31回日本看護学会論文集　看護総合 P.130-P.132	「優しさの行動尺度」から看護学生の持つ優しさイメージをとらえ、ローゼンバーグの自尊感情とで3学年を比較した。その結果自尊感情は高学年になるほど高くなる傾向がある。全体では自尊感情が高いと優しさイメージは低くなる傾向にある。3年生は自尊勘定が高い学生は、相手の気持ちを理解するという優しさイメージが低い傾向にあることがわかった。看護婦としての資質の優しさ育成に教員は人的環境として関わる重要性が示唆された。これは第1報である。 本人担当部分：研究の計画、調査の実施、集計、結果のまとめに関わった。特に結果と統計的処理、論文作成を行った。結果から3学年と自尊感情の違いによる優しさイメージについて考察し発表した。 共著者：吉村雅世、今井充子、大塚眞代、森ウメ子、内籐直子

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
その他 ―国内発表―				
4.　老年者の同居と老年問題への関心度からみた看護学生が持つ優しさイメージ	共同	平成13年6月	日本老年社会科学会第43回大会 日本老年社会科学誌第23巻第2号 P.162	高齢社会にいきる若者が老年者と生活を共存する関係や、老人問題への関心度から優しさ概念形成にどのように影響するか比較検討した。看護学生211名にアンケート調査し、優しさの概念形成に影響を与える要因は老人問題への関心度であり、優しい性格の持ち主は老人問題への関心度が高いことが明らかになった。 本人担当部分：研究の計画・調査の実施・集計・結果のまとめと関わったが、特に結果と統計的処理を行った。 共同発表者：今井充子、吉村雅世 、内藤直子
5.　看護学生の特養ホーム・老健施設実習の学び―過去2年間の自己評価から―	共同	平成14年	日本老年社会科学会第44会大会 日本老年社会科学誌第24巻第2号 P.261	2年間の老人保険施設実習をまとめ。学びの特徴を明らかにしたものである。 本人担当部分：学生の自己評価をまとめ、特徴を抽出することを担当した。 共同発表者：今井充子、吉村雅世
6.　看護ケアにナラティブを導入した老年患者の語りの構造及び変化の研究	共同	平成15年8月	第29会日本看護研究学会学術集会 日本看護研究学会誌 Vol.26 No.3 P.294	修士論文の一部。4名の看護者が患者の語りを物語であるかどうか、変化があるどうかを分析した内容分析の部分を発表した。患者が語る言葉の多くは、行動の変化とまでは行かないが、揺れ動く心情の変化が表出されていることを示唆した。 本人担当部分：修士課程研究の一部である。指導を得ながら実施した。 共同発表者：吉村雅世、内藤直子
7.　看護学におけるナラティヴに関する文献研究	共同	平成18年8月	第32回日本看護研究学会学術集会 日本看護研究学会誌 Vol.29　No.3 P.214	看護領域の研究でナラティヴがどのように使われているかを明らかにしようとする文献研究。 本人担当部分：協力して約150編の論文を分類し特徴を抽出した。 共同発表者：紙野雪香、吉村雅世
8.　看護場面の対話における高齢患者の認知・情動の変容過程の研究―物語の時系列分析から描き出す聞き手の姿勢―	単独	平成21年3月	日本看護研究学会第22回　近畿・北陸地方会学術集会	高齢患者の病の語りがネガティヴなものからポジティブなものに変わる時の聞き手の対応を自己内対話として記述し認知・情動の変容に働きかける「聞く姿勢」を検討した。 その結果、聞き手は自己の持ついくつかの立場の1つから患者の言葉に意味を作り出していた。看護者の立場より患者の生活を知らない無知の姿勢に効果があると考察した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
その他 ―国内発表―				
9.　物語生成のプロセスから検討する「視点」の聴き取り技能としての可能性―高齢患者と看護者の対話の継起的分析から―	単独	平成22年4月	第5回保健医療福祉情報行動科学会大会	5名の高齢者患者に対するナラティヴ・アプローチにおいて、患者の心情が変化したと判断した場面における、聴き手の姿勢を聴き手の自己内対話から可視化し、分析した。話を発展させよう炉するリフレクシブクエスチョンの有効性を示唆した。
10.　高齢者の話を聴き取る技能の研究―物語生成の継起的分析から検討する聴き手の視点―	単独	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	80歳の女性へのインタビューからインタビューアーの「聴き取り」について検討した。聞き手は高齢者の何度も繰り返される話の中から、「これ」「その」あの」といった代名詞をの意味を推測したり、「で・・・」といった止まった言葉の先を推測したり、聞き手の視点を移動させて聴きながら物語を共同生成している実態を明らかにした。
11.　認知症高齢者の思い出の語りを「聞くこと」の看護としての研究～事例から考える関係性を築くための質問～	共同	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	グループホームで暮らすお年寄りに対して昔の思い出をテーマに、グループフォーカスによる「聴き取り」を実施した。語られた内容から、自己の対応を分析し、関係性を築く為の質問の有効性を考察した、学部生の卒業研究である。 本人担当部分：担当として指導した。 共同発表者：東仁美、吉村雅世
12.　日常看護の会話の中で実践される「傾聴」の研究―経験と聴き取りの特徴―	共同	平成23年6月	第26回保健医療行動科学会	看護の対象は高齢者が多く、高齢者と会話する機会が多く「傾聴」を必要とする機会も多くなっている。看護師は日常看護の会話の中でどのようには「傾聴」を行っているか、看護師経験の違いから検討した。博士論文研究の一部である。 経験年数の2年未満と4年以上の看護師各2名が、76歳と78歳の女性患者の看護を実践する中で「傾聴」していると判断できる部分を取り出し、そのときの思いを看護師・患者から聴取し「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、経験年数の多い看護師ほど医療的な専門職としての視点で聴き取り、経験年数の浅い看護師ほど、医療的な視点でなく生活者の視点で聴き取る傾向があった。経験の少ない看護師のほうが、看護師としての力量は未熟であるが患者の気持ちに働きかける「傾聴」に近い聴き取りを実践していると考えた。 本人担当部分：研究計画書の段階からすべてに担当した。データ収集。分析を共同で行った。 共同発表者：吉村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博

教　育　研　究　業　績　書

平成27年5月12日

氏名　岡　本　響　子

研究分野	研究内容のキーワード
	なし

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1)医療観察法についての講義と講義にリンクさせた医療観察法病棟見学実習の展開	平成22年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において医療観察法について講義し、臨地実習でも病院教育師長から講義を受けた後、病棟見学を行った。学生からは、実習前は暗いイメージを抱いていたが見学により病棟のイメージ、対象者に対する認識が変わったとの評価を得た。
2)ACT（精神科地域包括ケアシステム）とICF（生活機能モデル）の考え方に基づいた講義と地域統合実習の導入	平成22年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部の（在宅看護論）地域統合実習は精神看護学領域が担当し学生全員が受講している。講師として担当の「精神看護学概論」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）においてACT（精神科地域包括ケア）とICF(国際生活分類)についての基礎知識を学習した。また地域統合実習では、ACTにおける多職種連携や地域包括ケアシステムの考え方について複数の施設を回って学習するシステムを導入した。そして実習での学びを統合させるためにICFを導入した。学生からは実習でのそれぞれの施設での学びがつながり、生活する人の立場に立って支援の方向性を考えることができるとの高い評価を得た。
3)オレム・アンダーウッドモデルによるセルフケア理論の講義にリンクさせた精神看護学実習の展開	平成23年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部看護学科の講師として担当の「看護方法論Ⅴ」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において看護過程の展開を導入。精神看護学実習とリンクさせたところ、学生から精神看護の情報収集の視点が明確で、看護過程がわかりやすいとの評価を得た。模擬試験での精神看護学の得点も上昇した。
4)精神看護学実習における自己理解と他者理解を重視した教育実践	平成20年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部看護学科の講師として担当の「精神看護学実習」（専門科目、3年次配当、通年、必修2単位）において、対象理解を深めるためには自己理解が重要であることから、プロセスレコードを重視した実習方法を展開。自己の関わりを振り返り、受け持ち患者に対してどのような援助が必要で、どのようにして患者と関わっていけばいいかを考えさせる実習を実施している。真剣に患者と向き合い誠実に関わることで充実感のある実習となったとの評価を得た。

5)認知行動療法や芸術療法の演習を取り入れた授業の実施	平成22年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部看護学科の講師として担当の「精神看護援助論Ⅰ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において､精神科の治療で実施されている認知行動療法と芸術療法（コラージュ）を実施。イメージだけではわかりにくいため演習を行った。認知行動療法では､うつの認知療法で使用されている「７つのコラム」を教材にして、物事の受け止め方が思考、感情、身体面に与える影響と、考え方を変えることによるプラスの影響について体験的に学習させた。またコラージュでは、自分の好きな雑誌を持参させ、のりとはさみを使って切り貼りさせながら治療の目的について理解させた。学生からは、自己の考え方の特徴がわかった、コラージュはいいストレス発散になった、楽しい時間だったとの評

２　作成した教科書、教材		
1)当事者研究を用いての教材作成	平成23年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部看護学科の講師として担当の「精神看護援助論Ⅱ」と「看護方法論Ⅴ」（いずれも専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）の講義で、浦河べてるの家から出されているビデオ、出版物（「べてるの家の『当事者研究』」医学書院2005年）を教材として使用し講義を行った。実在する人物であるため学生からは精神障害者のイメージがついた、偏見を持っていたが当事者の病気の大変さがわかった、当事者の気持ちが理解できたとの
2)ICF(国際生活分類）の理解を深めるための教材作成	平成23年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部看護学科の講師として担当の「地域統合実習」での学内演習で行うICFを用いた事例図の完成では、具体的な項目がわかないという意見が多かった。そこで生活機能に関する項目がわかる関連図を作成。関連図と書籍を用いて事前学習をしたうえで、実習での学びとして1事例を用い（1事例の）関連図を完成させるようにした。学生からは項目の整理がしやすく、生活機能について深く考えることができたとの評価を得た。
3)iPadを用いた反転授業及び基礎看護技術演習「ベッドメーキング」の実施	平成26年9月～	奈良学園大学では、学生全員がiPadを購入している。またBibiTと称するViewerが配信されている。基礎看護技術演習の授業担当部分で，BibiTに基礎看護技術演習「ベッドメーキング」の動画を組み入れた資料を作成し学生の予習及び演習時とセルフトレーニングで使用している。学生からは特にセルフトレーニングで役立つとの評価を得ている。
4)iPadを用いた反転授業，基礎看護技術「環境」	平成26年9月～	奈良学園大学保健医療学部，基礎看護技術演習の授業担当部分で，環境を構成する諸要因（色彩，音，光，においなど）を組み込んだ「理想の病室」のプログラミングを作成中。冬季休暇前に配信予定。基礎看護学実習Ⅰに向けた反転授業とする予定。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1)学長の評価	平成23年4月～平成25年3月	広島文化学園大学看護学部における職名は講師であるが、勤務を評価され精神看護学領域の領域責任者を任せられていた。

2)広島文化学園大学学生による授業評価アンケート結果における評価	平成24年9月	広島文化学園大学において毎年実施されている学生による授業評価アンケートによると、本人が担当の「精神看護学概論」における教員の授業に対する熱意は「非常に熱意が感じられ好感が持てた」49%理解度は「理解できた」73%、「十分理解できた」15%と高い評価であった。（なお精神看護援助論Ⅰ・Ⅱは演習を含むため他の教員との合同の評価になっており、本人一人の評価は出ていない。）
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)賀茂精神医療センター臨床実習指導	平成12年4月 ～平成12年12月	看護学校３年生及び看護大学3年生の臨床実習を受け入れることとなり、約50名の学生の実習指導に当たった。
2)呉医療センター公開講座講師	平成19年9月	腰痛対策のための公開講座の講師を務めた。
3)広島県看護協会教員養成課程講師（実習指導論）	平成19年9月	広島県看護協会主催講習会で｢実習指導論｣講師を務めた。
4)看護学生の国際交流推進	平成16年 ～平成20年	中細胞診病理学会（中国、韓国、タイなど）と連携し看護学生の国際交流及び学会発表の調整役を行った（代表者：呉医療センター谷山清己研究部長）
5)中国四国地区国立病院機構･国立療養所看護教員研究会会長	平成19年4月 ～平成20年3月	独立行政法人国立病院機構附属の看護学校の教員で作る研究会（会員約80名）の会長を務め、看護研究発表会の開催や交流の推進を図った。
6)広島市まちづくり市民交流プラザ公開講座「老いと看護のコラボレーション」講師	平成21年7月	市民を対象として老いと孫育に関する講義を行った。
7)広島文化学園大学公開講座高校生のための看護学入門講座講師	平成21年 平成22年	高校生を対象とした看護学入門講座で「こころって何だろう」と題した講座を行った。
8)大崎上島自殺防止連続講座「心しなやかに、イキイキ生きる～自分に合ったストレス対処法～」講師	平成23年3月	3回連続講座で、大崎上島町の住民を対象としてストレス対処法についての連続講演を行った。ストレス対処法については呼吸法を中心に実践した。
9)広島市宇品公民館「広島で一番受けたい大学講座」講師	平成23年9月	宇品公民館で「心って何だろう」をテーマに講義を行った。参加者からの質疑応答が活発で大変熱心に参加された。
10)広島県看護協会呉支部看護研究講師	平成24年4月～平成25年3月	複数の病院の看護師を対象に継続的に看護研究指導を行った。

5　その他 ・国家試験受験指導	平成16年 ～平成19年	呉医療センター附属呉看護学校在職時、全国模試(日本模試600校以上参加) 4年連続全国5位以内、2年連続全国1位・国家試験合格100%を維持。広島文化学園大学でも国家試験委員を担当した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格、免許		
1. 看護師免許	平成6年5月	第829524
2. 厚生労働省看護教員養成課程修了（1年間）	平成12年3月	第2071号
3. 厚生労働省看護研修研究センター看護教員再教育講習修了	平成19年8月	第585号
4. 厚生労働省看護研修研究センター医療安全研修（教員対象）修了	平成19年8月	第478号
5. 看護学修士	平成20年3月	呉大学(現広島文化学園大学) 大学院看護学研究科修士課程修了（看護学修士第15号）
2　特許等		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 賀茂精神医療センター看護師	平成6年～平成11年3月（1年間の看護研修研究センター移動をはさむ）平成12年4月～12月	単科の精神病院において，女子開放病棟（平成6年4月～10年3月），重度心身障害者病棟（平成10年4月～11年3月）に勤務した。実務の実績が認められ，賀茂精神医療センター看護部長及び院長の推薦により，中国四国厚生局の選抜試験及び看護研修研究センターの選抜試験に合格し，看護教員養成コースに移動となった。研修後は再び賀茂精神医療センターに戻り、男子閉鎖病棟（平成12年4月～12月）で勤務。院内教育委員職と看護学生の実習指導を任された。なお、教員コース終了後の昇任は看護師長と同格であるため、管理職になるための院内試験は免除されている。
4　その他		なし

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名	概　　要
（著書）				
1.　看護教育の発想―授業をどう変えるか―	共著	平成15年3月	看護の科学社	第1部「看護授業における言葉と経験」2.集約的経験と拡散的経験の項において「腹のぬくもり体験のすすめ」の事例を提供した。言葉によって知るということが不可能な事柄を経験(体験)によって知ったという内容に関して、重度心身障害者看護に関わる経験を記載した。 B4判、全164頁 著者：宇佐美寛、米田和美 本人担当部分：事例文提供（P.6-P.10）
（科研費採択） 1.　基盤研究C ひきこもり者の高齢の親が抱える問題の抽出と支援に関する質的研究		平成27年度～29年度採択		ひきこもり支援は本人が相談に訪れることは通常ないため，家族を介して本人に働きかけるしかなく，家族は重要な共同支援者として位置づけられる。昨今は加齢現象や身体障害などでひきこもり者の親への支援が必要になってきている。そのため訪問看護師の訪問先がひきこもり者宅ということも多い。本研究ではまず訪問看護師へのインタビューを通してケアを通して実践していることや，困難だと感じている問題点を明らかにする。次にひきこもり者の高齢の親の現状を把握し，直面する困難や問題点を明らかにする。これらの結果を踏まえ，関係者ト検討し，必要とされる看護支援のニーズを明らかにする。(本人役割：研究代表者）岡本響子・中川晶・松浦美晴・高橋里沙・上山千恵子
2. 挑戦的萌芽研究 保育士のリアリティショックの測定尺度開発と早期退職を防ぐプログラムの提案		平成27年度～29年度採択		本研究は，新卒保育士のリアリティショックを分析するために，「就職前に抱いていたイメージと現実のギャップの認知」とそれによる「ショック反応」を測定する「二次元リアリティショック測定尺度」を開発する。尺度を用いてリアリティショックの高リスク要因を検討し，保育士養成校や新卒保育士の勤務する保育施設向けに「リアリティショック予防プログラム」を提案する（本人役割：研究分担者）松浦美晴・皆川順・上地玲子・岡本響子
（学術論文）				

1.　痴呆性老人の外泊に向けた家族援助―介護力評価表を使用して外泊時の介護力を知る―　(査読付)	共著	平成11年5月	日本精神科看護学会誌 1999,vol.42　no.1 P.222-P.224	調査研究。精神科病棟に入院中の認知症高齢者の家族に対して短期間の外泊に適応できるよう介護力評価表を作成し、受け持ち看護師が家族に聴き取り調査を実施した。結果、ADLが低くても家族の意欲が外泊を可能にさせていることが明らかになった。看護師は認知症高齢者に対する理解が深まるように家族に対しても関わることで外泊が可能になることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、結果を担当
2.　(原著) 基礎看護技術「生活環境」における学習効果を高めるための授業の工夫―生活環境を体験的に学習させた授業過程を振り返る(査読付)	単著	平成16年10月	中国四国地区国立病院機構･国立療養所看護研究学会誌vol.1 P.78-P.81	感情に注目し、快･不快に働きかけた生活環境の授業の実践報告。色、におい、音に焦点化し、お香をたく、ヒーリング音楽を聴くなど感覚を刺激する教育方法を用いて環境の講義を実践した。結果、授業終了後に学生が提出した「理想の病室」の絵には心の落ち着く色彩、かすかなアロマの香りなど患者の立場に立って考えた病室が表現された。自らの感覚を刺激し、体験することで、学生たちは適切な生活環境について自ら気づき、思考できるようになることが示唆された。
3.　(原著) 基礎看護学実習Ⅱ終了後のレポート分析からみた実習指導者の行動 (査読付)	共著	平成19年2月	中国四国地区国立病院機構･国立療養所看護研究学会紀要 vol.3, 2007掲載 P.75-P.82	基礎看護学実習Ⅱ終了時に提出された自由記載の記述から、実習指導者の関わりとして記載されている内容を抽出し、コード化した。指導者は看護過程の展開全ての場面で適切な助言や実践を通して学生指導に関わっていることが明らかになった。特に実践の場面では効果的な指導がなされていた。学生と共に患者のケアの成果の喜びを分かち合う指導者の行動が、学生にケアの保証を与え、自己効力感を高めることにつながると示唆された。 本人担当部分：序論から考察に至るまで論文作成全体を担当。 共著者:岡本響子、崎本美子、橋本笑子他
4.　精神看護学実習において学生に受け持たれる患者の経験に関する研究 (修士学位論文)	単著	平成20年3月	呉大学 (現広島文化学園大学) 大学院看護学研究科修士論文	精神看護学実習において看護学生に受け持たれる患者がどのような経験をしているのか半構成的面接法により逐語録を作成し、カテゴリー化した。その結果、学生に受け持たれている患者の経験は、有意義な時間や生活支援への感謝といった肯定的経験、ついてまわられ不快などの否定的経験などが存在することが明らかになった。実習方法の課題については患者の選定方法や、説明と同意に基づく受け持ちの決定方法などが明らかになった。 A4判、全42頁

5.　（原著）看護学生に受け持たれる患者の経験―精神疾患患者へのインタビューから―（査読付）	共著	平成20年4月	第39回日本看護学会論文集「看護教育」 P.292-P.294	精神看護学実習において看護学生に受け持たれる患者がどのような経験をしているのか知るため、受け持たれた経験のある患者にインタビューを行った。半構成的面接法により逐語録を作成し、カテゴリー化した結果、学生に受け持たれている患者の経験は、有意義な時間や生活支援への感謝といった肯定的経験、ついてまわられるなど学生のコミュニケーション技術の未熟さに対する否定的経験などが存在することが明らかとなった。 本人担当部分：序論から考察に至るまで論文作成全体を担当。 共著者：岡本響子、東中須恵子、村木士郎
6.　精神看護学実習における学生の学びの分析Ⅱ（査読付）	共著	平成21年1月	第40回日本看護学会論文集「看護教育」 P.254-P.256	精神看護学実習における看護学生64名が記述した学びを、記述内容からコード化とカテゴリー化を行い、実習目標の主要な3つの目標と照合した。その結果、日常生活援助や社会復帰施設における援助活動を通して、実習目標はほぼ到達されていることがわかった。本学では学生が自らの体験を通して実習することに重点をおいているが、自己を振り返り、患者との関係をより発展させるためには、学生間での共有化が必要であるということも示唆された。 本人担当部分：データの質的分析、考察を担当。 共著者：村木士郎、東中須恵子、岡本響子
7.　精神看護学実習における学生の学びに関する研究(査読付)	共著	平成21年3月	看護学統合研究10巻2号 P.31-P.38	精神看護学実習を終了した看護学生64名の実習後最終レポートを使って記述内容を分析した。773文が抽出され、①精神保健医療における看護師の役割②患者理解③患者・看護師関係の3カテゴリーが生成された。学生は人間関係づくりに苦悩しながらも、自己を媒体とする精神科看護の特徴を理解し精神障がい者観を変化させていることがわかった。学生個々の体験を意味づけながら、学生の思考過程に沿った学習援助方法の工夫が示唆された。 本人担当部分：データの質的分析、考察を担当。 共著者：東中須恵子、村木士郎、岡本響子
8.　服薬アドヒアランスの獲得に向けての看護者の関わり(査読付)	共著	平成21年10月	看護学統合研究11巻1号 P.27-P.32	服薬アドヒアランスの考えに基づき患者教育を実施し、服薬自己管理に結びついた患者教育を振りかえった。入院患者29名に，病棟看護師が作成したシナリオに沿って薬や診断名，薬の副作用について教育を行った。教育に当たっては，患者をGAF 尺度の結果によりグループ分けし，自作の絵画を使ったりデモンストレーションを行いながら，質問形式の方法で進めて行った。その結果1名の服薬自己管理が開始となった。 臨床病院との共同研究。 本人担当部分：考察を担当。 共著者：吉元初美、藤崎由美子、岡本響子（大学側１番目）他

9.　学生が考え実践できる臨地実習の工夫―経験型実習の試み―(査読付)	共著	平成22年3月	看護学統合研究第11巻2号 P.29-P.36	本学の精神看護学実習指導者が、学生の手助けとなるような経験の意味づけをしているかどうか検討した。①学生の、見た、聞いた、感じたことを経験として活用することで学生の思考を発展させている、②教材として使用するにあたり指導者は、学生の経験を聴き共有化する努力が必要である、③指導型実習指導と経験型実習指導が混合することもあるが、指導者は思い込みに注意が必要であるということが明らかになった。 本人担当部分：序論及び結果を中心に担当。
10.　臨地実習における看護学生のコミュニケーション時の笑顔について(査読付)	共著	平成23年1月	日本看護学会論文集第41回「看護総合」 P.299-P.302	臨地実習における看護学生の笑顔の意味について3名の学生に半構成的インタビューを実施。インタビュー内容を意味のまとまりごとにカード化し、KJ法にもとづき質的に分析した。結果、３つの最終表札が生成された。看護学生の笑顔には「自然な笑顔」もあるが、患者とのコミュニケーションを優先し、「無理して笑う」ことや、「緊張を隠すため笑う」こともあった。患者との信頼関係の深まりと自然な笑顔の表出が関連することが示唆された。 本人担当部分：序論と考察を担当。 共著者：金川潮里、岡本響子
11.　新人看護師のリアリティショック尺度の開発	共著	平成23年1月	中国四国心理学会論文集第43巻 P.46	就職1～3年目の新人看護師13名に半構造化面接を実施し、発言内容をKJ法の手続きに従いカード化した。分析協力者19名が137枚のカードを分類し、カードの距離行列を対象にWARD法によるクラスター分析を行った。類似のクラスターをまとめて最終的に6カテゴリー51項目の質問を作成した。結果をもとに就職3ヶ月目の新人看護師100名にアンケート調査を行い、仕事への満足、労働負荷、看護実践の問題、職場の人間関係の4因子が抽出された。 本人担当部分：序論から考察に至るまでの論文作成全体を担当。 共著者：岡本響子、岩永誠
12.　看護学生が大学行事に参画する意義と看護教育活動としての効果―オープンキャンパスに関する学生へのアンケート結果から―(査読付)	共著	平成23年10月	看護学統合研究13号1巻 P.22-P.28	本学1年～4年次のオープンキャンパスに参加した学生にアンケートを実施した。結果、全学年に共通して、仲間及び教員との関係性、看護を学ぶことへの充実感、後輩への励ましと応援に関して高い値が示された。学生は高校生や参加者との関わりを通して、看護職者にとって重要な人間関係づくりを自ら積極的に行っていた。オープンキャンパスへの参加は、学生が主体的に学ぶ姿勢を支援することにつながると示唆された。 本人担当部分：データ分析を担当。 共著者:讃井真理、田村和恵、岡本響子（6番目）他

13.　新人看護師の就職前後における個人要因とストレス反応・バーンアウトの検討	共著	平成24年1月	中国四国心理学会論文集第44巻 P.89	新人看護師の就職前後における個人要因とストレス反応・バーンアウトに関して、重回帰分析を用いて検討した。就職後はソーシャルスキルや充実感が低下し、脱人格化、心身反応の上昇が認められた。自尊心は就職前はネガティブ反応のみに影響していたが、就職後はポジティブ反応にも影響していることがわかった。就職後の職場適応には自尊心が強く関連する。実習時からのソーシャルスキルトレーニングや自尊心を育む支援が必要である。 本人担当部分：序論から考察に至る論文作成全体を担当。
14.　臨地実習による看護技術の経験及び技術水準の到達状況―看護学生の「看護技術経験禄」から(査読付)	共著	平成24年10月	看護学統合研究14巻1号 P.1-P.12	A大学看護学生の看護技術経験録を分析。水準1の到達目標は80%であった。一方身体侵襲に伴う技術の到達率は20%以下であった。水準が上がるほどその割合は高く、水準3の見学ができたのは20%未満という結果になった。実習で経験できる技術には限界や制限があることから学内演習の強化や事後の振り返り学習を促すことの重要性が示唆された。 本人担当部分：データ分析を担当。 共著者；成順月、佐々木秀美、岡本響子（8番目）他
15.新人看護師のリアリティショックの推移とストレス反応に及ぼす影響	共著	平成25年2月	中国四国心理学会論文集第45巻 P.61	新人看護師の就職前のストレス反応を統制したうえで、リアリティショックと個人特性に及ぼす影響を重回帰分析を用いて検討した。経時的変化では就職後には個人特性は全体的に低下することが示された。ストレス反応では最も情動反応や自律神経反応が高いのは就職6カ月時であった。ストレス反応への影響では、情動反応に対してはリアリティショックの「職場の人間関係」が1年を通して説明率が高いことが示された。 本人担当部分：序論から考察に至るまで論文全体を担当した。
16.看護学生から看護師に至る就職前後の個人要因とストレス反応・バーンアウトの検討－実習時と就職3ヶ月目との比較（査読付・原著）	共著	平成25年	日本医学看護学教育学会誌（22），26-32，2013	就職前から就職後にかけて同一対象者に対してパネル調査を行い、ストレス反応やバーンアウトを規定している要因を就職前後で比較することを目的とした。調査の結果、就職後はストレス反応やバーンアウトが高まり、適応性が低くなることがわかった。また情動焦点型対処が抑うつ反応に影響していることがわかった。自尊心は就職後の適応性を高めており、学生時代から自尊心を高めておくことがストレスの低減につながることが示唆された。 本人担当部分：序論から考察に至るまで論文全体を担当した。 共著者：岡本響子、岩永誠

17. 地域統合実習の学内実習にICF（国際生活分類）モデルをとりいれて― ICF を用いたメリットとデメリット―(査読付)	共同	平成25年9月	看護学統合研究15巻1号 P.1-P.7	本研究は，地域統合実習の学内実習にICF（国 際生活機能分類）モデルをとりいれたメリット・デメリットを分析し，今後の実習のあり方について示唆を得ることを目的とした。 １． ICF モデルを活用することで，臨地実習で出会った対象者の全体像を把握することがで き，対象理解を深めていることが示された。 ２． ICF モデルを活用することで相互循環的な思考が可能になり，人が生きるという視点から 対象者や対象者を支えるシステムを捉えなお す事ができるようになることが示された。 ３． ICF モデル図は全体像が俯瞰できるため，対象者に対してどのような支援がなされている
18.新人看護師のリアリティショック尺度の開発(査読付)	共同	平成27年4月	インターナショナル Nursing Care Research 14巻1号	本研究では，新人看護師が就職直後に抱くリアリティショックを，予想と実態との認知的不整合の視点から測定する尺度を開発した。51項目から構成されるリアリティショック尺度原案を因子分析した結果，「生活の変化に関するギャップ」「看護の実践に関するギャップ」「職場の人間関係に関するギャップ」「新人教育に関するギャップ」「患者・家族との関係に関するギャップ」「就職後の満足感に関するギャップ」の41項目6因子が抽出された。またバーンアウト尺度及びストレス反応と中程度の関連性も示され，信頼性と妥当性が確かめられた。 本人担当部分：計画書作成から考察まですべて担当 共著者：岡本響子、岩永誠
19.就職3ヵ月時における新人看護師のリアリティショックの体験（査読付） （その他） （学会発表）	共同	平成27年6月掲載決定	日本行動科学会雑誌 vol.30,No.1	本研究の目的は新人看護師Ａさんに起こった就職3か月間の体験を通して，リアリティショック軽減のための支援について示唆を得ることである。ＫＪ法による分析の結果【自分が押し殺され続けている】[たった一人だけみたいな感じ][周りの支えや身についた技術が支えてくれている]の3つの最終表札が抽出された。【自分が押し殺され続けている】と[たった一人だけみたいな感じ]の島は，お互いが影響しあっていた。2つの島をつなぐ双方向の悪い相互作用によって，Ａさんの苦しみは強固に続いていく状態であった。一方[周りの支えや身についた技術が支えてくれている]の島は小さく，島同士の関係は見いだせなかった。Ａさんに起こったリアリティショックとは，学校で学習したことと異なり，実際の臨床において患者さんに十分なケアができていると感じられないことから生じる苦しみであることが示された。そこには対患者，対看護師と，人間関係が介在することから生じる精神的苦痛があった。また自己肯定感が持てず苦しみが増幅している状況では，周りに人はいたとしてもたった一人だけのような感じで孤立感が強まっていくことがわかった。 共著者：岡本響子，松浦美晴 本人担当部分：研究計画から考察まで主として担当した

1.　痴呆性老人の外泊に向けた家族援助―介護力評価表を使用して外泊時の介護力を知る―	共同	平成11年5月	日本精神科看護技術学会第24回鹿児島大会学会発表	調査研究。精神科病棟に入院中の認知症高齢者の家族に対して短期間の外泊に適応できるよう介護力評価表を作成し、受け持ち看護師が家族に聴き取り調査を実施した。結果、ADLが低くても家族の意欲が外泊を可能にさせていることが明らかになった。看護師は認知症高齢者に対する理解が深まるように家族に対しても関わることで外泊が可能になることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、結果を担当 共同発表者：奥弘子、岡本響子、秋田幸子
2.　極めて重篤な強迫症状をもつSさんと関わって―受容･共感･距離を取るの3方向から考える―	共同	平成11年11月	国立病院療養所総合医学会(札幌)学会発表	事例研究。境界性人格障害がベースにあり同時に強迫観念、強迫行為が著しいS氏との関わりを振りかえった。巻き込み型強迫のある患者に対して、看護師は病状理解が不足し、ある者は陰性感情をある者は陽性感情を抱くに至った。こういった逆転移現象についてチームで振り返り、関わりを統一した。本事例から境界例の患者を受容し、共感的に関わること、距離のとり方の難しさ、チーム全体で関わることの重要性について考察した。 本人担当部分：結果を担当。 共同発表者：新原ミチ子、岡本響子、高野学美
3.　基礎看護技術「生活環境」における学習効果を高めるための授業の工夫―生活環境を体験的に学習させた授業過程を振り返る	単独	平成17年9月	中国四国地区国立病院機構･国立療養所第1回看護研究学会発表	感情に注目し、快･不快に働きかけた生活環境の授業の実践報告。色、におい、音に焦点化し、お香をたく、ヒーリング音楽を聴くなど感覚を刺激する教育方法を用いて環境の講義を実践した。結果、授業終了後に学生が提出した「理想の病室」の絵には心の落ち着く色彩、かすかなアロマの香りなど患者の立場に立って考えた病室が表現された。自らの感覚を刺激し、体験することで、学生たちは適切な生活環境について自ら気づき、思考できるようになることが示唆された。 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子
4.　Mucinous breast carcinoma with endocrine differentiation:a case report	共同	平成17年11月	The 4th Korea-Japan Joint Meeting for Diagnostic Cytopathology	第4回韓国日本合同細胞診会議において内分泌への文化を示す粘膜癌の1例を報告。内分泌への分化を示す粘膜癌を術前細胞診において確定診断した。術前細胞診からは有用な情報を得ることができることがわかった。 本人担当部分：結果を担当。 共同発表者：T.Toda, K.Taniyama, K.okamoto.et.al
5.　prostatic adenocarcinoma detected by fine needle aspiration cytology(FNAC)of cystically-dilated seminal vesicles :a case report	共同	平成17年11月	The 4th Korea-Japan Joint Meeting for Diagnostic Cytopathology	第4回韓国日本合同細胞診会議において嚢胞性に拡張した精嚢腺の穿刺吸引細胞診で診断した前立腺癌の1例を報告。精嚢腺が癌におかされることは珍しい。嚢胞状に拡張した精嚢腺の穿刺吸引細胞診に免疫組織化学を加えることにより、前立腺癌の精嚢腺浸潤と確定した1例を報告。 本人担当部分：結果を担当。 共同発表者：K.Taniyama, K.Ishida, K.okamoto.et.al

6.　看護学生に受け持たれる患者の経験―精神疾患患者へのインタビューから―	共同	平成20年8月	第39回日本看護学会-看護教育－発表(岐阜)	精神看護学実習において看護学生に受け持たれる患者がどのような経験をしているのか知るため、受け持たれた経験のある患者にインタビューを行った。半構成的面接法により逐語録を作成し、カテゴリー化した結果、学生に受け持たれている患者の経験は、有意義な時間や生活支援への感謝といった肯定的経験、ついてまわられるなど学生のコミュニケーション技術の未熟さに対する否定的経験などが存在することが明らかとなった。 抄録共著者：岡本響子・東中須恵子 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子
7.　新人看護師Aさんが就職3か月目を振り返る―Aさんへのインタビューより―	単独	平成22年3月	第20回日本医学看護学教育学会発表(松江)	リアリティショックに陥りやすい時期である就職3ヶ月時の新人看護師にインタビューを実施。KJ法にて質的に分析した。「指導者の態度に振り回される」「看護というよりひたすら作業をしている」「先輩や患者さんに励まされている」の３つの最終表札が生成された。Aさんは極度にストレスが高く友人にも相談できず、孤立していた。同僚や先輩の励ましはあるが、ストレスを支えるほどの力にはなっていないことが明らかになった。 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子
8.　臨地実習における看護学生のコミュニケーション時の笑顔について	共同	平成22年4月	日本看護学会看護総合発表(山口)	臨地実習における看護学生の笑顔の意味について3名の学生に半構成的インタビューを実施。インタビュー内容を意味のまとまりごとにカード化し、KJ法にもとづき質的に分析した。結果、３つの最終表札が生成された。看護学生の笑顔には「自然な笑顔」もあるが、患者とのコミュニケーションを優先し、「無理して笑う」ことや、「緊張を隠すため笑う」こともあった。患者との信頼関係の深まりと自然な笑顔の表出が関連することが示唆された。 抄録共著者：岡本響子、金川潮里 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子
9.　新人看護師のリアリティショック尺度の開発	共同	平成22年11月	中国四国心理学会第66回大会発表(鳥取)	就職1～3年目の新人看護師13名に半構造化面接を実施し、発言内容をKJ法の手続きに従いカード化した。分析協力者19名が137枚のカードを分類し、カードの距離行列を対象にWARD法によるクラスター分析を行った。類似のクラスターをまとめて最終的に6カテゴリー51項目の質問を作成した。結果をもとに就職3ヶ月目の新人看護師100名に
10.　新人看護師のリアリティショック尺度の開発のプロセス	共同	平成22年11月	第1回ストレス研究会(川崎医療福祉大学)	新人看護師のリアリティショック尺度開発のプロセスを発表。中国四国心理学会第66回大会での発表に加え、リアリティショック尺度の因子分析結果の具体的項目について報告した。 パワーポイント作成：岡本響子 発表者：岡本響子

11.　看護学生から看護師に至る 就職前後の状態変化の検討 ―卒業前と就職後3ヶ月目を時期と学校別で 比較して―	共同	平成23年1月	第2回ストレス研究会（広島大学）	卒業前と就職後３ヶ月目を時期と看護専門学校卒業生と看護大学生別で比較・検討した。分散分析の結果、大学卒業生の方が就職後のストレス反応を高く自覚しており、専門学校卒業生の方がソーシャルスキルを活用できストレスが低い結果となった。また就職直後は、大学卒業生のほうが自尊心が低下し、ソーシャルスキルが効かず、抑うつ反応が高く現れることがわかった。ただし2校での分析であるため一般化は難しい。 抄録共著者：岡本響子・岩永誠 パワーポイント作成：岡本響子 発表者：岡本響子
12.　医療観察法病棟実習の学び―実習の問題点から見えてきたこと―	共同	平成23年3月	日本医学看護学教育学会第22回大会発表(出雲	医療観察法病棟実習での学びを内容分析手法により分析。実習の問題点を中心に発表した。医療観察法病棟に対する学生のイメージは、怖いから他の精神科病棟と変わらないに変化していた。学生の中には、被害者のことを考え複雑な葛藤が生じ、治療の目的や必要性の理解に苦しむ者もいた。今後の課題として、精神看護の倫理と人権についての講義時間を増やし、実習病院の教育担当者と共同での講義を検討することが明確になった。 抄録著者：岡本響子 パワーポイント作成：岡本響子 発表者：岡本響子
13.　医療観察法病棟実習の学び	共同	平成23年10月	日本看護学会第42回大会看護教育(松山)	医療観察法病棟実習での学びを内容分析手法により分析。学生は、充実した治療環境や多職種チームによる医療提供等について積極的に学んでいた。また医療観察法病棟で行われている看護は一般の精神科看護と変わらないという認識に変化し、自らの偏見や社会の偏見の根深さに気づいていた。一方で、もし自分が被害者の家族だとしたら複雑な気持ちであるとの葛藤が生じていた。 抄録著者：岡本響子 ポスター作成：岡本響子 発表者：岡本響子
14.　新人看護師の就職前後における個人要因とストレス反応・バーンアウトの検討	共同	平成23年11月	中国四国心理学会第67回大会発表(比治山大学)	新人看護師の就職前後における個人要因とストレス反応・バーンアウトに関して、重回帰分析を用いて検討した。就職後はソーシャルスキルや充実感が低下し、脱人格化、心身反応の上昇が認められた。自尊心は就職前はネガティブ反応のみに影響していたが、就職後はポジティブ反応にも影響していることがわかった。就職後の職場適応には自尊心が強く関連する。実習時からのソーシャルスキルトレーニングや自尊心を育む支援が必要である。 抄録共著者：岡本響子・岩永誠 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子

15.　A大学看護学生の臨地実習におけるストレス要因の検討	共同	平成24年3月	日本医学看護学教育学会第22回学術学会（米子）	A大学看護学生に対しアンケート調査により臨地実習ストレッサーを測定。因子分析の結果4因子が抽出された。そのうち「知識・技術に関するストレス」因子においてのみ先行研究に類似した結果であった。「理不尽な出来事に対するストレス」因子・「怒りや不安によるストレス」因子・「やりたいことが出来ないストレス」因子が独自の因子として抽出された。バーンアウト因子との相関も高く、A大学看護学生は適切なストレス対処が行われずストレス反応を呈している可能性が示唆された。またやりたいことがやれないストレスが高い人は脱人格化が高いことから対象者に対して人間的に接することが難しいと認知している可能性が示唆された。 抄録著者：岡本響子
16.　新人看護師のリアリティショックの研究―就職3カ月時、6カ月時の分析―	共同	平成24年3月	第3回ストレス研究会（川崎医療福祉大学）	就職3ヶ月時と6カ月時のリアリティショックの実態について分散分析を用いて検討。就職3ヶ月時・６カ月時とも看護実践困難を予想以上に強く感じているが６カ月時では有意に低下することがわかった。また就職3ヶ月時・６カ月時では、患者からの感謝や就職後の満足感も予想以上に強く感じているが，６カ月時では有意に低下することがわかった。これらのことから就職直後は看護実践の困難を感じつつも、患者に支えられていると感じながら職場に適応しようとしている。また就職後６カ月時は看護の実践に慣れつつも，ポジティブ面での支えを感じることも低下した状態で職場に適応し始めていることが考えられる
17.　精神科地域包括ケアにICFの視点をとりいれた地域統合実習の試み	共同	平成24年9月	第9回広島保健学学会学術集会・第13回広島保健福祉学会学術大会合同学会	実習での体験を踏まえ1事例をICFモデルに沿って完成させるというグループワークを実施。ICFの利点として「ストレングスに着目できたなど多くの学びが抽出された。統合実習の目標である包括型地域支援の全体像の理解、利用者主体の支援の重要性については、目標に到達できている。社会資源等、背景因子の強みが利用者の目標達成にどう結び付いていくかを考えさせ、より全体を統合できるよう学習支援することが示唆された。 抄録共著者：岡本響子・森下歩 発表者：岡本響子
18.　新人看護師のリアリティショックの推移とストレス反応に及ぼす影響の検討	共同	平成24年11月	中国四国心理学会第68回大会発表（福山大学）	リアリティショックを受けた人がどう心理的に推移していくのか、どんな個人要因が影響するのかについて縦断調査を行い検討した。リアリティショックは就職3カ月時が最も高く、徐々に低減することがわかった。また1年を通してRS「職場の人間関係」がストレス反応に大きく影響するが，特に就職３ヶ月時と6カ月時の影響は大きいことがわかった。就職後の研修は技術的側面の支援が中心であるが、就職直後の段階から心理面での支援の必要性が示唆された。 抄録共著者：岡本響子・岩永誠 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子

19.新人看護師のリアリティショックの推移とバーンアウトに及ぼす影響の検討	共同	平成25年3月	日本看護研究学会第26回中国四国学術集会	新人看護師の就職前のバーンアウトを統制した上で、リアリティショックと個人特性に及ぼす影響を重回帰分析を用いて検討した。経時的変化では就職後個人特性は全体的に低下した。就職3カ月時では人間関係の難しさに関するリアリティショックがバーンアウトに影響し、就職6カ月時になると，過剰労働感が影響していた。新人看護師は看護実践困難感というよりも、職場の人間関係の困難さでリアリティショックを強く感じ，半年後には過剰労働感に推移することがわかった。 抄録共著者：岡本響子、岩永誠 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子
20.新人看護師の就職前後のバーンアウトと就職後のリアリティショックの因果関係の推定	共同	平成26年8月	日本看護研究学会第40回学術集会（奈良）	【目的】3波のパネル調査によって，就職前後のバーンアウトと就職後のリアリティショックの因果関係を明らかにする.【研究方法】対象者:卒業前の看護専門学校3年生と看護大学4年生142名.調査時期:2011年から2012年にかけて就職前,就職後3ヶ月時,6ヵ月時の計3回の調査を実施。調査項目：筆者が開発したリアリティショック尺度(5件法)とバーンアウト尺度(6件法)を用いた.得られた回答について交差遅延効果モデルに基づいた共分散構造分析を実施した【結果】就職前と3ヶ月時の情緒的消耗感は3ヶ月時と6ヵ月時のリアリティショックの下位因子に影響を及ぼしていた.また3ヶ月時のリアリティショックの下位因子（過剰労働感）から6ヵ月時の情緒的消耗感に対しても有意な影響がみられた.【考察】看護学生時代に情緒的消耗感が高い新人看護師は,新たに就職した職場環境への適応が困難であると,リアリティショックを高く認知し,次にそのリアリティショックが原因となって6ヵ月時の情緒的消耗感に影響することが考えられる. 抄録共著者：岡本響子、岩永誠 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子
21. Research trends in psychiatric nursing on transition to the community	共著	平成26年9月	7th International Conference of Health Behavioral Science London, United Kingdom,	Literature published on MED LINE, CINAL, and CiNii in the last decade were reviewed using the following keywords: psychiatric nursing, discharge, community, and transfer.Many intervention studies have been conducted overseas, whereas in Japan, there have been explanatory studies and only few investigations with the exception of case studies, despite the revision to the law and a social movement promoting community care. To facilitate the smooth transition from hospitals to communities, effective variables in case studies and explanatory studies should be analyzed and intervention programs should be developed and their effectiveness investigated by using pilot studies among others. Theories of patient-nurse relationship and recovery should be

22.就職直後のバーンアウトがその後のリアリティショックの認知に及ぼす影響	共著	平成27年6月	第30回日本行動科学会学術大会	新人看護師のリアリティショックは、職場不適応を起こし、バーンアウトを引き起こすことや、早期離職につながることから問題視されている。バーンアウトがあると抑うつ状態が生じるといわれる。小粥1)は看護学生を対象に調査した結果、抑うつ状態により認知のゆがみが生じることを報告している。そのため，就職後にバーンアウトしていると、否定的な認知が行われやすくなり、その後のリアリティショックも過剰に評価してしまう可能性がある。リアリティショックが高まるのは就職3か月頃や6か月頃といわれる。本研究では3波のパネル調査によって、就職3か月時のバーンアウトが就職6か月時のリアリティショックに与える影響を検討することとした。 抄録共著者：岡本響子、岩永誠 ポスター作製：岡本響子 発表者：岡本響子

教　育　研　究　業　績　書

平成27年5月12日

氏名　　嶋田　理博

研究分野	研究内容のキーワード
天文学、科学教育	光学赤外線天文学、恒星物理学、自然科学教育（理科、地学、情報）

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）		
2　作成した教科書，教材		
1）テキスト情報基礎演習	平成17年4月	奈良産業大学 情報学部 専門科目 「HTML演習」「文書構造化演習」教科書
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）		
5　その他		
1）王寺町りーべるカレッジ「さよなら冥王星、ようこそエリス～天文学の進歩と広がる太陽系～」講演	平成19年9月29日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 2006年に国際天文連合が、冥王星を「準惑星」と定義したのを受け、18世紀末の天王星の発見から現在に至るまでの人類の太陽系観の変遷を振り返った。観測技術の進歩が太陽系を拡大してきたこと、地球から遠く離れた太陽系外縁の天体を知ることが人類にどのように関わってくるか、という観点から現在の太陽系天文学を解説した。
2）少年宇宙教室「太陽をさぐる」講師	平成20年8月23日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 平成20年度 地域活動支援企画No.20183 後援：三郷町教育委員会 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。過去の太陽黒点数の変化から、太陽黒点が11年周期で変化していることを紹介し、現在、そして参加者の誕生年には太陽がどのような状態にあったかを考察してもらった。また、過去の太陽表面のスケッチや撮像写真を公開データベースから取得し、参加者や家族の生まれた頃の太陽がどのような状況であったかを印刷した簡単な冊子を制作してもらった。
3）奈良県公共図書館・大学図書館 横断検索システムの制作と管理・運営	平成20年9月 ～現在	本学情報学部 中尾准教授（当時）とともに、ゼミ学生を指導し、奈良県内の公共図書館・大学図書館を串刺しにして検索するシステムを開発・公開した。当時、公共図書館だけの横断検索や大学図書館だけの横断検索は例があったが、両方を横断する検索はほとんど例がなく、先駆的であった。また、GoogleMapsと連携し、図書館の所在が地図上に示されるのも特徴である。 http://www.nara-su.ac.jp/~rihaku/library/search.html

４）少年宇宙教室「星の光のふしぎ」講師	平成20年10月18日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域科学技術理解増進活動推進事業 平成20年度 地域活動支援企画 No.20183 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。レプリカグレーティングと紙箱を使い、簡易分光器の製作を指導した。製作した分光器を通して、身近にある様々な光源を観察し、光源によってスペクトルが違うこと、太陽（青空）のスペクトルには吸収線が見えることに気づいてもらい、分光観測によって、対象の物理状態を知ることが出来ることを解説した。
５）教職員のための公開講座2008「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成20年12月25日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
６）奈良県高等学校体育連盟テニス専門部ウェブサイトの制作と管理・運用	平成20年12月 ～現在	平成21年に奈良県で高校総体（「近畿まほろば総体」、テニス競技開催地は奈良県）が開催されるにあたり、奈良県高体連テニス部から、テニス競技のウェブサイトを開設したいとの要請を受けた。ゼミ学生を指導し、サーバレンタル契約やドメイン名取得から始め、ウェブサイトをゼロから構築した。現在も更新業務を行い、維持・管理中である。 http://hsaf.nara-tennis.org/
７）教職員のための公開講座2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成21年8月5日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
８）少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する木星とその衛星」講師	平成21年10月24日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成21年度 地域活動支援企画No.21120 世界天文年2009公認イベント No. 2900601 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「世界天文年2009」の公認イベントの1つとして、400年前にガリレオ・ガリレイが天体観測に用いたのと同口径の口径4cmの望遠鏡の製作を指導した。あいにく曇天だったため、天体は観測できず、ポインティング、ピント合わせなど望遠鏡の操作法を練習した。あわせて、ガリレオが発見した木星の４大衛星の運行について、模型を用いて解説した。
９）少年宇宙教室「手作り望遠鏡で観測する夜空の星々」講師	平成21年11月28日	独立行政法人 科学技術振興機構 地域の科学舎推進事業 平成21年度 地域活動支援企画No.21120 世界天文年2009公認イベント No. 2900602 後援：三郷町教育委員会 　「世界天文年2009」の公認イベントの1つとして、10月に開催した「少年宇宙教室」に引き続き、参加者が製作した望遠鏡を用いて、月、木星とその衛星の観測を行った。あわせて、望遠鏡の結像の仕組みを数十cmサイズのフレネルレンズを使った模型を使って解説した。また、星座早見盤も製作した。
１０）教職員のための公開講座2009「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成21年12月25日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。

１１）教職員のための公開講座2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成22年8月4日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
１２）少年宇宙教室「探査機『あかつき』でさぐる宇宙」講師	平成22年8月21日	主催：奈良産業大学、後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生（主に低学年）とその保護者を対象とした科学教室を開催した。金星探査機「あかつき」の打ち上げに関連し、地球とは全く異なる金星の物理状態・気象状態、そして金星探査機「あかつき」のミッションと期待される観測成果について紹介した。また、金星がなぜ満ち欠けして見えるかを理解するために、太陽・地球・金星とそれらの位置関係を再現する模型の製作を指導し、地球の位置から見た金星が満ち欠けし、大きさも変化することを解説した。
１３）教職員のための公開講座2010「パーソナルコンピュータの製作」講師	平成22年12月27日	主催：奈良産業大学 後援：大阪府教育委員会、奈良県教育委員会 　幼稚園、小・中・高等学校、支援学校の教職員研修のための公開講座を開催した。市販のパーツを組み合わせて、コンピュータを製作するとともに、各パーツの働き、コンピュータの動作原理を解説した。組み立てたパソコンにはLinuxをインストールし、ネットワーク接続の設定や、各種ユーティリティーソフトの使い方を解説し、ウェブサーバソフトをセットアップするまでを実習した。
１４）奈良学園登美ヶ丘小中高　天体観望会　講師、講演「星の一生と星雲・星団」	平成23年3月12日	主催：奈良学園登美ヶ丘小中高 　奈良市、生駒市、木津川市、精華町在住の小学生と保護者対象の公開講座において、天体観望会に先立って講演を行った。当日参加者が望遠鏡で観望する星雲・星団は星の生死と関係があり、それらを観測することによって星が誕生してから最期を迎えるまでの物理が分かることを紹介した。
１５）少年宇宙教室「太陽を回る星々」全３回 実施主担当者	平成23年8月7日 平成23年8月20日 平成23年10月16日	独立行政法人 科学技術振興機構 科学コミュニケーション連携推進事業 平成23年度　機関活動支援 企画No.2300217 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「太陽を回る星々」をテーマに、 ・太陽系の８惑星 ・海王星以遠の小天体 ・太陽系外の惑星 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全３回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。
１６）少年宇宙教室「300年ぶりの天文ショー 金環日食を見よう」講師	平成24年5月19日	主催：奈良産業大学 後援：三郷町教育委員会 　地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。奈良県下では282年ぶりに見られる平成24年5月21日の金環日食について、日食の起こる原理や観測方法を解説し、日食観測用のサングラスを製作した。あわせて、近年活発になりつつある太陽活動のダイナミズムを、太陽観測衛星「ひので」や「SDO」の画像を交えて紹介した。当日の活動は奈良新聞5月20日版にて取り上げられた。
１７）王寺町りーべるカレッジ「宇宙の誕生と加速膨張」講演	平成24年9月1日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 　人類が歴史上どのように星や銀河までの距離を測り、宇宙の大きさを測ってきたのか、について紹介し、宇宙膨張が発見された経緯や当時の宇宙観への影響について解説した。また、2011年にノーベル物理学賞を受賞した宇宙の加速膨張の発見とその意義について論じた。
１８）王寺町りーべるカレッジ「もう一つの地球を探す」講演	平成24年9月15日	主催：王寺町、共催：奈良産業大学 　1995年に初めて発見されて以降、現在、700個以上の太陽系外惑星が発見されている。これら太陽系外惑星を発見する観測手段を解説するとともに、見つかった太陽系外惑星の特徴や、地球に似た惑星が存在する可能性について論じた。

１９）教職員のための公開講座2010「プレゼンテーションツールPrezi講座」講師	平成24年12月25日	主催：奈良産業大学、後援：奈良県教育委員会 PowerPointのような紙芝居的なプレゼンではなく、キャンバス上に二次元的に配置された素材の間を移動・ズーミングしてプレゼンするツールとして脚光を浴びているPreziの講習を行った。Preziのアカウント取得方法を始め、基本的な活用から、グループワークへの応用までを実習を交えて解説した。
２０）少年宇宙教室「宇宙を調べるモノづくり」実施主担当者および講師	平成25年8月10日 平成25年8月31日 平成25年10月12日	主催：奈良産業大学 情報学部 後援：三郷町教育委員会 助成：独立行政法人 科学技術振興機構（平成25年度 科学技術コミュニケーション推進事業：企画No.250068） 地域の小学生とその保護者を対象とした科学教室を開催した。「宇宙を調べるモノづくり」をテーマに、 ・惑星探査車 ・ロケット ・天体望遠鏡 のそれぞれを実験や体験を通じて学ぶ全３回の科学教室を実施責任者として企画・実施した。また第３回の望遠鏡をテーマに取り上げた回では、講師を務めた。
２１）少年宇宙教室「レンズのふしぎと望遠鏡」	平成26年11月29日	主催：奈良学園大学 社会連携センター 地域の児童の宇宙や科学への関心を高めるため、工作や観測などの体験を通じて楽しく学べる科学教室を開催した。 レンズが結ぶ２種類の像、実像と虚像の仕組みと、その２つを組み合わせた望遠鏡の原理について解説し。参加者に、市販の紙筒とプラスチックレンズを組み合わせた望遠鏡を製作してもらい、ピント合わせ等の操作練習した後、屋外で月のクレーターを観測した。
２２）「けいはんな科学フェスティバル2015」出展 ～けいはんな子ども天文クラブ～星の光のひみつ～	平成27年2月7日	主催：けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク 共催：(公財)関西文化学術研究都市推進機構、京都大学(COC事業)、奈良教育大学 「けいはんな科学フェスティバル2015」の中で、１ブース展示を担当した。 レプリカグレーティングを用いた簡易分光器を展示し、白熱電球や蛍光灯、ナトリウムランプ、LEDなど様々な光源によるスペクトルの違いを、参加者に観察してもらった。目に見える光は，様々な色の成分が合成されて出来ていること、発光する物質によってそのスペクトルのパターンが異なることを解説した。さらに、望遠鏡で撮影した恒星や銀河のスペクトルの写真を展示し，遠く離れた天体でも、スペクトルを観測することにより，天体に含まれている元素の量や，温度や密度などの物理状態、運動状態を知ることが出来ることを解説した

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）		
２　特許等		
１）		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）		
４　その他		
１）		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
１）テキスト情報基礎演習（再掲）	共著	平成17年4月	久美出版（ISBN:9784907757946）	奈良産業大学 情報学部 専門科目「基礎演習Ⅰ」「基礎演習Ⅱ」「HTML演習」「文書構造化演習」教科書 B5版、全147頁 共著者：中尾 泰士、向井 厚志 本人担当部分：「第２章 文書構造化演習」（pp.63-106）を単著 当時W3Cにより標準化されていたHTML4.01およびCSS2を用い、W3Cの仕様に厳密に従い、非推奨の属性を用いず、論理構造とデザインを分離してウェブページを制作する作法を詳説した。
（学術論文） １）The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 70.	エアシャワーサイズ時系列のカオス解析において、カオス性に寄与する宇宙線を選別し、その到来方向の分布を求めた。その結果、Crab, Mrk421, Cyg-Xなど、特定の活動銀河が高エネルギーガンマ線宇宙線源である可能性を示すことができた。 共著：S.Ohara, T.Konishi, A.Mukai, M.Shimada, A.Iyono, H.Matsumoto, I.Yamamoto, N.Takahashi, T.Nakatsuka, K.Okei, S.Tsuji, N.Ochi
２）Searching for cosmic ray nuclei above the KNEE energies through the Gerasimova-Zatsepin effect with the LAAS experiments	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 170.	Gerasimova-Zatsepin効果による原子核宇宙線の崩壊過程を考慮して、大広域エアシャワーデータを解析し、Knee領域以上の宇宙線について考察した。 共著：A.Iyono, H.Matsumoto, K.Okei, S.Tsuji, S.Ohara, N.Ochi, T.Konishi, N.Takahashi, I.Yamamoto, T.Nakatsuka, A.Mukai, M.Shimada
３）情報学部プロジェクト演習における「フィジカルコンピューティング」教育の実践	単著	平成25年2月	情報学フォーラム紀要（奈良産業大学），8, 131-140.	2009年度から2012年度の４年間、情報学部「ラジコン製作プロジェクト」において、「フィジカルコンピューティング」教育を実践した。教材としてSun SPOTまたはArduinoを主に用い、合計７つのシステムを製作し、各年度の学園祭に出展した。自らハードウェアとソフトウェアの設計を行い、部品の選定・購入から始めてシステムを完成させる体験は、学生にとって有意義な学修であったと考える。
４）太陽系外惑星発見と情報学	単著	平成25年2月	情報学フォーラム紀要（奈良産業大学），8, 159-164.	1995年に初めて発見されて以降、700個以上発見されている太陽系外の惑星について、それらを発見する観測手段や、見つかった惑星の特徴、地球に似た星が存在する可能性について論じた。これらの成果には、ＣＣＤなどの受光素子の技術革新による性能向上や、コンピュータによる自動観測、画像の自動解析など、情報技術の進展による寄与が大きい。
５）奈良県 公共図書館・大学図書館横断検索システムの構築	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要，29, 69-75.	平成20年度、奈良県図書館協会大学・専門図書館部会の依頼を受け、奈良県内の公共図書館および大学・研究所図書館の蔵書を検索できるシステムを開発し、インターネット上に公開した。従来の検索システムと異なり、地図上で図書館の位置が確認できることと、専門図書館を含めた大学図書館と公共図書館を一括して検索できるのが特徴である。 共著：嶋田理博、中尾泰士
６）地域における地学教育の実践と課題	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要，29, 185-191.	現在、地域に根差した理科教育として、サイエンスカフェや実験教室が各地で実施されている。本学でも地元住民向けの公開講座や小学生を対象とした科学教室を実施し、学外においても積極的に理科教育の振興に取り組んできた。こうした取り組みへの参加者は常に一定数を見込むことができるが、その多くはもともと科学に興味・関心を抱いていたリピーターであり、理科に関心をもたない住民の目を向けさせる工夫が必要である。 共著：向井厚志・嶋田理博

7）少年宇宙教室　−宇宙を調べるモノづくり−	共著	平成26年9月	奈良学園大学紀要，1，173-179.	平成25年度に奈良産業大学（現・奈良学園大学）情報学部が主催した公開講座「少年宇宙教室 〜宇宙を調べるモノづくり〜」の報告である。宇宙を探査・観測する機器・装置をテーマに、計３回の講座を開催し、参加者数は小学生児童とその保護者を中心に153名を数えた。参加者の感想はおおむね好評で、地域における科学コミュニケーション活動に一定の役割を果たせたと考える。 共著：嶋田理博・向井厚志・中尾泰士
（その他）				
「学会発表」				
1）プロジェクト型演習を通じたアプリケーション開発の学習	共同	平成20年12月	平成20年度　情報教育研究集会 （於福岡県北九州市）	共同発表者：嶋田理博、中尾泰士、向井厚志 情報学部のプロジェクト型演習「ITシステム構築プロジェクト」において、平成19年度に行った、ウェブサーバとRDBMSの構築、それらを連携させた掲示板、ストリートビューシステム、教室使用状況表示システムの制作について報告した。
2）小学生を対象とした天文教育活動「少年宇宙教室」の報告	共同	平成21年9月	日本天文学会 2009年秋季年会 （於山口大学）	共同発表者：中尾泰士、嶋田理博、向井厚志 地域の小学生を主たる対象とした地球・宇宙分野の体験型講座「少年宇宙教室 〜ロケット・太陽・スペクトル〜」を企画し、科学技術振興機構の「平成20年度　地域科学技術理解増進活動推進事業　地域活動支援」の支援活動の1つとして採択された。参加した子供達とその保護者に対して行ったアンケートなどをもとに、われわれの活動について報告した。
3）小学生向け体験型天文教室「少年宇宙教室」の報告２：「宇宙を調べる」	共同	平成22年9月	日本天文学会 2010年秋季年会 （於金沢大学）	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2009 年度には科学技術振興機構の支援を得て開催した体験型講座「少年宇宙教室」について報告した。「宇宙を調べる」をテーマとした全４回の講座は、望遠鏡の製作とそれを使っての月・木星の観測を行い、観測の楽しさや宇宙に対する興味を感じてもらえるなど、参加者の満足度の高いものだったと考える
4）小学生向け科学教室『少年宇宙教室』の活動	共同	平成22年11月	第54回 宇宙科学技術連合講演会 （於静岡県静岡市）	共同発表者：嶋田理博、向井厚志、中尾泰士 2008年度から地域の小学生を対象として開催している科学教室「少年宇宙教室」について報告した。子ども達が楽しみながら学べるよう、講義ではなく、工作や実験などの体験を中心とした内容は、科学や宇宙に関心のある参加者に対してはもちろん、初参加の子供や、関心のなかった保護者に対しても興味を引き出すことに成功していると言える。
5）The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共同	平成23年8月	Proceedings of 32nd International Cosmic Ray Conference, Vol.1 ,70-71. （at Beijing, China）	共同発表者：大原荘司、小西健陽、向井厚志、嶋田理博、伊代野淳、松本宏樹、山本勲、高橋信介、中塚隆郎、桶井一秀、辻修平 越智信彰 宇宙線時系列データについて、観測粒子密度分布より一次宇宙線エネルギーを算出し、エネルギー時系列データ約５万イベントのカオス解析を行った。エネルギー範囲に対応するカオスの出現頻度の解析から、5.0×10^15〜7.5×10^15eVの範囲のエネルギーをもった一次宇宙線が、300イベント連続する時系列データのカオス性の出現にもっとも寄与していることが見出された。

教　育　研　究　業　績　書

2015年5月12日

氏名　大山　真貴子

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	臨床看護学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 （1）老年者を疑似体験する	2003年4月～ 2004年8月	老年期にある高齢者の身体・社会的機能低下を理解することを目的として、学生が高齢者の身体機能を10枚のカードとして持ちカードを喪失することで機能低下が始まる。この体験をゲーム形式で演習した。IADLカード・高齢者身体疑似体験用具の作成。体験することで実際の老年像を明確にできる。
２　作成した教科書，教材		
1.周手術期看護Ⅰ:インターネット公開 第7回S－QUE院内研修 Eナーシング1000’ ヴェクソンインターナショナル主催	2010年7月	周手術看護における基本的な知識と技術に関して基礎編として構成し、現任教育としての自らの事前準備を促す目的で周手術期に関する10題程度の事前課題を用意し講義を行いインターネットで公開した。
2.周手術期看護Ⅱ:インターネット公開 第8回S－QUE院内研修 Eナーシング1000 ヴェクソンインターナショナル主催	2010年8月	周手術時看護応用編として事例を基礎編の知識と技術を用いて展開し、さらに事前課題を受講生に提示し学習効果を高め、内容はインターネットに公開した。
1.新体系　看護学全書 成人看護学⑦腎 出版社：メヂカルフレンド社	2007年11月	第4章　手術を受ける患者の看護部分で内容は腎疾患を持つ患者の病態生理と看護について記述し、成人看護学援助論のテキストとして作成した。
2.ベスト・プラクティスコレクション　ドレナージ管理＆ケアガイド 出版社：中山書店	2008年8月	腹会陰式直腸切除術後のドレナージに関してのケアとその看護の視点についてドレーン留置目的と管理方法に加え合併症とその対応を記述しまとめた。 編集：佐藤憲明　共著者：伊藤希、軽部厚、大山真貴子他22名 担当部分：Part2領域別ドレナージ　腹部：消化器118頁－124頁。直腸前方切除術後下部消化管に関して情報収集および整理を担当した。
3.疾患と看護がわかる看護過程　胃がん 雑誌名：クリニカルスタディ 出版社：メヂカルフレンド社	2010年6月	胃がん患者の事例を展開し、40歳代男性の早期胃がん患者の対象特性と身体・心理・社会面に焦点をあて実践的な看護過程をまとめ、急性期援助論演習の教材である。
4.新体系　看護学全書 成人看護学７腎・泌尿器 出版社：メヂカルフレンド社	2010年12月	第4章　手術を受ける患者の看護を担当した。内容は腎疾患を持つ患者の病態生理と看護について記述し、成人か看護学援助論テキストとして使用した。 編集：山田明・斉藤しのぶ 共著者：副島昭典、有村義弘、大山真貴子他11名 担当部分：第2編　第3章　手術を受ける患者の看護183頁-186頁
5.ベスト・プラクティスコレクション　ドレナージ管理＆ケアガイド第2版 出版社：中山書店	2012年4月	成人看護学急性期のテキストである。腹会陰式直腸切除術後のドレナージに関してのケアとその看護の視点についてドレーン留置目的と管理方法に加え合併症とその対応を記述しまとめた。
6.ベスト・プラクティスコレクション　ドレナージ管理＆ケアガイド第3版 出版社：中山書店	2014年5月	成人看護学急性期のテキストである。腹会陰式直腸切除術後のドレナージに関してのケアとその看護の視点についてドレーン留置目的と管理方法に加え合併症とその対応を記述しまとめた。

7.臨床看護学技術シリーズ 第16巻　慢性呼吸器機能障害患者の援助技術　病態生理と呼吸機能評価 出版社:丸善株式会社	2011年3月	慢性呼吸器機能障害患者の病態生理やその評価方法に関してまとめた視聴覚教材である。
8.臨床看護学技術シリーズ 第17巻　慢性呼吸器機能障害患者の援助技術　慢性閉塞性肺疾患(COPD)急性増悪の予防・日常生活 出版社:丸善株式会社	2011年3月	慢性閉塞性肺疾患患者の慢性期から急性増悪時の看護を患者のセルフケアの能力向上を目指した看護技術をまとめた視聴覚教材である。
9.臨床看護学技術シリーズ 第18巻　慢性呼吸器機能障害患者の援助技術　慢性閉塞性肺疾患(COPD)　薬物療法・酸素療法 出版社:丸善株式会社	2011年3月	慢性閉塞性肺疾患患者が日々行っている薬物療法・酸素療法に関しての看護技術をまとめた視聴覚教材である。
10.臨床看護学技術シリーズ 第13巻　糖尿病患者の援助技術　糖尿病とは 出版社:丸善株式会社	2011年9月	糖尿病に関する病気の成り立ちから症状についての視聴覚教材である
11.臨床看護学技術シリーズ 第14巻　　糖尿病患者の援助技術　糖尿病の診断・治療 出版社:丸善株式会社	2011年9月	糖尿病の診断から治療方法に関する内容とその指導方法に関する看護技術をまとめた視聴覚教材である。
12. 臨床看護学技術シリーズ 第15巻　　糖尿病患者の援助技術　生活の再構築に向けての援助 出版社:丸善株式会社	2011年9月	糖尿病患者の生活の再構築に向けての看護援助をまとめた視聴覚教材である。
13. 臨床看護学技術シリーズ 第10巻　肝臓病患者の援助技術　肝臓疾患の病態生理 出版社:丸善株式会社	2012年10月	肝臓病疾患弛緩する成り立ちから症状についての視覚教材である。
14.臨床看護学技術シリーズ 第11巻　肝臓病患者の援助技術　肝硬変・肝臓がんの治療 出版社:丸善株式会社	2012年10月	肝硬変と肝臓がん焦点を当て診断から治療方法に関する内容とその指導方法に関しての看護技術をまとめた視聴覚教材である。
15. 臨床看護学技術シリーズ 第12巻　肝臓病患者の援助技術　肝臓がん患者への看護 出版社:丸善株式会社	2012年10月	肝硬変から肝がんへと移行した患者への日常生活の編み直しに向けての看護援助をまとめた視覚教材である。
16.臨床看護学技術シリーズ第1巻 脳卒中患者への援助技術 脳卒中の解剖生理と脳卒中の病態生理	2013年11月	脳卒中に関連する脳神経の理解や脳卒中の成り立ちから症状についてを説明した視覚教材である。
17.臨床看護学技術シリーズ 第2巻 脳卒中患者への援助技術 脳卒中の診断と治療/リハビリテーション	2013年11月	脳卒中に関連する診断と治療・リハビリテーションを説明した視覚教材である。
19臨床看護学技術シリーズ 第3巻 脳卒中患者への援助技術 脳卒中患者の生活の再構築に向けて	2013年11月	脳卒中発症後の回復期にある患者をもでるとして麻痺のある患者が日常生活を編み直してくためのリハビリテーションと生活の再構築を映像にまとめた視覚教材である。
20.臨床看護学技術シリーズ 第4巻 不整脈(心房細動)患者への援助技術 心臓の構造・機能/不整脈・心不全の病態生理	2014年7月	不整脈のある患者への援助技術に向けて、心臓の構造・機能を映像とともに説明し、心不全の病態理解をまとめた視覚教材である。
21.臨床看護学技術シリーズ 第5巻 不整脈(心房細動)患者への援助技術 不整脈(心房細動)の診断・治療	2014年7月	不整脈のある患者への援助技術に向けて、不整脈の診断と治療を映像とともに説明した視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:不整脈と心不全の理解に必要な治療・診断・検査の枠組みを決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理を担当した。

22.臨床看護学技術シリーズ 第6巻 不整脈(心房細動)患者への援助技術 不整脈(心房細動)治療を受ける患者の看護と生活の再構築	2014年7月	不整脈のある患者への援助技術に向けて、心房細動のある患者への看護を映像とともに説明した視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子
3　教育上の能力に関する大学等の評価		なし
4　実務の経験を有する者についての特記事項		なし
5　その他		なし

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許	1988年6月6日	看護師国家資格取得（第641377号）
2　特許等		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
(1) 東京女子医科大学入学試験作問	2007年4月～ 2008年3月	認定看護師手術看護分野入学試験作問担当者
(2) 東京医療保健大学実習員会	2009年4月～ 2012年3月	東京医療保健大学看護学実習基本事項の編集・製作担当者
(3) 東京医療保健大学国家試験対策委員	2010年4月～ 2012年3月	東京医療保健大学1年生～4年生の国家試験対策および教員による夏期講習会・冬期講習会を企画運営
(4) 四日市看護医療大学教務委員	2013年4月～ 2014年3月	看護研究Ⅰ・Ⅱシラバス作成委員 自己点検・自己評価の評価方法検討委員 カリキュラム自己点検委員
(5) 平成24度～26年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「医療機関における産業看護活動に関する方策の支援と構築」（課題番号24500839）　研究分担研究者　大山真貴子	2013年4月～ 2015年3月	平成26年度 直接経費（A）80,000円、間接経費（B 24,000円
(6) 平成25年度　四日市看護医療大学四日市地域政策機構産業看護研究センター研究助成金「看護系大学における産業看護教育の実態」研究分担者　大山真貴子	2014年4月～ 2015年3月	研究助成金200,000円 研究計画書、調査票作成、データ分析、報告書作成、学会発表を担当
4　その他		なし

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
1.新体系　看護学全書　成人看護学⑦腎	共著	2007年11月	メジカルフレンド社	第4章　手術を受ける患者の看護部分で内容は腎疾患を持つ患者の病態生理と看護について記述した。 編集：山田明・斉藤しのぶ 共著者：副島昭典、有村義弘、大山真貴子他11名 担当部分：第2編　第3章　手術を受ける患者の看護　183頁-186頁
2.ベスト・プラクティスコレクション　ドレナージ管理＆ケアガイド	共著	2008年8月	中山書店	各種ドレーン管理とケアを看護の視点でまとめた書籍であり、腹会陰式直腸切除術後のドレナージに関してのケアとその看護の視点についてドレーン留置目的と管理方法に加え合併症とその対応を記述しまとめた。 編集：佐藤憲明　共著者：伊藤希、軽部厚、大山真貴子他22名 担当部分：Part2領域別ドレナージ　腹部：消化器118頁－124頁。低位前方手術・直腸前方切除術後下部消化管に関して担当した。
3.疾患と看護がわかる看護過程　胃がん	単著	2010年6月	クリニカルスタディ メジカルフレンド社	胃がん患者の事例を展開し、40歳代男性の早期胃がん患者の対象特性と身体・心理・社会面に焦点をあて実践的な看護過程をまとめた。

4. 認定看護師に期待される専門性	単著	2010年7月	からだの科学増刊 これからの認定看護師 日本評論社	手術看護認定看護師の現状と今後の課題に関して、役割、実践、期待される能力、価値を手術看護分野主任教員経験者として教育課程を踏まえ、まとめた。
5. 新体系　看護学全書　成人看護学７腎・泌尿器	共著	2010年12月	メジカルフレンド社	第4章　手術を受ける患者の看護を担当した。内容は腎疾患を持つ患者の病態生理と看護について記述した。 編集：山田明・斉藤しのぶ 共著者：副島昭典、有村義弘、大山真貴子他11名 担当部分：第2編　第3章　手術を受ける患者の看護　183頁-186頁
6. ベスト・プラクティスコレクション　ドレナージ管理＆ケアガイド第2版	共著	2012年4月	中山書店	各種ドレーン管理とケアを看護の視点でまとめた書籍であり、腹会陰式直腸切除術後のドレナージに関してのケアとその看護の視点についてドレーン留置目的と管理方法に加え合併症とその対応を記述しまとめた。 編集：佐藤憲明　共著者：伊藤希、軽部厚、大山真貴子他22名 担当部分：Part2領域別ドレナージ　腹部：消化器118頁－124頁。低位前方手術・直腸前方切除術後下部消化管に関して担当した。
3.臨床看護学技術シリーズ第16巻 慢性呼吸器機能障害患者の援助技術　病態生理と呼吸機能評価	共著	2011年3月	丸善株式会社	慢性呼吸器機能障害患者の病態生理やその評価方法に関してまとめた視聴覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:COPDの理解に必要な病態生理の枠組みを決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理し全過程を担当した。
4.臨床看護学技術シリーズ第17巻 慢性呼吸器機能障害患者の援助技術　慢性閉塞性肺疾患(COPD)急性増悪の予防・日常生活	共著	2011年3月	丸善株式会社	慢性閉塞性肺疾患患者の慢性期から急性増悪時の看護を患者のセルフケアの能力向上を目指した看護技術をまとめた視聴覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:COPDに必要な病態生理の枠組みを決定し、看護に必要な理論・援助技術とエビデンス情報の整理し全過程を担当した。
5.臨床看護学技術シリーズ第18巻 慢性呼吸器機能障害患者の援助技術 慢性閉塞性肺疾患(COPD)　薬物療法・酸素療法	共著	2011年3月	丸善株式会社	慢性閉塞性肺疾患患者が日々行っている薬物療法・酸素療法に関しての看護技術をまとめた視聴覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:COPDの理解に必要な看護援助の最新情報とエビデンスの情報収集とその整理し全過程を担当した。
6.臨床看護学技術シリーズ第13巻 糖尿病患者の援助技術 糖尿病とは	共著	2011年9月	丸善株式会社	糖尿病に関する病気の成り立ちから症状についての視聴覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:糖尿病の理解に必要な病態生理の枠組みを決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理し全過程を担当した。
7.臨床看護学技術シリーズ第14巻 糖尿病患者の援助技術糖尿病の診断・治療	共著	2011年9月	丸善株式会社	糖尿病の診断から治療方法に関する内容とその指導方法に関する看護技術をまとめた視聴覚教材。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:糖尿病の理解に必要な看護援助の最新情報とエビデンスの情報収集とその整理し全過程を担当した。
8.臨床看護学技術シリーズ第15巻 糖尿病患者の援助技術 生活の再構築に向けての援助	共著	2011年9月	丸善株式会社	糖尿病患者の生活の再構築に向けての看護援助をまとめた視聴覚教材 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:糖尿病患者看護の理解に必要な理論や最新情報エビデンスの情報収集とその整理し全過程を担当した。

9. 臨床看護学技術シリーズ 第10巻 肝硬変患者への援助技術 肝臓疾患とは	共著	2012年10月	丸善株式会社	肝臓病疾患の成り立ちから症状についての視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:肝疾患の理解に必要な病態生理の枠組みを決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理し全過程を担当した。
10.臨床看護学技術シリーズ 第11巻 肝硬変患者への援助技術 肝臓疾患の診断と治療	共著	2012年10月	丸善株式会社	肝硬変と肝臓がん焦点を当て診断から治療方法に関する内容とその指導方法に関しての看護技術をまとめた視聴覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:肝疾患と肝硬変の理解に必要なガイドラインの最新情報とエビデンスの情報収集およびその整理し全過程を担当した。
11. 臨床看護学技術シリーズ 第12巻 肝硬変患者への援助技術 肝硬変患者の生活の再構築に向けて	共著	2012年10月	丸善株式会社	肝硬変から肝がんへと移行した患者への日常生活の編み直しに向けての看護援助をまとめた。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:肝硬変患者の看護に必要な理論や最新情報エビデンスの情報収集とその整理し全過程を担当した。
12.臨床看護学技術シリーズ第1巻 脳卒中患者への援助技術 脳卒中の解剖生理と脳卒中の病態生理	共著	2013年11月	丸善株式会社	脳卒中に関連する脳神経の理解や脳卒中の成り立ちから症状についてを説明した視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:脳卒中を理解するのに必要な脳や神経や病態生理の枠組みを決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理を担当した。
13.臨床看護学技術シリーズ 第2巻 脳卒中患者への援助技術 脳卒中の診断と治療/リハビリテーション	共著	2013年11月	丸善株式会社	脳卒中に関連する診断と治療・リハビリテーションを説明した視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:脳卒中の診断と治療・リハビリテーションを理解するのに必要な脳や内容を決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理し全過程を担当した。
14.臨床看護学技術シリーズ 第3巻 脳卒中患者への援助技術 脳卒中患者の生活の再構築に向けて	共著	2013年11月	丸善株式会社	脳卒中発症後の回復期にある患者をもでるとして麻痺のある患者が日常生活を編み直してくためのリハビリテーションと生活の再構築を映像にまとめた視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:脳卒中患者の看護に必要な理論やリハビリテーションや最新情報エビデンスの情報収集とその整理し全過程を担当した。
15.ベスト・プラクティスコレクション　ドレナージ管理＆ケアガイド第3版	共著	2014年5月	中山書店	各種ドレーン管理とケアを看護の視点でまとめた書籍であり、最新の腹会陰式直腸切除術後のドレナージに関してのケアとその看護の視点についてドレーン留置目的と管理方法に加え合併症とその対応を記述しまとめた。 編集：佐藤憲明　共著者：伊藤希、軽部厚、大山真貴子他22名 担当部分：Part2領域別ドレナージ　腹部：消化器118頁－124頁。低位前方手術・直腸前方切除術後下部消化管に関して担当した。
15.臨床看護学技術シリーズ 第4巻 不整脈(心房細動)患者への援助技術 心臓の構造・機能/不整脈・心不全の病態生理	共著	2014年7月	丸善株式会社	不整脈のある患者への援助技術に向けて、心臓の構造・機能を映像とともに説明し、心不全の病態理解をまとめた視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:不整脈と心不全の理解に必要な病態生理の枠組みを決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理し全過程を担当した。

16.臨床看護学技術シリーズ 第5巻 不整脈(心房細動)患者への援助技術 不整脈(心房細動)の診断・治療	共著	2014年7月	丸善株式会社	不整脈のある患者への援助技術に向けて、不整脈の診断と治療を映像とともに説明した視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:不整脈と心不全の理解に必要な治療・診断・検査の枠組みを決定し、最新の医学情報と治療、ガイドライン情報の収集と整理し全過程を担当した。
17.臨床看護学技術シリーズ 第6巻 不整脈(心房細動)患者への援助技術 不整脈(心房細動)治療を受ける患者の看護と生活の再構築	共著	2014年7月	丸善株式会社	不整脈のある患者への援助技術に向けて、心房細動のある患者への看護を映像とともに説明した視覚教材である。 編集:坂本すが、貝瀬友子、大山真貴子 担当部分:不整脈のある患者の理解に必要な理論と看護技術のエビデンス情報収集とその整理し全過程を担当した。た。
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学位論文） 1型糖尿病のこどもの食生活に関する母親の意識	単著	2006年3月	東京女子医科大学大学院看護学研究科 （修士論文）	本研究は、郵送法による質問調査研究であり1型糖尿病の子どもをもつ母親88名と健常児を持母親108名に対して母親自身の食生活、子どもの食生活に関して調査した。その結果、1型糖尿病のこどもを持つ母親は子どもへの食生活を規則正しく、バランスの良い内容としていた。健常児の子どもの母親と病気の子どもを持つ母親はともに子どもの食生活を優先し、自身の食生活は後回しにしていることが推察できた。
（論文）				
1.手術看護トピックス医療従事者とラテックスアレルギー	単著	2008年4月	ﾅｰｼﾝｸﾞ ﾄｳﾃﾞｨ 日本看護協会出版 第23巻 第4号 P.8	内容は、医療従事者に多く発生しているラテックスアレルギーについてラテックス手袋に使用による感作が原因であることやラテックスアレルギー反応のの発生機序・予防・対策についてまとめた。特に手術室、救命救急センター、集中治療室の看護師ならびに外科医師の感作率有病率の高いことをまとめた。
2.手術認定看護師	単著	2008年4月	月刊ﾅｰｼﾝｸﾞ vol28.No.5　第23巻第4号 P.8	内容は手術医療の安全・安楽かつ個別的で正しい医療の実施における認定看護師の熟練した看護技術、患者の個別性を踏まえた看護実践のための看護過程の重要性、周手術期としての外来・病棟への連携についてまとめた。
3.手術看護認定看護師が求められる役割と手術看護がめざすもの	単著	2008年8月	ｵﾍﾟﾅｰｼﾝｸﾞ ﾒﾃﾞｨｶ出版 Vol.23 No.8 P.1～P.2	内容は、手術看護認定看護師の看護実践力について認定看護師の役割である指導、実践、相談への取り組み、看護実践に関して看護過程を展開することの重要性、手術を受ける患者への倫理的配慮ならびに手術医療チームとしての看護師の役割についてまとめた。
4.子どもの食生活に関する母親の意識	共著	2008年11月	日本健康医学会誌 第17巻　第3号 P.62～P.63	子どもの食生活に関しての母親の意識を明らかにすることを目的とし母親188名を対象に子どもの食生活についての質問紙調査票3部構成で作成したものを用いて調査を行った。その結果母親は、子どもは規則正しい食生活への工夫をしていることがわかった。 共著者：大山真貴子　州崎好香 担当部分：研究計画を立案し情報収集および整理、調査、集計を担当した。

5.食の外部化の家庭への進展	共著	2008年11月	日本健康医学会誌 第17巻　第3号 P.58～P.59	中高年者の中食利用と生活の関連を明らかにすることを目的とし、中高年の女性30歳から60歳．4000名に作成した調査票郵送し調査を行った。その結果、中食利用の弊害いわれているが、中食は調理時間を軽減するので有職者や子育て中の女性へのニーズがく、欠食対策として健康保持・増進目的として利用されていたことがわかった。中食の普及は有職者や子育て中の女性のゆとりを生み出していると考察できた。 共著者：有吉浩美、大山真貴子 担当部分：共同研究で抽出不可能
6.手術を受ける小児・家族へのプレパレーション－家族へのアンケート結果からの考察－	共著	2009年6月	日本手術看護学会誌 Vol.5No.1 P.70～P.72	対象者は手術を受ける母親、手術を受ける子どもへのﾌﾟﾚﾊﾟﾚｰｼｮﾝによりそのように手術を認識するかについて明らかにし、ﾌﾟﾚﾊﾟﾚｰｼｮﾝに活用できるDVDを作成した。さらに、DVD鑑賞を希望した家族に調査を行った。その結果家族の認識は子どもへの手術の説明の重要性や手術への理解や子どもへの精神面のケアの重要性が示唆された。 共著者：橋爪香代、荒木田真子、古澤俊、吉田裕子、大山真貴子 本人担当分：共同研究で抽出不可能
7.働く女性における食の外部化の進展	共著	2009年10月	産業保健人間工学学会誌 第11巻増補 58頁－60頁	本研究は30歳から69歳までの女性100名に対して研究者の作成した質問紙を用いて、働く女性の食生活、中食の利用と健康観に関する意識と実態を比較研究した。その結果、食の外部化状況は健康習慣、BMI・主観的健康状況に影響を与え、中食利用は身体的・精神的健康を促していることが示唆されえた。 共著者：州崎好香、森口稔、大山真貴子、有吉浩美 本人担当分：共同研究で抽出不可能
8.1型糖尿病の子どもの食生活に関する母親の意識 －親の性格特性に焦点をあてて－	共著	2009年11月	日本健康医学会誌	本研究は、1型糖尿病の子どもをもつ母親と健常児の母親に対して5因子モデルを用いて性格特性を検討した。その結果、1型糖尿病の子どもの母親と健常児の子どもの母親の性格特性に大きな差は見られなかった。 第18巻　第3号　116頁-117頁 共著者：大山真貴子、州崎好香 本人担当分：共同研究で抽出不可能
9.医療系大学生の協働することの認識過程について－メタボリックシンドローム患者への教育指導を事例として－	共著	2010年11月	日本健康医学会誌 第19巻　第3号 P.124～P.125	本研究は、医療系大学に所属する学生に行い、教育背景の異なる学生が一つのテーマを共有し協働した中での認識過程について明らかにした。この結果、認識の過程には3つの段階があった。教育課程に協働実践演習を取り入れることは専門職の視点や役割や能力を生かしながらチームを形成しやすいと考察できた。 共著者：大山真貴子、洲崎好香 本人担当分：共同研究で抽出不可能
10.交替勤務をしている看護職の食習慣と健康状態との関連性	共著	2010年11月	日本健康医学会誌 第19巻　第3号 P.108～P.109	本研究は女性比率の高い交替勤務をしている看護職の食習慣を明らかにし健康との関連を検討した。市立病院に勤務する30歳代から60歳代の看護師400名に質問調査を実施、健康習慣・BMI・主観的健康観は食習慣と有意差を認めた。このことから食習慣は交替勤務をする女性の健康へに影響を及ぼしている可能性が示唆された。 共同発表者：洲崎好香、大山真貴子、中村登志子、高山直子、有吉浩美 本人担当分：共同研究で抽出不可能

11.スポーツ障害を負った選手の受容過程に関する研究	共著	2011年11月	日本健康医学会誌 第20巻　第3号 P.140～P.141	本研究は、分析対象は20歳代男性、スポーツ障害を受けた患者が障害を受容し生活を再構築してく受容過程を抽出した。分析にはフィンクの危機理論とライトの価値転換理論の基づき行った。看護者は患者が状況を受容していく転換期に患者の意味づけた生きる意欲をサポートしていくことの重要性が見いだせた。 共著者：北澤友美、大山真貴子 本人担当分：共同研究で抽出不可能
12.口腔がんの病気体験に関する研究	共著	2011年11月	日本健康医学会誌 第20巻　第3号 P.142～P.143	本研究は、対象は口腔がん50代男性患者、口腔がんで治療を受けた方の病気の体験を内容を質的に分析した。結果は患者は診断を受けた時からがんと折り合いをつけながら生活し、がんを自己化し、自分以外のがん患者への支援を通して再発の恐怖と向き合っていた。 共同発表者：大川温子、大山真貴子 本人担当分：共同研究で抽出不可能
13.タクシー運転手におけるストレス状況調査	共著	2011年11月	日本健康医学会誌 第20巻　第3号 P.148～P.149	対象者はタクシー会社に勤務する男性66名、ストレス調査票を用いてタクシー運転手の労働実態とストレス状態を検討した。結果は、身体的な不調として肩こりや膝痛また糖尿病などの生習慣病が多く、ストレスは低かった。この誘因は短距離・短時間の乗車客の増加により身体的な負担の軽減から心理的な問題に至っていなかったことが明らかとなった。 共著者：洲崎好香、大山真貴子、中村登志子、高山直子、有吉浩美 本人担当分：共同研究で抽出不可能
14.1型糖尿病の子どもの食生活に関する母親の意識-子供への思い・希望に焦点をあてて-	共著	2011年11月	日本健康医学会誌 第20巻　第3号 P. 160～P. 161	対象はⅠ型糖尿病の子どもを持つ母親と健常児をもつ母親188名に対して、研究者の作成した調査票を用いて調査を行った。その結果、母親は自らの食生活を規則的にすることよりも子どもの食生活に配慮し規則的になることを意識していた。 共著者：大山真貴子、洲崎好香 本人分担分：共同研究で抽出不可能
15.関節リウマチ患者の日常生活上の生活困難に対しての受け止め方	共著	2012年12月	日本健康医学会誌 第21巻　第3号 P. 198～P. 199	本研究は50歳から60歳代の患者3名に対して半構成的面接により得られたデータを質的に内容分析した。調査結果の質的な内容分析における整合性の検討を担当した。 共著者：石見ちひろ、大山真貴子、貝瀬友子 本人担当分：共同研究で抽出不可能
16. 糖尿病患者のセルフに関する研究	共著	2012年12月	日本健康医学会誌 第21巻　第3号 P. 202～P. 203	本研究は糖尿病にて定期的に通院する患者2名にたいして半構成的面接により得られたデータを質的に内容分析し、糖尿病患者への教育の動機付け等について知見を得た。調査結果の質的な内容分析の整合性を担当した。 共著者：山元志織理、貝瀬友子、大山真貴子 本人担当分：共同研究で抽出不可能
17.慢性閉塞性肺疾患患者における在宅酸素療法施行による生活の変化に関する研究	共著	2012年12月	日本健康医学会誌 第21巻　第3号 P. 204～P. 205	本研究は70歳代以上のCOPDに罹患し在宅酸素を使用している患者2名に対して半構成的面接により得られたデーターを質的に内容分析し、HoT使用による日常生活の活動範囲の縮小や患者自身の葛藤についての知見を得た。調査結果の質的な内容分析の整合性を担当した。 共著者：木村壽里、大山真貴子、貝瀬友子 本人担当分：共同研究で抽出不可能

18.看護系大学における産業看護教育の実態	共著	2014年4月	四日市看護医療大学四日市地域政策機構産業看護研究センター 平成25年度事業活動報告書 P.5～P.26	本研究は看護系大学の産業看護学教育の実態を目的とし、日本看護系大学協議会会員校217に所属する大学の教員に、無記名自記式質問紙調査を行った。結果は教科目として設定している大学は「産業保健の動向」、単元として設定している大学は「産業看護の定義・役割」であることが明らかとなった。 共著者：河野啓子、畑中純子、後藤由紀、大山真貴子他2名 本人分担分：研究依頼文および質問紙作成、データ分析、報告書作成作成
19.平成24度～26年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）） 医療機関における産業看護活動に関する方策の支援と構築（課題番号24500839）	共著	2014年5月	平成24度～26年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）） 平成25年度研究報告書	当該年度に行った研究報告である。初年度研究で全国の100床以上の医療機関における産業看護活動の実態調査の結果を受け、5医療機関においてインタビュー調査研究を行った結果「阻害因子」「促進因子」「その他」の3分類で意味内容を抽出しまとめた。 本人分担分：データ分析、結果分析、報告書作成
20.Experiences by Families Supporting Amyotrophic Lateral Sclerosis Patients at Home	単著	2015月3月	奈良学園大学紀要第2集 P.199～P.203	本研究はALS患者を自宅で介護する主介護者の生活と体験を明らかにするこであった。研究結果としてALS患者と共に生活する家族は、患者の生活を最も優先する生活を送っていることやさまざまな医療器具を揃え、自分の身体や生活を犠牲にしてでもALSと戦う家族の療養環境を整えている現状を明らかにすることができた。
21.医療機関における産業看護活動に関する方策の支援と構築	共著	2015年3月	平成24度～26年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））研究報告書	3年間に行った研究の報告である。初年度研究で全国の100床以上の医療機関における産業看護活動の実態調査の結果を受け、5医療機関においてインタビュー調査研究を行った結果にも続き「阻害因子」「促進因子」「その他」の3分類で意味内容を抽出しまとめ、3段階目として2つの医療機関への教育指導を実践した報告書である。 共著者：近藤信子、畑中純子、河野啓子、後藤由紀、大山真貴子、内藤信子他4名 本人分担分：データ分析、結果分析、報告書作成
（その他）学会発表				
1.1型糖尿病の子どもの食生活に関する母親の意識	単独	2006年12月3日	第26回日本看護科学学術集会(神戸)	本研究は、1型糖尿病の子どもの食生活について母親がどのような意識をもち子どもにかかわっているのかその関連を明らかにすることである。本研究デザインは量的研究で郵送法による質問紙調査を行った。調査期間は2005年9月から12月である。1型糖尿病の子どもの母親は回収85名（有効回答80名）、健常児の母親は回収118名（有効回答108名）である。
2.手術を受ける小児・家族へのﾌﾟﾚﾊﾟﾚｰｼｮﾝ－家族へのアンケート結果からの考察　その1－	共同	2008年10月	第30回日本手術看護学会（徳島）	手術を受ける子どもへのﾌﾟﾚﾊﾟﾚｰｼｮﾝの認識を明らかにしﾌﾟﾚﾊﾟﾚｰｼｮﾝに活用できるDVDを作成、これを鑑賞を希望した家族に行った調査であり、調査結果の認識の変化部分について分析を行った。結果、子どもへのプレパレーションは子ども自身および家族に対し、手術を受け入れる準備として効果のあることが明らかになった。 共著者：橋爪香代、荒木田真子、古澤俊、吉田裕子、大山真貴子 本人担当分：共同研究で抽出不可能
3.手術を受ける小児・家族へのﾌﾟﾚﾊﾟﾚｰｼｮﾝ－家族へのアンケート結果からの考察　その2－	共同	2008年10月	第30回日本手術看護学会（徳島）	その1の結果を受けDVDを鑑賞した家族がどのように理解し、感じたかを明らかにした。 共著者：荒木田真子、橋爪香代、古澤俊、吉田裕子、大山真貴子 本人担当分：共同研究で抽出不可能

4.子どもの食生活に関する母親の意識	共同	2008年11月	第18回日本健康医学会総会（名古屋）	健常児の母親150名を対象に子どもの食生活についての質問紙調査票3部構成で作成したものを用いて調査を行った。その結果母親は、子どもは規則正しい食生活を過ごせしていた。 共同発表者：大山真貴子　州崎好香 本人担当分：研究計画を立案し情報収集、調査、データ分析、報告書作成を担当した。
5.食の外部化の家庭への進展	共同	2008年11月	第18回日本健康医学会総会（名古屋）	中高年の女性30歳から60歳．4000名に作成した調査票郵送し調査を行った。その結果、中食利用の弊害いわれているが、中食は調理時間を軽減するので有職者や子育て中の女性へのニーズ、欠食対策として健康保持・増進目的として利用されていたことがわかった。中食の普及は有職者や子育て中の女性のゆとりを生み出していると考察できた。 共同発表者：有吉浩美、大山真貴子 本人担当分：共同研究で抽出不可能
6.働く女性における食の外部化の進展	共同	2009年10月	第14回産業保健人間工学学会（千葉）	本研究は30歳から69歳までの女性100名に対して研究者の作成した質問紙を用いて、働く女性の食生活、中食の利用と健康観に関する意識と実態を比較研究した。その結果、食の外部化状況は健康習慣、BMI・主観的健康状況に影響を与え、中食利用は身体的・精神的健康を促していることが示唆されえた。 共著者：州崎好香、森口稔、大山真貴子、有吉浩美 本人担当分：共同研究で抽出不可能
7.1型糖尿病の子どもの食生活に関する母親の意識 －親の性格特性に焦点をあてて－	共同	2009年11月	第19日本健康医学会総会（東京）	本研究は、対象は1型糖尿病の子どもをもつ母親と健常児の母親に対して行い、5因子モデルを用いて性格特性を検討した。その結果、1型糖尿病の子どもの母親と健常児の子どもの母親の性格特性に大きな差は見られなかった。 共著者：大山真貴子、州崎好香 本人担当分：共同研究で抽出不可能
8.医療系大学生の協働することの認識過程について－メタボリックシンドローム患者への教育指導を事例として－	共同	2010年11月	第20回日本健康医学会総会(京都)	本研究は、教育背景の異なる学生が一つのテーマを共有し協働した中での認識過程について明らかにした。この結果、認識の過程には3つの段階があった。教育課程に協働実践演習を取り入れることは専門職の視点や役割や能力を生かしながらチームを形成しやすいと考察できた。 共同発表者:大山真貴子、洲崎好香 本人担当分:共同研究で抽出不可能
9.交替勤務をしている看護職の食習慣と健康状態との関連性	共同	2010年11月	第20回日本健康医学会総会(京都)	本研究は女性比率の高い交替勤務をしている看護職の食習慣を明らかにし健康との関連を検討した。市立病院に勤務する30歳代から60歳代の看護師400名に質問調査を実施、健康習慣・BMI・主観的健康観は食習慣と有意差を認めた。このことから食習慣は交替勤務をする女性の健康へに影響を及ぼしている可能性が示唆された。 共同発表者:洲崎好香、大山真貴子、中村登志子、高山直子、有吉浩美 本人担当分:共同研究で抽出不可能
10.スポーツ障害を負った選手の受容過程に関する研究	共同	2011年11月	第21回日本健康医学会総会(東京)	本研究は、患者の体験記からスポーツ障害を受けた患者が障害を受容し生活を再構築してく受容過程を抽出した。分析にはフィンクの危機理論とライトの価値転換理論の基づき行った。看護者は患者が状況を受容していく転換期に患者の意味づけた生きる意欲をサポートしていくことの重要性が見いだせた。 共同発表者:北澤友美、大山真貴子 本人担当分:共同研究で抽出不可能

11.口腔がんの病気体験に関する研究	共同	2011年11月	第21回日本健康医学会総会(東京)	本研究は、口腔がんで治療を受けた方の病気の体験をインタビューにて得られた内容を質的に分析した。結果は患者は診断を受けた時からがんと折り合いをつけながら生活し、がんを自己化し、自分以外のがん患者への支援を通して再発の恐怖と向き合っていた。 共同発表者:大川温子、大山真貴子 本人担当分:共同研究で抽出不可能
12.タクシー運転手におけるストレス状況調査	共同	2011年11月	第21回日本健康医学会総会(東京)	ストレス調査票を用いてタクシー運転手の労働実態とストレス状態を検討した。結果は、身体的な不調として肩こりや膝痛また糖尿病などの生習慣病が多く、ストレスは低かった。この誘因は短距離・短時間の乗車客の増加により身体的な負担の軽減から心理的な問題に至っていないと推測できる。本研究において明らかなタクシー運転手のストレス状態は示唆されなかった。 共同発表者:洲崎好香、大山真貴子、中村登志子、高山直子、有吉浩美 本人担当分:共同研究で抽出不可能
13.1型糖尿病の子どもの食生活に関する母親の意識-子供への思い・希望に焦点をあてて-	共同	2011年11月	第21回日本健康医学会総会（東京）	対象はⅠ型糖尿病の子どもを持つ母親と健常児をもつ母親188名に対して、研究者の作成した調査票を用いて調査を行った。その結果、母親は自らの食生活を規則的にすることよりも子どもの食生活に配慮し規則的になることを意識していた。 共著者：大山真貴子、洲崎好香 本人分担分：共同研究で抽出不可能
14.1型糖尿病の子どもの食生活に関する母親の意識 ―母親の食生活に焦点をあてて―	単独	2012年6月	第27回日本保健医療行動科学学会学術大会（岐阜）	本研究は1型糖尿病患者の子どもの食生活を担う母親の食生活への意識を明らかにすることを目的として、1型糖尿病の子どもをもつ母親と健常児をもつ母親に質問紙調査を行った。その結果子どもの食生活を豊かにするため母親自身の食生活は不規則であることが明らかとなった。
15.Experiences by Families Supporting Amyotrophic Lateral Sclerosis Patients at Home	共同	2014年6月	The 4th International Conference on Health System and Patient Safety （Tipei,TAIWAN）	本研究はALS患者を自宅で介護する主介護者の生活と体験を明らかにすることとした。結果、ALS患者と共に生活する家族は、患者の生活を最も優先する生活を送っていた。夫は、妻の介護は自分の当然の役割と考え、妻のために高額な薬を絶えず常備し、さまざまな医療器具を揃え、自分の身体や生活を犠牲にしてでも療養環境を整えている現状が明らかになった。 共著者：大山真貴子、貝瀬友子 本人分担分：インタビュー内容の分析と論文
16.医療機関における産業看護時活動の推進の疎外・促進要因	共同	2014年9月	日本産業看護学会第3回学術集会(九州)	本研究は、産業看護活動の促進要因・阻害要因について質問紙調査を実施し，産業看護活動の促進要因・阻害要因の妥当性を明らかにすることを目的とした。結果は産業看護活動の阻害因子と促進因子を明らかにすることができた。 共著者：河野啓子、近藤信子、畑中純子、後藤由紀、大山真貴子他6名 本人分担分：研究依頼文および質問紙作成と論文作成
17.糖尿病女性患者の食事療法継続に関する研究	単独	2014年11月	第23回日本健康医会総会（東京）	本研究のデザインは質的記述的研究とし、糖尿病のある女性にとって食事療法継続の工夫や療養における自己管理方法を明らかにすることを目的とし、結果は食事療法の工夫は7つのカテゴリーに分類された。

18.The actual condition of the industrial science-of-nursing education in the nursing system university in Japan	共同	2015年5月予定	31st International Congress on Occupational Health (Seoul,KOREA)（アクセプト完了）	本研究は看護系大学の産業看護学教育の実態を目的とし、日本看護系大学協議会会員校217に所属する大学の教員に、無記名自記式質問紙調査を行った。結果は教科目として設定している大学は「産業保健の動向」、単元として設定している大学は「産業看護の定義・役割」であることが明らかとなった。 共著者：畑中純子、河野啓子、後藤由紀、大山真貴子、内藤信子他4名 本人分担分：研究依頼文および質問紙作成と論文作成

教　育　研　究　業　績　書

平成２７年　５月　１５日

氏名　北　島　洋　子

研究分野	研究内容のキーワード
看護教育学	社会人基礎力、自己主導型学習、職場適応、看護研究

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
１）グループディスカッション、ブレインストーミング、マインドマップを活用した思考過程の開発支援	平成24年4月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1年次配当、30時間2単位のうち6時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程は問題解決型思考を看護に応用したものであり、クリティカルシンキングを基盤としている。対象学生は1年次生であり、看護の初学者の思考回路を刺激し看護専門職としての考え方を開発する必要がある。まずブレインストーミングを活用し批判非難の無い環境で自由にテーマに関する意見を述べあう機会を提供した。これによりグループワークを通して今日のチーム医療に求められる協働する力の素地が培われた。また、与えられたテーマについてマインドマップを活用し思考を深める作業を行い、学生は自己の内面に気づくことができ充実した学びとなったとの声が聞かれた。
２）グループディスカッション、ディベートを活用した倫理的意思決定の思考過程の開発支援、および授業アンケート、フィードバックの活用	平成24年10月～平成24年12月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4年次配当、30時間(1単位)のうち10時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。看護倫理の学習を通して学生は看護専門職としての自己のあり方を考え、様々な倫理的意思決定の支援を行えるようになる必要がある。グループディスカッションやディベートはメンバーの多様な考えに触れ価値の多様性を学習する好機となり、多様性に触れることで自己への気づきも促進された。グループで倫理的意思決定のプロセスを緻密に踏み思考を深め、倫理原則に従った判断をする基礎を身につけることができた。 毎時ごとの授業アンケート、フィードバックを活用し次回の講義に反映することで、学生の理解度を確認しながら授業を進め、学生のつまずいているところに戻った指導を行い、学生の理解を深めることができた。
３）PBL(Problem Based Learning)チュートリアルを活用した自己主導型学習の支援	平成24年6月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「コミュニティヘルスケア実習」(1年次配当、1単位)は1年次生の初回の実習であり、学生が地域に赴きコミュニティで生活する人々の健康問題について考察する実習である。実習指導においては、情報収集、問題抽出、対応策の検討等を学生主体で行い、教員はチューターとしてアドバイスを行った。学生は高校でこのような学習を行ったことがなく、大学生らしい学習方法だとの感想を述べ、どの学生もいきいきと積極的に実習に取り組んだ。また、実習後の学習成果の発表会でも有意義な学びが多数報告された。

４）PBL(Problem Based Learning)チュートリアル、ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成24年5月～平成24年6月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「総合実習」(4年次配当4単位)は、4年次生のこれまでの学習を統合し将来の看護専門職としての活動につなげるという目的がある。したがって実践に近い形の実習となり、より一層学生の自律性が求められる。ポートフォリオを活用し日々自己の目標を明確にしたことにより、学生は目的的に学習を行い、最終的に自己の変化を実感することができた。実習開始前にアンドラゴジーに関する講義を組み込み本実習は自己主導型を標榜することを示した。学生の学習姿勢は4年生であっても受動的な学生がほとんどであったが、4週間の実習を終了するころには個人差はあるものの能動的な実習を行い学習成果をあげることが可能となった。PBLの活用により、クリティカルシンキング、問題解決型の思考を磨くことができた。
５）ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成26年7月～平成26年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の早期体験演習、1年次配当（1単位）において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生は初めて臨地に赴き医療の現場に触れるため、看護の学習者としての準備性を高め、主体的な学習態度を身につける必要がある。事前の学習課題としてマナー、コミュニケーション方法を学び、実習中はポートフォリオにより省察的姿勢を養うように工夫した。
６）反転授業を取り入れた看護技術演習の工夫	平成26年9月～平成26年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護技術演習Ⅰ、1年次配当60時間（2単位）のうち清潔の援助〇〇時間を担当した。学生には穴埋め型のドリル形式の事前学習課題のプリントを配布し、テキストを参考に清潔の援助に関する基礎知識を習得した上で講義に臨むよう指導した。講義では事前に習得した基礎知識を活用しグループワークで演習計画書を作成し、実習室における技術演習の準備性を高めることを目指した。学生からは主体的に事前学習課題を行うことにより知識の記憶に効果的であったとの評価を得た。
７）ポートフォリオを活用した自己主導型学習の支援	平成26年7月～平成26年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科の基礎看護学実習Ⅰ、1年次配当（1単位）において実習の企画、運営、実習指導を担当した。学生にとっては早期体験演習に続き2回めの臨地実習であるが、半年以上期間が開いているため、実習における主体的な学習姿勢を改めて意識付けることが必要となる。そこで、ポートフォリオを活用し自己の目標設定や目標達成を自己管理し、学生が自分の成長を確認しながら実習できるよう工夫した。
２　作成した教科書，教材		
１）講義用補助教材	平成24年4月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1年次配当、30時間2単位のうち6時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。看護過程の展開のための事例を複数例作成し、事例展開に活用した。また、事例展開のプロセスを詳細にパワーポイントで示し、学生の理解がスムーズになった。
２）講義用補助教材	平成24年10月～平成24年13月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4年次配当、30時間(1単位)のうち11時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。倫理的意思決定の練習のための事例を複数例作成した。事例の登場人物の背景や状況を詳細に加えることで、学生の状況理解が深まり、文脈を読み解く能力が高まった。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		

1）兵庫県立大学看護学部教員評価委員会による、平成23年度教員活動報告書、平成23年度の目標に対する成果・実績、平成23年度領域別評価表、平成24年度目標設定に基づく評価	平成24年 9月27日	総合評価として、科目群の一部分担していること、他領域などへの支援も積極的にしていることを評価された。
2）	平成00年0月0日	
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）	平成00年0月0日	
2）	平成00年0月0日	
5　その他		
1）兵庫県立大学看護学部における教育実績	平成24年4月～平成24年7月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護学概論」1年次配当、30時間2単位のうち6時間(クリティカルシンキング、看護過程)担当した。
2）兵庫県立大学看護学部における教育実績	平成24年10月～平成24年3月	兵庫県立大学看護学部の専門教育科目「看護倫理」4年次配当、30時間(1単位)のうち11時間(看護倫理、関連する倫理概念)担当した。
3）奈良県立医科大学医学部看護学科における教育実績	平成25年4月～平成25年9月	基礎看護技術Ⅱ、基礎看護学実習、　基礎看護学実習Ⅱ、老年看護学実習を担当した。
4）千里金蘭大学看護学部看護学科における教育実績	平成25年11月	小児看護学実習を担当した。
5）大阪府立大学地域保健学域看護学類における教育実績	平成25年10月～平成26年3月	生活支援論、生活支援看護学実習を担当した。
6）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成26年4月～平成25年3月	早期体験演習、基礎看護学実習Ⅰ、基礎看護技術演習Ⅰを担当した。
7）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月	基礎看護技術演習Ⅱ、基礎看護技術演習Ⅲ、早期体験演習を担当し、現在に至る。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許(第597138号)	昭和62年5月	
2）日本心理学会　認定心理士(第17799号)	平成18年8月	
3）日本選択理論心理学会　准選択理論心理士(第23号)	平成18年11月	
4）修士（看護学）	平成21年3月	大阪府立大学　第６６号 修士論文題名「看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と関連要因」
2　特許等		
1）なし	昭和00年0月	
2）	昭和00年0月	
3）	昭和00年1月	
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）奈良県立医科大学付属病院小児科病棟看護師	昭和62年4月 ～平成元年3月	小児科病棟に勤務。主に白血病、血友病などの小児血液疾患の看護にあたった。その他、気管支喘息、腎炎、紫斑病、髄膜炎、悪性リンパ腫、潰瘍性大腸炎、幽門狭窄症など多様な疾患の看護にあたった。
2）吉馴医院　産婦人科・整形外科看護師	平成元年7月 ～平成2年2月	産婦人科病棟において、周産期の看護、帝王切開の介助、産婦人科外来診療の看護にあたった。 整形外科外来において外来診療看護にあたった。
3）市立柏原病院　内科外来看護師	平成10年12月 ～平成12年9月	内科外来勤務。循環器内科、消化器内科、呼吸器内科、神経内科の外来診療看護にあたった。
4）大道クリニック　人工透析室看護師	平成12年10月 ～平成14年4月	人工透析室勤務。ＨＤの看護、慢性腎不全患者の看護、糖尿病患者の看護にあたった。
5）仁真会白鷺病院　人工透析室看護師	平成14年月 ～平成18年3月	人工透析室勤務。ＨＤ、ＨＤＦ、ＨＦの看護、慢性腎不全患者の看護、糖尿病患者の看護、ＡＳＯ患者の看護にあたった。プリセプターとして新人看護師の指導にあたった。院内看護研究において、所属部署の研究チームの一員として人工透析患者のフットケアに関する研究を実施した。
4　その他		
1）兵庫県立大学看護学部　実習調整委員会	平成22年4月	実習調整委員として、学生の実習環境の調整、実習教育セミナーの企画運営にあたった。
2）兵庫県立大学看護学部　生涯学習委員会	平成23年4月	生涯学習委員として、社会貢献の一環として公開講座の企画運営にあたった。
3）兵庫県立大学看護学部　入試委員会	平成24年4月	入試委員として、入試関連データの入力業務等に携わった。

４）科学研究費助成金（基盤研究Ｃ）課題番号２５４６３３３３	平成25年4月	研究代表者として、研究題名「新人期看護師の社会人基礎力と関連要因の検討」科学研究費助成金を獲得し研究遂行し、現在に至る。
５）奈良学園大学　社会連携センター運営委員会	平成26年4月	社会連携センター運営委員として、社会連携推進の企画、運営に携わり、現在に至る。
６）奈良学園大学保健医療学部看護学科　実習部会	平成26年4月	実習部会の委員として、実習要綱作成、実習要項作成、その他実習関連業務に携わり、現在に至る。
７）奈良学園大学保健医療学部看護学科　教務部会	平成26年9月	教務部会の委員として、業務等に携わり、現在に至る。
８）日本看護学教育学会　学会誌査読委員	平成27年4月	日本管語学教育学会誌の査読委員に携わり、現在に至る。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
	単	平成00年0月		
	共	平成00年0月		
	共	平成00年0月		
（学術論文） 看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 （修士論文）	単著	平成22年3月	大阪府立大学	看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人基礎力と関連要因との関係を明らかにし、現状を把握する目的で、看護系大学8施設の１年次と４年次に在籍する学生1043名に質問紙調査を実施した。社会人基礎力の構成要素は共分散構造分析による確認的因子分析と多母集団分析により、3分類12能力要素から構成されるひとつのまとまりある概念であることが示された。社会人基礎力の関連要因はSpearmanの相関係数、Mann-WhitneyのU検定、多重ロジスティック回帰分析による検討を行った。社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関関係にあった。社会人基礎力の3分類すべてに対し影響していたのは看護実践力の「自己の学習課題の解決に向けた取り組みをしている」と、日常生活経験の「授業時間以外に自己学習する」であった。 Ａ4判　全68頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討 （査読付）	共著	平成23年 3月	大阪府立大学紀要第17(1)	本研究の目的は看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、属性による相違について検討することである。社会人基礎力は経済産業省により3分類12能力要素の構成とされている。看護系大学8施設の1年次と4年次の学生1043名を対象に、社会人基礎力を問う36項目の質問紙調査を実施した。構成要素の検討は構造方程式モデリングによる確認的因子分析と多母集団同時分析、属性による相違の検討はMann-WhitneyのU検定を用いた。社会人基礎力の構成要素は経済産業省の定義に基づく構造のまとまりある一つの概念であることが示された。学年別と性別の多母集団同時分析において、このモデル構成は学年および性別による母集団の相違に対応していることが示された。社会人基礎力合計得点はMann-WhitneyのU検定において、社会人未経験者より経験者、1年次生より4年次生、女子学生より男子学生が有意に高値を示した。看護学基礎教育における社会人基礎力の伸長の可能性が示唆される。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
学会誌掲載論文から見た臨床看護職が行っている看護研究の現状と課題 （査読付）	共著	平成24年 3月	兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要，19，1-15	【目的】臨床看護職による学会誌掲載論文の現状を把握し、EBPの推進に寄与できる看護研究の実践に向け課題を明らかにする。【研究方法】2004年から2008年の5年間に25学術誌に掲載された原著論文、研究報告、実践報告として掲載された論文1545編を対象とし、自作の研究デザイン別チェックリストに従い論文の記述内容を検討した。【結果】臨床看護職が第一著者である論文は210編(全体の13.6%)であり、論文の種類は研究報告、実践報告の占める割合が大きかった。質的研究のうち事例研究はResearch Questionが明確でない文献が多かった。実態調査・量的記述的研究のほとんど(85.7%)は標本の代表性に関する記述がなく、便宜的サンプリングが実施されていた。量的研究全般において、収集する変数の説明が明確でなく、自作アンケートによるデータ収集が多かった。【考察】臨床看護職による研究は看護のエビデンスの構築に充分寄与していないことが示唆され、緻密な研究のプロセスを踏む必要があると考えられた。 本人担当部分：データ整理、論文執筆 共著者：北島洋子，西平倫子，西谷美保，太尾元美，宮芝智子，坂下玲子，

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Critique看護学生の看護の認識:4学年群についての記述的研究	共著	平成24年　6月	インターナショナルナーシングレビュー，135(4),23-27	原文：Safadi RR , Saleh MY , Nassar OS , Amre HM , Froelicher ES(2011):Nursing students' perceptions of nursing: a descriptive study of four cohorts.Int Nurs Rev. ; 58(4):420-7. 上記論文のクリティークを実施し解説した論文である。本研究のサンプリング方法や倫理的配慮、データ分析方法にいくつかの疑問点はあるが、記述的に明らかにされた本研究の結果は、学生の看護の認識の発達に応じたカリキュラムを設計する際の基礎的資料となるものと考えられた。また、個人特性により看護の認識が異なる傾向があることを念頭に置いて、個々の学生への学習支援のあり方を考える、という意味において本研究結果は有用と考えられた。 本人担当部分：対象論文の分析、クリティークと論文の執筆を行った。 共著者：北島洋子，坂下玲子
看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係 （査読付）	共著	平成24年 7月	日本看護学教育学会誌，22(1)，1-12	【目的】看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力および日常生活経験の関係を明らかにする。【方法】看護系大学4年次生に質問紙調査を実施し、有効回答270をSpearmanの相関係数、多重ロジスティック回帰分析にて検討した。【結果】社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関を示し、社会人基礎力の下位概念である12の能力要素と看護実践力の4つの下位尺度ごとにおいても、すべての下位尺度間で有意な正の相関を認めた。社会人基礎力に影響を示した学習活動は「学校の担任やアドバイザーの教員に相談する」「授業の中でロールプレイする」「授業の中でディスカッションする」「授業時間以外に自己学習する」であった。【考察】看護学基礎教育において社会人基礎力は看護実践力と相互作用的な関係にあり、看護学基礎教育による伸長の可能性が示唆された。日常生活経験における多様な人々との関わり、相互作用的な教授－学習活動、授業外学習を取り入れた授業設計が社会人基礎力の伸長に効果的である。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
臨床から発表される論文の検討	単著	平成24年12月	看護研究，45(7)，649-658,医学書院	臨床において看護職によって行なわれている看護研究は看護学の知の創造に結びついているのか、またどのようにすれば知の創造に結びつけていけるのかをテーマに、臨床の看護職が学会誌に投稿し掲載されている論文から臨床における看護研究の現状を明らかにし、課題を分析した。さらに臨床から発表される論文が一層価値あるものとなるために、臨床の看護研究に比較的多く見られる課題をとりあげ、ケースごとに研究方法や取り組み方に関する改善のヒントを示し、新たな知の創造に向けた臨床の看護研究の具体的なあり方について考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護系大学生の社会人基礎力及び自己教育力と自己調整学習方略との関係（査読付）	単著	平成25年　2月	医学と生物学，157(2),222-228	【目的】看護系大学生の社会人基礎力と自己教育力に影響する自己調整学習方略を明らかにし、看護学基礎教育への示唆を得ること。【方法】平成23年11月に A大学看護学部学生の1年次から4年次生を対象とし、社会人基礎力、自己教育力、自己調整学習方略の質問紙調査を実施した。【結果】質問紙の回収は131名(回収率33.1%)であった。社会人基礎力と自己調整学習方略の下位尺度は全て有意な正の相関を示した。自己教育力の全ての下位尺度に対し自己調整学習方略の認知的方略が有意な正の相関を示した。多重ロジスティック回帰分析の結果、社会人基礎力に影響を示した自己調整学習方略の下位尺度は、努力調整方略とモニタリング方略であった。自己教育力にはモニタリング方略と認知的方略が影響を示した。【考察】学生の社会人基礎力と自己教育力は、自己調整学習方略を多く使用するほど高くなり、特にモニタリング方略の使用は効果的と考えられた。
中・大規模病院における看護研究に関する全国調査（査読付）	共著	平成25年　3月	看護科学会誌，33(1)，91-97	【目的】臨床の看護職に適した看護研究のあり方を検討するため、臨床の看護研究の現状を明らかにする。【方法】全国の100床以上の病院のうち無作為抽出した3000施設への質問紙調査。【結果】100床以上の規模の病院では高い割合で，看護研究が実施されている。研究する目的は「スタッフの教育」「患者サービス向上」「業務の改善」であり、質問紙法による実態調査が多く、研究期間や研究時間は短く、文献検討や研究資金は不十分、研究成果を論文として発表する率は低かった。【結論】データ分析や研究法の知識・技術に関する臨床のニーズに対し、組織外のリソースを活用した研究支援の必要性が示唆された。 本人担当部分：データの整理、分析、論文とりまとめを行った。 共著者：坂下玲子，北島洋子，宮芝智子，西平倫子，西谷美保，太尾元美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」				
看護系大学生の社会人基礎力の構成要素	共著	平成22年 8月	第20回日本看護学教育学会学術集会（大阪）	【目的】看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、社会人経験の有無、学年、性別による社会人基礎力の相違について検討する。【方法】看護系大学8施設の1年次と4年次の学生1043名に質問紙調査を実施し、共分散構造分析による確認的因子分析と多母集団分析、Mann-WhitneyのU検定で分析した。【結果】確認的因子分析のモデルの係数の推定値は全て有意で、適合度指標はデータのモデルへの良好なあてはまりを示した。社会人基礎力は、社会人未経験者より社会人経験者、1年生よりも4年生、女子学生よりも男子学生のほうが有意に高かった。【考察】看護系大学生の社会人基礎力は、企業の管理者と若手就労者による実践的知見に裏付けられたモデル構成と良好な適合度により、まとまりのあるひとつの概念であり、社会人基礎力は就労経験や学年の進行に伴い伸長すると考えられる。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係	共著	平成22年 8月	第36回日本看護研究学会学術集会（岡山）	【目的】看護系大学生の社会人基礎力と看護実践力の関係を明らかにする。【研究方法】看護系大学8施設の4年次の学生451名に質問紙調査を実施し、Spearmanの相関係数、多重ロジスティック回帰分析を実施した。【結果】社会人基礎力と看護実践力は有意な正の相関関係にあった。看護実践力20項目のうちの8項目が社会人基礎力に対して1.75から3.49のオッズ比を示し、その中でも「自己の学習課題の解決に向けた取り組みをしている」がアクション・シンキング・チームワークのすべてに対し正の影響を示していた。【考察】社会人基礎力と看護実践力は相互作用的な関係で伸長し、看護学基礎教育において看護学を学習していくことは、同時に社会人基礎力を身につけていくことにも寄与していると考えられる。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子，細田泰子，星和美，
院内看護研究の実施状況に関する全国実態調査	共著	平成22年12月	第30回日本看護科学学会学術集会（北海道）	【目的】100床以上の病院の看護部が行っている看護研究の実態を明らかにする。【研究方法】全国の病院8918のうち100床以上の病床を持つ5471病院より無作為抽出した3000病院に無記名質問紙を送付し看護研究推進担当者に回答を依頼した。【結果】1130病院から回収し、87.3%の病院が看護研究に取り組んでいると回答した。その目的はスタッフ教育が最も多く、次いで患者サービス向上であった。【考察】臨床看護職による研究は学問領域で考えられている新しい看護知識の提示をめざした研究とは異なり、教育の側面が強いことが明らかになった。今後臨床で看護研究という言葉で表現されている活動の目的や内容をさらに明確にし、臨床看護職が取り組む看護研究の意義について検討する必要があることが考えられた。 本人担当部分：データ整理 共著者：坂下玲子,宮芝智子,高谷嘉枝,北島洋子,若村智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護系大学生の社会人基礎力と日常生活経験の関係	共著	平成23年 3月	第21回日本医学看護学教育学会学術学会（出雲）	【目的】看護系大学生の社会人基礎力に関連する日常生活経験を明らかにする。【方法】看護系大学生1043名に質問紙調査を行い、多重ロジスティック回帰分析を行った。【結果】社会人基礎力のアクション・シンキング・チームワークの3分類すべてに影響を示したのは「授業時間以外に自己学習する」であった。その他に社会人基礎力に対し正の影響を示した項目は、学習経験では「学校の教師とコミュニケーションをもつ」「授業の中でロールプレイする」「授業の中でグループワークする」「学校の担任やアドバイザーの教員に相談をする」「学校の行事に参加する」であった。【考察】看護系大学生の社会人基礎力の育成にあたり、ロールプレイやディスカッション、グループワークを組み込んだ教授－学習活動、課外学習を取り入れたインストラクショナル・デザイン等が効果的であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子、星和美

新人看護師の職場適応行動	共著	平成26年12月	第34回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	【目的】新人看護師の職場適応について、適応行動の側面から質的帰納的に明らかにする。【方法】研究参加者は2年目の看護師16名(新卒で新規採用の社会人としての就業経験や准看護師経験がない、同一部署にて就職後1年を経た者)。半構成的面接法によりインタビューを実施し、質的記帰納的に分析した。【倫理的配慮】本研究は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。【結果】269コードから96サブカテゴリー、35カテゴリー、5コアカテゴリー【職務上必要な専門知識を学ぶ行為】、【新たな関係を構築する行為】、【職務を円滑にする行為】、【仕事に備え自己を整える行為】、【仕事に臨む心構え】が生成された。【考察】Piagetの説明する適応と同様に、新人看護師は、新規参入した職場において新たな行為や思考を取り入れたり、自己のそれまでの考え方を変容させたりして職場に適応する行動をとっていることが明らかになった。本研究は科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)の助成を受けて実施した研究の一部である。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
高齢者のための認知機能低下予防教室「脳いきいき教室」への継続参加の評価	共著	平成26年12月	第34回日本看護科学学会学術集会（名古屋）	【目的】認知機能低下予防教室への継続参加による認知機能への効果を明らかにする。【方法】65歳以上の認知症がなく自力歩行が可能な高齢者164名。測定尺度としてMMSEとファイブ・コグを用いた。継続参加者と単年度参加者別に分析を行った。【教室の概要】教室は4回、開催期間は6週間。内容は健康ミニ講座、知的活動を促すアクティビティ、有酸素運動、交流会。自宅での継続課題と散歩を課した。大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を得た。【結果】MMSEの単年度群と継続群間の初回参加時の得点およびフォロー時の得点において有意な差が見られなかった。群ごとにみた初回参加時とフォロー時では、継続群においてフォロー時のMMSE得点が有意に高かった（P＜.05）。ファイブ・コグでは、初回参加時の単年度群と継続群間において有意な差はなかった。【考察】８年間の取り組みである「脳いきいき教室」への継続参加による認知機能の評価を行なった。継続参加の効果が示されたことは、高齢者の認知機能が訓練により維持・改善できる可能性が示唆された。 本人担当部分：教育プログラムの実施、データ収集、データ整理 共著者：中村裕美子、深山華織、北島洋子

新人看護師の認識する職場適応状態	共著	平成27年 3月	第25回日本医学看護学教育学会学術学会（出雲）	【目的】新人看護師の職場適応状態について質的帰納的に明らかにする。【方法】近畿圏にある日本医療機能評価機構に認定されている200床以上の一般病院4施設に所属する2年目の看護師16名(新卒で新規採用の社会人としての就業経験や准看護師経験がない、同一部署にて就職後1年を経た者)を対象に、職場に慣れてきた、馴染んできた状態について半構成的にインタビューを実施し、その内容を質的帰納的に分析した。【倫理的配慮】本研究は大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認のもと実施した。【結果】130コードを抽出し53サブカテゴリー、4カテゴリー「チームへの所属感」「看護実践の手応え」「自律的な役割の遂行」「仕事に対する自己効力感」が生成された。【考察】本調査の結果は新人看護師自身の認識によるものであり、新人看護師の職場適応の自己評価尺度として活用可能なデータと考えられる。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子
新人看護師における社会人基礎力の関連要因の検討	共著	平成27年8月	日本看護研究学会第41回学術集会（広島）	【目的】新人看護師における社会人基礎力の関連要因を明らかにする。【方法】新卒で新規採用の看護師。質問紙は社会人基礎力尺度、看護実践力尺度、学生時代の日常生活経験。社会人基礎力の内的整合性、社会人基礎力と看護実践力の相関関係、日常生活経験による社会人基礎力への影響を検討。大阪府立大学看護学研究倫理委員会の承認を受けた。【結果】473名に配付、回収154名(回収率32.6%)、分析対象131名。社会人基礎力尺度のCronbach’αは0.92。社会人基礎力と看護実践力のSpearmanの相関係数は0.59の有意な正の相関関係。ロジスティック回帰分析によって社会人基礎力に対し正の影響を示したのは4項目。3項目は偏回帰係数が負であった。【考察】社会人基礎力尺度は内的整合性が認められ、新人看護師を対象としても信頼性がある。学生時代の日常生活経験は新人看護師の社会人基礎力に影響を与える。科学研究費助成事業(研究課題番号:25463333)。 本人担当部分：研究計画、研究遂行、学会発表 共著者：北島洋子、細田泰子

教　育　研　究　業　績　書

平成27年　５月　12

氏名　　西田　絵美

研究分野	研究内容のキーワード
看護学、教育学	母性看護学、看護教育学、教育方法、ケアリング、カリキュラム

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 １）NIE教育とプロジェクト学習	平成17年４月～９月	常勤講師として担当した白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻の1年次前期科目である母性看護学概論の授業においてNIE実践を行い、自主的な学習の発展をねらいプロジェクト学習を行った。NIE実践で興味関心のあるテーマを学生自身で選び、少人数ゼミスタイルで学習を行い発表会を開催した。この授業により、母性看護に関する関心の高まりと、学習意欲の向上がみられたことが、学生による授業評価アンケートからもうかがえた。
２）他職種連携へ向けた意識づけ教育	平成20年４月～９月	常勤助教として担当した畿央大学健康科学部における「基礎ゼミ」（初年次教育の少人数ゼミ）においてNIE実践を行なった。看護学科、栄養学科、健康デザイン学科の学生6人が参加し、自己のめざす職業について新聞記事を用いて他分野の学生にもわかるように説明するという行為が、職業的理解につながった。後にグループインタビューを行い質的に分析することで、NIE実践が思考力を育成するものとなっていることも確認した。
３）プロジェクト学習とポートフォリオ作成教育	平成21年４月～平成23年８月	常勤講師として担当した藍野大学医療保健学部看護学科の専門科目「母性看護学活動論」（3年次前期）において、看護学生の学習意欲向上と問題解決能力育成をねらいとして、母性看護学の授業にプロジェクト学習とポートフォリオ作成を導入した。プロジェクト学習でのグループ学習と、ポートフォリオでの個人の学習プロセスを同時に実施することで、学生の学びの拡大を図るものである。学内学習と臨地実習をつなぐ授業となった。
４）母性看護技術におけるジグソー教育	平成21年４月～平成23年８月	常勤講師として担当した藍野大学医療保健学部看護学科の専門科目「母性看護学活動論」（3年次前期）の中の母性看護技術習得演習においてジグソー学習方法を取り入れた。ジグソー学習法とは、学生同士が教え合うシステム学習で、学生の主体的学習を促進する方法である。この方法を取り入れることで、学生の主体性をひきだし、後期の実習へのモチベーションを高めると同時に、大多数の学生に対応できる教育方法でもある。
２　作成した教科書，教材 『ウェルネスの理解をめざした看護過程実践ワークブック』（再掲）	平成23年４月～８月	藍野大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「母性看護学活動論」（専門科目、3年次配当、前期、必修2単位）において使用した。この科目は後期の母性看護学実習に直結する知識や技術を学ぶ授業であるため、授業で学んだことをまとめる工夫をこらしたワークブックを作成し使用した。このワークブックは、後期の実習で自己学習ノートとしても使用できるような個別的な教材である。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 平成21年度～22年度　授業評価アンケート	平成21年度・22年度	藍野大学医療保健学部看護学科における「母性看護学活動論」のセメスターごとの授業評価では、常に学科内平均を上回っており、特に「教員の熱意」や「学生の反応に合わせる」という項目が高得点であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 １）専門学校助産師学生への臨地実習指導	平成２年４月～平成６年３月	常勤助産師として助産学生の実習指導を担当した。指導内容は主に、褥婦および新生児のケアと分娩介助である。

２）短大専攻科助産師学生への臨地実習指導	平成11年４月～６月	非常勤助産師として、奈良県立医科大学看護短期大学部助産学科専攻科学生の臨床実習指導を行う。主に妊婦健康診査と妊婦に対する助産診断・健康教育の指導を行った。
３）総合病院看護部における看護研究指導	平成21年４月～平成26年３月	高の原中央病院の看護研究指導の講師として、1年に１～2回の研修講義と、研究グループに対する指導を行う。研修講義内容は「看護研究とは」「研究計画書の書き方」「統計分析方法」「統計ソフトSPSS」「論文の書き方」などである。研究指導実績は合計36件である。
４)奈良県看護協会 臨地実習指導者講習会　講師	平成24年８月～10月	奈良県看護協会主催の臨地実習指導者養成講習会に実習指導案作成の講師として参加した。主に成人看護学グループの授業案作成の理念から具体的指導案作成までの指導・助言を行った。
５)病院看護部の看護師に対する教育計画立案および実施・評価	平成24年12月～平成26年３月	高の原中央病院看護部における教育主担者として教育全般の企画およびスタッフ指導を行った。主たる活動として平成25年度の看護職対象の研修教育計画を立案した。従来の強制的な研修参加法を廃止し、「人間性育成」「看護実践力育成」「リスクマネージメント力育成」「キャリア形成支援」「看護研究支援」などのコース制と選択的研修参加法を導入した。看護師ひとりひとりが主体的に楽しく学ぶことで個人のキャリア形成につなげることをねらいとした。
５　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）看護師免許	昭和62年5月20日	第600490号（厚生大臣）
２）助産師免許	昭和63年6月29日	第91032号（厚生大臣）
３）看護教員	平成12年12月22日	第1579号（大阪府知事）
４）看護管理者ファーストレベル修了	平成13年1月29日	第2615号（大阪府看護協会）
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 講義		
１）「母性看護学概論」の講義担当	平成17年4月～平成17年９月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻の学生90人を対象に「母性看護学概論」（必修2単位）を担当した。1年次前期科目であるため、学生の興味関心を引き出すことを主眼とし、女性看護学という広い視点で看護を考えることを重視した授業を行った。
２）「母性看護学方法論」の講義担当	平成17年10月～平成18年３月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻の学生90人を対象に　前期で行った授業の発展的位置づけとして科目を捉え、母性看護学の基礎的方法論についての授業展開を行った。
３）「母性看護学援助論」の講義担当	平成18年4月～平成20年3月	奈良文化女子短期大学衛生看護学科において常勤講師として「母性看護学援助論」を担当した。授業では、国家試験対策も視野に入れ、毎回の授業において国家試験の過去問を解いていくことを課題とし、その達成度をみた。
４）「成人看護学概論」の講義担当	平成18年4月～平成18年９月	奈良文化女子短期大学衛生看護学科において常勤講師として「成人看護学概論」の授業を担当した。成人看護学概論では、講義内にグループワークを取り入れ、学生同士が学びあうことで知識が向上することに力を入れた。
５）「卒業研究ゼミ」の担当	平成18年4月～平成20年３月	奈良文化女子短期大学衛生看護学科において常勤講師として「卒業研究ゼミ」を担当した。学生の希望によるテーマ別ゼミであり、学生の興味関心のある課題を研究できることを重視し、論文指導を行った。指導に当たった学生は6人であるが、そのうちの1人はまとめた卒業研究を翌年外部発表しており、その指導助言も行った。

６）「母性看護学活動論」の講義担当	平成21年4月～平成23年8月	「母性看護学援助論（３年次前期）」を担当し、妊産褥婦の看護の確実な理解を目指した授業を行った。授業は講義だけではなく、グループ学習や演習を導入することで、体験的な学習を大切にした。また、後期の「母性看護学実習」に直接的につながる科目であるため、実習で行う技術に関しては演習を行い、時間外学習も学生の希望に応じて行った。
７）「卒業研究演習」の担当	平成21年4月～平成23年３月	「卒業研究演習」では、母性看護に関連したテーマで論文指導を行った。
実習指導		
１）短期大学における「基礎看護学実習Ｉ」	平成18年2月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻1年次生の基礎看護学実習Ｉに指導教員として、国立病院機構奈良医療センターにおいて実習指導を行った。
２）短期大学における「母性看護学実習」	平成18年9月～平成20年3月	奈良文化女子短期大学衛生看護学科の母性看護学担当講師として、八尾市立病院産科病棟で母性看護学実習指導を行った。すべての学生が受け持ちができるような工夫を行い、特に褥婦及び新生児の看護能力が身につくことを主眼とした指導を行った。
３）大学における「チーム医療演習」	平成20年8月	畿央大学健康科学部の「チーム医療実習（1年前期科目）」の指導教員として、済生会中和病院で実習引率および指導教育を行った。対象学生は、看護学科だけでは理学療法学科および栄養学科の学生も含み、医療現場におけるチーム医療の現実を教授するとともに、医療専門職としての意識づけに焦点を当て、指導した。
４）大学における「基礎看護学実習１」	平成21年2月	畿央大学健康科学部看護学科の「基礎看護学実習１」の指導教員として、奈良市立病院で実習指導を行った。
５）大学における「母性看護学実習」	平成20年9月～平成23年3月	藍野大学医療保健部看護学科の母性看護学担当講師として、実習要項の作成から実習指導および評価までを行った。病院実習は高槻赤十字病院で行い、必ず学生が1組の母子を受け持てるように配慮した。女子学生だけではなく男子学生についてもほとんどの学生が受け持ちができた。また、地域における母子支援を学ばせるために、大阪府下の子育て支援施設における実習も組み込み、学生指導を行った。
６）大学における「統合看護学実習」	平成21年4月～平成23年4月	藍野大学医療保健学部看護学科の「統合看護学実習」の指導教員として、藍野病院で実習指導を行った。
４　その他 １）大学病院産科病棟における助産業務	昭和63年４月～平成６年３月	常勤助産師として奈良県立医科大学附属病院産科病棟において、正常分娩介助、妊産褥婦および新生児の看護と保健指導を行った。また、第三次救急医療施設であるため母体搬送数も多く、異常妊産褥婦のケアも同時に実践した。平成２年には、病院で販売していた指導用パンフレットの作成業務に携わった。
２）県立病院産科病棟の立ち上げ業務	平成４年４月～平成５年３月	奈良県立五條病院に産婦人科病棟を開設する時の立ち上げスタッフとして1年間出向勤務した。病棟のマニュアル作成、スタッフの指導などを主たる業務として実践した。
３）産科病院における助産業務	平成７年９月～平成10年12月	非常勤助産師として林産婦人科の入院施設病棟において助産業務を行った。主な業務は、分娩介助、妊産褥婦および新生児のケア・保健指導、母親教室等の集団指導である。
４）出張訪問の助産所開業	平成10年４月～平成11年６月	奈良県助産師会の後援により、訪問業務のみの助産所を開院した。主たる業務は、妊産褥婦および新生児の訪問指導、出張沐浴、乳房管理指導等である。
５）奈良県磯城郡保健センターとの委託助産業務	平成10年４月～平成12年３月	奈良県磯城郡田原本町・川西町・三宅町の保健センターの委託助産師として母子保健業務に携わった。主な業務は、新生児訪問指導、妊婦訪問指導、集団教育運営である。
６）母性看護学の専任教員	平成11年７月～平成17年３月	奈良県医師会看護専門学校の専任教員として看護教育に携わった。母性看護学担当教員として、講義および実習指導を実施した。

７）専門学校における実習調整者	平成15年４月～平成17年３月	奈良県医師会看護専門学校3年課程新設後初めての実習において、全実習領域の統括調整役割を担った。実習配置案の作成、各実習施設との実習環境調整、臨地実習指導者会開催の司会進行などを実施した。
８）大学生向けハラスメント防止リーフレットの作成	平成20年4月～平成21年3月	畿央大学におけるハラスメント委員として、学生対象のハラスメント防止リーフレットを作成した。当大学においてハラスメント委員会が設けられた初年度でもあり、セクシャルハラスメントが大学生の心身へどのような弊害があるかを熟知した専門家として携わった。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月日	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
［著　書］ 『ウェルネスの理解をめざした看護過程実践ワークブック』	単著	平成22年10月	どうき出版	学生が学内講義で学んだ知識を臨地実習で活かす方法としてワークブックを作成した。講義で考えたプロセスをワークブックにそのたびに落とし込み、実習の場でそれを紐解くことで、講義での思考プロセスを想起できるような工夫をしたものである。 「A4版　全87頁」
［学術論文］ １．「看護学校に入学した大学卒業者の特徴―高校卒業者との比較を通して―」（査読あり）	共著 （筆頭）	平成15年12月	『第34回日本看護学会看護教育論文集』、pp. 112-114	看護学校に入学した大学卒業者と高校卒業者に対し、学校生活における意識調査を実施した。その結果大卒者は①自己の適性を考慮し自己決定により職業選択しており、②学校生活に適応しやすく③主体的な学習姿勢を持ち④主体的な学生生活を過ごしていることが明らかになった。 本人担当分：共同研究につき、質問紙作成・データ収集と入力は共同で行い、その後のデータ分析および論文のとりまとめを責任をもって行った。 共著者：西田絵美、勝眞久美子、上平悦子
２．「看護学生の看護専門学校に対する満足度とイメージの特徴」（査読あり）	共著	平成15年12月	『第34回日本看護学会看護教育論文集』、pp. 97-99	看護専門学校生に調査を行い、学生が学校に対して満足感を得ている環境、得ていない環境を区別し、学校をどのようなイメージで捉えているかという実態を明らかにした。看護学生は学校を，自由ではないが肯定的なイメージで捉えており，学校の満足感は，学習意欲の促進に関連していた。 本人担当分：質問紙作成・データ収集と入力を共同で行った。 共著者：勝眞久美子、西田絵美、上平悦子
３．「大卒学生と高卒学生のクリティカルシンキング指向性の比較分析」（査読あり）	単著	平成16年12月	『第35回日本看護学会看護教育論文集』、pp. 166-168	看護学校に在籍する大卒学生高卒学生のクリティカルシンキング志向性を測定した結果、大卒学生は高卒学生より高いが、1年次から3年次の育成の過程は高卒学生の方が高いことが明らかになった。このことから現在の看護教育は大卒学生に焦点があたっていないこと、クリティカルシンキング能力の育成は不十分であることが示唆された。
４．「臨地実習におけるセクシャルハラスメント体験の問題の分析」	共著	平成17年12月	医学書院『看護教育』46〈12〉、pp. 1070-1074	臨地実習において患者からセクハラを受けた学生にインタビューを行い、その影響と問題について分析した。その結果、学生は看護観に歪みが生じ、患者を全人的に看護することが困難になった。つまり、セクハラ体験は学生が看護師になる過程においてアイデンティティ形成の障害になっていることがわかった。 本人担当分：逐語録におこしたインタビューのデータを、質的研究方法を用いて分析・考察した。 共著者：北出千春、西田絵美、濱田明日香、中村乃利子
５．「看護学生が看護教員との関わりにおいて感じる不満の分析」	単著	平成18年11月	『奈良文化女子短期大学紀要』第37号」、pp. 155-164	短期大学と専門学校に在籍する看護学生を対象に、学生生活における教員との関わり体験の中で不満を感じた場面を、半構成的質問紙において収集し質的に分析することで、学生の教員に対する不満の原因や構造への考察をこころみた。その結果、学生の教員に対する不満は、教員の持つ看護学の専門性に関与していること、教員の教育学的資質不足、教員と学生の認識のズレなどが原因になっていることなどの示唆が得られた。
６．「新聞記事発表を取り入れた母性看護学概論授業の効果―学生のレポートの分析より―」（査読あり）	共著 （筆頭）	平成19年１月	『第37回日本看護学会看護教育論文集』、pp. 173-175	看護専門学校における母性看護学概論の授業において、母性に関する新聞記事を学生自身が選び発表する参加型学習の授業を実施した。その教育方法の効果を明らかにするために授業終了後の学生のレポートを内容分析した。その結果、自らの発表や他学生の発表を聞くことにより、知識の発見・獲得にとどまらず、その意味形成の創造的思考、さらに得た知識の社会化レベルまでの発展的な学習ができていることが明らかになった。 本人担当分：研究筆頭者として研究過程すべてを共同研究者の協力を得ながら実施した。 共著者：西田絵美、中村乃利子、濱田明日香、北出千春、中村理恵

７．「看護師養成カリキュラムに関する研究―母性看護学と助産学の位置関係の問題に焦点付けて―」	単著	平成20年３月	佛教大学大学院、修士学位論文	現行の看護師養成カリキュラムの構造と内容を分析し、現行カリキュラムにおける問題を導き出した。最も問題となるべきことは、現行の看護師養成カリキュラムに、看護の専門性が明確に組み込まれていないことにある。さらに、母性看護学と助産学の位置関係の問題をも指摘し、看護師と助産師の職務の相違とそれぞれのケアの概念理解から、助産学の土台となるべき学問は母性看護学ではなく、看護学すべてであると結論づけた。 A4版、全52頁
８．「バースプランの作成が妊産婦の主体性を高めるプロセス―M-GTAの手法を用いて―」（査読あり）	共著	平成21年１月	『第39回日本看護学会母性看護論文集』、pp.60-62	公立総合病院産科病棟で分娩予約した8名の妊婦にバースプランを行い、バースプランが妊婦の主体性を高めるプロセスをM―GTAの手法を用いて分析した。その結果、パースプラン作成過程において妊婦は、①出産を見つめ直す②不安の言語化③分娩への前向きな気持ち④達成感⑤ひとりではない⑥安心感⑦自己効力感⑧医療者の姿勢の表出などの概念から、バースプラン作成過程が妊婦の主体性を育成していることがわかった。 本人担当分：逐語録のインタビューデータを、 M―GTAを用いて分析・考察した。 共著者：上田恵、村田さよ子、小倉三和、西田絵美
９．「看護師養成カリキュラムの分析―母性看護学の位置関係の問題に焦点付けて―」	単著	平成21年９月	『インターナショナルNursing Care Research』、18（3）、pp.23-31	平成20年に改正された看護師養成カリキュラムの構造と内容を分析し、カリキュラムにおける問題を導き出した。総合看護学が導入されたにも関わらず、現行の看護師養成カリキュラムに、看護の専門性が明確に組み込まれていないことが問題であり、看護の専門性と看護学の学問的基盤が希薄であることを示している。そのために母性看護学の教育内容が不明確な状態になっている。
10．「ラベルワークを取り入れた母性看護学実習の実践報告－学生のラベル図解、発表、レポートの内容から学習内容を読み取る―」	共著	平成22年11月	『インターナショナルNursing Care Research』、19（4）、pp.109-115	母性看護学実習にラベルワークを取り入れ、発表会資料、個人レポート等を質的帰納的分析により学習内容を明らかにした。「生命の尊厳」「母性観」など今まで学習効果が表出されにくい情意領域の学習内容が確認できた。 本人担当分：ラベル図解、逐語録、レポートで得たデータの分析と考察を共同研究者と共に行った。また、英文題目・抄録は責任を持って作成を担当した。 共著者：濱田明日香、中村乃利子、西田絵美
11．「新人看護師への教育的かかわりによるチームの成長プロセス」（査読あり）	共著（筆頭）	平成26年４月	『第44回日本看護学会看護教育論文集』、pp.169-172	看護師がチームとして新人看護師に教育的かかわりをもつことが、メンバー看護師およびチーム全体にとってどのような影響を与えるのかについて明らかにするために、M-GTAを用いて分析を行った。その結果、プリセプター看護師が不在であることで、メンバー看護師と新人看護師には寄り添う関係性が、メンバー看護師同士には補完の関係性が形成されていたことがわかった。 共著者：西田絵美、大槻直美、田中由紀
12.「転倒・転落事故に遭遇した看護師の認識の分析―医療安全教育の問題と提言―」	共著（筆頭）	平成26年９月	『奈良学園大学紀要第１集』pp.101-108	勤務中に転倒・転落を発見した看護師に半構造化面接を行い分析することで、看護師の認識を明らかにした。その結果、転倒・転落事故を防止するには、可視化できない事象や情報に対する看護師のアセスメント能力が関与していることがわかった。このことから、医療安全教育は方法論的側面からのアプローチだけではなく、本質論的教育の必要性が示唆できた。 共著者：西田絵美、伊藤舞、森香織
13．「メイヤロフのケアリング論の構造と本質」（査読あり）	単著	平成27年３月	『佛教大学大学院紀要教育学研究科篇』第43号、pp.35-51	看護の中核概念である〈ケアリング〉が未だ十分に吟味されていないことは、カリキュラムとしての助産学の基盤に揺らぎを与えている。そこで〈ケアリング〉の原理的本質を明らかにすることを目的とし、ケア理論の先駆者であるメイヤロフの理論分析を試みた。その結果、メイヤロフのケアリング論は方法論と本質論の二つの柱で構成されており、諸分野に通底する原理的な理論であることが明らかになった。つまり、〈ケアリング〉は看護の本質的属性であり、助産学の基盤は母性看護学ではなく看護学全般であることが示唆された。
その他[学会発表]				

１．看護学校に入学した大学卒業者の特徴―高校卒業者との比較を通して―（発表者）	共同	平成15年8月	日本看護学会第34回看護教育学術集会（於石川厚生年金会館）	看護学校に入学した大学卒業者と高校卒業者に対し、学校生活における意識調査を実施した。その結果大卒者は①自己の適性を考慮し自己決定により職業選択しており、②学校生活に適応しやすく③主体的な学習姿勢を持ち④主体的な学生生活を過ごしていることが明らかになった。 本人担当分：共同研究につき、質問紙作成・データ収集と入力は共同で行い、その後のデータ分析および論文のとりまとめを責任をもって行った。 共同発表者：西田絵美、勝眞久美子、上平悦子
２．看護学生の看護専門学校に対する満足度とイメージの特徴	共同	平成15年8月	日本看護学会第34回看護教育学術集会（於石川厚生年金会館）	看護専門学校生に調査を行い、学生が学校に対して満足感を得ている環境、得ていない環境を区別し、学校をどのようなイメージで捉えているかという実態を明らかにした。看護学生は学校を，自由ではないが肯定的なイメージで捉えており，学校の満足感は，学習意欲の促進に関連していた。 本人担当分：質問紙作成・データ収集と入力を共同で行った。 共同発表者：勝眞久美子、西田絵美、上平悦子
３．大卒学生と高卒学生のクリティカルシンキング指向性の比較分析	単独	平成16年8月	日本看護学会第35回看護教育学術集会（於和歌山県民文化会館）	看護学校に在籍する大卒学生高卒学生のクリティカルシンキング志向性を測定した結果、大卒学生は高卒学生より高いが、1年次から3年次の育成の過程は高卒学生の方が高いことが明らかになった。このことから現在の看護教育は大卒学生に焦点があたっていないこと、クリティカルシンキング能力の育成は不十分であることが示唆された。
４．臨地実習におけるセクシャルハラスメント体験の問題の分析	共同	平成17年12月	日本看護学会第36回看護教育学術集会（於宇都宮文化会館）	臨地実習において患者からセクハラを受けた学生にインタビューを行い、その影響と問題について分析した。その結果、学生は看護観に歪みが生じ、患者を全人的に看護することが困難になった。つまり、セクハラ体験は学生が看護師になる過程においてアイデンティティ形成の障害になっていることがわかった。 本人担当分：逐語録におこしたインタビューのデータを、質的研究方法を用いて分析・考察した。 共同発表者：北出千春、西田絵美、濱田明日香、中村乃利子
５．母性看護学における授業方法の検討―3次元CGシミュレーションを用いた模擬分娩演習からの学び	共同	平成17年10月	日本母性衛生学会第46回学術集会（於シェラトンリゾートワールド・コンベンションセンターサミット）	分娩数減少に伴う実習体験の希薄さを補うために、2年次在籍の学生に3次元シミュレーションを用いた模擬分娩授業を実施し、学生の感想文からその成果を分析した。その結果、模擬分娩体験は、実習での分娩見学と同様の情意領域への高まりがみられ、母性看護学実習へのモチベーションの高まりもみられた。 本人担当分：学生のアンケートを内容分析法を用いて分類・分析した。またその結果から、模擬分娩の意味や考察も共に行った。 共同発表者：北出千春、西田絵美、大槻優子
６．新聞記事発表を取り入れた母性看護学概論授業の効果―学生のレポートの分析より―（発表者）	共同	平成18年月	日本看護学会第37回看護教育学術集会（於愛媛県民文化会館）	看護専門学校における母性看護学概論の授業において、母性に関する新聞記事を学生自身が選び発表する参加型学習の授業を実施した。その教育方法の効果を明らかにするために授業終了後の学生のレポートを内容分析した。その結果、自らの発表や他学生の発表を聞くことにより、知識の発見・獲得にとどまらず、その意味形成の創造的思考、さらに得た知識の社会化レベルまでの発展的な学習ができていることが明らかになった。 本人担当分：研究筆頭者として研究過程すべてを共同研究者の協力を得ながら実施した。 共同発表者：西田絵美、中村乃利子、濱田明日香、北出千春、中村理恵
７．母性看護学実習における学生の主体的な学習意欲をもたらす要因	共同	平成19年10月	日本母性衛生学会第48回看護教育学術集会（於つくば国際会議場）	母性看護学実習において学生自らが主体的に学習したいと思った場面を分析し学習意欲をもたらす実習環境要因を導き出した。その結果、「指導者教員の関わり」「妊産婦との関わり」「グループダイナミクス」などの他者との関係因子と、「役に立ちたい」「感動した」などの感情の因子が、学習意欲に結びついていることが明らかになった。 本人分担分：研究計画の立案、収集されたデータ分析、考察などを共同研究者と共に行った。 共同発表者：中村理恵、北出千春、中村乃利子、西田絵美、濱田明日香

８．専門職養成大学におけるNIE実践の試み―専門職に必要な問題解決能力の育成をめざして―	単独	平成20年11月	日本NIE学会第５回全国大会（於福岡教育大学）	専門職養成大学の教養課程段階教育において、新聞を活用する教育方法（NIE）を導入し、教育効果と問題を検討した。教育効果として、リテラシーの向上があり、問題解決能力の一部（情報収集・アセスメント・問題の把握と明確化）の育成に関与可能という示唆を得た。保健医療福祉分野における専門職育成に対する教育方法の確立が今後の課題となった。
９．バースプランの作成が妊産婦の主体性を高めるプロセス―M-GTAの手法を用いて―	共同	平成20年８月	日本看護学会第39回母性看護学術集会（於秋田県民会館）	公立総合病院産科病棟で分娩予約した8名の妊婦にバースプランを行い、バースプランが妊婦の主体性を高めるプロセスをM―GTAの手法を用いて分析した。その結果、バースプラン作成過程において妊婦は、①出産を見つめ直す②不安の言語化③分娩への前向きな気持ち④達成感⑤ひとりではない⑥安心感⑦自己効力感⑧医療者の姿勢の表出などの概念から、バースプラン作成過程が妊婦の主体性を育成していることがわかった。 本人担当分：逐語録のインタビューデータを、 M―GTAを用いて分析・考察した。 共同者：上田恵、村田さよ子、小倉三和、西田絵美
10. 国内における看護実践能力育成教育に関する文献検討―基礎教育と卒業教育との比較検討―	単独	平成23年９月	日本看護学会第42回看護総合学術集会（於シェラトン・グランド・トーキョーベイ・ホテル）	我が国における「看護実践能力」育成教育に関する文献研究を行った。現在看護界で重要視されている能力であるが、定義の統一がされていないために、それぞれの養成機関や病院において行われている教育が有効ではなく、看護全体の質の貢献には到達していないことが明らかになった。
11. 新人看護師への教育的かかわりによるチームの成長プロセス（発表者）	共同	平成25年10月	日本看護学会第44回看護教育学術集会（於大宮ソニックシティ）	看護師がチームとして新人看護師に教育的かかわりをもつことが、メンバー看護師およびチーム全体にとってどのような影響を与えるのかについて明らかにするために、M-GTAを用いて分析を行った。その結果、プリセプター看護師が不在であることで、メンバー看護師と新人看護師には寄り添う関係性が、メンバー看護師同士には補完の関係性が形成されていたことがわかった。 共同発表者：西田絵美、大槻直美、田中由紀
12. 看護師の倫理的感受性の傾向	共同	平成25年10月	日本看護学会第44回看護教育学術集会（於大宮ソニックシティ）	看護師の倫理的感受性を明らかにすることを目的とし、看護師205名を対象に意識調査を実施した。看護師の倫理的感受性は、人生経験や実務経験を通して高められること、安全安楽を守る権利に関する感受性が高いこと、倫理学習を継続することを軽視しがちであることなどが明らかにできた。 共同発表者：高林美沙、耳塚淑子、西田絵美、上野弘子
13. What lies behind Education Behavior of Preceptors to Novice Nurses - Focusing on educational concept of values of preceptors-	単独	平成27年2月5日	18th Conference of East Asian Forum of Scholars （Taipei,TAIWAN）	プリセプターが新人看護師をどのような存在として捉えているのかを明らかにすることを目的とし、プリセプターを対象にM-GTA手法で分析を行った。その結果明らかになったことは、新人看護師に対する理想と現実にギャップが生じていることと、自身の価値観で態度が培われていることである。
その他[マスコミ] 1. 新聞	単独	平成22年 11月３日	毎日新聞（朝刊）	奈良県内の大学教員が発信する教育に関する2回連載型記事である。「質の高い看護師養成を目指した教育（上）ー大卒学生とクリティカルシンキング能力ー」という見出しで、質の高い看護師を養成するためのポイントについて述べた。
２．新聞	単独	平成22年 11月10日	毎日新聞（朝刊）	奈良県内の大学教員が発信する教育に関する２回連載型記事である。「質の高い看護師養成を目指した教育（下）ー母性看護学の授業とNIEの導入―」という見出しで、質の高い看護師を養成するためのポイントについて述べた。

教　育　研　究　業　績　書

平成２７年５月１日

氏名　出原　弥和

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	看護教育学　母性看護　家族看護

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
１）模擬患者を利用した看護技術教育	平成24年9月	三重大学　医学部看護学科　成人看護学実習Ⅰ 学内の看護学演習で、より臨場感を出し、学生が演習に取り組めるように、コミュニケーションや指導場面を設定し、模擬患者を利用している。学生は臨地実習に向けての意識が高まるとともに、模擬患者からのフィードバックがあることで、自己の特性などに気づくことができている。
２）多職種連携教育	平成24年6月	三重大学　医学部看護学科　統合実習 4年生の統合実習において、医学生とともに同一患者を受け持つことで、互いの専門性を知り、また自らの専門性をより理解できている。学生は卒業を前にこの体験をすることで、臨床で働く自分をより具体化することができている。
	平成25年2月	三重大学　医学部医学看護学教育センター主催　みえIPEセミナー 三重県内および名古屋の医療福祉系の5学部、6大学の学生に対し、1事例に対し多職種でケアプランを作成していくワークショップを開催した。事例は紙上事例と模擬患者を組み合わせ、より臨場感に近い形での学習方法を取り入れた。学生たちは、他職種の役割をお互いに理解し近い存在に感じるとともに、自らの専門性も再確認することができた。
３）学部講義での工夫	平成22年4月～	担当の講義には、積極的にメディア教材を取り入れるようにしている。講義科目では、パワーポイントの活用をしながら、テキストの内容を理解するために必要な資料を提示している。演習科目では、動画教材や実際の臨床場面を自身が撮影した写真を用い、臨場感が伝わるような工夫をしている。また、モデル人形を活用し、触れて学ぶ機会を多く持つようにしている。
２　作成した教科書，教材		
１）領域実習前技術演習教材	平成23年8月	関西看護医療大学　看護学部　領域実習前看護技術演習教務委員会において、3年生の領域別実習に向けての学内演習を領域を超えて一元化し、マニュアル化した教材を作成した。このことにより、学生たちへの指導が統一化され、臨地実習に向けての効果的な演習が実施されるようになった。また、教員の負担も軽減された。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成21年3月	岐阜保健短期大学看護学科着任時、専任講師「母性看護学概論」［母性看護学援助論」「母性看護学実習」の資格ありと判定
	平成25年8月	奈良学園大学設置認可提出時、助教的確判定 「早期体験演習」「基礎看護学実習Ⅰ」「母性看護学援助論」「母性看護学実習」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」「助産診断・技術学実習Ⅰ」「助産診断・技術学Ⅲ」「助産診断・技術学実習Ⅳ」

事項	年月日	概　　要
2）学生による授業評価	平成24年2月	関西看護医療大学において、科目終了時に行う授業評価ではすべての項目で4以上（5段階評価）であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）臨地実習指導者	平成5年4月	江東病院　産婦人科病棟 向川看護専門学校の母性看護学実習の臨地指導者としての実習指導と学内発表会での講評者
2）臨地実習指導者および新人助産師教育	平成17年4月	広川レディスクリニック 名古屋医専助産学科の学生の分娩介助実習指導と、新人助産師の現任教育
5　その他		
1）聖隷クリストファー大学看護短期大学部（旧称：聖隷学園浜松衛生短期大学）における教育実績	平成11年4月	成人看護学領域の科目、特に学内演習、臨地実習および、基礎看護学実習を担当した。卒業研究を担当した。
2）三重大学医学部看護学科における教育実績	平成16年4月	基礎看護学領域の講義、演習、実習を担当した。
3）岐阜保健医療短期大学看護学科における教育実績	平成20年	母性看護学領域の講義、演習、実習を担当した。また、基礎看護学実習、卒業論文の指導にあたった。
4）関西看護医療大学　看護学部における教育実績	平成22年	母性看護学領域の講義、演習、および基礎看護学実習を担当した。また、低学年のゼミナールや卒業研究、フィジカルアセスメントなどの基礎科目や専門基礎科目の担当をした。
5）三重大学医学部看護学科における教育実績	平成24年4月	成人看護学領域の講義、演習、実習を担当した。また、夏期海外早期体験実習での現地での指導および、事前に学内での準備教育を担当した。

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許	平成3年5月	（第732518号）
2）助産師免許	平成5年4月	（第78064号）
3）教員免許（愛知県教育委員会）	平成10年3月	中学校教諭一種普通免許(社会科)平9中1第3220号 高等学校教諭一種普通免許(公民科)平9高1第3901号 養護教諭一種免許　平養学1第135号
4）看護学修士　第502号	平成17年3月	三重県立看護大学大学院看護学研究科
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）海外留学	平成18年	タイ王立マハサラカム大学語学留学および大学院博士課程在籍 在籍中、カナダからの留学生の実習補助、日本からの訪問者への通訳ボランティア
4　その他		
1）聖隷クリストファー看護大学（聖隷学園浜松衛生短期大学）における教員組織活動	平成11年～ 平成15年	教務委員会委員
2）岐阜保健短期大学看護学部における教員組織活動	平成21年	実習委員会委員
3）関西看護医療大学における教員組織活動	平成22年～ 平成24年	教務委員会委員、臨地実習ワーキングメンバー、国家試験対策ワーキングメンバー、研究紀要委員会委員

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1. 症状別看護技術	分担執筆	平成18年7月	ヌーベルヒロカワ	臨床における症状マネジメントのために、症状についての定義、症状がQOLに与える影響とケアについて書かれたテキストである。 B5判、343項 編集：荒尾春惠、大西和子 共著者：明石惠子、荒尾晴惠、出原弥和、井関敦子、井上佳代、今井奈妙、井村香積、宇野さつき、大石ふみ子、奥野信行、川崎優子、後藤姉奈、小林珠実、菅野かおり、杉浦絹子、高植幸子、辻川真弓、沼田靖子、根岸恵、濵本千春、牧野佐知子、松山美幸、山口葉子、山本八千代、吉田和枝 p.189～p.194　症状を持つ人への看護援助「倦怠感」を担当
2）専門職連携教育および連携医療のための行動の枠組み	翻訳分担者	平成26年8月	三重大学	WHO事務総長の承認を得て、三重大学が日本語への翻訳および出版権を得たものである。
（学術論文）				
1. 臨床看護婦の「看護の過程」に関する知識・その2－本学実習病院と非実習病院の看護婦の比較－	共著	平成11年12月	聖隷学園浜松衛生短期大学紀要　第22号 P.64-P.74	Ａ短期大学の実習病院と非実習病院の看護師に対し、「看護過程」に関する意識調査を行い、結果を比較した。その結果、本学卒業生の多い実習病院において、多くの項目で意識が低いことが分かった。このことを踏まえ学内での看護過程の教授法についての検討の必要性がある。 共著者：原田千代子、落合清子、出原弥和、近江谷キヌ子 本人担当：調査結果の分析および執筆
2. 改正カリキュラムによる教育を受けた臨床看護者の「看護過程」に関する意識	共著	平成12年12月	聖隷学園浜松衛生短期大学紀要　第23号 P.55-P.59	看護過程の理解は教授方法との関連があると考え、改正カリキュラム以降に卒業した臨床看護者の学生時代の学習体験と看護過程の理解との関連を調べた。その結果、学習体験意識のあるものが看護過程の理解に関する意識は高かったが、基礎的知識の理解では差はみられなかった。 共著者：出原弥和、原田千代子、松井謙次、落合清子 本人担当：研究の調査書作成、データー収集及び集計、分析、執筆
3. 成人看護学実習における「看護過程」の理解の変化	共著	平成14年12月	聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要第25号 P.1-P.8	成人看護学実習前後での学生の看護過程の理解の変化をみるために、213名の学生を対象にアンケート調査を行った。その結果、「看護過程の5つの構成要素」についての理解は実習後に高くなった。「看護イコール看護過程ではない」と多くの学生が理解しているにも関わらず「看護過程は必要時活用すればよい」では理解が低いなど、いくつかの項目で矛盾や混乱が生じていることが分かった。 共著者：出原弥和、原田千代子、落合清子 本人担当：研究のデーター収集及び集計、分析、執筆
4. 学生の看護過程に関する認識の経年的変化	共著	平成15年12月	聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要第26号 P.23-P.33	看護学生97名を対象に看護過程の認識について縦断的に調査した。その結果、2年生の認識度が低く、また3年次の全課程終了時も看護過程を学べたと言う認識は低く、1年次を上回るものは5項目に留まった。 共著者：原田千代子、出原弥和、落合清子 本人担当：研究のデーター収集及び集計

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. タイにおける医療・福祉の状況	共著	平成18年3月	Mie Nursing Journal 第8巻 P.125-P.130	タイの田舎での生活体験をもとに、そこでおこなわれている医療や福祉の状況を考察しまとめた。開発途上国の医療や福祉の現状を考えることにより、現在の日本の医療や福祉についても考えさせられ、また我々の考えが自己の価値観による偏ったものであるかに気付かされた。 共著者：出原弥和、土田幸子、馬場雄司 本人担当：研究の調査、分析、執筆
6. 臨地実習において発生する笑いが実習展開へ及ぼす影響	単著	平成18年3月	三重県立看護大学看護学研究科修士論文集	臨地実習における笑いの発生する文脈と，実習展開への影響を検討することにより，実習中の笑いが学生の学習活動へ及ぼす影響を探求した。臨地実習で発生する笑いは，学習の場を活性化し取り繕うことで実習展開に影響がある．学生は医療の場という特殊な環境での学習を乗り越えるために，笑いを無意識に活用し，場の展開をコントロールしている．本研究により，学生を取り巻く実習環境を従来の患者や物理的環境の枠にとらわれず，場を全体として捉えることの重要性が示唆された。 総項数26ページ
7. Simulated patientを導入したコミュニケーション演習の評価	共著	平成18年3月	Mie Nursing Journal 第8巻 P.93-P.100	看護学生を対象に模擬患者を使用したコミュニケーション演習を行い、その学習効果を明らかにするために質問紙による調査を行った。その結果、模擬患者を使用した演習は、看護学生のコミュニケーションに関しての興味関心が高まり、学びたいと思う動機付けがされることが分かった。 共著者：出原弥和、辻川真弓、本田育美、高植幸子他 本人担当：研究の調査書作成、データー収集、分析、執筆
8. A町内会の高齢者の老人力(知恵・経験・技)に関する実態調査-県民運動実践活動より-	共著	平成24年3月	関西看護医療大学紀要 第４巻　第１号 P.14-P.22	2010年健康ひょうご21活動の助成を受け、世代間交流のプログラム創設の基礎資料を得るために老人力発掘の調査を行い、現在の健康状態や地域活動への参加の実態を明らかにした。対象者は概ね健康状態はよく、健康に気を付けている人が多かった。しかし、若い世代への継承、地域活動への参加意欲は少ない傾向にあった。今後は高齢者個々のニーズを把握した世代間交流を検討していきたい。 共著者：森田智子、江川隆子、笠岡和子、神谷千鶴、西村めぐみ、原田美穂子、服部直子、東美鈴、出原弥和 本人担当：データーの分析
9. タイの保健医療事情　－タイ・スタディツアーへの参加体験から－」	単著	平成24年3月	関西看護医療大学紀要 第４巻　第１号 P.30-P.34	タイ北部の田舎でのスタディーツアーに参加した。その体験は、普段当たり前となっている私たちの生活を考え直す機会となった。人々の健康には、その人の暮らしが深く関係している。生活を理解するためには、国や地域の文化や歴史を理解し、そこに生活する人々の行動の意味を考える必要がある。
10. タイにおける保健医療福祉サービス －タマサート大学での早期海外体験実習を通して－	共著	平成25年3月	Mie Nursing Journal 第15巻 P.89-P.94	三重大学の看護学生を対象にタイのバンコクにあるタマサート大学での短期実習を行った。日本での常識が海外では違うことも多い。学生たちは、環境や生活文化の違いが医療や福祉に大きく関連していることを学んだ。海外での体験は、若い学生たちの視野を広げ、今後の学習や生活において大きな力になると考える。 共著者：出原弥和、犬丸杏里 本人担当：資料整理、執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. BLSの成人看護学講義への導入の変遷	共著	平成25年3月	Mie Nursing Journal 第15巻 p.69-p.71	BLSを成人看護学の講義中に取り入れ、その現在に至るまでの変遷と現在の課題について明らかにした．BLSの講義と実習は，事前に講義を行うことで知識の習得し，実習を行うことで技術の習得ができていた．また講義は救命センターの医師が講義を行うことでより，命の大切さを学ぶことができていた．少人数の学生に2日間で集中して指導を行う現在の方法は教育的には効率が良いという考えもある．しかし消防署の協力が困難であったり、学生の負担を考えると今後の実習展開を検討する必要がある． 共著者：吉田和枝、辻川真弓、坂口美和、竹内佐智恵、後藤姉奈、犬丸杏里、出原弥和
12. タイ・タマサート大学への早期体験実習－医学部看護学科の学生とともに－	単著	平成25年10月	三重大学医学部News	看護学生のタイでの早期体験実習での体験を、医療制度や医療・福祉施設の現状と共にまとめた。
13. 模擬患者と学生の協働的パートナーシップに基づく演習の試み	共著	平成26年3月	Mie Nursing Journal 第16巻 p.43-p.45	模擬患者と看護学生の協働的パートナーシップに基づく、ロールプレイ演習を行った。本研究の事例は同意が得られない患者を設定しており、学生は苦い体験からも、自分の行動が自分本位であったことに気づかされたり，患者とともにケアを考えていくことの大切さを実感したりしていた。結果から、今後の模擬患者の活用拡大の示唆を得た。 共著者：犬丸杏里、坂口美和、出原弥和、吉田和枝、竹内佐智恵、後藤姉奈、辻川真弓
14. 5科6大学による多職種連携プロジェクトにおける教育効果-看護学生の学びを中心に-	共著	平成27年3月	奈良学園大学紀要第2集	6大学にわたる5学科の学生に対し、協働でケアプサンを作成する多職種連携ワークショップを開催し、教育効果を検討した。多職種連携の準備性では、直後では高くなったものの6か月後にまで持続しなかった。情動能力は看護学生のみで直後は上昇したものの、6か月後にまで継続はしなかった。普段のカリキュラムの中に学生の認識が持続するような取り組みの必要性が示唆された。 共著者：出原弥和、後藤道子、吉田和枝

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）				
1. 産婦からみた助産婦学生のイメージ	共著	平成5年	第34回日本母性衛生学会 開催地:山形県山形市	助産師学生が分娩介助した褥婦を対象に、助産師学生の印象を問う、リカート尺度によるアンケートを実施した。学生に対するイメージはポジティブな項目がほとんどで、知識・技術面の未熟さより傍にいて支えることの重要性が示唆された。 共著:平野真弓、野田佳代子、杉本浩子、清智美、鈴木智子、大嶋千恵、出原弥和
2. 臨床看護者の「看護過程」に関する意識調査	共著	平成12年	第31回日本看護学会－看護総合－ 開催場所：なら100年会館	看護過程の理解は教授方法との関連があると考え、改正カリキュラム以降に卒業した臨床看護師の学生時代の学習体験と看護家庭の理解との関連を調べた。その結果、学習体験意識のあるものが看護過程の理解に関する意識は高かったが、基礎的知識の理解では差はみられなかった。 共著者：原田千代子、落合清子、出原弥和、近江谷キヌ子 本人担当：データー分析、執筆、学会発表
3.看護過程に関する看護学生の意識の実態	共著	平成13年	平成13年度東海北陸地区看護研究学会 新潟県	出原弥和、原田千代子、落合清子、小川京子 第3学年の看護学生を対象に看護過程の認識について縦断的に調査した。その結果、2年生の認識度は低く、また3年生の全課程終了時も看護過程を学べたと言う認識は低く、1年次を上回るものは5項目に留まった。臨地で学習により、看護過程に必要な知識や理解の幅の広さ、深さに学生が気づいた結果だと考える。
4. Simulated Patientを導入したコミュニケーション演習の評価	共著	平成17年	第4回学術集会ー日本看護技術学会ー 開催場所：つくば国際会議場	看護学生を対象に模擬患者を使用したコミュニケーション演習を行い、その学習効果を明らかにするために質問紙による調査を行った。その結果、模擬患者を使用した演習は、看護学生のコミュニケーションに関しての興味関心が高まり、学びたいと思う動機付けがされることが分かった。 共著者：出原弥和、辻川真弓、本田育美、高植幸子他 本人担当：研究の調査書作成、データー収集、分析、執筆、学会発表
5. A comparative study of the father role during the early child rearing period between experienced and non-experienced fathers in Japan	単著	平成20年4月	Health Science of Mahasarakham University 開催場所：Mahasarakham University Faculty of Medicine	I gathered up the enforcement situation of the father role of father having the first baby than later-born through documents review. Father having the baby which was higher than later-born tended to participate in child care positively, but there was not the thing which showed a clear difference. （第1子を持つ父親と第２子以上の新生児を持つ父親の父親役割の実施状況を文献レビューを通しまとめた。第２子以上の子を持つ父親の方が、子育てに積極的に参加している傾向にあるが、明らかな違いを示しているものはなかった。今後は、父親役割の獲得過程も含めて調査し、明らかにしたい。）
6. 臨地実習において発生する笑いが実習展開へ及ぼす影響	単著	平成20年8月	第18回学術集会 日本看護学教育学会 開催場所：つくば国際会議場	臨地実習における笑いの発生する文脈と，実習展開への影響を検討することにより，実習中の笑いが学生の学習活動へ及ぼす影響を探求した。臨地実習で発生する笑いは，学習の場を活性化し取り繕うことで実習展開に影響がある．学生は医療の場という特殊な環境での学習を乗り越えるために，笑いを無意識に活用し，場の展開をコントロールしている．本研究により，学生を取り巻く実習環境を従来の患者や物理的環境の枠にとらわれず，場を全体として捉えることの重要性が示唆された．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. Survey by "A"Neighbourhood Associationon Geriatric Health and the Adventaged of Being Elderly - Prefectural Citizen Movement Practice Activity-	共著	平成23年11月	Japan-Korea Joint Conference on Community Health Nursing 開催場所：神戸市看護大学	2010年健康ひょうご21活動の女性を受け、世代間交流のプログラム創設の基礎資料を得るために老人力発掘の調査を行い、現在の健康状態や地域活動への参加の実態を明らかにした。対象者は概ね健康状態はよく、健康に気を付けている人が多かった。しかし、若い世代への継承、地域活動への参加意欲は少ない傾向にあった。今後は高齢者個々のニーズを把握した世代間交流を検討していきたい。 共著者：Morita Tomoko, Egawa Takako, Azuma Misuzu, Izuhara Miwa, Kasaoka Kazuko,Kamiya Chizuru, Harada Mihoko 森田智子、江川隆子、笠岡和子、神谷千鶴、西村めぐみ、原田美穂子、服部直子、東美鈴、出原弥和 本人担当：データー分析
8. 大学病院で入院治療する膵癌患者に対する看護ケア	共著	平成25年2月	第27回学術集会ー日本がん看護学会ー 開催地：金沢県立音楽堂他	入院中の膵癌患者に対して看護師がどのようなケアを行っているのかを記述し、看護ケアの可視化を目指すために、外科病棟看護師9名に半構成的面接を行った。その結果、看護師は［予後不良という辛い現実の中で、治療に対する患者の希望を支える］ことを土台といていた。ケアの内容は治療の時期で分けることができた。 共著者：犬丸杏里、坂口美和、出原弥和、吉田和枝、竹内佐智恵、後藤姉奈、辻川真弓 本人担当：データー分析
9.地域基盤型多職種連携教育の構築とその効果についてーパイロットスタディー報告ー	共著	平成25年7月	医学教育学会 開催地：千葉大学亥鼻キャンパス	看護学科統合実習と医学科実習における学生を共同学習させるために同一患者を受け持ち、同じスケジュールでの実習を行った。結果、学生は単独の役割イメージから多職種の中での具体的な役割イメージへと変化が見られた。 共著者：後藤道子、吉本尚、後藤姉那、坂口美和、家研也、竹内佐智恵、吉田和枝、出原弥和、犬丸杏里、辻川真弓、竹村洋典、堀浩樹 本人担当：インタビュー、データー分析
10.医学・看護学・薬学・心理学・福祉学の５科６大学による多職種連携教育プロジェクト＜三重IPE＞の教育効果	共著	平成25年7月	医学教育学会 開催地：千葉大学亥鼻キャンパス	IPEワークショップ前後に学生の多職種連携教育への準備状況と心の情動を質問紙調査及びインタビューを行い、量的・質的分析を行った。結果として、ワークショップは学生の多職種連携教育への準備状況と社会性を高めた。 共著者：後藤道子、吉本尚、出原弥和、辻川真弓、堀浩樹 本人担当：データー収集、分析
11.医学・看護学・薬学・心理学・福祉学の５科６大学による多職種連携教育プロジェクト＜三重IPE＞の教育効果	共著	平成25年8月	日本ヘルスコミュニケーション学会 開催地：岐阜大学	ワークショップ前後で学生に質問紙調査及びインタビューを行い、量的・質的分析を行った。結果として、ワークショップは学生の多職種連携教育への準備状況と社会性を高めた。また、総合大学でなくとも地域での複数大学との多職種連携が十分可能であることが示唆された。 共著者：後藤道子、吉本尚、出原弥和、辻川真弓、堀浩樹 本人担当：データー収集、分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12.. Perceptation and Current Conditions of Father's Participation in Child Rearing	共著	平成25年10月	第3回世界看護科学学会 開催地：ソウル	This research revealed that fathers fail to participate in child rearing due to their confusion and lack of knowledge about specific ways to participate. To promote fathers' participation in child rearing in the future, it is necessary for staff involved in child rearing support to hold concrete parenting classes intended not only to mothers but also fathers to create environments where fathers can obtain proper information regarding child rearing.(本研究は、父親が子育てへの参加方法への混乱と知識の不足のために子育てに参加することができないことを明らかにした。将来子育てへの父の参加を促進するために、子育てサポートに関係するスタッフが父に適当な情報を得ることができる環境を提供する必要性が示唆された。） 共著者:Miwa IZUHARA, Sachiko KAYAHARA, Kyoko KANAMORI, Kumiko IWATANI 本人担当:研究計画、データ収集、分析
13. Literure review based on Factors for Choosing Place	共著	平成25年10月	第3回世界看護科学学会 開催地：ソウル	I summarizes the literature study on selection reason of delivery facility.（分娩施設の選択理由に関する文献検討を行った。） 共著：Kumiko IWATANI, Miwa IZUHARA, Kyoko KANAMORI 本人担当：データー収集、分析
14. A Care of Delayed Wound Healing for Colon Cancer Patient	共著	平成25年11月	第1回アジアがん看護学会 開催地：バンコク	We learned that it is easy for the family to care for such wound and stoma; however, it is necessary to share the information such as pictures of wound for the visiting nurses in order to assure patients receiving the best possible care.　（本研究では、家族が創傷やストマのケアをすることは困難でないということが明らかになりました。しかし、よいケアを受けるためには訪問看護師からの映像など情報提供が不可欠であった。） 共著者：Kazue YOSHIDA, Miwa IZUHARA, Susumu SAIGUSA 本人担当：データー分析
15. Effect of Inter-Professional Education in Nursing Students	共著	平成26年2月	East Asisn Forum of Nursing Scholars 17th International Conference　開催地：マニラ	This study examined the learning in inter-professional education of nursing students. As a result, it was changed significantly compared to other fuculty students, teamwork and collaboration, IPE of opportunity, in the self-management.（看護学生の多職種連携教育での学びを検討した。チームワークとコラボレーション、IPEの機会、自己管理で他学部生に比べ大きく変化した。） 共著者：Miwa IZUHARA, Michiko GOTO, Hisashi YOSHIMOTO, Mayumi TSUJIKAWA, Yousuke C TAKEMURA, Hiroki HORI 本人担当：データー収集、分析
16. Awareness of a "Pregnancy-Related Risk Self-Assessment Scale" Among Japanese Females Who Gave Birth in a Denaral Perinatal and Maternal Care Center	共著	平成26年2月	East Asisn Forum of Nursing Scholars 17th International Conference　開催地：マニラ	It aims to help pregnant females assess their pregnancy and choose a place for childbirth based on information from the early stage, share responsibilities with a hospital according to the function, and efficiently collaborate with its staff. A survey was conducted in a general perinatal care center for pregnant females at high risk to examine their awareness of the Score.As a result, Ithough the females recognized the Score as a useful tool to understand their health levels, few viewed it as a tool to choose a place for childbirth.（本研究は、ハイリスク妊婦の分娩を取り扱う周産期センターにおいて、母体搬送・受診紹介群とそれ以外のコントロール群の間で属性、リスク得点、分娩帰結に差があるかを検討した。結果、高次医療機関へ母体搬送や紹介受診を必要とする事例では、スコアの有用性がある程度認められた。）共著者：Kyoko KANAMORI, Hiromi UENO, Misae okamoto,Tokiko HANAFUSA, Miwa IZUHARA, Kumiko IWATANI 本人担当：データー分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. Public Health Nurses' and Midwives' Perceived Reasons for Mothers, who Have Able-Bodied Children Under 4 Month of Age, Facing ″Difficulty of Raising Children″	共著	平成26年2月	East Asisn Forum of Nursing Scholars 17th International Conference 開催地：マニラ	This study was conducted using a qualitative and inductive approach, involving 7 PHNs and midwives who understood the study purpose and agreed to participate in this study. The results identified 8 reasons for "difficulty of raising children", and revealed the kinds of problem PHNs and midwives pay attention to. （本研究は、産後４ヶ月までの乳児家庭全戸訪問事業（こんにちは赤ちゃん事業）で,保健師・助産師の訪問体験から障害のない子どもを持つ母親が育てにくさを感じる現象を明らかにすることが目的である。結果、「育てにくさ」の現象は８つ分類され,どのような現象に注目しているのか観察のポイントが明らかとなった。） 共著者：Kumiko IWATANI, Yuko KIYOSUKE, Kanako WATANO, Hiroko MORI, Miwa IZUHARA, Kyoko KANAMORI 本人担当：データ分析
18. The Mie Inter-Professional Education Project :the Result of Collaboration between 5 Departments across 6 Universitys	共著	平成26年5月	WONCA Asia Pacific Regional Confrrence 2014 開催地：クチン（マレーシア）	The purpose of this study is to quantify and evaluate the impact of our inter-professional programme, which involved five departments across six universities. Students were able to enhance and improve their inter-professional collaboration skills during the course of the workshop. Furthermore, we demonstrated that IPE may be necessary as a tool to enhance collaboration not only among multiple medical departments at a given university but also across multiple medical schools in a given community.（本研究は、５科６大学の学生の参加による多職種連携プロジェクトの影響を評価することである。学生たちは、協働し、専門性の再認識をすることができた。また、医療職者間に限らず、多職種連携教育の必要性が示唆された。） 共著者：Michiko GOTO, Hisashi YOSHIMOTO, Miwa IZUHARA, Kazue YOSHIDA, MayumiTSUJIKAWA, Hiroki HORI, Yousuke TAKEMURA 本人担当：データー分析

教　育　研　究　業　績　書

平成　27年　5月　11日

氏名　　大浜　恵美子

研究分野	研究内容のキーワード
要介護者の在宅生活	要介護者　在宅生活　自立支援　生活の質

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）広島文化短期大学・広島文化学園大学 非常勤講師	平成16年～ 平成21年	平成16年～平成20年までは、2級ホームヘルパー講座を担当する非常勤講師として、サービス提供の基本視点、疾病の理解、緊急時の対応、基本的理解と基本的態度の形成、高齢者保健福祉制度とサービス、障害者（児）福祉制度とサービス、福祉理念とサービスケアの意義、ベッドメーキング、移動介助、入浴介助、排泄介助、衣服交換、食事介助などの介護技術演習を担当した。 大学生・短大生がを要介護者の疾病・生活を理解し易いように、人体の構造・機能やボディメカニックスなど根拠を示すように努めた。また、学生の興味を引き出すために参加型の講義を目指して、グループワークも活用して考えたり、学生が協働できる場をつくった。毎回の講義の終わりには、講義内容の振り返りと感想などを小レポートとして提出させた。就職活動時の小論文等を書くときのに漢字・文章に慣れておく機会とした。
2）広島都市学園大学健康科学部看護学科 助教	平成24年4月	助教として、担当科目は『コミュニケーション技法』『在宅看護技術』『在宅看護論』『在宅看護実習』『統合実習』『看護研究』。チューターとして学生指導にあたる。 講義は在宅看護を具体的な形で考えることができるように、在宅の要介護者・家族の援助にたずさわった経験のなかから、また視覚で理解できるように写真や画像を活用して講義を組み立てた。在宅生活を支えるためのマネジメントを理解できるように、介護サービス利用のための利用票や訪問看護指示書などを活用した。介護支援専門員が作成するケアプランをＩＣＦの視点で作成させて、ポジティブな援助ができるように指導した。 在宅看護実習指導では、生活者である療養者を訪問看護をはじめとするサービス提供機関が療養者及び家族にどのように援助をし、連携しているかを学べるかを実習機関を巡回しながら指導した。短い期間の実習のなか、病院実習では経験できなかった疾患・医療処置を見学することができるために、自分の知識・技術になるような振り返りを行うように指導した。
3）広島文化学園大学看護学部看護学科 講師	平成25年4月	講師 として、担当科目は「在宅看護論」「保健医療福祉行政論」「公衆衛生看護論」「地域看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「看護研究セミナーⅠ・Ⅱ」チューターとして学生指導にあたる。　在宅看護論では、在宅看護の概論を教え、公衆衛生看護論では、医療・介護保険などの制度について講義を行った。在宅看護学と公衆衛生看護学が一緒となっている地域看護学実習では、訪問看護ステーション実習、保健所及び保健センター、産業保健、学校保健の実習の指導にあたった。看護研究Ⅰは3年次生を研究Ⅱでは4年次生を指導した。
4）奈良学園大学保健医療学部看護学科 助教	平成26年4月	助教として、担当科目は「在宅援助論」「早期体験演習」「基礎看護学実習Ⅱ」「看護研究」。担任として学生指導にあたる。
2　作成した教科書、教材		

事項	年月日	概　　要
1）健康教室用の教材	平成9年4月～ 平成10年9月	府中町からの委託による老人保健事業の健康教室の講演の教材として、高齢者にとって加齢にともなっておこる身体の各器官及び精神の生理的な変化・低下について整理し、ADLを維持し、低下を防ぎ健康的な日常生活を送るためのポイントを高齢者に理解しやすいようにまとめた。そして、高齢者に多い疾患についての説明も加えたものとした。
2）2級ヘルパー講座の講義用の教材	平成16年～ 平成21年	学生用の教材として、訪問介護員（ホームヘルパー）2級課程養成研修テキストをベースに、“優しさには根拠が必要である”、すなわち福祉制度を理解した上で、必要とされる介護のあり方を考えられるように工夫した。身体的・精神的な機能の根拠に基づいた介護が提供されるように、介護する側にとってもボディメカニックスに基づき介護者自身を守ることが必要である。要介護者の自立支援につながるような介護が学べる教材を作成した。
3）介護者教室の教材	平成20年9月	地域包括支援センターからの委託で、地域住民対象の介護者教室で講演し「認知症について」の教材を作成した。特に重点をおいたのが、認知症になった人の心理面から、認知症が引き起こす問題行動が何故引き起こされるかを理解してもらい、認知症の人が穏やかに生活できるようにするための接し方が学べる教材とした。そして、身体的・精神的機能の低下からくる“閉じこもり”→“廃用症候群”からの認知症予防対策として、地域で仲間と活動的な生活を送ることを勧めてまとめた。
4）ヘルパーのキャリアパス支援研修講義用教材	平成22年7月	訪問介護に関する運営基準と法令遵守についての研修を行う際に、「指定居宅サービス等の事業の人員、設備及び運営に関する基準」「指定居宅サービス等及び指定介護予防サービス等に関する基準について」を説明した研修用資料を作成した。実際の訪問介護事業が適正に行われているか「介護サービスの質の向上と適正運営に向けて～自己点検のポイント～」と題した点検用の教材とした。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
平成26年度基盤研究C「独居高齢者と高齢夫婦世帯の在宅看取りシステムのモデル開発と実用化検証」	平成26年～29年	代表島内せつ　共同研究者　　調査票作成、調査に協力してもらえる訪問看護ステーションの調査などを担当し、研究を進めている。
5　その他		
1）社会福祉士会成年後見人研修	平成19年10月	日本社会福祉士会が実施した2007年成年後見人養成支部委託研修(広島）の研修を受講し広島県社会福祉士会「ぱあとなあ」に所属する。 「ぱあとなあ」からの紹介で、市長申し立てで成年後見が審判された70歳後半の認知症の女性について、法務局に登記を受けた後、財産管理、監護などの後見活動を行っている。「ぱあとなあ」へ年2回、家庭裁判所に年1回、後見活動の報告を行っている。
2）広島県介護支援専門員実務研修	平成20年～ 平成26年	広島県で介護支援専門員受講試験合格者に実施される介護支援専門員実務研修での、演習を中心とする小規模研修において、利用者・家族のアセスメント、居宅介護サービス計画の作成方法、居宅介護サービス計画を実際に作成して検討、サービス担当者会議の持ち方、サービス提供後のモニタリング方法まで、介護支援専門員が実務上必要な一連のマネジメントを3回に分けて指導した。

事項	年月日	概　　要
３）広島県介護支援専門員専門（更新Ⅰ/更新Ⅱ）研修講師	平成16年～ 平成26年	小規模研修で講師を務めた。対人個別援助技術(更新Ⅰ）では、ロールプレイの演習を含み、面接技術、コミュニケーションの取り方などの講義を行った。居宅介護支援事例研究（更新Ⅱ）では、ICFの枠組みを活用したケアプランの作成、ストレングス・モデルのケアマネジメントの方法について、また、成年後見制度や高齢者虐待への介入方法など、マネジメントに必要な知識・技術について理論的な講義を行った。サービス担当者会議の講義・演習では、資料等の準備をはじめ会議の進行を指導した。居宅介護支援演習（更新Ⅱ）では、支持的機能の側面から事例検討をする指導を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格、免許		
１）看護師	昭和48年5月	第236895号
２）社会福祉士	平成10年4月	第10676号
３）介護支援専門員	平成11年6月	第34000903号
４）福祉用具専門相談員	平成16年2月	第233号（福祉用具専門員相談員指定講習事業者 学校法人中川学園　広島福祉専門学校）
５）広島市障害者ケアマネジメント従事者研修終了	平成18年3月	第593号（広島県）
６）主任介護支援専門員	平成22年2月	第09-100001号(広島県)
７）日本ケアマネジメント学会認定ケアマネジャー	平成20年4月	第405号
２　特許等		
特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）健康教室での計画と講師を行う	平成9年4月～ 平成10年3月	中町から、所属していた法人に老人保健事業の委託をしており、各地域の老人クラブで健康教室を実施した。講演テーマは「転倒予防」「栄養」などの老人クラブの希望を聞いて講演を計画した。健康教室の司会・進行と、講演の間に身体を動かすことができるアクティビティ活動も計画した。自らは「高齢者に多い疾患について」「認知症について」などのテーマで講演を実施した。
２）在宅介護支援センターが実施する協力員研修会で講演を行う	平成8年～ 平成12年	在宅介護支援センターに協力していただいている協力員(府中町では民生委員）に、2回/年協力員研修会を行った。地域で高齢者等に関わるうえで必要となる知識・技術のなかで「緊急時の対応」「認知症への対応」「介護保険制度にていて」などの講演を行った。 講演を通して、協力員と在宅介護支援センターの職員との連携・協力をとれるような内容として講演した。
３）「介護保険制度」について町内で講演・啓蒙活動を行う	平成11年	府中町の委託で町内の公民館等の５ヶ所において実施する。 府中町介護保険係の職員と一緒に動き、講師として平成１２年４月から開始される予定の介護保険制度について説明する。介護保険制度は、今までの措置における福祉サービスから、介護保険制度は保険給付として契約により介護サービスを活用することになること。保険料として年金から特別徴収という形で徴収されること、介護保険制度の目的、概要、活用できるサービス及びサービスの利用方法等について啓蒙活動を行った。

事項	年月日	概　　要
４）ＦＩＧ福祉会において、介護支援専門員試験受験のための研修会の講師	平成12年6月	法人内の希望者を対象に５回に分けて、介護支援専門員受講試験に合格するために、介護保険制度をはじめ医学的知識、福祉・介護について介護支援専門員テキストや、資料を作成して講義した。最後には、模擬試験を実施して、職員の受験へ向けた対応を研修会として実施した。
５）医療法人長寿会で2級ヘルパーの講師	平成13年10月	医療法人長寿会が地域の人を対象に2級ヘルパーの養成研修を行い、ヘルパーの資格を確保したい人や家族の介護のためにと参加された人に介護技術の講師を務める。排泄介助・食事介助などの介護の技術についての基本知識と実技の演習を行った。
６）介護専門学校IWADにおいて2級ヘルパー講座の講師を務める	平成19年12月	介護専門学校IWADの園芸科の学生に対して2級ヘルパーの講師を務める。「疾患の理解」、「障害の理解」、「緊急時の対応」につて講義を行う。テキスト、補助資料及びビデオを活用して講義を行った。
７）在宅介護支援センターが実施する介護者教室の講師を務める	平成18年10月	地域の高齢者を対象に「高齢者に多い疾患について」のテーマに、地域のなかで健康的に生活するため、家に閉じこもることなく、仲間とともに活動して廃用症候群を予防するの必要性と、健康な生活をするためには栄養や水分摂取が必要であることの必要性、必要とされるカロリー、水分量について講演する。最後に参加者みんなで全身を動かす体操を行った。 2000年から、介護保険制度の両輪として制度化された「成年後見人制度について」、制度化された理由や果すべき役割、そして、法定後見と任意後見などを利用するときの申請方法などの一連の流れについて講演した。
８）シルバー振興会開催のヘルパーのキャリアパスの講師を務める	平成22年7月	平成22年度介護キャリアパス支援研修として、「訪問介護に関する運営基準と法令遵守」について、「訪問介護に関する運営基準と法訪問介護で実務についている人が理解できるように令遵守について」に基づいて、事業者が満たすべき基準について教材を作成する。そして、適切な事業運営ができるように根拠に基づく自己点検シートを活用してチェックしながら事業展開できるような教材を作成する。
９）広島市介護者教室の講師を務める	平成20年9月	テーマ「認知症を理解する」で講演する。 認知症の介護にあたって、認知症の物忘れによる「不安」「混乱」を中心とする心理状態から、問題行動と言われている様々な症状が現れていること、問題行動が現れないために介護者が気をつけなければならないこと。そして、物忘れがあっても認知症の人が安心して生活が送れる介護方法について講演する。
10）宇品カレッジの講師を務める	平成24年10月	「認知症の予防」について講演する 地域社会から遠ざかって、自宅に閉じこもった生活をすることによって、身体機能とともに精神機能も廃用によって認知力の低下に結びつくことがある。身体に必要な栄養、水分を摂取しないと身体機能・精神活動が低下する。身体を動かすことによって、セロトニンなどの物質が作られ、活発な生活にむすびつくことができる。最後の、CDでラジオ体操を流し参加者みんなで体操を行い終了した。
４　その他		
１）広島県訪問看護講習会終了	平成3年8月	広島県看護協会が研修会を実施した。講習会を受講した平成３年はまだ制度化されておらず、平成４年から老人対象に訪問看護が提供されるようになった。講習会は講義と演習が約１ケ月と、当時、御調病院の山口昇院長を中心に包括的な在宅を提供していた広島県御調で、病院、老人保健施設、リハビリテーション施設、訪問指導（訪問看護）の実習を３泊4日で実施した。

事項	年月日	概　　要
2）日本ケアマネジメント学会認定ケアマネジャー	平成20年4月	日本ケアマネジメント学会に入会後2年、ケアマネジャーとしての実務経験3年を経て受験する。申請時には、ケアマネジメントした軽度要介護者、重度要介護者及び認知症の事例を付けて申請する。一次の書類審査に合格後、口頭試問（東京）後合格となる。資格は5年の更新制をとっており、平成24年に活動、研修等の実績をつけて更新申請を行っている。認定ケアマネジャーの会に所属し、各種研修会に参加。スーパーバイザー養成講座（基礎・応用・フォローアップ）も修了している。（第405号）
3）社会福祉士会成年後見人研修終了	平成19年10月～現在に至る	日本社会福祉士会が実施した2007年成年後見人養成支部委託研修(広島）において、成年後見人制度に関する制度や法律について学び、成年後見人として活動するための知識・技術を研修した。
4）「精神障害者の在宅看護セミナー（5日間）」終了	平成25年2月	日本訪問看護財団が実施した精神科訪問看護基本療養費の届出要件を満たす本研究を終了した（第2012Ｒ00195）。精神保健の現状と動向から始まり、精神訪問看護の基礎・実際、精神障害者の病態生理、薬物治療や治療方法など精神科の訪問看護が実施できるように研修を行った。
5）日本財団助成事業　質の高い在宅ケア実践のためのＥＬＮＥＣ－Ｊ」終了	平成25年10月	日本訪問看護財団が実施したエンド・オブ・ケアを理解して、症状マネジメントを行う訪問看護師の役割について学び、ロールプレイ、ケーススタディなどを通して臨死期のケアを学び質の高いエンド・オブ・ライフが達成できるよう研修を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
特記事項なし				
（学術論文）				
1. 高齢者の地域における自立した生活のためのマネジメント （修士論文）	単著	平成24年3月	広島国際大学大学院	介護支援専門員へのアンケート調査と先駆的な施策を実施している高知市、富山市、和光市の事例を通して、高齢者が地域で自立した生活を送るために介護支援専門員の求められるマネジメントについて研究を行った。アンケート調査では、高齢者は地域コミュニティのなかで活動へ参加することができて、地域の人との交流をもつことができるインフォーマルな資源を活用すると要介護度の改善と、自立にむつびついているという結果を得た。この結果より、要介護（要支援）者のマネジメントにはインフォーマル資源の活用が必要であるという結論を得た。そして先駆的な事業展開をしている３市においては、高齢者が住む慣れた地域のなかで、住民が共に生活ができるような事業を創設し展開している。その結果、要介護度の改善や介護保険料の上昇を抑えるという結果になっている。地域での交流は高齢者の幸福感につながり、地域は地域力を高めるということになっている。これらの結果から、介護支援専門員が「高齢者が地域のなかで自立した生活をマネジメント」をするためには、地域のなかにあるインフォーマルな資源に参加・活動できるマネジメントを行い、もし地域にインフォーマルな資源がない場合は新しい資源を準備するための働きかけが必要であるという結果を得た。 従って、要介護高齢者等が地域のなかで自立した生活をするために介護支援専門員の果すべき役割は、地域にあるインフォーマル資源の活用や他者との交流をもつマネジメントを行い、地域にあるコミュニティに参加することによって「生きがい」や「主観的な幸福感」を得ることができ、要介護高齢者等の「生活の質の向上」「自立支援」につながるという結果に至った。全121頁
2. 高齢者の地域における自立した生活をめざすマネジメント	共著	平成25年3月	「広島国際大学紀要医療福祉学科」第9巻(2013)	介護支援専門員を対象としたマネジメントの実施状況を訪ねたアンケート調査を実施した結果、探索的因子分析、共分散構造分析において、「介護度の改善」「自立した生活のマネジメント」を実施するためには、インフォーマルな資源の活用が有用であるという結果を得た。「人間はコミュニティがないと生きていけない」と言われているように要介護（要支援）状態になっても、要介護高齢者のマネジメントには、インフォーマルな資源を活用して地域コミュニティへの参加を継続して活動的な生活を送るマネジメントが必要であるという結果を得た。 本人担当部分：論文構成、アンケート作成、分析、考察、結論 共著者：高尾文子、岡崎仁史、大浜恵美子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 要介護者が地域で自立した生活を送るためのケアマネジメントとインフォーマル資源の活用	共著	平成24年6月	第27回日本保健医療行動科学会学術大会	介護支援専門員へのアンケート調査を通してマネジメントの実施状況を単純集計、探索的因子分析及び共分散構造分析を行なった。その結果、要介護(要支援）者の自立・要介護度の改善のためには、地域との繋がりを継続するためにインフォーマルな資源を活用することが必要という結果となった。「人間はコミュニティがないと生きていけない」、「個人の生活は単独では成立するものではなく、社会関係が基盤なって成立している」と広井が述べているように、要介護（要支援）状態になった高齢者も地域のコミュニティへ参加するマネジメントが必要であるという裏付けともなった。 高齢者の地域における自立した生活をめざすために、介護支援専門員はインフォーマル資源を活用し地域コミュニティへの参加、交流をもつマネジメントをするという結論を得た。 （全121頁）
4. 老いの受容（受容困難要因の検討）	共著	平成24年10月	産業保健人間工学会第17回大会 産業保健人間工学研究 Vol（14） P.21-P.24	わが国の高齢者は増える一方で、高齢者が自身の老いを認識し受け入れることを難しくする要因があるために、日々の生活に影響を及ぼしている。その受容を妨げる要因を明らかにすることを目的とした研究を行った。医学中央雑誌Web版と、CiNiiの先行研究から「老い」「受容」をキーワードに10件の文献を抽出し、老いの受容を困難とする要因についてキーワードを抜き出し、ラベルに転記して、KJ法に準じた手法を用いて分類した。その結果、７つの大カテゴリに分類され、「老いの特性」「老いに対する否定的感情」「老いに対する心の準備」「迷惑をかけてはいけない思い」「頑張ってきた経験」「家族との不適切な依存関係」の要因が示された。高齢者が家族内での存在意識を見失い、家族との関係が希薄になることが、老いの受容を困難にさせる要因と考えられる。看護者は、老いや死という漠然とした不安な思いを家族に伝える代弁者の役割、家族との関係性をつなぐ調整役として関わる必要がある。 本人担当部分：再分析、考察 共著者：新谷奈苗、<u>大浜恵美子</u>
5. 基礎資格の違いからみえる 介護支援専門員の課題とマネジメント	共著	平成24年10月	産業保健人間工学会第17回大会 産業保健人間工学研究 Vol（14） P.25-P.28	産業保健人間工学研究　Vol（14）25-28 居宅介護支援事業所で従事している介護支援専門員は平成21年には介護福祉士が50.0%を超し増加をし、一方看護師は22.9%とに減少している。居宅介護支援事業所へのアンケート調査を通して、介護支援専門員の基礎資格によるマネジメントの違いを検討した。結果は、要介護度の改善状況や活用するサービスに違いがあるという結果となった。このことは、担当する介護支援専門員によって要介護者の生活の質が変わることになり、不利益を与える可能性も考えられる。　介護保険法が目指している「自立」を具体的に示すことによって、基礎資格の違う介護支援専門員が要介護者（要支援者）の自立した生活を具体的にイメージしてケアマネジメントすることができ、要介護者が受けるサービスの質に差が出ないのではないかと考える。 居宅介護支援事業所は事業所として、介護福祉士・社会福祉士・看護師の基礎資格をもつ介護支援専門員を配置し、各専門職の専門性を活用して、一人の要介護者のケアマネジメントにあたることも要介護者等に不利益を生じないことに結びつくと考えられる。 本人担当部分：論文構成、アンケート作成、分析、考察、結論 共著者：新谷奈苗、<u>大浜恵美子</u>

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 基礎資格の違いからみえる介護支援専門員の課題とケアマネジメント	単著	平成25年10月	医学福祉情報行動科学研究	医学福祉情報行動科学研究　ISSN 2185-1999第2号ｐ12-16 介護支援専門員の基礎資格が異なる場合のマネジメントの差異を知るために①基本属性、②ケアマネジメントの実施状況、③インフォーマル資源の活用状況、 ③担当事例のケアマネジメントの調査を実施した。介護支援専門員は基礎資格に積み重ねられて専門職であるため、基礎資格がケアマネジメントに影響を与えていると考えられる。調査の結果、介護福祉士、社会福祉士の福祉系の職種は通所介護、訪問介護など福祉系のサービスを多用し、看護師は通所リハビリ、訪問看護の医療系サービスの利用が福祉職と比べ多くなっている。この背景には「自立」の捉え方にあると考えられ、福祉職は、「自立」をサービスを活用して自分が望む生活ができるようになる「依存的自立」を求め、看護師は自分でできるようになる「自助的自立」を求めていると考えられる。また、友人・仲間との関係は人が健康に生きていくうえで欠かせないものであり、これらのインフォーマルな資源によって要介護度の改善や介護サービスを利用しなくても生活できることにむすびついている。インフォーマルな資源の活用を得意とする社会福祉士、医療を得意とする看護師というように専門性を包括的に活用してケアマネジメントしていくことが生活の質の向上につながると考えられる。そのためには居宅介護支援事業所に社会福祉士、介護福祉士の基礎資格をもつ介護支援専門員と、看護職の介護支援専門員を配置することが必要と考える。 本人担当部分：論文構成、アンケート作成、分析、考察、結論
（その他）				
（学会発表）				
1. 要介護者が地域で自立した生活を送るためのケアマネジメントとインフォーマル資源の活用 （再掲）	共同	平成24年6月	第27回日本保健医療行動科学会学術大会	介護支援専門員へのアンケート調査を通してマネジメントの実施状況を単純集計、探索的因子分析及び共分散構造分析を行なった。その結果、要介護(要支援）者の自立・要介護度の改善のためには、地域との繋がりを継続するためにインフォーマルな資源を活用することが必要という結果となった。「人間はコミュニティがないと生きていけない」、「個人の生活は単独では成立するものではなく、社会関係が基盤なって成立している」と広井が述べているように、要介護（要支援）状態になった高齢者も地域のコミュニティへ参加するマネジメントが必要であるという裏付けともなった。 高齢者の地域における自立した生活をめざすために、介護支援専門員はインフォーマル資源を活用し地域コミュニティへの参加、交流をもつマネジメントをするという結論を得た。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 基礎資格の違いからみえる 介護支援専門員の課題とマネジメント （再掲）	共同	平成24年10月	産業保健人間工学会第17回大会	産業保健人間工学研究　Vol（14）25-28 居宅介護支援事業所で従事している介護支援専門員は平成21年には介護福祉士が50.0%を超し増加をし、一方看護師は22.9%とに減少している。居宅介護支援事業所へのアンケート調査を通して、介護支援専門員の基礎資格によるマネジメントの違いを検討した。結果は、要介護度の改善状況や活用するサービスに違いがあるという結果となった。このことは、担当する介護支援専門員によって要介護者の生活の質が変わることになり、不利益を与える可能性も考えられる。　介護保険法が目指している「自立」を具体的に示すことによって、基礎資格の違う介護支援専門員が要介護者（要支援者）の自立した生活を具体的にイメージしてケアマネジメントすることができ、要介護者が受けるサービスの質に差が出ないのではないかと考える。 居宅介護支援事業所は事業所として、介護福祉士・社会福祉士・看護師の基礎資格をもつ介護支援専門員を配置し、各専門職の専門性を活用して、一人の要介護者のケアマネジメントにあたることも要介護者等に不利益を生じないことに結びつくと考えられる。 本人担当部分：論文構成、アンケート作成、分析、考察、結論 共同発表者：新谷奈苗、大浜恵美子
3.　A県の新興住宅地域における ケアマネジメントの実施状況からみる特性と課題	共同	平成24年10月	第71回日本公衆衛生学会	在宅ケアに求められるものは、新興住宅地と人間関係の濃密な農村地域、旧住宅地域とは大きく異なると考え、地域間に見られるマネジメントの違いについて検討した。新興住宅地は他地域（農村地域、旧住宅地域、農村新興住宅地域）と比較すると、軽度の要介護状態から介護サービスを利用し始め、介護サービスを利用し始めると、サービスに依存した生活が継続しているという結果となった。介護サービスを利用しても、要介護度の改善率が悪く、さらに、介護サービスでは他者との交流が可能な通所介護に利用割合が低く、地域にあるインフォーマルな資源の活用が少ないという結果を得た。 　「フォーマルな組織での活動は主観的幸福感にほとんど影響しない一方で、インフォーマルな組織での活動は主観的幸福感を増加させる」（George,1990）と述べている。農村地域・旧住宅地域の要介護高齢者は、介護支援専門員がマネジメントしなくてもコミュニティ活動への参加は可能であるが、新興住宅地域の高齢者はコミュニティに参加することが難しい。新興住宅地域では参加・活動できるインフォーマルな資源が少ないことが「要介護度の改善」さらには「介護サービスを利用せず生活ができる」と繋がらない要因と考える。介護支援専門員は地域のインフォーマルな資源を活用し、活用したい資源がない場合は、新しい資源を作る働きかけも併せて望まれる。 本人担当部分：　論文構成、アンケート作成、分析、考察、結論 共同発表者：高尾文子、大浜恵美子
4.Consideration of How to Support Breast Cancer Patients on Work-Treatment Balance. Achieving s Good Work-Treatment Balance in Many Types of Job Members around Patients.	共同	平成26年5月	35th International Association for Human Caring Conference	乳がん患者の治療と就労の両立を支えるために困難となっていることを明らかにしその困難は何かを抽出した。明らかになった困難からは医療職者だけでなくさ まざまに枠を超えた領域の支援が必要であり、なかでも困難の種類に合わせた相談が必要であることが分かった。 本人担当部分　KJ法の分析、考察 共同研究者：新谷奈苗、大浜恵美子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.高温環境下での馴化測定条件におけるサーモグラフィによる発熱判定の検討	共同	平成26年6月	日本サーモロジー学会第31 回大会	サーモグラフィを手法とした感染制御のための発熱判定基準の構築を目指して、高温環境下で馴化した健常者のサーモグラフィ測定を行い、高温環境によって体表温が上昇する可能性がある場合でも、発熱により上昇する体表温の検出が可能かについて検討した。対象は、インフルエンザ患者18名と高温環境下で馴化した健常者32名。両群を比較検定すると、高温環境下で馴化した健常群に比べてインフルエンザ患者群の体温は有意に高値であった。高温環境下で馴化した健常群に比べてインフルエンザ患者群の顔面体表温は有意に高値であり、高温環境下の測定条件でもサーモグラフィによる測定は可能であることがわかった。　本人担当部分：健常者への調査依頼等の調整、アンケート作成および集計、サーモグラフィ検査の一連の流れ　共同研究者：芝田宏美、堀江修、新谷奈苗他、大浜恵美子
6.在宅終末期ケアシステムの障害の分析からみた課題	共同	平成26年8月	日本地域看護学会大17回学術集会	在宅において終末期各受持事例にケアを行った訪問看護師が必要と考えるケアを実施することができなかった理由を調査し、システム上の障害となっている事項を明らかにし、改善課題を提言することを目的とした。アンケート調査の結果、　がん・非がん事例とも「連携が悪いこと」が問題と考えられているが、特に非がん事例において「悪い」と回答が多い。「病院・医院のスタッフの在宅ケアの連携の仕方がわからない」「医師・看護師の訪問看護に対する理解が不十分」や「主治医を含む連携機関・担当者が役割を果たしていない」ことが特に問題としてあげられ、終末期ケアシステムを担う各専門職が互いの役割・機能を理解し、自らの役割を果たして連携していくことが必要となる。専門職がシステム上の問題に対してスキルを上げるためには「困難事例検討会」や「連携研修会」が必要であると結論づけた。 本人担当部分：ポスター構成、アンケート分析、考察、結論 共同研究者：島内せつ、安藤純子、松井富子、越部恵美、大浜恵美子

教　育　研　究　業　績　書

平成27年５月１日

氏名　　岡　居久代

研究分野	研究内容のキーワード
育児支援に関する実務	周産期　育児支援　助産師

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
１）キャリア支援の一環としての地域ボランティア活動	平成20年4月～平成22年3月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し精華町育児支援事業に月1回程度1年間を通し参加させ、地域住民との交流や教室の運営の準備、実施中の補助などを行いキャリア教育につなげる働きかけを行った。毎回のレポートなどで学習成果を振り返り、支援を行う際の観察の視点、母子との関わりについて考える機会と、看護業務の多様性を考えるきっかけを与えた。年度末の学生のレポートでは、「講義のときにイメージがつきやすかった、赤ちゃんのあやし方がわかった」「生の現場の声を聞くことができた」などの声が寄せられた。
２）学校祭での助産師学生による性教育、妊娠分娩教育の実践	平成22年10月	白鳳女子短期大学学校祭において助産学専攻学生に、他学部学生及び留学生、一般の方を対象に、学内演習で企画、演習した集団保健指導を実施した。実際の指導場面では留学生の母国の事情、若年学生の生の声などを指導の効果として学生個々に感じ取ることができ、教材の工夫、声のかけ方などの学習に繋げる事ができた。
３）学生に新生児蘇生法「1次」コース取得をカリキュラムに導入	平成23年1月	白鳳女子短期大学助産学専攻科において助産学専攻学生に新生児蘇生「一次」コース資格を得て卒業を迎えることができるようカリキュラムに導入した。助産師の技術には重要な事項であり、学生にも好評であった。
４）母と子を取り巻く環境について多角的な視点を養うためのディスカッションの導入	平成24年9月～平成25年2月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の非常勤として担当の「母性看護学概論」（専門科目、１年次配当、半期必修１単位）において、母子を取り巻く環境、社会問題など個々が興味を持つテーマを選定しグループで関連する統計、歴史、法律、報道などの側面から調べた内容をプレゼンテーションし、その後ディスカッションを行った。母子の看護を行う上での対象理解の重要性に気付き学生の母子を取り巻く問題への視点が広がった、グループワークの重要性がわかったなど学習効果を学生が認識できた。
５）妊婦体験スーツを着用し模擬的な母親学級を受講する体験型学習の導入	平成20年7月～平成24年7月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し、「母性看護学」（2年次配当、半期1単位）において対象理解のため妊娠体験スーツを着用しての模擬的な母親学級を実施し、妊婦体操、呼吸法、リラックス法、マッサージなどを体験学習した。受講する妊婦の気持ちを推察し、妊娠中にどのような動き、運動が適切かなど実際に体感した。この講義は学生からも理解しやすいと好評で、青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科及び国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校看護師科の非常勤として担当の「母性看護学」の講義にも導入し学生の理解力向上につながっている。

事項	年月日	概　　要
６）パワーポイントを利用した分娩に関する理解を促す教育技術の工夫	平成20年7月～平成24年7月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し、「母性看護学」（2年次配当、半期1単位）において分娩開始徴候及び分娩機転理解のためパワーポイントの教材を作成した。分娩開始時の身体の変化や子宮の様子を示し理解を促した。この教材は学生からも理解しやすいと好評で、青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科及び国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校看護師科の非常勤として担当の「母性看護学」の講義にも導入し学生の理解力向上につながっている。
７）実習でよく出会う事例を作成しイメージ化を図った学内技術演習の実践	平成20年7月～平成21年11月	白鳳女子短期大学看護学専攻科学生に対し、「母性看護学」（2年次配当、半期２単位）において実習で受け持つ可能性の高い事例を作成しより実践的な動きをイメージしやすい産褥期の観察に関する技術演習を行った。この演習を通し学生がより臨床の場で必要な学習課題を明確にすることができた。
８）卒業論文の指導	平成21年4月～平成23年2月	白鳳女子短期大学助産学専攻科において、2年間で10名の学生の卒業論文の指導を行い学位を持たない学生は学位授与機構に提出、合格まで関わった。
９）短期大学助産学専攻科におけるグループでの助産学研究の指導	平成22年4月～平成23年3月	白鳳女子短期大学助産学専攻科において、「自分なりの母乳育児を見出すための支援とは～産後2か月までの初産婦の思い～」をテーマに学生の関心のある母乳育児支援に関する質的調査を指導し、発表まで関わった。
10）実践的な事例を導入しての演習	平成21年4月～平成22年7月	白鳳女子短期大学助産学専攻科「助産診断技術学」において、実習場面において体験する事例を作成しより実践に近い形での演習とさらにその結果を提示しアセスメントから診断に至るまでの過程を一連の流れでシュミレーションできるよう指導した。この演習により実習に行く前に学生の特徴を把握し、個性を把握して実習での指導方法を工夫することができた。
11）幼少時に身内に看病された体験をケアに活かすディスカッションの導入	平成24年8月～平成25年3月	大阪キリスト教短期大学幼児教育専攻の非常勤として担当の「子どもの保健Ⅱ」（専門科目、２年次配当、半期毎必修２単位）において、言葉を巧みに表現できない子どものケアに大切なものは何かを、幼少時の体験から想起しディスカッションを行う中で「寄り添う」ことの重要性に気付き心理面のケアなど学生の理解度が向上した。
12）助産師学生のキャリア支援講座の実施	平成22年4月～平成23年3月	白鳳女子短期大学助産学専攻科において、助産師学生の実習及び就職活動前のマナー、コミュニケーション等キャリアに関する能力を向上させる目的で講師を招いてシリーズでキャリア支援講座を学生に実施した。単にマナー、コミュニケーションだけにならないよう学生の遭遇する場面設定を工夫し講師とともに必要な点を作り上げた。
２　作成した教科書，教材		
１）視聴覚教材の作成「新生児の沐浴」	平成16年6月	京都中央看護専門学校において新生児の沐浴について学生が理解しやすいように実際の沐浴をビデオ撮影し教材を作成した。新生児の表情が豊かに映されており実際の沐浴のイメージを持つことが可能となった。また、この教材は幼児教育の学生、両親教室での教材としても活用され、沐浴イメージがつきやすいと好評である。
２）視聴覚教材の作成「妊婦の健康診査」	平成16年10月	京都中央看護専門学校において学生が理解しやすいように妊婦の健康診査の項目であるレオポルド触診法、胎児心音聴取、子宮底、腹囲計測等をビデオ撮影し教材を作成した。実際に妊娠中の女性に協力を得て実施し撮影したため具体的イメージを持つことが可能となった。また、この教材は幼児教育の学生の教材としても活用され、妊娠中の母体を理解できると好評である。

事項	年月日	概　　要
３）「母性看護学学内技術手引書」	平成19年4月	白鳳女子短期大学看護学専攻科において学内での母性看護技術の向上と学生間の自己学習を促すため母性看護学教員で作成し冊子として学生に配布した。

事項	年月日	概　　要
４）母性看護学の「模擬カルテ」の作成	平成20年6月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻科において母性看護学実習の母性看護学看護過程への導入のため模擬事例及び模擬カルテを作成し学生の情報収集能力を支援した。
５）妊娠期分娩期産褥期新生児期の学習ポイントまとめ冊子の作成	平成16年6月～平成23年3月	京都中央看護専門学校において学生が理解しやすいように妊娠分娩産褥新生児各期の学習ポイントをまとめ実習時に活用し整理できるまとめ冊子を作成した。この資料は、白鳳女子短期大学看護学専攻、助産学専攻でも改良を加えながら利用。実習、国家試験対策などにも継続して活用し、助産学生の復習にも利用することができた。
６）パワーポイント教材の作成	平成19年4月～平成24年2月	白鳳女子短期大学看護学専攻において母性看護学（2年次配当、半期２単位）の講義の中で必要な解剖生理、性周期、妊娠経過などの理解を促すためにパワーポイントを作成し視覚的な面を補う教材作成を試みた。この教材は理解を促すのにイメージが付きやすいと学生から好評で、学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科や独立行政法人国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校看護師科でも妊娠経過への導入として改良し活用できており好評である。
７）助産学実習実習要項の作成	平成21年4月～平成22年12月	白鳳女子短期大学専攻科助産学専攻科において助産学実習の導入のため実習目標から全体の実習概要を作成し学生が実習時に行動できるよう支援した。また、実習時の事故対応、連絡網等安全対策、倫理要綱なども検討を行い学生に指導した。
基礎看護技術「環境を調整する技術」における学生の実践能力向上のためのスマートラーニングの一試案 ―タブレット端末を用いた「理想の病室」作成ソフトの開発―	平成26年12月	奈良学園大学では学生一人１台タブレット端末（iPad）を所持している。iPad上で，患者にとっての理想の病室を作成することができるオリジナルのソフトを開発し，スマートラーニングの機能を利用して，学生が病室環境を構成する因子を統合させ，患者の生活環境を整えるための物的環境について考え、実践能力の向上を図ることを目的に教材開発に関わった。岡本響子（研究代表者），吉岡隆之，嶋田理博，北島洋子，岡居久代，高橋里沙，吉村雅代（研究分担者）
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）大阪キリスト教短期大学「子どもの保健Ⅱ」の学生の講義評価	平成24年8月～平成25年3月	大阪キリスト教短期大学幼児教育専攻の非常勤として担当の「子どもの保健Ⅱ」（専門科目、２年次配当、半期必修科目において学生の評価は5段階の平均4.5であり、全体の平均を全て上回っておりわかりやすかったと好評であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）大阪府助産師会子育て支援シンポジウム	平成6年10月	大阪府助産師会の子育てに関するシンポジウムにおいて実施している育児支援活動に関しパネリストとして育児支援活動を報告した。
２）奈良市立飛鳥小学校保護者講演会	平成12年1月	小学校1年生保護者を対象に「誕生」から「性」をいかに伝えるかについて助産師の立場で講演した。
３）奈良教育大学附属幼稚園PTA講演会	平成14年12月	奈良教育大学附属幼稚園に通う園児の保護者を対象に誕生、幼児の性教育を通して生命について考える機会となるよう「命の学習」をテーマに講演した。
４）NPOそよかぜ子育てサポートステップアップ講座	平成17年6月	京田辺市にある育児支援のNPO法人が主催する、子育て支援者を養成するためのシリーズ講座。「産後の母親と赤ちゃんのケア」をテーマに講演を行った。

事項	年月日	概　　要
５）京田辺市ファミリー・サポート・センター会員講習会	平成18年8月	京田辺市のファミリー・サポート・センターが主催する育児支援を実施する人が受講する講習会。産前産後のサポート、産後女性の心身の変化に関して講義をした。
６）看護学生の母性看護学実習指導	平成17年6月～ 平成17年8月	第二岡本総合病院産婦人科病棟において京都中央看護専門学校の実習生1グループ6名2グループを受け入れ「母性看護学実習」の指導を受け持ち看護、カンファレンスを通し関わった。
７）助産師学生の分娩介助実習指導	平成17年6月～ 平成19年3月	第二岡本総合病院において京都府立医科大学の助産学生の実習生2名を受け入れ「分娩介助実習」の指導を行った。
8）NPO精華育児支援事業サポーター講座	平成20年8月	NPO法人、精華育児支援事業主催の、育児支援を実施する人が受講する講習会。産前産後のサポート、産後女性の心身の変化に関して講義をした。
９）精華町役場における地域保健実習の受け入れ	平成20年8月	京都橘大学看護学部学生4名の地域保健実習において京都府相楽郡精華町の子育て支援事業の見学と、現場での立ち位置観察方法アセスメントなどの指導を行った。
７）精華町民生児童委員研修会「今の母の状況・育児事情」	平成22年5月	京都府相楽郡精華町の民生児童委員の研修会。現代の母の状況と育児支援の実態、民生児童委員の役割の再構築を目的に民生委員が家庭訪問を実施するに当たり配慮するべき注意点などを講演した。
８）大和郡山市学科指導教室「ASU」講師	平成23年7月	市内小・中学校に在籍する不登校児童生徒に向け「命の学習」というテーマで特別講義を行った。
９）精華町子育てパートナー養成講座講師	平成23年7月	京都府相楽郡精華町の子育て支援を実施するボランティア養成講座。現代の母の状況と育児支援の実態配慮するべき注意点などを講演した。
10）精華町役場子育て支援事業における実習生の受け入れ	平成24年8月～ 平成24年12月	畿央大学助産学専攻学生2グループ4名の実習生を受け入れ、パパママ教室などの事業に参加させ現場での指導を行った。
11）同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科笠間ゼミナール研究協力	平成19年10月～ 平成24年3月	同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科笠間ゼミナール学生の卒業グループ研究として実施している妊娠出産に関するガイドブック作成に当たり、特別講義、および情報の提供を行い、冊子作成に協力した。
12）精華町児童育成課主催事業「お孫さんと楽しく」講師	平成24年10月	京都府相楽郡精華町の児童育成課主催事業として精華町在住の幼い孫のいらっしゃる祖父母を対象に講演会を行った。
13)精華町子育て教室「赤ちゃんサロン」講師	平成17年～ 現在に至る	京都府相楽郡精華町児童育成課事業として月2回精華町在住の乳児とその母を対象に乳児との接し方、発育の促し方、遊びなどを説明するなど育児支援活動を行った。参加者は多い時で47組の母子があり、人気事業と評価を受けている。
14)精華町マタニティ教室講師	平成9年～ 現在に至る	京都府相楽郡精華町健康推進課事業として月１回精華町在住の妊婦さんを対象に出産に向けての支援やレクチャーを行っている。
15)奈良教育大学子育て支援研究会講師	平成26年11月～ 現在に至る	奈良教育大学附属幼稚園において開催される育児教室、及び幼稚園教諭を対象とした学習会の講師を担当した。
16)大阪市中央区子育てプラザ支援事業講師		０～4歳の児と母を対象に健康、発育にまつわるテーマで母たちがゆっくりと育児について話し合える場所を提供している事業。予約はすぐにいっぱいになり、人気が高いと評価を受けている。
５　その他		

事項	年月日	概　　要
１）看護師国家試験対策委員	平成20年4月～ 平成23年2月	白鳳女子短期大学の看護師・助産師国家試験対策において、実習と関連させた学習指導、練習問題の作成、受験手続、学生指導など国家試験に関連すること全てを担当した。
２）助産学専攻科カリキュラム改正	平成21年5月～ 平成21年7月	白鳳女子短期大学の助産学専攻科の学生数増加に伴い、カリキュラム改正を行い主な担当者として全てに関わった。
３）研究紀要編集委員	平成20年4月～ 平成23年3月	白鳳女子短期大学において2年間研究紀要編集委員として紀要作成すべての業務に関わった。

事項	年月日	概　　要
４）白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻における教育実績	平成19年4月～平成21年3月	白鳳女子短期大学総合人間学科看護学専攻科の専任教員として（平成19年4月から平成20年3月まで講師、平成20年4月から平成21年3月まで准教授）として以下のような科目を担当した。 「母性看護学概論」（専門科目1年次配当、必修、半期１単位）母性を取り巻く環境や母性看護に必要な解剖生理など基本的な母性の授業を行った。 「母性看護学方法論」（専門科目2年次配当、必修、通年2単位）妊娠分娩産褥新生児期の内容の授業を行い学生が実習に行く前の母性看護の基本となる知識、技術を理解させる教育効果があった。 「母性看護学実習」（必修、3年次配当、通年、3単位）臨床の場での母性看護実践をサポートしながら学生を指導した。実践に即した学習は学生の応用力を身につける効果があり、状況をイメージする効果があった。 「基礎看護学実習Ⅱ」（必修２年次配当3週間）看護の基本的実践となる実習への指導を行った。 「地域ボランティア活動」（選択科目、半期、1年次配当、1単位）学生の自主性を育成し、地域への実践活動を体験する機会として講義と実践活動を行った。
５）白鳳女子短期大学専攻科助産学専攻における教育実績	平成21年4月～平成23年3月	白鳳女子短期大学専攻科助産学専攻科の専任教員（平成20年4月から平成23年3月まで准教授）として以下のような科目を担当した。 「助産学概論」（必修、半期、1単位）助産師とは、助産の歴史、母子保健、助産師の社会的役割などの授業を行い、助産師に必要な要件などを考えさせた。 「助産診断技術学」（必修、半期、1単位）助産師に必要な具体的技術について授業し技術伝達を行った。 「地域母子保健」（必修、半期、1単位）地域での助産師活動について授業を行い助産師の地域での役割を学習させた。 「助産学実習」（必修、半期、５単位）分娩介助、助産診断などの臨床展開を行った。 「助産学研究」（必修、半期、1単位）助産学研究に関する講義と論文指導を行った。
６）白鳳女子短期大学総合人間学科幼児保育専攻における教育実績	平成20年4月～平成22年3月	保育士養成課程必修科目である「小児栄養」（保育士専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）を担当し母乳栄養や離乳食、小児の栄養に関する講義を行った。それにより学生の栄養、小児の栄養、健康と食への意識が向上した。
７）白鳳女子短期大学総合人間学科国際人間学専攻における教育実績	平成20年4月～平成22年3月	留学生のクラスの選択科目として位置づけられた「母親学」を担当した。（選択科目、半期、１単位）各国の妊娠出産育児事情や子どもを取り巻く環境、世界の母子保健の課題などをグローバルな視点で学べるよう講義した。
８）畿央大学専攻科助産学専攻科における教育実績	平成24年4月～平成26年3月	畿央大学専攻科助産学専攻科において非常勤講師として次の授業を行った。 「乳幼児の成長発達」（必修、半期、1単位）助産師に必要な乳幼児の知識と保健指導について授業を行った。これにより学生のアセスメント能力向上に役立った。 「フィジカルアセスメント」（必修半期1単位）助産診断に必要なフィジカルアセスメントの基本的知識を授業した。これによりフィジカルアセスメントの具体的方法を学生が身につけた。 「助産診断技術学」（必修、半期、1単位）分娩介助に必要な介助技術演習と授業を行った。実習前の分娩介助の方法を身につけさせた。 「助産学実習Ⅱ」（必修、半期、1単位）臨床の場で学生の分娩技術、診断能力向上に努めた。 「助産学実習Ⅲ」（必修、半期、1単位）地域での助産師の役割を理解させるため育児支援の事業に参加させ学習指導を行った。

事項	年月日	概　　要
9）大阪キリスト教短期大学幼児教育学部における教育実績	平成24年4月～平成26年3月	大阪キリスト教短期大学幼児教育学部において非常勤講師として保育士養成課程必修科目である「子どもの保健Ⅱ」（保育士専門科目、2年次配当、半期、必修1単位）において子どもの健康管理、疾病予防などの内容の授業を担当し子どもの発達、諸計測、清潔、健康管理等に関する演習を行った。それにより学生の子どもの健康管理や疾病予防、応急処置などを理解させる効果があった。
10)平安女学院大学子ども学部における教育実績	平成25年4月～平成26年3月	平安女学院大学子ども学部において非常勤講師として保育士養成課程必修科目である「小児保健実習」「子どもの保健Ｉｂ」（保育士専門科目、4年次配当、半期、必修各1単位）において子どもの健康管理、疾病予防などの内容の講義と子どもの発達、諸計測、清潔、健康管理等に関する演習講義を担当した。
11)国家試験解答速報の作成	平成23年2月～現在に至る	メディカ出版看護師国家試験解答速報において母子に関する問題の解答とその年度の国家試験の傾向について分析回答している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許	昭和62年6月	（第６０８８４３号）
2）助産師免許	平成3年6月	（第９５４９９号）
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）関西電力病院看護師	昭和62年4月～平成元年3月	消化器内科、循環器内科、血液内科などを統括する内科部門に勤務。病院の特殊性から原発従事者の血液データ、健康診断結果などの管理、看護に従事した。
2）大阪府三島救命救急センター看護師	昭和元年4月～平成2年3月	３次救命センターＩＣＵに勤務し、３次救急を必要とする患者の集中治療室での看護に従事した。また、オープンシステムを採用しているため、救急搬送時は救急患者の看護に従事した。
3）辻産婦人科助産師	平成3年4月～平成4年5月	産婦人科に勤務し外来、病棟等で継続的な妊娠出産産褥期のケアに従事した。勤務中の分娩介助件数は約100件であった。
4）出張専門助産所の開設	平成5年11月～平成15年3月	奈良市、京都府南部を中心に家庭訪問による妊娠期から産褥期の女性の支援を行った。また、自宅出産を扱う助産師のサポートとして自宅出産を支援した。この取り組みは出産施設と家庭生活の移行期間を支え、育児への不
5）精華町健康推進課新生児訪問事業	平成9年4月～平成15年3月	健康推進課嘱託助産師として精華町内の全第2子以降の出産児を家庭訪問し保健師、保育士、専門医療機関との連携を図った。
6）奈良市健康増進課委託契約助産師	平成9年4月～平成15年3月	母子保健法が市町村に委譲される時に助産師の活動の機会として奈良市と助産師会の連携の橋渡しとして調整を行い、助産師の業務振り分け、地区分担などの調整に関わった。
7）自宅出産介助者調査	平成8年11月～平成10年10月	全国で自宅出産を扱う医師・助産師の具体的な仕事の内容についての質問紙による調査。調査後は冊子としてまとめ自主発行した。

事項	年月日	概　　要
８）「日本の助産婦・昭和の仕事」　聞き取り調査協力	平成9年8月	高齢の開業助産師の仕事に関するインタビューの専門知識のサポートとして同行取材を行った。この調査は冊子にまとめられ、発行された。
９）地域創造～第五号～　おおさか地域創造ファンド事例集　地域支援事業平成23年度採択事業	平成23年8月	大阪中央地域活性化推進協議会（事務局：大阪商工会議所）の、「大阪中央地域活性化プラン」に技術や人材、歴史・伝統など大阪市内の地域資源を活用し、地域内の中小企業などに広く波及効果を与える新しい事業を助成するものとして募集「おおさか地域創造ファンド中央地域支援事業」の応募者４０組から5組が選ばれマタニティガーデンが採択された。このことにより育児支援を中小企業者との連携が可能となり異業種での取り組みを実施。
10）助産院「マタニティガーデン」の開設	平成23年9月～現在に至る	大阪市中央区に出産を扱わない妊娠期から産後1年間の育児サポートを中心とした助産院を開設。大学院の修士論文を基に妊娠中の妊婦のための教室や産後1年間の赤ちゃんを育てる時のコツなどを伝える活動をしている。この活動は毎日放送、毎日新聞、産経新聞、ラジオなどで紹介され評価を得た。
11）就職後のキャリア支援研修会の実施	平成23年9月～現在に至る	マタニティガーデンにおいて就職後のスキルをアップさせ、施設間を超えて学ぶ場所として提供。東洋医学、幼児の発達、メディアリテラシー、助産院の開設に向けた手続き、資金の調達、広報活動、プレスリリースの方法、弁護士への相談、税金、産婦人科医師との協働等をテーマにシリーズで学習会を定期的に開催。
12）助産師の個別キャリア相談事業の展開	平成23年9月～現在に至る	マタニティガーデンにおいて援助職者の離職、バーンアウトを防ぐ目的で助産師をサポートするための個別相談事業を実施した。病院での働き方、助産師としての自立、研修を目的にした働き方などのバリエーションをその人の生活にあう形で考えるきっかけを提供している。
13)高の原中央病院看護研究指導	平成27年6月～現在に至る	奈良学園大学の実習病院である高の原中央病院において、8セクションの研究指導を行い病院の看護ケアの質の向上を目指して取り組んだ。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1）心とからだを育む 子どもの保健Ⅱ（演習）	共著	平成25年3月	保育出版社	保育士養成の必修科目である子どもの保健Ⅱ（演習）の教科書。 Ｂ５版　本文１０６頁 編者：高内正子 共著者：梶美保，上山和子，工藤恭子，堀順子，岡いくよ他 本人担当は2章３節周産期の子どもの健康と母親の健康を執筆p24～25。出生直後の母子の健康と病態、胎外への適応の過程と病態などについてまとめ、学習のために必要な課題、教材を提案した。
（学術論文）				
１．周産期育児支援プログラムの開発研究 ～妊娠期から乳児期までを視野に入れて～〔修士学位論文〕	単著	平成19年3月	大阪人間科学大学	周産期の各時期の不安、関心、興味のある内容を調査し、育児支援の現状を社会的、母親側、行政、歴史などの視点から考察。 妊娠期から乳児の育児期間を継続して支援するためのプログラムの提案を行った。 A4判全65頁
２．助産師学生の志望動機と目指す助産師像 ～本学助産師教育における課題～ （査読付き）	単著	平成21年12月	白鳳女子短期大学紀要第４巻2009〔 p15～ｐ23〕	助産師学生の入学するまでのプロセスを振り返り、志望動機、目指す助産師像などを調査した。助産師としてのアイデンティティの獲得を中心に検討し、助産学専攻の教育における課題を探った。
３．乳児を育てる母親の育児支援ニーズ～現代の乳児を育てる母の希望する育児支援と不安の現状～（査読付き）	単著	平成23年３月	白鳳女子短期大学紀要第５巻2010〔 p35～ｐ42〕	16年間の妊婦の集いや乳児を育てる母の集いの実践活動において子どもの成長の時期毎に一定の質問や不安が出現していたことに着目し具体的に必要と感じる育児支援について調査。現代の母が望む育児支援などを整理し、これからの育児支援に必要な要素を検討した。
４．「子どもの保健演習」における実践力形成の一考察～感性豊かなケアを育むために	単著	平成24年12月	大阪キリスト教短期大学紀要第52集2012〔p93～ｐ100〕	学生の「子どもの保健」にまつわるケアの技術習得を効果的に行うために学生のこれまでの育児経験を把握し、いかに効果的に演習を進め実践に役立つ技術を身につけることができるか検討。
５．季刊家計経済研究　特集祖父母　巻頭対談	共著	平成25年１月	家計経済研究№９７ 2013Winter〔ｐ2～ｐ11〕	家計経済研究所の季刊誌の祖父母特集に「今日の育児と祖父母」をテーマに桜美林大学大学院老年学研究科客員教授の直井道子先生と対談し祖父母の置かれている現状や育児支援、育児の現状などについて対談したものをまとめ巻頭ページに特集された。 共著者：直井道子、岡いくよ 家計経済研究所編
６．周産期育児支援の一考察	単著	平成26年9月	奈良学園大学紀要第1集〔ｐ3～ｐ10〕	妊娠期、出産期、授乳期の継続した育児支援をマタニティガーデンでの実践と利用者アンケートで調査した。利用者は医療機関に行くほどでもない不安を解消し、ゆっくり妊娠出産育児について語り合える人や場所、同じ立場の人とのつながりを求めていた。周産期を切れ目なく支えることや同じ立場の人と出会う機会のの重要性についてまとめた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７．近年の出産動向～出産環境研究の潮流を中心に～	単著	平成27年3月	奈良学園大学紀要第2集〔ｐ27～ｐ41〕	本来妊娠出産育児は、生物学的には普遍的な営みであり、諸地域の文化や慣習に彩られた多様な産育文化として、民俗学、文化人類学、女性史、家族史、医学社会史等の分野で貴重な成果が集積されているが医学、看護、助産学の研究は他分野の研究成果を活かし切れていない。本論では、現在の問題がどのような歴史過程で生じ、各分野で調査、研究がなされてきたのか現在への応用可能性の検討を文献検討で試みた。
８．乳児の発達について～日常生活の関わりの中から～	単著	平成27年3月	奈良教育大学附属幼稚園研究紀要	出産前後の女性のサポートを中心に約20年地域活動を行い、近年の母と子の現状を乳児の発達を中心に、気になる点について実践の立場で報告した。
（その他）				
１．自宅出産介助者リスト	共著	平成10年8月	自宅出産ネットワーク編集・発行	全国で自宅出産を扱う医師・助産師を対象にアンケート調査を行い、情報公開の同意を得た医師・助産師93名の介助の具体的内容などをまとめた。このリストは、朝日、毎日、読売、産経など各紙が取り上げ全国各地から申し込みを受けた。〔A4判190頁〕 本人担当部分抽出不可能。 主に回答内容の調査を担当。 共著者　野原留美　古賀敦子　岡いくよ
２．「私」の自宅出産	単著	平成11年１月	月刊「春秋」No405 春秋社	自身の出産体験を元に、現代の出産、医療、死生観などの問題について言及した。〔p14～ｐ17〕
３．クローズアップ　母と子、そして家族の支援の場所「マタニティガーデン」をオープンしました	単著	平成24年2月	助産雑誌第66巻第２号 医学書院	自身のこれまでの経験、活動から助産師のできる育児支援、助産師同士のキャリアコミュニケーションとは何かを考え、活動している実践を報告としてまとめた。 （P154～ｐ159）
４．プロフェッショナル助産師のマナー	共著	平成24年01月～12月	ペリネイタルケア通巻400号第31巻1号～412号第31巻１２号	助産師として基本となる一般マナーから現場で起こりがちなメディカルマナーに至るまでを対談形式で月ごとにまとめたもの。1年間の連載（A４判５頁） 共著者：古賀敦子、岡いくよ １回目：助産師のマナーとは ２回目：第一印象を良くするためのポイント ３回目：助産師の身だしなみ ４回目：言葉遣い ５回目：助産師のマナーの基本姿勢 ６回目：助産師の立ち居振舞い ７回目：コミュニケーション ８回目：助産師の電話対応 ９回目：新人助産師とのコミュニケーション 10回目：病院でのクレーム対応 11回目：家庭訪問時のマナー 12回目：人前で話すときのマナー
５．特集育むよろこび「お産は大事な通過点」	共著	平成24年５月	月刊「母の友」No708 2012年5月号　福音館書店	親となるとはどういうことなのかを現代の出産などの状況を通して考える機会にと組まれた特集の内の1つ。 共著者：福音館書店編集部 （P18～ｐ26）
６．母の友エッセイ	単著	平成25年３月～5月	月刊「母の友」No712～714 2013年４月号～6月号 福音館書店	母の思いや仕事上の身近な話題をエッセイにまとめた。3回の短期リレー連載。 ４月号テーマ「いいお母さんになりたい」 ５月号テーマ「お母さんがいなくて寂しい？」 ６月号テーマ「生まれることと死ぬことと」
７．周産期における継続した育児支援 『口頭発表』	共同	平成20年9月	日本小児保健学会 札幌コンベンションセンター	これまでの地域活動から周産期を通じての時期特有の相談内容を整理し、これからの支援のあり方について考察、発表した。 共同発表者：原田正文（大阪人間科学大学） 本人が主担となり調査、研究、発表した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．The Roles of Supporters During Perinatal Period ~Practical report of classes for pregnant women and babies 『Poster presentation』	Joint	September 2014	The 7th International Conference of Health Behavioral Science 「Narrative and Health Behavioral Science」	Programs in Japan that incorporated methods from parent support programs in Canada, USA, and Australia. The aim of this study was to examine the role of supporters during the perinatal period and the necessary elements for parenting support in Japan IkuyoOka　KyoukoOkamoto
９．Research Trends in Psychiatric Nursing on Transition to the Community.	Joint	September 2014	The 7th International Conference of Health Behavioral Science 「Narrative and Health Behavioral Science」	This study reviewed previous studies on transferring mentally ill people to community services and discussed future support in measures in Japan. KyoukoOkamoto　IkuyoOka
10．子宮収縮薬（分娩誘発・促進剤）使用時のインフォームドコンセントの問題点『口頭発表』	単著	平成26年11月	医学哲学倫理学会 東洋大学	妊産婦及び家族の立場で子宮収縮薬（分娩誘発・促進剤）使用時にインフォームドコンセントを受ける場合の問題点と必要な支援について検討し報告。
11．周産期における切れ目ない育児支援　～マタニティガーデンの実践報告～『ポスター発表』	単著	平成27年3月	日本助産学会	妊婦及び乳児とその母親に、妊娠期、乳児期前半、後半に分かれ各期週1回程度、1回2時間、妊娠中から産後1年間、成人学習理論を応用した参加体験型学習によるクラスを実施した。参加修了後の利用者アンケートからの分析を報告。
12．たまごクラブ3月号お産の「怖い」「痛い」をムリなく克服プロジェクト	共著	平成27年3月	ベネッセコーポレーション	出産を恐怖に感じる妊婦さんに向けて普段からできるメンタル、フィジカルトレーニングを考えまとめたもの。共著者：岡いくよ、坂本フジエ、早川友香、浦野晴美、ｐ38～ｐ51
13．お母さんのココロとカラダをゆるめる周産期の育児支援「マタニティガーデンにようこそ」	単著	平成26年01月～平成27年３月	ペリネイタルケア通巻428号第33巻1号～445号第34巻３号	妊婦さんやお母さんから受ける相談の中でよくある相談例を事例を通して提示、解説し、実践現場で助産師として活用する手引書。連載（A４判５頁） １回目：母乳を直接吸ってもらえずに退院。 ２回目：人見知りで人付き合いの苦手そうな妊婦さん ３回目：赤ちゃんに泣かれてへとへとなお母さんがやってきた ４回目：妊娠したけれど体の変化がわからない ５回目：母乳母乳と言われて嫌になりそう ６回目：二度と子どもは産まないと決めていたのに妊娠することに ７回目：赤ちゃんを下すと泣くのでずっと抱っこしている ８回目：実家との関係に悩む妊婦さん ９回目：離乳食を食べてくれない 10回目：お産が怖くて仕方がない妊婦さん 11回目：あまりハイハイしないでつかまり立ちを始めた赤ちゃん 12回目：上の子の対応が心配なお母さん 13回目：子どものしつけについて悩むお母さん 14回目：おっぱいをどうやってやめるの？ 15回目：私はいいお母さんになれるでしょうか
14．妊娠出産育児の連続性～周産期の生と死に向き合う出産介助者のナラティブ～『口頭発表』	単著	平成27年６月	日本医療保健行動科学会 京都大会	80歳を超えた現在も現役で出産介助にあたるひとりの高齢助産師の、誕生のみならず死産時の関わりを通して、周産期とはどのような時期であるのか、周産期の出産介助の本質を探るための分析を試みた。

教　育　研　究　業　績　書

平成　　平成27年５月１日

氏名　　高橋　里沙

研究分野	研究内容のキーワード
看護学　公衆衛生学	渡航医学と看護　　国際保健　　途上国の保健医療 ヘルスプロモーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
１）演習の効果的な活用	平成24年4月～ 平成25年7月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の助手として「成人精神老年看護学演習」（３年次配当、半期、必須2単位）において、精神に障害を持つ対象への基本的援助技術と看護過程の展開について理解を深めるために、精神科における代表的な疾患のペーパーペーシェントを用いてのグループワークを取り入れた。また、患者ー看護師関係におけるコミュニケーションについて理解を深めるために、ロールプレイを取り入れた演習を行うことで、その後に続く実習でスムーズに患者に関わることができることができるような導入となった。
２）実習の効果的な活用	平成22年9月～ 平成25年4月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の助手として「精神看護学実習」（専門科目、３，４年次配当　年間　必須　2単位）2週間の精神科病棟実習において、毎日、30分程度の病棟実習指導者、教員、学生を交えたグループカンファレンスを取り入れた。カンファレンスの運営は学生主体い、教員は必要時助言した。その結果、学生同士が問題解決に向け意見を活発に述べ、それに向けて自己学習をする様子が見られ、実習に対して積極的に取り組む姿勢が見られた。また、学生アンケートからも、毎日のカンファレンスで実習中の悩みを解決できた等、学生の満足度も高かった。
３）プロセスレコードを用いた実習指導	平成22年9月～ 平成25年4月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の助手として「精神看護学実習」（専門科目３，４年次配当　年間　必須２単位）にてプロセスレコードを用いた実習指導を実践した。精神科看護学では、対人関係、コミュニケーション技術の理解に重点をおいているため、学生１人１人が自分自身のコミュニケーションやその特徴を知ることが大切になる。患者とコミュニケーションを図る自分自身を客観的に振り返ることができるように学生の記載したプロセスレコードをもちいて、個々の学生に合わせ、個人及び実習グループでの振り返りを行った。その結果、学生のコニュニケーションに関する気づきやが患者との関係を考えるきっかけとなり、その後の実習や患者ー学生間の関係の発展にに良い影響を与える効果があった。
２　作成した教科書，教材		
１）精神看護学実習要項・記録用紙	平成23年8月 平成24年8月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の助手として「精神看護学実習」（専門科目、３，４年次配当、に携わりで使用する実習要項、及び、記録用紙の作成に携わった。実習では精神に障害を持つ対象を理解し、一連の看護過程の展開するために、情報収集、対象の理解から看護計画立案実施評価までが実践を通して理解できるようレイアウトを構成し２週間の病院実習で活用した。

事項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
特記事項なし		
4実務の経験を有する者についての特記事項		
1）専門学校から受け入れた実習生に対する指導	平成12年4月～ 平成13年4月	整形外科・眼科の病棟にて、プライマリーナーシングを実施していたため、年間を通して2週間及び3週間の実習に来る担当患者の受け持ちになった進学コース及び准看護師養成コースの学生に、看護技術の実践指導や看護計画立案に際し適宜情報提供また、病棟カンファレンスを活用しての助言を行った。
2）看護教育者向けセミナー講師	平成13年1月	中部大学生命健康科学部保健看護学科主催の中部大学看護セミナーにて、臨地実習指導者等を対象に「対応困難事例に関する指導の実際」について講師を務めた。実際に対応した困難事例の指導方法示しながら講演を行った。
3）大学生の看護実習指導 （精神看護学実習）	平成22年9月～ 平成25年3月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の3年生後期から4年生前期の学生を対象に行う「精神看護学実習」（必須春学期）2単位）において、2週間臨地実習に同行し病棟での実および実習記録指導を行った。学生は2週間を通して受け持ち患者を持ち、患者-看護師の関係構築、情報収集、看護過程の展開を実施する。そのために必要な病院との連絡調整、実習指導、成績評価すべてに携わった。
4）大学生の看護実習指導 （基礎看護学：生活援助実習）	平成23年3月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の2年生と対象にした生活援助実習に同行し、看護技術習得を目指した1週間の実習指導を行った。病棟との連絡調整、実習および記録指導、成績評価に携わった。
5）大学生の看護実習指導 （基礎看護学：看護過程実践実習）	平成23年9月	中部大学生命健康科学部保健看護学科の3年生を対象にした基礎看護学の看護過程実践実習にて2週間の臨地実習指導に同行した。応用実習に出る前に看護過程の展開の基礎を学ぶ目的で受け持ち患者を持ち実践する実習において、病棟における実習および記録指導、連絡調整と成績評価に携わった。
5　その他		
特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許	平成11年4月	第1025498号
2）日本語教師	昭和18年3月	第1080012号

事項	年月日	概　　要
2　特許等		
特記事項なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1）社会保険京都病院看護師	平成11年4月～平成13年3月	整形外科・眼科病棟に勤務。整形外科患者の術前、術後、及びリハビリテーション期の看護、眼科患者の術前、術後看護などにあたった。また、人工関節置換術を行った患者の生活指導や自宅への退院に向けた社会資源の活用などの調整を医療ソーシャルワーカーとともに行った。
2）北山病院看護師	平成15年6月～平成20年5月	精神科病棟にて精神疾患をもつ慢性期の患者に対し、退院を目指した生活指導や服薬指導などの行った。また、水中毒の患者の看護や服薬管理、突発的な自殺企図に対応する必要があったため、患者の状態に十分に注意して看護に取り組んだ。
4　その他		
特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
特記事項なし				
（学術論文）				
1. Factors associated with travel related health problems among Japanese travelers in Thailand　（修士論文）	単著	平成21年5月	Chulalongkorn University A4版 総頁数85	タイ王国に4日以上3ヶ月未満滞在した18歳以上の日本人旅行者の健康問題とそれに関わる因子から3月末までの2ヶ月間、国際空港出発の出国ロビーにて400名を対象にアンケート調査による断面調査を行った。 有効回答者394名のデーターをもとに、社会人口学的要因、知識、姿勢、行動と、旅行中の健康問題の発生の関係性をカイ二乗検定、ｔ検定、ロジスティック回帰を用いて分析した。 主な回答者の層は、男性（58.6%）で24歳以下（29.7%）大学、短大卒者（42.7%）年収300万円以下の独身者であり、大多数がタイの都市部に滞在した旅行者で、渡航の目的は、休暇または観光であった。旅行保険には、74.7%が加入しており、4.6%の人が何らかの予防接種を渡航のために接種していた。多くの旅行者は、旅行中健康に過ごすことに対して高い姿勢を示したが、タイで注意が必要な熱帯特有の疾患や感染症に関しての知識はそれほど高くなかった。 回答者の内、32.1%が旅行中何らかの健康問題を体験したと答えた。 多重ロジスティック回帰分析を行った結果、旅行中の健康問題と関係性を示すものは、年齢、飲食と飲料水であった。この研究から、タイにて日本人旅行者が直面する健康問題に関連するのは、屋台での食事、旅行中の飲料水そして、若い世代がハイリスクであることがわかった。 A4版　総頁数85
2. Factors associated with travel related health problems among Japanese travelers in Thailand （査読あり）	共著	平成21年5月	Journal of Health Research Vol.23, 2009　p69～p74	タイへの国別年間入国者数第一位を占める日本人渡航者の健康問題について調査したいというタイ王国公衆衛生省の意向を受け、タイ出国前の18歳以上の日本人旅行者を対象に、日本人がタイ旅行中に直面する健康問題とその因子について明らかにするために、アンケートによる断面調査をスワナプーム国際空港にて行った。 　多重ロジスティック回帰分析をした結果、日本人の旅行中の健康問題には、屋台など路上での飲食、及び旅行中口にする飲料水に関係が深く、特に若い世代がハイリスクであることがわかった。旅行損害保険などの保険には、7割以上が加入しているが、風土の違う途上国に渡航するにも関わらず、6割以上の旅行者が旅行先の医療事情や注意の必要な感染症などに対しての情報にアクセスしておらず、熱帯特有の病気や感染症に関する知識が乏しいことがわかった。 　これまで、旅行者下痢症を扱った研究はあったものの、日本人旅行者の健康問題に関する研究はされていなかったため、今後の研究に役立てていけるものと思われる。 Risa Takahashi,Surasak Taneepanichskul 筆頭著者として企画・実施・総括のすべてを担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. Academic Exposure to Benefits of Physical Fitness Does Not Give Medical Students an Edge over Students from Non-Health-Related Disciplines （査読あり）	共著	平成24年12月	Journal of Applied Medical Sciences vol.1, no.2, 2012, p61-p67	近年ケニアでは、ヘルスプロモーションの一環として、適度な運動と生活習慣病の予防についての教育を医療関係の学部教育に取り入れている。しかし、実際に医学、看護学部の学生とそれ以外の学生間においてフィジカルフィットネスに違いがあるのかを検討するため、ケニアの国立大学に在籍する学生を対象に、それぞれ80名ずつ基礎体力測定と呼吸機能の調査を行った。その結果、健康教育を受けている医学・看護学部学生よりも、その他の学生の方が高い値を示した。このことから、健康教育を取り入れても実際の行動に効果を表すまでには至っていないことがわかった。 本人担当分：共同研究につき抽出不可能 共著者：Karani Magutah, Risa Takahashi, Calistus Wilunda
4. The relation between physical activity and indicators of body fatness in Kenyan adolescents （査読あり）	共著	平成25年3月	Journal of Applied Medical Sciences vol.2, no.1, 2013, p43-p59	開発途上国の医療問題は、感染症中心であったが近年は生活習慣病と感染症が混在する状況にある。ケニアも例外ではなく、生活習慣病予防は急務であると同時に、若年層の肥満化が大きな社会問題となりつつある。運動と肥満の関係はこれまで様々な研究で取り上げられているが、今回は座位中心の生活習慣と身体活動、座位中心の生活習慣と肥満の関係を明らかにすることを目的に、13歳から16歳の200名に対し、1日の内座位で過ごす時間、身体能力、及び肥満度を測定しその関係を調査した。結果、日中の活動時間の内平均78％の時間を座位でス過ごしていることがわかった。また、座位で過ごす時間と肥満の間には関連があることが明らかになった。今後の介入を考える上で有効だデーターとなった。　本人担当分：共同研究につき抽出不可能 Robert Ojiambo Mang’eni, Karani Magutah, Kihumbu Thairu, Risa Takahashi, Calistus Wilunda
（その他）				
1. Safety of street food in Thailand （査読あり）	単著	平成21年9月	Rotary International Magazine Thailand, September, 2009	タイでは食文化の一環として屋台が生活に根付いているが、衛生面や油の使い回しなどによる発がんリスクの問題などが大きな課題となっている。食中毒など感染性の健康被害については、周知されているが、近年問題となっているのは、揚げ物屋台による酸化した油の違法な再利用である。長期間使用した食用油に化学薬品を混入することにより、見た目は新しい油同様になることから、利益を重視して利用している屋台も多い。タイの公衆衛生省も調査と指導に乗り出しているが、一般にはあまり知られていないことから、そのリスクと注意を促す目的で依頼を受け、ロータリーマガジンに現状を寄稿した。
2. End Polio Project in Thailand	共著	平成22年3月	Rotary governors newsletter in Thailand	ロータリー財団ではビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団と協力し、世界からポリオの撲滅をめざし、ワクチン投与と啓発運動を行っている。タイでも公衆衛生省を協力し、低所得者世帯と中心に無償でのワクチン投与を実施しており、ロータリー財団の国際親善大使を務めた2009-2010年度にかけての活動を中心に、その活動と意義について広く理解してもらうことを目的にニュースレターに寄稿した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 海外医療事情⑲ 熱帯地方の病気と予防	単著	平成25年1月	LONGSTAY 2013年 冬号 P38-39	団塊世代の新しい老後の過ごし方として海外でのロングステイが注目されている。しかし、日本とは気候も風土も違う国での生活は、これまで目にしたことのない疾患にかかるリスクもある。また、言葉が不自由な人々は病気になるだけでも大きな不安を受ける。衛生管理の整った日本では一般に見ることが少ない、熱帯地方特有の疾患に焦点をあて、一般の人々に理解しやすいよう、疾患の特徴、予防法について解説し、現地で生活する上での気を付けたいポイントや持ち物などについて知識をもってもらうことを目的に一般向け雑誌に寄稿した。
4. タンザニアの産科医療の現状と課題	単独	平成25年3月	愛知国際看護研究会	国連ミレニアム開発目標の1つである、妊産婦死亡率の改善をめざし、イタリアのNGOと共同で平成24年にタンザニア、イリンガ州で実施した世帯調査をもとに、この州の抱える産科医療現状と問題点について研究会で発表した。この地区では、1回目の産前ケアに参加する妊婦の割合が他のサハラ以南の国々と比較し非常に高いにもかかわらず、全4回すべてに参加する妊婦の数は激減する。これは、医療機関と自宅の距離、及び世帯収入との関連が見られた。医療機関での分娩が8割をこえているにも関わらず、妊産婦死亡率が他の地域と差がないのは、医療従事者特に看護師及び助産師の質に問題があるのではないかと考えられる。国の方針で不足する人材を短期間で養成する教育にシフトしたことが、未熟な医療従事者を送り出している現状がある。また、マラリアも大きな問題であるが、世帯の人数が多くなるほど、乳幼児が蚊帳を使用している率が下がる現象が見られた。このことから、物質的な援助もまだまだ必要であることがわかった。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏　名　　井上　眞理子

研究分野	研究内容のキーワード
社会学(Sociology)	子ども虐待，child abuse，心神喪失者等医療観察法，人工授精・体外受精，artifificial insemination，in vitro fertilization，企業犯罪とその統制，corporate crime and regulation of it

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）臨床社会学的観点から、理論の応用・実践の現場を学生が知る機会を設けている。	平成17年4月～現在	＊京都家庭裁判所の見学と家庭裁判所調査官の講演（毎年実施している）。　＊京都府子ども家庭総合センターの見学。　＊少年院法務教官や障害児教育専門家等を招き、講演会の実施。
2　作成した教科書，教材		
1）『社会学への誘い』仏教大学通信教育部（満田久義・青木康容編）	平成11年4月	担当部分「人はなぜ逸脱をするのか」pp.55－56
2）『ジェンダーと社会―2000年度FD研究報告書』京都女子大学現代社会学部	平成13年3月	担当部分「生物学的性差と社会的性差＜ジェンダー＞」pp.4-16
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）前任校である京都女子大学における「学生による授業評価」の結果は良好であった。また非常勤校における「学生による授業評価」の結果は良好であった。	平成17年～現在	一例をあげると平成24年度後期現代社会学部専門科目「臨床社会学」において、「全体としてこの授業に満足できた」という設問に対して学生の評価の平均は4.5であり、これに対して大学平均は4.2であった。また「教員の授業に対する熱意を感じた」では4.6であり、大学平均は4.3であった。非常勤では平成25年度後期大谷大学文学部・大学院対象科目「現代家族論」において総合評価4.6であったが、これに対して全授業平均総合評価は4.2であった。」
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
特記事項なし		
5　その他		
特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
修士（文学）	昭和48年3月	京都大学　文修第１２８０号
博士（文学）	平成17年3月	京都大学 論文博第４８３号 論文題目：「ファミリー・バイオレンスの臨床社会学的アプローチ：子ども虐待問題を具体的論題として」

2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
京都家庭裁判所家事調停委員	平成14年4月 ～現在	平成14年4月より現在に至るまで京都家庭裁判所家事調停委員を務め、様々な家事事件（夫婦関係調整・離婚・離婚に伴う親権者の指定・養子縁組・遺産相続等）の調停を行った。社会学的な理論・概念を活用して多くの家事事件を成功裡に調停して当事者から感謝されている。
日本犯罪社会学会理事	平成１７年11月～ 平成20年10月	研究委員会委員として学会運営に携わった。
日本社会学会機関誌専門委員	平成18年11月～ 平成21年	日本社会学会機関誌『社会学評論』への投稿論文の審査を行った。
関西社会学会理事	平成19年5月～平成25年	研究委員会委員として学会運営に携わった。
日本学術振興会特別研究員等審査委会専門委員および国際事業委員会書面審査委員	平成20年8月～平成25年	日本学術振興会特別研究員PD(社会科学）の審査を行った。
日本社会病理学会理事	平成25年10月～ 現在	研究委員会委員として学会運営に携わった。
兵庫県地域安全まちづくり審議会委員	平成18年4月～平成26年	地域社会の安全と防犯に関する審議を行った。
京都府防犯カメラ管理運用指針策定委員会委員	平成18年6月～平成19年3月	防犯カメラの運用と管理に関してガイドラインの策定を行った。
羽曳野市男女共同参画推進審議会会長	平成25年4月～現在	羽曳野市男女共同参画推進条例および諸政策の策定を行った
4　その他		
特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
１、現代生殖医療－社会科学からのアプローチ－	共著	平成17年4月	世界思想社	生殖補助医療技術の進歩によって発生した「生殖の家族からの分離」現象を取り上げ、社会的・法的対応について論じた。 担当部分pp. 78-99「生殖の家族からの分離」。上杉富之編。共同執筆者：上杉富之、出口顕他９名。
２、ファミリー・バイオレンス―子ども虐待発生のメカニズム―	単著	平成17年5月	晃洋書房	子ども虐待の発生のメカニズムおよび有効な対応・防止について論じた。2005年3月に京都大学に提出した博士論文を刊行したものである。A5版、総頁数202.
３．学問の小径	共著	平成18年5月	世界思想社	臨床社会学の方法論における問題点とその改善について論じた。担当部分pp. 123-137「臨床社会学について考える」。大橋良介、高橋三郎、高橋由典編。共同執筆者：阿部哲三、井上俊他20名
４．医療化のポリティクス－近代医療の地平を問う	共著	平成18年9月	学文社	2003年に成立した「心神喪失者等医療観察法」を保安処分との関連で論じた。担当部分pp. 97-112「制裁としての医療―心神喪失者等医療観察法と保安処分」。森田洋司・進藤雄三編、共同執筆者：市野川容孝、斉藤環他16名。

５．子ども虐待への臨床社会学的介入	単著	平成19年5月	平成16年度～17年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書	全国の都道府県における、地域社会に基盤をおいた子ども虐待への対応・防止の取組みに対してアンケート調査を実施し、その結果を分析したものである。A4版、総頁数44.
６．リスク・ファミリー－家事調停の現場から見た現代家族－	単著	平成19年7月	晃洋書房	家庭裁判所家事調停委員としての経験に基き、現代家族の諸問題と家庭裁判所、家事調停のあり方について論じた。四六版、総頁数188.
７．子ども虐待への対応における家族介入的方法の有効性と問題点	単著	平成21年3月	平成18年度～19年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書	全国の児童養護施設のうちから系統抽出法で抽出した100施設に対して行った質問紙調査「虐待を受けた子どもと児童養護施設」の結果を分析し、家族介入的方法の有効性と問題点を論じた。A4判、40頁。
８．家族社会学を学ぶ人のために	共著	平成22年2月	世界思想社	変化し多様化する家族を「病理的形態」ではなく、問題解決に取組む「開かれたシステム」と位置づけ分析した。総頁数３０８．担当部分pp.1-27「1、はじめに―家族は～であるなんてきめつけられない―」、pp.176-201「ファミリー・バイオレンス」。井上眞理子編、共同執筆者・西川祐子、岩井八郎他9名。
９．社会学事典（日本社会学会社会学事典刊行委員会編）	共著	平成22年6月	丸善株式会社	「ファミリー・バイオレンス」について解説した。担当頁pp.680-681
１０．家庭内暴力発生のダイナミックスと有効な対応：平成20～平成22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書	単著	平成23年5月	京都女子大学	全国の都道府県警少年課及び少年による家庭内暴力問題に取り組んでいる65の民間団体に対して「少年による家庭内暴力」についての質問紙調査を実施し、調査結果に基づいて家庭内暴力発生のダイナミックスと有効な対応について検討した。
１１．命題コレクション社会学（文庫版）	共著	平成23年12月	筑摩書房	本書は社会学を代表する50の命題についてその面白さを解説したものである。井上はそのうち「文化としての性差（M.ミード）」と「アイデンティティとモラトリアム（E.H.エリクソン）」について説明を行った。
１２.家族社会学を学ぶ人のために（第2刷）	共編著	平成25年4月	世界思想社	第1刷の内容に修正・加筆した。
１３．社会調査事典	共著	平成26年1月	丸善出版	「家族病理」について解説した。担当pp.410-411
１４.共生社会を考える：奈良産業大学公開シンポジウム2013	共著	平成26年3月	奈良産業大学	「現代家族の脆弱さと共生社会」について問題提起を行い、またパネルディスカッションに参加した。
１５．地域社会を基盤とする子ども虐待防止：行政の政策と民間の活動	単著	平成26年6月	平成23～25年度科学研究費補助金（基盤研究C)研究成果報告書	全国の都道府県に対し「児童虐待への政策的対応についての調査」を実施し質問紙を送付した。また秋田県、岐阜県、山梨県に対してインタビュー調査を実施しこれらの調査結果を分析した。
共生社会を生きる	共著	平成27年1月	晃洋書房	現代日本の家族の脆弱さをさまざまな指標によって把握し、その上で「日本型福祉」の空洞化を踏まえ、新しい福祉の在り方と共生社会について考察した。総頁数２００．担当部分pp.29-34「問題提起Ｉ」、pp.66-10「現代日本の家族の脆弱さと共生社会」。橘木俊詔編、共同執筆者・武谷嘉之、福留和彦、古田雅雄

（学術論文）				
１．愛と暴力の迷路として家族	単著	平成18年1月	『分陀利華』第280号（京都女子大学宗教部）	子ども虐待への家族介入的対応の必要性と問題点を論じた。
２．子ども虐待と人権	単著	平成18年2月	『広報みき』第686号（兵庫県三木市）	子どもの権利条約によりつつ「子どもの人権」の侵害という観点から子ども虐待について論じた。
３．書評に応えて－『ファミリー・バイオレンス－子ども虐待発生のメカニズム』	単著	平成18年10月	『犯罪社会学研究』第31号	拙著『ファミリー・バイオレンス』への書評に対して応えたものであり，拙著における理論的立場と主張をさらに明確にしたものである。Pp. 164-165.
４．書評に応えて－『ファミリー・バイオレンス－子ども虐待発生のメカニズム』	単著	平成19年2月	『ソシオロジ』第51巻3号	拙著『ファミリー・バイオレンス』への書評に対して応えたものであり、拙著における理論的立場と主張をさらに明確にしたものである。Pp. 173-177.
５．現代日本の家族と人権－家事調停の現場から－	単著	平成20年1月	『広報みき』第732号（兵庫県三木市）	家事調停委員としての経験から、現代日本の家族における女性と子どもの人権について論じた。
６．書評に応えて『リスク・ファミリー－家事調停の現場から見た現代家族』	単著	平成20年5月	『ソシオロジ』第53巻第1号	拙著『リスク・ファミリー』への書評に対して応えたものであり、拙著における理論的立場と主張をさらに明確にした。Pp. 171-175
７．子ども虐待発生のメカニズム	単著	平成20年8月	『第29回堺女性大学講座』　（堺市教育委員会）	子ども虐待発生を説明するさまざまな理論的アプローチについて紹介した。
８．少年非行と「広汎性発達障害」	単著	平成21年1月	『日本犯罪社会学会第35回大会報告要旨集』	「広汎性発達障害」の概念を明らかにした後、広汎性発達障害と犯罪・非行に関する文献レビューを行い、それらを踏まえて近年の少年事件を分析した。pp. 34-36
９．現代日本の少年非行	単著	平成21年3月	『隣保館だより』第333号（兵庫県三木市）	データに基づきながら少年非行が「激増」も「凶悪化」もしていないことを論じた。
１０．子ども虐待に対して地域社会は何ができるか？	単著	平成21年8月	『第30回堺女性大学講座』　（堺市教育委員会）	子ども虐待や虐待致死の多発という現状に対して、学校、市民、民生委員等が子ども虐待の早期発見と予防について果たす役割について論じた。
１１．シンポジウムへのコメント	単著	平成22年12月	『家族療法研究』27巻3号	「リスク」概念を用いて現代家族論を論じた。6頁pp. 265-270
１２．家族と暴力：ファミリー・バイオレンスの発生とそれへの対応	単著	平成23年6月	『フォーラム現代社会学』第10号（関西社会学会）	ファミリー・バイオレンス発生を説明する理論とファミリー・バイオレンス対応との照応を論じた。
１３、地域社会を基盤とする子ども虐待防止：行政の政策と民間の活動	単著	平成26年5月	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））実績報告書	秋田県、岐阜県、山梨県に対して児童虐待防止政策の詳細についてインタビュー調査を実施し、調査結果をまとめた。
１４．ファミリー・バイオレンスの臨床社会学	単著	平成26年3月	『奈良学園大学紀要』第２集	社会学の中でも新しい領域である「臨床社会学」の立場からファミリー・バイオレンスについて考察した。Pp. 11-25
１５、閉ざされた扉の陰で	単著	平成26年3月	Becoming　第３４号	京都家庭裁判所家事調停委員としての自らの経験を交えながらファミリー・バイオレンスと家族システムとの関連について考察した。Pp. 67-97
（その他）				
「口頭発表」　１、「“家族神話”とファミリー・バイオレンス」	ー	平成19年5月	第6回日本フェミニストカウンセリング学会全国大会	子ども虐待の問題を加害者のパーソナリティやトラウマに還元せず、家族機能・法・制度等社会学的観点から考察した。
２、「家族と暴力：ファミリー・バイオレンスの発生とそれへの対応」	ー	平成22年5月	関西社会学会第61回大会	ファミリー・バイオレンスの説明理論の変遷と子ども虐待への現実の対応の変遷とが対応していることについて検討した。

３.「シンポジウム＜リスク・ファミリーの臨床＞へのコメント」	ー	平成22年6月	日本家族研究・家族療法学会第27回大会	「リスク」概念と関連づけてひきこもり・家庭内暴力等の現代の家族問題を考察した。
４、「ファミリー・バイオレンス：適応失敗的暴力か、規範同調的暴力か」	ー	平成23年10月	日本社会病理学会第27回大会	ファミリー・バイオレンスを家族システム論に代表される「適応失敗的暴力」と入れ子型エコロジカル理論に代表される「規範同調的暴力」に区別して検討した。
５.「現代日本の家族の脆弱さと共生社会」	ー	平成25年11月	奈良産業大学公開シンポジウム2013	家族は「福祉の制度」のひとつと考えられてきたが、現代日本の家族の脆弱化を踏まえ。家族福祉と共生社会について論じた。
６、子ども虐待について考える	ー	平成26年5月	王寺町りーべるカレッジ第２回	子ども虐待の現状、説明理論、子ども虐待への対応について講演を行った。
「新聞記事」 1. 60歳の憲法と私	ー	平成19年7月	『朝日新聞』2007年7月16日朝刊	憲法24条「改正」の動きについて論じた。
「シンポジウム司会・コーディネーター」１、.「社会病理・社会問題」	ー	平成17年5月	関西社会学会第56回大会	「社会病理・社会問題」部会で司会を務め、報告に基づく討論を深めた。
２、「性・ジェンダー」	ー	平成18年10月	第79回日本社会学会大会	「性・ジェンダー」の部会で司会を務め、報告に基づいて議論を深めた。
３、「格差社会と犯罪研究」	ー	平成18年10月	第33回日本犯罪社会学会	シンポジウム「格差社会と犯罪研究」のコーディネーター・司会を務め、報告に基づいて議論を深めた。
４、「環境メディアの誕生と社会」	ー	平成20年5月	関西社会学会第59回大会	シンポジウムのコーディネーターと司会を共同で務めた。
５、「少年非行と『広汎性発達障害』」	ー	平成20年10月	日本犯罪社会学会第35回大会	シンポジウムの「少年非行と『広汎性発達障害』」のコーディネーターと司会を務めた。
６、「秘密と監視」	ー	平成26年10月	日本社会病理学会第３０回大会	シンポジウム「秘密と監視」のコーディネーターと司会を務めた。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　岩見　昭三

研究分野	研究内容のキーワード
EUの金融・証券市場	EU,ユーロ、ソブリン危機、国際通貨

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
サブノート形式の講義プリントの作成・改訂	平成9年4月1日～	学生にキーワードを記入させるサブノートプリントを作成し、学習効果を高める。
ミニテストの実施	平成19年4月1日～	毎回、授業の最初にミニテスト問題を公表し、授業の焦点を明らかにする。授業の最後にミニテストを実施し、理解度を確認し、次回の授業時に解答例を示す。
2　作成した教科書，教材		
国際金融論、国際通貨システム論（関西大学非常勤）の講義プリント	平成25年4月1日～	テキスト『現代国際金論』（上川孝夫、藤田誠一編、有斐閣）の内容に基づき、重要事項を空欄にしたサブノートプリントを作成。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
１．『図説　ヨーロッパの証券市場　２００９年版』	共	平成20年12月	日本証券経済研究所	第４章の「公社債市場」を執筆し、ユーロ圏全体と主要国の公社債市場を概観し、問題点を析出
２．『図説　ヨーロッパの証券市場　２０１２年版』	共	平成24年2月	日本証券経済研究所	第９章の「公社債市場」を執筆し、とくに、現在のソブリン危機を中心に、原因を明らかにするとともに、今後の焦点を展望
（学術論文）				
１．EUのソブリン危機―国債利回りスプレッドの拡大要因を中心として―	単	平成24年2月	龍谷大学経済学論集（松岡利通教授追悼号）第５１巻第４号	ソブリン危機国の２００９～１０年の国債利回りの急上昇の原因を、ブンデスバンクの見解を手掛かりに分析。その結果、債務残高が一定程度高く、単年度の財政赤字が悪化している国の国債利回りが急上昇していることが判明し、たんなる投機要因によるものでないことを強調した。
２.ユーロ圏諸国の不均衡発展ードイツブンデスバンクの見解をめぐってー	単	平成24年12月	社会科学雑誌（奈良産業大学社会科学学会）第５巻	ユーロ発足以降拡大してきたユーロ圏内諸国間の不均衡発展の原因については、ブンデスバンクに代表される赤字国責任論と、それに批判的な黒字国責任論が対立している。データ分析の結果、赤字国の過大需要が主因であることが確認されたが、その過大需要をもたらした原因としてユーロ圏内先進国による資本投資のあり方が大きく影響していることが分かった。問題はユーロ圏内資本投資と各国の経済発展との連携の強化である。
３.EUの「金融危機」と銀行貸出行動⑴―ECBの統計（BLS)による分析―	単	平成26年6月	社会科学雑誌（奈良学園大学社会科学学会）第10巻	2009年秋のギリシャの財政赤字統計虚偽申告に端を発したEUの「金融危機」が銀行の貸出行動にどのように影響したかを、ECBの統計（BANK LENDING SURVEY)に依拠して分析した。その結果、ドイツ・フランス・スペイン・アイルランドにおいては明確な貸出抑制行動が確認できないこと、リーマン・ショックと今回のソブリン危機との連続性には再検討を要すること、確認されている貸出抑制の場合でも、その原因は、銀行側の財務状況よりも、銀行による「全般的経済見通しの悪化」にあること、などが明らかになった。
４.EUの「金融危機」と銀行貸出行動⑵ー企業向け貸出規準と貸出残高動向ー	単	平成26年12月	社会科学雑誌（奈良学園大学社会科学学会）第11巻	⑴の論文において依拠した統計は、銀行側へのアンケートにもとづいており、貸出規準についての銀行側の回答が実際の貸出残高にどのように反映しているか、という問題を残していた。この反省に立って、本論文では貸出残高動向と、それを規定した原因を分析した。その結果、ソブリン危機直後は銀行の貸出規準厳格化の下でも貸出残高が増加していたこと、2012年後半以降の主要国の貸出残高の減少は、企業側の借入需要の減少が主原因であることが明らかになった。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　宇津木　成介

研究分野	研究内容のキーワード
心理学	実験心理学、感情心理学、認知心理学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・コミュニケーション・ペーパーの配布	平成20年頃から	授業において「コミュニケーション・ペーパー」を配布し、質問、読書や他の授業等で得ている知識の提示を求める。翌週以降、そこに書かれた質問等に対する回答を配布し、学生の授業内容理解を援助している。これによって学生は、質問に対する答えを知るだけでなく、他の学生がどのような疑問をもっているかについて知ることができる。
・映像教材の積極的使用	平成20年頃から	著名な心理学実験に関する当時の映像記録の提示。例として、代理母実験において、F.H.ハーロゥがインタビューに答えて愛とはなにかを説明している画像。あるいはP.エクマンが作成したアクションユニットのデモ画像。また社会的参照に関するカンポスが行っている説明、マシュマロテストのデモ画像、攻撃行動の模倣に関するバンデューラのデモ画像など、著作権に配慮しながら提示している。本務校における「非言語コミュニケーション論」の授業においては、ほとんどの学生は初見であり、上記のコミュニケーション・ペーパーによるフィードバックによって、学生が授業のテーマに興味を持つことがわかる。
・基礎演習授業における実物教育	平成18年頃から	本務校は文系の学部であるため、学生は「計る、測る」ということに対して体験を持たない者が少なくない。そこで基礎の演習授業では履修者全員に電気回路計とストップウォッチを渡し、「何でもよいからはかって報告書を書いて来るように」指示している。正面階段を運動靴で上るときとハイヒールで上るときの所要時間を比べた学生、携帯電話を使用する乗客の数を朝と夕方で比較した学生など、「自分の手で数えたり測ったりすること」に対して動機づけが可能であると考える。
・演習授業における統計学の宿題	平成20年頃から	演習では心理学の領域で卒業論文を書く準備という目標を立てているが、心理学で使用する統計学の教育には時間が足りない。そこでｔ検定、χ２乗検定、ピアソン相関程度まで、配付資料とエクセルによる計算を義務づけて、レポートを提出させている。大学院に進学した学生からは、学部の演習で配布された資料を頼りに統計処理をしているというフィードバックをもらったことがある。統計学教育の充実に効果があると考えている。
2　作成した教科書，教材		
・パワーポイント教材の作成	平成18年頃から	授業はパワーポイントと映像、音声資料を併用して行っている。１回90分の授業に対し、平均60枚のスライドを準備するとともに、著作権のある画像を削除した24枚から48枚のスライドを印刷物として毎回配布している。
・心理学教科書の執筆	平成18年４月 平成21年４月 平成23年11月 平成24年４月 平成26年４月	授業の資料を生かすかたちで、心理学の概論書、入門書において感情心理学やコミュニケーションに関する章を執筆し、本務校に限られない初年時教育、教養教育に貢献している。

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
ポジティブ心理学	共著	平成18年4月	ナカニシヤ出版	本書は近年になって注目を浴びるようになってきたポジティブ心理学について書かれた本邦で最初の著作である。 A5版　全278頁 編者：島井哲志。 分担執筆：青木多寿子、浅川希洋志、穴井千鶴、宇津木成介、大石繁宏、大竹恵子、長田久雄、木村登紀子、小玉正博、島井哲志、鈴木直人、M.E.P.セリグマン、園田直子、大坊郁夫、津田彰、C.ピーターソン、堀毛一也。 担当部分「第2部第7章　ポジティブ感情心理学と情動知能」（pp.99-113）を単著 　まず幸福感においては、大きな利益を得ることより、大きな損失を回避することが重要であるという行動経済学の考え方に触れ、ついで感情心理学の立場から快感情の維持が効率的な情報処理の遂行を援助すること、物質的豊かさと幸福感の関連について、GNPやPPP（購買力平価）を指標とすると、日本人の幸福感が世界の標準からは逸脱して低いことを述べたあとで、P.サロベイらに端を発する「情動知能」の概念を紹介し、情動知能の高さが適応的行動と関わっていることについて、医学部の学生と留学生の情動知能に関する研究を例にとって論じた。

心理学・臨床心理学入門ゼミナール	共著	平成18年4月	北大路書房	本書は心理学の初等教科書であり、一冊で基礎心理学と臨床心理学の領域をカバーすることを企図したものである。 （A5版全286頁） 編者：島井哲志・池見陽 分担執筆：浅野浩子、安住伸子、生野照子、池上知子、池見陽、石谷真一、井上和臣、宇津木成介、大竹恵子、川崎弥生、岸本陽一、黒木賢一、児島達美、齋藤文夫、坂本真佐哉、島井哲志、高地知子、武知優子、田島孝一、玉木健弘、冨永良喜、中里浩明、本多雅子、増田千景、松永理恵、松本剛、三浦欽也、水田一郎、三井知代、三宅麻希、森永康子、山口素子、山祐嗣。 担当部分「第8章　感情・情動」（pp.66-74）を単著。 感情と情動の心理学について、初等教科書レベルの解説を行った。特徴は、感情の過程をまず心の問題よりさきに行動としてとらえ、従って、コミュニケーション行動の一つとして説明した点である。その後に、感情の認知理論として評価過程について説明し、その後に感情体験について述べた。また進化論的見地から、感情反応が適応的である場合について述べた。章末において、ジェームズ・ランゲ説とキャノン・バード説について歴史的観点から説明を加えた。
基礎から学ぶ心理学・臨床心理学	共著	平成21年4月	北大路書房	本書は心理学の初等教科書である。 A5版　全268頁 編者：山祐嗣、山口素子、小林知博 分担執筆：山祐嗣、水田一郎、武知優子、松永理恵、堀下智子、小林知博、川崎弥生、三浦欽也、宇津木成介、岸本陽一、池上知子、水本誠一、森永康子、出口宏、小林哲郎、山口素子、國吉知子、杉原保史、石谷真一、生野照子、三井知代、高地知子、奥紀子、田島孝一、玉木健弘、井上和臣、池見陽、坂本真佐哉、大利一雄、安住伸子、本多雅子、齋藤文夫、黒木賢一。 担当部分「第8章　動機づけと情動」（pp.62-74）を単著。 本章においては、動機づけと情動について概要を説明した。まず生理的な動因について述べ、次いで誘因と快不快の判断について説明した。またマズローの欲求の階層構造を例にとり、二次的欲求と社会的欲求について解説した。動因や欲求が行動主体の内部における欠如と関わるのに対し、感情や情動は、外部における何らかの状況や存在がその行動主体に対して都合がよい状態であるかどうかによって、それに対処するために生じることを説明した。適切な対処に必要な生理的反応があること、反応の一部はコミュニケーションとして機能していることを述べた。

わかりやすさとコミュニケーションの心理学（朝倉実践心理学講座５）	共著	平成22年2月	朝倉書店	本書は、「わかりやすいコミュニケーションとはどのようなものか」をテーマに書かれたものである。 A5版　全177頁 編者：海保博之。 分担執筆：宇津木成介、岡本真一郎、海保博之、加藤隆、向後千春、嶋田英明、冨永敦子、深田博己、松見法男。 担当部分「第4章　非言語的コミュニケーションの心理学」（pp. 62-86）を単著。 まずコミュニケーションの基礎となるコード系について説明した。また、感度・選択度について説明した。次いで心理学の分野で伝統的に非言語コミュニケーションとして取り扱われてきた現象について、近年の動物学の知見から、コミュニケーション行動と知覚とを区別して考える立場について論じた。また、非言語コミュニケーションにおける「わかりやすさ」として、メッセージの宛先について論述した。最後に典型的な非言語コミュニケーションについて例示しながら説明した。
脳とこころの視点から探る心理学入門	共著	平成23年11月	培風館	本書は心理学の初等教科書であるが、脳神経系の知見を基礎に書かれている点が特徴的である。 A5版　全229頁 編者：松本絵理子 分担執筆：木村貴彦、伊丸岡俊秀、松本絵理子、内藤智之、十河宏行、森下正修、関口貴裕、林良子、辻本悟史、石松一真、大坪庸介、宇津木成介、米谷淳、山田真希子 担当部分「4-2 コミュニケーションの心理学」（pp. 159-171）を単著 通信工学的なコミュニケーションについて述べ、次いで生物学的立場から他個体の行動を制御するコミュニケーションについて、コード系を信号検出理論の立場から記述した。最後に社会において「わかりあう」コミュニケーションについて、言語コミュニケーション、非言語コミュニケーション、説得コミュニケーションについて記述した。またコミュニケーションによって成立する他者の利益について述べた。そこでは、分業、愛他行動について述べ、最後に模倣と共感について説明した。
心理学概論−基礎から臨床心理学まで−	共著	平成24年4月	ふくろう出版	本書は大学における心理学の概論授業での使用を念頭において、15回の授業で基礎から臨床心理学的な話題までをカバーするように編さんされたものである。A5版　全260頁 編者：宇津木成介、橋本由里。 共著者：宇津木成介、田中裕、橋本由里、飯塚一浩、川中淳子、飯塚雄一、飯塚由美、他4名（コラム記事執筆者）。 担当部分「第1章　心理学とは」（pp. 1-9）「第4章　学習」（pp. 42-61）「第6章　言語と思考」（pp. 82-100）「第7章　動機づけと感情」（pp. 101-120）いずれも単著。 筆者が執筆した各章のうち、「感情心理学」にかかわる第７章においては、まず動機づけについて概説し、生理学的動因、社会的欲求、マズローの欲求階層モデルに言及した。次いで感情現象について、歴史的観点からデカルトの感情理論に、生理的反応の観点からジェームズとキャノンに、認知心理学的観点からラザルスに、コミュニケーション論的観点からはエクマンに言及した。また臨床心理学的見地から感情の異常に言及し、教科書後半の臨床的な諸章への橋渡しを行った。

心理学概論-基礎から臨床心理学まで-（第二版）	共著	平成26年4月	ふくろう出版	平成24年4月に出版した教科書の第二版である。初版を使用した教員からのフィードバックと、2年間の間に生じた行政的変化を反映した。図版を増やし、説明を新しくするなどした。初版は260頁であったが、第二版は本文が10頁増えたほか、索引をつけたことで277頁となった。 A5版　全277頁 編者：宇津木成介、橋本由里。 共著者：宇津木成介、田中裕、橋本由里、飯塚一浩、川中淳子、飯塚雄一、飯塚由美、他4名（コラム記事執筆者）。 担当部分「第1章　心理学とは」（pp. 1-9）「第4章　学習」（pp. 45-65）「第6章　言語と思考」（pp. 86-105）「第7章　動機づけと感情」（pp. 106-125）いずれも単著。 筆者が執筆した各章のうち、特に第6章は図版を増やし、説明を詳しくして改善を行った。
（学術論文）				
ヒトの視線と矢印記号による視覚的注意喚起（査読付）	共著	平成17年12月	人間工学 41巻6号 pp. 337-344.	橋本由里・宇津木成介 第二著者の指導のもとに第一著者が実験と結果の整理を行い、両著者が共同で考察を加えたものである。本論文は、ヒトの視線刺激が自動的注意を喚起するというFriesen & Kingstoneの知見を検証するとともに、彼らが人為的な記号と見なした矢印についても、視線刺激と同等以上の注意喚起効果が見られることを示した。これらの効果は100msの短いSOA（Stimulus onset asynchrony）の下でも観察され,矢印視線も自動的な注意喚起効果を持つことが確かめられた。第一著者の博士論文の一部を構成する実験の雑誌掲載論文である。
顔線画の表情と視覚的注意の定位 -口の形状が視線による手掛かり一致効果に及ぼす影響-（査読付）	共著	平成18年3月	感情心理学研究　13巻1号 pp.13-21.	橋本由里・宇津木成介 第二著者の指導のもとに第一著者が実験と結果の整理を行い、両著者が共同で考察を加えたものである。本論文は、ヒトの視線方向が自動的に観察者の視覚的注意を引くという先行研究に基づいて、人物の表情（線画）を操作し、ポジティブ感情表現とネガティブ感情表現によって注意喚起の様態が変化するかどうかを調べた。表情が怒りである場合には特別な情報処理がなされるという別の先行研究結果にもかかわらず、怒り表情の効果は有意ではなかった。むしろポジティブ感情表現の場合に注意喚起の変化が見られた。第一著者の博士論文の一部を構成する実験の雑誌掲載論文である。
ジェームズの感情理論：教科書にあらわれるその根拠と論理	単著	平成19年2月	国際文化学研究 27号 pp.1-27.	多くの心理学の初等教科書の感情に関する章や節では、「ウィリアム・ジェームズは、それまでの常識に反して、悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだと主張した」と述べた後、「その後にキャノンらによって批判された」と書かれていることが少なくない。しかしジェームズの主張については、その根拠が示されていることは少ない。本論考はこの問題に関して内外の心理学の教科書の記述を比較するとともに、ジェームズの心身二元論の考え方について論じた。
ウェブ上における「ふるさと」の所在	単著	平成19年10月	近代 99号 pp.29-55.	本研究は、ウェブ上に書かれた情報において、「ふるさと」と年号をキーワードとした検索を行い、「ふるさと」概念と特に密接に関わる年号が存在するかどうかについて調べた。そのような年号は明治の初期とともに、市町村合併が盛んな時期に多く見られた。一般には検索時期に近づくにつれて検索された件数は等比級数的に増加したが、検索の時点を越えた年号と関わる「ふるさと」概念はほどんど見られなかった。「ふるさと」は過去と強く関わる概念であり、未来との関わりは乏しいことが結論された。

基本的情動の数について	単著	平成19年12月	国際文化学研究 29号 pp.73-91.	英語のemotionは我が国においては情動あるいは感情と訳されるが、少し前までは情緒と訳されていた。その内容は、喜怒哀楽という４つ、あるいは七情という７つのの代表的な情動によって示される。ここでは19世紀末から20世紀中葉までの心理学者が考えていた「基本的情動」について、その数を数え、比較することを試みた。ウィリアム・ジェームズはその複数の著書の中で「標準的な情動７つ」と「粗大な情動８つ」について述べているが、単語レベルで見ると共通するのは２つだけである。プルーチックは全ての情動を８つの基本的情動の加算によって説明しようとした。最少はワトソンが考えた３つ、最多はマクドゥーガルの18であった。
女子大生の就職活動における情動知能の役割（査読付）	共著	平成19年12月	経営行動科学 20巻3号 pp.317-324	島井哲志・大竹恵子・宇津木成介 著者らが開発した情動知能尺度（EQS)を用いて女子大学生104名の情動知能を測定し、その後の就職内定数との関連を調べた。内定を得た学生と内定を得なかった学生を比べると、はっきりとした得点の差がみられた（p<0.002)。さらに２社以上から内定を得た31名は１社かのみら内定を得た35名にくらべて情動知能が高い傾向にあり、このことから、大学における社会的技能、情動的技能の訓練が大学生の将来設計や自己実現に資する可能性が示唆された。第一著者と第二著者の企画により調査が行われた。第三著者は考察に関与した。
ウィリアム・ジェームズと反射	単著	平成20年7月	国際文化学研究 30号 pp.31-57.	本論文はウィリアム・ジェームズの「What is an emotion?（1884)」において示唆された「反射」概念について、論文発表当時の神経学の知識をもとに検討した。ジェームズは、「一つの心的状態が直接に他の心的状態を生み出すことはない」と述べているのであるが、その説明はなく、従って当時の人々はある程度まで、その主張を当然のことと考えていた可能性がある。ジェームズがこの論文を執筆したころには脳における機能の局在を示す資料が提出されていたが、ジェームズ自身は脳における機能局在を、少なくとも大脳のレベルでは信じていなかった。そしてジェームズは、情動の体験が生じるためには、反射的な身体の運動が必要であると考えていた。しかし多くの批判をうけたジェームズは、脳内の信号のみによって感情体験が生じる可能性を示唆している。本論文ではまた、ジェームズの考えと条件反射との関連についても言及した。
中国と日本の大学生における接触行動の発達的変化-主観的評定値に基づく比較-（査読付）	共著	平成20年9月	国際文化学 第19号 pp.17-28.	呉　映妍・宇津木成介 第二著者の指導のもとに第一著者が研究計画を立案し、両者が調査を行い、次いで第一著者が結果の整理を行い、両著者が共同で考察を加えたものである。中国の５カ所、日本の３カ所の大学において、接触行動の発達に関するアンケート調査を行った。両親に対する接触行動には国の間で大きな違いがあったが、それぞれの国の内部における違いは少なかった。一方、恋人に対する接触行動については、それぞれの国内において差が認められた。第一著者の博士論文の一部を構成する研究の雑誌掲載論文である。

行動科学におけるコミュニケーションの機能と定義について	単著	平成21年12月	国際文化学研究 33号 pp.11-37.	社会科学や行動科学においては、コミュニケーションの用語が必ずしも明確に定義されることなしに使用されている。本論文においては、社会科学の分野においてはハーバーマスの著書を参考にしつつ、行動科学においては生物学の分野で用いられているコミュニケーションの定義、すなわち、メッセージによって受け手の行動が送り手に利益をもたらす方向に変化する現象として捉えることが最も適切であると結論した。また、ウソによって利益が得られることから、ウソつき行動とコミュニケーションの関連について言及した。
ディビッド・ヒューム『人性論』第2分冊に関する読書ノート（その1）	単著	平成22年7月	近代 103号 pp.71-105.	ディビッド・ヒュームの人性論（A treatise of human nature）は今日的な目で眺めると、認知心理学について書かれた本のように見える。とりわけ第2分冊では、今日的に情動と呼ばれる心的現象を取り扱っているので、心理学の立場から読むことには意味があると考えられた。アダム・スミスが感情論を共感性から始めたのに対し、ヒュームは自尊心から話を始める。ヒュームは特定の刺激が自動的に、つまり反射や本能によって、特定の情動を生じさせると考えるものの、特定の事物が特定の情動を生じさせることはないと述べる。つまりｎ個の事物が特定の情動反応を引き起こすとすれば、それはｎ個の事物に共通な特性Xによるのであって、決してｎ個の反射が存在するわけではないという。ここでは第2編第1部第1節から第6節までの読書ノートを含めた。
模擬エレベーター内における音楽と同乗者の存在が女性搭乗者の不安に与える影響（査読付）	共著	平成22年9月	行動医学研究 16巻 1号 pp.1-11.	鈴木智草・宇津木成介 第二著者の指導のもとに第一著者が実験と結果の整理を行い、両著者が共同で考察を加えたものである。近年の都市の安全性の観点から、女子が見知らぬ人物と２名、もしくは単独でエレベーターに搭乗するという条件を設定し、模擬エレベーター内に流される音楽の効果について検討した。従属変数として、心拍を測定し、また状態不安を質問紙によって測定した。音楽によって心拍の増加が抑制される知見を得たほか、エレベーター内に閉じこめられるような事態においては、見知らぬ同乗者の存在が不安の源泉ではなく、逆に安心感をもたらすという知見が得られた。第一著者の博士論文の一部を構成する実験の雑誌掲載論文である。
ディビッド・ヒューム『人性論』第2分冊に関する読書ノート（その2）	単著	平成22年12月	近代 104号 pp. 47-80.	前掲のディビッド・ヒュームの人性論に関する読書ノートの続きである。ここでは第7節から第12節までの読書ノートを含めた。まずヒュームは、他者の自尊は不快であり、他者の自卑は快であると述べる。つまり一般的に自尊心は善であるということはなく、自分の自尊心だけが善であるということである。その後でヒュームは、「快不快には理由がない」と述べているが、これは認知心理学者であるザイオンスの主張を彷彿させる。さらにヒュームは「快の予想はそれ自体が快である」と述べているが、これは現代の神経経済学のテーマであると言ってよいであろう。なお第12節では、動物の感情について述べられている。「無神論者」であったヒュームが人と動物の間を区別していなかったことが明瞭に示されている。

コミュニケーションと擬態	単著	平成22年12月	国際文化学研究 35号 pp.127-155.	上掲25の「行動科学におけるコミュニケーションの機能と定義について」の中で「ウソ」によって発生する利益について触れた。ここでは、ウソつき行動の起源を動物に求めた。ダーウィンは「人の子どもはある程度成長するとウソをつくようになる」と述べている。動物がつく最もポピュラーなウソとして「擬態」をテーマに論考した。人の世界ではウソは、ウソをつく者とウソをつかれる者の二者関係であると考えられているが、動物の世界では真似をして利益を得る者、真似される者、真似によって損失を蒙る者の三者関係としてとらえられる。生態学においては、ベイツ型擬態、ミュラー型擬態、メルテンス的擬態が区別される。擬態をコミュニケーションとして捉えれば、そこにコード系を見て取ることができる。
From SNARC to SQUARC: Universal Mental Quantity Line?（査読付）	共著	平成24年6月	International Journal of Psychological Studies 4巻2号 pp.217-227.	アタナス・キルイヤコフスキ、宇津木成介 (Kirjakovski,A. & Utsuki,N.) 空間において量的に大きなものは向かって右側に配置され、小さいものは左側に配置される傾向がある。また、大きな数字（例えば９）を正面に提示すると実験参加者の注意は右側に向き、小さな数字を提示すると注意は左側に向く。このような傾向が脳内の数量の処理と関わっているという仮説について検討した。実験１は主観的等量の水コップのうち右に配置されたコップのほうが重いという知見であり、実験２ではグラスの中のワインが多い場合には視覚的注意が右に向かうという知見である。 実験１は第二著者の指導のもとに第一著者が実験を行った結果であり、第２著者の修士論文の主要部分をまとめたものである。また実験２については第二著者の助言のもとに第一著者が実施したものである。内容は認知心理学に属するものであるが、実験２は上掲17の視覚的注意の論文と同様に、Posnerのパラダイムを使用している。
看護学生の感情知能に関する縦断的研究（査読付）	共著	平成25年2月	ヒューマン・ケア研究 13巻2号 pp. 89-99.	宇津木成介、島井哲志、橋本由里、菅佐和子 看護師には共感性や相他心が求められていると考えられる。本研究においては、看護師を目指す看護学生の感情知能の変化について縦断的に調査を行った結果について報告した。調査参加者は４年制の看護学科に素属する76名の学生であり、４年間を通じて計３回の調査に協力した女子31名の結果について考察した。４年間の教育の中葉において愛他心や共感性がいったん低下する傾向が見られた。この傾向は、先行研究においても見られるものであり、また、実務についている看護師において、新人に比べて経験者のほうが愛他心が低下する傾向とも類似している。本研究はこれまで行われてきた横断的研究の結果をおおむね追認する結果となった。４名の共同研究であるが、論文の執筆は第一著者が行った。
人はなぜ集団をつくるのか、あるいはつくらねばならないのか	単著	平成26年3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報第4集 pp.109-123.	ヒトが社会集団をつくって生活する動物であることは論をまたないが、なぜ集団をつくるのかを説明する明確な理論はない。本論文においては、利他心、愛他心といわれる行動傾向が、自己の利益を増加させようとする傾向（利己心）のみよって説明できるかどうかを検討した。自己の利益を増加させようとする傾向によって、愛他的に見える行動が出現しうることはホッブスによって主張された。生物学、ゲーム理論においては、同様に個体の利益だけで愛他的行動の説明が行われる。一方、ロックやヒューム、あるいはスミスは、利己心とは別に、当初から他者に対して配慮する心の働きがあると述べられる。近年の脳機能研究においては、後者の立場を支持するように見える結果も得られている。

ジョセフ・ヘイヴンの『心理学』ー訳者西周と、少しだけヴェブレンについてー	単著	平成26年9月	奈良学園大学紀要第1集 pp.149-159	ジョセフ・ヘイヴンの「メンタル・フィロソフィー」（初版は1857年）は西周の手によって明治11年に「心理学」として出版された。なぜ西周がヘイヴンの大学生向け教科書を翻訳したのかは、一種の謎である。本論文ではヘイヴンの略伝について述べ、ヘイヴンがいわゆるJSミルとウィリアム・ハミルトンの論争に強い興味を示していたことを明らかにした。西周が興味をもったのは、心理学そのものではなく、そこにミルとハミルトンの論争が反映されていると考えたからであろう。本稿では、また、新古典派経済学者であるJ.B.クラークがこの教科書を使って制度経済学の創始者とされるヴェブレンを教えたというエピソードについても触れている。
感情の概念を巡ってー用語の歴史的検討の試みー	単著	平成27年1月	感情心理学研究 第22巻第2号　pp.75-82.	現代の心理学で感情や情動の語が充てられている心の活動に対して、英語ではemotionの語が充てられている。この心の活動は、少し以前にはpassionと呼ばれていた。本論文では、デカルト、スピノザ、ディヴィッド・ヒューム、アダム・スミス、ジョセフ・ヘイヴン、ウィリアム・ジェームズの代表的な著作について、感情や情動に当たる言葉が歴史的にどのように変遷してきたかについて述べた。方法として、著作のpdf版をつかい、そこに出現する単語を計数するという方法を使った。デカルトがpassionの語を充てた概念はヒュームやスミスにおいてもpassionが使われているが、ヘイヴンではpassionの代わりにemotionが多用される。この傾向はウィリアム・ジェームズにも受け継がれ、現代に至っている。つまり、emotionの語の使用は、かならずしもジェームズに始まる近代的心理学と軌を一にしているわけではないということである。
「翻訳」				
W.ジェームズ 「情動とは何か？」	単著	平成19年4月	近代　98号 pp.35-68	原書名：What is an emotion? (W. James, Mind 誌 1884) 本論文については昭和31年に今田恵による訳が出ているが、現在かんたんに利用できる状況ではないと判断し、新たな訳を公表することにした。また、今田訳にはジェームズが付録としてつけたシュトリンペルによるドイツ語論文の英語訳の部分が訳出されていないことも理由の一つである。Emotionを身体の反応として、feelingをその身体反応の感覚としてとらえるという、ジェームズの思想が端的に表れている論文である。ジェームズが情動を大脳皮質における反射の結果であると考えていたことが推察できる。（神戸大学付属図書館リポジトリから無償でダウンロード可能）
W.ジェームズ 情動の身体的基礎	単著	平成19年10月	近代　99号 pp.1-28.	原書名：The physical basis of emotion. (W. James, Mind 誌 1894)」 本論文はジェームズの1884年の論文に加えられた批判に応えて書かれたものである。ヴントの批判に対してはヴントの統覚論を批判している。また例えばウスター博士は、夕立が来て雨宿りのために走って逃げる人はなぜ恐怖を感じないのか、と問う。これに対するジェームズの回答はかなり哲学的であるが、フランスの精神医学者であるソイエ博士の無感情の患者の症例を長く引用して、末梢からの感覚的フィードバックが失われると情動欠如（inemotivity）が生じると反論している。

ウォルター・B・キャノン ジェームズ・ランゲの情動理論：その検証と代替理論	単著	平成20年7月	近代 100号　pp.43-70.	原書名：The James-Lange Theory of Emotions: A critial examination and analternative theory (W.B.Cannon, American Journal of Psychology誌 1927)」 　キャノンはもっぱら生理学の立場から、ジェームズ＝ランゲ説のうち、内臓要因について５つの点から批判を加えている。次いで、情動の中枢があるかないかという問題（ジェームズはそのような中枢の存在を仮定する必要はないと述べている）について、視床がその中枢であると述べている。もっとも簡明には、中脳レベルで中枢神経を切断しても、視床への刺激によってネコに情動反応が生じるという反例である。また、偽性球麻痺の症状と左右差に関する記述は、今日の視点から見ても非常に興味深い。
チャールズ・ダーウィン著『一人の子どもの伝記的素描』	単著	平成21年12月	近代 102号 pp.15-33.	原書名：A Biographical Sketch of an Infant (Darwin,C., 1877) 本論文はダーウィンの長男が生まれたあとにつけていた日記を37年後にMind誌に投稿したものである。まずダーウィンは新生児がかなり多様な反射的、本能的な活動を行うことについて述べている。また生後２週間で、驚がく反射としての瞬目が生じたと述べている。機嫌が悪いときに他者にものを投げつけるという動作については、性差があることを観察している。また、生後5ヶ月の時点で、「観念の連合」（学習）が生じたと述べている。
「辞典」				
感情と思考の科学辞典	共著	平成22年4月	朝倉書店	竹村・北村・住吉（編）（A5版全472頁） 担当部分：EQ：情動知能　pp. 208-209を単著 （辞典項目につき共著者名と概要を省略）
最新心理学辞典	共著	平成25年12月	平凡社	藤永保（監修）（B5版全870頁） 担当部分：「意志」 pp.9-pp.10 を単著 「感情研究の歴史」　pp.88-pp.89 を単著 （辞典項目につき共著者名と概要を省略）
（その他）				
「口頭・ポスター発表」				
エレベータ・ミュージックと個人空間	共著	平成17年5月	日本感情心理学会第13回大会（名古屋大学・名古屋市）	（ポスター発表）鈴木智草・宇津木成介 音楽の不安軽減効果について、エレベーターから自由に出ることができる条件と、一定時間は出ることができない条件で、不安の程度を測定した。音楽の効果は、自由に出ることができない場合には有意であったが、自由に出ることができる条件では有意ではなかった。
視線による注意喚起ー口と眉の形状が与える影響ー	共著	平成17年5月	日本感情心理学会第13回大会（名古屋大学・名古屋市）	（ポスター発表）橋本由里・宇津木成介 橋本・宇津木（2004）では顔表情が注意喚起に影響する結果が得られたが、不快感情表出の強度が弱い可能性が指摘された。そこで不快表情の強度を増して実験を行ったが、顔表情が視線による注意喚起効果に対する影響は認められなかった。快感情において、注意喚起の立ち上がりが早い傾向が認められた。
方向指示刺激による空間的注意喚起ー視線刺激との比較ー	共著	平成17年9月	日本心理学会第６９会大会（慶應義塾大学・東京）	（ポスター発表）橋本由里・宇津木成介 Friesen & Kingstone(1998)の実験をもとに、視線の線画以外に、顔写真、矢印、英文字（RL)、漢字（左右）、単眼などを用いて視覚的注意喚起効果を検討した。矢印でも注意喚起効果が得られること、英文字では効果がないこと、漢字では若干の効果がみとめられることがわかった。単眼は矢印と同様の強い注意喚起効果が認められた。

大学生の国内移動と異文化適応	共著	平成17年10月	第２１回日本精神衛生学会大会（秋田看護福祉大学・大館市）	（ポスター発表）宇津木成介・鈴木智草 カルチュア・ショックに関する質問紙の中国語版と韓国語版を作成した。それぞれ中国または韓国からの留学生の協力を得て作成した。日本語版において重要な項目であった「地元のテレビが見られない」は、韓国においては不適切項目となるなど、国際比較を行う場合の特殊性について報告した。
閉所空間における音楽の効果	共著	平成17年10月	第２１回日本精神衛生学会大会（秋田看護福祉大学・大館市）	（ポスター発表）鈴木智草・宇津木成介 エレベーター内における音楽の提供が同乗者に起因する不安感と心拍に影響して不安低減効果があることを報告した。心拍数（RR間隔）は音楽がない場合に5分間に4拍低下したが、音楽を提示した場合には6拍低下した。特性不安（STAI）の変化が有意であり、エレベーター内滞留時間の主観評価は音楽ありの場合に200秒であったのに対し、音楽なしでは300秒であった。本研究は第一著者の博士論文の一部を構成するものである。
動物の心的機能に関する大学生の認知（1）	共著	平成18年5月	日本感情心理学会第14回大会（広島修道大学・広島市）	（ポスター発表）橋本由里・鈴木智草・宇津木成介 動物にどれほどの心的能力があると人びとが考えているかという問題についてはRasmussen（1993）らの研究がある。ここではペット飼育経験の有無が心性評価に与える影響について検討した。ペット飼育経験の主効果はみられなかったが、ペット飼育経験と心的能力の交互作用が有意であった。ペット飼育経験者は感覚機能を高く評価する反面、量の保存など高次の心的機能は低く評価した。
動物の心的機能に関する大学生の認知（2）	共著	平成18年5月	日本感情心理学会第14回大会（広島修道大学・広島市）	（ポスター発表）鈴木智草・橋本由里・宇津木成介 上述の研究に加え、質問紙において調査対象動物としてイルカを加えた。またイルカの位置をサルの直後または魚の直前におくことによって、系列位置効果による心性評価の異同について検討を行った。イルカの評価はイヌ、ネコより低かった。イルカの位置が魚の直前にあると、魚の心的能力が高く評価された。
国内外の移動による異文化適応のプロセス	共著	平成18年11月	日本心理学会70回大会（九州大学・福岡市）	（ポスター発表）宇津木成介・坂本千代・島袋恒男 大学生活を新たに始める場合には自国内にあってもカルチュアショックに類似した事象が生じる。本研究では中国の５都市において大学生活への適応度に関する調査と情動知能検査（EQS）の項目を中国語にしたものとを実施した。武漢では、日本における結果と同様に、実家に戻るための時間や費用が大きいほど不適応感が有意に高かった（r=0.24）が、北京では逆に実家までの距離が近いほど不適応感が高かった（r=0.29）。
視線による注意喚起−口と眉の形状が与える影響(2)−	共著	平成18年11月	日本心理学会70回大会（九州大学・福岡市）	（ポスター発表）橋本由里・宇津木成介 Friesen & Kingstone(1998)の実験に口の形状を変えて表情の効果を加えて検討した橋本・宇津木（2006）に、さらに眉の形状を変えて検討を加えた。手がかり一致効果と表情の交互作用は見られなかったが、表情の主効果が有意であった。
非言語コミュニケーション技能とEQS得点	共著	平成19年5月	日本感情心理学会第15回大会（大阪学院大学・吹田市）	（ポスター発表）宇津木成介・橋本由里・鈴木智草・島井哲志・大竹恵子 情動知能検査（EQS）得点と、非言語コミュニケーションの技能との相関について調べた。エクマンの表情写真の正答率（エクマンの基準）と「愛他心」との間に有意な相関（r=.27）が見られた。状況対応得点とは無相関（r=0.06）であった。対人状況における「好ましくない行動」を行うものほどEQS得点が低いこと、同一サークル内で「居心地のよい人」と評価される者ほどEQS得点が高いことが認められた。

音楽を携帯する-その不安低減効果と安全性-	共著	平成19年9月	日本心理学会第71回大会（東洋大学・東京）	（ポスター発表）鈴木智草・宇津木成介 携帯型音楽再生装置（PMP）の所有頻度と使用目的、使用上の安全性について大学生を対象に調査を行った。PMPの使用によって快が得られると答えた群とそれ以外の群を比較したところ、快が得られると答えた群では音楽聴取目的が95%を占めたのに対し、他群では89%に止まった。これらの結果は第1著者の博士論文において記述された。
心的機能に関する大学生の認知-BAQとEQSとの関連-	共著	平成19年9月	日本心理学会第71回大会（東洋大学・東京）	（ポスター発表）橋本由里・宇津木成介 動物の心的機能に関する大学生の認知の仕方について検討した。攻撃性と情動知能をBAQとEQSによって検討した。対象となる動物（子どもを含む）に心性を認める者ほどBAQの言語攻撃傾向が有意に高かった。また、動物以外の無生物に心性を認める者ほどBAQの敵意が低かった。例外はトリであって、トリに心性を認めるものは敵意得点が高かった。EQSに関しては、状況対応得点が高いほど動物と無生物の区別が明瞭であった。対人対応得点が高いと植物に心性を認めていた。
身体接触行動の中日比較	共著	平成19年9月	日本心理学会第71回大会（東洋大学・東京）	（ポスター発表）呉映妍・宇津木成介 中国と日本において、接触行動の違いを比較した。中国人は日本人よりも接触行動が多いと想定して調査を行ったが、結果的に日中の差はごく小さく、接触が生じる場（公的場面と私的場面）や性別の要因が大きかった。
国内外の移動による異文化適応のプロセス（2）	共著	平成19年9月	日本心理学会第71回大会（東洋大学・東京）	（ポスター発表）宇津木成介・島袋恒男・橋本由里・鈴木智草・呉映妍 中国の５カ所（北京、南京、武漢、厦門、蘭州）と韓国の２カ所（釜山、蔚山）、日本の２カ所（那覇、神戸）において調査を行った。大学生活への一般的満足度（GSF)と個々の生活上の問題との相関を検討した。親しい友人の存在や教員とのよい人間関係はGFSと有意な正の相関があった。GFSとの相関係数を測定箇所間で比較したところ、釜山、那覇、神戸はよく似た傾向を示した（r=.76-.85）。中国国内では北京と蘭州は他の地域とは異なった傾向を示した(r=0.2)。韓国内の釜山と蔚山の類似度は低かった（r=0.35）。
強制選択法による新しい情動知能尺度の作成	共著	平成19年9月	日本心理学会第71回大会（東洋大学・東京）	（ポスター発表）島井哲志・宇津木成介・内山喜久雄 著者らが開発した情動知能検査（EQS）では個人の情動知能の水準を相対的に測定することを主目的にしている。ここでは特定の状況において自己対応的、対人対応的、状況対応的な３つの選択肢を準備し、いずれかを強制的に選択させることによって、個人内の情動知能のストラテジーの特徴を検出することを試みた。
文字による注意喚起-漢字と英文字の比較-	共著	平成20年9月	日本心理学会第72回大会（北海道大学・札幌市）	（ポスター発表）橋本由里・宇津木成介 顔視線が視覚的注意を引く現象について、文字を用いて検討した。SOAが200 msの時点で、顔視線刺激においては注意喚起効果が認められたが、文字刺激では注意喚起効果は認められなかった。
「ふるさと」までの距離」	共著	平成20年9月	日本心理学会第72回大会（北海道大学・札幌市）	（ポスター発表）宇津木成介・橋本由里 大学生に対して「ふるさと」を刺激語として連想する言葉を記述させた。245の反応語中、「海」を答えた者は皆無であった。自宅から山が見えていた学生は30名、海が見えていた学生は11名いた。それぞれ23名、8名は山や海までの距離は徒歩30分以内と回答していた。ふるさと概念と海とは乖離しているようであるが、一方、google検索においてふるさとと山または海を検索語とした場合、95万件、86万件と大きな違いは見られなかった。

対人コミュニケーションにおける視線の役割	共著	平成22年5月	日本感情心理学会第18回大会（広島大学・東広島市）	（ポスター発表）王翼・宇津木成介 等身大写真の顔面の抽象度を変化させ、また視線の向きを変化させた。実験参加者はこの写真の前額部に提示されている英数字を記憶する課題が与えられた。顔の抽象度が増すほど人物写真までの距離（対人距離）は短くなった。また視線に関して、左視線では記憶成績が低下する現象が観察された。
看護学生のEQS得点の傾向	共著	平成22年9月	日本心理学会第74回大会（大阪大学・豊中市）	（ポスター発表）橋本由里・宇津木成介 看護専門学校の学生35名の情動知能（EQS得点）を先行研究の結果と比較した。看護学生では共感性の得点が一般の大学生に比べて高いことが再確認された。
新奇視覚刺激に対する瞬目反応	共著	平成22年9月	日本心理学会第74回大会（大阪大学・豊中市）	（ポスター発表）宇津木成介・山崎明音 2枚の連続するスライドにおいて、両者が同じである場合と異なる場合の瞬目生起について計測した。同一の場合に比べて異なる場合には２枚目のスライドに対する瞬目が増加した。同一スライドの場合には、１枚目スライドに対して0.9秒後に生じる瞬目ピークは２枚目に対しては観察されなかった。異なったスライドの場合、２枚目に対して0.5秒後に瞬目のピークが生じた。
看護学生の情動知能（EQS）に関する縦断的研究(2)	共著	平成23年7月	ヒューマンケア心理学会大13回大会（大阪市立大学・大阪市）	（ポスター発表）島井哲志・宇津木成介・橋本由里・菅佐和子 国内の看護学生の情動知能（EQS)について、新入生から卒業までその変化を縦断的に追跡した。
看護学生の情動知能（EQS）に関する縦断的研究(3)	共著	平成23年7月	ヒューマンケア心理学会大13回大会（大阪市立大学・大阪市）	（ポスター発表）宇津木成介・島井哲志・橋本由里・菅佐和子 上記追跡結果を分析したところ、入学時よりも2年次において共感性等が低下する傾向が見られた。これらの結果については、学術論文によって公表した。
看護学生の情動知能-日米比較の試み-	共著	平成23年9月	日本心理学会第75回大会（日本大学・東京）	（ポスター発表）橋本由里・平井由佳・宇津木成介 情動知能検査（EQS)について質問項目を英語化したものを米国の看護学生等83名に対して実施した。その結果を日本の看護学生80名と比較した。他専攻の学生と比較して、日本の看護学生は共感性の得点が高いが、米国の看護学生は「自己決定」「目標追求」などにおいて他専攻学生より高かった。また得点は一般に米国の学生が高かったが、これには翻訳の問題、また年齢の要因がかかわっている。
Spatial Shifts of the Covert Attention Cued by Symbols of Nondigital Nature: Possible SQUARC Effect	共著	平成23年9月	日本心理学会第75回大会（日本大学・東京）	（ポスター発表） 宇津木成介・キルリヤコフスキ　アタナス（Narisuke Utsuki & Atanas Kirjakovski） 第2著者の博士論文における第1実験の結果について発表したものである。
矢印の色が注意喚起に及ぼす影響	共著	平成24年6月	日本人間工学会第53回大会（九州大学・福岡市）	（ポスター発表）橋本由里・宇津木成介 矢印はヒトの視覚的注意を矢の示す方向に強く引くが、矢印の色が注意喚起力と関連するかどうかについては調べられていない。本研究では赤、青、緑、黒の４色の矢印について、ポスナーのパラダイムを用いて注意喚起力を比較した。その結果、色の主効果が認められ、緑色は黒色に比べて注意喚起力（ゲイン）が低いことが分かった。しかし赤や青の色彩は黒にくらべて注意喚起力に有意な差はなかった。背景が白色であったことから、コントラストの効果の存在が推察された。

大学生のソーシャルネットワーキングサービスの利用とEQSの相関	共著	平成25年5月	日本感情心理学会第21回大会（東北大学川内キャンパス）（主催；東北大学）	（繁野茜、松本絵理子と共著） ソーシャル・ネットワークサービス（SNS)を行っている大学生を対象に、その感情知能についてEQSを用いて測定した。有効回答者は162名。EQS対人対応領域の得点が高い群では、他者の発言（メッセージの書き込み）に対するコメントが多かった。また、友人数が多かった。 メッセージの書き込み頻度とEQS得点との相関は有意ではなかった。このことは、SNSにおける発言それ自体は対人的行動ではなく、発言に対するコメントが対人行動であると考えられた。
Effects of different stimulus onset asynchronies on visual attention shifts	共著	平成25年8月	第37回ECVP（The 37th European Conference on Visual Perception）(Bremen, Germany)	（ポスター発表）Hashimoto,Y. & Utsuki, N. 顔線画、矢印、英文字、漢字による方向指示手がかりについて、空間的注意の自動性を検討した。SOA条件は、50msから1000msまでである。統計的に有意な量の反応時間ゲインが得られたのは顔線画と矢印であった。矢印のゲインに比較すると、顔線画のゲインはわずかであった。これらのゲインは、手がかり一致による反応の促進によるのではなく、手がかり不一致による反応の遅延によって生じていた。
心理学学術用語の初期の訳語について-明治期に試みられた英語からの翻訳語-	単著	平成25年9月	日本心理学会第77回大会（主催：北海道医療大学）	（ポスター発表）宇津木成介 明治初期に西周によって、ジョセフ・ヘイヴン（Joseph Haven）の手になる教科書（Mental Philosophy）が「心理学」として翻訳された。翻訳において用いられた語について、原語（英語）との対応を比較検討した。あわせて、西村茂樹による心理学用語の訳語についても言及した。
恣意の一貫性を確かめてみる	共著	平成26年9月	日本心理学会第78回大会（主催同志社大学）	（ポスター発表）宇津木成介・橋本由里 行動経済学者のアリエリーは、カーネマンらによって提唱されたアンカーの考え方を応用して、社会保障番号の下２桁に実験参加者の注意を向けさせることによって、その後のオークションにおける入札金額が社会保障番号と相関することを示した。本研究はアリエリーの実験を批判する意図で追試したものである。結果的にはありえリーの主張は裏付けられた。６品目の商品に対する支払意志額は多くの商品で、仮に割り当てられた出席番号と正の相関を示した。とくに出席番号を５つに分割して算出した５分位相関係数は、最大で0.86に達した。
中国語母語話者による舌打ち音に対する日本人大学生の評価	共著	平成26年9月	日本心理学会第78回大会（主催同志社大学）	（ポスター発表）野口智草・宇津木成介 中国語母語話者は会話中に舌打ち音を発することが少なくない。日本語の母語話者においては舌打ちはかなりネガティブな感情をもって受け止められる。本研究では、中国人留学生による複数の感情表現の音声を、中国語を知らない日本語母語話者の大学生に聴取させ、表出されている感情を評定させた。その結果、舌打ち音を伴う表現では感情表現の強さが増し、驚きの印象が怒りの印象に変わるなど、感じ取られる感情が変化することが示された。
（国際学会口頭・ポスター発表）				
Handling another culture: A step-by-step adaptation model.	共著	平成18年10月	2nd International Conference of the Asian Philosophical Association, (Busan National University Busan,Korea)	（口頭発表） Utsuki,N., Sakamoto,C., & Shimabukuro,T. 異文化適応のプロセスは、多文化のコアを了解することによって進展するのではなく、遭遇する一つ一つの問題に対処していくことで徐々に進むことを日中韓の大学生のデータをもとに論証。（口頭発表者）

Effects of Native Language on Visual Attention Shifts.	共著	平成21年8月	The 117th Annual Convention of the American Psychological Association (Toronto, Ontario, Canada)	（ポスター発表）Hashimoto,Y. & Utsuki,N. 視線や矢印のみならず、方向を示す文字として漢字の「右」「左」英文字の「R」「L]の提示後に、空間的注意が文字の意味する方向に向けられるかどうかを検討した。その結果、これらの文字提示によっても、多少の注意喚起効果があることが示された。ただしその量は矢印と比較するとわずかであった。
Emotional Intelligence of Japanese University Students and Employment Offers.	共著	平成21年8月	117th Annual Convention of the American Psychological Association (Toronto, Canada)	（ポスター発表）Tanaka,J. & Utsuki,N. 感情知能が大学生の就職と強く関連することを示した。大学生の感情知能をEQSによって測定し、その後の就職活動の経緯との関連を調べたところ、感情知能得点の高い学生ほど、知名度の高い企業から内定をもらう傾向があることが示された。
Effects of different stimulus onset asynchronies on visual attention shifts	共著	平成25年8月	第37回ECVP (The 37th European Conference on Visual Perception) (Bremen, Germany)	（ポスター発表）Hashimoto,Y. & Utsuki, N. 顔線画、矢印、英文字、漢字による方向指示手がかりについて、空間的注意の自動性を検討した。SOA条件は、50msから1000msまでである。統計的に有意な量の反応時間ゲインが得られたのは顔線画と矢印であった。矢印のゲインに比較すると、顔線画のゲインはわずかであった。これらのゲインは、手がかり一致による反応の促進によるのではなく、手がかり不一致による反応の遅延によって生じていた。
（シンポジウム）				
		平成21年11月	第14回神戸大学国際文化学研究科国際シンポジウム（南あわじ市）	シンポジウム「文化情報リテラシーで読み解く地域文化-南淡路における民族芸能の展開-」（パネリスト）
		平成24年5月	日本感情心理学会第20回大会（神戸大学・神戸市）	第20回大会記念シンポジウム「世界の人びとの感情」（学会大会委員長、企画者）
		平成24年11月	神戸大学設立110年記念・国際文化学部設立20周年記念シンポジウム（神戸大学統合研究拠点コンベンションホール・神戸市）	宇宙文化学の創造性　（ディスカッション・コメンテーター）
		平成25年5月	日本感情心理学会第21回大会（東北大学川内キャンパス）（主催；東北大学）	シンポジウム「感情概念の領域横断的検討：研究の歴史と方法の観点から」においてシンポジストをつとめた。「感情の概念を巡って（訳語の問題）」の題目で、感情にかかわる基本的な語の使われ方、その日本における訳語の問題について解説した。
		平成25年9月	日本心理学会第77回大会（主催：北海道医療大学）	「こころの健康・臨床、健康支援、発達障がい者支援に役立つまばたき研究」シンポジウムにおいて指定討論者をつとめた。シンポジストの発表についてコメントを加えた。
（セミナー）				
		平成26年3月	日本心理学会研究セミナー（主催：名古屋大学）	「ルール・道徳・感情」において指定討論者をつとめた。ルールを順守する行動について、心理学の立場からルール遵守が自動的に利益を生じることを述べ、他の発表者の発表にコメントを加えた。
（ワークショップ）				
		平成17年5月	日本感情心理学会第13回大会（名古屋大学・名古屋市）	心理学の国際化に向けて-国際学会発表，英文論文投稿，海外留学のススメ-（企画・司会・話題提供）
		平成18年11月	日本心理学会第70回大会（九州大学・福岡市）	視覚ー運動系反応の体系化　まばたきから頭部運動まで　（指定討論者）

		平成19年9月	日本心理学会第71回大会（東洋大学・東京）	ポジティブ心理学の最前線（4）（指定討論者）.
		平成20年9月	日本心理学会第72回大会（北海道大学・札幌）	笑いの心理学（指定討論者）
		平成21年8月	日本心理学会第73回大会（立命館大学・京都）	まばたきと笑いの進化心理学（指定討論者）
		平成21年8月	日本心理学会第73回大会（立命館大学・京都）	特殊環境下での心理と生理　（指定討論者）
		平成22年9月	日本心理学会第74回大会（大阪大学・豊中市）	瞬目研究のあらたな萌芽（指定討論者）

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　金田　充広

研究分野	研究内容のキーワード
商法、会社法、手形・小切手法	募集株式・新株予約権の発行、取締役、人的抗弁

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）判例を中心とする解説により、法律全体をわかりやすく講義する。法の仕組みとビジネス（法学入門）	平成24年4月～	初学者用のレジュメを作成し用いるとともに、法律を具体的に解釈し適用する場面は裁判であるから、判例を中心としたテキストを作成・併用している。１回に提供する分量が多くならないように、キーワードを中心に難解になりがちな法律の理解を促進する授業を実践している。
2　作成した教科書，教材		
1）商取引社会における犯罪『経済犯罪と法』	平成19年10月30日	ビジネス学部のオムニバス講義科目「現代社会トピックスⅡ（経済犯罪と法）」のテキスト３部構成のうち、「Ⅱ 商取引社会における犯罪」に関して、刑事・民事の両面にわたる法的視点から、その法的構造を学習できるように作成した。18頁-31頁
2）法の仕組みとビジネス『専門基礎科目』	平成24年3月31日	ビジネス学部１年次生対象の科目「専門基礎科目」の１つ「法の仕組みとビジネス」の教科書として、初学者が法律全般を学習できるように、判例とキーワードの解説を中心に作成し、教育方法の実践例で紹介したように活用している。67頁-119頁
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
1）出張講義	平成18年2月17日	福井県立武生東高等学校で会社法の簡単な講義を行った。
2）出張講義	平成18年11月7日	私立関西中央高等学校で法律の成立、公布、施行に関する手続きなどを簡単に講義した。
3）奈良産業大学公開講座講演	平成18年12月9日	奈良産業大学主催:『会社の事業統合と戦略の法的視点』というテーマにより、会社法施行後の会社法と事業統合に関する制度を解説した。
4）公開講座奈良駅前大学講演	平成22年12月14日	奈良産業大学主催:『企業戦略の諸問題--会社の事業統合と防衛戦略 --』というテーマにより、会社の組織再編と企業買収防衛対策を解説した。
5）公開講座奈良駅前大学講演	平成24年3月24日	奈良産業大学主催:『株式会社の法律』というテーマにより、会社法の全体像とともに企業買収に関して募集株式発行等に関する法規制を解説した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 法の仕組みとビジネス『専門基礎科目』（再掲）	共著	平成24年4月	奈良産業大学ビジネス学部	ビジネス学部１年次生の専門基礎科目のうち「法の仕組みとビジネス」用に作成した。テーマごとに主要な判例および関連のキーワードを中心に執筆した。事実の概要を読み、利害関係を理解させるとともに、法律の基本的な制度、解釈等をめりはりをつけて学習できるように工夫している。67頁-119頁
（学術論文）				
1. ニッポン放送新株予約権発行差止事件	単著	平成18年9月	奈良法学会雑誌 19巻1･2号183頁-212頁	ニッポン放送が企業買収防衛策としてする新株予約権発行の差止請求に関する抗告審決定を素材に、新株発行の差止めに関する主要目的ルールを確認するとともに、従来の裁判例における理論との整合性を検討した。また企業価値の観点から、企業買収防衛策として行われる新株予約権の発行が許容される基準を裁判所が明らかにしている点にその特徴を見出すことができることを明らかにした。
2. 手形抗弁　――二重無権の抗弁における固有の経済的利益――	単著	平成20年3月	奈良法学会雑誌20巻1･2号145頁-171頁	いわゆる二重無権の抗弁に関する判例を検討するとともに後者の抗弁との関連において理論的整合性を検討するものである。二重無権の場合に、判例理論が、手形所持人の権利主張が拒否される理由をどのように説明しているかを検討した。とくに権利濫用がある場合に手形法17条但書の趣旨に鑑み手形所持人の手形金請求を拒否できるとする説と手形所持人の法律状態が固有の経済的利益を有しないという説の相互関係を検討した。

3. 会社の定款所定の目的	単著	平成20年12月	社会科学雑誌1巻1頁-30頁	会社の目的に関する判例・学説を概観するとともに、（平成18年改正前）民法43条は会社の目的に関して類推適用できるか否かという問題につき、民法の条文からは適用そのものであるという考え方を否定する積極的理由は見あたらないのではないかという見解を示すとともに、会社の権利能力および行為能力の目的による制限につき検討するものである。
4. 手形法の沿革と人的抗弁の制限――昭和一三年商法改正前――	単著	平成21年9月	奈良法学会雑誌22巻1･2号77頁-111頁	ジュネーブ手形統一法条約による手形法制定に至る沿革を概観した。手形抗弁に関する規定は、すでにロエスレル氏草案および旧商法にも存在した。そこでは善意取得と人的抗弁に関する規定が現行手形法16条・17条のように分化せず、また昭和13年改正前商法の下で、判例が、抗弁の制限に関して民法472条の規定を参酌すべきとしており、また後者の抗弁が手形に関する規定の適用される事案であるとしていることなどを紹介する。
5. 手形行為に関する利益相反取引『民事特別法の諸問題第五巻(上巻)(関西法律特許事務所開設四十五周年記念論文集)』	共著	平成22年4月	第一法規出版	商事・倒産法の分野から、各執筆者のこれまでの実務経験、研究成果を論文としてまとめたものである。取締役の手形行為に関する利益相反取引につき判例、裁判例および学説を検討したものである。手形行為が利益相反取引にあたるか否か、また手形学説によりどのような理論展開になるかなどに着目し、分析・整理している。79頁-103頁
6. 著しく不公正な方法による募集株式の発行 ――クオンツ新株発行差止仮処分命令申立事件――	単著	平成23年11月	社会科学雑誌3巻111頁-132頁	裁判例における主要目的ルールの適用を概観することにより、会社支配権が争われている場合に、具体的状況の下でする新株発行に一応差止事由があるという推定の基礎となる事実関係が、どのようなものでるかについて検討した。不公正発行の推定が資金調達の必要性により覆滅される傾向があるという見方である。このことは新株発行の差止めを求める株主の立証上の負担を軽減する機能を有することを確認した。
7. 会社買収防衛策における新株予約権の活用	共著	平成24年11月	社会科学雑誌5巻27頁-52頁	平時導入型のライツプランの実際の活用事例を紹介しつつ、特に取締役会決議によりライツプランを導入する場合の問題点を検討している。事前の防衛策を取締役会決議で導入することかできるか否かにつき、ニレコ事件は示唆的である。事前の対抗策としての新株予約権の発行は、原則として株主総会の意思に基づいて行うべきとする。取締役会決議による導入により機動的な会社買収防衛策を構築できる理論的道筋があることを示唆するものである。
8. 代表取締役の権限	単著	平成24年11月	阪大法学62巻3・4号365頁-387頁	株式会社の代表取締役の権限に関して、会社法の規定する権限分配および会社の目的との関係を概観し、取締役会と代表取締役との権限関係に関する各説を検討した。さらに代表取締役の権限の法律上の制限に関して、募集株式の発行につき、これが代表取締役による会社の行為として取締役会決議を経ずになされた場合の効力につき検討した。

9. ニレコ事件における新株予約権発行	単著	平成25年3月	奈良法学会雑誌25巻1頁-33頁	事前の会社買収防衛策として、平時において取締役会決議により行われた新株予約権発行の差止めが争われた裁判例を研究した。平時の場合にも主要目的ルールが適用されると解される。このような新株予約権等の発行に際して、その募集事項を決定する場合には、株主総会によるのが差止めのリスクを回避することになる。また差止めが争われているときには、裁判所は株主共同の利益を尊重しその判断基準としなければならないことなどを明らかにした。
10. 悪意の抗弁（１）――手形法17条ただし書にいう「債務者ヲ害スルコトヲ知リテ」――	共著	平成25年12月	社会科学雑誌8巻91頁-113頁	手形は、転々流通することが予定されている証券であるから、流通保護の観点から抗弁の制限を考慮しなければならない。しかし悪意で手形を取得した者を保護する必要はないから、このような場合には人的抗弁は制限されず手形所持人に対抗することができる。手形法17条ただし書がこれを規定するが、ジュネーブ手形法統一会議における条文成立に至る議論等を紹介する。
11. 悪意の抗弁（２・完）――手形法17条ただし書にいう「債務者ヲ害スルコトヲ知リテ」――	単著	平成26年3月	社会科学雑誌9巻137頁-163頁	判例を素材に悪意の抗弁を成立させる抗弁存在に関する認識について分析検討した。手形法17条ただし書にいう「債務者ヲ害スルコトヲ知リテ」に関する通説は、同条ただし書の要件事実をいっそう明確にしたものであり、その解釈指針を示したものである。また了知説と理論的に矛盾するものではなく密接な関連があることを明らかにした。
12. コーポレート・ガバナンスと社外取締役	単著	平成26年9月	奈良学園大学紀要第1集25頁-35頁	取締役は株主が選任する。しかしすべての株主が、企業者的に会社経営に積極的に関与する意識を持ち、経営者の人選等に関心を持っているということはできない。また取締役の社外性ということをあまりに強調しすぎると、株主の意図と離れたところで会社経営が行われるおそれがある。このような視点を基礎として、2014 年の会社法改正の動向、特に社外取締役について概観した。
13. 取締役会制度と会社法改正―― 取締役会の監督機能について ―― 『会社法改正の潮流― 理論と実務―』	共著	平成26年10月	新日本法規出版	コーポレート・ガバナンスの最大の目的は、経営者である取締役が監督される側でもあるということを矛盾のないように組み立て、株主の利益に導くことであるといっても過言ではない。2014年の会社法改正では、ガバナンスの在り方などが見直された。こうした動向を取締役会の監督機能の観点から、会社法改正に至る制度の変遷やその間における議論を検討した。79頁-98頁
（その他）				
1）東京高決平成17年3月23日金融・商事判例1214号6頁	単独	平成18年5月	第303回関西商事法研究会	ニッポン放送新株予約権発行差止事件に関する判例を検討しこれを報告発表した。特に企業価値という視点につき有益な示唆を得ることができた。
2）手形抗弁の検討――後者の抗弁および二重無権の抗弁	単独	平成19年2月	第309回関西商事法研究会	手形抗弁につき後者の抗弁および二重無権の抗弁に関して、判例・学説を検討しこれを報告発表した。
3）株式会社の定款所定の目的――名古屋高金沢支平成18年1月11日判例時報1937号143頁	単独	平成20年5月	第321回関西商事法研究会	名古屋高金沢支平成18年1月11日判例時報1937号143頁を素材として、会社の定款所定の目的に関する判例の変遷および学説を検討しこれを報告発表した。

4）取締役会の承認を欠く利益相反取引と手形行為――大阪地判平成18年5月29日判例時報1965号155頁を素材として	単独	平成21年6月	第330回関西商事法研究会	大阪地判平成18年5月29日判例時報1965号155頁を素材として、取締役会の承認を欠く利益相反取引と手形行為に関する判例を検討しこれを報告発表した。
5）著しく不公正な方法による募集株式の発行――東京地決20年6月23日金融・商事判例1296号10頁	単独	平成22年5月	第339回関西商事法研究会	東京地決20年6月23日金融・商事判例1296号10頁を素材として、主要目的ルールにおける特段の事情につき興味のある示唆を得ることができた。
6）ブルドックソース対スティールパートナーズ事件	単独	平成24年3月	第357回関西商事法研究会	最判平成19年8月7日民集61巻5号2215頁を素材として、事後的な買収防衛策としての新株予約権の無償割当てに関する判例を検討しこれを報告発表した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　河合　和男

研究分野	研究内容のキーワード
経済学	国際経済学、経済史

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）プリントを利用した講義	昭和60年4月から現在まで	プリント作成形式は文章形式とレジュメ形式の中間に位置し、適宜、統計資料も挿入している。これは、学生が口述部分を十分にノートできない状況、ならびに講義内容をすべて板書することの時間的非効率に対する措置である。またプリントには適宜、空白部分を設け、その箇所を口述もしくは板書を通じて学生に筆記させているが、それは学生が講義に集中し、講義内容を正確に把握してもらうためである。
2）「授業アンケート」の活用	毎年	本学では毎年「授業アンケート」を実施し、学生に授業への要望を聞いている。その要望を受けて、毎回、講義のはじめに前回の講義の要点を復習したり、板書の仕方や話し方を改善したりするなどの工夫をしている。
3）公開授業への参加	毎年	本学では毎年、他の教員の授業を聴講するという公開授業週間を設けている。これを通じて他の教員の授業方法を学び、自分の授業方法の改善に生かしている。
2　作成した教科書，教材		
1）特記事項なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）特記事項なし		
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
4　その他		
1）特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 日本の朝鮮･台湾支配と植民地官僚	共著	平成21年3月	思文閣出版	本書は、近代日本の朝鮮･台湾支配を、現地におけるその担い手だった「植民地官僚」に着目して考察したものである。 A5判　全740頁 編者:松田利彦・やまだあつし 共著者:松田利彦・やまだあつし・通堂あゆみ・大浜郁子･長沢一恵・広瀬貞三･河合和男･福井譲･青野正明･三谷憲正･野口真広･水野直樹･永井和･李炯植･李昇燁・河原林直人・廣岡浄進 本人担当部分：「第二次水力調査と朝鮮総督府官僚の水力認識」(303～332頁)を単著。 本稿は、1930年代の朝鮮工業化政策の根幹に位置した電力開発問題について、工業用の原動力としての水力発電という認識が総督府官僚のなかで、いつ生まれたのかを追ったものである。まず4次にわたる総督府の水力調査についてその期間や調査範囲、調査結果を跡付け、そのうえで朝鮮の水力は乏しいという認識から貯水池式・流域変更方式の採用によって朝鮮の水力発電が有望視されるようになった大きな転換点が第2次水力調査(1922～29年）にあったこと、そしてこの認識の転換は局長・課長の事務系官僚ではなく技術系官僚によってもたらされたということを指摘した。
(学術論文)				
1.1990年代後半以降の日本の直接投資と東アジア	単著	平成24年11月	奈良産業大学社会科学学会『社会科学雑誌』第5巻、ｐ５３～ｐ８７	本稿は、東アジア域内分業の展開という観点から、1990年代後半～2000年代末の日本の東アジア向け直接投資と在東アジア日系企業の行動様式を考察したものである。まず、日本の直接投資残高の推移と業種別構成、ならびに在外日系企業の事業展開(現地法人数・従業者数、設備投資額、売上高、経常利益等の推移）から、日本の東アジア向け直接投資の特徴について考察した。次いで、在外日系企業(製造業）の販売先別売上高構成と調達先別仕入高構成といった行動様式が日本と東アジアとの貿易にどのような影響を及ぼしているのかという観点から、全製造業ならびに日本の二大投資業種である輸送機械と情報通信機械の2業種について検討した。
2. 中国における日系企業	単著	平成24年12月	奈良産業大学経済経営学会『産業と経済』第25巻第1号、ｐ１～ｐ３０	本稿は、主に中国と日本の統計資料に依拠して、中国対内直接投資に占める日本の位置や特徴、中国の工業生産や輸出に占める外資企業の比重、販売先別売上高構成の観点からみた中国国内企業と日系企業をはじめとする外資企業の特徴、とくに日系企業の販売先別売上高構成・調達先別仕入高構成が中国全体の貿易や日中間貿易に及ぼす影響などをマクロ的に検討することを通じて、中国の経済発展と外資企業、特に日系企業との関わりについて考察した。併せて、世界の日系企業と対比しての在中国日系企業の特徴等についても言及した。
3.東アジア域内貿易の展開と中国	単著	平成25年2月	奈良産業大学社会科学学会『社会科学雑誌』第７巻、ｐ１～ｐ４９	本稿では中国にとって東アジア域内貿易がもつ意義を考察するための準備作業として、中国と東アジア域内貿易との関わりを数量的に検討した。まず、ＥＵ・ＮＡＦＴＡと東アジアにおける域内貿易の比較検討、ならびに東アジア域内貿易の変化という観点からの中国と他の東アジア諸国・地域との比較検討を通じて、東アジア域内貿易全体の特徴や中国における東アジア貿易の特徴を探った。さらに中国の貿易構造に関して、ＨＳ2ケタ分類に基づいて中国全体の趨勢の分析、ならびに中国―米国・ＥＵ間貿易と中国―日本を含む東アジア地域間貿易との比較検討を行なった。最後に補論として、香港を中継港とする中国・第三国間貿易における統計上の乖離問題について考察した。
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　川本　正知

研究分野	研究内容のキーワード
西アジア史・中央アジア史	イスラム教、西アジアの国民国家、中央アジアの国民国家、遊牧民、オアシス都市

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）特記事項なし		
2　作成した教科書，教材		
1）特記事項なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）日本語教師資格	平成23年3月	専門学校にて、年間420時間の日本語教師養成講座を受けて日本語教師資格を取得。現在、留学生向けの日本語授業を担当。
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
4　その他		
1）特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
１．マウラーナー・シャイフとして知られる弟子編著『15世紀中央アジアの聖者伝 ホージャ・アフラールのマカーマート』（訳注）	単	平成17年12月27日発行	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所イスラム文化研究叢書第80集，xxiii＋155頁 ISBN4-87297-921-4	上記ペルシア語聖者伝校訂本をもとにした日本語訳注。特に、ホージャ・アフラールの政治的な活動に関して詳細な注を施した。上記博士論文の第Ⅱ章にあたる。解題として、ホージャ・アフラールの誕生、修業時代、資産、死について他の聖者伝からの引用によって述べ、当聖者伝の記述との比較を行った。
２.モンゴル帝国の軍隊と戦争	単	平成25年11月	山川出版社	13世紀に世界を変えたモンゴル帝国。大モンゴル・ウルスという集団とその定住民支配のあり方から遊牧民の築いた帝国の実像に迫る。
（学術論文）				
１.15世紀中央アジアの聖者伝『ホージャ・アフラールのマカーマート』の研究（博士論文）	単	平成17年7月学位取得	京都大学文学部	上記著作２冊を第Ⅰ章 「ペルシア語テキストの校訂」、第Ⅱ章 「日本語訳注」として一書とし、博士論文として提出した。
２.16世紀中央アジアのソユルガル下賜文書	単	平成18年3月	堀川徹編『中央アジアにおけるムスリム・コミュニティーの成立と編成に関する歴史学的研究　平成14～平成17年度科学研究費補助金（基盤研究（A）（1）課題番号14201037）研究成果報告書』, pp. 63-79.	旧ソ連のチェホビチによって出版されたホージャ・アフラールに関する文書集から、トルコ語で書かれた文書16を取り上げて、翻訳し解説を加えた。この文書は、いわゆるソユルガル下賜文書であり、同時期のイランのサファヴィー朝における同種の文書との比較を行うことにより、チェホビチの翻訳の誤りと分析の不十分さを指摘した。
３.ナクシュバンディー教団の修業法について（２） ---アブド・アッラフマーン・ジャーミー『ホージャガーンの修業法についての論考』より---(査読付)	単	平成20年9月	『西南アジア研究』69, pp. 1-32	アブド・アッラフマーン・ジャーミー『ホージャガーンの修業法についての論考』を翻訳し、それについてコメントを加え、その内容から再度ナクシュバンディー教団の修行法について論じた。
４.モンゴル帝国における戦争(査読付)	単	平成22年9月	『アジア・アフリカ言語文化研究』80号, pp. 113-51	モンゴル帝国の戦争の有り様を、その軍隊の形成と国家の形成が同じものであったという視点から､もう一度とらえ直した論文。また、モンゴル帝国における定住民支配も軍隊の形成と全く同じ過程を経て行われていたことを論証し､遊牧民の支配の一貫性を論証した。
５.バハー・ウッディーン・ナクシュバンドの生涯とチャガタイ・ハン国の終焉(査読付)	単	平成24年3月印刷中	『東洋史研究』70-4	バハー・ウッディーン・ナクシュバンドの伝記を紹介した後、彼のトルコ人の師であったハリール・アタという人物はハリール・スルタンと呼ばれる最後のチャガタイ・ハンであったことを、従来あまり使われることのなかったコイン研究を利用しての論証し､併せてなぜ最後のチャガタイ・ハンの在位年代がティムール朝の年代記では誤って伝えられていたのかを論証した。
６.中央アジアにおける聖者崇拝の実態	単	平成24年9月刊行予定	帯谷知可・北川誠一・相馬秀廣編集『朝倉世界地理講座　第５巻　中央アジア』第４章４．２節	西アジアにおけるイスラム教聖者崇拝の拡がりを論じた後、中央アジアの主な聖者廟(トゥルキスタンのアフマド・ヤサヴィー廟、サマルカンドのシャーヒー・ジンダ廟、ブハラのバハー・ウッディーン・ナクシュバンド廟）の謂われ（「歴史」）を紹介し、それによって中央アジアのイスラム教のトレンドの時代的変遷を述べた。

（その他）				
「批評・紹介」				
1.赤堀雅幸・東長靖・堀川徹［編］『イスラーム地域研究叢書７ イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会、2005年1月	単	平成17年10月	『イスラム世界』65, pp. 114-126	同年出版された表題のイスラム神秘主義と聖者崇拝についての論文集の内容を一つひとつ紹介して、論評した後、今後の当研究分野の展望を述べた。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　清水　啓司

研究分野	研究内容のキーワード
健康・スポーツ科学 （身体教育学・体力科学・バイオメカニクス・運動生理学・スポーツ経営学）	体育授業研究（バイオメカニクス研究の成果を授業に活用する）、 運動の分析、体力科学、健康科学、スポーツ経営学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）体力測定、診断、運動処方を学ぶ取り組み。授業時間最初にスポーツテスト（体力診断・運動能力）を実施し、入学時の自己の体力の現状を測定・把握し、文部省体育局データまたは、都立大学の体力標準値と比較検討させた。自己の体力評価をの分析をグループディスカッションさせ,自己の運動処方をレポート課題とした。	平成元年～現在	同じ年齢の体力基準値（文部省・都立大学体力標準値）に対して、自分がどのような測定項目で劣っているのか、優れているのかをグループディスカッションで発表させ、他の受講学生と議論させ、トレーニングの課題を整理させた。自分のトレーニングメニューを作成レポート提出させた。 奈良産業大学　「一般体育実技・講義」、大谷大学 体育実技「スポーツ研究演習」で実施した。
2）正課スポーツ実技の運動運動強度を心拍数・血中乳酸濃度（運動生理学的測定値）の指標測定から主観的運動強度評価の信頼性を確認させた取り組み。	平成11年～現在	スポーツ実技での身体活動中最も心拍数が時間当たり多い前後の心拍数と血中乳酸濃度を測定した。さらに、次の課題として、講義時間、終了時まで継続して心拍数を測定し詳しく分析した。グールプで検討議論した。 奈良産業大学　一般教養科目　健康・スポーツ科目「選択スポーツ」で実施。
3）最寄駅から大学まで（大学周辺を含む）と大学構内の歩行地図作成の取り組み。新規開講科目の「健康スポーツ演習」の課題として、自己の歩行分析をテーマとして取り組ませた。伊能忠敬の歩行地図作成の歴史も学ばせた。	平成13年～現在	自己の歩行分析として、自分の1分あたりの歩行数つまり歩行頻度（ピッチ）・一歩の歩幅（ストライド）を測定させた。その積である1分あたりの歩行距離を自覚認識させることから、大学周辺と大学構内の歩行地図を作成させた。大学周辺・構内はかなりの傾斜があるにも関わらず、かなりの精度で、自己の歩行データは役立つことを認識させた。健康・体力の面からも歩行運動の意義を講義を通じ学ばせた。最寄駅からバスに乗車せず歩く学生の比率が増加した。 奈良産業大学　健康・スポーツ科目「健康スポーツ演習」で実施。講義科目のスポーツ科学論（体力科学）でも実施した。
4）「スポーツ指導者養成プロジェクト」の取り組み、ビジネス学部開設の重点科目としてのプロジェクト演習科目の一つとして、クラブ活動を意欲的に取り組む学生に対して、指導者として初歩的な資格にチャレンジできる能力を身に着けさせるための取り組み。	平成19年～現在	（財）日本サッカー協会のキッズプロジェクトの趣旨に賛同し、キッズリーダー資格を取得させた。さらに、JFA公認C級コーチ資格（サッカーの基礎技術能力のある者に）を取得させた。受講生同士で、学ぶ側と教える側を体験し指導案の書き方や指導技法・運動生理学・発育発達の科学を学び、学年を超えたクラスで、外部講師や外部組織との連携し活動する中で、グループ学習体験を繰り返し行わせた。
(1) ビジネス学部開設に合わせて、「プロジェクト演習」の取り組みに参加し、「スポーツ指導者養成プロジェクト」を西田裕之教授と担当した。、平成24年度の奈良産業大学紀要２８集に4年間の取り組みのまとめと課題として発表した。	平成24年12月	ビジネス学部開設時のカリキュラム編成の趣旨を理解し、「学士課程教育の構築に向けての答申」を受け、学年の枠を超えた、自律志向の体験型プロジェクト演習として「スポーツ指導者養成プロジェクト」を立ち上げた。「社会参画・グループワーク・課題探究・知識活用」の4つをキーワドに「社会人基礎力」の養成に力を入れたカリキュラムの推進に取り組んだ。

５）実技・講義・演習における教育実践	平成元年～現在	実技科目では、各種目の技術習得だけでなく、準備・後方づけ・基礎練習を通じ仲間との信頼関係をつくることを重視してきた。「協力」「役割分担」「バディーやグループでの信頼関係を築く活動」を意識させリーダーシップとともにフォロアーシップも大切であることを具体的に体験させるようグループ構成に工夫した。 当然個人の技能の向上も重視した。「運動を科学する」意識を持たせバイオメカニクス的研究の成果を生かすため「スポーツ一口メモ、運動技術のコツの発見」を課題として与え、議論させ、最後に解説するように心がけてきた。 講義科目では、学習への動機づけとして、視聴覚教材（DVD・VTR）を厳選し、積極的に活用した。OHPやパワーポントを活用し、できるだけ文章・キーワード・物理学の公式だけでなく、視覚的・直感的に理解できるよう図・表や写真・動画映像を準備工夫した。学生に問いかけ質問（クイズ）を投げかけ、発言させ・議論させ、一方的講義にならないよう、インターラクティブ（双方向）な授業を心掛けてきた。講義内容も、実技・実践を伴って意味のあるものなので、とにかく「やって試る」、「やらせて見る」よう測定機材・トレーニング道具を教室に持ち込み実演するようプレゼンテーションの工夫を心掛けた。
２　作成した教科書，教材		
１）作成した教材	平成元年～現在	教材として配布してきたプリントは、　①体力分析・評価・運動処方のシリーズ②歩行分析のシリーズ③運動生理学のシリーズ④バイオメカニクスに関するシリーズ⑤スポーツマネジメントに関するシリーズを作成してきた。「体育講義」、「体育実技」、「健康スポーツ演習」、「スポーツ科学論」、「バイオメカニクス」、「スポーツマネジメント」などの講義で、また選択スポーツ実技（バスケットボール・バドミントン・テニス）でプリントを配布してきた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）学生からの評価	平成21年～現在	平成21年度のFD委員会の学生の授業評価では、・説明はわかりやすいですか。・担当教員の授業への準備の程度。・担当教員の授業に対する意欲は感じられますか。・学習意欲は刺激されますか。・他の学生にこの授業を薦めますか。・「授業改善シート」の取り組みはなされましたか。等の半数以上の項目で5段階評価で4.0以上（4.0～4.6）の評価を、「健康スポーツ演習」・「スポーツマネジメント」・「競技スポーツ演習」の科目において前・後期連続して獲得した。 評価方法が4段階に改正された平成22年度では、「スポーツ経営学」で、総合判定3.47で、・説明の分かりやすさ。・理解度を確認しながら授業は進めていますか。・先生の授業への熱意と意欲は感じられますか。・授業時間外での学修活動を行うよう指導していますか。14項目中11項目で、3.0以上の評価を獲得した。 FD委員会として授業評価を実施していない科目についても中間「授業改善アンケート」を科目特性を考慮し独自に行い、セメスター内で改善するよう学生の意見を聴き・理解の程度を確認しながら授業を展開している。受講学生も好意的に協力してくれる信頼関係が形成され、その関係は現在も継続している。
２）学長からの評価	平成7年～現在	①平成7年度～17年度　評議委員、 ②平成16年度～17年度　FD副委員長、 ③平成18年度～19年度　学修支援センター長（部長職）、 ④平成19年度～20年度　全学共通教養推進委員長代行、 ⑤平成19年度、平成23年度　経営学部学部長代行、 ⑥平成20年度～21年度　オープンキャンパス実行委員長 ⑦平成20年度～21年度　自己点検・評価（教養教育担当委員） ⑧平成21年度～24年度　全学共通・教養教育推進委員長 ⑨平成25年度　自己点検・評価員委員長 他の学内委員会活動は、　５　その他　10)のその他の委員の項目で示す。

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他の事項		
1)学内委員会活動について		
（1）評議委員	平成7年～17年	学部（経済・経営）代表委員、教養教育代表委員
（2）FD委員会副委員長	平成16年・17年	副学長が委員長に就任した。副委員長という立場ではあるが、FD委員会の本学における運営を学長から直接個人指名で委嘱一任された。京都地区大学コンソーシアムでの先進他大学のFD活動を参考に、遅れていた本学でのFD活動を仲間の委員（教員・事務職員）たちとともに意欲的に推進した。年2回の学生の授業アンケートの実施、評価のフィードバック、ホームページ上での公開、同僚教員の授業の見学・報告書による評価・交流、その後の授業研究会の実施、FDに関する先進の他大学からの講師を招聘し、全学FD講演会の実施などを実現した。 これらのFD活動の取り組みは、その後の外部評価機構からも高い評価を頂いた。奈良県大学連合のFD連絡会議にも積極的に参加するように意識改革をはかった。
（3）学修支援センター長（部長職）	平成18年・19年	学長の直接指名・委嘱を受け、初代学修支援センター長に就任した。金沢工業大学や、関西国際大学のFD活動を参考に本学で、できることから取り組んだ。自主学習室の設置・運営、支援センターとして定期試験に向けての学習・質問・疑問を受け付る教員体制をつくり、当番日程表を学生に公表した。「なんでも相談コーナー」を作り、問題が解決するまで付き合い、関連部署に引率同行した。「目安箱」をつくり定期的に取り組み状況を公開し、その成果を公表した。奈良産業大学、学修支援室のホームページを通じ活動を公開し、「学修支援」のキーワードでの検索ヒット上位（10位以内）を担当者グループの努力で継続していた。活動内容の多くは、現在の学生支援センターに引き継がれた。
（4）全学共通・教養教育推進委員長代理	平成19年・20年	学長の直接指名・委嘱を受け、前任者の退職に伴い、全学共通・教養教育推進委員長代理の職につき第三者評価員会の教養教育分門の担当者となった。過去の会議の議事録を整理し、問題点を整理し解決策を議論した。議事録も必ず残し、会議も定例化し、「学士力の保証」に向けての課題と新カリキュラム作成に取り組んだ。
（5）経営学部長代行	平成19年・23年	経営学部募集停止の次の年度と経営学部閉鎖年度の経営学部長代行となった。
（6）オープンキャンパス実行委員長	平成20年・21年	ビジネス学部・情報学部の2学部体制でのオープンキャンパス・広報活動で中心的役割を果たした。在学生が案内し本学の生の声でアピールするオープンキャンパスを学生たちの協力で実施した。
（7）自己点検・評価委員（教養教育担当代表）	平成20年・21年	「学士力」が問われる中、ビジネス・情報学部での大幅なカリキュラム改善が実施された。特に教養基礎科目（基礎数学・基礎英語・ITリテラシー・日本語教育コミュニケーション）の設置、初年次教育、リメディアル教育、キャリア教育への対応の必要性を議論し科目を編成した。
(8) 全学共通・教養教育推進委員長	平成21年～現在	教養基礎科目（基礎数学・基礎英語・ITリテラシー・日本語コミュニケーション）、人文科学・自然科学・社会科学、キャリア科目、外国語科目、健康・スポーツ科目に関する担当者とカリキュラムの検討を推進してきた。また、初年次教育とリメディアル教育を重視し、学生支援センターと連絡・協力体制をつくり、学生の学力向上と学習環境の整備を進めてきた。フルゼミ制度や学年の枠を超えたプロジェクト演習の取り組みも本委員会として学部の教育を支えてきた。
(9)自己点検・評価委員長	平成25年	学長の直接指名により委嘱を受け就任した。 平成26年度に再審査となる外部評価機構への対応の資料準備の担当のとりまとめ役を命じられた。

(10)その他の委員会	平成元年～現在	教務委員、学生委員、入試委員、広報委員、図書館運営委員、情報センター運営委員、スポーツ振興委員、紀要編集委員など歴任した。
2)クラブ活動の指導について		
（1）奈良産業大学バスケットボール部（男子）指導	平成３年～現在	スポーツ推薦入学生なし、一般入学生のみの活動を部長・監督として指導 最高成績　西日本学生選手権大会ベスト１６、 関西学生リーグ３部　3位

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）小学校教諭１級普通免許	昭和51年3月31日	京都教育大学 免許書番号　昭五十小一普め第三一二号 （京都府教育委員会）
2）中学校教諭１級普通免許（保健体育）	昭和51年3月31日	京都教育大学 免許書番号　昭五十中一普め第二〇三一号(保健体育) （京都府教育委員会）
3）高等学校教諭１級免許(保健体育)	昭和52年3月31日	京都教育大学 免許書番号　昭和五十一高一普め第三九号（保健体育） （京都府教育委員会）
4）修士（教育学）	昭和55年3月	大阪教育大学 学位記　第538号（教育学修士）
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）				
1.日本人平泳ぎ選手に関する研究	単著	平成20年12月	奈良産業大学 紀要24集	pp.1～13 競泳における平泳ぎという種目、泳法については、過去の日本人水泳選手たちの工夫とアイデアで世界のトップレベルを維持してきた。その過程で競技規則がたびたび変更された。バタフライという泳法も日本人選手のアイデアで生み出された。潜水泳法も登場した。それらは、バイオメカニクス的思考により理論的根拠を得て、独自の技術練習やトレーニングを重ね、大きな競技会で栄光に輝いた。特に近代泳法はミュンヘンの田口選手から始まり、北京の北島選手で一つの完成形に到達したと評価されている。その泳法の技術の歴史を、バイオメカニクス的根拠を示しながら整理・検討した。

2.教育課程の改善と「プロジェクト演習」による教育の可能性　-「スポーツ指導者養成プロジェクト」の取り組みから	共著	平成24年12月	奈良産業大学 紀要28集	pp. 65～78 2007年にビジネス学部は、経済学部・経営学部・法学部を統合、改組され設置された。新学部の教育目標を充たすために、基礎科目としての初年次教育の重視、さらに専門科目では演習重視のカリキュラムを提示した。学年の枠を超えて、グループによる体験型学習によって、「学士課程共通の学習成果に関する指針」に応えるべく、カリキュラムとして「プロジェクト演習」が組まれた。【社会参画】【グループワーク】【課題探究】【知識活用】を共通コンセプトとして講座の目標を掲げ、実践活動を行ってきた。「スポーツ指導者養成プロジェクト」と担当者として、4年間のまとめと今後の課題を明らかにした。 共著者：清水啓司（第一著者）・西田裕之
3.スポーツの教育的価値・ビジネス的価値を考える　－スポーツマネジメント研究の課題から-	単著	平成24年12月	奈良産業大学 社会科学雑誌	pp. 189～209 スポーツビジネスの発展に伴う諸問題（経済的観点優先・勝利至上主義など）がスポーツの持つ本来の教育的意義を歪めていることを、オリンピックビジネスの歴史を顧みることから考察、検討した。更なる問題点を指摘し、改善のための課題をスポーツマネジメントの視点から考察した。「人を動かす力」は、「内発的動機づけを促す力」として発揮されなければならない。「自分で意思決定し、自立した人材自己育成の力をつけさせる」ことをスポーツ指導者やサポートする保護者が理解し、反省と点検を繰り返すマネジメントサイクルの形成に努力しなければならないことを指摘した。
（その他／学会発表・研究会発表）				
1.「初動動作の研究 （最初の一歩について）」	単独	平成17年8月6日	身体運動研究会 （奈良産業大学）	話題提供：資料配布要旨　イチロー選手の盗塁におけるポイントから「最初の一歩」についてまとめ提案した。①リードは小さめ　②重心が高い姿勢をとると、走り出しの姿勢までに上体を下げる動作が必要になる。（重心を下げすぎると体勢が立ち上がる）③ベースを結んだライン上に立たない。②に注目して、中間姿勢から抜重し（右膝関節を崩し）スタートしている、左足（一塁側）での蹴りを意識しすぎる二段動作になりスタートは遅くなるとのこと。陸上短距離のスタートの前足・後足とブロックに対するキックは、早くスタートすることよりシツカリ反作用を得ることが大切と考えられている。
2.「ナンバ走りと二軸運動」	共同	平成18年8月5日	身体運動研究会 （奈良産業大学）	話題提供：配布資料要旨　古武術研究家の甲野善紀氏が紹介され、桐朋高校バスケット部が取り入れ成果を上げた「ナンバ走り」について、バイオメカニクスの立場から優位性についてまとめ議論した。末續信吾選手の走りのフォームを取り上げ、二軸走法の分析・解説を行い話題提供した。 共同発表者：木村陽介・清水啓司
3.「歩行運動の分析－歩行のバイオメカニクスー」	単独	平成19年8月4日	身体運動研究会 （奈良産業大学）	話題提供：配布資料要旨　歩行運動の研究の歴史は古く、古代ギリシャのアリストテレスは、「動物の前進運動」の問題として取り上げている。ウエーバーは機械的側面から、マイブリジは馬の連続写真の分析・ブラウネとフィッシャーは、足圧測定など力学的分析へと、写真技術の進歩と測定機器の発達に伴って発展してきた。ヒトの歩行周期・身体重心の変化・関節角度変化から基礎的な歩行分析のバイオメカニクスの手法を整理・確認し話題を提供した。
4.「SPEED社の最新水着と水泳の記録の関係」	単独	平成20年8月2日	身体運動研究会 （奈良産業大学）	話題提供：配布資料要旨　北京五輪に向けて、開発投入されたＳＰＥＥＤ社の「レーザー・レーサー」を着用した選手が自己ベストをつぎつぎ更新し、世界記録が2008年7月7日現在、45個以上生まれた。日本選手権でも、日本記録が15個、世界記録が1個生まれた。北島選手がどの水着を着るか注目が集まった。北京五輪直前までの水着の影響によると思われる記録を整理した。日本選手は如何すべきか議論した。

5.「スポーツトレーナーなら知っておきたい身のこなし」	共同	平成21年8月1日	身体運動研究会 （奈良産業大学）	話題提供：配布資料要旨　①腕はどこからついているか？肩甲骨の外転運動を理解する。②支持基底面と重心の関係を理解する。③遊脚と支持脚を理解することから二軸動作の理解ができる。④右動作と左動作を真に対象に行うことは難しい。などを中心に議論した。 共同発表者：木村陽介・清水啓司
6.「少年野球の指導上の注意点（主に投手の指導）」	共同	平成22年8月1日	身体運動研究会 （奈良産業大学）	話題提供：配布資料要旨　スポーツ用品会社の社員として、少年野球・高校生の野球の指導者(木村陽介)としての経験から注意すべき事柄を整理し提言した。主に投手の肘・肩の障害予防の立場から、正しい投球フォームについて議論した。 共同発表者：木村陽介・清水啓司
（その他／公開講座・出張講義・オープンキャンパスデモ講義）				
1.「経営学を学ぶとは」 －スポーツ経営学の研究から－	単独	平成21年11月21日	私立高野山高等学校 （和歌山県）	配布資料:大学には、総合大学と単科大学があり、学術・研究の専門機関である。大学教育の特徴として、セメスター制と単位履修制度、ゼミナールを紹介した。経営学とは何か、学問領域と関連科目設定について解説した。ヒト・モノ・カネ・情報の4つの経営資源をコントロールし、社会にサービスし、利益を上げ、組織を継続的に存続・発展させ、社会貢献する営みであることを解説した。経営学理論の基本的な歴史の解説とスポーツマネジメントの具体例を、ロス五輪以後の民間のスポーツの発展からの取り組みを解説した。
2.「大学で学ぶべきこと」 －先入観をすて自分自身で判断する力を身に着けよう－	単独	平成22年3月27日	奈良産業大学 オープンキャンパス模擬講義	配布資料：「大学で学ぶとは、他者の経験から学び（文献を読む）、自分自身で過去の経験を整理し、自分の所属しているグループで何が課題であるか、問題を発見し、仲間と協力して解決策を見出し行動できる力を身に付けることである。との立場から、先入観に囚われず自分の頭で考え行動し、社会貢献できる人物になろう！と参加者に呼びかけた。そのためにぜひ本学のプログラム演習で学びませんかと呼びかけた。
3.「スポーツマネジメントとは？」	単独	平成22年6月15日	奈良県立大和広陵高等学校 （スポーツコース）	配布資料：「体育・スポーツ関係で職業に就くために」という観点でスポーツコースの生徒に講義した。体育教師になるためには、教育大学と呼ばれる国立大学の教育学部（大阪教育・京都教育・奈良教育）の体育学科を卒業するか、いわゆる体育大学（大阪体育・日本体育・天理大学・中京・びわ湖成蹊）の体育学部を卒業するか、地方の総合国立大学（筑波・滋賀・和歌山）の教育学部、体育学科を卒業するかが考えられる。国立では、鹿屋体育大学があることを紹介した。スポーツに関わり生計を立てている職業を紹介した。球団職員・用品メーカー・公務員・施設管理・コーチなどを紹介した。スポーツ用品メーカーの紹介として、美津濃・アシックス・アディダスの商品開発競争と企業の歴史を紹介した。
4.「スポーツ科学を学ぶ（運動生理学・バイオメカニクス）」 －スポーツ活動で何を学ぶべきか－	単独	平成22年6月19日	私立東大阪柏原高等学校 体育科（大阪府）	配布資料：生徒44人・教員2人・保護者7人 「スポーツを通じで何を学ぶか？」 勝利するためには「最新スポーツ科学（運動生理学・バイオメカニクス）を学ばねばならない、筋組成・心拍数・最大酸素摂取量・有酸素運動など基本的事項を解説した。スポーツを教材として、教育に生かすことは可能であるが、競技スポーツ優先・勝利至上主義・スポーツによる経済的効果（商業主義）が優先されると問題が生じることを指摘し、議論した。勝利至上主義とトーピング（薬物）、メダル優先、人格を否定され暴力に耐える選手達がいることを指摘し、議論した。

5.「体育学・スポーツ科学の紹介」	単独	平成22年6月23日	奈良県立西和青陵高等学校	配布資料：「ナショナルトレーニングセンターの完成と体育学・スポーツ科学の成果について」の話をした。主に、北京五輪選手（水泳の北島）の科学的トレーニングのサポート体制の強化とその成果。クラブ活動している生徒に、進路選択（進学）のために「スポーツに関わる職業」と「スポーツマネジメント」の話をした。
6.「経営学について」 －スポーツマネジメントの立場から－	単独	平成23年1月26日	奈良県立二階堂高等学校	配布資料:職業選択・大学進路選択に向けてお話を生徒にした。経営学とは何か、学問領域と関連科目設定について解説した。ヒト・モノ・カネ・情報の4つの経営資源をコントロールし、社会にサービスし、利益を上げ、組織を継続的に存続・発展させ、社会貢献する営みであることを解説した。経営学理論の基本的な歴史の解説をした。スポーツマネジメントの課題となる、マーケティングの具体例をスポーツ用品メーカーの商品開発努力を運動用シューズ（アシックスと美津濃、海外メーカー）の例を挙げ解説した。ロサンゼルスオリンピックでの民間活力の導入と近代オリンピックの変貌を解説した。
7.「オリンピックとスポーツビジネスの歴史」 －スポーツの教育的価値・ビジネス的価値を考える－	単独	平成23年5月21日	奈良産業大学主催 王寺町リーベルカレッジ （公開講座）	配布資料：「オリンピック開催とスポーツビジネスの発展」ピーターユベロスが1988年ロサンゼルス大会を民間活力を導入し、税金を充当せず大成功に導いた。以後オリンピック開催は、経済効果も期待されビジネスチャンスの宝庫であると認識されるようになった。招致合戦は激戦となった。しかし、体育・スポーツが勝利至上主義、ビジネス優先に終始すれば、教育的には問題を含んでいることを指摘しておかねばならない。さらにエスカレートする薬物問題、選手の人権問題なども考えられることを講義した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　竹山　理

研究分野	研究内容のキーワード
確率過程論、数理ファイナンス	確率微分方程式、マルチンゲール理論、派生証券、裁定価格

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）里山保全短期プロジェクト演習	平成19年10月～平成23年7月	プロジェクト演習とは明確な目標をもつ社会活動への参加の機会を学生に提供し、学生は活動を通して社会認識と自己認識を育て深めることができる課題探究型の教育である。テーマを里山保全とし、市民の立場から里山保全に取り組んでいるＮＰＯ法人里山倶楽部とＮＰＯ法人奈良ネイチャーネットの活動に参加した。毎年、活動報告書をＡ４版５０ページ程度に作成した。学生は里山保全という個別の問題に取り組むなかで、問題解決には社会の仕組みの多様な側面が関係することを学習することができた。（ビジネス学部「短期プロジェクト演習」）
2）地域参画プロジェクト演習	平成21年10月～平成25年3月	地域が抱える問題に市民の立場から取り組んでいる活動に継続的に参加し、課題解決のプロセスを実践的に学習することを目的とした演習である。テーマは地球環境に関する問題とし、ＮＰＯ法人奈良ストップ温暖化の会とＮＰＯ法人森づくりならクラブに団体入会して、継続的に活動に参加できるようにした。この演習は２年半の長期にわたるので、課題発見するところからはじめて、計画立案から計画実行、中間報告、計画見直し、課題解決までプロジェクトマネジメントを経験することで、社会人としての中核能力を養成するものである。（ビジネス学部「プロジェクト演習」）
2　作成した教科書，教材		
1）経済統計入門	平成19年4月1日	ビジネス学部専門基礎科目「経済統計入門」（１年次配当、半期、２単位）の講義用教科書である。経済統計データを読み解くために必要なマクロ経済学の基礎事項を解説しながら、代表的な経済統計を「財・サービスの消費」「労働と雇用」「財・サービスの生産」「国の財政」「物価と通貨」という項目に区分して取り上げて、最後に国民経済計算体系を取り扱った。（ビジネス学部「経済統計入門」）
2）ベーシック数理Ⅰ・Ⅱ	平成19年4月1日	ビジネス学部共通基礎科目「経済統計入門」（１年次配当、半期、必修１単位×２）の講義用教科書である。ベーシック数理Ⅰでは、社会で生じる問題解決において必要となる判断推理と数的処理の中から、その基礎となる方法と論理を解説した。具体的には、条件文の論理関係、情報をクロス表で整理する手法と対応関係の判断、数的処理としては整数の約数・倍数と剰余、等差数列と等比数列を現実問題の解決の利用することを解説した。ベーシック数理Ⅱでは数量化の方法を中心に据え、割合、関数、方程式による解法を解説した。（ビジネス学部「ベーシック数理」）
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）学長からの評価	平成25年3月	人権教育・研究推進委員。学生委員会主催のリメディアル教育活動への講師参加。

４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）教職員のための公開講座	平成20年8月6～7日　平成21年8月5～6日　平成22年8月4～5日	大阪府、奈良県の教職員を対象にして、夏季休暇の期間に１泊２日の公開講座「吉野の自然と林業」を企画担当した。第１日目は、自然観察を中心した講座であり、特に清流における水生生物の観察学習をした。第２日目は、吉野林業を中心とした講座であり、現地の林業家の協力で、山上の私有林における森林の現状を見て、林業の現状を理解してもらうと同時に、実際にヒノキの枝打ちを体験してもらう内容であった。
２）教職員のための公開講座	平成24年8月8日	大阪府、奈良県の教職員を対象にして、公開講座「総合的な学習とプロジェクト・ベース学習」を担当した。アクティブラーニングに取り組んでいる大学の現状をサーベイし、特に、プロジェクト・ベース学習と総合的な学習との連続性を探求し、その可能性を参加者と共に追求した。
３）高大連携セミナー	平成24年12月8日	ＥＲＰ研究会主催「高大連携セミナー」において、大学の学部教育におけるアクティブラーニングの事例として、「里山保全プロジェクト演習」と「地域参画プロジェクト演習」の実践を報告した。プロジェクト演習では、社会活動への参画、他者との協同による学習経験、専門知識の活用、課題の探求を必須の構成要件とし、「目的のある活動に学生が自ら協同して取り組むことを通じて深い学びの経験を積む」ことの可能性を提示した。
４）高大連携セミナー	平成25年6月2日	高校大学を通した「学び・育ち」研究会主催「高校大学連携フォーラム」のパネルディスカッション「アクティブラーニングの創造・実践と展望」においてコーディネーターを担当した。アクティブラーニングを知識定着型と課題探究型に区別して、高校・大学を通じた主体的学びの仕組みづくりに向けて、高校現場と教育委員会、大学関係者から実践例を報告をしてもらい、今後の可能性を追求する議論を展開した。
５）三郷町公開セミナー	平成25年9月3日	三郷町主催公開セミナー「カルチャーサロンさんごう」において、「社会的ジレンマの数理」をテーマに講演をした。社会的ジレンマとは具体的にどのような現象なのかを、「出し抜き型」と「ただ乗り型」に区別して確認したうえで、現象の背後にある数理的構造を抽出して、「囚人のジレンマ」としてモデル化をした。続いて、ジレンマを解消するための３つの要因（強制力・選択的誘因・利他的利己主義）について、具体的な数値例を用いながら解説をおこなった。
５　その他		
１）奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科における教育実績	平成19年4月～平成22年3月	専任教員（平成19年4月～平成22年3月まで教授）の専門教育担当として、以下の科目を担当した。
		「リスクマネジメント」　日々の社会生活の中で私たちはリスクに取り囲まれていることを認識することから始めて、リスクをマネジメントするプロセス、リスクをコントロールする手法を解説した上で、伝統的なリスク移転の手法である「保険」と代替的なリスク移転の手法である「派生証券」について解説する。さらに、社会的リスクを分散する制度である「社会保障」を考える講義をおこなった。
		「経済統計入門」　個々の経済活動を集計した経済統計データを、目的に応じて統計処理をおこなった経済指標を読み解く内容の講義である。経済統計は集計量を扱うので、マクロ経済学の知識が必須であるから、マクロ経済学の基礎知識も同時に学習しながら、主要な経済指標の見方を提示した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）高等学校教諭一級普通免許（数学）	昭和60年10月1日	昭六〇高一普め第二一号　京都府教育委員会
2）中学校教諭一級普通免許（数学）	昭和62年3月31日	昭六〇中一普め第四四六一号　京都府教育委員会
3）京都大学理学修士	昭和56年3月23日	理修第２４７６号、論文題名「正則行列上のBrown運動のLyapunov数」
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）研究助成	平成23年	ＪＲ西日本あんしん社会財団研究助成「災害時の状況把握用空中写真取得のための安価な自動航法ラジコンヘリコプター開発と実現」共同研究者（代表者：奈良産業大学情報学部　米川雅士）、研究費 1300千円
4　その他		
1）奈良産業大学評議員	平成17年４月～平成19年3月	

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1．統計学講義ノート	単	平成25年3月	開成出版	統計学を講義する場合に、実際のデータ解析の手法と確率論に基礎をおく理論とを、どのように配分するかに苦慮するが、第１部では、１変量データの整理の仕方から多変量データの回帰分析までを、確率論からの基礎知識は必要に応じた最低限度に限り、実際の解析手法に重点をおきつつ講義したノートをまとめたものである。第２部は、確率論の基礎理論をある程度準備した上で、と統計的推測の理論を線形代数学と解析学の知識を前提に講義したノートをまとめたものである。Ｂ５版112頁。
（学術論文）				
1．『貨幣経済の動学理論』精読Ⅰ	単	平成17年12月	奈良産業大学経済経営学会「産業と経済」第20巻第4号P.123～P.134	小野善康著『貨幣経済の動学理論』を精読して、そのモデル構成を確認し、分析の前提事項と導出結果を明確に区別し、完全均衡の不存在と不況定常状態の存在可能性を導出する論理展開を、詳細に読み解いた。さらに、小野の導出結果をケインズ『一般理論』第17章の記述と比較検討した。
2．法的推論における「視線の往復」過程の解明	共	平成17年12月	名城大学法学会「名城法学」第55巻第3号P.109～P.148	自然言語における条件文の意味論と語用論に関する認知言語学の成果を参考にしながら、法的推論の基本モデルを提示した。法的推論領域の確定は、事実認定の可能性と法的効果の適合性を判断して遂行されることを論じた。さらに、法的スキーマの構成を論じ、法的推論における「視線の往復」過程で、法的スキーマがどのような役割を果たすかを考察した。本人担当部分「２．問題設定」（141頁～145頁）、「４．法的推論の基本モデル」（131頁～137頁）、「６．事例による「視線の往復過程」の解明」（117頁～125頁）、共著者：辻博明、竹山理

３．プロジェクト演習の可能性	単	平成23年12月	「奈良産業大学紀要」第27集P. 19～P. 38	プロジェクト演習とは、社会的実践への参加としての学習を実現するものであり、授業構成では、社会参画、グループワーク、課題探究、知識活用を共通要件とする。この論文では、社会科学系大学の学部教育において、プロジェクト演習にどのような可能性があるかを考察した。まず、大学教育の現状を踏まえて、その射程を再考するための手がかりを探索し、次に活動における体験が教育的に価値ある経験になるための要件を考え、その要件をプロジェクト演習でどのように具体化できるかを例示した。さらに、４年間の教育実践内容を報告し、社会問題をテーマとしたプロジェクト演習が、大学教育において「活動的で協同的で反省的な学び」を目指す「学びの共同体」のひとつの形態となると結論づけた。
４．プロジェクト演習の設計	単	平成26年3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報第４集P. 67～P. 84	プロジェクト演習を実践するための前提とすべき理論として、エンゲストロームの活動理論と田中智志の様態論を概観した上で、社会科学系の大学教育課程において、プロジェクト演習を具体化するための設計指針を提示した。プロジェクト演習における学生の学習経験領域を、社会認識、学問知、実践知、表現の４領域に区分して、４領域ごとに探究目的に即した学習内容、探究課題の一覧を提示することを提案した。また、学生が主体的に活動を遂行する仕組み、および専門科目の知識獲得と関連づける仕組みを提示した。
５．デューイの教育哲学における「経験」と今日の大学教育	共著	平成26年3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報第４集P. 85～P. 1084	デューイの教育哲学、なかでも「経験」概念が、今日の日本の大学教育に示唆するものを論じた。本人担当部分は、「Ⅱ．デューイの「経験」の再検討」（P. 95～P. 102）である。戦後新教育におけるデューイの受容において、「経験」概念がゆがめて理解されていたことを具体的に示す４つの現象について、主にデューイの著書『経験と教育』から論拠となる部分を引用して検証した。共著者：吉村文男、竹山理、日下耕三。
６．『数学の現象学』精読Ⅰ	単著	平成27年3月	奈良学園大学紀要第２集p. 205～p. 221	鈴木俊洋著『数学の現象学』（法政大学出版会、2013年）の第１章、第２章に焦点を絞り、現象学の創始者として知られるフッサールが、現象学創設の動機となる数学論上の問題に取り組んだ経緯を明確にし、フッサールの数学観を形成する基本テーゼを定立するに至るまでの過程を、関連する文献を参照しながら精読した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　松本（伊達）　桃子

研究分野	研究内容のキーワード
文学	英米文学、比較文学、児童文学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）Eラーニングを活用した授業の実践	平成20年４月～平成26年3月	奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科、情報学部情報学科の外国語科目「基礎英語Ⅰ」において、Eラーニングによる演習を授業の主体とした。学生はコンピュータ上で問題演習を行い、誤答すれば同じ問題を３回連続で正答するまで繰り返し解かねばならない。正答率や回答に要した時間は教員のコンピュータ上で見ることができるので、各人の苦手分野を把握し、的確な指導ができた。また、進捗状況を点数化して成績に反映するため、学生は具体的な目標を得て学習意欲が増し、授業への満足度も高まった。
2）パワーポイントを用いた理解度向上	平成21年4月～平成26年3月	上記「基礎英語Ⅰ」において、理解が不十分なまま問題演習に取り組み、誤答を繰り返して学習意欲が低下する学生が見られたので、平成21年４月から、問題演習の前に自作のパワーポイント教材を用いて授業内容の概説を行い、理解度を向上させた。さらに、平成23年度からはパワーポイントの内容を書き込み式教材として印刷、配布し、学生の能動的学習を促している。
3）ドリル教材による理解度の把握と授業改善	平成21年４月～現在	上記「基礎英語Ⅰ」において、問題演習後の理解の定着ときめ細かい達成度把握のために、演習後の小テストを毎授業時間の最後に実施し、添削して次回に返却している。また、達成度をＡＢＣの３段階で評価し、成績に反映するとともに、Ｃの学生には最低Ｂランクに到達するまで再提出を義務づけている。 また「基礎英語Ⅱ」についても書き込み式の補助教材を作成し、学生の授業参加を促すとともに、ノートとして復習に使えるものとしている。これも毎回の提出を義務づけ、達成度を上と同じ方式で評価し、添削して次回に返却している。 「英語読解Ⅰ・Ⅱ」においても、教科書準拠のワークシートを自作し、毎回の提出を義務づけ、添削して返却している。
4）音声教材による発音とリスニングの指導	平成19年４月～現在	奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科、情報学部情報学科の外国語科目「TOEIC対策英語Ⅰ・Ⅱ」、また「資格試験対策英語Ⅰ・Ⅱ」において、TOEIC試験の問題形式に準拠した教材を使用し、全授業回数の半分をリスニング対策に充てている。問題音声を最低３回CDで流し、初回はスキャニングで概要を把握させ、次はスキミングで必要な情報を拾い出させ、最後はシャドーイングで発音を再現させることを試みている。初回は聞き取れない学生も、必要な情報を特定することで聞き取れるようになり、自信をつけていく傾向が見て取れる。さらに、英語の歌を使用して歌詞の一部を聞き取らせる活動を授業の最後に組み入れ、楽しみながら聴解力を上げる訓練をしている。
2　作成した教科書，教材		
1）「導入演習・基礎演習」（奈良産業大学ビジネス学部）	平成19年４月～９月	奈良産業大学ビジネス学部の「導入演習」において使用した。作成を担当した第５章「文章の書き方」では、長文を読みこなし内容を簡潔にまとめる能力を伸ばすことを目指し、一定の効果を上げることができた。
2）講義用補助教材「公務員試験対策英語」	平成８年４月～平成20年３月	奈良産業大学法学部法学科、ビジネス学部ビジネス学科の「公務員試験対策英語」のために作成した教材。公務員試験の過去問題や模擬問題から、学生の実力に併せた問題を選択し、主題別あるいは文法事項別にまとめて毎回の授業テキストとして使用した。

３）講義用補助教材「英語（講読）」「英語読解Ⅰ・Ⅱ」	平成19年４月～現在	奈良産業大学情報学部情報学科の「基礎英語Ⅰ」のために作成した教材。改訂し、奈良産業大学共通科目「英語読解Ⅰ・Ⅱ」にも使用。テキストに準拠し、単語、内容把握、発音練習、英作文などの演習をバランス良く配置して、オールラウンドな英語力の養成を図った。
４）講義用補助教材「基礎英語Ⅰ」	平成21年４月～平成26年3月	奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科、情報学部情報学科の「基礎英語Ⅰ」のために作成した教材。上記１-2),3)の内容を参照。
５）講義用補助教材「基礎英語Ⅱ」	平成21年４月～現在	奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科、情報学部情報学科の「基礎英語Ⅱ」のために作成した教材。上記１-3)の内容を参照。
６）講義用補助教材「英語Ⅰ・Ⅱ」「TOEIC対策英語Ⅰ・Ⅱ」「資格試験対策英語Ⅰ・Ⅱ」	平成５年４月～現在	奈良産業大学法学部法学科の「英語Ⅰ・Ⅱ」、ビジネス学部ビジネス学科、情報学部情報学科の「TOEIC対策英語Ⅰ・Ⅱ」「資格試験対策英語Ⅰ・Ⅱ」のために作成した教材。英語のポップソングから、親しみやすく聞き取りが容易なものを選び、歌詞の一部を空欄にして聞き取り教材とした。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）授業評価アンケート	平成25年11月	平成20年度から実施されている授業評価アンケートにおいては、毎回肯定的な評価を得ている。平成25年11月のアンケートでは、ほぼすべての授業で平均値を上回る評価を受けた。
２）学長からの評価（奈良産業大学）	平成24年度	講義・演習を堅実にこなしており、授業内容や授業の運営に対して学生からの評価も高く、教育能力は十分にあると考える。英語を苦手とする学生が多い中で、授業内容に対する理解度の向上をはかるため、常に授業方法の工夫に取り組んでいる。こうした授業改善への積極的な姿勢は、学生の語学能力の育成に貢献している。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）奈良産業大学公開講座『平成20年度王寺りーべるカレッジ』 （於王寺町地域交流センター）	平成20年７月	「ファンタジーの新しい波－『ハリー・ポッター』は何をもたらしたのか」と題して講演を行った。下記、講演１を参照。
２）生駒市図書館英米文学講座 （於生駒市図書館）	平成21年10月	「人形の家から見る現代の家族」と題して講演を行った。下記、講演２を参照。
３）奈良産業大学公開講座『平成22年度王寺りーべるカレッジ』 （於王寺町地域交流センター）	平成22年6月	「人形ファンタジーに見る現代の家族」と題して講演を行った。下記、講演３を参照。
４）奈良産業大学公開講座『平成25年度王寺りーべるカレッジ』 （於王寺町地域交流センター）	平成25年9月	「映画になったファンタジー―よみがえる古典作品―」と題して講演を行った。下記、講演４を参照。
５）奈良産業大学公開講座『平成25年度王寺りーべるカレッジ』 （於王寺町地域交流センター）	平成25年9月	「映画になったファンタジー―現代ファンタジーの挑戦―」と題して講演を行った。下記、講演５を参照。
５　その他		
１）奈良産業大学法学部法学科における教育実績	平成５年４月～平成19年３月（平成17年度を除く）	「英語ⅠA」（平成9～14,16,18年度） 英文の講読を中心とした初年次用の授業である。 「英語ⅠB」（平成6,9～12,14～16年度） LL演習を中心とした初年次用の英語の授業である。 「英語ⅡA」（平成5,7～8,13年度） 英文の講読を中心とした２年次用の授業である。 「公務員試験対策英語」（平成14～16,18年度） 公務員試験の英語問題の演習を行う授業である。 「実用英語C」（平成18年度） TOEICを中心とした資格試験問題の演習を行う授業である。

２）奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科、情報学部情報学科における教育実績	平成19年４月～現在	「英語ＩA」（平成19年度） 「実用英語C」（平成19～20年度） 「公務員試験対策英語」（平成19～20年度） 上記参照。 「TOEIC試験対策英語」（平成19～23年度） TOEICの問題演習を行う授業である。 「英語（講読）」（平成20～22年度） 英文の講読を中心とした初年次用の授業である。 「導入演習」（平成19～20,22年度） 「基礎演習」（平成19～20,22年度） 大学生活に必要な学習能力、学習習慣を身につけさせる授業である。 「総合演習」（平成21年度） 演習形式で実践力を養う授業である。 「英語コミュニケーション」（平成21～22年度） 英文法を中心に基礎的な英語力を養う授業である。 「基礎英語Ｉ」（平成23～24年度） 「基礎英語Ⅱ」（平成23～24年度） 英文法を中心に基礎的な英語力を養う授業である。 「資格試験対策英語Ｉ・Ⅱ」（平成24年度～） TOEICを中心とした資格試験問題の演習を行う授業である。 「英語読解Ｉ・Ⅱ」（平成26年度～） 英文の講読を中心とした授業である。
３）奈良女子大学における教育実績	平成27年4月～現在	「プラクティカル・イングリッシュ」（平成27年度～） ライティング・スピーキングを中心とした初年次用の授業である。 「オラルコミュニケーション」（平成27年度～） リスニング・スピーキングを中心とした2年次用の授業である。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）文学修士	平成２年３月	奈良女子大学　第419号 論文題目：Myth, History, and Story:J. R. R. Tolkien's Secondary World
２）中学校教諭専修免許状	平成２年３月	外国語（英語）（第34号）
３）高等学校教諭専修免許状	平成２年３月	外国語（英語）（第126号）
４）TOEIC（国際コミュニケーション英語能力テスト）	平成24年３月	９９０点取得
２　特許等		
なし		なし
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）日本イギリス児童文学会理事	平成14年4月～平成16年3月 平成20年4月～平成26年3月	学会規定の改訂、会員名簿の管理などの実務に当たった。
２）日本イギリス児童文学会TINKER BELL編集委員	平成20年4月～平成24年3月	学会の紀要TINKER BELLの査読、編集作業などの実務に当たった。

4　その他		
1）ホームページ企画小委員会委員長	平成20年4月～ 平成24年3月	広報委員会の下部組織であるホームページ企画小委員会の委員長を務めた。
2）紀要編集委員会委員長	平成26年4月～ 平成27年3月	奈良学園大学紀要第1集、第2集の発行および奈良学園大学紀要規程の制定に当たった。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
1．英語圏諸国の児童文学Ⅰ　物語ジャンルと歴史	共著	平成23年３月	ミネルヴァ書房	冒険物語、少年・少女小説、孤児物語など、30テーマを取り上げ、簡潔な説明と作家・作品解説を加えた総合的な児童文学ガイド。 Ａ５判　全194頁 編者：日本イギリス児童文学会 共著者：三宅興子、桂宥子、永島憲江、森野聡子、福田泰久、藤本朝巳、夏目康子、森恵子、水間千恵、伊達桃子ほか２０名 本人担当部分：「２３　人形・おもちゃ物語」（P.133-P.138）を単著。 人形やおもちゃが命を得て動き出すというファンタジーの系譜をたどり、代表的な作品を紹介しながら、この形式がもつ意味を考えた。
2．英米児童文化55のキーワード	共著	平成25年３月	ミネルヴァ書房	英米の児童文化に関わる５５のキーワードを取り上げて概説し、そのキーワードに関連する児童文学作家と作品を解説する。 A５判　全280頁 編者：白井澄子、笹田裕子 共著者：安藤聡、井辻朱美、川端有子、神戸洋子、北本正章、笹田裕子、白井澄子、島式子、鈴木宏枝、高田賢一、伊達桃子ほか１４名 本人担当部分：「１－３　子育て」(p.12～p.15)を単著。 時代によって変遷する子育ての理念と実態を辿り、子育てが社会を映す鏡であることを明らかにした。 本人担当部分：「３－３　乳母」(p.76～p.79)を単著。 イギリス独自の発展を遂げた乳母という職業の変遷をたどり、児童文学におけるもっとも有名な乳母メアリー・ポピンズの表象とからめて考察した。 本人担当部分：「４－３　人形」(p.112～p.115)を単著。 子どもにとって人形のもつ意味と、大人が教育手段として人形を用いる場合の意味を比較しながら考察した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（学術論文）				
1．ファンタジーとして見た『ハリー・ポッター』	単著	平成20年３月	奈良産業大学法学会誌「奈良法学会雑誌」20巻３・４号 P.1-P.17	世界的な人気を博した反面、文学としては厳しい評価を受けることも多いJ．K．ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズをファンタジーのジャンル的特質に注目して分析した。シンポジウム１の本人担当部分の内容に加筆・訂正を行ったものである。
2．ファンタジーの新しい波―『ハリー・ポッター』は何をもたらしたのか―	単著	平成20年12月	奈良産業大学社会科学学会誌「社会科学雑誌」第1巻 P.149-P.170	J．K．ローリングの『ハリー・ポッター』シリーズをイギリス児童文学の伝統の中に位置づけ、この作品が社会にもたらした影響を探った。講演２に加筆・訂正を行ったものである。

３．デイヴィッド・アーモンド『クレイ』における中間性の意味	単著	平成23年12月	「奈良産業大学紀要」第17集 P.67-P.78	デイヴィッド・アーモンドの『クレイ』を、アーモンドの作品総体の中での位置づけと、人形ファンタジーとしての特性という２つの観点から分析した。学会発表５の内容に加筆・訂正を行ったものである。
４．人形ファンタジーにおける変身	単著	平成24年3月	奈良産業大学社会科学学会誌「社会科学雑誌」 第４巻 P.1-P.21	人形から人間、人間から人形への変身というモチーフを含む児童文学作品を時代順に6点取り上げ、それぞれにおいてこのモチーフの表す意味の変遷をたどった。学会発表６の内容に加筆・訂正を行ったものである。
５．デイヴィッド・アーモンドの作品における怪物と天使 （査読付）	単著	平成25年3月	日本イギリス児童文学会誌「英語圏児童文学研究 TINKER BELL」 No.58 pp.57-71	アーモンドの作品に頻出する超自然的な存在を怪物と天使の２種類に大別し、それぞれの意味と作中での機能を考えた。怪物と天使はともに人間の内なる二面性を表し、これらを外部ではなく内部に見出すことが主人公の成長にとって必要であることを示した。
６．映画になったファンタジー―よみがえる古典作品―	単著	平成26年9月	「奈良学園大学紀要」第1集 P.65-P.80	ファンタジーの映画化の歴史を辿り、『不思議の国のアリス』『オズの魔法使い』『ピーター・パン』などの古典作品について、映画化に際して原作がどのように変更され、どのような価値観を伝えようとするか、社会状況と絡めて検討した。
７．映画になったファンタジー―現代ファンタジーの挑戦―	単著	平成27年6月 （予定）	奈良産業大学社会科学学会誌「社会科学雑誌」 第12巻 P.1-P.35	20世紀後半からのファンタジーの映画化の歴史を辿り、特に1990年代以降に映画化された4作の異世界ファンタジー『指輪物語』『ナルニア国年代記』『ハリー・ポッター』『ライラの冒険』それぞれの描かれ方と、映画化の成功あるいは失敗の要因を論じた。
（その他）				
１．世界文学あらすじ大事典１	共著	平成17年7月	国書刊行会	原書名：Masterpieces of World Literature in Digest Form フランク・マギルの原書(1952-56)を下敷きに、独自の項目や解説を加え、世界の文学作品１００１作（シリーズ全4巻合計）のあらすじを詳述した事典。 監修：横山茂雄、石堂藍 共訳者：石堂藍、伊藤雅子、應谷靖子、太田純、加藤紀子、金井真弓、唐澤洋子、川口有紀、菊池由美、伊達桃子ほか34名 本人担当部分：「アテネのタイモン」(P.62-P.64)「ウィンダミア卿夫人の扇」 (P.263-P.265)「ヴェローナの二紳士」 (P.275-P.277)「エマ」(P.354-P.357)「ガラスの鍵」(P.539-P.541)「狐になった人妻」(P.594-P.596)「吸血鬼ドラキュラ」(P.608-P.611)
２．世界文学あらすじ大事典2	共著	平成17年12月	国書刊行会	翻訳５の内容を参照のこと。 本人担当部分：「ジョン王」(P.426-P.429)「ゼンダ城の虜」(P.574-P.576)「タイタス・アンドロニカス」(P.597-P.601)「ダニエル・デロンダ」(P.639-P.643)
３．世界文学あらすじ大事典3	共著	平成18年9月	国書刊行会	翻訳５の内容を参照のこと。 本人担当部分：「説きふせられて」(P.145-P.148)「トロイラスとクレシダ」(P.218-P.221)「ナルニア国ものがたり」(P.270-P.275)「人間の絆」(P.328-P.332)「バラントレーの若殿」(P.467-P.471)「白衣の騎士団」(P.577-P.580)「二人の貴公子」(P.645-P.647)「冬物語」(P.660-P.663)

４．世界文学あらすじ大事典4	共著	平成19年６月	国書刊行会	翻訳５の内容を参照のこと。 本人担当部分：「ヘンリー五世」(P. 81-P. 83)「ヘンリー八世」(P. 83-P. 85)「ヘンリー四世」(P. 85-P. 89)「ヘンリー六世」(P. 92-P. 97)「ポイントンの蒐集品」(P. 99-P. 101)「まじめが肝心」(P. 161-P. 163)「指輪物語」(P. 429-P. 436)「四つの書名」(P. 464-P. 467)「レベッカ」(P. 575-P. 578)「罠」(P. 673-P. 675)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）				
「学会発表」				
１．デイヴィッド・アーモンド『クレイ』における中間性の意味	単独	平成20年11月	日本イギリス児童文学会第39回研究大会 （於清泉女子大学）	学術論文12の内容を参照のこと。
２．人形ファンタジーにおける変身	単独	平成22年11月	奈良女子大学英語英米文学会第39回大会 （於奈良女子大学）	学術論文13の内容を参照のこと。
「シンポジウム」				
１．『ハリー・ポッター』はおもしろかったのか	共同	平成19年11月	日本イギリス児童文学会第38回研究大会 （於中京大学）	世界的なベストセラーとなった『ハリー・ポッター』シリーズの終了に際して、この作品のどこがどのように受けたのか分析を試みた。発表者はそれぞれ、時代、ファンタジーとしての様式、フェミニズムによるヒロイン像、ポピュラー・カルチャーとしての普遍性の観点から作品の魅力を論じた。 本人担当部分：『ハリー・ポッター』のファンタジー性 共同発表者：戸田山みどり、伊達桃子、森野聡子、森有礼
「講演」				
１．ファンタジーの新しい波－『ハリー・ポッター』は何をもたらしたのか	単独	平成20年７月	奈良産業大学公開講座『平成20年度王寺りーべるカレッジ』 （於王寺町地域交流センター）	学術論文11の内容を参照のこと。
２．人形の家から見る現代の家族	単独	平成21年10月	生駒市図書館英米文学講座 （於生駒市図書館）	学術論文９の内容を下敷きに、ガーダムの作品を除き、ラッセル・ホーバンの『親子ネズミの冒険』を取り上げて、フェミニズム的視点を取り入れ、かつ一般にわかりやすい内容に改めた。
３．人形ファンタジーから見る現代の家族	単独	平成22年６月	奈良産業大学公開講座『平成22年度王寺りーべるカレッジ』 （於王寺町地域交流センター）	講演３の内容を下敷きに、ファンタジーの定義についてさらにわかりやすく解説した。
４．映画になったファンタジー―よみがえる古典作品―	単独	平成25年9月	奈良産業大学公開講座『平成25年度王寺りーべるカレッジ』 （於王寺町地域交流センター）	学術論文７の内容を参照のこと。

５．映画になったファンタジー―現代ファンタジーの挑戦―	単独	平成25年９月	奈良産業大学公開講座『平成25年度王寺りーべるカレッジ』（於王寺町地域交流センター）	学術論文８の内容を参照のこと。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　西口　清治

研究分野	研究内容のキーワード
会計学	財務会計、簿記

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）特記事項なし		
2　作成した教科書，教材		
1）一年次共通テキスト「会計入門」	平成19年4月	会計学を初めて学ぶ学生への入門書で会計の考え方、簿記、財務諸表、経営分析について概要を述べたものである。
2）一年次共通テキスト「簿記の仕組みとビジネス」	平成23年4月	「会計入門」の改訂版であり、より現代のビジネスにおける会計学と簿記論をわかりやすく開設したものである。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）特記事項なし		
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		

4　その他		
1）特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）				
1.小資金による株式投資と会計情報	単	平成18年3月	奈良産業大学経済学会「産業と経済」21巻1号 P.57～P.83	本稿は、小額（少額）から、株式投資を始める個人の投資家を対象に株式投資の現状と戦略を述べたものである。以下、手軽に入手できる「会計情報」、ここでは『会社四季報』などやインターネット上の情報を使って、投資判断する前提でものである。なお、信用取引については、投機性が強く、制約もあるので、触れていない。
2.我が国におけるキャッシュ・フロー計算書の傾向	単	平成24年11月	奈良産業大学社会科学学会「社会科学雑誌」第5巻 P.315～P333	会計情報としてのキャッシュ・フロー計算書の情報は企業経営者や情報利用者にとって意思決定に役立つ情報が必要である。キャッシュ・フロー計算書の作成目的は、損益計算書とは別の観点から企業の資金状況を開示、すなわち企業の現金創出能力と支払い能力を査定するのに役立つ情報を提供し、利益の質を評価するのに役立つ情報を提供することの視点から、企業の財務データを用い傾向を分析している。
3.100円ショップのビジネスモデルと会計構造	単	平成24年12月	奈良産業大学「地域公共学研究所年報」第３集 P.35～P.50	普段の生活になじみのある日用品・文房具等の生活雑貨商品を１００円で販売している「１００円ショップ」をとりあげ、現実の経営方法を検討し、「ヒト・モノ・カネ・情報」などの経営資源の考察を行う。　本稿は、筆者が文房具や日用品の購入でよく利用している１００円ショップを経営学的にまた会計学的視点から分析したものである。
4.小型計算機による会計計算技法	単	平成24年12月	奈良産業大学経済学会「産業と経済」25巻1号 P.83～P.105	本稿は過去の計算器具であるが、t会計領域においてまだ利用できる可能性があるのではないかとの思いから各種計算器を考察してみた。その結果そろばんや円形計算尺にはまだ利用できる可能性があることが分析できた。
5.計算ツールの会計領域への適用可能性	単	平成25年2月	奈良産業大学社会科学学会「社会科学雑誌」第7巻 P.51～P72	現在は会計情報の分析や活用において、デジタル機器としてパソコンを含めた汎用コンピュータの利用が一般的であるが、果たしてこれだけではないであろうと、また過去利用されていた計算道具の中にも考慮すべきツールをあるのではないかとの思いで、長年調査してきた。本稿では計算道具として金融電卓と円形計算尺を取り上げ、会計での適用可能性について分析したものである。
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　西　田　裕　之

研究分野	研究内容のキーワード
スポーツ方法学研究	サッカー、体力、指導方法、分析

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）プロジェクト演習「スポーツ指導者養成」において、奈良県内保育園・幼稚園の巡回指導アシスタントの実施。	平成22年10月～現在に至る	奈良産業大学プロジェクト演習「スポーツ指導者養成」受講生に日本サッカー協会の「キッズリーダー」を取得させ、その後、奈良県サッカー協会が実施している保育園・幼稚園巡回指導のアシスタントとして、実際の現場での指導を体験させる。
2）プロジェクト演習「スポーツ指導者養成」における指導実践の実施	平成22年度～現在に至る	奈良産業大学プロジェクト演習「スポーツ指導者養成」において、受講生1名が指導者となり、その他の学生が選手役となって指導実践を行う。最後にその指導内容、方法についての意見交換を行う。
2　作成した教科書，教材		
1）コーチング論プリント	平成23年4月	コーチング論の授業用ワークシートを作成。毎時間提出させて点検・確認を行う。
2）スポーツ文化史プリント	平成23年4月	スポーツ文化史の授業用ワークシートを作成。毎時間提出させて点検・確認を行う。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良産業大学平成23年度授業評価アンケート	平成23年7月27日	「コーチング論」について、授業評価アンケートを受けて改善策等を回答。
2）奈良産業大学平成24年度前期授業評価アンケート	平成24年7月25日	「コーチング論」「日本語コミュニケーションⅠ」について、授業評価アンケートを受けて改善策等を回答。
3）奈良産業大学平成24年度後期授業評価アンケート	平成25年1月23日	「日本語コミュニケーションⅡ」について、授業評価アンケートを受けて改善策等を回答。
4）奈良産業大学平成25年度前期授業評価アンケート	平成25年7月24日	「コーチング論」「日本語コミュニケーションⅠ」について、授業評価アンケートを受けて改善策等を回答。
5）奈良産業大学平成25年度後期授業評価アンケート	平成26年1月22日	「日本語コミュニケーションⅡ」について、授業評価アンケートを受けて改善策等を回答。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）王寺町「リーベル・カレッジ」公開講座　講師	平成19年9月	王寺町リーベルカレッジにおいて、「スポーツで子どもを育てる」をテーマで講演。凶悪犯罪の低年齢化が進む日本社会において、その要因として発育期におけるインターネット・携帯電話・テレビゲーム等の脳への悪影響を挙げ、その防止策として発育期の子どもたちにスポーツの楽しさ、外遊びの面白さを教えることの重要性を説いた。
2）日韓大学サッカー指導者セミナー（光云大学）シンポジウムパネラー	平成21年3月	毎年3月に実施される「日韓大学サッカー指導者セミナー」のパネラーとして登壇。韓国から3名、日本から3名の指導者が両国の大学サッカーの育成システムや強化策を討論。
3）王寺町「リーベル・カレッジ」公開講座　講師	平成22年6月	王寺町リーベルカレッジにおいて、FIFAワールドカップ南アフリカ大会の開催中に合わせて「FOOTBALLの歴史」について講演。フットボールの成立から世界への普及・発展、FIFAワールドカップの誕生から現在の発展に至る歴史について映像を交えて解説。

5　その他		
1）日本サッカー協会公認「C級コーチ養成講習会」の開催	平成23年6月～9月	奈良産業大学プロジェクト演習「スポーツ指導者養成」の受講生中、サッカー経験者に対して、日本サッカー協会公認「C級コーチ養成講習会」を別途開催し、6名が資格を取得。
1)奈良教育大学における教育実践	平成13年10月～平成22年3月	奈良教育大学の非常勤講師として後期の半年間「球技Ⅱ（サッカー）」を担当した。
2）同志社大学における教育実践	平成14年４月～平成20年３月	同志社大学法学部の嘱託教員として「スポーツパフォーマンスⅠ（サッカー）」を担当した。
3）同志社大学における教育実践	平成20年４月～	同志社大学健康スポーツ科学部の嘱託教員として「スポーツパフォーマンスⅠ（サッカー）」を担当している。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1．資格 (一財）日本体育協会公認Ｃ級スポーツ指導員取得 （一財）日本体育協会（財）日本サッカー協会公認Ｂ級コーチ取得 （一財）日本体育協会（財）日本サッカー協会公認Ａ級コーチ取得 （一財）日本サッカー協会準指導員インストラクター （ＪＦＡ:Ｃ級コーチ講習会インストラクター資格）	平成3年10月 平成9年10月 平成11年10月 平成14年4月～現在に至る	奈良県内でのサッカー指導が可能の公認資格 サッカー競技力向上を目的に、ユース年代の指導が可能の公認資格 サッカー競技力向上を目的に、アマチュアのトップレベルの指導が可能の公認資格 （一財）日本サッカー協会公認Ｃコーチ養成講習会のインストラクターを務めることが可能な資格
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）（一財）全日本大学サッカー連盟	平成7年4月 平成17年4月 平成21年4月 平成22年7月	技術委員（平成20年3月まで） 理事（現在に至る） 副理事長（現在に至る） 理事長はじめ各理事と協同のもと、全日本大学サッカー連盟の法人化を果たす。
2）関西学生サッカー連盟	昭和62年4月 昭和62年4月 平成6年4月 平成18年4月 平成20年4月	理事（現在に至る） 技術委員（平成20年3月まで） 技術委員長（平成12年3月まで） 副理事長（平成20年3月まで） 理事長（現在に至る）
3）（社）奈良県サッカー協会	昭和63年4月 昭和63年4月 平成10年4月 平成14年4月	理事(平成10年3月まで) 技術委員（平成22年3月まで） 総務委員（平成14年3月まで） 理事(平成26年3月まで)
4）関西サッカー協会	平成21年4月	理事（現在に至る）
5）ユニバーシアード男子サッカー代表チーム（再掲）	平成7年8月 平成9年5月 平成9年7月 平成15年8月 平成19年8月	福岡大会コーチ（優勝） 第2回東アジア競技大会コーチ（準優勝）銀メダル シシリー大会コーチ（9位） 大邱大会監督（優勝） バンコク大会チームリーダー（5位）
6）（財）奈良県体育協会	平成21年1月	競技力向上専門委員会委員（現在に至る）
7）テレビ解説	平成18年6月	ＮＨＫ教育テレビ 第35回関西学生サッカー選手権大会決勝戦 立命館大学対関西大学（14:00～長居陸上競技場）
8）テレビ解説	平成20年6月	ＮＨＫ教育テレビ 第37回関西学生サッカー選手権大会決勝戦 阪南大学対大阪体育大学（14:00～長居陸上競技場）

４　その他		
学内業務		
1）スポーツ振興委員会委員	平成20年4月～	奈良産業大学ビジネス学部
2)評議員	平成21年4月～	奈良産業大学ビジネス学部
3）スポーツ振興委員長	平成23年4月～	奈良産業大学
4）就職委員会委員	平成23年4月～ 平成25年３月	奈良産業大学ビジネス学部
5）年間行事検討委員会委員	平成22年4月～ 平成24年3月	奈良産業大学ビジネス学部
6)自己点検・評価委員会委員長	平成25年9月～	

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
なし				
（学術論文）				
1．フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究（Ⅰ）－若年層における選手育成システムの現状と特徴ー	共著	平成18年9月	大阪教育大学「紀要」第ＩＶ部門５５巻１号 ｐ51～p70	1998年フランス・ワールドカップにおいて、地元フランス代表チームが優勝した。その要因は1970年代から始まった選手育成システムによる若手選手の育成にある。フランスの青少年期におけるサッカー選手育成システムに着目し、その長期的な視野に立った若年層の選手育成システムの理念と実情を分析。 本人担当部分：共同研究のため抽出は困難。主に1995年に国立サッカー学院（I.N.F)での合宿経験を活かして、サッカー学院概要に関するものに関与。 共著者：松原英輝、入口豊、中野尊志、西田裕之、中村泰介
2．フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究（Ⅱ）－若年層における選手育成システムの現状と特徴ー	共著	平成19年2月	大阪教育大学「紀要」第ＩＶ部門５５巻2号 ｐ27～p44	1998年フランス・ワールドカップにおいて、地元フランス代表チームが優勝した。その要因は1970年代から始まった選手育成システムによる若手選手の育成にある。フランスの青少年期におけるサッカー選手育成システムに着目し、その長期的な視野に立った若年層の選手育成システムの理念と実情を分析。 本人担当部分：共同研究のため抽出は困難。主に1995年に国立サッカー学院（I.N.F)での合宿経験を活かして、サッカー学院概要に関するものに関与。 共著者：松原英輝、入口豊、中野尊志、西田裕之、中村泰介

3、教育課程の改善と「プロジェクト演習」による教育の可能性・「スポーツ指導者養成プロジェクト」の取り組みから	共著	平成24年12月	奈良産業大学「紀要」第28集P.65～p.78	2007年にビジネス学部が、経済・経営・法の3学部を統合・改組し設置された。新学部の学部教育目標を充たすために専門科目では演習重視のカリキュラムを提示した。学年の枠を超えた、グループによる体験型学習によって、「学士課程共通の学習成果に関する指針」に応えるべく、カリキュラムとして「プロジェクト演習」が組まれた。［社会参画］［グループワーク］［課題研究］［知識活用］を共通コンセプトとして講座の目標を掲げ、実践活動を行ってきた。「スポーツ指導者養成」の担当者として、４年間のまとめと今後の課題を明らかにした。本人担当部分：プロジェクト演習「スポーツ指導者養成」のなかで、「キッズリーダー養成講習会」「幼稚園巡回指導アシスタント」「JFA公認Ｃ級コーチ養成講習会」「救急救命士講習会」の実施担当者。 共著者：清水啓司、西田裕之
イングランドにおけるフットボール報道に関する史的研究（Ⅰ）ー1888年“Athletic News”紙の一面記事にみるFootball League報道を中心にー	共著	平成26年9月	大阪教育大学「紀要」第ＩＶ部門６３巻第１号	共著者：中野尊志、西田裕之、井上功一、入口豊 イングランドが近代フットボール発祥の地と言われるが、日本において、イングランドにおけるFootball Leagueの設立経緯や当時の状況について詳しく取り上げた資料はほとんど見当たらない。本研究は、1800年代後半の有力週刊スポーツ誌Athletic Newsがイングランドのフットボール界での革命的な出来事であった1888年のFootball Leagueの設立や実施に関して行った報道実態を明らかにする史的研究である。
イングランドにおけるフットボール報道に関する史的研究（Ⅱ）ー1888年“Athletic News”紙のフットボール界の収入・支出に関わる報道を中心にー	共著	平成27年2月	大阪教育大学「紀要」第ＩＶ部門６３巻第2号	共著者：中野尊志、西田裕之、井上功一、入口豊 『イングランドにおけるフットボール報道に関する史的研究（Ⅰ）－1888年“AthleticNews”紙の一面記事にみるFootball League報道を中心にー』に続く第Ⅱ報である。第Ⅱ報では、1888年のAthletic News紙一面記事にみるフットボール界における収入と支出に関する報道実態を①大会・試合、②各クラブ、③各協会の３つの項目に分けて明らかにしていく。
（その他）				
〈研究ノート〉 1、サッカー（フットボール）の誕生	単著	平成24年12月	奈良産業大学「紀要」第28集P.193～p.198	1990年代に入り世界の舞台で活躍するようになった日本のサッカー。これから世界のベスト１０入りを目標に掲げての強化を行う。そのためには日本独自の戦術を確立することが重要である。しかしその前に、まず、サッカーの誕生について知ることから始める。人間で一番器用に使えるのは手である。しかし、その手の使用を禁止したサッカー。このことが現在のようなサッカーに発展させた一番の要因と考える。これを今後の日本サッカーの戦術を研究する始めとする。
（オープンキャンパス・出張講義）				
１、「ユニバーシアード大邱大会　優勝の軌跡」	単独発表	平成18年9月	奈良産業大学オープンキャンパス	ユニバーシアード大邱大会優勝監督として、チーム立ち上げから本大会優勝までの軌跡を映像を使用して紹介。
2、「スポーツ指導者養成プロジェクト」	単独発表	平成19年9月	奈良産業大学オープンキャンパス	新学部のビジネス学部での取り組み「プロジェクト演習」の「スポーツ指導者養成」についての授業内容を紹介。
3、「フットボールの誕生」	単独発表	平成24年8月	奈良産業大学オープンキャンパス	ロンドンオリンピック期間中のオープンキャンパスにおいて、注目されているサッカーに焦点を絞り、その誕生についてミニ講義を実施。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　平尾　透

研究分野	研究内容のキーワード

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）特記事項なし		
2　作成した教科書，教材		
1）現代社会入門	平成18年3月	学内1回生向けオムニバス講義用（その第5講）
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）特記事項なし		
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
4　その他		
1）特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1.『統合主義ー政治の基本原則』	単	平成21年7月	ミネルヴァ書房	オリジナルな歴史理論である「統合史観」に基いて、人類の幸福を実現するための普遍的政治原則を打ち出した。 またそうした「統合主義」の観点から、日本にとって重大な「国民国家」および「日本帝国主義」の問題についても本格的に論じられている。A4判303頁。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏　名　　福留　和彦

研究分野	研究内容のキーワード
理論経済学、応用経済学、経済政策	経済政策、共生の経済学、幸福の経済学、日本経済／関西経済

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1)　ＩＴ機器を活用した教育実践	平成24年4月から 現在に至る	【大学名】 奈良産業大学(ビジネス学部ビジネス学科) 【科目名】 経済政策Ⅰ・Ⅱ 【内容】 ワープロ教材、パワーポイント教材とプロジェクターを使い、視覚的な効果から学生の理解度を促進。同教材を授業時間中にプリントとして配布し、かつ、学内LANで結ばれるサーバー上の「教材箱」にデジタルデータとして保管することで、授業に欠席した学生やプリントを紛失した学生でも、学生自身でプリントアウトできるように配慮した。予習のために、先々の授業内容に関する資料も「教材箱」に。学生による学内IT機器の利用促進の狙いもある。 【成果(効果)】 ①板書量の削減、口頭説明への注力向上、その結果としての学生の理解度の向上。 ②授業中での文章、図表類の再掲示が瞬時に行えた。 ③授業で前週内容を復習する際、瞬時に授業内容を再現可能。 ④予習・復習等学生の自習を支援した。
	平成16年4月～ 現在に至る	【大学名】 近畿大学(経済学部) 【科目名】 マクロ経済学 産業構造論Ⅰ 産業構造論Ⅱ 【内容】 ワープロ教材、パワーポイント教材とプロジェクターを使い、視覚的な効果から学生の理解度を促進。同教材を授業時間中にプリントとして配布。 【成果(効果)】 ①板書量の削減、口頭説明への注力向上、その結果としての学生の理解度の向上。 ②授業中での文章、図表類の再掲示が瞬時に行えた。 ③授業で前週内容を復習する際、瞬時に授業内容を再現可能。 【大学名】 近畿大学(法学部) 【科目名】 経済原論A 経済原論B 【内容】 ワープロ教材、パワーポイント教材とプロジェクターを使い、視覚的な効果から学生の理解度を促進。同教材を授業時間中にプリントとして配布。 【成果(効果)】 ①板書量の削減、口頭説明への注力向上、その結果としての学生の理解度の向上。 ②授業中での文章、図表類の再掲示が瞬時に行えた。 ③授業で前週内容を復習する際、瞬時に授業内容を再現可能。

	平成19年4月～ 平成20年9月	【大学名】 関西大学（経済学部） 【科目名】 学際講座2・開発経済学のアイデア 【内容】 ワープロ教材、パワーポイント教材とプロジェクターを使い、視覚的な効果から学生の理解度を促進。同教材を授業時間中にプリントとして配布。 【成果（効果）】 ①板書量の削減、口頭説明への注力向上、その結果としての学生の理解度の向上。 ②授業中での文章、図表類の再掲示が瞬時に行えた。 ③授業で前週内容を復習する際、瞬時に授業内容を再現可能。
2）教育効果を高めるためのその他の教育実践	平成19年4月から 現在に至る	【大学名】奈良産業大学ビジネス学部 【内容】eメールおよび学内LAN上の「教材箱」「提出箱」を利用した教員―学生間、学生―学生間の授業時間外の日常的なコミュニケーションを活性化。夏季休暇、冬期休暇、ゴールデンウィークなどの長期休日が教育の断絶、学習の停滞を生むことから、遠隔地間のコミュニケーション・ツールとしてeメールを活用し、学生への連絡や質問の受付を行っている。レポート課題や卒業論文指導もeメールの添付ファイル機能を利用している。データ量の大きなファイルの受け渡しは学内LAN上の「提出箱」を使用。 【成果（効果）】 ①eメールによる質問と回答は、経済政策Ⅰ・Ⅱや日本経済論では授業内容だけでなく、同時進行の時事問題についての質問も多く、社会問題への関心の喚起や、それと授業内容との関連についての理解度の向上ができた。 ②eメールの添付ファイル機能によって、論文やレポート作成の個別指導が日常的に行うことができ、指導回数や密度が格段に向上した。 ③プロジェクト演習の成果発表会に向けた発表資料の作成について、学内LAN上の「教材箱」や「提出箱」を通じて効率的に指導できた。 【大学名】 奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 専門演習Ⅱ、短期プロジェクト演習（ERE挑戦） 【内容】 オフィスアワーの活用や授業時間の延長による学生の学習のサポート。また、奈良産業大学学習支援センター主催によるリメディアル教育(課外補習)への参加。論文作成指導や資格試験指導の場合、通常の授業時間では不十分なため、学生の同意を得て授業時間を延長（最大2時間半）、オフィスアワーをその時間に割り当てたりした。またEREは、経済数学の知識が必要なため、学生たちと教員の時間的都合を調整し、都合の付く曜日時間帯で経済数学の授業を研究室で行った。 【成果（効果）】 ①モンゴルやミャンマーからの留学生に、毎週のオフィスアワーを重要文献の解読時間とし、日本の経済発展や日本の資本主義を学んでもらい、卒業論文を作成した。 ②経済学検定試験（ERE）では、2科目受験（ミクロ経済学・マクロ経済学）でB+およびBに合格した（各1名）。

2）教育効果を高めるためのその他の教育実践（続き）		【大学名】 奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 短期プロジェクト演習 「一流ビジネスパーソンとの交流プロジェクト」 「ERE挑戦プロジェクト」 プロジェクト演習「奈良観光振興プロジェクト」 【内容】 奈良産業大学ビジネス学部のカリキュラムの特徴である体験型学習プログラムとしての「プロジェクト演習」の実施。 ①「一流ビジネスパーソンとの交流プロジェクト」 筆者の学外での人脈を活かし、関西経済同友会会員企業から数社、部課長クラスのビジネスパーソンに延べ10回講義を担当して頂き、学生たちと活発な討論を行った。 ②「ERE挑戦プロジェクト」 毎時間ミクロ経済学またはマクロ経済学の練習問題の解答に演習参加者全員が取り組んだ。並行して経済数学の練習も行った。 ③「奈良観光振興プロジェクト」 信貴山（朝護孫子寺、門前町など）との協力のもと、当演習が観光地図を作成し、それを基にしたモニターツアーを企画・実施した。また隣町の平群町の時代祭にボランティア参加し、同祭りの成功に貢献した。また比較研究の重要性から、奈良以外の観光地・歴史遺産（大阪新世界、京都伏見）でのフィールドワーク、同じ奈良県下の他地域（法隆寺界隈、高取城跡など）にも調査に行った。学内での授業ではプレゼンテーションやレポート・レジュメ作成の訓練を行い、そのほか教員によりマーケティング論や広告論を講義したりした。 【成果（効果）】 ①「一流ビジネスパーソン交流プロジェクト」 多くの演習生がビジネスの最前線で活躍しているビジネスパーソンの馬力や姿勢に感化された。一部の学生はその後の実力向上が認められ、講師関係企業に就職を果たしている。 ②「ERE挑戦プロジェクト」 授業期間に2回の受験機会があり、最終的にB+級とB級の合格者を出し、奈良産業大学でEREの単位認定が制度化されて以来はじめての単位認定を果たした。 ③「奈良観光振興プロジェクト」 地元・信貴山の協力でモニターツアーを企画協力し、成功させた。また平群町の時代祭に協力参加し、成功に貢献した。 【大学名】 本務校（奈良産業大学）、非常勤先大学 【科目名】 経済政策Ⅰ・Ⅱ 日本経済論 【内容】 web上にある各種ホームページ・webサイトの活用。本務校および非常勤先で担当している専門科目・教養科目の教育効果を高めるため、web上の各種ホームページやwebサイトを活用している。経済政策Ⅰ・Ⅱや日本経済論の授業では衆議院や参議院の各種委員会及び本会議のストリーミング映像を使い、現在進行形の日本の諸問題を学生に認識させる一助としている。また、政府関係機関（内閣府、総務省、日銀など）や報道機関（各種新聞社など）の閲覧、YouTubeから目的の動画を参照したり、ネットを使った情報収集の仕方を教えている。 【成果（効果）】 ①授業に関連する情報のインターネット上の所在を覚える。 ②官公庁ホームページから無料ダウンロードできる資料や、国会中継などストリーミング動画映像によって興味関心を喚起できた。

２　作成した教科書，教材		
1）福留和彦〔1993年〕「発展途上国工業化の過程分析―メキシコと韓国を事例にとって―」（『大阪市大論集』第73号所収）	平成19年4月～ 平成25年3月	【大学名】 関西大学経済学部 【科目名】 学際講座2開発経済学のアイデア 【内容】 輸入代替工業化戦略と輸出志向工業化戦略、貿易構造と産業構造の関係を論じた雁行形態論の説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】 和歌山大学経済学部 【科目名】 開発経済学 【内容】 輸入代替工業化戦略と輸出志向工業化戦略、貿易構造と産業構造の関係を論じた雁行形態論の説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】 大阪産業大学経済学部 【科目名】 産業構造論 【内容】 輸入代替工業化戦略と輸出志向工業化戦略、貿易構造と産業構造の関係を論じた雁行形態論の説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】 近畿大学経済学部 【科目名】 産業構造論Ⅰ・Ⅱ 【内容】 輸入代替工業化戦略と輸出志向工業化戦略、貿易構造と産業構造の関係を論じた雁行形態論の説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。
2）福留和彦〔1997年〕「蓄積停止を考慮した農工2部門モデル」（『経済学雑誌』第98巻1号所収）または福留和彦〔2008年〕「アーサー・ルイスの二重経済論」（『社会科学雑誌』第1巻創刊号所収）	平成19年4月～ 平成25年3月	【大学名】 関西大学経済学部 【科目名】 学際講座2開発経済学のアイデア 【内容】 工業化過程における産業構造の変化、都市化、農業の役割などを説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】 和歌山大学経済学部 【科目名】 開発経済学 【内容】 工業化過程における産業構造の変化、都市化、農業の役割などを説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】 大阪産業大学経済学部 【科目名】 産業構造論 【内容】 工業化過程における産業構造の変化、都市化、農業の役割などを説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】 近畿大学経済学部 【科目名】 産業構造論Ⅰ・Ⅱ 【内容】 工業化過程における産業構造の変化、都市化、農業の役割などを説明。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。

3）PowerPoint／Word教材 3－1．PowerPoint／Word：基礎経済学Ⅰ（ミクロ経済学編） 3－2．PowerPoint：基礎経済学Ⅱ（マクロ経済学編） 3－3．Word：経済数学 3－4．PowerPoint／Word：経済政策Ⅰ・Ⅱ 3－5．PowerPoint／Word：日本経済論 3－6．PowerPoint／Word：マクロ経済学 3－7．PowerPoint：経済原論（ミクロ経済学編） 3－8．Word：経済原論A（ミクロ経済学編） 3－10．Word：経済原論B（マクロ経済学編） 3－11．PowerPoint：開発経済学のアイデア	平成16年4月～ 現在に至る	【大学名】奈良産業大学経済学部、ビジネス学部 【科目名】 基礎経済学Ⅰ　PowerPoint／Word教材（3－1） 基礎経済学Ⅱ　PowerPoint／Word教材（3－2） 特殊講義(経済数学演習)　Word教材（3－3） 経済政策Ⅰ・Ⅱ　PowerPoint／Word教材（3－4） 日本経済論　PowerPoint／Word教材（3－5） 【大学名】近畿大学経済学部、法学部 【科目名】 マクロ経済学（経済学部）PowerPoint／Word教材（3－6） 経済原論A（法学部）　PowerPoint教材（3－7） Word教材(3－8) 経済原論B（法学部）　Word教材（3－10） 【大学名】関西大学経済学部 【科目名】 開発経済学のアイデア　PowerPoint教材（3－11）
4）福留和彦〔1997年〕「情報の経済学を乗り越えて―経済発展の経済学の探求―」（『経済学雑誌』第97巻5・6号所収）	平成15年4月～ 現在に至る	【大学名】奈良産業大学経済学部、和歌山大学経済学部 【科目名】経済政策Ⅰ・Ⅱ（奈良産業大学） 開発経済学（和歌山大学） 【内容】 1．情報の非対称性、不確実性の基本事項。 2．「反新古典派の経済学」「開発経済学への情報の経済学の導入」などJ.E.スティグリッツやG.アカロフの情報の経済学の理論構造や特徴、問題点を説明。 【成果（効果）】講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。
5）福留和彦〔2001年〕「開発経済学の再生に向けて―市場経済化をどう理論化するか―」（富山大学極東地域研究センター報告レジュメ）	平成15年4月～ 平成23年3月	【大学名】奈良産業大学経済学部 【科目名】経済政策 【内容】開発経済学の現状と課題、IMFや世界銀行の構造調整プログラムの問題点などを説明。 【成果（効果）】講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】関西大学経済学部 【科目名】学際講座2開発経済学のアイデア 【内容】開発経済学の現状と課題、IMFや世界銀行の構造調整プログラムの問題点などを説明。 【成果（効果）】講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】和歌山大学経済学部 【科目名】開発経済学 【内容】開発経済学の現状と課題、IMFや世界銀行の構造調整プログラムの問題点などを説明。 【成果（効果）】講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。
6）福留和彦・福島健彦〔2001年〕「新しい時代の企業間電子商取引の可能性」（関西社会経済システム研究所（現関西社会経済研究所）デジタルエコノミー研究会編『デジタルエコノミーの進展と関西の産業競争力・企業活動に関する研究』所収第3章）。福留和彦〔2001年〕「IT化の進行と企業間電子商取引の可能性」（『産業と経済』第16巻1号所収）。	平成15年4月～ 平成25年3月	【大学名】奈良産業大学経済学部 【科目名】経済政策 【内容】テーマ「反新古典派の経済学」で引用。情報の経済学の盲点や、市場システムの構築の一例として参照。 【成果（効果）】講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】近畿大学経済学部 【科目名】産業構造論Ⅱ 【内容】テーマ「情報産業」で同論考を使用。電子商取引市場の仕組みや、90年代後半以降のIT革命における情報問題の解説。 【成果（効果）】講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。

7）竹山理・根岸章・福留和彦著〔2004年〕『経済数学入門』産図テクスト	平成16年4月～ 現在に至る	【大学名】 奈良産業大学経済学部経済学科 【科目名】 理論・経済史特殊講義(経済数学演習) ベーシック数理Ⅰ・Ⅱ 基礎数学Ⅰ・Ⅱ 【内容】 上記科目用に執筆・使用したテキスト。ベーシック数理Ⅰ・Ⅱおよび基礎数学Ⅰ・Ⅱではサブテキスト。 第Ⅰ部　経済数学への準備 第1章　関数とグラフ　（根岸執筆） 第2章　方程式　（福留執筆） 第3章　数列　（福留執筆） 第4章　微分法　（根岸執筆） 第Ⅱ部　経済数学の基礎 第5章　行列と行列式　（竹山執筆） 第6章　1変数関数の微分（竹山執筆） 第7章　2変数関数の微分（竹山執筆） 【成果(効果)】 基礎経済学(必修科目)、ミクロ経済学、マクロ経済学等経済理論に必要な数学知識を修得させた。ベーシック数理Ⅰ・Ⅱおよ基礎数学Ⅰ・Ⅱでは関連トピックを同テキストから引用した。
8）福留和彦〔2005年〕「実質利子率の低下は投資需要を増加させるか？―インフレ・ターゲティング論への留保―」（『産業と経済』第20巻4号所収）	平成18年4月～ 現在に至る	【大学名】 奈良産業大学経済学部、奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 経済政策Ⅰ・Ⅱ 【内容】 不況期の金融緩和政策の説明、インフレターゲティング政策の説明および批判。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。 【大学名】 近畿大学法学部 【科目名】 経済原論A、経済原論B 【内容】 不況期の金融緩和政策の説明、インフレターゲティング政策の説明および批判。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。
9）奈良産業大学ビジネス学部編『専門基礎科目Ⅱ』(株)明新社	平成19年4月～ 現在に至る	【大学名】 奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 経済の仕組みとビジネス （経済入門） 経済政策Ⅰ・Ⅱ 【内容】 専門基礎科目専用に学内スタッフにより執筆されたテキスト。福留は奈良産業大学ビジネス学部ビジネス科准教授(平成24年度より教授)として担当の「経済入門(平成23年4月から「経済の仕組みとビジネス」)」部分を担当執筆。経済分析の最も基本部分を学生に体得させることを狙いに、需給均衡分析と比較優位論に限定した具体例を収録。経済政策Ⅰ・Ⅱではこれをサブテキストとし、同書内の関連トピックを引用している。 【成果(効果)】 ①オリジナルテキストゆえのシラバスとの整合性の高さ。 ②学生の予習・復習の支援。
10）福留和彦〔2006年〕「高齢化の進行と日本経済のあり方―生活水準・国民負担率・経済成長率―」（『産業と経済』第21巻1号所収）	平成19年4月～ 平成26年3月	【大学名】 奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 日本経済論 【内容】 テーマ「国民負担率と経済成長」を説明。少子高齢化が進む日本経済が目指す方向を3つ提示し、増大する社会保障費に対応するためにプラスの経済成長率が必要であること、その値を試算し提示した。 【成果(効果)】 講義者(福留)の執筆であることの授業内容との整合性。

11）進化経済学会編〔2006年〕『進化経済学ハンドブック』共立出版	平成22年4月～ 現在に至る	【大学名】 近畿大学経済学部 【科目名】 産業構造論Ⅱ 【内容】 テーマ「情報産業」で同書の「情報革命」を引用。当該項目は講義者（福留）の執筆。 【成果（効果）】 情報革命の定義が講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。
12）福留和彦〔2011〕「高齢化する日本の社会保障モデル」（『社会科学雑誌』第3巻所収）	平成24年4月～ 平成26年3月	【大学名】 奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 日本経済論 【内容】 テーマ「国民負担率と経済成長」におて、勤労者と老齢者の受益・負担関係と、社会保障財源として保険料と税金の組み合わせ比率という要素を組み込んだより詳細な議論を説明した。 【成果（効果）】 講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。
13）福留和彦〔2013〕「「幸福の経済発展論」試論　―社会/経済システムを中心に―」（『奈良産業大学紀要』第29集所収）	平成25年4月～ 現在に至る	【大学名】 奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 経済政策Ⅰ・Ⅱ 専門演習Ⅱ 【内容】 現在の日本や地域経済が直面している政策的課題として、人々の豊かさや幸福をどう考えるかという問題があり、経済学としてどのように挑戦できるかを説明した。 【成果（効果）】 講義者（福留）の執筆であることの授業内容との整合性。
14）福留和彦〔2013〕「「論じる」文章の要件とは何か？―社会科学論文・レポートに求められること―」（『奈良産業大学紀要』第30集所収）	平成25年4月～ 現在に至る	【大学名】 奈良産業大学ビジネス学部 【科目名】 専門演習Ⅱ プロジェクト演習Ⅰ「公務員養成プロジェクト」 【内容】 専門演習Ⅱにおいては卒業論文指導に、プロジェクト演習では公務員試験問題にある要旨把握や論述問題対策へのテキストの一つとして使用。 【成果（効果）】「論じる」文章の要件とはなにか、それが欠けると論文や研究レポートとはなりえないことを注意できた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）拙稿「論文・レポートの書き方」への評価（評価者：奈良学園理事・水野隆徳）	平成22年4月12日	本人が執筆した「論文・レポートの書き方」（奈良産業大学経済経営学会NEWSLETTER no.38）に対し奈良学園理事（当時）・水野隆徳が評価。藤原昇学長宛書簡にて。以下原文ままま。「福留和彦氏は「奈良産業大学　経済経営学会　NEWSLETER No.38」の中で、優秀賞「麻生内閣の経済政策における定額給付金の検証」に関して講評し、論文やレポートを作成する場合の基本的要件について氏の見解を披歴している。内容は学生にとっては相当難しいものとなっているが、一人でも多くの教員がこのような姿勢で卒業論文や報告・レポート、試験結果の指導に当たってもらえればという思いをもった次第です。」

2）授業評価アンケート 近畿大学経済学部「産業構造論Ⅱ」	平成23年後期	教員評価に該当する項目全般に関して、全科目平均(5段階評価)を大きく上回る結果であった。 ＜例＞ 「授業内容は理解できたか」得点4.0(全科目平均3.8) 「教員の説明の仕方はわかりやすかったか」得点4.5(同3.9) 「教員の話し方は明瞭だったか」得点4.5(同4.0) 「黒板文字やパワーポイント資料の提示は明瞭だったか」得点4.3(同3.9) 「授業に刺激され授業内容に興味を持つようになったか」得点4.0(同3.7) 「教員は授業の準備を十分にしていたか」得点4.5(同4.2) 「授業に対する教員の熱意を感じたか」得点4.3(同)4.1 「教員は学生の質問、疑問、意見をくみとってくれたか」得点4.5(同4.0) 「教員のあなたがたへの接し方は適切だったか」得点4.8(同4.0) 「この教員の授業を10点法で評価せよ」得点8.5(同7.8)
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
特記事項なし		
５　その他		
1）奈良産業大学経済学部経済学科における教育実績	平成15年4月～ 平成19年3月	奈良産業大学経済学部経済学科助教授（平成15年4月から平成19年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「基礎経済学Ⅰ（ミクロ）」（平成15年4月～平成18年9月） 「基礎経済学Ⅱ（マクロ）」（平成15年10月～平成19年3月） 「理論・経済史特殊講義（経済数学演習）」（平成15年4月～平成19年3月） 「経済政策」（平成16年4月～平成19年3月） 「専門演習Ⅰ（経済学の考え方を実践しよう）」（平成15年4月～平成16年3月） 「専門演習Ⅰ（経済学で鍛えよう）」（平成16年4月～平成18年3月） 「専門演習Ⅰ（経済学的思考の技術）」（平成18年4月～平成19年3月） 「専門演習Ⅱ」（平成15年4月～平成18年3月） 「専門演習Ⅱ（卒論の準備）」（平成17年4月～平成19年3月） 「卒業論文」（平成18年4月～平成19年3月）

		「基礎経済学Ⅰ（ミクロ）」「基礎経済学Ⅱ（マクロ）」は、赤堀・渡辺・服部〔2002年〕『エッセンシャルズ基礎経済学』を使ってミクロ経済学とマクロ経済学の基礎を講じた。平成16年度は教科書として嶋村紘輝・横山将義〔2003年〕『図解雑学ミクロ経済学』井堀利宏〔2002年〕『図解雑学マクロ経済学』も使用した。 「理論・経済史特殊講義（経済数学演習）」は、教科書として竹山・根岸・福留〔2004年〕『経済数学入門』を執筆・使用し、基礎経済学Ⅰ・Ⅱに必要な関数、方程式、数列、微分の基礎を講じた。 「経済政策」は、IS-LMモデル、AD-ASモデルを講じた。平成18・19年度は発展途上国の経済政策を加えて講じた。 「専門演習Ⅰ」は、コミュニケーション能力、デザイン能力（企画・構成能力）、論理的思考力、問題発見能力などを鍛えることを目的とし、日本経済新聞社編〔2003年〕『ゼミナール日本経済入門』、野口旭〔2003年〕『らくらく入門塾経済のしくみがすんなりわかる講座』、伊藤元重〔2000年〕『市場主義』、大瀧雅之〔2001年〕『景気循環の読み方』などを教科書として使用した。平成17年度は教員が用意した30冊の経済関係図書から各自1冊異なる図書を選ばせ、1人がその1冊を読破し発表させるようにした。平成18年度は会計学の知識も取り入れ山田真哉〔2005年〕『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』、西野武彦〔2003年〕『ゼロから始める決算書の読み方』を追加した。 「専門演習Ⅱ」は、専門演習Ⅰで培った各種能力を基礎に、サブテキストとして澁谷恵宜〔2000年〕『卒論応援団』を読ませ、卒業論文の作成を指導した。平成16年度は教員が厳選した10冊の経済関係図書のうちから各自必ず1冊選ばせて、それに関連する卒業論文を書かせた。 「専門演習Ⅱ（卒論の準備）」は、卒論準備としてスティグリッツ＝ウォルシュ〔2005年〕『スティグリッツ入門経済学（第3版）』を読ませた。 「卒業論文」は、卒業論文作成指導を行った。
2）近畿大学経済学部における教育実績	平成16年4月～平成18年3月	近畿大学経済学部非常勤講師（平成16年4月から平成18年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「マクロ経済学」（平成16年4月～平成18年3月） 「マクロ経済学」は、ＳＮＡ、乗数理論、消費関数、投資関数、IS-LMモデル、AD-ASモデル、マクロ生産関数などを取り上げ、マクロ経済学の標準的な考え方や道具を説明した。
3）近畿大学法学部における教育実績	平成17年4月～平成19年3月	近畿大学法学部非常勤講師（平成17年4月から平成19年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「経済原論」（平成17年4月～平成19年3月） 「経済原論」は、前期にミクロ経済学（完全競争理論、市場の失敗論など）、後期にマクロ経済学（45度線分析、IS-LMモデル、AD-ASモデル）を講じた。

4）奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科における教育実績	平成19年4月～平成24年3月	奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科准教授（平成19年4月から平成26年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「経済入門（平成23年4月から「経済の仕組みとビジネス」へ名称変更）」（平成19年4月～平成24年3月） 「経済政策」（平成19年4月～平成24年3月） 「日本経済論」（平成19年4月～平成24年3月） 「ITリテラシーⅠ」（平成21年4月～平成21年9月） 「ITリテラシーⅡ」（平成21年10月～平成22年3月） 「ベーシック数理Ⅰ」（平成22年4月～平成22年9月） 「基礎数学Ⅰ」（平成23年4月～平成23年9月） 「基礎数学Ⅱ」（平成23年10月～平成24年3月） 「導入演習」（平成19年4月～平成19年9月） 「基礎演習」（平成19年10月～平成20年3月） 「短期プロジェクト演習（一流ビジネスパーソンとの交流プロジェクト）」平成19年10月～平成20年9月） 「専門演習Ⅱ（経済学部）」（平成19年4月～平成20年3月） 「卒業論文（経済学部）」（平成19年4月～平成21年3月） 「総合演習（E-circle）」（平成20年4月～平成21年3月） 「プロジェクト演習（奈良観光振興プロジェクト）」（平成20年4月～平成23年3月） 「専門演習Ⅰ（経済学的思考を身に付ける）」（平成21年4月～平成22年3月） 「専門演習Ⅱ」（平成22年4月～平成23年3月） 「短期プロジェクト演習（ERE挑戦プロジェクト）」（平成22年10月～平成23年9月） 「経済入門（経済の仕組みとビジネス）」は、指定教科書である奈良産業大学ビジネス学部編『専門基礎科目Ⅱ』所収の「経済の仕組みとビジネス（経済入門）」（担当者執筆）を使い、比較優位の原理や需給均衡分析を講じた。 「経済政策」は、岩田規久男・飯田泰之〔2006年〕『ゼミナール経済政策入門』を教科書とし、マクロ経済政策（財政・金融政策、成長政策）、ミクロ経済政策（公共事業と競争政策、公共財と外部性）、所得再分配政策（税制、年金、医療政策）を講じた。 「日本経済論」は、原田泰〔2008年〕『コンパクト日本経済論』を教科書とし、経済発展（生産性、成長会計分析）、景気循環（失業とインフレーション）、少子高齢化問題などを講じた。 「ITリテラシーⅠ」は、『よくわかるMicrosoft Office Word 2007』（富士通エフ・オー・エム）を教科書とし、基本的な文書作成・編集・保存の仕方を指導した。 「ITリテラシーⅡ」は、『よくわかるMicrosoft Office Word 2007』（富士通エフ・オー・エム）を教科書とし、文書作成に関する応用的機能、Excelデータの取り込み方、総合的な演習問題への取り組みなどを指導した。 「ベーシック数理Ⅰ」は、指定教科書として奈良産業大学ビジネス学部編『ベーシック数理Ⅰ・Ⅱ』を使い、論理、集合算、対応関係、約数・倍数の利用、数列、方程式などを講じた。 「基礎数学Ⅰ」は、(財)日本数学検定協会〔2011年〕『数学検定の完全対策6～8級』を教科書とし、計算技能問題と数理技能問題を学生に解かせ、解法を指導した。 「基礎数学Ⅱ」は、(財)日本数学検定協会〔2010年〕『数検の完全対策3～5級』を教科書とし、計算技能問題と数理技能問題を学生に解かせ、解法を指導した。

		「導入演習」は、指定教科書として奈良産業大学ビジネス学部編『導入演習・基礎演習』を使い、学内施設の利用の仕方、学修計画の立て方、スケジュール管理、ノート筆記のテクニック、情報収集の仕方、学外見学の実施とレポート作成・発表会を指導した。 「基礎演習」は、指定教科書として奈良産業大学ビジネス学部編『導入演習・基礎演習』を使い、レポート作成上の様々な要点について解説・指導した。 「短期プロジェクト演習（一流ビジネスパーソンとの交流プロジェクト）」は、東証1部上場の企業数社の部課長クラスのビジネスパーソンと交流し、業界の特徴、仕事のやり方や意味、一流たりえるための人間力について議論した。 「専門演習Ⅱ（経済学部）」は、200ページほどの小著のなかから最近話題になったものや好著と思うものを学生にできる限り多く読破してもらい、議論した。図書は、山田真哉『さおだけ屋はなぜ潰れないのか？』、山本信幸『キャバクラの経済学』、小菅正夫『＜旭山動物園＞革命』、安倍晋三『美しい国へ』、平野啓一郎『本の読み方　スローリーディングの実践』などを取り上げた。 「卒業論文（経済学部）」は、卒業論文執筆の指導を行った。 「総合演習（E-circle）」は、毎演習90分の時間中を日本語使用禁止とした。教科書として弘兼憲史〔2007年〕『バイリンガル版　部長・島耕作１』を使い、role-playingを英語で行った。 「プロジェクト演習（奈良観光振興プロジェクト）」は、奈良県三郷町、平群町を中心に実地調査を行い、地域の歴史遺産や自然、名所、特産物など観光振興につながる資源の開拓と、プランの作成・提案を学生が主体的に取り組めるよう指導した。「信貴山周辺魅力発見ツアー」の実現や「平群町時代祭」へのボランティア参加、学園祭での地元特産品販売などの成果を得た。 「専門演習Ⅰ」は、G.マンキュー〔2008年〕『マンキュー入門経済学』を教科書指定し、生産可能性フロンティア、比較優位の原理、需給均衡分析、AD-ASモデルなどを身につけさせ、それを使って新聞や雑誌の記事を読み解く練習をさせた。 「専門演習Ⅱ」は、卒業論文の執筆指導を行った。 「短期プロジェクト演習（ERE挑戦プロジェクト）」は、経済学検定試験（ＥＲＥ）のミクロ・マクロＢ、Ｂ＋、Ａ以上の合格を目指してミクロ経済学、マクロ経済学の特訓を行った。教科書として福岡正夫〔2008年〕『ゼミナール日本経済入門（第4版）』、問題集として瀬古・渡辺〔2009年〕『完全マスター　ゼミナール経済学入門（第3版）』、経済数学の教科書として西村和雄〔2003年〕『まんがDE入門　経済数学』を使用した。
5）近畿大学法学部における教育実績について	平成19年4月～平成21年3月	近畿大学法学部非常勤講師（平成19年4月から平成21年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「経済原論」（平成19年4月～平成21年3月） 「経済原論」は、マクロ経済学（45度線分析、IS-LMモデル、AD-ASモデル、開放マクロ経済モデル）を講じた。
6）関西大学経済学部における教育実績について	平成19年4月～平成20年9月	関西大学経済学部非常勤講師（平成19年4月から平成20年9月まで）として、以下の科目を担当した。 「学際講座2　開発経済学のアイデア（前期）」（平成19年4月～平成20年9月） 「学際講座2　開発経済学のアイデア（前期）」は、ルイス・モデル、ラニス＝フェイ・モデル、マハラノビス・モデル、ミントの「組織の二重性」論、分益小作制度と複合契約モデル、マイクロファイナンス、トダロの3部門モデル、クルーグマンの産業立地論を講じた。

7）大阪産業大学経済学部における教育実績について	平成20年4月～ 平成22年9月	大阪産業大学経済学部非常勤講師（平成20年4月から平成22年9月まで）として、以下の科目を担当した。 「産業構造論（前期科目）」（平成20年4月～平成22年9月） 「基礎演習2（前期科目）」（平成20年4月～平成22年9月） 「産業構造論（前期科目）」は、産業構造論の方法論、産業構造変化や産業構造調整、産業政策などについて講じた。 「基礎演習2（前期科目）」は、G.マンキュー『マンキュー経済学＜ミクロ編＞』を教科書にして、需給均衡分析と比較優位の原理を学び、それらの道具を使って実際の経済問題を考える訓練を行った。
8）近畿大学法学部における教育実績について	平成21年4月～ 平成24年3月	近畿大学法学部非常勤講師（平成21年4月から平成24年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「経済原論Ａ」（平成21年4月～平成23年9月） 「経済原論Ｂ」（平成21年10月～平成24年3月） 「経済原論Ａ」は、G.マンキュー『マンキュー入門経済学』を教科書に、経済学十大原理、比較優位の原理、需給均衡分析、弾力性概念、余剰分析、価格規制、課税、外部性について講じた。 「経済原論Ｂ」は、G.マンキュー『マンキュー入門経済学』を教科書に、ＧＤＰ、物価指数、生産と成長、貯蓄・投資と金融システム、貨幣システムと古典派理論、AD-ASモデルを講じた。
9）近畿大学経済学部における教育実績について	平成22年4月～ 平成24年3月	近畿大学経済学部非常勤講師（平成22年4月から平成24年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「産業構造論Ⅰ」（平成22年4月～平成23年9月） 「産業構造論Ⅱ」（平成22年10月～平成24年3月） 「産業構造論Ⅰ」は、産業構造論の方法、産業連関表、ペティ＝クラークの法則、迂回生産化と産業構造の多段階化、雁行形態論とプロダクトサイクル論などを講じた。 「産業構造論Ⅱ」は、高度成長期日本の産業構造変化、現代日本経済と情報産業、金融産業、観光産業などを講じた。
10）和歌山大学経済学部における教育実績について	平成22年9月～ 平成23年3月	和歌山大学経済学部非常勤講師（平成22年9月から平成23年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「開発経済学」（平成22年9月～平成23年3月） 「開発経済学」は、「賢人たちの開発経済論」と題し、J.E.Stiglitz、A.K.Sen、M.Yunus、J.Jacobs、石川滋、中岡哲郎の諸論を講じた。

11）奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科における教育実績	平成24年4月～現在	奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科教授（平成24年4月から現在に至る）として、以下の科目を担当した。 「経済入門（平成23年4月から「経済の仕組みとビジネス」へ名称変更）」（平成24年4月～現在） 「経済政策Ⅰ」（平成24年4月～現在） 「経済政策Ⅱ」（平成24年10月～現在） 「日本経済論」（平成24年4月～現在） 「基礎数学Ⅰ」（平成24年4月～平成24年9月） 「インターンシップⅠ」（平成24年9月～平成25年3月） 「インターンシップⅡ」（平成25年度集中講義） 「プロジェクト演習（奈良観光振興プロジェクト）」（平成24年4月～現在） 「専門演習Ⅰ（ERE挑戦と経済分析力のUP）」（平成24年4月～平成25年3月） 「専門演習Ⅱ」（平成25年4月～現在） 「経済入門（経済の仕組みとビジネス）」は、指定教科書である奈良産業大学ビジネス学部編『専門基礎科目Ⅱ』所収の「経済の仕組みとビジネス（経済入門）」（担当者執筆）を使い、比較優位の原理や需給均衡分析を講じている。 「経済政策Ⅰ」は、平成24年4月～平成26年3月は、マクロ経済指標（ＧＤＰ、ＣＰＩ、労働力と失業率など）、IS-LMモデル、不況下の財政政策について講じている。平成26年4月～現在は、需給均衡分析(余剰分析など)や比較優位論を使ってミクロ経済政策を扱っている。 「経済政策Ⅱ」は、AD-ASモデル、不況下の金融政策、マクロ経済政策と構造改革、日本の「失われた20年」、リフレーション政策、EU経済危機などについて講じている。 「日本経済論」は、戦後日本の経済成長、日米経済摩擦、日本のバブル経済、デフレーション、日本の経済政策（アベノミクスなど）、金本位制の歴史的教訓、新自由主義、少子高齢化と人口減少、幸福の経済発展論を講じている。 「基礎数学Ⅰ」は、(財)日本数学検定協会〔2011年〕『数学検定の完全対策6～8級』を教科書とし、計算技能問題と数理技能問題を学生に解かせ、解法を指導した。 「インターンシップⅠ」は、前半を企業が求める人材としてメーカー編、流通編、サービス編、情報編など業界別に紹介し、後半は実践トレーニング編として時間管理、職場のルール、話し方と動作、接客と他社訪問、電話と電子メール、ビジネス文書について専門講師を招き個人ワークやグループワークをして指導を行った。 「インターンシップⅡ」は、2年次に履修した「インターンシップⅠ」の知識を基礎に、実習先企業でそれを活かす訓練を行い、 その経験を批判的に分析・評価した「自己分析シート」をもとに、事後報告会で発表させる。 「プロジェクト演習（奈良観光振興プロジェクト）」は、平群町の竜田川周辺の城跡、古墳、道の駅などを調査し、成果発表を行った。 「専門演習Ⅰ(ERE挑戦と経済分析力のUP)」は、経済学検定試験（ERE）への挑戦を動機付けにして、学生の経済学知識と経済分析力の向上を図った。これにより次年度の専門演習Ⅱでの卒業論文作成のための基礎体力をつけた。 「専門演習Ⅱ」は、卒業論文の作成指導を行っている。
12）近畿大学経済学部における教育実績について	平成24年4月～平成25年3月	近畿大学経済学部非常勤講師（平成24年4月から平成25年3月まで）として、以下の科目を担当した。 「産業構造論Ⅰ」（平成24年4月～平成24年9月） 「産業構造論Ⅱ」（平成24年10月～平成25年3月） 「産業構造論Ⅰ」は、産業構造論の方法、産業連関表、ペティ＝クラークの法則、迂回生産化と産業構造の多段階化、雁行形態論とプロダクトサイクル論などを講じた。 「産業構造論Ⅱ」は、高度成長期日本の産業構造変化、現代日本経済と情報産業、金融産業、観光産業などを講じた。

13）近畿大学法学部における教育実績について	平成24年4月～現在	近畿大学法学部非常勤講師（平成24年4月から現在に至る）として、以下の科目を担当した。 「経済原論Ａ」（平成24年4月～現在） 「経済原論Ｂ」（平成24年10月～現在） 「経済原論Ａ」は、平成24年4月～平成26年3月までは、G.マンキュー『マンキュー マクロ経済学Ｉ入門篇（3版）』を教科書とし、マクロ経済学のデータ、IS-LMモデル、マンデル＝フレミングモデルを講じた。平成26年4月～現在は、講義用レジュメ(Word)を作成し、需給均衡分析(余剰分析など)や比較優位論を使ってミクロ経済学を講じている。 「経済原論Ｂ」は、平成24年4月～平成26年3月までは、G.マンキュー『マンキュー マクロ経済学Ｉ入門篇（3版）』を教科書とし、マクロ経済学のデータ、IS-LMモデル、AD-ASモデル、貨幣とインフレーション、貯蓄投資バランス論を講じた。平成26年4月～現在は、講義用レジュメ(Word)を作成し、マクロ経済学の基礎データ(GDP、物価、労働人口と失業率、貨幣など)、IS/Lモデル、AD/ASモデルを講じている。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）実用英語検定試験２級	昭和63年	
２）修士（経済学）	平成5年3月	学位番号　第252号 論文題名　二重経済発展論の再検討
２　特許等		
特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
特記事項なし		
４　その他（学内公務歴）		
1）大学要覧委員、学部広報委員、導入演習策定委員。	平成17年4月～平成18年3月	奈良産業大学 大学要覧委員：入学者募集のための広報誌作成。 学部広報委員：所属学部の広報関係案件の検討。 導入演習策定委員：1年次生対象「導入演習」に関わる案件の検討。
2）大学要覧委員、ＦＤ委員、学修支援センター委員、ビジネス学部準備作業部会委員、その他ビジネス学部開設準備に伴う各種作業小部会メンバー。	平成18年4月～平成19年3月	奈良産業大学 大学要覧委員：入学者募集のための広報誌作成。 FD委員：授業アンケート、公開授業、FD後援会の実施、FD研究会への参加などFD活動に関わる案件の企画・検討・実施。 学修支援センター委員：学生の学修サポートや学修への啓発を企画・立案・実施。 ビジネス学部準備作業部会委員：ビジネス学部の開設準備作業。
3）ＦＤ委員、キャリア育成委員。	平成19年4月～平成20年3月	奈良産業大学 FD委員：授業アンケート、公開授業、FD後援会の実施、FD研究会への参加などFD活動に関わる案件の企画・検討・実施。 キャリア育成委員：学生のキャリア形成に関わる案件の検討。
4）ＦＤ委員。	平成20年4月～平成21年3月	奈良産業大学 FD委員：授業アンケート、公開授業、FD後援会の実施、FD研究会への参加などFD活動に関わる案件の企画・検討・実施。

5）オープンキャンパス委員、1年次教育・テキスト作成委員。	平成21年4月～ 平成22年3月	奈良産業大学 オープンキャンパス委員：オープンキャンパスの企画・立案・実施。模擬講義の担当。 1年次教育・テキスト作成委員：ビジネス学部1年次教育に関わる案件の企画・立案・実施と、1年次教育オリジナルテキストの作成。
6）就職委員会副委員長、国際交流センター運営委員、1年次教育・テキスト作成委員、ホームページ小委員会委員、リメディアル教育ワーキンググループ委員、基礎数学検討ワーキンググループ委員。	平成22年4月～ 平成23年3月	奈良産業大学 就職委員会副委員長：学生の就職案件について企画・検討。 国際交流センター運営委員：留学生の学修や生活に関する案件の検討。 1年次教育・テキスト作成委員：ビジネス学部1年次教育に関わる案件の企画・立案・実施と、1年次教育オリジナルテキストの作成。 ホームページ小委員会委員：奈良産業大学ホームページの編集。 リメディアル教育ワーキンググループ委員：リメディアル教育の立案・検討・実施。 基礎数学検討ワーキンググループ委員：1年次生への数学教育の企画・立案・実施。
7）就職委員会委員長、スポーツ振興委員、1年次教育・テキスト作成委員、インターンシップ科目検討ワーキンググループ委員。	平成23年4月～ 平成24年3月	奈良産業大学 就職委員会委員長：就職委員会の招集、方向付け。学生の就職案件について企画・検討。 スポーツ振興委員：強化クラブを初めとした学生のスポーツに関わる案件の企画・検討・実施。 1年次教育・テキスト作成委員：ビジネス学部1年次教育に関わる案件の企画・立案・実施と、1年次教育オリジナルテキストの作成。 インターンシップ科目検討ワーキンググループ委員：インターンシップの科目化に関する制度設計。
8）就職委員会委員長、スポーツ振興委員、高等教育改革推進社会科学関係部会委員。	平成24年4月～ 平成25年3月	奈良産業大学 就職委員会委員長：就職委員会の招集、方向付け。学生の就職案件について企画・検討。 スポーツ振興委員：強化クラブを初めとした学生のスポーツに関わる案件の企画・検討・実施。 高等教育改革推進社会科学関係部会委員：新学部開設準備に関する企画・立案・実施。
9）入学試験委員、1年教育・テキスト作成委員、学校法人奈良学園（仮称）奈良学園大学設置準備委員会現代社会学部会会員。	平成25年4月～ 平成26年3月	奈良産業大学 入学試験委員：ビジネス学部及び情報学部の入試に関する諸業務。 1年次教育・テキスト作成委員：ビジネス学部1年次教育に関わる案件の企画・立案・実施と、1年次教育オリジナルテキストの作成。 学校法人奈良学園（仮称）奈良学園大学設置準備委員会現代社会学部会会員：奈良学園大学現代社会学部開設準備に関する諸業務。
10）学生支援センター委員、学生委員。	平成26年4月～ 平成27年3月	奈良学園大学 学修支援センター委員および学生委員：学生生活一般、奨学金関係、学友会活動の指導、リメディアル教育等に関する諸業務。
11）キャリアセンター運営委員、専門職養成支援プログラム委員。	平成27年4月～ 現在に至る	奈良学園大学 キャリアセンター運営委員：学生のキャリア・アップ及び進路の確定を目標として、各種の資格支援講座、セミナー、ガイダンスを実施し、また合同企業説明会やインターンシップを実施する。リメディアル教育も本委員会の業務範疇にある。 専門職養成支援プログラム委員：各種公務員試験への合格を目指してこれを支援すること。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1. 共生社会を生きる	共著	平成27年1月20日	晃洋書房	編著者：橘木俊詔(京都大学名誉教授) 共著者：井上眞理子、武谷嘉之、福留和彦、古田雅雄 ISBN：978-4-7710-2588-2 Ａ５版、縦組、上製本、カバー付、全212頁、2500円(税抜)。 本人担当部分：第Ⅰ部「問題提起２」(pp.36－44)、「パネルディスカッション」(pp.52－65)、第Ⅱ部「第三章「共生社会」のために経済成長は必要である」(pp.141－178) 概要：2013年度公開シンポジウム「共生社会を考える」を基礎に、基調講演(橘木)、問題提起(井上、福留、古田)、パネルディスカッション(橘木、井上、武谷、福留、古田)を収録。さらに、社会学(井上)、歴史学(武谷)、経済学(福留)、政治学(古田)の各立場から、共生社会をより深く論じた論考を加えた。本書は、共生社会という日本社会のありうべき未来像へ学際的に挑戦した初めての書物である。
（学術論文）				
1. 実質利子率の低下は投資需要を増加させるか？―インフレ・ターゲティング論への留保―	単著	平成17年12月	「産業と経済」(奈良産業大学経済経営学会)第20巻4号、pp.297－308.	要旨：利潤関数のなかに調整費用関数を導入し投資決定のモデルを構築した。本モデルでは、実質利子率の低下は実質利潤率（投資の予想実質収益率）の低下を「同時に」引き起こし、民間投資需要の喚起について不確定である結果を得た。国民の間でのインフレ期待の醸成による実質利子率の低下が、民間投資需要の増大を通じて均衡GDPの回復を図るとするインフレターゲット論に疑義を提示している。本稿のモデルは予想有効需要の変化が投資決定を左右する構造となっており、「長期期待」が投資決意に影響するというJ.M.ケインズの主張に沿っている。
2. 高齢化の進行と日本経済のあり方 ―生活水準・国民負担率・経済成長率―	単著	平成18年3月	「産業と経済」(奈良産業大学経済経営学会)第21巻1号、pp.1－13.	要旨：高齢化の進行が国民負担を不可避的に増加させる前提で、今後20年ほどの日本経済のあり方を考えた。税制や社会保障制度など所得再分配制度の整備、「豊かさ」に対する価値観の転換の必要性を指摘しつつ、①現在の可処分所得と20年後の可処分所得が同水準、②現在の可処分所得は20年間現在の水準を下回らないという2つの条件を持つモデルを構築し数値計算することによって、現在の生活水準を維持するために実質経済成長率（年率）が約2%必要という結果を得た。
3. 国民負担率の上昇と経済成長率 ―前著への補論―	単著	平成18年9月	「産業と経済」(奈良産業大学経済経営学会)第21巻3・4号、pp.271－282.	要旨：前著「高齢化の進行と日本経済のあり方」への補論。前著で議論されなかった勤労者層と老齢者層の階層分類に加え、各階層における可処分所得の違いをモデルのなかに明確化した。その結果、勤労者層と老齢者層が同時に生活水準を維持するための実質経済成長率は、前著とほぼ同じ結果である年率2%～3%という結果を得た。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4. アーサー・ルイスの二重経済論	単著	平成20年12月	「社会科学雑誌」(奈良産業大学社会科学学会)第1巻創刊号、pp.31－57.	要旨：Ranis＝Feiモデルや農工間資源移転論との関連を議論しながら、W.A.Lewisの二重経済論に関する4論文を再検討した。無制限労働供給による資本蓄積過程の成否は、農業余剰を生み出す農業の成長とのバランスにあることをLewisが非常に重視していることを確認した。さらに、前著「蓄積停止を考慮した農工2部門モデル」で提示したTrap型農工2部門モデルを再定式化し、Lewis「無制限労働供給による経済発展」（1954年）に叙述的に書かれている条件を使ってTrap型農工2部門モデルと同じモデルを構築できることを新たに確認した。
5. 高齢化する日本の社会保障モデル	単著	平成23年11月	「社会科学雑誌」(奈良産業大学社会科学学会)第3巻、pp.45－82.	要旨：福留〔2006年〕「高齢化の進行と日本経済のあり方」は、①将来時点での国民負担率が恣意的、②老齢者と勤労者の受益と負担の関係が不明確、③社会保障財源として国庫負担(税負担)と保険料負担の関係が不明確であった。本稿はこれらを明示化した社会保障モデルを構築した。全ての国民負担を勤労者が負う前提で、生活水準(1人当り可処分所得)を悪化させない実質GDP成長率を計算した。国民負担における租税負担と社会保障負担の割合及びその変化次第では、前著と同様に2%から3%台後半の実質GDP成長率が必要であることが確認された。
6. 部分最適と全体最適について ―経済学の見地から―	単著	平成24年3月	「社会科学雑誌」(奈良産業大学社会科学学会)第4巻、pp.53－70.	要旨：企業経営者など実業界は「部分最適ではなく全体最適の実現」が経営の要諦であると直観的に言う。言葉の直観的な意味がはたして論理的に支持されうるのか、市場の失敗の一種である「外部性」に関する経済理論を応用し検証した。モデルは、持株会社が子会社の部分最適に介入すれば、（部分最適の否定ではなく）部分最適を維持しながらぞれを全体最適につなぐ回路の存在する理論的可能性を示した。実務レベルでもそのような回路の具体化こそが効果的なマネジメントの鍵であることを指摘した。
7. 産業構造論の方法と現代日本経済分析〈1〉―産業構造論の再体系化―	単著	平成24年11月	「社会科学雑誌」(奈良産業大学社会科学学会)第5巻、pp.335－394.	要旨：応用経済学としての産業構造論の固有の意義を示すため、その道具立てである産業連関分析、ペティ＝クラークの法則、二重経済論、移動のマルコフチェーン、迂回生産化と産業構造の多段階化など産業構造変化の経験法則や理論を統一的な枠組み（需給均衡理論）のもとに再構成した。この分析枠組みにより、日本経済の近現代における産業構造の傾向的変化や、工業化の特性、技術進歩、環境・エネルギー問題、価値観の変化、少子高齢化からの要求など、現代日本経済の経験や直面する課題を産業活動の側面から明らかにした。
8.「幸福の経済発展論」試論―社会／経済システムを中心に―	単著	平成25年3月	「奈良産業大学紀要」第29集、pp.89－114.	要旨：本稿は先行する「幸福の経済学」研究や「幸福度指標」を巡る諸議論を踏まえ、新しい経済発展論のあり方として「幸福の経済発展論」として試論を提示した。「幸福の経済発展論」は次の3つの視点から行われる。①「幸福度」など指標化・可視化の努力、②幸福度向上のために必要なライフスタイルの提案・変革、それを支える財・サービス・技術群の考察、③社会／経済システム全体に対する認識方法の改良と、そうした認識に基づく実際のシステム改善の提案である。本論文はこのうちとくに①と③に焦点を合わせて論じた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 「論じる」文章の要件とは何か？―社会科学論文・レポートに求められること―	単著	平成25年12月	「奈良産業大学紀要」第30集、pp.65―87.	要旨：学生及び学生の論文指導を行う教員に対して社会科学論文やレポートの要件を示した。要件は、１.文章作成時の基本条件（①主語・述語・目的語・補語の明示、②5W1H）、２.論文やレポートのルール（①主語の重層性と時点差、②状況・評価・政策、③因果関係・相関関係・時間的前後関係、④目的と手段、⑤足し算と引き算、⑥必要条件と十分条件）、４.論文やレポートが陥りやすい罠（①bowlの中のお好み焼き、②日本人的非論理的文章構成）、３.経済学の使用（①需給均衡分析、②生産可能性フロンティア、⑤市場の失敗、⑥分配と成長）を挙げた。
（その他）				
「辞典・辞書」 １．進化経済学ハンドブック	共著	平成18年年9月	共立出版	概要：進化経済学会によるハンドブック編集事業。進化経済学の概要、方法論、様々な具体例、問題点や方向性などを包括した日本の進化経済学研究の出版当時における到達点を網羅・詳解。全頁数581頁。判型A5。ISBN 978-4-320-00572-3 編集委員：　塩沢由典(委員長)、磯谷明徳、清水耕一、八木紀一郎、荒川章義、池田毅、岡村東洋光、岡本哲史、高増明、谷口和久、徳丸宜穂、中島義裕、中原隆幸、萩原泰治、姫野順一、平野泰朗、福留和彦、水口雅夫。 担当部分：「繊維機械」pp.340-341、「情報革命」pp.485-486、「情報の経済学」p.486、「緑の革命」p.538、「レント・シーキング」p.551.
「メールマガジン」 １．地域づくりワンポイントアドバイス「地域づくりへの大学の関わり方」	単著	平成21年3月	「奈良県地域づくりメールマガジン　まほろば＊地域づくり情報」(奈良県地域振興部地域づくり支援課)、2009年4月号	要旨：奈良産業大学の教育プログラム「プロジェクト演習」の活動を通して、大学がもつ人的・知的資源の地域づくりへの活かし方を紹介。情報学部の「高取城CG再現プロジェクト」やビジネス学部の「奈良観光振興プロジェクト」の活動が、地域住民自身による価値ある地域資源の再発見を促す一方、学生自身も地域貢献の一端を担うことで知識を実践の場で活かす訓練を行えることを紹介した。
「公開シンポジウム冊子」 １．2013奈良産業大学公開シンポジウム「共生社会を考える」	共著	平成26年3月	奈良産業大学地域連携推進委員会	要旨：2013年11月9日に開催された奈良産業大学公開シンポジウム「共生社会を考える」の基調講演（同志社大学特別客員教授・橘木俊詔氏）、パネルディスカッション等を集録。福留はパネリストとして参加し、「「共生の経済学」をどう構想できるか？」という意見陳述を行った。のち、他のパネリストおよび基調講演者とパネルディスカッションを行った。同冊子はそれを集録したもの。
「学会・研究会発表」 1. 高齢化する日本の社会保障モデル	―	平成24年2月	奈良産業大学経済経営学会第2回定例研究会	コメンテータ：三浦晴彦准教授（同大ビジネス学部） 要旨：前著「高齢化の進行と日本経済のあり方」で得た結果を用いて、①国民負担率の恣意性、②老齢者と勤労者の受益と負担の関係が不明確、③社会保障財源として国庫負担と保険料の関係が不明確といった前著で残されていた課題に答えるためのモデル分析を行った。その結果、モデルの前提条件のうち国民負担中の社会保険料負担の割合が時間経過の中で低下するとき、国民負担率が大きく上昇する可能性をモデルの結論として得た。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 関西活性化、教育からのアプローチ	―	平成26年2月	平成25年度関西州広域計画研究会第3回会議	要旨：関西経済の低迷と日本経済の異同に注意しつつ、需要飽和社会のなかではマクロ経済政策のみならず需要創造を継続的に実現できる仕組み作りが必要であることを主張した。その方途の一つとして教育制度の転換を取り上げ、価値観の多軸化を提唱した。またこうした主張には、日本や関西が直面している課題への認識問題が存在しており、景気循環的問題と構造的問題の区別、経済成長の必要性、市場を成長に利用することなどを説明した。
3. 制度の現状分析	―	平成26年3月	進化経済学会金沢大会2013（金沢大学）	セッション司会：福留 報告者：西村　知(にしむら・さとる、鹿児島大学)「太平洋島嶼国の離島における農地利用制度の変容：ミクロネシア連邦共和国ピングラップ島のイモ畑利用を事例として」、Jokim Kitolelei（ジョキム・キトレレイ、鹿児島大学）「Understanding Fisheries Rules in Fiji: A Comparison of Three Case Studies」、戸田宏治(とだ・こうじ、日本経済大学)「官民人事交流に関する考察」、番匠谷光晴(ばんしょうや・みつはる、四天王寺大学)「医療供給体制と保険付の需関係にする一考察」
4. 「共生の経済学」をどう構想できるか？　―市場を利用した共生について―	―	平成26年8月	2014年度共生社会システム学会大会 （於：酪農学園大学）	座長・司会：井上誠司(酪農学園大学教授) 要旨：共生社会の実現に経済学としていかなる視点と方法論的立場を取りうるか私見を提示した。「談合」のようなある種の共生関係は社会全体の厚生を下げることをモデルで示した。また共生を図る目的で、公的な所得再分配と市場との関係を対立的に見る視点を批判した。むしろ共生のためにいかに市場を利用するか、①財・サービス市場を通じた世代間の共生、②新技術・新商品の普及媒体としての市場の役割、③経済成長による共生、④市場多様化による共生を提言した。
5. 橘木俊詔編著『共生社会を生きる』第二章武谷論文を読む	―	平成27年2月25日	第2回共生社会研究会 （於：大阪市立大学文化交流センター）	要旨：橘木俊詔編著『共生社会を生きる』第二章「日本における共助の可能性 ―歴史的視点から―」(武谷論文)を読み、経済理論の観点から論評し、執筆者本人と討議した。本章は特に近世日本の共助の仕組みとしての仲間や講や組に注目し、その相互扶助性や摩擦処理の役割を明らかにする。その上で、意識的な共助のある関係を共生と見なし、現代社会にとって意義のある共生を再構築するためには、民主主義的手続きの「面倒くささ」を我慢しなければならないという結論である。発表者は概ねその趣旨に賛同しつつ、①(近世の)共同体に代わる共助の担い手に関する議論が無いこと、②(公助に比べて)共助がより優れていることの経済学的説明がないことを指摘した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 共生社会システム学会編『共生社会システム研究』vol.8,no.1所収の武谷論文を読む	―	平成27年3月17日	第3回共生社会研究会（於：大阪市立大学文化交流センター）	要旨：共生社会システム学会編『共生社会システム研究』第8巻1号所収の武谷論文「共生社会システムを歴史的に考察するための枠組み」を読み、経済学の立場から論評し、執筆者本人と討議した。本論文は「共生」が意味内容としてもつ規範性から距離を置き、まずは異質なるものが共存してきた事実を読み解こうとする。その際の枠組みとして「共生様式」概念を提示する。共生様式には分離(排除、棲み分け)、同化、融合の3様式が有るとする。発表者は、分析枠組みとしての「共生様式」概念に一定の評価を与えつつ、しかし、①共生様式論自体にまだ検討の余地があること、②本論文の主張は既存の経済学や政治学の理論やそれが導く結論に含まれることが多いことを指摘した。
「公開シンポジウム」 1. アクティブラーニングの一形態―奈良産業大学ビジネス学部「プロジェクト演習」の経験から―	―	平成25年6月	第1回高校大学(「学び育ち」の)連携フォーラム	基調講演：溝上慎一(みぞかみ・しんいち、京都大学)「高校・大学で求められるアクティブラーニング」 パネリスト：福留「アクティブラーニングの一形態―奈良産業大学ビジネス学部「プロジェクト演習」の経験から―」 要旨：大阪府下の高等学校管理職（校長、教頭など）約60校を相手に、アクティブラーニングの理論と実践例を紹介。パネルディスカッションにて議論した。福留は本学プロジェクト演習「奈良観光振興」に携わってきた経験に基づき、どのように講義と演習を連携させているか説明した。また、理論化・制度化したものが現場の運用でどのような問題に直面するかにも言及した。
2. 共生社会を考える	―	平成26年3月	2013奈良産業大学公開シンポジウム	基調講演：橘木俊詔(たちばなき・としあき、同志社大学特別客員教授)「共生社会を考える」 パネリスト：福留「「共生の経済学」をどのように構想できるか？」 要旨：基調講演者がアメリカ型社会と北欧型社会(デンマーク)、ニューリベラリズムとコミュニタリアニズムを対比し問題を提起。自助・共助・公助のあり方を論じる中で、これからの日本では公助の重みが一層増すことを主張した。パネルディスカッションでは基調講演者のほか、奈良産業大学から古田雅雄(政治学、市民社会論)、井上眞理子(家族社会学)、福留(経済政策、幸福の経済発展論)が加わり議論した。福留は「共生」を考える際の一般的注意点を紹介しながら、経済学の立場から「共生」をどのように考えるべきか意見を述べた。
「講　演」 1. 日本経済のビジョンをどう描くか	―	平成17年8月	奈良産業大学第5回公開講座	王寺町リーベルカレッジ 要旨：日本経済の直面する課題を①短・中期的課題、②長期的課題に分け、前者には景気循環に関わる不況とデフレの問題、後者には技術や社会状況、国際環境の変化に起因する構造問題があることを注意した。政策割り当ての原則から、景気循環の問題にはマクロ経済政策、構造問題には市場機能の改善と知識創造のための仕組みの形成が必要であることを提言した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 日本経済の見取り図から私たちの暮らしを考える	―	平成18年6月～7月	2006しろきた市民セミナー(大阪市立城北市民学習センター)	第1回(6/26)経済学は「平成不況(デフレ経済)」をどう見ているか? 要旨：需要不足問題と供給側の構造問題を峻別することを指摘。平成不況は需要問題であり、供給問題への対処である構造改革は政策割当として不適切であることを指摘した。またなぜデフレーションが経済に悪影響をもたらすか解説した。 第2回(7/3)景気対策の混乱を整理する～財政・金融・「構造改革」～ 要旨：1990～2005年までの日本の歴代政権と経済政策を解説し、複数回の景気の回復と墜落が政策上の原因で発生したことを説明。AD-ASモデルを使って不況下の正しい経済政策を解説した。 第3回(7/10)高度経済成長とライフスタイル 要旨：戦後日本の高度成長が、欧米的ライフスタイルの導入と世帯数の増加や賃金上昇により、耐久消費財中心の内需主導型経済成長であったことを解説。このモデルでの経済成長はすでに完了し、現在の日本は新しい国内需要を創造するための好循環モデルの再形成に迫られていることを説明した。 第4回(7/24)少子高齢化社会と日本経済のあり方 要旨：日本の高齢化の進行は、社会保障コストの増加をもたらし、生活水準の悪化の可能性を指摘した。税制や社会保障制度の再分配政策では限界があり、経済成長が年率2～3%必要であることを説明した。 第5回(7/31)幸福の経済学～「質」の時代～ 要旨：経済の質的改善と量的拡大が車の両輪となって経済成長することが国民の幸福の前提であることを主張した。サービス産業化を進めることで環境負荷の低減を図り、国民の精神的・知的満足に応える財の創出が課題であることを結論とした。
3. ＜オズの魔法使い＞と経済学	―	平成22年8月	教職員のための公開講座(奈良産業大学)	要旨：F.ボーム作「＜オズ＞の魔法使い」には19世紀末米国での通貨制度を巡る議論がモチーフにあることを紹介。この話題の結論は、20世紀初頭の世界恐慌、同時期の昭和恐慌、日本の平成不況、さらにユーロ圏諸国の財政危機にも関係することを説明した。
4. 経済学から日本史を考える　～昭和恐慌から大東亜戦争へ～	―	平成24年2月	三郷町市民講座(財団法人三郷町文化振興財団)	要旨：経済政策の誤りによる国民の経済的困窮が大東亜戦争突入への抑止を不可能にしたことを主張。浜口雄幸・井上準之助政権時の清算主義が不況を悪化させたが、犬養毅・高橋是清政権時のケインズ政策、金本位制の放棄が景気回復の足がかりを作ったものの間にあわず、2.26事件で軍部の政治掌握をもたらしてしまったことを説明した。
5. 経済論議の混迷を整理する！　～経済診断はなぜ異なるのか？～	―	平成24年2月	三郷町市民講座(財団法人三郷町文化振興財団)	要旨：メディアに登場する専門家の解説は、各自が依拠している経済学の思想や理論に基づいていることを説明した。経済学は一枚岩ではなく、学派ごとに鋭い対立があることを紹介しつつ、不況の原因を需要面に求める立場、供給面に求める立場、セーフティネットの不備に求める立場など立場によって景気対策の処方箋が全く変わることを解説した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「社会人対象講義」 １．《重層的教育システム》仮説	―	平成19年7月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：社会常識やルール、所作・振る舞いなどを巡って世代間でしばしば摩擦が起きる。社会には本来様々な世界があり、各世界でルールや作法は異なるが、そうした複数の異なる世界での経験を経ずに、子供が子供の世界でのみ通用する単色の世界観を大人になっても全ての世界に持ち込むことが摩擦の原因であり、解決の方途としてコミュニティベースのもの、市場ベースのものの可能性を提案した。
２．幸福の経済学	―	平成20年4月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：日本経済の成熟化や日本社会の少子高齢化は、従来型の経済成長モデルや価値観からの転換を必要としているとの認識に立ち、日本社会の幸福度の向上のために必要なライフスタイルの提案・変革、それを支える産業、財・サービス、技術群の考察を行った。
３．経済診断はなぜ異なるのか？	―	平成20年6月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：「失われた15年」と称される日本経済の長期低迷に対し、処方箋を提示するはずの専門家や政策の立案者である政府の、経済に対する現状診断や政策内容の混乱・異論の並立の原因について、経済学史や経済理論に基づき整理・解説した。
４．格差問題の偽装を告発する	―	平成20年8月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：1990年代後半から2006年までの所得格差問題について、内閣府や政府見解など社会の高齢化の進行が格差拡大の原因とする見解に対し、それはジニ係数の誤用に基づく結論であり、正しくは、90年代末からの日本的賃金・雇用システムの変質に起因することをジニ係数の理論的特徴を踏まえて解説した。
５．交渉力を考える　～部分最適と全体最適～	―	平成20年9月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：交渉力を磨くための経済学的素養の必要性・有用性を説いた。「部分最適から全体最適へ」は企業の組織マネジメントの上で常識化して言われるが、経済学の「外部性」理論を用いると部分最適と全体最適をつなぐ回路をいかに作るかが真の課題であることがわかることを解説した。
６．続・交渉力を考える ～ゲーム理論の知見～	―	平成20年10月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：ゲーム理論「囚人のジレンマ」を通して、「部分最適≠全体最適」を確認し、小国がいかに交渉力を持つか、「背水の陣戦略」を解説した。 また、ゲーム理論によって完全競争市場の「部分最適＝全体最適」という結論が支持されなくなっていること、現在の経済学の主流が変化していることを解説した。
７．交渉術	―	平成20年11月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：タクシーへの相乗りの例を用いて、料金の異なる目的地へ2人が相乗りすることの平等な利益を得るように交渉が行われるための理論的背景を解説した。
８．田母神論文を考える	―	平成20年12月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：田母神俊雄〔2008年〕「日本は侵略国家であったのか」について、日本の戦後の歴史認識の問題を歴史学に対する比較言語学からの批判である「言語論的転回」を材料に考察した。物語としての歴史か、事実／真実としての歴史か、歴史学の難しさに留意しつつ、経済学的思考枠組をもった科学的歴史学に立脚すべきことを主張した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
９．インフレ・ターゲティング政策を考える	―	平成21年1月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：マクロ経済学のオペレーティング・システムであるIS-LMモデルを解説し、P.クルーグマンらのインフレターゲティング政策の特徴を解説した。また2005年10月に新しいFRB議長に就任したベン・バーナンキの考え方にも触れた。
10．続・インフレ・ターゲティング政策を考える	―	平成21年2月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：前回のインフレターゲティング政策の解説を踏まえ、拙稿〔2005年〕「実質利子率の低下は投資需要を増加させるか？」を紹介し、インフレターゲティング政策の問題点を解説した。結論として、民間投資需要の実質利子率に対する弾力性が非常に小さくなることをモデルの結論として得たことを紹介した。
11．サブプライム問題とはなにか？	―	平成21年3月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：日本の1980年代後半のバブル経済と、2007～2008年に米国で発生したサブプライム問題とリーマンショックの異同を明らかにした。両国とも不動産バブルがきっかけになっており、また金融機関による不動産関連融資の異常な拡大が背景にあったが、米国の場合には債権の証券化という金融手法が介在していることを解説した。
12．需要創出型経済成長の必要性　～ケインズとシュンペーター～	―	平成21年4月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：拙稿〔2008年〕「アーサー・ルイスの二重経済論」を引きつつ、日本の高度成長期の経済発展パターンを解説した。その上で吉川洋〔2009年〕『今こそ、ケインズとシュンペーターに学べ』、〔2003年〕『構造改革と日本経済』を引きつつ、需要飽和時代における経済成長、イノベーションの果たす役割について議論した。
13．年金制度の経済学　～原題：人生設計の経済学～	―	平成21年6月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：異時点間効用最大化モデル（2期間ライフサイクルモデル）を用いて、消費と貯蓄の最適解を求める方法を解説した。その上で、個人の長生き確率をモデルに組み込み、公的年金制度の必要性を説いた。
14．経済学から「マニフェスト」はどう見えるか？	―	平成21年8月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：2009年8月30日衆議院解散総選挙時の自民党と民主党のマニフェストについて、それを経済学に基づき統一的な基準で整理・評価した。生産可能性フロンティア、比較優位の原理、余剰分析、AD-ASモデルなど経済学の道具を用いて経済問題を整理し、両党のマニフェストが正しい経済認識と政策提言に至っているかチェックリストを作成し提示した。
15．関西の人材育成について	―	平成21年9月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：関西活性化の糸口の一つに人材育成がある。本発表では、「人間力」という力の実体について、サイバー適塾（関西経済同友会）での経験に基づいて定義し、「人間力」をもった企業人・起業家の育成が関西にとって課題であることを指摘した。
16．信貴山魅力発見	―	平成21年11月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：前回の「関西の人材育成」に引き続き、関西活性化を「観光振興」という別の観点から論じた。発表者は奈良県下の大学に所属し、大学が立地している地域の魅力を掘り出す作業を学生とともに行っている。その一つに地元「信貴山」の歴史遺産である朝護孫子寺があり、学生たちとともに明らかにしたその魅力を紹介した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
17. ＜オズの魔法使い＞と経済学	―	平成21年12月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：F.ボーム作「＜オズ＞の魔法使い」には19世紀末米国での通貨制度を巡る議論がモチーフにあることを紹介。この話題の結論は、20世紀初頭の世界恐慌、同時期の昭和恐慌、日本の平成不況、さらにユーロ圏諸国の財政危機にも関係することを説明した。
18. 続・幸福の経済学	―	平成22年2月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：ブータンのGNHに始まり、近年の幸福度の指標化の動きを紹介しつつ、発表者も経済学の新たな可能性を求めて「幸福の経済学」を構想していること紹介した。前回発表の「幸福の経済学」(平成20年4月)とは視点を変え、財・サービスの配分システムや、個人の社会的関係性など社会システムのあり方に焦点を当て持論を紹介した。
19. 財政赤字の考え方：Part1.最後の日本人	―	平成22年5月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：日本における毎年の財政赤字の計上とその累積である政府債務が国家財政の破綻を帰結するとの議論がある。これに反論する議論に原田泰〔2008年〕「最後の日本人」論があり、人口減少の進行により950年後の日本には1人の国民が国のすべての資産と負債を相続するため、国家財政の破綻は無いこと、問題は財政赤字によって作り出された公共財の性質にあることを紹介した。
20. 発展途上国工業化の過程分析　～メキシコと韓国～	―	平成22年9月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：1960年代～80年代に新興工業国として発展してきた韓国とメキシコの工業化過程を比較検討した。韓国の輸出指向工業化とメキシコの輸入代替工業化の相違点を明らかにし、両国とも累積債務問題という共通の問題点を抱えた中で、その返済の可否を左右した工業化の社会的能力について解説した。
21. 大学教育は今どうなっているか？	―	平成22年12月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：「初年次教育」と「リメディアル教育」と呼ばれる近年の大学教育の新しい制度化について紹介した。スタディ・スキルやスチューデント・スキル、専門教育への橋渡しを目的とした「初年次教育」、高校までに習得すべき内容の補習教育である「リメディアル教育」について、その制度化への経緯を説明し、現場レベルでどのような工夫や努力がなされているかを紹介した。
22. Ｙ＝Ｃ＋Ｉで読み解く経済学　Part1.	―	平成23年2月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：関西電力中之島プラザ 要旨：マクロ経済均衡を表現するY=C+Iの有用性を解説。乗数理論、マクロバランス論、各種政策論などマクロ経済を認識する際の共通枠組みとして、その応用性・汎用性が極めて高いことを説明した。
23. Ｙ＝Ｃ＋Ｉで読み解く経済学　Part2.	―	平成23年3月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：関西電力中之島プラザ 要旨：前回の発表内容を踏まえて、不況下の財政政策の種類について解説した。財政拡大政策と減税政策、財源を増税に求めるか国債発行とするか、国債発行は市中消化か日銀引受けか、ケースによって景気浮揚効果が変わってくることを解説した。
24. 日本史を経済学から読み解く　～Part1.大東亜戦争はなぜ起こったか？～	―	平成23年8月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：大東亜戦争の経済的背景として食料問題を指摘。英国を始め今日の先進各国は人口成長と人口転換問題を抱えた。日本は1920年代に農業生産性の停滞を経験し、コメ騒動など食料問題に直面する。その解決の方途として朝鮮半島と台湾を食料供給基地化したが、こうした問題を開発経済学では「リカードの罠」と呼び、現代の発展途上国にも共通する問題であることを説明した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
25．日本史を経済学から読み解く　～Part2.大東亜戦争はなぜ起こったか？～	―	平成23年9月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：電通関西支社 要旨：大東亜戦争の経済的背景として昭和恐慌を取り上げた。浜口雄幸首相・井上準之蔵相らが清算主義に基づき不況を悪化させ、農村を疲弊させたの対し、高橋是清蔵相の拡張的財政政策と金融緩和、金本位制からの離脱が景気回復への道筋をつけたことを説明した。しかし、2.26事件以降、軍部による政権の掌握と軍事予算の急拡大によって戦争突入が不可避となったことを説明した。
26．高齢化する日本の社会保障モデル	―	平成24年1月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：電通関西支社 要旨：拙稿〔2011年〕「高齢化する日本の社会保障モデル」に基づき、老齢者と勤労者の受益と負担の関係、社会保障財源としての国庫負担（税負担）と保険料負担の関係を明示的に導入したモデルを提示し、想定される将来の国民負担率のもとで個人の生活水準を悪化させない経済成長率がどの程度になるか試算したものを紹介した。
27．辛坊治郎『日本経済の真実』を批判的に読む	―	平成24年2月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：メディアを通じた発言力の強い著者による日本経済診断本である同書が誤解や矛盾、経済学への無知に満ち溢れていることを説明した。創作された「高度成長期」論を振り回し、景気対策としての経済政策を高度成長期への郷愁とする曲解、供給天井たる潜在生産能力の毀損が不況の真因だとする本書の奇怪さを標準的な経済理論から論破した。
28．範囲の経済	―	平成24年6月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：財の生産上のコスト削減に関して、財の生産量にかかわる効果と、財の生産の範囲に関わる効果に大きく2つあることを紹介した。財の生産量に関わる費用節約効果には、①固定費用、②規模の経済、③経験効果が、財の範囲に関わる費用節約効果には、①金銭的外部効果、②範囲の経済があることを解説した。
29．消費税って、どうよ？	―	平成24年8月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：電通関西支社 要旨：消費税やその税率を巡る議論が錯綜している状況をまず整理し、消費税の役割と注意点について経済学的分析を踏まえ解説した。また2014年4月および2015年10月に消費税率が引き上げられることに言及し、景気が回復軌道に乗り安定成長がしっかりしていなければ、再度の景気の墜落もあることに注意を引いた。
30．アベノミックスとはなにか？Part1	―	平成25年1月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：JR西日本商事(株) 要旨：アベノミクスへの賛意を示したうえで、マスメディアのアベノミクスに対する誤解を説明し、アベノミクスが標準的なマクロ経済政策の考え方に従っていること、その政策の遅効性や副作用も踏まえた上で、3年間の継続性を必要とすることを主張した。
31．アベノミックスとはなにか？Part2	―	平成25年2月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：京阪電鉄本社 要旨：前回発表の続きで、アベノミクスと高橋是清の政策の類似性を説明した。また、前回不十分であったIS-LMのオープンモデルを解説し、現在の円安進行の理論的解説を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
32. 「幸福の経済発展論」試論	―	平成25年6月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：三菱商事関西支社 要旨：人々の幸福は社会システムや経済システムのあり方に大きく影響されることを述べた。その上でシステムに関わる事項として、市場、ビルトインスタビライザー、経済成長の意義や役割、限界について論じた。また市場システムに関する先行理論に学びつつ、既存の市場システムへの改革提案としてどのようなものがあるかを紹介した。さらに、ネットワーク型社会の問題点にも言及した。
33. ご近所付き合いの経済学～外部不経済とピグー税～	―	平成25年10月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：電通関西支社 要旨：ミクロ経済学の道具立てを用い、市場の失敗の一つして外部性を紹介した。公害問題を事例としながら、ピグー税という解決手段が有効であること、その資金を一般財源化することを通じて電力等エネルギー問題をどのように解決するかを論じた。
34. 共生社会を考える～経済学からの構想～	―	平成26年1月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：京阪電鉄本社 要旨：日本国内および世界的にも様々な利害の衝突と調整が課題となっており、まさに共生をいかに実現するかが21世紀社会の課題であることを説明。経済や社会のシステムとして共生をどのように考える必要があるか、また社会の価値観にはどのようなタイプが存在しているか類型的に紹介した。
35. いわゆる「ゆとり教育」は教育ルネッサンスだったのか？～A.S.ニイルとJ.デューイの教育論とその実践例を通して～	―	平成26年2月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：京阪電鉄本社 要旨：いわゆる「ゆとり教育」への批判と見直しが進んでいるのに対して、実はゆとり教育の具体的形態の一つである総合的学習は、効果が出始めていたという問題提起をした。総合的学習の理論的・思想的背景と考えられるJ.デューイとA.S.ニイルの教育論を紹介し、その日本における実践例である「きのくに子どもの村学園」を紹介した。
36. ビットコイン騒動～貨幣とは、何なのか？～	―	平成26年4月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：JR西日本商事(株) 要旨：マウントゴックスの破綻によるビットコイン騒動への経済学からの見方を提示した。同事件は専らITの進歩による光と影に焦点があたっているが、実は「貨幣とは何か」という経済学における重要テーマに関わっていることを説明した。金融庁や財務省による制度(法律)上の解釈と、経済理論における解釈の違いにも言及した。
37. 経済学のキーワードから考えるTPP問題	―	平成26年5月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：JR西日本商事(株) 要旨：貿易や投資の自由化、その国際制度の変遷の上にTPP問題が生まれてきたことを説明した。TPP問題は経済問題だけでなく国内の利害調整という政治問題、TPPへの加盟がもたらす国家安全保障の問題等さまざまな社会的関係性を含んでいることにも注意しつつ、経済問題に焦点を合わせ、貿易理論と需給均衡分析を使ってこれを分析した。また最近国際貿易理論に理論的革新があって、TPP問題へも影響を及ぼしそうであることにも言及した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
38．関西活性化を考えるために	―	平成26年5月	第1回12期関西活性化サロン(サイバー適塾第12期生関西活性化グループ勉強会)	於：京阪ザ・ストア 要旨：関西経済の活性化を目的とした提言が多数発表されている現状の一方、実際の活性化が思うように実現していないことに対して、根本的な原因がどこにあるかをいくつか問題提起し、聴講者と議論した。
39．談合の理論 ―もう一つの共生社会―	―	平成26年8月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：電通関西支社 要旨：共生関係の一形態として「談合」を取り上げた。共生は無条件で社会の厚生を増加させるとは限らないことを、寡占理論とゲーム理論に基づいてモデル分析をおこなった。分析の結果、共生関係が業界内で閉じられていても、業界外に開放されていても、社会全体の厚生を損なうことが示された。
40．関西の経済活性化を考えるために	―	平成26年9月	サイバー適塾(関西経済同友会)第13期談論風発講座「関西の活性化」	於：阪急不動産(株) 要旨：関西経済の活性化を目的とした提言が多数発表されている現状の一方、実際の活性化が思うように実現していないことに対して、根本的な原因がどこにあるかをいくつか問題提起し、聴講者と議論した。
41．共生社会のために経済成長は必要である	―	平成26年11月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：JR西日本商事(株) 要旨：経済成長は所得再分配上の摩擦を緩和する点で共生社会の実現に資する。そのために需要側、供給側それぞれの問題として、国内の需要飽和を克服するための新規需要の創造と、労働人口の減少に伴う生産性の向上が課題であることを主張した。
42．定常社会か、経済成長か	―	平成27年1月	伍福塾(サイバー適塾第5期生勉強会)	於：電通関西支社 要旨：経済成長に対置される議論「定常社会論」を取り上げた。定常社会論が支持される背景には、①資源・エネルギー制約、②地球環境制約、③少子化による人口減少問題、④経済強化は幸福につながらない、⑤需要飽和（供給過剰）があることを説明した上で、こうした問題群も経済成長により解決ないし緩和可能であることを主張した。
「オープンキャンパス模擬講義・高校出張講義」 １．人生設計の経済学	―	平成17年11月	高校出張講義	於：京都府立すばる高等学校 要旨：高校生にも分かるように視覚化した上で、異時点間効用最大化モデル（2期間ライフサイクルモデル）を用いて、消費と貯蓄の最適解を求める方法を解説した。その上で、個人の長生き確率をモデルに組み込み、公的年金制度の必要性を説いた。
２．景気対策の混乱を整理する	―	平成18年10月	高校出張講義	於：大阪府立茨木西高等学校 要旨：「失われた15年」と称される日本経済の長期低迷に対し、処方箋を提示するはずの専門家や政策の立案者である政府の、経済に対する現状診断や政策内容の混乱・異論の並立の原因について、経済学史や経済理論に基づき整理・解説した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
３．カネの流れとｉモード	―	平成20年2月	高校出張講義	於：奈良県立二階堂高等学校 要旨：eコマース市場の発達と携帯端末としての携帯電話の普及が新たなサービスとしての「iモード」を生み出したことをやさしく解説した。その上で、iモードの公式有料サイトの課金制度が、東京に莫大な資金の流入を生み出していることを、公式サイトの運営会社の所在地から明らかにした。
４．いまこそ経済学！世の中を読み解く最強の理論～経済学から「マニフェスト」はどう見えるか？～	―	平成21年9月	高校出張講義	於：私立天理高等学校 要旨：2009年8月30日衆議院解散総選挙時の自民党と民主党のマニフェストについて、それを経済学に基づき統一的な基準で整理・評価した。生産可能性フロンティア、比較優位の原理、余剰分析、AD-ASモデルなど経済学の道具を用いて経済問題を整理し、両党のマニフェストが正しい経済認識と政策提言に至っているかチェックリストを作成し提示した。
５．＜オズの魔法使い＞と経済学	―	平成22年7月	高校出張講義	於：和歌山県立新宮高等学校 要旨：F.ボーム作「＜オズ＞の魔法使い」には19世紀末米国での通貨制度を巡る議論がモチーフにあることを紹介。この話題の結論は、20世紀初頭の世界恐慌、同時期の昭和恐慌、日本の平成不況、さらにユーロ圏諸国の財政危機にも関係することを説明した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏　名　　古田　雅雄

研究分野	研究内容のキーワード
政治学・国際関係論	政治制度、国民国家、勢力均衡論、民主化

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）学生の授業内容の確認	平成19年4月～	毎講義内容を学生が理解しているかどうかを確認するために毎講義内に確認レポートを書かせ提出させ、次回の授業において模範レポートの解説を行ってきた。
2）公務員試験対策の自主勉強会	平成17年4月～	公務員を目指す学生に講義後、休暇中の何日かを使ってに自主勉強会を開催した。対象科目は社会科学関連科目の講義と過去問練習、文章添削など。
3）少年警察ボランティア	平成17年4月～	本学と奈良県警察本部とが提携して地域の安全・安心のための学生のボランティア活動に引率役として参加。
2　作成した教科書，教材		
専門基礎科目用教材 1）政治学入門(2007年度版、担当120－178頁) 2）政治学入門(2008年度版、担当37－67頁) 3）政治学入門(2009度年版、担当71－101頁) 4）政治学入門(2010年度版、担当71－101頁) 5）政治の仕組みとビジネス(2011年度版、担当101－131頁) 6）政治の仕組みとビジネス(2012年度版、担当155－185頁)	平成19年4月1日 平成20年4月1日 平成21年4月1日 平成22年4月1日 平成23年4月1日 平成24年4月1日	専門基礎科目の講義用教材として作成。第2次世界大戦後の日本と世界の政治の動向を解説する。改版ごとに内容を修正、補足したりしてできるだけ今の政治現象を読み取れるように工夫している。主な項目は憲法をめぐる議論、日本人の政治意識の変遷、自民党と民主党、官僚主導と政治主導など。
国際関係論関連教材 1）ポスト冷戦時代の国際社会192頁 2）ポスト冷戦時代の国際関係[新版]67頁 3）ポスト冷戦時代の国際関係[第3版]66頁 4）ポスト冷戦時代の国際関係[第4版]51頁 5）ポスト冷戦時代の国際関係[第5版]54頁 6）ポスト冷戦時代の国際関係[第6版]93頁 7）ポスト冷戦時代の国際関係[第7版]85頁 8）外交論77頁 9）ポスト冷戦時代の国際関係[第8版]62頁 10）日本の戦後外交を考える115頁	平成10年 3月 平成13年12月 平成14年11月 平成16年 1月 平成16年12月 平成20年 3月 平成20年10月 平成21年 4月 平成22年 5月 平成22年 9月	国際関係論の講義用教材として作成。時事的な内容を書き換えている。基本的な内容は3つの部分からなる。第1は第2次世界大戦後からの冷戦時代である。第2は冷戦終了後1990年代から21世紀初めのイラク戦争までである。第3は現在の国際関係で問題となっている時事的な事柄を取り上げている。時事問題を扱うために本教材を定期的に書き改めている。８）は外交論の講義用に作成した教材。10）は国際政治コミュニケーションの講義用に作成した教材。
政治学講義用教材 1）政治学講義100頁 2）現代政治イデオロギー75頁 3）ヨーロッパ現代政治史（上・下）69頁 4）現代日本の政治45頁 5）市民社会論45頁 6）戦後西欧諸国の理念と現実の変遷67頁 7）ヨーロッパ現代政治史（上・下）改訂版69頁 8）行政学テキスト46頁	平成 9年 6月 平成13年 6月 平成14年 1月 平成14年 6月 平成22年10月 平成22年10月 平成24年4月 平成26年4月	講義用教材としてそれぞれの科目に応じて教材冊子の形で作成している。
3．教育上の能力に関する大学等の評価		
1）講義に関しては受講生からは内容は難しく感じているが、講義は理解できると評価されている。また講義運営は受講生からある程度納得できるとみなされている。その点では大学は良い評価を与えている。		

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)「高校内進路(法学部)ガイダンス」の説明 2)「同時多発テロ後の国際社会」を講演 3)「住民投票から民主主義を考える」を講演 4)「最近の選挙と投票行動について」を講演 5)「投票行動と政党支持」を講演 6)「最近の日本の選挙動向について」を講演 7)「2007年参議院選挙結果の分析」を講演 8)「近年の日本の選挙動向」を講演 9)「新世界秩序の行方」を講演 10)「総選挙にむけた政治過程における政治的リーダーシップの考察」を講演 11) 西宮甲英高院にて「大学進学説明会」での説明	17年11月5日 17年10月17日 17年11月5日 18年9月22日 18年11月21日 19年2月6日 19年11月6日 20年5月16日 20年6月14日 20年11月25日 25年7月17日	天理高校にて説明 京都府立南丹後高校の特別授業として講演。 福井県立武生高校の授業の一環として講演 大和郡山市選挙管理委員会・明るい選挙推進協議会主催 奈良県選挙管理委員会・明るい選挙協議会主催 天理市選挙管理委員会主催 天理市選挙管理委員会主催 大和高田市選挙管理委員会主催 「りーべるカレッジ」講座 播磨地区選挙管理委員会連絡協議会・明石選挙管理委員会主催 同校の授業の一環として特別授業を行った。

職務上の実績に関する事項		
事　項	年月日	概　要
1　資格，免許		
1）高等学校教諭二級免許状（社会科）	昭和52年 3月	
2）中学校教諭一級免許状（社会科）	昭和54年 3月	
3）法学修士	昭和58年 3月	「バイエルン人民党とバイエル政治」（法修第178号）
4）高等学校教諭一級免許状（社会科）	昭和58年 3月	
2　特許等		
特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）奈良市地域安全条例等委員会委員長	平成18年12月	奈良市安心安全まちづくり条例等策定、奈良市安全安心まちづくり基本計画策定に関わり、その進捗状況を検証。（現在に至る）
2）奈良県明るい選挙推進協議会委員	平成19年 8月	定期的な会議に参加、協議会に参加しその方針を協議・決定し、また選挙に関わる啓蒙活動に携わる。（現在に至る）
4　その他		
1）奈良産業大学全学教務委員会副委員長	平成21年 4月	全学教務副委員長としてカリキュラムの編成に携わった。（平成23年3月まで）
2）奈良産業大学ビジネス学部長 3）仮称現代社会学部設置部会長	平成23年 4月 平成24年6月	ビジネス学部長として学部運営に携わる。（平成24年5月まで）（仮称現代社会学部会長は平成26年3月まで）
4）奈良学園理事 5）奈良学園大学図書館長	平成24年 6月 平成25年4月	奈良学園の理事として常勤理事会等の機関で協議、決定に携わる。学園全体の学校経営に参加する（現在に至る）。図書館長として図書館業務に携わる(現在に至る)。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1.共生社会を生きる	共著	平成27年1月	晃洋書房	本書は「共生社会」をキーワードに哲学、経済学、社会学、政治学、歴史学などの幅広い分野から研究する学際的アプローチである。共生社会における自助、共助、公助とは何かをそれぞれの研究分野からアプローチする。A判全199頁 編著者：橘木俊詔、共著者：橘木俊詔、井上眞理子、福留和彦、武谷嘉之、古田雅雄 本人担当部分：「問題提議3」44－50頁、「現代市民社会論」177－199頁　現在の市民社会の特徴を信頼や民主主義などから説明し、社会関係資本との関係を確認する。A4判199頁
2.現代政治イデオロギー序説―現代政治をどのように理解すればよいのか―	単著	平成27年4月	晃洋書房	現代政治イデオロギーから現代政治をみる基本的な視点を整理・概説する。イデオロギーから現代政治の諸現象を分析する。イデオロギーとは何かから自由主義、保守主義、社会主義、アナーキズム、ナショナリズム、ファシズム、エコロジー主義、フェミニズム、宗教原理主義、グローバリズム/グローバル化、民主主義、イデオロギーの時代は終わったのかまでを論じる。補論として、政治と情報社会を加えている。全体として、個別の政治現象を理解するの根幹となる各イデオロギーから解説する。A4判309頁
論文				
1.ポスト冷戦時代の新世界秩序の行方ーソフト・バランシングから見た国際政治の理解に向けてー	単著	平成18年9月	奈良法学会雑誌第19巻第1・2号　1－153頁	本論は冷戦終了後の新世界秩序のあり方を主要大国・地域(米国、ＥＵ、ロシア、中国)を中心に、それにかかわる日本、イスラム・パワーなどから、現況の国際政治を解説する。第1に現在の国際政治を解説すること、第2にそれを説明できる理論の検討を内容とする。その際、勢力均衡論の立場から、新世界秩序像の分析とその理論についての可能性を探る。
2.なぜドイツではネオリベラリズムが定着しないのか―シュレーダー時代における経済改革のジレンマと政界再編の可能性ー	単著	平成19年3月	奈良法学会雑誌第19巻第3・4号　91－146頁	本論は1990年代末から2005年までのドイツのシュレーダー政権の経済改革を中心にドイツの政治動向を考察する。1990年代ドイツ経済は戦後最悪の時代を迎えた。かつて賞賛を浴びた[ドイツ・モデル]は見る影もないぐらい消滅したかに思われた。そのため経済改革が各政党から提示されたが、それが今後生じる政界再編と絡むという視点から、政党、政治家、有権者の態度の変化を検証する。
3.Contemporary Politics of Japan.Cooperation,Conflict,Support,and Change among Voters,Politicians,Parties and Bureacrats.	単著	平成19年9月	奈良法学会雑誌第20巻第1・2号　１－149頁	本論は現在の日本政治を外国に紹介するために英文で書かれた論文集である。その際説明する基本的な視点は政治アクター（政党、政治家、官僚、有権者、圧力団体など）から第2次世界大戦後から現在までを基本的な流れから日本政治の特質を浮かび上がらせる。具体的には、憲法をめぐる議論、戦後の有権者の投票行動から政治意識の変遷、自民党と民主党の政党の力学、官僚と政治家の関係、政治的リーダーシップなどを取り上げている。
4.ポスト冷戦時代の新勢力均衡論－ソフト・バランシング概念を中心にー	単著	平成20年3月	奈良法学会雑誌第20巻第3・4号　113－144頁	本論は冷戦後の国際政治をどのような観点から理解すればよいかを考察した。米国の1極支配、多極的構造など様々な考え方があるが、等閑視された勢力均衡論を修正したソフト・バランシングを枠組みに現在の事象を解明する。これは従来の勢力均衡論の固定的な考え方からもっと柔軟な国家間のバランスを保つ考え方である。現在、各国はこのような基準で柔軟な同盟関係を維持しながら、自国の安全保障を考慮している。

5.西ヨーロッパ国民国家形成論－Ｓ・ロッカン・モデルを参考に－	単著	平成20年9月	奈良法学会雑誌第21巻第1・2号1－187頁	本論は西ヨーロッパ国民国家の生成と発展、それに今後の行方をロッカン・モデルを参考に比較政治学的に説明するマクロ・モデルを描いている。歴史的に国家建設、国民形成、大衆民主主義、福祉国家の各段階を縦軸にし、それぞれの西欧諸国が各段階でどのような選択をするかを横軸にして現在の西欧諸国それぞれの違いを比較分析を行う。
6.グローバル化論　―　グローバル化する世界をどのように理解するべきか　―	単著	平成21年9月	奈良法学会雑誌第22巻第1・2号1－75頁	近年グローバル化の進展が著しい国際現象とみなされるが、それは経済現象のみを指摘される場合がほとんどである。しかし、グローバル化現象は政治・経済・文化のそれぞれの側面から考察しなければ理解できない。そのための分析枠組みを必要とする。本論では様々な観点から検討し、グローバル化した世界をどのように読み取るべきかの一試論を提供する。
7.総選挙に向けた政治過程における政治的リーダーシップの考察－麻生首相と小沢代表にみる政局の主導権争いをめぐる事例研究－	単著	平成22年3月	奈良法学会雑誌第22巻第3・4号109－141頁	本論はリーダーシップのあり方を2008年9月から年末にかけて自民党の麻生首相と民主党の小沢代表の2人のリーダーの動きから指導者像を考察する事例研究である。2009年の政権交代前の政局から政治的リーダーの駆け引き、状況判断、国民への訴えかけ、政策提言のあり方などを比較したうえで、日本の首相のリーダーシップと他国のそれと比較する。
8. 現代政治文化論―政治的価値意識をめぐるマクロ・メゾ・ミクロの各次元の研究―	単著	平成23年3月	奈良法学会雑誌第23巻1-124頁	本論は政治文化論をマクロ・メゾ・ミクロの部分から理論的な検討を行い、理論的な枠組みを提供することを目的とする。第2次世界大戦後、政治文化論は大きな躍進を果たしたが、1990年代に合理的選択モデルの席巻で一時学問的な停滞があったが、その後政治文化論の復権が言われている。これらの見解をまとめておく。
9.ドイツ社会民主党の改革戦略とそのジレンマ－政界再編期における社会民主主義の行方－	単著	平成23年11月	社会科学雑誌第3巻1－44頁	本論は最近のドイツの社会民主党の改革戦略とジレンマから現在の社会民主主義の模索、実際に改革の行きづまり、ドイツの福祉国家のあり方を検討する。1998年選挙に勝利したシュレーダー政権は当初予定していた改革方針を実現できず、その後大連合政権で様々な改革がなされたが、それは従来の福祉国家から離脱することになる。現在の社会民主主義のあり方を考える契機とする。
10. 現代政治イデオロギー序説―現代政治をどのように理解すればよいのか―	単著	平成24年3月	奈良法学会雑誌第24巻1－308頁	現代政治イデオロギーから現代政治をみる根本的な視点を整理する。イデオロギーとは何かから自由主義、保守主義、社会主義、アナーキズム、ナショナリズム、ファシズム、エコロジー主義、フェミニズム、宗教原理主義、グローバリズム/グローバル化までを説明する。補論として、政治と情報社会を考える。全体として、政治の根幹となるイデオロギー状況を解説する。
11. ドイツにおける政党組織の変遷について―「包括政党」論から政党組織をめぐる諸議論の整理―	単著	平成24年3月	奈良法学会雑誌第24巻１－93頁	現在の政党組織をどのように考えればよいのか。古典的な幹部政党から大衆メンバーシップ政党へ変化し、1960年代には包括政党が政争組織を希薄化させるようになったが、さらに政党組織の変遷は著しいのが現状である。本論では、その後の政党組織論は様々な見解を輩出している。現在の時点で政党組織を整理した。
12.現代市民社会論　―　その概念化への試論　―	単著	平成24年9月	社会科学雑誌第5巻407-460頁	1970年代以降、市民社会という用語は新しい理念を表すようになっている。1970年代南欧諸国の権威主義の崩壊、1989年東欧革命やソ連崩壊、1990年代第3世界の民主化、先進国の民主化の徹底、2010年中東・北アフリカの「アラブの春」などで、新しい市民社会像を模索する動きが顕著になってきた。その点を踏まえた市民社会論を考え、新たな市民社会論を本論では考察する。

13. グローバル化時代の西ヨーロッパ福祉国家	単著	平成24年12月	社会科学雑誌第6巻103－138頁	グローバル化は現在の西欧福祉国家にどのような衝撃を与えているのだろうか。この現象に解釈は3つの立場で見解が異なる。第1は大きく影響する。第2はあまり影響しない。第3は福祉国家がグローバル化に対応できる。3つの見解を検討したうえで、グローバル化が一様な現象であることを証明し、福祉国家の対応の仕方を個別事例を含めて考察する。
14, バイエルンにおける政治的カトリシズムの研究ー19世紀国民国家形成期における「国家と宗教」の関係から—	単著	平成25年3月	社会科学雑誌第7巻　83-285頁	ヨーロッパ政治を考察する際には政治と宗教の関係を抜きにして理解することはできない。とりわけ19世紀の国民国家の形成段階では国民を統合する意味で国家への忠誠心を持つ国民であることとカトリック信者との関係をどのように整合させるのかは国民形成過程には極めて重要な問題である。この事例をバイエルンに求め、その経緯をロッカン・モデルの視点から論じる。
15. 戦後史における日本の安全保障の変遷をめぐる議論の整理—日米安保体制の定着、変容、拡大について—	単著	平成25年3月	奈良産業大学紀要第29集129－163頁	第2次世界大戦以降の日本での安全保障政策に関する議論へ変遷を総合的に考察する。それには日米安全保障体制が大きな部分を占めている。これは1960年の両国の締結した同条約を基にするが、国際政治の状況は大きく変化してきた。その中で日本が日米関係を中心にどのような安全保障政策を議論し実際に採用してきたかを概観する。
16. 日米半導体交渉をめぐる政治経済過程の研究—戦後日米通商交渉の転換点に関する経済安全保障の観点からの一考察—	単著	平成25年3月	奈良法学会雑誌第25巻35－80頁	1970年代の半導体に関する日米通商交渉を事例に挙げて両国の経済安全保障の観点から分析する。1970年代から1990年代にかけて、冷戦終了の前後の時代変化における日本の経済成長、米国の経済凋落とを対比させながら、半導体という国防に不可欠な先端技術・製品をめぐる両国の政治経済過程を解説する。
17. 冷戦終結以降の日本における国際貢献と安全保障の変遷—湾岸戦争、カンボジアPKO、同時多発テロ後の自衛隊海外派遣からの考察－	単著	平成25年3月	奈良法学会雑誌第25巻81－118頁	1989年冷戦終結後、日本は冷戦時代と異なる国際貢献を果たすように要請をされてきた。それは単に経済的支援だけでえなく、人的貢献を求められる。国際貢献は日米関係を軸として規定されてきた。その事情の変化は日本の；対外関係に影響し、その変遷は密接に日米安全保障体制に則った形で展開している。その流れを整理すると同時に、その持つ意味も考察する。
18. 国際政治と第4次石油危機の可能性－エネルギー資源確保をめぐる地政学・地経済的変動の一考察－	単著	平成25年12月	社会科学雑誌第8巻115－177頁	戦後の先進国経済は安価な石油をエネルギーとした経済成長が続いたが、それが一変するのは1973年からの第1，2，3次石油危機によるものである。その危機は希少な資源と国際紛争が密接に結びついている。その後も消費国と生産国の生産と価格をめぐる主導権争いが続く。現在、それとは別の第4次石油危機が国際紛争を引き起こす可能性がある。第3世界の成長する国々が絡み、従来とは異なった事情を解説する。
19. 大統領制と議院内閣制の比較研究－民主主義にはどちらの統治形態がより有効なのか－	単著	平成26年3月	社会科学雑誌第9巻57－136頁	民主主義の統治形態には大統領制と議院内閣制、それに半大統領制がある。民主主義と政治的安定にはどの統治制度がふさわしいかという論争は以前からあるが、結論はいまだに出ていない。本論はこれまでの論争を整理し、この論争からの中心テーマを取り上げる。そのことで民主主義の実行性と政治的安定をいかに確保するかを検討する。
20. 日米為替レジームにおける政治過程—円高・ドル安の政治経済の事例研究—	単著	平成26年12月	社会科学雑誌第11巻91－112頁	日米通貨交渉を「プラザ合意」の前後の両国の国内外の政治経済関係を検証する。本論前半において通貨政策をめぐる政治経済学的な理論の検討を行う。事例を分析するための理論を考える。後半においては、前半の理論を使用しながら、1970年代の日本と米国のそれぞれの思惑の違いから通貨レジームがどのように変遷するかを検討する。

21. 織田作之助における市井の人々の描き方について―『木の都』における家族愛を題材に考える	単著	平成27年3月	奈良学園大学紀要第2集69－80頁	本論では織田作之助の家族観、大阪人という背景、彼の「小説の思想」を小説「木の都」を手がかりに考察する。この考察は織田作之助の小説を理解するうえで重要な視点を提供してくれるはずである。その点を3つの疑問点とその回答として仮説を3つから順次考えてゆく。その解明は織田作之助の小説の思想観の解明に貢献する。
（翻訳）				
1. M. アンダーソン『戦後ヨーロッパの国家とナショナリズム』 (M.Anderson,States and Nationalism in Europe since 1945)	共訳	平成17年9月	ナカニシヤ出版168頁	本訳は現在の欧州の国家とナショナリズムの関係を扱った訳書。ナショナリズムは国民国家の成立を目指し、それとともに誕生し、第1次世界大戦終結を機に普遍的理念の1つとしての立場を獲得した。その後極端に変質したのがナチズムやファシズム、ナショナリズムは信頼を失う結果となった。近年ナショナリズムは「時代遅れで危険な思想」と見なされてきた。翻訳書ではナショナリズムは現在でも有効な理念であるとする立場から、新たなナショナリズム論を構築し多角的に議論を展開する。共訳者：土倉莞爾。逐次共訳したので各担当部分を区別できない。
2.E.ヘラール、S.v.ヘッケ「ヨーロッパのキリスト教民主主義―冷戦終了以降の加工と上昇―」 (E.Gerard,S.V.Hecke,European Christian Democracy in the 1990s.Towards a Comparative Approach)	共訳	平成17年9月	法学論集第55巻第3号237－269頁	本訳は冷戦終了以降の欧州連合加盟国のキリスト教民主主義政党の展開を分析する。1990年代には西欧諸国のキリスト教民主主義政党の凋落が叫ばれた。有権者の意識、政治イデオロギー、政党などの変化などがその原因であるが、その一方でその復活も指摘される。冷戦終了以降の状況変化の中でキリスト教民主主義はそれに影響されるとともに時代を形成する役割も果たしてきたことを論じる。共訳者：土倉莞爾。逐次共訳をしたので、各担当部分を区別できない。
3.E. S. クラウス、B.ナイブレイド「日本は『大統領制』になったのか－日本における首相、メディア、選挙の関係－ (E.S.Krauss and B.Nyblade, in Japan ? The Prime Minisiter,Media and Election in Japan)	共訳	平成21年3月	奈良法学会雑誌第21巻第3.4号91－116頁	本訳は先進国共通である政治の「大統領化」の現象を日本に適応できるかどうかの検討を行っている。議院内閣制の国々でも首相が事実上大統領な権限を行使できると言われる。従来日本では首相は強いリーダーであるよりも、様々な勢力の調整役と評価され、政治的決定では官僚や自民党派閥ほど重要視されてこなかった。しかし著者たちは現在その事情が変化し、日本でも首相が「大統領」のような存在になっていることを論証する。共訳者：石井晶子。逐次共訳したので、担当部分を区別できない。
（講演録）				
1. 住民投票から民主主義を考える	単独	平成19年9月	奈良法学会雑誌第20巻第1・2号29－52頁	本講演録は平成18年6月石川県立武生高校で行った講演である。近年日本では住民投票(直接民主主義）が頻繁に行われるようになった。本講演では民主主義の視点から直接民主主義と代表民主主義の理論、実践、長所・短所などを説明すると同時に日本の場合は歴史的、現在的な経緯と問題点を考えてもらう。
2. 近年の日本の選挙動向－選挙制度の政治的効果と投票行動の変化－	単独	平成20年9月	奈良法学会雑誌第21巻第1・2号231－255頁	本講演録は平成20年5月第59回近畿都市選挙管理委員会総会（於、大和高田市文化会館）においての講演を所収している。選挙制度、そこから生じる「デヴェルジェの法則」、近年の選挙事情の変化、それに伴う投票行動の変容、有権者と政党の最近の傾向などを講演した。
3. 新世界秩序の行方－冷戦後の国際環境と日本外交のあり方－	単独	平成21年3月	奈良法学会雑誌第21巻第3・4号117－151頁	本講演録は平成20年6月王寺町リーベルカレッジにおいての講演を所収したものである。本講演では、前半において冷戦終了後の世界情勢を概観し、同時多発テロ、イラク戦争を経た現在の国際政治情勢を解説する。後半で北東アジア情勢から日本、中国、朝鮮半島の動向を解説する。
（学会発表）				
1.ドイツの社会的市場経済の行方―現代ドイツの政治経済体制の変質はあるのか－	単独	平成17年4月	近代思想史研究会（於、関西大学）	本発表は戦後の政治経済体制の特徴である社会的市場経済を解説する。それにその安定性の秘訣や、それが最近では批判される事情を分析する。

2.ロッカン・モデル再考	単独	平成20年11月	関西政治史研究会（於、奈良女子大学）	本発表はロッカンの提示したモデル・理論を解説し、現在にいても有効活用できることを実証することを要旨する。まず、ロッカンの理論を1960年代のものと、1970年代のものとに分けて解説する。前者は政党と支持者の政党システム構造の定式化である。後者はそれを含めた国民国家形成の比較分析モデルである。両者は一体となって現在の西欧諸国の政治を説明し、今後の展開を類推できる枠組みを提供する。
3.大連立政権の崩壊とドイツ社会民主党	単独	平成22年6月	日本比較政治学会自由企画3「現代ヨーロッパの社会民主主義政党と政権－改革の戦略と力量－」（於、東京外国語大学）	本発表は現代欧州の社会民主主義政党と政権の関係をスウェーデン、英国、ドイツの3国の改革能力を比較考察することを共通テーマとする報告である。その中でドイツ社会民主党の事例を取り上げた。1998年政権復帰以降から2005年大連立政権を介して2009年に政権離脱するまでの軌跡の中で政治経済体制の改革の経緯を報告する。結論的には社民党はこの間の改革に成功したとは言い難く、逆に社会民主主義の現在的意義を問われることになった。
4. ドイツにおける政党組織の変遷について	単独	平成26年9月	関西政治史研究会（於、神戸大学）	現在の政党組織を古典的な幹部政党から大衆メンバーシップ政党へ変化し、1960年代にはキルヒハイマーによる包括政党モデルが政党組織論を転換させるようになった。さらに実際の政党組織の変遷は著しいのが現状である。例えば、「カルテル政党」「選挙民政党」「アナーキー型政党」などである。現在のこのような政党組織論を本論では整理した。この政党組織論の変遷をドイツの場合で考察する。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　宮坂　純一

研究分野	研究内容のキーワード
経営学	経営管理、企業と社会、人的資源管理、企業倫理、企業社会的責任

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）経営学を実践的に学ぶ「場」として学内にカフェを開設して指導する	平成18年6月1日	経営を実践的に学ぶ場を提供するために、経営学部の同僚と3人で合同ゼミとして、学内に本格的なカフェを立ち上げる。学生がアルバイトではなく、事業主体として参加する。学生が、仕入れ、マーケティング、会計等に直接関わり、学生が経営するカフェとして多くのマスコミから取材を受ける。ビジネス学部のプロジェクト演習のモデルとなった活動（現在に至る）
2）カフェ・メーリングリスト	平成18年6月1日	プロジェクト演習（カフェ経営プロジェクト）を円滑に運営するために、カフェ開店時前から「カフェ・メーリングリスト」を構築する（現在に至る）。
3）専門演習のテキストとして「ケーススタディで学ぶ企業と社会」を作成。簡易製本して学生に配付	平成23年9月15日	専門演習Ⅰ用のテキスト
2　作成した教科書，教材		
1）『ビジネス入門』奈良産業大学ビジネス学部(単著)	平成19年4月	奈良産業大学ビジネス学部1回生対象に開講されている「ビジネス入門」の講義テキスト。それ以降、毎年微調整を施している。
2）『アドバンスト経営学』中央経済社(共著)	平成22年4月	大学院レベルの体系的テキスト。基本的・通説的な理論はもちろん最新の理論・テーマにも言及、経営学の全体像を偏りなくつかむことができる。各章とも現実編と理論編から構成され、現実・実際から理論・学説へとスムーズに読み進められる。第10章企業倫理担当（340－373）
3）『新版　要説経営学』文眞堂(共著)	平成23年6月	経営学の全領域にわたり、些末な内容をそぎ落として、重要な要点のみを包括的かつコンパクトに記述。本書1冊で優に十数冊以上の経営学書に匹敵する内容をカバーする。中~上級学習者向けの講義テキスト、大学院受験者や修士課程大学院生の知識整理、各種試験参考書などとして、高効率な学習ができるように各種の工夫がなされている。第11章人的資源管理（139-154）、第14章労使関係と従業員の権利（180-190）,第22章ステイクホルダー･マネジメント型企業への転換（290-302）担当
4）『管理の仕組みとビジネス』奈良産業大学ビジネス学部(単著)	平成23年4月	奈良産業大学ビジネス学部1回生対象に開講されている「ビジネス入門」の講義テキストを、カリキュラム改訂に合わせて書き直したもの
5）『ケーススタディで学ぶ　企業と社会』(単著)	平成23年9月	専門演習のために、実例から14件のケースを作成したテキスト

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）教育者・研究者としてのピア評価	昭和54年以降現在に至る	自著への書評及び依頼されて執筆した書評：宮坂純一著『ソビエト労務管理論』（奥林康司）『国民経済雑誌』第139巻第３号（1979年）／トムソン＆ヴィドマー著片岡信之＋宮坂純一＋小田福男訳『米ソ比較経営学』（奥林康司）『窓』第111号（1987年）／トムソン＆ヴィドマー著片岡信之＋宮坂純一＋小田福男訳『米ソ比較経営学』（笹川儀三郎）『経営史学』第22巻第２号（1987年）／宮坂純一著『社会主義経営とモチベーション』（大島國雄）『アジア経済』第31巻第11号１990年）／宮坂純一著『社会主義経営とモチベーション』（加藤志津子）奈良産業大学『産業と経済』第５巻第３号（1990年）／大島國雄著『社会主義経営学』『アジア経済』第31巻第11号（1990年）／宮坂純一著『経営管理の論理』（晃洋書房、1991年）を読んで――Ｔ君への手紙――（篠原三郎）奈良産業大学『産業と経済』第６巻第３号（1991年）／西岡健夫著『市場・組織と経営倫理（文眞堂、1996年）を読む』奈良産業大学『産業と経済』第12巻第１号（1997年）／宮坂純一著『ステイクホルダー・マネジメント』（出見世信之）『比較経営学会誌』第29号（2005年）／宮坂純一著『ステイクホルダー行動主義と企業社会』（晃洋書房、2004年 を読んで――Ｔ君への手紙――（篠原三郎）奈良産業大学『産業と経済』第20巻第２号（2005年）／山縣正幸著『企業発展の経営学』を読む『産業と経済』第22巻第２号（2007年）／宮坂純一著『道徳的主体としての現代企業』（山縣正幸）奈良産業大学『産業と経済』第24巻第３・４号（2010年）／宮坂純一著『道徳的主体としての現代企業』（田中一弘）『組織科学』Vol.43　No.4（2010年）
2）専門領域関連のホームページ作成	平成10年７月/平成11年３月（現在に至る）	「経営倫理学への招待」http://www009.upp.so-net.ne.jp/juka/及び「日本的経営への招待」http://www5f.biglobe.ne.jp/~juka2/を開設。学生をはじめとして研究者や実務家等から質問が多数寄せられる。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）なし		
5　その他		
1）講演 2006/11/25	平成18年11月	「企業倫理・コンプライアンスについて考える～ＣＳＲの陥穽、ＣＳＲは1960-70年代の社会的責任論の焼き直しなのか～」（社）日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会西日本支部主催「企業における消費者対応講座」
2）講演 2008/10/11	平成20年10月	「企業不祥事。なぜに、起こり、再発するのか。」【奈良産業大学リーベル王寺公開講座】

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）特記事項なし		
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		

4　その他		
1）特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1．応用倫理学事典	共	平成19年12月	丸善	加藤尚武責任編集宮坂純一他編。社会にコミットする倫理学である「応用倫理学」の全貌が見渡せる、この分野初の中項目事典。わが国の「応用倫理学」各分野で活躍中の研究者総勢200名が執筆に参加。様々な身の回りのキーワードについて、哲学的・倫理学的概念を援用しながら具体的に考察する。収録する中項目見出し語数は約350。巻末索引の収録語数は約3000語で、それぞれの用語に対応する英語も併記。７企業倫理・経営倫理を編集執筆（338-399）
2．現代企業の新地平	共	平成20年8月	千倉書房	片岡信之・海道ノブチカ編。新自由主義に基礎を置く経済政策が深刻な社会的諸問題を生み出してきた今日、それと一体の株主中心的企業モデルを問い直すとともに、改めてヨーロッパ・モデルの持つ現代的意義に目を向けてみることは、意味のあることと思われる。本書の意図するところは、まさにこの点であり、その課題を、三部に分けて考察する。第８章現代企業とステイクホルダーマネジメント担当（117-130）
3．道徳的主体としての現代企業	単	平成21年8月	晃洋書房	企業不祥事は何故に繰り返されるのか。ビジネス・エシックスの発想を借りて理論的に説明し、不祥事が起こらないために何を為すべきなのか、という課題にひとつの回答を提示する。
4．アドバンスト経営学	共	平成22年4月	中央経済社	［前掲］片岡信之、齊藤毅憲、佐々木恒男、高橋由明、渡辺峻編。大学院レベルの体系的テキスト。基本的・通説的な理論はもちろん最新の理論・テーマにも言及、経営学の全体像を偏りなくつかむことができる。各章とも現実編と理論編から構成され、現実・実際から理論・学説へとスムーズに読み進められる。第10章企業倫理担当（340－373）
5．新版　要説経営学	共	平成23年6月	文眞堂	［前掲］経営学の全領域にわたり、些末な内容をそぎ落として、重要な要点のみを包括的かつコンパクトに記述。本書1冊で優に十数冊以上の経営学書に匹敵する内容をカバーする。中~上級学習者向けの講義テキスト、大学院受験者や修士課程大学院生の知識整理、各種試験参考書などとして、高効率な学習ができるように各種の工夫がなされている。第11章人的資源管理（139-154）、第14章労使関係と従業員の権利（180-190）,第22章ステイクホルダー･マネジメント型企業への転換（290-302）担当
6．ロシア経営学の新著潮流	単	平成27年１月	晃洋書房	ロシアの高等教育機関でＣＳＲがカリキュラム的に重要視されている現実を踏まえ、どのような内容でＣＳＲが教えられているのか、という問題意識の元で、ロシアで刊行されたＣＳＲ関連のテキストを読み解き、ロシアのＣＳＲ研究及び教育の現状を纏める。企業倫理、モチベーション、ガバナンス、企業市民、等々がキーワードである。

（学術論文）				
１．統合社会契約論について考える(下))	単	平成18年3月	奈良産業大学『産業と経済』第18巻第３号（351-369）	ドナルドソンとダンフィによって「ビジネスエシックスの統合理論」として提唱され世界的に大きな反響を呼んだ「統合社会契約論」の内容を理論的に詳細に吟味する。マクロ契約、ミクロ契約、契約されたモラル合理性、モラルフリースペース、ハイパー規範、プライオリティルール等がキーワード。２回に分けて掲載。
２．ビジネス・エシックス、ステイクホルダー・マネジメントそしてＣＳＲ	単	平成17年9月	奈良産業大学『産業と経済』第20巻第３号（147-175）	ステイクホルダーという概念が「一般化」するに伴って、企業と社会の関係を巡ってさまざまな概念が明確に定義されずに使われし混乱している現状を考えて、企業を道徳的主体として考える立場から、ビジネスエシックス、ステイクホルダーマネジメント、ＣＳＲを概念的に交通整理した論攷である。
３．生活賃金の問題提起	単	平成17年10月	『労働調査』第423号（38-57）	依頼原稿。アメリカの各地で、生活ができる賃金を求めて「草の根」運動が広範囲にわたって展開されている。いまなぜ「生活賃金」が問題になっているのか。その推移と現状だけでなく、日本の年功賃金との関連を含めて、その意味を考える論攷である。
４．スウェットショップからの問題提起	単	平成17年12月	『奈良産業大学　紀要』第21号（59-80）	スゥエットショップに対する反対運動が、特に、児童労働、強制労働等の観点から、世界的に展開されている現状を概観し、それを擁護する立場の紹介をを含めて、スゥエットショップ問題を整理し、今後を展望する。
５．人権、そして働くものの権利	単	平成17年12月	『奈良産業大学紀要』第21号（101-126）	ＩＬＯ、ＧＲＩ、ＳＡ８０００，ＥＴＩ、サリバン原則、等の国際的な労働基準の比較研究。その有用性と含意を中心に、論じている。
６．スウェットショップは超えられたのか？	単	平成18年6月	奈良産業大学『産業と経済』第22巻第１号（97-118）	スウェットショップを巡る議論を整理した後、ナイキとアディダスの事例（アンチ・スウェットショップ運動への対応策）を分析して、その企業行動の意味を考えることが本稿の目的であり、モラルイマジネーションが重要なキーワードである。
７．ビジネスエシックスと三つの陥穽)	単	平成19年3月	奈良産業大学『産業と経済』第22巻第１号（1-16）	田中照純「企業倫理学に潜む３つの陥穽」に対する反論。倫理学への陥没、ステイクホルダー論による眩惑、主観的規範論への傾斜、という３つの論点を巡って、論争が展開されている。
８．コミュニティ・ビジネス概念の確立に向けて（１）－－－奈良県コミュニティ・ビジネスの経営学的研究序説	共	平成19年9月	奈良産業大学『産業と経済』第22巻第２号（1-17）	奈良県はコミュニティビジネス後進県である。その奈良県の実態把握を目指して、本稿では、その準備作業として、コミュニティビジネスの定義を分析し、コミュニティビジネスの指標を確立している。奈良県コミュニティビジネスの実態調査の結果は活字化はされていないが、ウェブで「資料」を公開している。
９．コミュニティ・ビジネスの新たな展開：地域経済開発から住民主体地域密着型ビジネスへ －－－イギリスの事例を中心として	単	平成19年120月	『奈良産業大学　紀要』第22号（39-58）	コミュニティビジネスないしはソーシャルビジネスは欧米においてさまざまな事業主体のろとで展開されている。本稿では、イギリスの先進的事例に学ぶという形で、彼の地で積極的に推し進められている地域経済開発から住民主体地域密着型への転換のプロセスそしてその実態を理論的にまた実態分析を不決めて論じている。
10．道徳的主体としての現代企業	単	平成20年7月	奈良産業大学『産業と経済』第23巻第１・２号（19-45）	自然人としての個人だけではなく、人工的につくりだされた組織に対しても、道徳的責任を問うことができる－－これが「企業道徳的主体」説である。これに対して賛成する立場、否定する立場の所説を批判的に検討したあとで、筆者の見解を、積極的に提示している。
11．現代企業とステイクホルダー・マネジメント	共	平成20年8月	片岡信之・海道ノブチカ編『現代企業の新地平』千倉書房所収（117-130）	企業を道徳的主体として見なすことができるという立場から、新しいマネジメントをあり方を提唱する。企業はいわば企業と各種のステイクホルダーとの間のさまざまな契約の束であり、それらを契約を遂行することがステイクホルダーマネジメントである、と主張する。

12. 従業員の権利について考えるひとつの視点－－労働ＣＳＲ序説	単	平成21年3月	奈良産業大学『産業と経済』第23巻第３・４号（1-29）	ＣＳＲを従業員の視点から論じた論攷。働くものの権利としての人権が企業内社会でどのように保障されるのかについて、アメリカ企業で注目されている「デュー・プロセス」に注目して、その歴史、原理、現状について整理し、日本企業への教訓を列挙している
13. 人的資源管理（HRM）と倫理－－人的資源管理をビジネス・エシックスの視点から考える	単	平成22年3月	奈良産業大学『産業と経済』第24巻第３・４号（1-18）	人的資源管理（HRM）の枠内にビジネスエシックスの問題提起をどのように組み込むのかを中心論じる。人的資源管理（HRM）を倫理の視点から本格的に論じた文献はこれまで少なく、おそらく本稿が我が国では最初の試みであろう。
14. 企業倫理	共	平成22年3月	片岡信之他編『アドバンスト経営学』中央経済社、2010年所収（340-375）	没道徳性神話、倫理綱領、ＣＳＲ、社会的責任投資、社会的ミッション、ステイクホルダー、ステイクホルダーマネジメント、ソーシャルスクリーニング、社会的企業、コミュニタリアニズム、等をキーワードとして、企業と社会の関係を、企業倫理の視点から、現実を踏まえて理論的に概観する。
15. 何故に、企業は倫理を問われるのか	単	平成23年1月	経営倫理実践センター『経営倫理』No.61（8-10）	依頼原稿。現在、社会から企業に求められていることを、企業倫理の立場から、道徳的主体としての企業という概念に基づいて、整理する。
16. ステイクホルダー・セオリーと従業員－－ステイクホルダー・セオリーとしての　　従業員の二面性を中心として	単	平成23年3月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第２巻（1-18）	ステイクホルダーとしての従業員には、会社と対峙する側面と会社を代表する経営者に連なる存在として社会と対峙する側面という２つの側面があるとの立場から、従業員ステイクホルダーの特殊性を本格的に論じている。
17. 人的資源管理	共	平成23年3月	片岡信之編『新版　要説経営学』文眞堂所収（139-154）	ワークライフバランス、ヒト資源、エンプロイアビリティ、長期決済型賃金、成果給、コンピテンシー給、ワークルール、等をキーワードとして、現代人的資源管理のあり方を整理する。
18. 労使関係と従業員の権利	共	平成23年3月	片岡信之編『新版　要説経営学』文眞堂所収（180-190）	労使協議制、国際的労働基準、労働ＣＳＲ、任意雇用、ディーセントワーク、等のキーワードで、現代の労使関係のあり方を整理する。
19. ステイクホルダー・マネジメント型経営への転換	共	平成23年3月	片岡信之編『新版　要説経営学』文眞堂所収（290-302）	株主中心のストックホルダー型・マネジメントからステイクホルダー型マネジメントへの転換が徐々に進行しているとの認識能もとで、現代企業のガバナンスを整理する。ＣＳＲ、株主行動主義、ステイクホルダー行動主義、等がキーワードである。
20. ロシアでモチベーションはどのような内容で教えられているのか	単	平成24年11月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第５巻(503-539)	1990年代以降ロシアでは再び欧米系のマネジメント思想・技術に大きな関心が払われ摂取がおこなわれてきたが、今日では、それらの経験を踏まえてマネジメント関連の斬新な『テキスト』が数多く刊行されている。本稿は、モチベーションをタイトルとする十数冊のテキストの内容を精査し、欧米及びソビエト時代のモチベーション論の異同を中心に、マネジメント文化（管理）の一般性と特殊性の問題にアプローチしたものである。
21.「道徳的主体としての現代企業」の存在論的意味	単	平成24年12月	『奈良産業大学紀要』第28集(120-140)	経営学をはじめとする社会科学のタームとの関連で「道徳的主体としての企業」を概念的に整理して、株式会社論の文脈で位置づけ、その存在論的意味を考える。例えば、会社は誰のものであるのか？という問題に対しては、会社は会社自体のものであり、その会社にはひとつの組織体として独自の意思がある、と積極的に主張する。
22.ロシアのビジネスエシックスについて	単	平成24年12月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第６巻(139-171)	ロシアでは2000年以降ビジネスエシックスへの関心が高まっている。しかし概念自体が英語圏の「借り物」であり、ロシア独自のビジネスエシックスの構築にまでは至っていない。本稿は、さまざまな文脈で使われているビジネスエシックスの概念整理にはじまり、実践的には、倫理綱領の制定が重要視されている、ロシアのビジネスエシックス関連の学界及び実務界の現状を、ロシア語文献を読みこなして、解明したものである。

23. 企業社会的責任論の生成と展開（上）	単	平成24年12月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第６巻(173-222)	2010年に刊行されたロシアのＣＳＲ研究の第一人者ブラゴフの『企業社会的責任：概念の進化』はＣＳＲ論通史として第一級の作品である。単独の著者による通史は欧米でも希である。本稿はその作品を批判的に紹介しＣＳＲ研究の現状の問題点を抽出し、現代社会の在り方を問うものである。ブラゴフは欧米系のＣＳＲ研究を文献史的に追体験し、企業市民、サスティナブル経営にも言及した上で、ロシアの観点を盛り込んで独自に整理しており、我々にとっても教えられることが多々ある。３回に分割して掲載。
24. 企業社会的責任論の生成と展開（中）	単	平成25年2月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第７巻(355-390)	2010年に刊行されたロシアのＣＳＲ研究の第一人者ブラゴフの『企業社会的責任：概念の進化』はＣＳＲ論通史として第一級の作品である。単独の著者による通史は欧米でも希である。本稿はその作品を批判的に紹介しＣＳＲ研究の現状の問題点を抽出し、現代社会の在り方を問うものである。ブラゴフは欧米系のＣＳＲ研究を文献史的に追体験し、企業市民、サスティナブル経営にも言及した上で、ロシアの観点を盛り込んで独自に整理しており、我々にとっても教えられることが多々ある。３回に分割して掲載。
25. ロシアにおけるソーシャルビジネス研究及び実践の一断面	単	平成25年3月	『奈良産業大学紀要』第29集(165-184)	日本ではコミュニティビジネスとして知られているロシアのソーシャルビジネスに焦点を合わせ、その理論的状況と現実の一端を解明する。ロシアでは、一方で、ＮＰＯが続々と立ち上げられ、他方で、ＣＳＲへの関心が深まり、地域住民が政府に頼らずに社会的課題をビジネスの手法で解決する社会的条件が整備されつつあるが、マイクロファイナンスはいまだかなり不十分である。その現状を分析することによって、我が国のコミュニティビジネスそして社会的企業が抱えている問題点がより鮮明に浮かび上がり、今後の対応に向けて教訓が得られる。
26. ロシアではＨＲＭがどのように教えられているのか 単著 平成25年12月	単	平成25年12月	『奈良産業大学紀要』第30集(99-114)	ロシアでは、市場経済へと転換とともに、様々なマネジメント領域において、個別の企業に大きな自由裁量が与えられることになった。人事管理の領域はそのような流れの中でよりラジカルな変貌を遂げている場である。本稿では、人的資源管理というタームが積極的に取り入れられている現状に注目して、その「人的資源管理」が高等教育機関でいかなる内容で教えられているのかという問題意識のもとで、現在のロシアのマネジメントのあり方を解明し、その意味を考えるための視点を提供している。
27. 企業社会的責任論の生成と展開（下）	単著	平成25年12月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第８巻(1-50)『	2010年に刊行されたロシアのＣＳＲ研究の第一人者ブラゴフの『企業社会的責任：概念の進化』はＣＳＲ論通史として第一級の作品である。単独の著者による通史は欧米でも希である。本稿はその作品を批判的に紹介しＣＳＲ研究の現状の問題点を抽出し、現代社会の在り方を問うものである。ブラゴフは欧米系のＣＳＲ研究を文献史的に追体験し、企業市民、サスティナブル経営にも言及した上で、ロシアの観点を盛り込んで独自に整理しており、我々にとっても教えられることが多々ある。３回に分割して掲載。

28.ロシアのおけるＣＳＲ教育充実に向けた動き	単著	平成25年12月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第８巻(51-90)	1990年代以降のロシアのビジネススクールの全般的な歴史を整理したうえで、具体的な事例のひとつとして、サンクトペテルブルグ大学ビジネススクールに焦点を当てて、カリキュラムの分析を試みる。その結果判明したことは、学部教育だけでなく大学院レベルの教育でも、ビジネスエシックスあるいはCSRを軸としてカリキュラムが構築され、マネジメント教育が推進されているという事実であり、この経験は、モデルとして、他のビジネススクールにも導入されている。
29.ロシアにおけるコーポレートガバナンスへの取り組み	単	平成26年3月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第９巻(195-230)	ロシアの高等教育機関で学ぶ学生を対象に執筆された「コーポレートガバナンス」関連のテキスト（教科書、参考書等）を読み込みその内容を精査して、「コーポレートガバナンス」という事象がいかなる意味で教えられているのか、を解明した論文。この作業によって、ロシアが原則としてはアメリカ型のガバナンスを志向していることが判明したが、それだけではなく、ロシアが英語圏をはじめとする欧米の企業統治からどのようなことを学び、自国の文化に適したガバナンス構築を進めているのか、その一端が見えてくる。
30.ロシアから見たソーシャルアントレプレナーシップ論の現状	単	平成26年3月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第９巻(231-282)	ソーシャルアントレプレナーシップ、言葉を換えて言えば、社会企業家、社会的企業の活動が世界的に注目を集めている。私経済、公経済だけではなく、今後は、社会経済（第3セクター）のあり方に私たちの未来が掛かっている、という考え方である。本稿は、このことを念頭に置いて、ソーシャルアントレプレナーシップを巡るロシアの現状を、理論と実際の２つの側面から検討し、私たちに突きつけられている課題を丁寧に整理した論文である。
31.ロシアの企業市民概念とその現実	単	平成26年3月	『地域公共学総合研究所所報』第４集(25-52)	CSRは進化する概念であり、今日では、そのCSRと企業市民概念の相互関連を巡って議論が錯綜し、実践的にも少なからざる混乱を引き起こしている。本稿では、そのような現状に対して、筆者なりにひとつの回答を提示することを意図して執筆されたものである。具体的には、この領域で「後進国」であるロシアの現状を題材として、理論的に問題点を整理し今後を展望している。
32.1920年代前半ロシア管理論の再評価を巡って：承前――コリツキーの所説の検討	単	平成26年6月	奈良マネジメント研究グループ『奈良経営学雑誌』第1巻(1-22)	ロシアでは市場経済への移行後欧米諸国の管理論に学ぶ姿勢が大きく打ち出されているが、同時に自国の過去の管理思想を見直し・再評価する動きも活発化している。本稿ではこの領域の代表的な研究者であるコリツキーの眼を借りて、1920年代前半ロシア管理論の再評価を巡るロシア学界の動向を纏めている。
33.1920 年代ロシア「人間関係」学派をめぐって ― 現代のロシアマネジメントとヴィトケの評価 ―	単	平成26年12月	奈良学園大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第11９巻(1-50)	ロシアでは現在1920年代の管理論の再評価がひとつの流れになっている。本稿は、メイヨーに先駆けて「人間関係論」を展開させたとの評価もあるヴィトケの業績を取り上げ、その現代的意義を整理したものである。
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　森　基雄

研究分野	研究内容のキーワード
英語学	英語の起源と歴史

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）全学レベルでプレースメントテストを実施し、学力別のクラス編成による授業を実施。	平成23年4月3日、平成24年4月3日	英語の基礎学力が極端に低い学生のケアーを重視したクラス編成を行い、ｅ-ラーニング教材で英語の基礎を１から学ばせることにより、本学の英語会話、英語読解といったやや発展的なレベルに向かう科目の習得のための土台作りを目指した。
2　作成した教科書，教材		
1）森　一郎・森　基雄　『耳から覚える試験にでる英文解釈　ＣＤ付き』　青春出版社	平成24年7月5日	本書は英文解釈の急所を116とし、大学受験に必要なエッセンスを厳選したものである。そして中身を再度点検の上、より見やすく、わかりやすく使用できるよう２色刷りとし、記憶シートと合わせて使用することによって英文解釈力をより身につけられるようにし、さらに≪急所≫部分をＣＤに収録し、繰り返し聞くことで勉強効率が上がることを目指した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
	平成00年0月0日	
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
	平成00年0月0日	
5　その他		
1）奈良県北葛城郡王寺町の王寺りーベルカレッジでの公開講座にて「英語の誕生」と題して講演	平成22年6月19日	英語はもともと印欧語族の中のいくつものグループの１つであるゲルマン語派の１方言であったこと、英語の歴史はドイツの北部にいたゲルマン民族の一部が西暦５世紀にブリテン島に移住してきたことに始まること、English、Englandという名称の由来、そして今日の英語のスペルと実際の発音との間に大きなギャップができてしまっことの歴史的背景など、世間一般にはなじみの薄いと思われる英語の裏話的な内容の講演。講演後のアンケートの結果も好評であったとの報告をいただいた。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）	昭和00年0月	
2　特許等		
1）	昭和00年0月	
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）	昭和00年0月	

4　その他		
1）	昭和00年0月	

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
	単	平成00年0月		
（学術論文）				
1. 古英語強変化動詞　(Ⅳ)	単	平成19年12月	奈良産業大学紀要第23集 p.59～p.68	古英語強変化動詞の第2類と第3類の活用における母音交替と子音交替の成立過程を印欧祖語までさかのぼって考察し、他の古代ゲルマン諸語のケースとは異なる古英語独自の音変化によって大きく様変わりした古英語の第2類と第3類の音韻、形態上の特徴とそこに至るまでのプロセスにおける問題点について論じた。
2. 古英語強変化動詞6類について	単	平成24年11月	奈良産業大学『社会科学雑誌』第5巻 p.541～p.558	古英語強変化動詞１～５類では不定詞～過去単数～過去複数～過去分詞における母音交替は究極的にはすべて印欧祖語の母音交替の基本パターンであるe～o～ゼロ～ゼロにさかのぼると考えられるにに対し、本稿のテーマである６類はゲルマン祖語のa～ō～ō～aという一見大きく逸脱したもののように見えるパターンを示す。本稿ではまずこの母音交替が後に古英語ではさまざまな音変化を受けたことにより古英語が独自に発達させた６類の状況について詳細に論じた上で、ゲルマン祖語のa～ō～ō～aそのものの印欧語としての真の起源についても主に最新の説に基づき、その問題点も含めて論じた。
3. 古英語強変化動詞　(Ⅴ)	単	平成24年12月	奈良産業大学紀要第28集 p.151～p.159	古英語強変化動詞１～３類の語根母音が基本的には不定詞～過去単数～過去複数～過去分詞においてe～o～ゼロ～ゼロという印欧祖語の単純な基本パターンにそのまま還元できるのに対し、本稿がテーマとして取り上げたものはより複雑で従来から議論の多い４，５類である。４類の語根母音は印欧祖語のe～o～ē～ゼロに、５類のそれは印欧祖語のe～o～ē～eにそのまま由来するかのようにも見えるが、１～３類にはなく４，５類に共通して現れる、印欧祖語のēにさかのぼるかのように一見思える過去複数の長母音については特に、ゲルマン語派以外のグループの動詞と比較すると、形態論的に見て印欧祖語にそのままさかのぼるものとは考えにくいとする学者も多い。その真に語源的な解釈については見解の分かれるところであり、その最新とも言える説を中心に議論を進めつつ、同時に４，５類がゲルマン祖語から古英語に至るまでのさまざまな音変化を受けて古英語独自のさらに複雑な様相を呈するに至った過程についても論じた。

4. 重複動詞とその古英語における発達	単	平成24年12月	奈良産業大学『地域公共学総合研究所年報』第3集 p. 109～p. 117	ゲルマン語の強変化動詞の７つのクラスのうち、最終の７類として分類されるのがこの重複動詞であり、このグループはまさに寄り合い所帯の様相を呈する。そして従来特に問題とされてきた過去形の母音は古英語（そしてゴート語以外のすべてのゲルマン語）においては印欧祖語のアプラウトを反映するものではなく、完了形の要素である重複接頭辞の母音eと語根母音の縮合により形成されたとする説が依然有力であることを改めて確認した。その結果、重複動詞が真に示すアプラウトはむしろ時制変化外の同根語に存在することは明らかであり、またそのことをはっきりと具体的に示すために、ゲルマン以外の語派も含め、同根でアプラウトの関係にあると思われるその多くの実例を挙げ、さらに重複動詞の現在時制の母音の起源、すなわちその真のアプラウト階梯についても考察した。
5. 古英語強変化動詞とその同根語における史的そして語源的な問題	単	平成27年3月	奈良学園大学紀要第2集 p. 91～p. 112	古英語強変化動詞とそれを取り巻く問題点について、以下の３つの点から考察した。まず第一には、印欧語族の最古の特徴の１つであるアプラウトを最もよく反映するとされる強変化動詞とその変化表外の同根語の中でも最近になってセム語族からの借用語ではないかと指摘されているものや、セム語族からの借用語である可能性が指摘されているものの中でも強変化動詞と同根語である可能性が考えられるものについて論じた。第２には、強変化動詞の同根語の中でもti-抽象名詞における印欧語族本来のアプラウトの状況とその古英語での実態について論じた。そして第３には、強変化動詞７類の、特に議論の多い過去母音の成立過程について論じ、さらに現在時制の語根母音において大きな問題を有する事例についても取り上げた。
（その他）				
	単	平成00年00月		

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　矢倉 伸太郎

研究分野	研究内容のキーワード
経営学	酒造企業経営史、地域経済史、地域産業史

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）特記事項なし		
2　作成した教科書，教材		
1）『管理の仕組みとビジネス（ビジネス入門）』	平成24年3月	共著　奈良産業大学（現奈良学園大学）ビジネス学部専門基礎科目の一つである「管理の仕組みとビジネス（ビジネス入門）」において使用し、経営学の諸分野の基本的な知識の学習のために作成されたものであり、ビジネス学部宮坂純一教授著作の教科書（同名）の一部を矢倉が書き替えたものである。 共著者：◎宮坂純一、矢倉伸太郎
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）特記事項なし		
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
4　その他		
1）特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文）				
コミュニティ・ビジネス概念の確立に向けて（Ⅰ）－奈良県コミュニティ・ビジネスの経営学的研究序説－	共著	平成19年8月	奈良産業大学『産業と経済』 第22巻第2号　73頁～110頁	われわれの本来の目的は、奈良県のコミュニティ・ビジネスの実態を調査し分析することである。本稿はその一環としてまず、欧米のコミュニティ・ビジネスの実情を、地域経済開発、シビック・アントレプレナーならびに地域金融に関する事例を分析し、考察する。次いで、奈良県を中心としたわが国の先進的なコミュニティ・ビジネスの取組の事例研究を積み重ね、その後コミュニティービジネスについての、われわれの定義を提示する予定である。 共著者：◎宮坂純一、矢倉伸太郎、西村　剛
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　渡辺　邦博

研究分野	研究内容のキーワード
理論経済学、経済思想、経済史	日本史、経済学説史、経済思想史、教育社会学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）特記事項なし		
2　作成した教科書，教材		
1）特記事項なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)　DVDと共に語る経済学成立の背景	平成17年4月23日	大学と地域社会の連携の試みとして、王寺町と共催して継続している公開講座第一回目の講演タイトル。スミスやステュアートに関係するスライド、関係DVDを紹介した。
2)　熊谷次郎訳・マグヌソン『重商主義』の合評会で司会	平成20年1月23日	重商主義に関する最近の動向を反映するマグヌソンの訳者の一人・熊谷次郎氏を招き、マグヌソンの学説について研究会を行った。
3)　ジョン・ヴィント「ハリエット・マーティノーと経済学の制度化」の講演で司会	平成22年3月15日	ジョン・ヴィント、マンチェスター・メトロポリタン大学教授の経済学の普及・制度化に関する講演は、古典派経済学の普及過程の好例であるが、氏の見解を研究した。
4)　奈良県王寺町･奈良産業大学共催「りーべるカレッジ」において、「特命全権大使米欧回覧実記と文明開化」を講演した。	平成23年10月1日	奈良県王寺町と奈良産業大学協賛「りーべるカレッジ」於;王寺町地域交流センター 政情未だ不安定な明治維新直後に、政府中枢メンバーと多数の留学生によって、条約改正と言う当初の目的と期間を大きく上回る一大旅行によって、明治のリーダーたちが、何を学び、日本の進路に生かそうとしたのか、膨大な記録を読み解いて、使節団の意図したことを考える。
5)　地域公共学総合研究所第一回経過報告会　「吉野林業関係調査経過報告」	平成23年3月	吉野林業関係調査経過報告、谷弥兵衛氏の大著「近景吉野林業史」の紹介を中心に現地林業調査の概要を報告した。
6)　地域公共学総合研究所第二回経過報告会＆公開講演会「台湾フェローシップ参加報告」＆「公開講演会の開会の辞」、福井県立大学服部茂幸講師紹介	平成24年2月	台湾フェローシップ参加報告＆公開講演会の開会の辞、福井県立大学服部茂幸講師紹介
7)　地域公共学総合研究所第三回経過報告会　「台北高等商業学校の商業教育調査」	平成25年3月	4ヶ月の台湾奨助金を得て旧日本が台北に設置した高等教育機関＝台北高等商業学校の商業教育を調査した成果を紹介した。
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
高等学校教員免許、社会1級、外国語（英語）２級		大阪府教育委員会
1）博士（経済学）	平成21年3月	関西大学　第415号　論文題目　「ジェイムズ･ステュアートとスコットランド」
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)　国立屏東科技大　技職及職業教育研究所，Graduate Institute of Vocational and Technological Education 2012/03/15　I. 第二次大戦前の台湾における高等商業教育 High commercial school education in Taiwan before WW II	平成24年3月	国際交流提携校の依頼により、一旦職業に就いた大学院生向けのワークショップを行った。
2）II. How Japan developed Taiwan by Japanese and western technology and knowledge.　2012/03/22	平成24年3月	国際交流提携校の依頼により、一度職業に就いた大学院生向けのワークショップを行った。
4　その他		
1）日本高等教育評価機構評価委員	平成24年４月1日から平成27年月31日まで	
関西地区台湾留学同友会理事	平成24年4月28日以降	

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1．『ジェイムズ・ステュアートとスコットランド---もう一つの古典派経済学---』	単	平成19年4月	ミネルヴァ書房	ステュアートの背景、主著以外の著作を中心に、その経済学説の普及拡大を考察し、伝記的部分によって補足した。
（学術論文）				
1.『コールドウェル文書』をめぐって	単	平成20年3月	アダム・スミスの会会報75	pp6-13　ステュアートの従兄弟ミュア家文書研究。
2.近代日本の国際化とスコットランド	単	平成21年9月	奈良産業大学「産業と経済」24/1-2	pp.1-20　近代化へのスコットランド人の貢献
3. 近世吉野林業に関する最近の労作 -Basic Structure of Yoshino Forestry in the Edo era-	単	平成24年	龍谷大学里山研究センター報告書	多間伐で先進的を言われる吉野林業については、実のところ、その起源まで遡った通史がなかった。
4. 新聞購読に関する意識調査	共	平成23年12月	奈良産業大学紀要第２７集	pp. 113-125. 大学生が新聞を読まない。それでは、彼らはどのように日々の情報を入手しているのか？新聞に関する意識はどのようなものかを近畿圏3つの大学を中心に500ほどのサンプルを収集、解析した。
5. 日本統治下の台湾における高等商業教育 ー台北高等商業学校を中心としてー	単	平成24年3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所 研究年報第2号	pp. 53-61.　旧日本領であった台湾の高等教育機関、とりわけ高等商業教育機関の台北高等商業学校のカリキュラム、スタッフなどを検討することで、経済学がどのように普及したか、さらには西洋技術がどう適用されたのかを研究する基礎を探求した。

6. ダリエン計画をめぐって	単	平成24年3月	社会科学雑誌 第4号	pp.43-50.17世紀末、未だ独立国であったスコットランドは、イングランドによる政治的攻勢と経済的停滞から脱出するため、起死回生策として、中南米のダリエン地峡に植民地建設を企画した。啓蒙思想研究に隠れて必ずしも活発とは言えないこの計画の基礎的研究文献を紹介する一階梯として、計画全体のスケッチを示した。
7.Report for Taiwan Fellowship 2012, Two Journals published by Taipei High Commercial School before the World War II. By Kunihiro Watanabe, Research Institute for Public Affairs, Nara Sangyo University	単	平成24年7月	中華民國國家図書館漢学研究中心報告書	2012年台湾外交部台湾奨助金訪問學人報告
8.グロサリ：『特命全権大使米欧回覧実記』帰路に観る固有名詞表記ーーー地名・国名を中心としてーーー	単	平成24年11月	社会科学雑誌第5号	pp.603-612.『特命全権大使米欧回覧実記』の帰路に現れた固有名詞表記に米欧諸国表記の日中文化歴史の差異を検討した。
9.「どのようにして日本は日本と西洋の技術・知識を通じて台湾を開発したのか」	単	平成24年12月	奈良産業大学紀要第28集	pp.217-226.屏東科技大学技職所の依頼で院生向けに実施したワークショップの教案。
10.2012年度台湾林業調査報告	山本英司との共同	平成24年12月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報第3集	pp.119-136.2012年9月に実施した台湾林業調査の速報。
11.台北高等商業学校の商業教育について	単	平成25年年6月	関西学院大学「経済学論究」第67巻1号	pp.65-104. 台湾フェローシップ2012年研究成果
（その他）				
（翻訳）				
ジョン・ヴィント、ハリエット・マーティノーと労働紛争	単	平成23年11月	奈良産業大学社会科学学会、社会科学雑誌第3号	pp.151-190.19世紀初頭、イングランドの女流作家マーティノーは、近代的な工場システムの導入に際して工場労働者たちによる「機械打ちこわし」に直面して、劇脚本を発表した。ヴィントは、彼女が依拠した経済理論と彼女の理解を比較して、彼女が経済学の普及に貢献したことを分析した。
ジョン・プレブル著『ダリエンの大惨事』	単	平成24年12月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報第3集	pp.137-147、プレブルの研究書『ダリエンの大惨事』の翻訳、中米パナマ地峡近傍のダリエンでのスコットランド植民地建設失敗に関する箇所の翻訳。
ジョン・プレブル著「ウスター事件、エディンバラ、1705年」	単	平成25年年2月	桃山学院大経済経営論集54-3	pp.53-77、プリブルの研究書『ダリエンの大惨事』の翻訳、1705年にエディンバラで起こったイングランド船乗組員の処刑事件の経緯部分の翻訳。
ジョン・プレブル著『ダリエンの大惨事』(3)	單	平成25年12月	奈良学園大学社会科学雑誌第11巻	pp.261-287.プレブルの研究書『ダリエンの大惨事』の翻訳、原書pp.21-41.
（書評）				
（辞典項目）				
（国際研究活動）				
台湾フォエローシップ研究員	單	平成25年1月から4月まで	台湾国家図書館漢学研究中心訪問學人	台湾政府MOFA基金による研究留学、台北高等商業学校の研究

（学会報告）				
1. ジェイムス･ステュアート	単	平成19年10月14日	社会思想史学会第32回大会(立命館大学) セッションF「ヒュームとスミス」	大会セッションFで 、拙著『ジェイムズ･ステュアートとスコットランド」が合評の対象となり、発題に答弁した。
2. 『コールドウェル文書』をめぐって	単	平成19年12月	アダム･スミスの会例会(芝蘭会館)	ステュアート関係の重要文書（『コールドウェル文書』『コルトネス文書』など）の研究意義を説明した。
3. ジェイムズ・ステュアート研究の現在	単	平成20年12月3日	関西大学公開セミナー（経商合同会議室）	関西大学のセミナーからの要請で、日本のステュアート研究の原状と課題を説明した。
4.台北高等商業学校の商業教育について	単	平成24年12月22日	経済学史研究会第218回例会報告	台湾フェローシップの助成を受け、台北高等商業学校の雑誌を収集し、その記事を分析した経過を報告した。
5.台湾林業の現状と課題	山本英司と共同	平成24年12月26日	龍谷大学里山学研究センター定例研究会	平成24年９月に実施された林業調査を山本英司氏との共同で報告した。
6. アーサー・ハーマン著、篠原久監訳「近代を創ったスコットランド人」合評会、発題	共	平成25年10月	関西学院大学（社会思想史学会大会）	社会思想史学会第38回大会セッションB「ヒュームとスミス」

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　武谷　嘉之

研究分野	研究内容のキーワード
経済学	経済史、社会史

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
＜奈良産業大学経済学部ビジネス学部において＞		
1)体験学習を取入れたゼミの運営	平成14年 4月～現在に至る	専門演習において早い時期に学外での工場見学等を取入れることによって、その後の演習における学習と実際の社会のつながりを実感させた。これによって学習意欲を引出した。また夏季休暇中には合宿を行い、研究を深めた。具体的な訪問先は大阪歴史博物館、法隆寺、トヨタ自動車本社工場、産業技術記念館、熊本城などである。
2）moodleを応用したＥ－ラーニングシステムを利用した日本経済史の復習システム	平成16年 4月～平成18年 3月	ＷＥＢ上で日本経済史の復習､および小テストの受験を可能とした｡原則的に講義のあった日とその翌日に２０問程度の小テストを毎回受験することとして、ログを取ることによって学習の進捗状況を把握した。また定期試験前に解説をつけたものを配布し、再受験を勧めることによって、学生の主体的な取り組みを引き出した。
3)講義おけるレポートの活用	平成16年 4月～現在に至る	日本経済史、および産業経済史の講義においてレポート課題の任意提出を認め、添削して返却した。これは受講生のなかに相当程度理解度に差のある現状の中で、上述の小テストだけではその差が埋らないと考えたからである。レポートの課題を複数提示し、学生がその興味に従ってレポートを作成することによって、理解度の高い学生にとっても、低い学生にとっても積極的に学習を深める契機となった。
4)資格取得と連動させたITリテラシー実習の実施	平成19年 4月～平成21年 3月	ビジネス学部の初年次教育として行ったITリテラシーの実習にマイクロソフトオフィススペシャリストの受験を前提とする内容を取入れた。それまで奈良産業大学では同資格取得者は年間１桁に満たなかったが、受講生の８０％の２５名を超える資格取得者を出した。単に資格を得たにとどまらず、比較的成功経験の乏しい本学学生に対して１年生の前期に一般に認められる資格を取得できたという達成感を与えることができた。学生アンケートにおいても非常に高い満足度が検出された。
5)体験型学習を契機とした自発的・主体的カリキュラムの構築と実践－プロジェクト演習を中心として－	平成19年 4月～現在に至る	ビジネス学部設立にあたって、申請するカリキュラムの立案にあたり体験型学習と体系的理論の修得を一体としたプロジェクト演習中心カリキュラムを構想し、ビジネス学部のカリキュラムとして実践した。具体的にはプロジェクト演習毎に重点科目・推奨科目を指定し、体験を中心としたプロジェクトとそれに必要な理論・知識を融合できるようなカリキュラムとした。またこれを全学部的に実施するために各プロジェクト演習担当者と面談を行い、学部として授業内容のチェックをする体制を取った。
6）初年次教育における学外見学を中心としたカリキュラムの実践	平成19年 4月～現在に至る	初年次教育において学外見学を核として、事前研究・現地調査・研究発表の過程を取入れた。座学による準備、現地での見学、調査、調査報告書の執筆、報告発表という流れの中で、基本的な研究態度を身につけさせることができた。さらにグループワークを基本とすることによって今後の大学生活の仲間づくりにも役だてた。具体的な見学先は中小企業の支援を行っているクリエイションコア東大阪などである。

7)パワーポイントを利用した授業教材作成とその配布	平成21年 4月～現在に至る	日本経済史の講義においてパワーポイントで教材を作成し、学生が学内からアクセス可能なフォルダにファイルとして公開することで、予習・復習などの自学を助けることができた。
8)学外NPOと連携した演習運営	平成22年 4月～現在に至る	NPOと連携して演習に社会活動を取込むことによって体験と理論の結合を図った。具体的には地球温暖化について輪読形式で学ぶとともに、温暖化防止活動をしているNPOが奈良各地で行っているイベントにスタッフとして参加し、啓蒙活動をしたり、奈良産業大学地域連携推進委員会と共催で地球温暖化に関するシンポジウムを開催したりした。
9)学外企業とのコラボレーションによる演習運営	平成22年 9月～平成23年 7月	学生食堂を運営企業(株式会社ダイショク)に協力して運営することによって、コミュニケーション能力を中心に、経営に必要な力を身につける演習をおこなった。具体的には学生食堂改善のためのプランを練り、ダイショクに対してプレゼンテーションを行い、ひとつひとつ問題点を解消していきながら、改善プランを実施していった。交渉力・プレゼン能力などが身についた。
１０)講義における双方向授業の実施	平成23年 4月～現在に至る	共通教育の「日本人の労働を考える」の講義を通じてアンケートを複数回とって、学生の労働意識を確認しながら、働くということの意味を対話形式で講義した。主体的な参加意欲を引き出した。
＜天理大学人間学部において＞		
１１)パワーポイントを利用した授業教材作成とその配布	平成21年 4月～平成22年 3月	日本経済史の講義においてパワーポイントで教材を作成し、学生が学内からアクセス可能なフォルダにファイルとして公開することで、予習・復習などの自学を助けることができた。
＜龍谷大学経済学部において＞		
１２)パワーポイントを利用した授業教材作成とその配布	平成23年 4月～平成24年 3月	経済学概論の講義においてパワーポイントで教材を作成し、学生の理解を助けた。またパワーポイント資料は印刷して配布し、復習に用いるよう指示した。
2　作成した教科書，教材		
1）「日本経済史」小テスト	平成16年 4月～平成19年 3月	日本経済史の講義の内容を２０問程度にまとめて毎回ネット上で受験させた。学内ネットワークの問題などで利用できないときは印刷した小テストを用いた。
2）「日本の歴史」プリント	平成23年 4月～現在に至る	共通教育の「日本の歴史」の講義で毎回講義内容をまとめたプリントを作成し、講義の概要や全体における位置づけなどを明確化することに努めた。
3）「日本の歴史」小テスト	平成23年 4月～現在に至る	共通教育の「日本の歴史」の講義を通じて4回程度の小テストを行い、知識の定着を図った。小テストとはいえ選択問題と論述形式を組み合わせたもので、授業の復習とテストの予習を兼ねて自宅学習への動機づけになるなどの効果が大きかった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）	平成00年0月0日	
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）行政書士	平成 6年	
2）博士(経済学)	平成15年 3月	大阪市立大学第４２３９号 「博士論文題名：近世下級建築職人の組織と労働」
2　特許等		
1）	昭和00年　0月	
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）	昭和00年　0月	
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 「日本史概説」	単著	平成25年 4月	開成出版	共生をキーワードとして日本近世近代史を概説した。大学における共通教育のテキストとしても利用できるよう基礎的な事実を通史的に概略すると共に、いくつかのトピックスについてやや詳しく解説した。土地所有の変遷、働き方の変化などを縦軸として設定し、各時代における社会集団のあり方からそれぞれの時代の共生様式を論じた。A5版　245頁
（学術論文）				
1.「日本人の労働観　勤勉の始原と終焉（上）」	単著	平成19年 8月	『産業と経済』 第22巻第2号 （奈良産業大学） 111頁～124頁	科研費助成によって得た成果をもとに、日本人の労働観について、始原としての勤勉革命論を検討している。また勤勉革命に見られた歴史的条件がどのように再生産され、どのように失われてきたかを論じている。勤勉革命論が取りこぼしている都市労働者についても議論している。
2.「日本人の労働観　勤勉の始原と終焉」（下）	単著	平成20年 1月	『産業と経済』 第22巻第５号 （奈良産業大学） 241頁～250頁	上記の前編に引き続き近代以降の労働観について述べた。いわゆる勤勉革命の歴史的意義をおさえたうえで、現在の成熟した社会にある日本においてその勤勉がどのように受け継がれてきたか、また失われつつあるかについて論じた。今後の日本人の労働観は、競争や生産性のみを意識した価値観から別の価値観に変化しつつあることが示唆された。
3. 「加賀藩「割場御改法掟帳」について」	単著	平成21年 9月	『産業と経済』 第23巻第2号 （奈良産業大学） 21頁～40頁	科研費の助成を受けて翻刻した加越能文庫の史料を用いて近世期の武家奉公人の雇用形態について分析した。また「割場御改法掟帳」については全文を翻刻し掲載した。特に加賀藩割場が日用についても統括していたことに注目し、その労務管理のあり方を論じた。

4.″*Construction workers' guilds in early modern Osaka*″ （査読付き）	単著	平成24年 3月	″City, Culture and Society″Elsevier Ltd,Volume 3, Issue 1, March 2012 Pages 43-49	英語圏の読者を前提に前近代の都市労働者の同業者集団について主に建築職人を事例に紹介した。この際、日本の前近代の特徴について理解を助けるよう解説すると共に、同業者集団が持つ機能、特に相互扶助や、競争ルールの設定などについて普遍的に理解できるよう努めた。ここでは閉鎖経済である一方で相当程度に市場が発達している前近代日本社会の中で、職人同士の過当な競争を防ぎ、他の職人や取引先との利害を調整する役割を同業者集団が担ったことを論じた。
5．「労働者の組織的連帯における意識の前近代と現代の歴史的比較分析 －共生システムとしての労働者組織の可能性－」	単著	平成24年11月	『社会科学雑誌』 第5号 （奈良産業大学）	これまで研究してきた1800年代後半から1900年代前半の労働者の組織と意識を前提として、現代の労働組合において活動している労働者の意識を歴史的に位置づけることを試みた。実際の労働組合で活動している労働者の意識としては単に労働者の権利の実現ということだけではなく、労働者間の利害調整や、経営的な視点からの活動を担うなど広い視野を持っていることが明らかとなった。その結果労働組合に代表される労働者組織が労使間の利害対立にいたる前の調整弁としての役割を担っていることが明らかとなった。
6．「共生社会経済史試論 －共生をキーワードとした日本史再構築の試み－」	単著	平成24年12月	『産業と経済』 第25号第1号 （奈良産業大学）	利害の異なる主体間の調整様式を共生様式と捉え、共生様式の変化が社会の変動をもたらすという視点から、日本史を再構築することでこれまで日本史の中心的課題としては十分に扱われてこなかった周縁的な事象を位置づけるための枠組みを提示した。現代の共生社会論の問題点を指摘し、歴史的に考える必要を主張している。またその場合に利害調整の役割を担った中間団体が共生様式の安定に果たした役割を指摘し、またその限界も考察した。
7.「共生社会システムを歴史的に考察するための枠組み」 (査読付き)	単著	平成26年7月	『共生社会システム研究』 第8巻第1号 （共生社会システム学会）	前稿の成果を受けて、歴史における共生の意味を考察し、歴史において「異質なもの」が共生する様式を論じた。日本が2度目の成熟社会を迎えているという認識の上でパラダイム転換の必要性を確認した。その上で共生をひとつの方向性として議論するために日本史を共生様式という点から再構築するための理論的考察を行っている。
(その他)				
（書評）				
1.「藪内吉彦・田原啓祐著『近代日本郵便史　－創設から確立へ－』」	単著	平成24年 1月	『経済史研究』 第15号 （大阪経済大学） 235頁～245頁	当該書について詳細な内容紹介を行うとともに、郵便の海外展開における評価について疑問を呈した。
（学会発表）				
1.「近世の都市における労働のあり方---大坂を中心に---」	単独	平成22年 1月	大阪経済史研究会 （於　大阪市立大学）	近世都市における労働の在り方について建築職人を中心に紹介した。特に使用者と職人の関係、また使用者に対抗し、その生活を安定させるための仲間の役割について報告した。労働市場における中間団体の重要性を議論した。
3.「近代日本郵便史に寄せて」	単独	平成23年 4月	第62回経済史研究会 （於　大阪経済大学）	藪内吉彦・田原啓祐著『近代日本郵便史』についての書評報告である。
4.「共生社会史の視角」	単独	平成25年 12月	奈良産業大学経済経営学会定例研究会 （於　奈良産業大学）	共生社会史を構築するための視角について、主に経済史的観点から報告した。共生様式の3様態について概略を述べ、その変化の要因について、現在の時点での見込みを述べた。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　棚橋　豪

研究分野	研究内容のキーワード
商学	マーケティング・消費文化・流通・ソーシャルネットワーク

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）本学のプレ・プロジェクト演習において、商店街のフィールドワークを企画	平成24年4月1日	座学型の講義ではなく、学生自身に問題設定やフィールドワーク先を主体的に考えさせ、その上で現場（商店街）で問題を発見して、考察していく方法を考案した。
2）本学のゼミにおいて商店街の取材を企画	平成24年9月1日	単なるインタビュー型のフィールドワークからカメラ機材や動画編集までを含めた、フィールドワーク＋コンテンツ作成の講義スタイルを考案した。
2　作成した教科書，教材		
1）	平成00年0月0日	
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）	平成00年0月0日	
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）	平成00年0月0日	
5　その他		
1）	平成00年0月0日	

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）	昭和00年0月	
2　特許等		
1）	昭和00年0月	
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）	昭和00年0月	

4　その他		
1）	昭和00年0月	

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
仮想経験のデザイン	共	平成18年7月	有斐閣	全体概要：インターネット時代における各サイトとマーケティングマネジメントの特徴を議論している。 B6判　全434頁 編者：石井淳蔵・水越康介 共著者：石井淳蔵他 本人担当部分：「2章　メタ・コミュニケーションの秩序」73-95項 我が国のインターネットの巨大掲示板２ちゃんねる内のコミュニケーション様式を分析した。本論はソーシャルネットワークの台頭により、匿名掲示板の存在意義が過小評価されていることを批判する。両者のサイトにおける人と人のつながり方は独立であり、それぞれは排他的なものではなく共存しうることを指摘した。
（学術論文）				
風呂チャンネルの再検討：二つの商人像とその混同 （産業と経済　第22巻2号）	単	平成19年8月	奈良産業大学	本論は、商業経済論で議論される商人像には、全く異なる性質・機能を持ったに２タイプが存在することを指摘した。一つはある関係を前提としたうえで、その関係の効率性向上に役立つ商人であり、他方は関係そのものを発見する商人である。既存の理論では両者が明確に区別されないまま議論が展開されてきたことを批判し、商人像の再定義の必要性を説いた。1-19頁
イマジナリー・コミュニケーションⅠ：顧客インタラクションと２ちゃんねる （産業と経済　第22巻3号）	単	平成19年12月	奈良産業大学	本論は、多くの企業が、インターネット・サイトの構築においてノイズを廃した戦略を採用しがちななか、実際にはサイトの盛り上がりはそのようなノイズなしには成立しないことを主張した。本論はその代表例として「２ちゃんねる」を取り上げて、ノイズの重要性を確認した。1-20頁
現代ファッションにおける「いき」試論：〈風合い〉のロバストネスⅠ （奈良産業大学紀要　第23集）	単	平成19年12月	奈良産業大学	本論は、現代の製品開発において、日本製ジーンズの持つ意義と歴史的背景を取り上げた。岡山県倉敷市のジーンズは、近代的な生産様式を採用せずに、あえて非効率的な設備に留まっている。それは生産の合理性ではなく、ジーンズの持つ色落ちや伸縮具合などの「風合い」を重要視しているためである。本論は、その背景には、職人や消費者双方にかつてのアメリカ文化への憧憬が存在したことを指摘した。19-27頁
風呂理論の再検討：商人の位相 （神戸大学　博士課程モノグラフシリーズ No.0835）	単	平成20年9月	神戸大学大学院	本論は、取引費用経済学（主に企業間関係にける「市場と組織」に二分法の論理）が、流通局面に適用することは無理があることを論じた。その際に、風呂のチャネル・システム論が再評価され、取引費用を計算することが新たな取引費用を生み出す問題の重要性を指摘した。1-22頁
取引費用概念の再検討 （神戸大学　博士課程モノグラフシリーズ No.0836）	単	平成20年9月	神戸大学大学院	本論は、新制度派経済学のフレームワークのひとつである取引費用経済学を取り上げ、「取引費用」概念成立の背景を次の二観点からレビューした。一つは、コース、ウィリアムソン、ノースの各取引費用論者たちの間の概念定義の差異について。もう一つは、取引費用が機会主義と表裏一体の関係であり、信頼関係に基づいた社会的な関係は最初から射程外であることを指摘した。1-28頁

ノスタルジアと消費社会：その類型と動的側面について（奈良産業大学紀要　第24集）	単	平成20年12月	奈良産業大学	本論は、レトロ・マーケティングに関連して、消費者のノスタルジア性向における基礎概念を再検討した。その趣旨はノスタルジアにはさらに4種類に類型化できること、さらにその類型間のダイナミクスの解明が今後のこの分野の研究課題であることを指摘した。15-27頁
二つのクラウドと取引費用（日本情報経営学会誌 Vol.30, No.4）	単	平成22年4月	日本情報経営学会	本論は、ビジネスとインターネットの関係を「クラウド」に焦点をあてて議論した。ここで、サーバーを自前で用意するのか、それともアウトソースしてクラウドを利用するのかという問題は、取引費用論のフレームワークとして考えることができる。本論はこの取引費用の中身をITの分野に引き寄せて具体化を図った。81-90頁
マルチエージェント・シミュレーションと動的ネットワーク：共同体と共同体のあいだをめぐって（奈良産業大学紀要　第26集）	単	平成22年12月	奈良産業大学	本論は、柄谷がマルクスを評価する際に用いた哲学的モチーフ「共同体と共同体のあいだ」をマルチエージェント・シミュレーションにより再現した。ネットワークの中心が空間的にも核となり、一定のクラスターを形成する。その際、クラスターとクラスターをブリッジするエージェントが媒介中心性最大となり、大きくクラスターを変化させる挙動をartisoc上で描くことに成功した。21-34頁
商人資本の形式化：エージェントベースモデリングとソーシャルネットワーク・アナリシス（第11回　MASコンペティション論文集）	単	平成23年5月	構造計画研究所	本論は、商人資本の形式化に伴う、方法論上の議論を充実させた論考である。一般的に、エージェントベースモデルと社会ネットワーク論はそれぞれ独立した枠組であるが、本論は双方のフレームワークを取り入れた方法を提案した。37-60頁
ネットワーク・システムと遊牧商人（第12回 MASコンペティション論文集）	単	平成24年5月	構造計画研究所	本論は、都市のネットワークシステム・ダイナミクスを、ネットワーク内を循環する商人とネットワークを形成する商人の二種類のエージェントによって描出した。前回のartisocのモデルの発展バージョンである。58-74頁
マーケティング・コミュニケーションの諸相：破壊的イノベーションと不可知論的マーケティング（社会科学雑誌　第5巻）	単	平成24年11月	奈良産業大学	本論は、従来のマーケティング理論や方法論が劇的な市場構造の変化に対応できないことを指摘した。また、本来独立的に考えられてきた破壊的イノベーションとキャズムの関係性を見た。その際に、両者の解決策となるのが「不可知論的マーケティング」であることを主張し、その内容を論じた。233-267頁
マーケティング・コミュニケーションとネットワーク・フロー：「流通」概念を問い直す（奈良産業大学紀要　第28集）	単	平成24年12月	奈良産業大学	本論は、従来の商業経済論やマーケティング論が扱ってきた「流通」概念を再考した。そして、既存理論が事例研究に集中し、この概念に対する数理的なアプローチを失っていることが明らかにされる。そこで、これの代替案として、商業資本の生成を「ネットワーク上の流通の集中度」とみなすことによって説明できることを示した。具体的には、動的なマルチエージェントのネットワークを媒介中心性で計測する方法を試みた。91-111頁
準最短経路と媒介中心性（産業と経済　第25巻　第1号）	単	平成24年12月	奈良産業大学	本論は、従来の社会ネットワーク論の中心性指標の一つである「媒介中心性」が最短経路問題に依存していることを取り上げる。人間行動を扱う社会科学において、ネットワーク上の移動は最短経路だけが採用されるわけでない。そこで本論は、最短経路でもランダムウォークでもない、「準最短経路」を踏まえた媒介中心性の必要性を説いた。53-62頁
「ちょっと、よりみち」を科学する（第13回 MASコンペティション論文集）	単	平成25年5月	構造計画研究所	本論は、従来の媒介中心性が最短経路のみに依拠した「よりみち無き」中心性概念であることを指摘する。その上で、artisoc上において、やや冗長な経路選択をも許容した中心性を求めるアルゴリズムを考案した。

商店街とパタン・ランゲージ：奈良県奈良市もちいどのセンター街を手がかりにして（社会科学雑誌　第9巻）	単	平成26年3月	奈良産業大学	本論は、クリストファー・アレグザンダーの「パタン・ランゲージ」を、商店街の問題に特化して展開した。その際、奈良県のもちいどのセンター街を手がかりにして、パタン・ランゲージの有効性と限界を明らかにする。ここで明らかにされた論点は、アレグザンダーが議論する「街」は地元民のためのものであるということである。しかし、観光地の商店街ではその街の地理に疎い者を相手にする必要があり、これを加味した商店街の環境設計が必要であることを指摘した。
artisocによる二次元可視領域の構築：エージェントベースド・イソビスタ	単	平成26年6月	奈良学園大学	本論は、ベネディクトが提案した「イソビスタ」を、マルチエージェント・シミュレーション用のソフトウェア、artisoc上に実装した。これにより、静物である構造物だけでない、他者の動きから由来する死角をも考慮に入れたイソビスタを定量化することを可能にした。
賑わいの質とそのビジュアライゼーション：簡易GISによる商業構造の可視化について	単	平成26年9月	奈良学園大学	商業地域に「賑わいの質」に注目し、これを各店舗の「その場所での営業年数」「チェーン店か否か」を区別した上で、GoogleMap上に可視化する研究方法を考案した。
学会発表				
GoogleMapsAPIによる「盛り場』のジオ・インフォマティクス－奈良の商店街と路地裏から」	学会発表	平成26年7月	日本商業学会関西部会	商業地域に「賑わいの質」に注目し、これを各店舗の「その場所での営業年数」「チェーン店か否か」を区別した上で、GoogleMap上に可視化する研究方法を考案した。これを奈良市の商店街に応用した。
近距離無線通信による次世代型クチコミュニケーションの展望	ポスターセッション	平成26年11月	日本マーケティング学会	iPhoneのWiFi通信と地図表示を活かしたアプリを作成し次世代型SNSの可能性を提示した。
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　藤井　路子

研究分野	研究内容のキーワード
計量経済学	計量経済学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・e-learningシステムを活用した授業実践 (Moodle, 教材の泉 他)	平成19年4月～ 現在に至る	奈良産業大学経済学部講義「計量経済学（専門科目、3年次配当、半期4単位）」、「ITリテラシー（共通教養科目、1年次配当、半期1単位）」、近畿大学農学部講義「国際経済入門（教養科目、1年次配当、半期2単位）」、亜細亜大学経済学部講義「ｼﾐｭﾚｰﾀで学ぶ経済学（専門科目、1年次配当、半期2単位）」などの講義科目においてe-learningシステムを利用した講義資料の配布や課題の受渡し、ウェブ試験などを行っている。これにより受講者自身による学習真直度の管理が可能になった。
・資格取得支援	平成19年4月～ 現在に至る	奈良産業大学ビジネス学部の授業として担当する「ITリテラシー（共通教養科目、1年次配当、半期1単位）」、および、「ITスキルアップ（専門科目、2年次配当、半期2単位）」において、MOSや日商PC検定などIT関連資格取得を目指す学生の学習支援を行っている。平成26年度前期には、受講生の8割を検定試験合格へ導くことができた。
・体験型学習の企画と運営	平成20年12月～ 平成25年3月	奈良産業大学ビジネス学部の授業として担当する「プロジェクト演習（演習科目、2年次配当、通年4単位）」において、「地域貢献プロジェクト」と称し、景観形成、特産品開発、地域貢献を目標に、地元NPOの協力を得て、「菜の花プロジェクト」に参加した。ナタネの栽培と収穫、搾油したナタネ油の販売活動、圃場の管理やイベント（そば打ち体験教室の開催等）の企画などを通じ、生産から販売に至る一連の流れを体験学習させるとともに、宣伝販売に必要な広報力、イベントなどの「にぎわい」を企画する力を身に着け、周辺住民との交流する機会を与えることができた。
・少年警察ボランティア活動への参加	平成26年4月～ 現在に至る	奈良産業大学ビジネス学部の授業として担当する「プロジェクト演習Ⅰ（演習科目、3年次配当、通年4単位）」において、奈良県警察が行う少年警察ボランティア活動に、大学生ボランティア「少年フォローズ奈Poli」として参加する機会を設けている。警察官や消防官を志望する学生に、活動への参加を通じて、職業上必要とされるボランティア精神を育てることを目的としたものである。
2　作成した教科書，教材		
・プロジェクト演習　活動紹介ホームページ（ http://www.nara-su.ac.jp/koken_pj/ ）	平成22年4月～ 平成25年3月	奈良産業大学ビジネス学部の授業として担当する「プロジェクト演習（演習科目、2年次配当、通年4単位）」において、「地域貢献プロジェクト」と称して行っている活動の紹介と、「大和奈花油」と名付けて特産品化を試みたナタネ油の広報を目的に制作、管理を行った。
・プロジェクト演習　学習管理ページ （ https://www3.nara-su.ac.jp/course/view.php?id=128 ）	平成22年4月～ 平成25年3月	奈良産業大学ビジネス学部の授業として担当する「プロジェクト演習（演習科目、2年次配当、通年4単位）」において、演習活動に関する連絡や活動記録を兼ねた学生向けホームページを、学習管理システムMoodle上に立ち上げ、運用を行った。

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
なし		
5　その他		
・奈良産業大学 教職員のための公開講座　講師	平成23年8月	奈良産業大学（現・奈良学園大学）が行う高大連携活動の一環として開講された「教職員のための公開講座」において、アクティブ・ラーニングの一例として、奈良産業大学ビジネス学部で実施している「プロジェクト演習」について紹介した。授業計画の立て方や運用面での留意事項など、自らが担当するプロジェクト演習の実例を交えながら説明した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
・日本商業簿記検定1級 ・修士（経済学） ・博士（経済学）	平成6年12月 平成8年3月 平成15年3月	日本商工会議所　証80の1第1418号 大阪市立大学第297号 　論文題目「企業の多国籍化」 大阪市立大学第4747号 　論文題目「日本企業の直接投資、および投資受入国による外資誘致効果の測定」
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
なし		
4　その他		
・第2回奈良産業大学ビジネス学部シンポジウム「道の駅を考える～道の駅の広域連合・連携によるブランド向上の可能性を探る」　コーディネーター	平成21年3月	「道の駅」を登録する国土交通省、「道の駅」のブランディングに取組む商社、および、奈良県内の「道の駅」の駅長を招いて、「道の駅」が担うべき機能を情報発信、地域活性という観点から考えることをテーマとするシンポジウムを開催した。シンポジウムの企画、出演者の選定と出演交渉、会場の選定、広報、会場運営までの全般を指揮した。（奈良産業大学社会科学学会（現・奈良学園大学社会科学学会）「社会科学雑誌第2集」に掲載）
・奈良産業大学公開講座「王寺町りーべるカレッジ」講師	平成21年10月	様々な経済事象をシンプルな数理モデルを用いて説明・解釈する経済学の手法を応用して、社会事象を読み解く方法を、「何故、ポイ捨てをするのか」という事例を挙げながらわかりやすく紹介しながら、個人の利益と社会的な利益が相反する社会的ジレンマが発生するポイントの存在と、人の道徳規範がそれに与える影響を、費用便益分析の枠組みを用いて読み解いた。
第3回奈良産業大学ビジネス学部シンポジウム「奈良の将来を考える」　パネリスト	平成22年12月	平成19年より奈良産業大学ビジネス学部演習科目「プロジェクト演習」で取り組む、「菜の花プロジェクト」を中心とした活動を通じて見た奈良県の抱える問題と、活性化策について、パネリストとして報告、討論した。奈良産業大学社会科学学会（現・奈良学園大学社会科学学会）社会科学雑誌第2巻pp. 43-115に掲載。

・奈良産業大学FD委員会　委員長	平成24年4月～ 平成26年3月	奈良産業大学FD委員長として、公開授業、授業評価アンケート、および、FD講演会の実施を指揮した。平成24年度の講演会は「大学教育のパラダイム転換を目指して～学生とともに作る授業、学生とともに進めるＦＤ～」を、平成25年度は「アクティブラーニングと座学を補完関係とするカリキュラム設計」というテーマで、他大学から講師を招聘して行った。
・奈良産業大学公開講座「王寺町りーべるカレッジ」講師	平成25年6月	漫画「サザエさん」に登場する磯野家を例にとりながら、A.シグノーの世代間扶養モデルをベースに、親による子世代の扶養と、子による親世代の扶養がどのように決定されるのかを経済学的にわかりやすく説明するとともに、このモデルから見えてくる少子高齢化の真の原因と解決策について述べた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
なし				
（学術論文）				
農業の縮小要因と耕地の現状	単著	平成23年3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所，奈良産業大学地域公共学総合研究所所報第1集，pp.73-80	国民経済における農業縮小の現状を再検討するとともに、需要の所得弾力性の定義式から、農業縮小の原因が農産物の需要の所得弾力性の低さにあると考えられることを導出した。また家計調査年報に掲載されている支出弾力性を代替的データとみなし、農産物が所得弾力性の低い生活必需品に分類されることを統計的に確認し、導出された仮説が否定されるものでないことを示した。
農業縮小要因としての農産物需要の所得弾力性の推計	単著	平成24年12月	奈良産業大学社会科学学会（現・奈良学園大学社会科学学会），社会科学雑誌第5巻，pp.395-405	経済発展に伴う農業部門の割合の低下は、どの国においてもみられる普遍的傾向として「ペティ＝クラークの法則」の名で知られる。その原因が農産物の需要の所得弾力性の低さにあると考えられることを経済モデルから導くとともに、マクロ経済データを用いて、農産物に対する需要の所得弾力性を推計し、これを実証した。
農家数、および、経営耕地現象の要因分析	単著	平成24年12月	奈良産業大学地域公共学総合研究所，奈良産業大学地域公共学総合研究所所報第3集，pp.69-76	農家戸数の減少と経営耕地の減少について、経済モデルを用いてその要因を明らかにした。そして特に経営耕地の減少に対してより大きな影響を与えるものを探るため、みかん（果樹）に関するデータを使用した推計と分析を行った。
農地規模が与える農地価格への影響分析	単著	平成25年2月	奈良産業大学社会科学学会（現・奈良学園大学社会科学学会），社会科学雑誌第7巻，pp.73-82	土地純収益の理論によると、農地の収益構造が同質化するにつれて農地の価格差は縮小すると考えられるが、モノや情報の流通の発展によって農業技術や生産物価格、生産要素価格の差異が縮小し、経営的な意味における農地の差異が縮小したと考えられる現代においても、地域による農地価格差は小さくない。この問題について、農地価格差がM過程のコストによって引き起こされていると仮定し、実証分析したものである。

作物の品目別価格弾力性と所得弾力性の比較と経営耕地面積に及ぼす影響の分析	単著	平成25年3月	奈良産業大学紀要第29集，pp.115-128	GDPに占める農業の比率低下や農業就業人口の減少、および、経営耕地面積減少の主因は、農業の主要産物である「食料」の需要の所得弾力性の低さにあるとされる。ベルヌイ＝ラプラス型効用関数を仮定した需要関数から青果物と果樹の価格弾力性と所得弾力性を推計してこの事実を確認するとともに、それらが耕地面積に及ぼす影響について実証分析を行った。その上で、転作や貸借、売買の容易さといった耕地の弾力的運用の可否が、青果物と果樹の耕作放棄地面積差に影響を及ぼしていることを導いた。
家族のモデル	単著	平成26年3月	奈良産業大学社会科学学会（現・奈良学園大学社会科学学会） 社会科学雑誌第9巻 pp.49-56	A.シグノーの世代間扶養モデルをベースに、わが国の少子高齢化対策について考察したものである。本稿では、高齢者や現役世代の負担を増やし、子ども世代に対する社会的補助を増やす政策によって社会全体の厚生は引き下げられ、少子化に拍車をかける可能性について指摘した。
技術進歩推定モデルの検証	単著	平成26年6月	奈良学園大学社会科学学会、社会科学雑誌第10巻、pp.53-63	技術水準に変化があるときに、技術中立的生産関数を特定化して技術変化率を推計する方法について考察したものである。状態空間モデルを用いることによって、技術水準の変化の大きさと、発生時点を適切に捉えることが可能となることを、シミュレーションによって示した。
（その他）				
新聞購読に関する意識調査（研究ノート）	共著	平成21年12月	奈良産業大学紀要第27集、pp.113-125	4つの大学で行ったアンケート調査から、各種メディアに対する学生の意識を明らかにしたmもので、ニュースメディアとしての新聞の衰退と、それに代わるインターネットの重要性が浮き彫りになる一方、インターネットに対する学生の信頼は決して高いと言えないという矛盾した結果を得た。著者：藤井、亘、渡辺　本人担当部分：pp.113-119，121-125　調査票の作成、データ分析といった本稿の主要部分を担当した。
〈シンポジウム〉「道の駅」を考える（編集）	―	平成23年3月	奈良産業大学社会科学学会（現・奈良学園大学社会科学学会） 社会科学雑誌第2巻 pp.117-146	自らがコーディネーターとして携わった、平成21年3月開催の第2回ビジネス学部シンポジウム「道の駅を考える」について、基調講演2本と、奈良の「道の駅」駅長によるパネルディスカッションをまとめたものである。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　三　浦　晴　彦

研究分野	研究内容のキーワード
財政学、地方財政論	土地税制、ライフタイムの税負担、都市経済

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）		
2　作成した教科書，教材		
1）『共通基礎科目』－日本語コミュニケーションⅡ	平成19年3月	必修科目の教科書として、１教科分を２名で分担して執筆（平成22年度まで使用）
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）		
5　その他		
1）		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）修士号（経済学）	平成10年3月	
2）	昭和00年0月	
2　特許等		
1）	昭和00年0月	
2）	昭和00年0月	

3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）		
2）		
4　その他		
1）		
2）		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文）				
（学術論文）				
「大阪都市圏における地域特性の変遷と人口動態との関係について－人口減少社会を見据えて－」	単	平成23年11月	『社会科学雑誌』第3巻 P.83～P.110	大阪都市圏（大阪府下の区･市と兵庫県の一部）における住環境の歴史的変遷を分析する為に、主成分分析を行った。その結果、1970年以降、各年代において同種の地域特性が表れ、各年代でその順位を変えていることがわかった。その地域特性を用いて、人口変動との関係を考察し、近年、インナーシティー要素の上昇と人口が減少が結びついており、人口減少に歯止めをかける為にも、重要な示唆を与えている。
「大阪府における地価と居住環境の関係について－地方分権下での自立できる地域の姿をさぐる－」	単	平成24年11月	『社会科学雑誌』第5巻 P.479～P.502	近年の地価下落状況を概観するとともに、その要因として居住環境との関係を考察した。変数間の多重共線関係を解消する為に主成分分析を行い地域特性の特定化を行った。居住環境と住宅地地価の関係として、理論と整合的な結果が得られ、特に地価下落には、旧来型住環境という停滞的要素が効いていることが実証された。
（その他）				
	単			

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　水 野 清 文

研究分野	研究内容のキーワード
経営学	経営管理、経営戦略、企業文化

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1) 小論文指導・面接指導・時事問題に関する問題提起と議論、ビジネスマナー指導。	平成18年度～平成20年度	東邦高等学校の科目「課題研究」にて、個別小論文指導、面接模擬演習、時事問題を取り上げて問題点や対策を生徒とともに議論、ビジネスマナーの指導などを行った。これらはプレゼンテーション能力、思考力、文章力、問題解決能力、社会人に必要となるマナーの習得などを目的としたものである。
2) 会社設立の手続きについての指導。	平成18年度～平成21年度	東邦高等学校の科目「総合実践」にて、会社法に基づき、会社設立（個人企業）の手続きについて学習させた。必要な書式については教材用見本を使用し、生徒各自が手続きを行うことができるように工夫をした。また、チェックライタ（電動式・手動式）やナンバリングといった事務用機器も利用した。商法、簿記などと相互関連させることで企業活動を幅広く実践的に学ぶことを目的としたものである。
3) Power Pointやラベルマイティを用いた授業。	平成18年度～平成21年度	東邦高等学校の科目「総合実践」にて、生徒各自が架空の会社を設立。その会社に関する社是・社訓、経営理念や基本方針などを作成し、Power Pointを使用して発表させた。また、ラベルマイティを使って各自の名刺を作成させた。これらはコンピュータ機器の幅広い利用とプレゼンテーション能力を高めることを目的としたものである。
4) 北九州観光事業についてのインタビュー調査の実施。	平成22年度～平成23年度	東筑紫短期大学の科目「ゼミナール」にて、地域観光事業について調査・研究を行った。「到津の森公園」（動物園）、「スペースワールド」（遊園地）、「門司港レトロ」などに学生とともに出向き、インタビュー調査を行った。これらは、学生の自主に学ぶ能力育成や問題意識の向上を図ることを目的としたものである。
5) 大阪駅ビルについての実態調査の実施。	平成24年度～平成25年度	奈良学園大学の科目「プレ・プロジェクト演習」にて、大阪駅商業ビルについて調査・研究を行った。これらは、学生の自主に学ぶ能力育成や問題意識の向上を図ることを目的としたものである。
6) 奈良観光事業についてのインタビュー調査の実施。	平成24年度	奈良学園大学の科目「プレ・プロジェクト演習」にて、奈良駅商店街について調査・研究を行った。これらは、学生の自主に学ぶ能力育成や問題意識の向上を図ることを目的としたものである。
7) 奈良観光事業についてのインタビュー調査の実施。	平成24年度	奈良学園大学にて、短期留学生に対する「課題研究」の指導を行った。論文作成にあたり、和服関連企業へのインタビュー調査を行った（学生と同伴）。この調査により、和服関連企業の取引流通の仕組みや業界の現状と課題を見出すことができた。

２　作成した教科書，教材		
1) 愛知東邦大学にて、「資格講座・簿記」のプリントの作成。	平成19年度11月～平成20年2月	日商簿記検定合格に向け、簿記入門レベル～日商3級レベルに至る解説ならびに問題プリント約100枚を作成した。プリントの使用は授業内の使用だけでなく、自宅学習用の反復練習としても活用することで生徒個々人のレベルアップを図った。
2) 東邦高等学校にて、「簿記」・「会計」のプリントの作成。	平成15年度～平成21年度	簿記の入門レベルから日商簿記検定2級レベルに至る（会計分野を含む）までの解説ならびに問題プリント1,000枚以上を作成した。日商簿記2級や全商簿記1級の内容はかなり高度なレベルであることや様々な問題パターンがあることから、プリントの内容は自宅学習でも理解できる解説と段階式の問題にするといった工夫をした。
3) 東筑紫短期大学にて、「経営実務Ⅰ」・「経営実務Ⅱ」のプリントの作成。	平成22年度、平成23年度	簿記会計の基礎を中心にプリント63枚を作成した。週1回の授業では学習内容が薄くなることを考えて問題集の解説や重要箇所の反復問題を織り交ぜた。また、これらプリントを使用して日商簿記対策講座を行った。
4) 東筑紫短期大学にて、「流通論」のプリントの作成。	平成22年度、平成23年度	流通・商業の概念、生産側・消費側の変化や流通の中心をなす小売業・卸売業について、その役割や活動内容、具体例などをまとめたプリント12枚を作成した。プリントの内容には時折、流通に関するトピックスを織り交ぜることで学生が関心を持つように工夫をした。
5) 東筑紫短期大学にて、「現代企業論」のプリントの作成。	平成22年度、平成23年度	企業の構造、その諸活動、現代企業が抱える諸問題についてまとめたプリント10枚を作成した。学生の就職活動に関わる知識習得も考慮し、業界地図や企業再編などについてもとり入れる工夫をした。
6) 東筑紫短期大学にて、「経済学」のプリントの作成。	平成22年度、平成23年度	ミクロ経済学を中心として経済学を幅広い観点から捉えた内容についてまとめたプリント12枚を作成した。価格決定の仕組みや影響要因などを具体例をあげながら説明することで、本質から理解できるように努めた。
7) 東筑紫短期大学にて、「プレゼミナール（企業研究）」・「ゼミナール（企業研究）」のプレゼンテーション資料の作成。	平成22年度、平成23年度	産業別・企業別資料の収集、ならびにプレゼンテーションの模範実演資料を作成した。資料収集に関しては、ホームページの他、ビジネス情報誌や有価証券報告書、専門書など複数の資料を集めて整理し、主要な経営活動や営業実績などを整理・検討させることで学生の業界知識の習得につなげた。
8) 東筑紫短期大学にて、「ビジネス実務総論」のプリントの作成。	平成22年度、平成23年度	ビジネスの基本、セルフマネジメントやキャリアデザインなどをまとめたプリント14枚を作成した。また、職場常識に関する基礎に関する問題を作成した。
9) 東筑紫短期大学にて、「ビジネス実務演習」のプリントの作成。	平成22年度、平成23年度	職場常識や秘書検定に関するプリント24枚を作成した。秘書検定対策としては、過去問題から出題頻度の高い箇所について要点をまとめた。
10) 奈良学園大学にて、「現代社会入門」のプリントの作成。	平成24年度～平成26年度	経済グローバル化、高度情報化、地球環境問題、少子高齢化という4つのテーマに焦点をあてて、その現状と問題に関するプリントを作成した。

11) 奈良学園大学にて、「現代社会トピックスⅢ」のプリントの作成。	平成24年度、平成26年度	労働の意味、労働環境の変化などに関するプリント9枚を作成した。学生と社会人の違いや日本国民の仕事の捉え方、さらにはキャリアに関する意識の持ち方などについて国民意識調査などのデータを活用しながらまとめた。
12) 奈良学園大学にて、「リーダーシップ論」のプリントの作成。	平成24年度～平成26年度	組織の中のリーダーの在り方やリーダーシップ理論に関するプリント31枚を作成した。組織の中での自分の立場の認識と、とるべき行動について参考になる内容となっている。
13) 奈良学園大学にて、「企業論」のプリントの作成。	平成24年度～平成26年度	企業の構造や諸活動などに関するプリント23枚を作成した。経済主体としての企業の役割や企業形態の分類・特徴などについてまとめた。
14)『奈良学園大学にて、「コミュニティ・ビジネス」のプリントの作成』	平成25年度～平成26年度	ソーシャル・ビジネスならびにコミュニティ・ビジネスに関わるプリント22枚を作成した。一般的にいうビジネスやボランティアとの違いを説明した上で、その取り組みについて具体例をあげながら整理、解説した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 東筑紫短期大学採用決定の際の評価。	平成21年12月	12年間に渡って高等学校教員を勤めたことによって、短期大学入学前となる高校生の資質に対する理解と教育経験（生活指導面を含む）があること、さらには、建学の精神への理解が高く評価された。
2) 平成22年度（前期）　～平成26年度（後期）までの授業評価アンケート	平成22～24年度	「説明の仕方がわかりやすかった」、「教員に対する熱意を感じた」、「授業がよく準備・計画されていた」などの項目がすべての担当科目で80％程度の評価を得た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
1) 東邦高等学校にて高等学校教育実習生に対する指導。	平成17年度～平成21年度	東邦高等学校にて、毎年6月に2週間実施される「教育実習」の実習生に対する指導。
2) 東筑紫短期大学にて担任業務。	平成22年度、平成23年度	美容ファッションビジネス学科・ビジネスコースの担任業務（平成22年度2年生、平成23年度1年生）。生活演習（HR）では東筑紫学園の建学の精神にもとづいて学校行事の意義と内容を説明、社会活動、履修登録・検定試験の管理、出席管理、教科担当学生・掃除当番学生に対する指導・指示などを行った。
3) 東筑紫短期大学にて学生委員担当。	平成22年度	入学式、レクリエーション・スポーツ大会（体育大会）、大学祭、卒業式などの学校行事の計画と反省、学生指導（身だしなみ・マナー教育など）を行った。
4) 東筑紫短期大学にて就職指導。	平成22年度	担任として、クラス内の学生に対する就職指導を行った。（就職内定率：就職希望者の100％が内定）就職先は主に民間企業の事務、営業、販売などで、その他医療秘書など幅広い。勉強方法やエントリーシートの作成方法、面接指導などきめ細かな指導を行った。

5) 東筑紫短期大学にて「初年次教育」の主担当。	平成23年度	初年次教育の主担当。学生のコミュニケーション能力、創造力の向上を目的とする内容である。
6) 奈良学園大学にて「新入生プレ・レクチャー」の授業担当。	平成24年度	平成25年度入学生に対して、大学の授業体験として演習授業の内容の一部を紹介。大学が自主的に学ぶ教育機関であることを認識させながら、自らが問題を見つけ出し、それを解決していこうとすることの面白さを少しでも理解させることを目的としたものである。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
学士号(経営学)取得	平成7年3月	機関名:朝日大学、経第1669号
修士号(経営学)取得	平成9年3月	機関名:愛知学院大学大学院、第61号 論　題:「経営戦略に関する一考察」
高等学校教諭専修免許状取得	平成9年3月	愛知県教育委員会、平8高専302号、商業
2　特許等		
な　し		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
な　し		
4　その他		
1)東筑紫短期大学にて教務委員担当。	平成23年度	編入に関わる科目の読み換え、休・退学手続き、カリキュラムや履修科目に関わる手続き等の業務を行った。
2)東筑紫短期大学にて新カリキュラムの考案。	平成22年9月～ 平成24年2月	所属する美容ファッションビジネス学科の平成23年度男女共学化に伴うカリキュラムの追加・変更の考案をした。
3)奈良学園大学にてFD委員担当。	平成24年度～ 平成27年度	
4)奈良学園大学にてビジネス学部教務委員担当。	平成24年度、 平成25年度	
5)奈良学園大学にてオープンキャンパス実行小委員担当。	平成24年度	
6)奈良学園大学にて情報センター運営委員担当。	平成24年度	

7)奈良学園大学にて専門職養成支援委員担当。	平成24年度～ 平成26年度	
8)奈良学園大学にて社会科学学会運営委員担当。	平成24年度	

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）				
1)「総合スーパー業界の拡大化と今後の展望 ―株式会社ダイエーの事例を中心として―」	単著	平成21年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第11巻pp.9～19	本論文は、総合スーパー大手である株式会社ダイエーの事例を中心として、これまでの拡大戦略・提携戦略の展開と限界ついて論述するとともに、今後の展望について考察した。まずは、ダイエーの戦略的経緯を明示し、その後、他社との戦略の相違点を考察・検討した。また、総合スーパー大手各社に対して行ったインタビュー調査から、PB商品開発と不採算店舗の閉鎖に重点がおかれているという現状を明らかにした。
2)「総合スーパー業界の企業文化に関する一考察 ―ダイエー、イオン、イトーヨーカ堂の企業文化とその特徴―」（査読論文）	単著	平成22年3月発行	日本産業経済学会機関誌投稿論文「産業経済研究」第10号pp.123～133	本論文は、総合スーパー業界大手4社（ダイエー、イオン、イトーヨーカ堂）の各社に対して行ったインタビュー調査をもとに、各社の企業文化の構成要素の特徴と企業文化のタイプ、さらには企業が現在置かれている立場との関係づけを考察した。その結果、各社がおかれている経営環境にとって望ましい企業文化の在り方と課題が明らかになった。
3)「製造企業と小売企業の双方からみるプライベート・ブランド商品戦略の効果と課題 ― 食品関連企業に対するアンケート調査結果からみる共通見解と相違点 ―」	単著	平成22年12月発行	東筑紫短期大学「研究紀要」第41号pp.149～167	本論文は、製造企業側と小売企業側のそれぞれの立場でのPB商品戦略に対する見解を明らかにすることを目的とした研究である。 筆者は2010年8月に食品関連の製造企業と小売企業の合わせて942社に対してPB商品戦略に関するアンケート調査を実施した。この集計結果からPB商品戦略の見解を整理し、検討・考察をすることで双方の見解の共通点と相違点を明らかにすることができた。
4)「GMSにおける顧客吸引戦略 ―コスト･パフォーマンス追求とその限界― 」	単著	平成23年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第13巻pp.59～70	本論文は、GMSに着目し、従来の顧客吸引戦略と今後のその在り方について検討・考察することで、GMSの戦略の本質を見出すことをねらいとしたものである。 もはやコスト・パフォーマンス追求は限界に近い。どれだけ消費者の視点で物事を考えられるかが重要である。結論として商品カテゴリーを拡張するというMDではなく、各カテゴリーのスペシャリティ化にもとづいた総合性を追求していかなければならないという見解を示した。

5) 「食品関連企業の戦略的展望 ―プライベート・ブランド商品戦略の課題克服と新たな企業形態の拡がり―」（査読論文）	単著	平成23年3月発行	日本産業経済学会機関誌投稿論文「産業経済研究」第11号、pp.125～138	本論文は、食品関連企業のPB商品戦略の効果と今後の展望について検討・考察したものである。これは、食品関連企業が将来進むべき方向性を定める手掛かりを得ることを目的としたものである。 今後は低価格PB商品だけでなく、地域限定的なPB商品の開発や特色ある企業との連携によって商品の差別化を図るなどといったことも求められる。また、SPAや製販同盟のような企業形態が数多く見受けられるようになるという見解を示した。
6) 「グループ化戦略による企業競争力強化の実現と限界 ―スーパーマーケット業界のケースを中心に―」	単著	平成23年12月発行	東筑紫短期大学「研究紀要」第42号pp.61～69	本論文は、スーパーマーケット業界のグループ化戦略について、その目的と成果・限界について検討・考察したものである。これにより、グループ化戦略の在り方やこれまでの成果、ならびにスーパーマーケットの今後の方向性を決定する手掛かりを得ることを研究の目的としたものである。 研究の結果、グループ化戦略の効果が明確になった。 また、グループ化戦略の限界と、高付加価値商品の開発・販売の必要性についての見解を述べた。
7)「グループ内企業の企業文化の融合と経営成果との関連性 」	単著	平成24年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第14巻pp.11～22	本論文は、グループ化戦略の効果と企業文化の融合に関する研究である。それはグループ化における企業文化の在り方を究明する手掛かりを得ることを目的としている。　結果、グループ化の際、その中心的企業の存在がグループ内の整合性を乱すきっかけになることがわかった。そのため、グループ化に至る際、企業文化の変革について関係するすべて人物からの賛同を得たうえで、その分析と変革を迅速に進める必要があることを述べた。
8)「企業における経営理念の役割と経営理念の形骸化 」	単著	平成24年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第14巻pp.23～33	本論文は、組織の生成から発展の過程おける経営理念の役割と在り方を理論的に検討・考察することで、その存在意義と重要性を明らかにすることを目的としている。その結果、経営理念は企業文化の構成要素として唯一明文化され、意図して浸透させることが可能であることが明らかになった。また、戦略的意思決定の根幹に位置することを図示した。経営理念は日常活動では数値化されないが、企業業績と深く結び付いていると結論付けた。
9)「食品関連企業におけるPB商品導入とランチェスター戦略への効果」(査読付)	単著	平成24年3月発行	日本産業経済学会機関誌投稿論文「産業経済研究」第11号pp.90～102	本論文は、ランチェスター戦略の考え方にもとづき、PB商品の差別化としての効果を検討・考察することで、新たな生き残りの指針を見出す手掛かりを得ることを目的としている。その結果、PB商品が差別化をもたらす理由が明らかになった。顧客満足は他社との比較によって決まることが多い。そのため弱者は、強者が参入しにくい隙間を見つけ出し、独自性あるPB商品の開発・提供に向けて、経営資源を投入すれば勝算があると結論づけた。

10)「PB商品の需要拡大が製造企業に与える影響―食品製造企業からみたPB商品の戦略的効果とNB商品の需要回復に向けた取り組み―」	単著	平成24年12月発行	奈良産業大学「奈良産業大学紀要」第28集pp.113～125	本論文は、研究対象を食品業界の製造企業に絞り、PB商品の需要の現状を掴むとともにNB商品の需要回復に向けた取り組みの実態と経営努力について検討・考察したものである。そして、製造企業の今後のPB生産の効率化に向けての手掛かりなるものを得ることを目的としている。この考察の結果、近年のPB商品の傾向として、価格追求型に留まらず、多様化する消費者の嗜好に合わせて様々な商品が開発・生産・販売すべきであると述べた。また、製造企業は、PB商品のメリットとデメリットについて自社だけでなく小売企業や消費者の立場も考慮に入れながら、SCM、LMSなどといったシステムを構築・実行していけば、十分に業績回復に向けた活路は見出せると述べた。
11)「食品関連企業の製販連携による競争優位確立と全体最適」	単著	平成25年2月発行	「社会科学雑誌」第7巻、pp.311～325	本論文は、製造企業と小売企業での提携に焦点を当てて、その効果と課題について整理・検討・考察したものである。その目的は、食品関連企業を研究対象としたものであり、流通過程上の各企業がより良い関係を構築するための手掛かりを得ることである。 検討・考察の結果、製販連携はグループ化が困難な中小企業にとっても競争力の強化になるし、差別化を図るという意味でも非常に効果的な戦略であることがわかった。ただし、グループ化ではみられない製造企業と小売企業という異なる立場ゆえの見解の相違や、当該企業の企業文化の相違などが課題となる。こうした障壁を乗り越えるためにも、組織間コミュニケーションによって双方のメリットを十分に理解しながら、互いに必要な知識、技術などを提供・共有していくべきであると結論付けた。
12)「食品関連企業にみる商品差別化戦略―低価格PBの限界と今後の商品展開―」	単著	平成25年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第15巻pp.1～12	本論文では研究対象を私たちの生活に最も関連する食品企業に限定し、効果的な商品差別化戦略がどうあるべきかについて明らかにすることを目的として検討・考察した。 そして、価格戦略ではなく商品差別化戦略として効果が期待できる商品についてプレミアムPBとは別の例を挙げながら4タイプを紹介した。また、インタビュー調査をもとにそれらの商品と企業規模との関係を整理した。その結果、規模が小さくなるほど地域範囲を限定し、仲介業者を介さない形で強固な製販関係を構築することが効果的であることがわかった。
13)「株式会社ダイエーの事業再建計画とその実行―再建活動にみる企業文化の変革―」	単著	平成25年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第15巻pp.13～27	本論文は、2004年には産業再生法の適用、および産業再生機構から支援を受けた株式会社ダイエーの事業再建に向けた経営計画とその活動内容について検討・考察したものである。また、創業者の強力なリーダーシップに代表される企業文化の変化についても検討・考察した。その目的は再建計画とその活動の要点究明の手掛かりを掴むことである。 その結果、創業者の信念に基づいた企業理念を時代に適合するものへ変えたものの、実際は企業理念が企業内部に浸透しているとは言い難いことがわかった。企業理念は組織に浸透したとき、組織の求心力ともなり、時代に適合したものかどうかも気付くし、結果として、消費者のみならず社会貢献に寄与する企業として認められ、業績にも反映されると結論付けた。

14)「株式会社ダイエーの再建に向けたグループ化と異文化融合」	単著	平成25年12月発行	奈良産業大学「奈良産業大学紀要」第30集pp.89～97	本論文は、大手スーパーマーケットはグループ化に着目し、そのグループメリットによる競争力の強化の在り方に関する研究を論述したものである。まずは、グループ化戦略の浸透とその効果を整理し、そのうえで、当該企業の企業文化融合の問題について論述した。その目的は、グループ化戦略の効果と問題を明らかにするとともに当該企業間が異なる企業文化をいかにして融合させていくかを究明する手掛かりを得ることである。なお、本論文では株式会社ダイエーを中心に例にあげながら論じた。その結果、業績の回復に向けた結合に限らず、企業が提携・結合する場合、主体となる企業の企業文化を浸透させるにせよ、新たな企業文化の構築を目指すにせよ、中核企業のリーダーが強力なリーダーシップを執ってその礎を築きあげることが重要となると結論付けた。
15)「食品関連企業にみる製販連携の拡がり」	単著	平成26年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第16巻pp.13～21	本論文は、食品関連企業の製販連携の在り方と将来性について検討・考察したものである。その目的は、製販関係の強化と商品差別化を実現するための手掛かりを得ることである。本論文では食品小売企業の中心的戦略が拡大化からグループ化への移行したことや製販連携の効果について整理した。製販連携をより効果的にするためには仲介業者を介さない形をとることで小売企業が主体となって商品開発に取り組むことや製販双方の企業規模の問題をクリアすること、販売地域を限定することなどに留意することが重要となる。製販連携は、商品差別化と製販関係の強化につながる効果的な戦略であり、こうした課題を乗り越えればますます広がりをみせていくと結論付けた。
16)「セブン＆アイHLDGS.にみる価値訴求商品の追求」	単著	平成26年3月発行	「愛知学院大学大学院経営学研究会紀要」第16巻pp.23～29	本研究は、セブン＆アイHLDGS.の経営者意識とそれに基づく企業活動に着目し、商品開発について考察した。その目的は消費者意識の変化を読み取ることの重要性を明らかにしたうえで、今日の商品開発の在り方についての手掛かりを得ることである。セブン＆アイは低価格PBに関しては一部商品についてSPAにより景気の波の影響をさほど受けない形態をとっている。こうした景気対策はもちろん必要であるが、価格の追求と同時に価値を追求することは重要であることがわかった。価値訴求商品の開発と普及させるにあたり、売り手側はビジョンの明確化とそれに伴う迅速な経営活動が求められると結論付けた。
（その他）				
■研究ノート				
1)「地域密着企業の経営努力ー奈良県のマスコットキャラクターを用いた商品戦略ー」	単著	平成26年3月発行	愛知学泉大学「地域社会デザイン研究」第2集pp.39～43	本研究では地域限定商品による商品差別化戦略をについて事例を取り上げながら考察をした。その狙いは、取引の地域範囲が比較的狭い中小企業の活路を見出す手掛かりを得ることにある。本研究では、考えられる様々な戦略の中から、地域のマスコットキャラクターを用いた地域限定の商品戦略についてみてきた。この戦略は取引範囲を限定するという局地戦の展開である。実際、マスコットキャラクターを利用した商品差別化戦略を行っているのは中小企業が多い。それは、資金力がさほどない中小企業が競争を生き抜く術と判断できるものであった。

2)『食品小売業のグループ化と製販連携』	単著	平成26年5月発行	日本企業経営学会機関誌投稿論文「企業経営研究」第17号pp.75～82	本研究は、食品小売企業の立場からの製販連携実現の手掛かりを得ることを目的としている。その内容として、これまでのグループ化について整理し、その上で製販連携に対する製販双方からの見解と展望に関するインタビュー調査の内容をまとめた。その結果、製販連携の実現には、①仲介業者の存在、②製造企業と小売企業の規模、③製造企業の技術、④小売企業の商品販売地域範囲、⑤地産地消が深く関係することがわかった。また、製販連携には仲介業者や製販双方の企業規模の問題，さらには販売地域などといった問題を解決しなければならないことも明らかになった。
■学会発表				
1)「食品関連企業におけるPB商品戦略の効果と消費者満足－製造企業・小売企業・消費者の視点から－」	単独発表	平成23年5月14日発表	日本産業経済学会第58回研究部会（長崎県立大学）	本研究は、生活に最も関連する食品関連企業に焦点を当てて、業績回復に効果が期待できるPB商品戦略について製造企業・小売企業・消費者の立場から検討・考察したものである。これは、それぞれの観点からPB商品の在り方を明確にすることを目的としている。研究の結果、PB商品の分類と定義、急速な普及の原因ならびに結果、さらにはその戦略的効果・課題を明らかになった。また、PB商品に関わる消費者心理について言及した。
2)「食品関連企業にみる商品差別化戦略ー地域特性を活かしたPB商品と製販連携ー」	単独発表	平成24年11月24日発表	日本マネジメント学会第46回研究部会（中京大学）	本研究は、食品関連企業に焦点を当てて、地域特性を活かしたPB商品の例を挙げながら、その特性について検討・考察した。その結果、差別化戦略としての期待度は非常に大きいものの、地域範囲選定の難しさや製販関係の問題などが浮き彫りとなった。
3)「食品業界にみる製販間の企業連携の現状と在り方」	単独発表	平成25年5月11日発表	日本企業経営学会第43回研究部会（大阪商業大学）	本研究は、食品関連業界の展望として製販連携による戦略的効果と課題を究明することを目的としたものである。その結果、製販連携をする商品タイプを①NB商品の地域限定版、②地域のキャラクター関連商品、③地域特性を取り入れた商品（PB商品）、の3つのタイプを例に挙げて、それらについてインタビュー調査の結果を踏まえながら、それぞれの特性を明らかにすることができた。
4)「食品関連企業にみる商品差別化戦略－地域特性を活かしたPB商品と製販連携－」	単独発表	平成25年6月9日発表	日本マネジメント学会第67回全国大会（和光大学） ※平成24年11月の学会発表の内容から中部部会の推薦を受けての発表。	本研究は、食品関連企業に焦点を当てて、地域特性を活かした商品特性について検討・考察したものである。 近年の小売企業には地域特性を活かした商品開発を行い製販連携により差別化を図る企業も見受けられるようになった。このような商品について、企業へのインタビュー調査を踏まえながら、その商品タイプを①地域特性を取り入れた商品（NB商品）、②地域のキャラクターを取り入れた商品（NB商品）、③地域特性を取り入れた商品（PB商品）、④オリジナル・キャラクターに関連する商品（PB商品）に分類し、その特徴を整理し、戦略的効果について検討した。その結果、③や④のような商品であれば、小規模企業であっても局地戦の強みを発揮しながら製販連携を執ることで十分成果が期待できることがわかった。
5)「オリジナル・キャラクターを用いた地域限定商品による戦略的効果」	単独発表	平成25年12月21日発表	日本商業学会12月研究部会（名古屋外国語大学）	近年急速に普及したPB商品だが、その狙いは低価格に限らず、独自性や製販関係の強化などもあげられる。本研究では地域特性を活かした商品としてオリジナル・キャラクターを用いた商品に着目し、その戦略的効果を探ることで特定地域での競争力強化や製販間の強固な関係の構築に向けた手がかりを得ることを目的とした。その結果、仲介業者を介さない形で強固な製販関係を構築することができれば効果的な戦略であることがわかった。同時に、いかにして販売地域を限定するか、いかにして価格を抑えるか、などといった課題も浮き彫りになった。

6)「食品小売企業のグループ化とその効果－商品差別化による競争力強化の可能性－」	単独発表	平成26年2月15日発表	日本企業経営学会第7回国際学術研究会(日本、韓国、台湾による国際大会。第7回開催国:日本、大阪商業大学)	本研究は、わが国の食品小売企業のグループ化の結果、共同仕入・共同広告・共同開発などシナジー効果がどの程度結果につながったのかを検討・考察したものである。その目的は、これからのグループ化への期待度をはかる上での手掛かりを得ることである。研究の結果、グループ化は商品の開発・販売に関してはPB商品導入や拡大において大いに実現可能性を高める戦略であることがわかった。しかし、その半面でこれまでの独自商品や独自技術の提供への抵抗がある。また、企業文化の相違やその変革など対する抵抗があるため、その浸透に時間を要するなどといった問題が浮き彫りになった。
7)『中小企業の地域戦略 －奈良県の食品企業の事例をもとに－ 』	単独発表	平成26年6月1日 発表	日本マネジメント学会第69回全国大会(文京学院大学)	本研究は、食品小売業の商品差別化戦略として、中小企業でも勝算が見込まれる地域戦略について事例を取り上げながら検討・考察したものである。 ここでは、地域戦略としてキャラクター商品を例にあげたが、キャラクター商品に限らず地域戦略の効果を高めるためには、少ない資金でも実現できる製販連携・製販同盟が効果的と考えられる。地域の特産物や観光地とイメージした商品や食文化など、地域特性に関連した商品の場合は、地域を限定することによって、大企業が介入しにくい取引関係を構築しながら、地域内の競合他社との差別化を図ることで有効な戦略となり得ると結論づけた。
8)『食品関連業界における製販関係の強化』	単独発表	平成27年2月28日発表	日本企業経営学会第47回研究部会(大阪商業大学)	本研究は、食品関連企業を研究対象として、流通過程上の各企業（本研究では製造企業と小売企業）の在り方を見出すことを目的として検討・考察したものである。 まずは製販連携の定義、種類、目的を整理した。そのうえで、製販連携に対する期待と効果、さらにはその結果と課題を述べた。製販連携は既存の取引関係や消費者からの情報収集と情報提供、組織間の相互理解や設備・技術の掌握により組織間協働の度合いが大きく変化する。しかし、製造企業と小売企業という異なる立場ゆえの見解の相違や企業文化の相違などといった障壁があるため、それらを乗り越えるためには互いに必要な情報の提供・共有が不可欠となると結論づけた。
■司会・コメンテーター				
1)発表者：日野隆生先生（大阪国際大学）テーマ：「マーケティング・コンセプトとイノベーション」		平成23年7月9日司会･ｺﾒﾝﾄ	日本産業経済学会第8回全国大会（東海学園大学）	日野隆生先生の紹介、発表内容について総評と質問、進行。
2)発表者：宮下雄治先生（城西国際大学）テーマ：「PBの製品評価に関する実証研究」		平成24年9月15日司会･ｺﾒﾝﾄ	日本産業経済学会第9回全国大会（立教大学）	宮下雄治先生の紹介、発表内容について総評と質問、進行。
3) 発表者:伍翔先生(愛知学院大学産業研究所)テーマ:『日中の輸出入管理制度及び通関システムの電子化』		平成26年8月22日司会･ｺﾒﾝﾄ	日本企業経営学会第12回全国大会(名古屋市消費生活センター)	伍翔先生の紹介、発表内容について総評と質問、進行。国際貿易に関してNACCSシステムの導入により、事務の合理化の実現など円滑な取引を可能とする反面、その導入率が低迷しているのが現状である。伍先生の研究は、NACCSシステムにおける効果と課題について明らかにし、今後のシステムの普及の手掛かりにつながる研究報告だったといえる。

4) 発表者:成田景堯先生(千葉県立農業大学校)テーマ:『成都イトーヨーカ堂式のテナント・マネジメントについての研究』		平成27年2月11日司会・ｺﾒﾝﾄ	日本企業経営学会第9回国際学術研究会(日本、韓国、台湾による国際大会、第9回開催国:日本、岐阜じゅうろくﾌﾟﾗｻﾞ)	成田景堯先生の紹介、発表内容について総評と質問、進行。成田先生の研究は売上の8割近くをテナント事業によって得ている成都イトーヨーカ堂のテナント・マネジメントに着目し、テナント事業の在り方について研究した内容であった。テナント事業における他店との差別化、ならびにイトーヨーカ堂のテナント事業の特徴について明らかにしていた。
5) 発表者:秦小紅氏(明治大学大学院経営学研究科)テーマ:『小売業の国際化における仕入れ研究』		平成27年2月11日司会・ｺﾒﾝﾄ	日本企業経営学会第9回国際学術研究会(日本、韓国、台湾による国際大会、第9回開催国:日本、岐阜じゅうろくﾌﾟﾗｻﾞ)	秦小紅氏の紹介、発表内容について総評と質問、進行。秦氏の研究は成都イトーヨーカ堂においては現地サプライヤーの役割が非常に大きく、そうした中で現地サプライヤーとの関係に関わる研究があまりなされていないという点に着目している。仕入体制概況を調査研究することでその課題を明確にした研究であった。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　山下 雅弘

研究分野	研究内容のキーワード
経済学	理論経済学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
授業内容の要約や質問等の受付	平成17年4月～平成21年7月	奈良産業大学経済学部経済学科の専任講師、ビジネス学部ビジネス学科の専任講師、准教授として担当の「ミクロ経済学」（専門科目、2年次配当、半期、4単位）において、理解促進のため、講義終了後、内容の要約や質問等を書いてもらい、それらに対して、次回の講義開始後最初の10分程度で紹介と返答をし、学生に好評であった。
2　作成した教科書，教材		
奈良産業大学　ビジネス学部　専門基礎科目Ⅰ　現代社会入門（経済分析入門）	平成19年4月～平成22年7月	奈良産業大学ビジネス学部ビジネス学科の専任講師、准教授として担当（複数教員担当）の「現代社会入門」（専門基礎科目Ⅰ、１年次配当、半期、必修2単位）の授業のために作成し理解を促進した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
公務員試験対策指導（経済）	平成18年11月6日	正規の授業とは別に、公務員志望者に試験対策としての経済の勉強会を行った。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
Microsoft Office Specialist Word 2003 Microsoft Office Specialist Excel 2003 Microsoft Office Specialist Word 2003 Expert	平成19年7月3日 平成19年9月4日 平成19年10月27日	
Microsoft Office Specialist Excel 2003 Expert Microsoft Office Specialist PowerPoint 2003 Microsoft Office Specialist Access 2003	平成19年12月1日 平成20年2月6日 平成20年3月4日	
Microsoft Certified Application Specialist Word2007, Excel2007, PowerPoint2007	平成20年6月14日 平成20年8月23日 平成20年11月1日	
2　特許等		

3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）				
1．進化ゲームにおける動学的均衡Ⅲ	単	平成18年10月	奈良産業大学産業と経済 第21巻 第3・4号	不確実性と情報の経済学、経済学に期待効用と自然淘汰と突然変異の考え方を導入した戦略的不確実性編の続々編。本文中の利得行列のような集団的な戦いが生じる状況に、第3の戦略として考えられうる様々な戦略を加えた場合の進化的均衡の特徴について考察し、協力的で高い利得の社会を創発させる戦略を見つけている。その場合、前論文と同様の構成を行い各命題を得ている。基本的に、経済学的観点から世界平和へ導く政策を導出することを目指しているが他にも適応範囲が広い可能性がある。
2.社会的選択関数に関する覚書	単	平成24年12月	社会科学雑誌 第6巻　奈良産業大学社会科学学会	先行研究における、アローの不可能性定理とその証明および社会的選択関数に関する命題とその証明を解説し、それらを基盤とし本文とは異なる系を導いている。情報の非対称性が存在する2つの社会の構成員が協力し新たな1つの組織として社会的選択をするとき、新たな組織において独裁的な者が存在してしまうこと、その状況がパレート効率的であるとは言えず、任意の個人の効用はただちに上昇するとは限らないことを示している。
3.Learning from the Bible about My Studies Related to Business―Mainly from the Torah―	単	平成26年6月	社会科学雑誌 第10巻 奈良学園大学社会科学学会	ヘブライ語聖書全体に関しビジネスに関係すると考えられる箇所について解読し、解説している。経済学発祥以前から続く哲学的考察でもあり現代に生かすことを考えている。
4.聖書に学ぶビジネス学―マタイによる福音書を中心に①―	単	平成26年6月	社会科学雑誌 第10巻 奈良学園大学社会科学学会	マタイによる福音書1章～12章を中心に解読し、ビジネスに関係すると考えられる箇所について解説し、現実に生かすことを考えている。
5.聖書に学ぶ経済学―マルコによる福音書を中心に―	単	平成26年9月	奈良学園大学紀要 第1集 奈良学園大学	マルコによる福音書を中心に解読し、経済と関係付け解説し、経済学の役割を広げている。大学運営とも関連させ、平成22年度からの認証評価の再評価に向けた取組の一つとしても位置付けている。ディクテーターシィップが外部にあることも意識し、福音書の内容がミクロ経済学の視点や奈良文化などとも一部共通する可能性についても述べている。人間教育や保健医療にも役立てることや大学など組織の長期的な存続も目指している。

6.聖書に学ぶビジネス学―モーセの律法を中心に―	単	平成26年12月	社会科学雑誌 第11巻 奈良学園大学社会科学学会	ヘブライ語聖書のうちモーセの律法を中心に解読し、ビジネスに関係すると考えられる箇所について解説し、現実に生かすことを考えている。
7.聖書に学ぶビジネス学―マタイによる福音書を中心に②―	単	平成26年12月	社会科学雑誌 第11巻 奈良学園大学社会科学学会	マタイによる福音書12章～28章を中心に解読し、ビジネスに関係すると考えられる箇所について解説し、現実に生かすことを考えている。社会科学雑誌第10巻の論文の続編。
8.聖書に学ぶ人間教育―ルカによる福音書を中心に―	単	平成27年3月	奈良学園大学紀要 第2集 奈良学園大学	ルカによる福音書を中心に解読し、人間教育の可能性について表現している。広く一般にも役立てることを目指している。奈良学園大学紀要第1集、社会科学雑誌第10・11巻の論文の続編。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　西川　弘展

研究分野	研究内容のキーワード
ケインズを基準とした、マクロ経済学に関する経済学史的研究（経済学史・経済理論）	ケインズ、マクロ経済学（含、貨幣理論・貨幣政策）の歴史

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）配布資料の作成 2）課題作成の作成	平成17年度より適宜	授業では、教科書を用いていないので、標準的なテキスト・ブックを参照しながら、配布資料と学生が受講到達度を実感できるような課題の作成を試みている。
2　作成した教科書，教材		
1）「ベーシック数理Ⅰ」第12章、第13章；「ベーシック数理Ⅱ」第6章、第7章、第8章、第9章（『ベーシック数理Ⅰ・Ⅱ』奈良産業大学ビジネス学部発行、所収）	平成21年4月1日	ビジネス学部共通基礎科目「ベーシック数理Ⅰ」、「ベーシック数理Ⅱ」の教材である。小学の算数・中学の数学での学習内容の計算技術の習得・確認だけでなく実社会での応用という観点から作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）平成18年7月より、ほぼ半期に1度のペースで授業評価アンケートを実施（結果および結果へのコメントは学内ウェブページに掲載）	平成18年7月より	学内のFD活動の一環として実施している。学生の学習意欲の喚起と年々の授業内容・授業方法の見直しに役立てている。なお全学的に実施されている授業改善シートも中間点検として利用している。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）学士（商学）	平成7年3月21日	同志社大学
2）修士（経済学）	平成10年3月24日	大阪市立大学大学院
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
4　その他		
1）特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
特記事項なし				
（学術論文）				
１．ケインズ『貨幣論』の銀行貨幣分割の含意：貨幣数量説からの離脱過程の一局面	単	平成26年3月	『社会科学雑誌』奈良産業大学社会科学学会、A5版、165-194頁	代表的基本モデルを取り上げつつも、『貨幣論』に内在しながら『貨幣論』における金融的流通に関連する貨幣量（M3）の把握が貨幣数量説から派生する、頑強な命題、全貨幣数量（M1＋M2＋M3）の変化率＝物価の変化率を頑強に否定することを確認し、これまであまり具体化されてこなかったケインズ理論の貨幣数量説からの離脱過程の様相の一齣を明らかにした。
２．『貨幣改革論』の内生的貨幣供給の着想－E.キャナンとJ.M.ケインズの論争	単	平成24年12月	『奈良産業大学地域公共学総合研究所年報』、A4版、57-68頁	ケインズにおける内生的貨幣供給の着想は『貨幣論』において本格化していることは周知されているが『貨幣改革論』においてもその着想の一端が示され、この論点をめぐりE.キャナンと論争されていることはあまり知られていない。本論では、キャナンをリカード的系譜に、ケインズをソーントン的系譜に位置付ける試みをしながら、『貨幣改革論』における内生的貨幣供給の着想を紹介し、ケインズの経済学を再解釈する際の視点を示した。
（その他）				
（翻訳） 1.Roger Backhouse「なぜケインズが重要なのか、イギリスの政策形成の視点からの検討」（所収書籍の第2部の担当者として）	共	平成26年2月	『ケインズは、《今》、なぜ必要か？：グローバルな視点からの現在的意義』ケインズ学会編集、平井俊顕監修、作品社、2014年2月15日。（第Ⅰ部グローバルな視点から、ケインズの現代的意義を考える、第3章として所収（42－52頁）。	経済理論史の世界的研究者のRoger Backhouseが所収書籍のために書き下ろされた論文の翻訳の担当。世界的に政府赤字の累積と財政規律の引締めの実行が前面に取りざたされる中においても、従来のケインズ的財政拡張政策の有効性が失われていないことを示唆することが当該論文の主要な論点である。
（翻訳） ２．Bradley W.Bateman, Toshiaki Hirai, Maria Cristina Marcuzzo eds, *The Return to Keynes*, The Belknap Press of Harvard University Press（所収の第9章の論文を「ケインズの経済学の形成過程」として翻訳）	単	平成26年9月	平井俊顕監訳『リターン・トゥ・ケインズ』東京大学出版会、（225～248頁に所収）	ケンブリッジ学派の２つの潮流（（１）マーシャル的理論＝マーシャル、ピグー、ラヴィントンの理論と（２）ヴィクセルタイプの理論＝ロバートソン、ホートリーの理論）の理論的特徴を明らかにしながら、ケインズの経済学の形成過程とケインズの経済学の独自性ををケインズ全集・ケインズペーパーズといった一次資料を基に解明した論文である。
（学会討論者）				
１．セッション：ピグー厚生経済学の再検討（『富と厚生』出版百周年）山本崇史氏（北海道大学）「関税改革論争におけるピグーの外国貿易論：「貿易論への「厚生」概念の本格的な適用に関して」へのコメント	単	平成24年5月26日（於小樽商科大学）	経済学史学会第76回全国大会	山本報告の前提となった論文を参考に、山本報告の意義と位置づけを確認し、いくつかの疑問点を提起した。学会セッション終了後直ちに山本氏により拙疑問への返答をいただいている。

（研究ノート）				
１．ケインズ『貨幣改革論』の基本視角に関する覚書（上）	単	平成21年9月	『産業と経済』第24巻第1・2号、奈良産業大学経済・経営学会、B5版、41-68頁	ケインズ革命を引き起こした『雇用、利子および貨幣の一般理論』については同著の重要性から論点を明確化し先行研究の不備を補う形で組織的・体系的に研究がなされ、研究が蓄積されている。その一方で『貨幣改革論』については世界的に見ても国内的に見ても、それを主題とする研究もわずかであり、組織的・体系的に研究されていない。そこで日本国内の諸研究の特徴を年代順に整理し、その上で独自の解釈を打ち出そうとしている。（平成24年4月6日時点で未完）
２．石橋湛山の言論思想についての覚書ー東洋経済新報社運営の側面からー	単	平成21年12月	『奈良産業大学紀要』第25集、奈良産業大学、A4版、79-106頁	明治創刊の『東京経済雑誌』についてはその先駆的性格、古典的な経済自由主義という原理的性格から研究が積み重ねられてきている。一方で明治期に創刊され現代まで引き継がれている『東洋経済新報』についてはその全貌が明らかでない。また『東洋経済新報』の中興の祖ともいうべき石橋湛山についてもその全集が古くから完結しているにもかかわらず、政治思想的研究に比べ経済学的研究は比較的手薄である。ここでは、『東洋経済新報社　百年史』を手がかりに『石橋湛山 全集』にもあたり、東洋経済新報社の創設からの歴史的流れを追うことで、同社の経営方針にあらわれる石橋湛山の経済思想を、ジャーナリズムの持続性重視の姿勢、特定の理論命題に過度に依拠した原理というよりは柔軟で折衷的なプラグマティズムの姿勢、専門的経済学重視というよりは教養的色彩の強い経済学重視の姿勢などとしてあきらかにした。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　松本　尚哲

研究分野	研究内容のキーワード
経営学	財務諸表監査、内部統制、包括利益

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）1年次生の導入・基礎演習（ゼミ指導）におけるレポート作成の指導	平成23年4月～平成25年3月	大学での授業を受講するに際し必要となるレポート作成の基本事項を教えるとともに、演習として実際にレポートを作成させつつ必要に応じて適時指導を行い、レポート作成の要領を体得させる。
2）様々な授業スタイルにおける受講方法と対応能力の育成	平成23年4月～現在に至る	各科目で用いる教材の形式を変え、異なる教材に応じた授業の進め方を色分けしておき、それぞれ用いる教材が異なる授業における受講の仕方を、各人の工夫によって習得させる。
2　作成した教科書，教材		
1）財務諸表論の授業用レジュメ	平成23年4月～現在に至る	財務諸表論の授業において主要教材となるレジュメを作成。
2）経営財務論の授業用PPT資料	平成25年4月～現在に至る	経営財務論の授業において使用するPowerPoint用のスライドを作成。
3）経営分析論の授業用レジュメ及び資料	平成26年4月～現在に至る	経営分析論の授業において教材として使用するレジュメと、分析の演習に用いる各企業の財務資料等を作成。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）授業評価アンケートによる評価	平成23年4月～現在に至る	本学において前期と後期の授業終了時に実施される学生の授業評価アンケートにて、概ね良好とされる一定水準以上の評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
1）専門職養成支援プログラム税理士コースの学生の指導	平成22年9月～平成27年3月まで	奈良産業大学にて、専門職養成支援プログラムの税理士コースに所属する学生を担当。税理士資格の取得に向けた勉強等の指導・フォローアップなどを行う。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）公認会計士試験合格者	平成21年11月	公認会計士試験　二次試験　2009年度合格者
2）修士（商学）	平成25年3月	関西大学　商学研究科　商学専攻　研究者コース 博士課程前期課程修了 商学修士 第685号
2　特許等		

3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）日本公認会計士協会・近畿会、税制・税務委員会委員	平成24年8月～現在に至る	日本公認会計士協会・近畿会における税制・税務委員会の委員として、税制・税務に関する研究を行っている
2）日本公認会計士協会・近畿会、経営委員会	平成25年7月～現在に至る	公認会計士協会・近畿会における経営委員会の委員として、経営、特に事業譲渡やバイオ・ベンチャーに関する研究を行っている
3）組織再編研究会	平成25年7月～現在に至る	公認会計士協会・近畿会と大阪弁護士会との共同研究会であり、その一員として組織再編の事例等に基づいて研究を行っている
4　その他		
1）奈良産業大学　学生委員会	平成23年4月～平成24年3月まで 平成25年4月～平成26年3月まで	学生委員会の一員として、主に三室祭の実行に際して学友会が抱える難問の手助け等を行う。また、在学学生の生活調査を数年に一度行っている。学生の素行不良などによる罰則規定の適用も当委員会で行った。
2）同上　学生支援センター運営委員会	平成23年4月～平成24年3月まで 平成25年4月～平成26年3月まで	学生支援センター運営委員の一員として、大学のリメディアル教育における学生の習熟度に対応したフォローアップの方策を考え、必要に応じて学生の面倒も見てきた。
3）同上　広報委員会	平成24年4月～平成25年3月まで	大学の広報活動の方向性などを検討した。また、下記小委員会の報告を受け、広報として行う方策を検討した。
4）同上　ホームページ作成小委員会	平成24年4月～平成25年3月まで	大学のホームページのあり方について検討するとともに、可能な範囲でデザインのリファイン等も検討した。
5）同上　オープンキャンパス実行小委員会	平成24年4月～平成25年3月まで	大学のオープンキャンパスを実行するための準備や打ち合わせ、学生スタッフとの協議などを行った。オープンキャンパス当日にはスタッフとして東奔西走した。
6）同上　専門職養成支援委員会	平成22年9月～平成27年3月まで	前身である専門職養成支援プログラムの頃から継続して一員である。税理士プログラム担当として、担当学生の教育、管理等を行っている。また、関連資格の受験に際しては渉外交渉なども担当して、資格講座の管理・運営も行っている。
7）奈良産業大学実施の講座である奈良駅前大学にて講座実施	平成24年11月	本学実施の講座である奈良駅前大学にて、「わが国の会計制度」というテーマで講義を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
（学術論文）				
監査制度における内部統制報告制度の位置づけとこれからの展望について	単	平成24年12月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第5巻、pp.461-478	我が国の監査制度に影響を与えたアメリカの監査制度における、制度の変遷とその中で生まれた内部統制の重要性について言及するとともに、J-SOX法とも呼ばれる内部統制報告制度の必要性について触れている。そのうえで、我が国の内部統制の基準における内部統制報告制度の扱いと、内部統制報告制度についてまわる内部統制の固有の限界の影響について述べている。
包括利益の表示に関する一考察	単	平成25年 3月	奈良産業大学ビジネス学部『社会科学雑誌』第7巻、pp.287-309	財務報告の目的と2つの会計観について言及するとともに、これにより新たに必要とされた包括利益について述べている。その上で、包括利益の必要性について言及し、その構成要素に則した我が国の会計基準における表示方法について述べるとともに、今後の表示方法のあり方について触れている。

包括利益の表示の有用性と会計責任	単	平成26年 1月	関西大学大学院商学研究科『千里山商学』第69号、pp.31-68	わが国の会計に対して大きな影響を与えている2つの利益観について述べると共に、包括利益という新しい利益概念が必要となった経緯と包括利益の特性について述べている。その上で、包括利益の業績指標としての有用性を検討しつつ、経営者の責任を判断するための考察を行っている。最後に、包括利益の拡張によって、より有用な情報提供が行える可能性について言及している。
COSOの統合フレームワークの改訂とその影響に関する一考察～統制環境を中心として～	単	平成26年12月	奈良学園大学『社会科学雑誌』第11巻、pp.233-259	約20年ぶりに改訂されたCOSOの内部統制の概念フレームワークについて、特に内部統制において最重視される統制環境について、旧フレームワークや公開草案からの変更点を比較検討しつつ、その改訂の狙いや影響について考察している。また、米国監査基準における統合フレームワークの影響を確認した上で、本改訂による影響について検討している。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　大原　荘司

研究分野	研究内容のキーワード
宇宙線物理学	非線形現象、カオス

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）共通教育科目「実験で学ぶ科学」の立ち上げ	平成２３年９月	実験で体験しながら科学の基礎知識を得て、データの取得や解析の基本が理解できることを目指した。
2　作成した教科書，教材		
1）組込みシステム	平成２１年４月	組込みシステム構築の実践教育のために、ルネサスマイコンＨ３０69を搭載する回路基盤をキットを購入して１０式作成し、開発用パソコンに接続して組込み用プログラムの作成演習に適用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）	平成00年0月0日	
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）	平成00年0月0日	
5　その他		
1）	平成00年0月0日	

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）高等学校理科教員１級免許	昭和５０年３月	
2）X線取り扱い作業主任者免許	昭和５３年９月	
2　特許等		
1）	昭和00年0月	
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
	昭和00年0月	

４　その他		
１）	昭和00年0月	

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文）				
The Cosmic Ray Anisotropy Observed By the Large Area Air Shower Experiments	共	平成１７年	29th International Cosmic Ray Conference Pune(2005)6,181-184	大広域エアーシャワー観測グループの５つのステーションから得られる宇宙線の到来方向と頻度に関するデータを調和解析し、宇宙線の到来方向の異方性について一定の知見を得た。共同研究者（A.Iyono,T.Konishi,T.Morita,T.Nakatsuka,C.Noda,N.Ochi,S.Ohara,M.Okita,J.Rou,J.Tada,N.Tahahashi,M.Tokiwa,S.Tsuji,T.Wada,I.Yamamoto and Y.Yamashita 本人担当部分　データ測定
情報学への導入教育としての演習科目設計	共	平成１７年	平成１７年度情報処理教育研究集会論文集４１１－４１４	様々な情報機器やソフトウェアの操作方法をひと通りケンケン氏、基本的技術を習得するための情報学導入教育として演習科目を創設し導入前後での学生の習熟度を求め一応の成果が得られたことを確認した。共著者　中尾泰士、向井厚志、大原荘司、福井徹　本人の担当部分　コンピュータミュージックとCADシステムの導入教育を担当した。
全体性と科学	単	平成１８年１２月	奈良産業大学紀要第２１集、９５－１００（２００５）	マックス・ウェーバーの全体知批判と科学の価値自由という考えに基づき、従来科学の対象とされなかった全体性が、環境科学、情報科学、システム科学、カオス科学の出現によって無関係ではなくなったことに焦点をあて、東洋を含めた科学の歴史の中の全体性の扱いと、ネットワークの集合知に見られる全体性を論じた。
リアルタイムOS演習システムの開発	共	平成１８年３月	奈良産業大学、情報学フォーラム、On-Line Journal、Vol.5	コンピュータシステムの効果的学習を考えると、組込み用オペレーティングシステムの学習が最も有効であるという考えに基づき、日本初の組込みOSであるITRON上で制御動作をするモータシステムを作成して、ITRONの命令語を使用することに寄ってコンピュータOSの実体を学習できるシステムを開発した。共同研究者　大原荘司、大崎幹雄　本人担当部分　内容の大部分を担当した。
Zenith Angle Distribution and Atmospheric Effect for EAS with LAAS experiments	共	平成２０年７月	Proc.of 30th International Cosmic Ray Conference,(2007)Vol.4,47-50	到来宇宙線の天頂角分布を、大広域宇宙線観測グループの各ステーションのデータに対して求め、いずれも指数関数によく一致することがわかった。また大気の及ぼす影響についても、シミュレーションの結果とよく一致した。共同研究者 A.Iyono,C.Noda,H.Matusmoto,M.Masuda,T.WadamK.Okei,S.Tsuji,S.Ohara,N.Ochi,T.Konishi,N.Takahashi,I.Yamamoto and T.Nakatsuka　本人担当部分 奈良産業大データ測定とまとめ
LAAS宇宙線観測データとGPS遅延データの相関	共	平成２１年	「地文台によるサイエンス」Universal Academy Press	宇宙線到来方向の異方性と大気変動についてのデータ解析から宇宙線強度を用いた対流圏トモグラフィーについて可能性を調べた。共同研究者 伊代野淳、松本宏樹、山本勲、小西健陽、大原荘司、高橋伸介、越智伸彰、辻修平、桶井一秀、中塚隆郎　本人担当部分　奈良産業大データ観測とまとめ

宇宙線エネルギー時系列のカオスとその異方性	共	平成２１年８月	奈良産業大学情報学フォーラム、Online Jounal,Vol.7	西村・蒲田の式を宇宙線観測データに適用して、５万イベントについての１次宇宙線エネルギーの時系列データを得た。これに、従来のカオス解析を適用し、時系列のカオス性の出現に異方性があることを見出した。共同研究者　大原荘司、小西健陽、向井厚志　本人担当部分　奈良産業大での宇宙線測定とカオス解析考察の大部分
Parallel and Simultaneous EAS Events due to Gerasimova-Zatsepin effects observed by LAAS experiments	共	平成２１年７月	Proc.of 30th International Cosmic Ray Conference,2009	宇宙線と太陽光子との反応で新たに宇宙線の秩序が形成されるというGerasimova-Zatsepin効果を大広域観測宇宙線データに適用した。共同研究者 A.Iyono,H.Matsumoto,K.Okei,S.Tshuji,**S.Ohara,** N.Ochi,T.Konishi,N.Takahashi,I.Yamamoto,T.Nakatsuka,T.Nakamura,N.Ohmori and K.Saitoh　本人担当部分　奈良産大データの観測とまとめ
カオスで探る宇宙線源	共	平成２２年１２月	奈良産業大学情報学部創設１０周年記念号,２０１０	宇宙線空気シャワーサイズデータ１１０万イベントについてフラクタル次元を求めるカオス解析をおこない、赤径６ｈ，１２ｈ，２２ｈ付近に異方性を発見した。高エネルギーγ線源あるいはダークマターのような天体の介在が推定される。共同研究者　大原荘司、小西健陽、向井厚志　本人担当部分　奈良産業大での宇宙線測定およびカオス解析とその考察
奈良周辺の二酸化炭素濃度	共	平成２３年３月	奈良産業大学地域公共学研究所年報第１集、２０１１	奈良周辺の二酸化炭素濃度の測定をVaisala製測定機器GMP３４３で行い、世界平均や日本の南鳥島の平均値などとの比較を行った。共同研究者　藤原昇、大原荘司　本人担当部分　二酸化炭素測定条件の検討と測定
The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共	平成２３年８月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing,2011	エアーシャワーサイズ時系列のカオス解析で、カオス性に寄与する宇宙線を選別しその到来方向分布を求めると、Crab、Mrk421、Cyg-Xなど特定の活動銀河などに高エネルギーガンマ線宇宙線源を求めることが可能であることを見出した。　共同研究者 S.Ohara,T.Konishi,A.Mukai,M.Shimada,A.Iyono,H.Matsumoto,I.Yamamoto,N.Takahashi,T.Nakatsuka,K.Okei,S.Tsuji,N.Ochi　本人の担当部分　奈良産業大での宇宙線測定とカオス解析および考察の大部分
Searching for cosmic ray nuclei above the KNEE energies through the Gerasimova-Zatsepin effect with the LAAS experiments	共	平成２３年８月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing,2011	大広域エアーシャワーデータの解析に、Gerasimova-Zatsepin効果による、原子核宇宙線の崩壊家庭も考慮に入れて、いわゆるKnee領域以上の宇宙線を対象に考察した。共同研究者 A.Iyono,H,Matsumoto,K.Okei,S.Tsuji,S.Ohara,N.Ochi,T.Konishi,N.Takahashi,I.Yamamoto,T.Nakatsuka,A.Mukai,M.Shimada 本人の担当部分　奈良産業大データの観測まとめ
二酸化炭素濃度の時間変動	共	平成２４年３月	奈良産業大学地域公共学研究所年報第２集、２０１２	二酸化炭素濃度の連続測定を、２００ｍと４ｋｍ離れた２地点で同時に行い、二酸化炭素濃度の変動を確認し考察した。２００ｍ程度の距離では周辺の構造物に大きな差異があってもCO2濃度の変動に大差はなく、光合成の効果が大気中を迅速に伝搬することがわかり、４ｋｍはなれた奈良、大阪間では、大きな差異がみられた。共同研究者　大原荘司　藤原昇　本人の担当部分　測定と解析の大部分を担当した
福島原発放射能拡散状況調査	共	平成２４年３月	奈良産業大学地域公共学研究所年報第２集、２０１２	原発事故に伴うセシウムの飛散状況を関西中心に空間線量計によって確認した。また、CdZnTe半導体検出器のCs放射能検出特性を検討し、市民レベルで情報を共有するための放射能測定の要求性能を満たす有望な放射能検出器であることを展望した。共同研究者　大原荘司　藤原昇　本人の担当部分　CdZnTe検出器の導入検討など

絶対主体性	単	平成２４年１２	奈良産業大学紀要第２８集、３５－４８（２０１２）	「仏の現在性」が意味する絶対主体性は、「具体的なことを通じて絶対性を覚する主体」と規定することができる。絶対主体性の確立が大乗仏教の本旨であることを間主観性に関する緒論や久松真一の諸論文を参考に論じた。
CdZnTe検出器による原発放射能分析	共	平成２４年１２	奈良産業大学地域公共学研究所年報第３集、１－７(2012)	原発事故により汚染された福島県飯舘村の表層土壌の放射能をCdZnTe放射能分析器で分析し、Cs-134とCs-137を有限時間で分離検出するための実用的なその場分析も可能なことを実証した。
道理	単	平成２５年１２	奈良産業大学紀要第３０集、（１）-（１２）,2013	道理というものがいかなる意義を持った概念であるかについて、武門の道理、イギリス法の精神、仏教の四種道理などを参考にして論じた。
飯舘村原発放射能汚染	共	平成２６年３月	奈良産業大学地域公共学研究所年報第４集、125-136、２０１４	福島原発事故放射能の被曝を受けた飯舘村で採取した１００点近い土壌、植物、水などの試料について放射能測定を行い、セシウム-137の移行状況について論じた。
二酸化炭素濃度の移動測定およびその解析について	共	平成２７年３月	奈良学園大学紀要第２集、２０１５．Ｐｐ８１－９０	二酸化炭素測定器を車載し、移動測定を実施した。
聞思論集（仏教と人間）	単	平成２７年２月	情報学フォーラム、第９巻、２０１５、ｐｐ１－１２０	信仰と社会行動を結びつけるのが愛であり、慈悲であり願であること、不染汚の行持が感応道交しあって新たな実践を生むというのが、信仰に基づく社会行動のあり方であることを論じた。
コケ分析により得られた放射能拡散状況	共	平成２７年２月受理	環境技術、出版予定	福島原発放射能被災地のコケを採取分析し、兵法メートルあたりの飛散量を求める方法を確立した。より詳細な放射能飛散マップの作成が可能となった。
（その他）				
特記事項なし				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　岡部　修一

研究分野	研究内容のキーワード
現代スポーツ、バレーボール、ゴルフ	スポーツマンシップ，　スポーツの功罪

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）バレーボール指導における ３コンタクトステップアップ習得法の確立	平成17年4月 ～ 平成26年3月	バレーボールに必要不可欠なボールコントロールとパスの能力、およびパス・トス・アタックの３コンタクトリズムの感覚を習得させる練習法を考案した。３コンタクトするパートナーを１人→２人→３人→４人→６人、コートも６m四方→バドミントンコート→バレーコートとステップアップさせていく。この練習方法によって学生のプレーがリズミカルで攻撃的となった。大阪体育大学、大阪教育大学のバレーボール実技で実施した。
2）バレーボール指導における スカウティング作業の導入	平成19年4月 ～ 平成26年3月	バレーボールの６チーム、８チームのリーグ戦において、相手チームの戦力分析（スカウティング）を導入。ローテーションごとのサーブの特徴、サーブレシーブの弱点、中心的攻撃の種類とボールコース、守備陣形などについてのデータ収集をさせ、当該チームとの対戦時にデータに基づいた作戦を立てゲームを行わせた。スポーツにおけるデータ分析の一端を経験させ、ゲームに対するモチベーションも著しくアップした。大阪体育大学、大阪教育大学のバレーボール実技で実施した。
3）ソフトボール授業でのボールパークイメージ導入	平成12年4月 ～ 平成17年3月	奈良産業大学選択スポーツのソフトボール授業において、ホームベースを通常の野球場２塁付近に設定、外野フェンスを用いた「ボールパークゲーム」のイメージ化を図った。打球が外野手の間を抜けても、走者との緊迫したインプレー状況が続き、またオーバーフェンスのホームラン感覚を体験させることが可能となり、ゲームの面白さが増し、個人通算記録に対する学生のモチベーション喚起に成功した。
4）ゴルフ授業での ターゲット意識をメインとした指導法	平成14年4月 ～ 平成17年3月	奈良産業大学選択スポーツのゴルフ初心者の学生に対し、パッティング→短いアプローチ→長いアプローチ→１００ﾔｰﾄﾞショットと段階的に距離を伸ばす指導において、スイング理論よりも目標に対するターゲット感覚を重視した。その際ターゲットからの距離によるポイント制を導入、個人およびグループ単位で競うゲーム形式で上達へのモチベーションを高めた。スイング理論も取り入れつつターゲット感覚を重視することで、クラブの振り幅や力の入れ方について常にターゲットを意識した体の使い方を養うことができる。
5）女子に対する基本ボール運動の指導	平成20年4月 ～ 平成22年3月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科の保健体育実技において、保育士、幼稚園教諭をめざす学生たちが将来幼児たちとボール遊びを上手く実践できるよう投げる・捕る・蹴る・打つという基本運動能力習得を目標とし、バレーボール、ドッジボール、ソフトテニスボール、イレギュラーバウンドボールなどを用いて基本からキックベースやＴ－ボールのゲーム実践まで、ボールに馴染めるよう指導した。特に女子はボール競技経験の有無により能力差が大きいが、経験無しの学生に顕著な能力向上がみられた。
2　作成した教科書，教材		
1）特記事項なし		

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）特記事項なし		
2　特許等		
1）特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
特記事項なし				
（学術論文）				
1. スポーツに内在する問題について　ースポーツの功罪を考えるー	単	平成17年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第36号 pp. 81～87	スポーツは努力や忍耐の大切さを教え、人々に夢や希望、感動を与えるものとして評価されている。親たちは子供がスポーツに取り組むよう望み、プロになることを期待することも少なくない。しかしスポーツとは、それほど賞賛と憧れに値するものなのであろうか。世の中の人びとに対し、スポーツへの過度の礼賛と期待を戒め、スポーツの功罪を問うものである。
2. スポーツに内在する問題について（2）　ースポーツに期待されるものを考えるー	単	平成18年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第37号 pp. 75～82	反社会的な行動や考え方の目立つ現代において人々はスポーツに、清々しさ、潔さ、ひたむきさなどを期待している。しかし現代社会同様、スポーツ界でも選手を取り巻く大人たちの影響あるいは選手自身の想像力、規範意識の欠如によって、反倫理的、反社会的な振る舞いや言動が頻発している。スポーツの存在意義やよりよい発展のためには、指導者、親をはじめとするスポーツ選手周辺の大人たちの責任は大きい。

3. スポーツに内在する問題について（３）	単	平成19年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第38号 pp. 117～124	人々に夢を与えるプロスポーツ選手は世の花形である。野球やサッカー、ゴルフなどのプロスポーツにおいては子どもの時代からプロをめざした英才教育が行われることも珍しくない。だがプロスポーツ選手として活躍し、賞賛され、自立して生活設計できるのは、ほんの一部に過ぎないという厳しい現実がある。親がわが子をプロスポーツ選手にさせたいと安易に考える風潮には、賛同できない。
4. スポーツに内在する問題について（4） －スポーツ選手の倫理観－	単	平成21年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第40号 pp. 41～48	頻発する大学の体育会運動部員の不祥事、刑事事件によって大学スポーツ界の根幹が揺らいでいる。スポーツマンシップやフェアプレー精神に象徴されるルール（法令）遵守や自律、規範意識はどこにいったのか。いとも簡単に悪事に手を染めてしまう風潮には、大学スポーツに特有の理由、要因もある。そこに着目しながら現在のスポーツ界や日本の社会が抱える問題を考えていく。
5. スポーツに内在する問題について（5） －キレるスポーツ選手たち－	単	平成22年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第41号 pp. 87～95	社会の中で問題化する「キレる」という概念による衝動的な行動が、スポーツ界でも多発している。勝利に執着し過ぎるなどの理由によって、常に冷静であるべきスポーツ選手が、短絡的あるいは粗暴な行為に走ってしまう。世の人々に理解され、スポーツを文化として未来に伝えゆくためにもスポーツ選手の熟成が求められる。
6. ゴルフは紳士のスポーツか	単	平成23年 3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報 第１集 pp. 95～104	紳士のスポーツとされるゴルフは、富裕層や特権階級の贅沢なお遊び、賭けゴルフ、自然破壊などネガティブなイメージも強い。しかしゴルフは生涯スポーツや障害者スポーツとしての存在価値もあり、他人とのコミュニケーションツールとしても有効である。紳士のスポーツと標榜されるゴルフについて、その実像を明らかにするために、まず現状と問題点をあげる。
7. 現代スポーツを考える －なでしこＪＡＰＡＮについて－	単	平成23年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第42号 pp. 137～146	今夏のワールドカップにおいて、代表チーム「なでしこジャパン」が優勝する偉業を成し遂げた日本女子サッカー界は、すでに2012ロンドン五輪でのメダル獲得をめざしている。なでしこジャパンを生んだ日本女子サッカー界の歴史と現状についてまとめ、さらに同じ団体球技であるバレーボールの現状をあげて、今後の展望について考えてみる。
8. 世界バレーボール界トップ４の変遷	単	平成24年 3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報 第２集 pp. 89～99	かつて日本が世界トップの座にあったバレーボールについて、世界大会が始まった１９６０年代から現在までの世界トップ４チームの変遷と、エポックメーキングとなった革新的技術や戦術についてまとめた。およそ５０年間にわたる世界バレーボール界のトップレベルチームについて考察する。
9. 現代スポーツを考える －スポーツ選手の入れ墨－	単	平成24年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第43号 pp. 175～183	昨今、オリンピックやワールドカップなど注目を集めるスポーツ世界大会で、身体に入れ墨をした外国人スポーツ選手が顕著である。それらはＴＶ映像画面を通して露出し、青少年を含め多くの人々が目にすることとなる。日本でもファッションの一環として気軽に入れ墨をする風潮が起こっており、外国人スポーツ選手の間の入れ墨の流行が、日本の社会やスポーツ文化に与える影響について考える。
10. フェアプレー精神を考える	単	平成24年12月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報 第３集 pp. 77～86	スポーツの根幹を成すフェアプレーの精神について、最近起こったいくつかの事象を取り上げながら、その問題点を考察する。

11.現代スポーツを考える －野球のUn Written Rules について－	単	平成25年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第44号 pp.155～162	野球にはルールに明文化されてはいない暗黙の了解ともいうべき不文律が存在する。これは主に相手に対する敬意やプライドの尊重に基づくものであるが、あまり固執してしまうとフェアプレー精神との矛盾が生じることとなる。野球独特のUn Written Rules について考察を加える。
12.JVISを用いたバレーボール技術成績の分析について（1） －関西、東海、関東学連の男女１部リーグのデータを対象として－	共	平成25年12月	奈良産業大学紀要第30集 pp.15～22	バレーボール試合の公式技術記録であるJVISを用いて、関西、東海、関東学連の男女１部リーグ戦を分析した。それぞれのリーグの傾向や男女による技術の差などに考察を行った。
（その他）				
13.現代スポーツを考える －歓喜の表現や祝福の方法について－	単	平成22年12月	奈良産業大学紀要第26集 pp.81～88	想像を絶するパフォーマンスで世間を魅了する一流プロスポーツ選手は、勝利や得点場面では歓喜を表現しチームメイトの祝福を受ける。それは雰囲気を盛り上げるパフォーマンスやファン、サポーターとの歓喜を共感する側面もあるが、昨今歓喜や祝福が過熱傾向にあり、見苦しさを感じさせたり負傷するケースもある。スポーツにおける歓喜の表現や祝福の方法について考える。
14.日本バレーボール界の変遷（1） －トップレベルリーグ４０年の変遷について－	単	平成23年12月	奈良産業大学紀要第27集 pp.157～167	日本のバレーボールは男女共にかつて世界一となった歴史があり、世界の頂点に立つ国民的スポーツとして野球に次ぐ人気を誇っていた。しかし男女とも世界レベルでの弱体化や経済不況による企業チームの休廃部により、現状の日本バレーボールは長期低落傾向に陥っている。栄華を誇った時代から現在までのトップレベルリーグの歴史的変遷をまとめた。
15.ＦＩＶＢランキングに関する一考察	単	平成24年12月	奈良産業大学紀要第28集 pp.161～171	FIVBランキングは、世界バレーボール連盟が制定する対象大会での成績を一定基準のポイントを与えることで評価し、ランキングづけをしたものである。現状、日本女子は世界３位という上位ポジションを得ているが、公平性などの点では疑問があるとされている。現状のFIVBランキングの問題点をあげて考察する。
16.現代スポーツを考える －スポーツにおける和製英語について－	単	平成26年11月	奈良文化女子短期大学紀要 第45号 pp.000～000	外国からの伝承の多いスポーツでは、外来語や和製英語による表現が多い。日本語は、外来語や和製外来語を取り込む自由度を評価される一方、その氾濫や乱用への批判も多い。スポーツ界でも外来語や和製外来語表現を是正すべきとの風潮があるが、伝統的に定着し、ときに日本独特の粋な表現方法であるものを、忌避することは本当に必要であるかを考察した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年　3月31日

氏名　杵　崎　の　り　子

研究分野	研究内容のキーワード
人文社会情報学、基礎生物学（生態・環境）	経営情報、テレワーク、情報システム学、数理生物

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）メーリングリストを活用した授業のサポート	平成11年4月～平成20年3月	奈良産業大学経営学部経営学科の専門科目「基礎演習（パソコンの活用）」「総合演習（パソコンの活用）」「専門演習Ⅰ（経営情報システムの研究）」「専門演習Ⅱ（経営情報システムの研究）」において、それぞれの受講生（ゼミ生）のメーリングリストを作り、教員と受講者全員（ゼミ生）を登録し、これを用いて情報提供、質問、回答、その他で交流を深めた。また、このために休みがちであった学生もゼミに参加するようになるなどの効果があった。
2）学内LANを利用した「教材フォルダ」「提出箱フォルダ」を使った課題の出題、課題提出	平成11年～現在	奈良産業大学経営学部経営学科、情報学部情報学科で担当する講義において、基本的に毎回または半期に数回の課題問題を出して学生の理解度を高める努力をしている。授業中に課題用紙を配布するだけでは、当日欠席した学生に対して十分な対応が出来ない場合が出て、時には学生が授業に出てこなくなるケースも少なからずある。そこで、学生が欠席した場合でも課題問題を学内LANからいつでも入手でき、また、提出も随時行えるようにしている。なお、電子媒体での提出が不適切な課題に関しては出題課題のみの利用。
3）e-mailを利用した卒業論文制作指導	平成11年～現在	奈良産業大学経営学部経営学科で担当する専門演習Ⅱおよび情報学部情報学科で担当する情報学演習Ⅲでは、卒業論文の指導にあたり、e-mailを利用して授業時間以外でも指導を行っている。 具体的には、学生は制作途中の論文を添付してe-mailに添付してメールに進捗や制作上の問題点、質問箇所、相談などを書いて送ってくる。それに対して、論文制作上の留意点、アドバイス等を書いて送って指導している。これにより、就職活動等により学生が授業（ゼミ）に出席できない場合や、卒業研究の山場となる冬期休業期間中でも迅速な対応、指導が効率よくできるようになった。
4）講義用補助教材の配布と小テスト実施	平成20年4月～現在	奈良産業大学情報学部情報学科において各講義科目で授業を実施するごとに課題プリントを配布して次回までに課題を行わせ、また、次回にその問題から小テストを行わせるようにして、理解度を深める工夫をしている。なお、これらの教材については、毎年見直しを行い、常に内容が情報技術上古くなっていないか、学生の能力にあっているかという観点からチェックして修正を加えている。 科目名「経営情報システム論Ⅰ」「経営情報システム論Ⅱ」「情報システム開発論」 効果：まじめに課題をやってくる学生においては、理解度も高まり成績を上げている。

２　作成した教科書，教材		
１）講義用補助教材の作成	平成20年4月～現在	奈良産業大学情報学部情報学科において担当する各講義科目で理解度を深めるための課題プリントおよび小テスト問題を補助教材として作成した。なお、これらの教材については、毎年見直しを行い、常に内容が情報技術上古くなっていないか、学生の能力にあっているかという観点からチェックして修正を加えている。 科目名：「経営情報システム論Ⅰ」「経営情報システム論Ⅱ」「情報システム開発論」「経営工学」「システムインテグレーション」 効果：まじめに課題をやってくる学生においては、理解度も高まり成績を上げている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）奈良産業大学学生による授業評価アンケートにおける評価	平成20年度～現在に至る	奈良産業大学では平成20年度より、担当科目の一部で学生による授業評価アンケートを毎年実施しており、集計結果および教員の自己評価を大学のホームページで公表している。 　奈良産業大学の情報学部情報学科の教授として担当した２年次配当の「経営情報システム論Ⅰ」や「経営情報システム論Ⅱ」においては、情報学部の学生にとって経営学的要素の強い当科目は、開講初年度の平成20年度には難しく分かりにくいという評価が過半数を占めていたが、配布資料の充実、課題問題の配布、小テストの実施等の改善を加えていくことによって、徐々に評価があがり、平成24年度にはやや難しいが、分かりやすいという回答が75%を占めるようになり、満足度においては「満足」と「やや満足」をあわせて100%を得た。
２）学長からの評価（奈良産業大学）	平成24年度	講義・演習を堅実にこなし、授業内容や授業の運営に対する学生からの評価も高く、教育能力は十分にあると考える。課外においても学生指導に熱心に取り組み、多くのゼミ生を育てている点も評価できる。また、学生支援センター長として、全学的なリメディアル教育に取り組み、課外活動としての体制作りや運営、問題点の改善に多大な貢献を果たしている。
３）大学設置・学校法人審議会における教員組織審査による評価	平成25年8月	大学設置・学校法人審議会における教員組織審査で、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科および保健医療学部含ご学科兼任教授として「情報機器の操作」「データの世界」「シミュレーションの世界」の科目可と認定される。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）奈良商業高等学校 高大連携情報実習「Visual Basic　プログラミングしよう」	平成18年12月1日 平成20年11月28日 平成22年10月25日	奈良商業高校１・２年生を対象とした大学体験授業の一つとして企画された。Visual Basicを使って簡単なプログラムを体験してもらう授業で、コマンドボタンをクリックすると自己紹介のメッセージが表示されるプログラムや占いのプログラムを作成する内容とした。
２）奈良県職員研修　平成19年度能力開発研修「統計データ活用講座」	平成19年8月27･28日	奈良県自治能力開発センターが実施する奈良県職員研修「統計データ活用講座」の演習補助の講師を担当した。講師山田伊知郎氏の講義、統計の基礎、統計データの見方、データを比較する方法、検定の考え方などの後におこなわれるExcelを使った統計演習（具体的には、統計基礎、平均値とばらつきの検定、相関分析、回帰分析の演習）において、受講者の演習補助をおこない、受講者からの質問に対応することにより演習が円滑に進み、また、研修の理解を深めてもらうことができた。

３）奈良県職員研修　平成20年度能力開発研修 「統計データ入門講座」	平成20年8月1日	奈良県自治能力開発センターが実施する奈良県職員研修「統計データ入門講座」の演習補助の講師を担当した。講師山田伊知郎氏の講義の後におこなわれるExcelを使った統計演習（正規分布表の見方、一つの母平均の違いの検定など）において、受講者の演習補助をおこない、受講者からの質問に対応することにより演習が円滑に進み、また、研修の理解を深めてもらう上で効果があった。
４）奈良県職員研修　平成20年度能力開発研修 「統計データ活用講座」	平成20年8月4日	奈良県自治能力開発センターが実施する奈良県職員研修「統計データ活用講座」の演習補助の講師を担当した。講師山田伊知郎氏の講義の後におこなわれるExcelを使った統計演習、具体的には、二つの母平均の違いの検定、母分散の違いの検定、一様性の検定、相関分析の演習において、受講者の演習補助をおこない、受講者からの質問に対応することにより演習が円滑に進み、また、研修の理解を深めてもらう上で効果があった。
５）王寺町りーべるカレッジ 「少子高齢化時代の柔軟な働き方 －在宅勤務・SOHO・在宅ワークを考える」	平成20年10月 25日	王寺町りーべるカレッジの講師を担当した。テーマは「少子高齢化時代の柔軟な働き方　ー在宅勤務・SOHO・在宅ワークを考える」とし、今日の少子高齢化時代にテレワークという新しい働き方に注目し、社会面、就業者の視点から、経営者の視点からみた効果について検討するという内容とした。
６）日本ドリコム主催　進路発見フェスタ体験講義 「気になるケータイ選び ～機能＆料金体系の決まり方」	平成21年3月10日	日本ドリコム主催の「進路発見フェスタ体験講義」において講師を担当した。テーマは「気になるケータイ選び～機能＆料金体系の決まり方」として、ケータイ白書2009の高校生や中学生のケータイ電話の利用動向など、関心の高いデータを出して実態を明らかにするとともに、ケータイの使い方によるデータ送受信量の違いや料金体系などからどういう利用の仕方をすれば、利用料金を抑えることができるかという内容とした。高校生にとって関心の高いテーマでもあり、ブースがあふれるほどの参加者が来た。
７）天理高等学校の校内ガイダンスへの出張講義 「大学入試の面接について （情報・コンピュータ分野）」	平成22年1月27日	株式会社さんぽうが主催する天理高等学校向けの校内ガイダンスにおいて、大学入試の面接についての講師を担当した。テーマを「大学入試の面接試験（情報・コンピュータ）」とし、試験の種類と面接試験の重みについての講義のあと、面接試験のよく出る質問内容を実際に面接練習を織り込んで対策をおこなった。
８）三郷北小学校教職員研修 「ホームページ作成講座」	平成22年8月2日	三郷北小学校の教職員向けの研修会の講師を担当した。テーマは「ホームページ作成講座」とし、HTMLのタグを知らなくてもMS Wordなどで簡単に作る演習形式の内容で演習形式でおこない、受講者対してHTMLのタグを憶えなくても普段使い慣れたWordでホームページが簡単に作れることを理解させる効果があった。
９）奈良文化高等学校への出張講義 「Excel VBAでゲームを作ろう」	平成23年6月24日	奈良文化高校からの出張講義の依頼があり、講師を担当した。ゲームについての演習形式の授業を希望とのことから、テーマを「Excel VBAでゲームを作ろう」とし、コマンドボタンを押すと「大吉」や「吉」などが出るおみくじゲームを作る演習形式の内容とした。熱心に取り組んでもらうことができ、ゲームを作ることに深く興味を持たせる効果があった。
５　その他		
１）奈良産業大学経営学部経営学科における教育実績	平成11年4月～ 平成20年3月	奈良産業大学経営学部経営学科の専任教員および兼担教員（平成11年４月から平成18年３月まで助教授、平成18年４月から平成19年３月まで教授、平成19年４月から平成21年３月まで兼担）として、以下の科目を担当した。 「コンピュータ演習Ⅰ」半期２単位（平成11年度） 「コンピュータ演習Ⅱ」半期２単位（平成11年度） それぞれ１年次配当科目であり、コンピュータの基礎的な操作に始まり、ブラインドタッチ、Word、Excel、電子メール、インターネット検索、ホームページ作成を内容とした。

１）奈良産業大学経営学部経営学科における教育実績（続き）		「プログラミング論」通年４単位（平成12～16年度） 「プログラミング論」半期２単位（平成17～20年度） 「プログラム設計論」半期２単位（平成17～20年度） それぞれ２年次配当の専門教育科目であり、通年４単位の「プログラミング論」は平成17年度から半期２単位の２科目「プログラミング論」と「プログラム設計論」とに分割されたが、内容については、前期にはVisual Basicによるプログラミングの修得を中心とし、後期にはVisual Basicを前提としたプログラム設計を行ってVisual Basicのプログラミングを行う内容とした。 「データベース構築論」通年４単位（平成12～16年度） 「データベース概論」　半期２単位（平成17～20年度） 「データベース構築論」半期２単位（平成17～20年度） それぞれ２年次配当の専門教育科目であり、通年４単位の「データベース構築論」は平成17年度から半期２単位の２科目「データベース概論」と「データベース構築論」とに分割され、内容については本質的には変えずに、前期にデータベースの概要を中心として簡単なデータベース作成をAccessを使って演習形式でおこない、後期に本格的にデータベースの構築をAccessを使って演習形式でおこなう内容とした。 「人的資源管理論」　　半期２単位（平成18～19年度） ２年次配当科目の専門教育科目であり、日本における人的資源管理の概要や特徴などについて講義形式でおこなう内容とした。 「国際人的資源管理論」半期２単位（平成18～19年度） ２年次配当科目の専門教育科目であり、海外の代表的な国（アメリカ、イギリス、ドイツ、スウェーデン、中国など）の人的資源管理の枠組みや特徴などについて講義形式でおこなう内容とした。 「基礎演習」　通年４単位（平成12年度） １年次配当の専門教育科目であり、前期には初年次教育として、電子メールの使い方、ノートの取り方やレポートの書き方、プレゼンテーションの仕方などを演習形式でおこなう内容とした。後期には、WordやExcelなどを使いこなせるように適宜課題を与えて演習形式でおこなう内容とした。 「応用演習」　通年４単位（平成15､17年度） ２年次配当の専門教育科目であり、パソコンを活用するというテーマのもとで、WordやExcelを中心とした演習をおこない、Microsoft Officeスペシャリスト等の資格取得をめざす内容とした。 「専門演習Ⅰ」通年４単位（平成12～18年度） ３年次配当の専門教育科目であり、企業における情報システムの研究をテーマとし、携帯電話やワンセグなどの新しい情報技術や、企業で使われている各種情報システムなどを調査してまとめ、発表するなど、卒業研究を見据えた演習をおこなう内容とした。 「専門演習Ⅱ」通年４単位（平成13～19年度） ４年次配当の専門教育科目であり、各自で卒業論文のテーマを決めて、テーマに沿った内容の研究をおこない、卒業論文にまとめ発表をおこなうという内容で演習形式でおこなう内容とした。

２）大阪産業大学経済学部国際経済学科における教育実績	平成18年4月～現在に至る	大阪産業大学経済学部国際経済学科の非常勤講師（平成18年４月から現在まで）として以下の科目を担当した。 「コンピュータ・グラフィックス」（平成18年度） ３年次配当の専門教育科目（半期２単位）であり、前後期で２クラス展開する。OpenGLを使って３次元の簡単なグラフィックスを描く内容とする演習形式の授業である。 「ネットワーク論」（平成18年度～現在に至る） ３年次配当の専門教育科目（半期２単位）であり、平成18年度には半期につき２クラス展開で、前後期合わせて４クラス展開する。平成19年度以降は半期に３クラス展開で、前後期合わせて年間６クラス展開する。Perl言語を使ったCGIプログラミングを行い、占い、アンケート、掲示板などのWebページを作成する内容とする講義形式（一部、演習形式を含む）の授業である。
３）奈良産業大学情報学部情報学科における教育実績	平成19年4月～現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科の専任教員（平成19年４月から現在まで教授）として以下の科目を担当した。 「経営情報システム論Ⅰ」（平成20～24年度） 「経営情報システム論Ⅱ」（平成20～24年度） それぞれ２年次配当の専門教育科目（半期２単位）であり、企業における情報システムの役割、種類、経営情報システム、意思決定支援システム、戦略的情報システム、最近の新技術を利用したシステムなどを内容とする講義形式の授業である。 「ＧＵＩプログラミング」（平成21～23，25年度） ２年次配当の専門教育科目（半期２単位）であり、Visual Basicによるプログラミングを行う内容とする講義形式（一部演習形式を含む）の授業である。 「情報システム開発論」（平成21～26年度） ３年次配当の専門教育科目（半期２単位）であり、情報システム開発の基本的な流れ、開発方法の種類、各工程の詳細などを内容とする講義形式の授業である。平成25年度より「ソフトウェア工学」に改名された。 「システムインテグレーション」（平成25年度） ３年次配当の専門教育科目（半期２単位）であり、企業経営の側面からみて、意思決定や計画、システム開発などを合理的におこなうための問題解決技術や、統合された経営情報システムの詳細などを内容とする講義形式の授業である。 「情報学演習IA」（平成20年度） １年次配当の専門教育科目（通年４単位）であり、初年次教育としての位置づけになっており、大学での基本的な学び方（各施設の利用の仕方、講義の受け方、レポートの書き方など）や、情報学部の各分野の内容の理解などを内容とした。１年次のアドバイザーとしての役割もあり、学生の生活全般に対する見守りや支援も行った。 「情報学演習ＩB」（平成21年度） ２年次配当の専門教育科目（通年４単位）であり、情報学部の複数の教員が情報学の様々な分野を半期ごとに２回リピートする演習形式で体験する内容の授業である。テーマを「インターネット関連ビジネスの将来展望を考える」とし、ネットビジネスの現状調査、分析、レポート、発表の仕方を体験的に学ぶ内容とした。

３）奈良産業大学情報学部情報学科における教育実績（続き）	平成19年4月～現在に至る	「情報学演習Ⅱ」（平成21～25年度） ３年次配当の専門教育科目（通年４単位）であり、卒業研究を意識した課題に取り組む演習形式の授業である。テーマを「企業における情報活用と経営情報システムの研究」とし、企業におけるMS Officeなどのアプリケーションプログラムの利用方法、経営情報システムの研究、Excel VBAを使ったプログラムの制作などを学生が主体となる演習形式の内容とした。平成25年度より「情報学ゼミⅢ」に改名された。 「情報学演習Ⅲ」（平成22～26年度） ４年次配当の専門教育科目（通年４単位）であり、各自でテーマを設定し、調査、分析、まとめと評価を行う流れで卒業研究に取組み、卒業論文や卒業制作をおこなうための授業である。平成26年度より「情報学ゼミⅣ」に改名された。 「プロジェクト演習Ⅰ」（平成19～22年度） １年次配当の専門教育科目（半期２単位）であり、実践的な課題に少人数で取り組む課外活動的な授業である。テーマを「資格挑戦講座」とし、ITパスポート試験や基本情報処理技術者試験の勉強方法をグループで考え、取組み、まとめ、発表させるという演習形式で行った。 「プロジェクト演習Ⅱ」(平成20～22､24～現在に至る) 「プロジェクト演習Ⅲ」(平成21～22､24～現在に至る) 「プロジェクト演習Ⅳ」(平成22､24～現在に至る) それぞれ２，３，４年次配当の専門教育科目（通年４単位）であり、「プロジェクト演習Ⅰ」を含め、同時間に開講する授業である。テーマは「資格挑戦講座」とし、「プロジェクト演習Ⅰ」と同じ内容ではあるが、各学年や学生の個性に応じてグループ内でのそれぞれの役割を持ち、協力して積極的に課題に取り組んでいく姿勢を養う効果や、実際に情報処理技術者試験を受験して合格する実績があった。なお、平成24年度より「プロジェクト演習Ⅱ」は「プロジェクト演習Ⅰ」に改名、平成25年度より「プロジェクト演習Ⅲ」は「プロジェクト演習Ⅱ」に改名された。
４）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績	平成26年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の兼任教員（平成26年4月から現在に至るまで）として、以下の科目を担当した。 「情報機器の操作」（平成26年度～現在に至る） １年次配当の共通教育科目（半期2単位）であり、パソコンの基本操作、インターネットによる情報検索、電子メールの利用、ワープロソフトを利用した報告書等の文書作成、表計算ソフトを利用した表やグラフの作成、プレゼンテーションソフトを利用した研究発表などを内容とする講義形式の授業である。理解を深めるために実際にパソコン等を利用して体験的な学習を多く取り入れた。 「データの世界」（平成26年度～現在に至る） １年次配当の共通教育科目（半期２単位）であり、データの扱い方、データの集計、統計の基本、データの視覚化、データの分析などを内容とする講義形式の授業である。理解を深めるために実際に表計算ソフトを利用した体験的な学習を多く取り入れた。
５）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成26年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の兼任教員（平成26年4月から現在に至るまで）として、以下の科目を担当した。 「データの世界」（平成26年度～現在に至る） １年次配当の共通教育科目（半期２単位）であり、データの扱い方、データの集計、統計の基本、データの視覚化、データの分析などを内容とする講義形式の授業である。理解を深めるために実際に表計算ソフトを利用した体験的な学習を多く取り入れた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）中学校教諭一級普通免許（数学）	昭和57年3月	昭５６中一普第１１２９号（奈良県教育委員会）
2）中学校教諭一級普通免許（理科）	昭和57年3月	昭５６中一普第１１４３号（奈良県教育委員会）
3）高等学校教諭二級普通免許（数学）	昭和57年3月	昭５６高二普第１２４６号（奈良県教育委員会）
4）高等学校教諭二級普通免許（理科）	昭和57年3月	昭５６高二普第１１８０号（奈良県教育委員会）
5）第二種情報処理技術者試験　合格	昭和58年2月	
6）第一種情報処理技術者試験　合格	昭和59年2月	
7）商工会議所簿記検定２級　合格	昭和60年6月	
8）特種情報処理技術者試験　合格	昭和62年2月	
9）情報処理システム監査技術者試験　合格	平成元年1月	
10）オンライン情報処理技術者試験　合格	平成 4年1月	
11）修士（理学）	平成13年3月	奈良女子大学　修第２８２号 修士論文題名：「帯状分断環境における侵入生物の伝播パターンと拡大速度に関する数理的研究」
12）博士（理学）	平成16年3月	奈良女子大学　博課第２４１号 博士論文題名：「侵入生物の侵入と空間伝播に関する数理的研究」
13）初級システムアドミニストレータ試験　合格	平成16年11月	
14）ITパスポート試験　合格	平成21年 5月	
15）基本情報技術者試験　合格	平成21年11月	
2　特許等		
特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
特になし		
4　その他		
1）奈良産業大学　広報委員長	平成21年４月～ 平成23年３月	大学広報の委員長として、広報活動の円滑な運営に責任を持ち、大学のホームページやオープンキャンパスなどの小委員会活動、大学要覧の大幅な見直し、学園広報誌と連携をとった大学の広報活動などに取り組んだ。
2）奈良産業大学　学生支援センター長	平成23年４月～ 平成26年３月	学生支援センター長として、学生の学び、こころ、身体の円滑なサポートに取り組んだ。特に、学生の学びの支援として、学習室を設置し高校までの教育の専門家としての外部講師や教材を配置し、アドバイザーの協力の元でリメディアルやその他の学修支援を行う体制を整えた。また、学生相談や特別な学生支援を必要とする学生が増加していることから、教職員向けの学生相談研修会を定例的に行い、アドバイザーを中心として教職員全員による学生の見守り、支援体制を整えることに取り組んでいる。

３）奈良学園大学　国際交流センター長	平成26年４月～現在に至る	国際交流センター長という立場から100人を超える留学生および特別聴講生、夏季短期留学生のに対する渡航・学生生活全般・学習面などの幅広いの支援や、日本人学生の海外留学に対する支援、交流研修会、協定校との交流、また、奈良市や外部団体への協力などを行ってきた。さらに、26年度から新設された人間教育学部や保健医療学部に根差した国際交流をめざし、両学部と協力してタイへの看護研修やイギリスへの語学研修などの新たなサマースクールの企画にも取り組んでいる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
１．少子化時代の多様で柔軟な働き方の創出－ワークライフバランス実現のテレワーク	共著	平成19年 9月	学文社	テレワークの効率性重視のモバイル型に対して、職住接近の在宅勤務・SOHOを再評価したうえで、少子高齢化社会において、子育てや介護と仕事の両立を可能とする豊かな働き方を追求する。 A5版　全232頁 編著：下崎千代子、小島敏宏 分担執筆：下崎千代子、杵崎のり子、加納郁也、小島敏宏、小嶌典明、脇夕希子、柳原佐智子、古賀広志、宮崎泰夫、田澤由利、佐藤彰男、川村晶子 本人担当部分：第１章「第３次テレワークブームの到来」（p.12-p.23)の単著 概要：21世紀に入ってからの国家戦略であるe-Japan戦略をきっかけとするテレワークへの注目を第３次テレワークブームと称し、その背景、取り組み内容を取り上げ、さらにテレワークの分類とその実態をまとめる。
２．「空間」の数理生物学（シリーズ数理生物学要論巻２）	共著	平成21年 5月	共立出版	「空間」次元に関わる生命現象の数理モデル研究に関するモノグラフを編集したものであり、生物個体群ダイナミクスにおける空間的非一様性の数理モデル研究、細胞集団が織りなす空間パターンに関する数理モデル研究などを収める。 B5版　全222頁 編集：日本数理生物学会　責任編集：瀬野裕美 分担執筆者：重定南奈子、川崎廣吉、杵崎のり子、難波利幸、佐藤一憲、泰中啓一、高須夫悟、関村利朗、巌佐庸、望月敦史、本多久夫、小林亮 本人担当部分：第１章「不均一環境下における生物集団の分布拡大パターン」（p.1-p.10）を共著。 2次元空間上に広がる周期的分断環境の典型として帯状環境、島状環境、コリドー環境の３つの環境を取り上げ、そこに侵入する生物の分布拡大過程について反応拡散モデルを用いて、分断構造の違いや分断スケールが伝播速度に及ぼす効果を明らかにする。 （共同研究につき本人担当部分抽出不可能。全体の立案や評価、分析については共著者全員が担当し、本研究のためのシミュレーションプログラム作成、シミュレーションの実施、データ作成については本人が主に担当。） 共著者：重定南奈子、川崎廣吉、杵崎のり子

（学術論文）				
１．Spatial dynamics of invasion in sinusoidally varying environments （査読付）	共著	平成18年 4月	Population Ecology 48:263-270	１次元の周期的に変化する環境（パッチ状環境とSin状環境）とランダムに変化する環境での侵入生物の伝播速度において、内的自然増加率と拡散係数の各パラメタが分布拡大に与える影響について考察する。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。主に本研究のためのシミュレーションプログラム作成、シミュレーションの実施、データ作成、図表作成、論文執筆を担当。全体の立案や評価、分析については共著者全員で担当。 共著者：杵崎のり子、川崎廣吉、重定南奈子
２．The effect of the spatial configuration of habitat fragmentation on invasive spread （査読付）	共著	平成22年 9月	Theoretical Population Biology78(2010)298-308	空間の分断化が生物の侵入に及ぼす影響について、帯状、島状、コリドー状の３つの環境に反応拡散モデルを用いて数値計算をして分析することによって次の３点が明らかになった。 １）分断のスケールが十分に大きい場合には、生物が生き残るための好適環境の最小面積は島状、帯状、コリドーの順に広く必要となる。 ２）好適パッチが十分に広いときの拡散スピードはコリドーが一番速く、帯状、島状の順に遅くなる。３）３種の環境の好適パッチと不適パッチとの間の境界線をランダムにシフトさせた場合、シフト幅を広くしていくと拡散速度が上がる傾向がある。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。主に本研究のためのシミュレーションプログラム作成、シミュレーションの実施、データ作成、図表作成、論文執筆を担当。全体の立案や評価、分析については共著者全員で担当。 共著者：杵崎のり子、川崎廣吉、重定南奈子
３．時間変動を伴うパッチ環境における侵入生物の数理モデル	単著	平成24年12月	奈良産業大学「産業と経済」第25巻第1号（奈良産業大学経済学会），31-51	不均質環境における生物の存続や侵入問題において、従来のモデルでは固定された分断環境を考えて来たが、本研究では季節変化や気候変動によってパッチ状環境のパッチサイズが時間的に変化するケースを考えた。１次元のFisherモデルを元に新たなモデルを作り、時間変動が伝播速度に及ぼす影響を数値計算によって計算し、その結果を分析し、その特性とみられる傾向を見つけた。
４．侵入生物の増殖率の空間変動が伝播速度に与える影響	単著	平成25年 2月	情報学フォーラム紀要第８巻、奈良産業大学情報学部,67-82	周期的に変化する環境における生物の侵入問題において、sin関数で増殖率や拡散係数が変化する環境での研究はされてきた。そこで本研究では、パッチ状環境における増殖率の違いによる伝播速度の違いを数学的解の公式から求め、生物の増殖率のどのような要因が伝播速度に大きな影響を与えるか、その傾向を分析した。
５．空間の分断化が侵入生物の伝播に与える影響	単著	平成25年 3月	奈良産業大学紀要第29集，53-68	周期的に変化する環境における生物の侵入問題において、侵入生物の伝播速度に大きく影響する要因が増殖率か、拡散係数か、好適パッチと不適パッチの幅なのか、その要因を探るために、シンプルなモデルとして代表的な一次元パッチモデルを使って、伝播速度を求めて、分析を行った。このとき、各変数を環境全体の基準値からの変動幅という概念で捉えた上で変数の値を設定し、伝播速度を数学的解の公式から求めた。よく使われ、多くの研究がなされてきたパッチモデルではあるが、変数の捉え方を変えることによって、これまでに予測しなかったような関係が見えてきて、増殖率や拡散係数のはたらきも、条件によっては全く逆の方向にはたらくなど、興味深い結果が得られた。

６．不均質環境における侵入生物の進行波: 拡散, 走性, 個体群圧力の効果	共著	平成25年10月	数理解析研究所講究録 1853,150-157	共著者：重定南奈子，川崎廣吉，杵崎のり子，飯沼万美子
（その他）				
「学会発表」				
１．製造業におけるナレッジマネジメント導入によるテレワークの可能性	単	平成17年 7月	第7回日本テレワーク学会研究発表大会（三鷹産業プラザ、三鷹）	概要：一般にテレワークの導入が困難であるといわれている製造業、特に熟練工を必要とする製造現場において、熟練工のノウハウをデータベース化しナレッジマネジメントを構築したY社の事例研究をもとにテレワークの可能性について考察する。概要：一般にテレワークの導入が困難であるといわれている製造業、特に熟練工を必要とする製造現場において、熟練工のノウハウをデータベース化しナレッジマネジメントを構築したY社の事例研究をもとにテレワークの可能性について考察する。
２．A Case of Knowledge Workers in a Small Japanese Manufacturer	共同	平成17年 8月	The 10th International Telework Workshop (Liverpool, UK)	一般にテレワークの導入が困難であるといわれている製造業、特に熟練工を必要とする製造現場においてテレワークを可能とする要因について分析する。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。主にデータのまとめ、図表の作成、プレゼンテーション資料作成、発表を担当。全体の立案や現場のインタビュー、資料やデータの収集、考察については共同発表者全員で担当。 共同発表者：杵崎のり子、下崎千代子
３．高付加価値製造業への自己変革プロセス～ある中小製造業の事例から～	単	平成17年11月	第51回オフィス･オートメーション学会全国大会（大阪成蹊大学、大阪）	概要：大企業の下請け工場から脱却した中小製造業の事例をもとに、変革を成功に導いたプロセスを戦略的意思決定プロセスの観点から分析し、中小製造業が高付加価値製造業へと変革するための要因について考察する。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　桑原　祐子

研究分野	研究内容のキーワード
言語学	日本語学　日本文学　正倉院文書

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）日本語の文法研究の成果を生かした実践的授業	平成7年 ～平成22年	摂南大学非常勤講師として担当の留学生の「日本語上級作文」の授業。中国語圏の留学生にとって習得の難しい助詞の機能について、文法研究における構文論の研究成果を取り入れ、日本語文の構造には様々な層があることを解説し、身近な文を分析しながら実践的教育を行った。また、日本語の歴史的変化を具体的に示しながら、現代の日本語の実態を分析することも試みた。その結果、日本語の作文能力の向上が見られた。
2）実地見学を取り入れた授業	平成22年11月	奈良産業大学准教授として担当した「詩歌の発生と展開」の授業に於いて、万葉集・正倉院を中心に授業を行った。そこで、東大寺の奈良時代の遺構の実地見学及び正倉院外構の見学を行った。写真では実感できない構造物の大きさや、機構の規模などが実感でき、概ね良好な反応が得られた。
3）所見カードによる問題意識の啓発	平成22年～24年	奈良産業大学准教授として担当した「奈良の文学と風土」（平成22年～24年）、「日本の文学」（平成24年）では、毎回の授業で２～３の問を提示し、これに答える形で講義をすすめている。授業の最後の10分間で、所見カードに、この問に対する答えを記入させ、疑問や質問も主体的に記入させている。これによって、受講生の理解の度合いが認識でき、また受講生理解向上が図れ、問題意識の啓発に資することができた、と認識される。記入された質問・疑問については、翌週の講義で取り上げて解説を加えている。
2　作成した教科書，教材		
1）講義用教材「奈良の文学と風土」	平成22年～24年	奈良産業大学准教授として担当した一般教養科目「奈良の文学と風土」において、授業時間内に使用する文学作品・文字資料などを毎回授業で配布している。できる限り、当時の文字の姿や文章の書き方が視覚的に捉えられるように、原本・写本の写真を掲載するように努めている。また、パワーポイントを使用して、古代の文物をできるだけ閲覧できるようにしている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）学生による評価	平成18年1月	奈良女子大学における「評価アンケート」では「授業の目的の明確さと纏まり・説明の適切さ」の項目について、4.7・4.5（5段階評価）の評価を得た。「学生の理解度の認知とその対応」では、4.5の評価であった。学生からの多くの意見として、「模擬授業によって授業の成果が形になったことに充実感を感じた」とあった。実践的内容は学生に様々な実感を与えることが明確となり、今後の授業計画の一つの指針となった。
2）奈良産業大学学生による授業評価アンケートにおける評価	平成24年度	奈良産業大学では、毎年学生による授業アンケートを実施している。平成24年度のアンケート結果によると、受講生の満足度に関して、「かなり満足」「やや満足」と答えた学生は、「日本語コミュニケーション」は68％・「日本の文学」は89％、「日本語（上級作文）は93％であり、比較的高い評価を得たものと認識している。

４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）放送大学面接授業　奈良学習センター　講師 「古代日本の文字資料を読む」	平成19年11月	日本古代の文字資料として、正倉院文書と木簡資料を訓読し、そこからどのような日本語の世界が浮かび上がってくるのかということを講義した。また、原本の写真を観察することによって、確かな古代の漢字の字形が復原できることも講義した。
2）ひょうご震災記念研究機構学術交流センター　ひょうご講座2009「古代史最前線」　講師　「正倉院文書からみる下級官人の言語生活」	平成21年7月	ひょうご講座2009「古代史最前線」での講座を担当した。奈良時代の紙の利用の仕方から意外な文書の事実が分かること、古代の下級官人の人間関係がどのように言葉遣いに反映するかということを講義した。
3）2009年若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師「正倉院文書の国語学的アプローチ」	平成21年8月	奈良女子大学古代学学術研究センターと万葉文化館主催による、2009年若手研究者支援プログラム「正倉院文書を考える」での特別講義。正倉院文書を国語資料として使うときの工具類及び工具の使い方を紹介すると共に、正倉院文書を奈良時代の姿に復原する手続きを講義した。
4）京都府立国語科研究会（山城支部）研修会　講師 「正倉院文書にみる下級官人の国語―石山寺造営関係資料―」	平成22年3月	現代の日本語の中には和製漢語が数多くある。その中に「早速」という言葉がある。この言葉は正倉院文書の中にしばしば見られる。特に、下級官人達がある特定の場面で専ら使用している。そのことから、新しい言葉が誕生する背景や使用者の言語に対する意識について講義を行った。
5）朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと萬葉集」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成22年9月	朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと万葉集」の第4回目の講座の講師として講義を行った。奈良正倉院と正倉院文書の紹介を行い、正倉院文書の分析を通して古代の下級官人の勤務の実態について講義を行った。
6）奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書の世界―古代官人の世界―」	平成23年11月	正倉院に残された古代官人たちの書いた文書の分析を通して、役所で彼らがどのような仕事をしていたのか、給料はどのくらいだったのか、出勤状況はどのようにして把握されていたのか、ということを解説した。また、謝金の証文から役人たちの住居の場所が明らかになることや、下級官人たちの書いた文書がなぜ正倉院に残ったのかということについて解説を行った。
7）帝塚山大学公開講座「奈良学への招待」講師 「正倉院文書と古代日本語」	平成23年11月	奈良の正倉院には華麗な宝物とともに一万数千点の文書が残されている。これらは、8世紀の日本語を知るための極めて重要な言語資料である。『万葉集』や『古事記』とは異なった、古代の生の言語生活を知ることができる。古代の官人たちが書いた休暇届や欠勤届を分析しながら、病気の治療・回復をどのように表現していたのかということを講義した。また、彼らが母語である和語と外国語である漢語をどのように意識して使い分けていたのかということも、具体的に紹介した。
8）奈良県大学連合主催「なら講座」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成24年12月	古都奈良の秋に開催される正倉院展には、1250年の時を越えて伝えられた聖武天皇遺愛の宝物や東大寺ゆかりの品々が展示される。これらの特色を解説すると共に、それなの中にあって、思いがけない情報を我々に語ってくれる一大文書群、正倉院文書を紹介し、当時の役人が、どのような場合にどのような言葉を生み出していったかということを、解説した。
9)三郷町文化振興財団主催『カルチャーサロンさんごう』文学・歴史・経済セミナー講師　「正倉院文書と木簡の世界」	平成25年11月	正倉院正倉（奈良市、国宝）が南倉、中倉、北倉と三室に分かれていること、「東大寺献物帳」（目録）が添えられていたため北倉の品々は、史料的価値が高いことなど、正倉院に関する基礎知識を説明し、東大寺写経所が残した正倉院文書（給料の請求書、欠勤届他）や平城宮跡出土木簡などに書かれた漢文を現代語訳しながら、当時の役人や写経生の仕事内容や仕事ぶりを解説。また、漢字の「怠（おこたる）」を取り上げて当時の人々の生きた言語生活を紹介した。
10）奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書・木簡からわかる古代日本語」	平成26年10月	正倉院の宝物と正倉院文書について１千年以上も保管された要因とその文化財的価値について説明した。また、正倉院文書は造東大寺司の下に置かれた写経所の残した文書群であることを説明し、そこで仕事をしていた写経生たちの提出した休暇願・欠勤届や同時代の木簡を読み解きながら、古代の人々の言語生活の一端を明らかにし、平仮名がまだなかった時代に、漢字や漢語の用法を借りながら、古代の人々がどのようにして言葉の世界を拓いていったのかということを解説した。

5　その他		
1）学位（博士）論文指導実績	平成24年10月～12月	愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻に所属する大学院生の博士論文について3人の審査員のうちの副査として審査を担当。指導テーマは「古代東アジアにおける漢字文化の研究」である。その内容は、中国・韓国日本の第一次資料を用いて、古代東アジア諸国の異体字研究を通して、漢字がどのように受容・定着したかということを明らかにする研究である。
2）摂南大学における教育実績	昭和61年4月～平成22年3月	摂南大学の非常勤講師（昭和61年4月から平成22年3月まで）として以下の科目を担当した。 「国語学」（昭和61年～平成13年度） 通年の一般教養科目（通年4単位）である。日本語の歴史を中心に講義し、音韻と文字がどのように関わるのか、語彙は古代語から近代語にどのように変化するのかということを実例に則して解説した。本講義によって、言語に関する知識を習得させることができた。 「国語学」の担当については、昭和62年8月に摂南大学法学部法律学科　兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。 同じく平成4年8月に摂南大学経営情報学部経営環境情報学科兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。 「文学」（平成8年～平成10年度） 通年の一般教養科目（通年4単位）である。日本の古典文学の根幹を成す和歌について講義した。前期は古代から近現代に亘る恋の歌を取り上げ、恋愛観がどのように変わっていくのかということを学んだ。後期は『万葉集』『古事記』平安朝文学に表れる日本人の自然観・死生観を解説し、言語に託された人間の思想・心情を学んだ。本講義によって、文学への理解を深めることができた。 「日本語表現Ⅰ」（平成14年～平成21年度） 「日本語表現Ⅱ」（平成14年～平成21年度） いずれも半期の一般教養科目（半期2単位）である。 音声言語と文字言語による日本語表現を分析的に学び、実践を通して日本語の運用能力を伸ばすことを目指す授業を行った。「日本語表現Ⅰ」では、音声言語による表現、特に敬語表現を中心に実践演習をさせた。この実践演習を通して、正しい敬語表現の運用と敬語表現の背後にある日本の文化的背景の理解が可能となった。 「日本語」（平成1年～13年度）留学生対象の科目（通年4単位）である。主に2回生以上の学生を対象とした科目である。前期は日本語の基礎的な語彙・文法の能力の向上を目指して自薦演習を行った。後期は、様々な分野の専門的な文章の読解を行い、課題の設定・文章の構成・レポート作成を行った。以上の実践演習によって、大学における専門科目の講義を聴く能力・レポートの作成能力を習得させることができた。 「日本語」の担当につては、平成4年8月に摂南大学経営情報学部経営環境情報学科兼任講師として、大学設置審議会教員資格審査判定に合格。 「日本語上級作文Ⅰ」（平成14年～平成21年度） 「日本語上級作文Ⅱ」（平成14年～平成21年度） いずれも留学生対象の科目（半期2単位）である。主に2回生以上の学生を対象とした科目である。 「日本語上級作文Ⅰ」では、語彙・文法の知識を深めるため、単文の作成を中心に実践練習を行った。 「日本語上級作文Ⅱ」では、専門的な文章の読解を中心に据え、文章構成の型・レポート作成の基本的技術を学び、与えられたテーマにそった文章作成を行った。この実践練習によって、大学における専門科目の講義を聴く能力・レポートの作成能力を習得させることができた。

		「日本語上級会話Ⅰ」（平成14年～平成21年度） 「日本語上級会話Ⅰ」（平成14年～平成21年度） いずれも留学生対象の科目（半期2単位）である。主に2回生以上の学生を対象とした科目である。 「日本語上級会話Ⅰ」では、日常生活の様々な場面を設定し、複数の学生に実践練習をさせ、口頭言語の背後になる日本特有の文化や具体的な表現の諸相を習得させた。 「日本語上級会話Ⅱ」では、先ず日本語特有の敬語表現を大系的に学び、次に実際に様々な場面を想定し、具体的な敬語表現の実践練習を行った。合わせて、敬語表現を生み出した日本語話者の感性・思想・人間関係のとらえ方なども学ばせた。本授業によって、基本的な日本語の運用能力の向上をはかることができた。 「コミュニケーション論」（平成18年～21年度） 薬学部の学生を対象にした一般教養科目。特に薬学専門家として患者や地域社会の人たちと円滑にコミュニケーションを図るための具体的な知識や技術を身につけさせることができた。
3）京都光華女子大学における教育実績	平成4年4月～平成24年3月	京都光華女子大学の非常勤講師（平成4年4月から平成24年3月まで）として以下の科目を担当した。 「国語表現」（平成4年～平成17年度） 「言葉の理解」（平成18年～平成22年度） 「言葉と表現」（平成18年～平成23年度） いずれも1回生対象の一般教養科目（半期2単位）である。「国語表現」は、平成18度から名称変更によって、「言葉の理解」（前期2単位）・「言葉と表現」（後期2単位）となった。 「言葉の理解」（平成18年～平成22年度） 日本語の特徴を学び、日本語話者の文化的背景を学ぶと共に、実践的な日本語の運用能力を養うことを目指し、基本的な語彙の習得をさせた。更に、正しい敬語表現を身につけるための実践練習を行った。これらの実践練習によって、社会人として適切な日本語の運用能力を習得させることができた。 「言葉と表現」（平成18年～平成23年度） 日本語の表現のうち、書き言葉の表現技術の向上を目指して実践練習を行った。様々な文章を書く練習を行い、大学におけるレポート作成・小論文作成の能力を身につけることができた。 「文学と人生」（平成13年～平成14年度） 『万葉集』の中から、特に古代史を彩った様々な人物の歌を取り上げ、歌の背後にある古代史の出来事を解説し、古代の人々の人生を考える授業を行った。言語芸術である文学作品から何が読み取れるのかということを考えさせた。本講義によって、文学を鑑賞する力をつけることができた。
4）奈良女子大学における教育実績	平成17年4月～平成20年3月	奈良女子大学の非常勤講師（平成17年4月から平成20年3月まで）として以下の授業を担当した。 「中等教科教育法　国語Ⅰ」（平成17年4月～19年度） 「中等教科教育法　国語Ⅱ」（平成17年4月～19年度） 教員免許取得のための教職科目（半期2単位）である。 「中等教科教育法　国語Ⅰ」では、国文学研究・国語学研究の成果に基づく教材分析を行い、国語という教科では、何をどのように分析して教授するのかということを実際の教材を使って講義した。 「中等教科教育法　国語Ⅱ」では、受講生による模擬授業を通して、授業の組み立て方、発問の仕方、情報機器の使い方、教材開発の仕方等を学ばせた。以上の実践を通して国語科の教師としての知識と技術を養うことができた。

5）奈良産業大学における教育実績	平成22年4月～ 現在に至る	奈良産業大学の専任教員（平成22年から現在に至るまで准教授）として、以下の科目を担当した。 「日本語コミュニケーションⅠ」（平成22年～24年度） 「日本語コミュニケーションⅡ」（平成22年～24年度） １年次配当の共通教育基礎科目（半期2単位）である。 「日本語コミュニケーション」Ⅰでは、話し言葉を中心に実践的な日本語の運用能力を習得させることができた。時に敬語の背景にある日本語話者の文化的背景についても蘆花医を深めることができた。 「日本語コミュニケーション」Ⅱでは、書き言葉を中心に学習し、レポート作成・小論文作成のための実践的能力を養うことができた。 「奈良の文学と風土」（平成22年～24年度） 共通教育科目（半期2単位）である。万葉集の歌と正倉院文書から明らかになる古代の人々の生きた姿を講義形式で紹介した。できるかぎり現存する文書の写真や木簡の写真を使って、古代言語生活を具体的に学んだ。加えて正倉院に伝世した宝物を通して東西文化の交流を学んだ。本講義を通して、奈良という地域の特性を正しく具体的に理解することができた。 「詩歌の発生と展開」（平成22年～23年度） 共通教育科目（半期2単位）である。日本文学の中で重要な位置を占める詩歌について、万葉集・記紀歌謡・古今和歌集の歌を講義形式で解説した。特に、万葉集では漢字だけで以下に日本語を表現する工夫をしたのかということも学んだ。本講義を通して、平仮名の発生や詩歌に対する知識を養うことができた。 「日本の文学」（平成24年度） 共通教育科目（半期2単位）である。古事記・万葉集の韻文を中心に講義形式で行った。古事記を題材として、神話に語られた自然現象、韻文の始まりを語った物語などを紹介し、また、万葉集の歌を通して、人間の心のあり方を、喜びや悲しみをいかにして表現したのかということを学んだ。本講義を通して文学先品を鑑賞する能力を養うことができた。 「日本語　上級作文Ⅰ」（平成22年～平成24年度） 「日本語　上級作文Ⅱ」（平成22年～平成24年度）平成22年度は「日本語　文章表現」の名称での講義であったが、23年度から「日本語　上級作文」に名称変更された。留学生の2年次生を対象にした共通教育科目（半期2単位）である。「日本語上級作文Ⅰ」では、基礎段階として、単文の作成を中心に実践的授業を行い、基本的な日本語文の作成能力を習得することができた。「日本語上級作文Ⅱ」では、応用のレベルとして専門的な内容を含む長文の読解を行い、加えてテーマを設定してレポート作成を行った。この実践的授業を通して、レポート作成の知識と技術を身につけることができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
1）中学校教諭一種免許状	昭和54年3月	中学校教諭一種免許　国語 昭和53中一種第880号（奈良県教育委員会）
2）高等学校教諭専修免許状	昭和56年3月	高等学校教諭専修免許　国語 昭和55高専修56号（奈良県教育委員会）
3）修士（文学）	昭和56年3月	奈良女子大学204号 論文題目「正倉院文書に於ける上代特殊仮名遣」
4）博士（文学）	平成16年12月	奈良女子大学第124号 論文題目「正倉院文書の国語学的研究」
２　特許等		
特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」研究員	平成16年10月～平成19年3月	奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」は、6つの研究グループを組織し考古学・歴史学・国語学・国文学・地理学・建築史学・生活文化史学などの諸学を統合し、奈良という地理的条件を生かして古代日本の形成過程とその特質を解明し、古代学を体系化しようとするプログラムである。この中の「古代日本の言語文化」グループの研究員として、研究活動を行った。
・21世紀ＣＯＥプログラム関連授業「日本アジア文献資料論」（博士後期課程）の受講生に対して、正倉院文書の基本的な取り扱い方についての事前指導。	平成16年10月～18年3月	21世紀ＣＯＥプログラム関連授業「日本アジア文献資料論」（博士後期課程）は、正倉院文書を中心資料とする授業であるが、正倉院文書はその扱い方が極めて複雑である。ばらばらになってしまった古文書の断簡を奈良時代の姿に復原するための工具類の使い方や技術的指導は不可欠である。受講生の中には、古代史を専攻する学生のみならず、国語国文学専攻の学生や留学生もいたので、正倉院文書の断簡の基本的な考え方と奈良時代の姿に復原する方法について、事前指導を行った。
・国際シンポジウム「古代日本の言語文化」の運営委員。	平成17年8月20日～同17年8月21日	『万葉集』成立1200年記念のシンポジウムとして「日本古代の言語文化」のメンバーを中心に、アメリカ・カナダ・韓国・台湾の日本古代文学研究者を招き、『万葉集』の成立、古代日本語の表記の問題、海外における日本古代文学の受容の実態について議論を行った。開催にあたり、事前準備、外部機関との交渉、報告書作成ための資料作成・記録等を行った。
・若手研究者支援プログラム「古代日本の言語文化」の運営委員。	平成17年8月22日～24日	若手研究者の支援事業として、日本古代文学・言語にか関する特別講義及び正倉院、藤原宮跡において実地講義を開催した。開催にあたり、事前準備、外部機関との交渉、実地講義のための引率、報告書作成ための資料作成・記録等を行った。
・季刊ニューズレター「奈良と古代」4号（奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム発行）編集委員。	平成17年9月30日	国際シンポジウム「古代日本の言語文化」・若手支援プログラム「古代日本の言語文化」の開催報告記事の執筆と編集を行った。平成17年6月～9月の研究活動報告及び今後の活動予定を掲載した。
・『正倉院文書の訓読と注釈―請暇不参解編（一）―』（ＣＯＥ報告集vol，４）の執筆と編集。	平成17年12月	ＣＯＥ研究員として発足当初より蓄積してきた、正倉院文書読解のための基礎研究を刊行したものである。企画・執筆・編集を行った。日本古代都市の政治・経済・国家機構の運営を支える情報伝達の「言葉」の解明をその目的として、正倉院文書に残っている下級官人の休暇願・欠勤届238通について、写真・釈文を提示し、それに訓読文と注釈を施した。更に、国語学的観点から問題となる事項については補注において分析を行った。（一）では、120通を収録。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。
・季刊ニューズレター「奈良と古代」６号（奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム発行）編集委員。	平成18年3月31日	古代学学術研究センター発足の記事、シンポジウム「古代遺跡の復元と整備」の報告記事を編集した。報告集vol．４～６の紹介記事を執筆し、平成18年1月～3月の研究活動報告及び今後の活動報告を掲載した。

・シンポジウム「正倉院文書にみる古代日本語」運営委員とパネリスト。	平成18年6月24日	『正倉院文書の訓読と注釈―請暇不参解編（一）―』（ＣＯＥ報告集vol,４）の刊行を受け、古代学における正倉院文書研究についてのシンポジウムを開催した。このシンポジウムの企画・準備及びパネリストとして、「請暇解の表現をめぐって―桑内真公と丸部大人―」と題して研究報告を行った。
・若手研究者支援プログラム「古代日本の散文をめぐって」の運営委員。	平成18年8月26日～8月28日	若手研究者の支援事業として、『日本霊異記』『日本書紀』『古事記』に関する講義・公開講演会、飛鳥・葛城・吉野を実地踏査する臨地講義を開催。開催にあたって、事前準備、外部機関との交渉、実地講義のための引率、報告書作成ための資料作成・記録等を行った。
・季刊ニューズレター「奈良と古代」８号（奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム発行）編集委員。	平成18年9月30日	若手研究者支援プログラム「古代日本の散文をめぐって」の開催記事の編集を行った。報告集vol.７の紹介記事、奈良国立博物館共催行事夏季講座「聖武天皇と奈良」の報告記事の編集をした。平成18年7月～9月の活動報告及び今後の活動予定を掲載した。
・日本学術振興会　科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」を申請。	平成18年11月	従来国語資料としては、評価されていなかった正倉院文書の訓読を通して、古代日本語の実用世界における言語生活を解明することを目的として、申請を行い、平成19年4月に採択された（研究課題番号19520396）。研究代表者である。
・国際シンポジウム「古代都市の空間構造と思想―その現代的展開を目指して―」の運営委員。	平成18年11月11日～11月12日	「古代的景観」について、その思想と形成、現代におけるその継承をテーマに、イタリア・中国・韓国の研究者を招いて、古代遺跡の復原、復原整備事業の位置づけなどについて、討論を行った。開催にあたり、事前準備、外部機関との交渉、通訳の充当、報告書作成ための資料作成・記録等を行った。
・『正倉院文書の訓読と注釈―請暇不参解編（二）―』（ＣＯＥ報告集vol,9）の執筆と編集。	平成19年3月30日	企画・執筆・編集を行った。「正倉院文書の訓読と注釈－請暇不参解編（一）」の続編。（一）の残り118通の写真・釈文・訓読・注釈を提示した。加えて、正倉院文書に関わる7編のコラムを掲載した。(一)・(二)ともに、国語史の資料として極めて高い価値を持ち、古代日本語の解明に貢献するところは大きいとの評価を得ている。『古典語研究の焦点』（武蔵野書院　平成22年）の中の「奈良時代の下層識字層のことばと平安時代語」（長沼英二）は、全面的に本報告書の成果を生かした論考として刊行されている。さらに、乾善彦氏は、「正倉院文書請暇解の訓読語と字音語」（『国語語彙史の研究』30　平成23年）、「文字をめぐる思弁から－文章と文字との対応関係についての覚え書き－」（関西大学『国文学』93　平成21年）の2本の論考を、本報告書の成果によって発表している。
2）奈良女子大学古代学学術研究センター協力研究員	平成19年～21年	奈良女子大学古代学学術研究センターは、古代日本の中心であった奈良に立地する奈良女子大学の特色を生かし、東アジアという広い視野の中で日本古代の歴史・文学・言語を学際的に研究する拠点として平成17年に設置された。このセンターにおいて、平成19年～21年までの間、科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」（研究課題番号19020396）の研究代表として、研究活動を行った。合わせて、前年度までのＣＯＥ研究員として企画を行った報告集の作成も行った。ＣＯＥ関連授業における博士課程の受講生に対する事前指導を引き続き行った。
・『正倉院文書にみる古代日本語』（ＣＯＥ報告集vol,11）に論文「請暇解の表現をめぐって―桑内真公と丸部大人―」を執筆。	平成19年6月23日	企画と編集を担当し、同報告書に論文「請暇解の表現をめぐって―桑内真公と丸部大人―」を執筆した。論文の概要は以下の通り。正倉院文書には、奈良時代の下級官人等の休暇願や欠勤届が238通余り残っている。この請暇不参解（休暇願・欠勤届）の中のどのような表現に着目すれば、仮名を持たなかった奈良時代の日本語を明らかにするための資料として、正倉院文書が位置づけられるのかということを、具体的に指摘し分析を試みた研究である。文字の形・人称代名詞の有無・親族名の諸相・前置詞の用法を手掛かりにして分析を行い、上代の文学資料では得られない生きた日常言語の実態を明らかにすることができた。

・ＣＯＥ発行の論文集『古代文化とその諸相』に論文「請暇不参解の表現―桑内真公の請暇解と不参解―」を執筆	平成19年8月31日	正倉院文書には238通の古代下級官人たちの休暇願と欠勤届が残されており、同一人物が書いた休暇願と欠勤届も多数存在する。休暇願と欠勤届は文書としての機能は共通している。しかし、同一人物が書いた両者の文書には、書き手の状況・心理に明らかな相違が見られる。その状況の相違・心理の相違が、それぞれの文書の表現の特色として現れていること、また、そこに日本語特有の敬意表現や曖昧表現が顕現することを明らかにした。
・第60回萬葉学会全国大会で研究発表。タイトルは「正倉院文書にみる古代言語生活―「回復」と「治療」を表す表現―」。	平成19年10月21日	ＣＯＥの報告集として刊行した『正倉院文書の訓読と注釈―請暇不参解編（一）―』『同（二）』の成果に基づいて、万葉学会で研究発表を行った。概要は以下の通り。　正倉院文書及び奈良時代の文献資料（文学資料・歴史資料）中の病気の回復・治療を示す言葉をすべて調査し、その具体的な音形式を提示した。さらにそこに見られる表現の位相差を指摘した。この調査によって、新たに奈良時代まで遡らせることのできる語を提示し、合わせて正倉院文書の国語資料としての可能性を実証した。
・ＣＯＥと協同で平成19年度より企画を進めていた『正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状編（一）―』の編集委員。	平成20年3月6日	古代における啓・書状は、古代の都市が、人間の集積地として機能していくうえで、情報伝達のツールとして重要な役割を果たした。この啓・書状を分析することで古代の人々がどのようにして、自らの思いを紙の上に載せて運ぶことを可能にしたかを探るための基礎作業として行った訓読と注釈である。
・釜山大学主催の日本学講演会の招聘を受け講演。タイトルは「正倉院文書と墨―韓国と日本の交流―」。	平成21年3月26日	正倉院文書から明らかにされる日本古代官人の言語生活に関する講演を行った。正倉院宝物中の新羅関連宝物の紹介と、それにまつわる文字資料の紹介を行い、特に新羅墨の形状にも関わる墨の助数詞「船」と「挺」の実態の調査についての報告を行った。墨の形状を反映していると考えられていた助数詞「船」は、ある特定の人物が使用していた助数詞であったことを報告した。合わせて、物を通じて日韓の交流についても言及した。
・奈良女子大学古代学学術研究センター発行の学術雑誌『古代学』第1号に論文「古代官人の言語生活―病気回復を表す表現―」を執筆。	平成21年3月30日	正倉院文書に多く現れる病気回復表現に着目し、正倉院文書を中心にして、日本律令・日本書紀・続日本紀などの上代文献の病気回復表現を調査した。その調査によって、奈良時代の病気回復表現を分類すると共に、その用法の分析をおこない、日本語を漢字で書き表す場合の創意工夫の実態と病気回復表現の位相を明らかにした。また、平安朝以降にしか見られないといわれていた「おこたる」について、奈良時代の確例を指摘した。
・奈良女子大学研究推進プロジェクト「正倉院文書からみた日本語表記の成立過程に関する研究」の研究分担者。	平成21年4月	上代の文献（万葉集・古事記など）・木簡・正倉院文書を用いて、日本語表記成立過程を明らかにする事を目指した研究プロジェクトである。研究代表は奈良女子大学の奥村悦三教授である。このプロジェクトの主に木簡と正倉院文書を研究分担した。
・奈良女子大学古代学学術研究センター主催の若手支援プログラム「正倉院文書を考える」の特別講師。	平成21年8月5日	特別講義「正倉院文書の国語学的アプローチ」を行った。正倉院文書中の写経生の書状を取り上げ、文書の断簡をどのようにして復原するのかという方法と研究工具の使い方を講義した。合わせて、年紀の記されない書状の年代を明らかにし、書状の書かれた背景を、様々な帳簿類を検討することで明らかにしていく手法を示した。
・学術振興会　科学研究費補助金（基盤研究（ｃ））を申請。課題は「正倉院文書訓読における日本語表記成立過程の研究」。	平成21年11月	平成22年4月に採択された（研究課題番号22520467）。研究代表者。本研究の目的は、正倉院文書に代表される実用の言語生活の中に、後世の日本語表記システム(漢字仮名交じり文)が成立していく契機があることを、具体的な事例に基づいて実証的に解明することである。そのため、正倉院文書の中に散見する下級官人や在野の技術者・非官人に光を当て、彼らの言語生活を明らかにすることである。
・科研基盤研究（ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」（研究課題番号1920396）の報告書3冊を刊行。	平成22年3月30日	3冊は以下の通り。報告書Ⅰ『正倉院文書の訓読と注釈―造石山所寺解移牒符案（一）―』（研究代表者桑原祐子執筆）・報告書Ⅱ『正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状―』（研究分担者黒田洋子執筆）・報告書Ⅲ『正倉院文書からたどる言葉の世界（一）』（連携研究者中川ゆかり執筆）。以上の報告書の企画・編集を行い、報告書Ⅰの執筆を行った。

4　その他		
1）読売新聞社『知ってる？正倉院』　取材協力	平成17年10月	読売新聞社が子ども向けに刊行している楽しくわかるガイドブック「知ってる？」シリーズの第１回目の編集に際し、21世紀ＣＯＥ研究員として、担当記者の取材を受けた。正倉院の宝物と文書についての関係等について話をした。
2）表現学会『表現研究』83号 「長田久男氏追悼」執筆「再掲」	平成18年3月	表現学会理事であった長田久男氏の追悼にあたって、身近に接した者の一人として、氏の研究に対する姿勢、その研究が他に及ぼしたエピソードなどを紹介した。
3）奈良女子大学国語国文学会報第10号 「書いた本」執筆「再掲」	平成18年10月	奈良女子大学国語国文学会が発行する「国語国文学会報」に、会員の出版物を紹介するコーナー「書いた本」があるので、ここに著書『正倉院文書の国語学的研究』（思文閣出版　平成17年）の概要を紹介した。
4）思文閣出版『鴨東通信』№63　「人文科学の最前線」執筆「再掲」	平成18年10月	21世紀ＣＯＥ研究員として、思文閣出版社からの依頼を受け思文閣出版の四季報『鴨東通信』の「人文科学の最前線」第1回において、奈良女子大学21世紀プログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」の概要及び成果などについて紹介を行った。
5）大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第14号 「栄原ゼミと私」執筆「再掲」	平成23年5月	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで10年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
1　正倉院文書の国語学的研究 （博士論文）	単著	平成17年12月	思文閣出版	正倉院文書は、従来日本古代史の史料としてのみ扱われてきた、と言っても過言ではない。まだ仮名が用いられず、全て漢字のみで表記されてきた史料であることが、正倉院文書を古代日本語研究の素材として用いることを困難にしてきた。本書「正倉院文書の国語学的研究」は、国語学的研究の可能性を手探りから始め、徐々にその方法論を確立し、正倉院文書が古代日本語・奈良時代の日本語を研究する上での重要な資料であることを論証していく過程を示しており、この分野での初めてのまとまった著作である。また、これは奈良女子大学への学位請求論文である。A4判　全298頁
（学術論文）				
1）　請暇解の表現をめぐって―桑内真公と丸部大人―	単	平成19年3月	奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム報告集 Vol.11「正倉院文書にみる古代日本語」 P.2～P.39	正倉院文書には、奈良時代の下級官人等の休暇願や欠勤届が238通余り残っている。この請暇不参解（休暇願・欠勤届）の中のどのような表現に着目すれば、仮名を持たなかった奈良時代の日本語を明らかにするための資料として、正倉院文書が位置づけられるのかということを、具体的に指摘し分析を試みた研究である。文字の形・人称代名詞の有無・親族名の諸相・前置詞の用法を手掛かりにして分析を行い、上代の文学資料では得られない生きた日常言語の実態を明らかにすることができた。
2）　請暇不参解の表現―桑内真公の請暇解と不参解― （査読付）	単	平成19年8月	奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム報告集 Vol.15「古代文化とその諸相」 P.1～P.26	正倉院文書には238通の古代下級官人たちの休暇願と欠勤届が残されており、同一人物が書いた休暇願と欠勤届も多数存在する。休暇願と欠勤届は文書としての機能は共通している。しかし、同一人物が書いた両者の文書には、書き手の状況・心理に明らかな相違が見られる。その状況の相違・心理の相違が、それぞれの文書の表現の特色として現れていること、また、そこに日本語特有の敬意表現や曖昧表現が顕現することを明らかにした。

3)　古代官人の言語生活―病気回復を表す言葉― （査読付）	単	平成21年3月	奈良女子大学古代学学術研究センター・奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム 「古代学」第１号 P. 1～P. 12	正倉院文書に多く現れる病気回復表現に着目し、正倉院文書を中心にして、日本律令・日本書紀・続日本紀などの上代文献の病気回復表現を調査した。その調査によって、奈良時代の病気回復表現を分類すると共に、その用法の分析をおこない、日本語を漢字で書き表す場合の創意工夫の実態と病気回復表現の位相を明らかにした。また、平安朝以降にしか見られないといわれていた「おこたる」について、奈良時代の確例を指摘した。
4) 上代写経識語注釈（その一）大般若経（長屋王願経・和銅経） (査読付)	単	平成22年4月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第385号 P. 26～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。特に本稿で取り上げた識語は現存する識語の中で、奈良時代のごく初期の写経経典でありながら、各地に点在する、極めて貴重なものである。
5) 写経生の書状―正倉院文書にみる古代官人の実態―	単	平成22年11月	奈良産業大学除法学部 「情報学フォーラム紀要」 P. 1～P. 8	いつ何のために何を書いたか不明であった写経生の書状について、その紙背文書の分析から書かれた年代を特定し、その時の写経所の状況、写経生等の勤務状況を明らかにし、仕事を依頼するための書状であったことを指摘した。そこには、漢字漢文では表現できない日本語特有の敬意を含んだ言葉が表出することをも合わせて指摘した。
6)　正倉院文書の「笑」と「篦」	単	平成23年6月	釜山大学校日本研究所 「日本研究」12輯 P. 7～P. 31	正倉院文書の造営資料や木簡等の一次資料、律令公文・延喜式などの歴史史料、万葉集などの文学資料、及び古辞書に見える「笑」と「篦」の使用実態を調査し、「笑」を、ヤダケを意味する和語「の」とよませる漢字用法は、漢字本来の意義から逸脱する日本的用法（国訓）であることを明らかにし、日本的漢字用法が、どのような人々によってどのような理由で生じるのか、その要因をさぐった。
7)　上代写経識語注釈（その九）十輪経（五月一日経） (査読付)	単	平成23年8月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第394号 P. 33～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第9である。特に本稿で取り上げた五月一日経（一切経）は、その写経の過程を知る文書・帳簿が正倉院文書に多量に残存し、経典そのものも大量に残存する世界的にも希有な資料群である。
8)　上代写経識語注釈（その十）千手千眼陀羅尼経（玄昉願経） (査読付)	単	平成23年8月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第393号 P. 36～P. 49	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第10である。本稿で取り上げた玄昉願経は、正倉院文書によってその写経の過程を知ることのできる写経経典の一つであり、この識語の分析によって、東大寺創建・国分寺建立にも深く関わる内容であることを指摘した。

9)　正倉院文書の「堪」と「勘」―古代下級官人 爪工家麻呂の学習― （査読付）	単著	平成24年9月	萬葉語文研究会 『萬葉語文研究』第８集 和泉書院 p.121～p.147	8世紀の原本が残る正倉院文書の分析を通じて、当時の下級官人の言語生活を記述した研究である。同一人物の作成した文書・帳簿を写経事業毎に選別し、特定の人物の置かれた状況・仕事内容を明らかにして上で、役人としての基本的な語彙をどのようにして習得したのかということを明らかにした。つまり、外国語である漢字・漢文を、日本語を母語とする人々がいかにして習得したかということを明らかにすることは、異文化を享受しながら独自の文字システムを構築してきた日本語のあり方を知ることに繋がる。
10)　正倉院文書の「早速」―和製漢語のうまれる場面―　（査読付）	単著	平成25年3月	奈良女子大学文学部国文学会誌「叙説」第40号 p.33～p.57	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対照させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。
11）道豊足の人事―あいまいな表現の背景―（査読付）	単著	平成25年10月	正倉院文書研究会会誌 『正倉院文書研究』13	石山寺造営関係資料の中には、人員の派遣に関する様々な文書や、勤務実態を明らかにする文書・帳簿が多く残存している。本稿では、道豊足の派遣を要請する文書の日付や要請理由、派遣を許諾した文書のあいまいな表現に注目し、文書間の整合性を保つために周到な準備をしていたことを確認した。さらに、道豊足の勤務実態と要請理由との間に生じた矛盾が、許諾文書のあいまいな表現の要因になったということを明らかにした。
12）正倉院文書における文末の「者」	単著	平成27年9月 （予定）	『日本古代の長大帳簿ー解移牒符案の研究ー』 和泉書院（9月刊行予定）	正倉院文書には、四つの「者」の用法が見られるが、文末の「者」は漢文の語法から外れる、古代日本独自の用法である。この文末の「者」の使用率が高い造石山寺所解移牒符案における、使用状況を調査し、なぜ文末に「者」が付されるのか、「者」は、当時のどのような日本語を表現したものなのか、ということを明らかにした。
（その他）				
「研究報告書」 1）正倉院文書の訓読と注釈－請暇不参解編（一）	単著	平成17年12月	奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム報告集 Vol.4	日本古代都市の政治・経済・国家機構の運営を支える情報伝達の「言葉」の解明をその目的として、正倉院文書に残っている下級官人の休暇願・欠勤届238通について、写真・釈文を提示し、それに訓読文と注釈を施した。更に、国語学的観点から問題となる事項については補注において分析を行った。（一）では、120通を収録。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。 Ａ4版163頁
2）正倉院文書の訓読と注釈－請暇不参解編（二）	単著	平成19年3月	奈良女子大学21世紀ＣＯＥプログラム報告集 Vol.9	「正倉院文書の訓読と注釈－請暇不参解編（一）」の続編。（一）の残り118通の写真・釈文・訓読・注釈を提示した。加えて、正倉院文書に関わる7編のコラムを掲載した。(一)・(二)ともに、国語史の資料として極めて高い価値を持ち、古代日本語の解明に貢献するところは大きいとの評価を得ている。『古典語研究の焦点』（武蔵野書院　平成22年）の中の「奈良時代の下層識字層のことばと平安時代語」（長沼英二）は、全面的に本報告書の成果を生かした論考として刊行されている。さらに、乾善彦氏は、「正倉院文書請暇解の訓読語と字音語」（『国語語彙史の研究』30　平成23年）、「文字をめぐる思弁から－文章と文字との対応関係についての覚え書き－」（関西大学『国文学』93　平成21年）の2本の論考を、本報告書の成果によって発表している。 Ａ4版161頁

3）正倉院文書訓読による古代言語生活の解明	共著	平成22年3月	平成19年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号1920396）研究成果報告書　（平成19年～21年）　研究代表：桑原祐子	平成19年度科学研究費補助金　基盤研究（C）（課題番号1920396）の3カ年の研究報告書である。以下の3冊からなる。 Ⅰ　正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（一）― 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 （執筆　桑原祐子）A4版161頁 Ⅱ　正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状― 正倉院文書中の啓・書状をすべて収録し、写真・釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。 啓・書状を内容によって分類し、関連資料の解説も合わせて行った。日本の書状の歴史研究、書道史の研究のための基礎研究となるものである。 （執筆　黒田洋子）A4版360頁 Ⅲ　正倉院文書からたどる言葉の世界 正倉院文書の中から、国語国文学研究の観点から重要である語彙を取り上げ、その語を含む文書の訓読と注釈を行い、注目すべき語の考察を行った。文書の写真・釈文を提示している。更に、正倉院文書と日本古代の文献との比較研究に関わる論考2編を収録した。 （執筆　中川ゆかり）A4版95頁 以上の研究は、『日本語の研究』（日本語学会）第8巻3号の日本語学界の展望において注目された。
4）正倉院文書による日本語表記成立過程の解明	共著	平成26年3月	平成22年度～25年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号22520467）研究成果報告書　研究代表：桑原祐子	平成22年～25年度科学研究費補助金　基盤研究（C）（課題番号22520467）の4カ年の研究報告書である。以下の２冊からなる。 Ⅰ　正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（二）― 注釈篇は、日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。論考篇には、これらの資料に関わる４編の論考を収録した。 （執筆　桑原祐子）A4版179頁 Ⅱ　正倉院文書からたどる言葉の世界（二） 正倉院文書の中から、5通の文書を取りあげ、写真・釈文・訓読文・現代語訳を施し、その文書の背景を解説し、国語国文学研究の観点から注目すべき語の考察を行った。更に、正倉院文書と日本古代の文献や漢籍との比較研究に関わる論考2編を収録した。 （執筆　中川ゆかり）A4版142頁
「依頼原稿」 1）正倉院文書こぼれ話	単著	平成16年11月	奈良女子大学国語国文学会報第8号	奈良女子大学国語国文学会が発行する「国語国文学会報」に、21世紀ＣＯＥ研究員として、正倉院文書研究の一端を紹介した。下級官人の仕事を細かく再現し、彼らの言語生活を具体的事実に基づき紹介した。
2）長田久男氏追悼	単著	平成18年3月	表現学会 『表現研究』83号	表現学会理事であった長田久男氏の追悼にあたって、身近に接した者の一人として、氏の研究に対する姿勢、その研究が他に及ぼしたエピソードなどを紹介した。
3）書いた本	単著	平成18年10月	奈良女子大学国語国文学会報第10号	奈良女子大学国語国文学会が発行する「国語国文学会報」に、会員の出版物を紹介するコーナー「書いた本」があるので、ここに著書『正倉院文書の国語学的研究』（思文閣出版　平成17年）の概要を紹介した。

4）人文科学の最前線	単著	平成18年10月	思文閣出版 『鴨東通信』№63	21世紀ＣＯＥ研究員として、思文閣出版社からの依頼を受け思文閣出版の四季報『鴨東通信』の「人文科学の最前線」第1回において、奈良女子大学21世紀プログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」の概要及び成果などについて紹介を行った。
5）栄原ゼミと私	単著	平成23年5月	大阪市立大学日本史学会 『市大日本史』第14号	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで10年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。
「学会発表」 1）正倉院文書にみる古代言語生活－「回復」と「治療」を表す表現－	単独	平成19年10月	第60回萬葉学会全国大会 （於大阪市立大学）	正倉院文書及び奈良時代の文献資料（文学資料・歴史資料）中の病気の回復・治療を示す言葉をすべて調査し、その具体的な音形式を提示した。さらにそこに見られる表現の位相差を指摘した。この調査によって、新たに奈良時代まで遡らせることのできる語を提示し、合わせて正倉院文書の国語資料としての可能性を実証した。
2）道豊足の人事―「正倉院文書の訓読と注釈」の作業から	単独	平成22年10月	正倉院文書研究会 第29会大会 （大阪市立大学）	近江石山寺造営資料における文書・帳簿の分析を通して、古代の下級官人の人事システムと人事の実態のずれを明らかにし、その背景には、律令文書主義の中で文書の整合性を保つための様々な調整が行われたことをも、文書の訂正状況や表現の差異から分析検討を行った
3）正倉院文書の「早速」―和製漢語の生まれる場面―	単独	平成23年12月	国語語彙史研究会 第99回大会 （大阪大学）	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対象させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。
4）26年11月8日　正倉院文書の「運」と「漕」	単独	平成26年11月	奈良女子大学古代学学術研究センター研究会 「正倉院文書研究の新たな試み」	文字を書くことが仕事であった古代の下級官人ちは、本来の漢語用法から逸脱しながらも、実務の現場にふさわしい漢字の使い方をしている。しかし、それは、彼らが漢語本来の用法を認識していなかった結果ではない。漢字の持つ機能を充分に理解したうえでの様々な工夫がそこにはあったと考えられる。そのような実態の一端を「運」と「漕」という言葉を通して明らかにし、日本的な漢字用法が生み出される背景を考えた。現代では「漕」は「コグ」とよまれるが、古代では水運による移動「ハコブ」を表していた。そこで、正倉院文書中の「運」と「漕」に着目し、その運用実態を調査し、加えて、漢字熟語「運漕」について、正倉院文書や延喜式には独自の用法があることを明らかにした。
「シンポジウム」 1）請暇解の表現をめぐって－桑内真公と丸部大人－	単独	平成18年6月	奈良女子大学ＣＯＥシンポジウム「正倉院文書にみる古代日本語」 （於奈良女子大学）	平成17年12 月のＣＯＥ報告集Vol．４「正倉院文書の訓読と注釈－請暇不参解編（一）」の刊行をうけ、請暇不参解の訓読を通じて、これまで注目されなかった実用文書の世界から、古代日本語の新たな実態が明らかにされる可能性を指摘した。

2）正倉院文書と墨―韓国と日本の交流―	単独	平成21年３月	正倉院文書の文字と文化（於釜山大学）	正倉院宝物中の新羅関蓮宝物の紹介と、それにまつわる文字資料の紹介を行い、特に新羅墨の形状にも関わる墨の助数詞「船」と「挺」の実態の調査についての報告を行った。墨の形状を反映していると考えられていた助数詞「船」は、ある特定の人物が使用していた助数詞であったことを報告した。合わせて、物を通じて日韓の交流についても言及した。
「招待講演」 1）古代言語資料としての正倉院文書	単独	平成23年3月	釜山大学日本研究所主催（於釜山大学）	漢籍に例を見ない漢字熟語が正倉院文書の中には、しばしば見られる。このような漢字熟語について、誰がどのような場面で、誰に向かって使用したかということを分析していくと、使用者の心情や心理が明らかになり、和製漢語が生じる背景を考察することが可能になるということについて報告を行った。
「科研費申請」 韓国研究財団　土台基礎研究「日本正倉院文書と韓国文字資料の物品名の研究―物品の用度、単位、書体のＤＢ構築」	共同	平成23年8月	韓国研究財団 土台基礎研究	釜山大学日本研究所の研究チームが中心になって申請した研究プログラムである。日本の正倉院文書と韓国古代文字資料に見える物品名の用例を分析し、物品の用度・単位・書体をＤＢに構築し、古代日韓両国の文字文化と言語生活及び生活様式を再解釈できる基礎をつくり、後続研究の土台の提供を目的とする。日本側の一般協同研究員として参加した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　西岡　茂樹

研究分野	研究内容のキーワード
経営情報学	経営情報システム、e-ビジネス、情報産業、ソフトウェア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）DVDの視聴、Webサイトのリアルタイム提示 PowerPointの積極的活用 奈良産業大学、大阪市立大学、尾道市立大学で実践	平成8年4月～ 現在に至る	奈良産業大学に着任した時から、当時としては珍しかったPowerPointによるプレゼンテーション、インターネットによる最新の情報提供、DVD等の視聴覚教材を講義に取り入れ、情報化の現場の実態を学生に伝えられるよう、取り組んできた。
2）講義終了時に、学生からメールや紙媒体で意見を吸い上げ、それを次週にフィードバックする 奈良産業大学、大阪市立大学、尾道市立大学で実践	平成8年4月～ 現在に至る	講義終了時に、その日の感想や質問等をメールあるいはメモ用紙に書いて提出してもらい、疑問点については次回に答える。この方法により、自分の講義の不備を見つけることができる。出席管理の補助手段にもなる。
2　作成した教科書，教材		
毎年、教科書・教材を自作し、学内LANを通じて、デジタルコンテンツとして学生に提供している。平成26年度には「ネットワーク基礎」「Web System」「情報セキュリティ」の3科目を提供。	毎年更新	情報化の技術革新のスピードは著しく速いため、本を出版していると、出版時にはすでに古い情報となってしまうことがある。それを避けるため、毎年、教科書はその直前までの情報を盛り込んだデジタルデータとして配信している。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		
奈良産業大学の情報教育環境、インターネット環境の基礎を固めた	昭和54年～	大学着任時に、民間のIT企業と比べて、その情報教育環境が非常に遅れていたため、情報センター委員、委員長として、その整備に尽力した。またインターネットについては全くの0からの整備を担当した。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）第一種情報処理技術者	昭和55年10月	通産省が実施する情報処理に関する資格試験
2）特種情報処理技術者	昭和58年10月	通産省が実施する情報処理に関する資格試験
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
なし		

4　その他		
なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）				
企業合併に伴う情報システム統合のリスクに関する考察～みずほ銀行の事例分析に基づく～	単	平成24年12月	「産業と経済」25巻1号 奈良産業大学経済経営学会	企業合併においては情報システムの統合が不可欠であるが、通常のシステム開発と異なり、合併する企業がこれまで開発・運用してきた既存システムをいかに安全・低コストで迅速に統合するかが重要課題となる。みずほ銀行は経営統合後、2度に亘る大きなシステム障害を起こしており、その要因と企業合併プロセスの相関について考察した。
非接触型ICカード「Felica」の現状とプロジェクト演習の成果	単	平成25年2月	奈良産業大学「情報学フォーラム紀要」第8巻	非接触型ICカード「Felica」を「RFID」と「接触型ICカード」の二つの流れの融合として捉え、その位置づけを明確にすると共に、Felicaの技術要素を分析した後、Feliacアプリケーション開発に取り組み、その成果を報告した。
企業合併に伴う情報システム統合のリスクに関する考察 ： 三銀行の事例分析に基づく（特集 リスクマネジメント）	単	平成25年9月	日本情報経営学会誌 34(1), 52-63	情報化が進展した企業どうしの合併においては、それらの情報システムの統合が、合併の成否を左右する。先の論文においては、みずほ銀行の合併に伴う情報システム統合の問題を扱ったが、本論では、それをさらに深化させるとともに、システム統合に成功した北洋銀行および三菱東京UFJ銀行の事例研究を加え、みずほ銀行のシステム統合がなぜ大きなトラブルを引き起こしたかを、成功事例との比較から論じている。
商品コードの標準化とその後の動態に関する考察 ： UPC、EAN、JAN、GTINを巡って	単	平成25年12月	奈良産業大学紀要第30集	今日の流通業界を支える情報システムのインフラは「共通商品コード」と「バーコードシンボル」である。これらの標準化の流れが、アメリカに始まり、それがヨーロッパ、日本、世界へと広がりを見せるなか、生じた問題点を整理し、今後の大きな潮流であるGTINの普及に際して考慮すべき注意点を述べている。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　根岸　章

研究分野	研究内容のキーワード
数学、情報学	作用素論、量子ウォーク、グラフ理論、垂直軸風車

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）小テストの実施とＬＡＮによる問題、解答の配布	平成15年４月～平成18年３月	奈良産業大学経済学部の専門科目「経済数学演習」で、小テストを毎回実施し、解答の配布を学内ＬＡＮを通じて行った。これによって、部活などで公欠した学生が、当日の授業内容を把握しやすくなり、また、課題を提出することによって休んだ回の授業内容にもついていきやすいようになった。
2）数学用ソフトウェアを用いた数学教育	平成19年９月～現在に至る	奈良産業大学情報学部の専門科目「情報数学II」において、KNOPPIX/MathのCDを配布し、フリーの数式処理ソフトウェアMaximaを用いた数学の学習活動を行った。これによって、関数のグラフをパラメータを使って動的に動かしたりが容易になり、関数の係数の意味を把握した理が容易になるなどの教育効果があった。 平成22年度からは、学内のパソコンがCDから起動できなくなり、Windows版のwxMaximaを利用するように変更した。 平成25年度は新規科目「ゲーム数理」においても、3次元曲線のパラメータ表示などの視覚化に役立てた。
3）達成度別課題演習システムの構築	平成20年４月～平成22年３月	奈良産業大学情報学部の専門科目「情報数学I」において、授業内容を課題として設定し、一つの課題に複数の同種の問題を用意して課題内容未達の学生は、繰り返し課題を行うようなシステムを構築した。学生は学内LANから自分の達成状況が分かる。また、成績評価も絡めることによって課題達成への意欲を持たせるようにした。
4）能力別クラス編成の実践	平成22年４月～平成23年３月	奈良産業大学情報学部１年次生に対し４月当初に数学についてのプレースメントテストを行い、日本人学生に関しては、多喜正城教授とクラス分けをして専門科目「情報数学I」を行った。それによって、学生の状況に応じた授業がしやすくなり、学生のやる気を高める教育効果があった。
5）「基礎数学」の科目設置	平成23年４月～現在に至る	奈良産業大学の全学共通の導入基礎科目「基礎数学I」「基礎数学II」を設置し、4月入学時に全学的に数学についてのプレースメントテストを行い「基礎数学I」から履修、「基礎数学II」から履修、「履修免除」にわけ、それぞれの科目を各学部で複数クラス開講して少人数教育にした。それによって、大部分の学生は数学力の向上が見られるなど教育効果があった。
6）講義科目「情報数学I」と演習科目「情報数学演習I」の同時受講	平成24年４月～現在に至る	奈良産業大学情報学部の平成23年度のカリキュラム改革で、主要科目において講義科目と演習科目を併設して同時受講させるようにした。平成24年度から2年次配当科目として「情報数学Ｉ」と「情報数学演習Ｉ」を同時受講させ、両科目を連携させることによって数学的内容の理解とともに計算力をつけさせるように工夫した。

２　作成した教科書，教材		
１）「経済数学入門」	平成16年４月～ 平成18年３月	奈良産業大学経済学部の専任講師として担当の「経済数学演習」（専門科目、１年次配当、通年、４単位）で使用した上記テキストを産業図書出版社にて製本したもの。 経済学の専門科目で必要とする数学の基礎的な内容を扱っている。高校数学の単なる復習ではなく、他の授業で必要な経済用語なども盛り込み、それによって、学生に興味を持たせる教育効果があった。
２）「数学入門」	平成18年４月～ 現在に至る	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用中の教科書。１変数関数の初歩的事項から、微積分、テーラー展開や数値積分までを扱っている。第２版では集合や命題と論理を付録として追加した。 自然数から有理数を導出する考え方と、指数が自然数のベキから小数のベキへの導出を対比させるなどして、いろいろな事項をなるべく関連させながら学習していくように工夫し、それによって、学生に１変数の解析を学習しやすくする教育効果があった。 第2版はA5全146ページ。
３）「統計学入門」	平成19年４月～ 平成24年３月	奈良産業大学ビジネス学部で兼坦した「統計学入門」（学部共通基礎科目、１年次配当、半期２単位）で使用したテキスト。 記述統計について平均や分散、相関係数などまでを扱う。平成20年度からは留学生対応としてルビをふるようにした。なるべく数式を使わずに統計学の概念の理解をさせるように工夫し、それによって、数学が苦手な学生でも統計の基礎的な概念が理解できる教育効果があった。 A4全29ページ。
４）「経済統計入門」	平成19年４月～ 平成24年３月	奈良産業大学ビジネス学部で兼坦した「経済統計入門」（学部共通基礎科目、１年次配当、半期２単位）で使用したテキスト。 インターネットで入手できる経済統計のデータについて、マクロ経済学の諸概念との関連を強調しながら入手方法や意味を扱う。実際のデータを入手したり、それを加工さるような課題を課すことによって、経済データの分析手法を学ばせる教育効果があった。経済統計のデータの更新や統計調査の名称変更などはプリントで補った。 A4全28ページ。
５）「情報数学Ｉ」	平成22年４月～ 平成24年３月	奈良産業大学情報学部の専任教員として担当の「情報数学I」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用したテキスト。数学の初歩事項の復習から、２進法、ベクトルや行列の計算など情報で必要とする数学的内容を扱う。高校数学の単なる復習ではなく、学生が躓きやすい個所を強調するなどして、それによって、学生が理解しやすくする教育効果があった。 A4全50ページ。
６）「数学２」	平成23年９月～ 現在に至る	同志社大学の非常勤嘱託として担当の「数学２」（共通基礎科目、２年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。１階常微分方程式の初等解法から演算子を用いた連立線形微分方程式の解法までを扱っている。 微積分のみならず、線形代数学との関係も重視し、数学の分野間の関連を意識させ、学生に数学についての認識を深めさせる教育効果があった。 A4全40ページ。
７）「生活の中の数学」	平成23年９月～ 現在に至る	奈良産業大学共通教育科目の平成23年度からの新カリキュラムの「生活の中の数学」（共通教育科目、１年次配当、半期、２単位）で配布したプリントや毎回行った小テストとその解答。内容は線形代数学であるが、本学の学生の学力や専門科目とのつながりを意識したものとしている。毎回小テストを実施し、その解答を学内LANで配布することにより、復習しやすい環境を作った。 全109シート。

8）「情報数学Ｉ」	平成24年４月～現在に至る	奈良産業大学情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「情報数学」（専門科目、2年次配当、半期、2単位）で配布したプリント。平成23年度のカリキュラム改革で設置された「基礎数学II」を修得した学生を対象とした科目内容に改めた。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。 全95シート。
9）「ゲーム数理」	平成25年４月～現在に至る	奈良産業大学情報学部の専任教員として、平成23年度から改革されたカリキュラムの「ゲーム数理」（専門科目、3年次配当、半期、2単位）で配布したプリント。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。 全93シート。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）奈良産業大学経済学部における教育実績	平成12年４月～平成19年３月	奈良産業大学経済学部の専任教員（平成12年４月から平成19年３月まで専任講師）として、以下のような科目を担当した。 「統計学」（平成12年４月～平成19年３月） 奈良産業大学経済学部の専任講師として担当の「統計学」（専門科目、１年次配当、通年、４単位）において、記述統計と推測統計の内容の授業を行い、それによって、学生にデータの整理の仕方や分析方法を理解させる教育効果があった。 同科目は平成15年度からは大学でのセメスタ制導入に伴い、半期科目の「統計学I」と「統計学II」に分かれた。 「専門演習I」（平成12年４月～平成19年３月） 奈良産業大学経済学部の専任講師として担当の「専門演習I」（専門科目、3年次配当、通年、４単位）において、経済数学と関連した内容の学習とコンピュータの演習を行い、それによって、学生に経済数学の内容と、コンピュータの利用法を理解させる教育効果があった。 「専門演習II」（平成13年４月～平成20年３月） 奈良産業大学経済学部の専任講師として担当の「専門演習II」（専門科目、4年次配当、通年、４単位）において、コンピュータを利用した経済数学の学習用教材の開発を行い、それによって、学生に自ら学んだことの理解を深めるとともに、他者へ教える視点を持たせる教育効果があった。 平成19年度は情報学部所属の専任講師として兼坦した。 「経済数学演習」（平成13年４月～平成18年３月） 奈良産業大学経済学部の専任講師として担当の「経済数学演習」（専門科目、4年次配当、通年、４単位）において、経済学を学習していく上で必要となる基礎的な数学の授業を行った。それによって、学生に経済学の他の専門科目で必要な数学的な基礎知識をつけさせる教育効果があった。

２）奈良産業大学情報学部における教育実績	平成19年４月～現在に至る	奈良産業大学情報学部の専任教員（平成19年４月から平成20年３月まで専任講師、平成20年４月から平成24年３月まで准教授、平成24年４月から現在に至るまで教授）として、以下のような科目を担当した。 「情報数学演習I」（平成25年４月～現在に至る） 奈良産業大学情報学部の専任教員として担当の「情報数学演習I」（専門科目、２年次配当、半期、１単位）において、数式処理ソフトウェアを使いながら情報数学についての授業を行い、それによって、学生に数式処理ソフトウェアの使い方を学ばせ、さらに数学について自ら学んでいく態度を養う教育効果があった。 「情報数学II」（平成25年４月～現在に至る） 奈良産業大学情報学部の専任教員として担当の「情報数学ＩＩ」（専門科目、２年次配当、半期、２単位）において、数式処理ソフトウェアを使いながら、多変数関数の微積分とその計算についての授業を行った。2変数関数のグラフを視覚的に確認できることで偏微分などの知識をより理解しやすくする効果があった。 「ゲーム数理」（平成25年4月～現在に至る） 3DCGの数理的基礎知識の習得を目的として、2次元および3次元における図形の表現方法として、陰関数表示やパラメータ表示、また、座標変換や射影などの授業を行った。 「情報学ゼミIIA」（平成24年４月～現在に至る） 奈良産業大学情報学部の専任教員として担当の「情報学ゼミＩＩA」（専門科目、２年次配当、半期、２単位）において、グラフの読み取りや記述統計、推測統計への理解と、表計算ソフトの習熟を目的とした課題演習を中心としたゼミを行った。それによって、学生に統計学の基礎知識とExcelの様々な関数の利用の知識を習得させる教育効果があった。 「情報学演習III」（平成23年４月～現在に至る） 奈良産業大学情報学部の専任教員として担当の「情報学演習III」（専門科目、４年次配当、通年、４単位）において、Pythonを用いたWindows用GUIアプリケーションの開発を行った。学生にGUIアプリのプログラミングの知識を習得させる教育効果があった。

３）同志社大学文化情報学部における教育実績	平成17年４月～現在に至る	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として、以下のような科目を担当した。 「数学入門」（平成17年４月～現在に至る） 同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）において、１変数関数の解析を初歩からテーラー展開までを扱う授業を行い、それによって、学生に解析的な手法についての基礎知識を習得させる教育効果があった。 「数学基礎I」（平成17年４月～現在に至る） 同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学基礎I」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）において、行列の演算から固有値・固有べとるの計算までを扱う授業を行い、それによって、学生に行列の基礎事項を習得させる教育効果があった。 「数学基礎II」（平成17年４月～平成23年３月） 同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学基礎II」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）において、2変数関数の解析を扱う授業を行い、それによって、学生に2変数関数の解析手法を理解させる教育効果があった。 同科目は平成21年度からのカリキュラム改革で2年次配当科目になった。 「教科教育法Ｂ（数学）」（平成23年４月～現在に至る） 同志社大学の非常勤嘱託として担当の「教科教育法Ｂ（数学）」（共通基礎科目、３年次配当、半期、２単位）において、中学・高等学校の教員免許を取得する学生のための数学教育の指導を行った。学生に模擬授業をさせそれをお互いに評価しあうことにより良い授業とは何かを考えさせる教育効果があった。 「数学２」（平成23年９月～現在に至る） 同志社大学の非常勤嘱託として担当の「数学２」（共通基礎科目、２年次配当、半期、２単位）において、常微分方程式の解法についての授業を行った。それによって、学生に数学的なモデルを用いて問題を解決するという考え方を習得させる教育効果があった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）高等学校教諭第一種免許（数学）	平成2年3月	平成高一め第四三六三号（京都府教育委員会）
２）修士（理学）	平成4年3月	理修第４０３５号（京都大学大学院）
２　特許等		
１）特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）特記事項なし		
４　その他		
１）特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1. 数学入門 （再掲）	単	平成18年4月 （第1版） 平成22年3月 （第2版）	学術図書出版社	1変数の解析学を第1章の数と式から始め、初等関数の導入、これらの関数の微積分やテーラー展開、数値積分までを記述。第2版では付録として集合、命題と論理を付け加えた。 A5判　全104頁（第1版）、全146頁（第2版）
2. 日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－	共	平成27年3月	学術図書出版社	2部構成で、第1部部は日常生活を題材にした様々な問題に数学を適用する事例を考察する。第2部は第1部で必要とする数学事項を中心に、基礎的な数学事項を概説している。A5判　全169頁で根岸の担当は第2部（69頁から169頁）。
（学術論文）				
1. ジニ係数の数理的性質と実証研究例 （査読付）	単	平成23年12月	「奈良産業大学紀要」 第27集 P.79～P.94	ある集団内の格差を表す指標の一つであるジニ係数について、複数の集団のそれぞれのジニ係数と、それを合わせた全体の集団のジニ係数の関係を考察した。必要となる性質を得るため、ジニ係数の定義を拡張し、新たな定義に対し必要となる性質を定理として得た。この結果、ジニ係数の高い集団が全体の集団での比率を増しても必ずしも全体のジニ係数は増大しないことを一般的に示した。また、「国民生活基礎調査」の公開データをもとに、日本の高齢化がジニ係数の増加に与える要因分析を行った。
2. 有限グラフ上の量子ウォークについてⅠ：定義と条件	単	平成25年2月	「奈良産業大学情報学フォーラム紀要」 第8集 p.99-108	有限グラフ上の量子ウォークについて、正準基底の存在を仮定せずに一般的な形式での定義を行った。
3. 有限グラフ上の量子ウォークについてII：例と性質	単	平成25年12月	「奈良産業大学紀要」 第30集 p.57-63	有限グラフ上の量子ウォークについて、2部グラフでの解析において、半分の次数の行列を用いれば十分であることを示した。
（その他）				
「その他：研究会発表10」				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　福西　三千春

研究分野	研究内容のキーワード
芸術分野　絵画分野　油画系	油画　テンペラ　デッサン

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）グランデッサンの二等分法の実践	平成7年から現在に至る	奈良芸術短期大学美術科洋画コースの非常勤講師の担当の等身大デッサン（専門科目、２年次配当、通年３単位、実技）の授業で実践。大石膏を90ｃｍＸ180ｃｍの紙にデッサンをする。まず横対縦の比率を求め、枠を描く。次に見えるものの中心を求め、二等分されたグリッドを描く。形の端部と中心を2等分していき、グリッドと重なる部分を紙に記録する。グリッド全体に形の端部が記録されたらハッチングをしていく。形態が見え始めたら、ネガのスペースに墨を入れる。墨を入れることでハッチングが浮上することが理想。このグランデッサンをすることで全紙以下の大きさのデッサンは、簡単に短時間でデッサンができ、デッサン力が飛躍的に伸びた。また、画家のあらゆる問題を学生に提示できた。又、難易度の高い授業だが、学生アンケートの結果からも、学生の満足度も高い。
2）彩色デッサンの実践	平成25年4月から現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科の教授として担当した「色彩演習」（専門科目、４年生配当、半期、2単位、演習）において色のサン属性（明度、彩度、色相）を理解するため、彩色デッサ（具体的には紙パック、空き缶、透明なペットボトルの彩色デッサン）、の教育方法を実施したところバルール（色価）、バリューパターン（光と個有色、明度・彩度・色相の相関関係を理解できるようになった。また、学生の能力差があり、学生とディスカションをすることにより学生の問題意識を見つけアドバイスすること（個人指導）をすることにより、授業に対する興味が増し、飛躍的に伸びた学生がいた。学生アンケートの満足度も高かった。
3）クロッキーの実践	平成２5年4月から現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科メディアコースの教授としての担当の「基礎デッサン」（専門科目、２年次配当、半期、２単位、演習）授業で絵画的線描を引けない学生がいる。いわゆる全身運動で、呼吸が伴った線のことである。具体的には最初は５分１人、４分３分と１分と時間を短縮して描いてていく。また一人から二人、三人とモデルを増やしていく。最初は学生は困惑するが徐々に描けるようになる。デッサンを描くモードにしていく。絵コンテ、イメージ記録をマッスとしてとらえられる効果がある。効果としては、絵コンテ、イメージ記録等が簡単に描けるようになる効果がある。学生アンケートの結果からも、学生の満足どが高い。 線描を引くための練習。モチーフは室内の学生。 5分で1枚のペースで枚数を増やしていく。そして だんだんと時間を短くしていく。3分、1分と。学生 は徐々に集中し、デッサンモードになっていく。そこ で、デッサンの授業に入っていく。いわば、導入 部分ではあるが、呼吸の伴った線が引けるようになる効果がある。学生アンケートの結果からも、学生の満足度も高い。

２　作成した教科書，教材		
1）ダビンチのデッサン装置	平成１０年４月 ～現在に至る	奈良芸術短期大学美術科洋画コースの非常勤講師として担当の(デッサン、通年、２年生、実技）にて製作した教材。主としてデッサンの遠近法、形態の把握、見ることのメカニズムを理解することを目的とし、フォルムを描けない学生も、フォルムが描けるという効果、あるいはマッス、立体の構造（プロポーション、ムーブマン、面、ボリューム）をよく理解できたと考える。具体的には適当な大きさ、40ｃｍX50ｃｍ位のパネルにのぞき穴（1ｃｍ）をあけ、次に30ｃｍほどのの間隔を置き、アクリル板に十字線を引き、対象の中心を決め、合わせ、ダーマクラフトで対象物を写し取っていく装置。いわば、１本線のデッサン。今日の、ドローイングにも通ずる。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）授業評価アンケートでの評価	平成26年2月	
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特になし	平成00年0月0日	
５　その他		
1)特になし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
1）芸術学士	昭和５３年３月	東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
２）中学校教諭一級普通免許（美術）昭五三中一普通第二四三一０号（東京都教育委員会）	昭和５３年３月	
３）高等学校教諭二級普通免許（美術・工芸）昭五三高二普第二五０三二号（東京都教育委員会）	昭和５３年３月	
２　特許等		
1）特になし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特になし		
４　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1）奈良芸術短期大学研究紀要	共	平成１８年８月	奈良芸術短期大学	「練り込みテンペラの可能性について」の概説。練り込みテンペラの紹介と処方箋を記載。練り込みテンペラの呼び名のルーツについても記している。また練り込みテンペラがこれからどのように日本の風土に定着するかが問題である。湿度の高い日本の風土ではカビが発生する。防カビ剤の開発が必要である。現在、ＴＢＺを使用しているが、初期の全容量の3%の氷酢酸も使用している。今後の練り込みテンペラの問題点と可能性についての考察である。OGテンペラの処方箋にも言及している。
（その他）				
1）個展ー福西三千春展	単	平成18年7月	福西三千春展-ＢＵＤＤＨＡ-銀座スルガ台画廊（東京）	画廊企画。162ｃｍｘ390．3ｃｍの大作からＦ0号の小品まで12点の展示。材料はテンペラミスター、自製キャンバス。テーマは前回と同様にブッダの言葉を視覚化を試みた。ブッダの言葉をテーマに描き続けたいと考えがまとまってきた。特に初期仏教に興味があった。様々な経典を勉強する。いかに芸術に心が重要かを感じた作品であった。しかし、所詮、芸術は感情的なものなのか、考えさせられた個展であった。絵画とは６感で知覚したものの再現かということであった。見えないもの、非言語、見ずらさが重要と考えた作品である。
2）個展ー福西三千春展	単	平成19年2月	福西三千春展月祖素画廊（東京）	月素画廊企画のＷｅｂ上での個展形式の発表。BUDDHAシリーズ作品の中から自選した作品。すべて画廊任せの個展である。
3）個展ー福西三千春展	単	平成19年8月	福西三千春展　月素画廊（東京）	月素画廊企画の上記Ｗｅｂ上の作品を実際に柳屋（和歌山・白浜）のロビーにて個展形式で展示。ホテルのロビーに展示するもので年間、何千人も来客する。月素画廊のオーナーがすべてのことを企画する。まだ、歴史の浅い企画画廊である。作品は旧作と新作の展示で搬入は自分で行ったのみ。
4）個展ー福西三千春展	単	平成21年8月	福西三千春展-生きとし生きるものが幸せでありますように一銀座スルガ台画廊（東京）	画廊企画。162ｃｍｘ390.3ｃｍの大作を中心に12点の展示。材料は練り込みテンペラ。防カビ剤はＴＢＺ5%である。5%では奈良県天川あたりの湿度の高いところでも、異常に湿度が上がらない限りカビが発生されないことが分かった。しかし、年数がたてばどのような状態になるか予想がつかない。今後の研究に期待したい。テーマはブッダの言葉、慈経の視覚化を試みた作品である。技法研究、表現研究、造形研究が絡み始めた個展であった。
5）個展ー福西三千春展	単	平成24年8月	福西三千春展　銀座スルガ台画廊（東京）	画廊企画。162ｃｍｘ390.3ｃｍの大作を中心に12点の展示。前回と同じブッダシリーズ。材料は練り込みテンペラ、自製キャンバス（今回は膠下地を試みた）、アクリル、コットンキャンバスを使用。やはり大作がメインである。ブッダシリーズとあるが、ブッダのことばを視覚化しながら描き続けていこうと決心した個展でもある。技法研究ではテンペラミスターと油彩の混合技法、アクリル絵の具、クレヨン、油彩、水彩など描画材料の幅を広げようと試みている。また支持体の幅も広げてはと思った。東京芸術大学准教授、Ｏ　ＪＵＮが絶賛した。

＜グループ展発表＞				
1）飛鳥展	共	平成１８年８月	画廊飛鳥（奈良県）	画廊飛鳥企画の選抜展。自選した「ブッダ」シリーズ３点を出展。比留間良介、三瀬夏ノ助、森川孝浩、福西三千春、赤井正人、北村繁（漆）、岸映子（陶）など様々なジャンルの作家の出品。奈良県の南部に画廊が少なく、なら輪展のメンバーが出品。多くの来客あり。奈良県の南部のアートの活性化に期待したいが、オーナーの喜多龍ノ助氏の話では経営的に大変厳しいものがあるとのことである。奈良県の多くの作家は大阪、京都に発表をする現状がある。今後の様子を見たいし、期待したい。
2）「新しい人」２００７ピースアンデパンダン展ＩＮ浜松２００７ピースアンデパンダン展ＩＮ浜松	共	平成１９年８月	ギャラリーケイブ（静岡・浜松）	ギャラリーケイブ企画のグループ展。Ｆ10号BUDDHA050806 を１点出展。静岡県を中心に活躍する中村昌司の呼びかけで集まった現代美術家、平面、インスタレーション、立体が展示されました。「新しい人」をテーマに現代美術家の展示でしたが、初めての参加で、遠方ということもあり小品、Ｆ10の出展。出品作家、池谷豊、伊藤怜子、乾久子、今井宏、奥中章人、掛川市内高校生、高木健、多々良栄里、竹内康人、中野球一、ナカムラマサシ、丹羽勝次、福西三千春、松浦澄江、森妙子、安井寛一。公募団体、年齢は様々である。次回機会があればぜひ参加したいと思う。
3）奈良芸術短期大学研究紀要	共	平成２０年８月	奈良芸術短期大学	作品掲載発表。ブッダシリーズからＦ１50号をを発表。材料は、テンペラミスター、石膏下地、キャンバス、防かび剤はＴＢＺ。この作品は特にテンペラミスターの防カビ剤、ＴＢＺの容量の実験である。卵黄、リンシードオイル、膠等の全容量の3%を入れていたが、赤井正人（奈良芸術短期大学卒業生）の報告では、湿度の高い（奈良県・天川）ではカビがはえるとの報告があった。ＴＢＺ5%，初期の氷酢酸3%を防腐剤として入れた。一年間、観察するがカビがわずかに入る。やはり卵黄、膠のタンパク質が問題である。ワニスを塗ることで対応する。またできる限り、タンパク質、具体的には卵黄を抜いた、ものに改良が求められる。ＯＧテンペラ（カゼインテンペラの応用）も視野に入れ実験を続けたい。初期のテンペラミスターよりカビがはえにくくなっている。また実験結果は、数年後の様子を観察しなければならない赤井氏の協力で、湿度の高い天川でも観察してしている。
4）世界遺産姫路城現代美術ビエンナーレ展2010	共	平成２２年８月	主催：姫路市市民プラザ、姫路城現代美術ビエンナーレ委員会。後援兵庫県　姫路市　姫路市教育委員会、財団法人：姫路市文化交流財団助成事業	国内外の現代美術作家、立体、平面作家50人の作家作品の展示。2000名以上の来客あり。F100号、２点出品。（立体）・生島豊昭、井上京太、加藤昭男、小島弘、栄利秋、鹿間厚次郎、など１３名（平面）濱田顥、岡芙美子、コウノ真理、福西三千春、橋本清、ナガイマモル、元木昭治など、ロシア、アメリカ、メキシコの作家３７名の平面作家による２年に１回のビエンナーレ展覧会。会期中、兵庫県立美術館　館長　蓑豊　の講演が開かれた。図録あり。
5）Who’s Who ART VIVI展	共	平成２３年２月	茶屋町画廊（大阪）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」井上祥子、奥村安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。グループてんを行うと必ずというほどトラブルが出てくる。その問題を解決できるかを確かめる実験展でもある。年齢、公募団体は様々である。

6) Who's Who ART VIVI展	共	平成２３年３月	ギャラリー石彫（兵庫）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」井上祥子、奥村安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。ギャラリー菊で開催したものを別空間に展示することにより問題を別角度から検証する実験展。年齢、公募団体は様々である。
7) Corega関西展	共	平成２３年４月	ギャラリーモダン（神戸）	関西の現代作家の企画展。Ｆ５０号を出展。（立体）・生島豊昭、栄利秋、鹿間厚次郎、山田幸作、山本哲三,（平面）・奈須豊、夏目陽子、橋本清、初田寿、よろずふきこ、松下元夫、吉田哲夫、吉見敏治、よろずひきこ、米田整弘など１０人の展示。年齢、公募団体、様々である。ギャラリーモダンは、企画のみのセカンダリーギャラリーである。具象中心の画廊であるが、以上のメンバーを扱うのは、初めてであるとのことである。クオリティの高い展覧会であった。
8) Who's Who ART VIVI展	共	平成２４年２月	ギャラリー菊（大阪）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」井上祥子、奥村安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、初田寿、中道紀子、夏目陽子、浜田夏子、内木孝志、中西節子、上田康宣、勝谷龍亮、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。グループてんを行うと必ずというほどトラブルが出てくる。その問題を解決できるかを確かめる実験展でもある。
9) Who's Who ART VIVI展	共	平成２４年３月	ギャラリー石彫（兵庫）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、初田寿、中道紀子、夏目陽子、浜田夏子、内木孝志、中西節子、上田康宣、勝谷龍亮、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。ギャラリー菊で開催したものを別空間に展示することにより問題を別角度から検証することができた。画廊が変わると、それぞれの作品の見え方が変わるところに興味を持った。知らない作家とグループ展をするのは大変、参考になる。
10) 世界遺産姫路城現代美術ビエンナーレ展2012	共	平成２４年７月	主催：姫路市市民プラザ、姫路城現代美術ビエンナーレ委員会。後援兵庫県　姫路市　姫路市教育委員会、財団法人：姫路市文化交流財団助成事業	国内外の現代美術作家、立体、平面作家50人の作家作品の展示。2000名以上の来客あり。F100号、２点出品。今回は、優秀賞にあたる、白鷺賞を受賞。（立体）・生島豊昭、井上京太、加藤昭男、小島弘、栄利秋、鹿間厚次郎、など１３名　（平面）生駒泰充、岡芙美子、コウノ真理、福西三千春、橋本清、ナガイマモル、元木昭治など、ロシア、アメリカ、メキシコの作家３７名の平面作家による２年に１回のビエンナーレ展覧会。会期中、美術評論家、吉村良夫の講演が開かれた。年齢、公募団体、年齢は様々である。今回は、最優秀賞の白鷺賞を受賞する。
11)スルガ台画廊開廊５０周年記念小品展	共	平成24年10月	銀座スルガ台画廊（東京）	画廊ゆかりの、現在活躍中、画壇を牽引している、若手の俊英作家の選抜企画展。小品展。Ｆ0号を出展。坂田哲也、野見山暁治、佐藤一郎、佐野ぬい、石井勢津子、小木曽誠、福西三千春、山村博男、諏訪敦、島田鮎子、木津文哉、木村克郎、寺田栄次郎,、開光一、など４２名の小品展。４２名と多いのでｆ３号までを各作家が持ち寄り画廊が展示する。画廊企画である。以上は洋画である。その2では日本画の展示がある。銀座スルガ台画廊から多くの作家が育った。最近では、松井冬子、村上隆もそうである。年齢、公募団体、ジャンルは様々である。

12)Who’s Who ART VIVI展	共	平成２５年２月	ギャラリー菊（大阪）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」上　順子、コウノ真理、佐藤廣子、中西節子、浜田夏子、福本美智子、堀江忠史、井上祥子、奥村安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。グループてんを行うと必ずというほどトラブルが出てくる。その問題を解決できるかを確かめる実験展でもある。公募団体、ジャンル、年齢は様々である。
13)Who’s Who ART vivi展	共	平成２５年３月	ギャラリー石彫（兵庫県・高砂市）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」上　順子、コウノ真理、佐藤廣子、中西節子、浜田夏子、福本美智子、堀江忠史、井上祥子、奥村安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。ギャラリー菊で開催したものを別空間に展示することにより問題を別角度から検証する実験展。
14)播磨文化賞美術展	共	平成２５年５月	主催：、播磨文化大賞選考委員会、播州美術賞運営委員会、ギャラリー、石彫（高砂市）	受賞者６名の平面作品のの展示。元木昭治（文化大賞）、福西三千春（文化大賞）、熊野融（美術賞）、苧玉紀夫（奨励賞）、鈴木孝典（功労賞）の作家が３点以上の作品を展示した。ノータイトルの平面作品から絵画までの内容である。ブッダシリーズ、Ｆ３０号を三点出品。年齢、ジャンルは様々である。
15)日本美術家連盟全近畿地区会員展「きのうとあすの対話Ⅱ」	共	平成25年5月から6月	兵庫県立美術館王子分館、原田の森ギャラリー、主催日本美術家連盟近畿地区、後援、大阪府、奈良県、和歌山県、京都府、滋賀県、神戸市、兵庫県教育委員会、神戸市教育委員会（公財）兵庫県芸術文化協会	日本美術家連盟全近畿地区会員展。約350名の洋画、彫刻、版画の作家達の第2回目の展覧会。各公募団体、無所属、ジャンル、年齢を超えてがコンセプトである。しかし、会場（展示室）を仕切り壁があり、見にくかった。期間中、講演会、懇親会等のイベントも開催され盛況だったが、問題も多いように思った。ジャンルを超えてとあるが、展示空間をうまく活用できず、見やすくは展示できていたが、少々、見づらくても、カテゴリーを作らづ展示をしたほうがいいのではないかと思った。色々の問題を含んだ展覧会であった。反省会でも取りざたされるであろう。しかし関西の画壇の全貌がみれたことは参考になった。
16)明日への視点	共	平成25年７月	ギャラリー菊（大阪）	ギャラリー菊の企画６人のグループ展。Ｆ100号、Ｆ30号、Ｆ10号の3点（ブッダシリーズである）を出展。出品作家は掛井五郎、古川昭芳、岡田信美、野田龍二、原田、明、福西三千春である。この画廊企画は、画廊が「明日への視点」というタイトルで６人限定の個展感覚ののグループ展という形をとっている。新鮮さと交流を目的としている。公募団体の出品者以外にもっと見てもらえる機会が欲しいという言う作家の要望に応えるという企画に賛同する作家たち６人が参加した。それぞれの作家は、面識がなく。展示に関しては６人の作家が相談して展示することになっている。一名は立体で、その他の作家は平面である。具象、抽象絵画、と問わず、公募団体の枠を超え、様々な視点を持つ作品であった。交流によって啓発がはかれ、アートの輪が広がり大変好評であった。

17）Who’s Who ART VIVI展	共	平成26年2月	ギャラリー菊（大阪）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、初田寿、中道紀子、夏目陽子、浜田夏子、内木孝志、中西節子、上田康宣、勝谷龍亮、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。ギャラリー菊で開催したものを別空間に展示することにより問題を別角度から検証することができた。画廊が変わると、それぞれの作品の見え方が変わるところに興味を持った。知らない作家とグループ展をするのは大変、参考になる。
18）Who’s Who ART VIVI展	共	平成26年3月	ギャラリー石彫（高砂市）	画廊企画。関西の現代作家、立体、平面作品の展示。Ｆ３０号を出品。「立体」・生島豊昭、鹿間厚次郎、橋本清、笹川まさ子,水嶋康宣など１０名、「平面」安尚、日和佐治雄、福西三千春、松本順子、よろずふきこ、初田寿、中道紀子、夏目陽子、浜田夏子、内木孝志、中西節子、上田康宣、勝谷龍亮、竹村京子、元木昭治など２２名の現代美術家の展示。ギャラリー菊で開催したものを別空間に展示することにより問題を別角度から検証することができた。画廊が変わると、それぞれの作品の見え方が変わるところに興味を持った。知らない作家とグループ展をするのは大変、参考になる。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　門垣　一敏

研究分野	研究内容のキーワード
メディア情報学	マルチメディア情報処理、コンテンツ、芸術情報

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）映像技術の講義に際して ・大学のネットワークサーバーを利用した教材の配布 ・ビデオ教材や映像作品を利用した視聴覚教育 ・授業の最後には「まとめ」として小テストを行い、次回に返却して理解度を再確認する。	平成19年4月～平成27年2月	奈良産業大学情報学部情報学科の教授として担当してきた専門科目「映像技術Ⅰ」（2年次配当、半期、2単位）において、理系でない履修者も多く、机上だけではわかりにくい専門用語や映像技術・音声技術の教材や資料をサーバーに置くことでいつでもどこでも予習・復習を可能にする。またビデオ教材や映像作品を見せることによって視聴覚的に理解しやすい指導をしている。 授業の最後に「まとめ」として小テストを行い、次回に返却することで反復して専門用語の再確認ができるようにしている。これは、出席確認も確実にできて出席率も上がる。
・ビデオカメラと編集パソコンで映像作品の制作	平成19年4月～平成24年2月	「映像技術Ⅱ」（2年次配当、半期、2単位）では「映像技術Ⅰ」の知識をもとに、ビデオカメラと編集パソコンを使用して簡単な映像作品の制作を課題にしている。映像制作を楽しんで制作する動機づけになっている。
2）2コマを連続して、2人の教員が共同で各専門の講義や指導を行うオムニバス授業。	平成19年4月～平成27年2月	「映像制作Ⅰ（映像制作演習）」（3年次配当、半期×2、4単位）においては、ビデオカメラで撮影して映像作品を制作する科目であるが、企画や撮影・編集など90分では不十分な時間を2コマ連続して3時間の授業をする。このことでじっくり考えて作業をしたり、学外に出ての調査やロケ撮影も可能にする。 映像制作では企画や演出を専門とする教員とカメラなどの技術を専門とする教員が共同して、また分担して授業を行ことで、複数のグループに分かれて作業する時にはより適切な指導のできる体制がとれる。
3）大学内にあるテレビスタジオ設備およびハンディーデジタルビデオカメラを利用した映像制作	平成19年4月～平成27年2月	「プロジェクト演習（ビデオ作品の制作と研究）」（2・3・4年次、通期、4単位）、「情報学演習Ⅱ・Ⅲ」（3・4年次、通期、情報学ゼミⅢ・Ⅳ、4単位）においては、テレビスタジオ設備を利用した映像作品の制作を行っている。このスタジオは複数のカメラを使った映像スイッチングシステムや照明機器、音声ミキサーを備えた本格的なもので、リアルタイム制作の実技トレーニングができる。これらをベースにハンディービデオカメラと編集ソフトを使用したポストプロダクション技術を習得し、映像情報を制作して発信する能力を高め、卒業制作などのより高度な作品づくりができる。
2　作成した教科書，教材		
1）教材 ・音声技術概要 ・アナログ放送からデジタル放送へ ・Premiere Proを起動する ・編集するとは・・・編集のためのカメラワーク ・映像制作の道 ・3D立体視映像の作成と実験	平成19年6月 平成19年7月 平成19年9月 平成19年～23年 平成23年 平成23年9月～平成26年2月	音声技術の概要とインピーダンス・デシベルについて 地上デジタル放送の概要 Adobe Premiere Pro　1.5～CS5.0 を使う手順書 編集ソフトの概念と編集のためのカメラワーク 映像制作の企画から編集までの手順書 3D立体視映像の制作実験をする教科の手順書
3　教育上の能力に関する大学等の評価		

4 実務の経験を有する者についての特記事項		
5 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格, 免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文）				

教　育　研　究　業　績　書

平成26年3月31日

山田　　尚

研究分野	研究内容のキーワード
映像メディア、　映画・映像論	メディアの展開と映像の役割、映画、映像と社会の関係

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）映像素材の活用	平成19年4月～	映像メディア論、映像作品論では、各回のテーマに合わせ、必要に応じ映像（作品）を視聴。比較分析及び発見というキーワードから考察する。また、そこから描かれた時代や社会背景にも敷衍し、学生に映像＋社会と人間についても理解を促す。
2）時代や社会（世界）への学生の関心の涵養	平成19年4月～	映像に関するメディアや作品の分析、解釈に加え、それに関連した、大学生なら知っておくべき事象へも展開させる。それは、学生により社会への知識や関心を高め社会性を涵養することも目的の一つ。
2　作成した教科書，教材		
1）独自の教材、資料の作成	平成19年4月～	「映像作品論」「コンテンツ構成論」「メディアを考える」の科目では、毎回の授業で独自の教材を作成、映像素材の視聴や関連資料も配布。社会の動きや最新の話題等も組みいれている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）		
5　その他		
1）		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）		
2　特許等		
1）		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）テレビ番組の制作 （ディレクター、プロデューサー）	昭和43年～ ～平成17年	ワイドショー：八木治郎ショー ドラマ：東芝日曜劇場「君に捧げる歌（民間放送連盟賞）」「伝言（JNN協議会賞）」　他39作品 連像ドラマ「生きて行く私（ｷﾞｬﾗｸｼｰ賞、ATP賞）」 他　6シリーズ 帯ドラマ「ピュア・ラブ　Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ」　他6シリーズ 単発ドラマ「開局記念・ちいさな橋を架ける（ｱｼﾞｱﾃﾚﾋﾞ賞、民間放送連盟賞）」　他３作品 情報エンタテイメント番組：「世界まるごとHOWﾏｯﾁ」 「世界ウルルン滞在記（橋田賞）」　　他

4　その他		
1）　放送人の会・幹事 一般社団法人放送人の会・理事	平成17年～	任意団体放送人の会の幹事として「日韓中テレビ制作者フォーラム」日本組織委員会（事務局長役）を担当、毎年3か国で持ち回る大会(各国30～40人が参加）の企画、運営に携わる。（第14回となる平成26年は横浜で開催） なお、平成25年4月から、放送人の会は一般社団法人となり理事となる。
2）学内役職・委員	平成19，20年度 平成21，22年度 平成23年度 平成24年度 平成25年度 平成26年度	

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
	単			
（学術論文）				
	単			
（その他）				
研究ノート 「映像と人間の認識」～人間はどのように映像をみているのか～	単	平成22年11月	奈良産業大学 情報学フォーラム紀要 情報学部創設10周年記念 P47～P57	映像は限られた枠の中の平面に描き出され、その中に時間と空間を持つという特質がある。描き出される多様な世界を、人間は生理的、心理的な働きと自らの経験により、解釈と理解が異なることを、映像の効果と演出の面から分析。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　小野　俊郎

研究分野	研究内容のキーワード
化学, 情報教育、物理学、生物物理学	精油、香料、ローレンツ変換、相対論、視覚、ロドプシン

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
修士（理学）	昭和60年3月23日	京都大学大学院　理修第3100号 修士論文題名「バソロドプシンの低温スペクトル的研究」
社団法人全国保育士養成協議会 児童福祉施設福祉サービス第三者評価調査者	平成16年7月19日	認定番号521
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
（学術論文）				
Volatile compounds with characteristic aroma of boiled sweet potato (*Ipomoea batatas L. cv* Ayamurasaki*, I. batatas L. cv* Beniazuma and *I. batatas L. cv* Simon 1)（査読付）	共	平成25年（2013）	Journal of Essential Oil Research Volume 25, Issue 6, 2013 pages 497-505	３品種のサツマイモの精油を水蒸気蒸留法で抽出した。また得られた精油の成分をGCおよびGC/MSにより同定して、比較検討した。hexadecanoic acidが3品種に共通して、最大成分またはそれに準じた成分であることなどがわかった。また、香気特性について、GC-Oを使い、AEDA分析を行った。担当部分：論文取り纏め Atsuhiko Nakamura, Toshirou Ono, Nobuo Yagi & Mitsuo Miyazawa
Comparison of Volatile Compounds with Characteristic Odor in Flowers and Leaves of Nojigiku (*Chrysanthemum japonense*)（査読付）	共	平成25年（2013）	Journal of Oleo Science Vol. 62 (2013) No. 8 pp. 631-636	ノジギクの葉と花から、それぞれ、ジエチルエーテルを用いて水蒸気蒸留法で精油を抽出した。精油をGCおよびGC/MSにより同定して、比較検討した。ともに、campherが40%程度以上存在することがわかった。またノジギクアルコールがそれに次いで存在することなどがわかった。また香気特性についても、調べた。 担当部分：論文取り纏め Atsushi Usami, Toshirou Ono, Shinsuke Marumoto, Mitsuo Miyazawa
Comparison of agitake (*Pleurotus eryngii* var. *ferulae*) volatile components with characteristic odors extracted by hydrodistillation and solvent-assisted flavor evaporation.（査読付）	共	平成26年（2014）	Journal of Oleo Science vol.63(2014) No.1,pp.83-92	アギタケの精油を水蒸気蒸留法とSAFE法で抽出した。溶媒として、ジエチルエーテルとジクロロメタンの両方を使用した。精油をGCおよびGC/MSにより同定して、比較検討した。2,3,7-trimethyl-2-octeneとMethylsuccinimideが、ヒラタケ属のキノコ精油の中にも存在することが確認できた。また、最も特徴的な香気成分が1-octen-3-olであることなどが判った。 担当部分：論文取り纏め Usami A,Ono T,Kashima Y,Nakahashi H,Marumoto S,Nosaka S,Watanabe S,Miyazawa M

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　菅　　徹

研究分野	研究内容のキーワード
学校カウンセリング　　臨床心理学	・解決志向アプローチ ・EMDR（Eye Movement Desensitization and Reprocessing：眼球運動による脱感作と再処理法）

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
奈良産業大学　　教育実習の手引き	平成22年4月1日	担当した内容は、第３章、３の教科外教育の指導（６）教育相談　Ｐ２６～２９　教育相談の定義。生徒と担任教師の関係性。学年や学校全体の有機的連携組織の構築及び活性化などについて記した。また、生徒との個別相談の三類型を示した。すなわち、「相談室登校」でのカウンセリング実践について述べたものである。そのルートは、Aルート　養護教諭から教育相談係、Bルート担任・部顧問から教育相談係、教育相談係による生徒への直接的なアプローチである。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
京都造形芸術大学 (博物館学芸員資格取得課程「教育学概論」「生涯学習概論」) (教職資格取得課程「教育相談）」「教育心理学」)	平成19年4月～7月	「構成的グループエンカウンター」の手法を使って、年度当初の堅い雰囲気の教室を変化させるため、初めての出会いを演出した。これは学生および、授業担当者としての私の自己開示をすることによって、対人コミュニケーションのあり方を体験させる実習プログラムである。毎回、授業終了後に学生にコメントを書いてもらい、次回授業の冒頭に疑問点に答え、各種、要望を取り入れるようにしている。上記、「構成的グループエンカウンター」を使用して実習をするために、進め方のテキストを作成し、このテキストに即して、８０分の授業を構成した。また、２コマ連続でカウンセリングの基礎とそれに基づいたロールプレーを実施した。M・セリグマン博士の「楽観度テスト」を実施し、「うつ病」への対策として、論理療法のロールプレーを実施した。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
実務家教員についての特記事項	平成15・16・17・18年	高等学校に在勤中、積極的に取り組んだことは地歴公民の各教科で夏休みの課題である。「世界史新聞」「日本史新聞」という名称で人物をキーワードに、①人物の生涯、②歴史的背景、③当時の世の中に与えた影響、④今日の社会での意味等を新聞記者として新聞紙面を作るものである。コマーシャルや４コマ漫画は時代を反映するので重視した。２学期以後の授業では授業に取り組む姿勢が違ってくるのが感じられた。また、クラスごとに冊子にして、配布した。翌年には前年の、反省に基づいて、質の高い新聞が期待できる。この取り組みによって、歴史の、基本的な事項を理解し説明できるようになった生徒が多くなった。また、決まった字数で文章を作ることでまとめる力をつけた。
5　その他		
新入生への入学前教育　構成的グループエンカウンター「～友だちづきあいと自己発見～」	2011年3月	新入学生、約百名に対して構成的グループエンカウンターの手法を使って、出会いの演出を行った。百人規模の仲間作り実習は工夫を必要とするが、新入生からは、「入学前に、この容易な体験ができてよかった」等、好評であった。

奈良産業大学入試課主催　高等学校対象出張講座	平成23年5月1日	奈良県立王寺工業高等学校の人権教育の一環として、６００名全学の生徒対象にして、「仲間づくり」の人権学習教育を目指している。是非、協力してほしいとの連絡が入った。そこで、筆者はカウンセリングの手法を使った。「自分のことが好きですか」という切り口で講演会を行うことを決めた。当日、体育館の座っている生徒の間に入り、「自分のことが好きだ」と手を挙げた生徒にマイクを向けた。「自分のどんなところが好きですか？」というものである。人前で、自己開示できることが大事である。次いで、先生方にも同じ問いを行った。約１時間の講演と実習を終了した。自分のことを好ましく思うことができないと、「自己理解」と「他者理解」は進まない。その意味で、仲間作りを目指す意図の出発点をになったことになる。これ以後、担任の先生方がどのように自分のクラスで展開されていくか楽しみである。
奈良産業大学入試課主催　高等学校対象出張講座	平成24年10月1日	奈良県立西和清陵高等学校の「総合的な学習の時間」一環として、１・２年生３００名の生徒対象に、「仲間づくり」の実習を行った。筆者は構成的グループエンカウンターの手法を使って、二人組でまず、①「出会いのあいさつ」をおこなった。次に、②好きな季節は（春夏秋冬）？　③クラス別ごとに誕生日順に並ぶ。④「二人一組で，お互いに知りたいことを聞く」⑤「四人組で、他者紹介」 ⑥「振り返り用紙の記入」 をおこなった。このことを通して、 「自己理解」と「他者理解」を促進するすることを目指している。今後、担任の先生方が、どのように自分のクラスを作られるかが楽しみである。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
臨床心理士（№１２９５５） 高等学校　地歴・公民専修免許状 中学校　社会専修免許状	平成17年4月1日 平成8年4月1日 平成8年4月1日	（財）日本臨床心理士資格認定協会の認定をうけている心理専門職 奈良県教育委員会 奈良県教育委員会
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
４　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文）				
「教育相談体制の整備と相談室登校生への支援」 －高等学校における６年間の試み－	単著	平成20年11月	京都造形芸術大学　紀要 ２００７　ＧＥＮＥＳＩＳ　１２	高等学校教員時に学内に教育相談室を作った。教室に入ることができない生徒を対象に相談室を、教室に戻るための待機場所として、活用し、多くの成果を上げることができた。また、このような活動は、学校の構成員の協力がなければ達成できない。このために、学内での定期教育相談研修会を実施した。さらに、保護者対象の研修会も実施して、相談室の活性化を図りながら、学校での教育相談活動の枠組みを作ることができた。その6年間の活動をまとめたものである。
小規模な大学における 学生支援の試み -奈良産業大学学生相談室（平成21年）の活動から-	単著	平成22年11月	奈良産業大学紀要 第２６集	本学での学生相談初年度の活動を振り返って、その内容を、詳らかにした。本学では、相談室の報告書がないため、紀要に執筆することで、毎年の活動内容を記録していくことにした。
小規模な大学における 学生支援の試み（２） -奈良産業大学学生相談室（平成22年）の活動から-	単著	平成23年１２月	奈良産業大学紀要 第２７集	最低限のこととして、個別の相談活動は初年度より記録していく方針であった。そのほか、教職員向けの学生相談研修会を定期的に行うことにした。この頃から、日本学生支援機構（JASSO）の関西地区での相談活動の委員として他大学の上に歩調を合わせながら、本学の活動を，地道なものにしていこうと考えた。
独立行政法人日本学生支援機構　平成２１年度近畿地区メンタルヘルス研究協議会報告書	共著	平成22年３月	独立行政法人日本学生支援機構 平成２１年度近畿地区メンタルヘルス研究協議会 第４分科会「発達障害学生への支援」	この年より3年間、メンタルヘルス研究協議会の委員として、活動した内容を報告書として提出した。初年度は、多喜先生と第４分科会を担当した。「発達障害学生の支援」の内容で、本学の状況を報告し、他大学の状況につても、実践を紹介してもらった。
独立行政法人日本学生支援機構　平成22年度近畿地区メンタルヘルス研究協議会報告書	共著	平成23年３月	独立行政法人日本学生支援機構 平成22年度近畿地区メンタルヘルス研究協議会 第４分科会「発達障害学生への支援」	この年度は、プール学院大学の中村健氏と前年と同じ第４分科会、「発達障害学生の支援」を担当した。プール学院大学の学生支援GP（2007～2009年度）を中心に、論議が活発に行われた。中でも、ユニバーサル支援の内容として「個別の教育支援計画」を軸に、入試から卒業まで切れ目なく学生支援を行うことができる大学内部の理解について、多数の意見が出された。
独立行政法人日本学生支援機構　平成23年度近畿地区メンタルヘルス研究協議会報告書	共著	平成24年３月	独立行政法人日本学生支援機構 平成２３年度近畿地区メンタルヘルス研究協議会 第３分科会「『チーム援助』による学生相談のすすめ方」	前年と同じ、中村健氏と「チーム援助」による学生相談のすすめ方について、全ての学生を支援することが、障害学生支援になると考えられる。とりわけ、「授業のユニバーサルデザイン」につて、「教職員の意識改革」について、活発に意見が出てきたので、どの大学も大同小異であることがわかった。学生相談担当者が教職員の理解を得られるような活をしていくことが望まれる。
奈良産業大学 学生相談だより 「三室山」№1-11	単著	平成２３年５月１４日～２月１０日	奈良産業大学学生支援センター　学生相談室 「三室山」№1-11(現在に至る)	不定期発行であるが、定期教育相談研修会や、その際の、出席者の参加しての感想等を掲載した。この活動によって、教職員が、相談担当者に何を望んでいるかが、よくわかった。相談室を密室にしないために、今後も続けていく努力が必要である。A4版裏表で、三号キャンパスの全教職員に配布した。

小規模な大学における 学生支援の試み（２） -奈良産業大学学生相談室 （平成23年）の活動から-	単著	平成２4年１２月	奈良産業大学紀要 第２８集	学生相談に関する、教職員への研修会を続けていく必要があると考えられる。地道ではあるが、続けることによって相談室と学生と教職員が少しずつつながって来たことを実感できるようになった。特に、「解決志向アプローチ」に関しての関心が高かった。今後も、そうだんしつで、行われている方法論を知ってもらう努力をしていくことが大事であると思われる。
小規模大学における 学生支援の試み -奈良産業大学学生相談室3年間（2009～2011）の活動から-	単著	平成２４年２月	奈良産業大学情報学 フォーラム紀要 第８巻	２００９～２０１１年について、学生相談室の活動を数量的に分析したものである。学生相談の3階層モデル（日本学生支援機構）を使って、機能評価を試みた。今後の問題点として、①「学生援助シート」の実用化ができていない。②障害学生に対する、就労支援が不十分である。外部機関との連携を図る必要がある。③リメディアル教育の推進と自主勉強赤井をさらに充実する必要がある。
小規模な大学における 学生支援の試み（３） -奈良産業大学学生相談室 （平成23年）の活動から-	単著	平成２４年１２月	奈良産業大学紀要 第２９集	個別の学生相談における、具体的な取組として、「学生相談トリアージ」と「学生援助シート」の作成と運用について取り組んだ。その内容が記された。また、リメディアル教育も本学の学生相談の大きな柱である。年度の終わりには、総括が行われ、次年度につなげることができるようにするための方策を記した。
小規模な大学における 学生支援の試み（４） -奈良産業大学学生相談室 （平成24年）の活動から-	単著	平成２５年１２月	奈良産業大学紀要 第３０集	「学生援助シート」の作成を皮切りに、全学的な学生支援組織の構築ができてきた。これは、全学生を対象にした、ユニバーサルスタンダードを目指す支援である。「気になる学生」に関する情報収集と集約系統図ができた。このことによって、「チーム支援会議（ケース会議･事例研究会）」が個別に実施されることになった。
小規模な大学における 学生支援の試み（５） -奈良産業大学学生相談室 （平成25年）の活動から-	単著	平成２６年９月	奈良学園大学紀要 第１集	奈良学園大学初年度、新たに、人間教育学部、医療保健学部が発足した。これにより、教職員に対する学生相談研修会の対象者が増えた。しかし、参加者は今ひとつである。こんごは、研修会の内容について、もっと研究する必要がある。
（その他）				
困りごとはありませんか？	単著	平成２２年３月	NEWSLETTER　№.８	短い文章で、学生向きに、困ったことがあったら相談するという方法は、一度試したらどうですかという呼びかけを行った。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　阪元　勇輝

研究分野	研究内容のキーワード
複合化学、環境学、総合工学	環境関連化学、環境影響評価・環境政策、環境技術・環境材料、地球・資源システム工学、エネルギー学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）マルチメディア機器を利用した講義	平成17年4月～現在に至る	奈良文化女子短期大学および京都文教大学において、学生に対して、より環境問題の理解を深めるため、視覚効果（画像･映像）を利用して、学習効果を高めた。
2）プレゼンテーションの導入と対外的発表	平成19年4月～平成22年3月	奈良文化女子短期大学の子供学ゼミにて、子供に対する環境教育として、プレゼンテーションソフトを用いて、学生に環境電子絵本を作成させ、また保育園や幼稚園児に対してプレゼンテーションさせ、視覚効果を利用し、子供に対する学習効果を高めた。
2　作成した教科書，教材		
1）環境関連講義用教科書	平成17年4月～現在に至る	奈良文化女子短期大学および京都文教大学において、環境関連の講義用教科書を作成した。環境関連の教科書は一般的に専門性が高いため、より平易な教科書を各関係テーマに応じて作成した。環境政策論、環境法規、地域環境論、他
2）環境関連講義用補助教材	平成17年4月～現在に至る	奈良文化女子短期大学および京都文教大学において、環境関連の補助教材を作成した。特に環境問題に関して、視覚効果（環境破壊の画像・ビデオ等）を利用し、より学習効果を高めるための補助教材を作成した。リサイクルと環境、環境保護と市民生活、他
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良文化女子短期大学学生による授業アンケート結果における評価	平成17年4月～平成22年3月	奈良文化女子短期大学において毎年実施されている学生によると、担当の講義全般について、総合評価として４点以上（５点満点）の評価を得ている。
2）京都文教大学学生による授業アンケート結果における評価	平成23年9月～現在に至る	京都文教大学において毎年実施されている学生によると、担当の「環境の科学」について、総合評価として４点（５点満点）の評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）事業者、団体および地方行政職員・議員に対する環境関連のセミナーおよび講演	平成17年4月～現在に至る	多くの環境関連のセミナーおよび講演を行っている。詳細は、（公的招待講演会・セミナー発表等）を参照。
2）関西大学客員研究員（先端科学技術推進機構）	平成20年4月～平成22年3月	客員研究員として卒業研究および修士研究に従事し、卒業論文および修士論文の作成に寄与した。
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）エネルギー管理士（経済産業省）	平成6年5月	エネルギーシステム全てにおいて管理が可能あることを認められている。

２）環境カウンセラー（環境省）	平成11年4月	環境全般に関してカウンセリング可能あることを認められている。
３）国際環境アドバイザー（経済産業省）	平成11年10月	国際的に環境に関するアドバイスが可能であることを認められている。
４）新エネルギー有識者（NEDO:新エネルギー・産業技術総合開発機構）	平成12年3月	新エネルギーに関する知見を有していることを公式的に認められている。
５）博士（工学）：化学工学専攻（プロセスシステム工学）	平成12年9月	ライフサイクルアナリシスによる省エネルギーおよび炭酸ガス削減技術の評価に関して論文として纏めた。
他、多数）危険物取扱者（甲種）、環境マネジメントシステムEA21審査（環境省）、環境社会検定（eco検定）、他		左記のように多様な環境関連の資格を有している。
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）奈良県庁　技術アドバイザー	平成12年12月～平成24年3月	奈良県商工労働部の技術アドバイザーとして奈良県内の企業に対して、新しい技術の導入の推進を目的にアドバイスを行った。
２）NPO法人奈良県環境カウンセラー協会　理事	平成13年3月～現在に至る	環境省環境カウンセラーの奈良県の協会を設立し、理事として現在まで運営に従事している。
３）奈良県庁　環境アドバイザー	平成13年3月～現在に至る	奈良県環境政策課の環境アドバイザーとして奈良県内の企業に対して環境保全技術、省エネルギー技術および新エネルギー技術の指導を行っている。
４）奈良県庁　経営革新アドバイザー	平成13年5月～現在に至る	奈良県商法労働部の経営革新アドバイザーとして奈良県内の企業に対して主として新しいビジネスモデルに対する評価およびアドバイスを行っている。
５）（社）省エネルギーセンター　エネルギー使用合理化専門員	平成15年10月～現在に至る	様々な規模および業種の企業に対して、省エネルギーを推進するために評価および指導を行っている。
６）経済産業省（他3省合同：環境省、農林水産省および国土交通省）カーボンフットプリント試行制度評価パネル委員	平成21年4月～平成24年3月	4省合同の国家プロジェクトである我が国のC02削減プロジェクトの検証制度の評価員として制度の枠組みおよび評価基準の策定に努めた。
７）環境省 環境カウンセラー選考委員会委員	平成23年4月～平成27年3月	環境省環境カウンセラー制度における環境カウンセラーの選考を行った。
８）奈良県庁　節電協議会委員	平成23年7月～現在に至る	奈良県全体の節電を推進するために学識経験者として県の節電政策の策定や普及に努めている。
９）奈良県庁　エネルギー利活用研究会委員	平成23年12月～現在に至る	奈良県のエネルギー利活用を目的とし、学識経験者として、特に再生可能エネルギー導入の推進策を研究し策定に努めている。
１０）（社）産業環境管理協会　カーボンフットプリントプログラム制度評価委員	平成24年4月～現在に至る	国家プロジェクト制度が終了し、制度が民間移行となるに伴い当該制度の評価委員として制度の策定および検証評価委員を務めている。
１１）奈良県庁　エネルギービジョン策定委員会　委員	平成26年4月～現在に至る	奈良県のエネルギービジョンの策定を目的とし、学識経験者として、奈良県全体のエネルギービジョンの策定に努めている。
４　その他		
１）特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 廃棄物循環利用と適正処理のための手引書～ゼロエミッションをめざして～	監修および編集	平成18年3月	奈良県庁：生活環境部：環境政策課廃棄物委対策課,奈良県庁,pp93	奈良県内の企業（事業者）を対象とし、配布することを目的に、様々な廃棄物の循環利用と適正処理のために、様々な廃棄物の処理方法の実例および廃棄物処理法・奈良県の条例等に関して解説した。
（学術論文）				
1. Life Cycle Assessment of a Solid-Liquid Separating Unit - Estimation of the CO2 emission for an Inclined Solid-Liquid Separating Unit -	単著	平成17年	Study Reports of Narabunka Women's College, No.36, pp.25-32	傾斜型固・液分離装置に関してライフサイクルアセスメントを行い、その各原材料およびユーティリティのCO2排出量を推算した。その結果、ステンレススチール製の形鋼の使用によるCO2排出量が最も多いことが明らかとなった。
2. Life Cycle Inventory Assessment of a Wet-Biomass Waste Treatment Plant （査読付）	共著（第3著者）	平成18年	The 7th International Conference on EcoBalance, P-45 (4pages)	家畜糞尿の処理プラントに関して、バイオマスエネルギーを有効するためにガスエンジンを利用したエネルギー回収システムに対してのライフサイクルアセスメントを行い、その性能を評価した。その結果、このシステムは、エネルギー発生システムおよびCO2 リサイクルシステムおよびとしても有効なシステムであることが明らかとなった。
3. Life Cycle Inventory Assessment of a Livestock Waste Treatment Plant （査読付）	共著（第3著者）	平成18年	環境科学会, Vol. 19, No. 6, pp517-526	家畜糞尿の処理プラントに関して、性能向上のために新たなシステム（燃料電池）を付加し、ライフサイクルアセスメントを行い、その性能を評価した。その結果、現状のシステムより、CO2 リサイクルシステムおよびエネルギー発生システムとしても極めて大きく性能向上することが明らかとなった。
4. Measurement of Thermophysical Properties by Arbitrary Heating Method - Development of Pressure and Corrosion Resistance Measurement Unit -	単著	平成19年	Study Reports of Narabunka Women's College, No.38, pp.55-66	高圧・腐食性を有する様々なエネルギー媒体の熱力学的物性値を測定するために耐圧・耐腐食性測定装置を設計・開発し、その評価を行った。その結果、耐圧性・耐腐食性は問題なく、測定装置として実用化できることが明らかとなった。
5. Measurement of Thermophysical Properties of Thermal Energy Storage System - Measurement of CaCl2-NH3 system by Arbitrary Heating Method -	単著	平成20年	Study Reports of Narabunka Women's College, No.39, pp.39-48	任意加熱法を用いた耐高圧・腐食性熱力学的物性値測定装置による蓄熱システム(CaCl2-n・NH3 system)の熱力学的物性を測定した。その結果、熱伝導度は、内部圧力の大きく依存するが、熱拡散係数は、ほぼ一定であることが明らかとなった。
6. Evaluation of Cost Index for Life Cycle Engineering - Cost index of an Inclined Solid-Liquid Separating Unit -	単著	平成21年	Study Reports of Narabunka Women's College, No.40, pp.71-81	ライフサイクルエンジニアリング(LCE)の概念を用いて、その1つのカテゴリーであるコストインデックスに関して、傾斜型固・液分離装置のコストインデックスを推算した。その結果、製品性能、コストおよび環境負荷の3者によるLCEモデルを構築することができた。
7. A Life Cycle Engineering of a Waste Water Treatment Unit （査読付）	単著	平成21年	The Nineth International Conference on Ecomaterials, pp.123-124	ライフサイクルエンジニアリング(LCE)の一例として、排水処理装置に関して、環境負荷、コストおよび性能との関係を評価すべく、本論文では、環境負荷（CO2排出量）とコストインデックス（コスト指標）の関係を推算し、評価した。その結果、環境負荷とコストインデックスには、非常に強い創刊関係があることが明らかとなった。

8. Numerical Simulation 4of Thermal Energy Storage Unit Using CaCl2-NH3 system	単著	平成22年	The Bulletin of Nara Sangyo University, Vol.26, pp.11-20	CaCl2-NH3 System を用いた蓄熱装置の反応特性と熱物性値とシミュレーションモデルにより得られた結果を比較した。その結果、最大誤差は、5%程度であり、当該シミュレーションモデルは、妥当なモデルであることが明らかとなった。
9. A Strategy of the Bio-mass Utilization in a Local Government -An Application of Lumber from Thinning -	単著	平成23年	Annual Report of the Research Institute of Public Affairs Nara Sangyo University, Vol.1, pp.115-120	奈良県の地方行政において、間伐材（廃棄物）の有効利用を目的に、あるリサイクルシステムを提案し、その検討を行った。その結果、有効成分が抽出できることが明らかとなり、また、その残渣をバイオマスエネルギーとして有効利用できるシステムあることが明らかとなった。
10. Measurement of Thermophysical Properties of Thermal Storage System - Effect of Heat Transfer Media -	単著	平成23年	The Bulletin of Nara Sangyo University, Vol.26, pp.73-78	CaCl2-NH3 System を用いた蓄熱システムに関して、熱媒体を添加した際の熱物性値（有効熱伝導度、熱拡散係数）の変化について測定を行った。その結果、熱媒体を添加した場合、その熱物性値は向上することが明らかとなり、また充填密度が大きく影響している事が分かった。
11. Feasibility Study of a Biomass Utilization in Local Village - Cost Simulation of Extraction System of Wood Oil from Wood Thinnings -	単著	平成24年	Annual Report of the Research Institute of Public Affairs Nara Sangyo University, Vol.2, pp.79-84	奈良県の地方行政において、間伐材（廃棄物）の有効利用を目的に、あるリサイクルシステムを提案し、その費用対効果の検討を行った。その結果、有効成分の抽出量にも依存するが、平均的な収量が得られれば、おおよそ約10年投資に対して回収できることが明らかとなった。
12. Life Cycle Assessment of Biodegradable Plastics（査読付）	単著	平成24年	Journal of Shanghai Jiaotong University. (Science), 17(3): pp.327-329	生分解性プラスチックを利用して製造された食品トレイと石油を原料として製造された食品トレイにおいて、その環境負荷としてCO2排出量およびエネルギー消費原単位をライフサイクルアセスメント評価法を利用して評価した。その結果、バイオマス由来で製造された食品トレイが石油を原料として製造された食品トレイよりも優位であることが明らかとなった。
13. Carbon Footprint of Recycling Service in Waste Treatment（査読付）	共著（第1著者）	平成24年	International Conference on EcoBalance2012,P-121 (3 pages)	廃棄物処理サービスとして空き缶（飲料鉄缶・アルミ缶および一斗缶）のリサイクル処理に関して、再生地金製造を目的としたリサイクル処理を一次データを用いてカーボンフットプリントを算出した。その結果、アルミ缶によるリサイクル用アルミ塊が最も数値が高く、次いで、鉄缶によるリサイクル用鉄塊、一斗缶によるリサイクル用鉄鉄の順であることが明らかとなり、また収集・運搬による値がすべての金属塊において最も大きいことが明らかとなった。
14. Utilization of Forest Thinning Residue as Biomass Resource（査読付）	単著	平成25年	The 11TH International Conference on Ecomaterials(ICEM11), pp.130-133	地方の森林山村において、隣地残材となっている森林間伐材の有効利用および廃棄物処理を目的とし、間伐材をバイオマス資源としてエッセンシャルオイルを抽出し、その抽出残渣をさらにバイオ燃料とするシステムを提案し、パイロットスケールにて実験を行い、そのフュージビリティスタディ（事業採算性）を行った。その結果、採算性は間伐材のコストに大きく依存することが明らかとなり、また間伐材のコストによっては、採算性が大きく見込める可能性があることが明らかとなった。
15. Performance of Thermal Energy Storage Unit Using Solid Ammoniated Salt (CaCl2-NH3 System)（査読付）	共著（第1著者）	平成26年	Natural Resources, Vol.5, pp.337-342	水素キャリアーであり、かつエネルギー貯蔵システムであるCaCl2-NH3 System を用いたエネルギーシステムに関して、プロトタイプの蓄熱装置を試作し、また熱媒体を利用した際の反応特性に関しての研究を行った。その結果、熱媒体を利用すると反応特性が向上することが明らかとり、また熱媒体の重量別の効果が明かとなった。

16. Measurement of Thermophysical Property of Energy Storage System (CaCl2･NH3 System) （査読付）	共著 （第1著者）	平成26年	Natural Resources, Vol.5, pp.687-697	水素キャリアーであり、かつエネルギー貯蔵システムであるCaCl2-NH3 System を用いたエネルギーシステムに関して、このシステムの熱力学的物性値（熱伝導度、熱拡散係数および熱容量）を測定するために任意加熱法を用いた耐圧・耐腐食性測定装置を設計・開発し、その評価を行った。その結果、測定装置として実用化できることが明らかとなり、上記の熱力学的物性値を測定でき、測定（実用）温度範囲内において熱伝導度および熱拡散係数は、ほぼ一定であることが明らかとなった。
（その他）				
（学会発表）				
1. Life Cycle Inventory Assessment of a Wet-Biomass Waste Treatment Plant	共同	平成18年11月	Proceedings of The 7th International Conference on EcoBalance, Nov. 14 - 16, Tsukuba, Japan	家畜糞尿の処理プラントに関して、バイオマスエネルギーを有効するためにガスエンジンを利用したエネルギー回収システムに対してのライフサイクルアセスメントを行い、その性能を評価した。その結果、このシステムは、エネルギー発生システムおよびCO2 リサイクルシステムおよびとしても有効なシステムであることが明らかとなった。
2. A Life Cycle Engineering of a Waste Water Treatment Unit	単	平成21年11月	Proceeding of Nineth International Conference on Ecomaterials(ICEM9),Nov.24-27, Kyoto, Japan	ライフサイクルエンジニアリング(LCE)の一例として、排水処理装置に関して、環境負荷、コストおよび性能との関係を評価すべく、本論文では、環境負荷（CO2排出量）とコストインデックス（コスト指標）の関係を推算し、評価した。その結果、環境負荷とコストインデックスには、非常に強い創刊関係があることが明らかとなった。
3. Life Cycle Assessment of Biodegradable Plastics	単	平成23年11月	Proceeding of Tenth International Conference on Ecomaterials(ICEM10),Nov.21-25, Shanghai, China	生分解性プラスチックを利用して製造された食品トレイと石油を原料として製造された食品トレイにおいて、その環境負荷としてCO2排出量およびエネルギー消費原単位をライフサイクルアセスメント評価法を利用して評価した。その結果、バイオマス由来で製造された食品トレイが石油を原料として製造された食品トレイよりも優位であることが明らかとなった。
4. Carbon Footprint of Recycling Service in Waste Treatment - Recycling Service of Empty Beverage Can and Container -	共同 （発表者本人）	平成24年11月	Proceeding of International Conference on EcoBalance2012,Nov.21-23, Yokohama, Japan	廃棄物処理サービスとしてリサイクル用の空き缶（飲料鉄缶・アルミ缶および一斗缶）のリサイクル処理に関して、一次データを用いてのカーボンフットプリントを算出した。その結果、アルミ缶によるリサイクル用アルミ塊が最も数値が高く、次いで、鉄缶によるリサイクル用鉄塊、一斗缶によるリサイクル用鉄鉄の順であることが明らかとなった。
5. Utilization of Forest Thinning Residue as Biomass Resource （以上、国際学会）	単	平成25年11月	Proceeding of Eleventh International Conference on Ecomaterials(ICEM11),Nov.11-13, Hanoi, Vietnam	日本の地方の森林山村において、隣地残材となっている森林間伐材の有効利用および廃棄物処理を目的とし、間伐材をバイオマス資源としてエッセンシャルオイルを抽出し、その抽出残渣をさらにバイオ燃料とするシステムを提案し、そのフュージビリティスタディを行った。その結果、採算性は間伐材のコストに依存し、また間伐材のコストによっては、採算性が見込める可能性があることが明らかとなった。
（国内学会） 1. 地球温暖化問題と日本の環境行政の動向（Global Warming Issue and Environmental Strategies of Japanese Government）	単	平成18年3月	Proceedings：第5回奈良女子大学共生科学研究センターシンポジウム（地球温暖化と都市化－緑は環境を緩和するのか？－），pp.128-129, 2006年3月4日，奈良女子大学，奈良	現在の日本国政府の地球温暖化対策に関する主要な施策・政策に関して解説し、また、これらの政策の中で、環境税や環境マネジメントシステムの重要性についても言及し、現在の施策・政策の現状と課題および今後の方向性について考察した。

2. 森林保全と環境政策 （以上、国内学会）	単	平成18年12月	第10回紀伊半島研究会シンポジウム（今後の紀伊半島研究会を考える －山の上から海まで、そして後継者養成－），奈良女子大学共生科学研究センター，紀伊半島研究会，2006年12月24日，奈良女子大学，奈良	現在の日本国政府の地球温暖化対策のための主要な森林施策・政策および奈良県の森林施策・政策に関して解説し、それらの施策・政策の現状と課題および今後の方向性および比較について考察した。
（公的招待講演会・セミナー発表等）				
1. 事務所・家庭で出来る地球温暖化防止策Ⅰ	単	平成17年7月	奈良県庁委託，奈良県環境アドバイザー事業，大宮通り商工振興会研修会， 奈良	企業（事業者）および一般家庭の方々に対して、地球温暖化のメカニズムおよびその影響に関して解説した。
2. エコアクション21（EA21）認証・登録制度について	単	平成17年7月	奈良県工業技術センター主催，奈良県技術フォーラム，奈良県工業技術センター，奈良	企業（事業者）に対して、環境省策定の環境マネジメントシステムであるエコアクション21（EA21）認証・登録制度に関して解説した。
3. 事務所・家庭で出来る地球温暖化防止策Ⅱ	単	平成17年8月	奈良県庁委託，奈良県環境アドバイザー事業，大宮通り商工振興会研修会，奈良ロイヤルホテル，奈良	企業（事業者）および一般家庭の方々に対して、極めて基本的で取り組みやすいな地球温暖化対策に関して解説した。
4. LCC（ライフサイクルコスト）評価方法の構築	単	平成17年8月	奈良県中小企業支援センター委託，中小企業支援事業，東洋スクリーン，奈良	企業（事業者）に対して、LCC（ライフサイクルコスト）評価方法の構築およびライフサイクルエンジニアリング等の製品の研究・開発および設計に関する新しい評価方法に関して解説した。
5. 環境問題に対する知識の共有化と課題解決-水質汚濁に関して-	単	平成17年10月	奈良県庁委託，奈良県環境アドバイザー事業，奈良県昭和工業団地研修会，奈良	奈良県昭和工業団地の企業（事業者）に対して、工業団地としての環境問題、特に水質汚濁に関しての知識の共有および課題解決策に関して解説した。
6. 環境省エコアクション21（EA21）説明会-EA21認証・登録制度について-	単	平成17年11月	NPO法人奈良環境カウンセラー協会主催，環境省近畿地方環境事務所後援事業，奈良県中小企業会館，奈良	企業（事業者）に対して、環境省策定の環境マネジメントシステムであるエコアクション21（EA21）認証・登録制度に関して解説した。
7. ～京都議定書発効から1年～地球温暖化の防止 -古都・奈良からの発信- パネラー	単	平成18年2月	環境省きんき環境館,奈良環境ネットワーク主催事業，なら環境パートナーシップ交流大会，奈良市生涯学習センター，奈良	企業（事業者）および市民の双方の立場から、地球温暖化対に対する取り組み方法やわが国の環境政策論に関しての基本的な解説した。
8. 環境経営が企業を変える-環境関連法の登録と遵守-	単	平成19年3月	NPO法人奈良環境カウンセラー協会主催，環境省近畿地方環境事務所後援事業，2007年3月15日，奈良県中小企業会館，奈良	企業（事業者）を対象とし、非常に広範囲にわたる環境関連法に関して、必修である法を解説し、具体的な事例をあげ、遵守すべき法とその遵守方法に関して解説した。
9. 最近の環境問題 -環境経営の必要性-：環境と経営講演会	単	平成19年12月	環境省主催，NPO法人奈良環境カウンセラー協会後援，2007年12月3日，奈良県中小企業会館，奈良	企業（事業者）および地方行政の環境関連担当者を対象とし、現状の逼迫した環境問題について解説し、今後どの様に企業および地方行政のマネジメントに環境経営が必要であるかを解説した。
10. 「環境問題を知る」シリーズ（全3回：登美ヶ丘キャンパス）：第一回 Lifestyles of Health and Sustainability（LOHAS：ロハス）とは － 健康と環境に配慮したライフスタイル －	単	平成20年7月	奈良文化女子短期大学主催，2008年7月26日，奈良文化女子短期大学（富美ヶ丘キャンパス）	アメリカ発祥の「健康や環境にやさしいライフスタイル（LOHAS：ロハス）」と言う考え方に関して、その意味やどの様なライフスタイルなのかについて概説した。

11. 「環境問題を知る」シリーズ：登美ヶ丘キャンパス：第二回　新エネルギーとは － 脱化石燃料を目指して －	単	平成20年10月	奈良文化女子短期大学主催，2008年10月18日，奈良文化女子短期大学（富美ヶ丘キャンパス）	「新エネルギー」に関して、それはどの様なエネルギーなのか、そのメリットやデメリットや脱化石燃料にどの程度貢献できるのか等、最近の最新技術・トピックスについて概説した。
12. 「環境問題を知る」シリーズ：高田キャンパス：第一回　新エネルギーとは － 脱化石燃料を目指して －	単	平成20年11月	奈良文化女子短期大学主催，2008年11月1日，奈良文化女子短期大学（高田キャンパス）	「新エネルギー」に関して、それはどの様なエネルギーなのか、そのメリットやデメリットや脱化石燃料にどの程度貢献できるのか等、最近の最新技術・トピックスについて概説した。
13. 「地球温暖化とライフサイクルアセスメント」	単	平成20年11月	奈良県庁委託，奈良県環境アドバイザー事業，ユーテック株式会社井戸野研究所，奈良(11月17日)	近年の地球温暖化の状況および原因について解説し、その対策に繋がる「ライフサイクルアセスメント」とは、どの様な対策手法か、どの様な有効性があるのかについて解説した。
14. 「省エネルギーと地球温暖化」	単	平成20年11月	奈良市・関西電力連携住宅省エネルギー推進事業(NEDO助成事業)，　なら100年会館，奈良，(11月29日)	住宅の省エネルギー推進事業に参画された奈良市民に対して、地球温暖化とエネルギー消費の関係や奈良市や奈良県のエネルギー状況について概説し、さらに簡単で効果のある省エネルギー手法を解説した。
15. 「環境問題を知る」シリーズ：登美ヶ丘キャンパス：第三回　化学物質と食の安全	単	平成21年1月	奈良文化女子短期大学主催，2009年1月17日，奈良文化女子短期大学（富美ヶ丘キャンパス）	最近、化学物質が身近に氾濫しており、その中で特に食の安全が大きな問題となっている。様々な化学物質の危険性に関して、食を通じて概説する。
16. 「環境問題を知る」シリーズ：高田キャンパス：第二回　化学物質と食の安全	単	平成21年1月	奈良文化女子短期大学主催，2009年1月24日，奈良文化女子短期大学（高田キャンパス）	最近、化学物質が身近に氾濫しており、その中で特に食の安全が大きな問題となっている。様々な化学物質の危険性に関して、食を通じて概説する。
17. 「低炭素社会 の実現に向けた電気エネルギー利用の合理化と関係法 令」	単	平成21年2月	奈良県電気協会主催，「平成20年度電気効率使用講習会」，奈良県中小企業会館4階大会議室，奈良，(2月17日)	省エネルギー法および地球温暖化防止法が改正され、より厳格化され、罰則を伴うことになった。また、電気エネルギーを効率良く利用し、省エネルギーにつなげるかを解説した。
18. 「地球環境と気候変動 － 地球温暖化と省エネ －」	単	平成21年12月	（財）奈良市生涯学習財団　富雄公民館 主催，「富雄環境講座」，富雄公民館，奈良市，（12月3日）	近年の大規模な気候変動に関して、地球温暖化との関係やその被害の重大性について解説し、今後のどの様に推移するか、またそれを防止する策としての省エネルギーの重要性に関して解説した。
19. 「省エネルギ ーと環境問題　－ 省エネと地球温暖化 －	単	平成21年12月	奈良リハビリテーション専門学校 学生自治会 主催，「環境セミナー」，生駒市，（12月3日）	20世紀の人類によるエネルギー多消費型の現代社会が、どの様に地球温暖化をもたらしたかを解説し、身近に取り組むことができて、効果が大きい省エネルギー手法を解説した。
20. 「CO225%削減生活の評価」	単	平成22年2月	朝日新聞，実況見聞 あれこれリポート,大阪・京都・奈良 ，（2月1日朝刊）	CO225%削減生活に実際に挑戦している記者の生活に関して、その節電方法やライフスタイルに関して、評価を行いまたさらなる削減方法を解説した。
21. 「化学物質と食の安全 － 化学物質の安全性とは － 」	単	平成22年2月	（財）奈良市生涯学習財団　富雄公民館 主催，「富雄環境講座」，富雄公民館，奈良市，（2月18日）	近年、化学物質が身近に氾濫しており、その中で特に食の安全が大きな問題となっている。様々な食品による健康被害や化学物質の危険性に関して、食を通じて概説した。
22. 低炭素社会に向けた社会動向と行政の役割	単	平成22年2月	奈良市市会議員団　主催，「環協講座」，奈良市市議会会議室，奈良市，（2月25日）	奈良市の市議会議員に対して、低炭素化に向けた国際的な動向について概説し、我が国の政策の現状および地方行政の役割やあり方について解説した。
23. カーボンフットプリント（CFP）制度試行事業について － 事業者の主な取組内容 －	単	平成22年3月	NPO法人　大阪環協カウンセラー協会　主催，H21年度第三回OECA普及啓発セミナー，piaNPO6F会議室，大阪市，（3月6日）	国家プロジェクトであるカーボンフットプリント（CFP）制度試行事業について、その制度の概要および様々な事業者の主なカーボン排出量の算定方法やカーボン排出量削減の取組内容について解説した。

24. 地球温暖化問題 － 地球温暖化と省エネルギー －	単	平成23年7月	奈良県，王寺町主催，奈良産業大学共催，「平成23年度りーべるカレッジ」第Ⅱシリーズ「生活を科学する」，王寺町地域交流センター，王寺町，（7月16日）	昨今の大規模な気候変動は、化石燃料の大量消費による「地球温暖化」に少なからず起因していることが明らかとなってきていつ。地球温暖化の状況と地球温暖化を少しでも抑制するための身近な省エネルギーについて概説した。
25. 3Eのトリレンマ －「3つのE」は、これからどうなるのでしょう －	単	平成23年11月	奈良産業大学主催，王寺町共催，2011奈良産業大学シンポジウム「これからのエネルギーと私達の暮らし」パネルディスカッション，王寺町地域交流センター，王寺町，（11月26日）	我が国の3つのE（環境・エネルギー・経済）の現状について概説し、この3つのEのトリレンマの状態にあること、また、今後の我が国のこの3つのEのあり方や方向性について討議した。
26. 「我が国の持続可能な発展とは？」 －「3Eのトリレンマ」－	単	平成24年4月	NPO法人　奈良環境カウンセラー協会主催，公開講座，なら環境市民大学，舟橋フロムワン，奈良市，（4月21日）	我が国の持続可能な発展に関して、3つのE（環境・エネルギー・経済）の観点から、その現状と今後の見通しについて概説し、この3つのEのトリレンマの状態をその様にバランスさせるか等を考察し、また、今後の我が国のこの3つのEに関する政策や方向性について概説した。
27. 「電気料金値上げを前に」	単	平成25年4月	NHK奈良放送局，ならナビ（18:30-19:00），NHK奈良放送局，奈良市，(4月22日)	関西電力管内において大幅な電気料金値上げが実施される予定である。その料金値上げ対策として、「電気料金値上げを前に」と題して、月額の電気料金の実際の値上げ巾やその対策としての節電方法を解説した。
28. エクセルギーとは何か？ － エネルギーのものさしと夏の節電 －	単	平成25年6月	「平成25年度 王子町り～べるカレッジ」第Ⅱシリーズ「自分を取り巻く環境について学ぶ」第1回，王寺町地域交流センター，王寺町，（6月29日）	近年、関西圏において特に夏期の電力不足が続いているため、エネルギーの価値として用いられているエクセルギーと言う指標を解説し、エネルギーの有効利用という観点から、効果的な節電方法の実例を挙げて解説した。
29. 「家庭でできる夏の節電」	単	平成25年7月	奈良県庁，奈良くらし手帳，奈良県民だより7月号,奈良県，(7月1日発行)	関西電力管内において、電力不足および大幅な電気料金値上げが実施された。それらの対策として、「家庭でできる夏の節電」と題して、家庭の電化製品で電力消費量の大きい物を紹介し、それらの電化製品に対して、簡単で効果の大きい節電策を解説した。
30. 「奈良で育む 新しいエネルギーのかたち」	単	平成25年7月	奈良テレビ放送局，奈良！そこが知りたい（21:00-21:30），奈良テレビ放送局，奈良市，(7月20日)	我が国のエネルギー政策として、原発停止以降、電力不足が大きな問題となっており、その対策としてのエネルギー政策について解説するとともに奈良県独自のエネルギー政策の策定とその実例を紹介した。
31. 公共施設のエネルギーマネジメント － 省エネルギー対策およびその事例 －	単	平成26年2月	橿原市役所主催，平成25年度研修会，橿原市役所北館別館　大会議室，橿原市，（2月12日）	公共施設のエネルギーマネジメントに関して、特に近年災害時等における公共施設の役割が増大しているため、電力に大きく依存しないような公共施設の省エネルギー化やマネジメントが急務とされており、その対策として、効果的な省エネルギーの方法および再生可能エネルギー導入の事例を解説した。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　宮崎（竹田）治美

研究分野	研究内容のキーワード
近代語彙史　日中比較言語学　異文化教育	中国語語彙史・文法史　宋代語録

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）日中通訳・翻訳の科目における効果的な活用と教材の開発	平成17年４月～平成21年3月	駿台観光・外国語学校の非常勤としての授業。具体的な実用性を考え、場面を想定して基本から旅行・商談・学習・生活などのニーズを応じる。また、間違いやすい文法と言葉をはじめ、基礎編と応用編に分けて、徹底的に役に立つ指導することを工夫した。単に言葉を直訳するではなく、言語の背後にある生活習慣、地域性、国民性と言語の関連性とつなぎ、価値観の違いを理解するうえで、授業内容や教材などを考えた。 留学生の日本語科目（語彙・文法）において、かつて自らの学習経験を生かし、生活言語と学習言語を平行線形式で考え、独自に教材を開発した。その結果、日本語能力試験の合格率が向上し、大きな成果がみられたといえる。
2）中国語科目における実用性を高めるための取り組み	平成18年9月～21年3月	天理大学中国語学科非常勤講師として担当した「中国語表現」「中国文学概論」「異文化コミュニケーションと情報」「中国語（文法・読解）において、イラスト、歌謡、漫画、文学作品、映画、料理などの補助教材を用いて目や肌で感じさせた。また、留学生との「ジャーナル指導法」（学生との交換日記）、Ｘチェンジ学習方法などを行った。その他、日本と中国の大学の間で知名度の高い歌コンテストに学生を指導・派遣し、優秀な成績を獲得した。また、学生の中国語の演劇の指導などにも携わり、台湾で上演し、斯界から好評を受けた。
3）留学生日本語科目の取り組み （語彙・読解）（作文）（日本語表現）	平成21年4月～平成25年	奈良産業大学両学部の共通教育科目としての留学生の日本語科目において、自ら学生時代日本語能力試験400満点に近い点数を突破したことや平成１１年のJ・testには９５０点（1000点満点）をとり、当時の最高点数であったなどの経験を生かして、漢字圏の学生にとって最も間違いやすい語彙を解説し、効率的な学習方法を指導した。その結果、良好な成績が見られた。また、より効果的な学習ができるよう四段階レベルに分けて、目標を決めて確実に進めた。留学生専用教材と中学生の教科書を用いて、日本の言語・社会・生活と文化について幅広く学べるように工夫した。また、異文化の角度から日本語を分析、理解しやすく指導した。
4）遠隔技術の利用	平成21年4月～平成22年3月	授業以外、学外の語学学習にも重視し、インターネットのチャット利用を試み、週三回3時間ほどの体勢で質問を受け、日本語の指導、作文や小論文の添削など行い、また、生活、進路などにも相談にも応じた。現在、日本語学習指導以外に関する相談は継続している。
5）ITリテラシーにおける活用の取り組み	平成21年4月～平成24年3月	奈良産業大学情報学部の基礎科目ITリテラシー（留学生）において、最も理解しにくい外来語などを動画やイラストと用いて分かりやすく解説し、留学生にとって不利なところを有利になるよう実用性を考え、内容を工夫した。その結果、カリキュラムより大幅に進み、全学の行事ポスター、『国際交流センター記録文集』の表紙などすべて留学生が作成し、学習の活用につながっている。

6）情報学ゼミ演習	平成21年4月～平成25年	奈良産業大学情報学部の専任講師及び准教授として、４年間連続1年次のアドバイザーを担当した。１年次生が大学生活がスムーズに進めるよう学外オリエンテーションや学習指導、研究発表、生活、履修指導、家庭訪問などを行った。
7）中国語科目における効果的な学習方法及び海外語学研修	平成23年4月～24年3月	奈良産業大学専任講師及び准教授として共通教育科目「中国語会話Ⅰ・Ⅱ」を担当した。受講生が数名しかいない中国語科目を復活させた。興趣性などを重視し、常に就職進路や国際的意識を強めさせ、物事を多方面から考える柔軟性を重視した。その結果、短期語学研修などを希望する学生も増えつつ、夏季短期語学研修が認定科目として認定された。
２　作成した教科書，教材		
1）「日本語表現―文法編」 （駿台観光・外語専門学校応用語学専科　専用）	平成18年4月～平成21年3月	学習者のニーズに応じて、日本語能力試験N2、N１を目指す学習者が効率よく自習できるよう工夫した。機能語を意味によって分類して構成を考え、できるだけ簡単明瞭に文法的性格を解説しようと試みた。
2）『会話と文法を学ぶ初級中国語』 （再掲）	平成20年3月	古都奈良などを題材に、日本の生活に密着し、日本の地名や観光地などを中国語で話せるように工夫した。学習効果を考慮して語彙・表現・文法など最も使用頻度の高いものを用いるようにした。また、中国語の全体像を掴むために、文法の知識を増やすと同時に、実際の使用頻度が高い表現を集中的に、対話文形式で覚えこむことを第一義としている。
3）『漢字ドリル３０００』 （奈良産業大学日本語科目専用）	平成２１年４月～現在に至る。	生活言語、学習言語の習得及び日本語能力試験N1を目指す留学生のために「読む力」「書く力」を確実に身につけられるよう工夫した。漢字を音読みと訓読みや字形、部首、意味などグループ別に構成し、効率的に習得できることを目指した。また過去数年間の能力試験１級に出題された漢字、語彙問題を徹底的に分析し、画数順に単元を配列して、日常学習の段階から最適な試験勉強ができるよう工夫した。その他、漢字圏の留学生にとって落とし穴である同形語をの用例を加えた。
4）「日本語表現―作文・小論文編」 （奈良産業大学日本語科目専用）	平成22年4月～平成23年3月	新しい作文の練習法で文章の構築力をつける練習帳である。留学生不得意な受け身、副助詞、接続詞で表現力をアップする練習帳である。
5）「コンピューター用語辞典（留学生用）」 情報学部向井教授と共同作成	平成22年4月～現在に至る。	留学生が最も理解しにくい情報学に関する専門用語を中国語に翻訳し、専門科目の授業内容の理解度を向上させることができた。（簡体字と繁体字二種類を作成）
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）奈良産業大学情報学部　学生による評価	平成21年～現在に至る	高い出席率を維持していて、大半の学生の受講意欲が高く、「理解しやす、大変熱意を感じる」と学生から評価を受けた。課外活動やクラブ活動、ボランティア活動、地域活動など学生と共に参加した。学習のみならず生活指導なども行い、学生から高い評価を受けた。特に留学生に対して、携帯電話の番号、メールアドレス、チャットIDを公開し、学習のみならず、生活、進路、自宅訪問などの相談を２４時間体制で受ける。大学を断念した留学生を大学に戻るように説得し、現在全員優秀な成績を修得している。留学生から多大な信頼を得ている。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）地域市民講座 （財）奈良県経済クラブ　中国語講座	平成15年4月～現在に至る	地域の経済連合会主催の語学講座の講師を務めた。また、本学と社会人向けの「奈良駅前大学」という地域連携事業にの協力のかけ橋を務めた。コンサートや料理教室などを主催し、本学の学生、留学生との交流を活発にさせた。本講座は、2013年に10周年を迎える。毎年、語学研修、コンサート、特色のあるイベントなど開催し、地域から「民間大使」と言われ、多大な評価を受け、中国大阪総領事館からも賞状を授与された。

「中国現代情報について－レシートからのビジネス」講演）	平成17年4月	専門の調査機関が実施した調査の結果から、中国市場および中国社会の最新動向・トレンドを探る。
「長安の日本人－阿倍仲麻呂と漢詩－」　講演	平成22年5月	日本の歴史上、アジアとの関係構築に一生を捧げたわが国最古の留学生として、奈良から中国・長安に旅立ったことで遣唐使阿倍仲麻呂の異郷での生涯を紹介した。
「中国の子どもたちと家庭教育―異文化の視点から」	平成25年6月	中国の幼・小・中・高・大の教育の全体像を紹介した上、現在中国の家庭教育や地域教育の差を紹介した。また、中国人と日本人の価値観や文化の差異の視点から現在の日本の学校教育における外国人児童・生徒に対する対応を考察する。
多言語・多文化社会へのまなざし	平成26年6月	日本の学校における外国籍の児童生徒を事例にして、彼からの日常生活及び学校生活においての問題点を取り上げて、学校現場からどのように対応したらいいかと検討する。また、日本人学生が他者と異文化との出会いによって、相互理解をすることを新しい共生の視点から検討する。
５　その他		
1）学内業務 国際交流委員として	平成21年～26年に至る	国際交流委員として本学の海外協定校国立台湾屏東科技大学、蘇州科技大学、青島理工大学、東方学院、南京郵電大学の協定の実現に努め、夏季短期留学生、特別聴講生の受け入れを提案し、実行を推した。協定校にて説明会などを行い、日本への留学の意欲を増進させた。
2）留学生のイベント指導	平成21年～現在に至る	４年間連続留学生の日本語スピーチコンテストの担当として、作文・演説の指導を行った。また、『国際交流センター記録文集』を企画・提案し、４年編集を務めた。
3）日本人学生の語学研修	平成23年～現在に至る	平成23年度から中国語の夏季短期語学研修に引率した。その結果、学生たち自ら積極的に国際交流活動を行い、異なった文化に興味を持つようになった。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
1）高等学校教諭一級普通免許（音楽）（中国で取得）	平成４年9月	内920068号　（内モンゴル自治区教育庁）
2）NAFL日本語教師養成プログラムLD	平成20年12月	株式会社アルクの主催する通信講座にて、420時間相当する日本語教師養成講座を受け、最終試験を受けて終了。
3）修士（教育学）	平成15年3月	奈良教育大学大学院　（奈良教育大学第957号） 論文題目　中国帰国児童･生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索―ライフ･ヒストリ―からの考察―
4）博士（文学）	平成20年9月	奈良女子大学大学院　（奈良女子大学博課第393号） 博士論文題目　宋代語録における副詞研究
２　特許等		
なし		

3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）天理大学　広報・国際交流部　職員	平成17年4月～ 平成18年3月	留学生に関する業務全般、日本人学生の海外渡航、留学、海外協定校などの業務を担当した。
4　その他		
奈良産業大学　学内委員会 1）国際交流センター運営委員	平成21年度～ 26年度に至る	留学生の生活、学習の支援・指導、留学生の引率、留学生行事、特別聴講生、短期留学生の指導、日本人学生の語学研修、海外協定校に関する業務全般を担当した。また、国際交流事業の企画、提案など、「国際交流センター記録」の編集などを担当留学生科目の担当の提案など。
2）全学共通・教養教育推進会委員	平成22年度～ 平成23年度	留学生及び特別聴講生の日本語科目、中国語科目などを適切に履修することができるよう提案する。またクラス編成、協定校との調整などの全般業務に携わる。
3）学生支援センター運営委員 4）学生委員会委員	平成23年度～ 平成24年度	学生の生活、学習の支援、指導、大学行事の協力及び企画、実施を行う。
5）紀要編集委員など	平成22年度～ 平成23年度	奈良産業大学紀要第27号の編集など。
6）入学試験委員会・編入学実施小委員	平成25年度～26年度	大学の入学試験に関する業務全般。
7)地域連携推進委員	平成25年度～26年度	大学が持っている物的・人的資源を社会に提供する企画・実施などを行う業務全般。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（1）『会話と文法を学ぶ初級中国語』	共著	平成20年3月	白帝社	古都奈良などを題材に、日本の生活に密着し、日本の地名や観光地などを中国語で話せるように工夫し、学習効果を考慮して語彙・表現・文法など最も使用頻度の高いものを用いるようにした。 B5判（全72頁） 共著：羅東耀・張敏・劉慶・何穎・郭斐映・竹田治美　（原稿の一部を執筆のほか全体の編集などを行ったため分割不可能）
（2）『宋代語録における副詞研究』	単著	平成24年12月	白帝社	本書は、著者のこれまでの中古・近古副詞や文法についての研究と、博士論文「宋代語録における副詞研究」をまとめたものである。 近年、中古・近古の文法や語彙、音韻の研究において個別の語彙について分析及び考察する研究があるものの、史的研究はきわめて少ない。 著者は、古代言語及び歴史的考察を中心とした研究に取り組んできた。本書は、史的な角度から宋代の言語状況を概観し、宋代語録の定義、起源、形成について論じ、総計436副詞の個々の使用状況、特徴、性質について考察を加え、宋代語録における副詞の特徴を明らかにした。 宋学語録における副詞の研究は、これまでの宋学語録研究が閑却してきた部分に着目し、近古語彙史の基礎研究を補完するものとして、学術的な意義は大きい。 A6判（全298頁）

（学術論文）				
（1）『捜神記』における程度副詞について	単著	平成19年3月	天理大学中国文化研究第23号 pp. 43-60	晋末宋初に著された志怪小説『捜神記』における程度副詞に焦点を合わせて、分析した。程度副詞体系の構築、機能を検討し、言語学的な側面に重点をおいて考察し、その文体的特徴を明らかにした。
（2）『朱子語類輯略』における「得」について	単著	平成20年3月	天理大学中国文化研究第24号 pp. 35-56	「得」の形態構造を取り上げ、機能と特徴を考察し、述語と補語の関係を結ぶ機能を持ち、動作性の強いものから感受性の強い動詞へ変遷した。「得」の働きによって、補語になる他の品詞が使用範囲も拡大した。さらに複句・複文の発展にも影響を与えた。
（3）『朱子語類輯略』における程度副詞について （査読あり）	単著	平成20年3月	奈良女子大学人間文化研究年報 第23号pp. 25-37	南宋は多くの優れた口語的な通俗文学作品が誕生し、言語も著しく変化した。特に副詞を含めて虚詞の機能の変化が顕著に見られる。その比較を示す程度副詞を取り上げ、その機能を考察し、さらに歴史的に構築を論じた。
（4）宋代語録における副詞の研究（博士学位論文）	単著	平成20年8月	奈良女子大学大学院	宋代における五つの宋学語録175巻を対象として、副詞を６つに分類し、435種類副詞の特徴や諸性格について考察を行った。更に、音節構造からみた宋代副詞を検証し、その変遷と諸性格を明らかにした。 （400字詰原稿用紙　1020頁）
（5）宋学語録についての一考察	単著	平成21年3月	天理大学中国文化研究第25号　pp. 47-76	宋学の代表的な語録を中心に、宋学語録の定義、起源、形成及び盛行の原因、さらに現存版本などについて考察するものである。
（6）音節構造からみた宋代副詞（査読あり）	単著	平成21年3月	白帝社 中国語研究第51号 pp. 76-91	大部の書である宋学の五つの語録をテキストとして、副詞を中心にその特徴や諸性格に着目し音節について考察した。 テキストとして宋学の語録合計175巻、総文字数は約2,720,000字であり、副詞は述べ435種類にのぼる。 2010年　NO.62日本中国学会報「歴史的文法分野」に取り上げられ、高く評価を受けた。
（7）　日本語学習における諸問題	単著	平成22年9月	奈良産業大学紀要 25集 pp.　73－77	留学生の日本語学習の習得課程における諸問題を分析し、その結果にも基づき、中級レベル学習者に日本語を習得させるための方法を探ることである。中級レベルの学習者においては、共通の問題として、文法・助詞・動詞などの混同、誤用などの問題点を考察し、教室における日本語指導を通して、講義中や作文、レポートなどの誤用例を収集し、これらの問題に焦点を絞って、分析・考察を行う。
（8）宋代語録における語気副詞について	単著	平成23年9月	奈良産業大学紀要26集 pp. 35-43	宋学語録を焦点に合わせ、語気副詞を考察した。語気副詞は数が多く、複音節化が顕著され、宋代の語気副詞は既に副詞の機能のみを担うものが多いということが分かる。一部の語気副詞は宋代以後も強い生命力を持って、現代漢語に定着し、口語表現として頻用されている。

（9）日本語コースカリキュラムと指導について	共著	平成24年9月	奈良産業大学紀要28集 pp. 161-166	近年、短期留学生が急速に増加している中、日本語短期研修を実施する際、教材の選択・使用、クラス編成、プログラム計画、教員配置などのあり方について、本学の夏季短期を事例として考察し、オムニバスで一つの講座を担当する際も、担当者間で目標についての共通理解、指導項目の意見交流や指導方法、指導内容のあり方を考える。また、研修生の教育効果を高めるために、学生の日本語レベルを含めた事前調査や全体像の構成から部分内容の調整までの確認など、望ましいコースカリキュラムの作成と指導のあり方について模索する。 （原稿の構成や問題意識の提起、講義の担当など全体にかかわったため分割不可能） 共著者：竹田治美・廣田直俊・加納巧
(10) 外国人児童･生徒の内部葛藤とアイデンティティの模索 ―学校の多文化教育に向けて―	単著	平成24年9月	奈良産業大学紀要28集 pp. 129-139	本論は、2003年から10年間にわたり、外国人児童・生徒の日本語学習や母語環境、学校生活などについて調査した。国別では中国、ブラジル、フィリピン、ベトナム、韓国、台湾になる。子どもたちの学校生活と家庭環境に焦点をあて、その背景､実態から見えてくるものを考察する。学校における日本語学習と日本語カリキュラムの位置付けを指摘する。また、来日時間の浅い児童と日本で生まれた子どもの違いを分析する。さらに、子どもたちをめぐる諸問題を明確にするためには、その問題の所在について日本の学校や社会を中心に徹底的な個別調査を行うことが必要である。そして、問題解決のために日本の学校、地域、社会が改善すべき点を具体的に提言する。
(11) 第二言語としての日本語習得について ―人称代名詞の認識と運用をめぐって―	単著	平成25年2月	奈良産業大学情報フォーラム第８集 pp.89-98	第二言語習得（second language acquisition/SLA）研究に基づきながら、留学生の日本語習得における人称代名詞の認識と運用について検討したものである。第二言語としての日本語の人称代名詞を通して第二言語習得研究の中、特に教室における指導がどのように学習者に影響を与えるかについて考察し、より効果的な指導方法を探っていく。 日本語学習者が「人称代名詞」を習得する過程において抱える課題について分析し、日本語習得においての課題を明らにすることを目指す。
(12) 日本語短期研修のカリキュラムとその周辺について	単著	平成25年3月	奈良産業大学紀要28集（続編）pp. 77-82	日本語短期研修における留学制度の現状とその課題について考察する。また、学習者の多様性と多面性にこたえる日本語教育の有り方について検証する。さらに、短期研修プログラムの実施やカリキュラムの編成には、より多様な内容で対応する必要があることと、多様なニーズに対応できる受け入れシステムの構築と今後の発展性について述べる。
(13)『祖堂集』における程度副詞について	単著	平成26年9月	奈良学園大学紀要集1集 pp.57－63	現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがそのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていったかに考察する。
（その他）				
「研究報告書」 (1) 日本の大学における職業教育と大学生の職業意識（査読あり）	単著	平成23年8月	中国教育科学「十一五」計画　教育部重点研究課題 職業教育と企業文化との結合研究と実験（研究課題番号：GJA104009） 中期研究成果論文集 中華職業教育出版社 pp. 367 - 372	中国教育部職業技術教育センター研究所からの要請で日本の大学におけるキャリア教育及び大学生の就職意識について考察、具体的なデータを挙げ分析した。また、その背景にある歴史的な原因、社会要素などについて明らかにした。海外から投稿論文の中、唯一入選されたものである。

「翻訳」 (1) 『台風雑記』	共著	平成22年3月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所出版	百年前、台湾植民統治時代に当時の官僚である佐倉孫三氏が漢文で記録した『台風雑記』を翻訳した。また、『台風雑記』と著者について紹介し、被植民者の思いと本書の意義についての論文の翻訳を担当した。担当部分「植民者による植民地の風俗記録」 A6判（全220頁）（12頁-30頁を担当）、その他、原稿全体の編集など。 三尾裕子監修　台湾の自然と文化研究会　編訳 木村自、李春子、山田仁史、王厳隈、福浦厚子、林美杏　竹田治美
「口頭発表」　（1） 日本の大学における職業教育と大学生の職業意識	単	平成23年8月	中国キャリア教育国際シンポジウム（青島）	日本の大学におけるキャリヤ教育及び大学生の就職意識について考察、具体的なデータを挙げ分析した。また、その背景にある歴史的な原因、社会要素などについて分析した。さらにインターンシップ制度と実施及び現状と課題を考察した。
（2）近世漢語における副詞の音節変遷について	単	平成平成24年9月	北京大学　古代漢語研究会	副詞は、最も複雑の品詞であり、数が多く、多様性を持っているのが特徴である。本発表は音節の角度から、中古・近世漢語の音節変遷について考察し、その機能と性質及び個々の使用状態を分析した。副詞の分節化の多重性からその意味と統語的な機能と構造と関連させ、系統性を試みる。
（3）『祖堂集』における程度副詞について	単	平成25年10月	日本中国学会第65回大会	現存の最古の禅宗史総集『祖堂集』の程度副詞の機能、用法、特徴などを考察し、中古から近古にわたって程度副詞の体系そのものがそのように変遷したのか、また歴史的にどのように構築されていったかに考察する。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏　名　米川　雅士

研究分野	研究内容のキーワード
情報学、社会・安全システム科学、制御工学	ソフトウェア、社会システム工学・安全システム、森林情報システム工学、衛星測位工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）授業利用教材のインターネット上での公開	平成22年4月～平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として担当の「プログラミング基礎」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）「HTML演習」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）「オブジェクト指向言語」（専門科目、３年次配当、半期、選択２単位）「ネットワークプログラミング」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「ヒューマンインタフェース」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「キャリアゼミ」（専門科目、３年次配当、半期、選択２単位）「プログラミング入門」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）「日本事情Ⅱ」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）「オペレーティングシステム基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「ネットワーク基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「ネットワーク基礎演習」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「情報ネットワーク概論」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「UNIX入門」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、学生が家庭でも授業の復讐を行えるように授業で利用したパワーポイント資料をネット上に公開したところ、授業で学んでもらいたいポイントを確実に理解するようになった。
2）学生の授業外勉強促進の取り組み	平成23年4月～平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として担当の「プログラミング基礎」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）「プログラミング入門」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）「オペレーティングシステム基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「ネットワーク基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「情報ネットワーク概論」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「UNIX入門」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、学生が授業外での勉強を行わなくてはいけない状況を作るために、授業時に１週前の授業で学んだことについて小テストを実施した。これにより、家庭での復讐を徹底することができたために、実施前と後では期末テストの平均点が向上した。
3）マルチメディア機器を活用した授業時間外のフォロー	平成23年4月～平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として担当の「プログラミング入門」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）「オペレーティングシステム基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「ネットワーク基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「ネットワーク基礎演習」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「情報ネットワーク概論」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）「UNIX入門」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、学生にはiPodtachが配布されているため、時間外でも気軽に勉強に触れることができ、疑問点はみんなで解決させるようにしむけるためにツイッターを利用した。頻繁に利用する学生ほど成績が向上した。

４）向上心の高い学生に対しての特別カリキュラムシステムの構築	平成23年11月～ 平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の授業では満足できない学生の学力向上を考え、授業外のカリキュラムを１年生から４年生までで実施することで、幅広い知識と高度な専門性を学ばせるシステムを構築した。学生のヤル気を維持させる仕組みとして短期と長期の目標を設定する。短期目標として、数学検定、TOEIC、日本語検定、学会発表、コンテスト出品を設置し、長期目標として各学生の将来像を明確に定めさせ、学生が抱いている将来像に一番専門性が近い教員が専任となり教育を実施する。これにより、短期目標である各試験で受験者の平均よりも大幅に高い合格率を実現している。また、参加した学生も満足度が高く１年間のカリキュラムを終えた学生は翌年も参加を希望する。
５）プレゼンテーションの導入	平成23年4月～ 平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として担当の「情報学演習１B」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「情報学演習Ⅱ」（専門科目、3年次配当、通年、選択4単位）「情報学演習Ⅲ」（専門科目、4年次配当、通年、選択4単位）「情報学ゼミⅡB」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「情報学ゼミⅢ」（専門科目、3年次配当、通年、選択4単位）において、学生が自己の考えを第3者に説明できるように資料を可視化させることで、資料作成の難しさや大変さを理解することで授業中の私語が激減した。
６）手書き課題の導入	平成23年4月～ 平成26年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として担当の「情報学実験基礎Ⅰ」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）において、実施した実験のレポートを手書きにした。これにより、実験関連知識への理解度向上と家庭学習の定着化を目指した。これは、親御さんの報告により家庭学習を行なっていることが複数人の学生について確認ができたため成果があったといえる。
７）短期プロジェクトの導入	平成22年4月～ 平成25年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として、学生にシステムへの興味と理解を深めてもらうため、学外から依頼のあったシステム構築を実践してもらう実学を導入した。学生には短期目標を設定する事により、勉強時間が数倍に増えた事、最終的に自分が作ったシステムが運用されている時の喜びを得る事が体験でき、参加学生の授業への取り組み方が向上する。また、学生自身に社会に出ても誇れる事を学生の間に実現をしたというプライドを持ってもらう事として、積極的に学会で発表を進め、平成23年11月開催の第6回パーソナルコンピュータ利用技術全国大会において、新人奨励賞を受賞した。 立ち上げた5つの短期プロジェクトを以下に記述する。 ・バスロケーションシステムの構築（依頼主：奈良文化女子短期大学付属幼稚園、期間：平成22年度）：幼稚園バスの位置をパソコンから確認ができるシステムの構築 ・情報学部HP作成（依頼主：奈良産業大学情報学部、期間：平成22年度）：情報学部のHPを見やすく且つわかりやすいものを作成する。 ・バスロケーションシステムの拡張（依頼主：奈良文化女子短期大学付属幼稚園、期間：平成23年度）：2つの機能について拡張した。1つめは、バスの位置情報取得送信装置として携帯電話を利用していた事から測位精度が悪かったため新アルゴリズムを実装した。2つめは、携帯電話からもバスの位置を確認できるようにした。 ・GISの設計書おこし（依頼主：奈良県、期間：平成23年度）：奈良県から県有林を借用し、新しいGISについて研究を進めている。基幹となるフリーGISのプログラムから設計書をおこした。なお、利用するフリーGISはGRASSであり、約55万ステップのプログラムである。 ・ビジュアル型SNSシステムの構築（依頼主：奈良産業大学国際交流センター、期間：平成24年度）：学生が交流する場としてSNSが重要なシステムとなってきた昨今、文字のみでのコミニュケーションに限界が言われるようになってきた。よって、写真などの画像データを基に学生間のコミュニケーションを促進する新しいシステムの構築する。

2　作成した教科書，教材		
1）授業での学習教材作成	平成22年4月～ 平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として担当の「プログラミング基礎」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）「HTML演習」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）「オブジェクト指向言語」（専門科目、3年次配当、半期、選択2単位）「ネットワークプログラミング」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「ヒューマンコンピュータインタラクション」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「キャリアゼミ」（専門科目、3年次配当、半期、選択2単位）「プログラミング入門」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）「日本事情Ⅱ」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）「オペレーティング基礎」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「ネットワーク基礎」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「ネットワーク基礎演習」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「情報ネットワーク概論」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「UNIX入門」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「アルゴリズムとデータ構造」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「アルゴリズムとデータ構造演習」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）の授業を進める上で、教科書のみでは知識が不足している学生の理解力が向上しないため、教科書以外の必要な知識を記述したパワーポイントを作成した。教材を電子データ化することで、学生が自宅で効率的な復讐を実施できる。
2）理解度確認小テスト	平成23年4月～ 平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として担当の「プログラミング基礎」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）「プログラミング入門」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）「オペレーティング基礎」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「ネットワーク基礎」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「情報ネットワーク概論」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「UNIX入門」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「アルゴリズムとデータ構造」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）「ヒューマンコンピュータインタラクション」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、理解度確認用の小テストを各講義14回分を作成した。これにより、学生の理解が薄いところを確認することができ、授業中にフォローが可能となる。
3）実験・実習用指導マニュアル	平成23年4月～ 平成25年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学実験基礎Ⅰ」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）において、実験後に提出するレポートの書き方と実験マニュアルを作成した。レポートの書き方については章構成と記述内容から、図表の書き方、記述例、参考文献の調べ方（HPによる関連論文の検索方法、図書館の利用方法）までを記述し4年生に作成する卒業論文を見据えた記述マニュアルにしてある。実験マニュアルについては、通信の歴史と技術について学んでもらいたいと考え、手旗信号の形と文字を関連づける実験から、有線通信でより遠くに早く通信ができるようになったことの実感、無線通信で通信の自由度が高くなった事に触れさせ、最後に宇宙通信になっても通信の基幹技術は変わらない事を学べるようなマニュアルを作成した。また、理解度を深めてもらうために必ず各実験の最後に課題と考察する項目をもうけて、授業外での勉強時間を増やす工夫をした。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）学生の授業評価アンケート結果	平成27年3月	専門教科にも関わらず、全授業の評定平均3.40と高ポイントであり、多くの学生においては満足のいく授業を実施している。また、質問の各項目においてもほぼ全項目で平均以上の評価を学生から受けている。
2）学長評価	平成25年3月	高大連携や地域協力の講演などに積極的に講師として参加し、学内外で大きく大学に貢献している。また、研究においても外部の様々な機関と共同研究を積極的に行い。コンスタントに外部で発表を行っている。

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）三郷北小学校教員研修会 研修会講師	平成22年8月2日	三郷町立三郷小学校の教員に対し、教員研修会を実施した。研修会は午前と午後の2部構成で開催し、午前中はインターネットが取り巻く世界と最新情報を踏まえて危険な世界である事、携帯電話を小学生に持たせない方がよいという内容を技術的な観点から講演した。午後はWindows7の新機能とExcel初級と定義して簡単な関数の利用方法について実習を行なった。研修会開催時間として午前10：00〜12：00、午後13：00〜15：00で開催し、参加数は約20名だった。
2）筒井小学校教員研修会 研修会講師	平成22年8月5日	大和郡山市立筒井小学校の教員に対し、教員研修会を実施した。研修会は午前と午後の2部構成で開催し、午前中はWindows7のAeroプレビュー、Aeroシェイク、スナップ、ライブタスクバープレビューなどの新機能を実際に触れながら体験し、ネットワークとセキュリティの設定まで学んだ、午後はExcel2010を利用して実際に使える出席簿と成績表を作成した。研修会開催時間として午前の部10：00〜12：00、午後の部13：00〜15：00で開催し、参加数は約20名だった。
3）高校キャリアガイダンス 講師	平成23年2月16日	奈良産業大学情報学部情報学科の教員として奈良県立高円高等学校の2年生対象に情報学部を卒業した際の就職先について講演を行った。講演内容は情報学部で学ぶ分野の説明から将来の就職が可能な職種を説明し、現在、各業種には何人の業務従事者がいるのか、それぞれの分野の給料はどれくらいなのかなどを踏まえて説明をした。講演時間は13：30〜16：30で開催し、参加者は約20名程度だった。
4）教育講演会 講演講師	平成23年6月19日	奈良文化女子短期大学付属幼稚園の保護者向け日曜参観において、特別講演講師として「幼少期の夢が将来の仕事に繋がる」と題して、保護者160名に対して講演を行った。講演内容としては、子育てには多くの時間をかけること、子供を萎縮させてしまう怒り方はしてはいけないこと、褒めるときは大げさに褒めてあげる事などいくつかの実例を踏まえて説明をした。また、自分自身の体験も踏まえて小さい頃に持った将来の夢が今の職業につながっていることを話した。講演時間は10：00〜11：20で開催した。
5）地域貢献市民講座王寺町り〜べるカレッジ 講演講師	平成23年7月2日	王寺町地域交流センターにおいて、王寺町が進める「出会いとにぎわいの街づくり」構想の一環として生活を科学するシリーズにおいて「宇宙を利用する生活」と題し、一般聴講者65人に対し、宇宙で開発された技術について講演を行った。一般の方々が聴講者のメインとなることから、宇宙に親しんでもらうことを主題において講演を行った。 最初は日本の宇宙開発について歴史を追って説明を行い、国の宇宙開発機関の統合、各部門での開発の枠組みと研究の方向性について説明を行った。続いて、日本の宇宙開発の流れを理解してもらい、宇宙で開発された技術が普段の生活用品にどのように利用されているのか、実例を挙げ説明を行った。実例としてはリニアモーターカーの開発期間短縮の裏話、家に利用されるペンキ、カーナビゲーションシステムなど最新のテクノロジーを感じさせる技術から、枕や布団に利用されている素材、消臭下着まで普段の生活では近すぎて宇宙のイメージが持てない物まであることを話した。
6）高大連携教育会 講義講師	平成23年8月9日 平成23年8月11日	奈良県立奈良情報商業高等学校総合情報科の学生約30名に対し、高大連携教育としてパーソナルコンピューターの制作実習を実施し、その実習の講師を務めた。実習内容はパーソナルコンピューターの制作、オペレーティングシステムのインストール、ネットワークの設定、各種ソフトウェアーのバージョンアップ、セキュリティソフトのインストール、webサーバーの設定、ホームページ作成と公開までを実施した。オペレーティングシステムにはLinuxのディストリビューションであるUbuntuを利用したことにより、初めて体験した学生も多く全てがフリーソフトで実装できることを体験してもらった。

７）教職員のための公開講座 講義講師	平成23年8月10日	奈良県立の教職員約30名に対し、教職員のための公開講座としてパーソナルコンピューターの制作実習を実施し、その実習の講師を務めた。実習内容はパーソナルコンピューターの制作、オペレーティングシステムのインストール、ネットワークの設定、各種ソフトウェアーのバージョンアップ、セキュリティソフトのインストール、webサーバーの設定、ホームページ作成と公開までを実施した。オペレーティングシステムにはLinuxのディストリビューションであるUbuntuを利用したことにより、初めて体験した受講者も多く全てがフリーソフトで実装できることを体験してもらった。
８）筒井小学校教員研修会 研修会講師	平成22年8月12日	大和郡山市立筒井小学校の教員に対し、教員研修会を実施した。研修会は午前と午後の2部構成で開催し、午前中はExcel2010を利用して実際に使える出席簿と成績表を作成した。午後はPowerPoin2010を利用してアニメーションの組み込み方、画像と動画の取り込み方を学んだ後に「自分」と題して5分程度の発表資料を作成した。研修会開催時間として午前の部10：00～12：00、午後の部13：00～15：00で開催し、参加数は約10名だった。
９）大学体験授業　講義講師	平成22年10月14日	奈良県立朱雀高校情報工学科2年生を対象に「携帯電話は便利だが危険」と題して講義を行った。最初に携帯電話とスマートフォンをどれくらいの学生が保有しているか確認から始めた。情報工学科の学生らしく、携帯電話・スマートフォンの保有者数は高校生の全国平均を上回る結果となった。ここから、携帯電話・スマートフォンの利用状況について話を進め、ほぼ全員が携帯電話・スマートフォンからHPの閲覧やゲーム、音楽などのデータをダウンロードして利用していることを確認した。殆どの学生がパソコンと同じような利用方法で携帯電話・スマートフォンを利用しているにもかかわらず、パソコンではOSのセキュリティーパッチを更新したり、セキュリティソフトをインストールしている学生が多く見られたが、携帯電話・スマートフォンでは全くセキュリティ対策が実施されていないことを学生たちに認識させた。この状況を元に現在スマートフォンの普及状況とウィルスの確認状況を学生たちに話し、スマートフォンもパソコンと変わらないこと、情報の重要性から言えばスマートフォンのほうがより強固なセキュリティ対策が必要なことを説明した。最後に一般的に知っている人が少ないのだが、普通のHPを閲覧する場合は個人情報を提供していることについて話した。HPから情報を貰うのはただではないことを理解しておくこと、使いやすく便利なHPほどこれら個人情報が悪用される可能性が高いことについても話した。
１０）高大連携教育会 講義講師	平成24年2月15日	奈良県立朱雀高等学校情報工学科の学生約20名に対し、高大連携教育としてパーソナルコンピューターの制作実習を実施し、その実習の講師を務めた。実習内容はパーソナルコンピューターの制作、オペレーティングシステムのインストール、ネットワークの設定、各種ソフトウェアーのバージョンアップ、セキュリティソフトのインストール、webサーバーの設定、ホームページ作成と公開までを実施した。オペレーティングシステムにはLinuxのディストリビューションであるUbuntuを利用したことにより、初めて体験した学生も多く全てがフリーソフトで実装できることを体験してもらった。
１１）高大連携教育会　講義講師	平成24年4月13日	奈良県立朱雀高校情報工学科2年生を対象に講義を実施した。携帯電話やカーナビゲーションなどで注目を浴びている衛星を使った位置情報サービスにおいて、実際の受信機を使って、受信実験を行い。自分の歩いた経路をホームページ上に公開するページを作成させた。これにより衛星を利用した位置情報に関連する技術とホームページの知識を学ぶことができる。

１２）オープンキャンパス模擬講義講師	平成24年8月25日	奈良産業大学オープンキャンパスにおいて、高校生に対し「情報学≠パソコン」ではない事を説明し、情報学で学ぶ事の幅広さの説明と実例としてGISの入力データとして利用できる空中写真撮影用の自動航法ラジコンヘリコプターの実物を見せ情報学の広さを実体験させた。
１３）高大連携教育会　講義講師	平成25年2月5日	奈良県立奈良情報商業高等学校総合情報科の学生約30名に対し、高大連携教育としてパーソナルコンピューターの制作実習を実施し、その実習の講師を務めた。実習内容はパーソナルコンピューターの制作、オペレーティングシステムのインストール、ネットワークの設定、各種ソフトウェアーのバージョンアップ、セキュリティソフトのインストール、webサーバーの設定、ホームページ作成と公開までを実施した。オペレーティングシステムにはLinuxのディストリビューションであるUbuntuを利用したことにより、初めて体験した学生も多く全てがフリーソフトで実装できることを体験してもらった。
１４）地域貢献市民講座王寺町り～べるカレッジ 講演講師	平成25年7月13日	王寺町地域交流センターにおいて、王寺町が進める「出会いとにぎわいの街づくり」構想の一環として生活を科学するシリーズにおいて「宇宙から自分の位置を知る」と題し、一般聴講者65人に対し、人間は大航海時代から宇宙の星を見て自分の位置を導き出しています。何世紀も経ち技術が進化した現在でも自分の位置を導き出すのに宇宙からの情報を使っている。本講座では昔の測位方法から最新の測位方法を学び、知っていれば得をする位置情報を利用した最新技術について講演を行った。
１５）奈良県立郡山高等学校 キャリア教育　講義講師	平成25年11月11日	奈良県立郡山高等学校の学生に対し、実際に仕事をしている人から仕事内容と仕事に必要な知識は何か公演することで、学生の勉強意欲と将来就きたい職業への知識を高める講演会の講師として公演を行った。 公演内容としては、大学の情報学部で学ぶ学生が多く就職する情報サービス業界での仕事内容と大学でどのようなことを学ぶのか研究成果から公演を行った。また、SEにはコミュニケーション能力が重要な要素だとわかってもらうために簡単な体験課題の実施も併せて行った。
５　その他		
１）奈良産業大学情報学部情報学科における教育実績	平成22年4月～ 平成27年3月	奈良産業大学情報学部情報学科の教員（平成22年4月から平成26年3月まで専任講師として、平成26年4月かた現在にいたるまで准教授）として以下のような科目を担当した。 「プログラミング基礎」（平成22年4月～平成23年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「プログラミング基礎」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）において、情報学部の学生として、必要な基礎知識について学び、最も実社会で利用されているVC++、HTML、JAVAのプログラミングに触れる内容の授業を行い、それによって、学生にプログラミングの種類がなぜ沢山あるのか、自分の将来に必要な知識、学ばなくては行けない知識を理解させる教育効果があった。 「オブジェクト指向言語」（平成22年4月～平成24年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「オブジェクト指向言語」（専門科目、３年次配当、半期、選択２単位）において、オブジェクト指向言語としてJAVAによるシステム開発の内容で授業を行い、それによって、学生にオブジェクト指向とは何か、オブジェクト指向が考えられた理由を理解させる教育効果があった。 「HTML演習」（平成22年4月～平成23年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「HTML演習」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）において、最新のHTMLバージョン5、スタイルシート、JavaScriptでの実社会での制作に近い内容の授業を行い、それによって、学生にホームページ作成方法を理解させる教育効果があった。

１）奈良産業大学情報学部情報学科における教育実績の続き		「ネットワークプログラミング」（平成22年4月～平成27年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「ネットワークプログラミング」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、ソケット、パケット通信、TCP/IPを理解させるためにチャットシステム、掲示板をPHPで作成させる内容で授業を行い、それによって、学生にネットワークを利用するプログラミング作成時に必要な知識を理解させる教育効果があった。 「ヒューマンコンピュータインタラクション」（平成22年4月～平成27年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「ヒューマンコンピュータインタラクション」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、システム設計の際に今後重要となるヒューマンインタフェースを考えた設計方法とIT技術がどのように進化しているのか理解させるように授業を行い、それによって、学生にヒューマンインタフェースを意識した設計方法について理解させる教育効果があった。 「キャリアゼミ」（平成22年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「キャリアゼミ」（専門科目、３年次配当、半期、選択２単位）において、就職に向けての情報と自己に足りない物を認識させる内容の授業を行い、それによって、学生に就職活動への不安軽減と強い意気込み持たせる事を実現させ、就職活動へ必要な知識を身につけさせる教育効果があった。 「基礎数学Ⅱ」（平成23年4月～平成24年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「基礎数学Ⅱ」（共通科目、１年次配当、半期、選択1単位）において、数学検定3級～5級の内容の授業を行い、それによって、学生に前期中等教育までの必要最低限の知識を理解させる教育効果があった。 「情報学実験基礎Ⅰ」（平成23年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学実験基礎Ⅰ」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）において、実際の実験機材を使い通信の歴史を確認させる内容の授業を行い、それによって、学生に通信とはどのような意図で考えられ、技術的にどのような内容になっているのかを理解させる教育効果があった。 「プログラミング入門」（平成23年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「プログラミング入門」専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）において、情報学部の学生として、必要な基礎知識について学び、最も実社会で利用されているVC++、HTML、JAVAのプログラミングに触れる内容の授業を行い、それによって、学生にプログラミングの種類がなぜ沢山あるのか、自分の将来に必要な知識、学ばなくては行けない知識を理解させる教育効果があった。

１）奈良産業大学情報学部情報学科における教育実績の続き		「日本事情Ⅱ」（平成23年4月～平成24年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「日本事情Ⅱ」（専門科目、１年次配当、半期、選択２単位）において、留学生に日本の携帯電話技術と事情について理解させる内容の授業を行い、それによって、学生に日本の事を理解させる教育効果があった。 「情報学演習ＩB」（平成23年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学演習ＩB」（専門科目、２年次配当、通年、選択4単位）において、測位衛星のシステム構成を理解し、自分の考えたシステムが実現できるかためす内容の授業を行い、それによって、学生に新しい分野への探究心と学び方を理解させる教育効果があった。 「情報学演習Ⅱ」（平成23年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学演習Ⅱ」（専門科目、3年次配当、通年、選択4単位）において、測位衛星の情報から自分の位置を求めるプログラム作成の内容の授業を行い、それによって、学生にC言語の実践的なプログラムと測位衛星に関わる基本的知識を理解させる教育効果があった。 「オペレーティングシステム基礎」（平成24年4月～平成27年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「オペレーティングシステム基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、世の中にあるオペレーティングシステムの特徴と役割についてシステム的な観点で理解させる内容の授業を行い、それによって、学生にオペレーティングシステムについて理解させる教育効果があった。 「ネットワーク基礎」（平成24年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「ネットワーク基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、ネットワークを利用するのに必要な最低限の知識を学ばせる内容の授業を行い、それによって、学生にネットワークの基礎知識を理解させる教育効果があった。 「ネットワーク基礎演習」（平成24年4月～平成27年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「ネットワーク基礎演習」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、ネットワーク環境を利用するプログラミングを作成させ理解度を深める内容の授業を行い、それによって、学生にネットワーク環境を利用したプログラミング方法を理解させる教育効果があった。
１）奈良産業大学情報学部情報学科における教育実績の続き		「情報ネットワーク概論」（平成24年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「ネットワーク基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、ネットワークを利用するのに必要な最低限の知識を学ばせる内容の授業を行い、それによって、学生にネットワークの基礎知識を理解させる教育効果があった。 「UNIX入門」（平成24年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「オペレーティングシステム基礎」（専門科目、２年次配当、半期、選択２単位）において、世の中にあるオペレーティングシステムの特徴と役割についてシステム的な観点で理解させる内容の授業を行い、それによって、学生にオペレーティングシステムについて理解させる教育効果があった。 「情報学演習Ⅲ」（平成24年4月～平成25年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学演習Ⅲ」（専門科目、4年次配当、通年、選択4単位）において、自分で考えた研究を進める内容の授業を行い、それによって、学生が研究というものについて理解させる教育効果があった。

		「情報学ゼミⅡB」（平成24年4月～平成27年3月） 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学ゼミⅡB」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、ゼミ室紹介の側面があり宇宙工学の関連技術を理解する内容の授業を行い、それによって、学生に宇宙工学を理解させる教育効果があった。 [情報学ゼミⅢ」（平成25年4月～平成27年3月 奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学ゼミⅢ」（専門科目、3年次配当、通年、選択4単位）において、卒業研究に必要な知識を身に着ける。宇宙工学の関連技術を理解する内容の授業を行い、それによって、学生が4年生になった時に自分自身で卒業研究を決めれる知識を身に着けた。
2）奈良工業高等専門学校電子制御工学科における教育実績	平成23年4月～ 平成26年3月	「電子回路」（平成23年4月～平成24年3月、平成25年4月～平成26年3月） 奈良工業高等専門学校電子制御工学科の非常勤講師として担当の「電子回路」（必修科目、4年次配当、半期、選択2単位）において、様々な電子回路とオペアンプで作成できる回路について理解する内容の授業を行い、それによって、学生に電子回路への理解を深めさせる教育効果があった。
3）大阪電気通信大学情報通信工学部情報工学科における教育実績	平成26年4月～ 平成27年3月	「電子回路基礎実験Ⅰ」（平成26年4月～平成27年3月） 大阪電気通信大学情報通信工学部情報工学科の非常勤講師として担当の「電子回路基礎実験Ⅰ」（必須科目、２年生次配当、半期、2単位）において、FETの実験担当とし、静特性・道徳性についての回路実験を担当している。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）修士（工学）	平成12年 3月	学位番号：第0093号 論文題名：衛星システムによる測位方式のデータ選択方法
2　特許等		
1）GPSによる自律測位方法、自立航法装置及びコンピュータプログラム 登録番号　特許第3651678号	平成17年 3月	公開種別：公開特許公報 公開番号：2004077228 出願番号：2002236137 出願日：平成12年8月13日 出願人：キーウェアソリューションズ株式会社 出願人識別番号：598109095 発明者：米川雅士 要約：GPSを利用した測位結果には誤差が含まれる。この誤差を最小に抑える事ができる方法として搬送波の利用がある。しかし、搬送波を利用する測位には多くの制約があり、一般的にはリアルタイム性を重要視していない測量の分野でしか利用されていない。本特許はこの搬送波を利用した新しい測位方法についての特許である。搬送波測位の制約事項として、正確に位置のわかっている地上局から補正データを取得する必要がある。地上局と離れての測位はできない。同一衛星を連続補足しないと測位ができなくなる等、多くの制約事項がある。この制約事項をなくすために、仮想地上局をソフトウェア上で再現することによって1回搬送波測位をおこなってしまえば、制約なく高精度な搬送波測位を継続可能な手法である。

３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）キーウェアソリューションズ株式会社 社員	平成12年4月～ 平成18年3月	6年間にわたり宇宙関連のソフトウェア設計・開発とシステムの運用に従事した。 平成12年6月から平成14年3月まではスタッフとして、4機の衛星について地上局の各装置、宇宙機シミュレーション装置、衛星情報公開用HP、各地上局とアンテナ局のネットワーク制御関連装置の開発と運用リーダーを務めた。開発利用言語としてはC++、Perl、JavaScript、HTMLを利用した。平成14年4月から平成18年3月まではシニアスタッフとしてプロジェクトリーダーを勤めシステムの開発だけではなく、部下の配置とスケジュール管理、お客様との開発費用調整も実施し、6機の衛星について上記同様の業務と仕様検討、宇宙機取得データ（放射線関連、μG関連）の解析・評価を産学連携で実施した。
２）慶應義塾大学２１世紀ＣＯＥプログラム「知能化から生命へのシステムデザイン」研究員	平成19年4月～ 平成20年3月	現代社会のシステムとしてバランスを確保し、人間や環境との共生のメカニズムを裏付け、全く新しいプロダクトイノベーションに結びつくようなシステム化技術の構築を目指して研究を進めていた。衛星を利用した測位技術は平成5年に一般利用が認められてから20年が立つが、カーナビゲーション、携帯電話、測量の分野以外の利用例は殆どない、これはいくつか利用制約があり使い勝手の悪さから一般的なシステムとして利用が広がらない。私の研究としてこれら制約の中で、使い勝手の良い高精度衛星測位を確立する事を目指して研究を実施し、各システムの情報インフラストラクチャーとなる事を目指して研究を進めていた。
３）慶應義塾大学グローバルCOEプログラム「環境共生・安全システムデザインの先導拠点」研究員	平成20年4月～ 平成22年3月	戦後から日本は大きな発展を遂げたが、これは従来の工学が要素還元論的な発送の基で構築されてきたが、現代社会に置いてシステムの大規模化、複雑化が進み適切且つ安全なシステムデザインが困難になってきている。 よって、人工物システムから社会システムまで、構築してきたあらゆるシステムの綻びを自ら解決するとともに、同種の問題解決ができる研究者・技術者の育成について研究を進めていた。私はシステムデザイン学の方法論を学び、衛星を利用した測位システムの構築を目指して研究を進めた。衛星を利用した測位が一般のシステムに普及するために必要な理由として重要な事柄を「リアルタイム性」「軽量化」「高精度測位」の3つと定義し、今まで利用されていた測位アルゴリズムとは異なる新しいアルゴリズムについて研究を進めていた。
４）平成23年度JR西日本あんしん社会財団研究助成金「災害時の状況把握用空中写真取得のための安価な自動航法ラジコンヘリコプター開発と実現」	平成22年11月	研究種目：研究助成金 申請期間：1年 申請金額：1,300,000円 申請結果：採用 申請内容：災害時に一番注意を払わないといけない事は2次災害である。これを防ぐために重要な情報は現場の正確な状況である。そのために誰もが安価でスピーディーに空中写真を取得する事は重要である。よって、本研究助成金の申請は誰もが安価でスピーディーに空中写真を取得できる方法として、自動航法ラジコンヘリコプターを制作する研究を実施した。 研究し作成した自動航法ラジコンヘリコプターはgoogleMAPを利用し感覚的に人が飛行経路を設定し、最も難しい姿勢制御と離着陸も含めて自動で行なう事を目的としている。
４　その他		
１）広報委員会委員	平成22年4月～ 平成23年3月	広報委員として大学の広報活動全般について業務を行った。特に学校パンフレットの作成についてはデザインのコンペを実施することを提案し、全教員参加型の学校パンフレット選定システムの構築に貢献した。
２）オープンキャンパス実行小委員会委員	平成22年4月～ 平成23年3月	オープンキャンパスに参加した高校生に大学で実施している研究活動をわかりやすく説明するために全教員にポスター作製を提案し、高校生への研究説明をスムーズに行えるようにした。

3）入学試験委員会委員	平成23年4月～平成24年3月	各種入学試験の運営と管理業務を実施した。また、新しい環境になれることが難しい学生も多くいることから、入学前教育を月に一回実施し、参加者には学内のシステムを学ばせることでリメディアル教育と友達作りを同時に実施することができるシステムを提案し実施した。また、自分で調べる課題を毎月出題することで大学で勉強するモチベーションを高めることも合わせて実施した。
4）情報学部ダブルスクール取りまとめ	平成23年10月～現在に至る	勉強をやる気のある学生を対象に講義以外で週12コマの授業を実施して、4年間で外部で研究発表を行えるレベルに教育するシステムを提案し、全運用と管理を行なっている。
5）就職委員会委員	平成24年4月～現在に至る	学生の就職支援として各種セミナーを計画・実施している。また、学生が就職活動のモチベーションを維持できるように情報提供と活動支援を行なっている。また、就職活動への不安を取り除くために外部講師を招聘し、就職活動模擬体験を多く実施できるように計画し実行した。
6）スポーツ振興委員会副委員長	平成24年4月～平成25年3月	各種スポーツクラブの奨学金運営・推薦入学者協議など、各クラブが必要なバックアップを実施している。本委員会の副委員長という立場から委員長の補佐役を実施している。
7）教務支援検討グループ委員	平成24年4月～平成25年3月	情報学部では、出口の明確に向けてシステムコースとメディアコースに2年生から分かれるが、学生が両コースのビジョンが明確になっていないため、各コースの教員により講義以外で、様々な体験学習を実施する事を計画する。例えば、外部の企業の人を呼んできて仕事へのイメージを付ける事や、各コースに必要な技術の短期集中講義を実施したりしている。この検討グループの発起人である。
8）学校法人奈良学園高等教育改革推進委員会社会科学関係部会会員	平成24年4月～平成25年3月	奈良産業大学において新学部設置に関する検討ワーキンググループのメンバーとして社会科学系学部の検討を行った。
9）学校法人奈良学園(仮称) 奈良学園大学設置準備委員会現代社会学部会会員	平成25年4月～平成26年3月	奈良産業大学を改組し新大学を設立するにあたって社会科学系学部の内容を検討する部会のメンバーとなった。

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
特記事項なし				
（学術論文）				
1.RATIONS BETWEEN POSITIONING RESULT AND EACH ERROR FACTOR IN GPS（査読付き）	共著	平成18年10月	SICE-ICASE International Joint Conference 2006, pp.1361-1365	GPSを利用した測位には衛星から受信機までの擬似距離と衛星の座標が必要である。そのため測位精度を改善するために、擬似距離に含まれている誤差を補正するのが一般的に行われている。しかし、測位環境と衛星の見え方によっても擬似距離へ悪影響を及ぼしている。つまり地平線上の衛星と天頂方向の衛星では擬似距離の長さが変わることで付加される誤差の量が変わる。そこで著者が提案した方法は衛星座標の移動方向によって補正を行う事と擬似距離の長さによって補正を同時に行うことで新しい測位精度改善方法についての提案を行った。 本人担当分：システム提案・構築から実験結果の論理的に評価し、論文のとりまとめを行なった。 共著者：米川雅士，田中敏幸

2.Improvement of GPS positioning accuracy by ionospheric delay correction （査読付き）	共著	平成19年 9月	SICE Annual Conference 2007, pp.1766-1769	GPSを利用した測位を行った際に付加される誤差原因はいくつかあるが、最大の誤差要因は電離層における信号の遅延が上げられる。GPSの衛星は異なる周波数を同一電波源から送信しているため、その2周波を受信できる受信機を使って電離層遅延量について測定し、さまざまな角度から検討し、電離層の補正方法として利用されているクロブッチャモデル、コサインモデル、2周波受信などの補正を行った結果について比較し報告している。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：秋山奈緒，米川雅士，田中敏幸
3.GPS Orbit Determination using Several Reference （査読付き）	共著	平成19年 9月	SICE Annual Conference 2007, pp.1770-1773	GPSを利用した測位精度はさまざまな要因によって、精度の劣化を招く。ここでは、衛星に起因する誤差の軽減を目指し研究を進めた。レンジアンドレンジレートで求めた真のGPS軌道と衛星から送信されたデータに含まれている軌道情報の誤差に注目して、衛星に起因する誤差の精度改善を試みた。一般的なレンジアンドレンジレートでは衛星の軌道を求めるのに時間がかかるため、複数基準局を用いて、GPS衛星軌道の補正をする方法について提案をおこなった。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：野村昌史，米川雅士，田中敏幸
4.GPS Positioning Method under Condition of Only Three Acquired Satellites （査読付き）	共著	平成20年 8月	SICE Annual Conference 2008, pp.3487-3490	GPSを用いた測位には最低でも4衛星からの直接信号を同時に受信する必要がある。しかし、一般的に利用される街中では建物や道幅の狭さから4機の衛星情報を同時に受信する事は難しい。そこで、著者らは新たな計算アルゴリズムの開発によって，3衛星を用いた測位アルゴリズムについて提案した。本手法は3機の衛星情報を連続した時間で取得し、6機の衛星が見えていると仮定し測位に利用したアルゴリズムである。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：野村昌史，米川雅士，田中敏幸
5.The Possibility and Practicality of A High Precision Positioning System using The Carrier （査読付き）	共著	平成20年 8月	SICE Annual Conference 2008, pp.3491-3495	世界中で自分の位置がわかるという事から、信頼性と利便性が高いとされている衛星を利用した測位技術が注目を集めている。しかし，測位方法には「空が見えていないと行けない」「同時に4機以上の衛星を補足しなくてはならない」「測位結果には誤差が含まれる」など様々な制約があるため一般的な利用があまり普及していない。そこで著者らは，制約事項の少ない測位方法を目指して、搬送波による高精度測位法の実現に向けたアルゴリズムの提案を行っている。 本人担当分：システム提案・構築から実験結果の論理的に評価し、論文のとりまとめを行なった。 共著者：米川雅士，田中敏幸
6.Recovery Method from Cycle Slip in GPS Positioning （査読付き）	共著	平成20年 8月	SICE Annual Conference 2008, pp.3496-3499	市街地でGPSを利用した場合，高層建築物にさえぎられて，一時的にGPS衛星からの直接信号が受信できなくなることがある。これをサイクルスリップという。本論文では，サイクルスリップから測位計算を復帰させるアルゴリズムに関する報告を行っている。サイクルスリップが起きる前の測位状況からサイクルスリップ発生時の測位結果予測と、他衛星の擬似距離の変化による測位点の補正をすることで、サイクルスリップ復旧後に即座に高精度な測位が開始できる。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：秋山奈緒，米川雅士，田中敏幸

7.High Accuracy Positioning of Two-Wheeled Vehicle at High Speed teraveling using GPS （査読付き）	共著	平成20年 8月	SICE Annual Conference 2008, pp.3500-3503	衛星を利用してリアルタイムに自分の位置を求めようとすると測位結果には大きな誤差が付加される。本研究では高速走行中の二輪車の位置をGPSで計測する新しい手法について提案している。高速走行中の二輪車は，カーブを曲がる際に車体を大きく傾けるためアンテナの指向方向が変わるため補足できる衛星の状態が時々刻々変化する。そのために測位結果が悪くなってしまう。測位結果から二輪車の挙動をモデル化し事後処理で測位結果を改善するアルゴリズムの提案を行なった。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：林昌輝，米川雅士，田中敏幸
8.Improvement accuracy in measurement of long baseline DGPS （査読付き）	共著	平成20年 8月	SICE Annual Conference 2008, pp.3504-3508	正確な位置がわかっている基準局から補正情報を受け取り測位精度向上を目指した方法であるDGPSは基準局と受信機の距離が長が長くなるほど同一誤差成分が違ってくるために精度が悪くなるという問題を持っている。DGPSにおける同一誤差成分は殆どが疑似距離に含まれる誤差なので衛星仰角に対する重み付け最小二乗法を用いて、受信機位置からの水平方向におけるバイアスを設定する事で誤差補正を行ない，長基線DGPSの測位精度向上を行った。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：松下孝，米川雅士，田中敏幸
9.A Study of The Possibility of Positioning Using Small Number of Satellite （査読付き）	共著	平成21年 8月	ICCAS-SICE 2009, pp.1785-1789	衛星を利用した測位を行う場合は最低4機の衛星が同時に見えなければ測位を行うことはできない。しかし、日本の街中での特徴として建物が高い、道が狭いということが上げられるため、一般的な街中で測位衛星を4機以上補足できる割合は全国の土地面積から考えると約60％しかない。そのため著者は測位衛星が補足できる機数が4機以下でも測位が可能なアルゴリズムについて提案を行った。通常測位は3次元の空間において測位アルゴリズムを解くが、一般的に利用される情報は緯度経度である。よって、著者らは２次元の平面を求める新しい測位アルゴリズムの提案を行なった。 本人担当分： 共著者：米川雅士，田中敏幸
10.Method for accuracy improvement of GPS measurement in the city （査読付き）	共著	平成21年 8月	ICCAS-SICE 2009, pp.3966-3969	衛星を利用した測位を行った場合、衛星からの電波を直接受信するのではなく、ビルなどからの反射波を受診してしまい。測位結果に大きな誤差が含まれる場合がある。これをマルチパスというが衛星を利用した測位を最も多く利用する街中ではこのマルチパスが大きな問題となっている。そのため著者らは衛星からの電波を連続受信する事でマルチパスか直接波かを判断し、マルチパスの場合は連続受信電波に付加される同一誤差を補正する事で、マルチパスを軽減する新しい方法を提案した。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：松下孝，米川雅士，田中敏幸
11.Implementation of an Efficient High-Accuracy Model for Personal GPS Receivers （査読付き）	共著	平成22年 5月	SICE Journal of Control, Measurement, and System Integration, Vol.3, No.3, pp.206-212	衛星を利用した測位結果には誤差が含まれる。この誤差の原因は様々ある。この誤差を軽減もしくは取り除くための研究が世界中で行なわれているが、測位環境についての測位誤差の研究を行っている研究者は殆どいない。本研究では、受信機から衛星の見え方についての補正モデルを提案した。補正モデルとしては衛星の仰角と太陽風の影響を加味したモデルである。これにより、通常の単独測位で利用できる補正方法より高精度な測位結果を得る事ができる。 本人担当分：システム提案・構築から実験結果の論理的に評価し、論文のとりまとめを行なった。 共著者：米川雅士，田中敏幸

12.簡易型バスロケーションシステムへの取り組み	単著	平成22年 11月	情報学フォーラム紀要，奈良産業大学情報学部創設10周年記念，pp.59-63	位置情報を提供するサービスはネットワークの普及と共に注目をあびている。しかし、システムを組むとなると大変なコストがかかる。本研究は幼稚園バスの位置情報を保護者に通知するシステムを低コストで作成した。サーバーシステムにはフリーソフトとPC、位置情報通知装置には携帯電話を利用した。刻一刻と変わる位置情報を自動で取得するために携帯電話でHPにアクセスする事で問題を解決した。
13.衛星を利用した測位を林業へ応用する場合の課題	単著	平成23年 3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報，第1集，pp.59-72	日本は世界最先端のIT国家を目指して制定されたe-Japan戦略に基づき「超高速ネットワークインフラ整備及び競争政策」を実施している。この中に国民へGISを利用した情報共有と提供が記述されている。しかし、GISには300以上の機能があり、様々な事ができるため専門家しかシステムを操作する事ができなくなったという問題点がある。著者は奈良県から県有林を借用しGISの問題点を解決しGISを中心とした産業の確立を行なうシステムを提案した。GISを誰でも利用できるために情報収集からGISと考えた。この情報収集に衛星を利用した位置情報をキーとして複数の情報を自動で関連づける方法を提案した。
14.山林における衛星を利用した高精度測位手法の提案	単著	平成24年 3月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報，第2集，pp.39-52	GISを林業に利用する場合、作業場所は山岳地帯である。山岳地帯は山の傾斜、周りにある他の山、木々によって衛星からの受信状況が悪い環境である。そのため林業ではなかなか衛星を利用した位置情報は利用されてこなかった。著者は人間の徒歩速度から移動共分散をモデル化し最適な測位アルゴリズムを提案した。これにより、他の測位アルゴリズムと比べも安定した測位結果を得る事ができる。
15.新しいGISの提案と林業への応用	単著	平成24年12月	奈良産業大学地域公共学総合研究所年報 第3集，pp.17-33	GISは地理情報をベースに様々な分野の情報を統合管理でき、それら情報を使って評価・解析など様々な機能を有している。しかし、様々な機能を有しているがため専門家でなければ利用することが困難なシステムになっている。この問題に対し、私は一般的な人が利用するためにGPSの位置情報を軸に自動的に全てのデータを統合するGISを提案した。その提案したGISの基本となる地理情報（地図と空中写真）の自動統合について研究を行った。
16.新しい出欠管理システムに向けた提案	単著	平成25年2月	奈良産業大学情報学フォーラム紀要 第8巻，pp.141-157	文部科学省による大学設置基準と通達により、授業時間についての厳格化が求められるようになった。これにより授業への参加が殆どの大学で義務化されている。しかし、出欠確認には時間がかかるためシステムを利用する動きが加速する中、様々な問題も生まれてきている。そこで測位技術を利用した出欠管理システムについて提案する。本論文には室内での携帯電話、スマートフォンの衛星受信状況から、携帯電話、スマートフォンが利用している独自の測位アルゴリズムの評価を行い、提案システムに利用できるか検討し、緯度経度の情報を複数人数集めることで統計的に処理することにより高精度な測位結果を得ることが出来た。

17.携帯端末によるシステム構築	単著	平成25年3月	奈良産業大学紀要 第29集，pp.199-206	平成24年にはスマートフォンの普及率が39.8%になり前年比で普及率は倍増している。また、近年はタブレット端末なども急速に普及していることから、システム構築を考える上で携帯端末の利用は必要不可欠な状態となってきている。しかし、携帯端末は今までのコンピュータと違い、利用者のネットワーク環境が整っていればどこからでもアクセスができ、またGPS受信機、加速度センサー、タッチパネルなど様々なセンサー類も装備していることから、構築できるシステムの幅が大きく広がったことは言うまでもない。この携帯端末を使ってシステムを構築する場合にどのようなシステムが構築可能か検証するため、各種センサー類の精度、ネットワーク環境におけるデータ通信量と安定度について評価し、システム構築の可能性について論じた。
（その他）				
「口頭発表」				
1.地域公共交通におけるＬＢＳ	—	平成18年11月	第23回誘導制御シンポジウム，pp. 81-84 （於宇宙航空研究開発機構 航空宇宙技術センター飛行場分室）	福島県いわき市、常磐交通と共に産学連携で地方公共交通のあり方について研究を行った結果を発表した。地方の公共交通機関は国から地方への交付金削減、若い世代の都会への流出、一般企業のサービス向上などにより公共交通機関が利用されなくなってきた。利用されないため本数の削減、より一層の利用率低下と地方交通は負のスパイラルに陥り倒産が相次いでいる。よって、バスを路線と考えず路面と考えて運行する事を試験的に実施した。バスの位置はネット環境から確認ができ、利用者がいるバス停のみを結ぶような路線をシステムで毎回決定するようなフレキシブル路線システムを導入したバス運行を実現した。これにより、駅前の商店街でバスが車での間飲食をする人が増え、町の活性化に繋がった。 本人担当分：本運用システムの開発責任者とシステムによる評価担当 共著者：浅井義彦，米川雅士，高橋輝，星野宇宙，西村敏充
2.電離層遅延補正によるGPS測位精度の向上	—	平成18年11月	GPS／GNSSシンポジウム2006，p.214 （於東京海洋大学）	GPSを利用した測位には誤差が必ず付加される。様々な要因があるが、最も大きな要因は電離層である。そのため世界中で多く研究されている分野の1つである。最も一般的な補正方法はクロブッチャーモデルの利用である。これは、GPS衛星から送信されてくるデータに補正に必要な情報が格納されているからである。このクロブッチャーモデルは日照時間による影響で電離層の誤差料を計算し補正する方法である。本発表ではクロブッチャーモデルに衛星の仰角を加味した新しいモデルの提案について発表した。これは、仰角が低ければ電波が電離層を通過する距離が長くなる事を差している。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：秋山菜穂，米川雅士，田中敏幸
3.複数基準局を用いたＧＰＳ衛星の軌道誤差低減	—	平成18年11月	GPS／GNSSシンポジウム2006，p.217 （於東京海洋大学）	通常の軌道決定は長時間衛星と地上局の距離を観測して予測する。しかし、GPSにおいては日本国内に国土地理院管轄の地上局が1500カ所以上設置してある。また、測位位置精度2mm程度なら５時間程度の連続受信で求める事ができるため、正確な座標の地上局は簡単に定義する事ができる。この地上局を複数利用する事でGPS衛星の軌道と位置を正確に求めるためのアルゴリズムについて発表した。本方法で正確なGPS衛星の軌道と位置を求める事ができれば、そのデータから別の受信機の測位精度向上も望める。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：野村昌史，米川雅士，田中敏幸

4.測位衛星システム複数併用による測位精度の向上	—	平成18年11月	GPS／GNSSシンポジウム 2006, p.220 (於東京海洋大学)	電離層の補正には経度緯度方向を5°毎の格子点に分けて広域の補正値を求めるIGPという手法があるが、これは複数の地上局とその補正値を送信するための設備が必要となる。本発表は２周波受信である程度の予測値を立て、そこから単独地上局で正確なIGPを導きだす方法について発表した。また、キーポイントして同一方向の衛星を利用するとIGPの精度が上がる事から、ロシアの測位衛星システムGLONASSを併用している。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：清水聡, 米川雅士, 田中敏幸
5.搬送波を利用した高精度衛星測位方法の可能性と実現	—	平成19年10月	第24回センシングフォーラム資料, 1A2-3, pp.37-41 (於東北文化学園大学)	搬送波を使った測位は擬似距離を伝送路時間から計算するのではなく搬送波の波の数をカウントすることでより正確な擬似距離を求めるられるため正確な測位結果を得ることができる。しかし、この正確な波の数を求めるために様々な制約がある。受信機とは別に正確な位置がわかっている地上局が必要である。地上局の側でないと高精度な測位はできない。受信開始に時間がかかる。受信を開始しだしたら同一衛星を測位に利用し続けなくてはならないなどあるが、本発表では通常の単独測位で利用されている各誤差軽減手法と受信状況を加味したモデルによる補正によって高精度に擬似距離を求めることが可能となった。これにより短時間で擬似距離の波の数を求めることができるか可能性について発表した。 本人担当分：システム提案・構築から実験結果の論理的に評価し、論文のとりまとめを行なった。 共著者：米川雅士, 田中敏幸
6.少衛星数下における測位方法の提案	—	平成19年11月	GPS／GNSSシンポジウム 2007, p.283 (於東京海洋大学)	衛星を利用した測位は同時に4機以上の衛星から受信して測位を行なっている。しかし、一般的な街中で宇宙を飛行している衛星を4機以上補足できないことが多い。そのため 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：野村昌史, 米川雅士, 田中敏幸
7.単一基準局を用いた長基線DGPSの測位精度向上	—	平成19年11月	GPS／GNSSシンポジウム 2007, p.286 (於東京海洋大学)	正確な位置がわかっている基準局から補正情報を受け取り測位精度向上を目指した方法であるDGPSは基準局と受信機の距離が長くなるほど同一誤差成分が違ってくるために精度が悪くなるという問題を持っている。DGPSにおける同一誤差成分は殆どが疑似距離に含まれる誤差なのか検討を行い、長基線DGPSの測位精度向上の可能性について発表した。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：松下孝, 米川雅士, 田中敏幸
8.GPSを用いた二輪車走行時の測位計算法	—	平成19年11月	GPS／GNSSシンポジウム 2007, p.287 (於東京海洋大学)	高速走行中の二輪車にGPS受信機を設置した際、測位精度が大きく悪くなる事がわかった。そのためどのような場合に測位精度が悪くなるのか検証を行った。悪くなる点としては、カーブを曲がるときであり、アンテナの指向方向が変わるため補足できる衛星の状態が時々刻々変化する。そのために測位結果が悪くなってしまう事がわかり、これについて発表を行った 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：林昌輝, 米川雅士, 田中敏幸

9.サイクルスリップ時における最適な測位復元手法	—	平成19年11月	GPS／GNSSシンポジウム 2007，p.288 （於東京海洋大学）	搬送波を利用した衛星測位において1つの制約事項であった「測位が開始された場合、同一衛星を利用し続けなければならない」について、この事象をサイクルスリップというが、これは波の数を求めた衛星と受信機の間に建物などが入り受信が途切れてしまうことを言う。通常はサイクルスリップが起きた場合は、波の数を最初から求め直さなくてはならないが、本発表で提案したサイクルスリップ復元方法を利用すれば、ある程度おサイクルスリップが起きても高精度な測位が復旧できる、これは実測値と予測値の開き方に規則性があったため、式による補正で実現させた。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：秋山菜穂，米川雅士，田中敏幸
10.GPSを用いた３衛星下における測位アルゴリズム	—	平成20年 9月	第25回センシングフォーラム資料，2C1-1，pp.263-267 （於佐賀大学）	GPSを用いた測位には最低でも4衛星からの直接信号を同時に受信する必要がある。しかし、一般的に利用される街中では建物や道幅の狭さから4機の衛星情報を同時に受信する事は難しい。そこで、著者らは新たな計算アルゴリズムの開発によって，3衛星を用いた測位アルゴリズムについて提案した。本手法は3機の衛星情報を連続した時間で取得し、6機の衛星が見えていると仮定し測位に利用したアルゴリズムである。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：野村昌史，米川雅士，田中敏幸
11.搬送波を利用した新測位方法の提案	—	平成20年 9月	第25回センシングフォーラム資料，2C1-3，pp.272-277 （於佐賀大学）	搬送波を使った測位は擬似距離を伝送路時間から計算するのではなく搬送波の波の数をカウントすることでより正確な擬似距離を求めるられるため正確な測位結果を得ることができる。しかし、この正確な波の数を求めるために様々な制約がある。受信機とは別に正確な位置がわかっている地上局が必要である。地上局の側でないと高精度な測位はできない。受信開始に時間がかかる。受信を開始しだしたら同一衛星を測位に利用し続けなくてはならないなどあるが、本発表ではこの波の数を受信機単独でカウントするアルゴリズムについて発表を行った。波の数を数える前に高精度なモデルによる擬似距離の補正を行い。その議事距離を元に波の数を予測し、正確な波の数に高速で絞り込む手法を提案した。 本人担当分：システム提案・構築から実験結果の論理的に評価し、論文のとりまとめを行なった。 共著者：米川雅士，田中敏幸
12.街中でのＧＰＳ搬送波測位アルゴリズム	—	平成20年 9月	第25回センシングフォーラム資料，2C1-5，pp.283-287 （於佐賀大学）	衛星を利用した測位の中で、最も高精度な測位は搬送波を利用した測位である。しかし、搬送波を利用した測位はなかなか利用されない。それは市街地で利用した場合，高層建築物にさえぎられて，一時的にGPS衛星からの直接信号が受信できなくなることがある。これをサイクルスリップという。街中ではこのサイクルスリップが多発するため利用が困難になっている。よって本発表はサイクルスリップから高速で復旧する方法について発表している。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：秋山菜穂，米川雅士，田中敏幸

13.街中でのGPS単独測位の精度改善法	—	平成21年 9月	第26回センシングフォーラム資料，2C1-3，pp.289-293 （於東京工業大学）	衛星を利用した測位を行った場合、衛星からの電波を直接受信するのではなく、ビルなどからの反射波を受診してしまい。測位結果に大きな誤差が含まれる場合がある。これをマルチパスというが衛星を利用した測位を最も多く利用する街中ではこのマルチパスが大きな問題となっている。そのため著者らは衛星からの電波を連続受信する事でマルチパスか直接波かを判断し、マルチパスの場合は連続受信電波に付加される同一誤差を補正する事で、マルチパスを軽減する新しい方法を提案した。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：松下孝，米川雅士，田中敏幸
14.少衛星による測位実現の可能性について	—	平成21年 9月	第26回センシングフォーラム資料，2C1-5，pp.300-304 （於東京工業大学）	衛星を利用した測位を行う場合は最低4機の衛星が同時に見えなければ測位を行うことはできない。しかし、日本の街中での特徴として建物が高い、道が狭いということが上げられるため、一般的な街中で測位衛星を4機以上補足できる割合は全国の土地面積から考えると約60％しかない。そのため著者は測位衛星が補足できる機数が4機以下でも測位が可能なアルゴリズムについて提案を行った。通常測位は3次元の空間において測位アルゴリズムを解くが、一般的に利用される情報は緯度経度である。よって、著者らは２次元の平面を求める新しい測位アルゴリズムの提案を行なった。 本人担当分：システム提案・構築から実験結果の論理的に評価し、論文のとりまとめを行なった。 共著者：米川雅士，田中敏幸
15.衛星による奈良県林業モニターに関する研究	—	平成23年 3月	平成22年度研究所経過報告会 （於奈良産業大学）	奈良県の歳入は下がり続けており雇用も減少している。このような状況で全国7位の森林保有率を誇る奈良県として林業を1つの産業として確立する事は、産業の確立、環境問題、資源問題にもよい結果をもたらす事について発表した。その方法として感覚と経験で運用している林業を情報統合しハウスメーカーまで共有の情報を知る事ができるシステムであるGISを利用する方法を提案した。また、GISには問題点がありその問題点を解決する方法についても話した。
16.抵コスト位置測位システム構築とソフトウェアによる補正方法の提案	—	平成23年11月	第6回パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会 （於大東文化大学）	位置情報を提供するサービスはネットワークの普及と共に注目をあびている。しかし、システムを組むとなると大変なコストがかかる。本研究は幼稚園バスの位置情報を保護者に通知するシステムを低コストで作成した。しかし、低コストで仕上げたために測位精度の悪さ、補正情報の取得の難しさから、簡易受信機による補正を提案した。 本人担当分：解決方法の提案と宇宙工学的な見地から評価し、研究指導を行なった。 共著者：斎藤悟志，米川雅士
17.山林における作業状況情報収集について	—	平成24年 3月	平成23年度研究所経過報告会 （於奈良産業大学）	提案する森林データ統合利用型GISは今までのGISと違い、利用しやすさと運用のしやすさを追求するために入力データ取得から1つのシステムとして考える考え方を提案している。よって、私は地上と空中のデータ取得方法について提案手法と結果を発表した。地上のデータ取得は林業に利用する場合、作業場所は山岳地帯である。山岳地帯は山の傾斜、周りにある他の山、木々によって衛星からの受信状況が悪い環境である。そのため林業ではなかなか衛星を利用した位置情報は利用されてこなかった。そのため最適な作業場所を見つけ出す方法として最適フィルタの設計を行ない、一般的に利用されている最小二乗法と比較した。空中のデータ取得は誰でも簡単にが重要であるため、人間が直接操縦しなくてもよいように自動航法ラジコンヘリコプターの制作を進めている事を発表した。想定している機材は全てそろった事も合わせて報告した。

18.自動オルソ化に向けた空中写真の新しい高精度測位アルゴリズムの提案	—	平成24年10月	地理情報システム学会第21回研究発表大会（於広島修道大学）	GISで基本となる地理情報（空中写真と地図情報）の取得には大変な労力とお金がかかる。そのためGISの地理情報は古いままで利用している事が多々ある。私は空中写真を自律航法ができるラジコンヘリコプターを安価で作成し、手軽に空中写真を取得する方法とその空中写真の連続性から空中写真の取得位置を高制度化させる新しい測位アルゴリズムを提案し、様々な速度と高度において新しいアルゴリズムが正しく測位ができるのか報告した。 また、本大会では司会者を努め発表者の審査委員の一人としても参加した。
19.自動航法ラジコンヘリコプターによる空中写真取得と高精度位置情報取得方法の提案	—	平成25年 3月	平成24年度研究所経過報告会（於奈良産業大学）	近年GISを使った情報共有が急速に進んでいるが、GISには多くの評価、解析、情報統合など約300種類以上の機能が備わっているため、専門家以外には利用が難しいシステムとなっている。そこでGISを誰でも利用できるシステムとするために研究を進めている。本発表では2種類の成果を発表した。1点目はGISの基本データの1つとなる空中写真を安価で取得するために自動航法ラジコンヘリコプターを制作した事。2点目は自動航法ラジコンヘリコプターが取得した空中写真の自動オルソ化に向けて写真に付加する位置情報を高精度化するために新しい測位アルゴリズムを構築した事を報告した。
20.スマートフォンを用いた星座鑑賞用ARアプリケーション	—	平成25年 12月	第8回パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会（於大阪国際大学）	スマートフォンには各種センサが標準装備されており、スマートフォンによる様々な新しい利用用途が日々発表されている。そこでスマートフォンの各種センサとカメラを並列で利用することにより、カメラに仮想の星空を映し出すことで、都市部などでもきれいな星空を観測できる事を目的として発表した。 この研究は、朝や夜も関係なく、天気に左右されることもなく、また街の明かりなども気にすることなく、身近に星空を感じることができ教育など利用することが期待できる。
21.空中写真からオルソフォトへの自動変換アルゴリズムの検討	—	平成26年 9月	第31回センシングフォーラム（於佐賀大学）	ドローンなどが簡単に購入することができるようになり、個人で空中写真を楽しむ人々が増えてきている。この空中写真を研究用資料として利用する場合は様々な前処理を行い歪みを修正しなくてはならない。しかし、現在は人間が時間をかけて手作業で実施している空中写真の歪み修正を自動で取り除く手法を提案する。これにより、災害時取得した空中写真を知識のない人でもすぐに利用することが出来るため、迅速な救助活動計画の立案、2次災害の防止など様々な利用用途が考えられる。
22.スマートフォンを用いた星座鑑賞用ARアプリケーション	—	平成26年 12月	第9回パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会（於慶應義塾大学 日吉キャンパス）	ネットワークが発達した近代において、絶対必要な技術としてセキュリティがある。このセキュリティは悪意ある第３者から自分のデータを守ることを前提として様々な技術が研究・開発されている。しかし、近年はデータ閲覧の権限を持っている管理者が金銭目的のためにデータを盗難する事件が続いている。このような事件に対しては今までのセキュリティは脆弱である。よって、私はデータ自身に開示できる条件を付加することで、個人認証と開示場所情報の2つをセキュリティキーとして利用することで、近年起きている事件にも対応できるセキュリティ度の高い利用方法を提案する。

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　片岡　　英己

研究分野	研究内容のキーワード
デジタル・アーカイブ	デジタル・アーカイブ

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例		
1）プロジェクト演習	平成17年9月～平成24年3月	「高取城」「藤原京」「郡山城」の3つのCG再現プロジェクトを通して、関わった学生達は、通常の一方向的な授業では学ぶ事のできなかった、技術の向上や知識の習得に並ぶ大切な、信頼関係を築くことの大切さ、得意分野を持つことで存在意義が確立される重要さ、期限を決めてそれを確実に達成する計画の大切さ、全員で作り上げたものが実際の地域現場で活用され喜ばれているのを見ての達成感を得ることにつながった。結果、学生達に社会性を基礎にした向上心が芽生えた。
2）コンピュータ操作教育における学習の確実性を高める工夫「3回操作」	平成20年4月～現在	コンピュータの操作教育の確実な学習成果を得る為に、目的の操作を行わせる際、「3回操作」を行っている。これは、一度その操作を見ただけではわからない学生がいるなかで、まず一回目はその操作を見るだけ、2回目は一緒にやってみる、3回目は2回目ででもついてこられなかった者に対してもう一度その操作を見せるといったもので、これにより授業についてこられなかった学生も確実に操作を覚えることになり、授業がスムーズに進めらることと、アンケート結果からも学生の授業に対する満足度が上がった。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
3）ティーチング・アシスタントの活用	平成20年4月～現在	授業のなかで、ティーチング・アシスタントを配置することにより、わからない学生に対するサポートの迅速性が上がった。またこのアシスタントの人選も、前年度にその授業で頑張っていたり、他の学生のサポートを積極的にする学生を優先的に採用するよう手配した。
4）電子ネットワーク上にある「教材箱」と「提出箱」の活用	平成20年4月～現在	担当科目全般で、電子ネットワーク上にある「教材箱」と「提出箱」の活用をした。このことにより、授業終了後の教室や自宅からの教材の閲覧、課題の提出にも役立ち、教材を予習や復習にも活用できるようにした。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
2　作成した教科書，教材		
1）講義用教材「３次元CG」	平成20年4月～現在	奈良産業大学　情報学部　情報学科の助教として担当の「３次元CG」（専門科目、2年次配当、通年、選択4単位）において使用している。内容は、3次元のＣＧで作成する基本的なテーマ「工業製品」「建築」「キャラクター」「ロボット」を作る方法から始め、最後には自分のオリジナル作品が作れるような流れになっている。教材は電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。
2）講義用教材「デジタルアーカイブ」	平成20年4月～現在	奈良産業大学　情報学部　情報学科の助教として担当の「デジタルアーカイブ」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用している。内容は、「デジタルアーカイブとは何か」「情報管理と著作権」「アーカイブの計画」「撮影技術」「データベースの構築」など、デジタルアーカイブの知識と技術がバランスよく学べるような教材である。教材は、電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。

３）講義用教材「コンピュータグラフィックス」	平成20年4月～現在	奈良産業大学　情報学部　情報学科の助教として担当の「コンピュータグラフィックス」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用している。内容は、実際に世の中で使用されている商業デザインを教材に、その技術的な工夫や制作意図を考える教材にしている。教材は、電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。
４）講義用教材「基本パソコン演習Ⅰ」	平成22年4月～現在	大阪学院大学　非常勤講師として担当の「基本パソコン演習Ⅰ」（必修科目、１年次配当、半期ごと、選択2単位）において使用している。内容は、マイクロソフトの「word」「PowerPoint」の基本や電子メールの使い方や原理、情報倫理など。教材は電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
５）講義用教材「基本パソコン演習Ⅱ」	平成22年4月～現在	大阪学院大学　非常勤講師として担当の「基本パソコン演習Ⅱ」（必修科目、１年次配当、半期ごと、選択2単位）において使用している。内容は、マイクロソフトの「Excel」の基本や応用など。教材は電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
６）「使って覚える基本Photoshop」（プリント冊子）	平成17年4月1日	・奈良産業大学　情報学部　情報学科　平成１７年度の科目「情報学演習ＩA」に使用 ・パソコンソフト「Photoshop」初心者の為の画像処理基礎教育のテキスト ・初心者でもわかりやすい様に基本操作に特化して作成したこともあり、学生には達成感が得られた。
７）「使って覚える基本Illustrator」（プリント冊子）	平成17年4月1日	・奈良産業大学　情報学部　情報学科　平成１７年度の科目「情報学演習ＩA」に使用 ・パソコンソフト「Illustrator」初心者の為の画像処理基礎教育のテキスト ・初心者でもわかりやすい様に基本操作に特化して作成したこともあり、学生には達成感が得られた。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
８）「画像処理とデジタルアルバム作成」（プリント冊子）	平成17年8月1日	・奈良産業大学　夏休みの短期特別講座に使用 ・POAYパソコン教室（高齢者のパソコン教室）に使用する為のテキスト ・高齢者向けに、文字や画像をかなり大きめに作成したこともあり、高齢者には好評であった 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
９）「準デジタル・アーキビスト養成講座テキスト」（プリント冊子）	平成19年8月16日	・年２回行われる資格試験「準デジタル・アーキビスト」養成の為の教材
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）高取城CG再現プロジェクト完成発表会講演	平成18年11月26日	奈良県高市郡高取町のリベルテホールにて、一般の方約300名に対しCG完成発表会を行った
２）藤原京ＣＧ再現プロジェクト中間発表講演	平成20年3月3日	奈良県橿原市のかしはら万葉ホールにて、一般の方約800人に対しCG完成中間発表会を行った
３）「デジタル・アーキビストについて」講演	平成20年9月17日	奈良産業大学図書館にて、奈良県内の大学・専門図書館関係者に向けてデジタル・アーキビストについての講演を行った
４）教職員のための公開講座　講師	平成20年12月25日	大阪、奈良の小学、中学、高校の教員向けに３ＤＣＧの講座を行った 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】

５）「超時空フォーラム　シルクロードから藤原・平城京へ」講演	平成21年3月15日	帝塚山大学にてＮＰＯ法人ユニバーサロン主催のフォーラムで、藤原京ＣＧ再現の取り組みについて講演を行った
６）「コンピュータグラフィックスでよみがえる藤原京」講演	平成21年11月7日	奈良産業大学主催「2009なら講座」で、奈良学園登美ヶ丘キャンパスで講演を行った
７）「遺構で残る歴史遺産の観光への活かし方」講演	平成21年11月19日	「地域紹介・観光ボランティアガイド全国大会」の第４分科会「遺構で残る歴史遺産の観光への活かし方」での藤原京の例の発表とアドバイザーとして参加
８）平城遷都1300年記念講座　講演	平成21年11月23日	「コンピュータグラフィックスでよみがえる藤原京」と題し、東京奈良まほろば館で講演を行った
９）藤原京ＣＧ再現プロジェクト完成発表講演「藤原京再現CG完成記念シンポジウム」	平成22年2月28日	イオンモール橿原アルルにて、プロジェクトメンバーと共に一般の方対象に藤原京CGの完成発表を行った
１０）近畿工業高等学校科長連絡協議会総会での講演 演題：「藤原京CG再現プロジェクトと学生達」	平成22年6月11日	奈良文化財研究所　平城京跡資料館　大講堂にて藤原京CG再現プロジェクトの取組みについて講演を行った
１１）王寺町りーべるカレッジ　講演 演題「文化遺産ＣＧ再現によって見えてくる世界」	平成22年10月23日	奈良産業大学の地域貢献として地元地域の方々に対して行う公開講座で講演を行った
１２）　奈良県立高田高等学校 演題「文化遺産ＣＧ再現によって見えてくる世界」	平成23年9月14日	高田高等学校にて、歴史を学ぶ生徒達に対しＣＧ再現プロジェクトについて講演を行った
１３）　奈良産業大学「大和郡山城CG発表展示会」	平成24年3月17日～20日	大和郡山市から依頼があり始まった郡山城CGプロジェクトの完成したCGの発表展示会を行った
５　その他		
１）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）上級デジタル・アーキビスト	平成20年　3月	文化の基礎、文化情報の収集、管理・流通・利用の処理および、知的財産権・プライバシーなどを理解し、実践できるものに与えられる資格
２　特許等		
１）特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）特記事項なし		
４　その他		
１）特記事項なし		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
特記事項なし				

（学術論文）				
1.「藤原京の３ＤＣＧ再現による万葉歌の視覚再現とその教育的利用方法について」 （修士論文）	単著	平成20年3月	岐阜女子大学	万葉集は日本最古の歌集で、多くの歌人により数々の傑作が生み出された。この研究では実際に歌が詠まれたであろう風景をＣＧ（コンピュータグラフィックス）で再現し、万葉歌がどのような状況で詠われたものかを映像として検証し、その成果によって、万葉集を学ぶ為の教材としての活用方法を提示する。 ここでは研究の対象を「藤原京」に関する歌２首を例に研究を行ったA4判　全47頁
2.「文化遺産のCG再現とそれを活用した地域振興について」 （査読付）	共著	平成22年3月	文化経済学　第7巻1号 （通算28号） P.33～P.40	歴史的建造物等の文化遺産の中には、現在では損壊や消失の結果、当時の様子がわからない状態にある物が多く存在する。本研究論文は、これらを史実や調査に基づいて3次元ＣＧのプログラムを用いたデジタル・アーカイブとして再現することで、当時の様子を甦らせ、地域振興や観光促進に活用することで、現地を訪れた訪問者に、より一層の文化遺産の価値を感じてもらい、交流人口の増加に繋げていく事の可能性について検討した。
3.「藤原京CG再現プロジェクト」	単著	平成22年10月	奈良産業大学　情報学フォーラム10周年記念誌 P.65～P.73	藤原京CG再現プロジェクトについて、学生の制作活動を中心にまとめた活動記録。
4.「郡山城CG再現プロジェクトの活動記録」	単著	平成25年2月	奈良産業大学　情報学フォーラム紀要P.33～P.39	郡山城CG再現プロジェクトについて、学生の制作活動を中心にまとめた活動記録。
（その他）				
「学会発表」 1.「デジタル・アーキビスト養成コースの設置について」	単独	平成19年8月20	日本教育情報学会 2007年次大会 （於　常磐大学）	「デジタル・アーキビスト養成コースの設置について」と題して本学での取り組みの学会発表を行った。
「学会発表」 2.「文化遺産のCG再現とそれを活用した地域振興について」	単独	平成20年8月	文化経済学会〈日本〉 2008年次大会 （於　北海道大学）	現存しない歴史遺産をCGで復元することにより、観光資源として地域の観光促進に繋げていけることの可能性を追求した
「情報教材作成」 1.講義用教材「３次元CG」	単独	平成20年4月～ 現在		奈良産業大学　情報学部　情報学科の助教として担当の「３次元CG」（専門科目、2年次配当、通年、選択4単位）において使用している。内容は、3次元のＣＧで作成する基本的なテーマ「工業製品」「建築」「キャラクター」「ロボット」を作る方法から始め、最後には自分のオリジナル作品が作れるような流れになっている。教材は電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。
「情報教材作成」 2.講義用教材「デジタルアーカイブ」	単独	平成20年4月～ 現在		奈良産業大学　情報学部　情報学科の助教として担当の「デジタルアーカイブ」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用している。内容は、「デジタルアーカイブとは何か」「情報管理と著作権」「アーカイブの計画」「撮影技術」「データベースの構築」など、デジタルアーカイブの知識と技術がバランスよく学べるような教材である。教材は、電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。
「情報教材作成」 講義用教材「コンピュータグラフィックス」	単独	平成20年4月～ 現在		奈良産業大学　情報学部　情報学科の助教として担当の「コンピュータグラフィックス」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用している。内容は、実際に世の中で使用されている商業デザインを教材に、その技術的な工夫や制作意図を考える教材にしている。教材は、電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。

「情報教材作成」 3.講義用教材「基本パソコン演習Ⅰ」	単独	平成22年4月～ 現在		大阪学院大学　非常勤講師として担当の「基本パソコン演習Ⅰ」（必修科目、１年次配当、半期ごと、選択2単位）において使用している。内容は、マイクロソフトの「word」「PowerPoint」の基本や電子メールの使い方や原理、情報倫理など。教材は電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
「情報教材作成」 4.講義用教材「基本パソコン演習Ⅱ」	単独	平成22年4月～ 現在		大阪学院大学　非常勤講師として担当の「基本パソコン演習Ⅱ」（必修科目、１年次配当、半期ごと、選択2単位）において使用している。内容は、マイクロソフトの「Excel」の基本や応用など。教材は電子ネットワーク上にある「教材箱」に回ごとにデジタルデータで提供するが、プリントアウトしてファイルに綴じる事も可能。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
「情報教材作成」 5.「使って覚える基本Photoshop」 （プリント冊子）	単独	平成17年4月～ 現在		・奈良産業大学　情報学部　情報学科　平成１７年度の科目「情報学演習ＩA」に使用 ・パソコンソフト「Photoshop」初心者の為の画像処理基礎教育のテキスト ・初心者でもわかりやすい様に基本操作に特化して作成したこともあり、学生には達成感が得られた。
「情報教材作成」 6.「使って覚える基本Illustrator」 （プリント冊子）	単独	平成17年4月～ 現在		・奈良産業大学　情報学部　情報学科　平成１７年度の科目「情報学演習ＩA」に使用 ・パソコンソフト「Illustrator」初心者の為の画像処理基礎教育のテキスト ・初心者でもわかりやすい様に基本操作に特化して作成したこともあり、学生には達成感が得られた。 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
「情報教材作成」 7.「画像処理とデジタルアルバム作成」 （プリント冊子）	単独	平成17年8月～ 現在		・奈良産業大学　夏休みの短期特別講座に使用 ・POAYパソコン教室（高齢者のパソコン教室）に使用する為のテキスト ・高齢者向けに、文字や画像をかなり大きめに作成したこともあり、高齢者には好評であった 【関連授業科目：教育方法技術論（初等）（中等）】
「情報教材作成」 8.「準デジタル・アーキビスト養成講座テキスト」 （プリント冊子）	単独	平成19年8月～ 現在		・年２回行われる資格試験「準デジタル・アーキビスト」養成の為の教材
「情報教材作成」 9.「図書館十進分類法に基づく図書検索のホームページ作成方法」	単独	平成20年4月～ 現在		奈良産業大学　情報学部　情報学科の担当の「デジタルアーカイブ」（専門科目、2年次配当、半期、選択2単位）において使用している。

教　育　研　究　業　績　書

平成26年3月31日

氏名　　玉野　哲也

研究分野	研究内容のキーワード
Visual Communication Design	Art Direction, Creative Direction, Planning Direction, Graphic Design, C.I Planning, Editorial Design, Web Design, Graphical User Interface Design,Infographic, Design Consulting, Design Education, Design Research, Workshop, 医療, 国際支援,危機管理, NPO/NGO, 地場産業, 商品開発.

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）スクーリング授業における指導の実践	平成14年7月から現在に至る	武蔵野美術大学 通信教育学部 デザイン情報学科 コミュニケーションデザインコースの非常勤講師として担当の「グラフィックデザイン基礎1」（専門科目/1年次配当/夏秋期添削課題/必修１単位）におけるスクーリングの実践例は以下の通りである。　スクーリング初日午前に前提講義を行い、課題説明、過去の参考作品の紹介、参考資料による「情報の線分編集」の説明を行う。また、前提講義に於いて、以下の事を学生に伝える。 １.スタートラインに於いてアイデアが悪いものに対しては決して制作許可を出さない。 ２.作品提出に於いてクオリティーの低いものには決して提出許可を出さない。 ３.提出時間は厳守しなくてはならない。 ４.課題参加者全員による自由投票で評価が決まる。 課題制作の進行過程に於いて「アイデア出し」「提出」の２ヶ所に、非常に厳しいチェックポイントを設けた。スクーリング初日午後より学生をグループに分け、アイデア出しを開始する。初日のアイデアにOKが出ない場合、通称「１００出し」と呼ばれるアイデア出しのトレーニング（学生の状況に応じて、アイデアを最大で１００案考えさせる宿題）を行う。翌日に宿題のチェックを行うが、指定されたアイデアの数が揃っていない場合、揃うまでアイデアチェックを行わない。 最終日に講師による最終チェックを経て、提出にOKが出た学生から順次提出。午後２時を作品提出時間とするが、提出時間に間に合わぬ学生には、10分遅れるごとにマイナス1点のペナルティーが科せられる。午後４時までに必ず提出出来るようにきめ細かく指導を行う。 講評は、まず、課題参加者全員に付箋３枚（３票）を渡し、「自分が好きな作品３つ」に無記名での投票を行なわせる。得票数1位の学生には時間無制限、投票数上位（５名程度）の学生には３分、その他の学生には１分の時間を与え、課題参加者全員にプレゼンテーションを行わせる。プレゼンテーションの内容も点数の評価対象とする。　以上の教育実践を行う事は、学生の「限界の壁」を短期間で突破させる事に役立ち、またクリエイティブに対する学生自らの適性を知る事に役立っている。

２）添削課題における指導の実践	平成14年9月から現在に至る	武蔵野美術大学 通信教育学部 デザイン情報学科 コミュニケーションデザインコースの非常勤講師として担当の「グラフィックデザイン基礎2」（専門科目/２年次配当/冬期添削課題/必修１単位）における添削の実践例は以下の通りである。 添削１回目に於いては、学生にビジュアルのアイデアスケッチ３点、及び、そのアイデア（テーマ）に対する簡単な文章説明を別紙にて提出させる。 提出されたビジュアルのアイデアスケッチ（文章説明は伏せる）を、３名の講師（原則誰でも良い）に見せ、以下の２点を記してもらう。 １,「画面から視覚的に何を認知・認識する事が出来るか」を即物的に抽出。 ２,「その認知・認識出来る情報から、何についてのテーマを表現しているか」を推測。 添削1回目に於いて重要な事は、「あなたの表現は他者に伝わっていない」「見る側が制作意図と全く違う捉え方をしている」という状況を、まず、学生に理解させる事にあり、返却時に添付される別紙指導書、及び、提出テーマに関する様々な資料をもとに、他者に的確に視覚伝達するために必要な物事の考え方、また、アイデア出しのヒント（ヴィジュアル・グラマー／添削課題用補助教材／別紙指導書／平成18年より配布）などを学ぶ。 添削1回目は殆どの場合、再提出とし、添削２回目以降に於いては、前回提出のアイデアや表現との比較により、表現に進歩性が見受けられた時点で最終提出指示を出す。 以上の教育実践を行う事により、最終提出物のクオリティーの向上、並びに、学生の課題理解に繋がっている。
３）各学生に適切な教科書を授業内で制作させる実践	平成23年4月から現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「ウェブデザイン基礎／HTML演習」（専門科目/1年次配当/半期/2単位）、「ウェブデザイン／Webサイト開発演習」（専門科目/2年次配当/通年授業/2単位）において、教科書を使用せずに、直接的にウェブサイトデザインを行いながら、「オンデマンド教科書」を制作させる課題を実践している。これは、各学生の理解度やスキルの差により教科書選定が困難な事が理由に挙げられる。そこで、各学生にとって最も適切な教科書は授業内で自ら制作したものであるという実務経験上の判断に基づき、学生自らの教科書を授業内で制作する演習形態を採っている。結果として、学生の理解度やスキルに応じた適切な教材を、授業内で効率良く制作する事が出来ている。
４）自分自身を加工していく楽しさの中で画像処理技術を身に付ける課題の実践	平成23年4月から現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「デジタル表現入門／画像処理入門」（専門科目/1年次配当/半期/2単位）において「デジタル・デッサン」と題する、自分の顔写真（セルフポートレイト）を用いた画像加工演習を行っている。１年次の最初の授業にてスタジオ撮影した自分自身の顔写真が、授業で毎回、Adbe Photoshopによって加工されていく事により、学生は授業を楽しみながら画像処理の基本的なスキルを身につける事が出来ている。
５）自分自身を再発見していく過程の中でエディトリアルデザインを身に付ける課題の実践	平成23年4月から現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学演習Ⅰb／情報学ゼミⅡA」（専門科目/2年次配当/半期/2単位）において「マインド・パンフ」と題する自らの紹介を兼ねた、文字組が縦組横組双方向のパンフレット制作を行っている。自らを構成する人や物、子供の頃の思い出、将来の夢などをディスカッション形式でグループ発表し、それらの情報を編集した上で一つの表現物として制作する課題である。制作の過程で、自らの過去と今と将来の追求して行く事により、エディトリアルデザインのスキルを習得するだけでなく、学生の自分自身の再発見に繋がっている。

2　作成した教科書，教材		
1）スクーリング課題用補助教材	平成18年9月から現在に至る	武蔵野美術大学 通信教育学部 デザイン情報学科 コミュニケーションデザインコースの非常勤講師として担当の「グラフィックデザイン基礎1」（専門科目/1年次配当/夏秋期添削課題/必修１単位）に於いて使用している。また、奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学演習Ⅱ（グラフィックデザイン）」（専門科目/3年次配当/通年授業/必修４単位）にて使用している。内容は以下の通り。 「情報の線分編集」 情報の線的編集、情報の面的編集、情報の立体編集、線分要素の性質について。
2）添削課題用補助教材	平成18年9月から現在に至る	武蔵野美術大学通信教育学部デザイン情報学科コミュニケーションデザインコースの非常勤講師として担当の「グラフィックデザイン基礎2」（専門科目/２年次配当/冬期添削課題/必修1単位）に於いて使用している。また、奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当の「情報学演習Ⅱ（グラフィックデザイン）」（専門科目/3年次配当/通年授業/必修４単位）にて使用している。　６項目から構成される教材であり、項目は以下の通り。 1，共通の認識は何かを探る 2，視覚表現に用いる要素の多面的な意味を探る 3，発信側から受信側への表現伝達と理解のプロセスを探る 4，なぜ伝わる？なぜ伝わらない？を探る 5，視覚表現の文法的構造を探る（ヴィジュアルグラマー） 6，参考作品からヒントを得る 付録として国語辞書8万語から選び出したアイデア出しに役に立つ3000語のリストを添付。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）特記事項なし		
5　その他		
1）特記事項なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）特記事項なし		
2　特許等		
1）医療具用容器及び医療キット PCT/JP2009/058679 特願2011-512285	平成21年5月	発明者及び出願人：玉野哲也 外科手術、分娩、その他の医療処置に用いられる医療具を収容する医療具用容器及び医療処置に用いられる医療キットに関する発明。震災などの緊急時に医療対処法を熟知しない者でも、清潔かつ安全に、複数の医療器具を用いて複雑な医療対処を行う事が出来る医療キットを提供する事を目的とした発明。主に緊急時に於ける出産、分娩時の使用を想定。また、清潔な出産、分娩が困難な発展途上国への支援物資としての機能も兼ねる。

3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）fibercity／アートディレクター	平成18年4月から平成20年3月まで	平成18年より、東京大学の大野秀敏研究室（工学部建築科、大学院新領域創成科学研究科）の研究テーマである「fibercity」（縮小する都市に於ける都市計画研究）に、アートディレクターとして参加。 主に院生の研究課題や、研究成果を出版物や展示パネルなどとして発表する際に、グラフィックデザインに於ける基礎を指導、また、デザイン上でのテクニカルアドバイスを行う。また、大学院新領域創成科学研究科の必修科目である「サバイバルシェルター」の課題講評時には講師（オブザーバー）として参加。 制作を行った主な出版物は,「JA63／fibercity」（新建築社）、「シュリンキング・ニッポン」（鹿島出版）。 主な展覧会は、 Shrinking Cities×fibercity @ akihabara(2006/UDX), Hong Kong & Shenzhen Bi-City Biennale Festival of Urbanism Architecture(2007/Hong Kong).
4　その他		
1）「夾竹桃物語―わすれていてごめんね」読書感想絵画・感想文コンクール	平成12年10月から現在に至る	全国の小中学生を対象とした毎年夏に開催される読書感想絵画・感想文コンクール。広島の原爆で亡くなった動植物の命の大切さを再考し、地球環境と平和を考える。コンクールの立ち上げには女優の吉永小百合さんも参加協力。受賞作品は毎年8月6日に広島平和記念資料館にて展示、その後、全国巡回展を行う。平成16年から最優秀賞には文部科学大臣奨励賞を与えている。広報、展示、作品集制作、受賞者と保護者を平和記念式典に招いてのワークショップ、作品審査などの全体的な運営に関わる。事務局代表者：福田昇二（会社社長）。
2）HBP（Hope for Birth Project）	平成19年9月から現在に至る	地場産業と国連との産業/支援スキーム構築。７ヶ月妊産婦への配布を想定した震災等の緊急時に於ける安全で清潔な出産キット（医療キット）の開発と、未使用キット回収及び発展途上国に於けるキット支援プロジェクト。国連によるMDGs（国連ミレニアム開発目標）が目標達成期限の中間にあたる平成19年の段階で、期限内での達成が困難である事が報告された。そこでこの個人研究企画が「市民から国連への提案」としてNPOを通じて国連に提案され（平成20年12月に早稲田大学にて『デザイン現場からの提案』として発表）、それに伴い、企画全体が発展した経緯がある。現在は国連機関、NGO、NPO、地方自治体、企業や個人の協力によって進行しているプロジェクトであり、また、Oliviero Toscani氏も呼びかけに呼応している。 プロジェクトは、NGO、NPO及び日本ユニセフを通じて行われる。プロジェクト内容は、平成21年に、UN:国連/TICAD本部（NewYork）TICAD代表 池亀美枝子氏、国連開発計画：UNDP（Geneva）MDGs担当局長 Adam Rogers 氏によって一定の評価を受け、現在、国連児童基金：UNICEF（NewYork）に、プロジェクトに対する非公式担当者が存在している。　平成23年2月に第2衆議院議員会館にて代議士（前・首相補佐官）に企画プレゼンテーションを行い、現時点でプロジェクトへの協力を取り付けている。 制作した支援キットは特許出願中。 (商標登録5169915号,意匠登録134803号6,特願2011-512285,PCT/JP2009/058679)
3）ことのはこプロジェクト	平成21年5月から現在に至る	独立行政法人中小企業基盤整備機構、越中越後越前の地場産業「越の国倶楽部」、弁護士チームとの連携による玉野哲也の発案企画である「遺言書保存箱～ことのはこプロジェクト」。地場産業の製造販売流通スキーム、及び遺言書に於けるデータ管理サービスシステムの構築。（商標に於ける役務の区分（第16類）内での指定役務、新定義の確立「遺言書保管箱・遺言書管理箱」登録5271038号）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
特記事項なし				
（学術論文）				
特記事項なし				
（その他）				
特記事項なし				

教　育　研　究　業　績　書

平成27年3月31日

氏名　　羽太　広海

研究分野	研究内容のキーワード
メディア芸術	コンピュータグラフィックス、インタラクティブアート、アニメーション、地域アートプロジェクト

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）国際映画祭への学生参加による教育実践	平成24年8月	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当している「情報学演習Ⅲ」において、自身がプロジェクト実行委員として活動している広島国際アニメーションフェスティバルに学生を参加させた。国内外の一流の作家や作品に触れる機会となり、国際コンペティションという場の雰囲気を実際に肌で感じることができた。学生は自らの視野を広げることができ、目標となる将来の希望や意欲の増進を得ることができた。自身が運営するプログラムにおいて、ウォルト・ディズニー社のアニメーターMATSUNE SUZUKIさんと人材開発のディレクターDawn Rivera-Ernsterさんを招き開催したワークショップでは、ウォルトディズニーの現場での制作ノウハウを学ぶ貴重な機会となり学生にも大変好評であった。また、制作会社や配給会社などの業界関係者が集まる場でもあるので、作品を持参した学生が企業の方と交流することで、その後の就職活動につながる出会いもあった。
2）プレゼンテーションと作品発表の実践教育	平成24年6月 平成24年8月	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当している「情報学演習Ⅲ」において制作した学生作品を、公開の場で学生自身がプレゼンテーションするよう指導を行った。広島国際アニメーションフェスティバルにおいて、「プロを目指す若者のための、持ち込み作品上映と情報交換の場」で、作品の上映とプレゼンテーションを行った。また、奈良県立図書情報館で行われた「佐保川の春 音楽の日・アートの日」におけるプログラム、奈良の表現者たちによるプレゼンテーション大会「omote-butai」において、作品の上映とプレゼンテーションを行った。社会経験の乏しい学生が人前で発表する機会を増やすことで、その技術の向上を支援する。また、アニメーション制作の専門家やプロのデザイナーからの助言や指導は貴重であり、本人の意欲や反省など作品の客観的な評価につながった。
3）SNSを利用した学生指導	平成23年4月～ 現在	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当している「情報学演習Ⅱ」「情報学演習Ⅲ」において、Facebookのグループ機能を利用して学生指導を行った。授業の諸連絡をはじめ、コンテスト情報や見ておくべき企画展の情報、関連技術のニュースなど、最新の動向をリアルタイムで、その都度もれなく発信することができた。今や学生は皆スマートフォンなどの情報端末を所持しており、校内の掲示板に貼り出すよりもアクセスの利便性が高い。また、学生との間で直接コミュニーケーションすることで、個々の学生へのきめ細かい対応を行うことができた。

４）向上心の高い学生に対しての特別授業の開設	平成24年6月～ 平成25年３月	奈良産業大学情報学部情報学科においては、ほとんどが美術教育を受けたことのない学生である。コンピュータグラフィックでの作品制作においてアイデアと技術があるものの、デッサン力がないために作品の質が向上しない例が多々あった。そこで、全体の底上げのため、新たに石膏像やイーゼルを配置した自由に利用可能なデッサン教室を構築し、技術的な指導と共に意欲ある学生が学べる環境を提供した。
５）プロジェクト室によるCG制作環境の整備と指導	平成23年4月～ 現在	奈良産業大学情報学部情報学科の専任講師として担当している「情報学演習Ⅱ」「情報学演習Ⅲ」において、授業とは別に学生が自由に利用できるプロジェクト室の整備を行った。プロジェクト室には、MAYAやPremier、Photoshopなどの制作に必要なソフトと、３次元コンピュータグラフィックスには不可欠なレンダリングを高速に行えるコンピュータを配備し、学生が思う存分制作に没頭できる環境を提供した。自身の研究室のすぐ隣に置くことで、制作中に生じた学生の質問や意見は積極的に聞きにくるよう指導し、進捗の確認とともにきめ細かい指導を行うことができた。学生も意欲的に利用し、授業がない日にも登校し、作品の制作に勤しむ姿が見られ、結果、海外のコンテストに入賞した作品や、就職活動でCGプロダクションの就職につながる作品を制作することができた。
２　作成した教科書，教材		
１）講義用補助教材「CG概論」	平成15年4月～ 平成21年3月	学校法人東京工学院専門学校の専任講師として担当した１年次配当の専門科目「CG概論」において、CGアニメーションにおける映像表現の方法論のプリントを作成し配布した。CG、映像表現を初めて学ぶ学生に対して、画面構成をする上での基本事項を盛り込み、黄金比による画面構成から、CGの歴史、重要先行作品の解説、絵画、美術、現代アートからの影響、ミニマルアートからの影響、国際映画祭、コンペティションの入賞作品を解説する内容とした。アイデア、企画、絵コンテを作成する上で重要な内容を盛り込み、加えて国内の学生コンテストの近況を紹介し、コンテストへのチャレンジを促す内容とした。
２）講義用補助教材「CG実習Ⅰ」「CG実習Ⅱ」	平成15年4月～ 平成21年3月	学校法人東京工学院専門学校の専任講師として１年次配当の専門科目「CG実習Ⅰ」において、CG制作アプリケーションMAYAを活用し、CG制作の初心者がモデリングを行う際に手際よく作業を進めることができる手順を簡潔に示した補助教材を作成した。通常モデリングの習熟には半年ほど掛かるが、三ヶ月ほどでモデリング技術を習得できるよう工夫した。「CG実習Ⅱ」の補助教材はマテリアル設定及び、ライティング設定に関する作業手順の習熟を図る内容とし、美しいレンダリングを効率よく行い仕上げる能力を習得できるようにした。
３）講義用補助教材「情報学演習Ⅱ」（CG制作技術）	平成23年4月～ 現在	奈良産業大学情報学部の専任講師として担当した３年次配当の専門教育科目「情報学演習Ⅱ」（3年次ゼミ）において、CGモデリングを行う際に有効なメルスクリプトのConnect Poly Shapeを用いたモデリングの資料、ならびに、高度なレンダリングを行う為のマテリアル設定及びライティング設定に関する資料を配布した。モデリングの技術レベルを向上させるために活用し、短期間にモデリングできる能力の習得を意図した。CG制作技術を学び始めたばかりの学生でも、動植物などの有機的なモデリングを効率よく行い、きめ細かいレンダリングによって作品の完成度を上げる技術が習得できるようにした。

４）講義用補助教材「情報学演習Ⅱ」（映像表現）	平成23年4月～現在	奈良産業大学情報学部の専任講師として担当した３年次配当の専門教育科目「情報学演習Ⅱ」（3年次ゼミ）において、CGアニメーションにおける映像表現の方法論に関する資料を作成し、配布した。黄金比による画面構成、CGの歴史、重要先行作品の解説、ミニマルアートからの影響、国際映画祭・コンペティションの入賞作品の解説などを含む内容とした。アイデアから企画を練り上げ、絵コンテを作成する上で重要なポイントを盛り込み、加えて国内の学生CGコンテストの近況を紹介し、コンテストへのチャレンジを促す内容とした。
５）講義用補助教材「情報学演習Ⅲ」	平成24年4月～現在	奈良産業大学情報学部の専任講師として担当した4年次配当の専門教育科目「情報学演習Ⅲ」（4年次ゼミ）において、植物の成長を表現するようなCGアニメーションの制作に関する資料を配布した。卒業制作作品に高度なアニメーション技術を盛り込む為、植物や雲などの生成シーケンスを活用できるように工夫をこらした。学生が卒業制作にこの生成シーケンスを活用し、作品の充実を図れるよう配慮した。
６）講義用補助教材「マルチメディア演習」	平成23年4月～現在	奈良産業大学情報学部の専任講師として担当した２年次配当「マルチメィア演習」において、Flashアニメーション制作の基礎技術として、ドローツールを利用した描画方法に関する資料を作成した。加えて、スケルトンツールを利用したキャラクターアニメーションの制作技術に関する資料も作成し、キャラクターの動きを追求するアニメーション制作に取り組めるよう意図した。さらに最終的なアニメーションシーンの構築を行う為の手順を記した。レイヤー構造とオブジェクトの配置、３D回転アニメーション、サウンドの配置等について解説し、アニメーションを完成させることを目指した。
７）講義用補助教材「マルチメディア表現」	平成24年4月～現在	奈良産業大学情報学部の専任講師として担当した２年次配当の専門教育科目「マルチメディア表現」において、Flashアニメーションの制作方法に加えて、映像編集アプリケーション「iMovie」及びサウンド制作アプリケーション「GarageBand」を取り扱うための資料を作成した。「GarageBand」の簡易作曲機能を利用することによって、Flashアニメーションにオリジナルのサウンドを加える事が可能となる。既成曲を利用するのではなく、サウンドに対してもオリジナリティーを意識して作品制作に臨むことを意図した。
８）講義用補助教材「映像制作演習」	平成24年4月～平成25年3月	奈良産業大学情報学部の専任講師として担当した3年次配当の専門教育科目「映像制作演習」において、ストップモーションアニメーションを撮影する為の方法を記した資料を作成し配布した。デジタル一眼カメラの絞り、感度、シャッタースピードの管理、フルHDフォーマットでの撮影等を解説し、初心者の学生でも、PCからのリモート撮影によるコマ撮り撮影を効率よく進めていけるよう意図した。
９）講義用補助教材「情報学実験応用Ⅱ」	平成24年9月～現在	奈良産業大学情報学部の専任講師として担当した２年次配当の専門教育科目「情報学実験応用Ⅱ」において、モーションキャプチャの資料を作成し、毎回の授業で配布した。Kinectセンサーによる被験者運動情報の取得方法と、取得したモーションデータの活用事例を示した。授業内で取得したモーションデータを人体のCGアニメーションとして再構築する方法を解説し、学生自ら活用方法を考えさせるヒントを示すことで、授業に積極的に取り組める内容とした。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
１）奈良産業大学生による授業評価アンケートにおける評価	平成24年度	奈良産業大学では、担当科目の一部で学生による授業評価アンケートを実施している。アンケート結果によると、受講生の満足度は「マルチメディア表現」で64点、「映像制作演習」で70点と、比較的高く評価されている。（「満足」を100点、「やや満足」を66点、「やや不満」を33点、「不満」を０点とした100点満点の重み付き平均）

４　実務の経験を有する者についての特記事項		
１）第13回広島国際アニメーションフェスティバル・アニメーションクリエイター支援事業　ワークショップ「コンピュータ・アニメーション・メーキングワールド」講師 （支援：文化庁メディア芸術人材育成支援事業）	平成22年8月7日 ～ 平成22年8月11日	第13回広島国際アニメーションフェスティバルのワークショップ「コンピュータ・アニメーション・メーキングワールド」（文化庁メディア芸術人材育成支援事業）にて、アニメーション制作アプリケーション「PICMO」を利用したコンピュータアニメーション制作のワークショップを企画し開催した。広く一般の来場者や親子連れ、地域住民など、普段アニメーション制作に触れる機会のない人でも制作できるよう工夫し、ドローツールで描画した絵に動きを付けアニメーションさせる楽しみを味わえる内容とした。制作したアニメーションは広島国際アニメーションフェスティバル関連のWebに掲載し、本ワークショップの制作作品として広く発表し、多くの人々が鑑賞できる場をつくり出して提供した。
２）三郷町立三郷北小学校教員研修会「パソコンを活用した映像編集」講師「再掲」	平成23年8月8日	三郷町立三郷北小学校の教員に対し、教員研修会を実施した。「パソコンを活用した映像編集」を担当し、Windowsの基本アプリケーションを利用した映像編集の方法を中心に演習形式で展開した。家庭用DVカメラでの撮影を想定し、iLinkを用いて映像をパソコンへキャプチャーする方法、Windowsムービーメーカーによるカット割り編集、タイトル、エンドーロールの作成等、小学校教員が学校行事を記録する際に活用できる内容とした。デジタルビデオカメラを用いて実際に撮影を行い、DVDへ記録する作業を体験させることで、実践的な映像制作技術を習得させる研修とした。
３）大和郡山市立筒井小学校教員研修会「初心者向けパソコン入門」講師「再掲」	平成23年8月12日	大和郡山市立筒井小学校の教員に対し、教員研修会を実施した。「初心者向けパソコン入門」として、Windows7の基本操作を扱った。テキストエディターの使い方、ファイル形式、ファイルのコピー、圧縮・解凍、画像ファイルの観覧等について演習形式で展開した。加えて、Googleを活用したインターネット検索についても触れ、テキスト検索、画像検索、ルート検索、ストリートビューの使い方を学び、小学校教員にとって必要なITスキルを学べる受講内容とした。
４）準デジタル・アーキビスト資格取得講座「巻物画像の接続」講師「再掲」	平成23年8月8日	画像編集ソフトのPhotoshopを使って文化財をデジタル情報化する方法を実習形式で展開した。長い巻物を数回に分けてスキャンした画像をコンピューター上で繋ぎあわせ、実際の巻物と見間違えるようになるまで加工を繰り返しす行程を行った。受講者は自然に繋ぎあわせる方法を工夫しながら作業を進める受講内容とした。
５）高大連携教育会・奈良県立奈良朱雀高等学校「ストップモーションアニメーションの制作」講師「再掲」	平成23年9月13日	奈良県立奈良朱雀高等学校情報ビジネス科の生徒37名に対し、高大連携教育として「ストップモーションアニメーションの制作」を実施した。ビデオカメラをPCから操作し、一コマづつ撮影する「コマ撮り」の手法を用い、人形アニメーションとピクシレーションの技法を実習形式で体験できるプログラムとした。撮影台を利用した人形アニメーションを制作する３グループと、スタジオで人物の撮影をするピクシレーションの３グループに別れ、各々のグループが短編アニメーションを完成させた。
６）和歌山県立日高高等学校「コンピュータグラフィックス講座」講師「再掲」	平成24年3月6日	和歌山県立日高高等学校の2年生を対象とした大学授業体験の出張講義として企画され、コンピュータグラフィックスを紹介する講義を行うとともに、モーションキャプチャを体験する授業を担当した。「Kinectセンサー」を利用した簡易モーションキャプチャーシステムを教室に設置し、受講者に被験者となってもらい、被験者運動情報の取得と3DCGアニメーションへの応用過程を解説した。加えて、CGアニメーションの制作過程を紹介し、人の動きを活用して3DCGのスケルトン（骨格）を制御する方法について解説した。

７）大和郡山市立筒井小学校教員研修会「Windows7環境でのファイル操作・基礎実習」講師	平成24年8月9日	大和郡山市立筒井小学校教員に対し、教員研修会を実施した。「Windows7環境でのファイル操作・基礎実習」として、Windows7の基本操作を扱った。テキストエディターの使い方、ファイル形式、ファイルのコピー、圧縮・解凍、画像ファイルの観覧等について演習形式で展開した。また、Mac等、異なったOS上でファイルを開くための保存形式などについても解説した。更にGoogleを活用したインターネット検索についても触れ、テキスト検索、画像検索、ルート検索、ストリートビューの使い方を解説した。
８）高大連携教育会・奈良県立奈良朱雀高等学校「Flashアニメーションの制作」講師	平成24年9月11日	奈良県立奈良朱雀高等学校情報ビジネス科の生徒40名に対し、高大連携教育としてWebコンテンツやアニメーション制作に活用されるAdobe Flashを用いた「Flashアニメーションの制作」を実施した。ペンツールを利用した独特のドロー描画方法を紹介した。オニキススキンやモーショントゥイーンなどによって、描画した絵をアニメーションさせる技法を用い、絵に動きを付けた。加えてスケルトン（骨格）によるキャラクターアニメーションも紹介し、オブジェクトを変形させる方法を習得させた。最終的に短編アニメーションを完成させた。
９）第一学院高等学校奈良校教育実習「モーションキャプチャを使ってボーカロイドを動かしてみよう」講師	平成24年11月9日	第一学院高等学校奈良校の３年生を対象とした大学授業体験の出張講義として企画され、モーションキャプチャを体験する授業を担当した。「Kinectセンサー」を利用した簡易モーションキャプチャーシステムを教室に設置し、受講者に被験者となってもらい、被験者運動情報の取得と3DCGアニメーションへの応用過程を解説した。加えて、CGアニメーションの制作過程を紹介し、人の動きを活用して3DCGのスケルトン（骨格）を制御する方法について解説した。
１０）京都造形芸術大学通信教育部 特別公開講義「映像とインタラクション」講師	平成25年3月10日	京都造形芸術大学通信教育部主催の特別公開講義の講師として「映像とインタラクション」の題目で講義を行った。「Kinectセンサー」「プロジェクションマッピング」を利用したインタラクティヴアートの制作方法を解説した。その具体的な作品例として、「奈良町家の芸術祭HANARART2013」で展示した作品「波紋の蚊帳」「光の染め物」２点を紹介した。奈良の地場産業である「奈良晒」を用いた「蚊帳」をスクリーンにみたて「プロジェクションマッピング」を用いたインタラクティヴインスタレーション作品の解説を行った。また、キュレーターとして、地域NPO団体とどのような関わり方で地域アートプロジェクトや展覧会を作り上げたかを紹介した。指定文化財である町家の会場は釘等の使用が不可能で、歴史的建造物を破損することができない。このような難しい状況で町家と現代アート作品をどのように調和させたかという具体的な事例を紹介した。
１１）カンボジア・香港短期研修　担当教員	平成25年2月13日 ～ 平成25年2月25日	カンボジア・メコン大学と香港・城市大学専上学院への短期研修において引率教員として関わった。研修前には、現地の風土・食・思想・歴史などを学ぶ事前指導を行い、研修中は現地の学生とともにフィールドワークを行った。帰国後は研修内容のレポート冊子作成、国際交流の経験と成果をまとめる指導と研修報告会を行った。本研修は国際交流、人材育成の面で、学生たちにとって大変有意義なものであった。

５　その他		
１）学校法人東京工学院専門学校の専任講師としての教育実績	平成15年4月～ 平成21年3月	「ＣＧ実習１」「ＣＧ実習２」において、AliasMayaを活用したアニメーション制作指導を行った。作品のテーマと芸術性を重視した指導方針を実践し、コンテストへの積極的な応募を奨励した。自身の担当授業だけでなく、他の授業との連携をコーディネートし、チームティーチングの体制を整えた。その結果、学生の作品の完成度が向上し、コンスタントに様々なコンテストで受賞する状況となった。 以下、指導の結果として担当学生のコンテスト受賞実績を列記する。 ＜平成17年度＞ (1) ユナイテッドシネマ CGアニメーションフィルムフェステイバル 最終選考ノミネート 榎本江里・篠原敦子 (2) 文化庁メディア芸術祭 CG-ARTS協会主催 第11回学生CGコンテスト 最終選考ノミネート 「moment-life-air-move」川島ゆかり ＜平成18年度＞ (3) アジアデジタルアート大賞 カテゴリーB 静止画部門 入賞「GOSHIKI」黒崎恭平 ＜平成19年度＞ (4) 文化庁メディア芸術祭 CG-ARTS協会主催 第13回学生CGコンテスト 静止画部門 佳作入賞 「井戸」古谷理沙 (5) アジアデジタルアート大賞 カテゴリーB 静止画部門 入賞 「井戸」古谷理沙 (6) アジアデジタルアート大賞 カテゴリーB 静止画部門 入賞 「1から10の階段」淡路遼介
２）学校法人東京工学院専門学校の専任講師としての教育実績（続き）	平成15年4月～ 平成21年3月	＜平成20年度＞ (7) 文化庁メディア芸術祭 CG-ARTS協会主催 第14回学生CGコンテスト 静止画部 最終選考ノミネート 「透明人間」鈴木麻里乃 (8) アジアデジタルアート大賞　カテゴリーB　静止画部門 入賞 「無題」横塚啓太 (9) アジアデジタルアート大賞 カテゴリーB 静止画部門 入賞 「chaos～顔す～」松本 昂 (10) アジアデジタルアート大賞 カテゴリーB 静止画部門 入賞 「4色の湖」唐澤祐人

３）奈良産業大学情報学部の専任講師としての教育実績	平成23年4月～ 現在に至る	奈良産業大学情報学部の専任講師として、以下の科目を担当した。 「映像制作演習」 コマ撮りアニメーションの制作演習を行った。撮影にはデジタル一眼カメラを活用し、PCでのリモート撮影を行い、画像精度を上げる制作指導を行った。学生は、何枚もの絵が連続して動く絵になるという、アニメーションの基本的な仕組みを理解することができ、次年度の３次元コンピューターアニメーションへの取り組みへの足がかりにもなった。受講した学生には、最終的に各自オリジナルの作品を提出することを求めたので、受け身ではなく、自ら作業を楽しみながら意欲的に取り組む姿勢がみられるようになった。 「マルチメディア演習」 Webコンテンツ作成ソフト、AdobeFlashを活用した制作演習を行った。オニキススキン、モーショントゥィーン、スケルトン等の技法を活用し、アニメーション制作指導を行った。Webコンテンツのアニメーションを作成する業界標準のソフトウエアの基本的な技能と、スケッチからコンテンツを書き出し公開する形にするまでの手順を習得させることができた。本科目は、平成24年度より「マルチメディア表現」に改名された。 「情報学実験応用Ⅱ」 Kinectセンサーによる被験者運動情報の取得と、取得データによるモーションキャプチャデータの人体モデルへの適用を演習形式で行った。人体モデルには学生がよく知るアニメのキャラクターを採用し、センサーによる情報取得という無味乾燥な内容を、学生が興味を持ち感覚的に入り込みやすいよう工夫した。センサーを使用したコンピュータグラフィックスの応用方法や活用方法を習得することができた。市販の情報機器を組み合わせることで多様な表現ができることを知り、受け身ではなく何かを生み出したいという欲求と創造力を培うことができた。 「情報学演習Ⅱ」 ３年次配当の専門教育科目であり、卒業制作を意識した課題に取り組む演習形式の授業である。前半はAliasMayaの基本操作を学び、後半は各自作品のテーマを決め、制作に入る。作品のテーマと芸術性を重視した指導方針を実践し、コンテストへの積極的な応募を奨励した。就職活動を意識したポートフォリオ作成の指導も合わせて行った。平成25年度より「情報学ゼミⅢ」に改名された。 「情報学演習Ⅲ」 ４年次配当の専門教育科目であり、上記の「情報学演習Ⅱ」をうけて卒業制作に取り組み、完成させる授業である。 以下、「情報学演習Ⅱ」及び「情報学演習Ⅲ」の指導の結果として担当学生のコンテスト受賞実績を明記する。 ＜平成24年度＞ （英国）EAST-WEST ART AWARD COMPETITION 2012 Video/Animation部門 ファイナリスト展参加 ベストスチューデント賞「Soul of Gray」楊暁東

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
１　資格，免許		
１）中学校教諭一種免許状（美術）	平成8年3月	平８中１第１２２３３号（東京都教育委員会）
２）高等学校教諭一種免許状（美術）	平成8年3月	平８高１第１２２３５号（東京都教育委員会）

２　特許等		
なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
なし		
４　その他		
１）図書館運営委員	平成23年4月～平成24年３月	図書館運営委員として学生用推薦図書の選書を行った。また、県立奈良図書情報館より依頼のあった選書協力、情報学部における取りまとめを行った。
２）オープンキャンパス実行委員	平成23年4月～平成24年３月	オープンキャンパス実行委員として学部紹介、模擬授業、キャンパスツアーの円滑な進行に取り組んだ。また「モーションキャプチャとCGアニメーション」と題した模擬授業を担当した。
４）情報センター運営委員	平成23年4月～平成24年３月	奈良産業大学の情報機器やネットワークの管理・運用に関する問題を検討し、情報センターの職員とともに解決に向けて取り組んだ。
５）ホームページ企画実行委員長	平成24年4月～平成25年３月	ホームページ企画実行委員長として奈良産業大学公式サイトのリニューアルに取り組んだ。サイトトップのFlashアニーションの刷新によるクオリティーアップを計った。トップページのデザイン変更（学生の顔が見え、ホスピタリティーのある公式サイトへ）、サイト階層の見直しによる重要情報へのアクセス、クリックを減らす改善をした。オープンキャンパス情報への動線の変更、アクセス解析による来訪者の動的な来訪動向の確認。新規セッション（来訪者）のUPに向けた対策に取り組んだ。前年度と比較し、一年を通じて一割り程の来訪者の増加が確認された。
６）学生委員会・学生支援センター委員	平成25年4月～平成26年3月	三室祭について、イベント等における各団体の出演者手配の紹介、企画等のサポートを行った。「２０１４年度学生の意識及び生活の実態に関する調査」において、担当項目の分析とコメントを執筆した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
なし				
（学術論文）				
１）CGとセンサー、奈良晒、蚊帳生地を用いたインタラクティブアート	単著	平成25年2月	奈良産業大学情報学部「情報学フォーラム紀要」第８巻，5-14	「奈良町屋の芸術祭HANARART2012」で発表したインタラクティブアート作品、「Dye in the particle 光の染物」「Mosquito net Ripples 波紋の蚊帳」の紹介を通して、テクノロジーとアートの新しい表現方法を提示し、CGとKinectセンサー、サウンドと地域の伝統産業の「奈良晒」を組み合わせた作品事例と方法について述べた。加えて「プロジェクションマッピング」を活用した蚊帳への映像投影方法を解説した。また、キュレーターとして、地域NPO団体とどのような関わり方で地域アートプロジェクトや展覧会を作り上げたかを紹介した。指定文化財である町家の会場は釘等の使用が不可能で、歴史的建造物を破損することができない。このような難しい状況で町家と現代アート作品をどのように調和させたかという具体的な事例を取り上げ論じた。

２）問題解決型の地域アートプロジェクト、文化・コミュニケーションの現状と課題「広島国際アニメーションフェスティバルと奈良町家の芸術祭HANARARTから」	単著	平成25年2月	奈良産業大学情報学部「情報学フォーラム紀要」第８巻，15-32	広島国際アニメーションフェスティバル、奈良町家の芸術祭HANARART、国際映画祭、地域アートプロジェクト等を企画運営し、また自らのアート作品を提供してきた。その経験にもとづき、アートを活用した地域振興、地域活性化の難しさと問題点を、作家の立場と運営企画の立場という二つの視点から、それぞれ対比させ比較検討を行った。観光資源、ツーリズムとして付加価値を持たせ相乗効果を狙った地域アートプロジェクトが数多く開催されているが、価値観、期待値の異なる関係者には文化的な共通理解を見いだす困難が存在することを明らかにした。加えて、アートプロジェクトを介したコミュニケーションの限界性を述べた。
３）メディアアートにおけるコンピュータグラフィックスとサウンドの設計、ミニマリズムを中心として	単著	平成25年4月	「奈良産業大学紀要」第29集，77-87	メディアアートにおけるコンピュータグラフィックスとサウンドについての関係性を、ミニマルアート、ミニマルミュージックとの対比を交え、創作の可能性について論じた。メディアアート作品を制作するうえで、コンピュータグラフィックスとサウンド、インタラクションを統合的に設計することは作品の総合性を高めるうえで、とても有効な手段である。五感に訴えかけることがメディアアートの趨勢となってきており、統合された制作環境の構築、重要性について解説した。加えてKinecセンサー、Quartz Conposer、DTMアプリケーション等を用いたシステムの構築と、総合的にメディアアート作品を組み上げる方法を論じた。
（その他）				
「受賞作品」				
１）神戸ビエンナーレ2013「アート イン コンテナ」国際コンペティション	共同	平成25年10月	神戸市メリケンパーク（神戸市中央区）	神戸ビエンナーレ2013「アート イン コンテナ」国際コンペティション　奨励賞 輸送用コンテナの特性を活かし、平面・立体・映像・インスタレーション、さらには伝統芸術やインタラクティブ・アートなど、自由な発想と方法でアートの力と可能性を追求する現代アートの国際コンペティションにおいて、CGとセンサーを用いたインタラクティヴアートで入選となった。 羽太広海　羽太祐子
（その他）				
「展覧会・発表作品」				
１）インタラクティヴアート「Dye in The particle・光の染物」 第１４回広島国際アニメーションフェスティバル・ASIFA-Japan３０周年記念展示	単独	平成24年9月	アステールプラザ（広島県広島市）	1981年に設立した国際アニメーションフィルム協会日本支部（ASIFA-JAPAN）の、３０周年記念イベントとして開催されたＡＳＩＦＡ－ＪＡＰＡＮ会員の活動を紹介する展覧会において、自身の作品であるKinectセンサー、Quartz ComposerによるCG、サウンドを用いた体験型インタラクティヴアート「Dye in The particle・光の染物」の展示を行った。
２）奈良・町屋の芸術HANARART2012	共同	平成24年11月	まちや館（奈良県五條市）	奈良の町家を現代アートで彩るという、地域型アートプロジュエクト「奈良・町屋の芸術祭HANARART2012」において、五條新町まちや館会場のキュレーター兼出展作家として参加。キュレーターとして歴史的な町家建築や開催地域のサイトスペシフィックを意識した展示の企画立案を行う。また、作家としてKinectセンサーとQuartz ComposerによるCG、サウンドを使用した体験型インタラクティブアート「Dye in The particle・光の染物」「Mosquito net Ripples 波紋の蚊帳」「Swimming Words 泳ぐ言葉」の３作品を展示した。 （主催：奈良・町屋の芸術祭HANARART2012実行委員会、共催：奈良県） 羽太広海　羽太祐子

３）Art Space 金魚空間	単独	平成25年1月	Art Space 金魚空間（台湾台北市）	台湾台北市大同區承德路にある企画画廊「Art Space 金魚空間」において、Kinectセンサー、Quartz ComposerよるCG、サウンドを作曲し複合的に用いた体験型インタラクティヴアート「Mosquito net Ripples 波紋の蚊帳」の展示を行った。
４）奈良・町屋の芸術 HANARART2013	共同	平成24年9月	奈良町物語館（奈良県奈良市）	奈良の町家を現代アートで彩るという、地域型アートプロジュエクト「奈良・町屋の芸術祭HANARART2013」において、奈良町物語館におけるプレイベント企画展としてインタラクティヴ映像展を開催した。歴史的な町家建築や開催地域のサイトスペシフィックを意識した展示の企画立案を行う。また、作家としてKinectセンサー、LaepMotionセンサー、Quartz Composer、ProcessingによるCG、サウンドを使用した体験型インタラクティブアート「Dye in The particle・光の染物」「Mosquito net Ripples 波紋の蚊帳」「Swimming Words 泳ぐ言葉」「触覚の可能性」の4作品を展示した。 （主催：奈良・町屋の芸術祭HANARART2013実行委員会、共催：奈良県） 羽太広海　羽太祐子
５）神戸ビエンナーレ2013「アート イン コンテナ」国際コンペティション	共同	平成25年10月	神戸市メリケンパーク（神戸市中央区）	神戸ビエンナーレ2013「アート イン コンテナ」国際コンペティション 輸送用コンテナの特性を活かし、平面・立体・映像・インスタレーション、さらには伝統芸術やインタラクティブ・アートなど、自由な発想と方法でアートの力と可能性を追求する現代アートの国際コンペティションにおいて、CGとセンサー、サウンドを用いたインタラクティヴアートでと奨励賞なった。 羽太広海　羽太祐子
６）BIWAKOビエンナーレ2014	共同	平成26年9月	BIWAKOビエンナーレ天籟宮（滋賀県近江八幡市玉屋町6 ）	BIWAKOビエンナーレ2014国際芸術祭 蚊帳とCGとLeapMotionセンサー、サウンドを用いたインタラクティブアートを「Mosquito net Particle」制作展示した。LeapMotionセンサーは手や指の動きを検知するセンサーである。手の動きに反応して、光のパーティクル（粒子）が動くインタラクションとなっている。 羽太広海　羽太祐子
（その他）				
「国際映画祭の委員」				
１）第１２回広島国際アニメーションフェスティバルプロジェクト委員	共同	平成20年8月	アステールプラザ（広島県広島市）	第１２回広島国際アニメーションフェスティバル （主催：広島市、共催：国際アニメーションフィルム協会日本支部、公認：国際アニメーションフィルム協会） アヌシー、オタワ、ザグレブと並ぶ世界4大アニメーションフェスティバルの一つである国際的映画祭において、プロジェクト委員として携わる。映画祭における企画のなかでパネルディスカッションの司会（羽太広海）も務めた。 パネラー：ラオ・ヘイドメッツ（エストニアアニメーション監督、タトゥル美術大学）、相原信弘：アニメーション作家（京都造形大学教授）、西本企良（アニメーション作家、武蔵野美術大学教授）
２）第１３回広島国際アニメーションフェスティバルプロジェクト委員	共同	平成22年8月	アステールプラザ（広島県広島市）	第１３回広島国際アニメーションフェスティバル （主催：広島市、共催：国際アニメーションフィルム協会日本支部、公認：国際アニメーションフィルム協会） アヌシー、オタワ、ザグレブと並ぶ世界4大アニメーションフェスティバルの一つである国際的映画祭において、プロジェクト委員として携わる。

３）第１３回広島国際アニメーションフェスティバル文化庁メディア芸術人材育成支援事業　「コンピュータ・アニメーション・メイキングワールド」の企画、運営	共同	平成22年8月	アステールプラザ（広島県広島市）	第１３回広島国際アニメーションフェスティバル期間中、文化庁メディア芸術人材育成支援事業「コンピュータ・アニメーション・メイキングワールド」の企画、運営を行う。アニメーションソフト「PICMO」等を利用したアニメーション制作体験を企画し、実施した。
４）第１４回広島国際アニメーションフェスティバルプロジェクト委員	共同	平成24年8月	アステールプラザ（広島県広島市）	第１４回広島国際アニメーションフェスティバル （主催：広島市、共催：国際アニメーションフィルム協会日本支部、公：認国際アニメーションフィルム協会） アヌシー、オタワ、ザグレブと並ぶ世界4大アニメーションフェスティバルの一つである国際的映画祭において、プロジェクト委員として携わる。
５）第１４回広島国際アニメーションフェスティバルASIFA-Japan３０周年記念展示委員	共同	平成24年8月	アステールプラザ（広島県広島市）	第１４回広島国際アニメーションフェスティバルおいて、１９８１年に設立した国際アニメーションフィルム協会ASIFA-Japanの３０周年記念展示が企画され、委員として展覧会に携わった。ASIFA-Japan日本を代表するアニメーション監督や作家等を中心に、プロデューサー、撮影、編集、評論などアニメーション関係者によって構成されている。会員一人一人の優れた仕事や活動を一挙に紹介した。
６）第１５回広島国際アニメーションフェスティバル	共同	平成26年8月	アステールプラザ（広島県広島市）	第１５回広島国際アニメーションフェスティバルおいて、エディケーショナル・フィルムマーケットの企画運営を行う。参加校、東京藝術大学大学院映像研究科、女子美術大学、女子美術大学短期大学部、武蔵野美術大学、九州大学芸術工学部、名古屋学芸大学、広島国際学院大学、比治山大学短期大学部、広島市立大学芸術学部映像メディア研究室、東京工芸大学。
（その他）				
「講演・シンポジウム」				
１）ＣＧアニメーションの世界	単独	平成24年6月	リーベルカレッジ（奈良県王寺町）	奈良産業大学が主催する市民向け公開講座としてCGアニメーションの歴史について講演を行った。コンピュータグラフフィックスの発展の歴史を技術と作品の両面から９０分で紹介した。コンピュータグラフフィックスにおける表現の発展をエポックメイキングとなった作品から紹介し、モデリング、アニメーション、レンダリング技術の変遷を解説した。また、「Kinectセンサー」とノートPCを利用した簡易モーションキャプチャーシステムを会場に設置し、聴講者にも被験者となってもらい被験者運動情報の取得と、3DCGへの応用過程を解説した。
２）奈良町家の芸術祭ＨＡＮＡＲＡＲＴ、シンポジウム　「ＨＡＮＡＲＡＲＴ こあ キュレーターからの提言」	共同	平成24年11月	旧川本邸（奈良県郡山市）	HANARART2012の振り返りから、地域型アートイベントの未来予想図、サイトスペシフィックとキュレーター制度について、日本の現代美術界への提言などを、キュレーターや出展作家などにより公開ディスカッションを行った。約７０名が傍聴するなか、それぞれの立場から活発な意見が出された。キュレーターと作家を兼任した立場からの指摘や、展示のサイトスペシフィックについての考えを提示した。 出演者：加藤孝朗　谷川恵子　谷口和正　千葉淳一　西田隆彦　羽太広海　林和音　伴野久美子　平田剛志　山中俊広（以上、HANARART こあ キュレーター）中島麦（HANARARART こあ 出展作家代表）奥中章人（HANARARART もあ 出展作家代表）増井正哉（奈良女子大学教授）三瀬夏之介（東北芸術工科大学准教授）小吹隆文（美術ライター）野村ヨシノリ（HANARART実行委員 アートコーディネーター）

３）奈良町家の芸術祭ＨＡＮＡＲＡＲＴ、アーティストトーク　「町家回想ー五條新町にて」	共同	平成24年11月	まちや館（奈良県五條市）	出展作家とキュレーター、地域の受け入れ団体であるNPO法人大和社中の方により、町家でアートを展示する意義や、苦労した点などをディスカッションした。歴史的な町並みに現代アートという異質なものが入ることにより、従来とは違う価値観が生まれ、地域コミュニティやまちづくりに新たな可能性を広げるということを確認した。また、アートをギャラリーではなく町家という日本の生活空間で展示する時の「もてなす」「しつらえる」という様式について説明した。 出演者：羽太広海（キュレーター、出展作家）大西宏志（出展作家、京都造形芸術大学准教授）菅原布寿史（出展作家）花岡伸宏（出展作家）平田剛志（キュレーター、京都国立博物館研究補佐員）米田征司（NPO法人大和社中）
（その他）				
「報告書」				
1）平成23年度情報学部活動報告書 ①三郷町立三郷北小学校教員研修会「パソコンを活用した映像編集」	単著	平成25年3月	平成23年度情報学部活動報告書 実習「パソコンを活用した映像編集」（教員研修： 三郷北小学校） pp.32-33	三郷町立三郷北小学校の教員を対象に情報研修を行った。「パソコンを活用した映像編集」を担当し、Windows に標準搭載されているWindowsムービーメーカーを利用し、学校行事等の記録映像を編集作成することを想定した演習形式での講座とした。編集に利用する映像を撮影する為、スタジオにおいてハンディーカメラを利用し、映像を二人一組となりビデオ撮影を行った。この際、特段の映像の制限は設けず、編集作業の中で必要な素材を各自撮影する形式の演習として実施した。
②大和郡山市立筒井小学校教員研修会「初心者向けパソコン入門」	単著		実習「初心者向けパソコン入門」（教員研修：大和郡山市立筒井小学校） p.35	大和郡山市立筒井小学校の教員を対象に情報研修を行った。「初心者向けパソコン入門」を担当し、「Windows7環境でのファイル操作　基礎実習」としての講座とした。OSの基本操作から確認することをスタートとし、過去のWindowsとWindows7の仕様の違いや、異なったパソコン間でファイルを開くための保存形式などの説明、OSの基本操作を解説した。加えて、インターネット検索の有効的な利用も内容として盛り込み、Google検索の目的に応じた検索の方法を解説した。
③準デジタル・アーキビスト資格取得講座「巻物画像の接続」	単著		実習「巻物画像の接続」（準デジタル・アーキビスト資格取得講座） pp.11-12	画像編集ソフトのPhotoshopを使って文化財をデジタル情報化する方法を実習形式で展開した。長い巻物を数回に分けてスキャンした画像をコンピューター上で繋ぎあわせ、実際の巻物と見間違えるようになるまで加工を繰り返しす行程を行った。受講者は自然に繋ぎあわせる方法を工夫しながら作業を進める受講内容とした。
④高大連携教育会・奈良県立奈良朱雀高等学校「ストップモーションアニメーションの制作」	単著		実習「ストップモーション・アニメーションの制作」（奈良朱雀高校） pp.21-22	奈良県立奈良朱雀高等学校情報ビジネス科の生徒37名に対し、高大連携教育として「ストップモーションアニメーションの制作」を実施した。ビデオカメラをPCから操作し、一コマづつ撮影する「コマ撮り」の手法を用い、人形アニメーションとピクシレーションの技法を実習形式で体験できるプログラムとした。撮影台を利用した人形アニメーションを制作する３グループと、スタジオで人物の撮影をするピクシレーションの３グループに別れ、各々のグループが短編アニメーションを完成させた。

⑤和歌山県立日高高等学校「コンピュータグラフィックス講座」	単著		講義「コンピュータグラフィックス」（出張：日高高校） pp.18-19	和歌山県立日高高等学校の2年生を対象とした大学授業体験の出張講義として企画され、コンピュータグラフィックスを紹介する講義を行うとともに、モーションキャプチャを体験する授業を担当した。「Kinectセンサー」を利用した簡易モーションキャプチャーシステムを教室に設置し、受講者に被験者となってもらい、被験者運動情報の取得と3DCGアニメーションへの応用過程を解説した。加えて、CGアニメーションの制作過程を紹介し、人の動きを活用して3DCGのスケルトン（骨格）を制御する方法について解説した。
（その他）				
「書籍掲載」				
１）奈良・町家の芸術祭HANARART2012 GUIDE BOOK	共著	平成24年10月	奈良県土木部まちづくり推進局地域デザイン推進課　発行／奈良・町家の芸術祭HANARART　実行委員会　編集	HANARARTこあ・もあの作品紹介と、キュレーター紹介、自身が担当した五條新町のキュレーション内容と作家として展示した作品が掲載された。
２）奈良・町家の芸術祭HANARART2012図録	共著	平成25年3月	奈良県土木部まちづくり推進局地域デザイン推進課　発行／奈良・町家の芸術祭HANARART　実行委員会　編集	HANARARTこあ・もあの作品紹介と、特にキュレーターに焦点を当てたアート図録において、自身が担当した五條新町のキュレーション内容と作家として展示した作品が掲載された。
３）神戸ビエンナーレ2013「公式ガイドブック」	共著	平成25年９月	株式会社美術出版社	アートインコンテナ国際展の項目に自身が制作した「波紋の蚊帳」がが掲載された。
４）奈良・町家の芸術祭HANARART2013図録	共著	平成26年2月	奈良県土木部まちづくり推進局地域デザイン推進課　発行／奈良・町家の芸術祭HANARART　実行委員会　編集	奈良の町家を現代アートで彩るという、地域型アートプロジュエクト「奈良・町屋の芸術祭HANARART2013」の図録に、奈良町物語館におけるプレイベント企画展として開催されたインタラクティヴ映像展の作品が掲載された。
５）神戸ビエンナーレ2013「公式作品記録集」	共著	平成26年9月	株式会社美術出版社	神戸ビエンナーレ2013「公式作品記録集」アートインコンテナ国際展の項目に自身が制作した「波紋の蚊帳 KOBE」が掲載された。
６）BIWAKOビエンナーレ2014図録	共著	平成26年9月	銀聲舎出版会	BIWAKOビエンナーレ2014「公式図録」自身が制作したインタラクティブアートを「Mosquito net Particle」が掲載された。